

けいおん！～軽音部と月の加護を受けし者～

TRcrant

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

私立桜ヶ丘女子高等学校は、とある事情で男女共学となった。在校生の9割が女子という、ある意味うらやましい環境に身を置くことになった一人の青年。

彼には、人には言えぬ大きな秘密があった。

これはそんな青年と、軽音部の女子生徒たちが織りなす物語である。

*不定期更新ですが、必ず完結させますのでよろしくお願ひします。

本篇中で見つけたおかしな点などのご指摘やアドバイス・感想をお待ちしております。

*本作品は自サイト『黄昏の部屋（別館）』でも掲載しております。

*ヒロイン希望案ですが、感想での回答は規約により禁止とされているため、ご遠慮ください。

希望案を出される際はお手数ですが『活動報告』および、自サイトからお願ひします。

目次

前書き (本篇の前に、必ずお読みください)	1
1年生編 『序章く始まりく』	
プロローグ	4
第1話 衝撃の事実	8
第2話 入学式!	14
第3話 部活	21
第4話 入部!	31
第5話 活動!	40
1年生編 『活動開始』	
第6話 楽器⇨性格?	48
第7話 楽器選び!	56
第8話 アルバイト	63
第9話 特訓!	76
第10話 試験乱舞	85
第11話 明暗の理由	93
第12話 勉強!	101
第13話 ライブと結果	116
1年生編 『合宿』	
第14話 選曲!	128
第15話 憤怒	135
第16話 初日	144
第17話 二日目	162
第18話 合宿の終わりと写真	173

1年生編 『学園祭』

第19話 危機

第20話 顧問

第21話 歌

第22話 ボーカル

第23話 学園祭

第24話 コンクールとMC

第25話 文化祭ライブ

第26話 動く者

1年生編 『クリスマスと新たなる始まり』

第27話 正体とクリスマス

第28話 夢か現実か

第29話 プレゼント！

第30話 クリスマス会とプレゼントと

第31話 罪悪感と初詣

第32話 ミスと春

2年生編 『新歓ライブ』

第33話 新クラス！

第34話 勧誘！

第35話 続・勧誘

第36話 新歓ライブ！

2年生編 『“新入”部員』

第37話 新入部員

第38話 部員狂想曲くあずにゃん誕生く

第39話 歓迎会

409 395 386 366 353 343 334 322 310 292 283 274 263 253 241 230 220 210 200 191 182

第40話 練習と外バン

422

第41話 答え

437

2年生編 『すべての終わりとはじまり』

第42話 兆し

448

第43話 崩壊

459

第44話 親友として

469

第45話 疑問

481

第46話 すべての終わり始まり

495

2年生編 『秘密』

第47話 発端

510

第48話 きっかけ

526

第49話 再会と拘束と

539

第50話 真実と覚悟と

552

第51話 説明!

562

第52話 お泊り!

571

第53話 家探しとお風呂パニック

585

2年生編 『合宿』

第54話 理想談義と恒例の

596

第55話 買い出しと合宿

606

第56話 合宿!!

617

第57話 夏の風物詩

628

第58話 肝試しと

641

第59話 ゲスト

652

第60話 練習とサプライズ

662

2年生編 『refrain』

第61話	新学期！	677
第62話	マラソン大会！	692
第63話	ループ	702
第64話	続・ループ	720
第65話	リフレイン	735
第66話	一日の終わり	748
2年生編 『ピンチ』		
第67話	占いと楽器	759
第68話	軋み	771
第69話	くだらない⇨重要なこと	781
第70話	男とは	794
第71話	ライブに向けて	805
2年生編 『学園祭』		
第72話	衝撃の知らせ	816
第73話	偽物	829
第74話	できること	838
第75話	学園祭	854
第76話	ライブと……	864
第77話	熱	876
2年生編Y 『忍び寄るもの』		
第78話	悪意	891
第79話	渦巻く悪意	902
第80話	廃部！	912
第81話	次の一手	922
第82話	静かなる攻防	934

第83話 探偵現る

第84話 終わりと思ひ

2年生編Y 『気づく思い、変わる日常』

第85話 変化と一手

第86話 変わる関係

第87話 変化する日常

第88話 悪夢と決意と

2年生編 『遠き地より』

第89話 訪問者

第90話 旧友

第91話 友のため

第92話 サプライズとお別れと

2年生編 『ファーストステップ』

第93話 移ろいゆくもの

第94話 とある冬の日

第95話 手の暖かさ、心の冷たさ

第96話 ライブ

第97話 プレゼントとセッティング

第98話 去る年、来る年

2年生編 『セカンドステップ』

第99話 応募!

第100話 訪問!

第101話 参加

第102話 別れ

3年生編 『新学期』

1153114411351125

110910971086107610651054

1044103510241012

1000 987 977 966

955 944

第103話 新学期!

第104話 クラスとコンビと

第105話 勧誘!

第106話 新歓ライブ

第107話 結果

3年生編 『片づけ』

第108話 寝言と掃除

第109話 掘り出し物

第110話 ホームセンター珍道中

第111話 お金狂騒曲

第112話 後輩

3年生編 『楽器』

第113話 予感

第114話 輝きと策

第115話 原点回帰

3年生編 『修学旅行』

第116話 修学旅行前日

第117話 波乱の幕開け?

第118話 手品と悲劇

第119話 京都狂騒歌

第120話 鬼門

第121話 朝のピンチと自由行動

外伝1 すべての始まり【UA通算8万突破記念】

外伝2 それは一つの転機【UA通算9万達成記念】

第122話 観光

138513751363135313381323131413041297

128612741265

12561245123512251216

12061196118611771166

外伝3 そしてそれは宿題となる 【U A通算10万達成記念】

1398

第123話 迷走

第124話 逃走

第125話 参考にならぬもの

142814201409

前書き（本篇の前に、必ずお読みください）

初めての方は初めまして。

それ以外の方はご無沙汰しております。

駄文の執筆者、T R e a n tと申します。

この度は、数多くある作品の中から、本作を選んでいただきありがとうございます。ありがとうございます。

本作を読まれるにあたって、皆様に了承していただきたいことがございます。

- ・私自身に音楽の知識は皆無で、また音楽の経験もありません
- ・本作には大量のご都合主義が含まれています。
- ・本作では恋愛描写があります。
- ・音の表現レベルが低いため、支離滅裂な文章が多々ありますので、おかしな点がありましたら積極的に指摘とアドバイスを願います。

- ・本作中での英語での会話などは、日本語で表記しています
- ・本作では作品の都合上、既存の設定の一部（桜ヶ丘高等学校が共学になるなど）を改変しております。

- ・本作内では様々な既存曲を使用しております。

誰もが一度は耳にしたであろう音楽ゲームからマイナーな物まで様々です。

また、その関係でアニメのOP, ED曲を使用することもあります。その際はその話の後書きのほうで曲名を以下の通り明記いたします。

『こちらには楽曲名が入ります』 “こちらにはゲーム及び、関係作品名が入ります” より

使用した楽曲の原作名が18未満にはふさわしくない描写を含むものだった場合は、下記の通り明記いたします。

『こちらには楽曲名が入ります』 “こちらにはゲーム名が入ります” (R-18) 主題歌より

一部原作名では、性的描写を含むと判断されかねないものもあるた

め、その場合は『PCゲーム（R-18）』の明記となります。

18歳未満にふさわしくない描写を含んでいるものと、そうでないものの原作名を検索される際は、ご自身の責任のもとでお願いいたします。

万が一、検索をされて生じた損害やトラブルなどは、当方では一切の責任は負いかねますのでご了承のほうをお願いします。

なお、あとがきにて記載したアーティストが間違っていた場合は、感想などでお知らせいただけると幸いです。

アーティスト情報を調べたのちに、必要であれば修正や加筆などを行います。

それと付随しまして、本篇では既存曲の著作権情報が一部変更されています。

簡単に言いますと、実際には違う方が作詞作曲されている曲が、本篇では登場人物（オリ主を含む）が作詞作曲したということになっています。

この場合、原則あとがきでの使用楽曲の一覧に記されている情報（音楽ゲームや劇中歌など）が正しいものになります。

もし、あとがきのほうにて曲の情報が記されていない場合は、ご連絡のほうをお願いします。

確認でき次第早急に修正いたします。

・本作はファンタジー要素（ここでのファンタジーには“魔法”等を指します）が含まれます

・本作では作品の向上及び、作者の文章能力向上の手がかりを得るため、評価の一言コメントを“必須”にしております。

これは、皆様からのご意見を反映しやすくするための措置ですので、ご理解のほうをよろしくお願いします。

・ヒロインの希望を募集しております。

もし希望などがありましたら、遠慮なくヒロインの希望を活動報告のコメントないしは自サイトの拍手コメントにてお教えください。

ただし、感想での希望案の回答葉規約違反ですので、おやめください。

以上の点（最後の点を除く）にご納得頂けない方は、お読みにならないことをお勧めします。

また、批判等（ご指摘やアドバイスを除く）はご遠慮ください。

それでは、本作をお楽しみください。

1年生編 『序章く始まりく』 プロローグ

「――以上で、式を終わります」

校長のその言葉で、僕がいる講堂中に賑わいが戻る。

色々な場所で、この後どうするかを話し合う声が聞こえる。

「ハイ、コウスケ」

「ん？ ああ、ジョンか」

僕も行動を後にしようとしたところで、声が掛けられた。

声をかけた人物……金髪の美形男子でもあるジョンは、気さくな性格でこの国で一番最初に友人となった幼なじみだ。

「本当に帰るのかい？」

「ああ。そのつもりだ」

「寂しくなるな」

本当に寂しそうな表情を浮かべるジョンに、僕は肩をすくめる。

「だけど、どうしていきなり日本に？ このままいけば博士まで行けるというのに」

「そうだな………ただの気まぐれかな」

ジョンの問いかけに、僕は行動の出口の方を見ながらそう答えた。それにジョンは分からないといった様子だった。

「そうだ。これは僕と友人たちからの贈り物だ。受け取って」

「ありがとう」

ジョンに手渡された花束とアルバムを受け取りながらお礼を言う。

「そろそろ行くな。飛行機の間もあるし」

「そうか………落ち着いたら手紙を送ってね」

ジョンに僕は頷いて答える。

「それじゃ、またなジョン」

そして僕は、ジョンに対してこれが最後ではないという意味を込めて、別れの言葉を告げるとその場を後にする。

「気まぐれ……か」

僕、高月浩介は空港へ向かうタクシーからイギリスの街並みを眺めながら、黄昏る。

とある事情でイギリスに留学した僕は、中学の課程でもある“キー・ステージ3”を修了したこの年、日本の高校に戻ることにした。学校の教師やガーディアンの人からもさんざん続けるようにと説得されたが、僕の決意は揺らがずに日本に戻ると言い続けた。

根気強く言い続けたおかげでようやく受験のために日本に戻るのことが出来たのだが、かなり戻るのが遅かったためにとんどの高校が願書の提出期限を過ぎていたという、絶望的な状況が僕を待っていた。

だが、一校だけ願書の提出期限が過ぎていなかったため、その高校に願書を提出して受験をしたのだ。

そして日本の高校に合格したという報告を受けたのがつい最近の事だ。

(そう言えば、高校はどこだったっけ?)

ふと、そんな疑問が脳裏をよぎる。

合格の知らせを受け取ってから色々なこと(ガーディアンの人への説得など)があつたため、名前を忘れてしまったのだ。

我ながら奇跡にも近い形で合格をした高校の名前を忘れるとは情けないと思ひながら名前を思い出す。

(そうだ。確か桜なんとかっていう名前だった)

思い出せたのが、高校の一部の名前だった。

正式名称を思い出そうとしたが、どうせ半日後には自宅に置かれてある合格通知書でわかるので、大して気にも留めなかった。

何せ、知らなければ日本に帰れないとかそういう類のものでもないし。

やがて、ヒースロー空港に到着し、僕は日本の成田空港行き便に乗ってイギリスを後にした。

イギリスをとび立ち、しばらくすると飛行機内の照明が落とされた。

周りが寝静まる中、僕はビニール袋から一冊の雑誌を取り出した。それはヒースロー空港内で販売されていた日本人向けの雑誌だった。

基本的に週刊誌があまり好きではないが、この雑誌を書く会社は色々な視野からの確かな分析と指摘をする記事を多く書いているため、時々読んでいるのだ。

僕は薄暗い中で、雑誌を読み始めた。

(ん？ 女子高が共学化)

その中、ひとつの記事に目が留まった。

それはとある女子高が男女共学化したと伝えるものだった。

何でも、近年日本で進む少子高齢化の影響で、受験する生徒の数が減少傾向にあるため男子の受け入れに踏み切ったようだ。

後半からはこの共学化の背景にある少子高齢化問題に対する鋭い分析と指摘をしつつ、政府がとらなければならない対策など、細かく書かれていた。

この出版社の記事は最後に読んだ3年前のと変わらない質だった。

(全入にさせるのも、問題だしな)

全入にさせる(つまり、願書を出すだけで入学ができる)と、中学程度の学力を有しないものまでもが入学できてしまうという問題もある。

一夜漬けは問題だが、勉強しないよりはましだ。

学校側も、そのリスクを避けるために男子の受け入れという伝家の

宝刀を抜いたのだろう。

(にしても、ここに入学する男子は大変なんだろうな)

男であれば、羨ましがらる周りのほとんどが女子という状況下で、果たして楽しめるだろうか？

女子の結束力はいい意味でも悪い意味でも強いものだから。

きっと男子たちは自分の居場所を確保するだけでも苦勞することだろう。

もつとも、積極的に交流を深めて居場所を確保できる者もいるだろうが。

(私立桜ヶ丘高等学校……ね)

僕は記事に出ていた高校名を見て、雑誌を閉じ再びビニール袋に戻した。

そして、僕も到着するまでの数時間の間、眠ることにするのであった。

(桜ヶ丘って……まさかね)

先ほど思い出したこれから通う高校の名前の一部と一致する雑誌に書かれた学校名に、ふと変な予感めいたものを感じたが、僕はたま名前が同じだっただけだと思ふことにした。

その予想が正しいものであることも知らずに。

それが分かるのは半日後のことであった。

第1話 衝撃の事実

成田空港に到着し、入国審査を終えた僕は成田空港のロビーである人物を待つ。

その人物は、僕のかけがえのない仲間でもあり、送迎する人物でもある。

「浩介、こっちよ」

「あ、中山さん」

短い黒髪に、整った顔立ちから凛としたオーラを纏う女性が中山なかやまみどり翠みどりさんだ。

「一月ぶりね」

「ええ。その時は非常にお世話になりました」

「なに、困ったときはお互い様よ」

ボーイッシュな感じだが、根はとても優しい人だ。

「さあ、車に乗りなさい。君の家へ送ってあげる」

僕は中山さんの厚意に甘える形で車のトランクに荷物を積むと、助手席に乗り込みシートベルトを締める。

「それじゃ、行くわよ」

「よろしくお願いします」

僕の言葉を受けて、車がゆっくりと滑り出す。

僕は再び車の窓から外を眺める。

たった一月しか経っていないのに、こうも懐かしく感じるというのは、僕は根っからの日本人だということを示しているのかもしれない。

「向こうの方はどうだった？」

「快く送り出してくれましたよ」

中山さんの問いに僕は静かに答えた。

「本当に、未練はないの？ あそこにいれば一流企業とかにも行けるんでしょ？」

「そうですね……でも僕は、日本人ですから」

僕の答えに、中山さんは「そう」と相槌を打った。

それを最後に、再び無言状態が続いた。

「まあ、これで私達のバンド”hyper・prominence”も活動再開というわけね。そうよね、”DK”？」

「ちよつと、勘弁してくださいよ」

中山さんのからかうような口調で言われたことに、僕は苦笑を浮かべる。

そう、彼女は僕が所属している、その世界で知らぬ人はいないと言われているほどの有名なコピーバンド、hyper-prominenceの一人なのだ。

ちなみにDKと言うのは、バンドで活動している際の僕の名前だ。

DKⅡ僕という事は、バンドメンバーしか知らない。

それにはある理由があるのだが、それはまた別の機会に話すとしよう。

「まあ、冗談は置いて、浩介のおかげで死にかけていた私達は、一流バンドになれてるんだから。本当に浩介様様よ」

「……」

中山さんの言っていることはある意味正しい。

当時、彼女たちのバンドは言い方は悪いが今とは正反対の環境だった。

それを部外者の僕とバンドメンバーの努力が実り、ようやく一流バンドまで上り詰めたのだ。

「浩介の演奏指導やカバー曲。みんな、あなたに感謝してるのよ。だから、メンバーを代表してお礼を言うわ。ありがとう」

「……素直に受け取っておきます。でも、これからはもつともつと頑張りますよ。何せ、僕たちに灯った火は誰にも消せないんだから」

「……ああ、そうね」

僕は中山さんと今後について意気込む。

自宅の前に到着し、トランクに積んだ荷物を取り出した僕は、荷物を取り出すのを手伝ってくれた中山さんに頭を下げてお礼を言う。

「ありがとうございます」

「いいって、いいって」

そんな僕に、中山さんはフランキーに相槌を打つ。

「それじゃあ、良い学校生活をね」

そして中山さんは、意味ありげな言葉を告げ、僕が何のことかと尋ねるよりも早く運転席に乗り込んで、そのまま走り去ってしまった。

「何だったんだろう？」

彼女の車を見送りながら首を傾げる僕は、まあいいかと割り切り数年間空き家にしていた我が家に足を踏み入れる。

「さて、こんなもんだらう」

一通り持ってきた荷物の片付けも終え、ついでに食材の買い出しも済ませた僕は、それを冷蔵庫にしまい終えると、自室でくつろぐことにした。

「お、久しぶりだな。このギター」

僕一人にしては広すぎる自室の窓側の壁の近くにあるギター掛けに掛けられたギター“Gibson ES-339”を僕は手に取った。

このギターは甘く軽快な音色で、低音がはっきりと出るという特徴がある。

十数個のギターを試し弾きして、ようやく決めた愛機で、バンドなどでも使っている僕の右腕的存在だ。

僕はギターをリードでアンプにつなぎ、電源を入れる。

ポリユームを徐々に上げて行き、軽く弦を弾く。

すると、軽快な音色が流れた。

その音色を確認した僕は、今度はピック手にして軽くギターを弾く。

曲ではなく、試し弾きの要領だ。

最初はゆっくりなテンポで、徐々に早めにしていく。
ある程度弾いた所で、僕はギターの弦を抑えて音を止める。

「よし、腕は落ちてないな」

僕がしたのは、腕が鈍っていないかの確認だ。

少々ギターから離れていたので、心配だったがどうやら大丈夫のようだ。

(まあ、離れていたとしても半年だけだ)

イギリスに留学する際には、ギターも持って行ってよく弾いていた。

ただ、日本に戻ることを決めてから、このギターを日本に送ったのだ。

「ん？ これは制服か」

ギター掛けにギターを掛けると、僕は机の上に置かれた大きな箱に目が留まった。

というよりどうして気づかなかったんだろう？

「サイズは中山さん達の方に伝えたから大丈夫だとは思っただけだ……」

イギリスの方での授業の合間に帰国したため、制服合わせなどをする暇もなく中山さんにイギリスの服屋で採寸してもらったサイズを学校側に伝えて貰うことにしたのだ。

大きな箱を開けると中に入っていたのは冬服なのか、白のTシャツと紺色のブレザーに黒色のズボンといった制服一式が入っていた。

取りあえずそれを試着してみた。

「……………」

ぴったりというくらいにサイズが合っていたが、制服を着た自分の姿を見るとどうも違和感が出てしまう。

(制服を着るなんて何回目だろう?)

昔の事なので良くは覚えていないが、少なくとも3回以上は着ている気がする。

しかし……

「しつくりこないな」

自分の制服姿を鏡で見てみるが、どうもしっくりこない。ただ単に似合わないというだけなのだが。

「とりあえず着替えるか」

僕は制服を脱ぐとハンガーにかける。

(これは何だろう?)

制服の入っていた箱の横に置かれた大きな紙袋の中身を見ると、教科書が入っていた。

僕は教科書一式を取り出すと、同封されていた教科書リストと照らし合わせて、すべてそろっているかを一冊ずつ確認していく。

「これが入学式のお知らせか」

続いて紙袋に入っていた入学式を知らせる用紙を手にするとそれに目を通す。

「よし……次は、生徒手帳か」

紙袋の中に入っていた最後の手帳のようなものを取り出す。

手帳を開くと高校名と僕の名前に学年、そして顔写真が貼ってあった。

「そうだ。高校の名前見ておかないと」

いつまでたっても高校の名前が分からないというのはまずいだろうと思い、僕は学校名の欄を見る。

「……………は？」

高校名を見た僕は、一瞬固まった。

その理由は学校名の欄に記された文字だった。

「な、なんで桜ヶ丘高等学校なの？」

そう、その学校は“私立桜ヶ丘高等学校”だった。

記事で見た共学化した女子高の名前と同じだった。

「こ、これはきつと同じ字なだけだ」

僕は微かな可能性に飛びつくと、生徒手帳に記載されていた住所を携帯のインターネットに打ち込んで検索を掛ける。

結果はすぐに出た。

「……………今年から共学」

僕の予想を無残にも砕く結果が。

「そ、そうだ！　これは夢だ！」

僕はそう叫んで頬を引つ張る。

「痛いッ!？」

やはりというべきか、鋭い痛みが走った。

「……字が変わってない！　という事は、これは現実?!」

痛む頬をさすりながら生徒手帳を見るが、やはりそこには“桜ヶ丘高等学校”の文字が記されていた。

『それじゃあ、良い学校生活をね』

その時、中山さんの言葉が頭の中に浮かび上がってきた。

きつとこのことだったのだろう。

「……………」

信じたくない現実を目の当たりにした僕は、只々立ち尽くすだけだった。

第2話 入学式!

あれから数日の時間が流れる。

僕は、新たに通うことになった桜ヶ丘高校の制服に袖を通していった。

「はあ……」

これから毎日通るであろう住宅街を歩きながら、僕はため息を漏らした。

これで何回目だろうか？

今日は入学式。

おそらく生徒たちはこれから始まる新たな日常に胸を躍らせている事だろう。

そんな中、僕は憂鬱な気分だった。

(何で僕が元女子高に)

僕は、未だに割り切れていなかった。

(まあ、願書を出すの日が遅かったんだから当然かもしれないけど)

それでも割り切ることはできなかった。

(女性に興味がないわけでも恐怖症でもないんだがな)

僕は女性に興味は多少なりともあるし、恐怖症だなんてこともない。

ただ単に“万が一”の時が一番恐ろしいだけだ。

女子の結束力は良い意味でも悪い意味でも恐ろしいほど強いのだから。

「9割が女子で残りの1割の男子の1割に僕が含まれているのか」

そう思うとなんだかすごいと思ってしまうのも仕方ない。

(というより、僕はどうやって合格したんだ?)

面接でも志望理由を聞かれたような記憶があるのだが。

……もつとも答えた内容は忘れてしまったが。

(不純な理由じゃなかったのが合格の決め手になった………なんてな。そんな分かりやすい基準じゃないか)

一体一クラスに男子は何人いるのだろうか？

僕一人だったらどうしよう？

再び不安になってきた。

「まあ、いつまで悩んでいてもしょうがないか。いつその事楽しむ勢いで行こう」

(それが例の課題もクリアに繋がるのかもしれないし)

僕はそう考えをまとめた。

「すう……はあ……」

いったん立ち止まり目を閉じると大きく深呼吸をする。

そして目を開けると、そこに広がる光景は今までとは見違えるほど素晴らしく見えた。

周りの光景など、心の持ちようで見え方が変わるのかと、どうでもいいことを学んだ僕は再び足を進める。

少し歩くと十字路に差し掛かった。

「この十字路からパンを口にくわえた少女が飛び出したりして」

どこのラブコメだよと心の中でツッコむ。

大体今の時間帯はまだ遅刻するような時間でもないし。

「うわッ!？」

そう思っていたところ目の前の十字路から少女が飛び出して来た。

しかもパンをくわえて。

(な、なんとというベタな)

あと一歩前に進んでいたらぶつかっていたかもしれない。

どうやら僕は運がいいようだ。

(にしても、かなり急いでいたな)

僕は少女が走り去って行った方向に視線を向ける。

(遅刻するってわけでもないのに走るなんて。とても律儀な人なんだな)

僕は先ほどの少女にそんな印象を抱いた。

きっと品行方正なのだろう。

「ん?」

自分の中で結論付けて歩き出そうとした僕は、地面に落ちている何かに目を止める。

それはピンク色で何やらキャラクターのようなものが縫われているハンカチだった。

「これって明らかに、さっきの人のだよな?」
もしかしたら別人かもしれないが。

「……………つて、早く追いかけないとツ!」

僕は慌てて少女の後を追いかける。

全速力ではなく若干パワーを抑えている。

そうしなければきつと僕は風になるだろうから。

全速力でなくても今の速さも普通の人よりはかなり出ている。

現にさっきの少女の後姿が徐々に近づいてきているのだから。

「おーい! その走っているあなた!」

「ふえつ!?! うわつととと?!」

声が聞こえるであろう範囲まで追いついた僕は大きな声で前を走る少女に声をかけると、それに驚いた少女は一瞬バランスを崩して転びそうになるが、なんとか転ばずに済んだようだ。

「だ、大丈夫ですか?」

「あ、はい。大丈夫です!」

少女は大丈夫だということのアピールしながら答える。

口にくわえたパンはどうやら途中で食べきったようだ。

「これ、君のですか? さっき向こうの方で拾ったんですが」

「あ、私のです! すみません、ありがとうございます」

僕が少女に差し出したハンカチは彼女の物だったようで、大事そうにスカートのポケットしまいながらお礼を言ってきた。

その少女は栗色の髪を左右と真ん中に分け、僕から見て左側をヘアピンで留めていた。

「いや、当然のことですよ」

「……………あツ!?! 遅刻、遅刻!」

僕の答えなど聞かず、少女は再び慌ただしく駆けて行った。

「……………」

僕はそんな少女の後姿を呆然として見送る。

(……………ただのおつちよこちよい?)

そんな事を思ってしまうのもある意味当然だと思う。

(それにしても彼女も桜高の生徒か)

着ている制服が前に見た桜高の女子用の制服と同じだったことから、僕はそう考えた。

そして僕は再びゆっくりと歩き出すのであった。

「ここが私立桜ヶ丘高等学校」

とうとう来てしまった。

元女子高であった桜高に。

「よしっ！」

僕は絶壁から身を投じる覚悟で校門をくぐる。

昇降口に入り『新一年生』と書かれた紙の下駄箱に靴を入れると、制服一式と一緒に入っていた青色の上履きを履くと奥の方に張り出されている新一年生のクラス分け表を確認する。

「僕は四組か」

自分のクラスが分かった僕は、四組の教室へと向かう。

「本当に女子しかないよ」

四組の教室に入った感想が今のだった。

周りを見れば女子、女子、女子。

まさに元女子高であるのを思わせる光景だった。

席の方は黒板に張り出されている席順で決まっている。

僕は廊下側の間だ。

隣の女子生徒はいないようだ。

(入学式までの間、どうしたものか)

この教室に足を踏み入れた時点で一斉に何とも言い難い視線にさ

らされたのだ。

「お前がもう一人の男子か」

これをもう一度味わえるかと聞かれれば、答えはN Oだ。

「よっー！」

最強を名乗る男が何を言ってるんだと思うが、これが現実だ。

「あれ聞こえなかったか？ おっす！」

「……………」

ところで、先ほどから馴れ馴れしく声をかけ続ける黒髪の男は何なのだ？

悪く言えば鬱陶しい。

男子は各クラスに二人ずつ入れられているようだ。

何故に二人ずつなのかが分からないが。

「あの一、いい加減反応してくれてもいいでしょうか？」

「なに？」

とりあえず今日の前にいる人物に、僕は鬱陶しさを隠すことなく反応することにした。

「お、やっど返事をしてくれたか！ いや、男子がほかにいてくれて助

かったぜ。俺は佐久間 慶介。よろしくな！」

「……………」

「あ、あれ？ また返事が」

僕は名乗り返すのが嫌になった。

相手の話方から、妙に僕の苦手とするタイプとぴったり重なる。

だが、同じクラススメイトだ。

そうも言ってられない

それに何より。

「はあ。高月浩介だ。呼び方は任せる」

「おう、俺の事も慶介って呼んでくれ！」

目の前の男が悪い奴には見えなかった。

人を見る目だけは、あるつもりだ。

きつとこいつは良い奴だ。

……もつとも、鬱陶しいのが玉に傷だが。

「ところで聞いてくれ浩介！ この俺の素晴らしいスクール・プランを」

「言ってみなよ」

「おう！ まずはこのクラスメイトの女子とお友達になるだろ、それでお付き合いするっていう素敵なプランだ！」

はつきり言おう。

目の前の男の言葉で、周囲の温度が三、四度下がった。
そして視線が痛い。

「……佐久間慶介」

「何だ？ 俺の素晴らしい計画に感銘したか？」

「僕に話し掛けないでくれるか？」

自分でもびつくりするほどの低い声で佐久間に告げる。

「な、なぜだ!？」

「お前と同類にされるのが嫌だから」

「お前も男だろ！ 女の一人や二人と付き合ってたっていいじゃねえか！ いいか！ ハーレムは男の夢だ!!」

知らないし。

それに、そんな事を大声で言わないでほしい。

本当に視線が痛い。

「佐久間慶介」

「何——ゲフツ?!」

僕は演説し続ける佐久間の脳天に鋭い一撃を加えることで演説を止めた。

「うるさい」

「ハイ」

ようやく佐久間は大人しくなった。

周囲からの視線も徐々にはあるが暖かい物となった。
(何だかものすごく目立っちゃったな)

今の一連のやり取りで、僕の当初のなるべく静かにしているようにすると密かな目標はことごとく潰された。

そんなこんなで、僕は入学式に出るべく入学式の会場でもある講堂

へと向かうのであった。

第3話 部活

入学式も終わり、後はHRだけとなった。

そのHRでは自己紹介をすることになった。

自己紹介の内容は名前はもちろん、趣味も言わなければいけないのだ。

「お、俺は佐久間啓介と申しますです！ 趣味はスポーツでしゅー！」

佐久間は誰が見ても分かるくらいに緊張していた。

しかも最後の方で囁んでるし。

そんな彼の様子に、微かではあるが笑い声も聞こえる。

「はい。それじゃ次」

「はい」

とうとう僕の番となった。

僕は何を言うかをまだ考えてもいなかったが、席を立つことにした。

「高月浩介です。趣味は読書です。よろしくお願いします」

僕は無難な自己紹介をすることにした。

嘘はついてないが。

こうして、自己紹介は進んでいき全員の自己紹介が終え、僕たちは下校となった。

「浩介！ 一緒に帰ろうぜ」

「はいはい」

HRが終わって解散になった瞬間に、僕の席にやってくる佐久間に僕はため息交じりに頷くと荷物をカバンに詰める。

「お待たせ」

「じゃ、出発！」

何故か佐久間に先導される形で、僕は教室を後にする。

「入学おめでとうございます！」

「うお?!」

靴に履き替え、外に出た瞬間先輩と思わしき女子生徒たちに行く手を阻まれたかと思うと、一瞬で囲まれた。

どうやら部活勧誘のようだ。

「あ、あれ? 俺には?」

女子生徒たちの部活勧誘の声と混じって微かに聞こえる男の声。

女子生徒たちはそのまま何事もなかったかのように去って行ったが、僕の手に残されたのは大量の部活勧誘のチラシだった。

そして両手を上げてチラシを受け取る姿勢のまま、呆然と立ち尽くす佐久間の姿だった。

気が付けば早いもので、学校が始まりもう二週間が過ぎようとしていた。

「何見てんだよ?」

「部活を紹介する冊子」

佐久間の問いに僕はそっけなく答える。

「部活って……二週間経つのにまだ決めてなかったのかよ!？」

「悪かったな」

前の席を占領した佐久間は机の上に広げた冊子を覗き込む。

「そう言うお前はどうかだよ? 仮入部とかをやりまくっていたようだけど」

「断られました」

新入部員が欲しい中でも断るということは、よほどのことをしでかしたのだろう。

もしくは本能的な何かでこいつの危険なところとかが分かったり

もしたのか？

(どうでもいいか)

僕はそう割り切り、冊子に目を向ける。

「僕さ、思うんだが」

「何だ？」

「この学校の校長か理事長なのかは知らないが、馬鹿だろ」

僕の辛辣な言葉に、佐久間は口笛を吹く。

「何故廃部予定などと記載をする？　そもそも、廃部するんなら載せなければいいのに」

僕が言っているのは『軽音部』の部活動紹介の項目だった。

しっかりと部活動名の隣に（廃部予定）と書かれている。

「まあ、普通の学校なら軽音部は定番だしな」

「そうなのか？　僕にはよく分からないが」

佐久間の説明に僕は首をかしげる。

今までイギリスにいたためそういったことは縁がなかったのだ。

「は？　浩介、中学の時に部活動とかしてなかったのか？」

「まあ、勉強とかもあつたしな。そもそも留学しているんだから知るわけがない」

「留学!？」

僕の言葉を聞いた佐久間は固まり、そしてなぜか周りで話していた女子の数人がこっちに來ていた。

「高月君って、留学してたの？」

「あ、ああ。三年間だけど」

「どっどっ？」

何故かは知らないが、留学の話に女子生徒たちは食いついてきたようだ。

「イギリスの方に」

「イギリスから、やっぱり料理はおいしかった？」

「まあ、味云々は感じ方は個人差があるし、数日もすればなれるよ」
やはり食いついたのは料理関連の方だった。

矢継ぎ早に投げかけられる疑問に、僕は丁寧な答えて行く。

「浩介！」

「な、何?！」

そんな中、今まで沈黙を守っていた佐久間が声を上げる。そのただならぬ雰囲気にも、思わず畏まってしまった。

「イギリスの女性たちのバストは！ 美人さんがいたのか?!」

「……………」

あまりにもくだらない問いかけに、僕は固まり女子たちは数歩後ずさった。

「高月君」

沈黙が教室内を覆う中、茶色の髪の子生徒が僕を呼ぶ。

目をやると、手でジェスチャーを送ってくる。

僕はそれを左手の親指と人差し指を使って丸を作り、相手に“了解”とジェスチャーを返した。

「佐久間」

「おう、教えてく——」

僕は脳天に一撃を加えることで、佐久間の口を強引に閉じさせた。その後、佐久間は自分の席に突っ伏すことになるのであった。

「部活かあ」

夜、自分の家に戻った僕は自室で考えをめぐらしていた。

内容はもちろん部活動の事。

(運動部は……………)

想像してみた。

運動部に入った僕⇒県内ベスト記録を塗り替える⇒全国大会に出場し優勝⇒世界大会で優勝

「ズルだろ」

僕の身体能力を考慮すると、絶対に入ってはいけない気がした。

もちろん僕も加減はするが、確実に加減できる自信がない。不意に全力で動いてしまっただろう。しかも、何気にありえそうで怖い。

「となると、残るのは文科系か」

僕は、文科系の部活紹介ページを開く。

だが、やはり僕の目に留まる様な部活はなかった。

「……………」

たった一つを除いては。

それは『軽音部』だ。

確かに今の僕ならばこの部の方が向いているかもしれない。

楽器系、特に弦楽器なら。

特に、軽音楽系は僕が所属するバンドとほとんど同じ感じの曲だった気がするし。

問題とすればただ一つ。

「僕がプロの……H&Pのヴォーカルであることは知られてはいけない」

そう、僕がDKという事を隠さなければいけないということだ。

だが、これは一筋縄ではないかない。

何せ演奏してしまえば一目瞭然なのだから。

いくらワザとミスをしようとしたところで、癖までは隠すことはできない。

ギタリストには各々に弾き癖が存在する。

それが極まって行くと“個性”となるのだが、僕の場合はそれが独特だとよく言われる。

要するに、知っている人が見れば、聞けば分かってしまうということだ。

ならば僕の子供の癖は一つしかない。

「楽器の方をいじくる……か」

ギターの方に細工をして“音色”その物を変える事だった。

勿論、音色を完全に変えることなど不可能だ。

「だからこそ、こいつを使うのさ」

僕はクローゼットに封印してあったギターを取り出す。白色でやや丸型と四角形の間形の形をするボディだ。名前はない。

というよりは覚えていないと言った方が正確だろう。

このギターには細工が施されている。

それは弦の部分。

弦全ては主流で使っている Gibson の使い古しだ。

ギターの弦は空気に触れるだけで錆びる。

そして人の汗でもっと早く錆びる。

錆びた状態で引き続ければどうなるかは、想像に難くない。

このギターはその弦を利用しているのだ。

これまでの経験による計算上、中級レベルの演奏法(速弾きなど)を
すると、弦が切れる段階まで錆びている弦を使っている。

よくDKとしてじゃないときに弾かなければいけない状態になっ
た際に使っている。

このギターが僕の正体を隠してくれる相棒になる。

その理由は――

「ん？ 電話だ」

思考の海に潜る僕を引き上げるように鳴り響く電話に、僕は着信音
のする方へと足を向ける。

「この電話という事は、バンド関係か。はい、もしもし」

『おー、出た出た。悪いねDK』

電話口から聞こえたのはMR (中山さんだが) の声だった。

この白色の携帯電話は、バンド関係の要件の際に使っている。

原則としてこの電話の際は、お互いに本名を言わないことにしてい
る。

完全に僕のがままによる措置だったが、バンドメンバーは快く引
き受けてくれていた。

「どうしたMR。ライブの件か？」

『いや。DKに〃例の〃物を届けておいたから、確認しておいてほし
いんだ』

DKとしての時は、僕はタメ口とやや威圧感のある口調で接する。これは他バンドから舐められないようにする自衛の手段だ。

理由としてはバンド発足当時、僕は小学生だったから餓鬼だと言われるのが嫌だったためだ。

その名残で今もこんな感じなのだ。

「ああ、あれか。分かった確認しておこう。返事は例の場所にいつも通りに発送しておく」

『分かった。では』

完結に用件を言つてMRは電話を切った。

“例の”物とは、リビングに置かれていたA4サイズの茶封筒の事だ。

僕は白い携帯電話を机の引き出しにしまうと、勉強机に置いてある茶封筒を手にする。

差出人は『鈴木卓郎』となつてているが、この人物はH&Pと関係のない一般人だ。

バンドメンバーの名前はトップシークレット。

限られた者しか知らない事実だ。

そしてそれを第三者にばれないようにするために、隠ぺい工作は徹底した。

こういつた手紙の発送元はMR……中山さんの知人が使つていた私書箱を譲り受けて使っている。

快くOKしてくれた鈴木さんには頭が上がりないのだ。

故に、僕がDKであるとは誰も思わない。

協力者がリークでもしない限りは。

「さて、中身は何かな」

僕は茶封筒を開封すると中を漁る。

中身が紙のようなものであることが分かった僕は、躊躇なくひっくり返して中身を机の上に出した。

「ファンレターか」

それはすべて僕に宛てられたファンレターだった。

何十通もあるファンレターに、僕は一通ずつ目を通していく。

「はあ……」

殆ど読み終えた僕は、ため息を漏らした。

嫌なわけではない。

むしろファンがいるということは嬉しいことだ。

問題は文面だ。

『DKさんの御復帰を心待ちにしておりました。是非、また良い演奏を聞かせてください』

問題はないようにも見えるかもしれないが、“DKさん”という部分が僕には屈辱でもあった。

勿論、ありがたいことでもある。

僕の事を待っていてくれるファンには感謝してもしきれない。

だけど……

(僕一人がH&Pじゃない)

それが本音だった。

昔音楽評論家が言った一言が原因だった。

『H&Pは、DKその物と言っても過言ではない。逆にDKがいないH&Pはここまで行けないだろう』

H&Pが有名になったのは、僕にも一因はあるが、何よりみんなの努力が実ったのこと。

それを僕のおかげで有名になれたと言われるのは、いった本人は最高のほめ言葉だと思うが、僕にとっては最高の侮辱だ。

僕は、バンドのメンバー全員に頭を下げた。

皆は許してくれたが、僕はそれから決めたのだ。

“DKの正体を絶対に明かさない”と。

「あー、気分悪」

嫌な事を思い出した僕は、振り切るように残り少ないファンレターを読むことにした。

「ん？ またあの子か」

僕が手にしたファンレターの差出人に、思わずそう呟いてしまった。

差出人は『秋山 滯』

H & Pのファンだとかで、よく手紙を送ってくれる。

この人物は、一通目で僕たちの印象に残ることになる。

その理由は……

(ペンネームでいいのに律儀だよな)

律儀に本名を明記しているからだ。

ファンレターの差出人は9分9厘、ペンネームなのに、彼女は本名で送ってきたのだ。

その事に思わず笑みがこぼれる。

ちなみに、一応その事を書いたのだがその後も本名だ。

理由までは皆目見当がつかないけど。

『DKさん、御復帰おめでとうございます。これからもH & Pのファンとして、楽しみにさせていただきます』

それが、手紙に書かれていた内容の要約だ。

“ H & P ”と書いてくれていることがとてもありがたいことだった。

僕を、DKをH & Pのメンバーとして見てくれることがうれしかった。

「さて、次は……またかい」

次のファンレターを手にして差出人を見た僕は思わず苦笑してしまった。

差出人には『中野梓』と記されていた。

この人物と先ほどの手紙と同様に、本名でいきなり送ってきた人物だ。

内容も先ほどと同じだが、他にもいろいろ書かれていた。

9割方のファンレターの返事はそれほど大差ない内容だが、この二人に関しては大きく返事の内容が異なる。

(嬉しい手紙をもらうと、書く量が変わる癖は直さないとな)

そんな事を思いながら、僕は気付けば便箋がいっぱいになるまで返事を書き上げるのであった。

書き終えた返事を新たに用意した茶封筒に入れて、封をすると翌日発送しようと思い、机の上に置いた。

その後は次の日の教科書などの準備をすると、僕はベッドにもぐりこみ眠りにつくのであった。

第4話 入部!

翌日、僕はファンレターに対する返事の手紙を射れた茶封筒を郵便ポストに投函してから、高校に向かった。

「おつす、浩介!」

「おはよう。朝からテンション高いな」

いつもの事だが、ハイテンションの佐久間に僕は呆れながらあいさつを返す。

「部活は決めたのか?」

「ああ。一応ね」

僕はそう告げて佐久間に入部届を渡す。

「へく、軽音部か」

「まあ、考えた結果だけど」

感心したようにつぶやくと、佐久間は入部届を僕に渡す。

「いいなく、これでまたモテるんだろうな」

「そんな不純な思いでやらないから」

こいつの頭の中にはモテることだけしかないのかと頭を抱えたくなる。

「これからは浩介の事を師匠、もしくは兄貴と——ぐばはあ!?!」

「お断りだ」

いつものように黙らせた僕は、封筒に入部届を入れると机の中にしまう。

僕は、放課後に思いを馳せる。

何だか楽しみになってきた。

「だったら、親父と——」

「佐久間慶介。黙れ」

「……………ハイ」

前言撤回、今日は色々と波乱の一日になりそうだ。

そんなこんなで、担任の先生が教室に入ってくることでHRが始まるのであった。

授業も終わり、放課後を迎えた。

そんな中、僕は今非常に困っている。

(入部届は、誰に出した方がいいのだろうか?)

これまで部活などをやっていなかったもので、入部届を誰に出せばいいのか分からなかった。

情けないなと我ながら思う。

(誰かに聞くか……とは言っても、それが出来るほど親しい奴は佐久間位しかいないんだよな)

何だかささらに情けなく思えてきた。

僕は佐久間の方を見てみた。

「グガー、グガー」

いびきを掻いて寝ていた。

まったくあてにならない人物であることだけは理解できた。

(とりあえず、軽音部の部長に提出しておくか)

先生には部長じゃない時に出せばいいだろうと思ひ、僕は教室を後にする。

(さて、軽音部はどこだろう)

教室を出てから数秒で、僕は大きな壁にぶち当たった。

壁にぶち当たった僕が向かった先は、『職員室』だった。

「失礼します」

職員室に入った僕は、担任の教師を探したが見当たらなかった。

おそらく多忙なのだろう。

「あなた、誰先生に用事かしら?」

どうしたものかと考えたところに、声をかけてくる人がいた。

見れば人当たりのいい笑みを浮かべているメガネをかけた女性教師が立っていた。

普通の人が見れば、彼女はお淑やかそうに見えるだろう。

そう普通の人には。

「えっと、軽音部の部室がどこにあるのかを聞きたいんですけど」
「ああ、軽音部ね」

僕の問いかけに、目の前の女性教師はなるほどねと言わんばかりの表情で頷くと職員室の出入り口のドアまで歩み寄る。

「あそこの階段を上った先……校舎の最上階にある音楽室よ。頑張つてね」

「ありがとうございます」

教師からエールをもらい、僕は一礼すると職員室を後にした。

「どうして手すりにこんなものを」

階段の手すりにあるウサギや亀のレリーフに、首を傾げながら一段一段上って行く。

上るたびに樹がきしむ音がするのは、風流と見るべきなのか、うるさいと取るべきなのか。

それはともかくとして。

「ようやく最上階だ」

なんとかかたどり着いた最上階で、僕は額の汗をぬぐう仕草をしながら一息つく。

「確か軽音部は音楽室で活動していると言ってたな」

僕は、念のためにと右手を音楽室のドアに触れて目を閉じる。

（いない。ということとは……）

人の気配がないのを確認した僕は、左隣の『音楽準備室』のドアに同じように手を触れる。

（いた。人数は……3人か。しかも全員女子だし）

早速懸念していたことが起こった。

女子だけの部活に男が一人というのは、非常に心苦しい。

いや、居心地が悪いということではなく。

接し方が分からないだけだ。

(とりあえずは、話してみないと)

僕は一度頷いて深呼吸をすると、ドアノブをひねった。

「あの、すみません」

「はい、何か用？」

ドアを開け、恐る恐るの中に入ると、栗色の髪をカチューシャのようなもので留める女子高生が、そっけない様子で近寄りながら声をかけてきた。

「軽音部はここで——」

「もしかして、入部希望?」

最後まで言い切る前に、栗色の髪の子高生によって遮られた。

先ほどのそっけない態度は何だったのだろうか?

今は目を輝かせている。

というより、すごい変わりようだな。

「え、ええ」

「~~~~っ! おーい、皆! 入部希望者が来たぞ!」

僕の返事に栗色の髪の子高生は嬉しそうな声で悶えると、後ろの方にいる女子高生二人に声をかける。

「ようこそ、軽音部へ!」

「歓迎いたします!」

そして立ち上がると、嬉しそうな表情で黒色の髪を後ろに結んでい
る女子高生と、薄い金髪の髪をストレートに伸ばす人当たりのいい雰
囲気を醸し出す女子高生の二人が歓迎の言葉を掛けてくれた。

「よおしムギ、お茶の準備だ!」

「はい!」

そして栗色の女子高生の指示に、薄い金髪の髪の子高生は笑顔で
返事をする素早く支度をした。

(な、何? この熱烈な歓迎)

あまりの熱烈な歓迎に、僕は少しばかり引いていた。

「さあさあ、座って座って」

「は、はい」

栗色の髪の子高生に言われるがまま、僕は奥にあった椅子に腰かける。

(ま、まさか僕の正体を知っているのか!?)

色々な可能性が頭の中をよぎる。

(もしかして、試験でもするのか? 入部するための面接試験とか)

ありえないとは思いつつも、部活動を生れてはじめてする僕には、想像がつかなかった。

「はい、どうぞ」

「あ、すみません」

そして用意されたのは良い香りの紅茶と、僕の大好物のチーズケーキだった。

なぜ、こうも僕の好みにぴったりなチョイスなのだろうか?

(た、食べづらい)

三人に見つめられながらと言うのは、非常に食べづらい。

「どうぞ、召し上がって」

「い、いただきます」

薄い金髪の女子高生に促されるまま、紅茶の入ったティーカップに手を伸ばす。

そして、一口すすると柔らかい味が口の中を駆け巡る。

「お、おいしい」

思わずそう呟いてしまうほどのおいしさだ。

人に入れて貰ってここまで美味しい紅茶は初めてだ。

僕はチーズケーキにも手を伸ばす。

フォークでチーズケーキの先を切ると、それを口元に運ぶ。

「はあ〜」

思わずとろけそうになる。

やはり、チーズケーキは神の産物だ!

「好きなんですか? チーズケーキ」

「え、ええ」

(いけないいけない。しっかりしないと)

とろけ切っていた自分に喝を入れつつ、僕は問いかけに答える。

「あなたは、どんなバンドが好き？」

「え？」

「好きなギターリストとかは？」

「えっ!？」

栗色の髪の子高生の早速の問いかけに、僕は固まってしまった。

まさか、そこから入るとは思ってもいなかった。

そして正直に言おう。

僕はバンドとかギターリストの名前は知らない。

いや、これでは語弊がある。

正しくは、名前は知っているが好きか否かの判別は出来ないのだ。

カバー曲をするために、曲を聴いたりはしているためバンド名は知っているが、それがそのバンドが好きだということに \parallel にはならない。

ギターリストはなおさらだ。

『他は他、ここはここだ。他者を気にする暇があるのなら、まずは己を鍛えよ』

それが、僕が前にバンドメンバーに言っていた言葉だった。

あの時の自分を殴り飛ばしたい。

少しは興味を持てばよかった。

(ここで適当に言っても深く潜られたら絶対についていけない)

そんな時、明暗が思いついた。

(自分の所属するバンドを言えばいいんだ)

そうすればどんなに詳しいことを聞かれても話についていける。

何せ自分が所属するバンドなのだから。

とは言え、DKと言うのは気が引ける。

自分で自分を褒めるほど、僕は変人ではない。

なので、僕は相方の名前を言うことにした。

「えっと、MR」

「MR!？」

黒髪の子高生が身を乗り出すほどの勢いで食いついてきた。
その勢いに、思わずのけぞりそうになった。

「あー、なるほど」

栗色の髪の子女子高生も納得した様子で呟く。

「どなた？」

「八年ほど前に発足したバンドのギタリスト！ 重厚で強く響く演奏をするんだ」

MRに聴かせてあげたら、喜ぶだろうなー。

「だったら滯と気が合うんじゃない？ 滯もファンだしな」

「え、滯？」

今、栗色の髪の子女子高生の口にした名前らしき単語に、僕は汗がどつと噴き出るような感じがした。

「滯さんって、お名前は？」

「っ!？」

恐る恐る尋ねると、滯と呼ばれた女子高生は顔を赤くして顔をそむけた。

「あくあ。ごめんね、うちの滯は恥ずかしがり屋だからなるほどなど納得。

細かいところには追求しないことにした。

「あなた、名前は？」

「あ、秋山滯」

その瞬間、時間が止まったような錯覚を覚えた。

(ふ、ファンの子だ!?)

何度も何度も本名でファンレターを送っていたのが、目の前の黒髪の子女子高生だったのか。

(よ、よかったDKと言わなくて)

言っていたら、DK解説が始まっていたかもしれない。

自分の事を目の前で言われるのは、非常にむずがゆく感じる。

「私は琴吹 紬と申します。ムギと呼んでください」

「あ、私は田井中 律。よろしくね」

薄い金髪の子女子高生……ムギさんに続いて栗色の髪の子女子高生

……田井中さんが自己紹介をする。

「すみません。僕は高月浩介と言います。よろしくお願いします」

僕も彼女たちに倅い、自己紹介をする。

「あ、敬語じゃなくても良いですよ。同じ学年ですし」

「そ、そうですか。では……これからはこんな感じで話さしてもらおうよ」

ムギさんの提案に僕は一呼吸おいて話し方を元に戻した。

「秋山さんのファンって、もしかしてMRの事？」

「いや、ちがうよ。漣はねH&Pというバンドとそこに所属するDKのファンなんだよ」

H&Pと言うのはhyper-prominenceの省略した呼び名だ。

世間一般的にはこの愛称で呼ばれている。

「そのDKさんと言うのは、どなた？」

「ギター演奏で右に出る物はいない、どのような難解な速弾きでも巧みに演奏する、音楽界に革命をもたらしたギタリスト！」

結局解説されちゃうのね。

(しかも革命なんてもたらしてないし)

突っ込みたいのを必死に堪える。

でも、今の一通りの流れで、僕の正体に気付いていないということ
は分かった。

気づいているのであれば、今頃はすごい騒ぎになっているだろう。

とは言え、さらに僕は気を付けなければ行けなくなったことでもある。

「あ、これ入部届です」

「はい、確かに」

「楽器は何を？」

入届を田井中さんに渡しながた聞かれたので、僕は少しだけ考えたのちに答える。

「えっと、ギターを少々」

一番いいのはギターを弾かないということでもあるのだが、それ以外だと演奏すらできない可能性があるので、ここはギターを取ることにした。

「そっかそっかく、それじゃぜひ明日持つてきて聞かせてよ」
「そうだな。どのくらい弾けるかを把握するのも必要だしな」
「どうやら神様は僕にとことん冷たいようだ。」
「どうとう来てしまった。」

最初の試練が。

「分かりました」

こうして僕は、その試練を受けることになるのであった。

第5話 活動!

晴れて軽音部に入部することになったのだが、僕はさっそく試練を課せられた。

「絶対にばれる」

目の前にあるのは白いギター。

ギター自体に細工をしていて弦が切れやすくなっている物だ。

とは言え、これだけでは心もとない。

どんなに下手な演奏をしようにも、弾き癖がある以上ばれる。

しかも、その場には僕たちのバンドのファンがいるのだ。

さらに注意が必要だ。

分からない可能性もあるにはあるが、そんな物は希望的観測に過ぎない。

だからこそ、そう言ったことは考えずに最悪の場合の事を考える。

「あわよくば、ギターを見る目が無いからこそこうまいギタリストだと思いつんでくれることを祈るしかないな」

その為の白いギターだ。

弦が折れる⇒ギターを購入した際の話をする⇒ギターを見る目は無いが演奏はうまいと思わせる。

それが僕の狙いだ。

「勝負は明日」

明日放課後に、みんなの前で演奏をすることになっている。

これを突破すれば第一関門はクリアになる。

後は演奏中に下手な事をしなければいい。

上手すぎず、下手すぎずのラインを目指すのだ。

「尤も、その前に『廃部しなければ』という前提がつくけど」

ティータイムの時に聞かされた話では、今月中(つまりはあと8日なのだが)に部員が五名入部しなければ廃部になるとの事。

つまりあと一人だ。

(とはいえ、軽音楽Ⅱ軽い音楽でハーモニカやカステネットとかの楽器を演奏するなんて勘違いした人が入部しなければいいんだけど)

さすがに“カスタネット”を演奏すると思ひ込んでいる人がいるとは思えないが。

目の前でそう言うのを出されて演奏されても、どう反応すればいいのかが困るし。

(まあ、ギター弾いたことがない人に一から教えるのは嫌じゃないんだけどね)

誰にも始めてはある。

そういう人にやさしく教えられるようにするのが、僕たちプロの役目の一つなのだ。

「よおし、明日は頑張るぞー！」

僕は気合を入れて眠りにつくことにした。

翌日、その仮定通りの人物が現れることになるとも知らずに。

翌日、僕は白色のギターが入ったギターケースを背負って教室に入った。

「おつす……つて、なんだよ!? その馬鹿でかい荷物」

教室に入ってきた僕に声をかけてくる佐久間。

「そんなにでかくない。ただのギターだ」

「へえ、ギターか。つて言うことは」

僕の言葉を聞いた佐久間はまさかと言った表情を浮かべる。

そんな佐久間に、僕は静かに頷く。

「軽音部に入部することになった」

「それはよかった」

意外だ。

佐久間だったら、部員は女子かとか聞いてくると思ったのだが。

(佐久間についての見方を少し改めよう)

僕は心の中でそう決めた。

「で、女子は何人だ？」

「……………」

先ほどまでの関心を返せ。

「全員だよ」

「ぬぁにい〜!?!」

ため息をつきながら答えると、佐久間は大きな声を上げて僕に迫る。

「浩介！ どうしてお前はそんなに女の子とお近づきに——げふあ!?!」

「うるさい。黙れ」

いい加減全部聞いているのも面倒になったので、潰すことにした。

「まあ、それはともかく、だ」

どうも最近佐久間の回復力が上がっているような気がしてならない。

勘違いであってほしいが。

「入部おめでとう」

「あ、ありがとう」

そして、こうやって真面目な一面を見せるから複雑な気分になるんだ。

僕はとりあえずギターケースを窓側に立てかけることにした。

邪魔になりそうなら別の場所に置くことになるが。

「やれやれ、やっと終わったよ」

放課後、担任の教師から雑用をするように言われた僕は、ようやく雑用を終えた。

教室に入ると怪しげな動作でギターケースに手を伸ばす佐久間の姿があった。

「佐久間、何をしている」

「あ、ちよつとギターを見てみよう——ッ?!?!?」

佐久間が言い切るよりも早く、股間を蹴りあげた。

「触るなど言った。これで五度目だ」

「は、はい。ズビバゼン」

取りあえず佐久間は潰しておき、僕は今度こそギターケースを手に教室を後にするのであった。

「ごめん、遅れ——」

「そういうわけだから、演奏の準備をして!」

部室である『音楽準備室』に入った瞬間、田井中さんに腕を掴まれながら指示を出された。

「は? 何が」

突然「そういうわけだから」と言われても意味が分からない僕は、呆然と固まっていた。

「律! ちゃんと説明しないと」

「でも、説明しているうちに平沢さんが帰ったらどうするのさ!」

何だかものすごく興奮しているなど思っていると、ふと視線を感じた。

視線のする方を見ると、そこには栗色の髪の女子高生がソファアに腰かけていた。

「ん? 君はあの時の」

「ふえ?」

入学式に遅刻でもないのに遅刻と言いながら走って行った、おつちよちよちな女子だった。

「あの時はありがとうございました!」

「いえいえ」

「お知り合い?」

そんなやり取りをしているとムギさんが聞いてきた。

「まあ、ちよつと色々ありまして」

「色々っ！ はあく」

彼女の名誉のためにと、具体的な事をぼかして言うと言のワンプレーズにムギさんは、ぼわあとゆるんだ表情を浮かべる。

どうして？

「取りあえず、今の状況を説明してくれる？」

思わずそう呟いてしまった僕の声に反応したのはムギさんだった。

そんなムギさんの説明によれば、楽器を演奏できないのに軽音部に入部してしまつたらしい。

そして、せめてという事で、演奏を聴いてもらうことになって僕が入ってきたということらしい。

「そう言う事なら……」

僕は背負っていたギターケースを下すと、中からギターを取り出す。

そして置かれているアンプとつなげた僕は、軽く弦を弾いた。

すると、微妙に歪んだ音が周囲に響く。

「それで、演奏曲目は？」

「うーん。『翼をください』？」

「いや疑問形で返されても」

曲名を告げられた僕は、頭の中でその曲を軽く思い出しながら、そこにギターの音を入れて行く。

「ワン、トウ、スリー、フォー！」

「え、ちよ!？」

まだ完全にシユミレートが出来ていない状態にもかかわらず、いきなりカウントされた僕はあるうことか入りがずれてしまった。

歪んだ音色を響かせる中、ドラムのリズムもバラバラでキーボードの音やベースの音なども微妙に方向性がずれてしまっている。

はつきり言つて、こんな演奏をバンドメンバーの前でしたら、僕はただでは済まないだろう。

そんなズレまくってしまった曲の演奏は、なんとか終えることが出来た。

すると、今まで座っていた栗色の髪の子高生は感動した様子でも度も拍手をしていた。

「い、いやあー。どうだった？」

「何ていうか。すごく言葉にしにくいんだけど」

照れた様子で女子高生に尋ねると、女子高生は高いテンションのままはつきりと告げた。

「あんまりうまくないですね！」

(ば、バツサリ)

僕とて、うまいとは思っていないがこうもはつきりと言われるのは逆に清々しささえ感じていた。

「でも、スツごく楽しそうでした！ 私、この部に入部しますー！」

女子高生の宣言に、僕は夢かと思ったが、頬の痛みがこれは夢じゃないと告げていた。

「痛い」

僕は小さな声で頬をつねるムギさんに不満を口にするが、聞こえていないようだった。

その後、田井中さんによつて活動開始記念と言うことで写真が取られた。

ちなみにその写真には、田井中さんが額しか映っていないかったために、ちよつとした騒動があつたのは余談だ。

「あ、でも私全然楽器とかできないし。マネージャーとかどうかな？」
「ここは運動部じゃないぞ」

女子高生の少しばかり外れたような提案に、思わず突っ込んでしまった。

気曲ムギさんの勧めで、彼女は“ギター”を始めることになった。

そして……

「では、聞かせて貰おうか！」

「お前は何様だ！」

ソファアの上でふんぞり返る田井中さんは、隣に腰かける秋山さんに小突かれた。

危ない、あとちよつとで僕が小突きそうになっていた。

さすがにここで“小突く”のは怪我では済まなくなりそうだ。

(何かほかの手段を考えることにしよう)

そう考え付いたところで、僕は一息ついた。

「まだ少しだけ嗜んでいる程度だからうまくないかもしれないけど、ワンフリーズ行きます」

僕はピックを持つ手に走る震えを深呼吸で抑える。

これから僕が演奏するのは僕の十八番でもあるカバー曲のソロだ

その名も『Devil Went Down to Georgia
a』だ。

直訳すると“悪魔はジョージアへ”となる。

悪魔と勝負をして負けた人間の魂を奪うという物語だ。

この曲は、もともとはカルチャーミュージックのようなものであったが、音楽ゲーム用にアレンジされハードロック風にされた。

そしてギター殺しの曲や、ラスボスとまで言われるようになる。

その由縁が、今から弾こうとしているソロパートなのだ。

僕は、ピックを振り下ろす。

最初はゆっくり目で簡単な音を。

だが、徐々に悪魔が牙をむく。

テンポは一気に早まり、音は小刻みになって行く。

今この場は嵐の海と化した。

その中で必死にもがくような音色が奏でられる。

そして、いよいよソロパートも終盤となったところで、間抜けな音

と共に弦は切れた

「あ、切れちゃった」

白々しいと思いつながら、僕は落胆した風に演じながら呟く。

(あれ、反応がない)

僕は、いつまで経っても反応がないため、リスナーである四人に声をかけることにした。

「おーい、大丈夫か？」

「……すす」

「すっ。」

彼女たちの前で手を振りながら呼びかけると、突然田井中さんが反応を示した。

「すっげえ！ うまい、上手すぎる!!」

「うん。私も聞きほれてしまいました」

「すごい！ わたしとつても震えちゃいました!!」

反応を示したかと思うと、ものすごいハイテンションで褒めちぎられる。

一応プロだから、弾けて当たり前だ。

でも、この胸の奥からこみ上げる喜びは、とても心地よい物だった。

「なあ、濡もそう思うだろ！」

「ああ……本当にすごい」

(まづいな)

秋山さんの目が、僕には過去を思い返しているように見えた。

今、秋山さんの中では様々なバンドの演奏が再生されているだろう。

どうか僕の正体がばれないように、祈ることしか僕にはできない。

それよりも問題なのは

「是非、私にギターを教えてください！ 師匠！」

「師匠は止めて」

興奮のあまりに手を握りしめて教えてくれとせがむ、軽音部に入部してくれることになった女子高生への対応だったりする。

その後、思考の海から戻ったのか秋山さんによって女子高生は落ち着きを取り戻し、僕が彼女にギターを教えるという事で落ち着いた。

その態度から、僕はばれなかったと知って静かに息を吐き出すのであった。

こうして、軽音部は廃部の危機を脱したが、これはまだまだ序の口であることを僕たちは知らないでいた。

1年生編 『活動開始』 第6話 楽器Ⅱ性格？

平沢さん（名前を覚えてもらった）の入部で軽音部は、何とか廃部を免れた。

大型連休も終え、またいつものように学校生活が始まる。

「ちくしょう、お前はこれからハーレム道に——」

何やら佐久間が喚きますが、いい加減構うのが面倒になったので無視して部室に向かうことにした。

「あれ？ 高月君部活？」

「ああ。基本毎日部活だよ」

「頑張つてね」

クラスの女子とも色々と馴染んでいき、そこそこ充実した高校生活を送っている。

僕はギターケースを背負うと、軽音部の部室でもある『音楽準備室』へと向かうのであった。

「つて、聞けよ！」

そんな佐久間の叫び声を背に受けながら。

「あれ？ 僕が最後か？」

「うん、そうだよ」

どうやら、僕が一番最後だったようで手をひらひらと振りながら答える平沢さんの目からは、早く食べたいという声が聞こえきそうだ。

僕はとりあえず近くの壁にギターケースを立て掛けると、物置部屋方面に用意された椅子に腰かける。

何だか議長のような位置だ。

正確に言うと、平沢さんとムギさんの机の横の部分が僕の席となつ

ている。

そして待つてましたと言わんばかりに平沢さんはケーキを頬張る。

「はい、どうぞぞ」

「ありがとう」

ムギさんによつて僕の前にも、同じケーキと紅茶が置かれる。

僕は手を合わせるとそれらに手を付ける。

さて、僕が入部したこの軽音部のメンバーは僕を除いて四人だ。

「そういえば、何で滯ちちゃんはベースを弾いてるの？」

「だってギターは……恥ずかしい」

平沢さんの問いかけに恥ずかしそうに俯いて答える黒髪の女子高生が、ベース担当の秋山滯。

恥ずかしがり屋な性格で、H&Pのファンの一人だ。

僕が正体を隠すうえで、最も注意をしなければいけない人物。

というより、なぜに恥ずかしいのだろうか？

「ギターってバンドの中心みたいな感じで、先頭に立つて演奏しなくちゃいけないから、観客の目も自然に集まって……自分がその立場になると考えただけで」

想像したのか、秋山さんは力が抜けたように突っ伏してしまった。

「ムギちゃんはキーボード上手いけど、キーボード歴長いの？」

「私、4歳のころからピアノを習ってたの。コンクールで賞をもらったこともあるのよ」

平沢さんの問いかけに、さらりと答える薄い金髪の髪の女子高生が、キーボード担当の琴吹紬。

ぼわぼわおっとり等、彼女を示す単語はいくらでももある不思議な人物だ。

でも、どうして軽音部に入ったのが謎だ。

紅茶も入れ終わり、各々が口を付け始めた頃、平沢さんがこの部屋に置かれているものが充実していることに触れた。

ちなみに、ここに置かれているほとんどの物はムギさんの自前だとか。

(後で琴吹家に関してサーチするか)

僕が保有する特殊ネットワークで調べてみようと思つて心の中で決めた。

「律ちゃんは、ドラムって感じだよね」

「なツ!? 私にも聞けばすぐ感動する理由があるんだぞ!」

「へえ、どんなどんな?」

「それ……えつと……かつこいいから」

小さな声で明らかに本心ではないなと思うことを口にする、栗色の髪をカチューシャで留める女子高生が、ドラム担当の田井中律。

元気で明るい、ムードメーカー的存在だ。

まあ、ひつくり返すとやかましいことになるのだが、それは考えないようにした。

「だって、ベースとかキーボードとか指でちまちましますのを想像しただけでああ!!! って感じになるんだよ!」

何となくしつくりくる理由だった。

田井中さんの答えに苦笑しながらも、僕は用意されたお菓子を口に入れる。

「それで、浩ちゃんは どうしてギターなの」

「……………」

今、平沢さんの口から幻聴が聞こえてきた。

「悪い、良く聞こえなかった。もう一回言ってくれませんか?」

「う、うん。 どうして浩ちゃんはギターを始めたの?」

「……………」

空耳ではなかったようだ。

「平沢さん」

「唯でいいよ」

「そんな事は どうでもいいんだよ平沢さん。 大事なものは——」

「唯!」

は、話が進まない。

どうして名前で呼びたがらせるんだ。

「……………唯さん」

僕は結局折れることにした。

これで彼女も納得——

「唯！」

「少しは妥協しろよ！」

しなかったようだ。

「あ、分かった。それでどうして“浩ちゃん”なんだ？ 唯」

「え、えつとね。かわいいから！」

下の名前で呼ばれて顔を紅くさせるんなら言わせるな。

というよりなぜに呼び方に可愛さを求める？

突っ込みたいことは色々あった。

だが、僕が一番言わなければいけないのはたった一つだ。

「浩ちゃん禁止！」

「えー」

「い・い・な？」

頬をふくらませて不満げな彼女に、僕は少々卑怯な手段ではあるが、殺気を放って頷かせることにした。

「は、はい！ 浩君！」

あまり変わっていないようにも見えるが、妥協点だと自分を納得させた。

問題なのは……

「こ、浩ちゃんだって。プクク」

「り、律。笑ったら失礼だろ。ふふふ」

後ろで盛大に笑っている二人の姿だった。

「何がおかしい？ “律”」

「い、いやなにも……って、呼び捨て!?!」

呼び捨てされたことに目を見開かせる律。

「“目には目を歯には歯を”、だ。お前の呼び方はこれから律にする」
「うぐぐ……だったら私も浩ちゃんって——」

再び浩ちゃんと呼んだ律に、僕は彼女の前のテーブルに目掛けてフォークを投げた。

「ちなみに、次は当ててる」

「はい、わかりました。浩介」

ケーキを食べ終え、空になったお皿を構えながら告げると、呼び方

を変えた。

とは言え、報復のつもりか呼び捨てだったが。

「ちなみに、そこで他人事のように座っているお前もだ、“滯”
「っ!」

あ、固まった。

「な、なななな何故私まで」

「律と笑ってたから」

「はう……」

ものすごく動揺した滯はそのまま脱力したのかテーブルに突っ伏す。

「それで、どうして浩君はギターをやろうと思ったの？」

「……三歳のころまで英才教育で、ピアノをやっていたから」

話題を戻すように聞いてきた唯の問いかけに、僕はそのまま答えた。

「待て待て！ ピアノとギターの関係が分からないぞ」

「ピアノをやっていたけど、飽きたから試しにとばかりにバイオリンをやってそこからチェロ、ハーブと行ってもう弦楽器が無くなったからギターの方に手を伸ばしてみたら意外としっくりきてやっているんだ」

「す、すごく手が広いな」

律が顔をひきつらせて突っ込んでくる。

「一度興味を持った事柄は、徹底的に調べたり極めるのが僕のくせだから」

「へえ」

まあ、裏を返せば、興味のないことに関しては徹底して無関心という事だが。

「楽器選びにも性格が出るんだね」

唯が呟いたその一言は、非常に的を得ているものであった。

ティータイムが進み和やかな空気が流れる中、口を開いたのは滯

だった。

「ところで平沢さん」

「唯でいいよ」

「え？」

唯に話し掛けると、唯は名前で呼ぶように言う。

何でも“ 漣ちゃん ”と呼んでいるからとのこと。

「ゆ、ゆい」

視線をあちらこちらにやりながら、最終的には上目づかいで名前を呼ぶと、唯はそのしぐさにぐつと来たのか胸を抑えた。

「だったら僕の事も律みたいに“ 浩介 ”と呼んでみたらどうだ？ 僕も漣って呼んでいるわけだし、そうすればおあいこだろ」

「……………(ん)、(ん)(ん)(ん)…」

僕は鶏なのか？

どう見ても名前で呼ぶのは無理そうだ。

「まあ、呼び方は漣の場合は永久の課題という事で、唯はギター買ったのか？」

話題を変えると、僕は漣が聞こうとしていた(というより僕自身が気になっていたこと)を問いかける。

「え？ ギター？」

なにそれと言わんばかりの表情を浮かべる唯。

「あー！ そうか、私ギターをやるんだっけ！」

ようやくと気づいたのか大発見した感じに声を上げた。

尤も、僕は呆れていたが。

「ここは喫茶店じゃないぞ」

漣の言う言葉は尤もだ。

まあ、目の前に広げられているティーセットやらお菓子やらがなければの話だが。

「値段はどのくらいするの？」

「そうだな、安いので一万円くらいがあるけど安すぎてもいけないしな、五万円くらいがいいかも」

漣の“ 五万円 ”の言葉に唯の表情が引きつった。

「お小遣い十か月分」

それはかなり痛い出費だ。

「高いのだと数十万円するのもあるけど、あまりケチると僕みたいになるからやめとけ」

「どういうこと？」

「ここで僕は切り札を切ることにした。」

「僕の使っているギター、露店で二千五百円で買ったんだ」

「に、二千五百円!？」

信じられないと言わんばかりに濤が声を上げた。

「露店の人が、百倍は下る代物らしいから買ったんだけど」

「そんなのインチキだろ」

律が野次を飛ばしてくるが、うまく的を得ている

「買ってみたらネックとかが狂っていてチューニングも合わないし、何故か弦が切れやすいというある意味使えない楽器だったんだよ」

「ネック？」

唯は話そのものよりも単語自体に引かかっているようだが、説明する暇はないので聞き流すことにした。

「新しいギターを調達するにも金銭的余裕の問題でできないから使い続けるしかないんだ」

「だ、大丈夫なのかよ？」

「まあ、度を超えた速弾きとかなければ普通に使えるし大丈夫なんだけどね」

勿論、これまででした話は全てうそだ。

あの白いギターは僕が故郷で最初に買ったギターだ。

それこそ二百万以上はするほどの高価な物だ。

尤も、それは故郷で売ればの話だが。

どのような音色にも化ける特性がある、今の僕には非常にぴったりな楽器だ。

それもこの楽器をフェイクで使おうとした理由の一つでもある。

「部費で落ちませんか？」

「落ちません」

律に尋ねるも、バツサリと切り捨てられ唯は項垂れるが、ムギさんがすかさず出したお菓子でテンションが元に戻っていた。

「よおし、今度の休みにギターを見に行こうぜ」

そんな律の一言で、僕たちは唯のギター選びに付き合うこととなった。

第7話 楽器選び!

その週の休み、集合場所に指定された場所に向かうと、すでに律たちが待っていた。

「後は唯だけか」

「みたい」

それからしばらく待つと、僕が来たのと同じ方向から唯が姿を現した。

「おーい唯、こっちこっち」

律が手を振って唯に場所を知らせると、唯も手を振り返しながら横断歩道を渡るが、渡っている人の肩にぶつかったり犬をかわいがったりと、中々たどり着けない。

(あと数mなのに、なぜ?)

世の中には理解できないことが多々あるのだと、僕は改めて知ることになった。

結局、唯はお小遣いを前借してもらおう形で五万円を調達したようだ。

「これからは計画的に使わないと……」

使おうと息込んだ唯はふらふらと洋服のお店の方へと、引き寄せられるように歩いていく。

「いけないんだけど、今なら買える」

「くらこらー!」

律の制止を振り切ってお店の中に入って行った唯を追うべく、僕たちもお店の中に入るのだが、洋服を一緒になって選んだり、置物などを見たり、食料品売り場で試食などに講じたり、ゲームセンターで遊んだり等々寄り道をし続けた。

そして、レストランに入ることになった。

唯たち四人の後ろのテーブルに僕は案内された。

僕は注文したチーズケーキを時間をかけて平らげた。

「あー、楽しかった」

「へへー、買っちゃった」

後ろから聞こえる満足げな声。

(まさかとは思うが、何をしに集まったのかを忘れてはいないよな?)
何となく不安に思えてきた。

「次はどこに……あれ、何か忘れてない?」

「楽器だ!」

本当に忘れてたようだ。

そんな大きな寄り道をして、僕たちはようやく本来の目的地である楽器店へと向かう。

楽器店の名前は『I O C I A』だ。

(なるほど、ここか)

その楽器店は、バンド用に使っているGibson ES-339はこのお店で購入したのだ。

余談ではあるが、“あのDKの持つギターを購入した楽器店”という密かなセールスアピールがあったりする。

まあ、表だって書かれたりはしてないけど。

そしてギターなどが置かれているブースにたどり着くと、唯はギターを見て行く。

「唯、決まった?」

「うーん。何か選ぶ基準とかあるのかな?」

唯の疑問に滲が解説をするが、唯はそれを聞かずにギターの方を見ている。

「あ、このギター可愛い」

(Gibsonのレスポールか)

唯が興味を示したのは、僕が愛用するギターのメーカーGibsonの物だ。

「そのギターは、かなりの重量があるけど大丈夫なのか?」

このレスポールは音が伸びやすく、多少のごまかしが効く初心者向けの楽器ではあるのだが、重量が約4,5キロするため彼女には少々厳しい楽器だ。

「それに、そのギター25万もするぞ」

レスポールは値が張るものが多い。

ビンテージものになれば百を超える物だってある。

「うーん。さすがにこれには手が出ないや」

律が付け加えるように言うど困った表情を浮かべる。

「このギターが欲しいの？」

ムギさんの問いかけに、唯は深く頷いた。

その後、律が他のギターを見るように促すが、唯はそのギターの前から動くことはなかった。

ギターを買う上で重要なのは、ネックや音の響きなども当然だが、一番必要なのはフィーリング。

これだ！ と直感的に思うギターに出会った時こそ、その人に最適なギターの一つでもあるのだ。

その後滞と律が楽器を購入する際の話をしてくれたが、正直律の値切り話にはこの店員の人に同情してしまった。

「よし！ みんなでバイトしよ！ 唯の楽器を買うために！」

「え？ そんな悪いよ」

律の言葉に最初は遠慮していた唯だが、“部活の一環”という言葉の言葉に圧され、ムギさんが賛成する形でアルバイトは決定したのであった。

「バイトお!？」

「ああ」

週が明け、休日に何をしていたかを聞いてきた佐久間に楽器選びの話をするど、驚いた反応が返ってきた。

「部活をするにはバイトもするのかあ。大変なんだな、軽音部は」

「まあな」

楽器という高価な物を買う以上、資金面で問題はついて回る。

僕が出せばいいじゃないかとも考えてしまうが、それでは意味がな

い。

重要なのは買うための努力をすることなのだから。そうすれば、ギターを手に入れた喜びもさらに増す。

「やっぱりバイトってファミレスとかか？」

「知らない」

どのようなバイトをするかを決めていないため、そう答えるしかない。

「もしファミレスだったら、俺大量に注文するぜ！」

「…………お前が来たら億単位で請求を出すことにしよう」

「ひどい！」

絶対に周りの迷惑になりそうだったため、牽制をかけておくことにした。

ちなみに、僕の場合は本気だ。

「アルバイトと言ってもどういうのをするんだ？」

バイトをすると決まれば問題はどのような内容かだ。

放課後（というより部活動の活動時間なのだが）を利用して探すかなかなか見つからない。

「ティッシュを配るのは？」

律が提案した内容に僕はおおむね賛成だったが、約一名無理そうなのがいる。

現に今、想像したのか拒否反応を起こしているし。

渡そうとしているが全員素通りするため、あたふたとしている光景が浮かんできた。

「ファーストフードとかどうですか？」

ムギさんの提案に、再び拒絶反応を起こす滞。

僕も、少しだけいやだったりする。

長い時間敬語を使い続けなければいけないのは、微妙に苦痛だ。
しかもマナーの悪い客に対して何も言えないかと言えばそれは否
だ。

確実に一悶着起こす。

特に佐久間とかの相手は確実に。

「ダメ……かも」

「あ、そっか。滯にはハードルが高いかもね」

滯の頭の中では何が再生されているのだろうか、この間と同じよう
に頭から何かが噴出して脱力した。

「ごめんね、滯ちゃん！ 無理しなくていいから」

唯も慌てて滯に告げた。

それをしり目に、僕はバイトの求人広告に目を通す。

「わ、私、何でもやるよー！」

よさそうなものを見つけた僕の耳に、滯の声が聞こえてくる。

彼女にとっては一大決心なのだろう。

「あ、だったら」

「な、なに!?!」

僕が声を上げると、滯が過剰な反応を示す。

というより声が裏返ってるぞ。

「こういうのはどうだ」

「何々……交通量調査?」

僕がみんなに見えるように内容の書かれた本を置くと、全員がそれ
を覗き込む。

「道を歩く人や車をカウントする仕事だ。これならば、極度の恥ずか
しがり屋にでも出来ると思うが?」

僕の説明に唯が「野鳥の会だね!」と意味が分からないことを口
にする。

「そうだな、これなら滯にもできるっしょ!」

「本当ですね」

話し合いの末、僕たちのアルバイトは「交通量調査」に決定するの
であった。

ちなみに、この時滯がほっと胸をなでおろしていたのは余談だ。

『へえ、バイトね〜』

夜、中山さんから調子はどうかという内容の電話で、事の経緯を話すとは意外だと言わんばかりの返事が返ってきた。

『懐かしいね〜、私達もかなり昔に楽器を買うための資金源を確保するべく、よくバイトをしたな』

『そうなんですか?』

僕の記憶にないため、おそらくは僕がバンドに入る前の話だろう。

その為、僕はさらに話を掘り下げることにした。

『ああ。半年かけてバイトをして、ようやく目当てのギターを手に入れた時は、嬉しくてうれしくて仕方がなかったな』

「分かります。自分もほしいギターを手に入れて喜んでいましたから」

中山さんの嬉しい気持ちに、僕は共感を感じた。

最初にギターを手に入れた時、僕は肌身離さずにギターを持ち続けていた。

音色もそうだが、形のどこかに僕を引き込むものを持っていたのだろう。

それが何なのかは自分にもわからないが。

『それじゃ、そっちの方でサポートとかはするのかい?』

「ええ。でも様子を見てから決めることにします」

中山さんの問いかけに、僕はそう答えるにとどめた。

サポートとは“資金援助”の事だ。

するつもりではあるが、現在は様子を見ている状態だ。

少なくとも、努力せずにギターを手に入れるようなことはあまりよろしくない。

なのでタイミングを見なければいけないのだ。

本当に難しいことをすると我ながら思う。

『まあ、頑張りなさいな』

「ありがとうございます」

その後、世間話を少しして、電話は切られた。

次の日の学校の授業の準備を終えた僕は、きつと今週はあつという間に終わるだろうなと思いつつ、眠りにつくことにした。

第8話 アルバイト

その週の休み、ついにバイトの日を迎えた。

徐々に日差しが強くなるこの頃、エアコンを使う季節も近づいたこともあり、そろそろエアコンのフィルター掃除でもしようかと考えてはいたが、バイトがあるため断念。

しばらくは、“あれ”で乗り切るしかない。

尤もエアコンなどそんなに使ったことはないのだが。

「えっと、集合場所は……」

早めについていた方がいいだろうと、この間届いたバイト先からの今日についての指示が記されている用紙を確認すると、僕は家を出るのであった。

「ごめんなさいね、本当は彼女たちと一緒にしてあげたかったんだけどね」

「いえ、お気になさらず」

一足早く集合場所に到着した僕に告げられたのは、僕たちの内誰かが別の場所の担当になる必要があるとのことだった。

何でも、人数調整の為とのこと。

問題はそれが誰かだ。

律は、まじめにやるかが心配だ。

唯は、誰かがフォローしていないと危なっかしい。

ムギさんは……ポワポワしていかかなり無防備で危険だ。

濡に限っては極度の恥ずかしがり屋だ。

知らない人と組んでまともにできるわけがない。

一月経とうとしているにも拘らず、まだ僕と普通の会話が出来ないほどのからだから。

そう言った経緯で、僕が別区画の担当になると買って出たのだ。唯たちにはメールにてその旨を知らせておくことにした。

こうして僕は、方角的には唯たちの区画から徒歩5〜8分ほど離れた別の区画で調査をすることになった。

それはともかく、別区画用の待機場場で僕はその区画の担当する人を待つことにした。

「あれ、高月さん？」

「ん？」

待機場場で区画の担当する人を待っている僕に突然かけられた透き通った女性の声に、僕は思わず視線を声の方へと向けると、そこには銀色の長い髪に麦わら帽子をかぶり目元がくつきりとした女性が驚いた様子で立っていた。

「荻原さん？ どうしてあなたが」

彼女の名前は荻原おぎわら 涼子りょうこさんだ。

もう気付いている人もいるかもしれないがH&Pのバンドメンバーだ。

バンドの際の名前は“RK”となっている。

そんな彼女の服装は白色のスカートに白のカーディガンを羽織り、その下には青地のシャツという軽装姿だった。

「どうしてと言われても、交通調査のアルバイトを。もしかして高月さんも？」

荻原さんの問いかけに、僕は頷くことで答えた。

「それでは、よろしくお願いします」

雇い主である人の号令で、交通量調査のバイトは幕を開けるのであった。

「そうだったんですか、部活の仲間の人のために、バイトを」

交通量調査の傍ら、事の経緯を話し終えると、荻原さんは納得した様子で相槌を打った。

「まあ、そんなところですよ」

車が通るたびにカウンターの押ししていく。

非常に単純な作業だが、眠気と戦わなければいけないという難しさを兼ね揃える。

「荻原さんはどうして？」

「私は……生活費が」

言わずらそうな様子ではあったが、理由を言ってくれた。

「……すみません」

「ち、違うんです！ 先月ちよつと楽器系でお金を使い過ぎてしまつて」

慌てて否定してくれるが、それは嘘だということはすぐに分かった。

どう考えても原因は僕が三年間、英国留学の為にバンド活動を休止していたためだ。

ちなみに彼女はベースをやっている。

性格は非常に気弱で、そこが滯と似ている部分がある。

……尤も彼女にベースを持たすと、それはすべて（悪い意味で）崩壊するが。

どういう意味かはまた別の機会に話そう。

「あ、そうでした」

不意に何かを思い出したのか、荻原さんが口を開いた。

「田村さんがとても怒っていらして『今度腕が落ちてないかを確認する』とおっしゃっていました」

「うげえ」

荻原さんの口から出た田村さんとは、ドラムを担当する男の人だ。面倒見が良くて社交的ないい人なのだが、口が悪く怒ると非常に怖い。

僕が留学するので、バンド活動を休止したいと言った際に猛反対をしたのも彼だった。

バンドをしている際の名前は“YJ”であったりする。とにかく、ギターの練習をするようにしようと心に決めた瞬間だった。

この交通量調査は二時間での交代制だ。

上手くすれば五人全員の休憩時間と重なることがある。それが今であったりする。

僕たちはムギさんが拵げたレジャーシートの上で、ムギさんが持ってきたお菓子を口にする。

毎日たくさんお菓子を持ってきているが、大丈夫なのかという唯の問いかけに、ムギさんは『毎日あまるほど貰っているから』と答えた。その答えに僕は、本当に調べてみようかと思った瞬間でもあった。そして滯と律はシートの上で横になって空を見ていたが、しきりに親指が動いていた。

……まるで、カウンターを押すかのように。

(職業病か?)

そんな事を思ってしまう。

ありえないとは思うが、彼女たちであれば十分にあり得る話だというのを、僕はここ一月で学んでいる。

その後、再び調査に戻り、一日目は無事に終了となった。

「じゃあ、私は電車で帰るから」

「私と滯はバス。唯と浩介は歩いて帰るんだっけ?」

僕と唯は途中までの道が同じなので、途中まで一緒に帰ることになる。

「明日も——」お菓子よろしく——……頑張りましょう、つて言おうとしたんだけど」

ムギさんの言葉を遮って元気よく片手をあげて言う唯に、ムギさんはどうい表情をすればいいのかが困ったような表情を浮かべる。

「ただ食い意地が張ってるんだ?」

「うんうんうん」

後ろから唯の首に腕を回して嗜めるが、それと連動して親指が動く。

「やっぱり職業病だ」

それを見ていた濤がポツリとつぶやく。

「じゃあねー」

手を振ってバス停から離れて行く唯に律たちはそれぞれ返事を返すと、明日の事について話し合う。

とは言っても集合場所等の事ではあるのだが。

「皆——！」

「ん？」

そんな時、唯の呼ぶ声が聞こえてきた。

「本当にありがとね！ 私、ギター買ったら、毎日練習するね！」

そう言って笑う彼女の表情に、僕たちもつられて笑った。

(……………よし)

そして、僕はある決心をした。

自宅に戻らずに向かったのは、この間唯たちと訪れた商店街にある楽器店『I O C I A』だ。

その際に、人通りの少ない路地裏で、僕は羽織っていたジャケットを脱ぐと、鞆に入っていた黒いジャケットに黒のサングラスを取り出す。

そしてジャケットを羽織り、サングラスを掛ければ僕は“高月浩介”ではなくなる。

今僕は、H & P メインボーカル & ギタリストのDKとなった。

そして、楽器店のギターが展示されている場所に向かう。

「デイ、DKさん！ ようこそ当店へ！」

僕が入ってきて少し経てば、楽器店の人が出迎えてくれた。

「DKさん、今回はどのようなご用件で！ ギターの弦でしたら、良い物をご用意しておりますよ！」

「いや、そういうのじゃない」

僕は矢継ぎ早に言ってくる店員の言葉を遮ると、手でギターベースの一点を示す。

「あの Gibson のギター、『Les Paul Standard』を頂きたい」

「あちらですか？　ありがとうございます」

「それで、少々無理なお願いをしてもいいか？」

「勿論ですとも！　喜んでお引き受けします」

そんな店員の答えを聞いた僕は心の中でほくそ笑む。

「実は私の友人の友人が軽音部に入部してギターを始めることになったんだ」

「はあ」

僕が語り始めると、店員は何を言いたいのかが分からないといった表情を浮かべる

「だが、ギターを買うような資金は到底持ち合わせていない。そこでだ、あのギターの頭金を私の方で支払うからあのギターをリザーブしてもらいたい」

「分かりました。それでは購入手続きに入りますので、こちらへ」

ようやく何をしたいのかが理解できた店員は、僕を会計の方へと案内する。

そしておもむろに一枚の用紙を取り出すと、それに色々と明記していく。

「DKさん、頭金はおいくらで？」

「20万円だが、問題はないか？」

僕の問いに、店員は「勿論です」と応え、ペンを走らせていく。

「それでしたら、こちらの方にその人物のお名前をご記入してください」

僕は店員からペンを受け取ると、用紙の指定された場所に「平沢唯」と記入した。

そして、20万円を店員に支払う。

「こちらのお控えと残金5万円、身分証明証をお持ちになってご来店

されますよう、お伝えください」

僕は控えを受け取ると、内容を確認していく。

その控えは『予約表』と書かれていた。

「それで、差支えなければこちらの方にサインをいただけませんか？」

そう言っただけで差し出されたのは色紙だった。

「私ので迷惑でなければ喜んで」

ペンを受け取ると、DKのサインと楽器店名を書いていく。

「ありがとうございます！ こちらは大切に飾らせていただきます！」

「ありがとうございます！！」

いつの間にか増えた店員に見送られる形で、僕は楽器店を後にした。

これで、唯は5万円ギターを買うことが出来る。

彼女の気持ちと、努力の度合いから見て、第一段階は合格だと思った為の行動だ。

偽善のような気もするが、それでも自分は間違っていないと自信を持つ。

まだ、これを渡さなければ意味をなさないのでから。

だがもう少しだけ見極めよう。

依怙鼻頂だと言われない、もっと強い明確な理由が出来るまでは。

翌日も、交通量調査のバイトだ。

萩原さんとペアになり、バイトをこなしていく。

途中、楽器関係の話に花が咲いてしまい、カウンタを忘れかけたこともあったが、二日間の交通量調査のバイトを終えることができた。

そして給料をもらい、それを先日別れたバス停で唯に手渡す。

日給八千円なので、一万六千円。
それに×5で八万円。

前借したお小遣いと合わせてもまだ遠く及ばない。

「やっぱりこれはいいよ。バイト代は、みんな自分のために使って」
律たちがまたバイトでも探そうかと話している中、唯は突然そう言
いながら僕たちに給料の入った封筒を手渡していく。

「私、自分で買えるギターを買うよ。一日も早くみんなと一緒に演奏
したいもん。また、楽器屋さんにつき合ってもらっても良い？」

その唯の問いかけに、僕たちは一斉に頷いて答えた。

（大金を前にしてもああ言えるという事は、これはかなりの人材だ）

普通であれば欲望に負けて、受け取ってしまおうだろう。

だが、それを彼女はしなかった。

それこそ僕の求めていた強く明確な理由になった。

音楽は、確かに技術も必要だが重要なのは“自”だ。

これにはいくつもの答えがある。

だが、僕は自が良ければ良い演奏が出来るが、逆に自が悪ければ奏
でる音も悪くなると考えている。

この考えは最後に、“故に僕はいい演奏は出来ない”というオチが
つくのだが、それはどうでもいいだろう。

この時僕は、彼女に予約票を渡そうと決めるのであった。

唯と一緒に帰路についた僕ではあったのだが……

（な、何をやってるんだ？ あいつ）

歩道を所狭しと飛び回る唯の姿に、僕は思わず啞然と見ていた。

完全に恥ずかしい人になりかけている。

（まさか、ギターを弾いているとかじゃないよな？）

本当に大丈夫なのかという不安が駆け巡った瞬間だった。

そんなこんなで、週が明けた月曜日の放課後。

僕は再び楽器店『I O C I A』を訪れていた。

ギターブースに訪れた僕たちだが、やはり唯はGibsonのレスポールの前で立ちどまっていた。

「よっぽど欲しいんだな」

その様子を見ていた漕が呟くと律がバイトをしようと再び告げた。

「あら？ このギター予約されていますね」

「なに!？」

ギターの所に掛かれた表示に気付いたムギさんが言うと、律たちは慌ててギターの前に移動する。

「本当だ」

「ギターって予約できるもんなのか？」

それぞれが声を上げる中、唯は悲しげな表情を浮かべる。

「唯、ほれ」

「え？ なにこれ」

僕はカバンから取り出した折りたたまれた予約票の控えを唯に手渡した。

それを受け取る唯は何だろうと首を傾げながら、紙を開いた。

「予約票？」

「こ、浩介。まさかこれを予約したのって」

後ろから覗き込む漕が口にした紙の名前に、律が問いただしてくる。

「いや、僕の知り合いにプロのミュージシャンがいてそいつにちよつと頼んだだけ。というよりそんな大金があつたら、僕はギターを買い替えてるよ」

「た、確かに」

「一体、アンタはどういう交友関係があるんだ？」

律が呆れた様子でツツコンでくるが、それを軽くないです。

「既に頭金として二十万は払ってあるらしいから、その紙と生徒手帳があれば五万円で買えるはずだよ」

「ありがとう！ 浩君」

「ははは。知り合いにお礼を言っていたと伝えておくよ」

その張本人が僕だなんて、言えない。

「お金は絶対に返すね」

「いや良いと思うよ。料金はその人の将来に投資するって言ったし」

「何てお願いしたんだ？」

「えっと……『才能あるギタリストにギターを買うお金がないから何とかして』と」

お願いした言葉を聞かれるとは思ってもいなかった僕は、今適当に思いついた言葉を口にする。

「それ、絶対に嘘だろ」

「はいはい。どうでもいいから行って来い」

「うん！」

律のツツコミに、これ以上話が續くとぼろが出そうだったため、唯に買うように急かした。

こうして、唯のギター選びは無事に幕を閉じたのであった。

その翌日、ギターを持ってきた唯によるお披露目会が行われていた。

弾けるか否かはともかくとして、持つだけでかなり様になっていく。

「何か弾いてみて！」

そうリクエストをした律に応えるべく、唯はただどしくではあるが弦を弾いた。

そして流れるのは間の抜けた音だった。

タイトルはチャルメラ？

唯曰く、ギターがピカピカしているから触るのが怖かったのだと

か。

「鏡の前でポーズを取ったり、添い寝をしたり写真を撮ったりはしたんだけど」

「弾けよ」

思わず突っ込んでしまった。

だが、ギターの扱い方ではない。

ちなみにレスポールは非常に耐久力が弱い。

落としただけで割れることがあるため、注意が必要だ。

その点に関しては、添い寝をしても異常がないのは奇跡にも近かった。

「そういや、ギターのフィルムも剥してないもんな」

確かに剥されていない。

そこで何を思ったのか、律が剥してしまった。

「唯ちゃん、お菓子お菓子」

必死に謝る律に、呆然と固まっている唯にムギさんがお菓子の乗っているお皿を差し出す。

(そんなので機嫌が治るわけが)

ないと思いつながら唯の方を見ると

(治ってるし!?)

おいしそうにお菓子を食べる唯の姿があつた。

「そうだよね、ギターは弾くものだもんね。ただ大事にしているだけじゃかわいいそうだもんね」

そう言つて律の手を唯が取ると、律の表情が晴れた。

まあ、言っているのは当然のことなんだけど

それで気を良くしたりつの頭を、濡が軽く小突いた。

「ライブみたいな音を出すにはどうすればいいのかな?」

「アンプにつないだら出るよ」

唯の疑問に答えるべく、ギターにリードを差し込むともう片方の端子をアンプに差し込む。

そしてポリウムつまみを上げると機械特有のノイズが走る。

「よー」

律が唯に合図を出すと、唯はピックを一気に振り下ろした。奏でるのはただの開放弦音。

それでも、甘く太い音が準備室を包み込む。

「かっこいいー！」

「やつとスタートだな」

「私達の軽音部」

その音に酔いしれる唯を見ながら、滲と律が感慨深げにつぶやく。

ここまでがかなり長く感じた。

「夢は武道館ライブ!!」

「「ええー!?!」」

片手を上げながらでかい夢を宣言する律に、僕たちは一斉に驚きの混じる声を上げる。

「卒業までー！」

さらにハードルを上げた。

夢や目標はデカければでかい方がいい。

小さい目標ではすぐに行き詰る。

とは言え、大きすぎるのも考え物だ。

そして、再び唯は間の抜けた音を奏でる。

「ごめん、まだこれしか弾けない」

肩を落とす律たちに、唯は申し訳なさそうに謝る

「アンプで音を鳴らすのはもう少ししてからね」

そう言いながら唯はアンプの元に歩み寄ると、つながっているリード線に手を掛けた。

「馬鹿、やめろー！」

「ふえっ？」

唯のやろうとしていることが分かった僕が忠告するも、それは少し遅かった。

すでにプラグを抜いてしまったためにアンプから、劈くような爆音が響き渡った。

その音の衝撃に思わず僕は仰け反ってしまう。

「アンプのボリュームを下げる前にコードを抜くと、そうなっちゃう

んだよ」

「早く言って」

武道館ライブまで道のりはまだかなり長いなと思わせるのには十分であった。

第9話 特訓!

それは6月に入り衣替えも済んだある日の放課後の事。

その日はムギさんは用事があるとのこととで休むとのことだった。

よって僕たちは、唯にギターを教えることにした。

「ギターの弦って細くてかたいから、指を切っちゃいそうで怖いよね」

「そうだけ。気を付けないと指がスパッと切れて血がどばーつと――

――」

ギターの弦を適当に弾きながら呟く唯に、律が相槌を打っていると
漣の悲鳴が響き渡った。

「い、痛い話はダメなんだ」

耳を押さええて蹲りながらそう答える漣。

彼女の苦手な物を知ってしまった。

とは言っても特に知ったところで、こちら側に得することはない
だけど。

「大丈夫だよ。指は切れてないから」

怯える漣に、唯は漣のそばまであつゆみよると自分の左手の指を漣
に見えるように広げた。

それで大丈夫だと分かった漣は立ち上がると、誤魔化すように咳払
いを一つする。

「まあ、練習しているうちに指先が固くなってくるから、切れることは
ないよ」

そう言っつて自分の手を唯に差し出す。

「お、本当だ。プニプニ〜」

そう言いながら漣の手の指を揉む唯。

漣の顔が徐々に赤く染まって来ていた。

「もう、いいかな」

「何をやってんだ? お前達」

黙って見ていた僕は、そう尋ねずにはいられなかった。

気を取り直して、ギターの練習を始めることにした。

滯の差し出した教本を使い、ギターのコードを覚える事から始める。

教本を受け取った唯は適当に開かれたページを見て、固まる。

「まずは楽譜の読み方から教えてください」

「そこから!?!」

思わずズツコケそうになるのを堪えた。

結局この日は、楽譜の読み方と簡単なコードの勉強で部活は終わった。

帰りは途中まで皆が同じ道であることもあり、途中までは一緒に帰るのが当然となっていた。

学校を出て少し歩いた辺りにある信号機が、分かれるポイントだ。

「それじゃあな」

「また明日」

「さようなら」

僕と唯は信号機を渡って帰路に就く。

その最中、唯は自分の手と睨めっこをしながら、ずっと唸り続けていた。

「それじゃ、僕はここで」

「あれ? 浩君の家じゃないよね?」

食品が売ってあるスーパーの前で別れることにした僕に、唯が聞いてくる。

「当たり前だ。夕食の買い物をするだけ。そろそろ切れかけていたから」

「そうなんだ。ねえ浩君、どうすればコードを覚えられるかな?」

唯が頷いたのを確認して中に入ろうとした僕を引き留めるように唯が聞いてきた。

「コードを抑える指使いでもやっておけ」

簡単な事を聞いてきた唯に、至極尤もな答えをする。

「やってみる。じゃあね」

「ああ、またな」

色々と不安を覚えるが、取りあえず食材の買い足しの方を済ませるのであった。

「ふう、今日も夕食は美味しかったな」

今日は気合を入れていつもより豪華な料理のラインナップにしてみたのだ。

皿洗いも終わり、今日の復習をするべく自室へと向かおうとした時だった。

「ん？ こんな夜遅くに誰だろう」

突然鳴り響く来訪者を告げるチャイムに、僕は首をかしげると玄関の方に向かう。

(この気配って)

ドアの先の方の気配を感じ取った僕は、それに覚えがあったため、ドアを開けた。

「中山さんに荻原さんそれにみんなまで」

「やあ、突然悪いね」

気さくに言うその手には手土産かケーキ屋の箱があった。

「お邪魔いたします」

「邪魔するぜ」

「お邪魔します」

さらに続く様にして荻原さんに短めの金髪に眼元が鋭いために、威圧感を覚えさせる男性が田村たむら 竜輝りゅうきさんと、短く切りそろえられた黒髪に柔らかい目元という金髪の男性とは正反対の人物が太田おおた 保まもるさん。が後に続く。

取りあえず全員をリビングの方に通すことにした。

「それで、どうしたんですか？ 皆さんお揃いで」

「要件は二つ。まずはライブの打ち合わせだ」

田村さんが本題を切り出すと、持っていた黒のカバンから一枚のチラシを取り出した。

そこには『DK復活記念ライブ』という名前がつづられていた。

「出来ればH&P復活ライブの方がいいと思うんですが」

「もう、これで確定したから修正は無理よ」

「どうやらタイトルはこれで確定のようだ。」

「えっと、日時は……って、あと三週間弱しかない!？」

もう驚きっぱなしだ。

「一応俺達の方で曲目は考えてあるが、こういう形で行く」

ライブの曲順が記された紙を中山さんから受け取ると、僕はそれを目を通していく。

- 1 : Leave me alone
- 2 : Devil Went Down to Georgia
- 3 : Only for you
- 4 : Darling……: Kiss immeditate
- 5 : ThrougH The Fire And Flames

「最初は簡単な曲で、デビュー曲を織り交ぜつつ高難易度曲で締めくる……さすがですね田村さん。曲の構成はこれでいいです」

特に問題はなかったため、僕は紙を中山さんに返す。

曲順などの構成を決めるのは、主に田村さんの役割だが今までで失敗したことはそれほどない。

音楽ゲームで使われた楽曲『Leave me alone』から始まって、カバー曲のみで構成されているラインナップではあるが、僕たちの歴史を思わせる物としては十分であった。

「でだ、ここからが本題」

「はい」

嫌な予感がした。

この間の荻原さんの言葉からして、出てくる言葉はもう限られてい

た。

「これからお前の腕を見極める」

「分かりました」

そう、これは田村さんの“試験”だ。

僕は素早く立ち上がると、テーブルや椅子を横にずらし、カーペットをめくって行く。

すると、隠し扉が床に現れる。

「本当にどういう構造をしてるんだい？　ここは」

「あはは」

中山さんの呆れたような言葉に、僕は苦笑しつつも扉を開ける。

そこから先は石造りの急な階段が姿を現した。

そこを僕たちは下りて行く。

薄暗い階段を降りた先にあるスイッチを押すと、明かりがついた。

そこは地下だった。

コンクリートに囲まれた何もないその部屋にはドラムやキーボード、アンプなどが置いてある。

そう、ここは僕たちH&Pのスタジオなのだ。

防音設備十分で、真夜中に大音量で演奏しても外には漏れないぐらいだ。

皆はそれぞれ自分の持っている楽器のスタンバイを始める。

「練習をかねて、全曲通していくので良い？」

「勿論だ」

どうせなら練習もしようと思った僕に、田村さんはOKと返事をする。

「それじゃ、みんな。準備はいい？」

「ええ」

「当然だ」

「こちらも」

全員が演奏の準備を終えているため、大丈夫と返してくる。

後は荻原さんだけとなったのだが……

「つたりめーよ。どんな曲も完璧に弾いてやるぜ！　おらー！」

いつもの彼女からは想像もできない威勢のいい言葉に、僕は中山さんと顔を見合わせて苦笑する。

いつもは気弱な女性だが、ベースを手にした瞬間その性格が一変する。

それが今の通りであつたりする。

「じゃ、行くか」

田村さんの言葉に、僕はギターを持つと深呼吸をする。

それで僕は気分を切り替えた。

今から僕はバンドH&PのDKなのだ、考える。

軽音部のみんなの事は頭の片隅へと追いやった。

「1, 2, 3, 4」

田村さんのリズムコールが終わると同時に、太田さんのキーボードが産声を上げた。

続いて荻原さんのベースと田村さんのドラムが音に命を吹き込む。

次は中山さんの簡単なギター演奏で曲は始まる。

この曲は僕がボーカルを務め、田村さんがサブボーカルとなる。

時より弦を弾きながら歌を紡ぐ。

自分がいる場所は非常に不安定な場所。

いつ何がやってくるかもしれない危険地帯だ。

その緊迫感を兼ね揃えた曲がこの楽曲のイメージだ。

ついにサビだ。

僕は複数のコードを引きながら歌を紡ぐ。

そして紡ぎ切ったところで、間奏が入る。

ここからは僕のギターテクが問われる。

ベースの音とドラムの音を頼りに、音を奏でて行く。

そして間奏の終わりで音を伸ばし、ビブラートを効かせる。

最後のサビも先ほどと同じ要領でギターを弾いていき、一気にフィニッシュへと向かう。

中山さんと合わせて弾き、同時にストロークをして曲は終わった。

「次だ！ 1, 2, 3, 4」

次は『Devil Went Down to Georgia』

だ。

早めの田村さんのリズムコールが言い切るのと同時に、僕は弦を弾く。

そして始まる曲。

全体的にアップテンポなこの曲の難関はギターソロ。

4、5分速いテンポでギターを弾き続けたところで、やってくるこのソロが、最大の山場だ。

歌が途切れる箇所では難易度の高いギターのテクニクを求められる間奏もギタリスト殺しと言われる一因だ。

その箇所は、僕と中山さんの演奏バトルのような感じで交互に弾いていく。

そして、全ての音が消えた。

その間、僅か1秒。

それはソロ開始の合図。

最初はゆっくり目で簡単な音を。

だが、徐々になりを潜めていた悪魔が牙をむく。

テンポは一気に早まり、音は小刻みになって行く。

複雑なコード変更をしながらも嵐を乗り切る。

ただ乗り切るのではない。

この嵐すらも自分だというのを表現しなければならぬ。

ソロも最終局面だ。

徐々に晴れて行く嵐の様子に希望を見出した僕は、総会であることを表現するべくピックを振り下ろすことでソロパートは終わった。

後は比較的簡単なパートの為、見事に演奏をし終えた。

その後も3、4曲目を演奏し終えいよいよ最終楽曲を迎えた。

曲名は『Through The Fire And Flame』

先ほど演奏した曲にはやや劣るものの、かなりの高難易度の曲だ。約7分間、腕を休める場所がないのだ。

つまりはギターをずっとストロークし続けなければいけない。

それも小刻みだったり大振りだったり、一定ではないのが難易度

を上げる。

さらに難易度を釣り上げる要因としてあるのが、3秒ほどの空白の後に訪れる間奏だ。

先ほどのソロほどではないが、非常に小刻みなストロークに素早いコード変更を求められる。

それが2分間にも及ぶことが、最たる理由だ。

しかもここでも曲のテンポが一気に上がる。

だが、弾ければ得られる者は非常に大きい。

弾き切った瞬間に浴びせられる拍手は心地いいのだ。

しかも、この間奏では一つのストリーも出来上がる。

ある人は『桃太郎』を、またある人は時代劇で悪者を退治していく人の戦う話など。

内容は様々だが、そう言うのを提供できるあたりが、僕自身がこの曲を好む理由の一つだ。

間奏を終え、やってくるのは小刻みなストローク。

だが、ここでも罨がある。

最後の最後で速弾きをしなければいけないくなるのだ。

その速弾きも終わり、曲はきれいにしまった。

「よし、完璧だ。この数年間腕は鈍っちゃいねえな」

「ありがとうございます」

曲がすべて終わり顔中に浮かべた汗をタオルで拭いながら感想を言う田村さんに、僕はお礼を言う。

やはり、褒められるのは嬉しい物だ。

「だが、もう少し練習をする必要がある。ということで、明日から毎晩練習をする」

「えっ？」

田村さんの宣言に、僕は顔をひきつらせているだろう。

一応、僕には学業という物があるので、それをやられると成績に影響が出る。

「まさか嫌だとは言わないよな？ これはお前への罰だ。留学とかでいきなり外国に行きやがって。俺達がどれだけ驚いたか知ってんの

か！」

「……………」

田村さんの罵声に、僕は何も言えなかった。イギリスに行く際、その寸前までみんなには相談していなかったのだ。

それには色々と訳があったのだが、それは言い訳に過ぎない。

皆に迷惑をかけたのは紛れもない事実なのだから。

「勿論、夕食面に関しては俺達がサポートする」

「分かりました。みんなこんな僕だけど、これからもよろしくお願ひします!!」

そう言って頭を下げると、皆は当然と返してくれた。

こうして、僕にとっての練習地獄は幕を開けるのであった。

第10話 試験乱舞

あの見極めの試験から、毎晩ライブに向けての練習が始まった。とは言っても、音の精度を高めるためのものだったけど。

スケジュールとしては、放課後に部活をやって自宅に戻り、6時ごろにメンバー全員がやってきて夕食をローテーションで作って行く。それを食べてから3時間みっちりと練習。

その後メンバー全員は帰宅して、僕はお風呂に入り次の日の学校の準備をして寝る。

就寝時間は11時。

もう色々と無理をしている感がある。

学生の本分である勉強がおろそかになっているだけでも、かなり問題ありだ。

そんな日々が続くある日の朝のこと。

「おつす、浩介」

「どうしたんだ？ やけにテンションが低いな」

いつもならこれからの季節にはやかましい暑苦しきで挨拶をしてくる佐久間が、まるでこの世の終わりといった様子で挨拶をしてきた。

「明日中間試験だろ？ それが憂鬱で憂鬱で」

「そうか。試験か」

適当に相槌を打ちながら、授業の準備を始める僕だが佐久間の言葉に引つかかった。

「え、明日？」

「そう、明日」

「……………」

この時、僕はさぞかし間拔けな表情を浮かべていることだろう。

(い、一夜漬けだけど今夜は勉強をしよう！)

僕はそう心の中で決意した。

そして迎えた試験当日。

正直に言おう。

まったく勉強していない。

それも先日、勉強をしたかったので練習は休みたいと伝えたところ。

『ああん？ 何を甘ったれてんだあ？ 練習が終わった後にすればいいだろうが！』

と一刀両断されたのだ。

言っていることはご尤もだったため、練習と相成ったのだが、いぎ終わりお風呂に入ると出ると時刻はすでに天辺を超えている状態。

さすがに寝ないと遅刻する時間帯だったため、結局無勉強で当日を迎えることとなったのだ。

その後、教室で試験範囲を見て死に物狂いで悪あがきをすることにして試験に挑んだ。

「答案を返却します」

試験から数日後、担任の先生の一言で答案が一斉に返却された。

僕にとつてはまるで死刑台に行く囚人のような気分を味わうことになるわけだが。

「なぜ？」

答案の結果を見た僕は、思わずそう呟かずにはいられなかった。

放課後、いつものように音楽準備室を訪れた僕は、自分の席へと腰かける。

「やっとテストから解放された〜！」

「高校に入ってから試験が一気に難しくなつて大変だったわ」

両腕を伸ばしながら、試験が終わった解放感を感じる律に相槌を打つムギさん。

「ところで、あそこでこの世の終わりと言わんばかりの様子だけど、何があつた？」

「あー、彼女はもつと大変そうな奴だよ」

さつきから気にしないようにしていたがこの世の終わりといった様子で呆然と立ちながら、時より気味の悪い笑い声を上げている唯の方を見ながら尋ねるとそんな答えが返ってきた。

「そんなにテストの結果が悪いのか？」

「フ、フ、フ。クラスでただ一人、追試だそうです」

そう言つて掲げられたのは数学の答案だった。

点数は………本人の名誉のために伏せておこう。

とにかくひどい状態だった。

「だ、大丈夫よ。今回は勉強の仕方が悪かっただけじゃない？」

「そうだな。次は勉強の仕方を変えれば——」

ムギさんのフォローに乗るように僕がフォローをしていると

「勉強は全くしてなかったけど」

「励ましの言葉返せ！」

唯から衝撃の事実が告げられ、僕の心の声を律が代弁してくれた。その後、唯の説明を簡単にまとめれば、勉強しようとしたがギターの練習ばかりしていたらしい。

「でもね、おかげでギターのコードを一杯弾けるようになったよ！」

偉いでしょ！　と言わんばかりに胸を張つて言う唯。

「自慢することじゃないだろ」

「その集中力を少しでも勉強に回せば」

「そう言うりっちゃん和浩君はどうだったのさ」

あ、こつちにまで飛び火。

まずは律が答案をお披露目する。

点数は中々の高得点だった。

「こんなのりつちやんのキャラじゃないよ」

唯の言うことも尤もだった。

(絶対に裏があるな)

そして高らかに笑っている所に滯が一言。

「試験の前日に泣きついてきたのはどこの誰だっけ？」

「ば、ばらすなよー」

やっぱり裏があった。

そんな律の肩に手を置き唯が一言。

「それでこそ、りつちやんだよ」

「赤点取った奴に言われたくはない！」

「尤もだ。」

まるでドングリの背比べ状態だ。

「で、浩君は？」

「僕は試験があることを知らなくてまったく勉強していなかったんだけど……こんな感じに」

「げっ!？」

「全部90点台」

取り出した答案の点数を見た二人が声をあげる。

殆どの科目で90点台を取っていた。

最低点は90点だった。

「おそらく留学していた方のカリキュラムが進んでいたんだろうね。ここの範囲は向こうの方で習ったから」

まさに奇跡だった。

進んだ教育構成に救われる形になった。

しかもここの試験はイギリスよりも断然に簡単だったため、解けるレベルだった。

とは言え、無勉強という不安材料のため、希望的観測をしないでいたのだが。

「そ、それだったらこれも当然だな！ うん」
律の顔が引きつっていた。

ちなみに佐久間もこれを見た際に

「べ、勉強しないで……これって」

と固まっていた。

そんな答案返却の一幕であった。

そして別の日。

今日のお菓子羊羹であった。

和を連想させる逸品だ。

「あ、今日は羊羹」

と、いつもより遅れてやってくる唯は席に着くと羊羹を口にする。

「追試の人は合格点を取るまで部活動禁止だって」

「……………ツ!? ゲホッゲホ！」

驚きのあまりむせた僕は、お茶を一気に流し込んで何とか落ち着いた。

「だったらここにいるのもまずいんじゃないのか？」

「大丈夫だよ。ここにはお菓子を食べに来てるんだし」

僕の問いにそう答えながら羊羹を口にする唯。

「そうだな、それなら安心……なわけないだろ!!」

もう完全に部活としての形を見失いかけているけど、一応これも

部活動だ。

「つまり、もし唯が追試で合格しなければ」

「私達は四人だけになって」

「廃部!？」

そして、僕たちは再び廃部の危機を迎えたのだ。

「大丈夫だよ。追試まで一週間もあるからここに毎日来れるよね」

その唯の発言に、僕たちは一斉にズッコケた。

「一週間」しか「ないんだよ!」

「ここには来ないで家に帰って勉強しろ」

律の言葉に続く様に、ため息交じりに僕は唯に言った。

「そうだよ。皆と部活を続けるために、私頑張る!」

「頼むぞ、本当に」

もう最近ため息しかついていないような気がする。

羊羹を食べ終えた唯は、そそくさと帰って行った。

「大丈夫かな、本当に」

「大丈夫だと、信じましょう」

僕のボヤキに、ムギさんがそう相槌を打つ。

「それにしても、どうしてこ、浩介は試験勉強をしなかったんだ?」

ようやくではあるが滯りが名前を呼んでくれるようになった。

若干ドモリつつはあるが、あと少しすれば普通に呼べるようになるだろう。

「いや、用事が立て込んでいて出来なかった」

その用事がライブの練習だとは言えない。

「それであんな高得点って羨ましすぎる」

「まあ、ともかくこれで試験から解放——『助けてくれ!!!』『ゴホッ?!』」

解放したと、新たに注がれたお茶を飲んで一息つこうとした瞬間、部室のドアが乱暴に開け放たれた。

思わず急ぎ込む僕をしり目に、開け放った人物は僕の肩を掴むと思いつき揺さぶる。

「追試に受からないと放課後補習なんだ! 俺の素晴らしいアフタースクールプランが無くなるんだ! だから助けてくれ!!!」

「だああ! やかましいんだ、よ!!」

「がふああ!?!」

いい加減気持ち悪くなり始めたため、肩を掴む佐久間の腕を振り払い、思いつきり(割と全力でだが)股間を蹴りあげた。

「はあ、はあ。死ぬかと思った」

「うわあ、大丈夫かな。あの人」

何とか落ち着きを取り戻す僕をしり目に、律たちは地面にうずくまっている佐久間の容態を気にしていた。

「あの、大丈夫です——」

「大丈夫です！」

ムギさんが声をかけた瞬間に立ち上がって答えた。

すごい回復力だな、本当に。

「で、こいつ誰？」

「僕のクラスメイトで、一応友人」

「初めまして。佐久間慶介です。よろしく」

僕の言葉に続く様に、佐久間は自己紹介をする。

「私は田井中律」

「わ、私は、秋山滯」

「琴吹紬です。よろしくお願いしますね、佐久間君」

「佐久間君！ はあぁ〜」

君付けされただけで昇天したようだ。

「だ、大丈夫か？ なんか行つてはいけない方向に行きかけてるが」

「大丈夫なんじゃない」

そんな佐久間の様子に若干引きながら小声で聞いてくる律にそう答えた。

「で、何点だったのさ」

「っと、そうだった。こんなんだけど」

そう言つて取り出されたのは4科目の答案用紙。

「うわ、これは……」

「こりやまた悲惨だな」

それを覗き込む律たちも顔をひきつらせていた。

点数は本人の名誉のために伏せるが、フォローの言葉が出ない。

一つ言えるのは、唯よりもひどい状態だ。

「たのむ！ 全科目ノー勉で高得点をたたき出した浩介だからこそ頼めることなんだ！ 俺に勉強を教えてくれ!!」

「……………」

佐久間の両手を合わせて必至に頼む姿に、僕は一つ息を吐き出す。

「オーケー。やってやろうじゃないか」

「助かる！ それでこそ、わが友だ！」

喜ぶ佐久間に、僕は大丈夫なのかと不安になった。

「ところで秋山さん！」

「は、はい!?!」

佐久間の勢いに、滯は後ずさる。

そして佐久間はこう告げた。

「俺とひと夏の甘い思い出を——げばあ!?!」

「やかましい」

ナンパをしようとした佐久間の脳天に全力で拳を振り下ろす。

いきなりそういう事を言える彼には尊敬の念さえ感じる。

(いきなりナンパまがいの事をしたら)

僕は滯の方へと視線を向ける

「」

案の定滯は固まっているし。

取りあえず、固まっている滯は律たちに任せて、気絶している佐久間を引きずりながら部室を後にするのであった。

第11話 明暗の理由

「いつつ……酷いじゃないか」

「うるさい。いきなり馬鹿げた事を言おうとする方が悪い」

学園を出て少ししたところで気を取り戻した佐久間が、歩きながら不満を漏らす。僕はそう言って退けた。

あんなこっぴどくかきしいセリフ、男の僕でさえ寒気がしたほどだ。

言われた本人はたまった者じゃないだろう。

現に滯は恥ずかしさのあまり固まっていたし。

そんな馬鹿げたやり取りをしながら、電車で二駅先で電車を降りてから数分。

今僕たちは、住宅街を歩いていた。

「この俺の最高の告白があれば俺は今頃……ぐへへ」

そう言いながら笑みを浮かべる佐久間だが、一体どんなことを想像しているのだろうか。

はつきり言って気持ち悪い。

「お、ここが俺の家だ」

「……………(こ)か」

一気に正気に戻った佐久間が示した一軒家は、可もなく不可もなくといった感じのごく普通の家だった。

「ただいま」

そう言いながら玄関を開けて中に入る佐久間に、僕は玄関の少し手前で立ちどまっていた。

「ほら、入りなよ」

「ああ。お邪魔します」

佐久間に促らされ、僕は佐久間家へと足を踏み入れた。

「お帰りなさい、慶介……あら？」

奥の方から佐久間の母親なのか、温厚そうな女性が姿を現した。

「慶介のお友達？」

「あ、はい。高月浩介です」

尋ねられた僕は、出来る限り丁寧に名乗りを上げるとお辞儀をし

た。

「これはごく丁寧に。慶介の母の吉江です」

女性……吉江さんは静かにお辞儀をり返した。

「それじゃ、俺の部屋に行くか」

「あ、ああ。お邪魔します」

「後で、飲み物を持って行きますね」

吉江さんのその言葉を背に受けながら、僕は佐久間の自室へと向かうのであった。

「ここがお前の部屋か？」

「そうだけ。ちよつと散らかってるがな」

部屋に足を踏み入れた僕の言葉に、佐久間が答える。

6畳ほどの広さのある祖の部屋には勉強机と本棚、テーブルなどが置かれている。

それ以外に目立った装飾品はない。

机の上も漫画が数冊ほど混ざってはいるが、殆どが教科書類。

散らかっているとは言えない状況だった。

(何だろう)

そして、そんな部屋を見ている僕は、何となく違和感を覚え首をかしげる。

何かがおかしいような気がするのだ。

「さあ、教えてくれ！」

そんな僕の違和感は、佐久間の催促の言葉によって頭の片隅へと追いやられた。

「まずは何から行く？」

「数学！」

即答だった。

凄まじい決断力だ。

「それじゃ、要点と公式を交えて問題を解いていく。今日の目標はこの科目の勉強を終えること！」

「え?!？」

僕の上げた目標に、佐久間がカエルを潰したような声を上げる。

「返事は？」

そんな彼に、僕はぎろりと睨みつけながら返事を促す。

「い、イエッサーー！」

兵隊のような返事をする佐久間に、ため息を漏らしながら勉強を教えて行くのであった。

勉強を教え始めてから数時間が経過した。

佐久間は呑み込みが非常に早く、教えたことを次々に覚えて行く。

「それじゃ、この演習問題を解いてみて」

「ああ」

教科書に載っている問いを試しに解かしてみた。

問題は二次関数の展開だ。

おそらく関数の問題で一番躓くであろう箇所がここだろう。

それを解いている佐久間の姿を見ながら、僕はふと一人の人物の事を考えていた。

(唯、しっかりと試験勉強しているよな?)

赤点を取って、追試で合格点を取らないと部活禁止⇨部活廃止という壮絶な条件を与えられた唯だ。

彼女が試験勉強をするところが全く想像できない。

出来るとすれば……

『あはははー、うふふふー』

楽しげにベッドで寝転がりながら端から端まで転がっている唯。

そして、その手には漫画があり、お菓子を口にしてまた転がっている姿だった。

(ないよな。あつて欲しくない)

そんな本人にはかなり失礼な妄想を頭の中から消し去る。

ちょうど5分ほどの時間が経った時、佐久間は演習問題を解き終え、僕はそれの答え合わせをした。

「正解だ」

「よっしゃー！ これで試験範囲完全コンプリート」

結果を告げると、大きく伸びをしながら喜びをかみしめている佐久間の姿に僕は思わず苦笑してしまう。

「つて、もうこんな時間か」

佐久間につられて壁に掛かっている時計に目をやると、時刻は9時を大幅に回っていた。

(みんなに連絡しておいてよかった)

ここに来る前の電車の中で、僕は携帯電話のメールでH&Pのメンバー全員に友人に勉強を教えるから帰るのが遅くなると連絡していた。

もし連絡していなかったら、今頃携帯の着信履歴はメンバーの名前で埋まっているだろう。

そして、会った瞬間にお小言の嵐だ。

(何だか背筋がぞくぞくしてきた)

「そうだ！ どうせだし、夕飯を食べてかないか？」

「え？ それはあんたの母親に申し訳ないよ」

さすがに夜遅くに二人分の夕食を作らせるのは、常識の面からばかられる。

「大丈夫大丈夫。作るのは俺だし」

「それはどういう意味？」

自室を後にしながら言う佐久間に、僕は後を追いつながらさらに追及する。

「お袋、夜はパートでいないんだよ。だからいつとも夕飯は俺が作ってる」

確かに、佐久間家内に僕たちを除いて人の気配がない。

「という事は共働きか」

最近の家庭はどこも大変なんだなと思いながら、リビングに足を踏み入れた僕に佐久間はさらに衝撃的な事を告げた。

「いや、親父はいねえよ。俺が小学生のころに天国に旅だったから」

「……悪い」

辛いことを思い出させてしまった僕は、佐久間に謝った。

「気にすんなって。俺は別に気にしてねえし」

そう言いながら、包丁で野菜を切って行く佐久間の手つきはかなりのものだった。

「まあ、昔は大変だった。お袋は落ち込んでずっと暗いオーラを纏っているし。俺まで暗くなったら、今頃真つ黒さ」

「まさか、何時ものあのバカげた言動は」

「本心が4割、演技が6割といった所だ」

佐久間の答えを聞いてようやく、頭の中に浮かんでいた疑問が解決した。

僕が感じた佐久間の自室への違和感の正体は、性格だった。

部屋というのは自ずと性格を表す。

無頓着な（もしくははだらしない）性格だと部屋は散らかっている。勿論、一元にそうだとは言えないが、僕の抱いている”佐久間慶介としての姿”と、部屋が表現している”佐久間慶介”という人となりがまったく一致していなかった。

「まだ誰にも言っておえんだぜ。これ」

自信満々に告げる佐久間に、僕は頭を抱えそうになった。

「……僕に言ってもよかったのか？　もしかしたら誰かに話すかもしれないぞ？」

「お前はそう言う奴じゃねえだろ？」

佐久間のその一言は、僕の心を揺さぶった。

確かに、僕は人のそう言った部分を積極的に漏らすようなことはない。尤も、言うべき時やそれほど重要でない、どちらかと言えばくだら

ない秘密の場合はこの限りではないが。

だが佐久間は僕という人間を、断片的にはあるが理解している。目の前の男の観察力に僕は舌を巻いた。

(本当に、こいつは)

そして僕は呆れていた。

自ら嫌われるような性格を演じなくても良い物を。

だが、それがどこかおかしくも思える。

「ほれ、出来たぞ。食べようぜ」

「ああ。いただきます」

テーブルの上に配膳された肉じゃが等の料理は非常においしそうにも見えた。

僕はその中で、肉じゃがに口を付ける。

「美味しい」

「だろー。いやー、食べてくれる奴がいるのは嬉しいもんだ、うん」

僕が口から漏らした感想に、佐久間は嬉しそうに頷いている。

その様子に子供かと思いつつながら、僕は佐久間が作った料理に舌鼓を打つのであった。

「悪いな、勉強を教えて貰ったり皿洗いまでさせちゃまって」

「いいって。こつちこそ夕飯までごちそうになったんだし。それ位しないと罰が当たる」

別れ際、玄関先まで見送りに出てきた佐久間の謝罪に、僕は手を振って返した。

皿洗いはさすがに僕がやった。

そうでないと、居心地が悪く感じるような気がしたからだ。

「じゃあな」

「ああ、また明日な。浩介」

僕は佐久間にそう告げて背を向け歩き出そうとするが、足を止めると佐久間に背を向けたまま声をかける。

「佐久間」

「何だ？」

「明日もビシバシと行くからな、覚悟しとけよ慶介」

僕は、彼にそう告げた。

それは僕にとって彼を真の友人と認めた瞬間だった。

「おうー。望むところだ」

後ろから返ってくる慶介の威勢のいい言葉に、僕は苦笑を浮かべながら手を振ることで答えると、今度こそ歩き出すのであった。

（あと少しで、僕は佐久間慶介という人間を完全に誤った認識をする所だった）

僕もまだまだ未熟だと実感した。

（近いうちに父さんの方に電話でもかけてみるか）

慶介の話を聞いた僕は、無性に父さんの声が聞きたくなったのだ。僕も十分にも子供だなと思いつながら、自宅へと戻るのであった。

ちなみに余談だが。

「おせえんだよ!!」

「ごめんなさい!!」

家に戻った瞬間、田中さんの罵声が浴びせられることになった。

その場屋に、僕はその場で土下座をして謝った。

他にも罵声を浴びせなかったものの、完全に怒っているであろう中山さんや、満面の笑みを浮かべている荻原さんの姿があった。

荻原さんの笑顔はものすごく恐ろしささえ感じさせた。

ちなみに、みんながここまで怒っている理由としては、

「遅くなるとは知っていたが10時過ぎたあ、度が過ぎるだろうが!!!」

とのことだった。

この日、青筋を浮かべるみんなによつて、ぶつ通しで数時間も練習をさせられる羽目になるのであった。

さらに後日の練習メニューがハードなものになると言われた僕は、崖から身を投げるぐらいの覚悟を決めることにした。

こうして、僕にとって地獄の日々が幕を開けるのであった。

ライブまであと9日。

追試まではあと7日。

第12話 勉強!

それはある夜の日の高月家でのこと。

『なんだ、こんな時間に』

「こんな時間で悪かったね」

浩介の部屋には男の声が聞こえていた。

『まあいい。何か問題か?』

「そう言うわけじゃない。ただ父さんの声が聞きたくなっただけ」

『……………珍しいことを言うじゃないか。あの高月浩介が親の声を聴きたいがために連絡をよこすとは』

浩介の言葉に、男……………浩介の父親は驚いた様子で答える。

そのやり取りはごく一般的な物だろう。

それは、浩介の手に電話機があればの話だが。

そもそも浩介の部屋には、電話機のようなものは置かれていないのだ。

あるのは携帯電話のみだ。

「からかわないで。こつちだって無性に聞きたくなくなっただけ何だから」

浩介が話しているのは机の方に向けてだった。

否、正確に言うと、机の上に置かれた、先端に真珠のようなものがつくネックレス”だった。

『ははは、これは失敬』

浩介の言葉に、父親は反省した素振りをみせずに謝る。

そんな父の言葉に浩介は心の中でため息をつく。

『まあ、それはともかく。そっちの”任務”は順調か』

「……………あの”任務”を、文字通りに受け取るのであればいまいち。 ”裏”の意味で受け取るのであればまあまあと言った所」

先ほどまでの軽快な口調はなりを潜め、真剣な声色に変わる。

それを感じた浩介も表情を引き締めて、皮肉を交えて答えた。

「この世界であげられる榮譽は、条件さえ無視すれば簡単に獲得できる。でもそれ以外の榮譽になれば実現は不可能に近い」

『ほう、世界最強が弱音かね?』

“落ちた物だな”と言いたげな父親の言葉に、浩介は首を横に振る。

「そう言うことではない。”明確な基準”がない栄誉は、獲得するにしても個人差があり無理だ。決めるのは人だ。結果ではない」

『そうだ。決めるのは人。勝敗の結果の栄誉など、難しいようで簡単な物さ』

浩介の反論に、父親は肯定する。

『ならば戻るか? 任務放棄で帰還することも可能だが』

父親の試すような問いかけに、浩介は首を横に振る。

「いや、それはやめておこう」

『何故だ?』

「ここは非常にのどかだ。戦争もなければテロもない。空気は穏やかで、まさに楽園だ。まあ、それが合わないという人もいるが」

意外だと言わんばかりの父親の問いかけに、浩介は苦笑しながら答える。

「それに、僕はここで手に入れたかったものを少しずつではあるが手に入れている」

『財宝か?』

「それよりもすばらしい物だ。学び舎、そして仲間。何億出しても手に入れられないものさ」

浩介の言葉に帰ってきたのは、何とも言いたげな父親のため息だった。

『その様子を見ると、裏の目的は確実に達成されつつあるな』

「ああ。僕は、この世界……高校でようやく手に入れた。ようやく僕の宿願がかなえられたんだ」

父親に嬉しそうに答える浩介に父親は“そうか”と相槌を打つ。

『高校では何か部活のようなものはやってないのか?』

「やっているさ。軽音楽部をね」

『けいお……なんだ、その部活は』

聞きなれない単語だったのか、怪訝そうな声色で問い返す父親に、

浩介は苦笑しながら答える。

「大雑把に言ってしまうえば、音楽を演奏する部活」

『やはり変わったな浩介。世界最強の男が音楽の世界に飛び込むか』

「人というのはその環境に染まるものだ。尤も人ではなく“生物”と言った方が妥当だろうが」

父親の言葉に、浩介は両手を挙げながら反論すると、徐に立ち上がる。

「“お前の曲は人々を地獄に落とす疫病神のような曲だ”」

『は？』

浩介の口から出た言葉に、父親は生返事で返す。

「とある音楽評論家に言われたことさ。まったくもって的確を得ている。音はその人を表すというが、確かにその通りだ」

『そうだな。あの時のお前はまさしく“死神”……いや、生きた“生物兵器”といった所か』

父親からの呼び名に、浩介は顔をしかめる。

「僕は最後の呼び名は嫌いだ」

『そう呼ばれる理由はそっちにある』

「確かに。だが、国を守るためには多少は残忍でなければいけない。話し合いですべてが解決していたら、この世界には“戦争”の概念すらない」

咎めるような父親の言葉に、浩介は反論する。

その言葉にはゆるぎない“何か”があった。

『まだそう言うか。あの時も、お前は経身を守るためという名目で我が国に攻撃を仕掛けようとしたテロリスト数百人を消したが、奴らとて要求を呑めば攻撃はしない旨の連絡をしていたそうではないか』

「はっ！ 甘いね。ああいう連中は話し合いに応じる気なんてことさらない。仮にあったところでもいつまた狙われるかという恐怖心は国民に根付く。ならば始末した方が安心できるだろう。僕はあの時の自分の対応は間違っていないかったと、今でも胸を張って言える」

『はあ〜』

浩介の非常に辛辣な答えに、父親は諦めにも似たため息をつく。

「まあいいさ。ここでの“任務”を僕は遂行するでしょう」
『……頼むぞ』

力なく答える父親に浩介はため息をつく。

「あの馬鹿はどうだ？」

『あいつならいつも通りだ。お前の所に行きたいと言い張って聞かない』

父親からの答えに、浩介は頭を抱える。

「何が何でも阻止して」

『そのつもりだ』

力ない言葉に、返ってきたのは呆れたような疲れ切ったような声だった。

「あの馬鹿が来れば必ず騒ぎになる。僕の“正体”を知られるのは何が何でも避けたいんだ」

『秘匿は我々の義務だ、それは心得ている。だからこそお前にも“制約”はいくつか与えているのだが……守っているだろうか？』

「勿論守っている」

疑うような声色に、浩介は即答で返す。

「身体能力が高いだけでも緊急回避ぐらいは可能だし、“あれ”を使う機会は全くとっていいほどにない」

『ならばいい』

浩介の返答に満足したのか、父親はそう言って言葉を区切る。

『さて、そろそろ通信を終えるところでしょう。でだ、最後に言っておこう』

父親の伝達事項に浩介は再び席に着くと、背筋を正した。

『あまり危険なことはするな。今のお前は赤子のようなものだ』

「赤子、ね……」

浩介が何かを言うよりも早く声は完全に消えた。

「ふう……」

浩介は静かに息を吐き出した。

「父さん、大きな誤解をしている」

その声に返事をするものがない空間で、浩介は静かに口を開いた。

「確かに、今の僕は赤子のように脆弱だ。でも大丈夫。なにせ……」
浩介はそこで言葉を区切ると、机の上に置かれた先端に真珠のようなものがつくネックレスを手にする。

「僕には世界最強の名に恥じない、頼もしい相棒がいるんだから。なあ、クリエイト?」

その言葉に、まるで呼応するように浩介の手にあるネックレスの先端にある真珠が、一瞬ではあるが淡い光を発する。

「上等」

その光は浩介も確認しており、不敵の笑みを浮かべて呟く。

「さあて」

浩介は窓に近づくと締め切ってあったカーテンを開けた。

窓から差し込む少しばかり明るい光が、夜明けであることを告げていた。

「徹夜か。上等だ」

不敵の笑みを浮かべるその姿は、まるで戦場に立つ戦士のようなものであった。

そしてまた新たな一日が幕を開けようとしていた。



人間というのは本当に真剣に取り組んでいたりすると日にち感覚がおかしくなるらしい。

それがまた興味深い。

つまり、僕が何を言いたいのかというと。

「は、ははは。追試前日にして、ようやくコーチから解放された」

慶介の物覚えの良さが、僕を救ってくれた。

「なあ、滯。これはさつきから大丈夫なのか?」

「さ、さあ」

ここは軽音部の部室でもある『音楽準備室』だ。

見れば滯たちが僕の方を心配するような表情で見ている。

「だ、大丈夫? 浩介君」

「だいじょうぶく、大丈夫く」

「全然大丈夫そうじゃないよ!」

自分でも何を言っているのが理解できない。

「一体どうしたんだ? クマがすごいけど」

「最近色々な野暮用が重なった結果、寝てないだけでーす!」

あ、今度は右手が勝手に動いた。

「寝てないって……何日だよ」

「唯が試験勉強を始めた日から」

「始めた日って……六日間!」

そう、あれから毎日放課後は啓介への試験勉強のコーチを、そして家に戻ってはH&Pのライブの練習が待っていた。

練習が終わるのは明け方近くになってしまう。

30分間通しで練習をしたのちに、1時間のミーティング(こここの箇所がダメだ、ここはもう少しこういうノリで行こうなどの話し合い)をしてまた練習を3回ほど繰り返していた。

メンバー全員は昼間に睡眠をとっているらしいが僕にはその時間は学校があるため、寝ることもできない。

そんなこんなで六日間一睡もしていないのだ。

「大丈夫! なんだか楽しくなってきたから」

僕は床を転がる。

ただひたすらに転がる。

「あたっ!」

そして、何かにぶつかった。

「お、おい、大丈夫?」

「ぼ、僕は一体何を」

滯の心配した様子の声に、一気に視界がクリアになる。

額の痛みと、目の前にある壁の角を見れば、僕がぶつかった者の正体はすぐに分かった。

「ごめん。何だか今日は思ってもいない事を勝手にしちゃうんだ」

「それって、もう異常だろ」

律がツツコんでくる。

まさしくその通りだった。

「まあ、でも。これで僕はぐっすりと眠れ——「濡ちやん助けて!!!」——ああ、いたな。問題児が」

部室のドアを思いつきり開け放つ人物に、僕は苦笑を浮かべる。

そして開け放った人物でもある唯は、何事だと言わんばかりに立ち上がった濡に泣きついた。

「勉強してきたんじゃないの？」

「出来なかった」

唯の答えに、今まで腰かけていた律は飛び上がるように立ち上がった。

「よし、今夜は特訓だ！」

「ホント!？」

濡の言葉に、唯は嬉しそうに口を開いた。

律によれば一夜漬けの達人らしい。

「ははは。グッバイ、僕の安息睡眠」

対する僕は力が抜けてしまい、床に座り込んでしまった。

「だ、大丈夫? 浩君」

「ダイジョウブ」

「目が危ないぞー」

どうやっても、僕は心配されてしまうようだ。

その後、準備室に備え付けられている洗い場で顔を洗い、眠気を吹き飛ばした僕たちは唯の家へと向かうことになった。

唯の家に向かう途中、両親は出張で不在と唯が告げた。

ただ、妹はすでに帰ってきているらしい。

「それだと、妹に迷惑なんじゃないのか？」

そう尋ねた僕は、思わず唯の妹の姿を思い浮かべてみた。

姉と一緒になって部屋を転がりまくる妹の姿が浮かんできた。

会つてもない人に対する創造にしては酷い物だったため、すぐさま頭の中から消し去った。

ただ言えることは

「大丈夫じゃない？」

だった。

「皆、上がって上がって」

『お邪魔しまーす』

平沢家にたどり着いた僕たちに、唯が促すので家に上がり込んだ。

僕は一番最後だ。

「あ、お姉ちゃんおかえりー」

そして現れたのは、少し前まで話に上がっていた妹さんだった。

髪型が違うだけで、唯と瓜二つ。

もし髪型を一緒にすれば、普通の人には見分けがつかなくなるだろう。

そして、僕たちに気付くと妹さんは僕たちの方に向き直る。

「初めまして。妹の憂です。姉がお世話になってまーす」

そして丁寧なお辞儀ときた。

さらに手際よくスリッパを5つ並べて行く。

「スリッパをどうぞ」

(で、出来た妹だ)

姉である唯との凄まじい違いに、僕は思わず啞然としてしまうのであった。

その後、唯の自室へと案内された僕たちは唯の部屋へと足を踏み入れる。

中は、ピンク色の壁で、本棚や勉強机などが置かれていた。

少し進めば一気に広がり、テーブルやベッドなどが置かれている。そしてベッドの横にはギターがあった。

「いやー、姉妹でこうも違うとわねー」

「なにが？」

それぞれが腰かける中、律の言葉に唯が首をかしげる。

「妹さんにいいところを全部吸い取られたんじゃないの？」

「酷いー！」

涙目になる唯だったが、僕も思っていた。

（人のふり見て我がふり直せ、か。よく言ったものだ）

口には出さないが。

「あの、皆さんよろしければお茶をどうぞ。買い置きのお菓子で申し訳ないんですけど」

そんな時、ノックと共にお茶菓子を手に入ってきた平沢妹に出来た妹だと思ったのは余談だ。

その後、平沢妹と少しばかり話をした（妹が中三であることや、桜ヶ丘を志望していることなど）のち試験勉強を始めることにした。

僕は律の横に腰かけて、その様子を見守る。

「ふわあ〜」

横からあくびをかみ殺す声が聞こえてくる。

（僕だって眠いのを我慢してるといふのに）

眠いのではなくただ退屈になっているだけかと、思いながら見守り続ける。

数分して、勉強机の回転いすに乗って回って遊ぶ律。

それに飽きたのか、後ろで何か（おそらく漫画だろう）を取ってそれを手にベッドの上に寝転がると、漫画を広げて転がり始めた。

（人のベッドの上なのに、よく出来るよな）

彼女の凶太い神経に、僕は思わず尊敬してしまう。

「ふははははは!!」

「だあー! もうー!」

あまりにも騒ぎすぎたため、滯から鉄槌を喰らいベッドから降りて正座する。

「足がしびれた」

その唯の一言に反応した律は、唯の背後に忍び寄ると、唯の足に指を触れさせる。

「ぎゃあああ!?」

「律——ッ!!!」

再び濡からの鉄槌を受けた律は外へと追い出された。

律がいなくなつて静かになつた部屋の中には、勉強を教える濡の声と、ノートにペンを走らせる音だけが響いていた。

僕は濡側の壁にもたれかかる。

それだけで、段々うとうととしてくる。

「うおおお!!!」

間もなく夢の世界へと飛び立とうとする僕を、無理やり引き上げたのは律の大声とドアを強引に開け放つ音だった。

「とりゃあああッとお」

受け身までとるが、はつきり言つてうるさい。

立ち上がろうとする濡を制止して、僕はこの日の為に作つておいた秘密兵器を手に律の方へと歩み寄る。

「おいしよつと、たの——」
「やかましいー!」——へばっ!?!」

僕は手にしていた秘密兵器を、律の頭に振り下ろした。

ものすごく良い音が鳴り響く。

「な、なにそれ?」

「ハリセン」

頭を押さえながら聞いてくる律に、手にしたハリセンを見せながら答える。

「どうしてそんなものを」

「女子に拳を振るうわけにはいかないから、これを使う。尤も効果がない場合は拳だけだ」

このハリセンを作るのにかかった労力は、ほんの数分程度だった。

僕の腕力では、下手すると死人が出かねない。

その為に、こういう手段を取っているわけだが、その点では慶介は本当にすごいと思う。

全力の一撃を喰らってもなお生きてるんだから。

「静かにしてね？」

「はい」

律が頷いたのを確認して、再び勉強は再開するのであった。

そして、僕の意識は再び闇の中へと吸い込まれていった。

「あ……………は？」

「も……………そ……………と？」

暗闇の中、誰かが話す声が聞こえてきた。

「ん……………」

その声に、僕は閉じていた眼を開ける。

目を開けると、そこは唯たちがいた。

ここは唯の家だ、それは当然だ。

でも、それだけではない。

「増えてるし!？」

人の数が明らかに増えていた。

赤い眼鏡をかけた黒っぽい髪の少女が、不思議そうな顔で僕を見ている。

「この人が、高月浩介ちゃん」

「真鍋和です。よろしく」

「こちらこそ、よろしくお願ひします」

色々と言いたいことはあったが、とりあえず自己紹介をすることにしました。

「唯、ちゃん付はやめろと言わなかったか？」

「え？ あれは“浩ちゃん”の場合でしょ」

「ちゃん付“自体”だ！ どんな理屈だよ」

言葉足らずの僕も悪いけど。

「幼稚園のころからずっと一緒のクラスなんだよー」

「不思議な縁よね」

まったくだ。

作為さえも感じる。

そんな真鍋さんは、どうやら試験勉強をしている唯に差し入れてサ
ンドイッチを作って持ってきたらしい。

僕たちも、それに舌鼓を打つ。

その最中、唯と幼なじみだからこそ知っていることを、真鍋さんか
ら色々教えてもらった。

内容に関しては唯の名誉のために伏せておくが。

つまりは、それほどあれな話だということだ。

話込んでいくと、時間はあつという間に過ぎてしまう。

「ところで、勉強は大丈夫なの？」

『あ……』

真鍋さんの問いかけに、全員が固まった。

時刻は8時過ぎだった。

その後、真鍋さんは勉強の邪魔にならないようにとのことで、帰っ
て行き試験勉強は再開となった。

僕は床に寝そべり“静かに”漫画を読んでいる。

僕は唯の正面の席に腰かけ、勉強の様子を見守っていた。

だが、とうの唯はコックリコックリとし始め、やがて完全に落ちた。

(あーあ)

心の中でため息をつきながら、僕は滯に声をかける。

「滯、いったんストップ」

「どうしたんだ？ 浩介」

突然止めたことに、滯は怪訝そうな表情を浮かべながら理由を聞い
てくる。

「唯の方をってみろ」

「あ」

唯の様子に気づいた滯は声を漏らすと、その肩をゆすり始めた。
すぐに唯は起きた。

「律ちゃん隊員、浩君隊員」

すると、律と僕の方を交互に見ながら

「ご、御武運を」

そう言っただけいきなり泣き始める唯に、僕たちはそれぞれ顔を見合わせる。

(一体どんな夢を見ていたんだ?)

そんな一幕もあったが、試験勉強は再び再開した。

「ん?」

そんな中、律が突然部屋を後にする。

三人とも、そんな事には気づいていないのか試験勉強を進めて行く。

(どうするか)

律が外に出た理由で思いつくのは、お手洗いか遊びに行っただかの二つだ。

前者であるならいいのだが、後者だと非常にまずい。

何せ、律の遊び相手になりそうなのは限りなく平沢妹だろう。

彼女に迷惑をかけるのは避けたい。

とは言え、前者の可能性もある。

(放っておくか、それとも様子を見に行くか)

目の前に突き付けられた二択。

僕が取ったのは

(10分くらい様子を見てから探しに行くか)

後者だった。

そして10分後。

(よし、いいこう)

律が戻ってくることはなかったため、僕は三人の邪魔にならないよ

うに静かに部屋を後にした。

(これは、テレビの音?)

下の方から聞こえてくるテレビの音に、僕は階段を下りると音のする方へと足を向けた。

「いたよ」

「あー! 負けた!!」

リビングと思わしき場所にたどり着いた僕は、目の前にある光景にため息が漏れそうになった。

寝そべりながらゲームのコントローラーを手に、負けたことへのくやしさをかみしめる律、そしてその横には平沢妹が居座っていた。

「何をやってる、律?」

「あ、浩介」

「高月さん」

呆れながら声をかけると、寝そべった姿勢のまま顔だけを向けてくる律に平沢妹。

「これは真剣勝負、止めないでくれ」

「なに言ってるんだ。彼女にだって明日は学校があるんだぞ? 夜遅くまでつき合わせたら迷惑だろ。平沢妹も言ってるやれ」

「あ、私の事は憂でいいですよ。姉とくんがらりますし」

何やら話に変な方向に逸れた。

(ものすごくデジャブを感じるぞ)

つい最近同じやり取りをしたような気がする。

「それじゃ、憂さんで」

「年上なんですから呼び捨てでいいですよ」

あ、やっぱり。

困ったような表情で言ってくる彼女の言葉に、姉とのやり取りが蘇ってきた。

(この姉にして、この妹あり、か)

「それじゃ、憂で。で、迷惑なら遠慮なく言っちゃれ。すぐに連れて戻るから」

「あ、いえ。別に迷惑じゃないですよ」

僕の言葉に、首を横に振りながら否定した。

本当にすごい妹だ。

「そ、そうか。まあ、迷惑になったら言って、すぐに連れてく」

「もしかしてここにいる気？」

邪魔にならないように反対側のテーブルの方に移動すると静かに座った。

「当り前」

そう言い切った僕に、二人は首を傾げながらもゲームを再開させた。

何かのゲームだろう、対戦しているようだが結果はほとんど憂の勝利という結果に終わっている。

(あ、やば)

そんな単調になりかけた流れに、ふと強烈な眠気が襲ってきた。

何とか抗おうとするも、強烈な眠気には叶わなかった。

そのまま僕は眠気に誘われるがまま、いつしか僕は目を閉じるのであった。

第13話 ライブと結果

「律、帰るぞ」

「へいへい、ところで浩介は？」

律の言葉に、漣とムギはあたりを見回す。

その人物はすぐに見つかった。

「寝てるし」

「私が起こすよ」

人の家で心地よさそうに眠る浩介に苦笑する漣に、律はそう言うところを浩介の元に歩み寄る。

「ほら、朝だぞ、起きろ。そうでないと死ぬぞ！」

「スー、スー」

体をゆすりながら言う律の言葉に、浩介は目覚める気配もなかった。

「あ」

そこで、律は妙案を思いつく。

浩介にとって言われたくない言葉を言ってみればいいのではないのかというものだ。

「浩ちゃん——へぶ!？」

「り、律?!」

浩ちゃんと言おうとしたりつの腹部に容赦のない一撃が浴びせられた。

「次は殺すぞ……佐久間」

寝言のようだが、一体どのような夢を見ているのだと、全員は固まっていた。

「お……お……浩介、恐ろしい子」

しばらくの間律は、その場にうずくまって動くことが出来なかった。

その結果、

「本当にごめんなさいね」

「大丈夫です」

「またね、みんなー!」

それぞれが申し訳なきように頭を下げる中、浩介を残して帰って行った。

寝ている浩介に近づくのは危険という事が、軽音部内で言われるようになったのはそれから少ししてからのも事だった。

★ ★ ★ ★ ★

耳に聞こえてきたのは、食器がこすれ合う音にテレビから流れるニュース。

新聞をめくる音などだった。

すぐに違和感に気が付いた。

「うう……」

のっそりと起き上がる。

そして辺りを見渡すが、良く知らない場所だった。

「起きたのね。おはよう」

「おはようございませう」

起き上がる僕を見て、声をかける女性。

どことなく誰かに雰囲気似ていた。

色々な疑問が渦巻く中、まったく回らない頭で、僕は記憶をたどることにした。

(確か、唯の勉強見するために唯の家に行ってそれで……)

「はっ?!」

視界が一気にクリアになった。

ここはもしかしなくとも唯の家だ。

という事は、この女性は……

「お、おとおお、お邪魔しましたっ!!!」

僕は慌てて家を出ようと駆けだす。

「あ、危ない——」

「へっ?!」

動転のあまり閉まっているドアに顔面からツッコんだ。

「だ、大丈夫?」

「大丈夫です。丈夫な体を取り柄ですから」
痛む鼻を押さえながら、女性に答える。

「ところで、あなたはどちら様?」

「あ……………」

その後、自己紹介をして二回から降りてきた憂たちと朝食を食べさせてもらい、学校へと向かうことになった。

唯の両親に今度ちゃんとお礼を言おうと、心に誓った時だった。

唯の追試から二日後。

僕は地元のそこそこの大きさのライブハウスにやって来ていた。

「お、来たな」

「待たせたな」

楽屋に一番最後に到着したのか、H&Pのメンバー全員が僕を待っていた。

「今日は俺達の独壇場だ」

そういうYJに連れられてステージ袖に向かう。

「た、確かにすごい熱気だ」

袖からでもわかる。

観客席の場所にいる人たちの熱気と期待感に満ちた思いが伝わってくる。

「DK、準備はいいか?」

MRが僕に問いかけてくる。

僕は入る際から掛けているサングラスの位置を少し上げる。

「当たり前だ。この私を何だと思っている。私達に宿った炎は決して消

えることはない。お前ら、炎は消してないな？」

「当り前だ。俺の中に供っている炎はいまだに激しさを増している」

「僕もだ」

「私もだ」

「私もです」

Y Jに続いてR OやM O、R Kが返事をする。

「さあ、始めようか」

僕のその一言に照明係の人が明かりを落とす。

それと同時に、観客席のざわめきは一気に弱まった。

全員の期待感が伝わってくる。

約三年ぶりの公の場での演奏だ。

色々と緊張もするが、一度深呼吸をすると足を地面に叩き付ける。

その時になった音が、Y Jに曲の開始を告げるリズムコール開始の合図だ。

Y Jがバチ同士を叩いてリズムコールをする。

Y Jのリズムコールが終わると同時に、R Oのキーボードが産声を上げた。

続いてR KのベースとY Jのドラムが音に命を吹き込む。

それと同時に明かりがつき、周囲が明るくなる。

次はM Rの簡単なギター演奏で曲は始まる。

この曲は僕がボーカルを務め、Y Jがサブボーカルとなる。時より弦を弾きながら歌を紡ぐ。

自分がいる場所は、非常に不安定な場所。

いつ何がやってくるかもしれない危険地帯だ。

その緊迫感を兼ね揃えた曲がこの楽曲のイメージだ。

ついにサビだ。

僕は複数のコードを引きながら歌を紡ぐ。

そして紡ぎ切ったところで、間奏が入る。

ここからは僕のギターテクが問われる。

ベースの音とドラムの音を頼りに、音を奏でて行く。

そして間奏の終わりで音を伸ばし、ビブラートを効かせる。

最後のサビも先ほどと同じ要領でギターを弾いていき、一気にフィニッシュへと向かう。

MRと合わせて弾き、同時にストロークをして曲は終わった。

それと同時に、けたたましい歓声が響き渡った。

時より『待ってたぞー！』という声も聞こえたような気がした。

「皆、待たせたな！」

マイクを手に取り、僕は会場みんなに声をかける。

「この三年間、フアンのみんなには長く待たせてしまい申し訳ないと思う」

今まで鳴り響いていた完成はぴたりとやんでいた。

「何がよくなった。何が変わったというものはない。だが、この三年分の待ちわびていた気持ちを、このライブに全てぶつけてほしい。そして楽しんでほしい」

そこで、僕は言葉を区切った。

「さあ、それじゃ次行ってみよう。次の曲名は『Devil Went Down to Georgia』だ！ お前ら！ 準備はいいか！！」

僕の言葉に答えるように、観客が声を上げる。

「それじゃ、行くぞー！」

「1, 2, 3, 4」

YJの早めのリズムコールが終わると同時に、僕は弦を弾く。

そして始まる曲。

この曲は僕がボーカルだ。

今まで止めていたギターの音を鳴らすべく弦を弾く。

すぐさま弦を揺らしてビブラートを効かせると、本格的にストロークを始めた。

リズム良く弦を弾いて行き、最初と同じフレーズを引き終えてもう一度ビブラートを効かせるようにしてピックを振り下ろす。

そこで、またストロークを止めるが、すぐさま速弾きに近い素早さでストロークする。

その後またゆっくり目のストロークになるが、ここからが本番だ。

一気にコードの移動速度が増す。

それをMRと交互に弾いていく。

まるで、一つのギターテクを争うバトルのように。

複雑なコード進行をし終え、再び僕の歌だ。

それと同時に、僕は弦を弾いていく。

ここからが第二ラウンド。

再びMRとの弾き勝負だ。

MRも複雑なコード進行をスムーズに進めて行く。

それに負けじと僕も素早いストロークで観客を魅せて行く。

それを何度も繰り返した頃、音が止まる。

その間、僅か1秒。

それはソロ開始の合図。

最初はゆっくり目で簡単な音を。

だが、徐々になりを潜めていた悪魔が牙をむく。

テンポは一気に早まり、音は小刻みになって行く。

複雑なコード変更をしながらも嵐を乗り切る。

ただ乗り切るのではない。

この嵐すらも自分だというのを表現しなければならぬ。

ソロの間、観客が歓声を上げる。

それが、ほぼ成功だという証だった。

ソロも最終局面だ。

徐々に晴れて行く嵐の様子に希望を見出した僕は、爽快であることを表現するべく、ピックを振り下ろすことでソロパートは終わった。

弦楽器類の音はなくなり、僕のボーカルとYJのドラムが響いている。

そして再び弦楽器の音が戻ってきた。

後は比較的簡単なコードのため、失敗する箇所はそれほどない。

僕がストロークをし終えることで、曲は終わった。

そして再び浴びせられる歓声。

「さあ、続いてはデビュー曲『only for you』だ！」

MRの告げた曲名に、会場の盛り上がりは一気に変わった。

YJのリズムコールと同時に、ROのキーボードが産声を上げる。数フレーズ引いたところで、ベースとドラムが音に命を吹き込んでいく。

これは、ロックではない。
なぜなら、まともにギターを弾くのは間奏くらいしかない。

それを積極的に取り込んだのは、話題性を持たせるため。

当初は、冷ややかな反応だったが、最近はその受け入れられつつもある。

それはともかく、MRが曲の合間にギターを弾いていく。

決して歌声を潰さないように、彩るのだ。

この曲のボーカルは僕だ。

歌詞全てが英語という状態だが、一言一句はつきりと紡いでいく。

二番が終わり、ついに間奏に移る。

歌い終えるのと同時に、弦を弾いていく。

一旦緩急を付け、コード進行の速さを早めビブラートを効かしながら音を伸ばして、フェードアウトする。

そこで僕の歌は再開。

一旦キーボードと僕の声のみになるが、再びすべての音は戻り僕は、無事歌い終わることが出来た。

その瞬間渦巻いたのは、歓声ではなく拍手だった。

「さんきゅー。次は『Darling... Kiss immediately』だ！ ノツて行くぜ！」

次の曲も前と同じ感じだ。

YJのリズムコールが終わると同時に、キーボードから産声がかかる。

この曲では、ギターは一本の為MRは完全にボーカルだ。

そして基本的にはドラムとベースとキーボードが前に出ている。時より軽く弦をはじいて僕は、音を奏でて行く。

2番の歌が終わったのと同時に、間奏に入る。

この曲にはラップがあり、それは僕がやることになっていた。ラップは僕の得意なもの。

手の振り付けを加えながら、ラップパートを終えると続いて弦を弾いていく。

そんなこんなで、4曲目が終わった。

「さあ、最後の曲だ」

「この曲は最後にふさわしい曲だ」

曲名を知らない観客たちはどよめく。

それを見ながら、僕は曲名を告げる。

「曲名は『Throug h The Fire And Flame s』だッ！」

その瞬間、会場中にざわめきが走った。

それはどちらかというと期待に満ちた物だ。

「1, 2, 3, 4」

YJの早めのリズムコールが終わると同時に、僕は弦を弾く。

最初は単調だったが、次の瞬間には速弾きの要領でストロークをしていくことになる。

この曲も僕がボーカル。

歌いながら殆ど速弾きに近いストロークをしていく。

そしてサビが訪れた。

ここは音を伸ばしていくのでそれほど難しくはないが1番と2番をつなぐ箇所です。再び素早いストロークをする必要があるため、気は抜けない。

2番が終わればしばらく演奏した瞬間、3秒ほど音が消える。

ここから始まるのは壮絶な間奏だ。

MRと僕のギターが一気に存在感を増す。

素早いストロークは徐々に速弾きへと移って行く。

それがどのくらい続いたか、ドラムやベースの音が無くなる。

そして響くのは激しさを増す僕のギターの音色だった。

ここからはさらに険しさを増す。

速弾きだ。

正確なコード進行をして、なおかつ素早く弾いて行かなければならない。

所々難しい箇所があるが、体を前後にゆっくりと揺らせることでそれをもパフオーマンスへと変えて行く。

ついに間奏も終盤。

速いテンポのまま凄まじい速度で弾ききった僕は小休止とばかりに、歌のみに集中をするが、再び小刻みにストロークを始める。

曲もラストスパート。

いよいよ最後の罨、速弾きとなった。

それを引き切った瞬間、観客たちは盛大な拍手と歓声を上げてくれた。

「ありがとう！ これで、ライブはお開きだ」

僕の言葉に、そこから中からブーイングの嵐が湧き上がる。

「だがしかしっ！ 私たちの——」

『またライブを開く』と言おうとした時だった。

予想外の乱入者が現れた。

「まだ終わりじゃねえ!!!」

「ッ!？」

その言葉に、会場全体が、僕たちでさえも固まった。

その声を放った人物RKはさらにこう続けた。

「もう一曲行くぞ！」

(あーあ、変なスイッチが入ったよ)

余程このライブが楽しかったのだろう。

理性が振り切ってしまったようだ。

僕には彼女がどんな曲を選ぶかの予想がついていた。

「曲名は『ラブ』ッ!!」

完全なカバー曲だ。

彼女はアマチュアバンドでもある『DEATH DEVIL』のファンなのだ。

その中でも、この『ラブ』が大のお気に入りらしい。

前にキャサリンに会ったら握手してサインをもらってデュエットするなど願望を漏らすほどに。

『DEATH DEVIL』の事で調べてみたが、ガールズバンドとい

う事以外情報は出てこなかった。

ただ、どこかの高校のバンドであることは分かったが。

僕たちは、目線でやり取りをしていく。

意見は一致していた。

『やるしかない』と。

「1, 2！」

YJのリズムコールが終わるのと同時に僕は一気に弦を振り下ろす。

この曲は、それほど難易度の高くない曲だ。

しばらく進めばMRのギターも合流する。

そして始まったのはRKの歌だ。

完全な“大人”の歌声に、会場はサプライズだということも忘れて、盛り上がりを取り戻していた。

心を込めながら歌っていく彼女の姿に、僕は苦笑しながらも弦を弾いていく。

サビではMRと僕がRKの歌声にハモらせる。

そして2番が終わった時、間奏となる。

間奏では最初に僕が速弾きの要領でストロークをしていくが、そこにRKの歌声が加わった瞬間、主役は交代だ。

MRのギターが火を噴く。

素早いストロークのフレーズも終わり、再びサビへと戻って行く。

最後は、RKの発狂したのではないかというような叫び声の後に、綺麗に音は鳴りやみ演奏が終わる。

こうして、僕たちの復活ライブは幕を閉じるのであった。

ちなみに、正気に戻ることになったRKは、終始謝り続けることになるのだが、それは割愛しよう。

唯の追試から、数日が経過したこの日、とうとう結果が判明するのだ。

「合格点取れてるかな？ 唯」

不安を口にしたのは漣だった。

律は雑誌を読んでいる。

そんな中、ドアが開く。

そして現れたのは、この世の終わりのような表情を浮かべた唯だった。

「ど、どうしよう、漣ちゃん」

「え、もしかしてまたダメだった？」

唯の様子から、漣は最悪の事態を想像した。

だが、それは唯の取り出した一枚の紙で完全に打ち破られる。

「ひひ、百点取っちゃった」

「極端な子！」

0に近い点数から一気に満点とは、まさしくその通りだった。

それはともかく、これで廃部の危機は免れた。

そして、練習をすることとなった。

唯は試験勉強中に何度も弾いていたため、かなり進歩したはずだ。

「それじゃ、何か弾いて見せてよ」

漣の横に移動して、唯のコード進行を見ることにした。

「へへへ、ばっちりだから。XでもYでもなんでもごじやれ」

そう言ってピックを振り下ろして音を鳴らす唯。

その様子に、僕たちは顔を見合わせた。

(いやな、予感がする)

「じゃあ、C, Am7, Dm7, G7って弾いてみて」

出されたコードは多くのヒット曲で行われている循環型のもの。

はきはきとした元気な音が特徴的な物だ。

「ほいほい」

再びピックを二度振り下ろす。

そこで、固まった。

その様子に、僕は嫌な予感を感じていた。

「おい、まさか」

「コード、忘れた」

どうやら予感的中したようだ。

唯の口から出た言葉に、僕たちは思わずズッコケてしまった。

「ずっとXとかYとか勉強してたから」

「また一から!？」

「お前は単細胞生物か!!」

一つ覚えたら他の事を忘れるとはいかほどに。

「これがXだっけ」

「そんなコード見たことない!？」

「あ、こうだこうだ」

そうやって唯が弦を弾くと、不協和音が鳴びびく。

「これがXだよ、濤ちゃん!」

「これ以上コードを増やすな!!」

もうめちやくちやだった。

「ええー!？」

困惑した唯は、再び弦を弾く。

そして流れるのは間の抜けた音だった。

タイトルはチャルメラだ。

「つて、それは弾けるんかい!」

律のツツコミは、とても的を得ているものであった。

(こんなん、行けるのか? 武道館)

彼女たちの様子を見て、どこことなく不安になってくる今日この頃だった。

1年生編 『合宿』 第14話 選曲！

徐々に暑さが増していき、夏真っ只中になろうかというこの季節の、軽音部部室『音楽準備室』

そこには無言緊迫感で満ちていた。

「……………」

ギターの弦に指を乗せたまま固まる唯。

それを僕と律は固唾をのんで見守る。

「あう!? ゆ、指い〜」

つつたのだろうか、涙目で左手を抑える唯に僕は呆れた視線を送る。

「本当に全部忘れたんだな」

「えへへ、昔よくおばあちゃんに褒められたんだ〜。〃唯は一つ覚えると他のことは全部忘れるね。って」

同じく呆れていたであろう律の言葉に、涙目のまま笑う唯。

「それは絶対に褒められてないから」

そのおばあさんはものすごく的を得た事を言っているなと思っ
ている中、いつもよりも乱暴にドアを開けて漑が入ってきた。

その漑は、テーブルにカバンを置くと僕たちに指差して大きな声で
宣言した。

「合宿をします!! もうすぐ夏休みだし朝から晩までみっちりと楽器
の練習を——」

漑が話をしている中、合宿という言葉に律と唯が海に行こうか山
に行こうかと、話し合っていた。

「人の話を聞け—!!」

漑の叫び声に、二人は話をやめる。

とりあえず開けっ放しのドアを閉めて席に着いて、話を聞くことに
した。

「夏休みが終われば学園祭だろ桜高祭での軽音部ののライブは、昔は

有名だった——」

そうなのかと思いながら漣の話を聞いていると、突然漣は話すのをやめた。

どうしてかと首をかしげるが、すぐに答えは見つかった。

律と唯の二人は、『メイド喫茶』やら『お化け屋敷』等と出し物の話をしていたからだ。

終いには、どっちをやるかという言い争いを始めるし。

それを聞いていた漣の肩が、小刻みに震えだした。

これは、噴火の前兆だ。

「おーい、二人とも。そろそろやめておかないと漣に——」

僕が二人に忠告しようとして口を開くが、言い切るよりも前に鉄槌が下った。

……律に。

「なんで私だけ」

「私達は軽音部。ライブやるの！」

律のボヤキをスルーしてぴしやりと言い切った時、再びドアが開いた。

「遅れちゃってごめんな——」

中に入ったムギ（さん付けをやめろとこの間言われたため、呼び捨てになった）は正座する二人と呆れている表情をしているであろう僕、そして腕を組んでいる漣の姿を見ると、言葉を失った。

「マドレーヌ、食べる？」

そして出た言葉はそれだった。

その後、ムギの用意したお菓子に舌鼓を打ちながら、漣は事情を説明した。

「いくら慌てずにやって行こうって言っても、もう三か月にもなるのにまだ一度も合わせたことがないんだよ」

唯のコードを全部忘れるという騒動で、慌てずにやって行こうということになった。

とは言え、練習の成果などは全く出てもいないこの状況にしびれを切らしたのだろう。

ムギも合宿に賛成したことで、合宿自体が決定ということになったわけだが、問題はあった。

「合宿はいいとして、金銭面はどうする気だ？」

「そうだと、きつくないか？」

「うゝ!？」

僕と律の言葉に、漣は言葉を詰まらせる。

経験論から言うと、別荘を使う場合は、そのレンタル代やら食費、光熱費等々を合わせると10万以上かかったことがある。

つまりは、最低でも一人当たり万単位での出費は覚悟しなければいけない。

僕はバンドなどで稼いだお金があるのでまだ大丈夫だが、一女子高生にはかなり厳しいだろう。

「む、ムギ。別荘とか——」

本人はない物ねだりのつもりで聞いたのだろう。

だが、僕にはその質問の答えは目に見えていた。

「ありますよ」

予想通りの答えだった。

前に特殊なネットワークを使い琴吹家を調べた結果、いくつもの別荘を所有していることや、楽器店等の社長令嬢であることが判明したのだ。

とは言え、そのようなことはすべて忘れるようにしているが。

ただの興味本位で得た情報は、覚えておく必要はないという理由もあるが、仲間の事をこそこそ嗅ぎまわることへの罪悪感というのがあるを占めていた。

金銭問題の方はクリアした。

こうして二泊三日での合宿と相成った。

「いつその事、何か曲を使って練習しない？」

という僕の提案に四人も賛同したところまでは良かった。

だが、どの曲を使うのかというところで躓いてしまったのだ。

「オリジナルを2曲、カバーで1曲という感じにしよう。この中で、作曲とかが得意な人はいるか？」

「あ、それでしたら、私が」

僕の問いに名乗りを上げたのがムギだった。

「それじゃ、ムギに作曲は任せる。でだ」

僕はカバンの中から一枚のレポート用紙を取り出すと、それをムギに差し出した。

「こんな感じの曲を作ることはできるか？」

「えっと……ちよつと時間が掛かりますけど」

「それじゃ、悪いけどこれで一曲頼む」

僕が差し出したのは、オリジナル曲のコンセプトが記された物だった。

これから作曲をする作業はかなりの難易度を誇る。

何せ、人の音楽への感覚を把握するのは、非常に難しいのだから。

「明日、皆で何か曲を持ち寄って演奏する曲を検討しよう」

そう締めくくって、合宿の話は区切りがついた。

「お前ら、馬鹿だろ」

「うぐっ!?! 面目ありません」

翌日、僕の言葉に滲はがっくりと項垂れた。

その彼女の前にはいくつかのCDが置かれていた。

その曲目は、『Devil Went Down to Georgia』、『Through The Fire And Flames』、『Leave me alone』の三曲。

律は、『vampire』一曲を持ってきていた。

ちなみに律の持ってきた『Vampire』というのは、ハードロック（もしくはスピードメタルとも言うが）な曲調で、かなり速いテンポなのが特徴だ。

演奏できればかつこいいが、その分難しさも増す。

特にドラムの方でその難しさが出ている。

なにせ、ドラムは速いテンポで叩かなければいけない。

はつきり言えば、中レベルの曲だ。

それ以上の難易度を誇るのが『Devil Went Down to Georgia』などの曲だったりもする。

とは言え、この曲のグループの演奏する曲は色々良曲揃いなので、いつの日か演奏してみたいという願望はあったりするが。

「まだコードもそれほど覚えていないのに、『Devil Went Down to Georgia』とかできるのか？」

完全に向こう見ずの選曲だ。

「唯に限っては、ギターとかベースとか関係ないし」

普通の曲を持ってこられたときは、何かのネタだろと思ってしまった。

「何も持ってきてない奴には言われたくないわツ!!」

律が反論してきた。

確かに、その通りだ。

僕は結局曲を持ち寄ることが出来なかった。

というのも、唯でも演奏できるレベルの曲というのが見当たらなかったからだ。

天辺を超えるまで調べてみたが、結局見つかることはなかったのだ。

そんな中、僕は潯が持ってきたCDを一枚手にする。

「でも、この曲はいいと思う」

「えっと『Leave me alone』？」

僕が手にしたCDを置くと、律たちは興味津々に覗き込む。

「この曲って何？」

「H&Pの曲で、はきはきとした歌声と力強いギターやベースの音が特徴的な曲だよ！」

唯の疑問の声に潯が答える。

「これならば、それほど難易度も高くないし、少し練習すれば僕たちでも演奏することはできるはずだ」

その為、この曲を選ぼうとはしたが、自分たちの演奏する曲を勧めるといふのは少々憚られたために出来なかったのだ。

そういう点では漣は非常に素晴らしいチョイスをしていると言える。

「でもこれって曲の長さは2分何だろ？　ちよつと短すぎないか？」

律が苦言を口にする。

確かに、この曲の問題点は、曲の短さだ。

学園祭のライブで使うには少々短すぎるのだ。

最低でも3分ほどがないと味気なさすぎる。

「だったら、曲の尺を長くすればいい。1番のサビが終わった後にもう一度最初の方に戻れば、3分くらいまでは伸びるだろうし」

「おー、なんだかすごいとすなー」

僕の提案に唯が反応するが、意味は分かっているのだろうか？

「大丈夫なのか？」

「たぶん大丈夫」

漣の“大丈夫”には二つの意味が含まれていた。

一つが他人の曲を勝手にいじることに対してのものだ。

これに関してはパロディにぎりぎり分類される可能性がある。

尤も、これを自分たちの曲だと言った瞬間に、アウトになるが。

もう一つが曲の編集が出来るかという事。

よくバンドでも曲のアレンジをしていたりしているため、そういうことをするのは簡単でもある。

だからこそ、大丈夫と返したのだ。

「それじゃ、合宿の日までに譜面の方を作っておくということで、練習を始めようか」

「「おー!!」」

こうして、僕たちは練習を始める。

唯も少しずつではあるが、コードを覚えてきている。

とは言え、その覚え方は“感覚”で、だが。

(もしかして唯は、絶対音感とか持っていたりするのかな?)

絶対音感とは音を聞いただけで、音階にすることが出来ることまで言わ

れているため感覚で覚えて行くというのは、絶対音感である可能性は十分にあるのだ。

とはいえ、それでもまだまだではあるがそのうち僕にも迫るほどのギタリストになるのではないかと、思えてくるのであった。

★ ★ ★ ★ ★

合宿前日、平沢家の唯の部屋。

「よしっ！ これで大丈夫」

唯は合宿の際に持つて行く荷物の荷造りを終えた。

最初唯が自分で荷造りをすると言いついで出した時、妹の憂は自分がやると言っていたが、唯は押し通すようにして、荷造りを始めたのだ。

理由としては、姉としての威厳を！ ということであったが唯は無事に荷造りをし終えることができたのだ。

その様子を陰から見ている憂はほっと胸をなでおろした。

「それじゃ、お姉ちゃん。私もう寝るね」

「うん、お休みー」

手を大きく振って憂を見送る唯は、時計に目をやる。

時刻はすでに10時を回っていた。

「よおし、寝るぞー！」

荷造りをしたという達成感を胸に、唯は眠りにつく。

とは言え、寝つけたのはそれから数時間後の事であったが。

——これが、後にとんでもない騒動をもたらすとも知らず、合宿の日を迎える。

第15話 憤怒

人というのは、期待を裏切らないものだ。

合宿当日、全員には寝坊をするなど釘をさしておいたのだ。

だが……

集合場所に集まったのは律にムギ、滯と僕を入れた四人。

唯一人がまだ来ていなかった。

不安に感じた滯は、念のためにと唯に電話を掛ける。

「おはよう」

その滯の一言に、律たちの間で哀愁のようなものが漂い始めた。

僕は、ため息を一つ漏らす。

それから数分後、唯は息を切らしながらやってきた。

「ごめんなさい！」

「まあ、間に合ったようだし。問題はないよ。な、律？」

「そ、そうだな」

土下座でもしそうな勢いで謝る唯に、僕はそう声をかけると律に振った。

こうして、僕たちは電車に乗り込み、ムギの持つ別荘へと向かうのであった。

特急列車に乗り換える駅まであと一駅となった時のことだった。

「あれ？ 電話だ」

誰かから電話がかかってきたのだろう。

唯は携帯電話を取り出すと相手を確認する。

「憂だ」

相手は唯の妹の憂だった。

唯は電話に出る。

「あッ!？」

何を言われたのか、唯の表情が青ざめる。

「ど、どうしたの?」

「服を持って行くのを忘れた」

「ええっ!？」

唯の言葉に、電車の中であることも忘れて律は大声をあげた。

案の定周りから視線が集まるわけだが、僕たちはそれを気にしているところではなかった。

「ど、どうするんだよ」

「私、予備の服なんて持ってきてきてないですよ」

着替えなければいい話だが、そういう問題でもない。

「これから帰るにしても、今からだど夕方ごろに着くぞ」

特急列車の次の発車は約2時間後だ。

つまりかなりの遅れは覚悟しなければならない。

「……」

どうしたものかと考えをめぐらす僕に、みんなが見てきた。

その目は、“僕に取って来て”と言っているようにも感じられた。

「だったら僕が取りに戻る」

「え、そんな。悪いですよ」

僕には何のメリットもない。

悪いと思ったのかムギが止めようとするが、僕は首を横に振った。

「いいって。この間の不始末のお詫びも含めてだから」

「それじゃ、浩介。頼むッ!」

話は決まった。

停車した駅で僕は電車から降りると、反対側に留まっている僕たちが乗った駅に向かう電車に乗り移った。

そして向かい側の電車に乗る唯たちの方を見る。

唯は終始申し訳なさそうに手を合わせていた。

駅に到着した僕は、平沢家へと向かう。

驚いたことに、平沢家前では憂が唯の服が入っているであろう風呂敷を手立に立っていた。

「どうやら電話で話を通しておいたのだろう。」

「高月さん！ すみません」

「良いっていいって」

何度も頭を下げる彼女に、僕は困りながら言う。

「別にこの後、唯に鉄槌を食らわしたりはしないから。まあ、遊んでいたら別だけど」

「えっと、よろしくお願いします」

困った表情を浮かべながら風呂敷を手渡してくるので、僕はそれを受け取った。

僕は憂に一礼すると、駆け足で平沢家前を後にした。

僕が向かったのは、駅ではなく自宅だった。

鍵を開けて中に入ると鍵を閉めた。

家はカーテンが閉められていて、外から中の様子を見ることはできない。

今から言っても1、2時間のタイムロスは必至。

ならば、それを出来る限りショートカットしなければいけない。

どのような手段を取ったところで、それは無理だ。

そう普通は。

僕は自室に向かうと、引き出しの中にしまつてあつた片目の方しかないサングラスを手にとると、それを掛ける。

右腕を前の方に掲げると、右手を開くように動かす。

その瞬間、何もなかった空間にホロウインドウが現れた。

さらに僕は地面と水平になるようにコンソールを展開すると、それを操作していく。

僕がしたのは通信だ。

通信先は僕の故郷。

“ACCESS”という文字が画面上に表示されたのちに、相手の顔が映し出される。

『お久しぶりです、大臣。何かご用でしょうか?』

「連盟ライセンス課に魔法使用許可を願いたい。事由は特務上、必要なためだ」

『了解いたしました。これよりライセンス課に申請いたします。2、30分ほどお待ちください』

そう告げて通信は切られた。

「ふう」

僕は息を吐き出しながらベッドに腰掛ける。

僕、高月浩介は人間ではない。

それが僕が一番大きな秘密。

僕の正体は、魔力を糧に生きる種族の“魔族”だ。

つまり、魔法使いだ。

そして僕の故郷はそう言った人ならざる者が多く暮らす“魔界”である。

僕はそのところにある魔法連盟（ここでいう警察みたいなもの）の法務大臣でもある。

この世界にやってきたのは、連盟長でもあり僕の父でもある高月宗次郎氏の指示だ。

その事についての説明は割愛することにしよう。

ここにいる際、僕は魔法に関するすべての力を封じている。

身体能力に関してはその限りでもないが。

これも、法律に基づくことが要因だったりする。

そして魔法を使う際は今のようには許可申請をしなければいけない。

とは言っても小規模な魔法（物を浮かせる風を起こす等）は、第三者に見られないようにすれば申請する必要はないのだが。

僕の作戦はこうだ。

中規模魔法でもある転移魔法を使い、ムギの別荘まで移動する。

そして合流するという物だ。

注意点と言えば、人目の無い場所に転移することと、転移するタイ

ミングだ。

いくらなんでも先に到着しているのは不自然だ。

遅れるにしても短すぎるのもおかしい。

それを考えた結果、15分ほどの遅れでいいかという結論に至った。

「さて、許可が出るまで紅茶でも飲むか」

僕は一回に戻ってティーカップに紅茶を淹れると、それを飲みながら連絡を待った。

30分ほどした頃、通信が入ってきたため、ホロウインドウを展開して通信を受ける。

『ライセンス課より30分の限定解除という形で許可が下りました』

「了解。感謝する」

『御武運を』

そう告げて通信は再び切れた。

(御武運をつて、別に戦いに行くわけじゃないんだが)

苦笑しながら僕はティーカップを洗い、乾いた布で拭くと食器棚にしまい、キッチンを後にした。

向かったのは玄関。

理由としては靴を履ける場所だから。

移動した場所で靴を履くのも嫌なので、こういう対策になった。

僕は再びホロウインドウを開く。

画面には座標入力を促すメッセージが表示されている。

「えっと、確か座標は……」

僕はポケットの中からムギから渡された別荘の住所が記された紙を確認するともう片方のポケットから地図を取り出す。

その地図は普通の地図ではなく1cm間隔で線が引かれているものだ。

引いたのは自分だが、これは非常に重要なアイテムだ

転移魔法などは行き先(つまりは座標だが)を必要とする。

座標は緯度等ではなく、自分の現在地を0とした際に等間隔に区分けされた数字となる。

その要件を満たしたのが僕の持つ地図という事だ。

その地図で僕はムギの別荘の住所の位置を探す。

(どうでもいいけど、これは時間が掛かるな)

それほど広い範囲が1ページに掛かっているわけではないので、地図を数ページも捲る羽目になるのはかなり面倒だ。

そしてようやく見つけた、ムギの持つ別荘の場所の座標を打ち込んでいく。

普通ならば、入力すればすぐに転移ということになるのだが、少しばかりこれは違う。

ウィンドウに映し出されたのは、転移する場所のリアルタイムの航空映像。

これは、転移先の状況を知ることが出来るのだ。

別荘の少し離れた場所に森があるのを見つけた僕は、そこに転移することにした。

念のために森の内部の映像も確認するが、人の気配などは皆無だった。

「時間的にも、唯たちが到着して2、30分ほどは経っているし、もういいか」

座標を決めるのにかなり時間が取られたが、ちょうどいい頃合いだった。

僕は、映し出されている場所を固定させると片目の方しかないサングラス……コントローラーの耳宛ての部分にあるボタンを押す。

一瞬光に包まれると、僕はウィンドウに映し出されていた映像の場所に立っていた。

「よし、無事到着」

僕は周囲を見渡しし人を探すが、人の気配も感じない。

僕はコントローラーを格納空間にしまい別荘の方へと足を進めた。

通常は、媒体を使う転移魔法を使う。

だが、消費魔力が多いためにホロウィンドウを利用した転移魔法を使っている。

決して、転移魔法が苦手というわけではない。

「つて、誰に言い訳してるんだ。そもそも言い訳でもないけど」
僕は苦笑しながら呟きながら足を進めて行く。

(あいつら、待ってるし急がないと)
今頃はどこかに座って僕がつくのを今か今かと待っているはずだ。
僕は少しばかり早歩きするのであった。

「でかつ!？」

別荘を見た僕の第一声がそれだった。
別荘にしてはかなり大きめだ。

そしてなんとという偶然か、スタジオと思われる場所の方にたどり着いた。

僕はスタジオの方にギターを置くと玄関の方へと向かうべく別荘の周辺を探索することにした。

「ん？ この声は唯たちか？」

遠くの方から聞こえる唯たちの声に、僕は嫌な予感を感じた。
声の感じも遊んでいる時のような、はしゃいでいる声だし。

「……………まさか、な」

この周辺には海がある。

そこで遊んでいるのではないかという予感がしてきた。

取りあえず確認しようと思ひ、声のする方へと歩いていく。

そこには……………

「きゃはははは!!」

水着を着て大はしやぎして海水浴をしている、唯と律二人の姿だった。
た。

他にもムギや滯も水着を着ているし。

(あいつらあ)

最初は小さかった怒りの炎が次第に大きくなっている。

僕ははしゃいでいる四人の元に近寄る。

「随分楽しそうだな」

「まったくだ。浩介がまだ来てないというの……に」

(あ、ちゃんと気を使っていてくれたのね)

滯の相槌に、僕は心の中でつぶやいた。

その滯は、声をかけたのが誰かに気付いたのか、まるで壊れかけの人形のような動きでこちらを見てきた。

「ヤッホー。遅れてごめんね」

「こ、こ(こ)こ(こ)こ、浩介!？」

僕のできる限りの満面の笑みに、滯たちは海の方へと後ずさる。

そして滯の叫び声に気付いたであろう、唯と律も凄まじい速さで海から上がる。

一瞬のうちに全員が横一列に並ぶ。

「こ、浩介。早かったんだな」

「ああ。皆が待っていると思って特殊ルートを通ってきたんだ」
誤魔化すように話題を振る。

「まったくびつくりだよ。まさか人が荷物を取っている間に自分たちはフルスロットルで遊んでいるんだもん」

「すまなかつた! 海を見たら衝動が抑えられなかったのじゃ!」

律よ、それは誰の真似だろうか？

そして一体どこの登山家だ？

「別に、僕は怒ってないよ。ただ、腹が立ちすぎて唯の服が入ったこの風呂敷を海の方に放り投げたくなつたけど」

「そ、それだけは勘弁してくださいませえ」

「僕が自主的に名乗り出たから、正座して待つてるとは言わないし、遊ぶとしてもトランプゲームぐらいしていても結構。ただ………これは少々限度というのを超えていないか？」

目を閉じて、静かに言葉を紡いでいく。

「……………それで、何か言うべき言葉はないのかな？」

「……………ごめんなさい!!」

僕の問いかけに、全員が頭を下げて謝ってきた。

「さてと、僕も着替えるか〜」

「つて、お前も遊ぶんかい!？」

僕の言葉に、律がツッコむ。

僕だって海水浴くらいはしたいんだよ。

そう心の中で言い訳をしながら、僕は別荘の方へと向かうのであった。

第16話 初日

あの後、荷物を置いておき水着に着替えた僕は唯たちのいる浜辺の方へと向かう。

「悪い、遅れた！」

「いや、いい……って何故にマント!？」

僕の姿を見た律が顔をひきつらせる。

僕は水着の上から黒のマントを羽織っている。

「家の方に」 見ず知らずの者に素肌を晒してはならない」といふしきりがあるから」

「何じゃその嘘のようなしきりは？」

「まるでものすごい古い大金持ちの家みたい」

僕の家には伝わるしきりや聞いた律は呆れたような表情をしながら聞いてくる。

それと唯、「古い」じゃなくて「伝統のある家」みたいと言ってくれ。

まあ、ある意味正しいんだけど。

「何でも家の風紀のような物を損ねないようにするためのものらしい。守っている人はそんなにいないけど」

妹がその典型例だ。

まさか、近くの湖に泳ぎに行こうとした際に家で水着に着替えて湖に向かうとは思わなかった。

「だったら、問題はないよ！ さあ、そのマントを脱ごう！」

「手を怪しげに動かしながら近寄るな」

目を輝かせてすり寄る唯の頭に手を当てて近寄れないようにする。

「でも浩介」

「何だ？」

唯の頭に手を当てたまま声をかけてくる滯の方に顔を向ける。

「マントを着たまま海に入る気？ それに、脱いだら素肌を晒すんだから、意味がないんじゃないか」

「あ、そうか」

漚の指摘に僕はようやく問題点に気づけた。

今まで気づけなかった僕は一体……

僕はマントを脱いだ。

「うお、マツチヨ！」

「うへえ、この上腕二頭筋生で始めて見た」

そう言いながら僕の体を観察する二人の少女。

名前は伏せておこう。

僕はマントを浜辺に敷かれたシートの上に置いた。

「さあ、遊ぶぞー！」

「「おー!!」」

律の呼び掛けに唯たちが応え、海水浴は再開となった。

途中唯をベースにして砂に動物の絵を描いてそれを写真に収めたり、ムギがとてつもなく精巧な城の砂山を作ったり、唯と律と僕の中で早く泳げるのは誰かという勝負をしたりした。

ちなみに結果はハンディキャップ（僕だけ泳ぐ距離は二人の倍という物）があつたが僕の勝利だ。

そんなこんなで、僕たちは海水浴を満喫した。

「ふう、楽しんだ〜」

気が付けば既に夕刻。

海面に優日焼けが反射して絶景となっている中、律と唯はやりきつた様子で砂浜に寝そべる。

そんな二人に近づく漚の手には、いつの間に取りつてきたのか大きなスイカがあつた。

「せっかく海に来たんだからいっぱい遊ばないとここまで来た意味が……」

「おい」

何となくここに来た種子を忘れていたような滯の言葉に、僕は思わず突っ込みを入れてしまった。

「あーっ！ 練習!!」

「忘れてたのかよ」

「ま、まったく。律が遊ぼうとかいうからだぞ」

律のツツコミに、滯は弱々しく反論する。

「僕の記憶違いでなければ、一番楽しそうに遊んでいたのは滯だと思うんだが」

「っーん」

完全に顔をそらした。

(これで本当に大丈夫なのだろうか?)

心の中で思わずそう呟いてしまった。

夕食を終え、僕たちは楽器のセッティングを始めた。
のだが……

「はあ、お腹いっぱい、夢いっぱい」

「おやすみ」

律と唯の二人は先ほどから床に寝そべってセッティングをするそぶりを見せていなかった。

「始めるぞー!」

「二人とも起きて」

二人の呼びかけにも、律たちは動く素振りすら見せない。

見かねた滯は僕たちに退くように言うと言うとベース用のアンプを移動させる。

そこは二人の耳元だった。

(まさか)

僕は、彼女が何をしようとしているのかの見当がついた。

案の定、漣はベースの弦を思いっきりはじく。それによつてアンプから凄まじい銃手に音が鳴り響く。

「うう」

その容赦ない爆音に、二人は起きざるを得なかった。

ようやく起き上がった二人は、ギターのつていんぐを始めるのだが、体がふらついていた。

律に限っては今にも後ろに倒れそうなほどに。

「なあ、今日はやめにしないか?」

「練習のためにここに来たの!」

律の提案に漣が切り捨てた。

それでも渋っている律に漣は

「そう言えば、最近ちよつと太ったんじゃないか?」

と、黒い笑みを浮かべながら言い放った。

「特にー、お腹の所とか。最近ドラムを叩いてないからかな」

「うぎやああ!!」

漣の容赦ない言葉の矢が律を動かした。

凄まじい勢いでビートを刻む律に、漣はほくそ笑む。

(漣、策士だ。そしてとてつもなく腹黒い)

漣の所業に思わず拍手をしたくなった。

「もうギター持てないよ」

「ええ!」

今度は唯の番だった。

ギターを置くと地面に座り込んでしまった。

「だって、このギター重いんだもん」

「言った! 重いと言った!!」

唯の言葉に、僕は大きな声でツッコむ。

ギター選びの際に僕は重量が有ると言っていた。

それでも彼女はこのギターに決めたのだ。

(そう言えば、どうしてこのギターにしたんだろう?)

フィーリングならば、明確な理由はないだろうが、無性に気になった。

「誰だ——このギターを買うって言ったのは——」
「お前だッ!!」

唯の叫びに、滯と声が合ってしまった。

そして結局、最初に戻る。

地面を転がる二人の姿は、まさに滑稽そのものであった。

「学園祭はどうするんだよ」

「だから、メイド喫茶でいいって言ったじゃん」

「ええ、お化け屋敷がいいよ」

「その次元から離れろよ」

滯の問いかけに少し前の論争を繰り広げようとする二人に、僕は飽きれ交じりに言う。

「唯に浩介。お前たちは何もわかっていない。滯を試してみろ」

「な、何？」

いきなり自分の方に話が向いてきたため、滯は目を丸くする。

「滯ほどメイド服姿が似合う奴はいないぞ」

その律の言葉に、僕は想像してみた。

黒のストッキングに、純白のエプロン。

止めに頭にはメイドカチューシャを付けた滯の姿

『萌え萌え、キュン』

と、何やらポーズをとりながら言う滯の姿は確かに

「とか言ったりしてなー!」

「可愛いかも」

「確かに、似合いそうだ」

皆の意見が一致した。

というより、あのセリフは律が吹き込んだのか。

「なんてなじ——」

その次の瞬間、一瞬ではあるがドラムの上に置かれたバチが宙を舞った。

それは顔を真っ赤にした滯の鉄槌によるものだが、僕は本当の恐ろしさを狭間見たのかもしれない。

練習にならないと悟ったのか、冷静になった滯は唯と凄まじい回復力で復帰した律の説得に圧されるがまま、外で休憩することになった。

少ししたら練習すると告げる滯の手にはスイカがあった。

それに対して律が『分かっている』と応えるが、それもどこか怪しくなってきた。

(本当に練習するのか?)

そう疑問が浮かんできたところで、

「せーの！」

二人の声と共に目の前に光の波が現れた。

「それじゃあ、最後の一曲。行くぜー！」

そう言つて唯はギターのピックをストロークさせる。

音は何も聞こえない。

声を出すことも、動くこともできなかった。

視線すらも動かせない。

僕はまるで石のように目の前のライブもどきを見ていた。

心が疼くのを感じた。

それは嫉妬でもなく、怒りでもない。

(楽しそう)

彼女の心から演奏を楽しんでいる、幻想的な光景に対する驚きのようなものだった。

まるで、彼女が俺の知らない平沢唯に……プロのギタリストになったような錯覚さえも感じさせる。

「オーイエ、オーイエー！」

その幻想的な時間もあっという間に終わりを告げた。

聞こえるのはただはしゃいでいる、いつもの唯の声だった。

「あ、あれもう終わり？」

「予算の問題だな」

あつという間の出来事に、唯が名残惜しそうな声を上げると、申し訳なさそうな表情で律が答えた。

「でも、武道館ではもつと派手にババババーンと！」

「武道館？」

「おいおい、目標はそこだって決めただろ。な？」

なにそれと言いたげな唯に、律は呆れたような表情で答えると、こつちに聞いてきた。

確かに、彼女たちは武道館公演を目標にしていた。

だが

(きつと武道館公演の時、僕は……)

出られない。

その言葉を掻き消す。

今の僕は軽音部の一員だ。

ならば、武道館だろうと何だろうと出てやろうじやないか。

例えそれが、後に問題になったとしても。

そんな思いを秘めながら、僕は立ち上がり三人の元へと足を進める。

「武道館目指すなら、このくらいは演奏できるようにならなきゃな」

そんな時に流されたのは、メタル風の曲だった。

簡単に聞けばギターが前に出過ぎている……目立ちすぎているようにも感じられるが、よく聞けば周りの音を引き立てている鞭のよきな役割を果たしている。

それでいてチョーキングなどの演奏技法を取り入れていたりしている。

ドラムも、そんなギターに埋もれないように必死にアピールしている。

つまり、何を言いたいのかというところ

「へえ、うまいなー」

律の漏らした感想であった。

「あれ？ でもこの曲」

演奏を聴いている唯が、首をかしげる
僕も微妙に引つかかっていた。

この曲の演奏技法が前に聞いた演奏と酷似しているような……
そんな僕の考えはすぐさま頭の片隅へと追いやられることになる。

『お前らが来るのを待っていた』

「「「「……………」」」」

テープから流れるまるでこの世の恨みを込めたかのようなどす黒い声に時間が止まったような気がした。

『死ネーッツ!!』

その叫び声に、僕たちは思わず耳を押さえてしまった。

叫び声に遅れてテープが止まる音が聞こえた。

どうやら流している面のテープが終わったようだ。

ふと、前方を見るとそこには……

「聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない」

耳を押さえて蹲り、まるで呪文のようにつぶやく滯の姿があった。

「いやだー！ やだよー!!」

そんな滯の耳元で律が何かを言ったのか、滯は這いつくばるようにして、テラスの上になると膝を抱え込んでしまった。

律が何を言ったのかは大体的見当がついていた。

「律ちゃん」

「やりすぎだよー」

「謝れ」

ムギと唯に続いて、僕は謝るように諭した。

「わ、悪かったな、滯」

「大丈夫だよ滯ちゃん。お化けはいないよー」

謝る律に続いて唯が安心させるように滯に言うと言いつくばるとこつちを見上げて

「本当?」

と、上目づかいで聞いてきた。

そのしぐさにまるで胸を打ちぬかれたような衝撃が走る。

「「萌え萌え、キュン」」

だからと言って二人のようなことはしないが。

未だにぐずっている滯を宥めつつ、僕たちは練習をするスタジオへと戻っていた。

唯がギターのセッティングをする中、律が謝っているが「むう」

顔をそらして頬を膨らませる。

「餓鬼か」

そんな彼女の様子に思わずそう呟いてしまった。

「ねえ、唯ちゃん。本当にさっきの曲……」

「うん！ 見てて」

ムギの心配そうな問いかけに返事をする、唯は徐にギターのピツクをストロークさせる。

そしてながれる音は、間違いなくあのテープのギターの音色と似ていた。

「おいおい……」

思わず口から声が漏れてしまった。

まだギターに触れて数か月しか経っていないにも拘らず、一度聞いた曲のギターの音色をほぼ完全にコピーしたのだ。

勿論、まだたどたどしくはあるし、音に振り回されている感じもある。

だが、それを差し引いても彼女には才能があるのは明らかだ。

(絶対音感か。これは将来、すごいギタリストになるぞ)

演奏の技法やそれ以外の諸問題をクリアすれば、彼女はそこらじゅうのバンドから引っ張りだこになるだろう。

それは予想ではなく確信でもあった。

「はい、どうっ？」

「すごい。完璧」

「ああ、まったくだ」

感想を求める唯に僕とムギは拍手を送りながら答えた。

「でも、みよくんっていう所が分からなくて」

「みよーん？」

「それって、チョーキングの事じゃないか？」

彼女の独特な表現に、律が首を傾げる中、漣が立ち上がりながら答えた。

「うぐツ!？」

「チョーキング？」

「違う」

僕の首を腕で占めながら聞いてくる律に漣が答える。

というより、苦しい。

「はな、せっ!!」

軽く力を込めて律の腕から逃れる。

ちなみに、チョーキングとは、音が鳴っている際にギターの弦を引つ張る演奏技法だ。

すると、唯でいう所の“みよくん”という感じに音の高さが変わる。

ビブラートとよく間違えられやすい技法だが、ビブラートは弦を揺らすのに対し、チョーキングは弦を引つ張るだけだ。

チョーキング後、いかに次のコードへとスムーズに移るか。

そして、何よりチョーキングをうまく出来るかがこの演奏技法の要となる。

「こうやって、こう」

漣にやり方を教わった唯は試しにとばかりにピックを振り下ろしながら、弦を引つ張る。

すると、音の高さが変わった。

「そうそう」

試しにやった唯に、漣が頷くがその唯は俯くと肩を震わせる。

そして再びチョーキングをやり始めるのだが、今度はギターの弦を

何度も引つ張ると顔をあげて笑い始めた。

「一体、そののどくに笑う要素が？」

「これ何か変」

僕の慰問の声に答えることなく、そう口にする唯。

「え？ 変って……」

「どうやら壺だったみたいだな」

「フジツボ!？」

その様子を見ていた律の言葉に、今度は滯が反応した。

そして再び耳を押さえて蹲ってしまった。

「どうして!?! ねえ、どうして?..」

一体どうすれば〃ツボ〃から〃フジツボ〃になるのだろうか？

結局、この日練習は出来なかった。

お風呂に入って寝ようということになったが、ここで問題が発生した。

それは僕がいるのだから当然ではあるのだが。

「それじゃ、私たちお風呂に入るけど」

「絶対に、ぜーったい! 覗くなよ!」

「大丈夫だよー、浩君は除くような人じゃないもん」

そう、お風呂だ。

ムギの話によれば、ここには露天風呂があるとのこと。

ただ、そこ一か所しかないとたため女子が入っていれば男である僕は外で待機となる。

つまり、覗かれないかという女子の不安は当然でもあった。

でも唯、その無条件の信頼はとてつもなくつらい。

それは置いておき、僕はスタジオの方で待つことになった。

「そうだ、ムギ」

「何ですか？ 高月君」

「前に頼んでおいた、オリジナル曲は出来てる？」

首を傾げて聞き返してくるムギに、僕は用件を告げる。

「その音声データとかがあれば貸してほしいんだ。待つてる間に肉付けとかするから」

「うん、良いわよ」

僕の頼みに、彼女は快く了承すると、荷物の中から携帯音楽プレイヤーを取り出した。

そして僕に簡単な操作方法を説明してくれた。

「だ、大丈夫なのか？」

「肉付けやアレンジは、割と得意だから心配しないで。さあ、集中の妨げになるからとつととお風呂に入ってこい」

律の心配そうな問いに答えると、四人を追い出した。

誰もいないスタジオで、僕は

「よし、始めるか」

イヤホンを耳に装着して、曲を再生する。

最初に流れてきたのは、『スピード感のある大人っぽい感じの曲』というかなりアバウトなコンセプトのもとに完成した曲のキーボードパートだった。

まずは、曲を通して聞きこむ。

(この曲のリズムコールは……バチ同士を叩かせた後にドラムのフィルとかを入れてみるか)

そして聞き込んだ曲からコンセプトを練り、それを白紙の譜面に書き込んでいく。

(ドラムは一定のテンポで所々にアクセントを入れて行くか)

一度決めれば簡単だ。

1番さえ埋めれば2番も同じ感じだ。

同じ要領で2番を埋めたところで、間奏の箇所になった。

もう一度間奏の箇所の曲を聴く。

キーボードの音から、この部分に合う構成を考えて行く。

(最初はドラムはミュートにして、その後は1番と同じリズムテンポ

の進行)

後は終わりの箇所なので、ここも1番で使った音で対応させる。
こうしてドラムの肉付けは終わった。

「次はベースか」

ベースは一種の鬼門だ。

何せ、別の音が埋もれてはいけないのだ。

かと言って前に出過ぎてはいけない。

縁の下の力持ちというのが理想的なポジションだ。

そのバランスが取り辛いのが、ベースでもある。

(ベースはとにかく小刻みなコード進行を進めるか)

その方針の元、ベースパートの肉付けを進めて行く。

「ん？ もう上がったか」

外の方から近づく人の気配に、僕は手を止める。

それから間もなくして、上がったと告げに濡たちがやってくるの

で、僕はお風呂に入ることにした。

「想像してはいたが、本当にすごいな」

お風呂に入った感想がそれだった。

まさに豪邸にあるような露天風呂だった。

あれがプールだと言っても誰も疑わないだろう。

お風呂から上がり、みんなは一つの部屋で寝ることになり、僕は別の部屋で一人寝るのだが、どうにも落ち着かない。

「……………広すぎるのもあれだな」

別に実家の自室に比べればこじんまりとしている。

だが、それでも何故か感覚的に落ち着かない。

なので僕はロビーの方で寝ることにした。

幸い季節は夏。

毛布無しでも風邪を引くことはないだろう。

(そうだ、せっかくだし肉付け作業をするか)

そう思い立った僕は、飲み物などで散らかったテーブルの上を簡単に整理すると、書きかけの譜面とムギに借りっぱなしの携帯音楽プレーヤーを取り出す。

そこで僕はある問題に直面した。

「ちよつと暗くて見えにくいな」

月明かりがあるとはいえ、少しばかり見づらいことだった。

とは言え、僕は魔族。

普通なら、暗闇だろうが昼間と同じようにくつきりと見える。

だが、それをしようとすると魔族特有の赤い目が輝きを発してしまい、ここを通りかかる皆に怖い思いをさせる。

特に濡がそれを見たら、気絶どころでは済まないような気がする。

「仕方ない。クリエイトに照らしてもらおうか」

残されたのは、僕の相棒でもあるクリエイト自身に光を纏わせる方法だった。

「クリエイト、頼む」

僕は首にかけている先端に真珠がついているネックレスを外しながらお願いすると、ネックレス……クリエイトは光を纏って周囲を照らしてくれた。

ネックレスの形をしたクリエイトはテーブルの少し上のあたりに浮かんでいる。

「ありがとう」

僕はクリエイトにお礼を言うと、作業を始めた。

最初の一曲目のギターパートだ。

唯でも弾けるコードや技法を選択する必要があるわけだが、それが前に蓄積した音を破壊してはいけない。

あくまでも蓄積した音に乗せる感じにしなければいけないのだ。

それはかなりの難易度を誇る。

(よし、これでベースになる1番は完成した。あとは間奏だな)

最後の難題である間奏だ。

本来なら、ここらでギターの超絶な技法を取り入れたいのだが、それをやると唯がつぶれる。

なので、ここも簡単にしていく必要がある

(まあ、ここで分割するのもありだけど。それはもう少し後だな)

将来的には唯をリードにして、僕はリズムで行くつもりだが、今の状態では二人で同一コードを引いて行かなければいけない。

それほど演奏技術が低いということだ。

勿論、誰しもが通る道のため、練習を積んでいけば僕ぐらいのレベルになるだろうが。

「何をやっているの？ 浩君」

「ッ!？」

突然かけられた声に僕は心臓が止まりそうになった。

「ゆ、唯?!? どうして」

唯たちは確かに寝たはず。

寝静まった頃を見計らって作業を始めたのだから間違いない。

「ちよつとトイレに起きたから戻ろうとしたら灯りがあつたからなんだろうって思ってた」

「……………」

僕は頭を抱えなくなった。

今、僕は最悪な状況を迎えている。

「それにしても、この灯りすごいね。どうやって浮いてるの?」

「……………」

興味深げに観察する唯。

彼女はこれが“魔法によるもの”だと気付いてはいない。

だが、彼女は魔法を見てしまった。

魔法文化の無い世界で魔法を使っているのが第三者に見られた場合、その物の記憶を消去しなければいけないのだ。

それが、僕たち魔法使いに課せられた義務だ。

まさか、それを仲間には掛ける羽目になるとは。

「唯」

「なこ?」

「僕はお前の事を仲間だと思っている。何だかんだで同じ軽音部の部員何だし」

「私も、浩君の事を友達だつて思ってるよ」

屈託のない笑みを浮かべながら返してくれる。

その気持ちがともうれしくて、だからこそこれからしようとしていることに罪悪感を感じてしまう。

だが、それを僕は心の中から完全に消し去る。

「だから、あんたの記憶を封じさせて貰うよ」

「ふえ？」

僕の言葉に唯が理解するよりも早く

「クリエイト！」

頭上に浮かぶクリエイトに声をかける。

それだけでクリエイトは僕が何をさせたいのかを判断して、その通りに実行する。

一瞬光の強さを増したそれは姿を一本の杖へと変える。

「え？ え!?!」

何が何だか理解できない唯は目を丸くするだけだった。

その隙に僕は杖状になったクリエイトの先端を唯の頭に触れさせて

「リ・ベア・ラティア」

呪文を紡ぐ。

その次の瞬間、辺りはまばゆい閃光に包まれた。

「――」

「すまない、唯」

謝罪の言葉を口にしながら、僕はクリエイトを元のネックレスに戻すとそれを首にかけておき、懐中電灯を手にする。

唯の意識がはつきりする前に、それをテーブルに置くと僕は唯に声をかける。

「それで唯」

「は、はい!?!」

突然呼ばれたことに驚いたのか声を上ずらせる。

「どうしてここにいるんだ？」

「どうして……あ、そうだ！ トイレに行つた帰りにここから唸り声が聞こえたから気になつてきたんだつた！」

僕の問いかけに答える彼女の言葉は、前のはとほ変わっていた。

それは彼女の記憶を操作したためだ。

具体的に言えば、明かりを見た記憶全てを封印して別の記憶にすり替えたのだ。

それが“唸り声”だった。

記憶消去は後始末が面倒だ。

何せ、数分間の記憶がない状態というのは魔法が主流になつていない所ではかなりの問題となる。

大騒ぎされて病院で見てもらうという騒ぎにもなりかねないのだ。

そのため、記憶の封印にしたのだ。

封印ならば修正する箇所が比較的にならないので簡単なのだ。

だが、ちよつとした拍子に記憶が戻るといふ危険性ははらんでいるのだが。

「唸り声とは失礼な。ちよつと構成に悩んでいただけだ」

「何をやってるのー？」

そういつてテーブルの上の方に置かれている紙を手にする。

「……………これ何？」

「まあ、そう来るだろうと思つたよ」

紙を見た唯はしばし固まると笑いながら聞いてきた。

「それは楽譜。読み方とかを説明すると夜が明けるからまた明日な」

「むう、なんだか馬鹿にされた気がする」

「はいはい、早く寝ろ」

僕は頬を膨らませる唯を軽くあしらう。

「お休み、浩君」

「ああ、お休み」

部屋の方に向かっていく唯の後姿を見送りながら、肉付け作業をもう一度始める。

「よし、こんなものか」

二曲分の肉付け作業を終わらせた僕は、腕を伸ばした。

音楽プレーヤーに入っていたもう一曲のオリジナル曲の音源を聞いた僕は、それに対する肉付け作業も終わらせた。

もう一つは初心者・中級者向けをコンセプトに肉付けした。簡単でいて、なおかつ奥が深い感じだ。

最初は唯のギターから始まり、次は僕や滯にムギに律の演奏が始まる。

この曲は終始一貫して難易度的には低く、初心者にとって入りやすい曲と言っても良い。

「さすがに二つのバージョンはやりすぎた」

二つのオリジナル曲にはそれぞれもう一つのバージョンの譜面を作っている。

ギターパートを中心に、音の幅を増やしさらにコード進行の難易度を引き上げた物だ。

これは僕を合わせた皆の技法が向上した際に、お披露目することにしてしよう。

「さて、寝るか」

テーブルの上に置いていた楽譜を片づけてソファに横たわる。

そして目を閉じると、意識は一気に闇へと落ちて行くのであった。

第17話 二日目

僕は夢を見ていた。

そう、それはとても懐かしく、そしてすべての始まりともなった出来事だ。

—9年前—

僕、高月浩介はいつものように人任務を終え、魔法連盟へと帰還していた。

任務の内容は我が国を攻撃しようとするテロ組織の鎮圧。

要求内容は莫大なお金をよこせという物であった。

もし反応がなければ我が国内で無差別テロを起こすという脅しまでくわえていた。

勿論、テロに屈するわけもなくテロ組織の鎮圧と相成ったわけだが、どうせ鎮圧したところで恐怖は取り除けないことは明白。

そう思った僕は、無許可で組織の者を一人残らず始末した。

「失礼します。法務大臣、高月です」

『入りたまえ』

ある部屋のドアをノックし、中から返事をもらった僕はドアを開けて中に入る。

そこはアンティーク調の家具が置かれている一室で、奥には社長椅子に腰かける黒髪の男の姿があった。

「何かご用で？ 連盟長」

「また無断で始末したようだな」

連盟長の咎めるような口調の問いに、僕はまたかと心の中のため息をつく。

また長い説教か、と思っていた。

「まあ、それはいいとして、お前に特務を与えよう」

「特務？」

連盟長の口から発せられた言葉に、僕は豆鉄砲に撃たれたように固まった。

「ああ。この世界に向かい魔法を封印してスポーツ以外の榮譽を上げろ」

「なツ!？」

連盟長の告げた特務に、僕は言葉が出なかった。

魔法を使わずに、スポーツ以外であげられる榮譽は限りがある。

しかも、榮譽を挙げられる保証もないのだ。

「そこは魔法文化0だ。くれぐれも魔法の事がばれることの無いようにしろ」

「……………左遷、ですか？」

僕の驚きを無視して説明する連盟長に、僕は問いかける。

「それはお前自身が良く分かっているはずだ。話は以上だ。下がれ」

有無も言わせないと言わんばかりの態度に、僕は連盟長室を後にすることしかできなかつた。

それが、僕がこの世界へとやって来るに至る記憶だ。

軽音部の強化合宿二日目は、とてつもなく騒がしかった。

「起きろー!!」

「ペプシ!」

一番最初に聞こえたのは、律の叫ぶ声。

そして顔中に走る痛み。

「律! やり過ぎだ!」

「大丈夫?」

滯と律ががやがやと言い合う中、ムギが心配そうに声をかけてくる。

とりあえず僕は大丈夫と告げて体を起こす。

外はすでに明るく、今が昼間であることを告げていた。

そして漂ってくる美味しそうなにおい。

「さあ、浩介も起きたことだし朝ご飯を食べようぜー」

「おー！」

右腕を上げながら律が告げると唯もそれに続いた。

(なるほど、早く朝食が食べたかったわけね)

たたき起こされた理由が分かった僕は、苦笑しながら席に着くのであった。

朝食を食べ終え、食器を洗い終わると僕を含めた全員がロビーのソ

ファーに腰かける。

「さて、今日の予定だが」

それを見計らい、律が真面目な表情で口を開いた。

「海で泳ぐぞー!!」

「おー!!!」

右腕を上げながら律が告げると、唯もそれに続く。

「こらこらー!!」

僕が口を開くよりも先に、漣が叫んだ。

「えー。だって昨日だけじゃ遊び足りないんだもん」

漣の言葉に、唯が反論した。

「練習のためにここに来たの！」

「そう言う漣は昨日は練習の事を忘れてたくせに」

「うぐっ!?!」

律の一言で、漣は何も言い返すことが出来なくなった。

確かに、漣は昨日練習のことをすっかり忘れていた。

そんな漣は、何とかしてと言わんばかりにこつちを見てきた。

(やれやれ、ここは僕が言うしかないか)

僕は心の中でため息をつく。

これからやることはDKとしてやってきたのと同じ方法だ。

今はもうそれをする必要はないが、昔は色々H&P内は酷かった。

その結果、僕は鬼軍曹の二つ名を与えられる羽目になるのだが。

(テーブルの上に危険な物はないな)

取りあえずテーブルの上を確認してみた。

もしコップなどがあればかなり危険なため、移動させないといけない。

だが、幸いなことにコップなどの危険な物はなかった。

(よし、やるか)

何をして遊ぶかという話に移りだしている様子をしり目に、僕は深呼吸をするとかなり加減をしてテーブルにこぶしを下ろした。

“ドスン”と重い音が響き渡り、今まで聞こえていた話し声は、ぴしやりとやんだ。

「昨日遊んでおいてまだ遊ぶと言うか！」

「「っ!」」

僕の怒号は思った以上に響き、全員が肩を震わせる。

「ふぎけるのも大概にしておけよ? ムギに無理を言つて別荘を借りてるのに、練習しないとか舐めてるだろ?」

「えっと、そんなに無理はしてないわよ」

引きつった笑顔を浮かべながら必死にフォローをしてくるムギに悪いと思いながら、僕は言葉を続ける。

「今日は朝から晩まで特訓だ。泣こうが喚こうが関係ない。抵抗するなら引きずってでも連れて行く。さあ、遊びたいという奴はいるか!!」

「り、りっちゃん！」

「お、おう! いぎ行かん! スタジオへ!!」

僕の一喝が功を奏したようで、二人は逃げるようにしてスタジオへと駆けて行く。

「はあ、大声で叫ぶのは疲れる」

「び、びっくりしたあ」

大きく息を吐き出しながらの僕の言葉に、漣がほっと胸をなでおろす。

「これくらいしないと、あの二人は絶対に練習をしない。さ、僕たちも行くよ。言い出しつpegが遅れたらシャレにならないし」

おやつ休憩の時間を設けてチーズケーキでも振舞おうと心の中で思いながら、僕はスタジオへと向かうのであった。

「まずは、カバー曲の『Leave me alone』から始めよう」
セッティングを終わらせて、いつでも演奏が出来る状態になったのを見計らって僕は、全員にそう切り出した。

「まずは、曲の方を聞いてほしい」

「いつの間持ってきたんだ？」

持ってきていたCDプレーヤーをスピーカーに接続させながら言うのと、律が呆れたような口調で聞いてきた。

それを無視して、僕はCDを再生する。

流れてきたのは『Leave me alone』のボーカルがないバージョンだ。

AメロBメロと行ってサビに入る。

そしてサビの後は間奏なのだが、サビの後に再びAメロに移行する。

「あれ？」

それに気づいた漣が声を漏らす。

Aメロに戻った後Bメロといきその後に行ったサビの後に間奏が入り、元の曲の状態に戻る。

「サビの後の間奏の前にAメロを取り入れたんだ。これで演奏時時間

は3分弱はあるはずだ」

「す、すい」

一体何に対してのすごいかはよくわからないが、好感触のようだ。「この曲は、ギターパートを僕と唯のツートップ……つまり同じコード進行で演奏する」

唯にでもわかりやすいように、独特の単語を出来るだけ噛み砕いて説明していく。

「これは、曲風を考慮するとボーカルは僕で行くけど、何か異論は？」
僕の問いかけに、全員が首を横に振った。

「それじゃ早速始めようか。唯、この曲のギター弾けそうか？」
「うーん。たぶん」

何とも頼りない返事だ。

唯には耳コピのスキルがある。

このスキルは非常に重宝する。

何せ、いちいち譜面におこす必要がないのだから。

「他三人には譜面を渡すから、それを見ながら演奏してみよう」
「うへえ」

譜面を見た律が眉をしかめる。

その様子を見ながら、僕はこの別荘に元々置かれていた譜面台を三人の前に置くとそれに譜面を置かせる。

「あれ、浩介は？」

「僕はもう覚えたから必要ない」

「お前は、何者だ！」

僕の答えに律が叫ぶ。

律の言葉に一瞬息が止まりそうになったのは秘密だ。

「さあ、演奏を始めよう。律、リズムコールを」

「お、おう！ 1, 2, 3, 4, 1, 2！」

二拍子多いコールの後に、演奏が始まる。

最初はムギのキーボードからだ。

それに続き、滯のベースと律のドラムが産声を上げる。
そしていよいよ僕たちの番だ。

「……………」

弾いて分かったのは音程がずれていること。

ギターの問題ではない。

奏者の問題だ。

唯の方を見ると、指を触れさせる弦の場所が微妙にずれていた。

さらにドラムとベースとキーボードの音がバラバラになる。

理由としては律のドラムが走りすぎたりゆっくりと歩き過ぎたりするために、テンポがめちやくちやだからだ。

漻のベースもどことなく力が弱く、他の音に埋もれてしまっている。

ムギも微妙に音の伸ばしが弱い。

僕自身も、微妙にはあるがテンポがキープできていないようにも感じた。

要するにみんながダメという事だ。

取りあえず通して弾くことにした。

本来は随所随所で止めるのがいいのだが、合宿の時間がないため一度通して弾いておいて曲の演奏（雰囲気とも言うが）に慣れさせる必要がある。

「ふう、終わった終わった」

弾き終えて、律が微妙な達成感を感じている中、僕は口を開いた。

「皆ダメダメだ。律はリズムがバラバラだし、漻のベースは弱いし唯は抑える場所違うし、ムギは伸ばしが弱い」

「うぐっ！」

「よ、容赦がないね」

僕の指摘に、全員が固まっていた。

とは言え、本当のことなのだから仕方がない。

「律、リズムキープをちゃんとやって。走りすぎたとしても、みんながそれに合わせるはずだから」

「おーけー！」

「滯は出来る限りベースを前に出して。音に埋もれたら曲自体がつぶれるから」

「わ、分かった」

「ムギは、音を止める感覚をもう少し遅めに。長すぎなければアドリブとして成り立つはずだから」

「分かったわ」

「唯は最初は僕のギターの弦を押さえている所をよく見て。二番も同じコードで行くからそこでうまく弾けるように努力」

「ラジャー！」

僕は全員に簡単に改善点とポイントを出していく。

「さあ、律。リズムコールを！」

「おう！ 1, 2, 3, 4, 1, 2！」

そして再び演奏が始まる。

二度目の演奏では、多少ばらつきはあったものの、音がゆっくりと揃い始めていた。

そして三回四回と回数を重ねるうちに……

「うん。今のはいい感じだ」

「ふう、長かった」

音の感覚も少しのずれに留まり、リズムキープも少しではあるが出来ていた。

唯のギターはまだ要練習だが、学園祭で披露するレベルには到達できた。

後は、毎日の練習で正確度を高めて行けばいいだろう。

「お、もう昼か」

ふとスタジオの壁につけられていた時計に目をやると、12時を過ぎていた。

「お腹すいたあ」

「何か食わせろ！」

律と唯が声を上げ出したため、僕たちは昼食にすることにした。

とは言え、律と唯が声を挙げなくても昼食をにしていたのだが。

「さて、ここからオリジナル曲だ」

「おおう！」

僕の宣言に、唯が拍手をする。

「これが、ムギが作った曲に肉付けをした物だ」

「うわあ、かなり本格的だな」

譜面を見た律が感想を漏らす。

「最初の律のリズムコールはバチを合わせる音だけ。そこからフィルで音楽が始まり、ベースとキーボードそしてギターがそれに続いている。この曲はスピードが重要だからそこに重点を——」

「よ、読めない」

「「「……………」」」

僕の説明を遮った唯の一言は、ここから先がどれだけ険しい山道かを知らせるのに十分だった。

「そんな唯にこれをやろう」

「これ、なあに？」

「僕お手製の、譜面の読み方と弦を押さえる場所の見方だ。とにかくそれを覚えて」

「ラジャー！」

敬礼する唯を見て、解説書を作っておいてよかったと内心ほっとしていた。

一つコードを覚えたら三つのコードを忘れる唯に、覚えろというのはかなり酷だ。

ただ、何度も叩き込めば感覚で鳴れていくはずだ。

要するに、机上理論ではなく実際にやった経験値で学ばせるということだ。

感覚で演奏が出来るようになれば、僕の解説書を使って譜面を読むこともできるようになるだろう。

……たぶん

譜面と解説書を見比べながら譜面を読んでいる唯をしり目に、僕は曲についての説明を続けた。

「よおし、読めた〜！」

「お、速かったな」

説明を終えるのと同時に、唯も譜面を読み切ったようだ。

「これもギターパートは唯と僕のツートップ。1番と2番はほぼ同じコード進行だから、さっきと同じ要領で自分の物にして行くんだ」

「了解です！ 師匠」

「……………」

何故師匠？

唯の返事に首を傾げるのを必死に堪える。

とりあえず、唯には僕が教えて行つた方が良さそうだ。

そんな事を心の中で思っていた。

「ああ、このケーキが身に染みるう」

「何か、大丈夫か？」

テーブルに突っ伏しながらチーズケーキをほおぼる律と唯の姿に、思わずそう聞いてしまった。

「でも、二、三回練習したただけであそこまで形になるなんて思ってもいなかったよ」

驚きなのは、通しで三回ほど弾いただけで、そこそこ形になった事だった。

勿論通しで弾き終わった後に、色々とレクチャーはしていたのだが、それにしてもかなり上達が早かった。

「それは師匠の教えの良さどすな〜」

「師匠はやめい」

唯の“師匠”という言葉に、僕はきつぱりと言う。

僕は“師匠”とか人の模範になるようなタイプではない。

どっちかというところと反面教師がいいところだ。

「でも、浩介の教え方はとてもうまくいったぞ」

「ええ。私も色々勉強になりました」

澁とムギまでもが加わり、僕はばつが悪くなり天井を見上げた。

「お、照れておりますな」

「照れてますわね」

そんな僕に唯と律がからかうように言ってきた。

きつとその表情はニや付いているだろう。

「さて、もうひと頑張りだ。まだオリジナル曲は残ってるんだから」

「「おうー」」

僕はごまかすように切りだして、再び練習を始めた。

結局この日、オリジナルを含めた三曲を通して演奏し、なんとか形になった。

とはいえ、まだ誰かに聞かせられないレベルではあるが。

第18話 合宿の終わりと写真

二泊三日の合宿も終われば一瞬のことにも感じられた。

二日間の強化合宿（とは言え、前半は遊びに費やされたが）で、オリジナルを含めた三曲の骨格は完成した。

後はどうやって人に聞かせられる最低限のレベルまで持って行くかということになる。

これに関してはひたすら練習あるのみだ。

……してくれるか否かは別としてだが。

まだ問題は山積みだ。

例えば、オリジナルの曲名はどうするかとか、歌詞はどうするかとか、ヴォーカルはどうするかとか。

しかも一番問題なのは、まだこの問題を解決出来る所まで行っていない所だったりもする。

（何を焦ってるんだ、僕は）

無意識にあせりの感情が出ていた自分に慄を飛ばす。

焦っても仕方がないのだ。

こういうことは落ち着いてやることに越したことがない。

ただでさえ僕自身に大きな問題を抱えているのだ。

焦ってボロを出すのは非常によろしくない。

そんなこんなではあるが、今日は帰る日。

という事で、別荘の掃除をすることとなった。

特に散らかっていたロビーの清掃も終えて、全員も荷物をまとめて帰り支度は完了したのだが、

「唯、忘れ物はないか？」

「ないよー」

「浩介、一体何回聞くんだ。気持ちは分かるけど」

本日19回目の問いかけに、律は呆れた表情を浮かべながら言ってきた。

また忘れ物で取りに戻るのはごめんだ。

「それじゃ、出発〜！」

「おう〜！」

律の言葉に続いて唯とムギが威勢よく片手を上げながら答える。

(ホントに賑やかな奴らだ)

そんな三人を僕は肩をすくませながら見ていた。

「浩介、行くぞー」

「あ、待ってよ！」

濡の声に気付くと、四人は少し先まで進んでいた。

というより、声かけろよ。

そんなこんなで、合宿は無事に終わりを告げるのであった。

「よし、これでいいだろ」

その日の夜、荷物の整理を終えた僕は、リビングのソファアーに座り込みながら一息つく。

整理とは言っても明日洗濯する洋服を出したり、着替えたり等々なのだが。

「さて、お茶でも飲んで寝るか」

時計を見ればもういい時間だったので、僕はお茶を淹れようと今まで座っていたソファアーから立ち上がった時だった。

「ん？」

突然の視界の揺れに、最初は立ちくらみとも思ったがそれは違った。

揺れは徐々に激しくなり周りの食器棚も激しく音を立てていた。

「地震!？」

ここに来てから何度も体験した地震に、僕は冷静にテーブルの下に避難する。

魔法を使うというのもあるが、防御関連は僕の苦手分野。

強固な障壁は出来てもせいぜい5、6秒が限度だ。

それはともかく、そこそこ強い揺れではあったが、それも10秒程度で収まった。

「ふう」

それを確認した僕は、息を吐き出した。

そして身を隠していたテーブルから這い出ると、テレビをつけて地震速報の確認をした。

「震度3か」

それほど大きな揺れではなかったので、2か3だろと思っていた僕の予想は当たっていたようだ。

津波の心配もないようなので、僕はテレビの電源を落とした。

「やてと……」

テレビを消した僕は、もう一度周囲を見渡す。

そこには先ほど片づけたばかりの荷物や、メモ帳などが散らばっていた。

さらには食器も数枚割れていた。

「もうひと頑張りだな」

そして僕の第二の格闘が始まった。

まずは危険な食器の処理。

食器を拾い、それを用意しておいたゴミ袋に入れて行く。

(破片は朝になったら掃除機で吸い込むか)

そう決めた僕は、物置部屋にしまっておいた小さめのカーペットを取りに行く。

そのカーペットを食器が割れたところを中心に敷いていく。

「これで朝までの応急処置になるだろ」

掃除する箇所が増えたような気もしなくはないが、ガラスの破片の対処は十分だ。

後は、各所に散らばった紙類だ。

元の場所に戻していく作業は、割と早く終わらせることが出来た。

「よし、これで終わりー」

時計を見れば草木も眠る丑三つ時を超えていた。

本当によく頑張ったと自分でも思う。

「さあ、今度こそ――」

寝るその言葉はガシャーンと響き渡る大きな落下音に遮られた。無性に嫌な予感がした僕は、音の発生源でもある調理器具を入れる棚の方を見た。

「……………」

そこに広がっていたのは、まるで狙っていましたがと言わんばかりに中敷きが前方に傾いて（というよりは落ちていると言った方が最適だろう）いる光景だった。

しかも下には調理器具がバラバラに散らばっている始末だ。

「負けない、絶対に負けないぞ！」

僕の負けられない戦いがいま幕を開けた。

それから数日後。

「はーいー」

来訪者を告げるチャイムに、僕は玄関先までかけて行くとドアのスコップから来訪者を確認する。

（律か。そう言えば、写真が出来上がったとか言ってたっけ）

来訪の理由を思い出した僕は、施錠を解除するとドアを開けて来訪者を迎え入れる。

「悪い、待たせた」

「いえいえー」

ドアを開けて謝る僕に、律は軽く応える。

「はい、写真」

「おおー。わざわざありがとうございます」

僕は律から写真が収められた封筒を受け取る。

「そう言えば浩介の家ってはじめにくるけど、広いな」

「物がないだけだよ。それと恥ずかしいからあまりきよろきよろ見な

いで」

周囲をまじまじと観察しながら家の事を言う律に、僕は苦笑を浮かべながら止める。

「せっかくだしお茶でも——」

どうかと勧めようとした僕の言葉を遮るのは、数日前に聞いた物が落ちる音だった。

「な、何事!？」

「合宿から帰った夜地震があっただろ?」

「あー、そう言えばあつたな。あの時はびっくりしちやつて、お風呂から逃げ出したよ」

「……………」

僕の問いにその日の事を思い出した律が答えるが、最後のは確実にトラップだろう。

「その時に、棚の大が壊れたようで載せてあつた物が落下したんだよ。直したんだけど、どうやら留め具の方にガタがきているようだ」

「無視ですかい」

(やっぱりトラップだったか)

肩を落とす律の姿を見て、僕はトラップを踏まなくてよかったと胸をなでおろした。

「ということで、悪いんだけどお茶はまた別の機会という事でいい?」

「まあ、別にお茶が目当てで来たわけじゃないし。手伝おつか?」

「いや、大丈夫。僕一人で十分だ。申し訳ない」

律の申し出を断ると、律は心配そうな表情を浮かべると、そのまま去って行った。

「さて、直すか」

僕は今頃広がつているであろう惨状にげんなりしそうになるのを堪え、リビングの方に向かうのであつた。

★★★★★

秋山家、玄関。

そこには合宿の際の写真を届けに来た律とそれを受け取る滯の姿があった。

その写真に紛れ込まれていた“恥ずかしい写真”で一悶着があったのはご愛嬌だ。

「あ、やっべ」

「ど、どうした？」

ポーチの中を確認した律が、若干引き攣った表情を浮かべているのを見た滯が不安そうに尋ねる。

「ムギに渡す写真を間違つて浩介に渡した」

「それだったら、別に……………まさか」

律の言葉に、胸を撫で下ろそうとした滯は思わず固まった。

「滯の恥ずかし写真を入れておい——グヘエ!？」

「す、ぐ、に、取り戻す、ぞ!」

律がすべて言い切るよりも早く、襟首をつかむと凄まじい速度で秋山家を飛び出した。

「い、家の場所、知ってるのかよ」

そんな律の言葉も虚しく、滯は凄まじい速度で書けるのであった。

……………襟首をつかんだまま。

★★★★★

「ふう、なんとかなった」

壊れた棚と格闘すること数十分、ようやく直った棚に、額の汗をぬぐう仕草をしながら一息ついた。

とはいえ留め具の方は完全にダメなようで、すぐにでも外れてしまいそうな状態だ。

取りあえず応急処置として、棚の台を固定しておくことで対処した。

これで少しの間は大丈夫だろう。

「魔法を使えば楽なのだろうけど、これはこれでいいか」

そう呟きながら、先ほど律にもらった写真を見ようと思ひ、僕はお

茶を入れて椅子に座るとテーブルに置いておいた写真の封筒に手を伸ばす。

封を開けて中に入っている写真を取り出すと、それに目を通した。

「おお、これは中々」

最初に入っていたのは海を写した写真。

次は海ではしやく律たちの姿。

「ん？」

そんな中、一枚の写真に眉をひそめた。

それは、他の写真とは全く別の写真だった。

「ふっ!!」

それが何なのかを認識するよりも早く、僕はその写真をゴミ箱に放り投げた。

「あの野郎、なんちゆう物を混ぜてやがる」

今度会ったら折檻しようかと思っただが、それをしたら見たということになるので諦めた。

「ん？ 今度は誰だ」

そんな中、鳴り響く来訪者を告げるチャイムに、僕は玄関まで向かう。

「な、なんというせつかちな押し方を」

向かうまでに50回を超える勢いで鳴り響き続けるチャイムに、恐ろしさを感じながら玄関先に向かうと、スコープで相手を確認する。

(こ、こわ!?)

その相手の顔を見た僕は、その表情に思わず数歩後ずさりそうになったが、このままだとドアまでぶち破りそうな勢いだったため、鍵を開けてドアを開けた。

「ど、どうし——ぐはっ!？」

「浩介！ あれはどうした、あれはどうした、あれはどうした！」

開口一番の襟首を持ち上げて、体を揺らしながら問い詰める滯に、僕は応えることはできない。

いや、息が出来ないと言った方が正確だろう。

(そう考えられる僕も、ものすごく冷静だよな)

「み、漕、とにかく落ち着け、な。答える前に浩介が落ちる」

そんな漕に、ある意味元凶ともなったであろう人物が止めてくれた。

「あ、ご、ごめん」

律の言葉に正気を取り戻したのか、漕は慌てて手を放すと謝ってきた。

僕はそれに大きく深呼吸をしながら「大丈夫」と、片手を上げながら答えた。

「取りあえず上がって。お茶でも出すから」

「お、おう」

「お、お邪魔します」

僕は取り合えず二人をリビングに通すことにした。

「ひ、広い」

「それにきれいだし」

席についてあたりをきよろきよろ見回しながら呟く二人の様子をしり目に、僕は冷たいお茶をコップに入れるとそれを二人の前に置く。

というより、二人はどんな家だと思いきや浮かべたんだろうか？

ちなみに片方にはある細工をしている。

「はい、お茶」

「あ、ありがとうございます」

「サンキュー」

お礼を言った二人は、コップを傾けてお茶を飲み始める。

「ッ!? ゲホッゲホ!」

「り、律?!」

突然むせだした律に、漕が慌てながら声をかける。

「な、何を混ぜだ!」

「ハバネロ」

「はぼっ!」

混ぜた者の正体を知った漕が声を上ずらせる。

僕は律のお茶にだけ、ハバネロを混ぜたのだ。

「ぐ、ぐごろずぎが！」

「変な写真を混ぜやがった仕返した。まあ安心しろ。その程度では死なないし、少しすれば辛いのが無くなるはずだから」

「ッ!？」

地面にうずくまりながら抗議してくる律に言い返すと、今度は漣が反応した。

「ままま、まさか、みみみ見たのか?!」

「み、見てない。写真を見るよりも素早くゴミ箱に捨てたから回収しておいて」

「ホッ！」

僕の言葉に何の違和感も感じずに漣は胸をなでおろすと、僕の指差す方向にあるゴミ箱に写真を回収しに向かった。

「あ、あの、舌がひびれへふんでふが？」

「少しすれば治る。けど次はブーツジョロキア入りにするから、いたずらも限度をわきまえておけよー」

舌がしびれているのか、微妙に滑舌が悪い彼女にそう告げる。

こうして、強化合宿に伴う騒動は幕を閉じるのであった。

1年生編 『学園祭』

第19話 危機

夏の暑さもそろそろ陰りを見せるであろう8月下旬。

僕は練習のために、軽音部の部室を訪れていた。

「まさか、集合日を一日間違えるとは」

部活をする日を間違えたがために、部室には誰の姿もなかった。

「ん？ これは何だろう」

帰ろうかと思いいドアの方へと向かおうとした僕だったが、ふと机の上に置かれた緑色の本に目が留まった。

（そう言えば、この前も置いてあったよな）

前に部活をした日も置かれてあった緑色の本のようなものは、僕も若干気になっていたのだ。

（ちよつと見てみるか）

そう思った僕は、律がいつも座っている席を借りて緑色の本を見ることにした。

（これは卒業生たちの部活写真か）

どうやら卒業アルバムのように、吹奏楽部や運動系の部活の集合写真が貼られていたために、僕はそう結論付けた。

「あ、あった……………」

そんな中、軽音部と思わしき集合写真のページを見つけた僕は時間が止まったような錯覚を感じた。

その写真には数人の女子学生が写っていた。

いや、それなら問題は何もない。

まあ、恰好が派手な衣装だったり顔に度派手な化粧を施されていたりと、かなり昔のバンドのような風貌をしているのは、ある意味問題であったりはする。

だが、僕が今上げているのは、写真の下のほうに書かれた文字だ。

——『DEATH DEVIL 結成』

荻原さんのファンである、『DEATH DEVIL』とまったく

もって同じバンド名だった。

もちろん、ただの偶然という可能性もあるが、高校のバンドであることとガールズバンドだという二点が一致している以上、偶然では片づけられない。

(この人がキャサリンか)

調べた際にわかった、ギターを担当する女性の名前はキャサリンとクリステイナの二人名前。

もちろん、顔まではわからないが、おそらくは昔もこの音楽準備室を部室で使っていたのか、栗色の髪にやはり度派手なメイクを施してギターを持っている写真があったことや、なによりこの人だけが写っているが多いためバンドリーダー的な立ち位置であることも想像ができる。

よって、この人がキャサリンであると思ったまで。

もちろん間違いがあるかもしれないが。

(この人、どこかで見たような)

写真に写るキャサリンと思わしき女性を観察してみるが、具体的な人物の顔や名前が出てこない。

(ということとは、ただすれ違っただけなのか忘れているのか……………)

考えてみても、答えなどは出なかった。

「帰るか」

これ以上考えても無駄だと思った僕は、アルバムを閉じると荷物を手にして部室を後にするのであった。

9月に入って少し経ったある日のこと。

始業式やマラソン大会などを終え、残すはすこし先に行われる学園

祭となった。

「なあ、やっぱりメイド喫茶のほうがいいと思わねえか？」

「うるさい」

HRでクラスの出し物を決め終えクラスのみんなが帰り支度をする中、未練がましく慶介が声をかけてきた。

「別にいいじゃない。名称なんて」

このクラスの出し物は『喫茶店』だ。

服装は男子はウエイトレスの服を、男子は執事服を着ることになっている。

ちなみに、この案は慶介の提案だ。

「いいや違うー！ お前はわかってないんだ。いいか？ メイドさんだぞ？ 入って『おかえりなさいませご主人様』って言われた時の快感。それがわからねえんなら男じゃねえ！」

「……………」

何やら意味の分からないことを熱く語る慶介だが、彼はわかっているのだろうか？

周囲の女子からの冷ややかな視線を。

そんなこんなで、案は通ったが名称の修正を求められるという事態に発展し、ただの“喫茶店”という異例の事態となった。

ちなみに余談ではあるが、喫茶店の名前は僕が出した『喫茶ムーン・トラフト』で決定となった。

自分としてはダメもとで出した名前なので、通ったことに案を出した自分が驚いたのは記憶に新しい。

「だったら、周りが見えないあんたは人として問題があると思うけどな」

「…………た、確かに」

ようやくと周囲の様子に気づいた慶介は冷や汗を浮かべながら肯定した。

「ところで、だ」

そして話題を変えた。

「本当に参加しないのか？ 歌自慢コンクール」

「し・な・い」

慶介からの何度目か分からない問いかけに、僕ははつきりと拒否した。

歌自慢コンクールとは文字通り、体育館のほうで行われる催しだ。5人の審査員(普通の生徒だが)の出した総得点(100点満点)で、一番高い点を取った人が優勝となるものだ。

参加人数は三人。

慶介はここぞとばかりに参加を表明し、ほか二人も何の問題もなく決まることになった。

正確に言えば三人が手を挙げるのがほぼ同時だったというだけだが。

そして、慶介はこの歌自慢コンクールに対してすごい執着(とはいえメイド喫茶ほどではないが)を見せていた。

尤も、理由なんて見え透いているわけだが。

その執着の度合いは朝から『歌自慢コンクールに参加しよう』と持ちかけてくるほどだ。

「僕は歌が下手だから、そういうのには出たくない」

「下手、ねえ……」

僕の言い訳に、慶介は咎めるように目を細めてつぶやいた。

「な、なんだよ」

「歌が下手な奴が歌うこともある軽音部に……いや、何でもねえよ」

途中まで言いかけた慶介はため息交じりに諦めたようだった。

もちろんだが、歌が下手だというのは僕の嘘だ。

下手どころか、おそらくはかなり上の部類に入るのではないかと思う。

これは自惚れではない。

魔法使いとして強ければ強いほど、歌などの音楽関係においてかなりのクオリティのものになることが統計で出ているほどだ。

ちなみに、魔法使いとして強いからと言って必ずしも歌が非常にうまいというとは言えない。

僕のも母国での話。

歌が下手な魔法使いだっているほどだ。
要するに、井の中の蛙。

ここの世界には数えきれないほど歌の素質を持った人がいるだろう。

だからこそ、僕の“へたくそ”という言い訳も、ある意味正しいのかもしれない。

「そこまで嫌がらなくてもいいと思うんだけどな」

「……」

慶介の言葉に、僕は何も答えられなかった。

「さて、そろそろ部活に行くか」

「おう、今日もハーレムをた——がふっ!？」

「黙れ」

いつものように慶介を黙らせた僕は、部室へと向かうのであった。

「部として認められてないだっ!?」

「ん?」

部室前にたどり着いた時、律の驚いたような叫び声の中から聞こえてきた。

とはいえ、聞き捨てならない内容だったが。

「それはどういうことだ?」

「あ、浩君」

ドアを開けながら声をかけると椅子ではなく床に軽く座っていた唯が声を上げた。

「それがね——」

僕の疑問に、ムギが事情を説明してくれた。

なんでも滞りに頼まれて学園祭でステージを使用するために申請をしに行ったらしいが、軽音部は部として認められていないために断ら

れたらしい。

「部員が五人そろっていけば大丈夫じゃなかったの？」

「そのはずなんだけどな」

全員がうなりながら理由を考える。

(もしかして顧問がいらないからとかか?)

確か、部活動では顧問の存在が非常に重要であるという話を聞いたことがある。

「ていうか、部として認められてないのに自由に使ってもよかったのかな?」

「……あ」

部室(認められてない以前で部室という表記は正しくないが)に置かれていたアンプなどの楽器類に、食器棚に入れられたコップなどかなりこの部屋を私物化している。

「ま、まあ何も言われてないんだからいいんじゃないのか?」

「とにかく、どうして認められてないか生徒会のほうに問い合わせたほうがいいだろ」

「そ、そうだな。ところで、漣は?」

僕の提案に乗った律は提案を受け入れると、あたりを見回しながら聞いてきた。

「あ、漣ちゃんならあそこでまだ怯えてるよ」

唯の指差す方向にはうずくまって耳を押さえている漣の姿があった。

「帰って来い!」

「何をやったんだ? いったい」

何をしたのか簡単に想像できる僕も、ある意味あれであるが。

そんなこんなで僕たちは部として認められてない理由を尋ねるべく、生徒会室に向かうのであった。

「あそこが生徒会室か。唯」

「了解であります、律ちゃん隊員！」

生徒会室が見えて来たところで呼びかける律に、まるで兵隊のように答える唯。

「ここは突撃だ！」

「おー！」

「突撃って……」

どこぞの犯罪集団のアジトに突入する警察官じゃないんだから、という僕のツツコミが入るよりも前に、

「たのもーっ！」

唯によってドアがいきよ良く開けられた。

「唯？」

「あれ、和ちゃん？　なんで和ちゃんがここに？」

生徒会室にいたのは、意外にも真鍋さんだった。

なんでも彼女は生徒会の役員となったようだ。

まあ、そのことを話してもらった際に幼馴染のはずなのに初耳といった様子の唯に、少し首をかしげたくなったのはどうでもいい話だが。

そんなこんなで、真鍋さんに部として認められてない理由を調べてもらうことにしたのだが、棚から取り出された青いファイルにはさまれている用紙をペラペラとめくっていく。

「やっぱりリストにはないわね」

ほとんど調べ終えたところで真鍋さんが口を開いた。

「ひょっとして、これは弱小部を廃部に追い込むための生徒会の陰謀！」

律の推測が初めてあり得ると思った瞬間だった。

もつとも、生徒会という組織が嫌いという、完全にどうでもいい理由によるものだが。

「和ちゃんは心がきれいな子！　目を覚まして」

「というより、それは人として終わってるだろ」

真鍋さんの手を握りながら呼びかける唯をしり目に、僕はポツリとつぶやく。

「何の話？ それよりも、部活申請紙を出していないんじゃないの？」

そんな唯の行動に目を丸くしながら、指摘した。

「部活申請用紙？」

真鍋さんの口から出た言葉に、僕とムギは思わずおうむ返しに聞いてしまった。

「そんなの聞いてないぞー！」

「聞いてるだろー！」

「ひいつ!？」

すさまじいオーラ（これは一種の殺気？）を纏う滯に、僕は思わず飛び上がってしまった。

どうでもいいが、女性の放つ殺気のようなオーラはとてつもないほどに恐ろしい威圧感がある。

僕は殺気の中でも女性の殺気のようなオーラだけが怖かったりする。

「……………あ」

そして、心当たりがあるのか、律が口を開いた。

「やっぱりお前のせいかつ!!」

その反応を見た滯は律の頬をつまむと引つ張り始めた。

ムギが滯をなだめに向かった。

（まあ、制裁を受けてるから放っておいていいか）

とはいえ、生徒会Ⅱ悪と決めつけた僕は、どれだけ心が荒んでいるのだろうか？

「なんて言うか、軽音部って唯にピッタリの部活だと思うわ」

「お願いですから、一纏めにしないでください」

あまりな言われように、僕は反論した。

これでは僕が間抜けみたいになる。

いや、もしかしたらイメージチェンジにはいいのかもしれないが、倒産の耳に入った瞬間地獄を見るのは目に見えている。

「しようがないわね。私が何とかしてあげるわ」

ため息交じりにそういうと、彼女は〃部活申請用紙〃を取り出してそれに必要事項を書いていく。

「ところで、顧問は？」

「顧問ぐらいいるよな？」

「コモン？」

真鍋さんの問いかけに僕も四人に尋ねると、まるで初めて聞いたような反応が返ってきた。

それだけで、どうなっているのかが容易に想像できた。

「あなたたち」

真鍋さんの呆れたような言葉は、罵声を浴びせられるよりもきつかった。

そんなこんなで、僕たちは軽音部を部として認められるようにするべく、顧問探しに向かうのであった。

第20話 顧問

すべてのきっかけは本当に何気ないことだった。

そうそれは、数日前のことだった。

「やつぱり、どこかで見たことがあるんだよな。この人」

部室に初めて一番乗り（自分で言っていてむなしくなるが）した僕は、少し前に見つけたあの卒業アルバムを見て唸っていた。

理由としては一度疑問に思うと、それを解決せずにはいられなくなっただからだ。

それが僕の悪い癖だった。

しかもわかりかけているものに関しては特にだ。

そして知らないきやいいことを知ってしまった、のちに大騒動になってしまうというのがいつものことであるのだが。

閑話休題。

「ムムム……」

「あれ、浩君。それって卒業アルバム？」

必死に記憶をたどりながら唸っている僕に声をかけてきたのは唯だった。

「どうやら、部室に来て卒業アルバムを開いてからかなりの時間が経っていたようだ。」

「ああ。実はこの写真の人をどこかで見たことがあるんだけど、それが誰かを思い出せなくてな。さつきからずっと思い出してるんだよ」

「ねーねー浩君。私この人見たことがあるよ」

お手あげだと背もたれに寄り掛かった僕に、唯は衝撃的なことを告げてきた。

「だ、誰？」

「ちよつとこつち来て」

「うわ！・ちよつと!？」

唯に腕を引かれるまま、僕は部室を後にする。

連れてこられたのは、職員室前だった。

正確には僕たちは、階段の踊り場から隠れるようにして職員室側のほうを見ているのだが。

「ほら、あの人」

「あの先生か？」

唯が示している先にいたのは、数人の学生と話をしている栗色の髪をしてメガネをかけた女性教師だった。

その女性教師は、軽音部の部室を聞いた人だった。

(まさか……確かに野蛮そうなオーラは感じたが……いや、でも)

今までの自分の勘から、あの写真に写っている人物は数人の学生と何かの話をしているであろう女性教師で間違いないと告げていた。

「ね、ね、似てるでしょ？」

「ああ、確かに」

すこしばかり興奮気味の唯の問いかけに、僕は頷いた。

こうして、僕の疑問は解決するのであった。

それがいつものように、のちに大きな騒動へと発展するであろうことを知らずに。

部として認められるために必要な顧問を探すということで、生徒会室を後にした僕たちだったが、

「誰がいいだろう」

「……………」

現在の状況は、顧問として頼める教師の見当がつかないという絶望的な状態だった。

場所は軽音部の部室(部として認知されていないため部室という表現は間違いではあるが)。

そこで僕たちは、部として認められるために必要な顧問探しの作戦

会議を開いていた。

まあ、それも最初から躓いているわけだが。

「顧問をお願いするとすれば、どういう先生がいいのかしら？」

「そりゃ、面倒見がよくて」

「楽器のことにも多少は詳しくて」

「優しい先生がいいと思うのですよ」

ムギの口にした疑問に答える律に続いて僕と唯も答えていく。

ちなみに念のために言うが『優しい先生』と答えたのは唯なのであしからず。

「でも、ほとんどの先生はすでにほかの部活の顧問だったりするから無理だと思っただけど」

「確かに」

この学校のほとんどの教師はすでに何らかの部活の顧問を務めている。

つまりは、教師に顧問の掛け持ちをしてもらわなければいけないのだ。

果たして、向こうがそれを受け入れるか……。

「あ、ねえねえ。あの人はどうかな？」

「あの人が？ もしかして何か心当たりがあるのか?！」

唯の提案に、律が待つてましたとばかりに食いついた。

それどころかムギに濡も続く。

(もしかしなくても、＼あの人が＼だよな)

唯の“あの人が”というフレーズに、数日前に判明したあの女性教師の姿が浮かび上がってしまった。

「うん、山中先生……」

「山中先生って、確か音楽の先生だったっけ」

やはり、僕の予想は当たっていたようだ。

「でも、どうするんだ？ 確か、山中先生って吹奏楽部の顧問だったはずだけど」

やはり、山中先生も顧問を務めているようだ。

「ふふふ、この私にいい考えがあります」

「……………」

その唯の言葉を聞いたこの時この瞬間、僕はこの後に何が起ころうとしているのかを悟った。

それは山中先生にある意味同情したくなるようなものであった。

そんな僕の心境など知る由もなく、山中先生を“強引”に顧問にする作戦が幕を開けるのであった。

「軽音部の顧問になってください！」

部室を後にして山中先生を探し始めてすぐ、運よく山中先生を廊下で見つけることができた律は、先生を呼び止めるや否やさっそく本題を切り出す。

「まだ、顧問いなかったんだ」

その律の言葉に、山中先生は顧問がいないことに苦笑していた。

「先生しか、頼める人がいないんです」

「…………ごめんなさい。なってあげたいのは山々なんだけど私、吹奏楽部の顧問をしているから、掛け持ちはちよつと…………」

やはり、返ってきた答えはN.Oだった。

まあ、それが当然なんだが。

「……………」

「……………」

唯が律に送る視線に、律が静かに頷いた。

それは作戦決行の合図だった。

「そういえば先生は確か、ここの卒業生でしたよね？」

「え、ええ」

気乗りしなかったが、これも部のため。

僕は心の中で先生に謝罪の言葉を贈りながら、切り出した。

「実は、つい先日古いアルバムを見つけたのでそれを見ていたんです

が

「うつ……」

僕の言葉を聞いた山中先生が顔を青ざめさせた。

「アルバムはどこにあるの？」

「ふえ？ 部室ですけど」

背を向けた山中先生の問いかけに、唯が答えた。

「そう……」

唯の答えに山中先生はそうつぶやき数歩歩くと、次の瞬間いきなり駆けだした。

「はやっ!？」

その速さに、思わず叫んでしまった。

「大成功!」

「何だか、悪い気がするけど。早く部室に行こう」

喜ぶ律と唯をしり目に、僕たちは部室に向かうのであった。

部室にたどり着くと、部室のドアは豪快にあけられており、その中には机の前……ちょうど例のアルバムが置かれていた場所に立つ山中先生の姿があった。

「やっぱり先生だったんですね」

おそらく、先生の望むものは手に入らなかったはずだ。

なぜならば、先生が一番隠したい物は、すでに律の手元にあるのだから。

その写真とは、『DEATH DEVIL』時代の山中先生を写したものだ。だった。

「つくー」

そして、その写真を目の当たりにした瞬間、山中先生は観念したのか口を開いた。

「よくわかったわね。そうよ、私は軽音部にいたの」
やはり、山中先生が『DEATH DEVIL』のメンバーだった
ようだ。

「それじゃ、これも」

そういつて唯が流したのは、合宿で聞いたカセットだった。

そして流れるのは、この世の恨みを込めたかのようなどす黒い声。

「お願いやめて！ 恥ずかし〜！」

(恥ずかしいのなら、やらなければよかったのに)

これが若さゆえの過ちというものなのだろうか？

耳を押さえようとすくまる山中先生を見て、思わずそう考えてしまっ
た。

本人が聞いたら起こるであろう単語のために決して口にはしな
かったが。

「聞こえない、聞こえない」

同じく耳を押さえようとすくまる一人の少女に対しては、いまだに引
きずっているのかと思ってしまう。

まあ、あのテープの音声は呪怨レベルにまで達しそうなレベルでは
あるが。

「それじゃ、もしかしてギターも」

「あ、そっか。弾いて弾いて」

思いついたようにつぶやかれたムギの言葉に、唯は自分のギターを
手にするとそれを山中先生に半ば強引に渡した

その瞬間、山中先生はうつむいた。

(あ、この感じあの人に似てる)

荻原さんことRKも、ベースを手にとると人が変わったようになる
ことがあるのを思い出した。

それが前のライブでの打ち合わせをしていない状況でのアンコー
ル演奏だったりするわけだが。

「しゃーねえな」

「目つき変わった!?!」

立ち上がちながら眼鏡を外したその姿は、生徒の中ではおそらくは

まだ僕たち以外に知る人はいないのではないかという雰囲気も放っていた。

その雰囲気は、本当にRKにも通ずるものがあつたが、あまりの豹変ぶりに驚きを隠せないでいた。

そして始まったのは、山中先生による壮絶な演奏だつた。

複数のコード進行をしながらそれを高速に弾いていく速弾きや、指板上の弦を叩きつけたり横に移動させる奏法でもあるタツピングや、さらには歯ギターと言つたテクを披露した。

それは、あのテープの曲を軽音部時代に山中先生が演奏していたことを改めて実感させられるものであつた。

そんな壮絶なテクを見せられた藩たちは驚きのあまり固まつていた。

「ああ、私のギター……」

歯ギターのテクを披露した瞬間、ある人物は悲しげな声を上げた。

まあ、気持ちはわからなくもない。

歯ギターは確かにすごいが、実際にすると少々抵抗がある。

それゆえに僕も歯ギターをしていなかったりするのだが。

もししてほしいとせがまれても、僕は絶対に断るだろう。

「おめえら！ 音楽室を好きに使いすぎるんだよっ!!」

「ひっ?」

「二「すみません!!!」二」

そんな演奏で、何かが吹っ切れたのだろうか、“教師の山中先生”

ではなく、“軽音部OGの山中先生”となつた山中先生は、大きな声で叫びながら僕たちにピックを突き付ける。

その山中先生の勢いに、唯たちは土下座して謝罪をして、僕は反射的に天井に逃げた。

我ながら臆病だと思うが、女性から発せられる修羅の気ほど恐ろしいものはない。

昔から怯えた時に天井に張り付くことで逃げる癖はなかなか治らない。

というよりは、今まで治らないのだからこれ以降も治ることはない

だろう。

「大体な！——」

そこまで言いかけて、ようやく正気に戻ったのだろうか山中先生は
びたりと声を止めた。

部室内に漂うのは、非常に重たい沈黙だった。

「今の、見た？」

「……………」

その問いかけに、みんなは示し合わせたように頷いて答えた。

「ああ……先生の時はおしとやかキャラで通すって決めたのに……」

(やっぱりキャラだったんだ)

最初にあつた時から、偽りの仮面であることはわかっていたので、
それほど驚きはしなかったが。

「先生——」

「そう、あれは8年前のことよ」

「いきなり語りだした!?!」

なぜだか語りだした山中先生の話聞きながら、僕は静かに彼女た
ちからは死角となる場所に着地した。

いくらなんでも天井にしがみついている光景を見られるのはまず
い。

そして、山中先生の話聞くのであつた。

それは、彼女の壮絶な学生時代の話。

好きな人の好みの女性になろうと努力したという過去だった。

とはいえ、努力の加減がまずかつたのだろうか、恋は結局終わりを
告げた。

(しかし、好みの女性になろうとするために、そこまでしようとする行
動力はすごい)

そんな勝手な感想を抱いていると、落ち込んでいるであろう山中先
生の肩に、律は優しく手を置いた。

「先生、顔を上げてください」

「律ちゃん」

優しい声色の言葉に、山中先生が彼女のほうに振り向いた瞬間、も

う片方の肩に手が置かれた。

「ばらされたくなくなったら顧問をやってください」

「えげつな!」

律の脅迫にも似たその言葉に、僕は思わず叫んでしまった。

尤も、最初の計画通りに進めば同じ結末になってしまうことと、その片棒を担いだために僕も同じではあるが。

(すみません、山中先生。軽音楽部存続のために許してください)

僕は心の中で、いまだに呆然としている山中先生に謝るのであった。

こうして、軽音部の存続の危機は、山中先生の犠牲によって去るのであった。

第21話 歌

脅迫という非常に強引な方法で何とか顧問は決まった。

それによって、ようやく軽音楽部は部として認められるにいたった。

だが、それに胸をなでおろす暇はない。

軽音部にとつて初舞台でもある文化祭までそう日がないのだ。

ということ、さつそく山中先生にお願いをして演奏を聴いてもらうことになった。

「こんな感じのオリジナルなんですけど、どうですか？」

アレンジした曲は除外して、残すオリジナルの二曲を演奏したのだが、あまり芳しくはなかった。

正直に言えば音はばらばらで、リズムキープもできていない。

何より、各音色がぼやけてしまっているような感じだ。

それは僕も同じことだった。

僕の問題点として上がるのが、浩介ⅡDKであることが知られないようにするために演奏のレベルを数段階落とすことで対策をしていることだ。

ちなみに、当初言っていた“ギターをいじって弦が切れやすくさせておき、楽器を選ぶ目がないのでプロではない”という構成は軽音部に入ってわずか数週間で破たんとなった。

理由としては、僕のくだらないプライドによるものだった。

—プロたる者、相棒に改悪するのは下種のすること—

その言葉が浮かんだ僕は、すぐさま弦をちゃんとしたものには張り替えた。

その結果弦は切れにくくなることとなり、ギターに細工をするという計画は失敗に終わるといふ何とも悲しい結果だけが残った。

となれば、自分の腕を数段階落とすしかない。

だが、落としたら落としたで、今度はどの程度落とせばいいのかわからない。落としたら落としたで、今度は何となく問題が発生したのだ。

今現在、その領域の計算中だったりするのだが、そのせいで演奏自

体に支障が出てしまい不協和音になりかけている曲ができてしまっているのだ。

(それに、何か忘れていているような)

そして僕が悩んでいるのはそれだった。

何かを忘れていているというより、何かが足りないような気がするのだ。

楽器の演奏のラインかと思いい見直しをしてみたものの、特に問題点は見つからなかった。

尤も、譜面に問題があれば合宿の際に気づいているわけだが。見直しが終わったのがつい先日のこと。

今はお手上げだとばかりに考えている状況だったりする。

さて、漣に感想を求められた山中先生は顎に手を当てて考え込む仕事草をしている。

僕たちは、彼女の口から出る感想を固唾を吞んで待っていた。

「前のり後のりとか、リズムセクションがバラバラとか、気になることはあるけど」

山中先生の評価は非常に厳しい物であり、そして僕がほぼ想定していたものでもあった。

だが、山中先生はさらに言葉を続けた。

「まず、ボーカルはいないの？」

「……………」

山中先生の問いかけに、再び部室内に痛い沈黙が走った。

「……あっ!!」

そして一斉に声を上げた。

(そっだよ、歌だよ)

足りないものの正体は、意外に簡単なことであった。

オリジナルの二曲には、“ボーカル”がないのだ。だからこそ足りないという感想を抱いたのだ。

とはいえ、一番問題なのはそのことに気づきもしない僕自身にあるのだが。

(こういう時にカバーバンドとしての欠点が出てくるわけか)

H & P はほかのバンドが演奏した曲をカバーする“カバーバンド”という区分となっている。

要するに、自分たちで曲を作ったことはない。もしかしたら他の皆にはあるのかもしれないが、僕には作曲経験は皆無。

できることとしたら、ベースとなる音にさらに楽器などを重ねて行ったりするアレンジなどしかない。

そして、当然だがカバーする元の曲には歌詞がすでにあるためそれが普通となってしまうた僕が気づけるはずもない。

(こりや、プロというよりはエセプロだな)

思わずため息がこぼれそうになるのを必死にこらえた。

「まさか、歌詞もまだ?」

「ええつと……」

歌がないことにすら気づいていないのだから、歌詞などあるわけがない。

「それでよく学園祭のステージに出ようだなんて考えたわね?」

「す、すみません」

山中先生の顔が引きつっていた。

それはいつしか体全体に広がっていく。

それは爆発の兆候でもあった。

「今まで音楽室を占領して、何をやっていたの?! ここはお茶を飲む場所じゃないのよ!」

「す、すみません!!」

予想通り……いや、予想以上の爆発に謝ってしまった。

いや、それが普通なんだが。

だが、山中先生はそれで止まらなかった。

「大体ねっ!」

「ひいひい!」

先ほどのような般若の表情をしてさらに詰め寄ってきたため、僕は横に逃げた。

「先生!」

「あぁっ!？」

もはや教師というより、チンピラにも近い状態の山中先生に果敢にも声をかけたのは、意外なことにムギだった。

「ケーキ、いかがですか？」

「ええ!？」

その手には、いつ持ったのかケーキの箱があった。

突然ケーキを差し出してきたムギに驚く僕たちにさらに追い打ちをかける人物がいた。

「いただきますっ!」

(いただくのかよ!?)

やはり女性はスイーツなどの甘いものには勝てないということなのか？

とはいえ、実験するほど僕は馬鹿ではないが。

この後、二曲の歌詞をそれぞれ書いてくるということでお開きとなった。

ちなみにその後は、先生に指摘された問題点を改善するべく練習をすることとなった。

「ほへー、練習後のお茶はまた格別どすなー」

「そうだねー」

「練習後って……二曲を二回ずつ通して弾いただけなんだけど」

椅子に座ってムギが入れたお茶を飲みながら黄昏ている律と唯の二人に、僕はため息交じりに突っ込む。

実際に、そこまでいう程に弾いているわけではない。

だが、ひとたび休憩となった途端こうなってしまう。

「根を詰めてもよくはならないんだし、適度に休憩を入れることも重要よ」

「……」

顧問でもあり、軽音楽部OGである山中先生の言葉に、僕は口を閉じることしかできなかった。

「おお、先生が天使に見える」

「あら、天使みたいに美人だなんて」

律の言葉に、山中先生は嬉しそうに頬に手を当ててもじもじと始める中、僕は観念して席に着いた。

「はい、どうぞ」

「あ。ありがとう」

ちなみに今日のデザートは今日はタルトだった。

お茶の入ったコップとタルトケーキの乗ったお皿が差し出された。それを僕は、口に運ぶのであった。

「作詞と言ってもな」

夜、自室で僕は放課後に出た課題『曲の歌詞を考える』に取り掛かっていた。

すでに夕食、お風呂、予習復習共に済ませていたため寝るまでの時間をつき込むことができるようになったのだ。

「まあ、とりあえずやってみるか」

そして僕は作詞に取り掛かった。

「よし、完成！」

作詞自体はすぐに終わった。

作詞したのは僕がムギに頼んだスピード感のある曲調の曲だった。

「とはいえ、これは……」

完成した詩に、僕は目を通してみた。

『目の前にある山を切り落とし、立ちふさがる敵を打倒せ——』

「うん。完全に没だ。というか確実にだめだ」

歌詞が物騒すぎる。

確かに、タイミングは合いそうではあるが、まず確実にこれを目の前で歌われたらひかれること間違いなし。

と言うか、歌詞自体が痛い。

痛覚と言う意味ではない。

確実にこれを見せたら軽蔑のまなざしを向けられるのは明白だ。

「僕に作詞の才能がないことがわかっただけでもよしとするか」

ポジティブシンキングも、行き過ぎていると思うが、前向き思考でない確実に自分を保てない。

（そういえば、この間授業で短歌を書いて提出したら先生に呼び出されたっけ）

今のこの状況と関係ないことも思えないことを、思い出してしまった。

（あの時に“血”とか“殺戮”とかの単語を入れたのがまずかったか）

書き直しをするようにと言われ、その日の放課後までに唸り続けた結果、何とか先生のOKをもらったのだ。

それまでに書き直した回数は20を超えていたのは余談だ。

「これは嚴重に抹消しよう」

とりあえず僕は台所に歌詞が記された紙を持っていくと、それを火にかけて抹消した。

火を放つ魔法はあることにはあるが、飛び火する可能性があることや、こういうことに魔法はあまり使いたくない（主に怒られるのが嫌だという理由でだが）ために、原始的な末梢方法となった。

「これで僕の黒歴史は葬り去られた」

ついでに20回ほど書き直した短歌とやり直しと言われた最初の短歌も燃やしておくことにした。

目の前で炭と化す紙だったものを見ながら、僕はそうつぶやいた。

そして僕が至った結論は

「誰かがちゃんとしたものを書くだろう」

他人任せだった。

そんなこんなで僕は作詞をあきらめるのであった。

「できたっ!？」

「あ、ああ」

翌日の放課後、作詞ができなかった四名（僕を含めてだが）は詩を書いてきたと言う瀧に一齐に詰め寄った。

その手にはおそらくは歌詞が書かれているであろうルーズリーブがあった。

「見せて見せて!」

「も、もう!？」

見たいとせがむ唯に、瀧が固まる。

「私も一度見たいわ」

「僕もぜひ見せてもらいたい」

“ 今後の作詞をする際の参考にしたいから ” とは口が裂けても言えなかった。

ところが、瀧の性格を忘れていた。

恥ずかしがって歌詞を見せようとしなのだ。

「えっと、以下減にしないと山田先生が……」

山中先生の笑顔は次第に崩れていき、今ではひきつっている。

僕はなぜか田舎のおじいさんの話題に展開しかけている唯たちに声をかけるが、それは遅すぎた。

「早くせんか!!」

大声で叫びながら、瀧の手にあるルーズリーブを奪い取ったのだ。

「ああっ!？」

瀧が悲鳴を上げるが、時すでに遅し。

僕と律は山中先生のそばによると、ルーズリーブを覗き込む。

「……」

歌詞と思わしき文章を読んだ瞬間、僕は背筋に寒気が走るのを感じた。

(こ、これはある意味すごい威力だ)

山中先生と律は悶えているし。

僕のとほ正反対の文章だった。

とはいえ、こっちの方が数倍もましなのは言わずもがなだが。

「わ、私としてはいい感じにかけたと思うんだけど……ダメ、かな？」

「だ、ダメと言うことはないんだけど」

「ちよつと思っていたのとは違ったというか……」

今にも泣きだしそうな滯に、二人は必死にフォローしている。

僕は無言を貫くことにした。

下手に口を開けば藪蛇になりかねない。

ちなみに、唯とムギはOKを出していた。

律は僕の方を見てくるが、僕は無言で肩を竦めて答える。

「さ、さわちゃん！」

「さわちゃん!？」

あまりの劣勢ぶりに、とうとう律は山中先生に救いを求めた。

しかも、あだ名のような感じで呼びながら。

「こういうのってなしだと思っよね?!」

「そ、そうね」

ようやく自分に賛同する意見が出たことに勢いをつけ、律は三人を落ち着かせようとするが、数秒後に山中先生は“こういうのもありだ”と意見を変えた。

「それじゃ、この歌詞で行くとするか」

律のその言葉に、唯とムギが拍手を送る。

だが、律の目にはうつすらと涙が浮かんでいた。

(同情するよ。本当に)

思わず同情してしまった僕の表情も、おそらくひきつっているだろう。

「それじゃ、ボーカルは滯で行くか」

「うえ!? わ、私は無理だよ！」

ボーカルが自分であることがわかるや否や、顔を引きつらせるとソファーから立ち上がり異論を唱えた。

「なんで?」

「だって……こんな恥ずかしい歌詞は歌えないよ！」

「だったら書くなっ！」

耳をふさいでうずくまる滯に、思わず突っ込んでしまった。

彼女はいつたい、自分が歌う可能性があることを考えて書いたのだろうか？

いや、もしかしたら誰かが歌詞を書いてそれになると思っていたのか……真相は滯のみぞ知るだ。

「滯がだめだと思うと………ムギやってみる？」

唯のほうに視線を向けた瞬間、固まったのちにムギに声をかけた。なぜ固まったのだろうかと、彼女のほうを見てみると目を輝かせていた。

「私はキーボードで精いっぱいだから……」

「そうか。じゃあ、浩介は？」

唯を飛ばしてこつちの方に視線を向けた律が聞いてきた。

「僕が、これを？」

まさか聞かれるとも思っていなかったため、うまく言葉が出てこなかった。

「律、僕がこの歌を歌っている光景を想像してみる」

「浩介が、これを歌っている姿……」

律が遠い目で上の方を見始めた。

きつと彼女の頭の中では、僕が歌っている姿が浮かんでいるのだろう。

ついでに僕も想像してみた。

「……………おえ」

きつとその光景は似ていたのだろう。

思う浮かべたその光景に、僕と律は思わず吐き出しそうになった。

「となる」と

気を取り直して、律は唯のほうへと視線を向ける。

相変わらず唯は目を輝かせてもうアピールしていた。

そして、ムギのほうを見て僕の方を見ると再び唯のほうへと視線を向ける。

「ごほん、ごほん。あーあー」

今度は声を出してアピールを شدした。

それほど歌いたいのだろう。

それを無視して律はムギに視線を向けて僕の方へと視線を向ける。「いい加減、隣で猛烈アピールをしている人物に声をかけて。見ているこっちが悲しくなってくる」

もうアピールしてもスルーされ続けられた唯はハンカチをかんでいた。

「唯、やってみるか？」

「え？ 私?! でもでも、私歌えるかわからないし、それに歌もうまくないし」

ようやく声をかけられた唯は手にしたハンカチを放り投げると、もじもじしながら言葉が続けた。

「じゃあ、いいや」

「嘘です！ 歌いたいです!!」

「はあ……」

律の腰にしがみつきながら懇願する唯の姿に、この先の道のりはまだまだ遠いことにため息が出てしまうのであった。

第22話 ボーカル

紆余曲折経て、ボーカルは唯に決まった。

「よし、それじゃ歌ってみようか」

「らじやー!」

律の指示に、唯は敬礼をすると息を吸い込んだ。

そしてついに歌い始めた。

「ちよつとちよつと」

律は、慌てて歌っている唯を止めた。

「ギターを弾きながら歌って」

「あ、そうだった。忘れてた」

(忘れてたって)

いろいろと突っ込みたかったが、もう一度唯にやってもらうことにした。

ポップな感じの曲調のギターの音色が響く中、しばらくたつても肝心の“歌”がない。

「二二今度は歌うのを忘れてる」

「僕の中には“絶望的”という言葉が浮かんでしまった。

非常に失礼だから言わないが。

「うう……ギターを弾きながら歌が歌えない」

一番落ち込んでいるのは当の本人だ。

「うーん。マルチタスク能力の欠如か……これは少しばかり先が思いやられるな」

顎に手を添えてどうしたものかと考えをめぐらす。

「とりあえず、ボーカルトレーニングをしておいたらどうだ?」

「ぼーか……なにそれ?」

僕の提案に、唯が首をかしげて聞いてきた。

「簡単に言えば、歌の練習のようなもの」

「おおー。でも、それはどうやってやればいいのかな？」

そこで、僕は固まってしまった。

普通、ボーカルトレーニングは専門のトレーナーの人の指導のもと行う。

だが、そうすると先立つ物が必要になる。

彼女の場合だと、初手からやる必要があるためそれなりの額になることは必至。

一学生の彼女に、そんな負担をさせてまでなすべきことなのだろうか？

プロデビューを考えているならともかく、アマチュアレベルで今後も行くことを考えるのであれば、それは非常に採算が取れなくなる可能性がある。

(僕の方でもできなくはないけど……)

それをすれば、おそらく僕の正体が知られることになるだろう。

それを考えると、どうしてもためらわれた。

「仕方ないわね。私が特訓してあげるわ」

「先生！」

そんな中、自ら名乗りを上げたのは、山中先生だった。

「それじゃ、まずは歯ギターから——」

「それはいいです」

唯の肩をつかんで歯ギターを教えようとするが、唯が問答無用と言わんばかりに断った。

こうして、山中先生による唯への特訓は幕を開けるのであった。

唯の特訓が始まって数日後のこと。

学園祭のことで打ち合わせに来た生徒会役員の真鍋さんと、打ち合わせを進めていた。

曲目は『Leave me alone』に『Don't say "lazy"』、そして締めを飾る『ふわふわ時間^{タイム}』の三曲だ。

最初はカバー曲、あと二曲がオリジナルと言う構成になっている。次のライブでは、すべてオリジナルにするのもいいかなと思っっているのはここだけの話だ。

「ボーカルは唯と漣と高月君の三人、と」

「うう……」

隣で哀愁を漂わせている漣を僕は見なかったことにした。

理由は明白。

漣も歌うことになったからだ。

その時はいろいろと大変だった。

ふと、その時のことを思い出した。

それはつい先日のこと。

いつものようにデザートに舌鼓を打っているときのことだ。

「あ、そうだ漣」

「何？ 浩介」

僕は、言おうと思っていたことを切り出すことにした。

「オリジナルで作った曲の一つ『Don't say "lazy"』のことなんだけど」

「あれが、どうかしたのか？」

「その曲だけ、ボーカルをやってもらいたいんだけど」

どう告げたものか悩んだが、ストレートに言ったほうがいだろうと結論付けた僕は、直球で口にした。

「ええ?!」

案の定、漣は飛び上がらん勢いで驚きに満ちた声を上げる。

「頼める?」

「嫌だ!」

一刀両断で断られてしまった。

「やっぱりだめか」

「断られるの分かっててどうして聞くかな、あんたは」

あきれた口調で、律が聞いてくる。

「この曲を構成した時から、ボーカルは漣が一番合っていると思ってたんだよ。だから、どうせなら漣に歌ってもらおうと思ったんだけど……」

「絶対に嫌だつ!」

視線を感じたのか、漣は耳をふさぎながら再び拒絶した。

「唯が歌えばいいじゃないか」

「確かに。でも、漣のほうがこの曲は最適だと思う」

唯が歌う予定の曲は、ふわふわした感じのアップテンポの曲。

こういう場合、唯の声は曲と非常にマッチしているため、自然と曲が輝くのだ。

つまり、曲との相性は抜群と言うことだ。

そして僕が漣に歌ってほしいと思っている『Don't say "lazy"』は、ふわふわしたものではなく、スピーディーで力強い曲調。

この場合で考えると漣の歌声のほうが相性がいいと判断したのだ。

良曲も歌い手次第では悪曲となることがあるため、歌い手の選択も重要なことなのだ。

ちなみに、悪曲に代表されるのはカラオケなどで歌われる聞くに堪えない音痴な歌だったりする。

音程はめちやくちや、タイミングもあっていないなどなど、探せばいくらでもそういうデータが存在するほどだ。

唯がこの曲を歌うと、“力強い”曲調が生かし切れなくなってしまいう可能性が高い。

(まあ、僕のがままなんだけど)

曲の相性云々と屁理屈をこねているが、結局は彼女が歌うこの曲を聞いてみたいという僕のわがままでもあった。

それに、誰が歌ったから失敗と言うものでもない。

要は、その曲をだれに歌ってもらうことを想定して作ったかが重要なのだ。

それが今回の場合は滯だったというだけの話で、唯が

(とはいえ、仕方ない。最終手段だ)

こうなるであろうことは想像していたため、僕は最終手段を使うことにした。

「分かった。だったら、こういうのはどうだ？」

「……………どうなの？」

僕は、妥協案を滯に提示することにした。

「二人で歌う」

「二人……………デュエットでってこと？」

僕は滯の問いかけに頷くと補足する。

「二人で歌えば、注目も分散されるし恥ずかしいとかそういうのも薄れると思うけど。どうだろうか？」

「……………」

「分かった。歌う」

しばらくして彼女が出したのは、承諾であった。

「す、すごい。あの滯に頷かせるとは。浩介、恐ろしい子っ！」

こうして、律から恐ろしいやつ認定をされることになってしまった。

彼女が母国での僕の二つ名を聞いたらどうという反応をするのかが、微妙に気になったのはどうでもいいことだ。

「でも、唯は大丈夫なの？」

僕が先日のことを思い起こしている間、話がかなり進んでいたようだ。

「この間から放課後にさわ子先生と特訓してるんだ」

「たぶん間に合うとは思うけど」

そう滯が言い切った瞬間だった。

力強く開けはなれたドアから入ってきたのは、山中先生と唯の二人だった。

「完璧よ」

サムズアップしながら、そう告げる山中先生の言葉が正しいと感じさせる雰囲気は唯は纏っていた。

（な、なんだ？　これが特訓によって進化した、平沢唯の姿とでもいうのか?!）

何だか自分でも支離滅裂な感じになっている。

それほど、彼女の雰囲気にもまれているということだ。

そして、唯はギターを弾き始めた。

その瞬間、さらに僕は背筋に電流が通ったような錯覚を覚える。

ゆがみのない音程、そしてメリハリのあるその奏法。

それらは彼女のギターの腕がかなり上達したと思わせるのに十分だった

「スウ……」

いよいよ問題の歌の部分だ。

この調子ならばかなりうまく歌えるという確証が僕の中にあった。

だが、それは無残にも裏切られることになる。

彼女の口から出た声色は、ガラガラとしたものだった。

「練習させすぎちゃった、テヘ♪」

「かわいく言ってもだめだっ！」

練習のしすぎによって、声がかれてしまったらしい。

（これはまずい）

『ふわふわ時間タイム』は、唯が歌うことを前提にしていたため、それを歌う人物がいなくなるというのは、かなり最悪な状況だった。

「と言つゝとは……」

その言葉に、自然と視線は一人の人物へと集まっていく。

「……………えっ!？」

「そうね。漣ちゃんなら歌詞覚えてるでしょうし」

「頑張ってるね漣ちゃん」

こうして、完全に一人で歌う曲ができてしまった。

そんな漣はと言うと

「……………」

「うわ!？」

「み、漣ちゃん!？」

ついに沸点を超えたのか、顔を真っ赤にして倒れてしまった。

(こ、こりやあれをデュエットにして正解だったな)

もしあれも漣一人で歌うとなったら、どうなっていたか想像がつかない。

『Don't say "lazy"』が、デュエットになったのがせめてもの救い……………なのか？

『そういうことじゃなくて、高月浩介としてのデビューでっていう意味だよ』

「……………」

考えてみればそうだった。

DKとしてはすでにデビューしているが、高月浩介としてはこれが初めての舞台なのだ。

「中山さんは僕にプレッシャーでも与える気ですか？」

『あははっ！』

僕の恨めしい言葉に、中山さんは電話口で高らかに笑い出した。

『ごめんごめん。浩介ほど』プレッシャー』っていう単語が似合わない人はいないからついね』

確かに、僕ほどプレッシャーだの、緊張だのが似合わない人はいないだろう。

(まあ、緊張したりするくらいは僕にでもあるんだけどね)

一度大きな緊張をすると、小さなプレッシャーなどに動じなくなってしまう。

……………たぶん。

「私だって緊張することぐらいはありますよ」

『想像がつかないんだけどね。あの初舞台の時の君の言葉を聞くと』

ずいぶんと懐かしいことを中山さんは言ってくる。

『怯えるな。たとえ、観客どもが野次を飛ばそうが、瓶を投げようがそれらをすべて歓声と思い、すべてを出し切れ。お前らの敵は観客ではない、自分自身だ』……………あの言葉は、私たちをしびれさせたよ』

「……………お恥ずかしい限りです」

それは“昔の僕だった”からこそ口にできた言葉だった。

今は、あのような内容の発言はしれないと思いたい。

『まあ、それはともかく。学園祭の時は私たちも顔を出すよ。あのDKがともに演奏することを認めた異例のバンドなのだからね。どのようなバンドか見ておきたいし』

「そんな、期待されても……………別に演奏のオファーを断り続けているのは、相手が悪いからと言うわけではなくて」

中山さんの言葉に、思わず苦笑してしまう。

実際に、僕に自分のバンドで臨時に演奏をしてほしいというオファーがいくつも寄せられたが、僕はそれをすべて断った。

でも、それは

『私たちに気を使っただら？』

「……………」

僕の心の中に思い浮かべたことをそのまま言われてしまった。

『自分で活動したら、私たちに申し訳ないから断り続けたんだろ？』

「はあ……かないませんね。中山さんには」

中山さんの鋭い指摘に、僕は苦笑した。

演奏のオフアートを断り続けたのは、それが主だった。

今思えば、ここに来るまでは他人を気遣った行動などをしたことはなかったため、あの時初めて他人に気を使って行動をしたと言うことになるのだろう。

『何年バンドやっているとと思うんだ？ それくらいはわかるさ』

あきれたような口調で返す中山さんの声からは、怒りなどの感情は見えなかった。

『あ、そうそう。次のライブだが一週間後を予定しているから、ミーティングと軽い練習をすることになるから、そのつもりで』

「分かった」

復帰後3回目のライブはどのようなものになるのか。

今はわからないが、とりあえずギターの練習の時間を少しばかり増やしておこうと心の中で決めた瞬間だった。

なんだかんだ言っただけで、練習自体がまともにできていないため不完全燃焼中だったりするのだ。

『それじゃ、学園祭楽しみにしてるぞ』

「了解。それじゃ、お休み」

中山さんも「お休み」と返して電話は切られた。

「さて、僕も寝るとするか」

時間を見れば、いい時間帯だったため、僕は明りを消してベッドにもぐりこむ。

こうして、時間は過ぎていき、気が付けば学園祭当日を迎えるのであった。

第23話 学園祭

ついにやってきた学園祭当日。

「いらっしやいませ。こちらへどうぞ」

僕たちのクラスの出し物『喫茶・ムーントラフト』はそこそこ順調だった。

盛況と言うわけでもなく、かといって不況と言うわけでもない。

そんな中、シートで囲まれた教室の一角にて、僕と慶介はボックスタッフとして料理を作るのに専念していた。

向こう側から聞こえる声で、お客が増えたことを知った僕は、慶介に声をかける。

「これでまだオーダー完了で調理が必要な人数が一人増えたな」

「そうだな。くそっ、どうして俺はこんなことをしてるんだ？」

今調理しなければいけない人数は、4人分。

注文の内容も軽食系（サンドウィッチやおにぎりなど）のため、それほど問題にはならないが、人数が増えればそれだけで負担も上がる。

「そっちの方は下準備はどのぐらい進んでる？」

「こっちは軽く20人分ほどはできてるよ」

僕はさらに別の場所で下準備をしているチームのほうに声をかけた。

「俺のボヤキはスルーなんだな」

「そんなどうでもいいことより、ハムとおにぎり3個の調理だ」

「へいへい」

慶介のボヤキは無視して、僕はさらにオーダーされた料理を作るよう慶介に指示を出す。

慶介が外でウェイターをやれない理由は、察していただけるとありがたい。

さて、関係ない話だがこの学園は電力関係の理由で各クラスで利用できる電化製品の数に限りがある。

この場合はご飯を炊くための炊飯器が2台、さらにおにぎりを焼

いたりするためのホットプレートが1台と決められている。
それ以上使うとブレーカーが落ちるのだ。

「つて、落ちた!？」

考えていたところにいきなりブレーカーが落ちたため、僕は思わず声を上げてしまった。

外の方から『何？ 停電?』といった戸惑いの声が聞こえてくる。

「あ、悪い。俺のせいかも。プレート2台使っちゃった」

「このドアホー！」

とりあえず元凶である慶介には鉄槌を浴びせる。

よく見ればハムとおにぎり用で2台も使っていた。

1台壊れた時の予備として、炊飯器とホットプレートは1台余分に用意しているため、気を付ける必要があるのだ。

とはいえ、すでに最悪の事態は起きてしまったわけだが。

とりあえず、悶絶する慶介は放っておき素早くおにぎりをハムと同じ台に入れると、1台のプレートの電源を切って電源コードを抜いた。

これで間違つて使おうとする人はいないだろう。

「そっちの方も復旧次第炊飯をもう一度やり直して」

「分かった」

後ろの方にも指示を飛ばし、混乱を最小限に済ませるようにしている。

すでに完成した料理を紙製のお皿に乗せ、さらにオーダー表に書かれている席の番号を示す番号札をトレーに置くと完成品を置く場所に置いた。

後は運んでいく人が持つていく。

「ちよつと、電化製品は3台までよ！ ちゃんと守ってる?」

「げっ」

向こう側から聞こえた怒りの声に、僕は思わず顔をしかめる。

「悪い。ホットプレートを1台多く使つてたみたいだ。本当に申し訳ない」

「気を付けてよね！ まったく」

慌てて謝罪すると、女子学生はぶつぶつと文句を言いながら去って行った。

「皆さんにも、ご迷惑おかけしてすみません」

そして、お客さんたちの方にも謝罪の言葉をかけて僕はもう一度バックヤードへと戻る。

「浩介、悪い俺のせいだ」

「謝罪をする暇があれば手を動かせ。決まり事を守り借り、効率的に動け」

「おう！」

少しして電力が無事に復旧したため、下準備と仕上げの工程が再開された。

そんな学園祭的一幕であった。

「男の勝負だ！」

「で、それがどうしてここだ？」

こちらの当番が終わったため、自由行動となった。

僕は部室で練習をしようと思っていたのだが、それをしようとする前に慶介に連れて行かれる形に入ったのはお化け屋敷だった。

そして今に至る。

「いや、度胸試しには最適だろ？ 一番ビビらないやつが男だつていう、わかりやすい出し物はここ以外にはないし」

「……………」

ものすごくくだらないと思うが、心の中でとどめておいた。

「にしても、ここはどここのクラスだよ」

連れ込まれる形だったため、どここのクラスかもわからない。

唯一分かるのはここの名前は『悪夢の館』であることくらいだ。

「さあ、行くぞ」

中は薄暗く、足元には赤色の明かりが灯されていた。周囲にある小物が、より一層不気味さを醸したてる。

「わぁ!!」

「ん?」

「うお!!」

まずは小手調べとばかりに現れた幽霊役の女子学生。

僕は首をかしげただけだ。

ちなみに、驚きの声を上げたのは慶介だ。

「……………」

僕は片方は驚き片方は目立ったりアクションをとっていないことに啞然としていいるであろう幽霊役の女子学生をしり目に奥の方へと進むことにした。

そんな中、僕は横にいる慶介のほうに視線を向ける。

「慶介」

「ビ、ビビッてないからな!」

「分かってるから。手を放して。歩きづらい」

まだ何も言っていないにもかかわらず、否定してくる慶介にため息交じりに返す。

怖いのが苦手なら入らなきゃいいものを。

それを言うのは野暮だろう。

この後も色々と幽霊役の学生が脅かしてくるが無事に出口付近までたどり着けた。

「何で、お前は平気なんだ?」

「作りものだってわかっていいるから」

慶介の恨めしそうな問いかけに、僕は簡潔に答える。

もちろんそれもあるが一番の理由は、すでに底に誰かがいることを知っているからだ。

ここにいるのはただの学生。

気配を消すなどと言う芸当は早々できやしない。

そのため、気配から居所を悟って脅かしてくると判断しているのだ。

そこに何かがいって脅かすことがわかっていれば、驚きも半減だ。しかもそれが作り物であることを知っていればなおさら減つていく。

とはいええ、お化け屋敷の楽しみ方には反しているわけだが。

「恨めしや〜！」

「……………」

そんな僕たちを遮るように目の前に現れたのは、骸骨の仮面をかぶった男子学生と思わしき人物だった。

慶介は後ろの方に飛びのいたが、悲鳴を上げないあたりさすがと言うべきだろう。

「ガ、ガオーー！」

動じない僕にヤツケになって驚かせようとする男子学生。

きっと今までで始めて驚かない人が出たために、驚かせようと躍起になっているのか、クラス内で驚かせた人数によってMVPを決めるというものがあるのかもしれない。

とはいええ、

(鬱陶しい)

その一言に尽きる。

もとより、僕には部室で練習しなければいけないため、少し急いでいたりするのだ。

(少し申し訳ないが、やるか)

僕は、心の中で男子学生に謝罪の言葉を送りつつ、それを行うことにした。

「邪魔。退いて」

「恨めしや〜」

僕の言葉に返ってきたのは、時代遅れの脅かし文句だった。

「退いて」

「ガオーー！」

何だか、ちよつと頭にきた。

「退けっ」

「は、ハイイー！」

僕は殺気を目の前の幽霊役の男子学生に放つことで強引に退かせた。

そして、そのままお化け屋敷を後にするのであった。

外に出た僕は、慶介が何かを言うよりも先にその場を後にした。おそらくもう全員部室にいるだろう。

なので、僕はできるだけ急いで部室へと向かう。

「悪い、遅れた」

「遅いぞ！」

謝りながら部室に入った僕にかけられたのは律の咎めるような声だった。

何だか、無性に腹が立ったが、遅れたことは事実なので飲み込んだ。「律たちも今来たばかりだろう」

そんな律に滲は咎めるような視線を律に向けながら指摘する。

「さ、さあ。練習練習！」

そんな律は、まるでごまかすように口にすると練習の準備を始めた。

そんな律に倣い、唯たちも準備に取り掛かるので、僕も準備を始めた。

「それじゃ、最初は『Leave me alone』から」

律の曲のコールに、僕たちは頷くと、律はリズムコールを始めた。

そして、最後の練習は幕を開けるのであった。

ギターとベース、ドラムの音がほぼ同時に終わる。

「よし。まあまあなんじゃない？」

最後の曲目でもある『ふわふわ時間（タイム）』が終わり、感想を律

が口にする。

「滯ちゃん、大丈夫そう?」

「え? う、うん」

唯の問いかけに答える滯だが、その表情はまだ硬かった。

どうしたものかと考えをめぐらせようとするのを遮るように、扉が開け放たれた。

「みんないるわね?」

そう言っに入ってきたのは、顧問の山中先生だった。

「不本意ながら軽音部の顧問になったわけだし、私も何か役に立てないかなと思って、衣装を作ってみました!」

そう言っって山中先生が掲げたのは白地のシャツに赤色のスカートの衣装と黒色に襟元が白いドレスのような衣装だった。

「いや、センス。気持ちはありがたいんだけど……」

「あんな服を着て歌うの? 大勢の前で?」

律の手が指し示す先にいたのは顔面蒼白で固まる滯の姿だった。

確実にタイミングがまずかった。

「うーん。これはお気に召さなかったか。それじゃ……私の昔着ていた衣装はどう?」

「や、やっぱりさっきの服が来てみたくなかった!!」

最初は首を思いつきり縦に振っていた滯だが、山中先生が取り出したなまはげを彷彿とさせるお面のついた衣装を見た瞬間、顔をひきつらせた。

(あんなの、滯じゃなくても着たくない)

「こんな衣装、滯じゃなくても着たくないよ」

それは律も同様だったのか、山中先生を止めていた。

「せっかく頑張っって作ったんだけど……それに唯ちゃんたちは嬉しそうに着ているわよ」

「おいこらー!」

山中先生の視線の先をたどると、そこにはノリノリにスクール水着を着る唯とナース服を着るムギの姿があった。

いつの間に着替えたんだ?

「ところで、山中先生」

「何かしら?」

「男物の服は?」

山中先生の衣装は女性物しかない。

当然だが、僕は男なので、女性物の衣装は着れないし着たくもない。

「ないわよ」

「……………」

さざりと当然だといわんばかりに答える山中先生に、僕は何も言えなくなつた。

まあ、ある意味当然の結果だろうけど。

「それじゃあ、頑張つてね」

そういつて去つていく山中先生。

(どうしたものか)

制服のままだと後が怖いため、衣装を着なければいけないわけだが、女性物だけは着たくない。

「私今ので全部忘れちゃつたよーっ!」

「おいおい」

「練習、しましょう」

頭を抱えて叫ぶ唯に、ムギが手を合わせて提案する。

「そうだな。そうするか。ところで浩介——」

ムギの提案に律は頷き、僕に何かを言おうとした時だった。

「浩介っ!!」

「のわっ!?!」

突然部室のドアが乱暴に開け放たれた。

「慶介ッ! 少しは静かに——うおお?!」

「ちよつと来てくれ!」

そしてドアを開けた張本人は、僕の言葉を遮るようにして腕を思いつきりつかむと、腕を引っ張って問答無用とばかりに部室から連れ出すのであつた。

「離しやがっれ！」

どのくらい引つ張られたかはわからないが、僕は慶介の手を強引に振りほどくことでようやくと止まることができた。

「説明してくれ。これはどういうことだ？」

「実は、歌自慢コンクールに参加するはずだった女子の一人が体調を崩して休んじまったんだ」

僕の問いかけに、慶介は静かに事情を話し始めた。

「練習してきただけに、今更棄権とかはしたくない。だから、浩介に頼みがある」

「まさか……」

慶介の話からなんとなく頼みが何であるのか想像できた。

「歌自慢コンクールに出てくれ！」

「……」

慶介の言葉に、僕は思わず目を閉じてしまった。

「頼むっ！ なんだったたら土下座でもするから！」

「……………そんなのしなくていい」

僕は静かに息を吐き出すと、土下座をしようとしているであろう慶介を止めた。

「ということとは？」

「……優勝できなくても責めるなよ」

「もちろんだよ。助かったぜ」

その僕の言葉に、慶介は答えを悟ったのか手を取ると思いつきり振りかぶった。

「それで、あと一名はどこだ？」

「ああ。あいつだったたら講堂で待っているはず」

「だったら、そこに行っておいた方がいいんじゃないか？」

よく周囲を見てみれば、どこかの通路だった。

「そうだった。ちよつと走るぜ！」

「はいはい」

慶介の言葉に、そう返すとおそらく全力で走っているであろう慶介についていくのであった。

第24話 コンクールとMC

「あ、佐久間君どこに行ってたのよ！ こっちは棄権するかどうかの判断をする期限が迫っているのに」

講堂の方に到着すると短めの黒い髪に、少しばかりおっとりとした感じの目が特徴的な女子学生が慶介を罵る。

「悪い悪い。でも、土産を持ってきたぜ」

慶介は謝りながらそう言うと、横に移動した。

「あれ？ 高月君がどうして」

「慶介に歌えと言われて」

女子学生の問いかけに、僕はそっけなく答えた。

あまり気のりしないのが僕の本音だった。

「良かったあ。これで棄権しなくて済む。それじゃ、実行委員の人に話してくる」

「おう！ 任せた」

駆け出していく女子学生の後姿を見送りながら、僕はある肝心のことを聞くことにした。

「それで、曲目は？」

「そうだった。全部で二曲。一曲は委員会が指定した曲で後一曲がそれぞれで選んでいい曲らしい」

三曲、四曲だったらどうしようかと思ったが、二曲だったら何とかなりそうさ。

僕がコンクール参加を拒否した理由は、“歌う”からだ。

H&Pはファン数を増やすという戦略によって、普通の歌手グループとしての顔を持つ。

尤も、通常の歌の時も生演奏をするように心がけてはいたりする。だからこそ、歌声だけでもDKであることがばれてしまうのだ。

ならば、歌うときにはDKの時の声色で歌わなければいいだけだ。だが、それが長く続くとさすがに疲れる。

主に精神的に。

だが、二曲程度であれば負担は少ない。

後は、難しめの曲を選んでなければいい。

「二曲目は確か『You, re my sunshine』で、二曲目は『天狗の落とし文』って言ったな」

「……………」

「どうやら、かなりの高負担のようだ。」

「一曲めは二か所ほどにラップが入っているだけであとはハモリが主なためそれほど負担は高くない。」

「この曲の主役はあの女子学生なのだから。」

「だが、二曲目の『天狗のお落とし文』はそうはいかない。」

「この曲はラップの中でも高速の部類に入る曲だ。」

「曲の8割が高速ラップなのだから、さらに性質が悪い。」

「とはいえ、決まればかなりすごい曲になるのは間違いない。」

「ちなみに、一度うたったことがあるだけに、この曲の歌声にはかなり気を使わなければいけない。」

「その前に確認すべきことが一つある。」

「慶介、ひとつ聞きたいんだが」

「おう。なんでも聞いてくれ」

「この問いかけの答えで、僕の方針が180度変わることになるのだ。」

「ラップとかはできるか？」

「『You, re my sunshine』のラップ程度だったらできるけど、最後の曲になると無理だな」

「やはり、最後の曲は慶介は無理のようだった。」

「と言うことは、僕が歌うことが必然的になる。」

「嘘ばかり。佐久間君カラオケで歌ったらボロボロだったじゃん」

「ぐっっ！ 少しでもかっこいい男と思わせたい俺の思惑があ！」

「委員会の人に話してきたのか女子学生の指摘に、慶介は頭を抱えて崩れ落ちた。」

「安心しろ。慶介」

「浩介……やっぱりお前はいいやつ——」

「僕の言葉に、顔を輝かせて立ち上がる慶介の言葉を遮り、僕はさら

に言葉が続ける。

「端からそんなこと思っていないし、思うこともないから」

「今の言葉、想像以上にグサツと来たぞ」

再び崩れ落ちる慶介をしり目に、先ほどから視線を感じる方へと顔を向ける。

「えっと……織部さんだったっけ」

「はい、織部 幸恵です」

僕があげた名前に織部さんは名前を述べる。

「相手をするのも、大変じゃないか？」

「確かに……まあ、扱い方さえ分かれば」

僕の問いに織部さんは苦笑を浮かべ崩れ落ちる慶介を見ながら、ポリウムを落として答えた。

まあ、彼ほど扱いやすい存在はいないだろう。

「高月君は、ラップとかできる？」

「下手で良ければ」

織部さんの問いかけに、僕はそう答えるにとどめた。

「だったら大丈夫そうだね。一応今やっているグループが終わったら私たちの番だから」

「何、この俺との扱いの差はっ」

そんな慶介の嘆きと、講堂の方から『ありがとうございます』と言う言葉が聞こえたのはほぼ同時だった。

「もう終わったみたい。さあ、行きましょう」

「了解」

ため息をつきたい気持ちを抑え、僕は崩れ落ちている慶介に喝を入れている織部さんをしり目に講堂の中へと向かうのであった。

「さあ、次は最後のグループです。どうぞ」

ステージで司会を務めているであろう女子学生に促らされ、僕たちはステージに出る。

講堂のステージ上には3台のカラオケ用の機械とマイクが設置されている。

おそらくあのテレビのような機械に歌詞が表示されるのだろう。

来ている生徒数は満員ではないため、これなら変に力を入れなくてもいいと思えるような状態だった。

とはいえ、8割ほどの席が埋まっているため少ないというわけでもないのだが。

「さあ、自己紹介をどうぞー！」

「さ、佐久間慶介です」

「織部幸恵ですっ」

「高月浩介です」

若干だが緊張の色を隠せない二人をしり目に、僕は冷静に名前を名乗る。

冷静にはいえ、緊張していないわけではない。

しっかりと隠し通せるかどうかが心配なのだ。

「はい、どうもー。それじゃ一曲目行ってみよう。最初の曲の曲名は『You, re my sunshine』！」

司会の人の言葉が言い切ると、音楽が流れだす。

それこそが『You, re my sunshine』の前奏だった。

最初は織部さんが歌いだす。

それに合わせてハモリを入れていく。

取る音程は少しばかり高め。

織部さんの歌いだしが終わると、今度は僕と慶介で英語の歌詞を歌う。

練習していた成果か、目立ったスペルミスもなく歌えていた慶介には舌を巻いた。

とはいえ、音程と速度があっていない状態だったが、緊張している中でここまでできるのはかなり伸び代はありそう。

そんな英語の歌詞部分が終われば、再び前奏へと戻る。

落ち着いた曲調から徐々に激しい曲調へと変化していく。

そこに慶介の英語の歌詞が入る。

それが始まりの合図だった。

そう、ラップだ。

結局ラップは僕がやることになり、僕はマイクを口元に近づける。自然とマイクを持つ手に力が入る中、僕はラップパートを歌いだす。

音程は地声に近い感じをキープしつつ、英語のラップを歌っている。

歌っていると妙なざわめきが聞こえてくる。

(集中集中)

ざわめきの方に意識を向けそうになる自分に喝を入れ僕はラップパートを歌い切った。

そして再び織部さんの歌うパートに入っていく。

そこに適度適度に僕と慶介でハモリを入れていく。

間奏の箇所織部さんが再び歌を紡ぎ、サビに入っていくいきAメロに移動する。

そしてBメロが終わると再び間奏に入ると先ほどと同じく織部さんがサビの箇所の歌を歌う。

だが、今度は歌い切ったのと同時に、僕ラップパートがある。

僕は英語のラップを歌い切るが、まだ終わりではない。

もう一度同じような流れがあるのだ。

そこも僕は何とか歌い切ることができた。

残すはサビのみ。

あとはハモリを入れるだけ。

最後は織部さんが見事に歌い切り、一曲目は終わった。

それと同時に講堂内に拍手が響き渡る。

その拍手に、思わずお辞儀をした僕は、ふと横を確認すると二人はお辞儀などしていなかった。

と言うか、余韻を味わっているような様子だった。

「はい、お見事でした。それじゃ最後の曲。私たちが選考した曲です。曲名は『天狗の落とし文』」

司会の告げた曲名に、ついに来たかと僕は心の中でつぶやいた。

「これまでほとんどすべてのグループが、涙を流した最難関曲です。さあ、君たちは見事歌い切れるかな？ それでは、行ってみよう」

二人からの“任せたよ”視線にさらされながらも、ついに曲が流れ始めた。

前奏が流れる中、僕は深呼吸をして歌う音程を決める。

音程は、今まで歌ったことがなく、なおかつこれから先歌わないだろうという音程。

その音程を決めて少しして、ついに高速ラップが始まった。

所々に慶介のハモリが入りながらも、僕は一気に高速のラップを歌い切る。

そしてBメロに入る。

ここからは織部さんが合いの手を入れながら少しばかり速度が落ちたラップパートに代わる。

それを繰り返すと、次はCメロ。

音を伸ばしたり伸ばしてはいけなかったりと少し難しいところだ。

ここは前半を慶介が歌う。

そして僕のラップから織部さんが歌いだす。

そして間奏を経て再びAメロに戻る。

Bメロではラップのテンポが少し変わるため、歌いにくかったりはあるが何とかそこもやり過ぎしCメロに入る。

そしていよいよ肝心のサビだ。

ここは織部さんが主に歌う。

そこに合わせて僕の高速ラップパートを挟む。

そしてサビが終われば、後はラストスパート。

高速ラップのパートを一気に歌い切り織部さんの歌う箇所も何とか決まれば、後は僕が最後の1フレーズを歌った。

そして、あつという間に最難関の曲は終わった。

それから少し間が相手、拍手が鳴り響く。

「どうもー。いやー、まさか本当に歌い切れるとは。私も驚きです」
(あ、やばっ！)

このコンクールで忘れていたが、この後には楽器機材の運搬をするはずだ。

女子だけにそれをやらせるのは男としては問題がある。

(約束は「歌うこと」。最後まで付き合うことじゃないから、抜け出しても問題ないよな)

そう勝手に結論付けた僕は、マイクを素早くカラオケ用の機械に戻すと音を立てずにステージを後にした。

「って、もう運搬されてるし!?!」

舞台そでには、既にドラムやらアンプやらの機材が置かれていた。どうやら手遅れのようだ。

(仕方がない。みんなに謝ろう)

最悪の場合には多少の消費も覚悟しよう。

僕は心の中でそう思うと、足早に部室へと向かうのであった。

部室前に到着した僕は、ドアを開けようとドアノブに手を伸ばす。中からは和気あいあいとした話し声が聞こえているが、安心はできない。

顔を見た瞬間に怒りが込み上げることも十分あるのだから。

「あれ、浩介」

「ご、ごめんなさい。別にサボるつもりはなかったんだ」

突然予想もしない方向からかけられた声に、混乱した僕は言い訳じみた言葉を口にする。

自分で言っていて情けなくなってきた。

「い、いや、別に怒ってないから。浩介の方も色々あるんだろうし」

「って、滯は何をしてたんだ?」

苦笑しながら許してくれた滯に感謝しながらも、僕はふと浮かんだ疑問を投げかける。

機材の運搬だったら、既に終わっているはず。

ならば、滯はすでに彼女たちの話に加わっているはずだ。

「ああ、律に用事を頼まれてそれをやってたんだ」

「あー、そういうことか」

なんとなくだが、律の本心がわかったような気がした。

唯が声を枯らしてしまったため、二曲を歌うことになった漣だが、二曲ボーカルを担当することがわかった瞬間に失神した彼女に機材運搬をさせたらどうなるかは想像するに難くない。

「入るか」

「そうだな」

そして僕は部室のドアを開けた。

「機材運ぶの終わった？」

「あ、漣ちゃんに浩君！」

漣を先に部室に入らせてそれに僕も続く。

「機材運ぶなくてごめん」

「いやいいって。そっちもいろいろ大変だったんだな」

機材運搬を手伝えなかったことに謝罪の言葉を贈ると、何だか悟られたような言葉が返ってきた。

その言葉がとても痛い。

とりあえず、僕はいつも座っている場所に座ることにした。

「あれ、意外と落ち着いてんな。ボーカルやるのあんなに嫌がってたのに」

「子供じゃないんだから、動揺してなんかいられないわよ」

そういうながらムギが注いだ飲み物が入ったカップを手にする漣だが、にこやかな表情と言葉に反して手は小刻みに震え、それは次第に大きくなっていく。

(ものすごく動揺しているじゃないか)

どうやら時間は解決できなかつたようだ。

「もうすぐ本番なのに、どうするんだよ？」

「……もうやだ」

心配そうな律の問いかけに、しばらく間が空いてぼつりと声を上げだした。

「律、浩介！ 私とボーカル変わって！」

「おいおい、ドラムとギターはどうするんだ？」

漣の突拍子もない頼みに僕は呆れながら聞き返す。

「私がやるから！」

「それじゃ、ベースはどうするんだよ？」

「それも私がやるから！」

漣の答えは非常に支離滅裂状態だった。

一人で異なる二つの楽器を弾くのは、世界中を探せばいるかもしれないが絶対に無理だ。

(というより、そんなことしたら逆に目立つだろうに)

そんなどうでもいいことを律と漣がせめぎ合っている光景を見ながら思っていた。

「ごめんね漣ちゃん。私が声をからせなきゃ漣ちゃんが歌うことはなかったのに」

「いや、どっちにしても漣は歌うんだけどね」

何せ、漣がボーカルを担当する曲は最初から一曲あるのだから。

それが一つ増えただけだ。

「やっぱり、私がボーカルをするよ！」

「ダメだからっ！ それ以上悪化しかねないからやめとけ」

僕は何とかボーカルを強行しようとする唯を思いとどまらせる。

そんな唯の様子に、漣は僕たちに背を向ける。

「あ、そうだ。MCとかを考えておかないと」

「えむしー？」

そんな中、律の提案に唯が首をかしげる。

「コンサートとかで曲と曲の合間にしゃべったりする奴のことだよ」

「なるほど」

首を傾げる唯に、僕は説明する。

「みなさーん、こんにーちはー」

突然席を立ったかと思うと、律は漣の横まで移動すると腕を大きく振り上げながら声を上げ始めた。

「軽音部のライブによろこそー」

なぜだか歓声が聞こえてきそうなほどに輝いていた。

そして律は唯とムギの順番でメンバー紹介を始めた。

「ベース&ボーカル！ 怖い話と痛い話が超苦手。デンジャラス・ク
イーン、秋山漣ッ！」

漣の自己紹介を終えた瞬間に、漣の鉄拳が律に落ちる。

「誰がデンジャラスだっ！」

「いたた……ギター！ 正体不明のミスティアスポーイ——」

痛む頭を手で押さえながら、律はさらにメンバー紹介を続ける。

と言うより、それは僕の自己紹介か？

「ハーレム道まっしぐら！ 男の敵！ ハーレム大魔王、高月浩
介ええっ!!」

「「「「……………」」」」

誰のものでもない声が、律の言葉を遮って響き渡る。

よく見れば、いつの間にか軽音部の部室に慶介の姿があった。

「ほう？ 僕は天魔王か」

痛い静寂が部室内を包み込む中、僕はゆっくりと席を立つ。

「トイレは済ませたか？ 神様にお祈りは？ 部屋の隅でガタガタ震
えて命乞いをする心の準備はオーケー？」

「ウ○ルター!？」

どこからともなくツツコミが入るが、それを無視して手の骨をぼき
ぼきと鳴らしながら慶介の方に歩み寄る。

「こ、浩介？ 目が怖いぞ」

「ちよつと二人で話をしようか」

引きつった表情を浮かべる慶介の肩を僕はつかむ。

「ああ！ 俺、大事な用を思い出したからまたあとでな！」

「いいから、来い」

僕は慶介を引きずって部室の外へと向かう。

「ごめんね。僕慶介君ととてーも大事な大事なお話があるから。すぐ
に戻るから、気にしないでねー」

「お、おい！ 誰でもいいから助け——」

慶介が言い切るよりも早く外に出た僕は部室のドアを閉じる。

そして、

「くたばれっ!!」

「ギャー!?!」

いつもの9割増しで鉄槌を浴びせるのであった。
こうして、ライブ前の時間は過ぎていくのであった。

第25話 文化祭ライブ

慶介をいつもより沈めた後、少しして講堂に向かう時間となったため、僕たちは講堂の舞台そでに移動していた。

「うわー、人がいっぱい」

幕の隙間から外を見ていた唯が、声を上げた。

結局ステージ衣装に着替えることになったわけだが、全員ワンピースタイプの服装となった。

唯は白と赤の二色、ムギは黒っぽい色と緑色っぽい色をした服と言った感じに全員の配色はばらばらだ。

「ねえねえ、浩君。似合ってる?」

「似合ってるんじゃない?」

唯の問いかけに、僕は簡単に答えた。

「ありがとー、浩君も似合ってるよ」

「それはどうも」

お礼返しのつもりなのか、笑顔で服装をほめた唯に、僕は投げやりな口調で答えた。

執事服を着て似合っているとされた僕は、素直に喜んでもいいのかが分からなかった。

「今こそ軽音部の力を見せるときっ」

「ちよつと律」

律が意気込んでいると、弱々しい声で呼びかける人物がいた。

「本当にこの格好をしないといけないのか?」

そう言っつて、先ほどから陰に隠れて一向に姿を見せようとしなかった漣が出てきた。

その姿は黒を基調としたメイド服だった。

おそらくは、いつぞやの律の言葉がそのまま形になったような感じだろうか。

「とても似合っておりますわよ。漣ちゅあん」

「ああ、とても似合っている。というか似合いすぎて恐ろしいくらいに」

まるで、メイド服と言うモノが彼女のために存在しているかのよう
な錯覚さえ思えてくる。

(うわ、自分で思っておいてあれだが、寒すぎ)

自分の考えに寒気が走った僕は、先ほどの施行を永遠に抹消するこ
とにした。

「くくく。もうっ！」

『次は軽音楽部による、バンド演奏です』

そんな律と僕の言葉に、顔を赤くして叫ぶ滯の声にかぶさるよう
に、僕たちの出番を告げるアナウンスが流れた。

「それじゃ、いっちょやりますか」

『おおー！』

律の声掛けに右手を上げながら応じた(一名ものすごく弱々しい声
だったが) 皆は、それぞれの配置についていく。

「うわっ」と!」

そんな中、目の前でこけそうになった唯に、僕は色々な意味で慌て
た。

(お願いだから目の前で転ばないで)

思わずそう思ってしまうのは、別に他意はない。

そんな中、僕も自分の配置についていく。

最初の曲目のため、滯の左側に僕そしてその横には唯が立つという
ポジションだった。

(ギターも大丈夫。曲目のコードの方も大丈夫)

軽くギターの弦をはじくことで調子を確認する。

ついでに、最初に演奏する曲と次の曲のコード進行も頭の中で確認
する。

この場には譜面などはない。

つまりは完全に暗記のような状態で弾いていかなければいけない
のだ。

だが、一番問題なのはポジションだろう。

二曲が終われば僕は、唯の左側に移動しなければいけない。

移動する際には細心の注意を払わなければいけない。

もし間違えれば必ず誰かが転ぶことになるからだ。

僕はいいとして唯と漕はスカートと言う服装。

転べば悲惨な結果になってしまうのは目に見えていてる。

そのため、リード線の配置には十分に注意をしなければいけない。

(後方でリード線のわだかまりを作るようにすればいいかな)

演奏中や終了した際に、僕たちは後ろに下がることはない。

(念のために少し余裕を持たせておけばいいかな)

一通りの準備を終えたところで、若干薄暗かった舞台に明かりが灯る。

それと同時に、機械特有の音を立てながらゆっくりと幕が上がっていく。

そして見えてくるのは、ライブを見ようと集まった人たちの姿だった。

確かに唯たちの言っていた通り、かなりの人数が集まっているようだ。

各々がこちらを期待と不安を込められたまなざしで見つめてくる。

その視線は僕に緊張感を生みだすのに十分だった。

(緊張してる？…この僕が)

一応はプロに足掛けていてこの数倍の規模のライブやコンサートに出ている僕が、緊張するということのも非常におかしいことだった。

(ああ、でも。当然なのかも)

今ここにいるのはH&PのDKではなく、軽音楽部の高月浩介としてだ。

ならば、これまでの自分のキャリアはすべてリセットされて当然だろう。

(それよりも……)

僕は、ふと右側から流れってくる異様な雰囲気になって漕の方を見てみた。

「……………」

やはりと言うべきかなんというべきか、そこには観客の人たちの視線に圧されている漕の姿があった。

圧されているためか、緊張しているのかはわからないが若干手が震えていた。

「漣」

そんな彼女に、気づけば僕はそつと声をかけていた。

「大丈夫」

「え？」

何の根拠もない言葉だった。

「怯えないで。もし、ここにいる人が野次を飛ばそうが、瓶を投げようがそれらをすべて応援の言葉と思って、自分の持つ力すべてを出し切るんだ。僕たちの敵はここにいる人ではない、自分自身なんだから」

「浩介……」

気づけば、そんな言葉をかけていた。

僕の言葉に、漣は目を丸くしていた。

(僕には似合わなかったかな)

この間の中山さんとの話に感化されすぎたのか、あの時と同じニュアンスの言葉をかけてしまったのだ。

「うん。やってみる」

一瞬不安にも思ったが、漣から返ってきた言葉に、僕はほつと胸をなでおろしながら頷いた。

そして、後ろに陣取る律の方に顔を向けると、お互いに頷きあった。それが合図だった。

「1, 2, 3, 4, 1, 2!」

スティック同士を打ち鳴らしながらリズムコールを始めた。

リズムコールが終わると同時に、ムギのキーボードがうなりを上げる。

続いて漣のベースと律のドラムが音に命を吹き込む。

さらに唯の単純なコード進行のギター演奏で曲は始まる。

この曲は僕がボーカルを務める。

本来は、サブボーカルがほしいが男性は僕一人なのと、さすがに三曲とも漣に歌わせるのは酷だということと僕一人がボーカルと言うことになった。

時より弦を弾きながら歌を紡ぐ。

(よし、いい感じだ)

練習時に存在したリズムがずれる問題はそれほどひどくはない。とはいえ、若干リズムがずれている。

……主に唯が。

だが、唯のリズムは、間違っていない。

ビートを刻むドラムのテンポがヨレているのが原因だ。

こればかりはどうしようもないので、唯と同じテンポに合わせる。そしてついにサビだ。

僕は複数のコード進行をしながら、歌を紡ぐ。

そしてアレンジを加えた部分もスムーズに終わり、残すは問題の間奏部分だ。

ここからは僕と唯のギターテクが問われる。

ベースの音とドラムの音を頼りに、キーボードのスクラッチ音に乗せて音を奏でて行く。

(おいおい、嘘だろ?!)

速弾きにも近い演奏をしている中、僕は驚きを隠せなかった。

唯都のテンポのずれが、予想よりも少なかったからだ。

音はまったく合っていなかったが、テンポはそれほどずれていないのだ。

とはいえ、ぴったり合っているというわけではないがそれでもずれはそれほど感じなかった。

練習の際には毎回テンポがずれていた箇所が今はぴったり合っていることに、僕は舌を巻いていた。

そして間奏の終わりて音を伸ばしつつ、ビブラートを効かせる。

最後のサビも先ほどと同じ要領でギターを弾いていき、一気にフィニッシュへと向かう。

間奏の最初の部分と同じコード進行で弾き、同時にストロークをして曲は終わった。

終わると同時に、爽快感を感じた。

それはおそらくは、本当の自分の姿で演奏をし終えたからだろう。

H & Pでは、サングラスをして名前も変えているため、偽りの自分のような感じを覚えることもあった。

だが、ここではただの“高月浩介”として、演奏をすることができ
る。

それは、とても幸せなことだった。

そんな僕と唯たちに、凄まじい拍手の音が襲いかかってきた。

その歓声が僕たちにとっては、最高の贈り物だった。

「……皆さん、初めまして」

マイクを握り、この場にいる人たちに向けて話しかけた。

「今回は、私たち軽音楽部のバンド演奏を聴いていただきありがとうございます
ございます」

僕のその言葉に、講堂内はまるで波を引くように静まり返る。

「僭越ながら、バンドメンバーの紹介をさせていただきます」

そう告げて、僕は横にいる唯に視線を送る。

「まずはいつものんびり、ギター兼ボーカル担当平沢唯っ」

「こんにちはー」

僕の紹介に続くように、横に移動していた唯は、僕が明け渡す形で
マイクの前で手を振りながら挨拶をした。

それに合わせて拍手が鳴り響く。

その拍手が静まるのを確認して、さらに

「続いて、人見知りか玉に瑕、クールビューティーなベース兼ボーカル
担当。秋山濤っ」

「ど、どうも」

僕の紹介の口上に恥ずかしそうに挨拶をする濤だったが、一瞬こっ
ちに恨めしそうな視線を送ってきた。

（これは、あとで覚悟をした方がいいかもしれない）

僕は、ライブ終了後の悲劇を覚悟した。

「続いて、いつもニコニコ朗らか、キーボード担当琴吹紬っ」

「こんにちはー」

手を上げながら挨拶をするムギに拍手が送られる。

「そして、いつもマイペースなドラム担当、田井中律」

「どうもー……って、私だけ扱いひどくない!？」

挨拶をしながらツツコんでくる律に肩をすくめることで返す。

「以上で——」

「最後に正体不明のミステリアスボーイ、ギターとボーカルの高月浩介」

終わらせようとする僕の言葉を遮るようにして、唯が僕の紹介をしてくれた。

自分で自分を紹介するのも少し恥ずかしいのでやめていたため、少しうれしくはあるが”ミステリアスボーイ”だけはやめてほしかった。

「さあ、次の曲に行きましょう。次の曲は……」

「Don't say Lazyです」

僕の言葉を継ぐように唯が曲名を口にした。

(唯にはMCの才能が有りそうだね)

もう少しばかり様子見が必要だが、もしあるのならMCは唯に一任しよう、僕は心の中で決めていた。

そして律がスティック同士を合わせる音を立てる。

それが曲の開始の合図。

そこからファイルで始まり、ベースとキーボードそしてギターが産声を上げる。

それと同時に僕と漣で歌を紡いでいく。

一定のテンポで弦を弾きながら歌っていく。

Aメロは簡単な上下のストローク。

音を伸ばさないように適度にミュートをしながら進めていく。

(それにしても、やっぱりこの曲のボーカルは漣が似合う)

隣で漣の歌声を聴きながら、僕はそう感じていた。

Bメロでは1, 2コードを短く伸ばしあとは長く伸ばしながらビブラートを効かせるのを繰り返す。

そしてサビに入る。

これは最初の時と同じ要領で弾いていく。

サビを謳い切ったところで、再びキーボードとベースの音色が輝き

だす。

ドラムの方もタムとシンバルを巧みに利用してビートを刻んでいた。

そしてまた2番のAメロに入るのだが、ここで僕はあることをすることにした。

それは歌わないということだ。

僕が歌わないとなると、必然的に濬がソロで歌うことになる。

だが、1番と2番の差を醸し出すには非常に適しているので、僕は一步弾いて歌うのをやめた。

一瞬驚いた様子で僕の方を見てきたものの、濬は歌を紡ぎ続けた。そしてBメロとサビに進んでいき、いよいよ問題の間奏だ。

ちなみに、サビのところだけはちゃんと僕も歌った。

ここで一番大変なのは、ドラムだろう。

ヨレないように、リズムをとり続けるというのはかなりの神経を使う。

ここでいかにヨレを小さくさせられるかが、重要だろう。

僕と唯のギターに相槌を入れるようにシンバルを打ち鳴らすと、ハイタムとロータムが音に力強さをつける。

さらにそこにキーボードの音加わる。

ギターのコードは繰り返すことになっているので、それほど難しくはない。

(……あ)

一瞬僕の方でリズムをずらしてしまった。

だが、慌ててリズムを修正したためキーボードとドラムの音がブレイクする前にほぼそろえることができた。

間奏の後はBメロの箇所コード進行で行き、サビへと入る。

そして一気にかけていき、ムギのキーボードの音色を前に出しつつ最後はドラムの音で締めくくった。

それが、曲の終わりだった。

「ありがとう」

再び送られる拍手の嵐に手を上げつつお礼を述べると、さっそく次

の曲紹介に移る。

「さて、名残惜しくはありますが、次の曲で最後となります。曲名はふわふわ時間タイムです」

僕は曲名を言うと、唯に右側に移動するように促しながら左側に移動する。

必然的に僕はマイクから遠のくが、これでいいのだ。

最後の曲は滯と唯のツインボーカルなのだから。

「1, 2, 3, 4, 1, 2!」

律のリズムコールと同時に、僕と唯のギターの音色が産声を上げる。

3曲目ともなると恥ずかしさも多少は和らいだのか、小さいながらも手拍子をしている滯をしり目に、僕はミュートを駆使しながら弦を弾いていく。

さらにそこにキーボードとベースにドラムの音が加わる。

そしてついに歌が始まった。

滯のクールビューティーな歌声がふわふわな曲を引き締めていく。

僕たちはそれに合わさるようにしてギターを演奏する。

片思いをしている相手に思いをはせているといった感じの曲調(たぶん)は滯にあっていた。

この曲は全体的にベースが大きく存在感を示す曲と言ってもいいだろう

滯の演奏するベースが小刻みに音を重低音を与えていく。

サビの部分は唯と滯のコラスだ。

ただ、唯の場合は喉が枯れているので少しばかりあれだったが、きつとそれも後ほどに思い出となるに違いない

サビが終われば最初の時と同じ要領で弾いていくが一瞬だけブレイクし、無音状態となる。

そこに滯の歌声が先行する形で2番が始まる。

2番も1番と同じ要領で演奏をしていく。

サビが終わればやってくるのは間奏だ。

ドラム以外の音が消え、タムの音のみとなる。

そこにベースの音がよみがえり、そこにキーボードとギターの音が加わっていく。

やや速いテンポでコードを変えながら小刻みに演奏していき、最後は軽く音を伸ばすことで一度ミュートにする。

それに続いてドラムやキーボードにベースの音も止まり、それと変わるようにしてギターで軽く音を奏でながら滯がソロで歌う。

そして、一気にギターの音色を変えると止まっていた楽器の音色が再び音を奏で始める。

そして訪れるはセリフの部分。

ここは単調に一音あげてまた下げてを繰り返す。

だが、そこで予想外の事態が起きた。

「浩介も歌おう歌おう！」

「そうだ、歌おう！」

「へっ!? ちょっと?!」

いきなり歌詞を変えたかと思うと、僕は強引にマイクの方まで押される。

混乱しているうちにも、ワンコーラスが始まろうとしていたため、僕は慌てて歌を紡いだ。

混乱しながらもちゃんとギターを弾いて歌うことができた自分に褒めてあげたいくらいであった。

そして最後は曲名の部分を僕が滯の後に続いたり、僕が先に言ったりを繰り返しつつ、最後はギターの音を限界まで伸ばし、キーボードの音色に導かれるようにすべての音と同時に音を止めた。

そんなハプニングはあったものの、何とかすべての曲目を演奏しきることができた。

そして響き渡る拍手の音は、これまでよりもはるかに大きく感じられた。

(これで、この後のライブも滯がボーカルを引き受けてくれるようになるかな)

そう考えれば、今回のライブは非常に最高の結果とも言えよう。

だが、運命というのは時に残酷だ。

「うわあ!?!」

「み、漕」

「漕ちゃん!?!」

予想していた最悪の事態が発生してしまったのだから。

しかも原因はリード配線だったのがさらに残酷すぎた。

「いたた……」

怪我はないようでゆっくりと立ち上がるが、観客の方からざわめきが走った。

「え?」

その理由を理解できない様子の漕が首をかしげるが、自分の体制を思い出した漕は顔をこわばらせていく。

その体制というのは観客の方向に足を向けている状態だ。

しかも、転んでいる状態であってそれがどういうことを示すのかという……

(本当にスカートをはいた状態で転ぶなんて)

そういうことだ。

そんな漕に止めを刺すように、パシヤリと写真の撮る音が聞こえた。

「い………いやあああああっ!!」

そして、この日一番の漕の悲鳴が学校中に響き渡るのであった。

「皆、お疲れ」

『お疲れ様』

あのライブから数日。

文化祭の余韻も徐々に抜けつつある中、少しばかり遅い労いの言葉がかけられた。

とはいえ、片付けなどの作業があったため十分に遅いというのはお

かしいが。

「唯は初ライブにしてはなかなかの出来だった」

「いやあ〜」

律の評価に、嬉しいのか照れたように頭を掻く唯の姿をしり目に、律はさらに言葉を続ける。

「浩介と漣にはファンクラブもできたしな」

「うわあ、すごいね〜!」

律の取り出した僕と漣のファンクラブ会員募集のチラシに、目を輝かせながら覗き見る唯とムギに僕は現実逃避がしたくなった。

文化祭でのコンクールとライブが相まって、なぜか僕のファンクラブまでできてしまったようなのだ。

(まあ、これもいいこと……なのかな?)

「まあ、当の本人は再起不能だけだな」

律の視線の先には、部屋の隅でうずくまっている漣の姿があった。先ほどからぶつぶつとつぶやいており、どことなく灰になっているような印象が感じられた。

あのライブでの転倒事件から、ずっとあのような感じなのだ。

彼女の傷が癒えるまで、もうしばらくの時間が必要なようだった。

こうして、僕たちの初めてのライブは上々の出来という結果で幕を閉じた。

だが、この時の僕はまだ知る由もなかった。

この自分の考えがどれほどまでに甘いのかということに。

それを知ることになったのは、ライブが終わってから数日ほど経った日のことだった。

あのような言葉を告げられたのは。

『お前、軽音楽部をやめろ』

第26話 動く者

それはある日の放課後のこと。

「あ、さわちゃん」

「あなたたち今日もお菓子を食べてるの？」

軽音部の部室である音楽準備室を訪れた、さわ子はいつものようにお菓子を食べているのを見て声を上げた。

「お茶とお菓子が我が部の売りなもんで」

「律、ここは演奏をする部活動だぞ。それは売りにはならないだろ」

お菓子（今日はモンブラン）を口にしながら答える律に、同じくお菓子を食べながらツツコミを入れる滯。

「あれ、そういえば高月君の姿が見えないようだけど」

「あ、浩君だったら何だか用事があるらしいから、来ていません」

ちゃっかりとお菓子を舌鼓を打つさわ子の疑問に、唯はホワイトボードの方を指差しながら答えた。

それにならってさわ子もホワイトボードの方に視線を向ける。

ホワイトボードには唯達による落書きなどが書き込まれているが、その一部分にホワイトボード用のペンで四角く囲まれている個所があり、その囲いの中には『今日は休養のため部活を休みます。高月』と簡潔に記されていた。

「それにしても、浩介ってなんとなく不思議だよな」

「ん？ どこが？」

不意に浩介の話に話題が変わり、律の言葉に滯は聞きかえした。

「だってさ、知り合いのギタリストに頼んで二つ返事で唯のギターを予約とかするし。不思議そのものじゃん」

「はい？ りつちゃん、今なんて？」

“ あー、確かに ” と相槌を打つ滯をよそに、律の言葉に引つかかったださわ子が、信じられないと言った様子で問いかける。

「知り合いのギタリストに頼んで唯のギターを予約したっていうことですけど……どうしたんですか？」

「その知り合いのギタリストって誰——「DKです」——そ、そう」

さわ子の疑問に間髪を入れずに応えた滯の勢いに、さわ子は軽く圧されながら相槌を打った。

「あー、私今日はちよつと仕事があるんだった」

「そうなんですか」

「だったら、どうしてここに来たんですか？」

思い出したように、言いながら席を立つさわ子に紬は残念そうな言い、律はジト目で疑問を投げかけた。

「お茶をするのもいいけど、ほどほどにね？」

『はい！』

顧問らしく注意をしたさわ子は部室を後にした。

「教師って、いろいろあるんだな」

「律ちゃん、そのキャラに合わないよ」

腕を組みフムフムと頷く律に、唯は容赦ない一言を放つ。

「そんなことを言うのはこの口かー」

「いひやいひよ、ふいつひゃん！（痛いよ、律ちゃん）」

「ふおら、ふあたふいのほつふえをふへふな（こら、私のほつぺをつねるな）」

「……何をしてるんだ？ 二人とも」

お互いの頬をつねりあう二人に呆れたようなまなざしを向けながら口を開く滯と苦笑している紬。

軽音部は、今日も通常運航だった。

一方、職員室へと戻ったさわ子は真剣な面持ちのまま席に着く。

（おかしいわ）

心の中でつぶやいたのは、違和感だった。

さわ子は、急な仕事などは特になかった。

さわ子にとって、軽音部の部室は砂漠の中にあるオアシスのような

ものであった。

その理由の一つにお菓子やお茶などがあることも含まれているのはご愛嬌だが。

そのひと時を棒に振ったのが、さわ子の感じた違和感だった。

(いくら知り合いとは言ってもプロのギタリストが、二つ返事でレスポールの予約をするかしら?)

もしかしたら、そういう可能性もあるのかもしれないが、さわ子の中ではあまり釈然としなかった。

(DKと言えば、H&Pのギタリスト。本名も不明だけど、その腕は他の誰にも追隨を許さないほどうまい)

さわ子はDKに関して知っている情報を頭の中で整理する。

(……………いけないわね)

だが、考え始めたところでさわ子はそれをやめた。

それは教師として生徒のことを探ってはいけないという自制心が働いたからである。

「さて、仕事仕事」

ちようどいい機会だとばかりに、さわ子はそれほど急を要しない事務作業に取り掛かるのであった。

「ただいまー。とは言っても、誰もいないんだけどね」

いつもより早めに自宅に戻ったさわ子は、自虐的な笑みを浮かべながらつぶやきながら、バックを床に降ろす。

さわ子は、テーブルに置かれたリモコンでテレビをつけるとビデオなどが置かれている棚から一本のパッケージを取り出すと、それをDVDプレーヤーに読み込ませる。

しばらくして、画面に映し出されたのはH&Pのバンド演奏の模様だった。

『H&Pライブ総集編』と題されたそれは、文字通りH&Pのライブでもっとも好評だった曲の演奏シーンが収録されていた。

放課後でのやり取りでH&Pの演奏を見たくなつたためだ。

「……………え？」

最初に聞いていた曲が終わり次の曲、『Leave me alone』の演奏が始まりDKが歌いだした瞬間、さわ子はまるで体に電流が走つたような錯覚を感じた。

そして、慌てた手つきで巻き戻すともう一度再生を始める。

「やっぱり、似ている」

さわ子は、DKの歌声がかすかにではあるが浩介と似ていたことに気が付いたのだ。

(いや、でも気のせい……………他人の空似と言うこともあるわよ)

結論を出そうとする自分に言い聞かせるようにさわ子は心の中でつぶやく。

(そういえば、DKは三年ほど活動を休止していた。そして高月君は三年ほどイギリスに留学をしていた……………偶然よね?)

考えれば考えるほど、否定をする材料がなくなっていた。

「それなら、実際に生で演奏を見ればいいのよ」

テレビで聞いたために、もしかしたら歌声が似ているという可能性もあつたためにさわ子は実際にライブを見ることを決めると、すぐさまパソコンを使ってライブの日程を調べたのであった。

★★★★★

その場所に行くのに、とても神経を使う。

この日、僕は中山さんたちからある場所を訪れるようにと告げられていた。

その場所は僕たちが契約している事務所だ。

名前を『チェリーレーベルプロダクション』という。

荻原さんの父親が社長を務める事務所だ。

僕がH&Pを結成するとき契約を交わしたのだが、当初はいつ潰

れてもおかしくない状態だったらしい。

アイドルグループやH&Pを含むバンドグループが所属している。活動面に関して、社長は特に制限は設けていないが、必ず事前報告をするようにと言われている。

なんでも金銭トラブルを防ぐためらしい。

その事務所は、僕が住んでいる場所から電車で二駅ほど離れたところにある。

そのため、僕は電車に乗り込んで事務所のある駅で降りると駅前に出る。

そして駅前に停められていた個人タクシーに乗り込むと、行き先を告げるよりも早くタクシーは動き出した。

「いつも、大変ですね。DKさん」

「まあ、慣れっここですよ。それに、大変なのはお互いお様じゃないですか」

運転手の言葉に相槌を打つと、『それもそうですね』と苦笑した様子の言葉が返ってきた。

この運転手の人は、事務所が雇っている個人タクシーなのだ。

事務所が雇っていると知られないために、内密に契約が結ばれていたりするほどの徹底ぶりだ。

これも、僕たちの正体を隠すための手段だ。

タクシー内でいつもの黒づくめの服装に着替え、黒のサングラスをつける。

タクシー内ほど、着替えるのに最適な場所はない。

なぜなら、走っている間であればよほどのことがない限り車内は見えないこともないからだ。

素早く着替えさえすれば着替えている最中のところを誰かに見られる心配がない。

とはいえ、絶対に大丈夫というわけではないが、これまで何度もこの方法を使っているが僕の正体に関する記事は出たことがないので、それほど心配する必要はないと思っている

(尾行する車もないしね)

まるでVIPだなど思いながら着替え終えた服と学校の鞆を黒いバックに入れると事務所前に向かうのであった。

「おはようございます」

「おはよう、DK」

「おう、DK」

挨拶をしながら中に入ると、ベンチに腰掛けていたMRやYJが挨拶を返してくれた。

事務所内は昔と変わらず一人一人が通るのがやつとの狭い通路があり、その先の開けた場所には緑色のベンチが置かれていた。

そのベンチに腰かけているのがMRにYJたちなのだが。

開けた場所は無機質な机が並べられており、そこにはいろいろな書類が置かれている。

窓と反対側の壁にあるホワイトボードには事務所にも所属する団体や人たちの予定が所せましとばかりに書き込まれていた。

「他の人は仕事なのかな？」

「ああ、そうだよ。寝る間もないとはこのことを言うのだね」

僕の疑問に答えたのは、先ほど僕が通った狭い通路から現れた口元にひげを生やした男の人だった。

「社長、こんにちは」

「ああ、こんにちは。DK君」

目の前の男……社長は僕のあいさつにやわらかい笑みを浮かべながら挨拶を返した。

「さて、H&P全員そろったようだしミーティングを始めるとしよう」

そう言っつて、ベンチに腰かけてテレビを見ていたMRたちを集めた社長は咳払いをすると口を開いた。

「数日後に開かれる定期コンサートだが、今回は席がほぼ埋まってい

る。これは、君たちへの期待の表れだ」

「つまり、その期待に応えられるようにしろ、ということですか？」

社長の言わんとすることを口にしたMRの言葉に、社長は嫌な顔一つせずに頷いて答えた。

「それだったら、言われなくてもわかってるさ。それに、俺たちは客が多かろうが少なかろうが、いつでも全力でやるさ」

「……その言葉を聞けて安心した。今回はDK君が復帰して初めての定期コンサートだ。三年という時間が人を変えることすらある」

きつと社長は不安だったのだろう。

僕たちの誰かが考えを変えてしまうことに。

“たとえお客が一人でも、その一人を満足させられる演奏をする”

それが、僕たちH&Pの誓いの言葉だった。

いま、ここまで有名になれたのはこの言葉のおかげではないかと思っている。

「だが、皆は変わっていない。それを私は確信した。数日後のコンサート、全力で演奏するように」

『はいっ』

社長の言葉に、僕たちは声をそろえて返事をするのであった。

それから一週間後の放課後のこと。

「浩君、帰ろう」

「あ、ごめん。今日ちよつとやることがあるから先に帰ってくれるかな？」

部活を終えて帰り支度を済ませた唯たちが部室の出入り口の前で、

“一緒に帰ろう”と声を掛けてくるが、僕はそれを断った。

「やることって、まさか如何わしいモノを読むためとか？」

「ええ!? そうなの？ 浩君」

「そんなわけないでしょ。古文の課題が今日までだからそれをやるだけだ」

律の言葉を真に受けた唯が驚きながら聞いてくるが、僕はそれをため息交じりに一蹴した。

「何だか、大変なんだな。浩介も」

「まあ、自業自得ではあるけど。そういうわけで、先に帰ってて」

気遣うように声を上げる滯に相槌を打ちながら全員に帰るように促した。

「それじゃあね、浩君」

「頑張れよー」

それぞれが別れの言葉や応援の言葉などを掛けながら、部室を後にしていった。

「……………」

人の気配を確認してみるが、四人分の気配が徐々に遠のいて行っていた。

帰ったと見せかけて中の様子を見るという古典的なことはしなかったようだ。

「みんな帰ったので、出てきたらどうですか？ 山中先生」

「……………気づいてたのね」

僕の呼びかけに答えるように音楽室とここをつなぐ扉が開き、中から山中先生が姿を現した。

「そりゃ、まあここ最近妙な視線を感じてましたから」

山中先生の僕を見る目つきがおかしくなったのを感じるようになっていた。

それは妬みや恨みと言ったの負の感情というよりは、僕に聞きたいことがあると言いたげな視線だった。

「それで、話はなんですか？」

「……………」

僕の問いかけに、山中先生は気まずそうに視線を周囲に向けるが踏ん切りがついたのはきりつとした表情を浮かべた。

「この間、あるバンドのライブを見に行ったのよ」

「はい？」

突然山中先生の口から語られた話の内容に、僕は思わず首をかしげてしまった。

「そのライブのボーカルの人の声と演奏の仕方が、似てるのよ。君に」
「……………」

今度は僕が固まる番だった。

それは衝撃と言うより驚きの方が勝っていた。

まさか声と同じであると気づかれるとまでは思っていなかったのだ。

ライブをするときは、いつも地声を出さないように声色を変えている。

だが、完全に隠すことは不可能で、どうしても要所要所で地声が出てしまう。

でも、普通の人の耳ではそれを判別することはほぼ不可能に近い。

その証拠に滯と話していてもそういった反応はない。

尤も、彼女とちゃんと話せた時間が短いので、そのためなのかもしれないが

「もちろん、他人の空似であるという可能性もあるし、私は無理に答えるように強要するつもりはないの」

考えをめぐらしている僕に、山中先生はさらに話を進める。

(教師と言う権力を振りかざさないなんて。本当にいい先生だ)

権力と言う武器を振りかざしてしまえば、僕は話さざるを得なくなる。

それでも、山中先生は僕が自分から応えるのを待っていた。

僕は山中先生がものすごくいい人だと改めて実感することになった。

「ただ、もしそうなのだとしたら、聞きたいの」

「何をですか？」

僕は、山中先生にさらに続きを促した。

「どうして、ここにいるのかを」

「……………」

山中先生のその言葉は、僕の心に凄まじい衝撃を与えた。

「最高の演奏の腕があるのに、あえてそれを隠してまでここにいる理由がわからないの。見下すためとか、遊ぶためとかそんな理由だとは思っていないけれど」

「……………」

山中先生の話を聞き終えた僕は、静かに息を吐き出す。

「山中先生」

「何かしら？」

僕は覚悟を決めた。

「今から話すことは、他言無用でお願いします」

「もちろんよ。生徒の事情は安易に漏らさないわ」

僕のお願いに、山中先生は即答で答えた。

自分の正体を話すかどうかは、僕自身にゆだねられている。

つまり、僕が話したいと思ったらいつでも話してもいいということだ。

「先生の考えている通り、DKは自分のことです」

そして、山中先生が最初に僕の正体を話す人となるのであった。

1年生編 『クリスマスと新たなる始まり』 第27話 正体とクリスマス

「先生の考えている通り、DKは自分のことです」

僕の言葉に、山中先生は表情を変えることはなかった。

「見下すとか遊びという見方もできなくはないですね。別に否定はしません。もしかしたら、自分が知らないところでそう思っているところもあるかもしれませんから」

僕自身には他者を見下すつもりは全くないが、もしかしたら心の中ではそういう風に思っているのかもしれない。

僕は“ただ”と言葉を続けた。

「ここにいれば、僕は“DK”ではなく、“高月浩介”として演奏ができます。だからここにいるのかもしれないですね」

DKと言う偽名を名乗って、有名になっていくにつれて気づくと僕は複雑な状態になっていた。

それは、ただの学生としての高月浩介と有名なギタリストに名を連ねるDKという二つの顔。

両極端なそれは、時折僕自身に疑問を抱かせる。

どっちが本当の自分なのだろうか？——と

正体を明かせばいいのではないかと言うことになるのかもしれないが、今はまだ高校生。

さすがにそれをするのは憚られる。

それに、やはりDKである僕のおかげでH&Pが有名になれたという評価が気になっていた。

「……そう」

僕の話に、山中先生は申し訳なきような表情で応えた。

「それに、彼女たちはいっしょに僕すらも驚くような最高の演奏をしてくれる。……根拠はないんですけど、そんな気がするんです。だから僕はそれを見てみたいんです」

「そういうことだったのね」

山中先生は否定することもせず、頷きながら相槌を打つ。

田中さんにこの話をしたら、きつと小言とかを言われるかもしれないがそれでも僕は今の言葉を撤回する気はない。

「あと、くれぐれもこのことは——」

「分かってるわ。誰にも話さないわ。さすがに教え子のことをペラペラと話すのは教師失格だからね」

僕の言葉を遮って、笑い飛ばすようにそう告げる山中先生のことを信じることにした。

普段はあれだが、教師としてはとてもいい人なのは確かなのだから。

(あ、そういえば)

「あの、先生。もうひとついいですか?」

「何かしら?」

そんな時、ふとあることを思い出した僕は、ダメもとで山中先生に訊いてみることにした。

「サインとか、もらえませんか?」

「……ごめんなさい。今なんて言ったのかしら?」

僕のお願いに、目を丸くしながら聞きかえしてくる山中先生に、やっぱりかと思いつつ事情を説明することにした。

「普段は物静かな性格だけど、楽器を手にすると異様に性格が変わるベースリストがいます、その人がDEATH DEVILのキャサリン……つまり山中先生の大ファンなんです。前にサインがほしくて言っていたので」

「そ、そう。嬉しいような悲しいような。まあいいわ。ちよつと待っててね」

ダメもとだったのだが、どうやらOKのようでどこから取り出したのか、色紙にサインペンで書きこんでいく。
(どうして色紙なんて持つてるんだろう?)

世の中には、僕にも分からないことが多くあるようだった。

「はい。これをその人に渡してね。ただし——」

「山中先生の名前は決して言いませんので、安心してください」

山中先生の言わんとすることを察した僕は、先生の言葉を遮って応えた。

「お互い、正体を隠すのに苦労するわね」

「ええ、全くです」

山中先生もDEATH DEVILでのことを隠している（と言えるのかどうかは定かではないが）あたり、共感できるところがあった。

「それじゃ、僕はこれで。さようなら」

「さようなら」

僕は手早く荷物をまとめると、先生に一礼して部室を後にした。

（さて、古文の課題を提出しないと）

担当の先生から書き直して再提出されるように言われた課題を提出するべく、僕は職員室へと向かうのであった。

これは余談だが色紙を荻原さんに渡したところ、とても喜んでくれた。

それは嬉しさのあまりに気を失うほどに。

ちなみに、荻原さんを起こすのにかなりの時間がかかることになるのだが、それはどうでもいい話だろう。

それからしばらく立った日の朝。

「何だか変に時間が余った」

いつもより早く目が覚めてしまった僕は、朝食を早めにとったのだが、やはりと言うべきかいつも家を出る時間よりかなり早い時間には準備ができてしまった。

（早く行くのもいいけど、どうせならのんびりしたい）

せっかちすぎるのもあれなので、結局僕はいつもの時間までニュース番組を見ることにした。

「続いてのニュースです」

先ほどまで報道していたニュースから話題を変えるように、女性ア

ナウンサーが告げると遅れて画面下にニュース内容が表示された。

「——町にて、女子高生が何者かに切りつけられる事件が発生しました」

「ん？」

告げられた内容に、僕は眉をひそめる。

そんな僕をよそに、ニュースはさらに続く。

「先日午後6時ごろ、人が血を流して倒れているのを近所の住人が発見し通報しました。女子高生は病院に搬送されましたが搬送先で死亡が確認されました」

「……………」

あまりにも悲惨な結果に、思わず右手を強く握りしめていた。

それは僕の中にあるかすかな正義によるものなのか、それとも職業病だろうか？

「警察は手口や時間帯が二日ほど前から発生している連続通り魔事件と酷似していることから、同一人物による犯行と断定し犯人の行方を追っています」

「やっぱりあの通り魔事件か」

——連続通り魔事件。

それは三日ほど前から発生している事件だ。

最初は今回の事件が発生した場所から二駅分離れた場所の住宅地でそれは起こった。

帰宅途中の女子高生が何者かに切り付けられたのだ。

その次の日の同じ時間帯に今回の事件が発生した場所の隣の住宅地でも帰宅途中の女子高生が何者かに切り付けられた。

二件とも通報が早かったため、幸いにも一命を取り留めることができたが、今回はそうではなかったようだ。

(二日に二駅分移動しているな)

犯人は、どういう理由なのかは分からないが一駅ずつ移動して犯行に及んでいる。

だとすると、次の犯行場所は自ずと分かってくる。

「もし、今日もあるのだとすれば。それは……………ここか」

二日ほど前から徐々にこちらに近づき、そしてとうとうここへとたどり着いた。

もちろん、これは僕の勝手な憶測だが注意するに越したことはないだろう。

(部活の時に言って早く帰るように促そう)

僕はそう心の中で決めると、出るのにちようどいい時間帯だったのでテレビの電源を切って家を後にするのであった。

季節とはすぐに移ろうものだ。

「今日も冷えるな〜」

冬真っ只中の12月。

僕は、寒い風が吹き付ける道を歩いていた。

「浩く〜ん!」

「ん?」

背後からかけられる声に、僕は声のした方へと振り向く。

「唯に憂か」

「おはよう、浩君」

「おはようございます。浩介さん」

いつものように変わらぬにこにここと幸せ全開の表情を浮かべている唯たちの姿があつた。

いつもと違うのはマフラーを一緒にかけていたり手をつないでいたりしていることだが。

「おはよう二人とも。今日も仲良しだよな、二人とも」

「えへへ〜、そうでしょそうでしょ〜」

僕の言葉に、嬉しそうに反応する唯。

憂の方を見てみると、同じく嬉しそうだったのでまんざらではない様子だ。

「うんうん。仲好きことは良きかなよきかな」

不仲よりは断然いいので、僕も頷きながら歩き始める。

「あ、待ってよ浩君！」

「はいはい」

歩くのが早すぎたのか、遅れ気味の唯たちに呼び止められた僕は、二人が追いつくのを待つことにした。

(できれば、ここで“浩君”と大声で呼ぶのはやめてほしかったりもするんだけどね)

おそらく言っても無駄なので、口には出さずに心の中で苦笑しながらつぶやいた。

現に、周りから視線を感じるような気がする。

そして追いついた二人に、僕は歩調を合わせる。

「それにしても浩君は寒くないの？」

「なぜに？」

突然そんなことを聞いてきた唯に、僕は首を傾げながら理由を尋ねた。

「だってマフラーとかコートとかを羽織らないのに平気そうにしてるから」

「カイロとかをつけてるんですか？」

二人から理由を聞いて大体把握ができた。

「いや、生まれてこの方つけたことはない」

ここにきて初めて知った“カイロ”という便利な道具。

とはいえ、僕には必要なものではなかったのでこれまで使ったことがない。

「そうなんですか!？」

「ずる〜い」

「いや、ずるいと言われても」

唯の非難に、僕はどういえばいいのかがわからずそれしか口にできなかった。

「皆——！ クリスマス会をしようぜー」

「クリスマス会？」

放課後、いつものように部室で部活動（とは言ってもお茶を飲んだりしているだけだが）をしている中、突然切り出したのは律だった。

「クリスマス会なんて聞いていないけど」

「うん、今話したばかりだから。これがそのチラシ」

人数分用意していたのか、律からクリスマス会に関するチラシを一枚受け取った僕は、それに目を通す。

そこに書かれていたのはこんな内容だった。

——クリスマス会——

日時：12月24日

場所：ムギの家

会費：一人1000円

「おい、人の家で開催するのになぜお金を取るんだよ」

「いいじゃん、いいじゃん」

ムギからも会費を取るのだろうか？

だとしたらものすごくあれなことになりそうなんだが。

「ごめんなさい、その日は都合が悪いの」

「あ、やっぱりだめか」

律も想像はついていたのか、無理だと言うムギに対してすんなりと引き下がった。

「私の家は毎日何がしらかの予定があつて、一か月前に予約をする必要があるの。本当にごめんなさい」

（一体どんな家なんだ？）

野暮だとは思わが思わず心の中でそうつぶやいてしまった。

それはともかくとして、ムギの家がだめになったことで代わりの場所を決めることになった。

「律ちゃんのお家はどうぞ?」

「あー、ダメダメ。律の部屋は足の踏み場もないほどに散らかっているから」

最初に白羽の矢が立った律の家だが、漣によって却下された。

……何となく容易に納得ができてしまう自分が恨めしかった。

「なにをー!」

漣の言葉に食って掛かる律だったが、意外なことにたった一言だけだった。

静かに席に着いた律がにやりとほくそ笑む。

「漣の部屋は服が脱ぎ散らかしてあるもんな。下着とか」

「なっ!?!」

律の言葉に、漣は一気に頬を赤らめさせる。

「浩介の前でデタラメなことを言うなっ!」

「証拠ならここにあげるぞ」

そう言って取り出したのは数枚の写真だった。

その一枚を僕たちに見えるように掲げた。

写真に写っていたのは下着ではなく、どこかのテーブルの上に置かれた二つのパンだった。

「パンが二つでパン……………」

律の言いたいことの意図がわかった僕たちは、何とも言えない空気に包まれた。

「他にもある——」

「そ、それじゃあ浩介君の家はどうかかな?」

別の写真を見せようとした律から写真をひったくろうとする漣と、それをガードする律との取り合いが始まった。

それをしり目にムギが次に白羽の矢が立ったのは僕だった。

「あー、僕の家はまだ食器棚の方が直ってないからご勘弁を」

「まだ直ってなかったのかよっ!?!」

漣と写真の取り合いをしていた律にツッコまれた。

「この間新しい食器棚が届いたから、まだ組み立てている最中なんだよ」

「食器棚って何？」

事情を知らない唯に、律が簡単に説明を始めた。

ちなみに、食器棚だがまだ半分程度しか完成していない。

ここ最近バンド関係で時間が取れなかったためなのだが、それはただの言い訳に過ぎない。

できれば年末までには完成させたい。

「唯ちゃんのお家は？」

「大丈夫だよー」

即答だった。

「でも、クリスマスなのに両親とか大丈夫なのか？」

「大丈夫だよ。いつもお父さんとお母さん、旅行に行っていて今度はドイツだって」

だからいつもいないのか。

とすれば、両親に会えた僕はまさしく運がいいと言える。

……尤も、会った状況が良ければなおよかったのだが。

「それじゃ、決定だな」

「料理は任せて！」

「だ、大丈夫なのか？」

あまりにも自信を持って言われたため、僕は心配になって訊いた。

唯には失礼だが、どう考えても危険な気がするのだ。

「うん！ 憂が作ってくれるから」

「……………だと思ったよ」

今度憂には劳いの言葉でもかけようと、心の中で誓うのであった。

「そうだ。プレゼント交換をやろうよ！」

「やろうくやろう」

律の提案に、ムギと唯が手を挙げて賛成した。

「変なものを持ってくるなよっ」

「それはお前だろ！」

にやりと笑みを浮かべる律の注意に滯が目を細めて返した。

「小学生の時に、プレゼントだとか言っつてびっくり箱を渡したのは律だろー」

「あー、あれはすごかったな。いきなり気絶するんだもん」

澤と律の会話だけで、その時に何があったのかが容易に想像できてしまった。

「何やってんだ？ お前」

「べたですなー」

呆れながらツッコむ僕に続くように唯がツッコんだ。

（びっくり箱はプレゼント交換のべたなのか？）

後で調べてみようと、心の中で決めた。

「あ、和ちゃんも誘ってもいい？」

「もちろんだよ」

唯の問いかけに、律は二つ返事でOKを出した。

「それじゃ、すぐに誘いに行こう！」

「とか言いながら、引つ張るな！」

即断即決とばかりに僕の腕をつかんで歩き出す唯に、僕は慌てて抗議するが止まるどころかささらに歩く速度を速めた。

「急がないと和ちゃんが帰っちゃう！」

「分かったから、せめて引つ張るのだけはやめて！ 転ぶからこれ、絶対に転ぶからッ！」

僕のお願いは、生徒会室前にたどり着くまで聞かれることはなかった。

ちなみに、真鍋さんだが、最初は

「部外者の私が参加してもいいのかしら？」

と渋っていたが、いつの間にかやってきていた律の「大丈夫だって。私たちはもう友達じゃん！」の一言で参加することとなった。

ちなみにそのあとの「参加者が増えれば会費が多くなるし」という声は僕は聞き逃さなかった。

「律、ろくでもない使い方はしないでね」

「もちろんだよ。まったく、浩介は気にしすぎだつて〜」

律にくぎを刺すように言ってみたところ、あからさまな笑顔で返された。

（絶対に変なことに使う気だったな）

願わくば、“変なこと”が軽音部にとってプラスになることである
ことを祈るばかりだった。

そんなこんなで、あれよ来れよという間に軽音部のクリスマス会の
開催が決まるのであった。

第28話 夢か現実か

部室に戻った僕たちは、次のライブに向けての練習を（珍しく）していた。

「ねえ、ちょっといいかな」

そんな練習も一区切りついたところを見計らって、僕は声を掛けた。

「何、浩介？」

「今日はこれで終わりにして帰らない？」

その僕の提案に、全員がぽかんとした表情を浮かべた。

「な、なに？」

「いや、浩介がそういうことを言うなんて初めてだから」

「そうそう。いつもは絶対に言わないじゃん」

「……言われてみれば、そうだね」

確かに滯と律に言われて知ったのだが、これまで練習しろなどと口うるさく言うことはなかったし、切り上げようということも当然なかった。

その理由は、僕自身にある。

僕の立場上、無理やり練習をさせるのはDKとしての価値観を押し付けているのではないかと思っただからだ。

だからこそ、練習するように促しはするが、無理やりさせるようなことはせずに彼女たちの自主性に任せることにしている。

もつとも切り上げることに関しては律たちが勝手にするのもある。

ただ、最近それでは彼女たちの為にならないのではと思うようになってきたので、何らかの対策は施すかもしれないが。

閑話休題

「何か用事でもあるの？」

「いや、そういうのではないんだけどね」

ムギの疑問に、応えた僕は朝の時に言おうと決めたことを告げることにした。

「今朝の通り魔に関するニュースを見た？」

「ああ、あれか」

僕の問いかけに、いち早く思い出した様子で返したのは滯だった。「あれって、確か一日に一駅分ずつ移動する連続通り魔って言われてたっけ」

「何だか、こわいわ」

「こつちの方に来ないでほしいんだけどな」

各々が話を始めるが、どうやら僕が知っていることは全員は把握しているようだった。

「犯行の時間帯は警察の捜査の結果、夕方の17時以降とされている。そして前日に隣の駅の町で事件が発生していることから、今日はこの街で事件が起こる可能性が非常に高い」

「どうして、そんなことまで知ってるんだよ？」

僕の説明に、律は驚きと疑問が入り混じった表情で訊いてきた。

「……そこで、今日は早めに帰っておいた方がいいと思うんだ」

「スルーされた!？」

律の問いかけには黙秘と言う手段で躲した。

どう取り繕っても誤魔化すことはできないからだ。

ならば、何も言わない方が得策だ。

「家に着いたら各自が一斉送信で連絡。律と滯は幼馴染だからそれぞれが家に着く時間帯を大幅には把握しているはず。そうでしょ？」

「ま、まあ大体だったらわかるけど」

僕の確認に、律は滯の方を見ながら答えた。

「だからいつも家に着くであろう時間になっても連絡がなければ、それは何らかの危機的状況に見舞われていると判断できる。唯の場合は僕が言えまで送り届ければ問題はないし、ムギは駅まで一緒に行けば問題はないと思うんだけど、どう?」

「でも、今日確実に起こるっていう保証はあるのか?」

律から根本的なことを聞かれた。

確かに、二日間にも及ぶ規則性もただの偶然だということも考えられる。

「それはないけど、でも万が一にもと言うこともある。もし、今日何もなければ皆にケーキを好きだけ奢る。それで手を打ってくれない

——「さあ、帰る支度をしよう！」——か……な」

「変わり身はやっ！」

ケーキを奢るといふ単語に反応して帰り支度を始めた律と唯に、濔がツッコんだ。

「本当にわかりやすいよな、二人とも」

そんな律たちに、僕は苦笑をしつつも帰り支度を始める。

この時、時刻は午後4時30分。

僕の推測が正しければ、かなり危ない時間帯だ。

それから、支度を終えて学校を後にするのに10分の時間を要することとなった。

「それじゃ、みんな気を付けて」

「ムギもな」

「また明日」

「おいしいお菓子をお願いね」

駅前まで一緒に歩いた僕たちは、三者三様に声を掛けてムギを見送る。

「それじゃ、私たちも帰るか」

「そうだな」

「そうしよう」

ムギを見送った僕たちを促すように率が声を掛けるとそれに濔と唯も頷くといつものように歩き出す。

やがて、信号機の前にたどり着いた。

「浩介達はここを渡るんだったよな」

「そうだね。そっちはこの道をまっすぐだっけ」

僕と唯は途中まで道が同じなので、いつも一緒の道で帰っている。

とはいえ、買い出しなどの用があるときは無理だが。

「それじゃ、二人とも気を付けてな」

「ありがとう、漣ちゃん」

「律たちもね」

お互いに注意を促しあつた僕たちは、ちようど歩行者用の信号が青になつたので横断歩道を渡ると律たちに手を振る。

向かい側でも律と漣の二人が手を振りかえしてくれた。

それもほんの少しのことで、すぐにやめると二人は自宅の方へと歩いて行つた。

「それじゃ、私たちも行こう。浩君」

「そうだな」

そして唯に促される形で、僕たちも歩き始めた。

「それにしても、唯は本当にケーキとかが好きなんだね」

「うん、大好きだよー。ムギちゃんの用意するお菓子はどれもおいしいんだよね〜」

ふと思いついた話題を唯に振ると、満面の笑みで答えが返つてきた。

「確かに、ムギの持ってくるお菓子は美味しいね」

それに僕も相槌を打つ。

確かにムギのお菓子はどれもおいしい。

だが、ムギに迷惑がかかつてるのではないかと思う時もあるが、ムギ自体は特に嫌そうな雰囲気は感じないので、まんざらではないのかもしれない。

とはいえ、多少の自重は必要だが。

「浩君は、ムギちゃんが持つてくるお菓子の中でどれが一番好き？」

「また難しいことを。そうだね……」

僕は、唯からの問いかけの答えを考えるのであつた。

★★★★★

学校からの帰り道、いつものように浩君とお話をして帰る私たち。

浩君は、自分から話すことはあまりないので、いつも私が話しかけ

ていたんだけど、今日は珍しく浩君の方から話しかけてきた。

「浩君は、ムギちゃんが持つてくるお菓子の途中でどれが一番好き？」

「また難しいことを。そうだね……」

私は浩君に訊いてみた。

私の問いかけに、浩君は考え込むように腕を組んでいた

浩君はいつもムギちゃんのお菓子をなんでも食べている。

しかも、とてもおいしそうに食べているので、同じものを食べているはずなのに違うものを食べていると思うってしまう。

もしかしたら私もしているのかもしれないと思っていた時だった。

「唯、危ないっ！」

「え？ きゃあ!？」

いきなり浩君が大きな声で叫んだかと思うと、私は誰かに突き飛ばされた。

「つぐ」

「つち」

そして聞こえてきたのは浩君のうめき声と知らない人の舌打ちだった。

背を向けているので、浩君の表情は私からは分からない。

「浩君？」

「……………」

私の呼びかけに浩君は何も反応を示さない。

『犯行の時間帯は警察の捜査の結果、夕方の17時以降とされている。

そして前日に隣の駅の町で事件が発生していることから、今日はこの街で事件が起こる可能性が非常に高い』

ふと、少し前に浩君が言っていた言葉が頭をよぎった。

(も、もしかして……)

「今度は、外さねえ」

「ひっ!？」

先ほどまで浩君の前に立っていた人は、不気味な笑みを浮かべながら私の方に近づいてくる。

その手には刃物が握られていた。

(に、にげなくちゃ)

そうは思っても体がまるで石になったように動かない。
そんな時だった。

「おい、待て」

「あん？」

ぼそりとつぶやかれた浩君の声が、知らない人を呼び止めた。

「そいつにまで手を出させはしない」

「な、なぜだ……」

浩君の言葉に、知らない男の人は震える声を上げた。

「急所を刺したはずなのに、どうしてまだ動けるっ！」

「え？」

一瞬何のことか理解はできなかったけれど、次第に分かってしまった。

「このようなもので、僕を貫けるとは思わないことだ。下手人が」

「ヒイツ!？」

男の人の背中で見えないけれど、浩君は無事のようにだ。

でも、今聞こえてきた何か折れるような音はいつたいなんだろう？

「魔力回路全開。生命維持を優先」

続いて聞こえてきた浩君の声と共に、言いようのない感覚に私は襲われた。

それは言うなれば、まるでこたつの中に足を入れた時に感じる熱の
ようなものだった。

「私にけがを負わせるとは、倍……いや、千倍返しをしないとな」

「く、来るなっ!!」

男の人が逃げるように移動したことで、浩君の姿がしっかりと見えるようになった。

(な、何?)

浩君の手にはゲームに出てくる剣のようなものがあった。

そして、それを手に浩君は男の人と距離を詰めていく。

「ば、化け物っ!!」

「逃がすかつ！ 高の月——」

逃げ出した男の人に、浩君は大きな声で叫ぶと一瞬で底から姿を消した。

そして

「ぎゃーっ！っ!!?!」

私の後方で断末魔の叫びが聞こえた。

振り返ってみると、そこには地面に倒れている男の人と、それを無表情で見下ろしている浩君の姿があった。

「さてと」

「っ！」

私の方を見た浩君のまなざしに、思わず息をのんでしまった。

いつも浩君とは向かい合っている時は何も感じないはずなのに、この時の浩君はとても怖かった。

そこで、私の意識は途切れた。

「う……ん」

「ん、唯？」

次に意識が戻った時に、私が最初に見たのは心配そうに私のことを見てくれている浩君の姿だった。

「ここは……？」

「ここは病院だ」

寝ぼけ眼で問いかける私に、浩君は簡潔に答えた。

「びょういん？」

「覚えていないのか？ 帰る途中に例の通り魔に襲われたんだ」

何のことかわからない私に浩君は目を少しだけ細めながら何が起こったのか教えてくれた。

そのおかげで、私はあの時に何が起こっていたのかを思い出した。

「こ、浩君。怪我は大丈夫?」

「ああ、これね。まったく問題ないよ」

そういつて浩君が掲げた手には包帯が巻かれていた。

でも、私の聞きたいことは少しだけ違っていた。

「ううん。そうじゃなくて胸の方のけがは?」

「は? 胸の方になんて怪我はしてないぞ?」

浩君の返事に、私は一瞬固まってしまった。

「でも、あの時確かに……」

男の人が「胸を刺した」と言っていたのを私ははつきりと覚えている。

「夢でも見てたんじゃないのか? 唯は僕が弾き飛ばした時に気を

失っていたんだし」

「そう、なの?」

浩君の言葉に首をかしげていると、浩君は「そうだ」と言った。

「何だか、浩君が“魔力”なんとかって言っていたような気がしたんだけど」

「魔力って。それこそ夢だよ。この世の中に“魔法”なんて存在するはずないじゃないか」

(そうだよね。夢に違いないよね)

笑いながらツツコむ浩君に、私も納得した。

「まあ、唯には特に怪我もなかったようだし、問題はないって医者の人が言っていたよ」

「そうなんだ」

私が気を失っているときに検査が終わっていたようで、結果にほつと胸をなでおろす。

「警察の人が唯を家まで送り届けてくれるらしいから、先に帰っててくれる?」

「え? 浩君は帰らないの?」

浩君とは帰り道が途中まで同じなので、一緒に来るのだとばかり思っていた。

「通り魔事件の犯人を捕まえた件で、事情聴取を受けないといけない

んだよ。その背時にこのけがをしたんだけどね」

「すごいね、浩君。犯人を捕まえるなんて」

苦笑しながら包帯が巻かれた手を軽く振っている浩君に、私はそう言った。

「趣味で習っていた護身術が役に立って良かったよ」

「ありがとう、浩君」

私のお礼の言葉に、浩君は優しい笑みを浮かべながら「どういたしまして」と返してくれた。

「それじゃ、行きましようか。ご家族の方が心配してますよ」

「あ、はい！ よろしくお願いします」

横に立っていた優しいそうな女の人に促される形で、私は今まで腰にかけていたベンチから立ち上げる。

「それじゃ、またね。浩君」

「ああ、またな」

浩君とあいさつをして私はおまわりさんと一緒に、病院を後にした。

この日、帰ったら『お姉ちゃん、大丈夫!』と、憂に言われたので、私は大丈夫と答えたら憂は安心した様子で息を吐き出していた。

(ごめんね、憂。ありがとう、浩君)

私は心の中で心配をかけてしまった妹に謝って、私を守ってくれた浩君にお礼を言うのであった。

その次の日の朝、テレビで『高校生によって連続通り魔事件の犯人逮捕』というニュースが報道されたけど、浩君の名前が出てくることはなかった。

(どうしてかな?)

疑問には思ったけれど、それほど気にしなくてもいいかなと思った私は、その疑問を忘れることにするのであった。

第29話 プレゼント!

あの、連続通り魔事件から数日ほどが経った。

犯人を確保したことで、律や滯たちからは“すごい”と言われてしまった。

別に嬉しくないわけじゃないが、僕にとってはそれが当然の行動でもあるのでむず痒くなってしまった。

そんなある日、僕は警察の方から呼び出しがあったので、警察署を訪れていた。

なんでも、事情聴取の最終確認をしたいそうさ。

応接室のような場所に案内された僕は、呼び出した人物が現れるのを待つことにした。

「いやー、わざわざ来てもらって申し訳ない」

「いえ。お気になさらずに」

申し訳なさそうにフランクに謝ってくる男性警察官二名に、僕は丁寧に返した。

後から入った警察の人がドアを閉める。

そこで雰囲気は一変した。

「で、あの下手人は?」

「はい。犯人には魔法関連のことを高月大臣のご指示通り、“幻”と思ひ込ませました」

僕の問いかけに、男性警察官のうち一人が丁寧に返した。

「それで、動機の方はどうだ?」

「何でも、『付き合っていた女性に振られた腹いせに、やった。だれでもよかった』と言うので間違いはないかと」

僕の疑問に、もう一人の男性警察官が応じる。

もう分かっているとは思いますが、この二人は僕の“仲間”だ。

どうして、ここにいいのかはまた別の機会に語るとしよう。

「魔法関係のことでの漏えい等は特にありませんので大丈夫です」

「そう。悪いね、変な役回りをさせてしまった」

「いえ。気にしないでください。それが我々の役目ですから」

即答にも近い形で返事をしてくれる二人の警官に、僕は心の中で感謝の言葉をかけることにした。

「ところで、体のけがはどうですか？」

「心配には及ばないよ。あんなもの、けがの範疇にも入らないから」
心配そうな面持ちで訪ねてくる男性警察官に、僕は肩を竦めながら答える。

唯を突き飛ばすところまではうまく行ったが、その拍子で胸のあたりに一撃を喰らう羽目になってしまった。

もちろん、これは自分の未熟さが招いたことなので、唯を責めることなどありえないが。

あの後、すぐに体の治癒に力を回したこともともと再生能力が高いこともあって、翌朝には傷痕すらも残っていなかった。

なので、“怪我の範疇にも入らない”という表現にしたのだ。

そのあと軽く話（とは言っても世間話だが）をした僕は、警察署を後にするのであった。

その次の日の休日のこと。

「プレゼント何にしよう」

僕は自室でクリスマス会のプレゼントについて悩んでいた。

「やっぱり女子が喜びそうなものがいいよね」

僕以外が女子のため、やはり女子が好きそうなものが一番いいだろう。

とはいえ、一番の問題は

「女子には何をプレゼントすれば喜ばれるんだろうか？」

女子の好みが何なのか、だが。

「……………」

考える

「……………」

とにかく考える

「……………だあぁっ!!!」

どのくらい考えていたのかはわからないが、諦めた。

「僕に女子の好みのがわかるか!」

そんな言い訳じみたことを、誰に対して言っているのかは自分でもわからない。

「女子限定で考えるから駄目なんだ。誰がもらっても喜ぶようなものにしよう」

路線を変更して、僕は万人受けするものをプレゼントすることにした。

だが、実際に考えてみると

「万人受けする物って何?」

そんな疑問にたどり着いてしまう。

そしてまた考え込んでしまうわけ。

考えた結論が

「ムリッ」

挫折だった。

「こと、戦いの仕方とかだったら分かるのに」

人づきあいをしてこなかった代償がこんなところに現れるとは。

「……………もういいや、自分の得意分野で行こう」

最終的に、僕の得意分野の代物をプレゼントすることにした。

(そういえば、滯が興味深いことを話していたな……パーティーなんだしいいか)

「とすると、買い出しに行かないといけないな」

プレゼント用の道具で足りない物を買うために、僕は自宅を後にするのであった。

「ありがとうございます」

「よし、これで必要なものは揃ったかな」

数点ほど購入した僕は、領きながら雑貨屋のお店の袋を見る。

「にしても、この抽選券はどうすればいいんだろう？」

先ほどの雑貨店でもらった一枚の福引券を手の上で弄びながら呟く。

さすがにこの抽選券の意味ぐらいは知っている。

「あれ？ あそこにいるのって唯たちじゃないか？」

そんな時、少し先の方で話している唯たちの姿を見かけた。

「道の真ん中で何をやってるんだ？」

「あ、浩君」

「浩介もプレゼントを買ったんだ」

僕が声を掛けるところこっちの方に振り向きながら話しかけてきた。

「まあね」

「浩介も抽選をするのか？」

律の言葉に、そう領きかえした僕の手にある抽選券を見つけたようで、滯は僕の手元に視線を向けるとそう聞いてきた。

「そうなんだけど、どこでやればいいのかかわからなくてね」

「どこも何も、ここだよ」

「え？」

律に言われて周りを見回すと、抽選定番の抽選器が台の上に置かれた場所があった。

(唯たちしか見えてなかった)

この間の通り魔と言い、最近弛んできてるような気がしてきた。

(やっぱり一度故郷に戻った方がいいかな)

弛んだ気を引き締めるのに故郷は最適だった。

「一回分か。いいのが当たればいいな」

僕の手にある抽選券を見た滯がそう言ってくれた。

「とか言って末等が当たりそうだけど」

「こら、律！ 縁起でもないことを言うな」

本当に起こりそうなことをつぶやいた律に滯が激を飛ばす。

「別にいいよ。その通りだから」

そんな滯に、僕はフォローを入れつつ担当の女性に抽選券を手渡すと、抽選器を回し始めた。

「自慢ではないが、僕ほど悪運が強い人はそうそういないと思うよ。どうせ当たったとしても末等がオチだよ」

出るボールの色など既に分かっているの、僕は期待もせず回していく。

やがて、ボールが落ちた音が聞こえた。

末等のボールの色は白なので、当然ボールの色も白だ。

そう思っていた僕に、ベルの音が送られた。

(末等でもベルを鳴らすのか)

「おめでとうございます。特賞のお米半年分です！」

サービス精神旺盛だなと思っていて僕に、女性の声が掛けられた。

「え？」

その言葉に、僕が口にできたのはたったそれだけだった。

恐る恐る女性の背後にある景品の方を見ると、確かに『特賞・お米半年分』と記されていた。

特賞のボールの色は金。

一等がねずみ色でハワイ旅行となっていた。

「すごい、特賞だった」

「ムギよりも強運を持ってるな」

後ろで事の成り行きを見守っていた滯たちが口々に感想を漏らす。

そして僕に差し出されたのは米俵三つだった。

一つの米俵で約60キロ分なので、三つで180キロと言ったところだろう。

(これ、当分お米を買いに行く必要がなくなるな)

僕の家は、基本的におコメの消費量はそれほど多くはない。

せいぜい月に5〜10キロ程度。

つまりどんなに多く消費しても18か月分ということになる。

(まあ、得したと思えばいいか)

僕は自分にそう言い聞かせることにした。

とはいえ、一つだけ問題が残っている。

それは

「浩介、それ本当に持っていく気か？」

米俵三つをどうやって家まで運ぶかだった。

僕は担いでいくことを選んだ。

「当たり前。台車を借りたら、返しに行く必要があるから二度手間でしょう」

濡の心配そうな言葉に、僕はそう返しながら米俵を抱え上げた。

「うおっ!」

「すごい、力持ち」

180キロの重さのものを軽々と抱え上げる僕に、濡たちが驚きに満ちた声を上げる。

180キロの重さなど、僕には小さな子供を抱え上げる程度二しか感じないので、それほどきつくはない。

尤も、〃自動車を持ち上げてみる〃と言われれば話は別だが。

「それじゃ、僕はこれで」

「あ、浩君。せっかくだから一緒に帰ろう!」

後ろの方から掛けられた声に、僕は立ち止まらず歩く速度を落とす。唯が合流するのを待つことにした。

「それにしても、本当にすごい力持ちね」

「いや、このくらいだったら僕には余裕だけど、いかんせんバランスが」

真鍋さんの驚きが混じった声に相槌を打っている僕だが、バランスを取るのが一番きつい。

どんなに力持ちでも、バランスを崩してしまうと全てが台無しになるのは当たり前のことだろう。

しかも米俵の上には、先ほど購入したプレゼントが置いてあるのだからさらに神経を使う。

「運動系の部活の人が見たら確実に欲しがるでしょうね」

「まあ、やる気はないけれど。今のところ、軽音部以外の部活のことは

考えていませんし」

真鍋さんのお世辞に、僕は苦笑しながら答えた。

運動系の部活に入っても僕にはあまり意味がないと判断したから文化系の部活を探していたのだから、今更運動系の部活に入ろうとなど考えるのは馬鹿馬鹿しい。

とはいえ、スポーツ自体が嫌いだというわけではないが。

「今のところは」^{〴〵}ということは、そういうこともあり得るのね」

「だ、ダメだよ！ 浩君が退部したら大変なことになっちゃう！」

いたずらっ子のような笑みを浮かべながら言う真鍋さんに、唯は慌てた様子で引きとめようとする。

「お願いですから、重箱の隅をつつくようなことしないでもらえませんか？ 真鍋さん。説明が地味に面倒なので」

「ごめんごめん」

絶対に本気で謝っていないといった感じで謝る真鍋さんに、僕はため息をつきながら唯にどう説明すればいいか考えをめぐらせるのであった。

「さて、これで必要な材料もそろったことだし、始めるか」

自宅に戻った僕は、米俵を台所の方に置くと自室に先ほど購入したプレゼントの材料をテーブルの上に置いた。

お店の袋から取り出したのは、緑色の箱とラッピング用の包み紙にリボンに、クラッカーが数個と小さめの中着袋の計五種類だ。

まずは、巾着から始めるか。

そうつぶやいた僕は、クローゼットの奥に隠されるようにしておいてあるアタッシュケースを取り出した。

それを開けると、中には様々な工作道具が入っている。

その中にある石を一つ取り出すと、それをトンカチで粉々に砕いて

いく。

粉々に砕いた石に手をかざす。

「……………」

目を閉じて掌に意識と力を集中しつつも頭の中で術式を組んでいく。

「リブーレア」

大よそ組み終えたところで、終結を示す呪文を紡ぐ。

手をかざしていた石には何も変化はないように見える。

だが、暗いところで見るとかすかにではあるが光を発しているはずだ。

この石の正体は故郷で最もよく取れる“魔石”というもの。

この魔石は素材として組み込めば非常に優れた効果を発揮するものだ。

しかも、どのような道具にも素材として使うことができるという優れものなのだ。

そのためこの魔石一つでも数百万という高額な値段がかかるので、あまり使われていない。

使ったとしても、ほんのひとかけくらいだろう。

これを贅沢にもすべて使用したのだ。

使い方も簡単で、砕いて魔力を注入するだけで、呪文を紡ぐ必要もない。

呪文を紡いだのは、この石自体を魔導媒体兼素材として利用するためのものだ。

それはともかくとして。

完成した魔石を巾着の中に入れると、巾着の口を締めて開けることができないうように処置を施した。

そうして完成した巾着袋と一緒に購入した緑色の箱の中に入れる。

残すはクラッカー。

これは単純だ。

僕はクラッカーを一つ取り出すと、ひもを引っ張る。すると破裂音が響き渡った。

僕は続いてもう一つのクラツカーを取り出すと同じようにひもを引つ張る。

それを何度も繰り返していく。

やがて、家に元々あった画用紙の端の方に指が入る大きさの隙間ができるように半円形に切り込みを入れてそれを巾着袋を隠すように箱の中に入れた。

「ラ・ベルティア・リ・ブレインド」

そしてその画用紙の方に手をかざした僕は、呪文を紡ぐと箱のふたを閉めてさらにラツピング用の包み紙で箱を包んでいく。

「レエーラ・モジスト」

さらにこれまたラツピング用の青と黄色のリボンにも、魔法をかけてから箱に結んでいく。

これで、一見すると普通のプレゼントが完成した。

だが、中身は色々と工夫が凝らされている代物となっているので、パーティーの場では非常に最適なものだろう。

「これではクリスマス会当日を待つのみか」

僕はそうつぶやきながら壁に掛けられているカレンダーを眺める。

クリスマス会の開催まであと一週間を切っていた。

「さて、変に壊れないようにするためにクローゼットにしまっておこうかな」

そうつぶやいた僕は、完成したプレゼントをクローゼットにしまうのであった。

そして、それから数日後。

ついにクリスマス会の開催日を迎えるのであった。

第30話 クリスマス会とプレゼントと

「家の戸締りよし、プレゼントもよし。忘れ物は無し！」

クリスマス会当日。

僕は、忘れ物がないかどうかを念入りに確認していた。

（集合時間までまだ30分もある。完璧だ）

僕は一通り問題がないことを確認してから家を出ると、ドアに鍵をかける。

そして僕はクリスマス会の会場である唯の家へと向かうのであった。

「浩介！」

唯の家にたどり着いた僕によく知る人物の声が掛けられた。

「ん？ 律たちか。ちょうどいいタイミングだな」

「本当ね」

僕とほぼ同時に着いた律たちにそう言うとムギは笑顔で相槌を打った。

「それじゃ、チャイムなら——」「えい♪」——「ああー!？」

チャイムを鳴らそうとする律よりも早くにチャイムを鳴らしたのは、ムギだった。

家の中から「はい」という声が返ってきた。

「チャイムを押すのが夢だったの」

「そ、そうなのか」

ムギのとてもささやかな夢に、律は苦笑を浮かべるしかなかった。それから少しして玄関のドアが開けられた。

「「「お邪魔します」」」

僕たちは声をそろえて言うと、律が口元に手を当てる。

それは声を遠くに聞こえるようにするための仕草だった。

「唯、来たぞ〜」

「おー、皆上がって上がって〜」

律の呼びかけに少し遅れてにかいから現れた唯の首元には飾り付けのようなものがマフラーのように巻かれていた。

「な、何をやってるんだ？」

「飾り付けをしていたら止まらなくなっちゃって」

僕の疑問に、唯は照れくさそうに頭を掻きながら答えた。

思わず『小学生か、お前は』と突っ込みそうになるのを必死にこらえた。

「あ、コートをもらいます」

「ありがとう」

そんな僕たちに、声を掛ける妹の憂は本当にしつかりとした子だ。
(しつかり者の妹と天然の姉……ものすごいデコボコ姉妹だね)

ものすごく失礼なことを心の中でつぶやきながらも家の中に入った。

憂に先導されるようにして上の階に上がると、リビングのテーブルの上にもものすごく豪華な料理の数々が用意されていた。

一部を言うと、クリスマスケーキはもちろんのこと北京ダックやサンドイッチなどだが、到底10代の少女が作れるような代物ではない。

「うわ、すごい料理」

それは律たちも同じだったようで、豪華な料理の数々に感想を漏らしていた。

「これ全部憂ちゃんが作ったの？」

「失礼な。私だってちゃんと作ってるよ！」

「何を？」

ムギの問いかけに抗議の声を上げる唯の言葉に、僕はすかさずに疑問を投げかける。

まあ、どうせ唯のことだからどうせお皿の盛り付けぐらいだと高を括っていた。

「このケーキ」

「すげえ！」

「本当だ。すごいじゃない、唯」

掲げて見せたクリスマスケーキに、僕と律は思わず称賛の声を上げる。

人は見かけには寄らない物だ。

これからは、見かけだけで判断するのはよそう。

「の上にイチゴを載せました！」

「さっきの“すごい”を返せっ！」

そう心の中で決めかけた時に唯が続けて言った言葉に、僕と律は思わず同時にツツコンでしまった。

ある意味期待を裏切らない唯だった。

「でもお姉ちゃんは本当にいろいろと手伝いをしてくれたんです！」

そんな中、慌てた様子で声を上げたのは憂だった。

「掃除を手伝ってくれようとしたり、飾りつけをしようとしてくれたり」

（全部未遂だし）

フォローしようとしているが、さらに墓穴を掘っているような気がする。

（というより、飾りつけをしようとしてこのありさまか）

僕はふと視線を周囲の壁に取り付けられている飾りに向ける。

未完成なのか、途中で垂れ下がっているのがとても悲しげに見えた。

「それから……えっと——」

「分かったから、もういいよ憂ちゃん」

「見ているこつちが惨めになつてくるから」

必至にフォローの言葉を探す憂を、僕と律が止めた。

「それじゃ、和ちゃんは遅れてくるらしいから、先に皆で乾杯しよう！」

先ほどまで話題になっていた唯はと言えば、飲み物が入った瓶とグ

ラスを持ちながら提案した。

(……何となく、お似合い姉妹のような気がしてきた)

それを見ていた僕は先ほど地面がしていた感想を変えるのであった。

こうして、各員にグラスが渡され飲み物も注がれた。

つまりは、乾杯の準備が整ったということになる。

「それじゃあ」

『乾杯!』

律の掛け声に合わせて、僕たちはグラスを合わせて乾杯をした。

「いや、今年もあつという間に終わっちゃうねー」

グラスに注がれた飲み物を一口飲んだ律がしみじみとした様子で口を開く。

「嫌ね、年よりくさいわよ」

そんな律に、やれやれと言わんばかりの表情で相槌を打つのはいつの間にか僕の隣に座っていた山中先生だった。

「つて、さわちやん!?!」

「これおいしいわ。おかわり、もらえる?」

驚きの声を上げる皆をよそに、山中先生はいつの間にか手を付けていたのか小皿を前に差し出していた。

(いるのは分かってたけど、いったいどうすれば僕に気配を悟られずに隣に座れるんだ?)

「まさか、壁をよじ登って家に侵入してきたんですか!?!」

「ちよつと、私をなんだと思ってるのよ?」

律の想像に山中先生が心外だと言わんばかりに疑問の声を上げる。律の想像を聞いていて僕が感じたのは

「婚期を逃した蜘蛛女泥棒?」

「あん? 今なんて言ったのかしら?」

「び、美人のクノイチ!」

ぼそつと呟いたはずが山中先生の耳に聞こえていたようで、凄まじいさつきを纏った目で睨まれたため、慌てて言い直した。

「なら、いいわ」

「毒舌も、度を越えると身を滅ぼすんだな」

言い直したことが功を奏したのか、睨みつけるのをやめた山中先生を見て、ほっと胸をなでおろしていると濡のつぶやきが聞こえた。

非常に的を得ているために、僕はどう反応したらいいのかわからなかった。

「大体、顧問である私を誘わないなんてどういうつもり？」

「えっと……」

第二の僕になってたまるかと言わんばかりに視線を泳がせて言葉を濁らせる律。

彼女の代わりに答えるような人はいないだろう。

下手すればとんでもない雷が落ちることになるのだから。

「先生は彼氏と予定があると思っただけで誘いませんでした」

そんな中、それをした平沢唯と言う名の勇者が現れた。

……とは言っても、ただの天然だとは思うが。

それはともかく、やはりと言うべきか大きな雷が落ちることになった。

「そんなことを言うのはこの口か〜！」

涙目になりながら唯の頬を引っ張っている山中先生の姿を見て、天然の恐ろしさを理解することにした。

「罰として唯ちゃんはこのを着なさい！」

「どうしてそんな服を持ってきてるんですか、アナタは？」

“じゃーん！”という効果音でも付きそうな勢いで掲げられたサントラ服（もちろんコスプレだが）に、思わず疑問を投げかけてしまった。

ちなみに、返ってきたのは意味ありげな笑みだった。

それはともかく、サントラ服を受け取った唯は着替えるためにすたすたとリビングを後にした。

それから数分後に、唯は戻ってきた。

「じゃーんー！」

サントラのコスプレ姿で。

しかも恥ずかしがる様子もなかった。

「ダメね、恥じらいが足りないわ」

「ガーンっ」

山中先生の容赦ないコメントに、唯は涙目になりながら床に座り込んだ。

そんな彼女の頭をやさしくなでているのは、妹の憂だった。

「やっぱりこっちは……」

「ひっ!?!」

山中先生の矛先が向けられた滯は、怯えた様子で立ち上がった。それとほぼ同時に山中先生も立ち上がる。

「ほら、逃げろ〜!」

「いや〜!!!」

そして始まった追いかっこ。

僕は巻き添えに合わないように隅の方に移動しておく。

やがて、追いかっここの舞台はリビングから移動したようで階下の方に向かっていった。

下の方から聞こえる二人の声は真鍋さんが遅れてやってくるまで続いた。

「もう、お嫁にいけない!……」

ソファーに顔をうずめている滯の背中には哀愁が漂っていた。

(ご)愁傷様

僕はそんな彼女に、心の中で手を合わせるのであった。

「気を取り直して、プレゼント交換をするぞー!」

「おー!」

凄まじい切り替えの早さでプレゼント交換をすることとなった。

「あ、でも山中先生はプレゼントを持ってきてるんですか?」

「それなら大丈夫よ。ちゃんと用意しているから」

真鍋さんの疑問に応えるようにして出されたのは青い包み紙に水色のリボンでラッピングされたプレゼントだった。

「本当は彼氏にあげるはずだったの」

『……………』

山中先生の言葉に、どんよりと重い空気が漂う。

「それじゃ、始めるわよっ！」

何かを振り払うように大きな声で叫んだ山中先生は勢いよくテーブルに手を置いた。

その拍子にビン同士がぶつかり合いガラス特有の音が鳴り響いた。

そして無言でプレゼントを出すように告げる山中先生に従うように、それぞれが用意していたプレゼントをテーブルに置いていく。

「歌が終わったらそれで終了よ」

そう言って今度は適当にプレゼント配り始めながら、歌を歌い始めた。

(プレゼント交換ってこんなに惨めなものなのか?)

やけになつて歌う山中先生の姿に、思わず僕は心の中で疑問を抱いてしまった。

それはともかく、プレゼントは順調に各人に回されていく。

いつ終わるのかわからない歌声をBGMに回していく。

「サンキューー！」

それは山中先生のその言葉で終了となった。

僕が持っていたのは山中先生が彼氏に渡すはずだったという代物だった。

「あ、これ私を買ったやつ」

「それじゃ、交換ね」

律の持っていたプレゼントの箱と山中先生が手にしていたはことを交換する。

その時に、濡が何かを言いかけていたのが気になった。

「さて、一体何かしら? とてもいいものが入っていそうな感じ」

包装紙を取り除きながら期待を胸に箱を開けた。

すると中から凄まじい勢いで何かが飛び出し、それが山中先生の顔

面に直撃した。

それは、漣が語っていた“びっくり箱”だった。

(いつでも逃げられるように避難しよう)

先ほどからうつむいている山中先生だが、それがいつ怒りの噴火につながるかわからない。

現に肩が震え始めているし。

どうやら、それは他の皆も同じだったようで、全員が山中先生から距離を取っていた。

「あは、あはは……」

かと思ったら今度は笑始めた。

それがとても不気味さを増させる。

「今日は最高のクリスマスだわ〜!」

どうやら怒りを通り越しておかしくなってしまったようだ。

「うわっ!?! 山中先生が壊れた?!」

こうして、僕と律たちの皆で、錯乱状態の山中先生をなだめることになるのであった。

それからしばらくして、ようやく正気を取り戻した山中先生に胸をなでおろしつつ、プレゼント交換の続きをすることとなった。

ムギが受け取ったのは漣の買った“マラカス”、律が受け取ったのは真鍋さんが買った“焼き海苔”、真鍋さんはムギが買った“お菓子の詰め合わせ”といった感じだった。

さすがに真鍋さんのプレゼントには唯ですら『お歳暮じゃないんだから』というツツコミが入った。

ある意味、真鍋さんも天然だった。

「僕のは……」

包装紙をできるだけ丁寧にかけて中身を見た僕は、言葉を失った。

「何何?」

「ほれ」

僕の様子に興味を持ったのか、唯がプレゼントの中身を聞いてきたので、僕はそれを出した。

「はうわあ……ッ!?!」

その代物に、一番の反応を示したのが漑だった。

思いつきり後ろに下がったその表情は怯えが入っていた。

「はいはい、それが私のね」

「もしかして、これを彼氏の人にあげるつもりだったんですか!?!」

投げやりに答える山中先生に、唯が本日二度目の爆弾を投下した。

「うう……そうよ! 悪かったわね!!」

やけになりながら応えた山中先生は再び泣き始めてしまった。

(天然が怖い)

「あ、それは最初に青色のリボンをほどいてから黄色のリボンをほどくようにしてね。じゃないとどんな手段でも開かなくなるから」

「わ、わかった」

「一体どんなプレゼントなんだよ?」

律からジト目でツツコミが入る中、漑は緊張の面持ちで言われた通りの手順でリボンをほどいていく。

そして包装紙を丁寧にはがしていき、箱の蓋に手をかけた。

「……………」

僕は耳に手を当ててこれから起こるであろうことに備えた。

「うわあ!?!」

「な、何?!」

箱を開けた瞬間に鳴り響く破裂音に全員が驚く。

(これはちよつと音を高くしすぎた)

強烈な音だったため、耳をふさいでいた僕ですら驚いてしまった。

「一体、これはなんなんだよ?」

「律のびっくり箱からヒントを得て作った手作りびっくり箱。最初に開けた瞬間にクラツカーのような破裂音が鳴り響く仕掛けだったんだけど、ちよつと失敗——「ちよつとじゃない!」——はい、すみま

せん。調子に乗りました」

僕のプレゼントの説明をしていると、一番の被害者である漣からきつい一撃をお見舞いされた。

「まあ、冗談はともかく、本当のプレゼントはちゃんと用意してあるから。箱の中の底の端の部分に穴が開いてるでしょ?」

「確かに、開いてるけど」

咳払いをしながら、説明をすると箱を覗き込んだ漣が相槌を打った。

「そこに指をひっかけるようにして開けてみて」

「……………」

僕の指示に、漣は無言で僕を見ている。

その眼は疑いのまなざしだった。

「いや、別にこれ以上驚かせる要素はないから」

信頼を失うのにかかる時間は築くのよりも遥かに短いことを身に染みて知ることとなった。

「それじゃ……………」

恐る恐ると言った様子で箱の底に手をかけた漣は、その画用紙を取り除く。

「これは……………」

「お守りのようなものだよ。身に付けておけば、ご利益があるかもしれないよ」

漣が取り出した小さめの巾着袋に、僕はそう説明した。

巾着袋内に入っている魔石には防御系統の術を施してある。

後は、漣の身に危険なことが起こった際に守ってくれるという代物だ。

とはいえ、一度きりの使いきりタイプなのが欠点だが。

そして、このお守りは最初に手にした人物(僕は開発者なので除く)にしかその効力を発揮しない。

とはいえ、このお守りの欠点は、巾着袋が触れている物すら対象にってしまうことだ。

つまり、プレゼント用の箱に触れただけで反応してしまうというこ

とになる。

それを防ぐために、簡易結界を箱を覆うように展開させることで対処した。

要は、直接触れないようにすればいいだけの話なのだ。

そして、その解除に当たったのがリボン。

濡りにリボンを開ける順番を指示したのもそれゆえだ。

ちなみに、箱を開けた時に鳴り響いた破裂音は、クラツカー音を何度も聞いて覚えた僕が仕掛けた魔法で、箱を開けると同時に鳴り響く仕掛けになっている。

音量の設定を大きく間違えてはいたが。

閑話休題

「手作り感満載だな〜」

「手作りだけど、効果は期待しても損はないから」

怪しげなものでも見るような目で感想を漏らす律に反論するように、僕は口を開いた。

「ありがとう、浩介」

「どういたしまして」

濡のお札に、僕は軽く頭を下げるようなしぐさで答えた。

「後開けていないのは、唯ちゃんと憂ちゃんだけね」

プレゼントを開けていない二人に、山中先生は『早く開けるように』と促した。

もう残り二人なので、それぞれ誰が送ったかはわかってはいるが、中身が気になる。

「手袋だ」

「マフラーだ」

箱を開けた唯と憂が中身を口にした。

見てみると、唯が手袋で、憂がマフラーだった。

「私が手袋（マフラー）を失くして寒がっていたから？」

「二人以外に当たっていたらどうする気だったんだ？」

運が良いでは片づけられない強運に、僕たちは苦笑した。

「ありがとうお姉ちゃん。これで冬も寒くないよ」

笑いあう姉妹に、僕たちの心も温かくなっていくような気がした
(仲よきことは良きかなよきかな)

いつか口にしたフレーズを、僕はもう一度心の中で口にした。
そんなこんなで、冬真っ只中で寒い日に開かれたクリスマス会は、
心温まる気持ちで幕を閉じる――

「いよおしー、プレゼント交換も終わったし、一人ずつ一発芸でもする
か!」

ことはなかった。

「せっかくのいい話系の流れが」

まったくだった。

「何だったら濡が最初にやるか?」

「ひええ!」

(もう完全に悪酔いしたオヤジのノリだな)

律と濡のやり取りを見ていた僕は、心の中でそう呟いた。

(とはいえ困った)

まさか一発芸を披露しなければいけないとは。

僕には芸を披露するようなスキルなどない。

(一つだけ、できそうなことはあるけど)

それをするには準備が必要だ。

もしトップバッターにでもなったら万事休すだ。

「それじゃ唯、いつてみよう!」

「ええ、私? ううん」

どうやらトップバッターは唯のようだ。

肝心の唯は何を披露するかを悩んでいるようだが。

「あの! 私が行きます!」

そんな唯に救いの手を差し伸べるように立候補したのは、憂だっ
た。

「それじゃ、どうぞ!」

律に促らされるように、憂は立ち上がるとどこからともなくトナカイ
とサンタの人形を取り出して、それを手に装着した。

『メリークリスマス。みんな、楽しんでますか?』

そして話し始めた。

だが、肝心の憂は口を一切動かしていない。

そのような芸当ができるとすれば、魔法で言う所の“念話”ぐらいだ。

だが、当然ではあるが憂はそのようなものを行使していない。

つまりこれは腹話術というものだろう。

(魔法が使えない人でも、このような芸当ができる。本当に人間ってすごい)

僕は感動のあまりに、拍手を送った。

それはみんなも同じだったようで、拍手を送る。

送られた憂は照れた様子で頭に手を置くと、再び両手を前に突き出すポーズに直した。

そして再び腹話術が始まる。

(よし、憂の頑張りに見合うぐらいのモノは見せないかね)

僕は憂の腹話術を見ながら、首にかけてある真珠の形をしたネックレスを怪しまれないようにつかむ。

(魔力回路限定解放。魔法術式の高速登録開始)

魔力というエネルギーを通すパイプである魔力回路を一部のみではあるが解放させる。

いつもはこの回路は封印されている。

この世界ではそういうものの類は必要ないからだ。

とはいえ、魔力がないと生命に関わるため、ほんの一部のみの開放をしているが。

そして、魔法を素早く発動させられるようにする力も使う。

魔力の消費量が4倍になってしまいが、せつかくのパーティーなのだ。

少しぐらい奮発しても罰は当たらないだろう。

まあ、一部からは大目玉を食らいそうだが。

その後も、唯のエアギターや律のエアドラムや、ムギのマンボウの真似などが披露されていくなか、僕は一発芸で披露するための準備を進めていく。

ちなみに、滯の出し物はコスプレだった。

「~~~~ッ！」

とは言っても、階段の陰から姿を現した時間はわずか数秒程度だったが、それでも滯にしてみればとてもがんばった方だ。

そのため、みんなから拍手が送られた。

「それじゃ、浩介行ってみようか！」

滯が着替え終えて戻ってきたのを見計らって、律が指名してきた。

(準備は大丈夫。後は僕の演技力)

もうすでにこれから行う一芸の準備は完了している。

後は僕の技術だ。

「それじゃ、僕は簡単な手品をいくつか披露するね」

「おーっ！」

手品と言う単語だけで、期待の込められたまなざしが僕に注がれる。

「律、そのプレゼントの箱借りていい？」

「いいぞ」

「さて。ここにあるのは種も仕掛けもない普通の箱」

律からプレゼント用の箱を借りた僕はその中身をみんなに見えるように見せながらお決まりの文句を口にする。

「これから、この箱からトランプを出して見せましょう」

「定番中の定番だね」

唯からコメントが入るが、特に反応せずに進めていく。

(媒体は、この棒でいいか)

魔法を使う際に効率を上げる媒体が必要になるため、僕は先ほどテーブルに置いてあった棒状のモノを拝借することにした。

「これにハンカチを覆って、三つ数字を数えると中からトランプが現れます」

そう言いながら箱にハンカチをかぶせる。

そしてハンカチに軽く触れるように棒を当てる。

「ワン、トウ……」

(ディメディア)

最後のカウントを言うよりも早く、心の中で魔法の呪文を紡ぐ。

「スリー！」

カウントをしきった僕は、ハンカチを取り除くと箱の中に手を入れる。

(よし、ちゃんとある)

転送魔法によって取り寄せたトランプがちゃんと現れていることを確認した僕は、中からそれを取り出した。

『おーっ！』

トランプが現れたのを見た唯たちは一様に拍手を送る。

「さて、それじゃこのトランプを使って、もう一つの手品をお見せしましょう」

僕の芸はまだまだ終わらない。

こと魔法に関しては譲歩しないのが僕の流儀だ。

「トランプには通常、こういった何も書かれていない無地の物がある。これは、トランプを一枚失くした時に代用する物なんだけど、今回はそれを八枚使おうと思う」

「何でそんなにあるんだよ？」

律から尤もなツツコミが入った。

実は無地のカードを八枚ほど入れてあるタイプと普通のトランプだけのものをたくさん置いてあるからだ。

ちなみに、普通のトランプはリビングにまとめて入れてあり、この特殊なトランプは自室に置いてある。

そうでないと、トランプを転送させるときに大量のトランプのセットが現れる羽目になる。

大まかな(○○の家の○○の部屋など)場所とモノしか指定できない転送魔法の特徴が故だ。

それはともかくとして、無地のカードを取り出した僕はそれを律と滯、憂と唯に一枚ずつ配っていく。

(リマインド)

その際にカードを介して再びある魔法をかけていく。

「今配った人はボールペンか何かで好きなマークと数字、それと名前

を書いてもらいたい。僕は四人が何を書くのかをもう四枚に書いていくから」

「分かった」

「分かりました」

「任せて」

「わ、わかった」

憂に続いて唯と律と滯が返事を返すのを確認して、僕はさらに言葉を続ける。

「山中先生は僕が四人の書いている内容を盗み見ていないかの監視をお願いしてもいいですか」

「分かったわ」

そして山中先生にも協力をしてもらい、僕は背を向けた。

横には山中先生の監視の目がある。

そんな時、僕の頭の中に声が響いてきた。

『何のマークを搔こうかな……どうせだから三角とか楕円形を書こうと』

『うーん。やっぱり星だね』

(……)

唯と律の声に、僕はため息をつきたくなるのをこらえて口を開いた。

「あ、そうだ。好きなマークとは言ったがあくまでもトランプにあるマークでスピードやハートとかだから、間違っても星とか楕円形とか三角とかは書くなよ？ 特に律と唯！」

「な、なぜにピンポイント!?!」

僕は再び目を閉じて神経を集中する。

『そうだ。ハートのAでいいかな』

(なるほど、滯はハートのAか)

頭の中に響いてきた滯の声に、僕はさらさらと滯の名前とハートのAを書き込んでいく。

今使っているのは、遠距離型の読心術だ。

これは、相手が心の中で思っていることが直接僕の方に声をとって

届けられる仕組みになっている。

とはいえ、遠距離にもなるとそれをし続けるのは難しい。

そこで、トランプを媒体として使っているのだ。

もはやペテン師のような気もしなくはないが、僕は頭の中に聞こえる声に意識を集中させて書き込んでいく。

「終わったぞ」

濡から声が掛けられたのを確認して、僕は再び彼女たちの方に振り向いた。

「それじゃ、今度はこのトランプを同じ組み合わせになるようにおいていこうと思う。もし名前とマークに数字が違っていたら手品は失敗ということになる」

そう言いながら、今度は目の方に意識を集中させる。

すると、トランプの裏側……つまり唯たちが書いていた面が見えるようになった。

これがいわゆる透視魔法だ。

中身を見ただけで知ることができる魔法だが、使い方を誤れば犯罪クラスになるため出力を極限にまで抑えている。

よって、どれほど集中させようが服が透けるようなことはありえない。

それはともかく、僕は透視魔法でトランプの裏側に書かれていることを読み取りながらそれに合うように自分が持っているトランプを配置していく。

「それじゃ、ムギ。唯たちが置いたのと僕が置いたのを同時に開いて行ってくれる？」

「分かりました」

指名されたムギは心躍ると言った面持ちでテーブルの方に来ると、トランプを表にしていく。

端の方からハートのAと書いた濡、ダイヤのJと書いた唯、スペードの3と書いた律、クローバーの5と書いた憂という配置だった。

そして僕のも全く同じ配置だった。

「す、すげえ!」

「全部一緒です?!」

「浩君、超能力者だ!」

カードの内容がすべて一致していたことに驚きを現す律たちに、僕はどこか嬉しく感じていた。

魔法使いであれば当然の芸当なのに、これほどうれしく感じるというのはどうしてなのだろうか?

「とは言っても、このカード本来の使い方じゃないよね? だから、全部消しちゃおう」

「へ? 消すってどういう——」

全てのランプを裏返しに集めて束にすると、媒体とした棒状のものをカードの上に充てる。

(イレイズ)

そしてまたスリーカウントと共に充てたり離したりを繰り返し、最後のカウントの前に再び呪文を紡いだ。

「はい、これで元通り」

「……………」

全て白紙に戻ったランプを目の当たりにした律たちは何も言うことはなかったが、代わりに拍手の音が響いた。

こうして、僕が用意した即興の手品は(何とか)無事に幕を閉じるのであった。

その後、山中先生がお腹に張り手で紅葉を作ったりする一発芸を見せられた。

とはいえ、ほとんどが引いていたが、当の本人は楽しそうだったのでいいのかもしれない。

そしてそのあとはムギが持ってきたボードゲームで遊び、解散になったのは日が暮れた時間帯だった。

この日、僕は今までにないほど充実した一日を過ごすことができた。

こうして、突如持ち上がったクリスマス会は無事に幕を閉じることができたのであった。

第31話 罪悪感と初詣

「ふう、ただいまー」

クリスマス会を終えた僕は、自宅へと戻った。疲れで重くなる体に鞭を打つようにして、僕は靴を脱ぐと家へと上がる。

そしてそのまま自室がある二階へと向かう。

「さすがに、魔法を使いすぎた」

今日使った魔法を上げると『透視魔法』に『読心術』、『転送魔法』、『修復魔法』の四種類だ。

これだけの魔法を使うのだから、消費するエネルギー量（魔力だが）は莫大だ。

今出ている倦怠感は、その影響をもろに受けているのだ。

例えると、フルマラソンを全速力で走ったような感じだ。

まず普通に考えても無理だが、ようはそれほどの疲労感だということだ。

「今日はこのまま寝よう」

着替えたほうがいいとは思いますが、それをする気も起きなかった為、僕はそのまま眠りに着こうとベッドに潜り込もうと――

「ん？ 通信だ」

したところで、誰かから通信が入ったことを伝えるアラームが鳴り響いたため、僕はベッドから起き上がるとどこからともなく片目だけのサングラスのようなもの（コントローラー）を顔に装着した。

そして耳元のスイッチを手で押すと、目の前に大きな画面が投影された。

画面に映し出されたのは一見すると、どこぞのマフィアの使いかと思われるような強面の顔つきをした男性だった。

『久しいな、高月大臣』

「……連盟長」

男性……連盟長に僕は嫌な予感を感じずにはいられなかった。

『用件は分かってるな？』

「ええ。十分に」

既に向こうには筒抜けのようだった。

『では、話は早い』

僕は耳をふさいで、これから来るであろう衝撃に備えた。

『このバカ者がっ！ 人間の前で軽々と魔法を三種類も使うとは何を考えているッ!!』

連盟長の怒鳴り声は耳をふさいでいる状態のはずなのに爆音のように頭に響き渡った。

ただ、抗議をするところが一か所ある。

「三種類ではなく四種類です!!」

『そんなことはどうでもいい!!』

僕の抗議に、連盟長はバツサリと斬り捨てた。

『一体何を考えているんだ？ 一歩間違えればお前の正体が知られていたかもしれないんだぞ』

「それは重々承知です。ですが、それで変に断れば孤立します。この世界での孤立は私という存在の消滅に等しいです」

どうやら、言いたいことを言い切ったようで、口調も幾分か柔らかくなった。

故郷であれば、付き合いが悪くても強ければある程度は評価される。

だが、ここではそのようなものは存在しない。

孤立してしまえば、それは存在の消滅にも等しい結果が待っている。

尤も、存在の消滅を人によつては“孤独”ともいうのだが。

『お前も、そっちでの暮らしになじんできたようだな』

「そっち側で言うのであれば、弱体化。こっち側で言うのであればそれは感情の回復でしょうか？」

僕の言わんとすることがわかったのか、連盟長は“確かに”と相槌を打った。

『しかし、だからと言って魔導鉱石を使用した魔導具を人間に与えるとは……そこから疑いの目が向けられたらどう対処するつもりなの

だ?』

「心配はいりません。あれはあくまでもお守り。そしてそれを手にするのは魔法のことなどを全く知らない一般人……発動したことにさえ気づきませんよ。万が一、気づかれた場合は認識祖語の魔法でそのことを認識の外へと追いやります」

僕は、あらかじめ用意しておいた対策を連盟長に述べる。

ちなみに、認識祖語魔法とは、特定の認識した事案を意図的に認識できる範囲から追い出すことを言う。

これを見ると、本人は気が付かぬうちに認識した事柄を忘れてしまう。

ただ、記憶の消去ではないのでひょうんなきっかけで再び認識の範囲内に入ってしまう欠点はあるが。

『なるほど。確かにそれなら誤魔化せるだろうな』

感心した様子で顎に手を当てて考え込む連盟長だったが、すぐさまそのポーズを解くと再び口を開いた。

『高月大臣が魔法を見せたのだ。相手はそこそこ信頼における人物であるのは確かだ』

「ありがとうございます」

連盟長のありがたい言葉に、僕は素直にお礼を述べる。

人を診る目はまだまだ未熟ではある物の、ややいと自負している。

存在の消滅を防ぐためなどと言っているが、結局のところは僕が唯たちにならそれを見させても大丈夫だと判断したから魔法を行使したというのが一番大きい。

『だが』

そこで、連盟長の言葉が掛けられる。

『それでも、私は安心することはできない。私は一国の主だ。完全に彼女たちが信頼に足りる人物だとこちらが確認する必要がある』

「父さん、まさかッ!」

その言葉に、思わず僕は現在の立場を忘れて口を開いてしまった。

『今は連盟長だ』

「……失礼しました」

連盟長……父さんは、先ほどのように激昂した様子で怒ることもなく静かに諭した。

僕は素直に謝罪をすることでそれに応じる。

連盟長というのは、この国で言うところの総理大臣のような存在だ。

そして、僕はその人の部下ということになる。

現在は連盟長として話をしているため、僕もそれに倣って対応しているのだ。

公私の区切りをしつかりとつけるのが、高月家の決まり事だ。

『高月大臣の気持ちも十分に理解できる。だが、これは決定事項だ。それにこれでもできる限り譲歩しているつもりだ』

「ええ、そうですね。元々こちらがまいた種。異論を述べる気も資格もないことは承知しています。それで、“工作部隊”への連絡はいつごろに？」

『本日中を予定している』

僕の問いかけに、連盟長はすんなりと教えてくれた。

『何か要望はあるか？ できる限りではあるが聞き入れよう』

「では、工作部隊には“できる限り対象者に悟られることの無いように”とお伝えください」

僕の申し出に、連盟長は“分かった”と応じると、用件が済んだのか通信が切られた。

連盟長はいろいろと忙しいことで有名だ。

僕と親子の話をするほどの時間はないのだ。

(そう思うと、僕ってとことん親不孝者のような気が)

親の仕事を増やしているあたり確実に言えるだろう。

(それにしても、工作部隊か)

僕は、ベッドに仰向けに横たわりながら連盟長から告げられた決定事項を思い起こす。

——工作部隊

それは、読んで字のごとく様々なことを行う部隊だ。

例えば、今のよう魔法文化のない世界で魔法が一般人に見られ
り知られたりした場合の情報操作や記憶の操作などを行う。

他にも同じように魔法文化のない世界に、任務で向かう魔法使いを
陰から補佐する役目もある。

僕の場合は周囲に大勢の工作部隊の者が紛れている。

例えば、この間の男性警察官二名も工作部隊の魔法使いだ。

他にも銀行や大手出版会社などのマスコミ関係では職員として、病
院や僕たちが通う桜ヶ丘高等学校にも教師や医者として紛れ込んで
いるのだ。

それぞれの目的は、僕に降りかかったトラブルの対処の補佐をする
ことにある。

ちなみに、工作部隊では全員が催眠魔法を会得しているため、いき
なり紛れ込んでも怪しまれることなく溶け込んでいる。

そんな工作部隊が、唯たちの監視をするというのが、今回の決定事
項なのだ。

監視はおそらく1月いっぱいまでは続くだろう。

(一応、当人たちには危害はないし、監視されていることを悟られさえ
しなければ、生活に支障はない)

免罪符を並べてみたものの、罪悪感が重くのしかかってくる。

(願わくば、唯たちが今までと変わらない生活を送れるようになるこ
とを祈るばかりだ)

そんなことを心の中で思いながら、僕の意識はブラックアウトする
のであった。

「ん……朝か」

あのクリスマス会からはや一週間ほどが経過した。

唯たちに違和感などは感じられないので、僕はほっと胸をなでおろ
していた。

「ご飯でも食べるか」

僕はとりあえず朝食をとることにし、キッチンへと向かった。

そして簡単に朝食をとった僕は、再び自室に戻った。

「あれ、携帯に連絡がある」

そこで、ふと机の上に置かれた携帯電話に、連絡があつたことを告げるランプが点滅しているのに気が付き、携帯を手にする。

「律からメールだ」

差出人を確認した僕は、そのメールの内容に目を通した。

『1月4日に神社に初詣に行くから、遅れないように集合』

要約するとそんな感じで、下の方には神社の場所と集合時間が明記されているという実にシンプルな内容だった。

「とりあえず返信しておくか」

僕は律からのメールに『了解』と打つと律のアドレスに送信した。

「さて、次のライブの曲順を考えないと」

軽音部のライブではなく、H&Pのライブだが。

既にH&Pのライブの次の予定が決まっているのだ。

それが4月のコンサート形式のライブだ。

コンサートとは、ライブと同じ意味ではあるが僕たちの演奏するタイプを示した隠語のようなものだ。

通常の“ライブ”では、『Leave me alone』などの曲のみを演奏することになっているが、コンサートの場合はそれ以外の楽曲と通常のライブで演奏するような曲を合わせているのだ。

ちなみに、総合で演奏する歌というのは『天狗の落とし文』のような感じの曲があげられる。

もちろん、一部を除いて演奏をするというスタンスは忘れていない。

さすがにさつき例に挙げた曲は、演奏は難しいが。

そのため、このライブは時間が長い。

前半と後半、そして途中で30分ほどの休憩をはさんだ2時間30分だ。

しかも、会場は完全に貸切のためまさしくオンステージだった。

その分、演奏する曲目も多くなりいつも以上に油断ができないライブでもある。

まあ、いつも全力で取り組んではいるのだがコンサートだけは死ぬ気で行かなといけない。

そのライブに向けての演奏曲のプログラムを組み立てるために、4か月前の今から始めているのだ。

これで1月末までにはプログラムを確定させ、2月から開催までの期間は本格的に練習に取り掛かるのがいつものことだ。

ちなみに、その期間は普通のライブなどは行われない。人から見れば、充電期間のようにも見えなくもない。

通常はどれほど掛けても2か月だが、今回は復帰後初めてのコンサート。

早め早めに準備をしておこうということになったのだ。

「うーん。前半で入れる曲はこんな感じでどうだろう……」

一通り完成した曲順を確認する。

(やっぱり初めは明るく元気な曲から入っていった方がいいよね)

前半だけで約10〜15曲合わせると2,30曲というとてもないボリュームになるので、曲順を決めるだけでも大変なのだ。

そして、僕にはもう一つのどうしても片づけなければいけない問題があった。

それは……

「これをどうするか……だよな」

目の前にあるのは、三つの米俵。

クリスマス会でのプレゼント交換用の材料を購入した時に手にした、抽選権で運よく手に入れた景品だった。

食費が少し浮くので、最初は幸運だと思っていたのだが、時間が経つにつれそうともいえない状況になってきた。

「スペース的にも邪魔」

米俵三つというのはかなりの大きさだ。

誰も済んでいないこの家ならいいかもしれないが、バンドメンバーが来るので、変なところに置いておくのも気が引ける。

かといって自室や使っていない部屋に置くのは衛生上問題がある。「仕方ない。格納庫にでも入れておくか」
僕が保有している異空間に存在する格納庫にしまうことにした。ものの数分で米俵を格納することができた。
結局、格納庫の様子がおかしくなったことに気づいた僕が米俵二つを祖国に送ったのはそれから一週間後のことだった。

そして、年が明けた1月4日。

僕は律のメールに書かれていた神社に向かった。服装はいつもの通りの私服だ。

違う服を着ていった方がいいのかと思っただが、律たちのことだから普通の服で来るに決まっているので私服にした。

「あ、浩君！ こっちこっち」

神社に到着すると、先に来ていた唯たちが手を振って自分のいる場所を知らせてきた。

その手には妹の憂から渡されたプレゼントの手袋がつけられていた。

「浩介、遅刻だぞー！」

「ごめんごめん。ちよつといろいろあつてね」

一番最後に来たことに叱咤する律に、僕は軽く謝った。

ちなみに、集合時間まではあと5分ある。

皆が早すぎただけだが、一番最後に到着ということはそれは遅刻と大して変わらないため、特に反論はしなかった。

「そう言えば、みんなは年末年始は何してたんだ？」

「僕は特に何事もなくのんびりとしてたよ」

律の問いかけに、僕は思い起こすように視線をそらせながら答えた。

ちなみに嘘だが。

本当は曲目を決めるのに費やしていた。

そのほかにもさまざまに“仕事”を片づけたりとかなり多忙な毎日だった。

その後、律とムギに滯が年末年始に何をしていたのかを話し始めた。

比較的家でゆっくりしていたというのが多かった。

そんな中、群を抜いてすごかったのは、

「私の年末年始はこんなでした」

と、話した唯だった。

年末はのんびりとこたつでテレビを見て、年越しそばを食べ、お汁粉を食べてみかんを食べさせてもらったりしていたらしい。

ちなみに年越しそばを作ったりお汁粉を作ったりみかんを食べさせたのは憂だ。

「憂ちゃんくれ！」

そう言いたくなる律の気持ちは、僕には痛いほどわかった。

「そんなに食べてたら太るだろ」

心配そうに尋ねる律。

自堕落な生活を送っている人に必ず現れる代償が体重の増加だ。

「それが私、いくら食べても体重が増えないんだ」

そんな律に、唯は衝撃的な回答をした。

「そんなはずは——「ないでしょ！」——え？」

別の意味で衝撃を受けた滯の叫びに、なぜかムギも加わる。

かと思えば今度は肩を寄せ合って何かを話すと、肩を震わせて泣き始めた。

(地味に聞こえているだけに、罪悪感が)

「とりあえず、謝っておけ」

「う、うん。ごめんね滯ちゃん」

律に促されるように唯は慌てて滯に謝った。

「べ、別にいいんだ。唯は悪くないんだ」

「そ、そうよ！　すべてはモチベーションの低さよ！」

「どうやら、この話題には触れない方がよさそうだ。

「み、濡ちちゃん晴れ着気合入ってるね」

「そこで、唯はなぜか赤を基調とした晴れ着を着ている濡に声を掛けた。」

「それは律が電話できていくのかって聞いたから」

「聞いただけ」

「どうやら完全に騙され（？）たらしい。」

「着替えに帰る！」

「えー、そのままでも十分可愛いよ。ね？ 浩君」

「プイツと背を向けて帰ろうとする濡の背中に、唯が元気づけるように声を掛けるところに、唯も同意を求めてきた。」

「どうして僕に振るのかがいささかわからないけれど、まあそうだね。元がいいからなに来てても可愛いと思うよ」

「か、可愛い!？」

（はっ!? つい唯にさせられてすごいことを言ってしまった）

「気づいたところであとの祭り、恥ずかしげに頬を赤らめる濡にやりと笑みを浮かべながら見つめているであろう律。」

「今年もいいのを見せてもらいました」

「ムギは相変わらずで——」

「ほっこり笑顔のムギに律は苦笑しながら口にする、聞きなれた声が聞こえた。」

「あれって……」

「さわちちゃん?」

「唯が示す方向に、ひものようなものに紙を括りつけている山中先生の姿があった。」

「おそらく、あの紙はおみくじだろう。」

「そして近くにいるカップルをにらみつけると目に涙を浮かべて逃げないように去っていった」

「さわちちゃんも相変わらずで」

「その光景に、律がポツリと漏らした。」

「せつかくだし、お参りでもしていこうぜ」

「そうだね」

「そうね」

律の提案に三者三様に賛成した僕たちは、本殿の方でお参りをする
ことにした。

鐘を鳴らして二拍手一礼をして、目を閉じながらお願い事をする。

(今年も良い一年となりますように)

お願い事を終えた僕は目を開けながら顔を上げる。

ちようどみんなも終わったのか顔を上げていた。

「皆は何をお願いしたんだ？」

「私は家内安全を」

「体重が減りますように」

「おいしいものをたくさん食べられますように」

「良い一年になるように」

それぞれがお願いごとの内容を口にする。

ちなみに、どれが誰のお願い事なのかは当人の名誉にもかかわること
なので伏せておきたいと思う。

「軽音部のことをお願いしようよ」

そんな律の一言で、もう一度やり直すことにした。

滯とムギに僕の順番で軽音部に関するお願いをしていく。

「ムギちゃんの持つてくるお菓子をもつとたくさん食べられますよう
——にいつ!?!」

そんな中、趣旨と異なるお願い事をする唯の頭を手にかけていたハリ
センで叩いた。

尤も、ほぼ同時に律が手を上げていたが。

「ギターがもつとうまくなりますように」

「いよおしー!」

律の掛け声で、お参りは幕を閉じた。

「にしても、それはなんだ？」

「これ? ハリセンだけど」

本殿を離れていると律から僕が手にしている者について聞かれた
ので、その物体の名前を答えた。

「いや、それは分かってるって。何でそんなものを持ち歩いているのさ？」

「今年からは遠慮をしないことにしたんだ。さすがに律たちをまとめる役割を滞りに押し付けるのもあれだと思って」

「そ、そんな押し付けられてるだなんて」

突然自分の名前が出てきたためか、若干慌てながら相槌を打つ滞をしり目に僕はさらに言葉を続けた。

「だから、今年からはこれではしんど叩いていくから。まあ、滞のげんこつに比べれば痛みは少ないけどね」

「いや、それで安心できないから！」

そんな律のツツコミを聞きながら、僕たちは神社を後にするのであった。

第32話 ミスと春

1月も終わりあっという間に二か月経って、3月の上旬となったあの日のこと。

「あ、今日はチョコケーキ」

最後に部屋に入ってきた唯は、ほくほく顔でいつもの席に腰掛ける。

「はい、唯ちゃん」

「ありがと、ムギちゃん」

今日もまたいつものようにお茶の時間に突入した。

「ちよつと聞いてほしいことがあるんだけど」

「ん？ どうしたんだ、そんな改まって」

話を切り出した僕に、律は不思議そうな表情を浮かべて用件を聞いてきた。

「来月に控えた新歓ライブ用に用意した楽曲だけど、最後の一曲が完成したんだ」

「おー！」

「どんな曲なの？」

この三か月間、新入生に各部活がどんなことをするのかを伝えるために催されるクラブ紹介の際に演奏する新曲を練習していた。

曲数は『私の恋はホツチキス』と『カレーのちライス』の二曲。

そして、そこに『ふわふわ時間』を加えた三曲がすでに完成・練習を始めた曲だったが、もう一曲できそうだという漣の言葉で、急ぎよ新曲を作曲することとなった。

新曲は僕がイメージをムギに伝え、ムギはそれを基にキーボードで曲の構築を作成し、それを使って音を飾り付けていくという形式なので、一番負担が大きかったのはムギだろう。

「これが、その新曲だよ」

そう言ってカバンからムギに借りた音楽プレーヤーを取り出すと机の上に置いた。

「漣には、また作詞と曲名の決定をお願いしてもいいかな？」

「うん、任せて」

作曲はムギと僕で、作詞は漕が行うという役割分担が軽音部ではできていた。

「それじゃ、曲の再生を……あれ、電話だ」

音楽を流そうとしたところで、着信を告げる携帯によって遮られた。

「ちよつとごめんね」

僕は謝りながら部室を後にすると、携帯の通話ボタンを押して耳に当てる。

「もしも——」

「おい、一体どこで何をしてるんだ!」

僕の声を遮るようにして耳に聞こえてきたのは、田中さんの罵声だった。

「えっと、学校ですけど?」

「はあ、学校だあ!? 今日夕方からコンサートの練習をするって言ってたよな!」

田中さんの剣幕に圧されながら、記憶を掘り起こすと、確かにそんなことを言われていたような気がした。

「す、すみません。すぐに行きますっ!」

「3分だけ待ってやる! すぐに来い!!」

(そんな無茶苦茶な!?)

田中さんの無茶な要求に反論をしようにも、すでに電話は切られていた。

ここから普通に走っても10分はかかってしまう。

(僕が悪いとはいえ、全力疾走させなくても!!)

そう言っている間にも時間は刻一刻と過ぎていく。

僕は駆け込むように部室に戻った。

「うお!? びっくりした」

「ごめん、急用が入ったから帰るね!」

こじ開ける勢いでドアを開けたため、驚いた様子の皆をしり目に、僕は荷物をまとめながら事情を説明する。

「それって、どういう——」

「これが、新曲のスコア！ 僕抜きで練習をしておいて！ できなくても、曲を覚えるようにして!! それじゃあっ!!」

叩きつける勢いで新曲のスコアを机に置いて指示を出した僕は、そのまま部室を後にした。

そして、校門を出たのと同時にギアを上げた。

「お……お待た、せ」

「きっかり三分以内。やればできるじゃねえか」

息を切らしている僕に、田中さんが感心した様子で声を掛けた。

「それじゃ、早く中に入って始めようとするか。ロスした分は取り戻すぞ」

「わ、わかりました」

田中さんが前を行く中、中山さんは僕の肩に手を乗せると僕に向かって頷いた。

それは、『お疲れ様』と言われているような気がした。

それに僕は苦笑で返すと、家の鍵を開けて中に入るのであった。

結局この日は夜遅くまで来月に開かれるコンサートの練習をすることとなった。

だが、この時の僕はまだ知らなかった。

急いで出したスコアと曲によってこの後とんでもない事態に発展するということ。

3月も下旬となりそろそろ春の足音が聞こえ始める季節がやってきた。

この季節の定番と言えば受験の結果発表だろう。

そして僕たちもまた、その例にもれず結果発表を待っている一人だ。

もつともそれは……

「憂ちゃん、合格してるといいわね」

「そうだな」

ムギの言葉に、漣が頷く。

そう、今日は桜ヶ丘の合格発表日なのだ。

そして唯の妹の憂もまたこの試験を受けていた。

部活の仲間の妹の受験の結果ということもあって、僕たちもそれに同行する形となったのだ。

(まあ、憂なら合格間違いなしだろ)

なにせ、姉が合格したのだから。

そんなことは口が裂けても言えないが、僕の中ではもうすでに憂の合格は確定していた。

そして到着した桜ヶ丘高等学校。

合格者の番号を張り出している掲示板の前には、数十人程度の受験生の姿があった。

受験生たちは“番号があった”や、“そんな……”などと喜びと絶望を浮かべている者が大勢いた。

去年の僕もあだったのかと思うと、時間の流れを感じてしまう。

それはともかく。

憂は掲示板の方に視線を向ける。

僕たちは、憂の合格発表の結果をか固唾をのんで見守っていた。

「あ……ああ」

そんな中、非常に緊張（というよりは不安と言ったほうが妥当だろうか？）の色を隠せないと言った様子で見ている人物がいた。

「そんなに心配だったら見てくれば？」

「そ、そうする」

僕がぼそりと口にした言葉を聞いた唯は頷くと唯の方へと駆けて行った。

「試験を受けた本人よりも緊張してる」

「まあ、唯らしいけど」

ぼそりとつぶやく律に、僕は苦笑しながら相槌を打った。

その数秒後、抱き合って喜びをあらわにし始めた。

「どうやら合格みたいね」

「本人よりも姉の方が喜んでる」

「親バカと言うより姉バカか」

その光景を見ていたムギや澪に律は、口々にそう漏らしていた。

そして僕たちも合格した憂に祝福の言葉をかけるため歩み寄る。

徐々にあたたかくなり始めるこの時期、憂は志望していた桜ヶ丘高等学校に合格するという嬉しい知らせは、心も温かくさせてくれるような気がした。

「コンサートまで残すところ2週間か」

憂の合格発表を終えた僕たちは解散となり自宅へと戻ってきていた。

というのも、学校の方で部活の自粛をするようにとの連絡がされていたからだ。

三日ほど前から自粛の連絡が入っており、理由としては合格発表の準備及び、入学式に向けての準備のためらしい。自粛の間は自宅で音を覚えたり、練習をしたりなど各自でできることをするように伝えている。

(とは言っても、確実にしないであろう人物が数名)

4月に入って自粛が解除された日からもう特訓をする必要があるのは明らかだった。

(まあ、それを見越して割と簡単な曲を組み込んではあるんだけど……)

とはいえ、懸念材料はある。

まず、『カレーのちライス』だ。

これはテンポが速い。

巷では『BPMの暴力』という言葉がある。

素早いテンポによって難易度がうなぎ上りに上がってしまったのだ。それが、この曲には存在する。

非常に速いテンポで、一歩先を見据えた演奏法が求められる。

この曲はドラムのリズムキープがモノを言う。

ドラムが走りすぎたりリズムが狂ったりすると、元のリズムに戻す必要がある。

それを何度も繰り返していれば曲自体にゆがみが現れるだけでなく、他の演奏者の体力を大幅に奪うことになる。

そして次の曲の演奏にも影響が生じるのだ。

そして『私の恋はホツチキス』も、ギターパートが鬼門と化している。

出だしの方のギターリフ（ギターの一定コードを繰り返して進行させること）が比較的難しい。

果たして、唯がこれを引けるのかがキーポイントだ。

そして、最後にこの間完成した新曲。

これは新歓ライブの趣旨に反した曲目だ。

新歓ライブでは、その部活がどういったものかを伝える事と同時に、軽音部に興味を持ってもらう必要がある。

それほど難しい楽曲にすることによって、未経験者（つまり、初心者だが）に壁を感じさせないようにするのが狙いだ。

現に、ギターは難しそうだからやらないという声をよく聞く。

なので、ギターは簡単に弾けるということを伝えさえすれば、初心者も入部しやすいだろう。

後は、僕たち先輩組が丁寧に教えていくだけだ。

だが、あまりにも簡単すぎるのはNGだ。

簡単すぎる曲をやりすぎると、今度は『大したことのない部活』という不名誉なレッテルを張られる。

簡単すぎず、難しすぎずのバランスをうまくとった曲編成にする必要がある。

よって、生まれたのが新曲だった。

まだ曲名が決まってない（というより歌詞もまだ完成していないが）曲だが、ギターのソロが群を抜いて難易度を吊り上げている。

そのソロを弾くのが、僕のパートだった。

自分で言い出したことは自分で責任を持つという意味も込められている。

「後は、勧誘をしてロビー活動を充実させれば、勝ったも同然」

もうすでに、僕にはウイニングロードが形成されつつあった。

そして、うまくいくという自信もあった。

そう、この時までには。

それは始業式まで残り二日と迫った日のこと。

「それじゃ、今日は新歓ライブで演奏する曲全部を通して弾いてみよう」

全員が演奏の準備を済ませたところで、僕はそう声を上げた。

「ミスしてもいいから弾ききる。そして演奏中に見つかった問題点を改善していくようにしましょう」

「オーケー」

「わかった」

「了解であります！ 師匠」

僕の練習プランに各々が返事を返す中、僕は律に向かって頷いた。律は頷き返すと、スティックを頭上に掲げ

「1, 2, 3, 4, 1, 2」

リズムコールをした。

そして始まる演奏。

最初は『ふわふわ時間』だ。

これはこの間のライブで演奏しているため、大丈夫だと思っていた曲。

だが……

(悲惨なほどにヨレてる)

ドラムのリズムキープが全くできていないという予想以上に悲惨な問題が浮き彫りになった。

そしてそれについていくようにしてギターもリズムキープができなくなってきたしており、もはや不協和音一步手前の状態だった。

そして、最初の曲を弾き終え、僕は次の曲に移るように声を上げた。

「次、『私の恋はホツチキス』！」

リズムコールはせずにスティックを数回鳴らすと曲の演奏が始まる。

最初はドラムのフィルから入り、そしてギターのリフへとつながる。

(テンポずれてたけど、いい感じ)

一番懸念していたギターのリフは多少リズムがずれたものの、許容範囲内にぎりぎりではあったもののおさまっていた。

唯のギターの音に乗せて、僕はわざとミュートをさせた状態で弾いていく。

これによって音にメリハリをつけやすくしている。

僕にとってはそれほど難しくないが後半の間奏部分ではやや複雑なコード変更を求められるために、簡単とは言えない。

(うーん。やっぱり音が伸びてない)

唯のギターの音がすぐに途切れたことに心の中でそうつぶやく。

そんな問題点はあったものの、いい感じで演奏し終えることができた。

「次、『カレーのちライス』」

「1, 2, 1, 2, 3, 4」

律のリズムコールで再び演奏が始まった。

比較的早いテンポでコードの進行をしなければいけないこの曲。

難しいはずなのだが、リズムのキープはそこそこできていた。

ドラムのリズムキープ自体がヨレているのが原因だと推測できる。

僕はリズムギターとしてのパートを弾いていく。

リズムギターの方はそれほど複雑なコードではないので、難易度としては中間程度だろう。

そのまま2番に入っても1番と同じ要領で弾いていく。

2番が終われば来るのはギターのソロだ。

ここが唯の担当するパートの最難関箇所と言っても過言ではない。速いテンポのまま複雑なコード変更を強いられるからだ。

その部分を、唯は何度も失敗しながらも弾ききることができた。後はサビを残すのみ。

サビでは僕の方が小刻みに弦を弾いていく必要がある物のやはり難易度は低い。

そして最後は全パートの音が揃って終わることができた。

(これで、残すは最後の曲か)

ついに、最後の曲となった。

だが、疑問なのはいまだに曲名はおろか作詞すらできている様子がないことだ。

いつもなら完成していてもおかしくはないはずだが。

(まあ、濡もいろいろあるんだろうな)

そもそも僕が作詞すればいいだけの話を、他人にやらせている時点で文句を言える資格など皆無だった。

そんなことを思っていると、律は無言でスティック同士を打ち鳴らす。

次の瞬間、キーボードとギターが産声を上げた。

「ちよつと待って!」

明らかに違う演奏に、僕は慌てて演奏を止めた。

「どうしたんだよ? 浩介」

「そうだよ。もしかして、何か間違っていたのか?」

いきなり演奏を止めた僕に、怪訝そうな表情を浮かべる律に、不安げに訊いてくる濡。

「根本的に間違っている。一体何の曲を演奏しているつもり?」

僕が渡した曲は、最初にキーボードの音色が、次に僕の担当するパートのギターが産声を上げるはずだった。

だが、今演奏した曲は唯のギターとキーボードが同時に音色を響かせてしまっている。

「何の曲って、浩介がよこしたやつに決まってるだろ」

そう言って渡されたのは、僕がこの間渡したスコアだった。

「げっ!？」

それを確認した僕は、思わず引き攣ったような声を上げてしまった。

その曲名は『命のユースティティア』だった。

この曲は、メリハリのある曲調と数十回にも及ぶ転調が特徴の曲だ。

これはそもそもH&Pのコンサート用に用意していた楽曲だ。

それがどうして、軽音部にわたっているのだろうか？

(まさか)

そこで、ふとある可能性が頭をよぎった。

それは、曲のデータを渡す時のことだ。

「よし、これで選曲完了ー!」

その日はコンサート用の楽曲の選曲作業をしており、数多ある楽曲を再生しながらいいと思う曲をピックアップしていた。

そして、最後の一曲に例の『命のユースティティア』を決めたのだ。

「あ、そう言えばムギから渡された追加の新曲の音が完成したんだっけ」

そこで、追加の新曲の素に音の色づけし終えたことに気づいた僕は、その楽曲データを携帯音楽プレーヤーに入れると、その曲のスコアをカバンに入れたのであった。

(あの時に開くフォルダーを間違えて、コンサート用に選曲していた曲を誤って転送して、スコアも曲名を見ずにカバンに入れたということか)

そして、曲を渡した日も急な呼び出しの為に僕自身が確認することができなかつた。

まさに、負のスパイル。

とはいえ、すべて僕のミスだが。

「これ、間違えて入れたやつなんだ」

「なにいつ!?!」

僕の説明に、驚きをあらわにする律。

声に出したのは律だけだが、驚いているのはみんなも同じだった。

「どうするんだ?」

「さすがにこの時期にやり直すのは厳しいわよ」

澁からどうするのか尋ねられる。

ムギの指摘通り、新歓ライブまでそんなに日がないこの状況での曲の変更は致命的だ。

もはや僕にとれる道は一つしかなかった。

「この曲で行こう」

「でも、この曲浩君のパートがないよ?」

この曲の問題点は、ギターが一本のみということ。

これはH&Pの方でもどうするのか話し合いが行われた。

「ギターソロを僕の方へ。それ以外は僕は伴奏という具合にアレンジするから大丈夫。とりあえず僕抜きで演奏をしてみてくれる?」

「分かった。律」

僕の言葉に頷いた澁は律に合図を送る。

それに律が答えると、先ほどと同じようにスティック同士を打ち鳴らした。

そして始まる曲の演奏。

転調の部分さえ気負つていれば難易度はそれほど高くはない。

後はリズムキープを正確にすることさえできれば問題はそれほどない。

唯のコード進行も安定しており、この曲の重要なパートでもあるキーボードもほぼ正確に弾けていた。

そして、2番が終わり問題の間奏に入った。

前半はキーボードであるムギの速弾き、そしてそこから唯のギターの音が曲にアクセントを入れる。

たどたどしくはある物の、ギターソロを弾ききった唯はラストスパートをかける。

(曲のバランスもそこそこだし。これなら数回練習すれば人に聞かせても大丈夫な感じになるかな)

僕の中で曲の練習する優先順位が完成した。

一番優先するのは『カレーのちライス』で、その次に『ふわふわ時間』と、『私の恋はホッチキス』が続く。

『命のユースティティア』は数回程度で十分だろう。

こうして、僕のミスによって新歓ライブへと僕たちは練習を進めていくのであった。

2年生編 『新歓ライブ』 第33話 新クラス！

それから二日後の始業式。

二年生へと進学した僕たちは、クラス分けを確認することにした。クラス分けは昇降口に張り出されており、色々な生徒たちがそれを確認していた。

その中には、友人同士なのだろうか、同じクラスになれたことを喜ぶ人もいれば、担当の教師を確認してげんなりとしている者もいた。

「あつた。私は二組だよ」

「あ、私もだ」

「私もよ」

どうやら唯と律にムギは同じクラスのようにだった。

「それじゃ、滯ちゃんに浩君も?」

この流れで来れば、滯も同じクラスになっていると考えるだろう。

だが、それは悪い方向で裏切られることになった。

「……一組」

「僕は四組だ」

まったくもってばらばらに割り当てられていたのだから。

「「……」」

「な、なんだよ?」

その現状に言葉を失う唯たちに、問いかける滯の肩に手を乗せると涙ぐみながら慰めていた。

「ふ、ふん。律の方こそ、もう宿題を見せてあげられないんだぞ」

「いいもん、ムギに見せてもらうから」

滯の精いっぱい反論だったが、律は鮮やかにそれを躲して見せた。

「別に、クラスの割り当てぐらいで何をムキに」

そんな二人のやり取りを見ていた僕は、思わずそう口にしてしまった。

「くらいじゃない！ クラスに知っている人がいないと一人で寂しいんだぞー！」

「ご、ごめん」

溻のすごい剣幕に圧されて、僕は謝った。

「あ、皆さん。おはようございます」

そんなやり取りをしている僕たちに、声を掛ける人物がいた。

「お。おはよう、憂ちゃん」

「すごく似合ってるわ。初々しいわね」

志望校であるこの学校に合格した唯の妹の憂だった。

（憂だけに初々しいってか？）

ムギの感想に、僕は心の中でそうつぶやいた。

（うわ、寒い）

自分で言っておいてあれだが、非常に寒いギャグだ。

僕は即興で思いついたあまりにも寒すぎるダジャレを、頭の片隅へと追いやることにした。

「そ、そうですか？ 浩介さん」

「よく似合ってるんじゃない？」

なぜかこちらに確認を求めてきた憂に、僕はそう答えた。

「あ、ありがとうございます」

それでも満足だったようで、嬉しそうにお礼を口にした。

「あ、お姉ちゃん」

そこで、憂は何かに気が付いたようで唯の襟もとに手を伸ばす。

「クリーニングのタグ、つけっぱなしだったよ」

「あ、まったく気が付かなかった」

さすがは憂だ。

今日も妹スキルは健在のようだ。

「それに寝癖もあるよ」

「今日、寝坊しちゃったんだ」

目ざとく寝癖を見つけた憂は常備しているのかコンパクトサイズのクシを取り出すと髪の手入れをしていく。

そんな二人の姿はまるで妹に世話を焼く姉のような印象を抱いた。

「おまえら、姉と妹交換した方がいいんじゃないか？」

だからこそ律のその言葉には僕も同意見だった。

そんな事をしていると、予鈴が聞こえた。

それを聞いた憂はクシを素早くしまおうと一礼して去っていった。

「それじゃ、私たちもいこっか」

「そうだね」

そして僕たちも昇降口から移動する。

階段の前にたどり着いたところで、僕たちは足を止めた。

「二組って二階なんだ」

「いかにも、上級生って感じがするな」

しみじみとつぶやく律だが、僕と漐のクラスは一階に存在する。

何故学年ごとに括らずにバラバラの階にしているのが理解できなかった。

「じゃあな、一階二年一組と四組の秋山さんと高月君」

「うるさいー」

律のからかうような言葉に漐が怒鳴るが当の本人は気にした様子もなくすたすたと階段を上っていく。

それに続くようにまた休み時間と言ったムギと律と話をしながら唯が階段が上がっていった。

残されたのは一階に教室がある僕と漐だった。

「あの三人、絶対に昼休みに地獄見るな」

この学校の購買部は一階にある。

そして購買部では常に食料の確保という戦争が繰り広げられることが多い。

つまりは、そういうことだ。

「……………漐？」

「……………寂しい」

いつまでも返事がなかったため、思わず名前を呼んでみるが、反応はなくとてつもなく切ない言葉が返ってきた。

「ちよつと暗いって。明るく行こうよ！ 明るく！」

結局、漐の雰囲気は元に戻ることはなかった。

「……………」

二年四組の教室に入った僕は、すぐに自分の席を確認して席に着く。

あたりを見回すが、やはりと言っているのかどうかは分からないが、知っている人物が一人もいなかった。

(何となく滯の気持ちがあったような気がする)

まるで陸の孤島に迷い込んだような錯覚を感じてしまう。

(新しい知り合いでも開拓するか)

とにかく行動あるのみ。

僕はそう思い立って席を立ちあがろうとしたところで、ふとある疑問が頭をよぎった。

(このクラスの男子って誰だろう?)

二年生は一クラスに二名の男子が存在する。

僕がその一人でもう一人がこのクラスにいるはずだ。

尤も、新入生は一クラスに五人男子がいるそうだが。

(まずは男の方から攻めたほうがいいか)

女子同士の結束力にはかなわないものの、男子の結束力も捨てたものではない。

まずは同性同士で親交を深めるのもいいかもしれない。

(そう言えば、慶介のやつはうまくやれてるのかな?)

ふと、前の学年で一緒だった慶介のことを思い出した。

暗くならないようにするためにといった理由でわざとあのような変態キャラにしているが、あれはあれで打たれ弱いところもある。

「浩介じゃないか!」

心配ではないが、少しだけ気になった。

「お、今年も同じクラスか!」

それにしても、今年の男子はどんなタイプなんだろうか？

「おーい、聞こえてるか？」

慶介みたいな癖の強いのはできれば勘弁してほしい。

「浩介！・聞こえますか！・元気ですか！！」

「だあああつ！・うるさいっ！！」

先ほどから耳元でしつこいほど声を上げ続ける奴の頭に全力で拳を振り下ろした。

「いきなりだな、おい」

「人の耳元で大声で叫ぶからだ」

最近慶介の方にも大勢ができてきたのか、僕の全力の一撃を喰らっても数秒で回復するようになってきた。

（本当に、こいつは人間か？）

人間離れた回復力に思わずそんなことを考えてしまう僕だった。

「ところで、浩介、聞いてくれ！・俺の今年の計画をつ！」

「まったくいい予感がしないが、言ってみな」

何だか去年もこんなやり取りをしたような気もするが、僕は続きを促した。

「俺たちももう二年生。つまりは先輩ということじゃない？」

「確かにそうだな」

慶介の前置きに、どうせくだらないと思いつつながら適当に相槌を打つ。

「だからこそ、俺は今年、先輩としてできることをしたいと思うっ！」

「おお……慶介にしては珍しく非常にまともなことを言ってる」

ようやく慶介にも先輩としての自覚が出てきたようだ。

「珍しくとはなんだ、失敬な！」

「わ、悪い。話を続けて」

慶介の怒りに僕は謝ると先を促した。

「おう。そこで俺は思ったわけだ！先輩としてできることが何かを！」

「それは、なんだ？」

「ずばり、コスプレをして女子を追いかけて声援を受けることSA!!」

「……」

大きな声で、恥ずかしがることもなく宣言したその言葉に、教室の空気が凍りついた。

「慶介」

「おう、何かアドバイスでも——ペプラガバア!？」

僕は慶介の頭に目掛けて拳を勢いよく振り下ろした。

「本当に変わらないな、お前のそのバカさ加減は」

「お前のこぶしの強さも、な。それ、世界狙える」

地面に沈んだ慶介は手をぴくぴくと動かしながら反論してきた。

「もしそんなことをしたら、お前を宇宙の果てまで吹き飛ばすぞ」

「それって、死刑宣告!？」

そんな脅し（わりと本気だが）を慶介にしておくことにした。

そうじゃないと、こいつの場合は本当は本当にやりかねない。

「それはともかく、今年もよろしくな、浩介!」

「はいはい。こっちもよろしくな。慶介」

そして僕と慶介は互いに握手を交わした。

何だかすつかり親友になってしまったが、それも悪くはないと思う僕なのであった。

そんなこんなで昼休み。

この時期では様々な部活が新入部員確保の為に勧誘を行っている。

まさに四月は新入部員が確保できるかどうかの戦いの時なのだ。

そんな中、軽音部も例にもれず、その勧誘を行うこととなったのだが……

「うわ、もう始まっちゃってるよ」

「やっぱり大きい部は手際が違いわね」

既に廊下では数多くの部活動が勧誘活動を行っているのを見た唯

が呆然とそれを見ており、ムギは少しばかり追いつめられたような表情を浮かべていた。

「軽音部だからって甘く見るなよ。濤、チラシは！」

「こ、これだけど」

闘志を燃やした律に圧されるように僕と律に渡したのは、軽音部の勧誘のチラシだった。

「地味」

それを目にした僕と律の意見は一致したようだった。

チラシにはシンプルに『バンドやりませんか?』の文字があった。

「インパクトがないんだ。なんか軽音部だけにある物を書くとか」

「例えば?」

「そうだな……お菓子食べ放題の軽音部! とか」

唯の問いかけに、少しの間考え込むとまじめな表情でそう答えた。

「それはいいねっ!」

「よくない!!」

軽音部としての趣旨から大きく逸脱した内容に、即答で否定した。

そんなうたい文句を書かれた日には確実に変な誤解を与えさせるだろう。

「だったら何かないのかよ? インパクトがあるやつ」

「それなら、私に任せなさいっ!」

腕を組んで聞く律の肩に手を置き、自信満々と言った様子で名乗りを上げたのは、顧問の山中先生だった。

(何だか嫌な予感がする)

そう感じた僕は山中先生たちに気づかれぬようにその場を後にした。

「裏切り者っ!!」

どこからか響く声を背に受けて。

「まずはこのインパクトの少ないチラシを何とかしよう」
安全地帯教室に戻った僕が始めたのはチラシの改良だ。

いくら何でも一文だけというのは寂しすぎる。

「うーん、何を書いたものか……」

僕は腕を組んでどのように書くかを考えた。

「おーい、浩介！ 飯でも——「うるさい」——はい、失礼しました」
(とりあえず、これで行くか)

慶介を追い払った僕は悩みぬいた末に、『初心・中級者大歓迎。分からない場所は懇切丁寧に教えます』と付け加えることにした。

ありきたりだが、これはこれでいいだろう。

「よし、これを印刷するか」

僕は新たに出来上がったチラシを印刷するために、コピー機のある職員室へと向かった。

「失礼します」

「どうした、高月」

「小松先生。ちよつと印刷機を借りに」

中に入ると、近くにいた古文担当の小松先生が声を掛けてきたので、僕は用件を口にした。

「印刷機はそこだ。何だ勧誘用のチラシか？」

「まあ、そんなところですよ」

目ざとく僕の手に使っていたチラシに気づいた小松先生の言葉に、僕は領きながら答えた。

「いろいろ大変だとは思いますが頑張りな」

「ありがとうございます」

小松先生のありがたいメールに、お礼を言おうと僕は100部印刷することにした。

「失礼しました」

そして僕は職員室を後にすると、先ほど刷ったチラシを配るべく行動を開始することにした。

(まずは屋外からか)

屋内はすでに多数の部活が勧誘活動を行っている。

だが屋外ではそれほど多くの部活が勧誘活動を行っているわけではない。

つまり、邪魔も入りにくく疑問などに答えられる時間も十分に取れるのだ。

そんな思惑で、僕は一人で屋外の方へと向かうのであった。

第34話 勧誘!

「軽音部です。興味があつたらら3階の音楽準備室に来てください」
「あ、ありがとうございます」

僕は屋外で地道ではあるが、チラシを配って回る。

これで既に十人以上の新入生にチラシを配ることができた。

(ふう、やりがいがあるしいいね)

僕にとつてチラシ配りは苦になるのではと考えていたが、どうやらそれは僕の思い過ごしだったようだ。

何せ、それほど苦にはならないのだから。

逆に、楽しくなってくるほどだ。

とはいえ、大変なことはいろいろあるが。

それが、

「この俺をぜひ軽音部に入部させてください!」

と、自ら志願してくる男子の新入生だ。

別に、志願してくるのはありがたい。

ありがたいのだが、

「どのパートを希望するのかな?」

「ギターです! 俺、自慢ではないんですがジュニアコンクールで賞を取ったんです!」

このように自慢してくることだ。

コンクールで賞を取ったのが本当か否かは定かではないが、こういうタイプの人間ははつきり言つて鬱陶しい。

要するに、自分は特別(もしくはエリート)だと思ひ込んでいるタイプだ。

こういう人間が軽音部に入部すれば部としてはマイナスだ。

(それに、こいつギターなんて簡単なのしか弾けないし)

僕たち高月家はある事情から人の嘘にはかなり注意しなければいけない。

そのために、高月家の人は全員が読心術を会得させられている。その読心術はほんの少しだけ意識を集中すればいいだけのこと。

嘘をついているときの感覚というのは、実は僕にもよくわからない。

ただ、「こいつは嘘をついているー!」というのが直観という形で伝わってくるのだ。

だが、これでも僕の場合は8割の確率で正確に読み解いている。

残りの2割は心を巧みに読ませないようにする相手が主だが、そのような人物はここにはなかなか存在しない。

というか、ここにいたほうが驚きだ。

「ギターか……」

僕は、あえて考え込む仕草を取る。

「ごめんね、ギターは今足りているんだ。ジャズ研とかはどうかな？」

きつと君にぴったり合うと思うよ」

申し訳なさそうな演技をしながら男子生徒に断りを入れる。

大抵の場合は、これで納得してくれる。

だが、中には

「なっ!?」この俺よりも下手な奴なんて辞めさせて俺を入れろ! いか? 俺の遠い親戚のおじさんは国会議員なんだ! お前の存在なんてすぐに消せるんだからなっ!!」

などと、ばかげた妄想を垂れ流して脅しをかけるバカがいる。

ちなみに、今の男子生徒の発言も嘘だ。

こういう時の私の対応は。

「黙れ」

と殺気を強めに込めて言うだけ。

「っ?!?!」

それだけで先ほどまでの威勢はどこへやら、ヨナヨナと力なく地面に崩れ落ちるとそのまま失神した。

(やれやれ、変な奴もいるもんだ)

ため息交じりに心の中でつぶやくと、僕は生徒手帳を拝借して男子生徒の名前とクラスを確認する。

(この男は要注意人物だな)

僕は失神している男子生徒を要注意人物にするとその場を後にし

た。

そんな勧誘活動だが、時間が経つにつれて相手の反応が変わり始めた。

「軽音部です。もし興味があつたら3階の音楽準備室まで来てね」

僕が声を掛けたのは二人組の女子生徒だった。

「ねえ、軽音部ってあの軽音部？」

「あの変な服を着ていた……」

軽音部の名前を聞いたとたん二人して何やらこそこそと話し始めた。

二人は小声で話しているのだろうが、僕の耳にはしっかりと聞こえていた。

「あ、ありがとうございます」

そして引き攣った笑みを浮かべてチラシを受け取ると、まるで逃げていくように去っていった。

(これで6人目か)

同じような感じの反応をする新入生が増えてきたのだ。

(変な服っていうことは……)

僕の頭の中には腹黒い笑みを浮かべている山中先生の姿が思い浮かんだ。

(どう考えてもあの人の仕業だよな)

クリスマスのあの一件以来、人に服を着せることが趣味となつてしまったらしく、自分が作った服を着せようとしていた。

尤も、その一番の被害者は濡だつたりもするが。

(作戦変更。あいつらを回収する)

これ以上傷が大きくなるよりも早く、変な服を着ていると思われ唯たちを回収することにした。

こうして、僕の唯たちの搜索が始まりを告げた。

もちろん、道中であつた新入生にチラシを配ることを忘れない。だが、やはり大半はこれまでと同じような反応だった。

(変な服つて、一体どんな服を着てるんだらう?)

新入生が引くほどのなだから、よつぽどおかしい服なのだろう。

(例えばドレスとか?)

自分の中に浮かんできた服に僕はすぐさま否定する。

いくら何でもドレスはない。

それに引かれるほどおかしくもない。

(だとしたら、ナース服……いや、ここは予想の斜め上を言つてスク水!?)

次々と浮かんでくる服装に、今度は僕の方がダウンした。

(やめよう辞めよう。考えるだけでおかしくなりそうだ)

僕の最優先事項は、唯たちの回収なのだから、服装が何かはどうでもいいことだ。

僕は再び自分を奮い立たせて唯たちの搜索を再開した。

(校舎内とかにいたりして)

そんな可能性を基に、僕は校舎内に移動することにした。

やがて一階部分も残す所、一本の通路のみとなった。

この通路には死角はそれほどないため、今見えなければ、この階には唯たちがいないということになる。

そして、唯の姿はないためやはりこの階ではないようだ。

突き当りの方ではL字になっているがその方向は外につながる通路になるため、中にいるのだとすれば関係がない場所ということになる。

(上に行くか、外を探るか)

重大な決断を迫られた僕だったが、とりあえず廊下の突き当たりまで歩くことにした。

「のわあ!」

少し歩いたところで、凄まじい勢いで栗色の髪の子生徒が僕の横を走り去っていった。

(危ないな……一体どういう神経をしてるんだ?)

先ほどの女子生徒の行動に首をかしげながらも、僕はさらに先に進む。

「きゃ!?」

「つと?!」

今日はすごく驚くなど、どうでもいいことを考えてしまった。

突き当りの方から突然女子生徒が飛び出してきたのだ。

突然のことだったため僕は回避することもできずそのままぶつかってしまい、ぶつかった女子生徒は勢いのあまりしりもちをつく形で後ろの方に飛ばされた。

「おい、大丈夫か?」

「は、はい。すみません」

手を差し伸べながら訊くと、黒髪をツインテールにした謝りながら僕の手を取ったので、僕は軽く引っ張って女子生徒を立ちあがらせた。

(ん? この手の感触は)

手を取った際に感じた感触に、僕は目の前の女子生徒が只者ではないことに気づいた。

指先が若干ではあるが硬かったのだ。

それは、ギターをある程度弾いている人であるということの証だ。

(これは勧誘してみるか)

もしかしたら、すごいあたりを引いたのかもしれないと僕は心の中でほくそ笑む。

それはともかく、気になることが一つあった。

「どうして走ってたんだ?」

「そ、それは——「待てえっ!!」——ひいいい!」

僕の疑問に答える女子生徒の言葉を遮るようにして声が聞こえたかと思うと、怯えた様子で僕の後ろの方に隠れた。

僕は声のした方に視線を向けてみる。

「な、なんだありゃ!?」

そこにはものすごい勢いでこちらにかけて来る、犬のぬいぐるみの

姿があった。

「あの、ぬいぐるみに追いかけられてるんです！」

（ぬいぐるみを着たやつが、か弱い女子生徒を追いかける………これって、変質者!?!）

僕の頭の中では、犬のぬいぐるみを着て、女子を追いかけてまわす変質者にしか見えなかった。

（しかし、いったい誰が……む）

誰がこのようなことをしているのかと考えをめぐらした時、ある人物の言葉が蘇った。

『そこで俺は思ったわけだ！ 先輩としてできることが何かを！ ずばり、コスプレをして女子を追いかけて声援を受けることS A!!』

馬鹿げたことを口にしていた慶介の言葉だった。

（まさか、あれは慶介か？）

確かに犬のコスプレをしているし、女子を追いかけている。

それに何より、

（あのバカならやりかねない）

それが一番の理由だった。

「安心しな、変質者はこの僕が始末するから」

「え？ 始末?!」

僕はできる限り笑顔を浮かべて、女子生徒を安心させる。

そして犬のぬいぐるみに向き合う。

「浩介！ 彼女を捕まえてー！」

よりによって慶介はこの僕に変質者の真似事をさせようとしているようだ。

「まったく、忠告したのにわからないやつだな」

心の中では怒りの炎が煮えたぎっているのに、口調はいつも通りの呆れたといったようなものだったのに自分でも驚いていた。

「だったら、お約束通り宇宙の果てまで吹き飛ばしてやろうじゃないか」

いまだに犬のぬいぐるみはその勢いを弱めることを知らない。

だが、それは僕にとっては好都合だった。

「ふう……」

大きく息を吐き出しながら、右足を後ろの方に移動させ右腕を後ろ側に振りかぶる。

「高の月武術」

静かに口にしなから、後ろに移動させた足を大きく前方に踏み込ませる。

そして後ろ側に振りかぶっている右腕の手を力強く握りしめる。

「圧っ!!」

その右腕を犬のぬいぐるみが間合いに入ったのを確認して思いつきり前方に突き出した。

——高の月武術。

それは僕が編み出した武術。

自分の力に特徴性を持たせることによって様々な効果を与えることができるものだ。

そして、今の“圧”は、相手の力のかかっている方向を逆向きにして、さらに力のエネルギーを倍にさせるものだ。

これを受けると、どんなに頑丈な者でも、後ろに吹き飛ばされる。当然だが、これも魔法に分類される。

とはいえ、今のは自分の覇気を基にしているので、厳密には違うが。

閑話休題。

僕の一撃を受けた犬のぬいぐるみは凄まじい速度で吹き飛ばされていった。

少ししてもものすごい音が聞こえたような気がしたが、慶介のことだからすぐさま回復するだろう。

「成敗っ」

一人の変質者を退治することができ、僕は清々しい気持ちだった。

「あ、そうだ。君、ちよつといいかな?」

「あ、はい。何ですか?」

そこでふと自分の役割を思い出した僕は、女子生徒を呼び止めると役割を全うすることにした。

「実は僕、軽音部に所属してるんだけど、もしよかったら君もどうか

? これがチラシ」

「は、はあ」

若干気もそろそろと言う感じでチラシを受け取った女子生徒は、これまでのような反応は見られない。

「もし興味があつたら覗きに来てみてよ。場所は3階の音楽準備室だから」

「分かりました。ありがとうございます」

丁寧にお辞儀をした女子生徒は、そのまますたすたと去つていった。

(ところで、あいつらはどこにいるんだ?)

僕はその後ろ姿を見ながら再び唯たちの搜索を再開させるのであつた。

「昼休みも残りわずか……結局見つからず」

色々な場所を歩き回ったが、おかしな服装の人影は全く見当たらなかつた。

それなのに、軽音部の名前を出すと引かれるという反応が続いた。(早くあいつらを見つけ出さないとすべてがダメになる)

そう思ったところで、ふと僕はあることに気づいた。

(僕つてもしかして、いい感触がないのを唯たちのせいにしてないか?)

いい感触がないのは、単に僕の説明が下手なだけ。

それを唯たちのせいにするというのは、あまりにも最悪な人のやることだろう。

(人の中には自分がいい子で周りが悪だと思わせる偽善者がいるとは聞いたが、僕も人のこと言えないな)

自分の偽善者ぶりに呆れてしまった僕は、唯たちを探すことをやめ

て部室に戻ることにした。

「あ、浩君」

「あれ、皆戻ってたんだ？」

部室に戻ると、そこには唯たちの姿があった。

その全員の表情には疲労の色が見えた。

「一体皆は何をやってたんだ？　というより、律は何で燃え尽きてるわけ？」

「……………自分の胸に訊いてみる」

なぜか机にぐったりとしている律の姿に疑問を抱いた僕に、律は唸るような声色で答えた。

「実はね、これを着てビラを配ってたんだけど、誰も受け取ってくれなかったんだよ」

「これって、ぬいぐるみ……………」

唯が指し示す方向に置かれた物体を確認した僕は、言葉を失った。

なぜなら、そこには例の変質者が着ていた犬のぬいぐるみとそっくりな頭の部分があつたからだ。

「この犬のを着てたのって、もしかして……………」

「私だよ」

とてつもなくドスの利いた声に、僕は背筋が震えあがつた。

「本当に申し訳ありませんでしたっ!!!」

それから土下座をするまでに、それほど時間はかからなかった。

「まったく、ひどい目にあつたぞ」

「ごめん、ものすごく馬鹿げたことを口に行っているバカたれがいたもんだから、そいつだと思つて」

何とか律に許してもらつた（とは言つても、ケーキを好きただけごちそうするという制裁と引き換えにだが）僕に、律がため息交じりにつぶやくので、僕は釈明をした。

「そいつっていったい……………ああ、なるほどな」

名前を言つてもいないのに悟られてしまった。

それほどあいつは有名なのだろう。

(良かったな慶介。これでお前は注目の的だ)

まあ、悪い意味でだけど。

「それにしても、疲れるだけで、受け取ってもらえなかったね」

「これは明日のライブで取り返すしかないな」

果たして、明日のライブでどれほどプラスに転じさせられるのか。

絶望的な状態ではあるが、僕は奇跡にかけてみることにした。

「あの一、これなんてどうかしら?」

そんな僕たちに、ある種の元凶である山中先生が声を掛けてきた。

その手には執事服とメイド服が合った。

「さあ、午後の授業が始まるぞ」

「そうだね、とつとと戻るか」

四人は音楽室と音楽準備室の連絡通路の方へと着替えるために向かい、僕は四人が戻ってくるのを待つことにした。

「あの、無視だけはやめて」

(もう少しちゃんとしたのは用意できないのだろうか?)

思わず頭を抱えたくなるのを必死にこらえた。

そして、着替え終わった唯たちと共に、ぬいぐるみを(適当に)片づけると山中先生を教室に残して部室を後にした。

「お願いだから、無視だけはやめて!!」

部室からそんなむなし叫び声が聞こえてきたが、それにも目もくれずに階段を下りていくのであった。

この行動が放課後にとんでもない嵐を巻き起こすとも知らずに。

第35話 続・勧誘

放課後、僕たちはいつものように部室へと来ていた。チラシを配りまわったこともあり、もしかしたら部活の見学に来る人がいるかもしれない。

少ない確率ではあるが、それにかけるしかなかった。なのだが……

「さあ、これを着るのよー!」

「……」

部室のドアを開けると仁王立ちで立っている山田先生が僕の前に掲げられた執事服に、僕は言葉を失っていた。

「何故ですか?」

「それはね、時代がこれを求めているからよ!」

意味が分からなかった。

「いい? メイドと執事はセットなの。ほら、あそこを見なさい!」

そう言つて山田先生がドアの前から離れることで、ようやく中の様子がはつきりと見えた。

「ねえねえ浩君。似合ってる?」

「……………何をやってるんだ? お前らは」

目の前の光景に、僕は思わずそう尋ねてしまった。

今の僕はさぞかし間抜けな表情を浮かべているだろう。

なぜなら、そこにはメイド服姿の唯に律たちの姿があったのだから。

「律ちゃん隊員、浩君が無視するであります!」

「怯むな、唯隊員。もう一度アタックするんだっ!」

そんな僕の驚きをよそに、唯と律は芝居じみた会話を交わしていた。

「浩君、似合うかな?」

「似合ってる。十分なほどに似合ってるから、事情を説明して!」

「実はね、山中先生が着ろつて言つてきたから着てみたら気に入っちゃったの♪」

僕の投げやりな返事に『何、その投げやりな感想は』と、頬を膨らませながら不満げにつぶやく唯をしり目に、ムギが説明してくれた。(どうすれば気に入るといふプロセスになるんだ?)

軽音部に所属して一年。

まだまだ僕にもわからない彼女たちのプロセスの組み方は、僕にとっては大きな謎だった。

「さあ、高月君も着るのよ。さもないと、私が着させるわよ」

眼鏡を怪しく光らせながら、グへへへと不気味な笑みを浮かべる山中先生の雰囲気は本当にやりかねない物だった。

「分かりました。着ましよう」

僕は貞操を守るため、山中先生から執事服一式を受け取るとそれに着替えるべく部屋を後にするのであった。

「……着ました」

「うん、やっぱり浩介には執事服が似合うな」

「似合ってるよ、浩君」

「まるで本物の執事みたい」

うんうんと頷きながら感想を口にする律と、屈託のない笑みで感想を言ってくる唯に、称賛の声を送るムギに僕は喜んでいいのかそれとも悲しむべきなのか、複雑な心境だった。

「そう言えば、山中先生は？」

「あー、さわちやんだったら——」

僕の疑問に律が答えようとしたところで声が聞こえてきた。

「さあ、着ねえ子はいねがあー！」

「ひいひい!!」

山中先生の声が続いて女子生徒の声が聞こえた。

「……な？」

「そう言うことか」

今、この場にはいない部員が餌食になってしまったようだ。

ひとまず僕は心の中で手を合わせることにした。

助ける気はない。

というか、そんなことをしたら僕まで巻き込まれる。

“ 触らぬ神に祟りなし ” だ。

(そうだ。アンプの調子でも確認しておくか)

そんな中、僕はアンプの調子を確認するべくギターを取り出してアンプにつなげた。

「あれ、浩君演奏するの？」

「いや、アンプの調子を確認するだけ。明日は大事なライブだし、肝心な時に演奏できなくなるのだけは避けたいといけないから」

僕のそんな行動に首をかしげて聞いてきた唯に説明するが、“ 大変だね ” というだけで特に何かをする気はないようだ。

そんなこんなで、僕だけでアンプの調子をすることとなった。

ギターの弦を適当に弾いていく。

「おい、嘘だろ……」

軽く弾いたがアンプから音がしない。

ボリユームのつまみもMINの位置ではないので、考えられるのは “ アンプの故障 ” だった。

(仕方ない修理でもするか)

幸い、僕はアンプを直したことがあるため、できないことではなかった。

僕はアンプの裏側のふたを外して中の基盤を確認すると、故障の原因である場所を探した。

(この部品だったら何とかかなりそうだ)

すぐに壊れていた箇所を見つけると、いつも持ち歩いている部品が

入った箱の中から同じ系統の部品を取り出すと、それを取り付けていく。

「あ、お客さんだ」

そんな僕を先ほどから興味深げに見ていた唯はドアのノック音に気づくとドアの方に向かって立った。

「こんにちは」

「いらっしやいませ〜」

部室を訪れたのは唯の妹の憂だったが、唯はまるで喫茶店のようなノリで迎えた。

「お、お姉ちゃん!」

「お、憂ちゃん」

「もしかして軽音部に?」

姉の姿に驚きを隠せない憂に、律とムギが声を掛けていく。

僕も一旦作業を止めて立ち上がると彼女の方に向かい合う。

「律さんに紬さんに浩介さんまで!」

そんな僕たちの服装に憂はさらに驚くが、先ほどから二人の気配がこっちの方に近づいてきてるのを僕は見逃さなかった。

「あ、二人ともそこ退いた方がいいよ」

「え? どうしてです——」

「助けてええええっ!!!」

憂が言い切るよりも早く必至に抵抗している藩を引きずりながら凄まじい速度でかけていく山中先生が二人のわきを通って外へと出て行った。

「さあ入って入って。歓迎するよん」

そして、それをなんでもないと風にする律はある意味大物だと感じさせられた。

「そ、それよりも今のつて」

「抵抗してたのが裏目に出たか」

困惑を隠せない憂と同じく新入生で左右に髪を束ねている女子生徒をしり目に、僕はそう漏らすと再びアンプの修理に取り掛かった。

二人は先ほどのことは気にしないことにしたらしく、唯に導かれる

がまま席に着いた。

「先生クリスマスから人に服を着せるのが癖になっちゃったみたいで」

「そうなんだ」

年が明けて早々にコスプレをさせられたときは驚いたものだ。

「あ、うちのお姉ちゃん唯です」

「平沢唯です。あ、まお茶を持っていくね」

憂の紹介に自己紹介をした唯は先輩としていいところを見せなくてはと思ったのか、それともただの親切心からなのかそう口にする。

「これを持っていけばいいんだよね？」

「熱いから気を付けてね」

唯の問いかけに、ムギが注意を促す。

「熱っ!？」

「だ、大丈夫?」

「お、お姉ちゃん!？」

唯に尋ねるムギと心配そうに声を上げる憂の雰囲気は圧されて、僕は作業を止めると唯の方へと向かっていく。

「頼むから転ぶなよ?」

「大丈夫だよ、浩君!」

どこから湧いてくるのかわからないが、自信満々に返事をする、唯はティーカップが乗せられたトレイを手にして歩き出した。

「お、お……あわ……あわわわわ!？」

その手は最初は静かに震えだし、しまいには大きく震えた。

とてもではないが危なっかしい。

僕は唯から距離を取ろうと後ろに下がる。

「危ない!」

「あ、ありがとう憂ちゃん」

今にもティーカップを落としそうな様子の唯に、憂は腕をつかむことで最悪の事態を免れた。

「良かった、けがをしなくて」

憂は怪我をしている人（主に唯だが）がいなかったことに、ほっと

胸をなでおろしている。

とはいえ、

「おい……………」

「あ、浩介……………」

僕の頭にあるティーカップがなければ完全に良かったのだが。

「もしかして、狙ってないか?」

「ね、狙ってなんかいないでありますよ!」

僕のジト目に、唯は非常におかしな口調で答えた。

「だ、大丈夫ですか? 浩介さん」

「痛い。それと、熱い」

若干及び腰な様子の憂の問いかけに、僕は思わずハードボイルドな声が出てしまった。

「ティーカップが割れなくてよかったよ」

「それはいいんだけど、頭大丈夫?」

「あはは…………ちよつと冷やしてくる」

燃えるほど熱い紅茶をかぶった僕は、心配そうに聞いてくるムギに、僕は苦笑しながらいったん部室を後にした。

それから数分後、頭を文字通り冷やした僕は軽音部の部室に戻った。

ちなみに唯はというと

「お姉ちゃんは座ってて。あとは私の方でやるから」

憂によって椅子に座らされていた。

(下級生にお茶を配膳することになる上級生って)

僕はそこで考えるのをやめた。

いくら何でも唯に失礼なような気がしたからだ。

僕は再びアンプの修理に取り掛かることにした。

「紹介するね。部長の田井中律さん」

「どうも、部長の田井中律。よろしく」

かっこよく見せようと、いつもよりボーイッシュに自己紹介をする律。

そんな彼女の様子に、もう一人の新生が入りかかると漏ら

す。

「ちよつと、律！」

「ん？」

そんな律を尋ねてきたのは生徒会役員の真鍋さんだった。

声色は少しばかり怒りが混じっているような気がした。

「講堂の使用申請がまた出ていないじゃない！ このままだと講堂が使えなくなるよ！」

「あ、そうだった!？」

(またかよ)

律と唯のやり取りに、僕は心の中でため息をついた。

部活申請用紙の時にも同じことをしていたような気が……

「すみませんすみません！」

先ほどまでのかつこよさはどこへやら、謝り続けている律の姿は実にあれだった。

「それで、こちらが琴吹紬さん」

そんな律たちをしり目に、部員の紹介を続ける憂はある意味大物なのかもしれない。

「初めまして。騒がしくてごめんね」

「あ、いえ」

おっとりとして温厚そうなムギの印象は、新入生にも伝わったようで「優しそうな人だね」と漏らしていた。

「大体、その恰好は何よ！」

「律ちゃんったら」

尤も、律と和の絡みにうつとりとしたような声を出している時点でそれも半減しそうな気もするが。

「そして、あそこにいる人が高月浩介さん」

「高月浩介だ。よろしく」

修理をしている手を休めて、新入生の元まで向かうとそう言いながら、新入生に手を差し伸べる。

「ど、どうも」

そして握手を交わした。

(昼休みの彼女ほどではないけど、ギターとかに触れているみたい)
握手をしながら僕は得られた情報を頭の中で整理する。

僕はまだ終わっていないアンプの修理をするべくアンプの元へと向かうが、後ろの方で“かっこいい人だね”という声が聞こえたのは僕の幻聴だろう。

「それで、最後が……あれ？」

まだ紹介していない濡の姿を探すが、部室内のどこにも見当たらないので、困惑したような声を上げる。

「もしかして、あそこにいる人？」

「う、うん。秋山濡さん。とても恥ずかしがり屋なの」

僕はアンプの修理を終え、ふたを閉める終えてからドアの方に視線を向けると、ドアから顔だけを出して顔を赤らめながら僕たちを見ている濡の姿があった。

「そんなところにいないで入ってこいよ」

「いや。笑うもん」

律が促すが濡はさらに顔を引っ込めてしまった。

「笑いませんよ。似合ってますし」

「ほ、本当？」

憂に言われて安心したのかようやく部室内に入ってきた濡は唯たちが着ているメイド服だった。

「か、かわいい」

思わずそう漏らしてしまう新生生の二人の反応も正しいものだった。

そんな二人に迫る魔の手に二人は気付いていない。

「……………」

「あの、この人は？」

「山中さわ子先生。軽音部の顧問」

睨みつけるように憂と新生生を見比べる山中先生の様子に、困惑した様子で問いかける新生生に同じく憂も困惑した様子で答えた

「貴方たち」

「は、はい!?!」

山中先生の呼びかけに、二人は体を震わせながら返事をする。そんな二人の後に後ろに隠していたメイド服を掲げると

「着てみない？」

と声を掛けた。

返事はもちろん

「結構です」

だった。

それからしばらくして、演奏をすることになり各々が準備を始める。

僕はギターをアンプにつなげて準備を整えていた。

「何だかかっこいいかも！」

女子生徒のその言葉はある意味僕には救いの言葉にも見えた。

（彼女は“かっこいい”のが好きなのだろうか？）

そんな疑問を抱くが、僕はそれを頭の片隅へと追いやることにした。

今は演奏をしつかりとすることに意識を集中させるためだ。

だが、

「滯ちやん、ストラップが引っ掛かる」

「私も」

「裾が邪魔でペダルが踏みずらい」

「……………袖が……………あ、大丈夫か」

唯をきっかけに次々に不満を口にし始めた。

「だあっ！ 演奏しづらい！」

「誰だ、この服を着ようと言いだしたのはっ!!」

ついに律が癩癩を起こした。

ちなみに、主犯は用があるとのことで部室を去っていった。

「着替えよう！」

「賛成〜！」

そして、僕を除くみんなは服を着替えるため音楽室とここをつなぐ通路のドアを開けて中に入っただけだった。

「いい度胸してるよな。お前ら」

「あ、あはは……」

僕は叫びたくなるのを必死にこらえながら口を開いた。

そんな僕に返ってくる苦笑がとても痛かった。

「結局ジャージになりました」

着替えたのは良かったのだが、なぜかジャージに着替えていた。

(分からない、全く分からない)

ジャージを着る理由が僕には見当がつかなかった。

「早くやるよ。時は金なりだ」

「分かってるって。浩介、ちよつと退いて」

僕の促しに律は頷くと退くようにジェスチャー交じりで行ってき
た。

「分かった」

「よしっ！ 唯！」

「あいよ！」

僕が横に避けると、律は唯に声を掛けた。

掛けられた唯はその場でくの字に頭を下げる。

(一体何をやる気だ?)

「いいよー」

「よし、行くぞっ！」

唯の合図に律は宣言をして駆け出した。

そして唯の背中に手をつけて唯を飛び越えた。

清々しい笑顔で見事に飛び越えた律は華麗に着地した。

まさに素晴らしいフォームだった。

「次、ムギだぞー！」

「おー！」

そのやり取りを見ていて、僕の中で何かが切れた。

「あたっ!？」

「練習をしろ、練習を!!」

この間完成した“ハリセンmark26”(25まですべて破損のため役目を終えた)で二人の頭を軽く叩いた。

それからものの数分で全員は演奏の準備を整えた。

「それじゃ、行くぞ」

「うん」

律の呼びかけに頷いた唯はレスポールの弦を軽くストロークさせ甘く太い音を上げた。

「お、かつこいいー!」

(やっぱりかつこいいいものが好きなんだ)

目の前の女子生徒の好みがなんとなく把握できてしまった。

それはともかく、これから始まる演奏は絶好のアピールチャンスだ。

ここで素晴らしい演奏をすれば、目の前の女子生徒の入部の可能性は上がるだろう。

(よし、ここは気を引き締めよう。正体がばれるとかそんなのはここでは忘れよう)

僕も本気で演奏をすることにした。

ちなみに、いつもは全力で演奏をしているがそれでもある程度手を抜いている。

とはいえ、それでも人から見ればうまいという分類になるわけだが。

閑話休題。

そして律がステイック同士を打ち鳴らすことでリズムコールを行う。

そして始まった曲は初めてのオリジナル曲でもある『ふわふわ時間』だ。

なのだが、一言で言うならば、最悪だった。

律のリズムキープはめちやくちやで、もはや清々しいほどのヨレ方だった。

ドラムはある意味リズム面ではリーダー格の存在。

そのリズムが狂ってしまえば、リズムを聞いて演奏をするパートもめちやくちやになるのは当然のことだ。

それは基礎がしっかりとしていない家のように、ちよつとした衝撃があっただけでも崩れるようなものだ。

とはいえ、唯の方も所々コードを間違えたりしていたり、ベースも若干ではあるが弱かったり僕の方も空回りしだして音にムラができていたり、全体がおかしかった。

(あはは、もうこれは無理かも)

僕にはもう結果が見えてしまったような気がした。

それでも、この演奏で良かったことと言えば、最後まで諦めずに弾ききることができた。ことだろう。

「ちゃんとした演奏を見せてあげられなくてごめんね」

「いつもはちゃんとやってるんだよ」

女子生徒に謝る唯に、フォローを口にする漕。

「そうだったけ？」

「そうだろうが」

そんな漕のフォローも唯の一言で無くなったが。

「とにかく、明日ライブをするからぜひ見に来てね」

「ぜひ、わが軽音部に清き一票を」

「選挙か！」

ムギの言葉に続いて口を開いた律に、僕はそうツッコんだ。

「は、はい」

(あー、やっぱり駄目だったか)

女子生徒の表情が曇ったのを見た僕は、彼女が入部する可能性が限

りなくゼロに近いということを悟った。

「そ、それじゃあ行こうか」

それは憂も同じだったようで、誤魔化すように女子生徒に声を掛けると唯に先に帰っていることを告げて、僕たちに一礼すると女子生徒と共に部室を後にした。

「ふう……」

二人を見届けると誰かがゆっくりと息を吐き出した。

「浩君、明日も来てくれるかな？」

「さ、さあ？」

“可能性は低い”とは言えずとぼけることしかできなかった。

そんな自分の弱いところがとても恨めしかった。

「いよおし、明日のライブ成功させるぞ!!」

「!!「おー!!」!!」

とはいえ、ライブに向けてさらに士気が高められたのだとすれば、それはそれでもいいかと思う僕なのであった。

第36話 新歓ライブ!

日も暮れて空が暗闇に包まれている中、僕は中山さんに家まで送り届けてもらった。

「それじゃ、お疲れ」

「お疲れ様です」

中山さんの労いの言葉に、僕も労いの言葉を返すと手を上げて中山さんは車を走らせていった。

僕の背中にはいつも使っているのではないギターが入っているケースがある。

今日、年に一、二回開かれるコンサート形式のライブが行われたのだ。

結果は成功で、会場は盛況となった。

(やっぱり、New starsプロジェクトは好評みたい)

——New starsプロジェクト

それは、まだ名前は知れていないが、とてもいい演奏をする新生バンドにスポットを当てる企画だ。

後半の部の15分を当てて期待のバンドの紹介と、演奏をするというのがこのプロジェクトの目的だ。

来場している観客も、ブーイングを飛ばしたりせずに手拍子をしたり歓声を上げたり等々、非常に盛り上がっていた。

そんなこの企画の参加(というよりは選出だが)方法は、各バンドが送ってくれたPRビデオを基にバンドメンバーの判断で決められる。

完璧でもなくていいので、いい演奏ができるバンドが選考基準である。

応募するバンドも自分の名前を売り出すことができる格好のチャンスであり、こちらは新生バンドの楽曲を演奏させてもらえる契約ができるため双方にメリットがあるのだ。

そんなプロジェクトだが、ある問題があった。

(やっぱり、このプロジェクトの時間は拡大させた方がいいかな)

今回の企画で選ばれたバンド『ラヴ・クライシス』との懇談会で“時間が短すぎる”という意見が出たのだ。

確かに、15分という時間は短すぎる。

だが、会場を貸し切りに行っているので、長い時間になればなるほど使用料が高くなる。

しかも、演奏している楽曲はすべて他者が作曲したもの。

それを演奏しているため、その料金も加算される。

チケット代がほかのバンドよりもやや高額なのはそれが理由だ。

少しでも利益を上げるため、限定でアルバムCDを販売した。

完売はしているもののこれも予想以上に費用が掛り、結局利益は5%増のみに留まった。

(いつそのこと3時間30分貸切にでもしてみるか)

そうすれば、1時間ほどはこの企画に割り当てられるはずだ。

とはいえ、これは経営にかかわる話。

一度社長と話し合いをするのが得策だ。

そんなことを思いながら、僕は自宅に戻るとギターを置くために自室へと向かうのであった。

「ふう、ライブの後のお風呂はまた格別だ」

お風呂に入って疲れた体をいやした僕はさっぱりとした気分で自室に戻った。

「あれ、電話がかかってきてる」

自室に戻るなりけたたましく鳴り響く携帯の着信音に、僕は少し顔をしかめながら机の上に置かれた携帯を手取る。

「って、慶介か」

電話の相手は慶介だった。

「気安くコールするな」

『おいおい、いきなりのご挨拶だな』

僕の言葉に、慶介は苦笑しながら返してきた。

「当たり前だ。今何時だと思ってる」

『夜の10時だ』

しれっと悪びれることもなく答える慶介に、僕はため息をつきながら頭を押さえた。

「そんな時間に電話をかけるか？」

『いや、夕方からかけてるけどずっと出なかったんだから仕方がないだろ』

慶介の反論に、僕は携帯の着信履歴を確認すると確かに夕方から何度も連絡をよこしている記録が残っていた。

「ごめん、ちよつと用事が立て込んでいて」

『いや、まあいいけどな』

コンサートに出ていたため電話の連絡に気づけなかったことを謝ると、慶介はそう言っただけで軽い感じで許してくれた。

「で、何の用？」

『ああ、軽音部の新歓ライブでの曲演奏の件だけど』

用件を促すと、慶介の口からそんな内容が聞こえてきた。

「おい、待て。何で、お前の口からその言葉が出る？」

『あれ、言っただけだったか？ 俺、生徒会に入ったんだ』

僕の疑問に、慶介はおかしいなど言った感じで説明してくれた。
「な……なにいいいいいい!!!」

慶介の言葉に、僕はおそらくこれまでに一番の衝撃を受けてしまい、大声で叫んだ。

部屋を防音仕様にしておいてよかった。

『おわっ!? いきなり大声を上げるなっ!』

「お前、まさか生徒会役員を脅したのか!? なんとやつだ! 今すぐ天に変わってお前に天罰を——」

『待て待て待て! 俺は悪いことなどしていない! ちゃんと推薦で選ばれたんだ! どうかひどい言い草だな』

混乱する僕に律儀にツッコむ慶介の声はそんな僕を鎮めさせるの

に十分だった。

「ご、ごめん。まさか、慶介が生徒会にいるとは予想もできなくて」

『いいんだけど。ていうか、去年の10月にメールしたぞ』

「メール？」

慶介に言われて、僕はメールの方を読み返してみる。

すると、確かに10月にメールが届いていた。

「ごめん、前置きが長くて鬱陶しかったから読んでなかった」

『ファイファイ』

慶介のメールは前置きが長くて10行以上はあった。

しかも前置きもくだらない内容だったのと、読む時間がなかったこともあり、読まずに放置していたのだ。

「それで、曲が何？」

『曲目に『命のユーステイティア』というのがあったら？』

「確かにあるけど、それがどうかした？」

僕はなんとなく嫌な予感を感じながらも続きを促す。

『実は、学校の方に欲名で連絡があったんだ『他者の作曲した曲を演奏させるなど大変遺憾であり、即刻中止にしてもらいたい』とね。それで、申し訳ないんだけど現状のままでのライブは認められないという結論になったんだ』

「何だって!?!」

慶介の告げた内容に、僕は思わず叫んでしまった。

(誰が連絡を……著作権曲なんて学園祭でも演奏してるだろ)

予想もしていない事態に僕は混乱しないようにするので精いっぱい、詳しいことを聞くことができなかった。

『だから、曲目を変更してもらいたんだよ。幸い、申請用紙は手元にあるから曲名さえ言ってもらえればこっちの方で修正できる。明日は色々忙しいから、できれば今すぐしてもらいたい』

「分かった。それじゃ……」

僕は慶介に代わりに演奏する楽曲の名前を告げるのであった。

翌日、いつもより早めに学校に来ていた僕は、時間を見計らって席を立ちあがる。

「さて、まずは滯からだな」

これから僕は、部員全員に曲目の変更を告げなければいけないのだ。

本来は電話をした後すぐにでも教えるべきなのだが、時間も時間だったため朝のうちに説明して回ることにしたのだ。

ちなみに、苦情の連絡をしそうな相手ということで、真っ先に思い浮かんだ田中さんには電話をしてさりげなく聞いてみたが、知らないと返された。

嘘を言っているようでもなかったので、田中さんではないようだ。

(工作部隊に調査をお願いするか)

僕はそう思い立つとある教科のノートに、依頼文を記していく。そして今度こそ滯のいる一組へ移動した。

一組の教室には真鍋さんと滯の姿があった。

どうやら滯は真鍋さんと同じクラスだったようで、楽しげに話をしていた。

「滯」

「あ、浩介」

教室に入って、滯の席まで移動して声を掛けた僕に、滯は若干驚いたようすで反応した。

「今日の新歓ライブだけど、曲目を変更する」

「な、何いっ!?!」

僕の単刀直入な物言いに、滯は驚きのあまりに大きな声で叫んだ。そのために、何事だとはかりに教室にいた人たちが滯の方に視線を向ける。

「ど、どういうことなんだよ」

視線が集まったことに顔を赤くしながら詳細を尋ねる滯に、僕はふ

と疑問を抱くがそれを頭の片隅に追いやる。

『命のユースティティア』を演奏するなどという苦情が来て、曲を変更しなければ演奏をさせないと言われたんだ」

「そんな……もう当日なのに、どうするんだよ」

僕の事情の説明を聞き終えた漣のの表情は絶望の色に染まっていた。

「それは大丈夫だ。代わりに入れた曲は既に演奏したことがある曲だから、一回通して演奏するだけで大丈夫だろうしそれほど心配することはないよ」

「そ、そうなのか」

僕の話聞いた漣はほっと胸をなでおろす。

(とはいえ、一度演奏しているふわふわ時間であの惨状なんだけどね) あえて式を低くさせるようなことを言うのもあれなので、僕は口にはしなかった。

そこで、ふと疑問がわいたのか僕の方に視線を向けた。

「それで、その曲ってなんなんだ？」

「それはだな……」

そして僕は漣に、変更となった曲目を告げた。

その瞬間、漣の顔が真っ青になった。

一組を後にした僕は続いて二組の方に来ていた。

「律、ムギ、唯」

「お、浩介じゃん」

「どうしたの？ 浩介君」

すでに学校に来ていた三人に声を掛けると三者三様に反応を示した。

「今日の新歓ライブだけど、曲目を変更する」

「おーけー……って、何だって?」

ノリのように頷いた律だったが、話の内容に気が付くと顔をこわばらせながら聞きかえしてきた。

「だから、今日の新歓ライブの曲目を変更する」

「な、なんだって!?!」

「ど、どういうことなの浩君?!」

再度告げた言葉に、律は驚きをあらわにし、唯は事情を聴いてきたため僕は滞にしたのと同じことを説明した。

「陰謀だ。競合の部活が陰謀を——「そんなわけないだろ」——ですよ
ねー」

陰謀説を唱え始めた律に僕は即座に否定した。

当人もあり得ないと思っていたのかすんなりと引き下がった。

「でも困ったわ。今新しい曲の練習をしてもうまくできるかどうか
……」

「安心して。そこはしっかりと考えている。一度演奏した楽曲に変更
しているから、昼休みに練習をしておけば大丈夫」

ムギの不安そうな言葉に、僕は安心させられるように笑顔で答えた。

「それで、どんな曲?」

「それはだな——」

唯の疑問に、僕は新たな曲名を告げた。

これで、全ての準備が整った。

後は昼休みでの練習だけだ。

変更になった曲を弾き終えた僕たちは、お互いに顔を向い合せると
頷きあった。

「今のすぐくよかったんじゃない?」

「ああ、ものすごく揃ってた」

「こんな気持ちのいい演奏は初めてだよ」

ムギの問いに続いて漑と僕は弾き終えた感想を漏らした。

昨日のふわふわ時間での一件が嘘みたいに関わさっていたのだ。

リズムキープも正確で、コードのミスも目立たなかったほどに。

「それに浩君のアレンジもすごかったよ」

「ああ。あれは私も驚いたぐらいだ」

唯の称賛の声に乗るようにして律も声を上げた。

「いや、皆が頑張ってるんなら僕ももつと頑張らないと思ってるね」

「やっぱり浩君ってギターうまいよね」

改まって褒められるとどうもむずがゆくて仕方がない。

僕は、そんな気持ちをぐまかすように頭の後ろの方に手を当てるのであった。

「あ、もう昼休みも終わりだ」

「それじゃ、移動の方を始めましょ」

「そうだな」

新入生歓迎会に参加する生徒は公欠が認められており、5、6限は授業を受けなくてもいいのだ。

とは言っても、後程教師の方から課題を出されはするが。

そして、最初の5限で楽器の移動などの準備を、6限で本番の歓迎ライブを行うことになっている。

ちなみに5限と6限は新入生は歓迎会の為に授業は自習扱いになっている。

僕も慶介と共に歓迎会を見たのである意味経験者だったりもする。

閑話休題。

「ひ、人がいっぱい」

「歓迎会なんだから当然でしょ」

舞台上最後の準備をしている中、幕の端の方から外の様子を確認した漑が体を震わせながら声を漏らす彼女に、僕はため息をつきながら返した。

「いつも通りにやれば大丈夫よ」

「で、でででもっ」

(やっぱり緊張するんだね)

何となく緊張することは予測はついていたが、滯が緊張をしないようになるのはおそらく今後も無理な課題なのかなと心の中で悟っていた。

「ねえねえ律ちゃん、浩君」

「なんだ？」

「何？」

そんな僕と律に声を掛ける唯の方に視線を向けると用件を尋ねた。

「そこで百円玉を拾ったよ！」

「お前は緊張しろ！」

緊張の“き”の字も知らないと言った様子で嬉しそうに先ほど拾ったと思われる百円玉を僕たちに見せてくる唯に、律がツッコんだ。

「はい没収っ！ 後で生徒会の方に届ける」

「うなっ!? 浩君のけちんぼ」

唯がブーイングするが僕はそれに構うことなく唯から奪った百円玉を近くにいた生徒会の人に渡した。

「それにしても、滯のセンスは独特だよな」

「そうか？」

そんな僕たちをしり目に、今回の新歓ライブの曲目を確認していた律がポツリと漏らした。

僕もリストの方を覗き見た。

1 : ふわふわ時間^{タイム}

2 : 私の恋はホツチキス

3 : カレーのちライス

4 : Don't say lazy

確かに、微妙に独特だった。

「ねえ、本当にボーカルは私と浩君だけでいいの？」

「うえッ!？」

唯の疑問に、滯が引き攣ったような声を上げた。

「そうだな。せつかく三人もいるんだし滯も一曲歌って——」
「ヤダっ!」

律が言い切るよりも早く滯は拒絶した。

「あんなアクセントも、もう怒らないって」
「ヤダっ! 絶対ヤダ!」

律の言葉に、学園祭での悲劇を思い出したのか、さらに拒絶反応を強くした。

「滯ちゃん——」

「ヤダっ!」

「滯——」

「ヤダっ!」

とうとうムギと唯が声を掛けただけでも拒否をするという極限の拒絶反応を見せた。

そんな中、唯の表情が何かをひらめいたと言わんばかりの者となった。

「ラーメンだけじゃ?」

「ヤダっ!」

「餃子もつかなきゃ?」

「ヤダっ!」

唯とムギは滯を使って遊び出した。

(何だか面白そう)

「チーズケーキも出さないと」

「ヤダっ!」

そんな二人に触発されて僕もやってみるが、この体中に感じる達成感のようなものはなんだろう?

「ものすごい拒否反応だな、おい。というより滯を使って遊ぶなよ」

本来は僕が言うべきセリフを律に言われてしまった。

何事も適度が一番いいのだ。

「しょうがないわね。全部唯ちゃんと高月君でいいんじゃない?」

一連のやり取りを見ていた山中先生はやれやれと言った様子で促した。

『次は、軽音楽部によるクラブ紹介と演奏です』

そんな山中先生の言葉の直後に、僕たちの出番を告げるアナウンスが入った。

「みんな頑張ってね最後に顧問として、言いたいことがあるの」

「さわちゃん」

「山中先生」

山中先生の応援に、僕たちは感動に包まれた。

コスプレさせるなどの暴挙をしてきたあれな人ではなかったのだ。

僕は改めて山中先生のことを教師だと実感した。

(これが終わったら山中先生にはお礼を言わなきゃ)

「制服も意外といいっ!」

「「「「「……………」」」」」

そう思っていた僕に、山中先生はサムズアップをしながら、恥じらうこともなく大きな声で告げた。

これまでの僕の感動は一瞬で崩壊した。

「準備をするので、とっとと舞台のそでに引っ込んでください」

それは律も同じだったようで、律はそれだけ言うどドラムの方に歩み寄った。

それに倣って、山中先生には目もくれずに皆も準備の方を始めた。

「滯」

「何、浩介?」

僕もそれに倣って滯の方へと向かうと声を掛けた。

「忘れてないと思うが、最後の曲は滯がボーカルだぞ?」

「うっ……………」

本当に忘れていたのか、それとも忘れようとしていたのかは定か恵はないが、僕の指摘に滯が言葉を詰まらせた。

「……………分かった。僕一人で歌うよ。滯の歌声は曲の感じを引き締めたいんだけど、残念だ。本当に残念だ」

僕は大きさに言いながら肩をすくめると漣に背を向けた。

(何だか悪人になったような気がする)

漣の性格上、ああ言えば実際に歌う可能性があることをわかって僕はあえて言ったのだ。

とは言っても1割2割程度の話だが、漣の性格を利用したことへの罪悪感にかられた。

「あ、唯」

「何、浩君？」

そして、僕は唯にも言っておかなければいけないことがあった。

「今回のMCはすべて唯がやることになっているのは覚えてるよね？」

「頑張ります！」

ムスツと胸を張る唯に僕は軽く頷くと言葉を続けた。

「それはいいんだけど、くれぐれもオチで僕を使わないように頼むよ」

「了解であります！」

僕のお願いに、本当に信じていいのかが不安になるような反応だったが、とりあえず彼女のことを信じてみることにした。

「あ、それと足元のペダルには気を付けて」

「これって、何？」

そう言って視線を向けたのは、今回投入した新兵器だった。

「エフェクトと言って、音に色々な効果を出すものだよ。そのペダルを踏むとエフェクトがかかって音色が変わるから、演奏中に踏まないように気を付けてね」

「なるほど……」

興味深げにペダルを観察している唯に、僕は不安を抱く。

ペダルは僕のポジションの方に置かれているが、手違いで踏まれる可能性もあるので、注意をしておいたのだ。

アドリブを入れてきたりする可能性もあるのもその一つだ。

そして、一通り用が終わった僕は、自分のポジション(唯の隣)に移動するのだが、もう一つ問題が残っていた。

「山中先生、本当に邪魔何でとつとすつこんでください。というか

すぐに退いて」

「ちよつと！ みんなして扱いがひどすぎるわよー」

僕の一言が止めだったのか、山中先生は抗議の声を上げるが、僕達はそれを無視した。

山中先生はすぐに観念して舞台そでへと移動していった。

(これは終わった後に埋め合わせとかをする必要があるよな)

埋め合わせが何を指すのかがわかっている以上、あまり気は進まないが。

(まあ、今はこのライブを成功させることに意識を向けよう)

僕は気持ちを切り替えながら開きつつある幕を見るのであった。

★ ★ ★ ★ ★

同時刻、一年の教室。

自習という形にはなっているものの、HRが終わっているため下校しても良い状態のため、部活動に興味のある者は既に新入生歓迎会の会場へと向かっていた。

そうでない者や既に入部を決めた者は、下校していたり部室に向かっていたりとなっているため、教室に残っているのは数人程度だった。

その数人も、9割が既に歓迎会で目的の部活の紹介を見終わった者たちだったりするが。

「……………」

そんな教室に残る生徒たちの一人でもある黒髪にツインテールの髪形をした少女は、荷物をまとめていた。

その生徒は、当初『ジャズ研究部』への入部を考えていたが少女の思い描いているジャズとは違っていたため入部を見送っていた。

もう一つの部活もあるが、まじめにやっている部活という印象を持たなかった彼女は、自宅に戻ってこれからどうするかを考えようとしていた。

「え、もう決めちゃったの!?!」

そんな彼女の耳に、女子生徒の驚きに満ちた声が聞こえてきた。その声の方を見ると、二人の生徒が話をしていた。

片や申し訳なさそうに、片や残念そうな様子で。

(確かあの人は……)

少女はその女子生徒を思い起こそうとした時、片方の女子生徒が去って行った。

「っ!？」

そして残された女子生徒と目が合ってしまった少女は慌てて荷物を手にするとドアに向かって足を進めようとした。

「あ、あのー！」

「……………」

ドアを開けるよりも早く呼び止められた少女——中野 梓はゆっくりと呼びとめた人物の方へと振り返った。

「もしよかったら一緒に新入生歓迎会に行きませんか？」

「……………」

女子生徒の言葉に、梓は考え込んだ。

(確か、この時間帯は『軽音部』のライブをやってるんだっけ)

「別にいいけど」

まじめにやっていないという印象を抱いた部だったが、演奏だけでも聞いてみてもいいのではないかという結論になった梓は頷いて答えた。

「本当ー、ありがとう」

「別にお礼を言われることじゃないと思うんだけど。えっと、平沢さんだっけ?」

梓の答えに嬉しそうにお礼を言う女子生徒——平沢 憂に梓は返すところ尋ねた。

覚えていないわけではないが、間違っているのかもしれないという考えがあったためだ。

「憂でいいよ。中野さん」

「私のことも、梓でいいよ」

二人はあつという間に意気投合し、下の名前で呼び合う仲となっ

た。

こうして、二人は歓迎会が開かれている講堂へと向かうのであった。

「うわあ、結構いっぱいだ」

「……………」

憂の後に続いて会場内に足を踏み入れた梓は、その光景に息をのんだ。

会場内を埋め尽くす生徒たち。

そして演奏が終わったのか、会場内を包み込む拍手の音。

それは梓が予想していたのとは全く異なる光景だった。

「わあ、お姉ちゃんと浩介さんボーカルなんだ」

そんな梓の横で、憂は嬉しそうに言葉を漏らしていた。

「どうも。うわ?!」

女子生徒の声と共にハウリングが鳴り響き、とつさに耳に手を当てた。

「どうも、軽音部です!」

だが、すぐ後にもう一度女子生徒の声が聞こえてきたので、梓は耳を押さえていた手を退けた。

女子生徒のMCに周囲で笑い声で包まれた。

「それじゃ、次の曲。『Don't say lazy』浩君はクレイジーだってことは言っちゃだめだよー」

「ッ!」

女子生徒がそう言い切った瞬間に、会場中を冷たい風が吹き抜けていくのを梓は感じた。

(冷房とか掛ってるのかな?)

冷たい風に震える梓はそう考えながら天井の方を見上げようとし

た。

ところで、ステイック同士が合わさる音が耳に入ってきた。その直後、ドラムのフィルで曲の演奏が始まった。

梓は風のことを頭の片隅に追いやり、ステージの方に視線を戻した。

会場である講堂内に音楽が響き始めた。

キーボードの音色とパワーのあるドラムに目立たず、されど力強いビートが絡み合い、さらにそこにギターの音色が合わさる。

そして歌声もそれに乗った。

(すごい)

曲の出だしを聞いた梓が感じた感想はそれだった。

全ての音が相殺するのではなく曲自体を磨き上げていた。

(ボーカルもうまいなあ)

聞いていても違和感がなく、まるで曲と一緒に歌声も奏でていてではないかという錯覚を受けるほどに合わさっていた。

時より違う人物の歌声も聞こえてくるが、全くと言っていいほど違和感を感じることもなかった。

(これって、ワウだよな?)

Bメロに差し掛かった瞬間、これまでのギターの音色が大きく変わった。

これまでの軽く薄い音色から、甘く深いギターの音色へと変化したのだ。

(うう……見えない)

どういう人たちが演奏しているのかを目に焼き付けようとするが、自分の背の関係で、よく見えなかった。

梓は自分の背の低さをこの時は恨んだ。

そして、間奏に入る。

(リフもいいな)

同じコードを繰り返すリフはほとんど同じ音色だった。

二本のギターの音色が聞こえたが、リズムにばらつきがあることもない。

(あれ、音が減った)

何回目かのリフでこれまで二本分のギターの音色が一本減った。かと思えばスクラッチ音が会場を駆け抜けた。

(これって、ピックスクラッチ!?)

梓は先ほどのギターの音色の正体を見抜いていた。

——ピックスクラッチ

ピックを弦上でこするように滑らせる演奏法だ。

迫力のあるサウンドが出せる効果を持つが、場面を間違えると局自体を壊すものとなってしまふ

閑話休題。

そこからギターのソロが始まった。

(ビブラートが効いてるし、格好いいな!)

そんな感想を抱いていると、周りからどよめきが走った。

梓はその正体探ろうと背伸びをするが、やはり見えない。

「浩介さんすげーいい」

隣で憂がそう漏らしていたが、梓の耳には聞こえていなかった。

そして駆けるようにして演奏は終わった。

「……」

会場内から拍手がわきあがる中、梓はまるで熱に浮かされたような感覚に襲われていた。

それほどまでに、軽音部の演奏は梓に思わせるところがあったのだ。

そして、これが中野梓にとって新たな道を生み出す結果となるのであつた。

★★★★★

新歓ライブも盛況という良い結果を残して、幕を閉じることができた。

ちなみに、これは余談だが。

「ねえ、唯」

「何？ 浩君」

ライブが終わって舞台そでの方に移動したところで、僕は唯に声を掛けた。

「僕ライブが始まる前に、オチで僕を使うなって言わなかったっけ？」
「えーっと、言っておりました」

僕の問いかけに、唯は素直に白状した。

「それじゃ、『浩君はクレイジーだってことは言っちゃだめだよ』っていうのは何？」

「それは、言った方が面白そうかなーって思いました」

あのMCでオチに使われたことに怒っているのもあるが、それだけではない。

「まあ、確かに受けるMCができるのはすごいとは思うけど、唯は僕のことを狂ったやつだって思ってたんだな。あれで、はつきりとわかったよ」

「いや、それは言葉のあやです。って、どうしてハリセンを持っていらつしやる!?!」

引き攣った表情をしながら聞いてくる唯に、僕はきつとこれまでで最高の笑みを浮かべているだろう。

「どうして？ 教えてあげるよ。それはね、こうするためだっ
「あたっ」

僕はハリセンを大きく振りかぶると“軽く”本当に軽く頭を叩いた。

「今度から、オチに使うときは前もっていうこと。オーケー？」
「了解であります」

そんなやり取りがあった。

結局、自分で嫌がっていた“自分がMCのオチに使われること”を許してしまうという何とも、意思の弱さを感じさせる一幕だった。

閑話休題。

「あの一、そうやっていると来るものも来ないんじゃ……」

楽器等もすべて部屋に運び終わり、ムギがお茶菓子を置きながら先ほどからドアの方に張り付いて動こうとしない唯と律に滯の三人に

声を掛けた。

「だって、ライブはともうまく行ったのに誰も来ないんだよ？はっ!? もしかして、私が失敗したからかな?！」

「やはり、部員が少ないのがいけないのかも」

滯の言葉に、全員がため息をつく。

(というより、勧誘でしょ)

そんな三人に、僕は心の中でツツコんだ。

おかしい恰好で勧誘すれば、どう考えてもその結論になるのが当然だ。

(まあ、止められなかった僕も悪いんだけど)

この結果は全員の責任でもあるのだから。

「お茶入りましたよ」

律たちがドアの前から離れたのは、その一言だった。

「浩介は食べないのか?」

「何やってるの?」

三人が席に着く中、しゃがみこんで作業をしている僕に、律と唯が声を掛けてくる。

「ギター用のアンプを治してるの。ライブの時に壊れたみたいだから」

何が原因だったのか、治したはずのアンプのスピーカーが突然ダメになってしまったのだ。

僕は、再び必要な部品の交換を行っていた。

「大変どすなー」

(これ、本当はお前もやらないといけないんだけど)

他人事のように相槌を打ちながらのんびりとしているギタリストに、僕は心の中で指摘した。

「こうなったら憂ちゃんを捕まえてくるしかないか」

「憂は虫じゃないぞ」

今後どうするのかの話になった際に、律が漏らした提案を僕が即座に却下した。

もしかしたら唯が誘えば来るかもしれないが、だからと言って虫の

ように捕まえるのはあまり気が進まなかった。

(まあ、奇跡でも起きない限り新入部員は期待できないか)

ライブでは大きくプラスに加算されたが、それまでの勧誘でマイナスの極限状態になっているのだから、来る可能性の方がゼロに近いという状態だった。

僕はすでに新入部員をあきらめていた。

そんな中、静かにドアが開けられた。

(山中先生じゃないよな)

あの人はもう少し音を立ててドアを開ける。

ならばいったい誰だろうと、ドアの方を見た。

「あの一」

「はい？」

上半身をドアの隙間からのぞかせて声を上げた少女は、この間変質者(犬のぬいぐるみを着た律だったが)から助けた時の少女だった。

唯が返事を返すと、今度は部室の方に入って後ろ手でドアを締めながら、少女は告げた

「入部希望、なんですけど」

「……………ごめん。今なんて？」

少女の言葉に、部室が静まり返った。

「入部希望——」

思わず尋ねた僕に、少女が答えるのと、後ろの方で歓声上がるのとほぼ同時だった。

(奇跡だ。奇跡が起こった！)

限りなくゼロに近い新入部員が今、ここに現れたのだ。

「確保〜!!!」

感動に浸っていると、律は大きな声で叫びながら新入部員である女子生徒の方に駆け出し始めた。

「きゃあああああ!!!」

この日一番の絶叫が、軽音部の部室内に響き渡るのであった。

2年生編 『新入』 部員』 第37話 新入部員

「ぐえ!？」

「はいはいそこまで」

僕は女子生徒に飛び掛かろうとしている律の襟首を持ち上げた。

「こ、浩介。首が締まってる」

「失礼な。それじゃまるで僕が首を絞めてるみたいじゃないか。そもそも、地面に足がついているんだから締まることもないでしょ」

苦しそうに訴えてくる律に、僕は反論をしながらため息をついた。

「そうだった。てへ」

そう言ってお茶目に笑った律は、咳払いをするので、僕もそれに倣って掴んでいた襟首を離した。

「軽音部へようこそ!」

「さあさあ、こっちこっち」

素早く女子生徒の元まで移動した律と唯は歓迎の言葉を贈ると手を取って奥の方へと引つ張っていく。

そしていつの間にも用意されていたのか椅子に座らされた。

そんな熱烈な歓迎に、女子生徒は嬉しそうな表情を浮かべていた。

「ねえねえ、名前は何ていうの?」

「えっと、中野——」

「楽器は何が得意なの?」

「えっと——」

「好きな食べ物は何?」

矢継ぎ早に浴びせられる質問の嵐に、女子生徒はどうしていいのかわからない様子で戸惑うだけだった。

「お前ら、気持ちは分かるけど落ち着け」

そんな彼女たちに僕ができたのは、落ち着かせることだけだった。

次は滯の手で落ち着きを取り戻した三人に、女子生徒は改めて自己紹介をした。

「えつと……名前は中野梓と言います」

「ん、中野？」

女子生徒の口から出た名前に引っかけた僕は思わず口を継いで出ってしまった。

「どうかしたのか？」

「い、いや。なんでもない。ごめんね、続けて」

僕は気のせいだと思い中野さんに先を促すことにした。

(そうだよ、同じ名前の人なんて数人はいるはずだし)

「は、はい。パートはギターを少し」

(完全にH&Pのファンだっ!?)

ファンレターに書いてあった“ギターをやっている”という文面と一致していたため、もはや目の前の少女が僕のバンドのファンだということとは確定した。

これで、僕はさらに追い詰められた。

中野さんはギターに関して技術と知識を有している。

それは文面からも感じられた。

しかも彼女は、ファンレターという形ではあるがギターの弾き方のコツなどを聞いてきたりしている。

僕の音楽に関する技術や知識は独特だと言われたことがある。

それはつまり、いつバレてもおかしくないということだ。

というより確実にばれる。

「お、それだったら唯と浩介と同じだな」

「よろしく願います。唯先輩、高月先輩」

律の言葉に、僕と唯に向かって礼儀正しくお辞儀をする彼女の姿は、非常にまぶしかった。

それは唯も同じようだ。

「唯先輩……唯先輩……」

「おーい、帰ってこーい」

とはいえ、唯の場合はとても危ない方向に行きかけているが。

「僕のことも〝浩介先輩〟でいいよ」

「え？ でも……」

そんな唯は置いていて、僕の提案に中野さんは躊躇う。

「いい？ バンドたるもの、良好な関係を築くこともまた重要。ならば苗字ではなく下の名前で呼び合うのが効率的なんだ」

それを別の言葉で“絆”ともいうのだが、それはどうでもいいだろう。

「そ、そうなんですか。それじゃ……こ、浩介先輩。私のことも〝梓〟って呼んでください」

「いゝッ!？」

顔を赤くしながら言われたことに、僕はまるでど元を誰かに抑えられたような変な声を出してしまった。

「お、新入生に手を出すとは、浩介ってば大胆♪」

「違うっ！ 親睦を深めるという意味でだっ!!」

律のからかうような笑みでの言葉に、僕はむきになって反論する。
「おやおや、顔を赤くして。むっつりなんだから、もう！」

それでドツボにはまってしまったようで、さらに追撃が掛けられる。

(ちよつと申し訳ないけど、話が進まないし。仕方がないか)

あまり気は進まないが、これ以上醜態をさらすのがいやなのと、話が進まないで僕は強硬手段に出ることにした。

「いいから、とつと話を戻せ」

「さ、サーイエッサー！」

軽く殺気を律に充てて強引に話を元に戻させることにした。

「それじゃ、何か弾いて見せて」

おかしな世界から戻ってきた唯は、自信の相棒であるレスポールを梓（平然に呼べる自分の尻軽さが憎い）へと手渡しながら促した。

「まだ初心者なので、うまく弾けませんけど」

「大丈夫！ 私が教えてあげるから」

梓の初心者という発言に、唯は胸を張って告げた。

「お、もう先輩風ふかしてるな」

「その自信は一体どこから出てくるのやら」

そんな唯に滯と僕はそうツッコんだ。

ちなみに、唯のレベルは“初心者”に毛が生えた程度だ。

それでもあそこまでの演奏ができるのはある種の才能だろう。

そして、梓の言う“初心者”はある種の謙遜だ。

技術は文面から推測しただけだが、知識面ではおそらくこの中では断トツだろう。

梓は恐る恐ると言った様子でレスポールを構えているが、それは今手にしているギターの価値が分かっている証だ。

「それじゃあ」

そう告げて梓はピックをストロークし始めた。

するとどうだろうか。

甘く根太い音が僕たちを包み込んだ。

「う、うまい」

「私より断然っ」

軽快で、それでいて刺激的な音色に律たちは舌を巻いていた。

かくいう僕も、うまい演奏に舌を巻いていたが。

さりげなく入れられたビブラートがまた音に膨らみを付けていく。

「ご、ゴメンなさい。私が下手な演奏をしてしまった」

演奏が終わっても僕たちが啞然としているのを見て下手な演奏だったと勘違いした梓が頭を下げて謝った。

「い、いや。そういうのじゃないから」

「そうだよ。皆うますぎて言葉を失っているだけだから。ね、唯？」

そんな彼女に、滯と僕が必死にフォローをする。

そして、先ほど素直な感想を口にしていた唯に同意を求めるように振った。

「ま、まだまだだね！」

「ええっ!？」

唯のとんでもない感想に、僕たちはいつせいに驚きをあらわにした。

「知らないぞ、そんなこと言っつて。梓の方を見てみる」

「……………っ?!」

僕の言葉に、唯は視線を梓の方に向けて固まった。

梓は唯の言葉に腹を立てたりシヨックを受けたりせずに、逆に唯へと尊敬のまなざしを浮かべていた。

「私、もう一度唯先輩のギターが聞きたいです!」

「え!?! あの……………その……………えっつと」

墓穴を掘る形になった唯は、とうとう追い込められた。

目の前には、尊敬のまなざしで見つめる後輩の姿。

演奏を失敗すれば最悪の場合、それは失望のまなざしへと変わるだろう。

視線をあちらこちらに巡らせながら唯が出した結論は

「それは私よりもうまい浩君がしてくれるよ!」

僕への丸投げだった。

「逃げた」

「逃げたな」

律と滯の呆れた様子の言葉に、唯は視線を逸らした。

「まあ、唯の言葉はともかく。浩介の演奏はとつてもうまいぞ」

「ああ。新歓ライブの時のテクには驚かされたし」

唯の言葉は無視されて、律と滯の評価の言葉が掛けられた。

「あの、できればプレッシャーをかけるのはやめてくれませんか?」

二人に言われてしまうと、僕が中途半端な演奏をできなくなってしまう。

フアンが二人もいる中で本気で演奏するのは自殺行為だった。

「私、浩介先輩の演奏が聴きたいです!」

「うっ。断れない」

梓からの期待と尊敬のまなざしに到底断ることができなくなってしまう。

「はい、浩君」

「……………分かった」

僕は観念して唯からギターを受け取った。

「うう……………私のギターが」

（泣くなら渡すなよ）

涙を流しながら言う唯に、僕は心の中でツッコんだ。

（後輩がうまい演奏をしてくれたんだから、僕もそれに見合った演奏をしないとね）

やるからには徹底的にやるのが一番。

僕は唯から借りたレスポールを肩にストラップをかけて落ちないようにしたうえで構えた。

「梓の演奏はともう良かった。だが、何かが足りない」

「何か、ですか？」

僕の話に興味を持ったのか、梓は気を悪くするどころか興味津々に身を乗り出して聞いてきた。

「ズバリ、楽しいプレイだ」

「楽しいプレイ」

僕の答えを復唱する彼女に頷くことで相槌を打ち言葉を続けた。

「うまい演奏をするだけならば、何も会場に来る必要はない。CDとかで聴けばいいだけ。ライブとかでは聴いて楽しみ、見て楽しませるのが必要だと僕は思ってるんだ。そこで、こういうのはどう？」

そう言い切って、僕はピックを持つ手を動かした。

演奏するのは前の合宿の時に濡が持ってきた、カセットテープに入っていた曲のギターソロの箇所。

あの時は、最後の方に凄まじい声が入っていたが、調べた結果その曲は『Maddy Candy』であることが判明した。

それはともかく、ビブラートやチョーキングを効かせながら素早くコード進行していく。

そしてコード進行がいったん途切れ、音を伸ばすところでギターのヘッドを持つとそれを垂直に立てた。

ギターを縦に構え先ほどよりも比較的にコード進行の激しいパートを弾いていく。

「うお!?!」

「う、うま?!」

すると、それを見ていた梓達が驚きの声を上げる。

最後まで引き切り音を伸ばしながらギターの位置を元の場所まで戻す。

「とまあ、こんな風にパフォーマンスをするのもありかな。はい、どうぞ」

「これはどうもご丁寧」

両手でレスポールを持ちながら返すと、それに唯も倣って両手で受け取った。

「と、とにかく入部ってことでもいいんだよね?」

「は、はい。新歓ライブでの皆さんの演奏に感動しました!」

そんな僕たちをしり目に、律は話を進めた。

「これからもよろしくお願いします!」

そう言っただけで再びお辞儀をする彼女の姿は本当に礼儀正しいという印象を与えるのに十分だった。

「ま、眩しすぎて直視できません!」

「……………」

そんな彼女の姿に、空気を読んでいないような気もしなくもないことを口にする唯に律が一瞬睨みつけた。

「あ、これ入部届です」

「確かに。明日からよろしくな」

入部届の入った封筒を律に差し出す彼女から預かった律は梓にその声を掛けた。

「はい、よろしくお願いします」

再び僕たちに一礼して梓は部室を去っていった。

こうして僕たちは待望の新入部員を獲得するのであった。

「はっ!? わ、私どうしよう?!」

「練習しとけ」

梓がいなくなった途端に慌てだした唯に、僕たちは同時に答えるのであった。

「それにしても、浩介が初対面の女子を呼び捨てにするとはな―」
「まだ掘り返すか。お前は」

軽い殺気を充ててもなお口にできる律の心強さ（悪く言えば怖いもの知らず）に感心したような呆れたような複雑な心境だった。

「さつきも言ったけど、別に他意はない。ただ、向こうがそう呼んでほしいと言つてそう呼ばないとエンドレスになりそうだから」

それは平沢姉妹で十分経験済みだ。

「つと、ちよつと職員室に行つてくる」

新入部員が来たことで忘れていたが、僕には一つだけやらなければいけないことがあったのだ。

「職員室？　なんか悪いことでもやったのか？」

「ええ!?　まさか、校舎中の窓ガラスを割つて回つたの!？」

「まあまあ♪」

律の疑問の声に、唯が壮絶な妄想を口にした。

「誰がするかっ！　そこも、嬉しそうに目を輝かせるな！」

妄想を口にした唯と、目を輝かせてある種の尊敬のまなざしを浮かべるムギにツツコみを入れた。

「古文のことで分からないことを聞きに行くだけだよ」

「何だ。つまらないの」

用件を知つた律は興味を失つたのか、頭に手を当てながら席の方に戻つていった。

そんな律にため息をつきながら、僕はカバンから取り出した古文のノートを片手に部室を後にするのであった。

「失礼します。小松先生」

「高月か。どうかしたのか？」

デスクワークをしていた小松先生に声を掛けた僕は、手にあるノー

トを開いて先生の前においた。

「このことについて教えてほしいんですけど」

「……………」

古文の文面の下に落書きのような文字が書かれているページをまじまじと見ていた小松先生は、僕の方を見上げた。

「なるほど。ここは四段活用を試してみるといい」

「四段活用ですね。分かりました」

僕は小松先生に一礼をして職員室を後にした。

これで、僕の目的も達成された。

(明日からの部活、どういう風にするのかを考えないと)

そして僕は明日新入部員の梓を加えたことによる今後の方針を考えながら部室へと戻るのであった。

第38話 部員狂想曲くあずにやん誕生く

新入部員を獲得して初めての部活の日を迎えた。

「……………」

いつもの席に腰掛けていた僕は、今後のことについて考えをめぐらせていた。

今後のこと、それはバンドの形式だ。

現在は、ギターが二本にベースが一本、ドラムとキーボードが一つずつという形式になっている。

そこに加わった新入部員でもある梓のパートは、ギター。

すると、ギターが三本になってしまう。

そう言うバンドもあることにはあるが、そうなると曲の編成だ。

三本のギターを有効に使う曲というのはある意味難易度が増す。

だからと言って、片方のパートと同じパートを弾く形式は、タイミングや音程などすべてを合わせなければいけないため、演奏の難易度が高すぎる。

(ラインを作るべきか、それとも同一パートで弾くべきか……………)

当然だが、こういうことはみんな話し合って決めるべきだ。

だが、一応考えておくのが筋というものだろう。

「こんにちは！」

そんな結論を出した時、部室のドアが開けられ元気な声が掛けられた。

ドアを開けたのは、新入部員でもある梓だった。

その背中には自信の相棒となるギターがあった。

「お、元気いっぱいだな」

「はい！ 放課後が待ち遠しかったです」

律の言葉に、梓は元気な声で若干興奮気味に答えた。

「それじゃ、梓も来たことだし早速……………」

「練習ですか！」

律の言葉を受けて、梓はさらに前のめりになって尋ねた。

それを見ながら僕も練習をする準備をしようと席を立ちあが――

「お茶にするか」

「え!？」

りかけたところで告げられた言葉に、思わずずっこけてしまった。

「浩君大丈夫?」

「またベタなコケを」

「だ、大丈夫」

そんな僕に気遣いの言葉をかけてくる律とあきれた様子で声を上げる二人に答えながら、僕は席に座り直した。

(普通、新入部員を獲得して最初の部活動の時は練習しないか?)

この軽音部は練習とお茶を飲む時間の比率は2:8だ。

つまり、練習は全くと言っていいほどやらないと言ってても過言ではないのだ。

とはいえ、新入部員が来たのだからいい刺激になって比率が5:5になるか、変わらなくとも最初ぐらいはまじめに練習をする物と踏んでいたのだが、いつものように平常運転だった。

「ほら、座って座って」

「は、はい」

律に促されるまま律の対面の席に座らされた梓のもとに、紅茶の入ったティーカップが置かれた。

「あ、あの。部室でこんなことをやっても大丈夫なんですか?」

「大丈夫だって」

不安げな表情の梓に、律は軽く答えた。

そして今度は僕の方に視線が向けられた。

僕はそれに肩をすくめて答えた。

「あ、やってるわね」

「ッー」

程なくして現れた顧問の山中先生に、梓の体が震えた。

そして、自分の左側……僕から見ると対面に腰かけた山中先生に、うつむいた。

「あ、あのこれは――」

「ロイヤルミルクティーをお願いね」

罪悪感のようなものがピークになったのか、いたたまれなくなつたのか、梓がしなくてもいい釈明をし始めたところで、山中先生はムギに紅茶を淹れるように頼んでいた。

さすがにそれは予想外だったのか、驚きをあらわにする梓に、僕は苦笑しながら先ほどおかれた紅茶を一口すするのであった。

「顧問の山中さわ子よ。よろしくね」

「中野梓です。よろしくお願いします」

遅れてやってきた濡を交え、梓と山中先生は自己紹介をした。

「お菓子もどうぞ」

「お、ケーキだ！」

そして各々が自由気ままに動き始めた。

ある者は雑談をしたり、またある者は雑誌を読んだり等々、ばらばらだった。

（うーん。机を一つ増やすべきか）

かくいう僕も、その例にもれずに考え事をしていたわけだが。

今現在、ムギが立ちっぱなしになっている。

僕が立てばいいのかもしれないが、それでムギが快く座ってくれるのが疑問だ。

人に立たせといて自分が座ることはできないという性格ならば、まず無理だろう。

（机を増やすとなるとやっぱり生徒会か。一度掛け合ってみるか）

そう心の中で結論付けた僕は、ふと梓の方へと視線を向けた。

梓は戸惑った様子で律たちを見ていた。

やがて、何を思ったのかいきなり立ち上がるとギターケースから、ボディーの色が白と赤色を基調としたギターを取り出すと、ストラッ

プを肩に通して構えた。

(まさか、この雰囲気强行突破して練習をさせようとする気か!?)

梓のやろうとしていることがわかった僕は、勇敢な行動に目を瞬かせた。

ピックを手に、弦をストロークさせた。

すると甘い音色の音が響き渡った。

「うるさーいっ!!」

「ひええ!？」

やはりと言うべきか、魔人と化した(非常に失礼な言い方だが)山中先生の一喝が浴びせられた。

「う……う」

その迫力に、梓は涙ぐむと床にうずくまってしまった。

「さわちゃんのドアホウ！」

「だって、静かにお茶したかったんだもん」

律の一喝に、山名先生はハンカチで目元を抑えながら言い訳をした。

「だもんって、年を考え——「今なんか言ったか。ああん？」——空耳でしょう」

山中先生のやくぎでもビビッて逃げていくのではないかという視線から逃げるように立ち上がると、うずくまっている梓の素へと歩み寄った。

「大丈夫だ」

「あの先生ちよつと変なんだ」

「変とは何よ」

僕に続いて声を掛けた滯りに、山中先生が抗議の声を上げる。

(ちよつとどころか、＼かなり＼だけどね)

口に出したら今度こそ危ないと思った僕は、心の中でツッコんだ。

「ほら、一緒にケーキを食べよう！」

「ティータイムがうちの売りなんだ」

(そんな売りはいらない)

心の中で再びツッコんでいるが、梓の反応がない。

見ると、梓の肩が震えていた。

悲しみと言うよりも、それとは真逆のオーラをまき散らしながら。

「こんなんじゃ、だめですっ!!」

ついに我慢の限界に達したのか、勢いよく立ち上がると大きな声で叫んだ。

「うわ、キレた!?!」

「今度はこっち?!」

今日はよく誰かがキレる日だなと、まったく見当違いなことを感じていた。

「皆さんやる気が感じられないです!」

まったく同意見だった。

「い、いや、新歓が終わって間もないから」

「そんなの関係ないです!」

律の見苦しい言い分をバツサリと切り捨てた。

「部室を私物化するのは良くないと思います! ティーセットは全部撤去するべきです!」

「それだけ、それだけは」

梓のまっとうな意見に、上着をつかんで涙ながらに懇願するのは山中先生だった。

「どうして先生(あなた)が言うんですかっ!!」

山中先生の醜態に、思わず梓と同時にツッコんでしまった。

梓の言っている正論は、僕が常日頃から言おう言おうと思っていたことだった。

「ま、まあとにかく落ち着いて——」

「これが落ち着いていられますかっ!!」

律がなだめるが全く効果はなく、怒りが収まらなかった。

そんな彼女の背後に忍び寄り怪しい(そうでもないが)影。

「いい子、いい子」

「そんなので落ち着くはずが——」

背後から抱きついた唯がやさしく梓の頭をなでる。

そんな彼女に、梓は

「ほわ〜〜」

(お、おさまってるし)

幸せそうな表情を浮かべており、すっかり落ち着きを取り戻していた。

「さっきは取り乱してすみませんでした」

数分ほどして、落ち着きを取り戻した梓が僕たちに頭を下げて謝った。

「ううん。大丈夫だよ。まったく気にしてないから」

「え!？」

唯のフォローに、表情がこわばる梓。

(少しは気にしろよ)

その気持ち、わからなくもない。

「梓の言うことは一理ある。みんなもちやんと練習をするように」「これを機会に練習の時間を増やしなよ」

漣と僕の言葉に、全員は若干不服そうに返事を返した。

こうして、新入部員である梓を加えた初めての部活動は、不穏な雲行きで幕を閉じることとなった。

土曜日日曜日を跨いだ月曜日の放課後。

新入部員梓を加えた二回目の部活動の日を迎えた。

「浩介、浩介!」

「なんだ、鬱陶しい」

大きな声で名前を二回も呼ばれた僕は、不機嫌であることを隠そうとせずに返事を返した。

「うわ、いつにもまして不機嫌だな。何かあったのか?」

「強いて言うなれば、部活に行こうとしたのを止められて、それがしかも慶介だから……かな」

僕は考え込むようなしぐさをしながら、慶介に答えた。

「ひどっ!? 本人前にして言いますか?!」

「普通は言わないけど、慶介だから」

慶介は罵声されても喜びそうな気がする。

「俺とお前は親友だもんな。フツ! もてる男はつれえぜ」

「……………」

かっこをつけるように髪を払う慶介に、僕は彼を無視して教室を後にした。

「つて、そうじゃなくてたな! お前に訊きたいことがあるんだ!」

「なんだ?」

ため息をつきながら足を止めた僕は慶介に向き直る。

「軽音部に新入部員の女子が来たそうじゃないか」

「本当に耳が早いな。それがどうした?」

僕は話の続きを促した。

「おめでとう。ようやく念願の新入部員を獲得できたんだし、しつかりやれよ」

「慶介……」

いつになくまじめな面持ちで送られた祝福の言葉に、僕は感動に飲み込まれた。

いつもはあれな慶介だけど、やはりちゃんとしたいいやつなんだ。

「それで、その子の胸の——」

その一言がなければ、もっとよかったが。

僕は慶介をいつものように始末すると、今度こそ軽音部の部室に向かうのであった。

「ん？ あれは」

階段の前に差し掛かったところで、うつむきながら歩いて来る黒髪的女子生徒の姿が目に入った。

「梓」

「え？ あ、浩介先輩。こんにちは」

声を掛けられてようやく僕の存在に気付いた梓は僕の方を見ながら挨拶をしてきた。

僕もそれに返しつつ、一緒に部室に向かうこととなった。

「あの、浩介先輩」

「何？」

階段を上っていると、横からかけられた声に僕は用件を尋ねた。

「その……この間はすみませんでした」

「その件に関しては梓には非がないんだし、謝る必要はないよ」

前回の激怒の件を謝ってくる梓の律義さに感心しながら、僕はそう返した。

「でも、皆さんに迷惑をかけて……」

「迷惑？ ご冗談を、梓は正論を言ってるんだから、迷惑なんて思っていないし。というか、梓の言っていたことは僕が日ごろから言いたかったことだから、それを言ってくれて感謝してるくらいだ。ありがとね、梓」

「そ、そんな。私は……」

僕のお礼の言葉に、梓は慌てながら反応してきた。

「あいつらに何言っても動じないからな……まあ、今度ばかりは効果はあるだろう。何せ、待望の新入部員に一喝されたんだから、普通は恥ずかしくて練習をまじめにしたくなるはずだよ」

「だと、良いんですけど」

僕の予想に、梓の不安そうな声で相槌が返ってきた。

いくら、動じる気配のない二人でも梓の一喝はかなり効いている

……はず。

「お先にどうぞ」

「あ、はい。こんにちは」

先に梓を中に入れ、僕も続いて部屋に足を踏み入れる。

「……………」

僕の目の前に広がる光景は、練習の準備を整えている唯たちの姿ではなく、ティーカップ片手に談笑している唯と律、ムギの姿だった。

(全然動じてもない)

僕の予想は最悪な形で破られることとなった。

隣にいる梓も呆れた様子だった。

「あ……………」

そして、僕たちが来たことを最初に気づいたのは唯だった。

「お前ら、いい度胸してるよ。本当に」

「い、今から練習をしようと思ってたんだよ！ 本当だよ!？」

僕たちの視線に、唯たちは慌てて楽器を手にした。

しかもそれらはすでに後ろの方に置いてあったものだったことから、僕たちが来たら誤魔化せるようにしたのかもしれない。

……本当に練習をしようとして、用意していたが皆が来ないのでお茶を飲んでいたという見方もできなくはないが。

できれば、僕もそうであってほしいと思っている。

そして、練習が始まった。

ギターを構えた唯が弦を弾く。

だが数回ほどコードチェンジをしたところで、力突きたのか地面に座り込んでしまった。

「はや!？」

「お腹がすいて力が出ないよー」

(そんなのあるはずがないだろ)

唯の言葉に、僕は心の中でツツコみを入れる。

そこへすかさずムギが手にしていたケーキを一口サイズフォークに刺して唯に差し出す。

「う、うま!？」

「なぜに!？」

ケーキを一口食べた瞬間に、速弾きでコードチェンジがうまくできるようになっていた唯に、驚愕の声しか出だせなかった。

「梓ちゃんも、一口」

「え、でも……」

速弾きで疲れたのか若干疲れたような表情を浮かべながら一口分のケーキをフォークに乗せて差し出す唯に、梓は躊躇っていた。

だが、何かに負けたのか梓はケーキを口にした。

「あ、おいし——」

「ん？ 今なんか言ったか？」

ケーキの感想を口にした梓に、律がすかさずツツコんだ。

「おしいって言ったんです！」

（いや、それ無理があるから）

梓の返事に、僕は心の中でそう口にした。

「ううくん、梓ちゃんは気に入らなかったか」

「うう……」

残念そうにケーキが乗っているお皿を見ながらつぶやく唯に、梓の表情は切なげなものとなった。

そんな唯は、梓にケーキが乗っているお皿を差し出した。

すると、梓の表情はまるでひまわりのごとく光輝いた。

だが、逆に唯が腕をひっこめると、今度はどんよりとした雰囲気にも包まれる。

そしてまた腕を前に差し出すとひまわりのごとく光輝き、逆にひっこめるとどんよりとした雰囲気にも包まれる。

「おもしろい」

「後輩で遊ぶな」

若干遊び始めている唯に注意をした僕だった。

ちなみに、この後どうなったのかを目の当たりにした某顧問曰く。

「皆、練習はかどって……って、食べてるし!?!」
だった。

「そう言えば、どうしてティーセットを撤去しなかったの？」

「撤去の発起人が……」

山中先生の疑問に肩を震わせた梓の手にはチョコケーキを乗せたフォークが握られていた。

「な、何事も否定するのは良くないかなと思ったので」

「へえ」

梓の答えに、山中先生たちは意外だと言わんばかりに相槌を打つ。

（間違つてもケーキに買収されたとは言えないもんね）

「梓ちゃんはいつギターを始めたの？」

「小4からです。親がジャズバンドをやっていた影響で」

唯の問いかけに、梓が答えるが完全に初心者というキャリアではない。

（単純計算で5年はやっているのか）

もはや中級者と言っても過言ではない年数だった。

「そう言えば、唯先輩はどうしてギターを始められた切っ掛けってなんですか？」

「え!? えっと……」

梓の疑問に、唯は視線をそらせながら口笛を吹いて誤魔化した。

経緯は律から聞いたが、ものすごい勘違いをしていたということとは言えないだろう。

「あ、あの」

「いやー！ 新入部員ができて良かった！」

答えようとしない唯を不思議に思った梓が声を掛けた瞬間、唯はわざとらしく大きな声で話した。

（今絶対に誤魔化したな）

「こ、浩介先輩の切っ掛けってなんですか？」

「僕？ えっと……」

梓からの問いかけに、僕は視線をそらして考え込む。

唯の二の舞になりかけているが、仕方がないのだ。

何せ、彼女ほどファンとして一番怖い存在はいないのだから。

一つでもミスをすれば全て明かされそうな予感さえするほどだ。

「……三歳のころまで英才教育で、ピアノをやっていたから」

「はっ？」

結局、この間律たちにした説明と同じことを話すことにした。

案の定梓はあつけにとられた様子でぽかーんとしていた。

「あ、あの。ピアノからギターに行く過程が分からないんですけど」
「ピアノをやっていたけど、飽きたから試しにとばかりにバイオリンをやってそこからチェロ、ハーブと行ってもう弦楽器が無くなったからギターの方に手を伸ばしてみたら意外としつくりきてやっているんだ」

「す、すごく手が広いんですね」

僕の説明に梓は、苦笑しながら大人の対応をしてくれた。

何だか対応まで律の時と同じような気がしなくもない。

「あ、そうそう。私、梓ちゃんの入部祝いでプレゼントを持ってきているの」

「本当です………か」

山中先生の“プレゼント”という単語に、表情を明るくしながら期待にみちた表情を浮かべる。

だが、プレゼントを目にした梓が固まった。

ムギの横で立っていてよく見えなかった僕は、少し移動してそれを確認してみた。

その手にあったのはネコ耳のヘアバンドだった。

「あ、あのこれは？」

「ねこ耳だけど？」

梓の疑問に、山中先生は分からないのと言いたげな様子で応えた。

「いえ、それは分かるんですけど。これを一体どうすれば」

「ウヒヒヒヒ」

困惑した梓の背後に忍び寄る黒い影。

「ヒィッ!？」

「あー、大丈夫大丈夫。儀式みたいなものだから」

（一体どういう儀式？）

肩に手を置かれた恐怖で体を震わせる梓に安心させるようかけられた律の言葉に、僕は心の中でツツコんだ。

そんな中、梓は山中先生の魔の手から逃れることができたようで自分の体を抱きしめるようにして距離をとった。

「あらあら、恥ずかしがり屋さんね」

「当たり前です！ 先輩方も恥ずかしいですよ……」

初々しいわと言った様子の山中先生に反論しながら同意を求めると同時に背後に視線を向けた梓は、再び固まった。

僕もその方向を見ると、そこにはムギが何の躊躇もなくねこ耳をしている姿があった。

さらには、律に唯と続いてねこ耳をするという始末だ。

一瞬自分が変なのかと思ってしまうもおかしくないだろう。

「はい。今度は梓ちゃんの番」

唯から手渡されたねこ耳に、梓はこちらに救いを求める。

「抵抗するとひん剥かれるから、素直に応じたほうがいいよ」

「ちよつと、私を一体なんだと思ってるのよ？」

(いつも悪酔いをしている人みたいなのをする人)

口には出して言えないので、心の中で答えた。

「うう……」

そんな僕の返事に、観念したのか梓は断腸の思いでそれを頭に付けた。

「おおおー！」

その姿に、思わず僕も完成を上げてしまった。

それほどまでにねこ耳が似合っていたのだ。

「すっごく似合ってるよー！」

「私の目に狂いはなかったわ」

その姿に満足した様子で山中先生が頷いた。

こればかりは僕も同意せざるを得ない。

(これほどまでねこ耳が似合う人っているのか?)

「梓ちゃん可愛い〜！」

そう言って梓に抱き着く唯の気持ちが僕には十分わかった。

「にやあく」って言うてみて、「にやあく」って」
さらにそこへ律が追い打ちをかける。

「に、にやあく」
「がはっ!？」

ネコの手をしながら上目づかいで鳴きまねをした梓に、僕は深刻なダメージを負い、後ろに下がった。

(な、なんという威力……お、恐ろしい)

梓の恐ろしさを再認識する僕なのであった。

「あだ名は」あずにゃん」で決定だね！」

そして、唯の手で梓へのあだ名は「あずにゃん」になるのであった。

ちなみに、これは余談だが。

「何あれ」

「さあ？」

「あれって二年の人だよな？」

「そうだと思う」

僕たちの教室の前の廊下では、肅清されたためにのびている慶介を不思議そうに見ている後輩たちの姿があった。

この日を境に、慶介は廊下を歩いていただけで注目されるようになったらしい。

本人は喜んでるので、特に問題はないだろう。

……たぶん。

第39話 歓迎会

「……………」

突然だが、僕にはとても重大な悩み事がある。
衣替えも終わり、徐々に夏に向かっていくこの季節。

梓が軽音部に入部してそろそろ2か月が経とうとしていた。
それ自体はいいのだ。

問題は……

「はあ、楽しかった〜」

「練習していないのに疲れました」

満足げの唯とは対照的に疲れた様子で肩を落とす梓だった。

そう、梓の言うとおり、練習が問題なのだ。

時間が経つにつれて唯たちの梓に対する歓迎ぶりはさらに拍車をかけて強くなっていた。

例えば、ティータイムの際には素早く飲み物が並々まで注がれたり、お菓子は僕たちよりも多めだったりなど。

例を挙げればきりが無い。

それに比べて、練習の時間はほぼ0だ。

“オー”ではない、ゼロだ。

これまでも練習は全くと言っていいほどしていなかった。

それでも今までは練習とティータイムの比率は2：8の状態だった。

だが、現在はどうかだろうか？

比率は0.1：9.9という、最低値ぎりぎりを記録している。

ちなみに、0.1は“これからの演奏をどうしていいこうか”と言う

内容の律のティータイムで出された疑問でもある。

これも数十秒後の唯の『このケーキおもしろいよ！』で幕を閉じた。

これにはさすがに開いた口が塞がらなかった。

ちなみに、この二か月で僕と梓の方にも若干の変化はあった。

それが

「まああずにゃんには同情を禁じ得ないね」

梓への呼び方を唯が名づけたあだ名“あずにゃん”にしたことくらいだ。

「あの、浩介先輩。アズにゃんって呼ぶのはやめてくれませんか？」
「嫌だ」

後輩のお願いを、僕はバツサリと斬り捨てた。

「どうしてですか?!」

「僕のあだ名を笑ったから」

前にティータイムの際に唯が語った“浩ちゃん”というあだ名に、梓が吹き出しそうになっていたのを僕は見逃さなかった。

それから報復で僕も彼女にはあだ名で呼ぶようにしたのだ。

「あー、浩介って一度こうと決めると絶対に変えないからあきらめたほうがいいぞ」

「そんな……」

律の言葉に、青ざめる梓。

「まあ、あだ名で呼ぶときには、TPOを弁えるから大丈夫」

「お願いします」

学校を出たところでは梓という呼び方に戻しているのが、いい例だ。

さすがに吹き出しそうになっただけであのあだ名を言い続けるのは、かわいそうだと思っただけからだ。

閑話休題。

今はまだ戸惑っている程度だが、いつ梓が、“やめる”と言い出してもおかしくない状況だった。

今の軽音部はただの休憩所へと成り果ててしまっている。

どうにかしなければいけないのは当然だった。

一番手っ取り早いのは、僕が練習をするように告げることだ。

だが、そこで問題が生じる。

(それを、僕はどの立場で言うのか……だよな)

僕はH&PのDKである。

そして、腕を落とさないためにはギターの練習をしなければいけないのは当然だ。

部活で練習ができない以上、自宅でするしかない。

そうすると、睡眠時間が大幅に削られてしまうことになる。

つまり、彼女たちの知らないところで、影響が出てしまっている状態だ。

僕が練習を促すのは、それをなくすためなのか、それとも純粹に梓をやめさせないようにならせるためなのか、重要になる。

前者ならば僕の注意は自分勝手なエゴに、後者ならば後輩思いの先輩……部員の一因ということになる。

そして、僕はどっちの立場なのかが、いまだにはつきりしていない。それは今後もしないだろう。

ならば、別の方法でアプローチをするしかない。

僕は、その方法を探していたのだ。

しかしいつまで経ってもその方法が見つかることはなく、時間だけがむなしく過ぎていた。

「あ、そうだ。私の家の近くにおいしいアイスクリーム屋さんがあるんだよ。一緒に行かない？」

帰り道、そう提案してきたのは唯だった。

「行きましょう、行きましょう」

そんな提案に、即答で賛成したムギをしり目に唯が“奢る”と口にした時はとても驚いた。

「は、はあ……」

「違うよあずにゃん。返事は“にゃー”だよ」

そんな唯の提案に浮かない表情を浮かべる梓に、唯は真顔で指摘した。

「えっ？」

「はい、にゃー」

「に、にゃー」

首をかしげる梓に、唯は一押しするかのように猫の手をしながら猫の鳴きまねをするように促すと、梓は頬を赤くしながらもそれに応じた。

そして、僕と漕以外の全員がまるで猫を愛でるかのようにくつつい

て頭をなでたりしていた。

(完全に手懐けられてるし)

そんな僕の考えをよそに、唯の先導の元アイスクリーム屋に向かうと各々が好きア味のアイス注文した。

ちなみに、梓のアイスクリーム代は有言実行とばかり、唯が奢っていた。

僕はストロベリー味のアイス頼むことにした。

(チーズ味のアイスはないのだろうか?)

先ほど購入したストロベリー味のアイスを食べながら、僕はそんなことを考えていた。

全員がアイスクリーム屋の前に置かれているベンチに腰掛ける中、僕は梓の後方に立っていた。

(まだアイスの時期ではなからうに)

確かに衣替えで夏服になり、少しだけ昼が伸びてきたような気もするが、まだ“夏だ”と言えるような気温ではない。

せいぜい“ちよつと暑くなってきたな”程度だ。

尤も、この感覚は僕を基準にしているのでもしかしたら皆にとって“暑いな”と感じているのかもしれないが。

(ごっつこ)

僕は再び視線を前の方で、ベンチに腰掛けながらアイス食べている梓に向けた。

「どうかな、軽音部でやっていけそう?」

「えつと……このゆつくりのんびりとした雰囲気がちよつとあれですけど」

梓の前に移動してしゃがみこんで問いかけた際に、梓は少しばかり言葉を選んで答えた。

だが、後半の“ゆつくりのんびりとした雰囲気”という部分が彼女の本音のような気もした。

「大丈夫! いつか慣れるから!」

『ていうか、慣れたくない』

そんな梓の肩に手を当てて唯が告げるが、梓の心の声が聞こえて

きた。

読心術を使っていないにもかかわらずになぜか聞こえてくるということは、それほど強い思いなのだろう。

……きつと。

その後、アイスを食べ終えた僕たちは、いつもの信号機のところで別れた。

滯と律は家が同じ方向のため、一緒に帰っている。

変わって僕と唯に梓は途中まで帰り道が同じこともあって、一緒に帰っている。

「ねえねえあずにゃん。やっぱりアイスはバニラだよね？」

「は、はい」

そして別れ道まで唯と梓はいろいろな話をしている。

それがいつもの下校風景でもある。

(今だけならいいんだけど、これが常時だもんな)

部活中もこんな感じなので、あまりよろしくないことは明らかだった。

逆に、よく毎日話のネタがあるものだと感心するほどだ。

「このままは、まずいよな」

夕食も終わり、後は軽く勉強をするだけとなった中、僕は現状の軽音部について考えていた。

(梓のあの様子だと、来週までもてばいいほうかな)

どんどんと曇っていく梓の表情を見ていた僕は、このままで行けば梓は確実にやめるであろうというところまで来ているのを察知していた。

(手を打つなら今日中か)

今週中に練習をするようになれば、梓が辞める可能性は大幅に減少する。

(かといって、何をすればいいか……)

僕は直接的に練習をさせるように促すのはできれば避けたい。

よって、間接的にそれをしなければいけない。

「……………明日の放課後に緊急会議を開くか」

結局僕に思い付いたのはそれだけだった。

僕は梓以外の全員にメールで明日の放課後に、梓を除いた全員で緊急会議を開くことを書いたメールを一斉送信した。

梓には明日の部活は休みであることを告げるメールを送信しておく。

これでまた退部の可能性が上がってしまったが、明日の会議でちゃんとした結論を導いたときの結果を考えれば、微々たるものであった。

その後送信した人全員から了解の旨の連絡が返ってきた。

(よし。これで準備は大丈夫)

後は明日に賭けるしかない。

そして、いよいよ迎えた運命の日。

この日は土曜日で午前中のみの授業なので、いつもより長い時間を話し合いに割くことができる。

「それで、なんなんだよ。緊急会議って？」

全員が集まり、ムギがお茶を全員分入れ終えた所を見計らって律が口火を切った。

「今まで何も言えなかった、僕にも責任があるから皆だけを責めるつもりはないんだけど……………」

「もったいぶらないではつきり言いなよ」

できる限りオブラートに包もうとしたが、それは律の一言で無駄になった。

「分かった。それじゃあ、はつきりと言わせてもらう」

その律の言葉を受けて、僕は直球で言うことにした。

「新入部員が来たからと言って、最近弛みすぎじゃないか？」
「そうか？」

「別に今まで通りだよ？」

僕の問いかけに、首をかしげながら律と唯が返してくる。

「では聞くが、ここ二か月で、練習をしたのはいつだ？」

「それは……………」

僕の疑問に、律は腕を組んで考え込むが答えが出なかった。

「このままでは梓は辞める。というより、確実に辞める」

「え？ あずにゃんが辞めるのは嫌だっツ」

(よし、ここまではいい感じ)

僕の言葉に慌てた表情を浮かべる唯の様子を見て、僕は心の中でガッツポーズをとった。

まず大事なものは、今どれほど危機的状态に立たされているかという事実を伝えることだ。

「こうなったら、梓の弱みを握ら——あいたっ！」

「変なことを言っていると、叩くぞ」

カメラを片手に、卑怯なことをしようとする律の頭をハリセンで叩いた。

「もうすでに…………叩いてるじゃないか」

「つまり、浩介が言いたいのは、活動計画を立てたほうがいいんじゃないかということ？」

頭をさすりながら抗議する律をしり目に、漣が僕の言いたいことを組んでくれたのか、分かりやすくまとめてくれた。

「そう言うこと」

「活動計画？」

頷く僕に、同いう意味なのと言いたげな表情で首を傾げてくる唯。

(内容のことで首をかしげてるんだよね？ 言葉の意味が分からないとかではないよな？)

唯だから後者だとしても不思議ではない。

…………ものすごく失礼だけど

「そう言えば、活動計画をすっかり立てていなかったなあ」

どうやらちゃんと考えてる気になってくれたようで腕を組んで考え込み始めた律の様子を見た僕は、ほっと胸をなでおろす。

(これで梓の退部危機は遠ざかるかな)

「よし、それじゃあ——」

そして、僕は律の“活動計画”を聞くのであった。

翌日、律の発案した活動計画が実行された。

場所は学校の部室……ではなく、近くの公園。

周辺は子供連れの母親や父親の姿があったり、貸出ボートで川を渡りながらいちやいちゃするカップルの姿があった。

そんなのどかな場所で、広げられたのは楽器や楽譜など……ではなくレジャーシートと豪華な料理の数々だった。

「はい、あずにゃん。食べて食べて〜」

「これも食べてね」

「あ、あの……」

そしてレジャーシートの上では唯やムギが料理を梓に進めていた。

当の梓は困惑した様子で、視線を色々な場所に向けている。

「梓にはこのたい焼き、だー」

そして律は強引に梓の口の中にたい焼きをツッコんだ。

「……………何故だあああっ!!!」

ついに僕の中で何かが限界を迎え、大きな声で叫び声をあげてしまった。

「うお!? いきなり大きな声で叫ぶなって」

「そうだよ。迷惑になっちゃうよ」

そんな僕に、驚きをあらわにした律とケーキを手にしながらいふんと頷く唯の二人に注意された。

「……………失礼」

二人の言うことも尤もなため、僕は静かに謝罪の言葉を口にした。「念のために訊くが、これが活動計画？」

「そうさ！ 私たちに足りなかったのは、ずばり歓迎するおもてなしの心！ なら歓迎会を開くのが一番さっ！」

間違いであってほしいという願いを込めて聞いた僕に、律は自信満々でまばゆいほどの笑みを浮かべて答えた。

そう、律が立てた活動計画というのは「歓迎会をする」というものであった。

今日この時この瞬間まで、僕はそれが律なりのジョークだと思っていた。

（この二か月間、常に歓迎会のような感じになっていたのを知っているのか？）

思わず律にそう問いかけたくなかった僕だったが、楽しい雰囲気ぶち壊すようなことは避けたかった。

ただ、僕が言えるのは

（律に期待した僕がバカだった）

だった。

とはいえ、

「たい焼き……好きなの？」

たい焼きを口にして幸せそうな表情を浮かべる梓を見ると、律の提案もある意味的を得ているのではと思えてくる僕なのであった。

昼食をとり終えた唯たちは、梓に遊ばないかと誘ったが本人は疲れたので休むと告げて断った。

すると、唯は「あずにやんの分楽しむね」と言っただけでムギと律の三人で遊び始めた。

（歓迎する人を差し置いて自分たちが楽しんだらダメだろ）

さんさんと日が照りつけ、日光にさらされただけですぐに暑く感じるようになってきたこの頃、僕は太陽の光から逃げるように木の幹に寄り掛かりると大はしゃぎで遊ぶ唯たちに、心の中でツッコんだ。

(何だか、視線を感じるんだけど)

横で体育座りをしている梓からものすごい視線を感じる僕は、どう反応すればいいのかに悩んでいた。

「何かな?」

「あ、いえ」

どうやらそれは滯も同じだったようで、声を掛けられた梓は視線を僕たちから外した。

かと思えば再び梓からの視線を感じた。

「滯先輩は外でバンドとか組んだりしないんですか?」

「うーん、外バンかく。確かに面白そうだね」

梓のその問いかけに、僕には退部することを示唆しているのではないかと感じてしまった。

(僕の邪推ならいいんだけど)

そんな滯に迫る黒い影があった。

「ははくん。そんなことを言っていないのかな?」

「な、何よ」

いつの間に来ていたのか、滯の横で不気味な笑みを浮かべる律に、滯は問いかけた。

「例えば、こんなところがあるのに」

「ち、ちよつと!? 何よそれはっ!」

律が取り出したのは写真のような気がした。

それに反応した滯は律から写真を取り戻そうと奮闘していた。

(あれって、間違いなく桜高祭の時のだよな)

一瞬見えてしまった写真の隅の方に写っているもので、何の写真家かわかってしまった。

ちなみに、これは余談だが滯の転倒事件はある意味伝説となりつつあるらしい。

あの時間こえたシャッター音は、写真部の部員のモノではないかという噂があるか真偽は定かではない。

閑話休題

「浩介先輩はどうですか?」

「僕？ そうだね……」

なぜかこちらにも質問が飛んできた。

梓の問いかけに考えてみた。

軽音部以外のバンドで演奏をする自分の姿を。

(……………)

きつと、うまいバンドに入れば僕の力はかなり活かされるはずだ。

それでも

「考えてないかな」

「どうしてですか？」

梓のもつともな質問に、僕は即答で返す。

「外バンをすると色々ややこしいことになるから」

「は、はあ……」

僕の口にした理由に梓は分からないと言った様子で相槌を打った。

梓に告げた理由は本当のことだ。

僕が所属する事務所“チェリーブロッサム”は、勝手な活動を許さない厳格な事務所で有名になっている。

ゲリラライブをするにしても、必ず事務所に話を通してから行わなければいけないのだ。

それは、金銭トラブルを回避するための策であり、自分たちを守るためでもあるので納得もしているし、特に異論もない。

では、今の僕の状態はどうなのか。

僕が軽音部でバンド活動をするのにあたって、事務所側には話を通していない。

だが、そのことで怒られたことは一度もない。

要は、金銭トラブルに発展するか否かのラインなのだ。

社長からは『最初にバンド演奏を大勢の前でする際には料金徴収等はしないように』と言われている。

この国では、バンド演奏等ですでにある他人の曲を演奏すると、使用料としてお金を支払わなければならない。

コンサート形式になると、この使用料に加え舞台の貸切料まで加わってくるので、利益はほんの1〜2割なのだ。

一応これは営利目的ではなく、観客からお金を徴収しなければ大丈夫らしいので、それを知りたかったのだと思う。

当然だが、桜高祭や新歓ライブでも料金の徴収は行ってもいないし、僕たちに報酬金が支払われたこともない。

なので、事務所からは公には許可されていないが、認められているのだ。

だが、もし外バンをしようとするれば、確実に許可はされない。

というより、そもそもH&Pの皆が認めない。

僕が軽音部で活動を認められているのも、H&Pのメンバーが認めていることの方が大きい。

これ以上バンド活動を多くすれば、H&Pのバンド活動が疎かになる可能性がある。

そして、第一に挙げられる理由が

(僕は、このことH&P以外のバンドで活動する気はない)

それが一番大きかった。

僕が外バンをすることになる日こそが、軽音部をやめる時だろう。

(そんな日が来ないことを願いたい)

そんなことを考えていると、梓の背後に再び怪しい影が忍び寄っていた。

背後に忍び寄っていた山中先生は、梓の頭にウサギの耳の形をしたヘアーバンドを取り付けた。

「バニーもいいわね」

「ひいひいっ!?!」

顎に手を当ててつぶやく山中先生に、梓は顔を真っ青にしながら後ろに下がった。

「あ、さわちゃん先生!」

「ごめんねー。仕込みに手間取っちゃって」

(仕込みって何?)

見れば、山中先生の手にはジュラルミンケースがあった。

それを芝生の上に置くと、ケースを開いた。

そこには様々な衣装が入っていた。

ゴスロリ風のドレスだったり制服のようなものである。

「あずにゃんが嫌だったら私たちが着るね」

(そう言う問題じゃない)

唯の言葉に、僕は思わず心の中でツツコンでしまった。

それから遊び続け、あたりはオレンジ色のベールに包まれていた。唯たちは満足そうに次に行く場所をどこにするかを話し合っていた。

「……………」

僕と梓はそんな唯たちの様子をへとへとになりながら見ていた。

僕はともかく梓にとって、これほどまで壮絶な休日にはなかったはずだ。

そう思えるほど振り回されていた。

僕は梓に同情を禁じ得なかった。

(もうこれは確定だな)

僕はこの時すべてをあきらめていた。

そんな僕の横に立つ一人の人物。

「皆ー」

滯の一言で、話をしていた唯たちは一斉に話をやめて滯に視線を向ける。

「私たちは軽音部だから、明日は絶対に絶対に絶対に絶対に練習をするからな！」

滯の“絶対”を強調した叫びに皆は圧されるように頷いた。

結局、みんなを動かしたのは滯だった。

第40話 練習と外バン

「皆っ！ 私たちは軽音部なのを忘れてたらダメだぞ！」

「いや、忘れてないし」

澤の勢いに押されるようにして、次の日の今日にようやく練習をすることになった。

「今日は練習をするぞー！」

「おー！」

律が腕を天井の方に挙げるのに倣って皆も腕を上げた。

こうして、ようやく練習が幕を開けた。

「ギターが三人になったけど、どうするんだ？」

「それについては、僕の方に考えがある」

「それでは、聞かせてもらおうか！」

僕の提案に腕を組んでふんぞり返る律にツツコみたいのをこらえて、僕はこれまで考えた案を口にする。

「現状を考えても、新たに独立したラインを作成するのは非常に手間がかかり、すぐにはできない。だとすれば残される方法は既存のパートで工夫をするしかない」

「なるほど」

感心したように頷く律をしり目に、僕はその方法を告げる。

「そこで出てくる案は二つ。一つは二人で一つのパートを担当する方法。もう一つはバッキングを利用した新規ラインの作成」

「ねえねえ、”ばつきんぐ”って何？」

二つの案を告げたところで、唯からそんな問いかけの言葉がかけられた。

「バッキングというのは、伴奏のことです」

「ばんそうっ？」

梓が僕の代わりに答えてくれたが、どうやらそこもわからない様子だった。

「主旋律を強調する演奏のこと……と言ってもわからないよね」

「うんっ！ まったく」

「胸を張るところじゃないぞ」

僕の予想通りの答えを胸を張ってする唯に、律がツッコんだ。

「音楽の授業で先生がピアノを弾いていたりするでしょ？ それのこと」

「おー、なるほど」

その説明だけで理解できたようで右手にくるぶしを作るとそれを左手とポンツと合わせた。

「でも、さつき浩介」ライン作成は手間がかかるからできない」って言っただけだった？

「それは、新規にパートのラインを作成するという話。バッキング用の譜面作成はそんなに難しくはないから比較的早くできるんだ」

唯が納得したところで、漕が首をかしげながら聞いてきたので僕は頷きながら答えた。

バッキング用の譜面作成は、色々なタイプがあるが僕はシンプルにボーカルに合わせた物を考えている。

つまりは、ボーカルが一言言うのに合わせてストロークさせる感じだ。

この方がシンプルで作りやすい。

「それじゃ、多数決。新規ラインを作成することに賛成の人」

律の呼びかけに、手を挙げる人はいなかった。

「それじゃ、バッキング用の譜面を新たに作成する方法に賛成の人」

その呼びかけに、今度は全員が手を上げた。

「それじゃ後者の方法をとるとなると、誰がリードをやるかだけだ」

「それなら、先輩が——」

「はいはい、私がやるー！」

律の言葉に、梓が遠慮した様子で唯の方に視線を向けたところで、唯は大きく腕を上げながら自信に満ちた表情を浮かべて立候補した。
(一体その自信はどこから出てくるんだ?)

思わず唯にそう問いかけたくなる僕なのであった。

「とりあえず、それぞれの演奏を聴いてから判断しよう。最初はどっ

ちがやる」

「……そ、それじゃ私から」

唯の無言のプレッシャーに圧されるように、梓は手を上げてそう告げると自信の相棒のギターの弦を弾き始めた。

今度は速弾きではないがメリハリのある音色と、基礎がしっかりと出来ていないと弾けないようなコードを織り交ぜたメロディーを弾いて見せた。

(やっぱりうまい)

僕はそんな梓の演奏に心の中で称賛の声を送る。

それは瀞たちも同じだったようで、口々にうまいと声を上げていた。

「それじゃ、次は唯の番——」

「ぎ、ぎっくり腰が……」

律が唯の方に顔を向けながら演奏するように促そうとしたところで声が途切れた。

見てみれば、腰に手を当てて仮病にも似たようなことを言っている唯の姿があった。

「いい加減にしろよ、おい」

「お願いです、ギター教えてください!!」

「寝返り、早えな!?!」

かと思えば、クイックターンで梓の元まで駆け寄ると、梓にしがみついて懇願する唯に、律がツツコみを入れた。

そんなこんなで、練習は始まった。

今唯が弾いているのは比較的簡単なコードの音色だった。

それを一定のリズムで弾かなければいけない。

だが、唯が奏でている音色はメリハリがなく、どこか間抜けなもの

となっている。

それはまるで、異なる二色の色が複雑に混ざり合っているような感じだった。

「あ、そこはミュートをした方が。それにビブラートも効かせるといいかも」

「みゅーと？　びぶらーと？　なにそれ」

僕と同じことを感じていたのか、そのことを指摘する梓に唯は爆弾発言をした。

「え!？」

「これでも、一年間やってきたんだ」

さすがの梓も驚きを隠せなかった様子だった。

そんな僕たちをしり目に、唯は再び先ほどと同じフレーズを弾きはじめた。

だが、今度は音色にメリハリがつき音自体が引き締まっていた。

完全にミュートができていたのだ。

「今のが”みゅーと”っていうんだね」

「……………」

(知らずに使えるようになるっていったい)

唯の言葉に、僕は心の中でつぶやいた。

ちなみに、ミュートというのは弦に意図的に触れることで音が出ないようにする演奏技術だ。

ストロークをする際に余計な音が鳴ってノイズになるのを防いだり、音自体にメリハリをつけさせる効果がある。

「唯はゲームを買っても説明書を読まないでやるタイプなんだ」

「納得です」

二か月しか一緒にいない人物に納得されてしまった。

(要するに、体で覚えていくということか……そう言えば僕もそんな方法で唯にギターを教えていたっけ)

半年ほど前まで、僕も同じ手法でギターを教えていたのを思い出した。

絶対音感だから耳で覚えさせた方が早いとは考えていたが、それが

すべてに適用できることまでは知らなかった。

「ねえ、そろそろロイヤルミルクティーを入れてくれない？」

僕たちの練習の様子を見ていた山中先生が、背伸びをしながらムギに声を掛けた。

「あの、今日は練習をしますからー！」

「いやだ〜いやだ〜」

山中先生の要求をきっぱりと断ったムギに、山中先生はしがみつくと涙ながらに猛抗議した。

(もはや教師の威厳ゼロ)

そんな山中先生の醜態に、僕は深いため息を漏らす。

「少し休憩にするか」

僕と同じ思いだったのか、律はため息交じりに休憩にすることにしたのだが……

「ほげ〜〜」

「練習は!?!」

ムギの入れたお茶を口にした瞬間に、気が抜けたように長椅子にもたれかかる三人に、僕と漣はほぼ同時に問いかけた。

「明日やるよ〜」

ゆるみきった様子で応える律の様子は、全く信憑性がなかった。

(こうなると練習は当然なしか)

僕は何もかもをあきらめた。

「ほら、あずにゃんも〜」

「え、私は別に……」

いつの間に用意したのかお菓子のケーキを一口サイズフォークに刺すと、それを梓の口元に持っていく。

最初は断っていた梓だったが、唯に促されるようにケーキを口にしたら。

その瞬間、梓の表情は幸せいっぱいな表情になった。

「はい。これ梓ちゃん専用のマグカップ」

ムギが満面の笑みを浮かべて梓に手渡したのは、ピンク色でネコの顔が描かれたかわいらしいカップだった。

それを受け取った梓は自然な動作で中に入っている液体を口にす
る。

結局この日の練習時間は1時間未満だった。

「この曲のこの箇所は、このコードで行くか」

いつもより早めに解散となったため、僕は自宅でバッキング用の譜
面作成に勤しんでいた。

バッキングは、作成にあたってさまざまな条件がある。

それを簡単にまとめると、他の音より目立ってはいけないという一
つに尽きる。

リードギターやボーカルを埋もれさせるようなバッキングはNG。
だからと言って目立ちすぎないのも良くない。

要するにバランスの問題だ。

なので、バッキング用の譜面作成はかなり神経を使うのだ。

(よし、これで半分)

現在は『私の恋はホッチキス』のバッキング譜面を作成しているが、
ようやくそれも半分程度完成したところで、僕は腕を軽く回した。

「あ、そう言えば今日ライブをやるんだった」

今日は、夜にライブハウスでゲリラライブを行うのだ。

これは社長から前に言われていたことで、何でもライブハウスの方
で記念すべき日だとかで鼻屑にしている観客にサプライズプレゼン
トがしたいという意向らしい。

そこで白羽の矢が立ったのが、僕たちだった。

『曲目は任せるので2曲程度、弾いてもらいたい』

それが社長を通して告げられた、ライブハウスからの依頼内容だっ
た。

その依頼の後すぐに、演奏する曲目を決め各自で練習をすることと

なったのだ。

「にしても、これはね」

僕はそうつぶやきながら決められた曲目のリストを目にする。

1: Hell the World

2: Maddy Candy

「完全にDEATH DEVIL祭りになってる」

ちなみに、これは荻原さんのチョイスだ。

(軽音部OGの曲、下手な演奏はできないよね)

色々と軽音部関係で問題を抱えているが、今この時だけそのことを頭の片隅に追いやる。

考えるのは、このライブを成功させることのみだ。

「さて、着替えるか」

今日は中山さんが運転する車でライブハウスに向かうことになっている。

その約束の時間までに、僕は素早く黒づくめの服に、サングラスをかけて準備を済ませた。

それと同じタイミングで来訪者を告げるチャイムが鳴り響いた。

それは中山さんが到着した合図であった。

僕は相棒のGibsonが入ったギターケースを手にとると、玄関の方に向かう。

「うん、ちゃんと準備はできてるようね」

「ええ。もちろん」

満足げに頷くMRに僕も頷きかえした。

「さあ、乗りな」

「それでは」

MRに促されるように車に乗り込んだ僕はシートベルトを締める。そして車はゆっくりと動き出した。

ライブハウス『Koto』に向かつて。



ライブハウス『koto』にギターケースを手にした黒髪の少女が最前列でライブを見ていた。

「……」

少女……梓はそのライブを目に涙を浮かべながら見ていた。

(どうして)

梓は心の中でつぶやく。

(どのバンドも軽音部よりもうまいのに)

梓はまじめに練習をしない軽音部での活動を諦め、外バンをしようとしていたのだ。

ここに来たのも、良いバンドを見つけるためのものだった。

だが、梓の気を引くようなバンドはなかった。

演奏の腕は軽音部のメンバーよりも上だったのに、何も感じない理由がわからず梓はただただ見ていることしかできなかったのだ。

梓の脳裏によぎるのは、新歓ライブで演奏しきった時に見せた唯たちの達成感に満ちた表情だった。

その光景はあるバンドとだぶらせた。

(どうして、軽音部の皆さんの演奏するのを見て、H&Pのライブを思い出したの?)

それは梓にとっては憧れでもあるH&Pというバンドだった。

軽音部に入部したのも、その理由を知るためであったのだ。

(もう、帰ろう)

ちょうど最後のバンドの演奏も終わり、照明が薄暗くなったのを見計らって、梓はライブハウスを後にしようとステージに背を向けた。

その時だった。

「お前らが来るのを、待っていたーっ!!」

突如として、この世の恨みを込めたかのようなどす黒い声がライブハウス中に響き渡った。

「え? な、なに?」

突然のことに混乱する梓だったが、それはその場にいたほかの観客

も同じだったようで、ざわめき始めた。

それと同時に曲が流れ始めた。

デスメタに近いその曲は薄暗い会場内と相まって不気味さを増させた。

(あれ、この歌声って)

そんな中に響き始めた女性の歌声に、梓は頭をかしげる。

スローテンポでサビの箇所を歌い終わると、甘く軽快な音色がライブハウス内を包み込む。

それと同時に、ステージの照明が再び明るく灯す。

その照明の下で演奏をしていたのは、H & Pだった。

帰路に着こうとしていた観客たちも再び戻り始めた。

その曲は地獄の世界を現したような曲で、スローだったり速いテンポだったりとテンポの変動が激しい曲だ。

テンポが速くなったと思えば一気にテンポが遅くなる。

そこにMRの歌声が合わさり曲に刺激が加わる。

MRが歌い切ると同時に、DKのスクラッチが入り、曲調が変わる。

そこから始まるのはギターソロだ。

「MR！」

DKの呼び声に呼応したMRが前方に歩み寄り、艶めかしい動きをしながら速弾きでギターを弾いていき、観客を魅了する。

「DK！」

MRの呼びかけで簡単なコードをリフで弾いていたDKが前方に歩み寄るとギターを縦構えにした。

そしてMRと同じコード進行で速弾きしていく。

そのテクに会場中が熱気に包まれた。
(す、すごい。やっぱりDKさんもMRさんもすごい演奏をしてる)

それを見ていた梓は、すっかりH & Pの熱気にとらわれていた。

そして一気に再び駆け巡るように演奏をしていき、最後はドラムのフィルで閉めた。

それと同時に観客から大きな拍手が送られた。

「どうも！ 皆、楽しんでるか？」

『おー！』

DKのMCに会場が一体となって返事を返した。

「今日はこのライブハウスがオープンした記念の日なのを、お前ら知ってるかー！」

DKの問いかけに、誰も応えない。

「でも、記念品は出ないが今日はオープン記念日ということで、H&Pがここにいる皆に曲と言うプレゼントを届けに来た！」

観客たちが歓声を上げた。

(そ、そうだったんだ)

梓は心の中で運よくライブを見ることができたことをかみしめていた。

この時は、自分の問題のことをすっかり忘れていたのだ。

「でも、次の曲で最後なんだ」

『ブーっ！』

DKの残念なお知らせに、会場中からブーイングがでる。

「そう言うな。その分、皆に満足してもらおう曲を届けよう。さあ、速いが最後の曲だ。準備はいいか!!」

『おー！』

DKの呼びかけに、観客たちは腕を上を振り上げて答えた。

「それじゃ、最後の曲。DEATH DEVILの『Maddy Candy』！」

「1, 2！」

YJのリズムコールと共にフィルから入りギターの音色がそれに乗る。

疾走感のある曲調で始まった。

(この曲はDKさんがボーカルなんだ！)

MCの時とは違うクールな声色に、梓は全身を使ってリズムに乗る。

ロックな曲調で進行するこの曲は、ギターソロが一番注目される箇所。

所。

甘く、それでいてどこか刺激のある曲風に、観客たちは飲み込まれていく。

そして、ギターのソロに入った。

DKの速弾きによって甘い音色が会場を包み込む。

ビブラートやチョーキングを効かせながら素早くコード進行していく。

そしてコード進行がいったん途切れ、音を伸ばすところでギターのヘッドを持つとそれを垂直に立てた。

ギターを縦に構え先ほどよりも比較的コード進行の激しいパートを弾いていく。

再び出た縦構えの奏法に観客から歓声が沸き起こる。

(あれ、これって……)

そんな中、梓の脳裏にふと疑問がよぎる。

梓はその演奏法を知っていた。

(これって、浩介先輩のと同じ)

だが、梓の思考はそこで途切れることになる。

MRとDKで交互にギターを弾いていくギターソロで、MRが歯ギターを披露したのだ。

そして縦構えのままDKの凄まじい速度での速弾きでギター走路を終えると、ROのキーボードとRKのベースの音色に乗せてDKが歌声を奏でる。

さらにそこにMRのギターの音色が加わり、最後にYOとDKが音色を奏でる。

最後はバンドメンバー全員で歌声を上げ、そのままギターを弾いていきドラムの音で曲を終えた。

「サンキューー!」

そしてDKのその一声で

再びステージの照明は薄暗くなった。

それは完全な終了を意味していた。

「ッー!」

梓は何かを思い立ち、急いでその場を後にすると、裏側へと回り込んだ。

裏側にはスタッフ専用の出入り口があり、そこから出てくるH&Pの姿があった

「あのっ！」

「ん？」

そして彼らの元まで駆け寄ると、その場を後にしようとするH&Pのメンバーに梓は声を掛けた。

それに反応したのはY Oだった。

「私をH&Pのバンドメンバーに加えてください!!」

梓は崖から飛び降りる覚悟でそう告げると、体をほぼ直角に折り曲げた。

「……………君、名前は？」

「あ、な、中野梓です」

ROの問いかけに、梓は慌てた様子で名前を述べた。

「中野か…………」

Y Oはそうつぶやくとほかのメンバーに視線を向ける。

向けられたメンバーは、Y Oの言いたいことを察し、頷くことで答えた。

「よし、中に入って待ってろ」

「は、はいー！」

門前払いされなかったことに梓は嬉しきをかみしめながら返事を返すと素早く来た道に戻っていった。

「俺は、このオーナーと話をつけてくる」

「それじゃ、僕たちも行くか」

Y Oはそう告げて再びライブハウス内に入っていく、DKたちも中に戻っていく。

「ぎたーはあるな…………よし、それじゃこれから君には好きなフレーズを実際に弾いてもらう。準備を始めてくれ」

「は、はいっー!」

しばらくして、ライブハウスのオーナーに、少しばかりスタジオを借りる許可をもらい戻ってきたY Oは梓にそう告げると、梓は震える手で演奏をする準備をしていく。

ギターを取り出しアンプにリードを接続する。

「Y O」

「何だ?・ D K」

梓が準備をする中、D KはY Oに声を掛ける。

「私は評価を色を付けたりするのは嫌いだから公正にする。だから――」

「俺も公正に評価をすればいいんだろ?」

D Kの言いたいことを察したY OがD Kの言葉を遮るように口を開いた。

それにD Kは無言で頷いた。

「安心しろ。俺はいついかなる時もお世辞は言わない」

「だったな。Y Oはそういうやつだよな」

Y Oの言葉にD Kは口元に微笑を浮かべるとY Oと拳どうしを合わせた。

それはお互いの信頼の暁でもあった。

「じ、準備ができました」

「そうか。では、どうぞ」

Y Oは準備ができたことを告げる梓に演奏するように促した。

緊張した様子ではあったが、梓は落ち着かせるように深呼吸をする
と右手に持っていたピックをストロークさせた。

演奏されたのは梓が軽音部で最初に弾いて見せた物と同じフレーズだった。

軽快で、それでいて刺激的な音色に、さりげなく入れられたビブラートがまた音に膨らみを加えていく。

「ど、どうですか?」

「そうだな。とてもうまい演奏だと思う。お前らはどうだ?」

フレーズを弾き終えた梓の問いかけに、Y Oは感想を述べると後ろ

で聞いていたメンバーに話を振る。

「僕もY Oと同意見だよ」

「私もです」

「私もだね」

「右に同じく」

RO、RK、MR、DKと続いて感想を述べる。

「あ、ありがとうございますっ!」

満場一致の称賛の声に、梓は明るい表情で頭を下げるとお礼を述べる。

「だが、俺はお前のメンバー入りに反対だ」

「え?」

Y Oから告げられた衝撃の言葉に、梓の表情が固まった。

助けを求めるように後ろのメンバーの方に視線を向けるが、誰一人Y Oの言葉に異を唱える者はいなかった。

「ど、どうしてですか?」

「それについてはリードのDKが説明しろ」

「ここで私か」

人使いが荒いなとつぶやきながら、DKがY Oの前に出た。

「君の演奏は確かにうまい。さすがは親の影響で小4からギターをやっているだけある」

（あれ、どうしてDKさんはギターを始めたきっかけや時期を知っているの?）

DKのコメントにふと疑問が湧き上がるが、それはDKの『ただし』とつづけた言葉で頭の片隅に追いやられた。

「君の演奏には人を楽しませる要素はない。うまい演奏も重要だが、それ以上に見て楽しませることもプロには求められる」

「……………」

梓に告げられた厳しい言葉に、梓は真摯に受け止めていく。

「でも、それは今後の成長次第でどうにでもなる。Y Oもそうなのかは知らないが、私が一番問題にしているのは」

「な、なんですか?」

梓は緊張の面持ちでDKの次の言葉を待つ。

「君が、〃本気でメンバーの一員になる気がない〃ということだ
「っ!」」

DKのその言葉に、梓は一番大きな衝撃を受ける。

「君の演奏を聴いていて一番大きかった印象は、〃迷い〃と〃哀愁〃
の弾いてもらったフレーズの曲調と合わない二つ」

(私は、迷ってるの?)

自分でも気づかない心の声に、梓は自問自答する。

そんな彼女に、DKは言葉を続ける。

「おそらく、君はどこかでバンド活動もしくはそれに準じたことをしているが、何らかの理由でここで掛け持ち、もしくは現在加わっているバンドをやめて活動を行おうと考えている。……違うか?」

DKの問いかけに、梓は首を横に振ることで考察を正しいと認めた。

(あまり当たってほしくなかったな。そこは)

DKは心の中でつぶやいた。

「ならば、認められない。少なくとも、そのバンドとの未練を完全に断ち切らない限りは」

「……………」

DKの言葉に、梓はうつむくだけで何も反応を示さなかった。

「未練を断ち切ることができたのであれば、その時は手紙でもいいし直接でもいいから連絡をよこすように。分かったか?」

「はい。ありがとうございます」

先ほどとは打って変わって肩を落としながら梓は去っていった。

「……………」

「いくぞ。DK」

その後ろ姿を見るDKに、YOはそう呼びかけるとYOの後に続いて歩き出す。

(これは僕の罪……なのかな?)

そう心の中でつぶやきながらDK……浩介は帰路につくのであった。

第41話 答え

ライブハウスでの一件から数日が経った。

(困ったな)

僕はあることに頭を悩ませていた。

「はあ」

「おいおい、何ため息なんかついてテンション下げてるだよ！」

思わずため息をついていると、慶介から激が飛んだ。

「そう言うお前は馬鹿みたいにテンションが高いな。そんなにいいことでもあるのか?」

「今日は体育だぞ! 女子のキャツキやうふふを見れるチャンスだ—

—ぐばあ!」

とりあえずバカなことを言う慶介の顔面を蹴る飛ばすことで黙らせた。

どうせ、すぐに

「痛つてえな。最近力つけてないか?」

このように回復するのだから。

「うるさい。能天気なお前には想像もできない悩みがあるんだよ」

「その悩みって、この間言っていた新入部員の子がらみか?」

言葉を吐き捨てて、ジャージに着替えるべく男子トイレに向かおうとその場を後にしようとする僕の背中に、真剣な声色の慶介の言葉が掛けられた。

ちなみに、男子の更衣室は今現在も設けられていないため、増設された男子トイレが臨時の更衣室と化している。

これが、元女子高の現実だ。

僕は慶介の問いかけに、頷いて答える。

「辞めるのか?」

「いや、分からない。今はその可能性が高いことくらいしか」

慶介の問いかけに、僕は首を横に振りながら現状の考えを告げた。

「そうやって、何でもかんでも諦めるのは良くないと思うけどな。信じれば救われるっていうじゃないか」

慶介からの指摘に、僕は何も答えられなかった。

「俺のようなバカだって、受かつてるって信じて受かつてたわけだし」
「確かにそうかもな。出なければお前がここにいることなどありえないしな」

「あの、自分で言うっておいてあれだけど、領かれると地味にきついです」

慶介の言葉に説得力を感じた僕が頷くと、慶介から落ち込んだ様子の声が返ってきた。

「ありがと。慶介の意見、参考にさせてもらうよ」

「そうか？ それならよかった」

僕は慶介に“後で”と告げると、今度こそ教室を後にする。

(それでも、このままで放置するのは非常によろしくないな)

僕は心の中でつぶやくと、進行方向を変えた。

場所は、梓のクラスの教室だ。

梓のクラスの教室前まで来た僕は、教室内から死角になる場所で教室から出てくる生徒が来るのを待った。

「あれ、浩介さん？」

「ん？」

そんな僕によく知る人物から声が掛けられた。

見れば、そこには憂の姿があった。

「こんなところで会うとは奇遇だね」

「あれ？ お姉ちゃんから聞いていませんか？ 私、このクラスな

んです」

そう言うって指で指示したのは、僕が立っている教室だった。

「そうだったんだ。まったく知らなかった」

最近では唯たちの話を聞き流している状態だったため、もしかしたら

聞き逃していたのかもしれない。

「あの、何か用ですか？」

「ああ、実は僕の名前を伏せて梓を呼んでもらいたいんだ」

運よく憂に会えたため、僕は梓を呼び出してもらうように頼んだ。

「別にかまいませんけど、どうして浩介さんの名前を隠すんですか？」

「ちよつと部活関係でいろいろあつてね。名前を言うのと逃げられそうだから」

我ながら、もつとまじなことを言えないのかと思うが、これ以外の言い方は僕は持ち合わせていなかった。

「わかりました。ちよつと待っていてくださいね」

（詳しい事情を聴かずに引き受けてくれるなんて、本当にできた妹だ）
軽くお辞儀をしながら中に入っていく憂に僕は、そんな感想を抱いていた。

それから待つこと数十秒。

ターゲットでもある梓が教室から姿を現した。

「あずにゃん」

「っ!？」

呼び出した人物を見つけるためか、僕に背を向けてあたりをきよろきよろと見回しているところに声を掛けると、その体が大きく震えた。

「その様子だと、病気ではないようだな」

「え?」

僕の言葉が意外だったのか、梓はこっちの方に振り返った。

「ここ数日部室に来なかったから、病気でもしたのかと思ったが、元氣そうで安心した」

「べ、別に病気なんかじゃ」

ばつが悪そうに僕と視線を合わせようとしない梓の様子に、僕は苦笑しながらも言葉を続けた。

「どうして来なくなったのか、その理由は聞かないし、そのことで怒るつもりもない」

「それじゃ、何をしにここへ?」

梓から視線を外しながら言うと、尤もな疑問を投げかけられたため僕は再び視線を彼女に戻した。

「ちよつとしたアドバイスをね」

そう言つて、僕は言葉を区切つた。

「あずにゃんは軽音部をやめるのか？ それとも続けるのか？」

「……………」

僕の問いかけに、梓は何も答えなかった。

「急がなくてもいいから、しっかりと考えて自分自身で答えを決めること。決めたらいつでもいいから部室に來い。そこで梓の答えを聞かせてもらう」

「でも……………」

僕の提案に、梓は難色を示した。

梓の気持ちもわからなくはない。

先輩たちの前で退部をすることを告げるといふのは、僕が想像するよりも過酷なことなのかもしれない。

それでも、けじめといふのは何事も必要なのだ。

「もちろん、無理やり引き止めさせたり罵声などを浴びさせないよう努力をすることを約束しよう。当然だが、その後偶然顔を合わせた時も自然と接することができるようになることもね」

こればかりは他人の心なので、難しいが唯たちは根はいい人だ。

きっと僕の頼みを聞き入れてくれるはずだ。

「ただし、自分の口にした答えには責任を持つこと。一度自分で決めたことを撤回することも他者のせいには許さない。おそらく僕が罵声の一つでも浴びせるだろうけど」

「……………」

僕の言葉に、梓は真剣な面持ちで聞いていた。

「僕はどちらを選んでもらつても構わない。まあ、本音を言えばやめてほしくはないけどね。ようやく訪れた待望の新入部員という理由もあるけど、中野梓という存在は、軽音部のメンバーにとっていい意味で刺激を与える可能性があるからね」

「そうでしょうか？」

即答にも近い形で聞きかえされた僕は、思わず苦笑してしまった。「まあ、梓にはこのまま続ける自由もありし、辞める自由もある。存分にどちらかの権利を使うといい。それじゃ」

僕は言うことだけ言ってそのままその場を後にした。

「え、あの？ 浩介先輩？」

後ろで困惑した様子で声を掛けてくる梓に、僕は片手を上げて応じる。

僕は後ろを振り向くことはなかった。

その日の放課後、僕はいつものように部室へと向かう。

「あら、高月君」

「ん？ 真鍋さん」

階段を上がろうとしたところで、誰かに呼び止められた僕が振り返るとそこには数枚程度の紙を手にした真鍋さんが立っていた。

「これから部活？」

「まあ、そんなところ」

真鍋さんの問いかけに、僕は頷きながら答える。

「それで、どうなの？」

「何が？」

「新入部員よ。続けていけそう？」

真鍋さんの言葉の意味するところが分からずに首をかしげている僕に、真鍋さんは分かりやすく説明してくれた。

だが、まず出てきたのは素朴な疑問だった。

「どうして、貴女が知ってる？」

「唯が言ってたのよ。『あずにゃんが部室に来ない』ってね」

疑問に答えた真鍋さんに、僕は軽く驚いた。

尤も、その驚きは「あずにゃん」と何の躊躇もなく口にしたことだった。

「無理だろうな。おそらく、次に来るときは『退部届』を持参してくると思う」

「そう」

僕の推測に、真鍋さんは一言だけ呟いた。

「高月君は、彼女に続けてほしいと思っていないの？」

「そりゃ、もちろん思っているに決まってる。だが、辞めたいと言っている人に無理に居続けてもらうというのはお互いの為にならない」

だからこそ、梓にはどちらを選んでも構わないと言っているのだ。

「あなた、色々と損するタイプって言われるでしょ？」

「はは、正解。でもまあ、それでいい方向に向かうのであれば、構わないんだけど」

真鍋さんの鋭い指摘に、苦笑しながら相槌を打つと階段を上りきった。

そこは部室と生徒会室の分かれ道だった。

「それじゃ、また」

「会えたらね」

真鍋さんと別れの挨拶をした僕はさらに階段をのぼり部室へと向かうのであった。

(信じた者は救われる……ねえ)

慶介に言われた言葉がふと頭をよぎった。

(世の中には、信じただけではどうしようもないことだってあるんだよ)

ここにはいないやつに、僕は心の中で反論するのであった。

僕が梓に軽くアドバイスをしてからさらに数日が経った放課後のこと。

「あずにゃん、最近来ないね」

「来ないのかもしれないな」

ここ最近珍しく(かなり失礼だけど)毎日練習をしていた僕たち

だったが、唯の口にした一言で、全員が手を止めてしまった。

「いや、来るんじゃない?」

「そうかな?」

僕の口にした予想の言葉に、唯は浮かぬ表情で聞いてきた。

(その時に『退部届』と書かれた封筒を持っているかもしれないけれど)

あまりにも酷いのでその予想だけは口にはできなかった。

そんな時、部室のドアが開く音が聞こえた。

ドアの方に視線を向けると、そこには梓の姿があった。

(やっぱり、そういうことか)

背中に自身の相棒でもあるギターケースがないのを見た僕は、梓の答えが何なのかを知ってしまった。

「最近どうして来なかったんだよ、梓? 毎日練習していたんだぞ」

「あずにゃーん!」

来なかった理由を問いたです律をしり目に、唯が梓に抱きついた。

だが、当の本人の表情は暗いままだった。

「どうした?」

「ま、まさか辞める……とか?」

表情がすぐれない梓に気づいた漣が尋ね、律が不安に満ちた表情で梓に問いかけた。

「そ、それだけは勘弁して下さいえ」

「分からなくなってる」

唯の言葉に、梓が体を震わせながらポツリポツリと口を開いた。

「どうして新歓ライブで、ヒック……皆さんの演奏で感動したのか、グス……しばらく一緒にやっていたら、グス……分かんと思って……ヒック、でも全然わからなくて」

「あずにゃん……」

嗚咽交じりに紡がれたのは、梓の心からの叫びだった。

だが、言われてみれば、入部動機は“新歓ライブの演奏を聴いて感動したから”という類のものだった。

梓が、二か月も続けてきた本当の理由。

そんなもの、考えればすぐにでも思いついたはずだ。

(そんなことにも気付かなかつたなんて……その結果こうして後輩を泣かせている……僕の方がどうしようもないバカだったんだ)

梓のその姿に、僕は気づかずにも何もすることのできない自分に対して罪悪感に駆られていた。

そんな中、僕の方に視線を感じた。

見れば、唯たちが僕の方を見ていた。

その視線は“何か言っちゃって”と告げているようにも思えた。

(……)

僕は無言で頷いて梓の方に向き合った。

『あなた、色々と損するタイプって言われるでしょ?』

真鍋さんに言われた言葉を思い出した。

確かに僕は損をするタイプだ。

だって、今だって非難されるようなことを言おうとしているのだから。

(でも、それでいいんだ)

それが、僕の役目なのだから。

「あんだ、馬鹿じゃないの?」

「ッ!」

「浩介!」

僕の冷たい一言に、梓の肩が大きく震え、濡から罵声が浴びせられた。

「音楽の感じ方……受け取り方は、十人の人がいれば十通りある。だから、音楽の解釈に“答え”など存在しない」

尤も、作曲者が解釈について話しているのならば、それが答えになるが。

「僕たちは“中野梓”ではない。だから、その理由について答えを導くことは不可能だ。答えを導き出すのはあくまでも“中野梓”自信なのだから」

「何もそんな言い方をしなくても——「ただし」——」

律の非難の声を遮るように、僕はうつむかせている梓に言葉を続け

た。

「梓が答えに導く助け程度のことなら、僕たちにでもできる……いや、僕たちにしかできない。そうでしょ？ 部長」

「え？ ……そうだな」

突然話を振られた律はしばらく沈黙すると、僕の言わんとすることを察したのか頷いた。

「それじゃ、梓のために演奏をするか。その時の気持ちの理由が分かるようにするためにさ」

律の呼びかけに、全員が応じた。

それぞれの楽器を構えると、律のファイルから始まった。

その曲名は『私の恋はホッチキス』。

先ほど完成したバッキングパート（僕が命名）入りのものだった。

でも、僕は演奏には加わらない。

（自分でまいた種は自分で回収しないとね）

要は自分に対してのフォローのようなものだ。

「梓、君はこの前どうして外バンをしないのかと僕たちに訊いたよね？」

「は、はい」

なるべく演奏を聴く梓の邪魔にならないように声のボリュームを落として問いかける。

「あの時の理由もあるけど、一番多いのは」皆と演奏をしていることが、とても楽しいから」なのかもしれない」

「え？」

僕の答えが意外だったのか、梓は無言で先を促してくる。

「それはもしかしたら他の皆もそうなのかもしれない……たぶん」

「たぶんじゃなくてそうなんだよ。私もみんなと演奏をすることが好きだからだだと思う」

「ッ!？」

断言することができずに、しりすぼみになっている僕の言葉に続くように話してくれたのは滯だった。

その言葉に、梓の目が大きく見開かれた。

まるで、何かを思い出したかのように。
気づけば、演奏は終わっていた。

「さあ、一緒に演奏しよう。梓」

滯と共に僕も自分のポジションに移動して、梓の答えを待った。

「……………はい！ 私、やっぱり先輩方と一緒に演奏がしたいですっ！」

それは、僕が心の中で望んでいた答えだった。

「良かったあ〜！」

「まあ、これからお茶を飲んだり話をしたりとかを思うけど。
それも軽音部には必要な時間なんだと思う」

梓が軽音部を続けることに対する喜びのあまりに、梓に再び抱き着く唯を見ながら言葉を続けた。

きつとその表情は苦笑に満ちているかもしれない。

「納得しているところ悪いけど、あの様子で説得力はあると思う？」

「え？」

僕の言葉に、視線を僕が指し示している方向に向けた滯が固まった。

そこには…………

「燃え尽きた」

「もう当分演奏はしたくない」

長椅子に突っ伏すように座る唯と律の姿だった。

「本当ですか？」

「…………たぶん」

その光景を見た梓も不安になったのか、滯に問いかけるが返ってきたのは説得力皆無の言葉だった。

結局、その後はいつも通りの軽音部の姿となった。

だが、梓の表情は前のように曇ることはなかった。

(いい方向に流れてくれてよかった)

僕は昔からすべてを破滅に導く存在だと言われてきた。

簡単に言えば、僕が行動を起こせば、そのすべてが逆効果になってしまうのだ。

「浩介君、お茶が入りましたよ」

「あ、うん。今行く！」

でも、今回だけはそうならなかったようで、僕はほっと胸をなでおろしながら、ムギの呼びかけに応じるとテーブルの方に向かのであった。

(生徒会に机の追加を頼まないよね)

今まで二の次にしていた机の数を増やすことを頼むと心の中で決めながら。

だが、僕はまだ気づいていなかった。

それから日も経たないうちに、僕が軽音部を空中分解させかねない出来事の、台風の目になるということを。

2年生編 『すべての終わりとはじまり』 第42話 兆し

僕の前には長椅子に座っている唯と梓と漣の三人、そしてその後ろに立つ律とムギ。

「それじゃ……行くよ」

僕のその言葉に、唯と律にムギは興味津々に僕がこれからしようとすることを見守る。

そして漣と梓は緊張の面持ちで僕を見ていた。

そんな視線を受けながら、僕は肩に掛けてあるギターの弦を弾いた。

それが演奏を始める合図だった。

すべての切っ掛けは、ある日の放課後のこと。

「あ、私はリンゴタルト」

「それじゃ、モンブラン！」

「なっ!? それは私が狙っていたのに!!」

「へっへっくん、こういうのは早い者勝ちなのだよ。漣ちゅわくん」
「……………」

目の前で繰り広げれる醜い争いに、僕と対面の席に座る梓は言葉を失っていた。

「あれ、あずにゃんと浩君は食べないの？」

「い、いえ。それじゃ、バナナ味を」

「僕はチーズ味を」

お菓子程度で争う二人の姿に呆れていたとも言えず、僕たちは各自好きなケーキを取っていく。

今日のお菓子は、多種多様なケーキだった。

(まあ、チーズケーキを誰かが取ったら、僕もあんな風になるんだろうな)

僕にはチーズケーキ一つを巡って戦争をする自信があった。

それほど食べ物とは恐ろしい魔物なのだ。

梓の一件からしばらく経った。

二つの机を生徒会から許可をもらって、部室に運んだのはつい最近のこと。

『梓はどこに座る?』

『えっと、それじゃ……』

新たに二つほど机が増えたことで、梓にどこの席がいいかを尋ねる。

そして梓が選んだのは物置部屋側の壁とは反対の席……僕の対面の席だった。

ちなみに、山中先生の席は僕が座っていた物置部屋側の机の横の部分だった。

そんなこんなで、今日も今日とて雑談に花を咲かせる唯たち。

『どうしたの浩君?』

『いや、よくそんなに話す内容があるなと思って』

何も言わない僕を不審に思ったのか、首をかしげながら尋ねてくる唯に、僕は苦笑しながら答えた。

先ほどから、話声が尽きることが全くない。

いくら五人の人がいる(とはいえ、話をしているのは主に四人だが)からと言って、ここまで続くのはある意味すごいことだった。

「だって、毎日楽しいんだもん♪」

満面の笑みで応える唯。

「そうそう、ネタはいろいろあるだけ。例えば滯の面白恥ずかしい過去とか」

「なっ!? それだけは絶対にダメっ!!」

律の言葉に必死に阻止しようとする声を上げる滯。

「えー、私滯ちゃんのこと聞きたいなー」

「私も」

律の言葉に興味を持った唯とムギの二人が律の援護射撃に入る。

「だ、ダメと言ったらダメっ!!」

「あー、はいはい。冗談だから」

今にも掴み掛らんとする勢いの滯を止めるように両手を上げて宥めた。

「ちえ〜」

「聞いてみたかったのに」

そんな律に、不服そうな顔で頬を膨らませる唯と残念そうに言葉を漏らすムギ。

「だったら、浩介の恥ずかしい過去でも聞けばいいんじゃないかね?」

「あ、そうだね〜♪」

そんな二人にかけられた、小悪魔のような笑みを浮かべた律の言葉に期限を治した唯が僕の方に向き直った。

「ということ、話してよ浩君」

「うん分かった。あれはそうだな今から……って誰が言うかつ!」

危ない、危うく本当に話すところだった。

「ぶーぶー」

「だったら自分の恥ずかしい過去でも話せばいいじゃないか」

再び頬を膨らませて膨れる唯に、僕はため息交じりにそう告げた。

「そうだね! それじゃあね……あ、そうだ。あれは——「って、本当に話すな!」——もう、浩君はわがままさんだね〜」

適当に言ったことを真に受けて本当に話そうとする唯を止めた僕は、わがままなことと言う認識をされた。

……何だか無性に腹が立つのはどうしてだろう。

「それじゃあ、あずにゃんの恥ずかしい過去でも——」

「絶対に嫌ですっ!」

即答で拒否をする梓も、すっかり軽音部に慣れてきたようだった。

「梓にとつての恥ずかしい過去って、ねこ耳を付けた時のような気がするの僕の気のせいかな?」

「だったら、今つければいいんだよ!」

そう言う言う唯の手にはどこから取り出したのか、ねこ耳があった。

「それは絶対に嫌です！ 後、浩介先輩も蒸し返さないでください！」

「これは失礼」

梓から怒られた僕は、軽く謝った。

今日も軽音部は通常運航だった。

—— チク

「……？」

楽しげに談笑する唯たちを見ていた僕は、ふと胸の痛みを感じた。それは体の問題ではないような気がした。

言うなれば、心の方だ。

「どうしたの、浩君？」

「いや、なんでもないよ」

再び唯から聞かれた僕は、そう答える。さっきのはただの気のせいだと結論付けて。

それはもしかしたら、兆しだったのかもしれない。

数日後の昼休み、僕と慶介は机をくつつけて向かい合うようにして昼食をとっていた。

ちなみに、これがいつもの昼休みの光景でもあった。

特に用がない限り、慶介と食べることが多いような気がする。

非常に不本意だが。

「今日はお弁当か？」

「文句でもあるのか？」

お弁当を広げて黙々と食べている僕は、慶介の言葉に睨みつけながら問いかける。

「いや、文句なんてないって。ただ、お恵みがほしいだけだから」

(完全にたかってるじゃないか)

何の惜しげもなく言える慶介の精神に、呆れを隠せなかった。

「別にいいぞ。今から頼るから、口でキャッチしろ」

「お、大道芸だなっ！ 良いぜ、受けて立ってやるー！」

僕の無茶な指示に、慶介はテンション高めに応じた。

「これを成功させれば女の子にもてるぞー！」

「……………」

欲望ダダ漏れの慶介をしり目に、僕はから揚げを一つ箸でつかむ。

「ほれっ」

「よし来たあ!!」

放り投げられた唐揚げは飛んでいく。

……対角線上に

「つて、無茶だあっ!!」

対角線上に飛んでいく唐揚げを口でキャッチするには、斜めに飛んでいかなければいけないが、普通の人にその芸当は不可能。

他の手段としては、机の合間を縫って行くしかない。

とはいえ、全力で走りながら唐揚げの落下点を予測しなければいけないので、とてつもない難易度になるが。

さて、全速力で教室内を走る慶介。

「ずべしっ!?!」

だが、何かに引つかかったのか盛大にこけた。

(ま、無理だとは思ってたけどね)

僕は心の中でつぶやきながらお弁当箱のふたを手にする。

そして椅子の上に立ち上がった僕は、そのまま対角線上にとんだ。

空中で一回転をしながら現在落下中の唐揚げを蓋の中に入れた僕は、そのまま何も無い場所に着地した。

『おお〜』

僕の芸当によってか、それとも慶介の惨めな行いによってかは知らないが注目を集めていたようでクラス中から拍手が送られた。

「すっごくいい。サーカスみたいだったわ」

「うんうん。思わず見惚れちゃったよ〜」

「ど、どうも」

次々と浴びせられる歓声に、僕は恥ずかしさのあまり視線を逸らした。

「結局、うまい思いをするのはお前か」

盛大にこけた慶介から恨めしそうな声を掛けられた。

「それにしても、浩介の親って料理上手だよな」

「いきなりなんだ？」

先ほど放り投げた唐揚げを頬張りながら慶介はそんなことを言うてきた。

「この唐揚げとてもうまいぜ！」

「残念だが、それは僕の自作だ」

称賛の声を上げる慶介に、僕は本当のことを告げる。

「は？　なんで自分で作ってるんだよ？」

「そんなの、家に親がないからに決まってるだろ」

信じられないとばかりに訊いてくる慶介に、呆れながらウインナーを口にする。

「あ……悪い」

「勘違いするな。親はちゃんといるぞ。別居してるけど」

そんな僕の言葉に勘違いしたのか、罰が悪そうに謝る慶介に、口の中の食べ物を飲み込んでから口にした。

「は？　どうして別居なんかしてるんだよ」

「ちよつとしたことで家出をしたから」

「家出って……それじゃ、生活費とかはどうしてるんだよ？」

僕の口にした理由（当然嘘だが）に信じられないと言わんばかりに下世話なことを聞いてくる慶介。

「親から仕送りでもらってる。数か月に一回の間隔で実家に帰ることを条件にだけど」

僕は嘘の説明をしながら海苔ごはんを口に入れる。

実際はすべて僕のポケットマネーで生活している。

「へえ、いろいろ大変なんだな」

「それはお互い様だ」

慶介も明るくするために、演技をしていたりするのだから。

まあ、本心が4割というのがかなり気にはなるが。

「だな」

そして僕たちは黙々と昼食を食べていく。

この時はあの時に感じた胸の痛みはなかった。

「あの、浩介先輩」

「ん？ どうかしたか、あずにゃん？」

放課後、部室でいつものように話に花を咲かせていると、梓が突然何かを思い出した様子で話しかけてきた。

「前から聞こうと思ってるんがあるんですけど。その、間違っていたらごめんなさい」

「な、何かな梓？ 改まって」

梓の様子から、僕は呼び方を元に戻して先を促した。

気づけば、他の皆も話をやめて梓の答えを待っていた。

「その、浩介先輩って……」

そこまで言うと、言いづらそうに視線をさまよわせたが、すぐに僕の方を見つめてきた。

「DKさん……ですか？」

「……っ」

梓の言葉に、表情を変えないように気分を落ち着かせる。

「で、DKって……」

「H&Pのメインボーカル兼リードギターの人です」

滯が目を見開かせて声を漏らすと、分からないと思ったのか梓が説明をした。

「藪から棒に、何を言ってるんだ梓？」

「すみません。この間DKさんとお話する機会があったんです」

「な、何いーッ?!」

梓の言葉に一番の衝撃を受けていたのは漣だった。

それはもう椅子を吹き飛ばすような勢いで立ち上がるほどに。

「ど、どうしたんですか漣先輩？」

「あー、漣はDKのファンみたいだな」

突然の漣の変化に、驚きを隠せない梓の問いかけに律は苦笑しながら答えた。

「う、うらやましい。私だって一回も話したことがないのに」

（しよっちゆう話していることを知ったら、どうなるんだろう）

ぶつぶつとつぶやく漣に、僕は心の中でつぶやいた。

どうやら僕にはまだ余裕があるようだ。

「は、話を戻しますね。その時に、DKさんが言ってたんです。『さすがは親の影響で小4からギターをやっているだけある』と」

「別に普通だと思っけど？ ねえ、律ちゃん隊員」

梓の言葉を聞いていた唯がいつになくまじめな様子で律に同意を求める。

そんな律も頷いて答えた。

「でも、私が親の影響で小4からギターをやっていることは、軽音部の皆さんにしか言っていないんです」

「それって、手紙で書いたとかじゃないのか？」

考え込んでいた漣が梓に問いかける。

（手紙に書いてあったっけ？）

僕は心の中で思い起こしてみるが、そのような文面に心当たりはなかった。

「探してみたんですけど、全く書いてませんでした」

「それは確かに、おかしいわね」

顎に手を当てて思案顔のムギが呟いた。

（というより、よくとっておいたよね）

梓の場合は数年前からファンレターが来ている。

その数は優に100を超えているはずだ。

それを取っておく彼女の執念がすごかった。

(それにしても、かなりまずいことになった)

あの時は手紙に書いておいたということに解釈するだろうとたかを括っついてさほど気にも留めていなかったが、まさかここにきて裏目に出るとは。

「それに、浩介先輩の演奏の方法がDKさんと同じなんです」

そして、演奏面からも指摘が入った。

「浩介先輩。先輩がDKさん、なんですか？」

「それは……」

もはや万事休す。

何を言っても誤魔化せないと悟った僕は、覚悟を決めた。

「実はな、梓」

そんな中、助け舟を出したのは意外にも律だった。

「浩介ってDKの知り合いらしくてな、よくギターを教えてもらっているんだってさ」

「そ、そうなんですか？」

律が言ったのは前に僕が説明した内容と同じものだった。

「そうだよ」

梓に僕は、渋々頷く演技をしながら答えた。

「ごめんね、つい練習の合間の雑談で梓のことを話しちゃったから、言いだしづらくて」

「そうだったんですか」

取ってつけたような理由に、梓はすんなりと納得してくれた。

「本当に申し訳なかった」

「そ、そんな謝るほどのことでもないです。まあ、ちよつとうらやましかつたりしますけど」

席を立てて謝る僕に、慌てながら話す梓だったが、最後の方は絶対に本音だと思う。

「というより、律知ってたんなら言つてよ」

「あはは、ごめんごめん。追い詰められていく浩介の表情が面白くて

「つい♪」

僕の非難の声に、律は笑いながら相槌を打った。

「まったく、律はしようがないんだから」

「そう言ってる滯も知ってたよな？」

「うっ!？」

ため息交じり呆れた様子で言った滯に律はにやりとほくそ笑みながら指摘した。

(どっちもどっちだ)

僕は心の中でそうつぶやいた。

「でも、DKさんにギターのコーチしてもらえなんて羨ましいです」

「だったら、浩介にでも頼んでもらうようにお願いしたらどうだ？」

「そうだね! ついでに私も教えてもらっちゃおう」

梓の言葉に、律と唯が相槌を打つ。

——チク

(……まただ)

二人の会話を聞いていると、再びあの痛みが走った。

「あれ、どうかしたの?」

「ちよっとお手洗いに」

席を立った僕にムギが尋ねてきたので、僕はあたりさわりのない理由を告げて部室を後にした。

「……オープラ」

部室を出た突き当りのドアに手をかけ、周囲に誰もいないのを確認してから魔法で鍵を開けた。

そこは屋上に続くドアだった。

外に出た瞬間に、心地よい風が僕を包み込んだ。

僕はゆっくりと前に足を進める。

(慶介とのやり取りと、軽音部でのやり取りの時の違いって……なんだ?)

屋上から望める景色にも目を止めずに、僕は心の中で問いかける。そして思い出してみた。

慶介の時にあつて、軽音部の時にはない物を。

「……………ああ、そうか」

考えてみれば簡単に見つかった。

慶介の時にあつて軽音部の時にはない物。

軽音部の時にあつて、慶介の時にはない物の正体。

「僕って…………」

それはきつと

「孤独だったんだ」

一種の疎外感のようなものなのかもしれない。

第43話 崩壊

——孤独とは何か？

そのような問いかけをされて、すぐに返すことはできるだろうか？
僕の場合は全く想像ができない。

“一人でいること”

それがきつと僕が出す答えのような気がする。

孤独とは、森の中より町の中にも存在するとまで言われているが、僕はもしかしたらそれに該当するのかもしれない。

(何で僕が孤独を感じるんだ？)

無視をされているわけでも、話に加わっていないわけでもない。

それでも、もし疎外感が孤独だと思っている原因だとしたらどうだろうか？

自分と軽音部の皆との見えない距離感が、僕に孤独だと思わせている要因だとしたら。

(馬鹿馬鹿しい)

僕は自分の考えを一蹴する。

それには確信があったからだ。

(いい演奏をするには、お互いの信頼関係が必要)

お互いが信頼し合い、楽しんで演奏をすることこそがいい演奏をするための条件の一つだ。

音合わせをしたのは4月以降ないが、疎外感を感じていたのでは決してできない演奏だったはず。

だからこそ、ありえないのだ。

「きつと、遅めの五月病だろう」

そう言うのは普通は新入社員や入学生などがかかりそうな印象があるが、僕ならば十分にあり得る。

(家に戻ったら五月病克服の方法でも調べるか)

僕はそんなことを考えながら屋上を後にする。

戻る際も周囲に目を配る。

誰も見ていたりする人がいないのを確認した僕は、屋上から出ると

元通り鍵をかけておくことにした。

「あ、浩君！」

「早くしないと、お菓子食っちゃまうぞ〜」

「なっ!? それはいくら何でも横暴だ!」

部室に戻った僕はいつものように話に加わっていく。

この時に気が付いておくべきだった。

目に見えないひびが、徐々に徐々に広がっていることに。

「……………」

異変に気付いたのは、それから数日後のことだった。

僕は自室で一人練習に励んでいた。

いや、励もうとして“いた”と言ったほうが正しいかもしれない。

「どうして?」

僕はポツリと疑問の声を口にした。

当然、この部屋には僕しかいないので答えが返ってくることはない。
いい。

「どうしてだよ」

それでも問いかけずにはいられなかった。

「どうして、弾けないんだっ!」

僕は大きな声で叫んだ。

いつものように練習をしようとした僕はアンプにつながずに軽く演奏をすることにした。

だが、ピックを持つ右手は、まるで石のように動かないのだ。

右手を動かしてみるが普通に動く。

そのままピックを持ってストロークをしようとするとう動かなくなるのだ。

「どうしたんだ、一体」

自分の体の変化に、僕は戸惑っていた。

これまでスランプになった時期があった。

今後どうやっていくべきか悩んだ時もあった。

その時でも、ギターが弾けなくなるということは、これまで一度もなかった。

「ここは落ち着いて、深呼吸」

気が焦る中、僕は冷静さを取り戻させるべく深呼吸を数回繰り返した。

「よしっ」

僕は気合を入れてもう一度ギターを弾くべく右手をストロークさせた。

すると、今度はちゃんと動き、開放弦の音色が響き渡った。

(良かった)

しっかりと動いている右手に、胸をなでおろしながら僕は練習をしていくのであった。

(でも一体なんだったんだろう?)

そんな疑問を残して。

そして、翌日のこと。

「おっす、浩介!」

「お前、いつも馬鹿みたいにテンションが高いよな」

早く教室に来ていた僕に、いつもと同じくハイテンションであいさつをする慶介に、僕は呆れながら返した。

「テンションが高ければ、今日も一日ハッピーデー★」

「……………あんだ、そのバカげた内容の話を僕とすることにどんな意味があるんだ?」

しようもない内容の話ばかりしている慶介に、僕はそう尋ねずにはいられなかった。

一日に3、4回は言っているような気がする。

「特に意味はない!」

「威張るな」

あまりにも堂々と応える慶介に、僕は頭を抱えなくなった。

「まあ、浩介と話をすること自体が、俺にとつては意味があるけどな」
「……？ それはいったいどういう——」

慶介の引つかかる言い回しに、詳しいことを聞こうとしたところに、予鈴が鳴り響いた。

「おっと、席に着かないと」

「……………」

そう言いながら自分の席に向かっていく慶介を、僕はただ黙って見送るだけだった。

結局、言葉の真意を知ることにはできなかつた。

「よおし、今日は練習するぞ〜！」

「おー！」

この日はようやくまともな練習をすることとなった。

「当分の間、唯はリードのままであずにゃんはリズム、僕はバッキングの方でどう？」

「私はいいよー」

「私もです」

僕の提案に、二人は頷いた。

とりあえず様子を見ながら演奏をしていき、大丈夫そうならばあずにゃんと僕のパートを演奏途中で入れ替えたりなどの遊びを入れてみるのもいいかもしれない。

「それじゃ、まずはふわふわからな。1, 2！」

律のリズムコールで演奏が始まる。

最初は唯のギターパートから始まり続いて僕たちのパートも演奏を始める。

冒頭はあずにやんと同じリズムギターパートなので、それほど変化はないがボーカルに合わせたバッキングという点では大きく変化している。

いかにほかのパートやボーカルをつぶさないように演奏をするか。それが僕のパートには求められる。

簡単そうに見えて難しいのがバッキングなのだ。

それはともかく、僕は弦を弾こうと右手をストロークさせようと力を込めた。

『それに、浩介先輩の演奏の方法がDKさんと同じなんです』
(ツ!?)

ふと頭の中に、梓の声が響いた。

その声は僕の身体をまるで石のように固める。

それは、先日感じたあの感覚だった。

そんな僕の醜態に、演奏が中断された。

「どうしたんだ？」

「え？ あ、ごめん。ちょっとボーつとしてただけだから」

漣の問いかけに、僕は謝りながら応えた。

「ボーつとしてるって、なんだか浩介らしくないよな」

——チク

律の苦笑交じりの言葉に、再び胸が痛む。

「そうだよね。浩君はいつも“ずっしり”としているのにな」

——チク

「それを言うなら、“びしつと”だろ」

「はっ!? それだ!」

唯のボケに、漣がツッコむ。

「よし、もう一回初めから行くか」

その律の掛け声で、もう一度最初から演奏することになった。

唯が弦を弾いて軽快な音を奏で、それに続いて僕と梓ギターの音色が加わる。

『それに、浩介先輩の演奏の方法がDKさんと同じなんです』
(つく!)

再び頭の中に響き渡る梓の声。

僕はそれを無視しながら弦を弾いていく。

今度は歌い出しまで演奏することができた。

だが、頭の中では梓の音が雑音のごとく響き渡り続ける。

それはまるで呪縛のようにも感じられた。

(うるさい、うるさい、うるさいっ!!)

頭を振って声を追い出そうとするが、追い出すどころかささらにボリュームを増していく。

(僕の頭の中から、出て行けよ)

「出て行ってくれええッ!!」

ついに力の限りに叫び声をあげるのと同時にストロークさせている右手の力加減を誤り、弦自体をすべて切ってしまった。

「のわっ!!」

「み、耳が?!」

そのせいで、凄まじい爆音が部室中に響き渡り、全員が耳をふさぐ。

「はあ……はあ」

「こ、浩介先輩!!」

「だ、大丈夫か?」

体中の力が抜け地面に座り込む僕に、梓と滯が駆け寄ってくる。

それに少し遅れるように、ムギと唯に律も歩み寄ってくる。

「どうしたんだよ。本当に大丈夫なのか?」

「ご、ごめん。大丈夫……だから」

謝りながら立ち上がろうとするが、腰が抜けたように力が入らない。

「いつもの浩介らしくないぜ」

「……っ」

律のその言葉がきつかけだった。

徐々にひびが入っていったそれは、ついに大きな音を立てて崩れた。

「ほら、捕まって浩介君」

「は、はは……」

出てきたのは、笑い声だった。

「浩介？」

「あはははは……」

突然笑い出した僕に、怪訝そうな表情を浮かべる律をしり目に、先ほどまで力が入らなかつたのがまるで嘘のように立ち上がった。

「いつものってなんだよ」

「はい？」

笑い声の後に出てきたのは、自分でも驚くほど感情のこもらない声だった。

「いつもの僕っていったい何？ お前は僕の何を知ってるんだよ？」

「こ、浩介先輩？」

律の下にふらふらと歩み寄りながら、問いかける僕に梓が怯えた声を上げる。

「ねえ、いつもの僕って一体何だよ？」

「え、そ、それは……」

後輩を怯えさせるのは最低な行為だと分かっているても、溢れ出す感情は止めることができない。

「誰も知るわけないじゃない。皆はどうせ、他人なんだからツ!!!」

「ま、待って!？」

「浩君〜!」

力の限り叫んだ僕は荷物を持たず部室を飛び出した。

そしてただただ走り続けた。

それから先の記憶はない。

「……は……」

正気を取り戻すと、僕は自分の家のリビングの床に座り込んでいた。

「いつッ！」

体を動かそうとするが、痛みが走った。

(もしかしくなくても、筋肉痛?)

今の自分の状態が把握できた僕は、ため息を漏らす。

「全速力で走ったのっていつ以来だっけ?」

思い出そうとするが、10年以上前だったような気がする。

「まさかりミッター付きで全速力を出して走るなんて……」

窓を見ると、薄暗くなりつつあるので、かなりの時間走り続けていたのは間違いなさそうだった。

「はあ……やってしまった」

そしてこみあげてきたのは深い自責の念。

自分のしたことはちゃんと覚えている。

感情に任せて叫ぶだけ叫んで部室を飛び出したのだ。

「どうしよう……」

天井を見上げながら、僕は問いかけた。

だが、当然答えなど返ってこない。

「とりあえず、夕食とお風呂に入ろう」

僕はそう思い立つと、夕食の支度を始めるのであった。

だが、結局食欲がわかず食パン1枚で済ませた。

お風呂も気が付けば上がっていた。

(何だか、やる気すら出ない)

いつもならば、色々とやるべきことに取り組む気力があつたが、今はその気さえ湧いてこない。

一番シヨックだったのはギターを弾きたくならなかったことだ。

ギターを見ただけで体が拒絶反応を起こすのだ。

「……………これは末期だな。完全に」

完全にH&Pの活動の方にも支障をきたしてしまっている状況に、苦笑するしかなかった。

「……………相談しよ」

事はH&Pの活動にまで及んでいるため、それが僕が思いつく中では最善の策だった。

『どうした?』

「すみません。最悪の事態になりました」

携帯で数コール鳴らしたところで出た田中さんに、僕は用件を告げた。

電話口からため息が聞こえた。

『どんな状態だ?』

「ギターが弾けなくなりました。弾こうとすると手が震えてしまつて」

田中さんの声色は感情を殺した様子だった。

きつと罵声の一つでも浴びせたいのかもしれない。

『そうか』

田中さんは、ただ一言つぶやいた。

『俺が言いたいこと、わかるよな?』

「……………はい。十分」

田中さんの言いたいこと。

それは、“軽音部をやめる”こと。

桜高祭のライブが終わって数日ほど経った頃に言われていた。

“もし、俺たちの活動に支障をきたすようであれば、お前、軽音部をやめろ”

そして、その通りのことがこうして起こってしまった。

『もし、続けるのであれば俺から課題を出す。それをクリアすれば認めよう。そうでなければ明日にも退部届か何かは知らないが提出しろ。それから病院に行ったりリハビリを行っていく』

田中さんの口にした“課題”が何なのかが、とても気になった。

だが、田中さんのことだ。

かなり難しいものを出すはずだ。

『できれば今すぐ決めろ。時間が経てばライブに影響する』

次のライブは来月7月の中旬に開かれる。

それまでに諸問題を解決させなければならぬ。

「すみません、少しだけ時間を下さい。それと、課題の方を教えてください」

僕の答えは、時間の引き延ばしだった。

『……………いいだろう。課題を言う』

僕の答えに、田中さんはしばし沈黙したものの、時間を引き延ばしてもらうことを認めてくれた。

『お前の課題は——』

そして田中さんから課題が告げられた。

それは、僕の予想していたものよりも、はるかに簡単そうで、難しい物であった。

「書いちゃった」

あれから数分後、僕の前には先ほど書き終えたばかりの“退部届け”が置かれていた。

僕はそれを茶封筒に入れるとカバンの中に入れた。

僕はまだ、退部するかどうかを決めていない。

退部届けの用紙に記入をしたのも、自分の答えが決まった時にすぐにも行動ができるようにするための前準備に過ぎない。

(タイムリミットはあと7日)

僕は決して悔いが残らないように、自分の納得する答えを導こうと心の中で決心するのであった。

こうして、すべての終わりの時は、静かに始まりを告げるのであった。

第44話 親友として

「はあ……」

あれからもう三日経った。

今日もギターケースを持たずに学校に朝一で来ていた。

これまでの輝きはすっかりと損なわれていた。

出てくるのは今のような溜息のみ。

(梓の気持ちになんとなくわかるよ)

きっと梓もこんな気持ちだったのかもしれない。

考えれば考えるほどわからなくなり、思考はどんどん沈んでいくばかり。

その要因は、田中さんから出された課題も絡んでいた。

——“軽音部の連中に、自分がDKであることを打ち明けること”

それが、課題だった。

確かに、合理的な課題だった。

自分の正体を明かせるというのは、かなりの信頼がなければできないことだ。

しかも僕はいまだに山中先生以外に正体を明かしたことはない。

『元々名前に偽名を使うようになったのはお前の指示だ。ミステリアスで人気を得ようとする意図がないことくらいは分かっている。それならば、お前の一存で話しても構わない』

それが田中さんの話だった。

「おーっす！ 今日テンション低いなっ!!」

「……………」

三日前からいつもの二割増しでテンションを高めて声を掛けてくる慶介だが、僕はそれに返事を返す気力は全くわかかなかった。

「あの、お願いですから。反応してくださいえ！ この通り！」

「……………」

土下座をする慶介が、かわいそうになり僕は無言で席を立った。

(もう少しだけ待って)

まだ話をする気分ではない。

でも、少しすればこの間と同じように話をすることができるようになるはず。

……それがいつなのかはわからないが。

今日も僕は絶賛暗闇の中に迷っていた。

「高月」

「あ、小松先生」

ぶらぶらと歩いていると小松先生と鉢合わせになった。

「ちようどよかった。お前にこの間の課題を返却するところだったんだ」

「そうですか。ありがとうございます」

小松先生から真っ白な紙を受け取った。

「それでは」

僕は小松先生に一礼してその場を後にする。

(これって、調査報告書か)

少し歩いたところで、中身を確認した僕はそう判断した。

それは、二か月ほど前に小松先生に依頼した新歓ライブの数日前に連絡をした人物とその内容の調査の報告だった。

実は、小松先生こそが僕を陰から支援する“工作部隊”の人間なのだ。

見事に学校の教師として溶け込んでいるので、配置を知らない限り気づかれることはない。

(家で確認するか)

僕はそう考えて、報告書を内ポケットにしまうのであった。

★★★★★

「はあ……今日もダメか」

浩介が去った教室で、俺はため息交じりに立ち上がる。

(この頃考え込んだりすることが多くなってたから心配してたら案の定か)

浩介の様子がおかしいことは、薄々ではあるもののわかっていた。何度もしつこく話しかけ続けていたのは、それが理由でもあった。最近は無視されるようになったが。

「……………」

そんな俺の目の前に、浩介のカバンが見えた。

浩介は教科書などを机に入れることはない。

机に入っているのは暇つぶし用の本のみだ。

ちなみに、俺は1行読んで挫折した。

つまり、浩介の異変の原因の手掛かりがもしかしたら鞆の中に入っているかもしれない。

(ギターを持ってきていないのも気になる)

三日前からギターを持ってこなくなった浩介に理由を尋ねたところ、”ちよつとな”としか答えてくれなかった。

浩介の異変は軽音部とかかわりがある。

そんな気はしたが、それを裏付ける根拠がなかった。

(後で謝ろう)

俺は、浩介に怒られるのを覚悟して浩介のカバンを机の上に置くとチャックを開けて中身をあさる。

中には教科書やノートなどの勉強道具しか入っていない。

(はあ、やっぱり優等生タイプだよな)

俺のカバンの中身とは大違いの内容物に感嘆の声を心の中で上げる。

「ん？」

そんな中、ふとある物を見つけた。

俺はそれをカバンから取り出す。

それはどこにでもある普通の茶封筒であった。

(……………怪しい)

浩介がこのようなものを持っていること自体が怪しかった。

前に楽譜のようなものを持ってきたことはあったが、その時もクリアファイルに挟んでいた。

封筒に入れるというのは、浩介にしては不自然すぎる。

「鞆は元に戻しておこう」

浩介に見つかりづらくさせるべく、俺は鞆のチャックを閉めると浩介の席から離れ、自分の席に戻った。

「一体なんだろう」

自分の席に腰掛けた俺は、浩介のカバンの中に入っていた茶封筒の中から一枚の紙を取り出した。

そして俺はそれを開いて中身を確認する。

「なっ!？」

思わず大声で叫びそうになったが、何とか堪えることができた。

俺は慌てて周囲を見渡すが、特に視線は感じなかった。

普段のキャラづくりが幸いしたようだ。

ほっと俺は胸をなでおろすと再び視線を紙に戻す。

(いったいどうしたというんだ。浩介)

俺は『退部届け』を手に、心の中で友人の浩介に問いかける。

「やれやれ、ここは親友の俺の出番というわけか」

自称だが、それでも俺は浩介の力になりたい。

それが、俺にできる唯一のく恩返しなのだから。



放課後、軽音部部室。

いつものようにお菓子やティーカップが各人の前に置かれ、ティータイム真っ只中であつたが、いつもの活気はなかった。

「今日も来ませんね。浩介先輩」

「……………」

ぼつりとつぶやいた梓の言葉に、返事はなかった。

全員が視線を机に向けているだけだった。

「休み時間に、浩介先輩のクラスの教室に行ったんですけど……………」

「……………私も。朝に浩君のクラスに行ったけど会えなかった」

梓の言葉に導かれるように唯も続いた。

「そもそも、どうして浩介はあんなつたんだろう?」

腕を組みながら、浩介が突然怒り出した理由を考える律。

「律が何かしたからだろ！」

「そうですねよ！ 律先輩の言葉の後で怒りだしたんじゃないですか！」

そんな律に滯と梓が詰め寄る。

「なっ!? 私だけのせいだっって言いたいのかよ！」

「お、落ち着いて。滯ちゃんと梓ちゃんも」

滯と梓の言葉に、律は椅子を弾き飛ばす勢いで立ち上がる。

ムギは三人を落ち着かせようとなだめる。

軽音部は空中分解の危機を迎えていた。

「っ!? 浩介?!」

ドアの開く音に、全員が出入り口であるドアの方に視線を向ける。

「なんだなんだ、騒がしいな〜」

そこに煮立っていたのは、軽快に笑いながら部室に入る慶介の姿だった。

「あ、あの先輩。あの人は？」

「あー、彼はだな——」

突然登場した慶介のことを知らない梓が尋ね、それに応じようと律が口を開いた瞬間だった。

「お、日本人形みたいに可愛い後輩発見！」

「へ?」

梓を指さしながら告げられた言葉に、固まった。

「確保〜ッ!!」

「きゃあああああ!!!」

そして突進をしながら自分の下に向かってくる慶介に、梓は大きな悲鳴を上げた。

だが、結局慶介は梓の横をすり抜けていった。

「ふーむ。こうすれば浩介だったら駆けつけそうな気もするんだが。無理だったか」

「えっと、何の用?」

顎に手を当てて考え込む仕草をする慶介に、律が用件を尋ねた。

ちなみに梓はちやつかりと慶介から距離を取っていた。

「その前に自己紹介を」

そう口にするると、慶介は咳払いをした。

「俺は佐久間慶介。自称、浩介の親友さー！」

「え、えつと。中野梓です」

梓に向けてされた自己紹介に、梓も応じるように自分の名前を告げた。

「それで、用件なんだけど……」

慶介はいったんそこで言葉を区切る。

その表情にお茶らけた雰囲気はなかった。

「浩介と何があったんだ？」

「ッ！」

佐久間の問いかけに、全員が肩を震わせた。

「教えてほしい。何があったのか」

「……………」

慶介の頼みに、唯たちは終始無言だった。

「実はね」

その沈黙を破ったのは唯だった。

そして、三日ほど前の一件が語られた。

「なるほど」

話を聞き終えた慶介は、静かにつぶやいた。

「それで、こいつになるわけか」

「それは？」

慶介がどこからともなく取り出した茶封筒に、紬が首をかしげながら問いかける。

「浩介が持っていた奴だ」

そう言いながら、慶介は封筒を机の上に置いた。

それを唯が手にすると封筒を開けて中に入っていた用紙を取り出し、それを広げる。

『なっ!?!』

その用紙を目にした唯たちは驚きのあまり言葉を失った。

「た、退部届ってどういうことだよ!!」

「浩介先輩や、辞めちゃうんですか!？」

「いや、俺に訊かれても。俺はただ勝手に持ってきただけだし」

今にも掴み掛らんばかりの勢いで問い詰める律と梓に、慶介は落ち着くようにジェスチャーを送りながら答えた。

「勝手にって、大丈夫なのかよ?」

「大丈夫じゃね? 今までばれなかったし」

「何となく、この後にどうなるかが分かるような気がする」

浩介の荷物を勝手に持ってきた慶介の未来が見えた漣は、視線をそらしながらつぶやいた。

「浩君が辞めるなんて嫌だよ!」

「私ですよ!」

唯が立ち上がりながら声を上げるのに続いて梓も声を上げる。

「私も絶対に嫌だ」

それにムギが続く。

後の二人は声を上げなかったが、何度も何度も頷いていた。

「浩介って、自分のことを話したりしたか?」

「……………一人暮らして、DKっていう人の知り合いだということは話していたような気がする」

(なるほど、そういうことか)

唯の答えに、慶介は事の原因を悟った。

「俺から言える最善の解決策はただ一つ」

「それって、なんですか?」

「それはつまり、話し合うことだつ!!」

自信満々に口にした慶介の解決策に、全員が机に突っ伏した。

「あれ?」

「それはすでに試みようとして失敗してるんだよ」

「教室に何回か行ってみたんだけど、浩介君と会えなかったの」

すぐさま姿勢を戻した漣が説明し、それに補足するように紬が教室に向かっていたことを告げた。

「だったら、あいつの家前行けばいいんじゃないのか?」

『え?』

慶介の提案に、全員がどういう意味と言わんばかりに首をかしげた。

「家だったらさすがに会えるだろうし」

『ああ?!?』

(本気で忘れてたのかよ)

一番当たり前のことを忘れている軽音部のメンバーに、慶介は心の中で苦笑する。

「ま、がんばって」

「あ、ちよつと!」

とりあえずやることはやったと思った慶介は、そのまま部室を後にしようとするとその背中に声が掛けられる。

「ありがとう」

「どういたしまして」

お礼を言った唯に、慶介はそう返すと今度こそ部室を後にした。

『よおし、これから浩介の家に行くぞー!』

(これで明日には元通りだな)

そんなことを考えながら、慶介は階段を下りていくのであった。

★ ★ ★ ★ ★

「はあ。今日もダメだったか」

僕は自室で深いため息をつく。

今日も考え続けはしたものの、結局答えは出なかった。

もうタイムリミットは迫ってきている。

さすがにこれ以上悩むのに時間をかけるのはまずい。

(とは言っても、あの課題をクリアするなんて)

田中さんの課題が予想外の重荷となっていた。

「あ、そう言えば。小松から調査結果を渡されたんだった」

僕はふと、偶々朝に合うことができた小松先生から手渡された、課題に偽装された報告書を手にする。

それは、梓が軽音部に入部した際に頼んだ調査に関するものだった。

僕は報告書に目を通す。

「短!?!」

報告書の内容は意外にも短かった

調査内容：4月の指定期間における電話の着信履歴および内容

結果：依頼内容の通話内容を特に確認できず。

郵便物等を精査したが依頼内容の要件を確認できず。

簡単な内容だったが、非常にわかりやすいものだった。

(つまり、慶介の言っていた連絡はなかったということか)

だとすると、浮かび上がる疑問は一つ。

「何で、慶介は連絡があつたなんて言ったんだろう?」

工作部隊の人間の調査能力は非常に高い。

この調査報告書もそれだけに信憑性が高いのだ。

だとすると、うそをついたのは慶介の方になる。

(まさか、曲目を急に換えさせることで、軽音部のライブを妨害しようとした)

どう考えても慶介の方にメリットがない。

だが、気になったことは調べないと気が済まない。

僕は右腕を前方にかざすと握りしめていた手を開くようなしぐさをする。

そして何も無い空間にホロウインドウを表示させると、工作部隊の方に連絡を入れる。

『はい。どうされましたか? 大臣』

「佐久間慶介に関する情報を集めて。主に彼とのつながりや交友関係、家族の名前全てを」

『了解しました。失礼します』

通信の相手はそう告げると通信を切った。
そして待つこと数分。

「もう来た」

ホロウインドウに新着メッセージを告げる表示が現れたので、僕は調査能力の高さに驚きながら結果を確認する。

「それほど多くないな。とりあえず、一人ずつ検索をかけるか」

そうつぶやいた僕は現在展開しているウインドウの横に同じサイズ
のホロウインドウを展開する。

画面には入力欄と検索のボタンが配置されている。

それは魔法連盟が管理する魔法使いのデータベースである。

魔法使いと認識されると、必ずこのデータベースに登録されるよう
になっている。

主な内容は生年月日や年齢はもちろんのこと、生体パターンや魔力
パターン、指紋に声紋等々様々だ。

これも魔法犯罪を抑止し、早期解決に導くために必要なものでもあ
る。

僕はそこに先ほど届いた慶介にかかわりのある人物の名前を入力
し、検索をかけるが一致する名前は出てこない。

当然慶介自身もだ。

だが、全員一致はしなかった。

(ということとは、魔法関係ではない)

魔法関係であれば、僕への逆恨みで妨害するという行為も考えられ
るがそうでないとする、見当が全くつかなかった。

「……………はあ」

この日、何度目かのため息をつく。

【マスター、ため息をつくこと幸せが逃げますよ?】

「うお!」

突然響いた女性の声に、僕は驚きのあまりのけぞってしまった。

「クリエイトか」

【さすがにその反応はひどいですね】

「ごめんごめん。クリエイトと話すのが久しぶりだったから」

若干怒っている声色に、僕は苦笑しながら謝罪の言葉をかけた。今僕が話しているのは、首にかけているネックレスだ。

名前をクリエイトと言い、魔法を使う際の相棒でもある。

【マスターが話せないようにしたんじゃないですか】

「そうだったね。でも、今は話せてるみたいだけど?」

魔法という文化のない世界でいきなり誰もいないはずの場所から声がしたら大騒ぎになること間違いナシ。

そんなわけで話せないように封印をかけたのだが、なぜか普通にクリエイトは話をする事ができる。

【実は一昨日から封印魔法が弱まっているらしく】

「魔法が? ……そういうことか」

魔法というのは精神状態に密接に関係している。

詳しい理由はまだ明らかにはなっていないが、不安定な精神状態になると魔法の質も不安定になるらしい。

(つまり、僕はそれほど精神状態が不安定なんだ)

どうやら、僕は自分でも知らないところまでひどいことになってるらしい。

「クリエイト」

【はい、何ですか? マスター】

僕はクリエイトに呼びかける。

「いつものあれ、良い?」

【もちろんです。この御心は我が主の名の下に】

僕の問いかけの意味が分かっているようで、クリエイトはそう答えるると一瞬光を発して一本の杖となりぼくのまえに浮いていた。

先端が槍のようになっていた紫色の杖だった。

【さあ、お乗りください】

「ありがと」

クリエイトに促されるまま、僕は杖に腰掛ける。

【認識阻害魔法をてんかいしてますから、いつでも大丈夫ですよ】

手際のいいクリエイトの行動に、僕は心の中で苦笑した。

ちなみに、認識阻害魔法というのは、自分という存在を相手からは

存在しない物にするという魔法である。

簡単に言えば透明人間になったようなものだ。

透明人間との違いは、声を上げれば誰かにそこにいることがばれるが、この魔法は声を上げてても「声すらも存在しない」ことになるため聴きとられることはない。

「それじゃ、出発！」

そして僕は窓から外に出ると、そのまま上昇を始める。

空は黒のベールが徐々に包み込み始めている。

もう少しすれば日が沈むような時間帯だ。

そんな中を、僕は優雅に飛んでいた。

一定の高度に達すると上昇を止める。

「いつみてもいい景色だ」

【そうですね。特等席ですね】

どこかの高い建物の屋上に行かなければ見ることはできないであろう光景を、僕は今堂々と見ているのだ。

「……………」

【マスター】

そんな光景を見ながらどうしようかと考えていると、クリエイトから声が掛けられた。

【私はいつでもマスターの味方です】

「……………ありがとう。クリエイト」

クリエイトの言葉に、左手で撫でながらお礼を言った。

なんだかんだ言ってもクリエイトとはかなり長い付き合いなのだ。

その言葉が本当のことか否かくらいは、簡単にわかった。

それからしばらく空中散歩を満喫した僕たちは下降していくと自室に戻るのであった。

何となくではあるが、がんばれそうな気がした。

第45話 疑問

次の日、浩介はギターを持ってこなかった。

(ダメだったのか)

俺は、それだけで結果を悟った。

軽音部の作戦は失敗に終わったのだ。

「おっす、浩介！ 今日こそは俺のハーレム道を叩きこんでぶはりや!？」

「……………」

いつものようにテンション高めでアタックしてみたところ、浩介から痛烈な一撃をお見舞いされた。

無言で立ち去ったが、それは俺にとっては希望の光のようにも思えた。

(これまでは馬鹿なことをしても手が出なかったからな。少し改善されたようだ)

少し頭が痛い、これはいい知らせだ。

あとはちよつとしたワンプッシュがあればいいだろう。

(だとしても、一体何をするかだな)

俺は腕を組んで作戦を立てる。

(そう言えば、母さんは今日は仕事で家に戻れないって言ってたな)

母さんの仕事の都合上、仕方がないかもしれないが、ちよつとだけ寂しいのもまた事実だ。

(そうだ！ これだっ！)

俺は最善の策を思いついた。

(こうなったら実行あるのみ！)

勝負は放課後だ。

俺は放課後に向けて気合を入れるのであった。

★★★★★

放課後を迎えた。

この日も結局結論を出すことはできなかった。

(このまま自然消滅するしかないか)

それをしてしまったらすべてが終わるような気がするので、やりたくはなかったが。

「浩介！俺と遊ぼうぜ！」

「断る」

悩んでいる僕のことなどつゆ知らず、慶介のハイテンションな誘い言葉に、即答で断った。

「そんなこと言わずに、しゅっぱ〜っ」

「お、おい！引っ張るな!!」

腕を引っ張って強引に連れていく慶介に、僕は抗議をする但那が振りほどかれることはなかった。

「それで、一体どこに連れて行く気だ?」

校門まで引っ張られた僕は、ようやく腕を離してもらうことができた。

「まずはカラオケだいい！」

「……………オーケー」

僕は降参とばかりに両手を上げる。

「それじゃ、行くぜ！」

「はいはい」

ため息交じりに返事をしながら、僕は慶介の後をついていくのであった。

「使い方とかは大丈夫か？」

「もう一通り、見たから平気だ」

電車で慶介の家がある駅まで向かった僕たちが最初に向かったのはカラオケ店だった。

カラオケ店で手続きを済ませた慶介に連れて行かれるように来たのは少し狭い一室だった。

天井にはスピーカーカーが二つほどついており、部屋の一角には機会が置かれていた。

(昔とは違うのか)

昔は分厚い本から歌いたい曲を見つけて番号を入力する必要があったが、今では小さいパッドのような機械で曲を探してそのまま送信すればいいのだから便利になったものだ。

「それじゃトップバッター、佐久間慶介、行きま〜す!」

そう啖呵をきってマイクを持つと、慶介は歌いだし始めた。

歌っているのはあまりよく知らない曲だった。

「つと、きてきて、何点かな〜」

「何を言ってるんだ?」

歌い切った慶介が楽しげにつぶやく言葉に、僕は首をかしげる。

「知らないのか? これ採点機能がついてるんだ。点数が出るんだぜ」

「そうなんだ」

本当にすごいなと心の中で感心していると、結果が表示された。

点数は47点。

「くそ〜、50点越えずか。次は浩介の番だな」

「それじゃ失礼して」

僕はマイクを慶介から受け取ると、先ほど入れた曲を歌う。

曲名は『月に叢雲華に風』だ。

知っている人は知っている、知らない人は知らないというある種のマイナーな曲で、しよっぱなから歌わなければいけない。

ちなみに、女性ボーカルだったりする。

「最初の曲で女性ボーカルか。やるな〜」

慶介から感心したような声を送られるが、それを無視する。

(機械だから性別は考慮しない。とすれば、音程のみか)

そう推測を立てた僕は、高得点を取るべく音程の方に気を付けて歌っていく。

やがて、僕は曲を歌い切った。

「さてさて、浩介の点数は何点かなかな？」

興味津々に結果を待つ慶介をしり目に、僕はいつの間にか届いていたお茶を飲む。

「げっ!?!」

「ん?」

慶介が引き攣ったような声を上げるので、僕は視線を大型テレビの方に向けた。

そこには97点という数字が出ていた。

(満点が取れなかったのは残念だが、まあ我慢しよう)

高得点には変わりないのだから。

「ど、どうして女性ボーカルの曲をこんな高得点で?! やっぱりお前は天才なのか!!」

「何を言ってるんだ? 素質もあるだろうが、僕はただレスポンスをただけだ」

「れすぽんす?」

わけのわからないことを喚く慶介に、僕は首をかしげながら返した。

「つまり、相手の要求を推測してその通りに歌うということだ」

「それって、機械が何を望んでいるかということか?」

察してくれた慶介の問いかけに、僕は頷くことで答えた。

「こういう機械は歌い手の音程や伸びなどで採点している。だから、そこを意識して音程を一定にし、伸ばすところを伸ばし締めるところを締めるようにすれば点数も自然と上がるだろ」

「そうか? それじゃ、俺もやってみよう」

そう言うや否や慶介が再び歌ったのは、最初に歌った曲だった。

(まあ、高得点を取るためには、リズムの方も大事なんだけど)

それが素質の方になってくるわけだ。

(所詮カラオケは遊びだし、そこまで高得点にこだわる意味もないしね)

カラオケのような遊びは、楽しんだもの勝ちだ。

ならば、下手なことを教えない方がましだろう。

そんなことを考えていると、慶介は歌い切ったようだ。

「うおッ!? 初めての高得点!」

「なかなかやるじゃないか」

慶介がとった点数は69点だった。

高得点かどうかは知らないが、飛躍的に上がっていた。

「ありがとう浩介! これで人前で歌っても恥ずかしくないぞ!」

「そ、そうか。それはなにより」

点数が少し上がったくらいで喜びの声を上げる慶介に、僕は少しばかり圧されながら相槌を打った。

「さすが、コンクール優勝のMVPだな」

「それを言うなど前にも言ったはずだが?」

桜高祭で開かれた歌自慢コンクールで僕のクラスは優勝の成績を収めたらしい。

そのMVPが僕であることを知らされたのが桜高祭が終わってから少ししたときの話だ。

「悪い悪い。っと、そろそろ時間か。次行くぜ、浩介!」

「了解」

僕は渋々返事を返すと、カラオケ店を後にした。

滞在時間は約1時間だった。

「次はここだ!」

「ここってゲームセンターか」

慶介に連れてこられたのはゲームセンターだった。

「さあ、行くぞー」

そしてゲームセンター内に入った僕たちは中を歩き回る。

「これの対戦はどうだ?」

「別にかまわないけど、やり方知らないぞ?」

一つのゲーム機の前で立ち止まった慶介の提案に、僕は肩をすくませる。

「大丈夫簡単だから。それにここに書いてあるし」

「えっと……赤いノートが来たら面を叩く……リズムゲームか」

やり方も簡単そうなので、僕にでもすぐにできそうだった。

「難易度は簡単から鬼まであるんだ」

「そうだぞ。俺は普通で行くから、浩介は簡単なレベルにしろよ」

慶介のアドバイスを無視して、僕は慶介が選んだ曲の最高難易度を選んだ。

「うげ!? お前、初めてやるのに何最高難易度を選んでるんだ?!」

「別にどの難易度を選ぶかなんて、人の自由でしょ。それに、曲始まるよ」

「うおっ!? 危ねえ危ねえ。負けても文句言うなよ!」

曲が始まりノートが流れ始めたため、慶介は画面に顔を向けながら叫んだ。

このゲームは一定のラインまでゲージをためないと、クリアにならないシステムのようなのだ。

(すごい密集度。でも、余裕だな)

流れてくるノートは非常に密集していてこんがらがりそうだが、それほど苦にもならないレベルなので捌ける可能性が高い。

(母国ではこれよりも密度の濃い弾幕を避けてるんだから!)

僕は次々にノートに対応した面を叩いていく。

その結果……

「う、嘘だろ。初プレイで最高難易度で最強と言われた曲をノーミスでクリアしやがった」

ミス一つせずクリアすることができた。

しかも何気にランキング1位になっているし。

「慶介」

「な、なんだ?」

目を瞬かせている慶介に、僕は尋ねた。

「もつと難しいの無い？」

「お前は化け物か!!」

僕の問いかけに、慶介からそんなツツコミを入れられてしまった。
（うーん、僕としてはノートが流れてくる速度が少し遅く感じるから、速いのがないかなと思っただけど……自重するべき？）

その後も慶介とゲームセンターでいろいろなゲームをプレイした。
格闘ゲームやレースゲーム等々、ほとんど僕が買っていたような気がするがとても楽しかった。

「最後にこいつをやるぞ！」

「これはクレーンゲームか」

慶介が指差したのは前に唯たちが遊んでいたクレーンゲームだった。

尤も、ここではないが。

「これ前からとりたかったんだよな」

「ふーん」

見ればアニメでやるロボットのフィギュアだった。

（こういうもののどこがいいんだか）

僕にはその良さがあまり分からなかった。

一番わからないのは、

「くそ〜、今日もダメか！」

熱中する慶介の方だが。

（まあ、たまにはいいか）

「退け」

「うわ!? 押すなよ」

慶介を軽く突き飛ばして、お金を投入する。

そして、ボタンを操作してクレーンを操作する。

（ターゲットを落とすためには、急所を突けばいいだけ）

少しだけずるをして、僕はそのポイントを見極めることにした。

一回目を閉じて再び開くと、ターゲットの状態が事細かに見えてくる。
（見つけたっ！）

その中で、安定に要する力が最も強い場所を導き出した僕は、その場所を狙ってクレーンを操作して力のバランスを不安定にさせた。

その結果、箱はそのまま取り出し口に落下した。

「ほい。駄賃だ」

「さんきゅー、やっぱり浩介はすげえな」

戦利品を慶介に手渡すと、慶介は喜びをあらわにした。

こうして、僕たちはゲームセンターを後にした。

オレンジ色の明かりに照らされる建物は、今が夕方であることを物語っていた。

「満足したのなら、僕は帰るぞ」

「ちよつと待てって」

駅に向かって歩き出そうとする僕の腕を掴んで引き止める慶介に、僕はため息をつきながら振り返った。

「なんだ？」

「今日、母さんが仕事で家に帰ってこないんだ」

「……で？」

慶介の言わんとすることがわからず、僕は先を促した。

「俺の家に泊まってかねえか？」

「……………」

慶介の提案に、断ろうかと思ったが断っても連れて行かれそうな予感がした。

「オーケー。ご招待されましょう」

「よしっ。そうと決まれば——」

「その変わり着替えとかを持ってくるからいったん家に戻る」

慶介の言葉を遮って、条件を告げるように慶介に言い放った。

「一緒に行くか？」

「僕は方向音痴ではない。一人で十分だ。あとから行くから待ってて」

同行しようとする慶介に断りを入れた僕はそのまま駅に向かって

歩き出す。

今度は引き止められることはなかった。

「やれやれ、僕は何をやってるんだ？」

自宅から着替えなどの泊まるのに必要最低限のものをカバンに詰めて慶介の家に向かう中、僕はため息交じりにつぶやいた。

自分にはやらなければいけないことがある。

ならば、このような遠回りをしている暇はないはずだ。

それなのに、

(これが無駄には思えない。何らかの意味がある)

そのように思えてならないのだ。

相手はただのバカが付く男だ。

失礼だが僕の悩みが解決できるような存在には思えない。

それでも、僕は可能性に賭けてみることにした。

そう結論を出したところで、慶介の家が見えてきた。

僕はチャイムを鳴らした。

「やっと来たか。さあ、入って入って」

「お邪魔します」

慶介に招き入れられた僕は、慶介に促されるまま中に入っていた。

案内されたのはリビングだった。

「これはすごい……」

テーブルの上に用意されたのは色々な料理だった。

「俺が作ったから、味の保証はできないけど」

「これを慶介が作ったというのか!？」

ハンバーグなどもあり、到底慶介が作ったとは思えなかった。

「そうだけど……そこまで驚くことか？」

「失礼」

「まあいいや。早速食べようぜ」

僕の謝罪に、慶介は追及をやめてそう言いながら席に着いた。

「それじゃ」

僕も慶介の対面に腰掛ける。

「いただきます」

「いただきます」

僕たちは手を合わせて声を上げると、料理に手を付けた。

まずはハンバーグだ。

ナイフで一口サイズにするとフォークでそれを口の中に入れる。

「む……」

（こ、これは!?!）

「ど、どうだ?」

「おいしい。本当に」

緊張の面持ちで味を聞いてくる慶介に、僕は本当のことを答えた。

やわらかく、噛んだ瞬間にうまみが口の中に広がるそれはまさに芸術と言っても過言ではなかった。

「そうか。口に合ったみたいで何よりだ」

「ごつちも、こんなにおいしいハンバーグ、久々に食べた」

母さんが作ったものには遠く及ばないが、それでも十分においしいことに変わりはない。

（色々と損しているよ、お前は）

それが僕を感じた慶介への心証だった。

この一面を出せれば、それこそ慶介は女子にもてるだろう。

（本当、僕にはもつたいない友人だよ）

自分の愚かさを再び思い知らされた瞬間でもあった。

「お風呂あがったよ」

「おう、お疲れさん」

最後にお風呂に入り終えた僕は、慶介の部屋に戻っていた。

慶介曰く、今日はここで寝るとのこと。

既に床には布団が敷かれていた。

「もう寝るぞ。明日も学校だ」

時間にして午後9時。

もう寝る時間だったため、僕は慶介に提案した。

「くそー、浩介と話をしたかったが寝ながら話すとするか」

「はいはい。御託はいいから明かりを消して」

僕は布団にもぐりこみながら部屋の主である慶介に、明かりを消すように頼んだ。

「わかった。それじゃ、消すぞ」

「おう」

そして明かりが消え、あたりは真つ暗になった。

横のベッドから人の気配がする。

どうやら慶介もベッドに入ったようだ。

「なあ慶介」

「なんだ？」

僕は慶介にあのことを問いただすことにした。

「この間の新歓ライブの前に、言ったよな？ 苦情が来たので僕たちに演奏する曲を変えるように」

「ああ。確かに言った」

「その苦情は本当にあったのか？」

僕は直球で尋ねた。

「……」

慶介は何の反応も示さなかった。

「知り合いにそう言うのに詳しいやつがいてね。そいつに調べてもらったんだ」

「真鍋さんか」

思い当たったのか慶介は真鍋さんの名前を口にした。

「そう取ってもらっても結構。それで、その結果そのような電話やメール郵便物などはなかったらしい。慶介、お前はどうかやって苦情を受けただ？」

「……………」

「直接か？ ならば名前は？ 連絡先は？ 年齢は？ 性別は？」

僕の問いかけに、慶介は口をつぐんだまま答えようとはしない。

「もしくは、軽音部への嫌がらせか？」

「は？」

僕のその言葉に、ようやく慶介が反応を示した。

「あの時期に変更されたら最悪の場合は新歓ライブは失敗に終わる可能性があった。それを見据えて嘘の通達を出したのだとすれば、それは妨害ともいえる」

「冗談じゃない！ 俺はそんなことはしない！」

僕の言葉に、慶介は初めて怒鳴り散らすように反論してきた。

「俺はただ、浩介への恩返しのためで……………」

「恩返し？ 僕はお前に恩を売ったつもりもないし、あったとしても、そんな恩返しは不要だ！」

慶介が漏らした言葉に、僕はきっぱりと断りを入れた。

僕には慶介の言う恩と言うものが何なのかがよくわからなかったが。

「にしても意外だな」

「何がだ？」

今度は僕が聞きかえす番だった。

「浩介が、軽音部のことにそこまでムキになるなんて」

「それは嫌味のつもりか？」

「いや。軽音部をやめようと考えている奴のセリフじゃないからついで」

慶介のその言葉で、すべてがわかったような気がした。

「なるほど、退部届けを盗み出した下手人は、お前だったか」

「なんだ、ばれてたのか」

僕の言葉に、慶介はため息交じりにつぶやいた。

「ばれてないと思うお前のその神経がすごいよ」

「まったく。それで、何があったんだ？ 彼女たちと」

今度は慶介から問いただされる番だった。

僕は天井を見ながらゆっくりと口を開く。

「こんなはずじゃなかったんだ」

一度口に出してしまえば、後は芋づる式だった。

「自分が爆弾だということも、自分の置かれている立場も理解しているつもりだった。それでもずっとこのままで行けると思っていた」
「……………」

慶介は無言で僕の話聞いていた。

「勝手に隠して、勝手に爆発して……………全ては僕自身のわがままから始まつてるってことも。そのせいで唯たちを苦しませていることも」
「そうか。いろいろ大変なんだな」

僕が話し終わると、慶介は静かに相槌を打った。

「DKとしての顔と、ただの生徒としての二つの顔か。どこか俺にも通じるところがあるな」

「そうだな……………おい慶介。今なんて言った？」

普通に相槌を打った僕だったが、慶介の口から聞き捨てならない単語が聞こえたような気がしたので、僕はもう一度尋ねた。

「だから、DKとしての顔と、ただの生徒としての二つの顔か。どこか俺にも通じるところがあるな」

「……………ど、どうして」

驚きで声がかまく出せない。

まるで金縛りにでもあったかのように体が動かなくなかった。

「どうして……………いつから知ってるんだ？」

それでもようやく僕は疑問を口にすることができた。

「最初に会った時から」

「それって……………冗談だろ」

慶介の答えに、僕は信じられなかった。

あの時の慶介の様子は、僕のことを知っているというものは見られなかった。

「まだはつきりとはわかってなかったからな。でも、桜高祭のコンクールではつきりした」

「だからしつこく僕を参加させようとしたのか」

慶介のあの時のしつこい勧誘の真意をようやく僕は理解できた。

「声質は変わっていたけれど、歌い方とかはDKとそっくりだった。前に、歌番組で大物歌手と採点勝負をしたことがあったら？ あの時も浩介は99点という高得点を出して優勝してたし」

「……よく御存じで」

数年前……僕がイギリス留学をする直前に、テレビ局の方から出演依頼があった。

それが大物歌手と歌で勝負をするという内容だった

そこで僕は大物歌手を堂々破り優勝の栄誉を手に入れたのだ。

「そりゃ知ってるさ。だって……」

慶介はそこで言葉を区切った。

そしてこう告げた。

「俺は、DKの……浩介のファンなんだから」

第46話 すべての終わりと始まり

それは慶介が小学生のころの話。

父親を亡くし、悲しみに浸っていたころの話だ。

通夜や葬式も終わり、いつも通りにの日常が始まる中、慶介はいつもの明るさを取り戻せなかった。

普段の慶介は、人づきあいも良く友人に恵まれていた。

だが、それ以降から、慶介の明るさはすっかり無くなり、どんよりとした雰囲気醸し出すようになった。

そして友人たちもそんな慶介から離れていく。

慶介は友人をも失ったのだ。

そんな中、それと慶介は出会った。

きっかけはとあるテレビ番組。

『続いては、流星のごとく現れたH&Pで、Only for youです!』

それは有名な音楽番組だった。

それを何気なく見ている慶介の耳に聞こえてきたのはピアノの音だった。

そしてそのあとに流れた歌声に、慶介は衝撃を感じた。

歌っていたのは一人の少年。

自分と年端もいかなない年齢のだ。

だが、クールビューティーを形にしたような力強い歌声は、慶介のハートをつかむのに難しくはなかった。

歌の意味も分からない慶介だが、その歌に力をももらったような気がした。

(かっこいい。すごい、本当にすごい)

そして慶介は、その歌手がDKであることを突き止めた。

その後はまるで人が変わったかのように明るくなり、元の輝きを取り戻すことができた。

そしてお小遣いを前借する形で、H&Pの演奏するCDを買い漁った。

CDプレーヤーはプレゼントでもらっていたため、それで毎日CDが壊れるのではないかというほど聞き込んだ。

ライブにも顔を出すこともあった。

(もし、もし願いがかなうのなら……DKと友人になりたい)

同い年であることを突き止めた慶介は、心なしかそう願いを込めるようになった。

だが、自分のどこかでは、それは一生叶わないとあきらめていた。相手は天才と呼ばれたバンドリスト。

そして自分はただの子供。

どう考えても、友人になれるような身分ではなかった。

『皆に知らせがあるー!』

演奏が終わった後、DKはそう声を上げた。

(なんだろう?)

『私は今日を以って、"H&P"の活動を休止する!!』

その言葉に、会場中がどよめいた。

それは慶介も同じことだった。

慶介にとつて、DKやH&Pの存在は命の恩人というものにまでシフトしていたのだ。

『だが、私はいずれここに戻る! そして、皆にまた演奏を届けよう!』

その時まで、待つてくれるか!!』

そのDKの言葉に慶介も一緒になって返事を返す。

慶介はDKが戻るのを待つことにした。

そして何気なく選んだ高校。

『あのー、いい加減反応してくれてもいいでしょうか?』

『なに?』

そのこのクラスでもう一人の男子と出会った。

(あれ?)

一瞬違和感を感じた者の慶介は、それを頭の片隅に追いやった。

だが、それは桜高祭で再び浮かび上がる。

『それでは、優勝の要因を審査員に話してもらいましょう!』

『私は、今はいない男子の歌声がすごくよかったからだと思います』

数人の審査員の生徒は一樣に浩介の歌声を評価した。
それで慶介は確信した。

(やっぱり、DKは浩介だったのか！)
そして確信したと同時に、慶介は自分の願い事がかなっていることを喜んだ。

だが、思い知った。

自分がやらなければいけないことを。

(DKの……浩介の秘密は俺が守る！)

そして行ったのがありもしない嘘の苦情だった。

DKとして演奏をしていた楽曲『命のユースティティア』

それを新歓ライブで演奏を知った慶介は、それから浩介の正体がばれることを危惧した。

そのために、無理やり変更させたのだ。



「——ということだ」

「なるほど。だから曲目を変えさせたのか」

慶介の独白を聞き終えた僕は、全てのことには納得がいった。

あれは妨害ではなく、慶介なりの助けだったのだ。

「浩介って、俺のことを信頼してるか？」

「まあな。性格があれだが、悪いやつではないことくらいは分かっているから」

慶介の問いかけに、ほぼ即答で答えた。

「それじゃ、彼女たちのことは？ 信頼してるのか？」

「……………」

その答えに、僕は何も答えられなかった。

「俺は、プロの大変さを知らないから何も言えないけど、まずは信じてみたらどうだ？ 俺みたいなやつでも功なんだから、受け入れてくれるはずだ」

「……………ありがと。もう眠いから寝るよ」

「そうか。お休み、浩介」

僕は逃げるように慶介にそう告げる。

それから少しして、隣から規則的な寝息が聞こえるようになった。

僕はそれを見計らって布団から出ると、布団を畳んで部屋を後にする。

そしてそのまま家を出た。

「信じているか……か」

自宅に戻った僕は、自室の窓から空を眺める。

（口では信じているとか偉そうなことを言ってたけど、結局のところ僕は唯たちのことを心の底から信用していなかった）

「本当に、最低だな」

自分でかくしておいて何が”自分の何を知っている”だ。

知らなくて当然だ。

話していないのだから。

「慶介は、僕がDKだと知っても普通に接してくれた」

嘘をついていないのは僕だってわかる。

慶介は、DKを……高月浩介という人間を受け入れてくれたのだ。

ならば、唯たちはどうだろうか。

彼女たちは僕がDKであることを知ったらどうという反応をするだろうか？

（例えば、ムギみたいに普通に接してくれるだろうか？）

ムギが普通の人ではないことは唯たちも気づいているはずだ。

毎日持つてくるお茶菓子、そして大きな別荘。

どう考えても普通ではないことに気づくはず。

それでも、唯たちの接し方は変わらない。

ならば、もしかしたら

「いや。今更どんな顔して合えばいいんだ？」

あのような暴言を吐いてしまった僕が、どの面を下げて軽音部のメンバーのところ顔を出すんだ？

「本当、僕って最悪」

夜空の景色がにじんできた。

そして頬に熱いものが伝う。

「驚いたな。この僕にもまだ」悲しい」という感情があったなんて」
頬を伝うものをぬぐいながら僕はそうつぶやいた。

「……………そういえば、昔にもこんなことがあったな」

僕はふと過去のことを思い返した。

それは、かなり昔の魔法連盟でのこと。

当時新入職員だったその人物は、とてもまじめな好青年だった。

そんな彼が、突然爆発した。

『自分のことを何も知らないのに、勝手なことを言わないでください！』

そう言っつて勝手に帰っていった彼は、ひと月ほど無断欠勤した。

連盟長の方から、彼に働く気があるのかを聞くようにとの命を受け

た僕は、彼の住む家を訪ねた。

家から姿を現した青年に、僕は門前払いをされるかと危惧したが、
青年は追い出すどころか土下座をして謝ってきたのだ。

人の目にも付きやすい場所で土下座をさせるのもあれだったため、
とりあえず家の中に入れてもらった僕は、彼から事情を聴くことにし
た。

彼が告げたのは意外なことだった。

彼が爆発した原因、それは自分の親がかなり優秀な魔法連盟職員
だったことを隠したことに対する負い目からだだった。

私には理解ができなかったが、なんでも彼はその職員の隠し子だっ
たらしく、決して口外しないようにと言われていた。

彼は、自信に抱えた大きな秘密が知られないように必死に隠してい
た。

それを同僚に隠していることがとてもつらかったと彼は語ってい
た。

私は、彼にすべてを語るように告げて自宅を後にした。

その後、その職員には隠し子であることを認めるように通達を出

し、認めなければ懲戒にすると脅しをかけた。

そして彼は同僚に謝罪をし、今でも法務課で働いている。

「そう言うことか」

その事案を思い返した僕は、今自分に起こっているすべての事態の理由がわかった。

僕が感じていた“孤独感”。

それは、僕がDKであることを隠している負い目からだった。

おそらく、罪悪感のようなものを孤独感だと勘違いしていたのだろう。

「つまりは、これの解決策はあの時と同じく、話すことか」

僕にはそれしか解決の手段はなかった。

ただ謝るだけでは、一時しのぎにしかない。

しっかりと理由も彼女たちに説明をする義務が僕にはあるのだ。

「まったく、本当に僕は馬鹿な男だ」

僕は改めてそうつぶやくと、ベッドに潜り込む。

そしてすぐに眠りにつくのであった。

全ての決着は明日の放課後だ。

そして迎えた放課後。

僕は横にあるギターケースを手にする。

「行くのか、浩介」

「ああ。僕はもう悩まない」

そんな僕に声を掛ける慶介に僕はそう答えた。

「がんばれよ」

「ありがとう。慶介」

僕は応援をしてくれる慶介に、二つの意味を込めてお礼を言った。

一つは、“僕の力になってくれてありがとう”と言う意味。

もう一つは“僕を受け入れてくれてありがとう”という意味。
そして僕は軽音部の部室に向かった。
全てを終わらせるために。

「……………」

ここに立つのも久しぶりの気がする。

そう思えるほど、僕はここに来ていなかった。

タイムリミットを明日に控えたこの日。

僕は覚悟を決めてドアを開けた。

「あ……………」

「こ、浩介」

「ひ、久しぶりだな」

僕に気づいた軽音部メンバーの全員がぎこちない反応をする。

それは当然のことだった。

「と、とりあえず座りなよ」

「お、おいしいお菓子を用意してるの」

律の言葉に続くようにムギが言う。

僕はギターケースを近くの壁に立てかけた。

「いや、その前に皆に話しておきたいことがある。実は——」

「それなら私もあるんだ」

僕の言葉を遮るように、律は声を上げると席を立って僕の前まで歩

み寄ってきた。

「ごめんなさい！」

「えっ!？」

いきなり頭を下げて謝ってきた律に、僕は固まってしまった。

「ち、ちよつと！ 頼むから頭を上げて！ というより、みんなは悪く

ない!! 悪いのはすべて僕だから！」

慌てて頭を上げさせようとする僕に、律は凄まじい勢いで反論して

きた。

きつと、かなり思いつめていたのかもしれない。

「いいや、違う。きつと私たちが気づかないうちに——」

「いや、本当にみんなは悪くないから」

「違う!」

「二人とも、まずはおちついて、ね?」

いつまでも終わらないと思われた言葉の応酬も、ムギの仲裁で何とかおさまった。

(まさか向こうから謝ってくるなんて、予想もしていなかった)

悪くもない皆に謝らせたことに、罪悪感に駆られそうになるが今はそれを頭の片隅に追いやる。

今必要なのは罪悪感に駆られることではなく、事情を説明することだ。

「この間の一件、本当に申し訳なかった。こつちが勝手に思い込んで皆を傷つけるようなことを言ってしまった。許してほしい、この通り」

僕は頭をほぼ直角に下げた。

「もちろんこれだけで許してもらえとは思っていない。皆の気が済むのであれば土下座でもなんでもする」

「いやもういいから」

「浩君、頭を上げてよ」

律に続いて唯が僕に頭を上げるように言ってくれた。

(本当にやさしいんだね)

僕にはもつたいたい人たちだった。

「それに、浩介がぶちぎれたのだから私たちが練習をちゃんとしてなかったからで——」

「それは違う!」

律の言葉を遮るように僕は叫んだ。

練習をしていないことは危惧していたが、それは絶対に違った。

「そのことについて、僕はみんなに聞いてほしいことがある」

僕はそこでいったん区切った。

「僕がああなった要因にもつながるから」

「分かった。でも、立ちながらもあれだから座って話さない?」

滞の提案に、僕は頷くことで答えた。

そして全員で再び席に着く。

こうして座ってみると、どこか懐かしく感じてしまう。

「はい、どうぞ」

「ありがと」

ムギが入れてくれた紅茶をとりあえず口に入れた。

「僕はみんなに隠していることがある」

「待て待て、隠していることと怒ったことと何の関係が？」

「関係があるから話している」

僕の言葉に異論を唱える律に、僕はきっぱりと言い切った。

もうすでに自分の気持ちの整理はついていた。

だからこそ自信持つて言えるのだ。

それこそが一番の原因なのだ。

「僕は厳密には違うけど外バンをしているんだ」

「外バン？」

「外バンっていうのは、違う場所のバンドの方で活動をすることを言うんです。分かりやすく言えば掛け持ちみたいなものです」

言葉の意味が分からなかったのか首をかしげる唯に梓がわかり役説明してくれた。

「だから浩介先輩、外バンはできないって答えたんですね」

「でも、外バンをしていることくらい別に隠さなくても」

確かに律の言うとおりだ。

“普通であれば” だけだ。

「いや、隠さなければいけないかったんだ。そうしないと色々と問題が起こりそうだから」

「問題って、どんな？」

今度は斜め右側の席に座るムギが訊いてきた。

「えっと、マスコミが大挙して押し寄せてくるのと、ここがちよつとした騒ぎになること……かな？」

考えられる問題を上げてみたが、後者は確実に起こるような気がした。

「いや、私に訊かれても」

「ついつい漣の方を見ながら話してしまった。」

「それで、その外バンをしていることを隠していることとぶちギレたのと何の関係が？」

「隠していることの後ろめたさを、自分は一人だという孤独感と間違えて捉えていて、そこでドカんと」

「僕の説明に、全員が首をかしげている。」

「当然だろう。」

「僕でさえ、この原因はよくわからないのだ。」

「ただ、根本的な原因はここにあるというのには確信している。」

「だから、今は良くてもこのままだとまた同じようなことが起きかねない」

「浩介の言っていることが本当だとすると、確かに根本原因を失くさない限りまた起こりそうな気がする」

「僕の言葉に頷い着ながら漣は相槌を打った。」

「だから、全てを話す。僕が活動している外バンの名前は」

「名前は？」

「唯が首をかしげながら聞いてくる。」

「僕はもう一度覚悟を決めた。」

「これですべてが終わり、そして始まる。」

「その一言を口にする。」

「“hyper-prominence”というバンド」

「はいぱー」

「ぷろみねんす？」

「僕の告げたH&Pの正式名称に、唯と律は首をかしげていた。」

「とはいえ、」

「……」

「その名称はファンだったら確実に知っているのです、漣と梓は固まっているが。」

「ん？ 漣、どうしたんだ？」

「あずにゃん、大丈夫？」

そんな二人の様子に気づいた律と唯がそれぞれに声を掛けていく。
「も、もももももしかして……」

一番早く正気に戻った漕が今まで以上に凄まじいドモリかたで僕を指差す。

「そこではメインボーカル兼、リードギターを担当している」

「ということは……」

「へ？ どういうことなの、律ちゃん」

担当パートを告げただけで律ですら理解してしまったようで目を見開かせている。

唯一分かっていないのは唯だった。

「そのバンドで名乗っている名前は、DK」

『……………』

そして、音が消えた。

全員が固まっている。

「は、はは……」

一番最初に正気に戻ったのは意外にも梓だった。

「こ、浩介先輩。冗談はやめてくださいよ」

「はい？」

引き攣った笑い声を上げながら注意してくる梓の反応に、僕は目を瞬かせた。

色々なパターンを予想したが、まさか冗談だと思われることになるとは思ってもみなかった。

「いや、否定されるとかなりショックなんだけど」

(まあ、ちょうどいいか)

ある意味一番入りやすい形になってくれた。

そう言う意味では結果オーライとも言えなくない。

「だったら、その証拠を見せるよ」

「証拠？」

「どんなどんな？」

僕の言葉に、律は興味津々に、唯はわくわくと言った反応を示した。

まあ、後者はムギもだけど。

「そりや、ミュージシャンなんだから、あれに決まってるでしょ」

そう言つて僕は先ほど立てかけたギターケースを指差した。

「演奏で、証明するよ」

僕はそう告げるや否や、席を立ってギターケースを開ける。

「あ、唯先輩と同じ Gibson 社製の ES—339」

さすがと言うべきか、梓は見ただけでギターの種類がわかったのか口を開いた。

「皆、そこで聴くの？」

席に座つたまま

僕のその一言の後の唯たちの行動は素早かった。

一瞬のうちに長椅子の方に移動しているのだから。

僕はその様子を苦笑しながら準備を進める。

(まさかここで僕が全力での演奏を披露するなんて)

人生本当に何が起こるかわからない。

そして一通りの準備を終えた僕は、観客である唯たちの方へと向き直る。

僕の前には長椅子に座っている唯と梓と漣の三人、そしてその後ろに立つ律とムギ。

「それじゃ……行くよ」

僕のその言葉に、唯と律にムギは興味津々に僕がこれからしようとすることを見守る。

そして漣と梓は緊張の面持ちで僕を見ていた。

そんな視線を受けながら、僕は肩に掛けてあるギターの弦を弾いた。

それが演奏を始める合図だった。

演奏する曲は既に決まっていた。

曲名は『Throu gh The Fire And Flame
s』

ドラムやリズムギターにベースがないので少々迫力は無くなってしまいが、今回はギターの演奏を見せることなので、問題はないだろう。

そのためボーカルもなしにしている。

さらにフルで演奏すると6、7分という長さになるため、短めにアレンジをする。

これでも5、6分ぐらいの長さになってしまおうが。

それはともかく、まずは小刻みなストロークから入る。

所々音を伸ばしては再び小刻みなストロークをするのを繰り返していく。

後ろめたいのがなくなったからか、それとも別の何かのおかげか、数日間のブランクを感じさせない演奏をすることができた。

途中で速弾きに近い速度で弦を弾きながらサビに入る。

最初は音を伸ばし、中盤で素早くコードを切り替えていき終盤では再び音を伸ばしていく。

そしてイントロ部分を弾き終わると、数秒間の無音状態が訪れる。それが間奏の合図。

最初は簡単にストロークさせていったん音を伸ばしていく。

そしてまた簡単に数回ストロークして音を伸ばす。

そこからギターソロの始まり。

ピックを小刻みにストロークさせ、左手はせわしなく弦を抑える。

そしてさらにスピードを上げていく。

ここから先は完全に速弾きの領域だ。

今、この場は火に包まれたステージと化す。

炎の中で緊迫感に満ちた場所にいる。

それが最初に僕が感じたこの曲の印象だった。

所々にスクラッチを入れたりビブラートを効かせたりする。

「うへひょっ！」

誰かのすつとんきよな声が聞こえたような気がした。

そしてソロパートの終盤、ラストスパートをかけていく。

速弾きで弾いて音を上げてまた速弾きをしていく。

そして間奏が終わった。

あと残るのはサビの部分だけだ。

だが、最後の箇所は速弾きが待ち構える。

そこを僕は冷静にさばいていく。

半ばタツピングのような感じになりながらも、僕は演奏を終えた。演奏をし終えた僕はある意味清々しささえ感じていた。

「それで、どうかな？」

『……………』

「つて、また固まってる」

呼びかけても反応がないので、僕は苦笑するしかなかった。

「浩介」

「な、何？」

律の呼びかけに、僕は数歩下がりがりながら返事を返した。

「すっごくうまい！ わたしや感動した!! さすがは浩介だ！」

「あ、ありがとう」

褒めてるのかそれとも別の意味があるのかわからなかったが、とりあえず前者の方で受け取ることにした。

「私も感動しちゃった」

「さすが私の師匠！」

「ありがとう。というより師匠って……………」

唯の“師匠”という言葉に違和感を感じたものの、高評価だったことに胸をなでおろした。

残る問題は、いまだに呆然としている二人だろう。

「……………ほ」

「ホットケーキ？」

一番初めに正気に戻った梓があげた言葉を取って、唯が食べ物の名前を口にした。

「ほ、本物のDKだ！」

「うわあ!？」

いきなり大きな声を上げながらこつちに向かつてくる梓に、僕は思わず後ろに下がった。

そのあとは軽音部が混沌と化した。

「どうして、こんなところ!?!」

「とても感動しました！」

「私ずっとファンだったんです！」

「サインください！」

まるでマシンガンのごとく梓から声を掛けられ続けた。

「すごい、あずにゃんがものすごい興奮してる」

「やっぱりこれが一番よね」

そんな僕たちの様子に、お揃器の表情を浮かべている唯と楽しそうに微笑むムギ。

「頼むから、そんなところでのんきに言ってないで助けて！」

「待ってください！ まだいっぱいお話ししたいことがあるんですっ
!!」

目を輝かせながらのマシンガントーク攻撃に、僕は梓と追いかけて
こをする羽目になった。

色々と疑問の残ることはあるが、これはこれでめでたしめでたし

……なのか？

ちなみに、これは余談だが

「濡ちゃん、大丈夫？」

「あー、こりや完全に気絶してるな」

呆然と固まっていた濡は気を失っていることが判明した。

そして、梓との追いかけてこが終わったのは山中先生が梓を落ち着
かせた時だった。

その後しばらく、尊敬のまなざしを梓から送られることになった。

こうして僕は、DKⅡ高月浩介を隠していることを終わらせ、僕が
DKであるということを皆に打ち明けることで、新たな始まりを迎える
こととなった。

2年生編 『秘密』
第47話 発端

「ん……」

とある場所で、彼女たちは目を覚ます。

「ここは……」

起き上がった少女はあたりを見回す。

「あ、憂に律ちゃん隊員に滯ちゃんに、ムギちゃんとあずにゃん！ 起きてー！」

最初に起きた少女……唯は周囲で地面に倒れている友人たちを起こしていく。

「何だあ？」

「あ、お姉ちゃん」

「……ううん」

唯の呼びかけに次々と目を覚ます律たちは、目をこすりながらあたりを見回す。

「ところで、唯」

「何？ 滯ちゃん」

啞然とした様子で声を上げる滯に、唯は首をかしげながら尋ねた。

「(ここはどこ?)」

「(ここって……どこだっけ?)」

周囲を見渡した唯が首をかしげる。

「おいおい、ここは浩介の家の近く……」

唯の言葉に、苦笑しながら律は口を開くが言葉の途中で、自分の置かれた状況を理解したのか言葉を失った。

「何もありませんね」

「芝生と木々だけ」

梓と紬が周囲にある物を口にする。

彼女たちがいたのは見知らぬ草原のような場所だった。

「どうしてこんなことに……」

「えっと、あれは確か律が……」

憂の疑問に、指を顎に添えながら漣はきつかけとなった出来事を思い返した。

「よおし、全員そろったな」

「あの、これはどういう意味ですか？」

マックスバーガーに、集まっていたのは律と漣、さらに紬と唯に梓の軽音部メンバーに憂を加えた6人だった。

彼女たちは、律の集合命令によって招集されたのだ。

「非常に重大な話があるんだ」

「律ちゃん隊員、その重大な話とはっ？」

真剣な声色で告げる律に、唯は手を上げながら律に問いかけた。

「うむ、それは……」

「そ、それは？」

梓は緊張した面持ちで続きを聞く。

「浩介の実家がどういふ場所なのかを探るといふことだ！」

『……………』

力強く告げられた律の言葉に、律以外の全員が言葉を失った。

「あ、あれ？ 反応が悪いぞー」

「いえ、とても重要な話かと思っていたところに、浩介先輩の実家を探るなんて言われたもので」

呆れたような表情を浮かべながらも、梓はおそらくこの場にいる律以外の人が心の中で考えているであろう言葉をつぶやいた。

「だってさー、この間の浩介絶対になにかを隠している様子だったぜ」

「もしそうだとでもさすがにプライベートを探るのは良くないと思う」

漣は気乗りしない様子で律に止めるように促した。

「だったら、これから浩介の家に行って、尋ねるのはどうだ？ それなら探っていることにはならないだろ？」

「ま、まあ。それだったら」

「良いんですか!？」

律の提案に、漣はしぶしぶと頷いた。

「よおし、そうと決まったらいざゆかん！ 浩介の家へ！」

「「おー！」」

律の呼びかけに唯と紬の二人が手を上げて応じた。

ちなみに、この時間帯はちょうど人の来店が途切れていたらしく、来店者はそれほど多くはなかった。

そのためそれほど視線を集めることはなかった。

とはいえ、多少の視線を集めることになったのだが。

「本当にいいのかな？」

「浩介さんだったら許してくれるよ……たぶん」

一気に浩介の家に向かうことが決まっている流れになっている唯たちをしり目に、首をかしげている梓の疑問に唯が苦笑交じりに応じた。

最後の部分がとても自信なさげだったのはご愛嬌だろう。

(というより、浩介先輩だったら絶対に怒るような気がする)

梓はなんとなく感じていた。

そんなこんなで、彼女たちはファーストフード店を後にすると、浩介の家へと向かうのであった。

浩介の家に向かう途中、律の携帯から着信音が鳴り響いた。

「あ、浩介からだ」

連絡した相手が分かった律が漏らした言葉に、全員が固まった。

「浩君どうしたんだろう?」

「まさか、私たちが行くこうとしているのを察した……とか?」

唯の疑問に滯が答える。

「とりあえず出てみるか……もしもし」

電話に出た律は平静を装い電話口の浩介に声を掛ける。

『律か、ちよつと聞きたいことがあるんだけど』

「何だ？」

一体何を聞かれるのかと律はひやひやしながら浩介の言葉を待つ。

『今どこにいるんだ？』

「い、今か!? えつと、学校近くのファーストフードだよ。憂達も一緒だよ」

浩介の鋭い問いかけに律は一瞬声が上づるが、何とか答えることができた。

『どうして憂も一緒なんだ？』

「偶々近くであつてさ。そう言う浩介はどこにいんのさ？」

どうやら怪しまれていないようで、律はほつと胸をなでおろしながら、逆に浩介に尋ねた。

『僕か？ 今実家に帰省する準備中だ』

「いつごろ出ていつごろ戻る予定？」

浩介の返事に、律は浩介の予定を聞く。

『あと10分ぐらいしたら。明後日には戻ってくるけど……何か急用でもあつたら今聞くけど。たぶん実家ではそういう余裕ないと思うし』

「い、いや特にはないかな。あはは」

『そう？ それじゃ、また後日。土産話でも聞かせるよ』

律の返事に若干首を傾げた様子で口にする浩介は律の“分かった”という返事で電話を切った。

「そ、それじゃ行くぞー」

「合点であります！」

深いため息をもらしながらも、さらに進むことを選んだ律はそのまま浩介の家に向かって足を進める。

「あれ？」

「どうかしたのか？ 梓」

しばらく歩いていたらところで、何かが気になったのか首をかしげる梓に、漣が問いかけた。

「あ、いえ。なんでもありません」

「そう？　ならいいんだけど」

首をかしげながらも漣は梓から視線を逸らした。

「どうしたの？　梓ちゃん」

「うーん、何か今違和感のようなものを感じただけど……気のせいだと思う」

声を抑えて問いかける憂に梓はそう答えるが、気のせいだと自己完結した。

浩介に申し訳ないことをしているということが、そういう風を感じさせたのかもしれないと考えたからだ。

「律ちゃん、浩介君まだ家にいるって？」

「10分ほどしたら出るとか言ってたから、まだ大丈夫だと思う。念のために時間を……って!」

紬の問いかけに、時間を確認しようと携帯を取り出して待ち受け画面を確認した律が固まった。

「どうしたんだ、律？」

「律先輩？」

その尋常ではない様子に、漣たちが何事だと声を掛ける。

「み、見てくれ！」

「……？　ただの待ち受けじゃないか」

律が全員に見えるようにかざしたのは、ただの待ち受け画面だった。

「違う！　電波の方！」

「アンテナって……圏外?!」

画面上部に表示されている“圏外”という文字に、漣は目を見開かせた。

「あ、私のもだ！」

「私も！」

次々に自分の携帯を確認した唯たちが同じ状態であることを告げ

た。

「トラブルか？」

「こんな場所で、圏外になるなんて話聞いたことがないぞ」

「そこは閑静な住宅街。」

「どう考えても圏外になるという事態は普通は起こりえない。」

「あ、今度は画面が！」

「な、なにこれ」

唯の言葉に、再び画面に視線を向けると今度は待ち受け画面が砂嵐になっていった。

「何だかホラー映画みたいな展開だな」

「ひ!？」

律が漏らした言葉に、漣が悲鳴をあげそうになる。

「な、なあ。戻らない？ さすがにこれは変だって」

「そ、そうだな。戻るか」

「私も！」

漣の提案に口々に賛成の声を上げる。

「梓ちゃん……」

「だ、大丈夫だよー」

不安げな憂に梓は安心させるようにつぶやいた。

そして全員が元来た道に戻ろうとした時に、それは起こった。

「うわ!？」

「な、なんだ?!」

突如として、彼女たちの足元に光が発光し始めたのだ。

それは唯たちを囲むように円状になっていく。

「お姉ちゃん!」

「憂〜!」

全員が体を寄せ合う。

そして光はさらに輝きを増し、やがて

『きゃあああああああ!!!』

閃光のような光を発した。

その光はすぐになくなったが、そこには唯たちの姿はなかった。

「そうだ。思い出した」

「どうしよう」

「それよりも、ここはどこなんですか？」

周囲を見渡すが、薄暗いため草原のような場所以外を把握することは不可能だった。

「これって、神隠しというものじゃないかしら？」

「かみかくし？」

紬がつぶやいた言葉に、唯が首をかしげる。

「それって、確か行方不明になった子供が数日してひよつこりと姿を現す……みたいなの？」

「だというんなら、ここは神様の世界？ そんな馬鹿な」

濡の言葉に、律は軽快に笑い飛ばした。

常識で考えてありえないのだ。

「それじゃ、ここはどこだって言うんですか？」

「そんなの、携帯で調べれば簡単に……って、切れてる」

携帯電話を取り出した律は、電源が切れていることに気づいた。

「あ、私のもだ」

「私のも」

「私のも切れてる」

唯や紬たちも自分の携帯を家訓するが、全員画面が真っ暗な状態であり電源が切れていた。

唯たちは首をかしげながらも電源を入れなおそうとするが、電源が付く兆しはなかった。

「ダメだ、電源が見つからない」

「そんな馬鹿な」

「どうしよう」

絶望的な状況に全員はその場にとどまることしかできなかった。
「皆！」

そんな時に立ち上がったのは唯だった。

「歩こう！ 歩けばきつと誰かに会えるよ！」

「このままここにいるよりかは断然いいか」

「そうだな……」

唯の提案に律に続いて滯も頷く。

「梓ちゃん、寒くない？」

「あ、はい。大丈夫です」

薄着の姿だった梓に氣遣う紬に梓はお礼の言葉を口にする。

その場所の気温は肌寒くはなくちようどいい暖かさだった。

「よっしゃ、氣合入れていくぞー！」

『おー！』

こうして、律たちの冒険が始まった。

しばらく歩いたころだった。

「な、なんだ!？」

突如けたたましく鳴り響く警告音に、律が驚きの声を上げた。

「やっぱり向こうの方に人がいるんですよ！」

「そうですね。人がいなければ、こんな音なんてしませんし」

梓の言葉に憂も頷いた。

「それじゃ、走ろう！」

「あ、待ってって唯！」

唯は音のする方に走り始めた。

それを追う滯と律に梓と憂の4人。

「唯ちゃん、何か言ってるわ！」

「ほえっ？」

だが、鳴り響いている警告音に交じって何かが聞こえるのを紬は聞き逃さなかった。

全員は足を止めるとその音に耳を澄ませる。

『警告！ 国内に6名の不法侵入者を検知しました！ 襲撃に備えてください！ 職員は至急指定エリアへ向かい不正侵入者を確保せよ』

！ 繰り返す——』

「不法侵入者6名って……」

「私たちのことじゃないよね？」

男の物と思われる逼迫したアナウンスに、全員そこから動けなくなつた。

「6人というのも、偶々かもしれないよ」

「そ、そうだよね、梓ちゃん」

梓の希望にも違い考えに憂も賛同した。

「いいや。ここは私たちだという可能性で進めたほうがいいかもしれない」

「だとすれば、結論は一つ」

滯の言葉に、律は即座に対応策を導き出していた。

「逃げろ〜！」

唯が叫ぶのと同時に、全員が一目散に駆け出す。

追っ手がどこから来るかわからずに知らない場所で逃げるのは、まさに恐怖だった。

どれだけ走ったのか、唯たちは追っ手の気配を感じていない。

「律ちゃん！ あそこ」

「お、明かりだ！」

「これで話が訊ける！」

そんな中、唯が見つけた明かりのようなものに、全員の表情が明るくなる。

「よおし、ラストスパート！」

律はその一言でさらに走る速度を速めた。

「あ、あのすみません！」

「お嬢ちゃんたち、そんなに慌てた様子でどうしたのかね？ まさか……」

滑り込むように初老の男性に声を掛ける律たちの様子に、男性は驚いたような表情を浮かべながら問いかけると、何かを思いついたのか目が見開かれた。

「ッ!?!」

「遭難者かね！」

まずいと思った唯たちだったが、男性が告げたのは全く予想だにしない言葉だった。

「遭難者？」

「そうじゃよ。この辺りは時頼迷い込んでしまうものが多くての。この列車はそう言った者たちを入口まで送り届けるためのモノなんじゃよ」

よくは分からないが、どうやら自分たちは遭難者として認識されているようだ。

それを知った唯たちはほっと胸をなでおろす。

「さあ、早く御乗りなさい。あと数分で出発じゃよ」

「あ、でもお金が……」

「お金は不要じゃよ。これは救済用なのじゃから」

財布を取り出す律に、男性は笑顔で告げると、彼女たちを中へと迎え入れる。

「うわあ、まるで普通の特急列車みたい」

中に足を踏み入れた梓が感想を口にする。

周囲はネズミ色で覆われており、向かい合うように背もたれの部分と座る部分が緑色の座席は向かい合うように配置されている。

「あの人たちも遭難者みたいですね」

「あ、本当だ」

憂の視線の先には次の車両に続くドアの近くの座席に腰掛けている、何やら話をしている二人組の男の姿があった。

「私たちも座りましょう」

「そうね」

梓の提案で、全員が座席に腰掛ける。

ちようど6人掛けだったようでぴったりとおさまった。

「お、動き出した」

それから数分後、列車はゆっくりと動き出した。

窓の外の光景は相変わらず芝生などしかない。

「これからどうする？」

「入口って言ってたぐらいだし、到着すれば人がたくさんいるかもしれないし、そこで考えよう」

「そうね。人がいれば話を聞くことだってできるかもしれないし」

漣たちは今後の行動について話し合っていた。

「あれ、列車が」

「止まりましたね」

そんな最中、列車は突然走るのを止めてしまった。

「停車駅？」

「お弁当とか売ってるのかな？」

「いや、ここどう見ても駅じゃないし。というより、唯は少しは自重しろっ」

漣と唯の言葉に、律が相槌を打つ。

「何だか、前の車両が騒がしいみたいですけど……」

「どうし——」

前の車両から音が聞こえてくる中、唯が「どうしようかな」と言い切ろうとした時だった。

「連盟だ！ 動くなっ！ 全員両手を上にあげろ!!」

「な、なに!?!」

「し、知らないけれど従ったほうがいいな」

一斉に雪崩れ込むように車両に入ってきた数人の男たちに、唯たちは驚きのあまり叫びそうになるのをこらえた。

律に言われるがまま全員は両手を上にあげた。

すると、男の一人はサングラスのようなものをかけた。

「ファッションショー？」

「そんな雰囲気じゃないだろっ」

声を潜めて唯のボケにツッコみを入れる律。

「もしかして、追っ手じゃないかな？ どこかの刑事みたいな入り方だったし」

「……………」

漣の言葉に、全員が固まった。

その間も男は周囲を見渡していく。

まるで人を探しているかのように。

その様子が唯たちに追っ手であるという確証を与えるのに十分であつた。

そしてサングラスをかけていない男が唯たちの方へと足を進める。徐々に自分に近づいてくるのに比例して、彼女たちの鼓動が速さを増していく。

そしてすぐそばまで来た時だつた。

「不法侵入者2名確保!!」

「「「ええ!?!」」」

律たちは思わず声を上げて驚きをあらわにした。

見れば、男たちが捕まえていたのは最初から乗っていた二人組の男たちだつたのだ。

「くそ! バレてないかと思つてたのに!」

「ほら来い! どこから来たか、あと4名の行方を吐いてもらうぞ!!」

そのまま男たちは二人組の男性を引っ張るように連れて行つた。

「……………助かつたの?」

「……………見たい」

その光景を見ていた律の疑問に、漣が答える。

『はあ……………』

そして一様にその場に力なく座りこんだ。

そんなこんなで、列車は再び動き出し始めた。

「そう言えば、あれだけ走つたのにまったく疲れませんね」

「言われてみればそうだな」

徐々に夜が明けていき周囲の景色が見えるようになったころ、梓が思い出した様子で口を開いた。

唯たちが走つた距離は、フルマラソンと同じくらいの長さだ。

しかもそれをノンストップでだ。

「なんだかおかしいよね」

「あつげらんかと言っけど、こゝろって本当にどこなんだ?」

律たちを乗せた列車はそのまま走り続ける。

それから数十分経った頃だった。

「あ、着いたみたい」

駅らしい場所で列車が止まったのを確認した澁が声を上げる。

「外に出るか」

そして唯たちは、列車を後にした。

『ありがとうございますました』

「礼儀正しい嬢ちゃんたちだね」

初老の男性を見つけた唯たちは、一様に頭を下げてお礼の言葉をかけると、軽快に笑いながら感心した様子で応じた。

「あの、すみません」

「何かな？」

そんな中、唯が前に出て男性に尋ねる。

「浩君の家はどこですか？」

「こうくん？ 誰かね？」

唯の問いかけに、あだ名だと分からなかったようで首をかしげながら聞きかえす男性。

「唯先輩、ちよつと黙っててください」

「ぷうー」

「あの、高月浩介っていう人なんですけど」

梓によつて一刀両断された唯が頬を膨らませるのをしり目に、梓が言い直した。

「……………お嬢ちゃんたち、坊ちゃんの知り合いかね？」

「は、はい。そうです」

一瞬男性の表情が険しいもの変わったが、それもすぐに元に戻り人当たりのいい笑顔で聞かれたため、梓もそれに答えた。

「それだったら、ここをまつすぐ進むと見えてくるはずだよ。分からなければいったん降りて誰かに尋ねてみるといい」

「は、はあ…………」

「ありがとうございます」

目を瞬かせる律に変わって憂がお礼を述べた。

「とりあえず、この道をまつすぐ進めばいいんだよね？」

「私に聞いても……とりあえず歩こう」

こうして唯たちは浩介の家へと向かうこととなった。

のだが……

「うん、迷った!」

「威張るなっ」

腰に手を当てて胸を張りながら告げる律の頭に、漑の鉄拳制裁が下る。

「でもおかしいですよね、言われた通りに言っているはずなのに」

色々なところで道を尋ね、その通りに行動をしたもの一向に浩介の家にたどり着くことはなかった。

「まさか、嘘をついているとか!？」

「何で嘘をつく必要があるんだよ?」

「そうですよ。きつと私たちが間違えてるんですよ」

律が漏らした言葉に、漑が異論を唱え、それに梓が続く。

「とはいえ、ここはどこだろう?」

「住宅街みたいだけど」

律たちが迷い込んだのは閑静な住宅街だった。

列車を降りた時に上っていた日はすでに空高くまで上がっていた。

「仕方がない、こうなったら道を聞くか」

「そうだな」

「そうですね」

律の言葉に全員が頷き、近くにあった家のインターホンを押そうとした時だった。

「うわひゃ!？」

「きゃあ?!」

「な、なんですか?!」

突然目の前に何かが落ちてきたことに驚きを隠せない唯たち。

その何かはゆっくりと立ち上がった。

落ちてきたのは人だった。

「兄貴! どうやらまいたようでっせ」

その一人の青髪のとサカヘアの男の呼びかけに、金髪の男は立ち上

がりながら満足げに頷く。

「よし、少しここでおとなしくするぞ。おい山！ あれを持ってこい」
「はっ、熱々のコーヒーであります！」

金髪の男の呼びかけに答えるように、黒髪の男から差し出された
コーヒーの入った紙コップ。

どう見ても熱いのは確かであった。

「馬鹿野郎！ こんな暑い日に熱いコーヒーを入れるな！ 冷たい食
い物をよこせと言ってるんだ！」

「ははあっ！ ただいま！」

金髪の男に怒鳴られた黒髪の男が用意したのは氷だった。

（な、何あのコント）

（あの人たち、どこから来たんだろう？）

律たちは三人組の男のやり取りを、呆然と見ていた。
声を出そうにも出すことができない。

そんな雰囲気の中、平然と声を上げる人物がいた。

「あははは！ あずにゃん、とても面白いコントだよ！」

「いえ、唯先輩。たぶんコントじゃないと」

大きな声で笑いながら近くにいた梓に声を掛ける唯に、梓はいろい
ろな意味で哑然としながらも返した。

「おいこら、ガキ共！」

『ひゃ、ひゃい!?!』

突如浴びせられた罵声に圧されるように、唯たちは姿勢を正して返
事をした。

「俺たちは見世物ではないぞっ！」

『す、すみませんでした!!』

勢い良く頭を下げて謝る彼女たちを見て満足したのか、視線を外し
た。

「兄貴、早く逃げないと死神が！」

「っと、そうだったな。とっとと逃げるとするか」

横にいた青髪の男の言葉に金髪の男は逃げようと動き出した時
だった。

「それは諦めてもらおうか」

「「ッ!」」

突然頭上から降ってきた声に、三人組の男たちは固まった。

「あれ、この声どこかで……」

一方の唯は、その声に心当たりがあるのか頭を抱えて考え込み始めた。

「私の目からは決して逃れることはできない。どこまでも追っていき捕まえてやる」

そんな彼女たちの頭上から、再び声が掛けられる。

そして、その声の主はゆっくりと目の前に降り立った。

「え?」

「はい?」

「嘘……」

「ど、どうして?」

その姿を見た唯たち全員が信じられないとばかりに口をパクパクと動かしていた。

「浩君?」

「あ? 誰だ、この私をそのような馬鹿げた呼び方で呼ぶの……は」

唯の呼びかけに応じるように鋭い視線を向けた人物こそが、唯たちが探し続けた高月浩介であった。

その姿は黒いマントを羽織り、手には西洋風の剣が手にしてあった。

「どうして、お前らがここにいるっ」

唯たちにかけられたのは、驚きに満ちた浩介の言葉だった。

第48話 きっかけ

僕が巻き起こした騒動から数週間ほど経った。

騒動直後は、色々トタバタしたが現在では何とか落ち着きを見せた。

特に僕の立ち位置ではかなり問題になった。

とはいえ、結局のところ今まで通りにということで話はまとまった。

まあ、これで良かったのは隠し事をしているという自責の念からの解放ぐらいだろう。

良くないこととして、尊敬のまなざしで見続けられるようになったことと、言つとき再び滯の人見知りが悪化したことぐらいだろう。

今では滯の方は元に戻ったが、

「浩介先輩！ おはようございます!!」
「っ!?!」

突然後ろからかけられた凄まじく大きな挨拶の声に、僕は思わず転びかけた。

「おはよう梓。今日も元気だね」

「はいー」

嫌味で言つたつもりが、梓には効果が全くなかったので、僕はストレートに言うことにした。

「それはいいんだけどね、いきなり背後から大声で名前を呼ぶのはやめてくれないかな？ 恥ずかしいし心臓に悪いから」

「あ、す、すみません！」

僕の注意に、梓は申し訳なさそうに頭を下げた。

(ちなみに、このやり取りをするのはこれでもう数回目なんだけど) 梓の姿を見ていたら、その言葉を口にするのは躊躇われたので、心の中に留めておくことにした。

「お、今日もやってるなお二人さん」

「おはよう。律に滯」

そんなやり取りを終えたところでかけられた声に、僕は振り向きな

がら挨拶を交わす。

「おはよう浩介」

「お、おはよう、浩介」

時よりもることはあるが、これでもかなり少なくなった方だ。

「おはよう、浩君！」

「おはよう。唯が寝坊をしないなんて珍しい……今日は槍でも降ってきそうだな」

いつもは寝坊もしくは遅刻ギリギリに起きる唯が、余裕で間に合う時間帯に起きることに僕は心の底から驚きをあらわにした。

「むー、私はいつも寝坊するわけじゃないよ」

「そうだな。まあ、夏休みだしな」

今は学生にはとてもうれしい夏休みだ。

学校がある日は寝坊するくせに、ない日になると早起きするタイプの人は少なからずいるものだ。

「そうなんです！……まあ、時計を見間違えたただけだけど」
(だと思った)

唯の場合はかなり特殊なタイプだけど。

そして僕たちは部活の練習をするべく学校へと向かうのであった。

「今日は何の曲を練習するの？」

「今日は新歓ライブでお披露目できなかつたこの曲を集中して練習するつもり」

ムギの問いかけに僕は、カバンに入れておいた楽譜一式を取り出すとそれぞれに配っていく。

「えっと『Happy?! Sorry!!』？」

それは、新歓ライブで本来演奏をするはずだった曲だ。

「全てのパート難易度はやや高いけど、リズムギターの難易度は高め

という感じになってる」

「あ、本当です。ギターのソロが」

Tabを読んでいた梓はギターソロの方の譜面を見つけてつぶやいた。

「そこを決めればかなりかつこよくなるけど、失敗すれば目も当てられなくなる」

「まさに、紙一重っていうやつだね！」

「いや、それを言うなら綱渡りだぞ」

唯に指摘をする律だが、どちらも微妙にずれていた。

「私にできるでしょうか？」

“できるか” じゃなく、“できるように” するんだ。最初にできなくて当然。これをできるようにしていけるかがカギだ」

不安そうに声を漏らす梓に、僕は背中を押すように答えた。

「そうですね。やってみます！」

「いよおし、それじゃ通しで行くよー！」

話がまとまったところで、部長の律が号令をかける。

そしてリズムコールの後に、演奏が始まるのであった。

「ふはあ……燃え尽きた〜」

「満足じゃ〜」

しばらく練習をしたところで、律と唯が長椅子にもたれかかる。

(この時期にドラムはきついからな)

もはや夏真っ盛りのこの季節。

楽器を演奏する軽音部は、運動部並（もしくはそれ以下）の体力を消費する。

体を全体を動かし続けて演奏する必要があるドラムにとってはまだに灼熱地獄だろう。

この部室にはエアコンなどは存在しないため、空調は窓を開けて風通しを良くしておくことくらいしかない。

「アイステイヤーが入ったわよー」

そんなムギの一言で、ティータイムとなった。

「そう言えば滯とアズサってどんな手紙を浩介によこしていたんだ？」

「ぶツ!」

律の問いかけに、滯と梓が吹き出しそうになった。

「何？ 藪から棒に」

「だってなんて書いているのか気になるじゃん！」

「私もー」

僕の反応に、律が答えた。

それに唯も乗る。

「や、辞めてくれー!」

「私も絶対に嫌です!」

相当恥ずかしいのか、それとも聞かれることに抵抗があるのか、二人はすごい勢いで阻止してきた。

「ファンレターの内容は当人の許諾がない限り決して口外はしない。それが僕の流儀。早い話が諦めろ」

「ちえー」

「浩君のケチ」

僕がはつきりと断ると、二人は頬を膨らませながら毒づく。

「とはいえ、どうしてペンネームを本名にし続けたのかを聞きたいと思ってたから、応えてくれる?」

「え?」

僕の突然の問いかけに、二人はほとんど同時に固まった。

「ペンネームって何?」

「えっと……偽名みたいなものかしら」

唯の疑問はムギに任せることにした。

「わ、私は途中から変えたらおかしくなりそうだったので」

「私は何だか負けたような気がしたから」

「……………」

梓の理由には納得がいったが、滯の理由には納得ができなかった。

一体何に負けるとでもいうのだろうか?

「誰と勝負してんだ？」

律の意見に僕は心の中で頷いた。

そんなこんなで、いつもの軽音部の時間は流れていく。

ある時は先日のテレビの話。

そしてまたあるときはお菓子談義等々。

話声が尽きることはなかった。

(よくここまで話のネタがあるよな)

そんな彼女たちを見ながら、僕は心の中でつぶやいた。

「ん？ 誰の携帯だ？」

そんな話に水を差したのは無機質な携帯の着信音だった。

「私のじゃないよ」

「私のもです」

「私のも」

「私も違うぞ」

鳴り響く携帯の着信音に、それぞれが確認をするが違っていたよう
だ。

「私でもないということとは……」

一気に視線がこちらに集まる。

そんな中、僕は携帯電話を取り出す。

「僕だったみたい」

僕はそう声を上げると携帯を開いて相手の名前を確認した。

『本部』

そこに表示された文字に、僕は反射的に席を立っていた。

「どうしたんだよ？ いきなり立ち上がったりなんかして？」

「浩介先輩？」

そんな僕の様子を訝しむようにみている律たち。

「ごめん、ちよつとだけ失礼するね」

僕は笑顔を取り繕いながら部室を後にする。

いまだに携帯はなりっぱなしだ。

僕は着信ボタンを押すと、それを耳にあてる。

「はい、高月です」

『おー、浩介か』

電話口から聞こえてきたのは、いまや威圧感に満ち足りている連盟長である父さんだった。

「連盟長、何か御用でも」

『お前に折り入って頼みたいことがある』

声をできる限り小さくして用件を尋ねる僕に返ってきたのは、そんな言葉だった。

(何だか無性に嫌な予感がする)

今すぐ電話を切ったかったが、そんなことをする雰囲気ではなかったため、僕は話を先に進めることにした。

「それは何ですか？」

『一度こっちに戻ってきてくれ』

僕の問いかけに、連盟長は用件を非常にシンプルに告げた。

「それはなぜです？」

『お前にしかできないことがあるからだ』

理由がわからずに尋ねた僕は、さらに理由がわからなくなってきた。

「仕事だったら、いつものようにここに飛ばしてもらえれば――」

僕の仕事には罪を犯した人の量刑を確定させたり(ここでいうところの検察の起訴か不起訴かを決めるようなもの)、そのほかの資料の精査をしたりなどがある。

それらは連盟の方から毎回ダンボールで送られてきており、それを僕の方で処理してから送り返すという形をとっている。

『そうはいかないんだ。最近職員共の気が弛んできていてな。お前が戻ってくれば連中も少しは気を引き締めるはずだと思っただ』

「僕は気つけ剤ですか？」

あまりにもひどい理由に、僕は連盟長に反論してしまった。

『そう言わずに頼む。たまには親孝行でもしろ』

「分かりました。それで、いつ戻れば？」

ため息を漏らしながら、僕は領くと連盟長に機関に日程を尋ねる。

『できれば明日に戻ってきてもらいたい』

「明日ですね、わかりました」

『よろしく頼む』

僕が同意したのを確認して、連盟長は電話を切った。

「携帯に電話してきたと思っただらこれか」

連盟長のある種の職権乱用にも思える呼び出しに、僕はため息をつく。

「お、誰からだっただんだ？」

「親から」

部屋に戻った簿上に投げかけられた疑問に、僕はため息をつきながら応える。

「どうかしたの？」

「いや、明日実家に戻って言われてね。なんでも親孝行をしろとさ」
ムギの問いかけに、不満を漏らしながらカップに入っている飲み物を飲みきった。

「あれ、浩君って一人暮らし？」

「そうだよ。親と喧嘩して家出して今の状態になっているだけだから」

僕は何度目になるかわからない嘘を口にする。

「お金とかはどうしてるんだよ」

「実家の方から毎月支給されてる。定期的に帰ることを条件に」

「一体どんな家系何だ?！」

僕の答えに、律が目を見開かせてツツコンでくる。

「普通の家系だよ。ということ、明日実家に帰るから練習をするんだっいたら5人でしておいてもらっていい?」

「それは構わないけど、いつぐらいに戻ってこれそう?」

滯の問いかけに、僕は顎に手を添えて考える。

(まあ、2, 3日くらいを見ておけばいいか)

「長くても三日で帰る予定」

「何だか大変そうですね、浩介先輩」

「あはは。もう慣れた」

梓の言葉に苦笑しながら返した。

「そう言えば、浩介の実家ってどこにあるんだ？」

「あ、私も気になる」

「えっと……ちよつと遠いところだよ」

律とムギの問いかけに、少しだけ考えた結果出たのが今の答えだった。

我ながらももう少しましな答えはない物かと思ってしまうが、これ以外に思い付かなかったのだから仕方がない。

「それって、どこなんだよ」

「それよりも、練習をするよー！」

「うわ、逃げた！」

律の追及に話題をそらした僕に、澤からツツコミが入ってしまった。

「まあ、練習でもすつか」

「そうだね！ 律ちゃん隊員」

律の一言で、僕たちは練習を再開することとなった。

(何とかうまくごまかせたか)

僕は、何とかごまかせたことに胸をなでおろした。

だが、この時の僕はまだ知らなかった。

ちやんとごまかせていないということ。

知っていればあのような事態には発展しなかったはずだ。

翌日、僕は自宅のリビングで故郷に戻る準備をしていた。

僕は携帯電話を取り出すと、律の番号を呼び出して電話をかける程なくして律が電話に出た。

「律か、ちよつと聞きたいことがあるんだけど」

『何だ？』

いつもの様子で聞きかえしてくる律に、僕は本題を告げることにし

た。

「今どこにいるんだ？」

『い、今か!? えっと、学校近くのファーストフードだよ。憂達も一緒だよ』

どこか慌てた様子で応える律だったが、気になったことは一つ。

『どうして憂も一緒なんだ？』

『偶々近くであつてさ。そう言う浩介はどこにいんのさ？』

(まあ、律に無理やり遊びに繰り出されただけか)

無理やりかどうかは知らないが、似たようなものだろうと解釈することにした。

そして今度は僕が律の問いかけに答える番だった。

「僕か？ 今実家に帰省する準備中だ」

『いつごろ出ていつごろ戻る予定？』

(昨日話したような気もするけど)

首をかしげる僕だったが、確認はとても重要なことなので、もう一度答える。

「あと10分ぐらいしたら。明後日には戻ってくるけど……何か急用でもあったら今聞くけど。たぶん実家ではそういう余裕ないと思うし」

『い、いや特にはないかな。あはは』

「そう？ それじゃ、また後日。土産話でも聞かせるよ」

律から「分かった」という返答があつたのを聞いた僕は、そのまま電話を切った。

「ふう……どうやら、こっちに乗り込もうとしている様子はないみたいだし大丈夫かな」

僕が確認したかったのは、律がここに乗り込んでくるか否かだった。

一応カーテンなどを閉め切ってブレーカーを落したりしてはいるが、それでも家の前にまで来られれば僕が魔法を使うところを見られる可能性は非常に高くなる。

それを防ぐための確認だったが、律たちは僕の家から少し離れた場

所にいるようなので、どう急いでも僕の準備が終わるまでに家の前に来ることは無理だろう。

そう考えた僕は再び準備を再開させる。

今の僕は、故郷にある実家で常に着ていた黒を基調とした式服に身を包んでいる。

床には前日に書き上げた魔法陣（雑巾で拭けば簡単に消せる）があった。

この魔法陣は転送する際の効果範囲でもある。

簡単に言えば、魔法陣内全てが転送魔法の効果範囲になるということだ。

その魔法陣の周りには僕の顔の高さの位置に、複数のホロウインドウが展開されている。

「これより転送支援用の魔法陣の最終チェックを行う。クリエイト、隔離結界を展開」

【了解】

僕の指示にクリエイトが返事を返すと魔力が一気に膨れ上がる。

空間自体を切り取る隔離結界は、これから行うことに巻き込まれる人が出ないようにするための安全策だ。

僕はそれをこの家を基準に半径1kmの範囲にかけていく。

【マスター以外の生命体との隔離に成功しました】

「それじゃ、チェックの方が」

僕は杖状になっているクリエイトを魔法陣の上に置く。

すると、クリエイトはゆっくりと宙に浮かび回転を始めた。

一回転をしたところで再び地面に落ちた。

【魔法陣の歪み等の問題は確認されませんでした】

「よし」

クリエイトの報告に満足げに頷いた僕は、魔法陣内に入ると右手を開くようなしぐさをして手元にコンソールを展開させた。

【最終確認完了。転送システム、スタンバイ】

『ID、媒体、生体反応の一致を確認しました。転送システム受け入れを開始します。お気を付けて』

展開されているホロウインドウの一つが言い切るのと同時に閉じた。

それは、通信用のウィンドウだった。

故郷の方と、こちらの方で確認作業を行いながら準備を進めていくことによつて、トラブルをなくすことが目的だ。

【時代の流れですね。転送魔法もここまで進化するとは】

「まあね。一昔前のように」魔法陣展開後に人が出入りしただけで次元空間をさまよう」なんていう事態はもう無くなったからね」

クリエイトの言葉に、僕も相槌を打つ。

少し前までは、世界を跨いだ転送はそれぞれが魔法使いの魔法で行っていた。

当然だと言われればそうだが、この魔法には重大な欠陥があった。

それが、転送用の魔法陣を展開させた後に、一人でも出入りすると魔法陣が不安定となり次元空間をさまようようになってしまったことだった。

これによつて、故郷では数千人の魔法使いが今でも消息不明となっている。

【ですが、マスターの開発したこの”VS”を利用した転送システム”で、そう言った問題はすべてクリアされましたけどね】

”VS”とはゲームで言うところのA対Bという意味ではない。

正式名称はヴァーチャル・システム。

とある世界で流行っていたエンターテイメントの番組内で出ていたものをモデルに作ったシステムだ。

説明すると日が暮れるので簡単に言うと、魔法と科学という相反するものを混合させた魔法科学の結集であり、これを使えば簡単な転送魔法（物を召喚したり取り寄せたりすることも含む）に通信、簡易照合等々が誰でもできるのだ。

「でも欠点はあるけど」

その欠点が、“周囲にいる無関係の人を転送の対象にしてしまう”ことだった。

普通の転送なら問題はないが、今回のような世界を跨ぐ転送の場合

に発生するのだ。

このために、転送システムを利用する際には隔離結界を展開することが義務付けられていたりするわけだ。

閑話休題。

(よし、そろそろか)

話も一通り終わり、僕は杖状のクリエイトを背中のように触れさせる。

すると、まるで何かに固定されたように、クリエイトは僕の背中にくっついた。

魔法使いの持つ媒体は、非使用時の場合は、元の形にするか今のように背中に装着する方法がある。

どうして背中にくっつくのかはいまだにわかってはいない。

魔力の供給が関係あるのではという理論も出ているが、真相は定かではない。

「転送システム、スタート」

僕の言葉と同時に、目の前には『teleport starting』の文字が表示された。

そして僕は光につつまこまれる。

一瞬の浮遊感を感じた僕は、気が付けば薄暗い部屋のような場所にいた。

そこがどこなのかを知っている僕は、前に足を進め出入口と思われる扉を開けて外に出た。

まぶしい光に、一瞬目を覆うがすぐに慣れた僕はさらに前に足を進める。

「おかえりなさい、高月大臣」

「ただいま。というより、大臣って呼ぶのやめてくれない？」

僕を出迎えたのは、ここの建物で一番偉い人にあたる人物だった。

僕はその人に呼び方の訂正を求めた。

「いえいえ。大臣を呼び捨てにしたら、私の首が飛びますゆえ」

「……………さいですか」

返ってきた言葉は“却下”だった。

「連盟長より、連盟長室に来るようにとの通達が出ています。」

「分かった。至急向かう故、そのように言伝をしておいてもらえらる？」

僕の言葉に、“かしこまりました”と返事をして僕の前から去っていった。

「それじゃ、僕も向かいますか」

そして僕は連盟長の待つ連盟長室へと向かうのであった。

第49話 再会と拘束と

「はあ……久しぶりの我が家だあ」

数時間ほどして、僕は実家でもある高月家の自室へと戻っていた。

自室の広さは約20畳。

二階建ての構造となっている。

一階は作業用の机などの物が置かれているいわゆる作業部屋のよ
うな場所。

二階はベッドやクローゼットなどが置かれた寝室のスペース。

「何が”がんばれ”だ」

僕は二階の余裕で三人寝れるぐらいの大きさのベッドに横になりながら、天井を見上げて連盟長のありがたいお言葉に対する不満を口にする。

魔法連盟に向かった僕はいの一番で連盟長室を訪れていた。

そこはアンティーク調の家具が配置され、威厳のある部屋となっていた。

その奥の方に鎮座している男こそが、僕の父親にしてこの世界を治める魔法連盟の連盟長”高月 宗次朗”なのだ。

「法務課大臣高月浩介。ただ今帰還しました」

「うむ、帰還ご苦労」

僕の言葉に立ち上がりながら労いの言葉をかけてくる連盟長。

「それで、用件は？」

「これからもがんばれ」

なぜか応援の言葉を掛けられた。

「……………それだけ？」

「それだけだ」

当然だと言わんばかりに答える連盟長に、僕は怒鳴りたくなるのをこらえて連盟長室を後にした。

そしてその足で自宅に戻って今に至る。

「軽く寝ておくか」

夕食の時間までかなりある。

どうせ母国に帰ってきたのだから、ゆっくりと過ごしたいところ。

(まあ、ここでそれを求めるのは酷だけど)

唯たちの世界の方がよっぽどゆっくりと過ごせると言っても過言ではないほどのレベルでここは気が抜けない。

いつどのようなことが起きても不思議ではないのだから。

そんなこんなで、僕の意識はゆっくりと闇の中に飲み込まれていくのであった。

「ッ!!」

食事と入浴を終え、早めに眠りにについていた僕の意識を覚醒されたのは、けたたましく鳴り響くサイレンの音だった。

『警告！ 国内に6名の不法侵入者を検知しました！ 襲撃に備えてください！ 職員は至急指定エリアへ向かい不法侵入者を確保せよ！ 繰り返し———』

同時にアナウンスも聞こえた。

「つたく、かんべんしてくれよ」

思わず愚痴がこぼれたが、僕は素早く仕事着でもある黒一色の服を着こむと、高月家を後にした。

「大臣！」

「状況は！」

警察の魔法使い版でもある魔法連盟に到着した僕は、法務課に入ると状況を問いかける。

「6名分のエネルギーパターンを採取し終えました！」

「失礼」

職員が展開したホロウインドウを覗き込んで、不法侵入者のエネルギー

ギーパターンを確認した。

エネルギーパターンとは一種の生体反応のようなものである。どのような生命体であれ、無意識的にエネルギーを外部に放出している。

このエネルギーは魔法使いであればだれでも認識することができ

る。逆に、魔力のない者はそれを感知することすらできない。

尤も時よりそれを“オーラ”として認識できることもあるらしいが。

そして、魔法使いにとってエネルギーパターンは重要な手掛かりとなる。

理由としては、それを基にどこにいるかを探ることができると、相手の情報が手に入るからだ。

相手の種族はもちろん、魔法使いか否か、その実力など、取得できる情報は膨大だ。

「不法侵入者は魔法使い。能力レベルはSS！」

エネルギーパターンを確認した僕の言葉に、周囲がどよめく。

能力レベルは魔法使いの強さを示す基準である。

尤も、これは“魔力のみ”で判断しているため、本当の実力は未知の範囲でもある。

もしかしたら、それよりも上か下の実力しかない可能性もある。

ちなみに、僕の場合はSSS+だったりする。

閑話休題。

「落ち着け。相手がどのような奴でも、確保しなければならない。それが我々の使命だ。まずは同行の確認だ。至急作業にかかれ！」

『はッー！』

僕は全員に指示を出し、ホロウインドウをいったん閉じてから大臣室に向かう。

「エネルギーの行動ルート割出」

大臣室に入って再びホロウインドウを展開するとサーチをかける。

「見つけたっ！」

程なくして結果は出た。

エネルギー反応は、スピードを上げながらこちらの方に向かっていく。

「このルートは確か……」

僕は横の方に別のホロウインドウを展開させる。

その画面に表示させたのはこの世界の外部エリアの地図だった。

外部エリアとは、この世界のエリアではあるが、草原などしかない場所のことだ。

このエリア内では魔力が打ち消されるために、魔法が使えなくなる。

とはいえ、魔法科学であるVSの転送システムは使えるので、職員たちは簡易転送をしながら搜索に当たれるのだ。

「この反応がある場所は……遭難者救助用の列車か！」

不法侵入者の移動経路がわかった僕は、すぐさま通信を入れる。

「至急遭難者救助用の列車に向かえ！ 不法侵入者はここにいる！」

『了解！』

急いで指示を出した僕は、通信ウィンドウを閉じながらほっと一息つく。

(よりによって遭難者救助用の列車を使ってくるとは)

僕は心の中でため息をつく。

遭難者救助用列車とは、文字通り外部エリアに迷い込んだ者を管轄エリア（連盟のすぐ近くの場所）に送り届けるための物だ。

運賃も無料で、一日に二往復する列車だ。

救済用に用意した列車を犯罪に使用されるとは、何とも皮肉なことだ。

「どうした？」

『不法侵入者2名を確保しました』

通信を告げるアラームが鳴ったため、ホロウインドウを開いて通信を開いた僕に、犯人確保の一報が入った。

「後の4名は？」

『逃走したのか見当たりません』

「引き続き捜索に当たれ」

僕は捜索の指示を出して通信を切る。

「とりあえず、不法侵入者の一味は確保できたわけだから良しとするか」

何故侵入したのか、仲間の名前や連絡先を聞き出せれば全ては解決だろう。

「取り調べはこっちの管轄ではない。あいつらを信じよう」

取り調べの結果はこっちの方に来ることになっている。

後は不法侵入者の量刑をこちらで決めるのみだ。

僕はどうせ来たのだからと簡単な事務作業をしていく。

「こんなもんだろ」

事務処理を終えた僕は、体を伸ばして固まったであろう筋肉をほぐしながら一息ついた。

(少し仮眠でもとるか)

時間にして午前10時。

まだ職務中だが、小一時間程度であれば仮眠をとれるはずだ。

「大臣！」

「何？」

そう思って仮眠を取ろうとしていた僕のところに、職員が血相をかいて入ってきた。

「強盗傷害事件です！」

「何!? 詳細は？」

職員から告げられた事件の知らせに、今度は僕が驚く番だった。

「商店街通りにある雑貨屋です。金2万円を強奪して住宅街方面に逃走中! 追跡班からの応援要請です」

「分かった。すぐに向かう。パッチを開いて出撃準備を」

「了解」

(やれやれ、本当にのんびりできないな)

部下の職員に指示を出しながら、僕は心の中のため息を漏らす。

とはいえ、そういう仕事なのだから仕方がないわけだが。

(家に戻ってもだれもないし。ちようどいいか)

一応家族には両親と妹が二人ほどいるが、妹は特別任務でこの世界を出ているようで、しかも両親ともに仕事の為に家にはいなかった。今戻っても寂しいだけなので、体を動かしていた方がいいだろう。「よし、行くか」

そして僕は強盗犯の追跡に向かうのであった。

「見つけた……その三人、今すぐ逃走をやめ降伏しろ！ さもなくば五体満足は保証しない！」

「げ、死神!!」

「おい速度を上げろ!!」

少し前を絨毯に乗って飛んで逃げている男たちを見つけた僕は、三人組の男に降伏を告げる。

だが、男たちはさらに速度を上げた。

「おーけー。それが答えか。ならばお望みどおりに」
僕は空中で止まり右手の指を鳴らす。

それだけで僕の周囲に大量の魔法弾が出現した。

「合計1万発の魔法弾で、地獄の逃走を楽しみな。フェルティア！」
僕は1万発の魔法弾を一斉に男たちに向け放った。

それらを絶妙なコントロールで躲すが、一発が絨毯に命中した。

それは爆発して乗っていた三人を空中に放り出す。

「はいはい。確保確保」

ここまでくれば流れ作業だ。

後は拘束で移動して男たちを拘束すれば終わる。

「なっ?」

だが、そこで予想外のことが起こる。

男たちは魔力エネルギーを放出したのだ。

意味が無いようにもみえるが、魔力エネルギーを一斉に放出すると

風のようなものが発生する。

その風量は放出する魔力の量に比例して増していく。

「くそっ。見失ったか」

つまりは、魔力放出のせいで当初予定していた落下地点が大幅にずれたということになる。

(魔力の探知もできないか)

しかも魔力反応の追跡も魔力放出によって阻まれてしまうため不可能。

とはいえ、

(この角度であの量の魔力を放出したということは……)

それも計算してしまえば大体の落下地点を予想できるわけだが。

僕は計算して予測した落下地点の方に向かっていく。

「えつと……いた」

予測した方向の近くに経っている三人組の男と、6人の姿もあった。

「兄貴、早く逃げないと死神が！」

空にいるのになぜか聞こえてくる三人組の一人の声に、僕は彼らに聞こえるように声を張り上げる。

「それは諦めてもらおうか」

その声に、全員が反応した。

「私の目からは決して逃れることはできない。どこまでも追っついていき捕まえてやる」

そして三人組の男の前にゆっくりと降り立った僕は、鋭い視線を男に向ける。

「えっ？」

「はい？」

「嘘……」

「ど、どうして？」

後ろの方から驚きの声が聞こえる。

どこかで聞いたような気もするが、今はそれはどうでもいいだろう。

重要なのは目の前の男どもを捕まえることだけだ。

「浩君？」

そんな中に掛けられた言葉に、僕は一気に気分を壊されたような感じになった。

「あ？ 誰だ、この私をそのような馬鹿げた呼び方で呼ぶの……は」

緊迫した雰囲気を書壊した不埒者に、鋭い視線を向けながら振り向いたところで、思わず固まった。

「どうして、お前らがここにいるっ」

そこにいたのはここに入るはずのない唯たちだった。

しかも憂もいる。

「そ、それは……」

「というより、これって何かの特撮か？ カメラはどこにあるんだ？」

僕の問いに答えようとするが躊躇った様子の唯をしり目に、律が質問を浴びせてきた。

「それはだな……っ!!」

突然の予期せぬ事態に、僕は答えに困っていると、背後にいた男たちが動きをみせた。

危険を察知した僕は地面を蹴り宙に浮かぶことで危険を回避する。

「……………」

そして地面に着地したところで、さらに事態は悪化したことに気づいた。

「おっと、動くなよ！ 動くところいつの命はない！」

「ッ！」

「ヒイツ!？」

「き、きやあ!？」

三人の男たちが唯と漣と梓の首元にナイフを突きつける。

「お姉ちゃん!？」

「漣!!」

「梓ちゃん！」

三人の悲鳴に、残った三人が叫び声に近い声を上げる。

「……………要求は？」

「そんなもん、言わなくてもわかかってるだろ？」

「俺たちを見逃すツス」

「男たちの要求は逃がすこと。」

「実に単純な要求だった。」

(ここで見逃すと嘘をついて捕まえるか)

ふとそんな案が思い浮かんだ。

だが、そうそう簡単に事が運ぶだろうか？

「おっと、うそをつこうと思っても無駄だぜ。途中までこいつらも連れて行くからな！」

(だろうと思った)

となると方法は一つ。

ちなみに、見逃すという選択肢はない。

凶悪犯をみすみす取り逃がすようなことはできない。

最悪の場合は彼女たちを犠牲にしても捕まえるつもりだ。

だが、できればやりたくはない手段。

彼らの為に、犠牲にするのは何が何でも避けたいことだ。

犯人を取り押さえることしかない。

だが、方法だ。

(すり抜けを使うか……でも、あいつらが指示に従うか?)

すり抜けとは僕が編み出した魔法攻撃の一つ。

今のように人質に一般市民がされている場合の攻撃手段だ。

簡単に言えば、関係ない人には魔法のダメージを0にし、当てたい

人物にのみダメージを与えさせるものだ。

そのための絶対条件は、非対象者(つまりは人質にされている人が)の五感の一つを奪わなければいけない。

それは“視覚”

人間が得る情報の大半が視覚だ。

それを奪うことによつて魔法の情報は大幅に奪われてしまう。

尤も、人によつては第六感や心眼等々を使ったりするのだが。

そこを利用して、魔法の威力を犠牲に独特な細工を加えて“視覚が奪われた非対象者には魔法が無効化される”という効果が発生する

ようになったのだ。

それはともかく。

視覚を奪うには目を閉じさせることが重要。

この世界の人であれば、魔法というものを知っているので、大抵は素直に目を閉じてくれる。

だが、魔法を知らない人は目を閉じることを拒む。

知っているのと知らないのでは恐怖の度合いが違うのだ。

尤も、目の前にナイフを持っている人がいて目を閉じろと言われて閉じるバカはいないが。

そう言う意味では、このすり抜け魔法はあまり使い物にならない魔法の一つでもある。

閑話休題。

だとするとこのこされた方法は、

(目に見えない速さでけりをつけるか)

それしかなかった。

幸いにも、僕には俊足という音速には遠く及ばないがほとんどの人の目を欺かせるほどの素早さを誇る技がある。

それを駆使すれば三人組の男の背後に回ることなど、造作もないことだろう。

「さあ、どうするんだ!」

「僕の答えなど最初から決まっている」

男の言葉に答えた後は一瞬だった。

俊足を利用し一気に男たちの後ろ側に回り込んだ僕は、あらかじめクリエイトにかけておいた“触れたものを眠らせる”睡眠魔法を利用し三人の身体に触れさせていくことで強制的に眠らせた。

「あ、あれ?」

「た、助かった……のか?」

次々に地面に崩れ落ちた、人質の滞りたちは突然の出来事についていけない様子だった。

「浩介! これはいったいどういうことなんだよ!」

僕は律の問いかけに答えずに、彼女たちに背を向ける。

「大臣！」

程なくして最初から追跡をしていた追跡班の職員達が駆けつけてきた。

『だ、大臣!?!』

職員が発した言葉に唯たちが驚きの声を上げた。

「強盗傷害の被疑者だ。拘束しろ」

「協力感謝します！」

一人の職員が礼を告げると三人の男たちを拘束し連行していった。残されたのは唯たちと僕に数人の職員だった。

「浩介先輩。教えてください。一体これはどういうことなんですか？」

「浩介君」

「大臣、この者たちは？」

僕に声を掛け続ける梓と唯に怪訝そうな表情を浮かべながら僕に確認してくる。

(仕方がない)

僕は心を鬼にして彼女たちに向き直る。

「こ、浩介君？」

僕の異変に真っ先に気づいた唯が一步後ずさる。

「君たち、ここでは見かけない顔だが、パスポートは持つてるか？」

「ぱ、パスポートってなんだよ？」

「あの、浩介さん。貴女はいったい何者なんですか？」

僕の問いかけに、戸惑いながら応える律と憂。

当然だ、彼女たちはこの世界に入国するパスポートなど所持していない。

つまり彼女たちがここにいるのは、

「不法入国の現行犯だ。拘束しろ」

犯罪ということになる。

「お、おいどういことなんだよ！」

「浩介君！」

「着手っ!!」

僕の言葉に驚きながら声を上げる律たちを遮るように、僕は数人の職員に彼女たちの拘束を命令した。

「ちよ、ちよつと離せつて！」

「い、いやっ！ 助けてください、浩介先輩！」

「静かにしろ!!」

数人の職員に取り押さえられ、抵抗するものの人間の……しかもただの女子がかなうはずもなく一瞬にして彼女たちは魔法連盟へと連行された。

「私はあとで戻る。彼女たちの取り調べを終えたのち、至急こちらに報告するように。それと取り調べに行き過ぎが無いよう監視をしろ」
「はっー！」

僕の指示に職員は応じるとそのまま連盟の方に去っていった。

「はあ……」

それを確認した僕の口から出てきたのは、ため息だった。

「いつかばれるのではないかと思っただけだね……」

運命とは時に残酷なものだと感じた。

（本当はこうするべきではないんだが）

僕の立場を考えれば、それは決して許されない行動。

だからこそ、彼女たちを捕まえさせたのだ。

（でも、罪に問われることはない）

僕の予測が正しければ、彼女たちはお咎めなしになる可能性が高い。

それを公式的に認めさせるために拘束させたのだ。

尤も、もう一つの理由もあるが。

「問題は、職員の連中が取り調べで行き過ぎたことをしないかだ」

彼女たちは“軽音部所属の高月浩介”の面しか知らない。

そんな彼女の言動は、職員たちにとっては侮辱にも等しいはずだ。

ここでは僕は“カリスマ法務課大臣、高月浩介”として通っている。

彼らにとっては僕は一種の憧れの存在らしい。

尤も僕自身は、そのような価値があるとは思ってもいないのだが。

つまり、何が言いたいのかというところ取り調べに当たっている者たちが唯たちに危害を加える可能性が高いということだ。

それだけは決してあつてはならない。

監視を命じたのは二人。

何事もなければ、いいのだが。

「本当に、僕は爆弾だよな」

再びため息をつきながら、僕は魔法連盟へと戻っていくのであった。

第50話 真実と覚悟と

連盟に戻った僕はとある取り調べ室にいた。

「全く、あんた達は」

「も、申し訳ありませんでしたあ!!」

僕が呆れながら口を開くと、二人の男たちはきれいな土下座をしながら謝ってきた。

彼らは唯たちとは別に不法侵入をしてきた人物だ。

動機はあきれたことに大人になるためにだとか。

この世界にはそう言った風俗街が存在するため、そこに向かおうとしたようだ。

だが、この世界に入るには明確な理由を上げなければならない。

その理由をかくのが恥ずかしく、今回のようなバカげた犯行に及んだらしい。

「今回は嚴重注意だが、次やったらこれでは済まないぞっ!」

「お前たちは、ブラックリストに登録され5年間はいかなる理由だろうと、入国は許可されない。だが次ここに来る際は、恥ずかしくても本当の理由を書くこと。別に個々の職員が見て笑うわけではないだから」

「本当に申し訳ありませんでした」

職員と僕の言葉に、二人の男は謝り続けていた。

「とりあえず、明日に強制送還します」

「頼む」

職員の口にした対応に頷いた僕は、取調室を後にした。

この1フロアはすべて取調室だ。

先が見えないほどの長さを誇る通路にあるドアの数は100を超える。

「高月大臣」

「なんだ?」

しばらく歩くと、後ろの方から女性職員に呼び止められた。

「不法侵入した6名の取り調べが終了しました。こちらが供述調書で

す」

「そうか。ありがとう」

唯たちの取り調べの結果が記された書類を受け取った僕は、女性職員に労いの言葉をかける。

「それと、一番最後のページに書かれている二名の職員が……」

「何かしたのか？」

「は、はい。その、被疑者を恫喝しておりました」

僕の鋭い視線での問いかけに、女性職員は一步後ろに下がった。

「そうか。報告ありがとう。君は自分の職場に戻りなさい」

「はい。失礼します」

女性職員は僕に一礼すると、そのまま去っていった。

(やれやれ、本当にするとはな……)

とりあえずその二名の処分は非常に重くしようと考えながら、僕は大臣室へと戻るのであった。

「……それぞれ一致しているな」

大臣室で供述調書を確認した僕は、感想を漏らす。

言っていることはばらばらだが、内容はすべて同じだった。

僕の家に向かおうとしたところで、謎の光に包まれて気づいたら外部エリアの草原にいた。

そして遭難者救助用の列車に乗って管轄エリアまで向かい、そこから確保された場所まで向かった。

それが、大体的内容だった。

(それにしても、唯たちまで隔離結界に取り込まれたんだ?)

まず最初の疑問がそれだった。

隔離結界は、空間を捻じ曲げることによって僕以外の生命体と隔離する結界だ。

つまり、どうあがいても入り込むことは不可能。
中から出られても、外から入ることは不可能なのだ。
それができてしまったことが、一番の疑問だった。

(生命体……なるほど、そう言うことか)

少し考えたところで、僕はその理由がわかった。

とんでもなく最悪な偶然による理由だが。

「とはいえ、被害者を拘束するわけにもいかないな」

僕は右手を開くようなしぐさをして通信用のホロウインドウを展開する。

相手は、この連盟にある牢獄の看守の責任者だ。

『はい、どうされましたか?』

「現在牢獄に入っている平沢唯ら6名を解放し、応接室に案内しろ。
彼女たちは犯罪被害者であることが判明した」

『了解しました。至急解放し、応接室に案内します』

僕は責任者の返答を聞いて“頼む”と告げるとウィンドウを閉じるのであった。



「……………」

そこは魔法連盟の地下にある牢獄。

薄暗く、明かりは壁についているろうそくの明かりのみだった。

時より水の滴る音が響き渡る。

そんな場所に、唯たちは監禁されていた。

「取り調べ終わったんだ」

「うん。すごく怖かった」

最後に戻ってきた唯に、律は思いつめた声色で話しかけた。

「わ、私も、浩介先輩のことを訊いたら……グス」

「……………」

6人の表情は暗い物だった。

その理由は言わなくてもわかるだろう。

梓は、浩介のことを質問しただけで、恫喝されたのだ。

その際に自分にあてられた鋭い殺気は梓の中でトラウマと化していたのだ。

「これから私たち、どうなるんだらう?」

「知らねえよ。そんなこと」

澪がつぶやいた言葉に、律が投げやりに返した。

そんな彼女たちの牢の前で鍵を開ける音がした。

「おい、お前らそこを出なさい」

「は、はい」

看守と思われる男に言われるがまま唯たちは牢を出た。

「ついてきなさい」

そう告げた看守はすたすたと歩きだした。

唯たちもそのあとに続く。

やがて、連れてこられたのは黒色のソファーにアンティーク調の家具が置かれた一室だった。

テーブルにはお茶が入ったカップが置かれ、その横にはお菓子も用意されていた。

「あ、あの。これは?」

「君たちの無罪は証明された」

紬の問いかけには応えずに、看守の男はそう告げた。

「ついては、法務課大臣が君たちに話があるそうだから、ここでおとなしく待つように」

そう告げて看守はドアを閉めた。

「……どうする、律?」

「どうするも何も。座って待つしか。なあ、ゆ——」

澪の問いかけに応えながら律は唯たちの方に視線を向けたところで固まった。

「うわあ、このお菓子おいしいわ」

「このお茶もおいしいわ」

その理由は、先ほどまでの落ち込み用が嘘のように用意されたお菓子やお茶を口にする唯とムギの姿があったからだ。

「お前ら少しは緊張感を持って！」

「ふえ？」

律のツツコミ口調の言葉にお菓子を口にしながら首をかしげる唯に、律は力が抜けるような感じを覚えた。

「私たちも座りましょう」

「……そうだな」

梓の呼びかけに応じるように律たちがソファアに腰掛けた時だった。

ノックの音と共に、浩介が姿を現したのは。

★ ★ ★ ★ ★

「あの、本当に私が同行しなくても？」

「何度も言っているが、彼女たちが武装をしていないことは確認済みだ。それに、彼女らは被疑者ではなく被害者だ」

応接室の前で、僕を案内していた看守の責任者が今回で何度目かになるかわからない問いかけをしてきたため、僕はきっぱりと告げた。

「分かりました。それでは私はここで待機しまするので、何かあった際はお声を」

「分かった」

それが責任者なりの譲歩なのかもしれない。

僕は、頷くと応接室の扉をノックして開いた。

「こ、浩介」

中に入ると僕は扉を閉めて彼女たちの方に歩み寄る。

近づくと、若干怯えの色が伺えた。

仕方がないかもしれないけど。

「はあ……何が」学校近くのファーストフードにいる。だよ。一体何をやってるんだ？」

「そ、それは……」

ため息交じりに声を掛けると、律が視線を逸らした。

「あの、浩介先輩」

「何？ あずにゃん」

できる限り彼女たちから恐怖心を解くべく、元の世界にいた時と同じ呼び方で梓の名前を呼ぶことにした。

こうでもしないと、簡単に解けなさそうだと感じたからだ。

「浩介先輩って何者なんですか？」

「……」

「それにここは一体……」

梓から次々に投げかけられる問いかけに、僕はどう応えるかを考えるよりも、今後のことの方が大きかった。

「最初の問いかけには応えられるけど、最後の方は今は無理。それでもいいのなら」

「……」

僕の言葉に、全員が無言で頷いた。

「僕は、魔法連盟法務課大臣の高月浩介だ」

「……………へ？」

僕の名乗りにも、固まっている唯たちの心境を物語るように律が声を上げた。

「早い話が魔法使い」

「……………じ、冗談ですよね？」

「こ、浩介にしてはとても笑える冗談だな」

僕の“魔法使い”という単語に、憂と滯が顔をひきつらせながら声を上げる。

「残念ながら、冗談じゃないんだ」

「それだったら、その証拠を見せてみなよ」

律から至極もつともな言葉が掛けられた。

「分かった」

僕は頷きながらどの魔法を使うか頭の中で考える。
普通の転送魔法では信じてもらえるかわからない。

(だとすれば、身をもって知ってもらうのがいいか)

「え、なに？」

僕は唯の方に手を掲げる。

「リ・ベルリア」

「え、ええ!？」

「お、お姉ちゃん!？」

「唯先輩?!」

僕の詠唱とともに、唯の体が僕の腕が上がるのに比例して宙に浮かび上がる。

それを目の当たりにした憂達が慌てふためく。

「これでも信じてもらえないのなら、もう少し激しくするけど?。」

「わ、わかった。信じるから。唯を下して」

滯の返答を聞いて、僕は腕をゆっくりと降ろしていく。

それに反応して唯の身体も降りていく。

「そ、それにしても、本当に浩介は魔法使い……何だ?。」

「す、すごい! 本物の魔法使いだ!。」

唯ははしゃいでいるが、それ以外の皆は信じられないと言った感じだった。

「浩介さん?。」

「ごめん。今の僕には皆との接し方がわからない」

僕は彼女たちから視線を逸らせる。

「何を言ってるんだよ。今まで通りでいいじゃんか」

「そもいかないんだよ」

律の嬉しい言葉に、答えながら手元に赤色と青色の二枚の用紙を一組にしたものを全員に配っていく。

「浩介君、これは?。」

「それは宣誓書」

ムギの問いかけに、僕は簡潔に答えた。

「二枚とも、一番上にはこれから起こるであろうことがかかっている。そして下にはそれに同意する旨の署名欄がある。二色によって、未来は変わる。赤い宣誓書は、受け入れ拒否の場合だ」

「それって、私たちが浩介のことを拒否するということか?。」

滯の言葉に、僕は首を横に振る。

「それは違う。僕が魔法使いであることを受け入れず、これまで通り

の生活を望む場合だ。その場合は、全員のここに関する記憶をすべて消去させてもらう」

「記憶を……消す？」

「もちろん、それによって皆になんら不利益なことは起こらないようにすることを約束する」

唯たちの反応を無視して、僕は淡々と説明を続ける。

「青色の紙は僕を受け入れる場合に書く。その場合、みんなには言語規制が掛けられる」

「げんごきせいって何？」

「簡単に言えば、話す言葉を規制して自由に話せなくなるということ」
首をかしげながら聞いてくる唯に、僕は大まかな答えを返す。

「規制されるのは僕が魔法使いであること。そしてこの世界のこと。これは家族や知人友人や動物にも口にしてはいけない。ただし、ここにいるメンバーは別だけど」

「お、おい。どこに行くんだよ」

彼女たちに背を向ける僕に、慌てた様子で律が声を掛けてくる。

「本人の目の前で決めにくいでしょう？ 僕は席を外す。書き終わったら外の方に仲間がいるからそいつに渡して」

「あ、浩君！」

唯が呼び止める声を無視して、僕は応接室を後にした。

「大臣」

「……宣誓書を渡した。受け取り次第こちらに持ってきて」

外に出た僕に声を掛ける責任者に、僕はそれだけ告げるとその場を後にした。

（本当に残酷な運命だよな）

自分の運の無さを恨みたくなる。

（皆、赤い紙を使うよね）

あの二枚の紙は人間の本性を見るための物として使用されていたものだ。

要するに、受け入れた人間はよからぬたくらみを考えていると捉えられることになる。

いまだにそういうことを考える者もいるが、僕は彼女たちならば、青色の紙と赤色の紙の意味通りであり、嘘偽りがないことを信じている。

だからこそみんなは赤い色の紙を使うと考えているのだ。どう考えてもいやなはずだ。

魔法というわけのわからない物のせいで、自分の自由が束縛されるのだから。

「本当に、最悪だ」

大臣室で、僕は声を漏らす。

だが、赤色を選んでも関係が変わることはないだろう。

いつものように部室で部活をする。

それだけだ。

「なんだ？」

「大臣、宣誓書をお持ちしました」

「ありがとうございます。もう戻ってもいいぞ」

おそらく宣誓書が入っているのだろう、茶色の箱を受け取った僕は責任者から受け取るとお礼を言って職場に戻るように告げた。

「それでは、失礼します」

責任者の男性職員は、一礼すると大臣室を後にした。

「さてと……」

僕は茶色の箱を茶色のデスクに置く。

椅子に腰かけて箱のふたを開けた僕は、中身を確認した。

「……………えっ？」

その箱の中に入っていた紙を見て、僕は思わず固まった。

なぜなら、その箱の中の紙の色は

「嘘でしょ？」

全部青色だったのだから。

「うわ!? 何だ浩介か。びっくりしたな」

「ちよっと、どういうことだ、あれは!!」

全速力で応接室に向かった僕は、皆に問いただした。

「どうしたんですか？」

「どうしたもこうしたもない！ 青色の宣誓書なんて出すなんて、皆正気か!？」

僕の様子に、声を掛ける梓達に僕は問い詰める。

僕には青色の宣誓書を書くことが正気の沙汰ではないように感じたのだ。

「正気だよ、私たちは」

「それじゃ、あれか？ 僕を傷つけないためにか？」

僕の推測に、漣は首を横に振る。

「そうじゃなくてね、浩介が魔法使い？ とかでも仲間には変わりないんだつたらそれでいいじゃん」

「私も。最初は驚いたけど、同じ部員だし」

「わたしもですよ。浩介さんのことよく知りませんが、でも浩介さんは怖い人には見えなかったのよ」

「私もです。浩介先輩には色々とお世話になりましたし、拒絶することなんて考えてないです」

律に続いて漣や憂に梓が口々に声を掛けてくれる。

「そうそう。私は難しいこととかわからないけど。浩君は浩君だよ」「皆……ありがとう」

唯らしい説明だったけれど、それはとても僕の救いの言葉になった。

だからこそ、僕はみんなに頭を下げて感謝の気持ち告げた。

「何だかみんなだけ言いたいこと言ってずるい」

そんな中、唯一何も言っていないムギが抗議の声を上げた。

「それだったら、皆と同じ意見だって言えばいいんじゃない？」

「それもそうね。それじゃ、私もみんなと同意見よ♪」

僕のアドバイス通りに声を上げるムギに、気づけば僕たちは心の底から笑っていた。

きっと僕にとってこの日、この瞬間こそが幸せだと感じた時だったのかもしれない。

第51話 説明!

「それじゃ、説明をさせてもらうよ。かなり長くなると思うから、それだけは覚悟してね」

「合点です!」

「……二人とも真面目に返事をしなよ」

「そうですよ!」

律と唯らしい返事の仕方により、律と梓から厳しい声上がる。

「まあ、居眠りをされるよりはましだから」

僕はそうフォローの言葉を告げると、咳払いをして話を始めた。

「まずは、この世界について説明をするね」

そう告げて僕は説明を始めた。

「この世界は、皆も気づいている通り、唯たちが知っている世界ではない。ここは、人ならざる者が住まう世界、名前は『忘れられし』……そつちの言葉で簡単に言うと、『魔界』」

「ま、魔界って、ゲームやアニメに出てくるあれ?」

唯の問いかけに、いささか意味が分からなかったが、僕は頷いて答えた。

「ていうことは、魔王とかがいたりして——」
「いるよ。というか僕のとだし」——いるのかよ!? ていうか浩介かよ!!」

僕のカミングアウトに、律がのけぞる勢いで驚きをあらわにした。

「魔王というのは強さの称号のようなもの。僕はこの世界で一番強い魔法使いであるという意味。持ってつけられた二つ名が」

「二つ名は?」

「『死神浩介』。その名の通り、狙った獲物は決して逃さずに仕留める」

唯に乗せられるようにして、僕は二つ名を告げた。

ちなみにもう一つの名前があるのだが、彼女たちには言うことはいだらう。

「す、すごいんですね」

「それで、話を戻すけど」

僕は咳払いをすることで、話を元に戻した。

「ここにいるのは魔法使いとか魔女だとかそういう感じの者たち。そして、ここは通常の方法ではたどり着けないように嚴重に保護されているんだ。僕だって特殊な方法を用いた転送魔法を使ってここに入りしている。そのため魔法使いでない者がここに来ることは、限りなく0に近い」

とはいえ、先ほどのように魔力を有する者がここを不法に訪れてしまうことがあるのだが。

「それじゃ、どうして私たちが？ 私達は魔法使いじゃないですけど」「それはこの僕が保障するよ。皆は魔法使いではない」

憂はともかく、梓達とは部活動で一緒に活動をしているのだ。

魔力を持つていれば僕が真つ先に気づく。

「な、なんだか夢が壊されたような気分です。隊長」

「皆がここに来た理由は転送魔法の誤作動だ」

「ご、誤作動？」

「何だかしようもない理由が聞こえたぞ」

僕の告げた理由に、律がツツコみを入れた。

確かに、しようもない理由だ。

「この誤作動はどうしても直らない物だ。それゆえに僕も対策を施していた。それは“隔離結界”による空間を隔離する方法」

「空間を………角煮？」

「いや、気持ちは分かるけど。それは違うぞー」

腕を組み視線を天井の方に向けながら考え込む唯に、律がツツコみを入れた。

「簡単に言うと、僕以外の人や動物を追い出すみたいなもの」

「なるほどー」

唯が右の掌に握り拳を作っている左手をポンと重ね合わせる仕草をしながら、納得したのを確認して話を先に進めることにした。

「本来であれば、みんなもこれに伴っていつもと同じ空間に移動するはずだったんだけど」

「それがなぜか私たちが結界内に入ってしまっただけですね」

僕の説明の先を読んだ憂の言葉に、僕は頷くことで答えた。

「何かおかしな現象とかが起こらなかつた？　ここに飛ばされる予兆の前に」

「おかしなことと言うと……あ、携帯電話が変になった！」

僕の問いかけに、漣が答えた。

僕は彼女から話を詳しく聞くことにした。

なんでも、いきなり圏外になり、そして待ち受け画面が砂嵐になつたらしい。

「間違いない。それこそが隔離結界による影響だ。空間を捻じ曲げたせいで電波が通らなくなり、しまいには結界内の魔力が電子機器の調子をおかしくしたんだと思う」

「そう言えば、なんだか携帯電話の電源がつかなくなつちやつたんだけど」

唯から携帯電話を受け取った僕は、電源をつけようと試みたものの、確かに電源がつくことはなかった。

「世界移動の際に壊れたか……壊れた携帯はこつちで預かせてもらうよ。専門のスタッフがいるから修復してもらおう」

「それなら、私も」

「私も」

僕の言葉に、律に続いて全員が携帯を差し出してきた。

僕は苦笑しながらそれを受け取ると用紙を入れていた茶色の箱に入れてふたを閉めた。

「それで、話を戻すけど。この結界は外から入ることは絶対に無理なんだ」

「え？」

僕の言葉に、驚きをあらわにする漣。

「それは魔法使いであつても。そうでない皆は特に」

「それじゃ、どうして私たちが」

「それが一番の問題」

梓の問いかけに、頷きながら僕は立ち上がった。

「これから言うことは、冗談ではない。つらい現実になるかもしれない」

いけど、しっかりと受け止めるんだ」

「わ、わかったよ」

「……………」

誰かが呑み込んだ時の音を立てる。

だが、全員が首を縦に振っていた。

それを確認した僕は、真実を告げた。

「皆の体の中に、僕の一部が取り込まれているんだ」

「……………」

僕の言葉に、一瞬の静寂が僕たちを包み込んだ。

『ええ~~~~~~~~!!?!?』

そして劈くような叫び声が僕を襲った。

「そ、そそそそそそれって、どういうこと?!」

「私たち、浩君になっちゃうの?!」

やはりと言うべきか、混乱が起きてしまった。

「ごめん、言葉が不足していた。僕の魔力残渣が皆の体内に取り込まれているんだ」

「魔力残渣っていったい何? というより、そもそもどうしてそんなものが」

僕の説明で落ち着きを取り戻したのか、滯が疑問を投げかけてきた。

「魔力残渣とは、魔力のかすのようなもの。まあ、人体には害がないんだけど、時たま魔力反応で追っている魔法使いに本人と間違われてしまうことがある」

「それって、ものすごく危険なのでは?」

梓の言うとおり、これはかなり危険なものだ。

通常は魔法使いの場合だと自分が発する魔力の方が大きいので、このようなことは起こらない。

だが、魔法使いでない人でなおかつある特定の条件が重なると、誤認される事態が発生するようになるのだ。

「まあ、その対策はちゃんと考えているから心配しないで」

とは言ったものの、魔力残渣は時間が経たないと体外に出て行かな

い厄介な物質。

そして、彼女たちの場合はそれが非常に難しい。

「でも、どうしてそんなものが……もしかして浩介先輩と一緒にいたからですか？」

「でもそれだと私までそれがいっぱいある理由に説明がつかないよ？」

梓の疑問に、憂が異論を唱える。

「梓の答えは半分合っている」

「半分、ですか？」

「正確に言くと、僕の魔力に触れたから」

それが魔力残渣が彼女の体内にある理由。

「唯たちもだけど、みんなは無意識的に自分のエネルギーを外部に放出、吸収を繰り返している。人によってはそれが、オーラのようなものに見えるらしいけど」

「へえ、全く知らなかったよ。ということは私のおーらが、あずにやんに吸収されているということ？」

「断言はできない。というより、その場にいる人物全員のオーラを取り込んだからと言って、体に異変が出るわけではない。皆は、取り込んだエネルギーを自分のモノにする技術を知らないんだから」

そこが一番不思議だった。

人間は力と知識さえあれば魔法使いになれるということの証明なのかもしれない。

「つまり、浩介君が放出している魔力を私たちが取り込んでいったからそれがたまったってということ？」

「それじゃ、憂はどうしてですか？」

ムギのまどめに頷く僕に、梓が疑問を投げかけてきた。

「魔力残渣は何も僕が放出する物だけじゃない。色々あるよ。例えば、去年僕が憂から受け取った風呂敷。あれも魔力残渣を放出するから」

「洗濯したんですけど」

思わず“汚れ物か”とツツコミたくなったが何とかこらえた。

「洗濯程度で落ちない。逆に魔力残渣を拡散させることになるだけ。残渣を消したい場合はその魔法を使うか薬品を使うしかない。まあ、後者は服も溶けて消えるけど」

「うへえ、なかなか手ごわいんだね」

「まあ、それほど悲観するべきじゃない。さつきも言ったけど、人体にも影響はないし、僕と誤解して皆に危害を加えるような存在がこの世界に入った瞬間に、僕がすぐに察知して潰すから」

僕は自信をもってみんなに安心させるように告げた。

「浩介君何だかかっこいいヒーローみたい♪」

「そ、そう?」

ヒーローなどという言葉が掛けられたのは初めてのため、頬をかきながら相槌を打つ。

「照れてますな、律ちゃん隊員」

「照れておりますのう」

「ゴホンっ!」

二人の冷やかしの視線に咳払いをすることで話題をそらした。

「そう言うわけで、二人が飛ばされたのは外部エリアという、何も無い場所。そこでは魔法などが使えなくなるから、誰も寄り付かない。入ればエリアに仕掛けられているセンサーに反応してサイレンが鳴り響くようになってるから」

「それじゃ、あのサイレンは」

「お前たちがセンサーを反応させたためになったんだろうね」

サイレンの理由がわかった憂に頷きながら、僕は説明した。

「それで、この建物は?」

「ここは魔法使いたちが事件を起こさないよう監視・事件解決を行う魔法連盟という場所。分かりやすく言えば警察の魔法使い版みたいなもの」

唯たちはまだよくわかっていないようだが、魔法使いたちが一番信頼し、脅威に思っているのがここの魔法連盟なのだ。

職員たちはみな優秀。

それでいて市民のために働くという、まさに尊敬に値するレベルの

精鋭で形成されている。

尤も、一部にはそういうのとは無縁の者もいるが。

「それじゃ、法務課大臣ってすごいのか？」

「さあ？　ここではNo. 3に入っているらしいけど」

「それって、かなりすごいじゃん！」

律から言われるが、僕にはあまりよくわからなかった。

「そんなわけないでしょ。僕は所詮連盟長のおまけだし。選挙で選ばれたとはいえ、すごいと感じることなんてしてないし」

「ちよ、ちよつと待って、今選挙って……」

僕の言葉に反応したムギが慌てた様子で言葉を遮った。

「法務大臣って選挙で選ぶのか？」

「そうだよ。5年ごとに一回ね。候補者はいるにはいるけど、僕の批判をしてくれず、ほかの候補者通しでつぶし合うから結局は僕が当選を続けて……これで28回目だったっけ」

僕は一度も選挙でほかの候補者の批判はしていない。

それどころか、他社の掲げた公約を評価し、それに対する自分の立場などの説明しかしていないような気がする。

選挙とはよくわからない物だ。

「って、どうしたの皆？　固まっちゃって」

「あの、今28回って言いましたけど、浩介先輩いくつですか？」

なぜか唾然とする皆に問いかけると、代表して梓が問いかけてきた。

「あー、そういうこと」

それで何となく理解できた。

「人間の年齢に換算すれば16歳。ただ実年齢はその10倍はあるはずだよ」

「えつと、16に10をかけると……160!？」

計算をして僕の年齢を導いた唯が信じられないと言った様子で僕の方を見た。

「な、なるほど。だから大人びていたのね」

「ていうか、学校に通う意味ある？」

ムギに続いて律が手厳しい言葉を僕に投げかけた。

「念のために言うけど、学校は中学までしか通ってない。一応大学レベルの学力は有している。僕には学ぶことではなく“通うこと”に意義があるから」

「……………」

皆はそこから先を聞くことはなかった。

聞かれても答えないけど。

「ということは、私たちは敬語で話すべき？　さん付けとか」

「同学年だから必要がない。それに敬語は嫌い。下級生だったらともかく同学年の人にまで言われるのは精神的に疲れる」

「そ、そう」

嫌いになったのは、個々の大臣をしているからだだったりもする。

そう言う意味では魔法連盟は僕の好き嫌いに大きな影響を与えているようにも思える。

「以上で、説明は終わり。何か質問は？」

僕の問いかけに、みんなは腕を上げなかった。

どうやら納得したようだ。

まあ、納得せざるを得ないから仕方がないかもしれないが。

「ということ、これから僕の家まで行くからついてきて」

「え？　どうして？」

僕の言葉に、律が訊いてきた。

「ああ、ここから出るための門は今日一日使用禁止になってるから」

「なぜ?!」

僕の宣告に漕が声を荒げる。

「唯たちの不法侵入によって特別警戒態勢になったから」

『うぐっ』

僕の簡潔な返事に、全員の表情が固まった。

「安心して。寝着は家に余分にあるタオルとかもあるからお風呂にも入れる。部屋もいっぱい余ってるから」

「でも、あの…………下着が…………その」

頬を赤くして恥ずかしげにうつむく梓に、僕は少しばかり考え込む

とすぐに結論を出した。

「それはそれぞれの家から取り寄せるから安心して」

「取り寄せるって、どうやってですか？」

梓の問いかけに今応えてもいいが、少々時間がかかる。

これ以上応接室を占領するのも良くない。

「詳しい説明は家に着いてから。ここで話してもきりがなし、みんなも落ち着く場所の方がいいでしょ。まあ、ご希望であれば牢獄の方を用意するけど？」

『今すぐ家に行こう！』

僕の言葉に、みんなが団結した。

こうして、僕は唯たちのゲストを連れて高月家へと向かうこととなった。

第52話 お泊り!

「こんなところに来てどうするんだ?」

「これってもしかして、魔法の絨毯とかに乗って行くんですか?」

僕たちがやってきたのは、出撃用のパッチだ。

無機質な鉄製の床や壁に囲まれた中、先の方ではぱっくりと穴が開いており、そこから外の風景を見ることが出来る。

「正解。よくお分かりで」

目を輝かせながら聞いてくる梓に答えながら、僕は自分用のロッカーにしまっておいた赤色の10人ほど乗れそうなサイズの絨毯を取り出すと、それを地面に敷いた。

「さあ、乗って」

皆に乗るように促すと、全員はおずおずと絨毯の上に乗った。

滯は若干怯えた様子ではあったが、わりとすぐに乗ってくれた。

最後に敷かれた絨毯の出口側に面する方向の場所に陣取ると、背中に装着していたクリエイトを絨毯に突き立てた。

「それはなんですか?」

「クリエイト。僕の魔法使用をサポートする相棒。ものすごく優秀だよ」

憂の問いかけに答えながら、出発の準備を整えていく。

ちなみに現在クリエイトは喋れないようになっていく。

喋れるようにすることもできるが、色々と面倒くさいのでこのままでいいだろう。

「それじゃ、浮かぶから気を付けて」

そう後ろの皆に告げた僕は、軽く魔力を注入する。

するとそれに呼応して、絨毯が浮いた。

「お、浮いたぞ!」

「それじゃ、発射まで5秒前。5, 4, 3, 2, 1」

浮いたことに感嘆の声を上げる律をしり目に、僕はカウントダウンをしながら魔力の放出をさらに強める。

「0!!」

「きゃあああ!？」

「のわああ!？」

「にゃ〜〜〜!!」

カウントダウンを終えるのと同時に、急発進してパッチを出たため、みんなが悲鳴を上げた。

それを無視して僕は絨毯の高度をさらに上げていく。

「と、飛んでる〜〜!」

「でも、風が来ない〜!」

「でも怖いです!!」

後ろから驚きなのか悲鳴なのかよくわからない歓声上がる。

必要な高度まで浮上したところで、上昇を止めて地面と平行にした。

「ほら、下の方見てみな」

「うわ〜」

「すごくいい景色ね」

「まるで家が米粒みたいに見える」

僕の言葉に下の方に視線を向けた唯たちが感嘆の声を上げた。

「なあ、浩介」

「何?」

一定の速度と高度を維持したまま飛んでいると、律から声が掛けられた。

「全然寒くなったりとか風圧を感じないんだけど、これってやっぱり」

「魔法です」

律の予想に、僕は頷きながら答えた。

「便利ですよね、魔法」

「うんうん。本当にあるんだね〜」

憂に続いて唯がつぶやく。

(お前たちは知らない。魔法の本当の怖さを)

だが、僕はそれを口にしなかった。

それはもしかしたら、人の夢を壊すようなことをしたくなかったからかもしれない。

「それじゃ、アクロバットとかできたりする?」

「お、いいところに目を付けた。もちろんできるよ。何だったらやってあげようか?」

律の問いかけに、僕はそう尋ねた。

「ひっ!?」

「おお、それじゃよろしく頼むぞ!」

「私も体験してみたい!」

「私も私も!」

律に唯とムギが続いてリクエストを送ってきた。

「あ、あの。アクロバットは危ないですし辞めませんか?」

「そ、そうだよ! 危険だし!」

反対するのは梓と滯の二人だった。

憂は苦笑しているのでどっちなのかがわからなかった。

「それじゃ、危なくない範囲で、アクロバット運転をするか」

「いえーい!」

僕の決定に、歓迎の声を上げる律と唯。

そんな二人をしり目に、僕は魔力の放出方向を調整する。

そして一気に浮上を始めた。

「うおおお!!」

ちようどいいところでさらに上の方に絨毯を向けていく。

すると、円を描くように空中で一回転した。

「どう?」

「すつごく楽しかった」

「浩君すごくうまいね〜!」

「わ、私は怖かったです!」

対照的な感想に、僕は苦笑しながら高度を少しだけ下げていく。

「ねえ浩君」

「なに?」

しばらく進んだところで、唯が声を掛けてきた。

「もし私たちが魔法を使えるとしたら、一番すごい魔法使いになるのは誰?」

「これまたアバウトなことを聞くな」

唯の問いかけに、相槌を打ちながら考えをめぐらしていく。

この6人はいろいろなタイプに分かれている。

律は大雑把タイプ。

ちまちましたことは苦手な律に一番ピッタリなものだと思う。

細かな制御は不得手だが、大規模魔法には長けている。

漣は正確タイプ。

性格的にもそう見えるからだだが、怖いことが苦手な彼女には、魔法使いとして少し欠けているのかもしれない。

梓は理論タイプだろう。

感覚ではなく、理屈から固めていくタイプ。

魔法使いとしては優秀だが、臨機応変な対処の点で少々悩む。

憂は万能タイプ。

すべての面においてオールラウンダーの能力を持つタイプだ。

いい面も悪い面も特にないため、普通という評価だ。

だが、チームとしては重宝される。

ムギはどちらかというところ攻撃タイプだろう。

力持ちなのと学ぶ姿勢が強いのはとてもいいことだ。

特に前者の場合は攻撃力はピカイチなことが多い。

その代わり防御魔法の方が弱くなるが多々あるが。

もちろん、このタイプは僕の勝手な偏見だ。

確実に間違っている可能性が高い。

それに、それぞれの性格だけで魔法使いとしての強さは決まるのではない。

つまり、何が言いたいのかというところ。

「まあ、強いて一番なのを言うとするところ、やっぱり梓かムギあたりだと思っよ」

ということだった。

「ほ、本当ですかー」

やはり、魔法というのに憧れているからなのか、僕の言葉に目を輝かせて聞いてくる梓。

「魔法ってというのは座学も重要なカギを握るからね。特に物理に数学関連でいい成績をとっている人ほど、すごい魔法使いになっている傾向が強い」

「どうして、数学と物理が重要なのか？」

「それは、単純だ。今こうして空を飛ぶ際にもベクトルをどっちの方向にどれほど掛けるか、全員の体重を考慮してどの程度の魔力を注入するかを計算しなければいけない。そうしないと、飛べたとしてもすぐに墜落しちゃうから」

唯の問いかけに答える僕に、唯は“へえ〜”と理解しているのかわからないのかよくわからない感じの返事を返した。

ちなみに、魔法というのはアニメのような“感覚で〜”という生易しい物ではない。

どのような魔法も複雑な計算にベクトル予想等々をする必要がある。

そういう意味では魔法というのも侮れないのだ。

「ねえ、いつ着くんのだ？」

かれこれ30分ほど飛んでいると、さすがに飽きてきたのか律が僕に訊いてきた。

「もう着いてるよ」

「へ？ 冗談を……森ばっかじゃん」

僕の答えに、律は軽快に笑い飛ばしながら相槌を打つ。

確かに、ここらへんには森しかない。

「……まさか」

「そのまさか。ここ一体すべてが高月家の敷地です」

律の予想に僕は頷くことで肯定すると、そう告げた。

その数秒後、魔界の空に6名の絶叫が響き渡るのであった。

「はい、到着」

程なくして、高月家本家に到着した僕たちは絨毯から降りた。

そして全員が、家の外観を眺めている。

「思ってたよりも大きくないね」

「悪かったな」

唯の率直な感想に嫌味を込めて謝った。

(中に入ってもそれが言えるかどうか、見物だ)

絶対に真逆の反応をするような気がする。

「とりあえず中に入るよ」

僕はそう声を掛けると玄関の方に足を進める。

「あ、待ってよ浩君！」

その後ろを唯たちがついてくる。

玄関のドアノブをつかみながら魔力を込める。

この家は、さりげなくではあるが高度なセキュリティ魔法が掛けられている。

特定の魔力を持つ者しか敷地内や、家の中に入ることはできない。

さらに、一種の結界のように敷地を覆っている力により、万が一の事態が発生してもここにいれば助かるような魔法もある。

今、僕は一種のルーティング（認証）を行ったに過ぎない。

そしてドアノブを引いてドアを開いた。

「どうぞ」

閉じないように処置を施すと、先に全員を中に招いた。

『お邪魔します』

全員がそう言いながら中に入っていく。

そして最後に僕が続く。

「つて、広!？」

「すごい、ここだけで一部屋分あるよ」

最初に驚きの声を上げたのは律だった。

玄関だけでも6畳分の広さはあるのだから、当然と言われればそう

いうことになる。

「靴を脱いだらまっすぐ歩いて、三つ目のドアがダイニングへの入り口になってるからそこに入って」

「よし、唯隊員！」

「合点であります、律ちゃん隊長!!」

僕の案内をよそに、唯と律は合図を送る。

そして、

「探検するぞー！」

「おー！」

「こおらー！」

いきなり探検すると言い出して走り出す律たちに、拳を構えながら声を荒げる濤。

「ここ、色々な魔法が仕掛けてあるから、下手にドアを開けたりするとけがでは済まないよ」

「や、やめておきます」

「くつ、ここは魔境か」

最後に“それでもいいのならば、どうぞ”と付け加えると二人は潔く引き下がった。

ちなみに、今の話は本当のことだったりする。

今、家の中にもセキュリティが施されており、ダイニングや浴室などは大丈夫だがそれ以外の場所はルーティングを再度行う必要がある。

それをしないでドアノブに手を触れると、一番ひどいところでは四方八方から槍が放たれる仕掛けも存在する。

「皆、先にダイニングの方に行っててくれる？」

「浩介先輩は？」

「僕はちよつとやることがあるから」

梓にそう答えると、全員はダイニングの方に向かっていった。

すぐさま中から歓声が聞こえてくる。

「さて、やりますか」

それを聞きながら、僕は静かに息を吐き出すと浴室や化粧室以外の

すべてのドアの周辺に簡単な結界を展開する。

これをしておけば面白半分にはドアを開けようとしても近づけない。
(高月家の魔力を持つ者以外が結界に触れたらダイニングに戻るようになるか)

一通り結界魔法を発動し終えた僕はダイニングへと向かう。

「ごめんね、なんかお茶も出さずに」

「それは大丈夫。にしても……」

「すごいな」

ダイニングを見渡した濡がポツリと感想を漏らす。

確かに、すごい。

天井はいたって普通だが、周囲に置かれた家具はいかにも高級そうな雰囲気を出しているし、何よりテーブルが優に2、30人分の席があるのでないかというほどに長い。

ちなみに、僕が知る限り、この席全てが埋まったことは一度もない。

「部屋の方だけど、1フロアに3部屋ずつで……4階でもいいかな？」

「ちよつと待てい！」

僕の問いかけに、律から待ったが掛けられた。

「あの、この家って3階建て……ですよね？」

顔をひきつらせて聞いてくる憂。

「ああ、そう言うことか」

それで彼女たちの言わんとすることがわかった。

「この家の外観は3階建てだけど、中は家の外観の数百倍の広さと高さがあるんだ。ゲストルームは100を優に超えていたと思うけど」

「お前はいったい何者だ！」

律から鋭いツツコミが入った。

「この世界を治める名家」

「へ？」

(そう言えば、このことは話していなかったっけ)

固まる律たちの様子に、僕はそれを思い出した。

「高月家は、魔法使いで知らぬ者がいないと言われる名家何だよ。まあ、これは皆が知っても意味はないと思うから、”知っている人は

知っている名家”程度の認識で構わないよ」

「知れば知るほど、恐ろしいやつに見えてくるんだけど」

「律たちが恐ろしく思う必要はない。魔法使いじゃないし、僕が牙をむける事はないから」

律の言葉に、僕はそう返した。

実際問題、律たちが何をしようと、こちら側に不利益が発生しない限りは何もできない。

「それじゃ、ゲストルームに案内するから、ついてきて」

僕はそう声を掛けるとダイニングを出てすぐ前にあるドアを開ける。

「ここも広いですね」

「本当だ〜」

ドアの先のリビングに感想を漏らす唯たちをしり目に、僕はリビングの奥の方にある階段に目を向ける。

「あそこの階段から上の階に行くことができる」

「それって下の階に行く時は必ずここを通る必要があるということよね?」

ムギの問いかけに頷くことで答えた。

「さあ、行くよ」

「おー!」

そして僕たちは階段を上がっていく

1フロアごとに入出口であるドアに結界を張っていく。

それでもしないと

「律ちゃん隊員、ドアが開きません!」

「くっ! おのれ浩介め。鍵をかけたな!」

このように変なところに行こうとする者が出てくるからだ。

「唯先輩に律先輩、人の家のドアを勝手に開けるのは失礼ですよ」
「うう、あずにゃん厳しいっす」

梓が二人に注意をしてくれた。

(どっちが先輩何だか)

時よりそんなことを考えてしまう。

そんなこんなで、4階まで階段を上がった。

「ここがゲストルームだ」

「突入〜！」

「子供か……まったく」

「まあまあ」

「失礼します」

僕を押しよけるように中に入っていった律と唯にため息交じりにつぶやく滯とそれをなだめるムギが続いて、最後に憂と梓が中に足を踏み入れた。

それに続くように僕もゲストルームに足を踏み入れた。

「……………」

中に入った皆は部屋を見て固まっていた。

ちなみに部屋の構造は棒の部屋と同じ構造だ。

つまりは……

「ひ、広いな」

「す、すごいです」

ということだった。

「ちなみに、ここ一人一部屋用なんだけどもし広すぎて落ち着かないのであれば二人で一部屋という風にもできるよ。ベッドも夕に三人は寝れる大きさだし」

「そ、それじゃあ……」

僕の提案に梓がおおずと手を上げた。

それに連鎖するように全員が手を上げた。

「なら、ペアを組んで。言っておくけど、無理やりはダメだからね」

「分かってるって」

僕の忠告に律が相槌を打ちながら、ペアを決めていく。

結果次の通りになった。

唯ームギ

憂ー梓

滯ー律

「そのカギは、なくすと部屋に入れなくなるから気を付けて。開け方

はドアのどの部分でもいいからかざすこと」

鍵の取り扱いについて説明をし終えた。

ちなみに、鍵はしっかりしている者に渡している。

名誉のため誰なのかは言わないが。

「さて、今度は肌着か。とりあえずいったん部屋を出よう」

僕はとりあえず全員をゲストルーム（現在は唯とムギの部屋だが）から外の通路に追い出した。

「何をするんですか？」

「お取り寄せ」

憂の疑問に答えた僕は、何もない空間に右腕を上げると右手を広げるようなしぐさでホロウインドウを展開した。

「うわ、何か出た!?!」

律が驚きの声を上げるのを聞きながら、僕は次々にウィンドウを展開していく。

そしてコンソールで必要事項を入力していく。

「浩介先輩、それってなんですか？」

「これ？ これはヴァーチャリング・システムって言って、パソコンが進化したような感じのやつ」

梓の疑問に答えながら、準備を整えた。

「これを使って、唯たちの世界から肌着を転送する」

「い、一応聞くけど、どうやって？」

「この画面は、平沢家の唯の部屋の様子を示している。これを基に、必要なものがある場所を指定してそれを所定の位置に転送させる。ちなみに、唯の場合はこの部屋の中に出てくるようになってる」

目をひきつらせながら聞いてくる律に、僕は隠さずに正直告げた。

「それって、服が仕舞ってある場所とか浩介にわかるよな？」

「当然」

「却下」

予想通り、僕の家は却下されてしまった。

「そう言うだろうと思って、案は考えている」

「どんな？」

「僕は後ろを向いて、手元には転送を開始させるボタンだけが表示された画面のみ表示させる。あとは唯たちの方で場所の入力を行う。入力はある場所をタッチするだけで指定できるから唯たちでもできる。これならどう？」

つまりは場所の決定は唯たち自身でやってもらい、後の転送開始は僕の方ですという形式だ。

「それだったら、良いけど……梓、浩介が後ろを見ないように見張っておいて」

「はいですー！」

律の指示に素直に応じた梓に、僕はとことん信用されてないなと心の中で嘆いた。

「それじゃ、まずは唯から」

「それじゃ、失礼して〜」

唯が画面を操作させる。

場所の確定が完了すると、転送ボタンが押せる状態になるので僕の方でも知ることができる。

そして、転送ボタンが押せるようになった。

僕は即座に転送ボタンに手を触れた。

「これで唯の部屋に目的の者が転送された。同じようにやるから、協力してね」

「それじゃ、次はムギだな」

こうして僕は全員分の肌着をそれぞれの部屋に転送していくのであった。

「それじゃ、夕食は午後6時ごろ。時間に遅れないようにダイニングの方に集合すること」

「了解であります！」

「私も」

敬礼して答える唯にならってムギも敬礼しながら相槌を打った。

「ちなみに遅れたら夕飯抜き」

「ッ!? 滯、時計を見逃しちゃだめだぜ！」

「誰が見逃すか！」

僕の夕飯抜き宣言に、律の目が一瞬大きく見開かれた。

これで、みんなちゃんと夕食時になればダイニングに来るだろう。「それじゃ、夕飯までの1時間弱、部屋でゆっくりとしてな。あ、それと部屋のテーブルに注意点を書き記したメモを置いといたから、くれぐれも破ることの無いように」

「またあとでね、浩君！」

唯の声に見送られながら、僕は4階を後にした。

ちなみに注意点とはこんな感じのものだ。

- ・ 4階や3階以外のフロアへの侵入は禁止。
 - ・ 部屋の家財道具を壊さないこと。
- 壊した場合は、全額弁償してもらいます。
- なお、家財道具は安くてもひとつ数十万円します。
- ・ 夜12時を過ぎると各階の出入り口がロックされ開かなくなりま
- す。

ロック解除はまず無理なので、この時間帯に出入りしないこと。

「守ってくれればいいんだけど」

フロアの進入を禁止する旨の項目は書いても無駄だと薄々気づいていたが、書かずにはいられない性分なのだ。

ちなみに、この家のセキュリティはかなり強度で、3階と4階のフロアへの入り口のドアが開かなくなるようにされている。

しかも物理的に突破しようとするサイレン音が鳴り響く仕組みだ。

それをされると、まず僕は寝れなくなる。

そしてみんなもたたき起こされることになるので、かなり迷惑がかかる。

ちなみに、ロックの解除はしようと思えばできるのだ。

ただ、それにはドアに魔力を注入してルーティングをする必要があるため、かなり面倒くさい。

寝起きにやらされるのはゴメンなので、無理だと書いてあるのだ。

本当に面倒が起らないことを僕は心の中で願うのであった。

第53話 家探しとお風呂パニック

「部屋には戻ったけど、やることも特にはないんだよね」

仕事もここに帰る前に大方片づけてしまったので、本当にのんびりするところしかやることがない。

「ん？」

どうしたものかと考えをめぐらせていると、ドアがノックされた。

「私たちはこういうものだ！」

「今から浩君の部屋を搜索する！」

「は？」

いきなり意味の分からないことをまくし立てた律たちは僕の部屋に入ってきた。

「何、これ？」

「ご、ごめん。なんか律がいきなり浩介の部屋を家探しするって言いだして」

理解に苦しんでいる僕に、濔が手を合わせながら謝ってきた。

「律く、黙示の棚には手を触れるなよく？ それ、触ると爆発するから」

「うわあ!？」

僕の忠告から少し遅れて律の驚いた声が聞こえてきた。

「律先輩!？」

「律！」

「のわ?!」

その声に反応した、濔たちが僕を押しつけるようにして部屋に入っていく。

「ここ、僕の部屋なんだけどな」

首をかしげながらぼやいた僕は、部屋に戻る。

「そのケースがどうしたんだ？」

「で、出たんだ！」

「もしかして、遺体が?!」

「ひいひい!!」

ムギの言葉に、濤が耳をふさいでしやがみこんだ。

(というよりそれって)

律が手にするケースに心当たりがあった僕は、なんとなく理解できたような気がした。

「お、お金」

「へ？」

「あの、浩介さん。どうしてこんなところにお金を入れているんですか？」

「どう見ても不用心ですよね？」

憂の疑問に、梓も頷く。

確かに、その通りだ。

それでもここに置いておかなければいけないわけがある。

「金庫にもどこにもお金の置き場がなくなったから、ここに置いてるだけ」

「置き場がないって、どんだけあるんだよ」

律に訊かれた僕は、考えてみた。

「僕の個人資産でたぶん京は越えてたと思う」

「京？」

「それって億、兆の次の桁？」

ムギの問いかけに、僕は頷いて答えた。

「寄付をしたり、色々なサービスを使ったりしているんだけど、給料の方でもらうのが多いからなかなか減ってくれなくて。人にあげるわけにもいかないし。本当にどうしたものか」

「浩介、お前むちやくちやだ」

頭を抱えている僕に、律からそんなツツコミが入った。

見ると、みんなも固まっていたり苦笑していたりと、反応は様々だった。

(本当に、これをすべてなくせる日は来るのかな?)

そんなみんなをよそに、僕は心の中でそうつぶやくのであった。

なんだかんだあつて迎えた夕食の時間。

全員は集合時間の10分ほど前にダイニングに来ていた。

「さて、夕食の前に、自己紹介をするかね」

目の前には肉じゃがやハンバーグなどのごく普通の一般家庭で出される料理の数々が並べられている中、上座に腰掛けている父さんが口を開いた。

あまりにも自然な形でいたためか、みんなは誰なのかを尋ねることができていなかったようで、ちらちらと父さんの方に視線を向けていた。

「私の名は、高月 宗次朗。こいつの父親だ。いつも愚息が世話になっているようで」

「そ、そんな。私は平沢唯です」

「ひ、平沢憂です」

「た、田井中律です」

「秋山、滯です」

「な、中野梓でしゅー！」

全員、父さんの何かを感じ取っているのか緊張の色を隠せない様子で自己紹介をしていた。

梓の場合は……もはや言うまい。

「初めまして、浩介君のお父様。琴吹紬と言います」

「ほお。その肝の据わった様子は素晴らしい」

唯一普通に対応が出来ているムギに、父さんは称賛の声を掛けた。

「父さん。話はほどほどに。ご飯が冷める」

「つと、そうだった。それじゃ、いただきます」

『いただきます』

僕の言葉に、思い出したように声を上げると、手を合わせて食事を始める合図の言葉を口にした。

それを受けて僕たちも同じように口にする料理に手を付ける。

「おいしいですね。この肉じゃが」

「だろ？ 愚息ではあるが、料理の腕は素晴らしいな」

「調子のいいことを」

父さんの言葉に、僕は反論しながら、肉じゃがを口にする。

「え？ この料理、浩介先輩が作ったんですか!？」

「そうだとも。浩介は昔から料理の腕が良くてな」

「ただ単に、父さんたちの腕が悪すぎるだけ」

驚きをあらわにする梓に自慢げに話す父さんに、僕はツツコミを入れた。

「どうやら我が家で料理の才能があるのは、僕だけのようだった。

母さんの場合は、食べられることは食べられるが、まずくもおいしくもない普通の味の料理しか作れなかった。

「すつごくおいしいよ、浩君」

「それは、どうも」

唯の感想に、僕は適当に返しながらかご飯を口にする。

「ほう………どうかね唯君。性格はこうだが、料理もできてしっかり者の愚息を婿に欲しくないかね？」

「ふえ?! そ、それは………」

父さんの問いかけに、唯は頬を赤くしながらうつむいた。

さすがの唯でも、この手の質問では恥ずかしいようだ。

「それじゃ……ぎゃー」

「それ以上やると殴りますよ。父さん」

とりあえず、元凶である父さんの頭にタライを落としながら忠告した。

「もう落としとるではないか」

「……」

父さんの講義を無視して、僕は再び料理に口をつける。

「冗談はともかくだ。愚息のことを、よろしく頼むよ」

『はいー』

父さんの真剣なまなざしの言葉に、全員が声をそろえて頷いた。

その時の父さんの目は、一人の父親の目にも見えた。

こうして、夕食の時間は過ぎていくのであった。

「お風呂の支度できたよ」

「お、悪いどうすのう」

「ありがとうございます、浩介先輩」

夕食も終わり、リビングでくつろいでいる唯たちに、お風呂の支度ができた胸を知らせると、律は演技じみた話し方でお礼を言い、梓はいつものようにお礼の言葉を言ってきた。

「ここを出て左側に進んだ突き当りにあるドアの左側に、大浴場があるから皆で入ってくるといいよ」

「もう驚かないぞー」

僕の言葉に、律は半目で僕を見ながらそう言ってきた。

「覗くなよっ」

「去年の合宿の時に僕は覗いてないでしょうが。ゆっくり入ってこい」

濡の言葉に、ため息をつきながら追い払うようにお風呂に入るように促した。

「やれやれ」

僕はため息をつきながら唯たちが今まで見ていたテレビを見る。

それは最近魔界で流行っている漫才だった。

僕はテレビを消すとリビングを後にした。

僕には食器洗いという仕事が残っているのだ。

「今日は8人分か。腕が鳴るな」

腕まくりをしながら気合を入れた僕は、食器を洗うべくキッチンへと向かうのであった。

「もうみんな寝たかな」

午後10時。

全員が寝静まったのを確認した僕は、リビングから立ち上がった。手にしているのはお風呂道具。

僕が向かう場所は当然あの大浴場だ。

「はあく、一回入ってみたかったんだよね。この大浴場」

大浴場は、文字通り数人が同時に入れる場所だ。

広さにして60畳分はある。

普通の温泉のような広さはある。

その分清掃が大変で、僕一人の為にここを使うのも躊躇われるため、いつもは普通の家庭サイズの浴室を使っている。

だが、今日は唯たちが入ったので、その清掃という名目で、僕も大浴場を満喫しようと考えていたのだ。

体を洗ってから浴槽に浸かる。

「はあく、やっぱり広いと違うね〜」

浸かっているお湯や入浴剤は同じだが、気分はまるで温泉気分だ。

「そうですねあく。このお湯の流れる音とか風流ですのお」

そんな僕に、帰ってくる声があった。

「お、分かるじゃないか唯」

「まあね〜、浩君も羨ましいですなー」

「そっちだっと思って入ろうと思えば入れるのに、何を言ってるんだよ唯
……………」

「……………え?」

この時、ようやく違和感に気づいた。

今この家にいるのは僕を除いて全員女子だ。

ならば、この声はいったい何なのか?

僕の幻聴か?

それは否。

こんなはつきりとした幻聴はない。

僕は油の切れたロボットののような動きで声のした方に視線を向ける。

「……あ」

そこには僕の横で浴槽に入っている唯の姿があった。湯気で顔しか見えなかったのが幸いだった。

お湯に濡れないようにするためか髪を後ろの方に括っていたため、一瞬憂と間違えそうになったが声の感じが完全に唯の物だったので、間違わずに済んだ。

「ぬおおおおお!!?!」

「はによわ〜!!?!」

驚きのあまりに奇声を発して遠ざかる僕に、連れるようにして悲鳴を上げる唯。

「なんでお前がここにいる!」

「え? そ、それはせつかくの温泉だから、もう一回入っておきたいと思っ……」

僕の問いかけに、声が小さくなっていきながらも応える。

「どうやら、完全に間が悪かったようだ。」

「ごめん、すぐに出る」

「あ、待ってよ浩君!」

急いで出ようとする僕を引き留めたのは、唯だった。

「せつかくだから一緒にお話ししない?」

「……………分かった」

唯の提案に、僕はしばらく考えたのちに、頷いた。

もう一度浴槽に戻ると、唯に背を向けた。

「……………」

はつきり言うと、とても居心地が悪い。

聞こえてくるのはお湯の流れる音。

そして時々唯が動く時に発する水音くらいだった。

心臓が痛いほど力強く脈づく。

「ねえ浩君」

「何?」

そんな中、かけられた唯の言葉に、僕は用件を聞く。

「どうして、浩君は高校に通っているの?」

「……」

またそれかと思った。

昼間にも聞かれた問いかけだった。

「確かに、僕の学力なら、高校に通う意味なんてない」

「そうだよ。無勉強で満点近い点数とか出すもんね」

唯の言葉に、その時のことを思い出した。

あの時はちよつとやりすぎたと思っていた。

どのような点数がいいのか、そのポイントをうまく導いていなかったがために、あのような高得点になったのだ。

「あの時にも言ったはずだけど、僕には“通うこと自体に意味がある”。それが本当の答え」

「それって、どーいう意味？」

「……この世界は“力”がすべての一面がある。それが原因で嫉妬の炎に飲み込まれたクラスメイトから、殺されかけた。ただそれだけのことさ」

唯には軽口を叩いているが、あの時の出来事は僕にとってはトラウマ以外の何物でもない。

あの時のことは、今でも鮮明に思い出す。

朝、いつものように教室に入る僕。

化け物と言ってクラスメイトに取り押さえられ、そして手にしたのこぎりで腕を……

「それから学校には通わずに、独学であそこまで上り詰めた。でも、時々思うんだよ。ちゃんと“卒業”をしたいってね」

「……………」

「皆と登校して、時にはバカなことをやったりして、楽しい時間も苦しい時間も一緒に味わう……そんなどうでもいいことが、僕は欲しかった」

「言わないと思っていたことだったはずが、気が付くとすらすらと言葉が出てきていた。」

「僕はね、唯や皆に感謝してるんだよ」

「感謝？」

「皆と出会ったおかげで、僕は宝石よりも価値のあるすばらしい日々を過ごせてる。だから、ありがとう。それと僕を受け入れてくれたこともね」

お風呂に入ると、心もやわらかくなるようだ。

普段ならば、決して言わないようなことを僕は次々に口に出しているのだから。

と、そんな時後ろの方で動く気配があった。

「え？」

気が付くと僕の頭の上には唯の手があった。

「私も、ありがとう。あの時、通り魔から助けてくれて」

「……そうか。全て知って夢にはできないか」

まるで母親が小さな子供をあやすように撫でられている中、僕は納得がいった。

通り魔事件の際に、僕が取った行動を唯が夢だと思い込んだのも、

“魔法”という存在を知らなかったからだ。

だが、今は魔法という存在を知っている。知っている現象を夢にはできない。

「いつまで頭をなでてるつもり？」

「……ダメかな？」

後ろを見ずに、いつまでも頭をなで続ける唯に問いかけると、そんな言葉が返ってきた。

「勝手にしろ」

そんな彼女に、僕はそう答えた。

結局、唯が止めてくれたのはそれから数分後のことだった。

唯を先にあげてから僕も大浴場の清掃をすることにした。

こうして、魔界での一日は過ぎていった。

「ん……」

ふと目が覚めた。

「あれ……寝てたのか」

机の上には夏休みの課題が広がっている。

机の上に突っ伏すように寝ていたので、どうやらやっている最中に眠っていたようだ。

「……………夢？」

椅子から立ち上がり、固まった筋肉をほぐしながら、僕は自分に問いかけた。

日付は僕が魔界に帰った日の夕方だった。

どこか夢うつつな感じで、頭がボーっとしている。

(夢じゃない)

それだけは確信できた。

それほどまでに、僕にとっては驚きが強かったのだ。

だからこそあのハプニングのような出来事は、僕の記憶の中に鮮明に焼き付いているのだ。

「本当に、すごい一日だった」

なにせ予期せぬ形で、僕の最後の秘密を知られてしまったのだから、もしかしたら“史上最強の”というべきかもしれない。

だが、結果としてこれはこれで良かったのかもしれない。

なぜならば、僕はまたかけがえのない大事なものを得ることができたのだから。

僕という存在を受け入れてくれる“親友”を。

きつと、僕はこの日のことをこれから先も、忘れることはないだろう。

「さてー…音楽の方もがんばりますかー!」

そしてまた僕は新たな相棒であるギターを手にする。

それが、僕がこの世界で手に入れた相棒なのだから。

季節は夏真っ只中。

聞こえるのはセミの大合唱。

感じるのは心地よいそよ風。

見えるのは地面に照りつける陽の光。

(とりあえず、夏の課題をやるのはギターで軽く演奏をしてからにしよう)

そう自分に言い聞かせながら、僕は弦をはじき出すのであった。

2年生編 『合宿』

第54話 理想談義と恒例の

あの魔界騒動から少し経ったある日のこと。

「浩介——」

「ん？」

気が向いて散歩をしている僕に掛けられるよく知る人物の声に、振り向くと、手を振っている律の姿があった。

「こんなところで何をしてるんだ？」

「それはこっちのセリフだって。浩介こそ何をしてるんだよ」

今いる場所ではあまり見かけないだけに、不思議に思った僕の問いかけに、律が聞きかえしてきた。

「散歩」

「実に分かりやすい答えどすな」

「で、そっちは？」

律の演技じみた話し方をスルーしつつ、僕は律に尋ねた。

「私も、ぶらぶら——と遊んでるところ」

「そう」

（遊ぶって、勉強は大丈夫なのかな？）

ふとそんな疑問が頭をよぎるが、考えるまでもないので、聞かなかった。

ただ一つだけ言えたことは、

（絶対に夏休みの最後の日に地獄見るな）

ということだけだった。

そんなこんなで、ファーストフード店を通りかかった時だった。

「お」

「どうした？」

突然立ち止まって上の方を見上げながら声を上げた律に、僕は問いかけた。

「梓と憂ちゃんだ」

「ん？ あ、本当だ」

律に言われた通り上の方を見上げる。

店内で食事をするフロアの窓際の方に、憂と粹の姿があった。楽しげに何かの話をしている様子だった。

「それがどうかしたの？」

おそらく二人でお出かけでもしていて、その途中にここに立ち寄ったという感じだろう。

僕は、律の言わんとするところがわからずに聞いた。

「突入するぞ」

「……はい？」

律の返答に、僕は耳を疑って聞きかえしてしまった。

「浩介はあの二人の話の内容、気にならないのか？」

「ならない」

律の問いかけに、僕は即答で答えた。

何を話そうが二人の自由なわけで、それに対して一々干渉するのは失礼だ。

まあ、陰口を言われていたらそれはそれでショックだが。

「こうなったらっ！」

「うわ、ちよつと！」

取りつく暇もない僕の様子にしびれを切らしたのか、律は僕の腕をとると強引に引っ張っていく形で僕たちはファーストフード店に足を踏み入れるのであった。

「はいはい、もう分かったから腕を話して」

そしてそのまま二階の方に上っていくところで、僕は降参の言葉を口にした。

もうここまで来て抵抗するのも無駄なように思えちゃからだ。

「よし、それじゃ誰にも見つかからないように慎重に移動するんだ、高月隊員」

「はいはい」

いつから僕はお前の部下になったのかと心の中でツッコみながら、僕達は二階へ上がると窓際の席に座っている二人に見つからないよ

うに梓達の後ろ側の席に座った。

何とかバレずに済んだようだ。

「私、濤先輩のようなお姉ちゃんか、浩介先輩のようなお兄ちゃんがほしいかな」

「ッ!?!」

梓の言葉に、思わず声をあげそうになるのを必死にこらえた。

「何だか優しくて格好いいもんね」

「うん、それに浩介先輩も何だか頼りになるお兄ちゃんみたいだし」
「だって」

梓の言葉に、律がにやにやと笑みを浮かべながら僕の方を見てくる。

(僕は、そんなに面倒見は良くない)

心の中でそう反論しながら、僕は視線を窓の方に移す。

「それに浩介さん、なんだかんだ言ってもちゃんとやってくれと思うよ。去年の合宿の時にね、お姉ちゃんが着替えるための服を忘れたことがあったの」

「へえ。それじゃ、皆で戻ったの?」

思い出したように憂が口にしたのは、去年の合宿の際の一件だ。

あれはいろいろな意味で衝撃的だった。

何せ、人に取りに行かせといて自分たちはフルスロットルで遊んでいるのだから。

「ううん。気づいたのは電車に乗った後だったから、戻ったら到着するのがかなり遅れるらしくてね、浩介さんが代わりに取りに来てくれたんだ」

「へえ……」

感心したように相槌を打つ梓。

「何だか、私の名前が出てこなくない?」

「別にいいんじゃない? 悪い意味で出るよりは」

小声で話しかけられた僕は、同じく小声で返した。

「どうして私は悪い意味限定されるんだよ」

「それは……ねえ」

律の問いかけに、僕は律から視線を逸らした。

「こうなったら……あれで行くぞ」

「何をやる気だ？」

妙に力む律に、僕は思わず目を細めながら問いかけた。

「それじゃ、律さんは？」

(せ、声帯模写!?)

律が発した声色は、ほとんど憂とそっくりだったことに驚きを隠せなかった。

「うーん……いい加減で大雑把そうだから律先輩はパス、かな？」

(何気にひどいな、梓)

梓の律に対する見方に、思わず心の中でつぶやいてしまった。

「ほお？ 誰が大雑把だって？」

「のおおおっ!!!」

この日、梓の悲鳴が響き渡った。

「はあ、疲れた……」

「面白半分に電話するからだ」

ファーストフード店を後にした僕は、疲れ切った表情を浮かべている律に、相槌を打った。

何をしたのかと言えば、梓の『ムギ先輩はお嬢様なんですか？』の問いかけに、悪乗りした律がムギの家に電話を掛けたのだ。

そして電話に出た執事に、しどろもどろになりながらも応対して、無事に電話を切ったのだ。

「でも、本当に執事っていたんですね」

「そう言えば、浩介さんのところはいませんでしたよね？」

梓の言葉にふと思い出したのか、憂が聞いてきた。

「高月家と琴吹家ってどっちがすごいんだろう？」

「比較して何の意味が？」

あまりにも下世話な問いかけに、僕は顔をしかめが鳴ら律に問いかけの真意を聞く。

「いや、ただ単に興味が出たから」

「規模で言えば、向こうが上。ただし、家自体の資産だところちの方が向こうの数百倍は上だったと思うけど」

琴吹家は音楽業界で大規模に展開しているため、規模はかなり大きいのが特徴だ。

それに比べて、高月家は一つの世界のみで、限られた範囲のみの展開のため、どうしても規模では向こうより数百分の1と言ったところだろう。

だが、総資産では別だ。

高月家が保有する資産の金額は、数字にすることができないため、圧倒的大差だったはずだ。

「何、そのあべこべな家」

「僕は儉約主義なんだよ。メイドとか執事とか雇わず、自分自身ですべてを行うというのが僕の流儀で。だから、家の中全ての掃除をしようとするとは半年はかかるんだよね」

「そ、そうなんだ」

僕の愚痴に、律たちが苦笑しながら言葉を返した。

掃除に関しては切実な問題だったりする。

とりあえず、自分の手の届く範囲は掃除をするように言っているが、忙しさのあまり掃除が滞りがちなのだ。

とはいえ、執事や家政婦を雇う気は全くないが。

「あ、そうでした！ 私の家に来ませんか？ スイカとかがありますよ」

「行くっ！」

憂による唐突な話題の変更に、律は「スイカ」という単語によって即答で答えた。

（絶対にいつか律は「スイカをあげるからおじさんと一緒に遊ばないか」と誘われて、ついに行った挙句に誘拐されるな）

即答で答える律に、僕は思わず物騒な事を考えてしまうのであった。

そして僕と梓と律の三人で、憂の家に向かうこととなった。

「それにしても、浩介。私たち、どうやって浩介の故郷から帰ってきたんだ？」

「私も全く記憶にないんです。何か知ってますか？」

律の言葉に、梓や憂も続く。

律たちには魔界から帰る日の記憶がすべて消去されている。

『魔界のゲートについていくら被害者といえど、部外者に伝えることは黙認できない』

という父さんの一言が理由だった。

魔界と外の世界をつなぐゲートの管理や来訪者の認証などを行う施設、『入出国管理センター』は、魔界ではトップレベルの機密事項だ。

魔法使いで待階の住人であればまだしも、非魔法使いで、他世界の住人となるとおいそれと足を踏み入れさせるわけにはいかない。

だが、そこを使わなければ外の世界には行けない。

ではどうすればいいか。

その結論として挙げられたのが、全員の記憶を消去することだった。

その際、僕にも同様に記憶を消すようお願いしたのだ。

理由は自分にもよくわからない。

もしかしたら、自分だけが覚えていることに罪悪感を感じたからなのか、それとも自分も同じように記憶を消されることで罪滅ぼしでもしようとしたのか。

今でもわからない。

できれば前者であってほしいと思いたい。

「さあ……僕も覚えてない」

そんなことを考えながら、僕は三人に答えるのであった。

「ただいまー」

「『お邪魔します』」

平沢家に戻った僕たちは、憂がさりげなく出したスリッパをはくと階段を上がっていく。

「お姉ちゃん、律さんに梓ちゃんと浩介さんが来たよ」

「スイカ……」

「唯はスイカじゃな——」

上にいるであろう唯に声を掛ける憂の後ろで食べ物の名前を口に
する律にツツコみを入れていた僕は、目の前に広がる光景に言葉を
失った。

「お〜く〜え〜り〜」

そこにいたのは扇風機の前で床に寝そべりうちわで扇いでいる唯
の姿だった。

『……………』

その光景に、僕たちは言葉を失っていた。

(何だか、横の方からものすごく場違いなオーラが感じるんだけど、気
のせいかな?)

ほっこりというかうつとりというかさんなオーラが流れてくる。

(まあ、見え方は人それぞれとも言出し、別にいいか)

僕はそう自分に思い込ませることにした。

「よし、これで夏休みの課題は終了っ」と

夜、自宅に戻った僕は夏休みの課題をすべて終わらせることができ
た。

まだ8月には入っていないが、早めにやっておくに越したことがな
いだろう。

何せ、去年の一件がある。

それは、今年の8月31日の午前9時のこと。

『浩君！ 助けて!!』

『どうした!? 何があったんだ!』

電話口でいきなり告げられた唯のSOSに、僕は慌てて唯に事情を聴く。

『宿題が終わらないの〜!』

『は?』

電話口から聞こえた内容に、僕は耳を疑った。

『だからね、宿題がいっぱいあって終わらないんだよ!』

『一杯って……そんなに多く無いぞ。一体何をやってたんだ? 今まで』

再び電話口で説明するに、僕は疑問を投げかけた。

『え? それはね、アイスを食べたり家でゴロゴロしたり、ギターの練習をしたり、えっとそれから……』

唯の口から出てくるのはいずれも遊び（もしくは楽器の練習など）のみだった。

それを聞いた僕が言えたのは、

「勉強しろよ」

だけだった。

「結局、夏休みの課題の6割を僕がやる羽目になったんだよね」

去年のことを思い出しながら、僕は固まった筋肉を伸ばしてほぐしてから立ち上がる。

できれば、去年のようなことは起こらないでほしい。

というより絶対に。

変に憂鬱な気分になりかけているのもあれなので、明るい話題の方に考えをめぐらせることにした。

「そう言えば、合宿をやるんだっけ」

軽音部では去年に引き続き、今年も合宿を行うらしい。

今年は3泊4日の予定で、八月の上旬を予定しているとか。

「また、唯が寝坊したりして」

それだけは一番当たってほしくないことだった。

今年は新入部員梓を加えた合宿だ。

合宿を通じて、距離を縮めるのもいいだろう。

縮めると言っても、関係を良好なものにしていくことでいい音が出るということであり、そういう意味ではない。

「つて、僕は誰に弁解してるんだ？」

最近自分がおかしいのではないかと感じてくることがある。

(まあ、いつか)

深く考えずに、僕はそれで話を区切った。

「合宿か……」

そして考えるのは合宿のこと。

(僕も何か唯たちにプレゼントをしたいな)

皆には色々な感謝の気持ちがある。

プロのギターリストだと知っても顔色を変えずに今まで通りに接してくれたこと、僕という存在を認めてくれたこと。

そのお礼をしたいと思った。

「問題は、何をプレゼントするか……か」

あいにくと、僕は女子にプレゼントを渡したことはない。

一応妹はいるが、妹の好みは確実に普通の女子とはかけ離れたものとなっているので、参考にするのは無理だろう。

「となると、物はダメか」

下手に変なものを送ればすべてが台無しになるだろう。

(物以外で、僕にできるプレゼントと言えば……)

「あった」

僕はそれを思いついた。

おそらく、これが僕にできる一番のプレゼントだ。

「でも、これをするには皆の協力が必要だよね」

思いついたそれは、僕一人では決してできない事だ。

少なくともあと数人は必要だ。

「よし、ダメもとで皆に訊いてみるか」

僕はそう思い立つと、携帯電話を手にしてそのままある人物たちに電話をかけていくのであった。

「良かった、みんながOKしてくれて」

ある人物たちに電話を掛け終えた僕は、携帯電話を机に置いてほつと胸をなでおろした。

最初は拒否されるかと思ったが、二つ返事でOKだった。

「まあ、これで僕の練習時間が倍増になったけど」

そればかりは仕方がないかと割り切る。

「まずは、楽譜のデータを起こして人数分用意しよう」

そして僕はみんなに贈るプレゼントを用意するべく動き出すのであった。

こうして、ゆっくりとはあるが合宿に向けて僕たちは動き出すのであった。

第55話 買い出しと合宿

8月に入り、暑さもピークに達してきたこの時期。

「おはよっす」

「おはよう、浩介君」

「おはよう、みんな」

先に部屋に来ていた僕に、挨拶をしてくる唯とムギに、僕は先ほどまで読んでいた本（魔導書）を閉じながら応じた。

魔法使いであることがみんなに知られる前は、堂々と読むことはできなかったが、今ではこうして堂々と読むことができるのはある意味いいことかもしれない。

とはいえ、魔法のことを知らない人から見れば、ただの意味不明な文字の羅列にしか見えないので、誰も魔導書とは思わなかったりするが。

「あれ、何読んでるの？」

「魔導書と言って、辞典の魔法使い版」

閉じられた本を興味深げに覗き込む唯に、僕は分かりやすく答えた。

「読んでいい？」

「どうぞ」

「あ、私も見る！」

「それじゃ、私も」

「私も」

唯日本を渡すと次々に人が集まり、結局唯たち全員が本を覗き込むこととなった。

「詠めればだけど」

『うつ……』

僕が言い切った瞬間、全員が本の内容を見て、固まった。

「これ、何語？」

「僕の故郷で使われる文字。皆には絶対に読めない」

僕は唯から本を受け取りながら答えた。

「故郷の方は、言語は日本語が主流だけど、文字は故郷独特のものだから」

「そうなんですか。すごいですね」

「それはともかく、さっさと部活動を始めるぞ」

感嘆の声を上げる梓の言葉を退けて、僕は練習を始めるように促した。

「あ、ちよっと待って」

「どうかしたのか？ 律」

準備を始める僕たちを止めた律に、漑が疑問を投げかける。

「合宿のことをさわちゃんに伝えに行つてからでもいいか？」

「別に僕は構わないよ。顧問だし、良くいかないにもかかわらず伝えておいた方がいいと思う」

「私も。というより、言わないと怒ると思う」

僕の意見に、漑と梓にムギも賛成してくれた。

「それじゃ、ちよつくら伝えに行つてくるわ」

「あ、それじゃ私もー」

部室を後にする律の後に続くように、唯もついて行った。

「とりあえず、準備だけは進めよう」

「そうですね」

残された僕たちは、演奏の準備をしながら律たちが戻ってくるのを待つのであった。

程なくして、律たちは戻ってきた。

「先生なんだって？」

「面倒くさそうな顔をしてたから多分行かないと思う」

部屋に入ってきたときの不機嫌そうな表情で何となくわかつてはいたが、やはりNOだったようだ。

山中先生が合宿の本当の姿を知った時、どういうりアクションを取るのかが実に興味深い。

「全く、誘わなければ怒るくせに誘ってもああなんだから」

「まあまあまあまあ」

ぶつぶつと文句を口にする律を必死になだめるムギ（ちなみに6回

だった)の奮闘の甲斐もあって、機嫌を取り戻した律によって、練習は始められた。

一通り練習+ α (この“ α ”が何を差しているのかは想像に任せ)を終えた僕たちは、片づけをしていた。

西日が部室を照らす中、僕はギターの弦の手入れをする。手入れと言ってもただ弦をふくだけだが。

とはいえ、これが何気に重要だ。

これをしないと弦がさびやすくなってしまふからだ。

弦がさびるとどうなるかは、前にも言ったとおりだが、演奏中に切れてしまうのだ。

もちろん、拭けば絶対に錆びないということではない。

どうしても弦というのは錆びついてしまう。

だが、その速度を少しだけ緩めることができる。

ギター自体にも定期的にメンテナンスをしたりすれば、もつといいだろう。

閑話休題。

メンテナンスをしている中、律が突然立ち上がった。

「よし！ 久しぶりに全員そろった事だし、合宿の買い出しに行くか！」

「賛成！」

「おー！」

そんな律の提案に、全員が賛成の声を上げた。

それに続くように僕も手を上げえ、賛成に票を入れる。

(というより、この買い出してどう考えても、あれだよね)

僕は、何となくではあるが律たちが何を買おうとしているのかがわかってしまった。

何も知らずに賛同している梓に本当のことを言ってもいいのだが、夢というものはできる限り長く見させてあげたかったので、僕は心の中に留めることにした。

そんなこんなで、僕たちは商店街の方にやってきた。

先頭は唯に律とムギが横一列に並び、その後ろを僕と梓と漣という形でこれまた横一列に並んで歩いていった。

「ところで、買い出しというのは新しい機材とかを買うんですか？」

「軽音部に新しい機材を買う余裕はないです。ええ」

嬉々とした様子で漣に問いかける梓に、僕は即答で否定した。

「え？ それじゃ、何を買うんですか？」

「えつと……」

困惑した様子で再度漣に問いかけると、漣は梓から視線をそらして言葉を濁した。

そんな時、目的地に到着したようで、先頭の三人の足が止まった。

そして、カジュアルショップを指差して

「水着だよ」

と、自信満々に唯が告げた。

「遊ぶ気満々!?!」

唯の答えを聞いた梓は、驚きをあらわにした。

「こんなことだろうと思いました」

がつくりと項垂れながら話す梓の背中には哀愁が漂っていた。

「ま、まあ、ずっと遊ぶわけじゃないから」

「信用できないです!!」

「な、なぜ!?!」

律のフオローに頬を膨らませてだ限する梓に、律が後ろに下がりがら声を出した。

まあ、当然だけど。

「でも、息抜きは大事だと思うし、な?」

「そうですね……大事ですよね」

そんな梓に、漕がフォローすると梓は先ほどとは打って変わって納得したように頷いた。

そして漕が頭をなでると梓は嬉しそうにそれを受け入れる。

「この差はいつたいたいなんだろう?」

「日ごろの行い」

「君には遠慮という言葉はないのかね!」

律のボヤキに、真実を告げるとそんなツツコミが返ってきた。

僕はそれに肩をすくめて応じた。

結局、この後皆は水着を買いに向かい、僕は外で待つこととなった。

(本当に大丈夫なのかな? 合宿)

合宿まで残すところ数日。

一株の不安を抱えながらも、僕は軽音部合宿の前日を迎えることとなるのであった。

「あ、電話だ」

夜、合宿に向けての支度をしていると、携帯電話が着信音を鳴り響かせることで着信を告げた。

僕は、支度している手を止め、携帯を手にとると着信ボタンを押して電話に出た。

「はい、高月です」

『田中だ』

電話の相手は田中さんだった。

『この間頼まれていた件だが、都合がついた』

「いつですか?」

僕は田中さんに日付を尋ねる。

『そっちの合宿の二日目だ』

「二日目ですね。分かりました」

僕は忘れないようにメモ帳にメモを取った。

「田中さん、無理なお願いを聞いてもらってすみません」

『気にするな。俺も一度会って話してみたいと思ってたからな。ちょうどよかった』

田中さんにお礼を言うと、田中さんは軽快に笑いながら返事をしてくれた。

（一体どんな話をするつもりだろうか？）

そんな不安を感じてしまった。

「それじゃ、また明後日に」

『ああ』

そして僕は電話を切った。

「二日目……か」

やはり初日は無理だったかと、肩を落とす。

H & Pのスケジュールは8月をピークに入られている。

音楽番組への出演と演奏に、バラエティまで様々だ。

もつとも後者の番組は僕は出ないが。

バラエティなどは、僕が一番苦手なジャンルだ。

何せ、音楽以外で話をしていく必要もあるからだ。

話せないこともないが、確実にぼろが出るが出してしまう可能性がある。

そのために、僕はバラエティだけは出演を辞退して、ほかのメンバーだけの出演としていたのだ。

そして合宿の時期がちょうど、そのバラエティ番組の収録日だったのだ。

そのため、スケジュールの方を調整してもらった結果が今のとおりだったのだ。

僕が皆に頼んだ内容。

それは

「皆の曲を演奏するんだから、失敗はできないよね」

軽音部で演奏した『ふわふわ時間タイム』などの曲をメドレーにして演奏することだった。

それが、僕にできる贈り物だった。

既にメドレー用の楽譜も完成しており、練習もこれまでたくさんしてきた。

『こんなもんだらう』

という田中さんの意見が出たのはつい数日ほど前のことだった。

後は本番でうまく演奏をするだけ。

コンクールとかよりも緊張するよな、これ。

全くあべこべな状況で緊張する自分に苦笑しながら、僕は再び支度の方に取り掛かる。

「まあ、いい演奏ができるようにしますか」

僕はそう自分に告げるのであった。

そして、いよいよ合宿当日を迎えた。

翌日、待ち合わせ場所である駅で僕たちは待っていた。

いまだに來ていない、唯を。

「ちゃんと来るよな？」

「信じるしかないだろ」

濡の不安そうな問いかけに、僕はそれしか言えなかった。

去年の一件もあるので、大丈夫とは言えなかった。

「おはよー」

「お、今度は寝坊しなかったな」

そんな僕たちの前に、唯が現れた。

「今日の私は違うのです！」

「忘れ物は？」

「ふんすつ！」と、自信満々の様子で胸を張る唯に、僕は問いかけた。

「大丈夫！ 行く前に確認してきましたっ！」

「よおし、それじゃ、行くぞー！」

「おー!!」

唯の答えを聞いた律は気合を込めて腕を上げると、二人もそれに倣って腕を上げた。

そして僕たちは電車に乗って今回の合宿場へと向かうのであった。

『おおお〜』

合宿する場所に到着した僕たちは、その建物を見て感嘆の声を上げた。

石垣の上に立っている別荘は、去年の別荘よりもかなり大きかった。

(これまたでかいな)

思わずそんな感想を心の中で口にしてしまうほど大きく見えた。

「ここが前に言っていた、借りることのできなかつた別荘?」

そいえば、去年そんなことを言っていたなと思いだしながら、僕はムギの答えに耳を傾ける。

「ううん。そこは今年もダメだったの。高月君の家と比べて狭いかもしれないけど、我慢してね」

(ま、まだ上があるんだ……というより、僕を引き合いに出さないで)

項垂れながら僕は心の中でムギにツッコむ。

ちなみに、唯たちは唾然としていたが。

とりあえず、別荘内に荷物を置くことにした僕たちは、ムギが先導する形で別荘内に足を踏み入れた。

僕の寝室は、他のメンバーとは別だ。

当然だけど。

「ねえ、浩君も一緒に寝なくていいの?」

「い・い・の! というより男女が同室で寝るなんてまずすぎるだろうが。というよりそっち側が嫌でしょ」

少しだけ広い広間に、荷物を置く僕に今回で3度目の問いかけをしてくる唯に、僕は毅然とした態度で応えた。

「私は気にしないけど」

「私も〜！」

「私もよ」

「わ、私はちよつと……」

「私も」

構わないと告げる律に唯とムギの三人とは対照的に、頬を少しだけ赤らめて恥ずかしげにこちらを見てくる梓と漣が反対を告げた。

「な？」

「まあ、仕方がないか」

律が渋々と納得したことで、僕はみんなとは違う部屋で寝ることになった。

「でも、もし修学旅行とかで、同じ部屋に泊まることになったらどうするんだよ？」

「まず第一に、そんなことを学校側が許さないし、することはないと思うから考えるにも値しないぞ、漣」

律の一生ありえない内容を想定した問いかけに、僕は漣が考えるよりも早く突っ込みを入れた。

「ノリの浩君ノリが悪いです」

「あれが反抗期というものですわよ」

「誰？」

二人の演技じみたやり取りに、ツツコみをいれながら、僕は荷物を置いていく。

「遊ぶぞーー!!!」

「おーっ!!」

それからしばらくして、部屋を出ると入口の方から二人の声が聞こえてきた。

「うおおおおいつ!! 練習をするんだっ！」

入口の方にたどり着くと、握り拳を作りながら叫ぶ滯の姿があった。

「ぶーぶー」

「遊びたい！」

そんな滯に不満げに頬を膨らませて反論する律と唯は、しつかりと水着を着て浮き輪まで持つていて遊ぶ気満々だった。

「それじゃ、多数決にしよう。練習がいい」

「私もです！」

いつの間にか来ていた梓も練習へと票を投じた。

「遊びたいです」

梓と一緒に来ていたのか、二人の後ろにいたムギも遊びの方に票を入れた。

「まさかの裏切り!?!」

「浩介先輩はどうですか？」

「浩君も遊びたいよね？」

一気に浴びせられるみんなの視線。

僕の応え次第で、練習かそれとも遊ぶかが確定する。

ある意味責任重大だった。

(今練習をすと言つて明日も練習をするか?)

僕は自分に疑問を投げかけてみた。

その答えはもちろん

(無理だよ)

だった。

おそらく律たちは“昨日は練習したんだから今日は遊ぶ!”と言
い張るだろう。

だが明日は田中さんたちが、演奏などをするためにここまで来てく
れることになっている。

そんな日に遊んででもいたらどうなるか、恐ろしくて考えたくもし
たくなかった。

それならば、僕が出す答えはもう決まっている。

「遊びに一票！」

「いよっしやあ!!」

「やったー♪」

僕の返答に、律と唯が歓声を上げる。

「う、裏切られた?!」

「シヨックです」

そして、却下された練習の意思を出していた二人は肩を落としていた。

「大丈夫大丈夫。あの三人は明日練習で地獄を見ることになるから」

「本当ですか？」

僕の言葉に不安げに訊いてくる梓に僕はしっかりと頷いて答えた。

「それじゃ……」

澁々と承諾した二人は、着替えると言って戻っていった。

「僕も水着に着替えてくるから待ってて」

「合点です!」

律に待っているように告げてから僕は水着に着替えるべく、宛がわられた部屋へと向かうのであった。

第56話 合宿!!

「皆―、はやくはやく!」

僕たちの前を元気に走っていく唯と律。

その後ろの方で、僕たちはのんびりと歩いていた。

「全く、遊ぶことになる元気になるんだから」

濡はため息をつきながら何度目になるかわからない愚痴を漏らし
ていた。

とはいえ、全員水着姿だが。

僕は水着の上に黒いマントを羽織っていた。

これは去年と同じだ。

『そう言えば、ムギ先輩の遊びって……』

そんな時、梓の者と思われる声が頭の中に響いた。

梓は口には出していない。

これは心の声だ。

(あ、リミッターを解除しっぱなしだった)

常時人の心の裏を読まなければいけないため、読心術が常時発動状
態になっている。

それを制限しているのが勾玉のネックレスだったりする。

だが、それを水着を着ている際に付けているのはかなり目立つ。

そのために、外しておいたのだが、それがあだとなったようだ。

(首以外にはリストバンドにするしかないんだよね……)

『……まさかね』

そんな中、再び梓の声が聞こえた。

何のことを考えているのかわかった僕は、海の方に視線を向けて
みた。

「いや、そのまさかかもしれないぞ」

「人の心を読まないでください……え?」

顔を赤くして抗議してくる梓に僕は海の方を見るように合図を
送った。

海の沖の方から一隻のクルーザーの姿が見え、さらに浜辺にはパラソ

ルなどが立てられていた。

おそらくは、梓が想像したであろう通りの光景が広がっていた。だから、いらなくなって言っておいたでしょっ！」

そんな時、後ろの方からいつものおっとりとしたムギの雰囲気からは、想像がつかないほど慌てている口調の声が聞こえてきた。

「浜辺にある物をすぐに片づけて！ お船もいらぬい！」

「ムギ……」

「先輩」

飛び跳ねながら厳しい口調で指示を出すムギに、それを見ていた漕と梓が肩を落とした。

それから少しして、ムギの意向通りクルーザーとピーチパラソルなどは撤去された。

数人の人たちがさつとやって来てさつと帰っていった。

その動きはまるで忍者のようだった。

僕は人が来たのは分かったが、一瞬のことすぎて見ることはできなかったが。

残された最後の一つのピーチパラソルを適当な場所に立てて、浜辺にシートを敷けば簡単な日陰の腰掛場が完成した。

僕とムギ、そして漕と梓はそこに座ると海辺の方で、無邪気にはしゃいでいる律と唯の方を見ていた。

「よいしょ、よいしょ、よいしょ♪」

ムギは楽しげに何かを移動させるようなしぐさをしていたが。

「本当にちゃんと練習するんでしょうか？」

「大丈夫。＼させる＼から」

頬を若干膨らませてそれを見ていた梓の問いかけに、僕は安心させられるように笑みを浮かべながら答えた。

「そ、そうですか」

そんな僕の笑みに何かを感じ取ったのか、梓はひきつったような笑みを浮かべながら相槌を打った。

「あずにゃーん、浩君ー！」

そんな中、唯と律は僕と梓の名前を叫びながらかけてきた。

その手にビーチボールを持って。

「二人も一緒にやろ！」

「結構」

「私もです」

唯の誘いの言葉に、僕が断ると梓も続いた。

「ははあん。実は運動が苦手なんだな。いや、それは悪いことをしてしまったな」

「なっ!? そんなことありません、やってやるです！」

「後で吠え面かいても知らないからな！」

律の安い挑発に、僕と梓は見事に乗ってしまった。

それからはあつという間だった。

まるで引きずり込まれるかのように、遊びにのめりこんでしまった。

律と唯にムギの三人は浅瀬の方で海藻を持つてはしゃいでいる。

濡たちは海辺の岩のところが適当に歩いている。

かくいう僕も周囲を歩いているわけだが。

(やっぱり海はいいな)

海独特の潮の香りを堪能した僕は、心の中でつぶやく。

「ん？」

そんな時、ふと何かの違和感を感じた。

(何だったんだ?)

それは気配のようにも思えたが、周囲には誰の姿も見かけない。

「まあいいか」

せつかくの合宿だ。

水を差すようなことをするのも気が引けるので、僕は特に気にも留めなかった。

「うわあああああ!!!」

「な、何事?!」

そんな中響き渡った絹を裂くような悲鳴に、僕は驚きながら声を発している人物の方に視線を向ける。

その人物は、耳を押さえながら逃げ出してしまった。

(あれって、滯だよな……一体何を言ったんだ？ 梓)

僕は近くで呆然と立ち尽くしている梓に、心の中で問いかけた。そんな梓に向けて律が親指を突き立てて笑っていたのは余談だ。

「よし、スイカ割りをするぞー！」

「「おー!!」」

律の呼びかけに、僕と梓(この場にはいない滯もだが)以外が手を空に向けて突き上げることで返事を返した。

「でも、スイカ割りだったら、ダメーもないと」

「そうなの？ 唯ちゃん」

唯が口にした言葉に、ムギが聞きかえした。

それに唯は頷くことで答えた。

「そんなものあったかしら……」

「定番どころとしては人だぜ」

律の言葉で、なんとなく嫌な予感がしてきた。

「人？ それじゃ、誰がいいのかしら」

「それだったら、適任がいるぜ」

首をかしげて悩むムギに、律は僕の方を見ながら笑顔で答えた。

「浩介というね！」

「……………おい」

「でも、もし間違えたら浩介先輩がけがをするんじゃない……」

律の言葉に、梓が異論を述べた。

そして心配そうにこちらを見てくる。

だが、そんな問いかけに、律は表情を変えることはなかった。

「大丈夫だって、なんたって浩介は魔法使いなんだし♪」

「あ、そうですね」

律の言葉に、梓は態度を一変させて、簡単に納得してしまった。

「納得するなよ！」

「はいはい、浩介ちゃん、いい子だから大人しくしましょうね」

僕の肩に手を置きながら律が満面の笑みを僕に向ける。

「唯、ムギ！」

「合点です！」

そして律の指示を受けて、どこから取り出したのかスコップで穴を掘り出した。

「あ、あのね。確かに防御障壁という系統の魔法はあるけど」

「だったら、いいんじゃない」

その間も僕は必死に抵抗する。

とはいえ、力で行ったらず下手すると怪我をするので口頭でだが。

「でも、人には得手不得手と言うものが——」

「よし！ 準備はオーケー！」

「つて、人の話を聞け!!」

僕の話を見殺した律たちによって、僕は穴の中に入れられた。

(というより、よく短時間で掘れたよな、この穴)

二人の体力に僕は舌を巻いていた。

僕の身体はすっばりとはまり、砂を隙間に入れられることで出ていくのは顔だけになった。

そして横にはスイカが置かれた。

「まずは梓からだ！」

「え？ わ、私ですか?!」

律の言葉に、梓は驚きと不安の色を浮かべながら反応した。

「そうだけ。これで目隠しをしてからするんだぞ」

「え、ちよつと律先輩！」

「はい、あずにゃんじつとしていてね」

とんとん拍子に話が進んでいき、話について行けないであたふたとしている梓に、唯は笑顔で白いハチマキをすることで目を覆った。

「それじゃ行ってみよう！」

「え、えつと。間違えたらごめんなさい！」

(怖いこと言うなよ)

前もって謝ってくる梓に、僕は心の中でつぶやいた。

「あずにゃん、まっすぐだよ」

「あ、ちよつと左よ！」

「いいや、右だ！」

(な、なんかこつちに来てないか?)

唯たちの誘導に従って歩く梓は、少しずつこつちによってきているようにも思えた。

「よし、そのまままっすぐ」

「違うよあずにゃん、左だよ」

「お、おい梓そつちじゃない。左だ左！」

完全に僕の正面を歩く梓に指示を出すのが、聞こえていないのか方向感覚がおかしくなったのか、まるで吸い込まれるように僕の方へと歩いてくる。

「ち、ちよつと。嘘でしょ？」

そして僕の目の前で立ち止まった。

余計なことを考える暇など僕にはなかった。

「ええい！」

梓は手にしていた木刀を力いっぱい振り下ろしてきたのだ。

……僕に向かって。

「のわああああ!! シール!!」

とつさの判断だった。

僕は自分を覆うように防御障壁を展開した。

運よく、防御障壁は梓の一撃を持ちこたえてくれたようだ。

「こ、浩介先輩!! 大丈夫ですか！」

「あ……あははは。本気で背筋が凍ったぞ」

何気に任務などで僕が体験した修羅場以上に、恐ろしく感じた。

「す、すみません」

「大丈夫。当たってないから」

申し訳なさそうに謝ってくる梓に、へなへなになりながら応えた。

「よし、次は唯！」

「お前は少し自重しろ!!」

「きゃ!!」

なおも続けさせようとする律の言葉に、僕の中で何かが切れた。勢いよく砂から出ると律の前に移動する。

「へ？」

「拘束！」

そして僕は律に向け、手を掲げると一言告げた。

「ちよ、ちよつと。腕が動かないんですけど!」

「当然。拘束魔法だもん」

両腕が気を付けの姿勢で動かなくなった律に、僕は当然だと言いつつ返した。

「はい、行きましょうね」

「あ、あの浩介さん。どこに連れて行くおつもりで?!」

僕は律の腕を引っ張り先ほどまで僕が入っていたスイカの横の穴に入れた。

「ま、まさか」

「そのまさかだ。恐怖のスイカ割りパーティーと洒落こもうじゃないか。ククク」

僕は笑いながら、青ざめた表情を浮かべる律に告げた。

「あ、あの浩君?」

「あん? 何かよう?」

「い、いえ。なんでもないっす!」

唯の呼びかけに、僕は振り返りながら訪ねると肝心の唯は首を横に振った。

「斬るのは……こいつだな」

僕は格納庫から一本の剣を取り出した。

「ちよつと、それ真剣じゃないよな?!」

「……もちろん」

「今の間はなんだ!」

僕の返答に、律がツツコミを入れた。

ちなみに、完全に真剣だ。

「それじゃ、行くぞ」

「ちよ、ちよつとまつ——」

僕は剣を持つ手に力を込める。

「一刀……両断!」

「うわああああ!」

離れた場所からスイカにめがけて剣を振り下ろした。

斬るのは剣先ではなく一種の衝撃波のようなものだ。

スイカに向かって放たれた衝撃波は狙い通りにスイカの方に向かい、やがて人数分にスイカを切ることができた。

「おーっ」

そんな僕に拍手を送る梓達。

「さあ、食べよう！」

「わーい♪」

僕の言葉に、唯は両手を上げて喜ぶとスイカの方へと向かった。

「あの、私を出してくださいませんか？ 浩介様」

そんな中、わざとらしい態度で律が僕に頼んできた。

（まあ、僕と同じような恐怖心を味あわせることができたんだし、いいか）

僕は無言で指を鳴らす。

「もう動けるから、出るのはご自分で」

「お、本当だ」

腕が動くようになったのがわかったのか、律は砂の中から腕を出すと這い出るようにして出てきた。

「何をするんだよー」

「冗談でも、強引にはやるべきではない……いい教訓になっただろ？」

「……大変失礼しました」

僕の言葉に、律が項垂れることで、僕の勝利は確定した。

僕は律にスイカを手渡した。

「どうも」

そして僕たちはスイカを口にするのであった。

ちなみにスイカはともみずみずしくておいしかった。

「そう言えば、滯は……って、まだ逃げてる」

滯の分のスイカがあるので、渡そうとしたが、滯はいまだに逃げ続けているのか耳を押さえて走っていた。

「……………保冷魔法でもかけておくか」

僕はとりあえず保冷魔法をかけてスイカが腐らないようにしておくのであった。

そのあとも色々と遊びつくした。

海では唯が再び海藻を見つけたり、浜辺の日陰となつているところでアイスを食べたりした。

「浩君、頂戴」

「ダメ」

唯がアイスを狙ってきたが、僕はそれを一蹴した。

「あずにゃん」

「ダメです」

梓の方にも向かったが、梓も即答で断った。

「二人のケチ」

「ケチとかじゃないと思うぞ、唯」

口をとがらせる唯に、律がそれとなくツツコミを入れた。

アイスを食べ終わった後は、前回恒例(?)の唯をモデルにしたアトなどをしたりした。

今年はナイスボデイだった。

そして、実際にその通りになった。

どういう意味なのかは絶対に言わないが。

「作り出したら止まらなくて」

照れたように頬をかくムギの横には大きな砂の城が立っていた。

「す、すごいです」

「こんなにすごいのをよく作るよな」

もはや一つの芸術作品の域にまで達している砂のお城に、僕は首をかしげるのであった。

そんな楽しい時間はあつという間に問題なく過ぎていく。

とはいえ、問題があるとすれば、

「あわわわわ」

先ほどから、某数世代にわたって盗んでいる3世代目の人のごとく逃げ続けていた澁だろう。

疲れたのかどうかは定かではないが、地面にうづくまり耳に手を当てて震えていた。

「澁」

「あ、あははは……私としたことが——」

律に声を掛けられたことで正氣に戻ったのか、誤魔化すように笑いながら立ち上がり声を掛けた律の方に振り返る。

そこに立っていたのは、海藻を頭にかぶった律だった。

「……………」

「み、濡り!」

「濡ちゃん、しつかり!」

律の姿に驚きを通り越して氣を失って後ろ向きに倒れる濡に、僕たちは慌てて駆け寄った。

結局、濡が目を覚ましたのはそれからしばらく経った時だった。

「うはあ……疲れた」

「遊んだー」

一通り遊びつくしたのか、浜辺に背中を合わせて座り込む律と唯が言葉を漏らした。

「練習はどうするんだ?」

「明日でいいや」

手を横にあてながらの濡の問いかけに、律は間の抜けた口調で答えた。

(というより、今年は忘れてなかったんだ)

「やっぱり最初に練習をしておくべきだったじゃないですか」

どうでもいいことを考えている中、僕たちの前に呆れたような口調で言う梓が現れた。

その言葉はすごく説得力があった。

とはいえ、

「梓だって、いっぱい遊んだじゃん。真っ黒になって」

肌が黒く焼けていなければの話だが。

「っ!? 私は練習をするもん」

(〃もん〃 って……時より梓の口調がおかしくなるよな)

敬語を使い忘れたりするところがまた、人間味があつていいと思う。

何となくではあるが、来年の新生の勧誘はいろいろな意味で苦勞しそうだと感じた瞬間だった。

「ははん。それじゃ、一晩中?」

「……、するもん!」

律の言葉に頬を赤くした梓の叫び声が、青空へと響き渡るのであつた。

第57話 夏の風物詩

遊び終えた僕たちは水着から普段着へと着替え、ムギの案内の元別荘にあるスタジオへと向かった。

「ここよ」

「それじゃ、失礼して」

ドアの上側に円型のガラスがありそこで中の様子が見えるようになっていた。ドアの取っ手を濡が抑えた。

すると空気の抜けるような音と共に、ドアが開いた。

「疲れた〜」

「お腹すいた〜」

「我慢しろ」

唯と律の訴えを濡は一言で一蹴した。

「うわあ、すごいな」

そのスタジオを目の当たりにした濡が感嘆の声を上げた。

広さはダンス教室並みの広さ(数字にすると数十畳ほど)を誇り、奥の方には様々な機材が置いてあった。

「あ、あんなアンプ見たことないです」

そんな機材の数々に、梓は言葉を失っていた。

(ここなら、練習には申し分ないな)

前日もそうだが、今回も練習場としては最上級クラスのスタジオに、僕は改めてムギの偉大さを感じるのであった。

「濡、濡」

「何? 律」

そんな中、いつの間にかドラムの前でスティックを構えた律が濡に声を掛けた。

「早く練習をしようぜ。スネアが新品だ」

(物に惹かれて……現金な性格だよな)

とはいえ、練習する気になっている律に水を差すのもあれなので、僕は何も言わずに練習の準備に取り掛かった。

それぞれが自分の楽器のセッティングをしていくなか、僕の方も簡

単にはあるがチューニングが終わった。

後はチューナーを使って確認するだけだ。

二度手間になるかもしれないが、最終確認なので、それほど面倒にはならない。

「ねえあずにやん。それなあに？」

「これですか？ これはチューナーですけど」

そんな中、チューナーを使ってチューニングをしている梓が珍しいのか、チューナーを珍しそうに見ながら尋ねる唯に梓は怪訝そうな口調で答えた。

「チューナーを見たことがないんですか？」

「うん」

梓の問いかけに、唯は覗き込みながら答えた。

「それじゃ、どうやってチューニングとかをしてるんですか？」

「えっと、こうやって適当に……ほら」

ペグを適当に回した唯は右手をストロークさせることによって音を鳴らした。

開放弦だったが、その音に乱れはなくしっかりとチューニングがさ
れているようだった。

「ぜ、絶対音感!?!」

今日の前で唯が行った芸当で、唯の持つ才能に気づいた梓が驚きの
声を上げる。

とはいえ、当の本人は全くそれを理解している様子ではなかった
が。

やがて、全員の準備が終わり、いつでも演奏ができる状態になった。

「どういう風にやる？」

「時間も時間だし、今回は全曲通しで演奏していく形でいいと思う」
律の問いかけに、僕は今の時間と律たちの疲労状態を考えてプラン
を口にした。

海で散々泳ぎまくった律たちはおそろくかなり疲れがたまってい
る状態。

そんな状態で演奏の練習をしたところで、逆効果だろう。

それに今回は三日間ある。

初日は通して練習を行い、次の日からはあげられた問題点の克服練習にあてる形をとれば十分だろう。

(後は遊びたがる律たちをどう動かすかか)

こればかりはかなりの難題だ。

だが、考えていても始まらないのでまずは今回の演奏に集中することにした。

「クリエイト、録音をお願い」

「了解です。マスター」

とりあえず音の録音はクリエイトに頼むことにした。

「それじゃ、まずはカレーから。1, 2, 3, 4!」

律のリズムコールで始めたのは『カレーのちライス』からだった。

そこから通してリストに前もって書き上げておいた曲を演奏していくのであった。

「今の、いい感じじゃなかったですか?」

「ぴったりだったね。唯ちゃんもすごくすてきだったよ」

演奏をし終え、興奮冷めやらないと言った様子で声を上げる梓にムギが返事をする、唯に称賛の声を掛けた。

褒められた唯は嬉しげに顔の前で手を横に振っていた。

「浩介君もとてもよかったよ」

「どうも」

うまく弾けて当然の僕ではあるが、それでもうれしく感じるものだ。

「律もリズムキープがよくできてたよな。練習でもしたのか?」

今回の一番の上達を見せたドラムの律にも滯は感心したように問いかけた。

今回の演奏は一貫してリズムキープができていた。

完璧とは言えないものの、これまでのような感じは一切しなかった
ので、これは上達と言っても過言ではない。

「お腹がすいて力が出ない」

「お腹がすいたから余分な力が抜けたのね」

ぐったりとドラムに突っ伏す律に、漑はあきれた様子で声を上げた。

「お腹すいたら、飯食わせろー!!」

そして、大きな声で律は欲望の限り叫んだ。

「私も」

「そうだね。今日はこれで切り上げるか」

遠慮がちに手を上げるムギの一言と、僕の一言で、練習はお開きとなった。

「戻ったよー」

周囲が夕日の明かりに照らされる中、夕食の買い出しを済ませた僕たちは別荘へと戻ってきた。

「ほら律ちゃん。お肉だよー、お野菜だよー」

別荘で留守番をしていた一人の律（ちなみにもう一人は漑）の前に唯が野菜とお肉の入った袋を掲げる。

「うわ、丸ごとキャベツ！ こうなったら丸ごとでも！」

「少しは我慢しろ」

本気でキャベツを丸ごと食べようとする律を漑が止める。

「キャベツの、キャベツの神様が降臨したぞお……………」

「それじゃ、私火の方を見ますね」

非常におかしなことを口に行っている律をしり目に、梓はそう言いながらコンロの方へと向かっていった。

結局律は濡の“後輩が率先してるんだから”の一言で、渋々と持ち上げていたキャベツを下した。

今回の夕食はBBQ……通称バーベキューだ。

ここで問題になるのが僕の役割。

正直言つて、もう僕のやることはない。

コンロの火はムギが見ているし、野菜を切るのは律と唯がやっている。

おにぎりの方は濡と梓の二人がやる。

「僕、何かやることある？」

「えーっと……それぞれのお手伝い、かな？」

ムギに尋ねてみると、何故か疑問形で返されてしまった。

「分かった」

僕は頷くと最初に野菜を切っている律たちの方へと向かう。

「律ちゃん。死ぬときは、一緒だよ」

「……………何をやってるんだ？ お前ら」

涙を流しながら律と二人で手を組んでいる二人の姿に、思わずため息をつきそうになるのをこらえながら問いかけた。

「玉ねぎを切ると目に染みて涙が出るんだよ、浩君」

「知ってるし。というより、常識だし」

当然のことを大発見したように言ってくる唯に、僕は肩を落としながら相槌を打つ。

「それに、目にしみるんなら、しみる前に切ればいいんだ」

「それって、どういう意味だ？」

僕の言葉の意味が分からなかったのか、首をかしげている律から玉ねぎを取ると、僕は何もないところで人差し指を伸ばすと数回ほど左右に動かす。

そして人差し指をそのまま素早く縦に動かしていく。

「こういうこと」

「うわ!?」一瞬で玉ねぎが切れた!」

僕が言い切るのと同時に玉ねぎは律が切っていたように切れた。

「風邪を利用してかまいたちを起こしてみた」

「べ、便利だなー」

拍手をする二人に、僕は、

「他に切る野菜とかある？」

と、尋ねた。

「それじゃ、浩君はキャベツの千切りをお願いね」

「分かった」

半分に切られたキャベツを受け取った僕は、横に置かれた包丁を手にキャベツを刻んでいく。

「むむ……包丁使いづらい」

剣などを使っていなれているせいか、どうしても包丁になると思うように切れない。

「浩介、この前料理してたじゃん」

「あの時も包丁を使ってたんだよね？」

僕のボヤキが聞こえたのか、律と唯が声を掛けてきた。

「あの時は最初は包丁でやろうとしたんだけど、やりづらくてこれを使っただ」

「な、ナイフ？」

「そんなものでどうやって切ってるんだ？……」

僕が取り出したのはただのキッチンナイフ。

僕はそれを外側に刃が向くように構えた。

そして、僕はキャベツに向き合うとナイフを数回ほどキャベツの上で往復させる。

「う、うそ!？」

「す、すごい……」

一振りで、キャベツの千切りを完成させた僕に、二人は言葉を失っていた。

「一振り二撃……一回振っただけで二回分のダメージを与える技法。料理にも役に立つよ」

「立つかい！」

僕の言葉に、律から鋭いツツコミが入った。

「ナイフ禁止！ 時間かかってもいいから包丁で切れ！」

「……………了解」

律の強い言葉に圧されるようにして、僕は応じるとナイフをしまつて包丁を持つと野菜を切っていく。

時間はかかったものの、野菜を切り終えることができた。

切った野菜をまとめておいた僕は、一番奥の方のおにぎりを作るブースに向かった。

「僕も手伝ってもいいかな？」

「もちろん。そっちの方は終わったんだよな？」

濡に声を掛けると、二つ返事でOKが出た。

濡の問いかけに僕は頷くことで答える。

「それじゃ、浩介もお願い」

「任せて」

そして僕は濡と梓と共に、おにぎりを握っていく。

僕よりも先に、梓と濡は握り終えたらしくお皿の上におにぎりが二つ置かれた。

小さなおにぎりだと、大きなおにぎりが。

「……………」

濡の方を見てみると、自分の手のひらを呆然と見ていた。

「濡ちゃんの手が大きいのかしら？」

「うるさいっ！」

そんな濡の様子の原因がわかったのか、からかうような口調で律が濡に声を掛けると大きな声で叫んだ。

「でも、おにぎりは大きいほうが僕にはありがたいかな。ポリウムがよさそうだし」

「そ、そうだよな」

僕のフォローに濡は何とか持ち直したようだった。

その後も、僕たちはおにぎりを握っていく。

三人ということもあり、おにぎりはすぐに完成した。

その後お肉や野菜などを鉄串に均等に刺していく。

律がお肉だけさすという暴挙をしていたが濡によって元に戻された。

そして完成したのをコンロで焼いていく。

「変わるよ」

「ありがとう、浩介君」

コンロで焼いている料理を見ているムギと、僕は交代した。

そうでないかと、ムギがずつと見続けることになり食べられなくなるかもしれないからだ。

食事中、楽しそうな話声が尽きることはなかった。

「はあー……おいしかった」

「満腹じゃ」

食事を終え、唯は椅子の上にもたれかかりながら食事後の余韻を感じていた。

「それじゃ、今度は花火しよう」

そう言っつてムギが取り出したのは二つの花火セットだった。

「でも、火はどうするんだ？」

「それなら僕に任せて」

律の言葉に、僕はそう答えると右手を一回転させた。

その仕草で一枚の紙を取り出す。

「それはなんの紙ですか？」

「火の魔法陣。魔力を込めれば火を起こすことができる」

梓の疑問に、僕は簡単に答えた。

これは遭難した時に暖を取るための魔方陣だ。

他にも水を出すことができる魔法陣等もある。

「これを使えば、節約になるでしょ」

「おお。それじゃ、やろうやろう！」

ということ、僕たちは場所を変え別荘の入り口の階段を降りたところで花火をすることとなった。

魔法陣を風が吹いても燃え移らないところの地面に置き、四方を石などで固定するとそれに向けて手をかざす。

たったそれだけで火の手が上がった。

「ん？」

その時、再び気配を感じた。

「……………」

周囲を見渡しても気配を発しているであろう人の姿はない。

これは唯たちの気配でもない。

(おかしい)

昼間に海で感じた気配といい、今回の気配といい。

(これは、少し注意する必要があるか)

「うわ、もう点いてる」

そんな時、後ろの方から唯たちの声が聞こえたので、僕は視線を唯たちの方へと向けた。

「残念、見ようと思つてたんだけど」

一足早く火を点けた僕に、残念そうに肩を落とすムギ。

「それよりも、花火をするよ」

「それじゃ、まずはこれから。はい、唯と梓とムギと漣に浩介の分」

まずは普通の棒状の花火を、律が僕たちに手渡してきた。

そしてそれぞれが花火に火を点けていく。

「うわあ、律ちゃん隊長見てくだされ！」

「おおー、だが唯隊員、こっちも負けてはいないでございますわよ！」

花火から出る色鮮やかな火に、律と唯は大はしゃぎしていた。

「子供か、まったく」

「まあまあ。楽しみましょう♪ね、漣ちゃんに梓ちゃん」

「あ、はい」

ムギの呼びかけに梓は頷くと、花火に視線を落としました。

それぞれが、花火を楽しんでいる。

それでも、すぐに花火はなくなってくる。

「残ったのは線香花火か」

「よおし、誰が一番長いか競争だ！」

「負けないよ〜」

線香花火を手にした律の言葉に、唯が気合を入れた様子で勝負に乗った。

こうして、線香花火勝負となった。

『……』

全員が無言で線香花火を見つめる。

「あつ。落ちちゃった」

一番最初に落ちたムギに、梓は柔らかい表情で相槌を打った。

「あはは、わかるわかる。何となくがんばれ〜って言いたくなるんだよな。がんばれ〜がんばれ〜」

「私だって。がんばれ〜がんばれ〜」

苦笑しながら律はムギに言う、線香花火を見つめながら念じ始めた。

「よおし、私ももう一本」

どうでもいいが、勝負のことは律の頭の中から完全にすっ飛んでいくようだった。

唯と律にムギの三人の“がんばれ〜”という念じの声がしばらくの間聞こえていた。

ちなみに僕の場合は、それをするところくなことが起こらないので、やらなかったが。

「あ、律ちゃん。花火が消えちゃいそう」

「そういう時は合体させるんだ!」

線香花火が消えそうになった唯の言葉に、律がそう告げると二人の持つ線香花火をくつつけた。

「合体! 線香花火モン!」

「あ、ずるい」

何だかいかつい名前を叫ぶ二人に、うらやましそうに声を上げるムギ。

(というより、そんなことしたら)

「ああ! 落ちちゃった」

「なんとということだつ!」

「……アホ」

案の定完全に消えてしまったことに落ち込んでいる律に、濔がポツリとツツコんだ。

そんなこんなで、花火は幕を閉じた。

「重くない?」

「はい、大丈夫です」

花火の片付け作業をしている中、一番重であろう水の入ったバケツを持つ梓にムギが尋ねた。

「でも、僕が持つよ。というよりもたせて」

「あ、はい」

完全に手持無沙汰になっていた僕は、半ば強引に梓の手にあるバケツを受け取った。

(まずいな)

バケツの中にある花火を所定の場所に捨ながら、僕は危機感を感じていた。

というのも、先ほどの気配がさらに強くなり始めているのだ。

(早急にみんなを中に入れたほうがいいか)

現在は大丈夫だが、いつこども危険になるかがわからない。

力を持つ者として、みんなを危機から守る責任がある。

皆を中に入れようと決心しながらも完全に片づけを終えた時、再び律が立ち止った。

「よし、肝試しをやるぞ!!」

「次から次に遊びを思いつくな」

「夏と言えばやっぱり肝試しだよね!」

拳を握りしめて力説する律。

「私はやらないからな」

「ははん? そうだよなー、濔ちゃんは怖いのが苦手だもんなー」

断りの言葉を口にする濔を煽るように律はいたずらっぽい笑みを浮かべながら濔に相槌を打つ、

「なっ!? 全っ然余裕よ。やってやろうじゃない!」

そんな律の手のひらに乗せられるようにして、漣は賛成に回った。

「僕は反対」

「おやおや、男で魔法使いで死神が怖いからいやだと言っただけ」

僕の反対の意見に、律が薄ら笑いを浮かべて僕を煽る。

「そんなわけではない。肝試しなんて全然余裕だ」

頷けばいいものを、余計なプライドが邪魔をした。

「いよっしや! それじゃ、組み合わせは……」

とうとう障害がなくなり、話は進んでしまった。

こればかりは危険すぎる。

何かが起こるような予感がしてならなかった。

(もうここまで来たら無理か)

それほどまで肝試しをやるという雰囲気が形成されて辞めさせることが不可能な状態になっている。

「ということ、組み合わせは漣と梓、唯とムギと浩介に決定しました!」

「おお〜」

考え込んでいる中、すでに組み合わせは決まったようで、唯とムギが歓声を上げながら手を叩いた。

「皆、ちよつといい?」

そんなみんなに、僕は声を掛けた。

「何だよ。今更辞めるは無しだぞ?」

「そうじゃなくて。もし何か起こったたら、その場を動かずに大きな声を上げて。すぐに駆けつけるから」

「駆けつけるって、まるで何かあるみたいない言い方ですね」

僕の言葉に、梓が鋭く切り返した。

(下手にみんなを怖がらせてもまずい)

何より、確証がない段階で断言することはできない。

「念のためだよ念のため」

そのため、僕はお茶を濁して言うことにした。

「それじゃ、最初は漣たちからな。私は向こうの森の方でちよちよい

としかけるから。5分後に森の中に入るんだぞ。で、それから5分ほどしたら浩介たちな」

「はい」

唯たちの返事に満足したのか、律はそのまますたと肝試し会場と思われる森の方へと向かっていった。

僕は何も起こらないことを祈りながら、律の背中を見送るのであった。

第58話 肝試しと

今現在、濡から少し遅れるようにして森の中に入った僕たちは、律に指示されたルートを通っていく。

「何だか、雰囲気があるわね」

「そ、そうだね」

「あの、二人とも。それをいうのなら、せめて僕の腕を話してからにしてくださいませんか？」

僕の左腕に唯が、右腕にムギがそれぞれ掴んでいるのを見ながら、指摘した。

「だって……」

「とつても怖いんだもん」

二人でタイミングよく答えてきた。

「男の子でしょ？」

「そう言う問題でもないんだけど。というより、歩きづらいし」
ムギの言葉に、反論しながらも僕は周囲に視線を配る。

(感じる。ものすごく強い邪気だ)

森の内部に入って進めば進むほど、深く濃い邪気を感じる。

邪気というのは人の邪な気持ちや恨みつらみなどが形となって現れるオーラのようなものだ。

ここの言葉でいうと、“霊気”と言ったほうが正確だろう。

僕が感じたのは、幽霊の気配だったのだ。

そして、おそらく霊体がいるのはこの森の中。

正確な位置は特定できていないが奥の方であるのは間違いない。

(とにかくとつとと終わらせよう。最悪な事態が起こる前に)

僕は心の中でつぶやきながら周囲を警戒する。

そんな時だった。

「ひいひいひい!!!」

「ッ!」

突然奥の方から絹を裂くような悲鳴が響き渡った。

僕は突き動かされるように駆け出そうとしたが、それを遮るものが

二名。

「うわ!? いきなり走り出したら危ないよ」

「そうだよ、浩君」

「ごめん。二人の存在を忘れてた」

抗議の声を上げる二人に、僕は素直に謝った。

そしてできるだけ早く濡たちの方へと向かうことにした。

さすがに、両腕は離してもらったが。

「大丈夫……」

人影を見つけた僕が最初に人影の方に駆け寄ると、そこにいたのは梓に肩を支えられている山中先生の姿だった。

「つて、さわちゃん先生どうしたんですか? というより何でここに
いるんですか?」

「何気にひどいな、唯」

何気なく毒を吐く唯に、僕はツツコミを入れた。

「皆を驚かそうと、思ったけれど道に迷って」

「驚かせる目的は成功してますけど」

山中先生が告げたある意味くだらない理由に梓がそうつぶやいた。

そして後ろの方に目を向ける。

僕もそれにならって億の方に視線を向けると、そこにはムギによつて介抱されている、濡の姿があった。

(ありや、完全に気を失ってるな)

僕は心の中でため息をついたのであった。

結局濡が気を取り戻した後に、山中先生を連れて別荘の方へと僕たちは戻った。

「はあ……やっと着いた」

「ちやんと行くって言っていればよかったのに」

別荘に到着した途端、脱力した様子で床に座り込む山中先生に、唯があきれた口調で言い返した。

「だって、バーベキューとか泳いだりとかするだなんて知らなかったんだもん！」

「子供ですか。アナタは！」

山中先生の来る事となった理由に、ツツコんだ。

というより、もうそれらは終わっているんだが。

(あれ、そう言え何か忘れているような……)

ふと、何かを忘れているような気がした。

「そう言えば、律ちゃんは」

「「「あ」」」

山中先生の問いかけで、ようやく僕はそれが何だったのかに気づいた。

(よりによって律を忘れてた！)

慌てて探しに行こうとしたところで、玄関のドアが開いた。

『きゃああ!?!』

突然のことに、みんなが悲鳴を上げた。

「わ、私を……忘れるな！」

大きな声を上げて現れたのは律だった。

「り、律ちゃん」

「ご、ごめんね。さわ子先生が来ていたことで思わず」

息を切らせながら怒る律に、ムギが必死になだめた。

「ま、まあ……いいけど」

「というより、そのこんにゃくはなんだ？」

手に持っていた棒の先にひもでくりつけられた板こんにゃくに気づいた漣が疑問を投げかけた。

「これか？ これは通りかかったやつに、こうやってペタ——つとおお!!?」

「ふん——」

こんにゃくを漣の頬にくっつけた律の頭に、漣の鉄拳が振り下ろされた。

「浩君、どうしたの？ そんなに下がって」

「というより、顔怖いわよ」

そんな中、後ずさりをする僕に唯と山中先生が、不思議そうな表情を浮かべながら聞いてきた。

「私、睨まれるようなことした？」

「いや……」

（今ここでいうのはまずい）

彼女は今、律であり、律ではない。

ここで話せばやりやすくなるが、皆を余計に怖がらせることになる。

「こんにやくという古典的な手法を使って脅かそうとした律に、呆れてただけだから」

「なにをお！ 古典的とか言うけど、怖がる奴はいるんだからな！」

とつさに誤魔化した僕に、律が力強く主張する。

その視線はそっぽを向いている滯の方に向けられている。

「確かに」

「それはともかく、お風呂に入りたんだけど。さんざん道に迷ったから汚れちゃって」

頷く僕に、すかさず山中先生がお風呂に入るのを提案した。

「私も、入りたい！」

「それじゃ、私も」

唯が手を上げながら山中先生の提案に賛成をすると、それが次々に広がっていく。

こうして、みんなはお風呂に入ることとなった。

「浩介、覗きは絶対に、絶対、ダメだからな！」

「……………前に行ったときしなかっただろ」

滯の強い注意の言葉に、僕はため息交じりにツツコんだ。

（僕は何かしたのかな？）

一度滯に確認をしてみようと思う僕なのであった。

「はあ……良いお湯」

唯たちがお風呂を上がって30分ほどして、僕はお風呂に入った。なぜそれほど時間差があったのかというと、山中先生が上がってこなかったからだ。

よほどお風呂に入りたかったのかなと思っていたが、上がったときの山中先生の姿に納得がいった。

山中先生の頭には二つほど大きなたんこぶがあった。

(一体何があったんだろう?)

それは唯たちのみを知ることだ。

僕は人に尋ねるほど特に気にもならなかったので、聞かなかったが。

「にしても、まいったな」

体を洗い終え、浴槽に浸かった僕はため息をつきながらつぶやいた。

悩みの種は律だ。

「お風呂から上がった時、律からは変な感じはしなくなった」

ここに戻ってきたとき、律の体を覆う白い靄のようなものが見えたのだ。

それが霊体であることがわかるまで時間はかからなかった。

その律が、お風呂から上がると彼女を覆っていた白い靄は消えていた。

ここまでならば、いいことのようにも思えるかもしれないが、問題なのはここから。

その白い靄が他の人物を覆っていたのだ。

つまりは、

(乗り移ったということか)

どのような霊なのかはわからないが、かなり力が強い霊であるのは間違いない。

(とにかく、寝静まるまで待とう。そうすれば何らかのアクションを起こすはずだ)

本来であればすぐにやるべきことなのだが、どうしてもそれが憚られた。

幸い、離れて行ったりつの方には、後遺症のようなものは感じられない。

幽霊をさらにひきつけるといふ事態もないだろう。

「ただ、あいっだけは何とかしないと」

彼女が今後どのような行動をとるのかが、僕にも全く見当がつかない。

「まあ、マーキングはしておいたから、追跡できるはずだけど」

唯たちがお風呂から上がった際に、憑りつかれた人物に、スキンシップを装って触れた時に追跡をするときに必要なマーキングをしたのだ。

そのマーキングはただの魔力である

これは一日もすれば勝手に消えるようになっていく。

そもそもただのマーキングなのだから、永続的に残るわけではない。

時間経過とともに、自然と空気に混ざり合うようにして消えていくのだ。

(少しばかりやり方が外道じみてるけど、これもあいつを守るため)

心の中で釈明するが、今度おいしい物でもご馳走しようかなと僕は心の中に決めることにした。

「そう言えば、彼女の好きな食べ物とか全く知らなかったな」

今度聞いておくかと考えながら、僕はお風呂から出るのであった。

「それじゃ、お休み。浩君」

「おやすみなさい、浩介君」

「お休み浩介」

「寝坊すんなよー」

「夜這いはダメだからね」

「おやすみなさいです。浩介先輩」

「はいはい、お休み」

お風呂から上がり、一通り話をした後で唯たちは眠りにつくべくそれぞれが色々な言葉を掛けながら去っていった。

「さて、僕も行きますか」

僕もさっそく行動を起こすことにした。

静かに誰にも見つからないように、別荘を後にした。

「よつとー」

そして軽くジャンプをして別荘の屋根に着地した。

聞こえるのは海のさざ波の音。

そして時より流れる心地よい風の音。

セミの鳴き声だった。

ある種の夏の風物詩ともいえるそれを、楽しむ余裕はなかった。

僕は右手を広げるようなしぐさで目の前にホロウインドウを展開させる。

その画面は先ほどマーキングした人物の現在地を詳しく表示している物だ。

赤い丸のマークが彼女の現在地となる。

「まだ動きはない。あと一時間ほど待つか」

僕はそうつぶやくと画面を開いたまま屋根の上に立ち上がる。

そして首にかけてある勾玉のネックレスを外すと、それを上空に掲げる。

たったそれだけで、反応した勾玉は光を発すると、僕を包み込んでいく。

光が晴れた時、手には杖状になっているクリエイトがあった。

服装も黒一色のマントへと変わっている。

『その姿ということとは、やる気のようにですね』

「ああ。今回は久々に全力を出すよ」

僕の服装を見ただけで、僕の気合が伝わったのかクリエイトの言葉に頷いて答えた。

僕はいつも、全力を出すときはこの服装にしている。
いわゆる勝負服というやつだ。

とはいえ、全力を出すのは戦いにおいてのみだが。

『しかし、意外です』

「何が？」

時間までまだ少しある。

クリエイトの話に僕は付き合うことにした。

『マスターが、これまで何も言わないことです』

「……………」

『いつものマスターでしたら、空気が悪くならうとすぐに真実を告げ
てました。でも、今は雰囲気を悪くさせないことを優先にしていま
す』

「…………唯たちはともかく、梓は初めての合宿だ。いい思い出を残して
おきたいと思うのは当然のことだと思うけど？」

クリエイトの言葉に、僕は反論するように口にした。

もしあそこで真実を告げれば、唯たちは恐怖のどん底に突き落とさ
れるだろう。

そうなれば明日にもそれは響くかもしれない。

みんながみんな、僕のように強いわけではない。

皆の雰囲気を悪くしないように、なおかつ、雰囲気が悪くならない
ようにするという相反する方法をとっている僕は、きつと祖国にいた
ころの自分から見れば“異常”な行動になるのかもしれない。

『ええ。だから、私は思います。“マスターはいい方向に変わられた
”と』

「変わった…………か」

クリエイトの言葉に、僕はぽつりとつぶやく。

(変わったのか、それとも変えられたのか)

もしかしたら、軽音部という場所は僕にとっては本当の意味での“
居場所”なのではないかと思う。

全員が心を一つにして演奏をする。

楽しいことも悲しいこともすべてを共有していく。

そんな場所だからこそ、もしかしたら僕はここまで変わったのかもしれない。

(考えてみれば、家族以外にここまで本音を言えるのは唯たちが初めてかもしれないな)

僕は今、とても充実した毎日を過ごしているのかもしれない。

「つと、もう一時間か。そろそろ頃合いかな」

気が付けば皆が寝てから一時間ほど経過していた。

時刻は頂点を超えるかどうかの時間帯。

「本当はあと二時間待った方がいいのかもしれないんだけど、そんなに待てない」

午前二時は、“草木も眠る丑三つ時”と言われている。

この時間になると、幽霊などの活動が活発になるのは良く知られていること。

その理由は、空気中に満ちる魔力のようなものの量が関係していることが判明している。

僕たち魔法使いは、一日で消費した魔力の3〜4割を食事から回復している。

残りが睡眠中だ。

睡眠中は魔力の消費量が大幅に減少して、効率的に魔力の回復ができるからだと言われている。

魔力の回復は空気中に満ちている魔力または魔力残渣を体内に取り込み、それを自身の魔力に変換することで行われる。

そのピークが午前二時頃なのだ。

つまり、二時頃になると空気中に満ちる魔力や残渣の量が大幅に増える。

そのため、魔法使いにとっては夜の方が活発的に動けるのだ。

逆に昼間になるとこれらが少なくなるため、一番消費量が大きくなる。

そして、これは幽霊にも言えること。

幽霊の活動エネルギーの一部に魔力などがあると言われている。

実際に心霊スポットでは魔力の量が他の場所と比べて多いことが

判明している。

(魔力を意図的に流しさえすれば、幽霊は午前二時になった時と同様に活発に行動を始める。)

それが僕の作戦だった。

「クリエイト、1万5千ほどの量の魔力をこの別荘に向けて放出するから、サポートを」

『了解です。魔力の放出リミッターを付けます。どうぞ』

クリエイトからOKをもらった僕は、杖の先を屋根にあてて午前二時頃相当の魔力を放出する。

「後は、相手の出方次第か」

僕はウィンドウの方に目を向ける。

数分は何の異変もなかったが、すぐにそれは起こった。

『動き出しましたね』

「ああ。ゆっくりと歩いてるな」

寝ているであろう場所から動き出す彼女の現在地を示すマークが動き出している。

「あ、外に出た」

やがて、別荘からマークが出たのを確認した僕はウィンドウを閉じると、屋根から下の方を覗き見る。

そこにはふらついた足取りで歩く彼女の姿があった。

「では、行きましようか」

そして僕は行動に移すのであった。

「あずにゃん二号?」

「あれ? 浩介先輩……どうしてこんなところに?」

別荘近くの浜辺をに着地した僕はクリエイト元の勾玉に戻して彼女の姿を探していると、梓の姿を見かけたので声を掛けた。

「僕は散歩だ。そっちは？」

「え？ あた……私ですか？ 私も散歩です」

僕はその返事を聞いて心の中で確信した。

「というのは嘘だろ？」

「何を言うんですか？ 本当にですよ」

「本当は、この海に入るつもりだったんだろ？」

僕は、不思議そうな表情を浮かべる梓に、彼女の本当の目的を指摘した。

「“彼女”を殺すために」

「……………」

僕の言葉に、梓は何も答えない。

そんな彼女に、僕は止めを刺すことにした。

「そうだろ？ 中野梓の姿をした、亡霊さん」

第59話 ゲスト

「ふう……覚悟していたとはいえ、少し疲れた」

一通りの作業を終えた僕は、息をつきながら別荘に戻っていた。
あの後、少しばかり大暴れした。

どちらかというとその後の作業が疲れる要因になったわけだが。
（そう言えば、梓はどうなってるかな？）

ふと、梓のことが気になった。

あの後梓には別荘の方に戻ってもらった（当然その間の記憶はない）が、ちゃんとたどり着いているかが不安になったのだ。

（まあ、梓を向かわせた場所に行けばいいか）

僕はそう考えると、梓が歩いて行った方へと向かうのであった。

「あれ、明かりがついてる」

梓が歩いて行った方へと向かっている途中で、ドアのガラス部分から明かりが漏れているのを見つけた。

（あそこはスタジオだったはずだけど……）

気になった僕は、いったん足を止めてガラス部分から中をのぞき見た。

「……………」

そこには、目的の人物がいた。

僕はゆつくりとドアを開けた。

「ゴホン、ゴホン！」

僕は床に寝転がりながら抱きついて二人に向かって、聞こえるように咳ばらいをした。

尤も、一緒にいた唯が梓に抱きついてるだけだが。

「にゃー!」

「あ、浩君」

僕の咳払いに気づいたのか、梓が驚きの声を上げるのに対して、唯はいつものようにマイペースな感じで僕の名前を口にした。

「確かに世界は広いからそういう関係はいいのかもしれないが、少しばかり時と場合を考えるべきじゃない？」

「ち、違うんですよ！ これは唯先輩と練習をしていて、それがうまく行ったから抱きつかれただけですっ！」

本当はどういう経緯かはわかっているが、少しばかり魔が差した僕の言葉に、梓が大声で反論してきた。

（あはは、疲れた体に大声はきつい）

「あー分かっているって。冗談だから、大きな声を出すのはやめてくださいなあずにやん。頭に響くので」

「なっ!? 浩介先輩のイジワル!」

落ち着かせるように宥める僕に、梓はそっぽを向いてしまった。

「ごめんごめん、反応があまりにも面白くてね。というより、本当に元気だね」

「……次からは気を付けてくださいいね」

僕の謝罪の言葉に、梓はしぶしぶと許してくれたようだ。

「それで、練習の方は続けるの？ 続けるんだったら僕も付き合うけど」

「もちろんですたい!」

僕の問いかけに、唯は手を上げて答えた。

「あ、でも浩介先輩のギターは……」

「これで問題ないでしょ?」

「ですよね」

指を鳴らすことで取り出したギターケースに、梓が答えた。

「それじゃ、練習をしようか」

「おー!」

そして僕たちは練習を始めるのであった。

練習が終わったのは午前一時ごろだった。

「おはよう、浩君」

「おつす、浩介。寝坊してないようだな」

「おはよう浩介」

「おはよう、浩介君」

「浩介先輩おはようございます」

「早いよね」

「おはよう皆。僕は寝坊助じゃないからね」

朝、身支度を終えてダイニングで朝食の支度を済ませていると、起きてきた唯たちが亜札をしてきたので、僕もそれに応じた。

「お、スクランブルエッグにトーストとはまたベタどすなー」

「ですわねー」

律の演技じみた言葉に、唯が便乗する。

「べたなのが一番いいの。文句があるなら二人は朝食抜きにするよ」

「べたが一番！ 浩介が一番ー」

僕の言葉に、まるで手のひらを返すように叫ぶ二人に、僕はある意味尊敬の念を覚えた。

「早く食べよう。せっかくの料理が冷めるから」

「はーい」

僕が促すと全員がテーブルを囲むように座った。

「それじゃ、いただきます」

『いただきます』

山中先生の言葉に続くように手を合わせた僕たちは、朝食をとるのであった。

「それでは、今日の予定を発表する！」

朝食を食べ終え、食器を片づけ終わったところで、リビングに戻っ

た僕たちは、律の次の言葉を待つ。

「今日は……遊ぶぞー!!」

「おー!!!」

右腕を上げながら律が告げると、唯もそれに続く。

「こらこらー!!」

僕が口を開くよりも先に、漑が叫び声を上げた。

「それじゃ、合宿の意味がないだろー!」

「えー。だって昨日だけじゃ遊び足りないだもん」

漑の言葉に、唯が両手の人差し指をくつつけたり離したりしながら反論した。

(何だか、去年と同じ光景だ)

去年にもこんなやり取りをしたような気がする。

だが、今年はそうはいかない。

なぜなら今年は、

「そうですねよ！ 私たちは練習をするために合宿に来たんですよ！」

梓という強力な仲間がいるのだから。

「そう言う梓は昨日は真っ黒になるほど遊んでたくせに」

「うっ!？」

そんな梓も律の一言でバツサリと返り討ちにあっていたが。

「浩介は、反対だよな?」

そして向けられる視線。

なまじ去年は僕が“強引に”練習をするようにさせたため期待も

高いのだろう。

だが、今年は普通に練習をさせるつもりだ。

「別に僕は構わないけど、いいのかな?」

「え、何が?」

そつぽを向きながら、僕は律たちに疑問を投げかけた。

「今日実は、みんなの練習に少しでも貢献できればと思って、プロのバンドを呼んでるんだよね」

『ええ!?!』

僕の言葉に、全員が驚きの声を上げた。

「う、嘘だろ？」

「本当だよ。というよりあと1、2時間もすれば来ると思うよ」

僕の作り話と思っている律が聞いてくるが、本当のことなので、僕はきつぱりと言い切った。

尤も、プロかどうかは僕にもわからないが。

「しかも、そのバンドのドラマーはとても鬼のように怖い人だね。もし到着した時に遊んでたりしたら……」

「し、したら？」

緊張の面持ちで言葉の続きを待つ律と唯に、僕は勝利を確信しながら答えた。

「うーん……良くて半殺し？」

「は……」

考え込む仕草をして告げた言葉に、律と唯（ついでに漣もだが）は固まった。

ちなみに、田中さんは怖いが、そこまではしない。

つまり、嘘だ。

（これが本人に知られば僕が締められるけど）

願わくば、本人に知られないことを願おう。

「み、みんなー。今日は練習をするぞー！」

『お、おー！』

とはいえ、見事律に練習をさせる気に行うことができたのだから、結果往來だろう。

その後、みんなは到着予定の時間までに各自で練習の準備をするこ
ととなった。

「あの、浩介先輩」

「あずにゃんに、漣。どうしたんだ？」

練習を終えて玄関先でH&Pの皆が来るのを待っていると、梓が声を掛けてきた。

見れば後ろの方には漣の姿もあった。

「あの、私思ったんですけど浩介先輩が魔法を使って唯先輩たちに練習をさせる気を出させた方が早くないですか？」

「……………」

僕は梓の言葉に答えずに、続きを促した。

何となく、話には続きがあるような気がしたからだ。

「浩介先輩が、唯先輩や律先輩に練習をする気を出させているのは分かっているんです。でも、何だか私には今の浩介先輩の方法が遠回りをしているように思えるんです」

「それは、滯も同意見かな？」

僕の問いかけに、滯は控えめではあるものの頷いて答えた。

「ふーむ……………」

少しだけ考える。

誤魔化す方法ではなく、分かりやすく説明する方法をだ。

「二人に訊くけど、テストとかでカンニングをして全教科百点を取ったらうれしいと思う？」

僕のその問いかけに、二人は首を横に振って答えた。

「それが、僕の答えだよ」

「あの、もう少しわかりやすくお願いします」

どうやら、僕の言いたいことはしっかりと伝わっていなかったようで、梓の言葉に僕はしっかりと説明をすることにした。

「一言でいえば、“魔法を使つて成しえたことに意味はない”ということ」

全てはそれだった。

「仮に、僕が律と唯に練習をさせるように魔法で操ったとしよう。それって、唯と律の人間性を完全に潰してると思わない？」

「思います」

僕の挙げた例に、梓が頷いた。

「それじゃ、僕が練習をすることによって魔法の恩恵を受けたとしよう。これって完全に二人を動物扱いしてるよね？ 芸をすれば餌を与える…………動物に芸事を躰ける手段の一つ」

どちらも、人権を無視しているの言うまでもなかった。

「僕はそういうのが嫌いな。魔法を使った大会や戦いならばそういうことをするかもしれないけれど、そうでなければ僕はしない。いつ

いかなる時も正々堂々と自分達の実力で勝負をしたいから」

「……浩介」

僕は二人から視線を外すと二人に背を向けた。

「僕は、二人がきつと練習をするようになるかと信じている。それが例え一週間に一日だとしても。僕は自主性を重んじたい。だからこそ、遠回りになってるんだけどね」

「浩介先輩」

「もちろん、ある程度のレベルを下回ったらこっちからアクションを起すようにはするよ。そうだね……あみだくじをさせてその結果でその日の活動を決めさせるのはどう？」

僕はふと思いついた案を二人に話してみた。

あみだくじならば、完全に運のみになって、魔法が介入する余地はない。

ちなみに、ずるはしない。

「いいと思います。私は」

「ま、まあ。それだったら」

「じゃ、決定だね」

願わくば、それをする日が来ないことを願うばかりだ。

「二人は、準備の方は終わったのか？」

「ああ。もうすでに。たぶん律たちも」

「私もです」

漣と梓の返事に僕は「そう」と相槌を打つ。

「二人は、待機してるといい。僕はここでゲストの到着を待つから」

「分かった。行こうか、梓」

「はいー」

僕の言葉に頷くと、梓に声を掛けそのまま梓と共に去っていった。

「らしくもないことを言ったな。僕も」

それを見送った僕は、ポツリとつぶやいた。

魔法というのはとても便利だ。

魔法という力があれば、僕はこの世界のあらゆるジャンルで頂点に君臨することができる。

だが、それにいったい何の意味があるのだろうか？

僕の力は、くだらないプライドを守る物ではない。

だからこそ、僕は魔法をずるをする道具としては使わない。

この力は、家族や仲間を守るための矛と盾として使う。

それが昔自分で決めた“契約”だった。

でも、僕はそれを口にすることは今までなかった。

言うまでもないと思っていたのと、恥ずかしいというのが理由だっ

たが、僕はそれを口にしたのだ。

「本当に僕は変わったよ」

先日、クリエイトから言われた言葉を思い出した。

そして、僕はこの後来るであろうH&Pの皆を玄関口で待つので

あった。

「……来ない」

どれほど経ったのかはわからないが、一向に来る気配がない。

(時計は持っていないし……)

どうしようと考えた結果、時計を確認するべくリビングの方へと戻ることにした。

リビングでは冷たい飲み物を飲んでくつろいでいる律たちの姿があった。

「あ、浩介先輩」

「もう2時間経ったけど、まだ来ないのか？」

「というより、本当に来るのか？」

律と滯の問いかけが僕に浴びせられる。

「いや、来るはずなんだけど」

時刻はすでに10時を20分ほど回っていた。

本来であればとくに到着していてもおかしくない時間帯だ。

だが、どう考えても到着している様子には感じられない。

「ちよっと外の方見てくる。皆は待ってて」

「あ、ちよっとー」

僕は律たちに言うだけ言って、リビングを後にして靴を履くと玄関を飛び出した。

「まだこの辺りには来ていない……気配を探るか」

僕は目を閉じて全神経を集中させる。

H & Pの中で最も強い気配を発しているのは田中さんだ。

田中さんの気配を探せば、たどり着ける。

「……………は？」

結果はすぐに出た。

(何で近くから気配がするんだ?)

反応は近くの方から感じた。

それはどう考えてもこの付近にきているということになる。

だが、近くには車のようなものはおろか人影すら見かけない。

「とりあえず、気配を感じたほうに向かってみるか」

僕は先ほど感じた方向へと足を進める。

「……………」

そこに、みんなの姿があった。

「よっしゃ！ 次は海水飛込みだー！」

「ちよっと待ちなよ。私も参加するからさ」

服を着たまま、海辺の方ではしゃいでいる田中さんたちの姿が。

(そう言えば、田中さんはそう言う性格だったよな。忘れてた)

いつもは厳しい正確の田中さんだが、時より羽目を外して大はしやぎして遊ぶことがある。

それが、海だ。

田中さんいわく『海は俺の家のようなものだ。魂だ』だが、まさか遊んでいるとは思いもしなかった。

(時間が限られてるから、早め早めに頼むって言うておいたんだけどな)

明日はまた別の番組の収録があるため、早く帰ってあげたいと田中さんたちの貯めを思ってお願ひしたことをすっかり忘れているみんなに、僕は啞然としていた。

(とはいえ、こうしている間にも時間が過ぎるんだよね)

それはとても無駄な時間だった。

「すう……………」

僕は息を大きく吸い込んだ。

そして、

「てめえらっ！ 何、油を売っていやがんだ!! 自分たちの本分を全うしないか、この大馬鹿者っ!!!」

大声で怒鳴り声を上げるのであった。

これは関係ない話だが、この時の怒鳴り声は、唯たちの方にも聞こえていたとか。

その時に地響きが起こったと言われたが、誇大表現だと判断するここにした。

いくら僕でも、声だけで地響きを起こすことは不可能だ。

第60話 練習とサプライズ

「えー、私は中山 翠。リズムギターを担当している。よろしく」
あれから数分後、遊びほうけていた皆を折檻した僕たちは、別荘に戻ると唯たちの前に中山さんたちを連れて行き、一人ずつ自己紹介をさせていくことにした。

「わ、私は荻原 涼子です。パートはベースです」

「俺は田中 竜輝。ドラムをやっている。よろしく」

「僕は、太田 保。パートはキーボードです」

荻原さんたちの自己紹介に、唯たちは啞然としていた。

尤も、そのうち二名は硬直しているが。

「そっちも自己紹介したら?」

「ハッ!? わ、わしゃ平沢 唯と申すものです! パートはリードです」

(わしって何?)

緊張かそれとも突然話題をふられたことによる動転かは定かではないが、一人称のおかしい唯に僕は心の中でツツコんだ。

「滞ー、自己紹介だぞー」

「あ、わ、わわわっ!」

「落ち着け」

声が震えている滞に、律が肩を置いて落ち着かせる。

「私は、秋山 滞です。パートはベースを」

「わ、私は中野 梓と言います。この間は本当にすみませんでした!」

「自己紹介と謝罪をごっちゃにしない!」

謝る必要はないが、どこが悪いと思っていたのか、自己紹介をするはずが謝罪の言葉になっていた。

「私は琴吹 紬と申します。パートはキーボードです。どうぞ、よろしく願います」

そして、ムギは動じるどころか堂々とした口調でお辞儀をすると自己紹介を終えた。

「私は、田井中律です。ドラムをやっています」

お互いに自己紹介を終えた。

「あ、それであるの女性が軽音部の顧問の」

「山中さわ子です」

最後に残った山中先生の紹介をすることで、今度こそ本当に自己紹介を済ませることができた。

「で、パートリーダーに訊くが。今回、俺たちが来た理由は聞いているのか？」

「パートリーダーって、誰？」

唯の疑問の声に、田中さんが固まった。

「浩介。まさかとは思いますが、リーダーも決めていなかったのか？」

「失敬な。もうすでに決まってる」

田中さんの問いかけに、僕はため息交じりに答える。

「そんなのいつ決めたっけ？」

「バンドリーダーはみんなのリーダーの人物。部長のことだ！」

「へ？ 私?!」

どうやら完全に自覚がなかったようだ。

まあ、部活レベルでバンドリーダーというのはあまり常識ではないのかも知れない。

「では、改めて聞くが俺たちの来た理由は聞いているか？」

「は、はい。私たちに指導をしてくれるんですよね？」

田中さんの問いかけに、律は頷いて答えた。

「そうだ。これから、お前たちの練習の指導をする。その参謀」

「もしかしなくても、“参謀”は自分のことですか？」

僕の方を明らかにしながら告げられた呼び名に、僕は聞きかえした。

「そうだ。お前のことだ。浩介にピッタリな称号だと思うぞ」

「いらないので、破棄してください」

確かに、いろいろ計画を練ったりしているので、参謀というのはぴったりかもしれないが、なんとなく受け付けなかったので僕は辞退した。

「例の物を渡せ」

「はい、どうぞ」

田中さんの促す声に、僕は用意しておいた五枚の用紙を田中さんに手渡す。

さらにそれを後ろに控えていた中山さんたちにも配っていく。

そして最後に僕にも手渡された。

「今日は、お前らの苦手分野と問題点にスポットを入れた練習メニューを組んである。これを使って音を合わせる前に個別練習をする」

「えっと、どういうこと？ 浩介君」

練習の理由がわからなかったのか、ムギが首をかしげながら聞いてきたので、僕はそれに応じるように答えた。

「音合わせは、確かに全員のタイミングをそろえることができる効率的なものだけど、それぞれに問題点があるのに音合わせをしても上達しにくくなる。だから、まずは個別に問題点や苦手を克服していくんだ」

「なるほど」

僕の答えに納得がいったのか、漣が頷いていた。

「指導をするのは同じパートメンバーだ」

「私は、貴女となるから、よろしくお願いしますね」

「は、はい。こちらこそ」

ベースの漣の指導は同じベースの荻原さんが担当することとなった。

だが、二人とも声が上がっているが大丈夫なのだろうか？

「俺はお前とだ。厳しく行くぞ」

「は、はい」

律の指導は田中さんが行う。

律から救いのまなざしが向けられるが、僕はあえてそれを無視することにした。

「僕は、君とだね。よろしく」

「はい、よろしくお願いします」

そして太田さんはムギの指導を担当する。

「私は君とだ。残念だとは思うけどよろしく」

「は、はい！」

そして中山さんは、梓の担当だ。

“残念”が何を意味するのかは、僕には何となくではあるがわかった。

「僕は唯の指導担当だ。遠慮せずに行くから、しっかりとついてこい」
「了解であります！」

こうして、各メンバーの担当ペアが形成された。
そして練習が幕を開けるのであった。

練習が始まって数分ほどが経過した。

練習はある意味順調だった。

「唯の場合はリズムを一定に保つリズムキープができていない」
「うーん、どうしてかな？」

僕の指摘に、唯は腕を組む。

「コードチェンジの際に、次の音を出すのがワンテンポずれてるから。そしてずれたのを直そうとテンポを速めてまた遅れてを繰り返すために、リズムがおかしくなる」

「……なるほど」

「リズムというのは他のパートとの連携では一番要になる物になる。音域とかに問題はないんだから、コード進行を一定の速度でやる練習をしよう」

「ふむふむ」

先ほどから何度も頷いて相槌を打っている唯に、僕はジト目で見つめる。

「唯、今言ったこと理解してないだろ？」

「まったく！」

「だろうと思った」

今のを唯が理解できていたらとつくの昔に、唯のギターの腕は凄まじいほどに上達しているはずだ。

(まあ、それが唯らしいところではあるけど)

「簡単に言えば、リズムをキープする練習をするということ」

「具体的にはどんな？」

唯の問いかけに、僕はピックを手にする。

「今から僕の弾くコードを僕と同じテンポで何回も繰り返して弾いてもらう」

「それなら簡単そう」

(果たしてそうかな)

唯の漏らした言葉に、僕は心の中でつぶやく。

この反復練習というのはとても難しいものだ。

なぜならば、耳で聞いた音のみを頼りに弾いたコードを判断し、さらにはリズムも同様にしなければいけないからだ。

だが、唯の絶対音感があれば、どの音がいいかはなんとなくではある物の把握することはできるだろう。

後はリズムを一定に保つことが重要なカギとなる。

「それじゃ、行くよ」

唯に告げてから、僕は右手をストロークさせていく。

一定のテンポ(とはいえ、スローテンポだが)でGとCとAm系のコードを弾いていく。

「はい、どうぞ」

コードを弾き終えた僕は、唯に同じコードを弾くように促す。

そして唯も同じコードを弾いていく。

それを確認した僕は、少しテンポを早くして同じコードを弾いていく。

この練習で、テンポの方を250程まで早めていくことで、スムーズなコードチェンジができるようにしているのだ。

これで唯のコードチェンジの際のタイムロスを減少させるように

する。

その傍ら、意識を唯から外す。

「そこはもう少し色を付けるべきよ。例えばこんな風に」

「は、はい」

梓達も練習は順調そうだ。

他の箇所も、練習は順調そうだった。

漣の方も心配していたが、練習の方は順調に進んでいた。

ちなみに、僕が手渡した資料は、五人の問題点がかかれたものだった。

唯の場合は先ほども言ったとおり、リズムキープがうまくできていない部分。

梓の場合は、演奏のスパイス不足。

見て楽しむという要素を加えても問題がないと判断したからこそ
の記述だった。

漣は、ベースのパワー不足だ。

漣の性格上仕方がないのかもしれないが、若干パワーが足りていないようにも感じたからだ。

あと少しだけパワーを上げてもらえると、音自体がいい感じに引き締まるのだ。

ムギは梓と同じく色不足。

キーボードはバンド内では装飾だと僕は思っている。

ギターやドラムなどの音に色を付けて華やかにしていく。

そんな感じのパートだからこそ、重要なかもしれないというのが
僕の持論だ。

だからこそ、その色が不足しているために、ムギに対して色付けの
指導をお願いしたので。

どうやってなのかは僕にもわからないが。

最後に残った律は、言わずもがなでリズムキープだ。

律はパワーは非常にいいのだが、走ったり遅くなったりとヨレている
ことが多い。

ドラムはリズムの要。

ドラムこそがリズムキープを求められるのだ。

その基準点のリズムがずれていけば、全体のリズムがずれることになる。

そこで田中さんにはリズムを一定にすることをお願いしてもらったのだ。

走りすぎたりするのはいいとしても、テンポが途中で不用意にころろ変えられたら修正していくのが大変になる。

一人残された山中先生はその光景を静かに見守っていた。

「よし、今度は早めに行くから、ちゃんと弾いてね」

「了解であります！ 師匠」

敬礼をしながら返事を返す唯に苦笑をしながらも、僕はテンポをさらに速めて同じコードを弾いていく。

それを何度も何度も繰り返した。

練習もひと段落したところで、昼食となった。

「くうく、練習をした後のご飯はうまいですねー、律ちゃん隊長！」

「唯はいいよな、元気そうで」

昼食であるホットケーキを頬張りながら幸せそうな声を上げる唯に、律は燃え尽きた様子で相槌を打った。

「私もちよつと疲れしました」

「ここまですごい密度の練習はなかったからな」

疲れた様子の梓に、同じくどこか疲れたような表情を浮かべている澪が口を開いた。

「ちよつと、やりすぎたかな？」

そんな彼女たちを、少し離れた場所で見ている僕は、田中さんに尋ねた。

「さあな。だがまあ、面白いほどに習得していくもんだから、教えがいはあるかもな」

「確かに。天才の塊もいますからね」

特に唯とか。

「しかし、あれだけで良かったのかい？ 見た感じもつと問題点はあ
るようにも思えるけど」

「ええ。大丈夫です」

ホットケーキを口にしながら聞いてくる中山さんの問いかけに、僕
は頷きながら答えた。

「彼女たちは、今はまだプロではないです。だから、まずはスタートラ
インに立てるように導くことが、僕の役割だと思いませんか？」

「……確かに」

僕の言葉に、中山さんは頷きながら相槌を打つ。

プロとアマというのは大きくて高い壁がある。

それを彼女たちが本当に超える覚悟があれば、僕はそれに答えるつ
もりだ。

だが、今はその覚悟があるのか否かが分からない状況だ。

だからこそアマを基準にした問題点のみを列挙したのだ。

プロに本気になるつもりがあるのであれば、さらに厳しい練習をす
る必要があるのは当たり前のことだ。

「それじゃ、私たちは先に準備をしてくるから」

「お願いします」

中山さんに、僕は軽くお辞儀をしながらお願いすると、中山さんた
ちは「任せて」と言い残して去っていった。

「皆、大丈夫」

「はい、何とか」

疲れ切った様子で返事を返す梓に、大丈夫ではないことが伺えた。

「律は特に大変だったようだけど」

「そうだよ！ あの人の、ものすごく怖い顔で睨みながらこういうんだ
！ 『やり直し』って！」

「あー、分かるその気持ち」

何度もそれをされているので、僕も律の気持ちに痛いほどわかる。

田中さんは何が悪いかを言わない。

もつとも今回の場合は、最初に問題点を上げているのだから、それから推測すればいいだけのようない気もするが。

「浩介はあんな風に、練習をしていたんだな」

「いつもではないけど、最初のころはそんな感じだったよ。最近は音合わせと微調整位だけ」

濡の漏らした感想に、僕は昔を思い出しながら答えた。

昔は毎日が練習の毎日だった。

リズムキープにコード進行の方法。

ドラムの自己主張の度合い等々、問題は山積みだった。

それが今のようによくなったのは、みんなの努力の賜物だったのかもしれない。

「この後も、あそこに集合だからね」

『はい』

元気がない様子で返事をする皆に苦笑をしながらも、僕は昼食をとるのであった。

昼食を終え、少しの間休憩をしたのちに、僕たちはスタジオに戻った。

「それで、今からする練習はなんだ？」

「いや、皆はそこに座るだけでいい」

僕の返事に、全員が不思議そうに首をかしげていた。

「あの、一体何をするんですか？」

「演奏」

梓の問いかけに、僕は簡潔に答えた。

「演奏って、どういうこと？ 浩君」

「そのままの意味さ。私たちの演奏を聴いてもらうということだよ」

僕の答えにさらに疑問が深まったのか聞いてくる唯に、中山さんが

代わりに答えてくれた。

「皆が頑張ったご褒美みたいなものだよ。H & Pの特別ライブの開幕だ」

「……………り、律これは夢ですか!?!」

「うお!?… 気持ちには分かるから、落ち着け」

僕の言葉に、呆然としていた湊は興奮した様子で律の身体を揺さぶり出した。

「あの、曲目はなんですか?」

「軽音部の皆がこれまで演奏した曲、そしてこれから演奏しようとしている曲をメドレーにした曲だから、題して『軽音部メドレー』になるね」

梓の問いかけに、僕はこれまで準備をしてきた曲の内容を告げた。

「ささ、皆さんぐ着席を」

「は、早いな」

僕の言葉が言い終わるよりも前に、全員が用意しておいた長椅子に腰掛けたのを見て中山さんが苦笑しながらつぶやいた。

「準備はいいな?」

田中さんの呼びかけに、僕たちはお互いに頷きあう。

「1, 2, 3, 4, 1, 2!」

田中さんのリズムコールが終わると同時に、最初に産声を上げたのは僕のギターだった。

最初の曲目はふわふわ時間タイムだ。

次にベースやドラムにキーボードが産声を上げる。

そして歌いだしたのは荻原さんだった。

本来はリードを弾いている僕が歌うべきのだが、できれば歌いたくなかったので、僕は荻原さんにボーカルをお願いしたのだ。

唯たちが演奏する時と比べて少しばかり大人っぽさが出てはいるが、H & Pの色は出ていると思う。

Aメロはギターの音色は細かく区切り、Bメロでは伸ばすところは伸ばすというメリハリをつけた感じで演奏をしていく。

サビでは中山さんと荻原さんの二人が歌声を上げる中、僕はさらに

細かくストロークをさせていく。

サビが終わるところで、僕のギターの音色以外の音がいったん止まる。

それは次の曲へ移ることを告げる合図だった。

「キーボードの音色が再び鳴り響く。

それに一步送れるようにドラムやベースのにギターの音色が続く。

曲名は『Happy!? Sorry!!』だ。

新歓ライブでお披露目になるはずが、僕のミスで叶わなかった曲。

全体的に難易度は高いが、目を見張るのは途中のギターソロだ。

ソロを担当するのはリズムギター。

今回は中山さんだ。

僕はリードのためミュートをして音を伸ばさないようにしながら前奏を演奏する。

そしていったん音を伸ばし再びミュートにすると再び音を伸ばす。

この曲はいつものふんわりでゆるゆるな軽音部という印象とは正反対の曲調になっている。

サビが終わり、ついにリズムのソロが始まった。

僕はただギターの音色を伸ばすだけ。

サビが再び始まったところで、少なカットイングで音を伸ばす。

やがて最後の方になり早いテンポで弦を弾いていく。

ドラムの最期の音で曲が終わるが、今度は田中さんがシンバルを叩く。

それはリズムコールの代わりでもあった。

その音を頼りに、僕は弦を弾いた。

曲名は『カレーのちライス』だ。

テンポが異様に早いため、リズムキープを謝ると破滅が待っている。

この曲の一番の餌食になるのは今僕が演奏しているリードギターだろう。

それはギターのソロだ。

サビが終わったところでソロが始まる。

僕はそこをビブラートを効かせ素早くコードチェンジをしていく。ストロークも小刻みにしていかなければならないため、ややきついが何とか乗り切った。

というより、これよりも難しい曲を何度も演奏しているのだから、できて当然なのかもしれないが。

最後にスクラッチで音を引き締めると、サビの方へと戻る。

サビの方はストロークはやや大きくなるが、それでも伸ばしたりミュートしたりと不規則な演奏をしていく。

それにドラムやキーボードベースの音色にリズムギターの細かなギターの音色が続く。

最後に、ギターとキーボードの音を伸ばすことでこの曲は終わりかける。

そこで再び田中さんがシンバルを鳴らす。

次の曲は僕と中山さんのデュエットだ。

曲名は『Don't say lazy』

今回は僕はリードなので、ミュートをしながらの小刻みなストロークとなる。

田中さんのリズムキープ非常に安定していた。

Bメロに入り、今度は音を伸ばしていく。

そしてサビでは再び音を軽く伸ばすか所はあるもののミュートをしていくため小刻みな音色となる。

そして間奏に入った。

僕は数個のコードを繰り返して弾くだけだが、中山さんはソロがある。

中山さんの方を見てみた。

ソロを演奏する中山さんは艶めかしい動きで、見ている者をひきつける演奏をしていた。

それに負けないように、僕もサビでは歌声でクールさを出し、ギターの音色を引き締めていくようにした。

最後にギターパートの音で曲は終わるが、中山さんのギターの音色が長く伸びていく。

そのつなぎを利用して、僕は次の曲のコードを弾いていく。

曲名は『ふでペン くボールペンく』

音を伸ばしながらもビブラートを効かせ、また音を伸ばすというのが前奏を終えると、今度は地獄のAメロに入る。

中山さんが歌う中、僕はブリッジミュートをしながら細かくストロークを続ける。

そしてBメロでは今度はミュートはするもののストロークの間隔は大きくなった。

一番大変なのは、終始小刻みなストロークを求められるベースだろう。

サビでは僕はただ音を伸ばせばいいだけなので、それほど難しくはない。

サビが終わり、再び間奏に入るが、そこは前奏と同じコードなので、同じ要領で弾いていく。

間奏の後にBメロからサビに変わるか所になる。

ブリッジミュートをしたり、音を伸ばしたりしながらサビへと入る。

そしてこの曲もまた演奏を終えた。

最初にブレイク状態に入ったドラムの田中さんが、ファイルを始めた。

それによつて、僕は次の曲の前奏を始める。

曲名は『私の恋はホッチキス』

恋をしている女子の心境を歌っている曲（たぶん）の出だしは複数のコード進行によるリフだった。

（そう言えば、唯はこの箇所と前の曲の前奏で躓いていたっけ）
梓のおかげで克服したみたいだけど。

そして曲も終盤に入った。

テンポがゆっくりになり、ドラムとベースの音が消えた。

そしてギターの音色も止まる。

残ったのはキーボードのピアノの音だけ。

最後にギターとベースの開放弦で曲は終わった。

曲が終わって、しばらくはみんなは茫然と固まっていたが、正気に戻ったのか拍手をしようと立ち上がった。

それを確認した僕は、右腕を回した。

その瞬間、キーボードの音色が音を刻みだす。

「えっ？」

その驚きの声は誰だったのかは分からない。

でも、みんなの顔には驚きがあったのは確かだ。

それだけでも、このメドレーは大成功であることを証明していた。

なぜなら、これは前もって計画していた奏法なのだから。

数拍おいてドラムの音が加わる。

さらにそれから数拍おいて、次はベースの音が加わる。

徐々に徐々に曲が形成されていくというのを通して、いくつものパーツを組み合わせて曲はできる……音楽の演奏に誰も欠けてはいけないという思いを込めていた。

滲が欠ければ、ベースの音色は流れないし、ムギがいなければキーボードの音色も流れない。

目立つか否かが重要ではなく、曲の構成ができてるかどうかが重要なのだ。

数拍おいて今度はリズムギターである中山さんの音色が加わり、それから数拍で僕のギターの音色が加わる。

これで完全に『ふわふわ時間^{タイム}』は完成した。

それから数拍ほど前奏の部分を弾いたのちに、サビへと入った。

サビが終わり、最初に演奏した時と同じように中山さんの歌に続いて荻原さんが曲名の部分を歌っていくというのを繰り返しドラムが高速フィルをする中、僕と中山さんのギターの音色を伸ばしていく。

そして、タイミングを合わせて全員で音色をあげると、今度こそメドレーは終わりを告げた。

「どうも、ありがとう！」

僕は立ち上がって聞いていた唯たちに終わりという意味を込めてお礼の言葉を告げた。

それから少しの間を持って、拍手が送られた。

「とつてもすごかったわ」

「はい！ 何だか感動しちゃいました！」

その拍手に乗せられてムギと梓の声が聞こえた。

(そこまで感動するのかな?)

何となくオーバーなような気もした。

「何だか、良いかもな。こういうのも」

いつの間にか横に来ていた田中さんが漏らした言葉に、僕も頷く。

自分の中にあるのはある種の達成感だった。

(観客はいつもよりかなり少ないのにね)

観客はたったの6人。

だが、いつものライブの時のような達成感を感じていたりする。

(きつと観客の数は関係ないんだ)

僕はそう感じていた。

こうして、僕が考えていた贈り物は唯たちに喜んでもらうことができただけであった。

2年生編 『r e f r a i n』

第61話 新学期！

合宿というのは過ぎてみればあつという間に終わってしまった。

三日目は一日中遊ぶことになった。

なんでも『昨日で今日の分練習したから！』という律の主張だった。

あの時の梓の呆れたような、律の気持ちも分かるという複雑な表情を浮かべていたのは、僕の記憶にも新しい。

あつという間なのは夏休みとて同じっだ。

つまり、何を言いたいのかというところ。

「今日からまた学校が始まる」

ということであつた。

僕はしつかりと準備を済ませており、いつでも出られる状態だった。

(うーむ……そろそろ出るか)

時刻は7時30分。

時間的にも今出れば十分に間に合うだろう。

今日は始業式とHRくらいしかない。

ならば早めに行くのもいいだろう。

「よし、行くか」

そして僕は少し早いが自宅を後にするのであつた。

「よっ！ 浩介」

「慶介か」

踏切を超えたところで呼び止めたのは慶介だった。

「何だよ、久しぶりに会った友にかける言葉がそれかよ」

「お前が友なのかどうかは別として、久しぶり」

「いや、そこはとつても重要だぜ！」

ちやつかりと僕の言葉の前半を拾う慶介に、いつも通りだと実感した。

「今日放課後暇か？」

「残念ながら、部活です」

部長である律から今日の放課後も部室に集合と告げられている。

言われたのは昨日の夜だけ。

「そっかー、部活じゃ仕方ないよなー。例え、お茶を飲むだけだとしても」

「ちゃんと練習してますから」

慶介の言葉に、ある種の嫌味を感じた。

確かに練習とお茶を飲む時間の比率は3：7だけど。

「まあ、いつか付き合ってくれよ。この間みたいにゲーセンで遊ぼうぜ」

「考えておく」

この間のようにゲーセンで遊びつくすのも悪くないと思い、僕はそう返した。

「ところで、夏休みはどうだったんだ？」

「いつも通りだ。合宿で言った場所の近くにある海で泳いだりしただけだ」

慶介に訊かれた僕は、夏休みのことを思い起こす。

今年の夏はとてエキサイティングだった。

特に、僕が魔法使いであることを知られるという事態が。

「な、なあんだとお!!」

「うわ!? いきなりなんだ」

道の真ん中で大声を上げた慶介に、周囲を歩く人から視線が集まる。

「浩介、今の言葉をもう一遍言ってみろお!」

「うわ!? いきなりなんだ」

「ぬあにい!! って、そうじゃない!」

慶介に言われた通り、先ほどの言葉をもう一度言っていると、冷静なツツコミが入った。

「海で泳いだとか言ってたよな!？」

「ああ、言ったよ」

一体何の問題があるのかが分からないまま、僕は慶介に答えた。

「それって、軽音部のメンバー全員とか」

「当たり前でしょ。というか僕が自発的に泳ぎだすわけがない」

「ということは、見たのか？」

慶介が僕の肩に手を回し耳元でささやいてくる。

「何を、だ」

「彼女たちの水着を、だよ」

とりあえず暑苦しいので慶介を引きはがしながら訪ねると、返ってきた答えは何となく予想した通りのものだった。

もう慶介が訊きそうなことはなんとなく想像ができていたのだ。

「くっそー、これがリア充の特権か！ つくつく！ 羨ましいい!!」

「……………」

ハンカチを噛むぐらいの勢いで悔しがる慶介に、僕は少し距離を取った。

というより、本当にハンカチを噛んでいるし。

歩いて歩いて、気づけば校門前にたどり着いていた。

「それで、どうだったんだ？」

「そうだな……………ずっと遊びほうけてたかな。何のための合宿やら」

「いや、違うぞ」

真剣な面持ちの慶介の問いかけに、僕は合宿でのことを思い出しながら答えた。

だが、慶介が首を横に振りながら言ってきた。

「彼女たちの水着姿がどうだったかだZE!」

「……………一瞬でも、まじめなことだと考えた僕がバカだった」

慶介のぶれることのない変態キャラに、僕は感心しかけていた。

「そう言うなって。そうだ！ 平沢さんはどうなんだ？」

「……………」

慶介の口から出た唯の名前。

それが僕の中で永遠に響き続ける。

「いやー、きつと目の保養になつただろうなく。彼女スタイルもいいから——」

「あ……………」

気づくと、僕は魔力を纏った拳を慶介に振るっていた。

慶介は草むらの中に吹き飛ばされていた。

(おかしいな)

僕は首をかしげながら自分の手を見る。

いつもならば、魔力を纏わせないで純粋な力のみで鉄槌を喰らわせていた。

それが、今は本当の意味での全力で慶介に鉄槌を喰らわせていた。

(ただ、唯の名前を言っただけなのに)

何となくだが、腹が立ったのだ。

唯の名前を口にする慶介に。

唯のスタイルの話をする慶介に。

「……………まあ、いいか」

考え込む僕は、そこで止めた。

きつとこれも、夏の暑さのせいだと思い込むことにした。

「は、ははは。浩介、お前世界を、狙える……………ぞ……………ガクツ」

草むらでそんなことを言っている慶介のことを忘れて。

「本当にひどい目にあった」

「だから、悪かったって」

講堂にて校長先生の“ありがたいお話”を聞き終えた僕たちが教

室に戻る中、慶介が何度目かの愚痴をこぼしたので、僕は何度目かになるかわからない謝罪の言葉を口にする。

「まあ、いいけどさ。俺も少しやりすぎた」

「慶介……本当にごめん」

不承不承ながらも許してくれる慶介の優しさに、僕はひどい罪悪感にかられ

「俺も、中野さんのスタイルを聞けば——ごふあ!？」

「お前に謝ろうとした僕があほだった」

たところで言われた慶介の言葉に、僕は前言撤回した。

「にしても、どうして校長の話はあも長いんだろうな？」

「あそこしか自分が話すところがないんだろ。暇なんじゃないの？」

いつものようにとてつもない回復力で立ち直った慶介の疑問に、僕は応えた。

ここにきて知ったが、この世界の校長は話がやけに長い。

それも為になるのかならないのか微妙な内容の話だし。

「時より、浩介の毒舌が怖く感じる時があるぞ」

「そう？」

顔をひきつらせながら言う慶介に、僕は首をかしげながら聞きかえした。

「そう言えば、この後って学園祭だったよな。今年こそ、メイド喫茶にするぞー!」

「言ってる」

どういう結末になるか、僕にはなんとなく見えていたので、放っておくことにした。

「まあ、その前にあれを終わらせないといけないんだけど」

「そう言えば、マラソン大会があったんだっけ」

僕の指差したポスターを目にした慶介が思い出した様子でつぶやく。

そこにはマラソン大会を告知するポスターが貼り出されていた。

「浩介、一緒に走ろうぜ」

「別にかまわないけど、去年ゴールした時の順位は中間くらいか？」

それとも前の方だったのか？」

慶介の誘いに乗った僕は、気になって聞いてみた。

「ん？ もちろん、後ろの方だぜ！」

「……………一人で走ってる」

「何故！」

順番を聞いた僕は、一言で切り捨てるのであった。

ちなみに、放課後のHRで挙げられたメイド喫茶の案は、

「それでは学園祭の出し物は『お化け屋敷』で決定しました」

問答無用で却下された。

「何故だ——ごぼお!？」

「うるさい」

叫び声を上げようとした慶介の頭に拳を振り下ろすことで止めさせるのであった。

マラソン大会前日。

いつものように部室である音楽準備室にやってきた。

「何だか、元気がないけど。どうしたんだ？」

「あー、何故マラソンはあるのかしらー」

いつもの元気がない唯に訊くと、唯は両手を上にあげて嘆きだした。

「体力の強化とかじゃない？」

「ま、まあそうなんだけど。何もそんな尤もな答えを出さなくても」

「ノオー」

律の言葉に反応してか、唯は机に突っ伏した。

「唯ちゃん、ケーキよ」

「はむ……………うん、うまい！」

本日のデザートであるケーキを突っ伏しながら口にした唯はサム

ズアツプしながら感想を漏らすと、先ほどまでの落ち込み用はなんだったのかと思うほど元気にケーキを食べ始めた。

「立ち直り早いなー」

「まあ、いつものことだけど」

苦笑しながら漏らした律の言葉に、漣が相槌を打った。

「おはようございます」

「お、梓ー何味がいい?」

「今日もお茶ですか?」

律が部屋にやってきた梓に、何味がいいかを尋ねると肩を落とす名づら声を上げた。

「いらないんだったら私が食べちゃうぞー」

「それじゃ、バナナタルトで」

(結局食べるんだ)

素早い変わり身で味を指定した梓に、僕は心の中でツッコんだ。

「あれ、あの時計はなんですか?」

「ん? そういえば、さつきから気になってたんだよなー、この時計が」

ケーキを口にしながら、いつものように話に花を咲かせていると、梓が戻側に置かれた棚の方を指差しながら疑問を投げかけた。

そこにはやや大きめな時計が置かれていた。

数字盤に針というアナログな形式で、周辺にはキラキラと光るデコレーションがあった。

それは右に回ったり左に回ったりという動きを繰り返している。

どう見ても高級そうな感じがした。

「あ、それ私がいただいて不要な時計でどうしようか悩んでいる様子だったから、もらったの。ここで時間が見ることができるようになるかなーって」

どうやら、この時計はムギが持ち込んだようだった。

「もしかして迷惑だった?」

「そんなことはないぞ。ちよつとびっくりしただけだから。なあ、漣?」

「あ、ああ。とつてもいいと思うよ」

表情を曇らせるムギに、律は慌てながら否定し、さらに突然振られた濡もぎこちなくではあるが頷いた。

「良かった」

その二人に、ムギはほつと胸をなでおろすのであった。

その後、軽く練習をして、この日の部活を終えるのであった。

「よし、ジャージはよし」

夜、寝る前にカバンの中にジャージが入っているのを確認した僕は、カバンのチャックを閉めた。

「あ、もう10時か」

時計を見ると夜の10時を回っていた。

明日はマラソン大会があるので、早めに寝ることに越したことはないだろう。

そう思った僕は、明かりを消すとベッドに潜り込む。

「おやすみ」

そして僕は眠りにつくのであった。

「——を誓います」

翌日、太陽の光が皆さんさんと照りつける中、生徒会長（名前は知らない）が台に上がって右手を上げながら宣誓の言葉を告げた。

「それでは、よいい」

校長の掛け声とともに銃声が鳴り響く。

こうして、マラソン大会は幕を開けた。

（今回は中盤を走るか）

軽音部の皆と一緒に走ろうと考えたのだが、去年は先頭を走っていたがそれらしい人物の姿を見かけることがなかったのだ。

なので、今年の中盤付近を走ることにした。

ちなみに、走り出す前に探し出せばいいというものもあるが、どうせのマラソン大会だ。

人探しゲームという勝手な遊びを加えたところで罰は当たらないだろう。

(まあ、このマラソン自体が僕にとっては遊びだし)

去年も今年も、僕はそれほど力を出していない。

僕にとっては幼稚園の子供を追いかけているような感じだ。

少しばかり、窮屈な感じはするもののこれはこれで力の制御の練習になるのではないかなと考えていたりする。

(これで1キロか)

周りを走っている生徒たちが、若干ペースダウンをし始めてきた。

だが、みんなの姿は見つからない。

(お、あの後ろ姿は)

「あずに……梓ー」

間違えて“あずにゃん”と呼びそうになった僕は、慌てて元の呼び方に戻した。

「あ、浩介先輩！」

僕の声に気づいたのか、走る足を少しだけ緩めるとこっちの方を振り向いた。

その横に一緒に走っている二人の女子も一緒に。

「浩介さん、早いですね」

「それをそのまま憂達に返すよ」

少し走る速度を速めて彼女たちの斜め後ろにまで迫りながら、僕は憂に返した。

「こんにちは、浩介先輩」

「こんにちは……えっと、沢村さんだっけ？」

「鈴木です！」

名前が出てこなかった僕は思いついた名前を口にすると、彼女からツッコミが入った。

「失礼、鈴木さんだったね。あと2年ほどは覚えておくようにするよ」

「2年って、卒業したらまた忘れるんですか?!」

ちやつかり計算したのか、鈴木さんが僕に言ってきた。

「記憶とは移ろいゆくもの。色々な人と出会うと、関係性のない古い人物の名前は忘れる物さー」

「それって、人としてどうかと思いますよ?」

ジト目で僕を見つめる梓に、指摘されてしまった。

「まあ、冗談はともかく。ずっと覚えておく努力はするよ。さすがに忘れようとするのは失礼だし」

「お願いします」

項垂れるようにお願いしてきた鈴木さんの姿に、僕は何が何でも記憶にとどめておこうと決めるのであった。

「ところで、唯たちは見たか?」

「唯先輩ですか? 見てませんけど」

「そうか……」

梓の返事に、僕は顎に手を添えて考える。

(ここを走っていないとなると、まさか終盤の方か)

よくよく考えれば軽音部は一部のメンバーを除いて運動が得意そうな印象を受ける人物はいない。

一番後ろの方を走っている可能性が高かった。

「あの、良ければ一緒に走りませんか?」

「……鈴木さんが迷惑でなければ」

憂の提案に、僕は考え込みながら返した。

後ろに下がることは考えなかった。

速度をこれ以上落とすのは僕には無理だからだ。

走るのをやめて待つというのもあるが、それはそれでなんかいやだった。

「私は構わないですよ」

「それじゃ、お言葉に甘えて」

鈴木さんが頷いたので、僕は梓達と共に走ることにした。

「あ、憂から聞いたんですけど浩介先輩ってギターなんですよね?」

「そうだけど、何か?」

走っている最中、鈴木さんから声が掛けられた。

「その、もしよければ私にも教えてほしいな、と」

「……………？ どういうことだ？」

「あ、純ちゃんはジャズ研究部でベースを担当しているんです」

鈴木さんの問いかけの理由がよくわからなかった僕に、憂がすかさず説明してくれた。

「なるほど。だが、ベースだったら僕ではなく濬の方が適任だろ？」

ギターとベースとでは若干奏法も異なってくるし」

「そうなんですけど、ジャズ研の先輩から浩介先輩のギターは格好いいって聞いたので」

（理由が”かっこいいから”かよ）

素直に喜んでいいのかわからない理由に、僕は心の中で苦笑する。

「まあ、考えておくよ」

「お願いします」

考えるとは言ったが教える可能性は限りなく0に近い。

理由としては部同士の問題だ。

軽音部とジャズ研究部はある種の競合関係……つまり、ライバルになる。

それぞれの部長が、部外者の介入を快く思うかどうかどうの問題だ。

例えるならば、別の会社の社長が、ライバル会社の経営に介入するような感じだ。

どちらにせよ、律に話を通す必要があるが、それをする気は今の僕にはなかった。

僕をその気にさせる”何か”があれば話は別だが。

彼女には悪いが。

そんなこんなで、僕たちは走りきるのであった。

「はあく、マラソンの後のお菓子は格別どすな」

「そうですね」

「おやじか、お前らは」

マラソン大会を終えた日の放課後、部室でムギの出してくれたケーキに舌鼓を打っている中、椅子にもたれかかりながら声を上げる唯と、それに乗る律に、漣がツツコみを入れた。

「でも、楽しかったわ」

「はい。また来年が楽しみですね」

とはいえ、梓とムギの二人はある意味間違っているような気がしたが。

「はあく疲れたわ」

「あ、さわちゃん」

そんな中、ため息交じりに入ってきた山中先生に、唯が反応した。

「ムギちゃん、紅茶とお菓子をお願い」

「分かりました」

「完全にたかってる」

「というより、教師の面目丸つぶれですね」

ムギが席を立てて紅茶とお菓子の用意をしている中、律のつぶやきに僕が続いた。

「だって、大変なのよ。教師というのも」

「へえ」

「先生ですしね」

山中先生の反論に、唯は分かっているのいないのか微妙な声を上げ、梓は想像がついたのか頷きながら答えた。

「お待たせしました。紅茶が入り——きや!？」

「わぶ!？」

いきなり頭上から厚い液体が降り注いできた。

「だ、大丈夫かムギ?」

「わ、私は大丈夫だけど……」

「あ……」

ムギの言葉に導かれるように、全員がこっちを見る。
「僕も大丈夫だから」

「ご、ゴメンなさい。本当にわざとじゃないのよ。本当よ！」

「いや、分かっているから。こんなのかすり傷にもならないし」

とりあえずハンカチで頭をふきながら目の端に涙を浮かべながら謝るムギを落ち着かせた。

「僕にも、お茶のおかわりをもらえるかな？　それでこの件はおしまいいい」

「わ、わかったわ。とびきりおいしい紅茶を淹れるわね」

拭き終えた僕は、ムギに紅茶のおかわりをお願いした。

「あの、練習はしないんですか？」

「私は燃え尽きた……」

「私もだー」

梓の言葉に、唯と律は同時に背もたれにもたれかかった。

「だそうです」

「……」

梓の肩が下がった。

「そう言えば、浩君たちは順位はどうだったの？」

「僕はあずにやんと同じだったと思うよ」

「浩介君はやっぱ早いんだね」

僕の答えに、ムギは紅茶のおかわりが入ったカップを置きながら言った。

「まあね」

「去年はトップでゴールしてた程よ」

そんな中、山中先生が、ウインクしながら人差し指を立てて補足した。

「あんたは化け物か！」

「あ、でも。浩君だから当然かー」

ツツコミを入れる律に、納得顔の唯。

「ずるでもしたのか?！」

「するか！　普通に走っただけだ」

律に掛けられたあらぬ誤解に、僕は猛反論した。

「そうよ。今回のコースは近道なんてないもの」

唯たちが示している言葉の意味を知らない山中先生は、言葉通りに受け取って僕の言葉に賛同した。

「あ、そうだ。走ってる時に、おいしいケーキ屋さんがあったんだよー」

ふと唯が話題を変えたことで、話はケーキ屋のこととなった。

「やつぱり、今日も練習は無しですか」

「あはは……明日は大丈夫だと思うよ……たぶん」

肩を落としている梓に、僕は苦笑しながらそうフォローの声を掛けるのであった。

「お風呂も入って、予習復習もできたし、今日は早く寝るか」

時刻は夜の9時30分。

やることをすべて終えた僕は、自室に入って腕を伸ばしながらつぶやいた。

「つて、そう言えばあったね。やること」

そんな僕の視線の片隅に見えた段ボール箱に、先ほどまで上げていた腕を力なく降ろしながらつぶやいた。

それは魔法連盟での僕の仕事用の書類が入ったものだ。

「やれやれ、起訴か不起訴かを決めるのも大変だよ……」

ため息交じりに呟きながら、僕は段ボール箱の中からファイルを10個程度取り出した。

本当は500ほどあったが、これまでにコツコツやって終わらせたのだ。

その提出期限は今日の23時59分59秒までだ。

だからこそ急いでやらなければならない。

「二つ10分以内に終わらせれば間に合うか」

ファイルの内容は数百ページにも及ぶが、何とかなるだろう。

……たぶん。

僕は、できる限り急いで仕事に取り組みなのであった。

そして、二時間後の11時30分。

「終わったー!」

何とか仕事を終わらせることができた僕は、固まった筋肉をほぐしながら仕事を終えた解放感に浸っていた。

「さて、この書類を段ボールに詰めて……」

僕は段ボールの箱に10このファイルを詰めるとテープで閉じた。

「後は、転送システムで送ればいいだけ」

右腕を前方に掲げ、手を開くようなしぐさをしてホロウインドウを展開させる。

そして『転送』の項目に手を触れると、目の前の段ボール箱が光りだし大きく光を放った。

光が薄まると、目の前の段ボール箱は跡形もなく無くなっていた。

「さて、早く寝よう。明日に響くし」

僕はそうつぶやくと、部屋の明かりを消してベッドに潜り込んで目を閉じた。

そして意識が闇の中へと沈んでいく。

この時、僕はまだ知らなかった。

とんでもないことが僕の身に降りかかることになるということ。

第62話 マラソン大会!

「ん……」

ふと目が覚めた。

カーテンの隙間から差し込むのは冬であればありがたい陽の光。その光が、部屋を照らし出していた。

「ふあゝ」

あくびをして眠い目をこすりながら、僕は起き上がった。

「んー?」

ふと、違和感に気づいた。

(いつもの感じがない)

先日は日付が変わる30分前まで起きていた。

時間を確認すると午前6時だ。

6時間しか寝ていないと、いつもは若干疲れが残るはずだ。

他の人はどうかは知らないが、僕の場合は魔力自体を回復しなければいけないので、少なくとも8時間は寝る必要がある。

それかになればなるほど、疲れが残っていくのだ。

だが、僕の場合はそんな感じは一切しない。

これはまるで

「8時間以上熟睡したみたいだ」

(僕の身体はどうかしてしまったのだろうか?)

そんな不安を抱きながら、僕は再度時計を見る。

「は?」

時計に表示された日付に、僕は目を疑った。

その日付は、マラソン大会当日を指していた。

「……………僕の妄想? 記憶違い?」

僕の記憶には確かにマラソン大会での出来事が記憶に残っている。

「確か、生徒会長の選手宣誓が終わった後に走り出して、それから……あれ?」

マラソン大会当日のことを思い出していると、なぜか記憶の方があやふやなものになっていた。

「……………まあいいか」

考えても仕方がないことなので、僕はそれ以上考えるのをやめた。そして自室を後にすると朝食を食べ、いつものように身支度を済ませると、いつものように自宅を後にするのであった。

「————を誓います」

太陽の光がさんと照りつける中、生徒会長（名前は知らない）が台上上がって右手を上げながら宣誓の言葉を告げた。

「それでは、よいい」

校長の掛け声とともに銃声が鳴り響く。

こうして、マラソン大会は幕を開けた。

（今回は中盤を走るか）

軽音部の皆と一緒に走ろうと考えたのだが、去年は先頭を走っていたがそれらしい人物の姿を見かけることがなかったのだ。

なので、今年の中盤付近を走ることにした。

ちなみに、走り出す前に探し出せばいいというものもあるが、どうせのマラソン大会だ。

人探しゲームという勝手な遊びを加えたところで罰は当たらないだろう。

（まあ、このマラソン自体が僕にとっては遊びだし）

去年も今年も、僕はそれほど力を出していない。

僕にとっては幼稚園の子供を追いかけているような感じだ。

少しばかり、窮屈な感じはするもののこれはこれで力の制御の練習になるのではないかなと考えていたりする。

（にしても、本当におかしいな……………）

先ほどからどうもこの光景を見たようなことがあるような気がするのだ。

(つと、もう1キロか)

そんな違和感を感じていると、1キロ走ったのか周りを走っている生徒たちが、若干ペースダウンをし始めてきた。

だが、やっぱり軽音部の姿は見つからない。

(そう言えば、この辺りで梓の姿見えるんだったつけ)

そんなことを考えていると、本当に梓の後姿が見えた。

「あずに……梓ー」

間違えて「あずにゃん」と呼びそうになった僕は、慌てて元の呼び方に戻した。

「あ、浩介先輩ー」

僕の声に気づいたのか、走る足を少しだけ緩めるところこっちの方を振り向いた。

その横に一緒に走っている二人の女子も一緒に。

「浩介さん、早いですね」

「それをそのまま憂達に返すよ」

少し走る速度を速めて彼女たちの斜め後ろにまで迫りながら、僕は憂に返した。

「あれ?」

そんな中、梓が声を漏らした。

「こんにちは、浩介先輩」

深く考えるよりも前に、両サイドに髪を束ねた女子生徒が僕に声を掛けてきた。

「こんにちは……えっと、沢村さんだっけ?」

「鈴木ですー」

名前が出てこなかった僕は思いついた名前を口にすると、彼女からツッコミが入った。

「失礼、鈴木さんだったね。あと2年ほどは覚えておくようにするよ」

「2年って、卒業したらまた忘れるんですか?!

ちゃっかり計算したのか、鈴木さんが僕に言ってきた。

「記憶とは移ろいゆくもの。色々な人と出会うと、関係性のない古い人物の名前は忘れる物さー」

「それって、人としてどうかと思いますよ?」

ジト目で僕を見つめる梓に、指摘されてしまった。

「まあ、冗談はともかく。ずつと覚えておく努力はするよ。さすがに忘れようとするのは失礼だし」

「お願いします」

項垂れるようにお願いしてきた鈴木さんの姿に、僕は何が何でも記憶にとどめておこうと決めるのであった。

「ところで、唯たちは見たか?」

「唯先輩ですか? 見てませんけど」

「そうか……」

梓の返事に、僕は顎に手を添えて考える。

(ここを走っていないとなると、まさか終盤の方か)

よくよく考えれば軽音部は一部のメンバーを除いて運動が得意そうな印象を受ける人物はいない。

一番後ろの方を走っている可能性が高かった。

「あの、良ければ一緒に走りませんか?」

「……鈴木さんが迷惑でなければ」

憂の提案に、僕は考え込みながら返した。

後ろに下がることは考えなかった。

速度をこれ以上落とすのは僕には無理だからだ。

走るのをやめて待つというのもあるが、それはそれでなんかいやだった。

「私は構わないですよ」

「それじゃ、お言葉に甘えて」

鈴木さんが頷いたので、僕は梓達と共に走ることにした。

「あ、憂から聞いたんですけど浩介先輩ってギターなんですよね?」

「そうだけど、何か?」

走っている最中、鈴木さんから声が掛けられた。

「その、もしよければ私にも教えてほしいな、と」

「……? どういうことだ?」

「あ、純ちゃんはジャズ研究部でベースを担当しているんです」

鈴木さんの問いかけの理由がよくわからなかった僕に、憂がすかさず説明をしてくれた。

「なるほど。だが、ベースだったら僕ではなく濤の方が適任だろ？ギターとベースとでは若干奏法も異なってくるし」

「そうなんですけど、ジャズ研の先輩から浩介先輩のギターは格好いいって聞いたので」

（理由が”かっこいいから”かよ）

素直に喜んでいいのかわからない理由に、僕は心の中で苦笑する。

「まあ、考えておくよ」

「お願いします」

考えるとは言ったが教える可能性は限りなく0に近い。

理由としては部同士の問題だ。

軽音部とジャズ研究部はある種の競合関係……つまり、ライバルになる。

それぞれの部長が、部外者の介入を快く思うかどうかどうの問題だ。

例えるならば、別の会社の社長が、ライバル会社の経営に介入するような感じだ。

どちらにせよ、律に話を通す必要があるが、それをする気は今の僕にはなかった。

僕をその気にさせる”何か”があれば話は別だが。

彼女には悪いが。

そんなこんなで、僕たちは走りきるのであった。

（でも、なんとなく見覚えがあるんだよな）

「はあ、マラソンの後のお菓子は格別どすな」

「そうですね」

「おやじか、お前らは」

マラソン大会を終えた日の放課後、部室でムギの出してくれたケーキに舌鼓を打っている中、椅子にもたれかかりながら声を上げる唯と、それに乗る律に、漣がツツコみを入れた。

「でも、楽しかったわ」

「はい。また来年が楽しみですね」

とはいえ、梓とムギの二人はある意味間違っているような気がしたが。

「はあく疲れたわ」

「あ、さわちゃん」

そんな中、ため息交じりに入ってきた山中先生に、唯が反応した。

「ムギちゃん、紅茶とお菓子をお願い」

「分かりました」

「完全にたかってる」

「というより、教師の面目丸つぶれですね」

ムギが席を立てて紅茶とお菓子の用意をしている中、律のつぶやきに僕が続いた。

「だって、大変なのよ。教師というのも」

「へえ」

「先生ですしね」

山中先生の反論に、唯は分かっているのいないのか微妙な声を上げ、梓は想像がついたのか頷きながら答えた。

（そう言えば、この後ムギが珍しくこけてカップが僕の頭上に振ってくるんだっただっけ？）

何となく覚えていることを思い出した僕は、“まさか”と一蹴した。

「浩介先輩危ないです！」

「お待たせしました。紅茶が入り——きや!？」

「っ!？」

そんな時に掛けられた梓の警告に反応した僕は、偶々手にしていたボードを頭上に掲げる。

次の瞬間、ボードを持つ手に衝撃を感じた。

「だ、大丈夫かムギ？」

「わ、私は大丈夫だけど、浩介君が」

「……こっちは大丈夫だ」

ムギの言葉に導かれるように、全員がこっちを見るので、僕はボードを頭の方から退けて答えた。

「よ、よかった……」

ほっと胸をなでおろす様子のムギ。

「僕にも、お茶のおかわりをもらえるかな？　それでこの件はおしま
い」

「わ、わかったわ。とびきりおいしい紅茶を淹れるわね」

僕は、そんなムギに紅茶のおかわりをお願いした。

「それにしても、よくわかったな」

「うん、あずにゃんもエスパーだと思ったよ」

そんな中、律の漏らした言葉に、唯も頷く。

「あ、いえ。その……浩介先輩にムギ先輩が紅茶をこぼすのを前にも見たような気がしたので」

「そうか？　私の記憶の限りでムギが浩介に紅茶をこぼしたことなんてなかったけど」

梓の発した溪谷の理由に、漣は首を貸しえながら相槌を打った。

「きつと私がこぼした時のだよ。あずにゃん」

「あのととき、あずにゃんはここには来てないよ」

唯が配膳をしたのは、新入生歓迎会の前で、梓の姿は見かけていない。

鈴木さんから聞いたのであれば話は別だが。

「むむむ……」

「お茶入りましたよー」

「ありがとう」

腕を組んで考え込む中、ムギが紅茶のおかわりが入ったティーカップを手に戻ってきた。

「それって、デジャブじゃないのか？」

「でじやぶっ」

律の出した言葉に、唯は分からなそうに首をかしげた。

「見たことがない場所を見たことがあると思うことだよ。でも、本当はちゃんと見ているんだけど記憶が抜け落ちているだけらしいよ」

「へえー、そうなんだ」

漣の答えに、唯は感心したように頷くとつぶやいた。

「あ、そう言えば浩君たちは順位はどうだったの？」

「僕はあずにゃんと同じだったと思うよ」

「浩介君はやっぱり早いんだね」

僕の答えに、ムギは紅茶のおかわりが入ったカップを置きながら言った。

「まあね」

「去年はトップでゴールしてた程よ」

そんな中、山中先生が、ウインクしながら人差し指を立てて補足した。

「あんたは化け物か！」

「あ、でも。浩君だから当然かー」

ツツコミを入れる律に、納得顔の唯。

「ずるでもしたのか?!」

「するか！ 普通に走っただけだ」

律に掛けられたあらぬ誤解に、僕は猛反論した。

「そうよ。今回のコースは近道なんてないもの」

唯たちが示している言葉の意味を知らない山中先生は、言葉通りに受け取って僕の言葉に賛同した。

「あ、そうだ。走ってる時に、おいしいケーキ屋さんがあったんだよー」

ふと唯が話題を変えたことで、話はケーキ屋のこととなった。

「やっぱり、今日も練習は無しですか」

「あはは……明日は大丈夫だと思うよ……たぶん」

肩を落としている梓に、僕は苦笑しながらそうフォローの声を掛けるのであった。

「お風呂も入って、予習復習もできたし、今日は早く寝るか」

時刻は夜の9時30分。

やることをすべて終えた僕は、自室に入って腕を伸ばしながらつぶやいた。

「つて、そう言えばあったね。やること」

そんな僕の視線の片隅に見えた段ボール箱に、先ほどまで上げていた腕を力なく降ろしながらつぶやいた。

それは魔法連盟での僕の仕事用の書類が入ったものだ。

「やれやれ、起訴か不起訴かを決めるのも大変だよ……」

ため息交じりに呟きながら、僕は段ボール箱の中からファイルを10個程度取り出した。

本当は500ほどあったが、これまでにコツコツやって終わらせたのだ。

その提出期限は今日の23時59分59秒までだ。
だからこそ急いでやらなければならない。

「二つ10分以内に終わらせれば間に合うか」

ファイルの内容は数百ページにも及ぶが、何とかなるだろう。

……たぶん。

僕は、できる限り急いで仕事に取り組むのであった。

そして、二時間後の11時30分。

「終わったー！」

何とか仕事を終わらせることができた僕は、固まった筋肉をほぐしながら仕事を終えた解放感に浸っていた。

「さて、この書類を段ボールに詰めて……」

僕は段ボールの箱に10このファイルを詰めるとテープで閉じた。

「後は、転送システムで送ればいいだけ」

右腕を前方に掲げ、手を開くようなしぐさをしてホロウインドウを

展開させる。

そして『転送』の項目に手を触れると、目の前の段ボール箱が光りだし大きく光を放った。

光が薄まると、目の前の段ボール箱は跡形もなく無くなっていた。(にしても、本当に僕がうつすらと覚えていることとそっくりな一日だった)

今日一日は、まるで同じ日を体験しているのではないかと思うほど記憶していることと似ていた。

とはいえ、しつかりと覚えているのではないため、おぼろげになっているが。

「既視感か……」

本当にそういう類のモノなのだろうか？

「……とにかく寝よう。明日に響くし」

僕はそうつぶやくと、部屋の明かりを消してベッドに潜り込んで目を閉じた。

悩んでいても始まらないし、何より確証がない。そして意識が闇の中へと沈んでいくのであった。

第63話 ループ

「……………おかしい。これは絶対におかしい」

朝、支度が終わった僕は、自室で呟く。

今日は、マラソン大会だ。

そう“またしても”だ。

前の時は勘違いだと思うことにしたが、今度ばかりは勘違いではすまされない。

僕はしっかりとマラソン大会で走っているのだから。

このことから判断すると、

「一日を繰り返しているな……………これは」

そう思うのが妥当だった。

「問題は“なぜ”それが起こり、そして“どうやって”繰り返しているのか」

今の僕には、その情報が一切ない。

これでは、対策の打ちようがない。

「とりあえず、学校で考えよう。時間はある」

僕はそう結論を出していつものように自宅を後にするのであった。

「————を誓います」

太陽の光が皆さんさんと照りつける中、生徒会長(名前は知らない)が台上が上がって右手を上げながら宣誓の言葉を告げた。

僕はそれをすでに三回も聞いていた。

「それでは、よいい」

校長の掛け声とともに銃声が鳴り響く。

こうして、僕にとっては四回目のマラソン大会は幕を開けた。

(どうしてまた中盤から走ることになるんだ！)

軽音部の皆と一緒に走ろうと考えたのだが、並ぶ順番の問題なのか、はたまた別の問題なのか、今回もまた中盤付近を走ることになった。

(まあ、いいか)

走っている時間中に考えをまとめることくらいはできる。
それに何より、

(このマラソン自体が僕にとっては遊びだし)

去年も今年も、僕はそれほど力を出していない。

僕にとつては幼稚園の子供を追いかけているような感じだ。

少しばかり、窮屈な感じはするもののこれはこれで力の制御の練習になるのではないかなと考えていたりする。

なので、考える方に力を入れることにした。

(つと、もう1キロか)

1キロのポイントにたどり着き、周りの生徒が若干ペースダウンをし始めてきた。

だが、やっぱり軽音部の姿は見つかからない。

(そう言えば、この辺りで梓の姿見えるんだったよな)

そんなことを思っていると、梓の姿が前の方に見えてきた。

「梓―」

もう三回目にもなる僕は、しっかりと元の呼び方で梓の名前を。

「あ、浩介先輩―」

僕の声に気づいたのか、走る足を少しだけ緩めるとこっちの方を振り向いた。

その横に一緒に走っている二人の女子も一緒に。

「浩介さん、早いですね」

「それをそのまま憂達に返すよ」

少し走る速度を速めて彼女たちの斜め後ろにまで迫りながら、僕は憂に返した。

「あれ……やっぱり」

そんな中、梓が声を漏らした。

(まさか梓のやつ)

「こんにちは、浩介先輩」

深く考えるよりも前に、両サイドに髪を束ねた女子生徒が僕に声を掛けてきた。

「こんにちは……えっと、鈴木さんだっけ？」

「鈴木です！」

もう三回も聞いているが、若干覚えていない僕が名前を口にする
と、彼女からツツコミが入った。

これで三回目だった。

我ながら、この記憶力の無さは恥ずかしいこと極まりない。

「失礼、鈴木さんだったね。次からは間違えないようにするよ」
「お願いします」

項垂れるようにお願いしてきた鈴木さんの姿に、僕は何が何でも記
憶にとどめておこうと決めるのであった。

「ところで、唯たちは見たか？」

「唯先輩ですか？ 見てませんけど」

「そうか……」

梓の返事に、僕は顎に手を添えて考える。

（ここを走っていないとなると、やっぱり終盤の方か）

よくよく考えれば軽音部は一部のメンバーを除いて、運動が得意そ
うな印象を受ける人物はいない。

どう考えても一番後ろの方を走っている可能性が高かった。

「あの浩介先輩も、良ければ一緒に走りませんか？」

「……鈴木さんが迷惑でなければ」

梓の提案に、僕は考え込みながら返した。

後ろに下がることは考えなかった。

速度をこれ以上落とすのは僕には無理だからだ。

走るのをやめて待つというのもあるが、それはそれでなんかいや
だった。

「私は構わないですよ」

「それじゃ、お言葉に甘えて」

鈴木さんが頷いたので、僕は梓達と共に走ることにした。

（この後に鈴木さんからギターのコーチを頼まれるんだよな）

「あ、憂から聞いたんですけど浩介先輩ってギターなんですよね？」

「そうだけど、何か？」

そんなことを思っている最中、鈴木さんから声が掛けられた僕は、

分からないふりをして先を促した。

「その、もしよければ私にも教えてほしいな、と」

「……………？ どういうことだ？」

「あ、純ちゃんにはジャズ研究部でベースを担当しているんです」

僕の知っている鈴木さんの問いかけに、僕は理由がよくわからないのを演じる。

下手をすると予知能力があると思われかねないからだ。

そんな僕に、憂がすかさず説明をしてくれた。

「なるほど。だが、ベースだったら僕ではなく漣の方が適任だろ？」

ギターとベースとでは若干奏法も異なってくるし」

「そうなんですけど、ジャズ研の先輩から浩介先輩のギターは格好いいって聞いたので」

（それにしても理由が”かつこいいから”というのは、わかりかねるよな）

素直に喜んでいいのかわからない理由に、僕は再び心の中で苦笑する。

「まあ、考えておくよ」

「お願いします」

考えるとは言ったが教える可能性は限りなく0に近い。

理由としては部同士の問題だ。

軽音部とジャズ研究部はある種の競合関係……つまり、ライバルになる。

それぞれの部長が、部外者の介入を快く思うかどうかどうの問題だ。

例えるならば、別の会社の社長が、ライバル会社の経営に介入するような感じだ。

どちらにせよ、律に話を通す必要があるが、それをする気は今の僕にはなかった。

僕をその気にさせる”何か”があれば話は別だが。

彼女には悪いが。

（やっぱり、間違いない）

そんな中、僕は梓に関してある確証を抱いていた。

(梓は、時間の繰り返しに気づいてる)

思えば前回の繰り返しの際に、梓から警告が出てきたのも、おかしかった。

おそらく、梓の中に時間が繰り返しているという概念が、無意識的に出ているのかもしれない。

「梓」

「は、はい。なんですか?」

そんな梓に、僕は走りながらさりげなく小声で話しかけた。

梓も小声でそれに応じる。

「梓、もしかして、今日を何度も繰り返していることに気づいている」

「ツ!? 浩介先輩もですか?!」

「え? なに? どうしたの、梓ちゃん?」

僕の問いかけに、大きな声で聞きかえしてきた梓に、憂いが不思議そうな表情を浮かべて梓に問いかけた。

「な、何でもないよ」

「…………?」

慌てて答える梓に、憂は不思議そうな表情を浮かべたものの納得したのか、深く追求することなく梓から視線を外した。

それにほっと胸をなでおろす梓。

「今はまずいな。放課後、部室で待つ」

「分かりました」

僕は今はまずいと思い、梓にそう告げた。

そんなこんなで、僕たちは走りきるのであった。

「……………これで大丈夫かな」

先に部室にやってきた僕は、部室前の階段のところにある仕掛けを施していた。

僕は目を閉じて梓が来るのを待った。

(ん、梓だ)

おそらく急いでできたのか、駆け足で階段を上がってきているのがわかった。

「ラ・ベネーリア」

そしてタイミングよく、ある魔法を発動させた。

それと同時に、ドアが乱暴に開け放たれる。

「はあ………はあ………」、こんにちは」

「お疲れ。というより、そこまでは知らなくてもいいのに。どうぞ」

息を切らしながら挨拶をしてくる梓に、僕は苦笑しながらいつも梓が座る椅子を引いて座るように促した。

「ど、どうも………です」

席に着いたところで、紅茶を出すとお礼を口にした梓はそのまま紅茶に口をつけた。

「それで、あずにゃんには今日を何度も繰り返していることに気づいているということ、間違いはないかな?」

「はい。最初は気のせいだって思ったんですけど、あまりにも同じだったのだから」

僕の問いかけに、梓は頷くと答えてくれた。

「どうやら、今この時間は何らかの理由でループしているようだ」

「ループですか?」

「しかもただのループではない。魔法的要因によるループだ」

放課後まで考え続けた結果、今回の要因となっているのがループ現象(巻き戻しだが)であることを突き止めた。

「それって、時間を巻き戻しているっていうことでは?」

「そうとも言うね。ただ、ループの方がわかりやすそうだから、ループと銘打っているわけだけだ」

梓の指摘に頷きながら、僕は梓の問いかけに答えた。

「そして、その原因となる物はこの部屋の中にある」

「部室の中ですか?」

僕は頷いて話を進める。

「魔力の流れが一昨日と違う。魔力を消費するものがある証拠。それを探し出さなければならぬのだが……」

「何か問題でもあるんですか?」

梓の疑問に、僕は頷くと口を開いた。

「僕一人では、その根源の特定に、かなり時間がかかってしまうことだ」

「具体的にはどのくらいですか?」

「僕の推測が正しければ、少なくともあと35回繰り返す必要があるとしか」

特にこの後に今日中に提出する資料を全て片づけなければいけない。

終わったのは、午後11時30分ごろ。

それから30分で捜索できる範囲などたかが知れている。

「さ、三十?!」

あまりの数の多さに、梓が飛び上がった。

「三十がどうかしたの? あずにゃん」

「にゃ! ゆ、唯先輩?!」

「あんた、いつの間に……というより、どうやってここに来た」

梓の背後にいきなりあらわれて声を上げる唯に、僕たちは驚きをおろわにした。

「え? どうやって……あそこから律ちゃんたちと一緒に……あれ、律ちゃん? 濔ちゃん?」

「ループの魔法をキャンセルしてきたのか」

改めて平沢唯という存在が恐ろしく思えた。

「律たちはしばらく来ないよ」

「え? なんで?」

「ループの魔法を階段のあたりにかけてあるから。今は無限階段状態かな」

僕は唯たちに律たちが来ない理由を告げた。

「一体何をやってるんですか? 浩介先輩」

「少々込み入った話だからね。律たちは向こう側だから、知る必要は

ないし。ということ、今こっち側に来た唯にも話を聞いてもらおうよ」

「え？　え？」

事情が呑み込めない唯を無視して、僕は唯たちに席に着くように促すと現在起こっている事態を彼女に告げた。

「えっと、浩君の話だと、今日も何度も何度も繰り返しているんだよね？」

「そう言うこと。唯はどうだ？　既視感や違和感を感じたりしてないか？」

「むくくくく」

目を閉じて眉間にしわを寄せて考え込み始める唯を、僕は待ち続けた。

「あ、そう言えば」

「感じてたんですか!？」

「うん。なんかね同じお菓子が出てきたからおかしいなって」

唯が口にした違和感に、僕たちは開いた口がふさがらなくなつた。

違和感を感じていたのはいいが、よりによってお菓子とは……微妙だ。

「でしたら、律先輩や滯先輩たちも？」

「いや。律たちはちっとも気づいていないし、違和感すら感じていない」

僕は梓の言葉を首を横に振りながら否定した。

「でも、どうして私たちだけが……」

「魔法による事象は、魔力を有していると把握しやすいことがある。今回もその通り、魔力を持つ僕はこの時間の経過の違和感を把握することができたわけだ」

「でも、私たちって魔力とかなないんだよね？」

梓の疑問に答える僕の説明に首を傾げた唯が聞いてきた。

「ああ。それは検査でもしっかりと出ている。二人には魔法を使うほどの魔力はない。ただ……」

「ただ？」

僕が意味ありげに言葉を区切ると、唯が僕の方に迫りながら聞いてきた。

「二人の場合は僕の魔法を数回ほど直接体に受けているから、魔法に対する抵抗力がついている可能性がある。それで、僕の空間魔法をすり抜けたら、今回の事象の把握ができるのかもしれない」

「えっと、私は記憶を消された時のだよね？」

唯は記憶の操作によって、魔法に対する抵抗力がついたとみるのが最適だろう。

「私はなんですか？ 覚えている限り、浩介先輩の魔法を受けたことなんてないですよ？」

「確かに」 覚えている限りは「ないだろうね。だが、君は確かに唯よりも強い魔法を掛けられている」

「……………？」

心当たりがない様子で首をかしげる梓をしり目に、僕は話を先に進めることにした。

「とにかく、今回の事象を何とかできるのは僕たちだけのようだ。そこで、二人に折り入って頼みがある」

「何何？」

「何ですか？」

興味ありげに訊いてくる二人に、僕は頼みごとを告げるのであった。

「はあく、マラソンの後のお菓子は格別どすなー」

「そうですね〜」

「おやじか、お前らは」

それから数分後、部室前の階段にかけていたループの魔法を解除してすぐにやってきたムギ達とともに、ムギが出してくれたケーキに舌

鼓を打っている中、椅子にもたれかかりながら声を上げる唯とそれに乗る律に、漣がツツコみを入れた。

「でも、楽しかったわ」

「はい。また来年が楽しみですね」

とはいえ、梓とムギの二人はある意味間違っているような気がしたが。

しかし、このやり取りも三回見るとうんざりしてくるところがあるのは気のせいだろうか？

「はあく疲れたわ」

「あ、さわちゃん」

そんな中、ため息交じりに入ってきた山中先生に、唯が反応した。

「ムギちゃん、紅茶とお菓子をお願い」

「分かりました」

「完全にたかってる」

「というより、教師の面目丸つぶれですね」

ムギが席を立てて紅茶とお菓子の用意をしている中、律のつぶやきに僕が続いた。

「だって、大変なのよ。教師というのも」

「へえ」

「先生ですしね」

山中先生の反論に、唯は分かっているのいないのか微妙な声を上げ、梓は想像がついたのか頷きながら答えた。

（あ、そうだ）

僕はこの後に起こるであろうことを思いだし予備のトレイを頭上に構える。

「お待たせしました。紅茶が入り——きや!？」

「……」

次の瞬間、ボードを持つ手に衝撃を感じた。

「だ、大丈夫かムギ？」

「わ、私は大丈夫だけど、浩介君が」

「……こっちは大丈夫だ」

ムギの言葉に導かれるように、全員がこつちを見るので、僕はボードを頭の方から退けて答えた。

「よ、よかった……」

ほっと胸をなでおろす様子のムギ。

「僕にも、お茶のおかわりをもらえるかな？　それでこの件はおしまいい」

「わ、わかったわ。とびきりおいしい紅茶を淹れるわね」

僕は、そんなムギに紅茶のおかわりをお願いした。

「お茶入りましたよー」

「ありがとう」

それから数分後、ムギが紅茶のおかわりが入ったティーカップを手に戻ってきた。

「あ、そう言えば浩君たちは順位はどうだったの？」

「僕はあずにゃんと同じだったと思うよ」

「浩介君はやっぱり早いんだね」

僕の答えに、ムギは紅茶のおかわりが入ったカップを置きながら言った。

「まあね」

「去年はトップでゴールしてた程よ」

そんな中、山中先生が、ウインクしながら人差し指を立てて補足した。

「あんたは化け物か！」

「あ、でも。浩君だから当然かー」

ツツコミを入れる律に、納得顔の唯。

「ずるでもしたのか?!」

「するか！　普通に走っただけだ」

律に掛けられたあらぬ誤解に、僕は猛反論した。

「そうよ。今回のコースは近道なんてないもの」

唯たちが示している言葉の意味を知らない山中先生は、言葉通りに受け取って僕の言葉に賛同した。

「あ、そうだ。走ってる時に、おいしいケーキ屋さんがあったんだ

よー」

ふと唯が話題を変えたことで、話はケーキ屋のこととなった。

「やっぱり、今日も練習は無しですか」

「あはは……明日は大丈夫だと思うよ……たぶん」

肩を落としている様に、僕は苦笑しながらそうフオローの声を掛けるのであった。

「お風呂も入って、予習復習もできたし、残すは」

時刻は夜の9時30分。

やることをすべて終えた僕は、自室に入って腕を伸ばしながらつぶやいた。

「これか……」

そんな僕の視線の片隅に見えた段ボール箱に、先ほどまで上げていた腕を力なく降ろしながらつぶやいた。

それは魔法連盟での僕の仕事用の書類が入ったものだ。

「やれやれ、起訴か不起訴かを決めるのも大変だよ……」

ため息交じりに呟きながら、僕は段ボール箱の中からファイルを10個程度取り出した。

本当は500ほどあったが、これまでにコツコツやって終わらせたのだ。

その提出期限は今日の23時59分59秒までだ。だからこそ急いでやらなければならない。

「二つ10分以内に終わらせれば間に合うか」

ファイルの内容は数百ページにも及ぶが、何とかなるだろう。……たぶん。

僕は、できる限り急いで仕事に取り組むのであった。

そして、二時間後の11時30分。

「終わったー!」

何とか仕事を終わらせることができた僕は、固まった筋肉をほぐしながら仕事を終えた解放感に浸っていた。

「さて、この書類を段ボールに詰めて……」

僕は段ボールの箱に10このファイルを詰めるとテープで閉じた。

「後は、転送システムで送ればいいだけ」

右腕を前方に掲げ、手を開くようなしぐさをしてホロウインドウを展開させる。

そして『転送』の項目に手を触れると、目の前の段ボール箱が光りだし大きく光を放った。

光が薄まると、目の前の段ボール箱は跡形もなく無くなっていた。

(しかし、同じことを三回もするのはきつい)

「よし、行くか」

僕は気合を入れると杖状のクリエイトを手にする。

そして部屋の明かりを消して窓を開ける。

僕は認識障害魔法を自身に施してから、窓から飛び出た。

そして流れるような動きで杖の上に乗った僕は協力者たちの家に向かうのであった。

「そろそろ唯の家だ。あずにゃん、電話を」

「は、はい!」

空を飛んで協力者の一人である梓にもう一人の協力者への連絡を頼んだ。

そうしているうちに、平沢家が見えてきた。

すると、唯の部屋と思われる窓が開いた。

僕はその窓の近くで止まった。

「ヤッホー」

「いいから、早く乗って」

まるで山に来た時のような声を上げる唯に、僕は促した。

「それじゃ、失礼します……っつと!」

「あ、危な!?! 気を付けてよ」

「えへへ、ごめんごめん」

バランスを崩しかける唯の手をつかんで、僕は梓の後ろに座らせた。

「狭いですのう」

「当然だ。これは乗ったとしてもそもそも二人が限界だ」

不満を漏らす唯に、僕はため息をつきながら答えた。

今もクリエイトは念話で悲鳴を上げ続けている程だ。

「しっかりつかまって。飛ばすよー」

「了解であります！」

僕は魔力をいつより三倍ほど消費させることで学校へと向かうのであった。

「やはり、警備員の姿があるな」

「そうですね」

「どうするの？ 浩君」

学校の上空を飛行する僕は、校門付近で巡回をしている警備員の姿を見つけた。

「別のルートから侵入する」

そう答えた僕は、校舎の屋上の方へと降りたつた。

そこは扉を開ければ部室に続くドアがあるので、非常に便利な場所だった。

「さて、今の時間は？」

「11時35分です」

ここに来るので5分の時間をロスしてしまった。

「僕たちのここに来た目的は覚えているよな？」

「はい。時間を繰り返す原因を探すんですよね？」

梓の答えた言葉に、僕は頷いて答えた。

そう、僕がここに来たのは時間経過を正常に戻すために、原因である物を探し出すことだった。

「放課後にも話したけれど、魔法連盟に頼んでいたのでは、一生掛つても捜索することができないので、僕たちだけで探す。探し方は覚えているよね？ 唯」

「もちろんです！ えっと、目を閉じて手をかぎしていけばいいんだ

よね」

「正確には、全神経を掌に集中させればいい。魔力で動くものがあれば、掌がひりひりしたり暖かいものを感じたりするはずだから」

これは、魔力を持つていない人に向けた魔力根源搜索の方法だ。

魔力と言っても一種のエネルギーだ。

人間の肌で感じ取ることは十分に可能。

それを利用した搜索方法だ。

「おそらく、今回の原因物は巧みなカモフラージュをしている。だから目で見た物を信じずに、感じた者を信じるように」

「はい！」

僕の指示に、二人は活き活きとした様子で頷いた。

こんな夜遅い時間だというのに元気な奴だ。

ある意味感心してしまう。

「おそらく午前0時になった瞬間に、時間が巻き戻される。そうなったらマラソン大会をやり直すことになる。だから、できる限り急いで」

「は、はい！」

「もうマラソンは勘弁です」

唯の言葉に、僕も同意見だ。

そしてお互いに頷きあうと、屋上から中に入るドアへと向かう。

そしてドアノブに手をかざしてつぶやく。

「オープラ」

たった一言でドアのかぎが開き、僕たちは中へと足を踏み入れた。

「それじゃ、開けるよ」

僕は後ろにいる二人に声を掛けると、再びドアノブに手をかけて先ほどの呪文を口にした。

「よし、入るぞ」

「おー」

小声で告げた僕は、ドアを開けた。

だが、そこでとんでもないことが起こった。

「ぬぁにい、くおれえはあ？」

僕を含めて動きがゆっくりになったのだ。

分かりにくいため、元の速度で書いていきます

「時間の流れが――」

「あれ？」

「あれ？ 私たち、確か部室の前にいたよね？」

気が付くと、僕たちは屋上の方へと戻されていた。

「梓、時間は！」

「は、はい！ えっと、11時35分です」

梓が告げたのは、ここに来た時の時刻だった。

「どうやら、むやみに部室に入ると、時間を戻されるようだ」

「ええー。でも、入らないと調べられないよ」

(おそらく、これは探知魔法)

僕はこのからくりをすぐに突き止めていた。

探知魔法とは、監視カメラとセンサーがセットになったようなもので、仕掛けてある場所に何らかのものが入ってきたことを検知するとさまざまなきミツクを発動させる。

大抵は、術者への通告なのだが、今回はどうやら時間操作の魔法の発動らしい。

「だったら、これを使おう」

僕は二人にそう告げてホロウインドウを展開すると『転送』の項目に触れた。

そして僕の前方に三枚の黒色のマントが現れた。

「あの、これはなんですか？」

「認識障害と言って、そんなものからも姿を隠すことのできるマント。分かりやすく言えば、透明マント」

マントの説明をしながら二人に手渡していく。

「おお……これが伝説の」

「……終わったら返してね」

唯にくぎを刺しながら、僕はマントを頭から羽織った。

「あ、あれ?! 浩君が消えた!」

「二人もこうやって羽織って」

「は、はい」

驚きの声を上げる唯をしり目に、僕が促すと二人も、僕と同じようにマントを羽織る。

すると、僕の前から二人の姿が消えた。

これは唯たちが認識阻害によって、姿を見えなくさせられたことを意味していた。

「僕から離れないで」

「了解です、浩君隊員!」

「はい!」

僕はいるであろう二人に、声を掛けると先ほどと同じ要領で屋上を後にする。

そして中に入った僕は、音楽準備室ではなく、その横の音楽室のドアノブに触れると、魔法で鍵を開けた。

「え? 部室じゃないんですか?」

「部室だとまたさっきのようになれる。こつちにある連絡用の物置を使って、部室に入る。あそこはカギがかかってないから」

驚いた様子で聞いてくる梓に、僕はそう答えると音楽室に足を踏み入れた。

「唯、ちゃんとついてきてるか?」

「大丈夫だよー」

不安材料の唯に僕は確認を取った。

唯から返事が返ってきたようなので、どうやら大丈夫のようだ。

そして物置に通じるドアを開けた。

そして奥の部室に続くドアを慎重にあける。

「唯は出入り口付近を。梓はベンチ付近。僕はこの辺りを調べる」
「はい」

二人に指示を出した僕たちは、それぞれの場所を調べていく。

(違う……)

手をかざしていくが、なかなか見つからない。

そして時間が刻一刻と過ぎていき。

「浩君！」

「時間が!!」

そんな中、唯と梓の悲鳴にも似た声が聞こえた。

僕は、その声に反応して顔を上げる。

「どうし

第64話 続・ループ

「……………なぜ？」

朝、支度が終わった僕は、自室で呟く。

今日も、マラソン大会だ。

そう“またしても”だ。

記憶はしつかりとある。

あの時、調べる段階にまで進むことができた。

何度日付を確認してみても、マラソン大会当日だった。

「また一日を繰り返しているな……………これは」

そう思うのが妥当だった。

「時間切れか」

原因は、おそらく時間切れになったためだ。

25分でしたっかりと集中して調べようとするれば、その分だけかかる時間は増えていく。

「とりあえず、学校に行こう」

僕はそう結論を出して、いつものように自宅を後にするのであった。

「……………を誓います」

太陽の光が皆さんさんと照りつける中、生徒会長（名前は知らないが、いい加減覚えるようにしよう）が台上がって右手を上げながら宣誓の言葉を告げた。

僕はそれをすでに四回も聞いていた。

「それでは、よーい」

校長の掛け声とともに銃声が鳴り響く。

こうして、僕にとっては五回目のマラソン大会は幕を開けた。

(どうしてまた中盤から走ることになるんだ！)

軽音部の皆と一緒に走ろうと考えたのだが、並ぶ順番の問題なのか、はたまた別の問題なのか、今回もまた中盤付近を走ることになった。

(もういいや)

考えることが面倒になった僕は、深く考えることをやめた。

(まあ馬拉ソン自体が、僕にとっては遊びだし)

去年も今年も、僕はそれほど力を出していない。

僕にとつては幼稚園の子供を追いかけているような感じだ。

少しばかり、窮屈な感じはするもののこれはこれで力の制御の練習になるのではないかなと考えていたりする。

なので、考える方に力を入れることにした。

(つと、もう1キロか)

1キロのポイントにたどり着き、周りの生徒が若干ペースダウンをし始めてきた。

だが、やっぱり軽音部の姿は見つからない。

(そう言えば、この辺りで梓の姿見えるんだったよな)

そんなことを思っていると、梓の姿が前の方に見えてきた。

「梓ー」

もう四回目にもなる僕は、しっかりと元の呼び方で梓の名前を呼んだ。

だが、声に活気はなかった。

「あ、浩介先輩」

僕の声に気づいたのか、走る足を少しだけ緩めるとこつちの方を振り向いた。

梓も活気が全くない。

まあ、四回も繰り返し返しているだから当然かもしれないが。

その横に一緒に走っている二人の女子もこつちに振り向いた。

「浩介さん、早いですね」

「それをそのまま憂達に返すよ」

少し走る速度を速めて彼女たちの斜め後ろにまで迫りながら、僕は

憂に返した。

もうこのやり取りを僕は、四回もしているのだ。

「こんにちは、浩介先輩」

深く考えるよりも前に、両サイドに髪を束ねた女子生徒が僕に声を掛けてきた。

「こんにちは、鈴木さん」

「はい！ 名前覚えてくれたんですね」

正しい名前を口にするのと、うれしそうな表情を浮かべてくれた。

「まあね、さすがに忘れないよ」

これで四回目になるのだから。

「ところで、唯たちは見たか？」

「唯先輩ですか？ 見てませんけど」

「そうか……」

梓の返事に、僕は顎に手を添えて考える。

(ここを走っていないとなると、終盤の方だな。確実に)

よくよく考えれば軽音部は一部のメンバーを除いて、運動が得意そうな印象を受ける人物はいない。

どう考えても一番後ろの方を走っている可能性が高かった。

「あの浩介先輩も、良ければ一緒に走りませんか？」

「……鈴木さんが迷惑でなければ」

梓の提案に、僕は考え込みながら返した。

後ろに下がることは考えなかった。

速度をこれ以上落とすのは僕には無理だからだ。

走るのをやめて待つというのもあるが、それはそれでなんかいやだった。

「私は構わないですよ」

「それじゃ、お言葉に甘えて」

鈴木さんが頷いたので、僕は梓達と共に走ることにした。

(この後に鈴木さんからギターのコーチを頼まれるんだよな)

「あ、憂から聞いたんですけど浩介先輩ってギターなんですよね？」

「そうだけど、何か？」

そんなことを思っている最中、鈴木さんから声が掛けられた僕は、分からないふりをして先を促した。

「その、もしよければ私にも教えてほしいな、と」

「…………… どういうことだ？」

「あ、純ちゃんはジャズ研究部でベースを担当しているんです」

僕の知っている鈴木さんの問いかけに、僕は理由がよくわからないのを演じる。

下手をすると予知能力があると思われかねないからだ。

魔法のことを隠さないといけない。

だからと言って、同じやり取りを繰り返すというのは精神的にきつい。

そんな僕に、憂がすかさず説明をしてくれた。

「なるほど。だが、ベースだったら僕ではなく濤の方が適任だろ？」

ギターとベースとでは若干奏法も異なってくるし」

「そうなんですけど、ジャズ研の先輩から浩介先輩のギターは格好いいって聞いたので」

（それにしても理由が”かつこいいから”というのは、わかりかねるよな）

素直に喜んでいいのかわからない理由に、僕は再び心の中で苦笑する。

「まあ、考えておくよ」

「お願いします」

考えるとは言ったが教える可能性は限りなく0に近い。

理由としては部同士の問題だ。

軽音部とジャズ研究部はある種の競合関係……………つまり、ライバルになる。

それぞれの部長が、部外者の介入を快く思うかどうかどうの問題だ。

例えるならば、別の会社の社長が、ライバル会社の経営に介入するような感じだ。

どちらにせよ、律に話を通す必要があるが、それをする気は今の僕にはなかった。

僕をその気にさせる。何かがあれば話は別だが。彼女には悪いが。

(まずは、この繰り返し返される一日の、問題解決だ)

それが解決しない限り、僕たちに未来はないのだから。

「梓、放課後に部室で」

「……分かりました」

僕は梓にそれだけ告げた。

そんなこんなで、僕たちは五回目のマラソン大会を走りきるのであった。

「……………これで大丈夫かな」

先に部室にやってきた僕は、前と同じように部室前の階段のところにある仕掛けを施していた。

そして僕は目を閉じて梓が来るのを待った。

(ん、梓だ)

おそらく急いでできたのか、駆け足で階段を上がってきているのがわかった。

「ラ・ベネーリア」

そしてタイミングよく、ある魔法を発動させた。

それと同時に、ドアが乱暴に開け放たれる。

「はあ……………はあ……………」、こんにちは」

「お疲れ。というより、そこまでは知らなくてもいいのに。どうぞ」

息を切らしながら挨拶をしてくる梓に、僕は苦笑しながらいつも梓が座る椅子を引いて座るように促した。

「ど、どうも……………です」

席に着いたところで、紅茶を出すとお礼を口にした梓はそのまま紅茶に口をつけた。

「それで、こうなった原因はやっぱり？」

「はい。12時になってしまいました」

僕の問いかけに、梓は頷くと答えてくれた。

「それで、そっちは収穫は？」

僕の問いかけに、梓は首を横に振ることで答えた。

「あ、浩君にあずにゃん」

「唯先輩！」

「ゆい、そっちの方は収穫はあったか？」

前と同じように、僕のループの魔法を無効化して入ってきた唯に、僕はすぐに問いかけた。

「全然だった。二人は？」

唯の問いに、僕たちは首を横に振った。

「唯はどのあたりまで調べた」

「えっとね……」

僕の疑問に、唯はドアの前の壁からドラムのあたりまで歩いていく。

「ここまで！」

「全然進んでないな」

まだ割り当てられた面積の1割も達していなかった。

「梓は？」

「えっと、私は……この辺りまでです」

梓が指し示したのは長椅子だった。

「あずにゃんも進んでないんだね」

「まあ、床に比べて物は調べる箇所が多いから。僕だってそんなもんだし」

僕はドア付近から洗面台までしか調べることができていなかった。

結局のところ、人手が足りないのだ。

「ねえ、魔法連盟の人にお願ひしたらどうかかな？」

そんな中、真剣な面持ちで唯がそんなことを提案してきた。

「確かに、魔法連盟に調査の要請をすれば、数十人規模で調査が行われるからかなり効率はいいかもしれないね」

そういう意味では唯の提案は確かに素晴らしい案だった。

「それじゃ——」

「でもね」

僕は、唯の言葉を遮って話を続けた。

「要請してから調査に入るまで最低でも1日は要する。人員を集めて作業方法の検討とかもあるからすぐに調査は無理」

「12時になると、またやり直すことになるから、確かに意味がないですよね」

僕の話聞いた梓が相槌を打つ。

「こうなったら！」

「今調べても無駄だ。昨日からそれをしていているけど、昼間はどうかやら完全に隠れているようで気配が把握できないんだ」

調べだそうとする唯に、僕は残酷な事実を告げた。

「結局、夜にやるしかないんですね」

「今夜こそ、突き止めるんだ」

そうしなければ、僕たちはまたマラソン大会で走る羽目になるのだから。

「はあ、マラソンの後のお菓子は格別どすな」

「そうですね」

「おやじか、お前らは」

それから数分後、部室前の階段にかけていたループの魔法を解除し、すぐにやってきたムギ達とともに、ムギが出してくれたケーキに舌鼓を打っている中、椅子にもたれかかりながら声を上げる唯とそれに乗る律に、漣がツツコみを入れた。

唯のあそこまでの変わりようには、僕も目を見張るものがある。

「でも、楽しかったわね、マラソン大会」

「はい。また来年が楽しみですね」

とはいえ、梓とムギの二人はある意味間違っているような気がしたが。

しかし、このやり取りも四回見るとうんざりしてくるところがあるのは気のせいだろうか？

「はあく疲れたわ」

「あ、さわちゃん」

そんな中、ため息交じりに入ってきた山中先生に、唯が反応した。

「ムギちゃん、紅茶とお菓子をお願い」

「分かりました」

「完全にたかってる」

「というより、教師の面目丸つぶれですね」

ムギが席を立てて紅茶とお菓子の用意をしている中、律のつぶやきに僕が続いた。

「だって、大変なのよ。教師というのも」

「へえ」

「先生ですしね」

山中先生の反論に、唯は分かっているのいないのか微妙な声を上げ、梓は想像がついたのか頷きながら答えた。

(あ、そうだ)

僕はこの後に起こるであろうことを思いだし予備のトレイを頭上に構える。

「お待ちせしました。紅茶が入り——きや!？」

「……」

次の瞬間、いつものようにボードを持つ手に衝撃を感じた。

「だ、大丈夫かムギ？」

「わ、私は大丈夫だけど、浩介君が」

「……こっちは大丈夫だ」

ムギの言葉に導かれるように、全員がこっちを見るので、僕はボードを頭の方から退けて答えた。

「よ、よかった……」

ほっと胸をなでおろす様子のムギ。

「僕にも、お茶のおかわりをもらえるかな？　それでこの件はおしまいいい」

「わ、わかったわ。とびきりおいしい紅茶を淹れるわね」

僕は、そんなムギに紅茶のおかわりをお願いした。

「お茶入りましたよー」

「ありがとう」

それから数分後、ムギが紅茶のおかわりが入ったティーカップを手に戻ってきた。

「あ、そう言えば浩君たちは順位はどうだったの？」

「僕はあずにやんと同じだったと思うよ」

「浩介君はやっぱり早いんだね」

僕の答えに、ムギは紅茶のおかわりが入ったカップを置きながら言った。

「まあね」

「去年はトップでゴールしてた程よ」

そんな中、山中先生が、ウインクしながら人差し指を立てて補足した。

「あんたは化け物か！」

「あ、でも。浩君だから当然かー」

ツツコミを入れる律に、納得顔の唯。

「ずるでもしたのか?!」

「するか！　普通に走っただけだ」

律に掛けられたあらぬ誤解に、僕は猛反論した。

「そうよ。今回のコースは近道なんてないもの」

唯たちが示している言葉の意味を知らない山中先生は、言葉通りに受け取って僕の言葉に賛同した。

「あ、そうだ。走ってる時に、おいしいケーキ屋さんがあったんだよー」

ふと唯が話題を変えたことで、話はケーキ屋のこととなった。

「やっぱり、今日も練習は無しですか」

「あはは……明日は大丈夫だと思うよ……たぶん」

肩を落としている梓に、僕は苦笑しながらそうフォローの声を掛けるのであった。

まあ、その明日が来ればだけど。

「お風呂も入って、予習復習もできたし、残すは……」

時刻は夜の9時30分。

やることをすべて終えた僕は、自室に入って腕を伸ばしながらつぶやいた。

「これか……」

そんな僕の視線の片隅に見えた段ボール箱に、先ほどまで上げていた腕を力なく降ろしながらつぶやいた。

それは魔法連盟での僕の仕事用の書類が入ったものだ。

「やれやれ、起訴か不起訴かを決めるのも大変だよ……」

ため息交じりに呟きながら、僕は段ボール箱の中からファイルを10個程度取り出した。

本当は500ほどあったが、これまでにコツコツやって終わらせたのだ。

その提出期限は今日の23時59分59秒までだ。だからこそ急いでやらなければならない。

「一つ10分以内に終わらせれば間に合うか」

ファイルの内容は数百ページにも及ぶが、何とかなるだろう。

……たぶん。

僕は、できる限り急いで仕事に取り組むのであった。

そして、二時間後の11時30分。

「終わったー!」

何とか仕事を終わらせることができた僕は、固まった筋肉をほぐし

ながら仕事を終えた解放感に浸っていた。

「さて、この書類を段ボールに詰めて……」

僕は段ボールの箱に10このファイルを詰めるとテープで閉じた。

「後は、転送システムで送ればいいだけ」

右腕を前方に掲げ、手を開くようなしぐさをしてホロウインドウを展開させる。

そして『転送』の項目に手を触れると、目の前の段ボール箱が光りだし大きく光を放った。

光が薄まると、目の前の段ボール箱は跡形もなく無くなっていた。

(しかし、同じことを四回もするのはきつい)

「よし、行くか」

僕は気合を入れると杖状のクリエイトを手にする。

そして部屋の明かりを消して窓を開ける。

僕は認識障害魔法を自身に施してから、窓から飛び出た。

そして流れるような動きで杖の上に乗った僕は協力者たちの家に向かうのであった。

「そろそろ唯の家だ。あずにゃん、電話を」

「は、はい！」

空を飛んで協力者の一人である梓にもう一人の協力者への連絡を頼んだ。

そうしているうちに、平沢家が見えてきた。

すると、唯の部屋と思われる窓が開いた。

僕はその窓の近くで止まった。

「ヤッホー」

「もうそれはいいから、早く乗って」

まるで山に来た時のような声を上げる唯に、僕は促した。

「それじゃ、失礼します……つと!?!」

「あ、危な!?! 前にも言ったけど気を付けてよ」

「えへへ、ごめんごめん」

再びバランスを崩しかける唯の手をつかんで、僕は梓の後ろに座らせた。

「狭いですのう」

「当然だ。これは乗ったとしても、そもそも二人が限界だ」

不満を漏らす唯に、僕はため息をつきながら答えた。

今もクリエイトは念話で悲鳴を上げ続けている程だ。

「しつかりつかまって。飛ばすよ！」

「了解であります！」

僕は魔力をいつより三倍ほど消費させることで学校へと向かうのであった。

「やはり、警備員の姿があるな」

「そうですね」

「どうするの？ 浩君」

学校の上空を飛行する僕は、校門付近で巡回をしている警備員の姿を見つけた。

僕はそれに目もくれずに、そのまま校舎の屋上の方へと降りたつた。

そこは扉を開ければ部室に続くドアがあるので、非常に便利な場所だった。

「さて、今の時間は？」

「11時35分です」

「ここに来るので5分の時間をロスしてしまった。」

「僕たちのここに来た目的は、ちゃんと覚えているよね？」

「はい。時間を繰り返す原因を探すんですよね？」

梓の答えた言葉に、僕は頷いて答えた。

「探し方は覚えているよね？ 唯」

「もちろんです！ えっと、目を閉じて手をかざしていけばいいんだよね」

「正確には、全神経を掌に集中させればいい。魔力で動くものがあれば、掌がひりひりしたり暖かいものを感じたりするはずだから」

唯の答えに僕は満足げに頷くと、右手を開くようなしぐさで、ホロウインドウを展開する。

そして『転送』の項目に触れた。

「これを忘れずに」

僕は二人にそう告げて、黒色のマントを手渡した。

「オープラ」

そして僕は昨日と同じ要領でドアを開けると屋上を後にする。

そして中に入った僕は、音楽準備室ではなく、その横の音楽室のドアノブに触れると、これまた魔法で鍵を開けた。

「唯、ちゃんとしてきてるか?」

「大丈夫だよー」

不安材料の唯に僕は確認を取った。

唯から返事が返ってきたようなので、どうやら大丈夫のようだ。

そして物置に通じるドアを開けた。

そして奥の部屋に続くドアを慎重にあける。

「調べる場所は昨日の続き。原因を見つけたら何もせずに僕を呼ぶように。オーケー?」

「はい」

二人に指示を出した僕たちは、それぞれの場所を調べていく。

(違う……)

手をかざしていくが、なかなか見つからない。

やがて、洗面台の反対側の窓付近にある棚の方に差し掛かった時だった。

「ッ!」

明らかに、掌に魔力の反応を感じた。

「見つけた」

「え!」

僕の言葉に反応した二人がこっちに駆け寄ってきた。

「原因はこの時計だ」

僕が見ているのは、ムギが頂き物として持ち込んだ置時計だった。

「ムギ先輩の時計が、まさか……」

「それじゃ、この繰り返し返しの犯人はムギちゃん?」

「それはどうでもいい。早くこいつをどうにかしないと」

疑問に頭を抱える二人に、僕は厳しい口調で声を掛ける。

時計が指し示す時間は11時50分。

もう時間がなかった。

「でも、どうすれば?」

「簡単だ、こいつを破壊すればいい」

唯の疑問に、僕は一番確実な方法を答えた。

破壊すれば、どんな魔法が掛けられていようとも、機能することは不可能になる。

また解除する必要がないため、一番簡単な方法だ。

尤も、かなり乱暴ではあるが。

「ダメだよっ! これはムギちゃんが持ってきてくれた奴だよ!」

「他に方法とかはないんですか」

反対の声を上げる唯に賛同するように、梓が訊いてきた。

「あることにはあるが、かなり難しい」

「どういうことですか?」

「こいつには、センサーのようなものがついているらしい。無力化する際には構造の把握をする必要があるが、ちよつとでも魔力を流せばすぐに反応して時間を巻き戻されてしまう」

構造把握ともいうが、これをするには魔法を使って精密に調べる必要があるのだ。

この場合、当然だが魔法を使う必要がある。

魔力も当然探知魔法に引っ搔かれればこの時計は時間を操作してしまっただろう。

「僕は別にかまわないよ? あと数十回ほど今日を繰り返すことになるけど」

「う……」

「それはそれで、嫌だ」

僕の挙げた回数に、二人は勢いを失った。

「この時計のことについては、明日ムギに僕から説明して謝る。それでいいでしょ?」

「……………」

二人は無言で頷くことで答えた。

「それじゃ……」

僕は格納庫から一本の剣を取り出した。

「高の月武術……なっ!？」

僕が保有する武術で、時計を破壊しようとしたところで、時計がとんでもない動きをした。

なんと、時計の針がゆっくりと動き出したのだ。

「ど、どうしたんですか!？」

「浩君!？」

二人の悲鳴にも似た声が聞こえる。

長針が文字盤の“11”を通過した。

「いけない! こいつ、時計だけ時間を

第65話 リフレイン

「……………またか」

朝、支度が終わった僕は、自室で呟く。

今日も、マラソン大会だ。

そう“またしても”だ。

記憶は、例のごとくしつかりとある。

あの時、調査の結果、ついに原因である物を見つけることができた。だが、時計自信の時間を早めて0時にさせるといふ暴挙に出ただ。だ。

何度日付を確認してみても、マラソン大会当日だった。

「また一日を繰り返すのか……」

思わず肩を落としてしまった。

「勘弁してくれ」

さすがに、一日を何度も繰り返すのは精神的にきつい。

まさに無間地獄に近い状態だった。

「とりあえず、学校に行こう」

学校を休むわけにもいかないなので、僕はいつものように自宅を後にするのであった。

「————を誓います」

太陽の光が皆さんさんと照りつける中、生徒会長（名前は知らないが、いい加減覚えるようにしよう）が台に上がって右手を上げながら宣誓の言葉を告げた。

僕はそれをすでに五回も聞いていた。

（……………ん？）

そんな生徒会長の姿に、僕は何かが引っ掛かった。

「それでは、よーい」

校長の掛け声とともに銃声が鳴り響く。

こうして、僕にとっては六回目のマラソン大会は幕を開けた。

(どうしても何度も何度も、中盤から走るようになるんだ！)

今回もまた軽音部の皆と一緒に走ろうと考えたのだが、並ぶ順番の問題なのかはたまたまた別の問題なのか、今回もまた中盤付近を走る事になった。

(もういいや)

考えることが面倒になった僕は、深く考えることをやめた。

(まあマラソン自体が、僕にとっては遊びだし。というよりもうどうでもよくなってきた)

去年も今年も、僕はそれほど力を出していない。

僕にとつては幼稚園の子供を追いかけているような感じだ。

少しばかり、窮屈な感じはするもの。これはこれで力の制御の練習になるのではないかなと考えていたりする。

なので、考える方に力を入れることにした。

これ以上繰り返し返されると本格的に気が狂いそうだった。

(つと、もう1キロか)

1キロのポイントにたどり着き、いつものように周りの生徒が若干ペースダウンをし始めてきた。

だが、やっぱり軽音部の姿は見つからない。

(そう言えば、この辺りで梓の姿見えるんだったよな)

そんなことを思っていると、梓の姿が前の方に見えてきた。

「梓」

もう五回目にもなる僕は、しっかりと元の呼び方で梓の名前を呼んだ。

だが、どうしても声に活気が出なかった。

「あ……浩介先輩」

僕の声に気づいたのか、走る足を少しだけ緩めるとこっちの方を振り向いた。

そして梓も言葉に活気が全くない。

まあ、五回も繰り返しているだから当然かもしれないが。

その横に一緒に走っている二人の女子は、僕たちとは対照的に元気そうな様子でこっちに振り向いた。

「浩介さん、早いですね」

「それをそのまま、憂達に返すよ」

少し走る速度を速めて彼女たちの斜め後ろにまで迫りながら、僕は憂に返した。

もうこのやり取りを僕は、五回もしているのだ。

「こんにちは、浩介先輩」

深く考えるよりも前に、両サイドに髪を束ねた女子生徒が僕に声を掛けてきた。

「こんにちは、鈴木さん」

「はい！ 名前覚えててくれたんですね」

正しい名前を口にするのと、うれしそうな表情を浮かべてくれた。

「まあね、さすがに忘れないよ」

なにせこれで五回目になるのだから。

「ところで、唯たちは見たか？」

「唯先輩ですか？ 見てませんけど」

「そうか……」

梓の返事に、僕は顎に手を添えて考える。

(ここを走っていないとなると、終盤の方だな。確実に)

よくよく考えれば軽音部は一部のメンバーを除いて、運動が得意そうな印象を受ける人物はいない。

どう考えても一番後ろの方を走っている可能性が高かった。

というより、唯の様子がものすごく気になった。

もしかしたら気が滅入っているのかもしれない。

「あの浩介先輩も、良ければ一緒に走りませんか？」

「……鈴木さんが迷惑でなければ」

梓の提案に、僕は考え込みながら返した。

後ろに下がることは考えなかった。

速度をこれ以上落とすのは僕には無理だからだ。

走るのをやめて待つというのもあるが、それはそれでなんかいやだった。

「私は構わないですよ」

「それじゃ、お言葉に甘えて」

鈴木さんが頷いたので、僕は梓達と共に走ることにした。

(この後に鈴木さんからギターのコーチを頼まれるんだよな)

「あ、憂から聞いたんですけど浩介先輩ってギターなんですよね？」

「そうだけど、何か？」

そんなことを思っている最中、鈴木さんから声が掛けられた僕は、分からないふりをして先を促した。

「その、もしよければ私にも教えてほしいな、と」

「……？ どういうことだ？」

「あ、純ちゃんはジャズ研究部でベースを担当しているんです」

僕の知っている鈴木さんの問いかけに、僕は理由がよくわからないのを演じる。

下手をすると予知能力があると思われかねないからだ。

魔法のことを隠さないといけない。

だからと言って、同じやり取りを繰り返すというのは精神的にきつい。

そんな僕に、憂がすかさず説明をしてくれた。

「なるほど。だが、ベースだったら僕ではなく濤の方が適任だろ？」

ギターとベースとでは若干奏法も異なってくるし」

「そうなんですけど、ジャズ研の先輩から浩介先輩のギターは格好いいって聞いたので」

(それにしても理由が「カッコいいから」というのは、わかりかねるよな)

素直に喜んでいいのかわからない理由に、僕は再び心の中で苦笑する。

「まあ、考えておくよ」

「お願いします」

考えるとは言ったが教える可能性は限りなく0に近い。

理由としては部同士の問題だ。

軽音部とジャズ研究部はある種の競合関係……つまり、ライバルになる。

それぞれの部長が、部外者の介入を快く思うかどうかどうの問題だ。

例えるならば、別の会社の社長が、ライバル会社の経営に介入するような感じだ。

どちらにせよ、律に話を通す必要があるが、それをする気は今の僕にはなかった。

僕をその気にさせる〝何か〟があれば話は別だが。

彼女には悪いが。

(まずは、この繰り返し返される一日の、問題解決だ)

それが解決しない限り、僕たちに未来はないのだから。

「梓、放課後に部室で」

「……分かりました」

僕は梓にそれだけ告げた。

そんなこんなで、僕たちは六回目のマラソン大会を走りきるのであった。

「……………これで大丈夫かな」

先に部室にやってきた僕は、前と同じように部室前の階段のところに、ある仕掛けを施していた。

そして僕は目を閉じて梓が来るのを待った。

(ん、梓だ)

おそらく急いできたのか、駆け足で階段を上がってきているのがわかった。

「ラ・ベネーリア」

そしてタイミングよく、ある魔法を発動させた。

それと同時に、ドアが乱暴に開け放たれる。

「はあ………はあ………」

「お疲れ。というより、そこまでは知らなくてもいいのに。どうぞ」

息を切らしながら挨拶をしてくる梓に、僕は苦笑しながらいつも梓が座る椅子を引いて座るように促した。

「ど、どうも……です」

席に着いたところで、紅茶を出すとお礼を口にした梓はそのまま紅茶に口をつけた。

「あ、浩君にあずにやん」

「唯先輩！」

それから少しして前と同じように、僕のループの魔法を無効化して入ってきた唯は、いつもの僕の隣の席に腰掛けた。

「どうしよう？」

「今やってみるのはどうですか？」

唯が口にした言葉に、梓が閃いたのか僕に促してきた。

「やってみるか？」

僕はそれだけを告げると、格納庫から一本の剣を取り出す。

「ふんっ！」

「あっ!？」

「弾いた！」

剣を時計に向けて振り下ろすが、時計を覆っている何かによって弾かれてしまった。

「こうやって弾かれる。おそらく昼間は時計の周りに結界のようなものを張っているんだろう」

おそらく、それが魔力の流れがおかしかった原因の一つだ。

昼間でも常時魔力を消費していれば、魔力の流れが不自然なものになってもおかしくない。

「この時計、一体どういう仕組みなのかな？」

「午前0時になった瞬間に、それまでため込んでいた魔力を消費して時間を巻き戻す。だから、それ以外ではほんのわずかな時間を巻き戻したり時計だけ時間を進めたりすることしかできない」

唯の疑問に、僕が突き止めたこの時計の仕組みを告げた。

「この時計には、魔力回路の基盤が存在するはず。それをへし折つてやれば時間の巻き戻しは無くなる」

「それをするには、時計を壊すしかないんですか？」

あまり乗り気ではない梓の問いかけに、僕は無言で頷いた。

「外から見てもどれが基盤かはわからない。取り出せばすぐにわかるんだけど。それにもしかしたら魔力回路以外に何らかの仕掛けが施されている可能性が高い。だったら完全に破壊した方が確実なんだ」「やつぱり、犯人はムギちゃんなのかな？」

そんな中、唯がポツリと漏らした。

「でも、ムギ先輩がそんなことをするような人には見えません！」

「僕とて同じだ。おそらくムギは全く関係ない。だから、今回のことで咎めは一切ないはずだ」

梓の意見に賛同しながら、僕は「それよりも」と言葉を続けた。

「どうやってこれを何とかするかだ」

「壊そうとすれば、前みたいに時間を止められたりはやめて巻き戻されたりしてしまいますし」

「ねえねえ、バリアのようなものはどうかな？」

頭を抱える中、唯が右手を挙げて提案してきた。

確かに、それもいい案だ。

だが、

「防御魔法や、結界などは魔法攻撃などは防いでも、時間操作などから守ることはできない」

「そうなんだ……むー」

僕の返答に、頭を抱える二人をしり目に、僕は席を立つと例の時計の前に立つ。

(一体どうすれば、この時間のループを止められるんだ)

時計に手を置きながら、僕は考えを巡らせる。

(……………ん?)

そんな時、ふと何かを感じた。

(なるほど。そう言うことか)

僕はこの時、すべての問題を解決させることに成功した。

「いや、あった。時間操作を無効化できる魔法が」

「本当ですか!？」

僕の言葉に、希望を抱いた目で僕を見てくる梓に、僕は無言で頷いた。

「今夜、決着をつけるよ!」

「おー!」

そして、僕たちは今夜すべての決着をつけることを誓い合うのであった。

「はあく、マラソンの後のお菓子は格別どすなー」

「そうですね」

「おやじか、お前らは」

それから数分後、部室前の階段にかけていたループの魔法を解除し、すぐにやってきたムギ達とともに、ムギが出してくれたケーキに舌鼓を打っている中、椅子にもたれかかりながら声を上げる唯とそれに乗る律に、濡がツツコみを入れた。

唯のあそこまでの変わりようには、僕も目を見張るものがある。

「でも、楽しかったわね、マラソン大会」

「はい。また来年が楽しみですね」

とはいえ、梓とムギの二人はある意味間違っているような気がしたが。

しかし、このやり取りも五回見るとうんざりしてくるところがあるのは気のせいだろうか？

「はあく疲れたわ」

「あ、さわちゃん」

そんな中、ため息交じりに入ってきた山中先生に、唯が反応した。

「ムギちゃん、紅茶とお菓子をお願い」

「分かりました」

「完全にたかってる」

「というより、教師の面目丸つぶれですね」

ムギが席を立てて紅茶とお菓子の用意をしている中、律のつぶやきに僕が続いた。

「だって、大変なのよ。教師というのも」

「へえ」

「先生ですしね」

山中先生の反論に、唯は分かっているのいないのか微妙な声を上げ、梓は想像がついたのか頷きながら答えた。

（あ、そうだ）

僕はこの後に起こるであろうことを思いだし、その場から移動する。

「もう、作業感丸出しですね」

「お待ちせしました。紅茶が入り——きや!？」

「……」

次の瞬間、頭の上から熱い液体が降ってきた。

「だ、大丈夫かムギ?」

「わ、私は大丈夫だけど、浩介君が」

「……僕は大丈夫」

ムギの言葉に導かれるように、全員がこっちを見るので、僕はそれだけ答えた

「ご、ゴメンなさい。本当にわざとじゃないのよ。本当よ!」

「いや、分かっているから。こんなのかすり傷にもならないし」

とりあえずハンカチで頭をふきながら目の端に涙を浮かべながら謝るムギを落ち着かせた。

「僕にも、お茶のおかわりをもらえるかな? それでこの件はおしま
い」

「わ、わかったわ。とびきりおいしい紅茶を淹れるわね」

（過程を変えても結果は変わらないんだった）

僕は、時間ループの際の原則の話を思い出しながら心の中でつぶやいた。

ちなみに、この原則は簡単に言えばループした日に起きたことを体験しないようにしても、必ず自分の身に降りかかるということだ。

つまり、僕の場合は予備のトレイで頭を覆っていたので、問題はなかった。

だが、今回はただ席を移動しただけだったので、ティーカップはちゃんと僕の頭上にやってきたのだ。

時間を何度も繰り返し返すと、こういうことがあるから悔れないのだ。

「お茶入りましたよー」

「ありがとう」

それから数分後、ムギが紅茶のおかわりが入ったティーカップを手に戻ってきた。

「あ、そう言えば浩君たちは順位はどうだったの？」

「僕はあずにやんと同じだったと思うよ」

「浩介君はやっぱ早いんだね」

僕の答えに、ムギは紅茶のおかわりが入ったカップを置きながら言った。

「まあね」

「去年はトップでゴールしてた程よ」

そんな中、山中先生が、ウインクしながら人差し指を立てて補足した。

「あんたは化け物か！」

「あ、でも。浩君だから当然かー」

ツツコミを入れる律に、納得顔の唯。

「ずるでもしたのか?！」

「するか！ 普通に走っただけだ」

律に掛けられたあらぬ誤解に、僕は猛反論した。

「そうよ。今回のコースは近道なんてないもの」

唯たちが示している言葉の意味を知らない山中先生は、言葉通りに受け取って僕の言葉に賛同した。

「あ、そうだ。走ってる時に、おいしいケーキ屋さんがあったんだよー」

ふと唯が話題を変えたことで、話はケーキ屋のこととなった。

「やっぱり、今日も練習は無しですか」

「あはは……明日は大丈夫だと思うよ……たぶん」

肩を落としている様に、僕は苦笑しながらそうフオローの声を掛けるのであった。

まあ、その明日が来ればだけど。

「よし、行くか」

僕は気合を入れると杖状のクリエイトを手にする。

そして部屋の明かりを消して窓を開ける。

僕は認識障害魔法を自身に施してから、窓から飛び出た。

そして流れるような動きで杖の上に乗った僕は協力者たちの家に向かうのであった。

「そろそろ唯の家だ。あずにゃん、電話を」

「は、はいー!」

空を飛んで協力者の一人である梓にもう一人の協力者への連絡を頼んだ。

そうしているうちに、平沢家が見えてきた。

すると、唯の部屋と思われる窓が開いた。

僕はその窓の近くで止まった。

「ヤッホー」

「それはいいから、早く乗って」

まるで山に来た時のような声を上げる唯に、僕は促した。

「それじゃ、失礼します……っ!?!」

「あ、危な!?! 気を付けてよ」

「えへへ、ごめんごめん」

再びバランスを崩しかける唯の手をつかんで、僕は梓の後ろに座らせた。

「狭いですのう」

「当然だ。これは乗ったとしても、そもそも二人が限界だ」

不満を漏らす唯に、僕はため息をつきながら答えた。

今もクリエイトは念話で悲鳴を上げ続けている程だ。

「しつかりつかまって。飛ばすよ!」

「了解であります!」

僕は魔力をいつより三倍ほど消費させることで学校へと向かうのであった。

「やはり、警備員の姿があるな」

「そうですね」

「どうするの? 浩君」

学校の上空を飛行する僕は、校門付近で巡回をしている警備員の姿を見つけた。

僕はそれに目もくれずに、そのまま校舎の屋上の方へと降りたつた。

そこは扉を開ければ部室に続くドアがあるので、非常に便利な場所だった。

「さて、今の時間は?」

「11時35分です」

「ここに来るので5分の時間をロスしてしまった。」

「それじゃ、行くよ」

「はい!」

僕は、二人に声を掛けた。

「オープラ」

そして僕は呪文を唱えることでドアを開けると、屋上を後にする。

そして中に入った僕は、音楽準備室ではなく、その横の音楽室のドアノブに触れると、これまた魔法で鍵を開けた。

「唯、ちゃんとしてきてるか?」

「大丈夫だよー」

不安材料でもある唯に、僕は確認を取った。

唯から返事が返ってきたようなので、どうやら大丈夫のようだ。

そして物置に通じるドアを開けた。

そして奥の部屋に続くドアの前に立った。

「高月家儀流・特幕……」

呪文を紡ぎながら、ドアを開けて部屋に侵入し、

「闇の誘い！」

時計が時間を止めるよりも早く、対策用の魔法を発動させた。

その瞬間、周辺が白い光で包まれていく。

「まぶしっ!？」

後ろの方で唯たちが声を上げるが、それを気にせずに僕は剣状のクリエイトを振り上げる。

「はあっ!!」

そして、それを時計に向けて振り下ろすのであった。

第66話 一日の終わり

11時45分、桜ヶ丘高等学校内。

「またやってる。無駄なことを」

そのの一室内でほくそ笑む人物が見ていたのは、浩介達が魔法を使い周辺を白い光で包み込むところだった。

「それじゃ、また繰り返すんだね」

その人物はそうつぶやきながら、鏡に手をかざそうと――

「その君！　そこで何をしているんだい？」

したところで、その人物に懐中電灯の光と警備員の声が掛けられた。

「あ、ご苦労様です。私はここの生徒会の者です。ちよつと、忘れ物をしてしまったので、取りに戻ってきていたんです」

女子生徒は、笑顔で答えると学生証を警備員に手渡した。

「曾我部さんね」

「ええ」

少女――恵は、警備員のおおと場に、人当たりのいい笑顔で応じた。

「それじゃ……」

その時、警備員はほくそ笑んだ。

「っ!？」

次の瞬間、恵は見えない力で両手を前方でくつつけるようにして拘束された。

「ようやっと見つけたよ。犯人さん？」

「な、何のことを――」

「最初は不自然だなあと、思っていたんだ。君の後姿が妙に”揺らぐ

”んだもん」

警備員は得意顔で、説明を始めた。

それを恵は歯を食いしばりながら睨みつけるように、警備員を見ていた。

「でも最初は、確固たる証拠はなかったし、揺らいでるのも気のせいかなど結論付けてしまったけれど、この時間のループを考えると、無関

係ではないのではと思うようになったんだ」

「……………」

警備員の説明に、恵は何も反応を示さない。

「だからよく観察をしてみると、君だけ同じ行動をとっていないんだよ」

「何を言ってるんですか？ 私はいつも通り行動してますよ」

恵の反論に、警備員は首を横に振る。

「例えば、宣誓をするとき、君は右手を上げていたが、その際の右手の角度が5度ぐらいずれているし、手の開く幅も数センチほど違う。ちなみに、君以外で時間のループに気づいていない人たちはすべての所作やフォームの角度や間隔、その他諸々が同じ事は確認済み。これが意味することは何か、わかるかい？」

「あ、貴方は一体……………」

あまりにも異様な根拠に、恵の表情がこわばる。

「私か？ 私の正体はこういうものさ」

警備員が不敵の笑みを浮かべながら指を鳴らした。

すると、警備員の姿がぐにやりとゆれて崩れ始めた。

そして、それはゆっくりと別の人物の姿へと変わっていく。

「なっ!?!」

その正体を目にした時、恵の表情は驚きに包まれた。

「た、高月浩介!?!」

そこにいたのは、浩介の姿だった。

★★★★★

浩介（？）の前には粉々に粉碎された時計だったものの残骸があった。

「あの、電話が鳴っていますけどでなくていいんですか？」

「ああ、これ。これは合図だよ」

そんな中、先ほどからけたたましく鳴り響く電話の着信音。

「何を言ってるんですか？」

「浩君？」

浩介（？）の言葉に、困惑の色を浮かべる二人に、浩介（？）は笑みを浮かべる。

「さすがに違和感を感じるようね。さすがは選ばれた人間……勘がいよいよで何よりよ」

そう言いながら、指を鳴らすと浩介の姿が崩れていき、それは元の姿へと変わる。

月の光に照らされるのは白いフードつきのローブのような服だけだった。

フードを深くかぶっているため、二人はその姿まで確認できない。「だ、誰ですか！」

「ごめんなさいね。それは言えないわ。でも、私は貴女たちの味方で、危害を加えるつもりはないから。そんなに警戒しないでちょうだい？」

警戒心むき出しで、声を上げる梓に女性は穏やかな声で返した。

「どうしてなんですか？」

「だって、彼が私をここに来させた時に特に指示がなかったからね。そういう時は私は何も言わなくてもいいということでもあるから」

唯の疑問に、女性は窓の方を見つめながら言葉を返した。

「さて、もう夜も遅いし、いい子は帰る時間よ」

「あの——」

女性は、唯の声を右手を上げることでも遮った。

「リーブン・アロー・メジエスタ」

女性の紡ぐ呪文によって、音楽室に続くドアが一斉に開け放たれる。

「また縁があれば会いましょう」

「え、ちよつと……きやあ!!」

「にやあああ!?!」

女性の言葉に、返事を返すこともできず、唯たちはドアに吸い込まれるのであった。

そして、ドアは大きな音を立てて閉じるのであった。



「それじゃ、あれはいつたい誰——」

「パーフェクト・コピー
完全複製」

「は？」

僕の口にした単語に、犯人は口を半開きにさせる。

「全てにおいて完璧に模写してしまう能力。人だろうと力だろうと、すべてを。それを持つてるのが、僕だけだと思ったら大間違いだ」

「……………鉄壁の盾か」

僕の説明で、どうやらあの鏡に写る偽物の僕の正体に気が付いたようだ。

「ここから部室を監視して、時間の巻き戻しや停止など諸々の操作をしていたというわけか。だが、時間操作の影響を受け付けていないことが逆に仇となったな」

「それはどうかかな？」

僕の言葉に、犯人は不敵な笑みを浮かべながら反論した。

「あの時計には、爆破機能がついてるんだ！ 指示さえ出せば、あいつらはお陀仏だ！」

「ならばやってみな」

犯人の言葉に、僕は促すように告げた。

「あ？」

「だから、爆破してみなよ。そのスイッチだろ？ ほれ」

筒状で先端に赤いスイッチのようなものがついている物を僕は犯人の手に渡した。

「気でも狂ったか。ならばお望みどおりに……………は？」

ボタンを押した恵だったが、何も変化がないことに慌てた様子で、ボタンを狂ったように押し始めた。

「爆破機能がついていることはもう把握している。だから、時計をこんな風に木端微塵にしたわけだ」

「なっ!？」

ホロウインドウを展開して、部室の状況を犯人に見せると、驚きに満ちた声を上げた。

「で、なんでこんなくだらないことをした？ 動機を言いな」

「許せなかったんだ」

僕が動機を言うように促すと、犯人はポツリポツリと動機を語り始めた。

「浩介様は、あのような低俗で知能程度が低い野蛮な愚者共といえるべきではありません！ 我が祖国で、腕を振るわれていた浩介様に、戻っていただきたい！」

「……………やれやれ」

犯人の動機に、僕はそれしか口にできなかった。

「いいか？ 魔族優位説の時代は終わったのだ。これからは、我々は人間と共に共存をしていく必要がある」

「なりません！ 人間は再び我々を飼い殺しにする気だ！」

「確かに。だが、それは魔族とて同じ、いいやつがいればお前のような犯罪者もいる。全生物がそういうもんだ。だからと言って閉じこもっていても衰退をもたらさず。進化するには人類との共存が必要なのだ」

それは僕が前から持っていた持論だった。

「かなり長い服役になるだろう。そこからいいからじつくり考えるんだな。衰退進化を取るのかを。お前を広域魔法の無断使用と、高月家倫理規定法違反で逮捕する」

「お疲れ様。無茶な要望を出して悪かったね」

「まったくだよ。いきなり呼び出されたかと思えば、いきなり演技をしろだなんて」

僕が毎回降り立った屋上で、白いフードつきのローブに身を纏っている女性に、声を掛けるとどこか呆れたような声色が返ってきた。

その女性はこちらへと振り向くと、そのフードを脱いだ。

そして現れたのは青色の短い髪に赤い目をした少女だった。

「久しいな。何年ぶりだ？」

「ここに来る前だから約10年になるかな」

僕の疑問に、少女は簡単に考え込む仕草をすると答えた。

「そっちの方はどうなの？ 順調？」

「順調と言われれば、そうだし。そうでないと言えばそうなるな」

首をかしげながら、僕は矛盾した答えを返した。

「クスクス……なにそれ」

「矛盾してるな」

少女が笑い、それに倣って僕も笑い出す。

「そろそろ戻りな。一時停止状態にさせた僕が言うのもあれだが、あまり長い間止めておくと、任務遂行に支障が出るだろ」

「大丈夫よ。この程度の停止なんて、良いハンデだから。それにあと少しで任務終了になるし」

僕の心配に、少女は自信に満ちた表情で告げた。

「早いな、おい」

「当然よ。この私を誰だと思ってるの？ かの、最強の魔法使い高月浩介の一番弟子であり——」

「僕の妹だもんな。当然か」

少女……妹に、僕はそう声を掛けた。

「それで、そっちの方はどうだったの？」

「こっちも成功だ。別室でモニターしていやがった」

妹の問いかけに、僕は空を仰ぎ見ながら答えた。

「兄さんの推測通りということね」

「ああ」

何回にも及ぶ時間のループ現象。

その時に見つけた不自然な点が、事件を解決へと導きだした。

あの時計に掛けられた探知魔法は、“術者への通達”のみの役割だった。

ならば、時間操作の魔法を制御する人物が、近くにいるはずだ。

例えば、原因となった時計が置かれた校舎内。

離れば離れるだけ、見つからない可能性は大きくなるが、臨機応

変な反応は難しくなる。

距離が開けば開くほど、魔法の具現化には時間差が生じる。地球の反対側へと魔法を具現化させる際には最大で5秒程度のズレが生じるらしい。

要するに、この街の中からならば、せいぜい1秒程度のズレで済む。たった1秒、されど1秒。

とっさの判断から魔法を行使して、それを具現化させる全行程を加味すれば、この1秒は致命的だろう。

だからこそ、即座に発動できる校舎内に留まっていたのだ。

しかも、魔法を使えば居場所が特定されるかもしれないという不安から、犯人は探知魔法を仕掛けて反応があれば、モニタリングするという形式にして。

尤も、それが居場所の特定につながってしまったわけだが。

「犯人が成りすましていた生徒は無事に保護して自宅に戻したよ。記憶の方も一通り削除して、適当な菊を植え付けておいたから、今回のことは何も覚えていないはず」

「そうか。これで、解決だな」

妹の報告に頷きながら、僕は事件解決を告げた。

こうして、僕たちの長い長い一日は、ようやく幕を閉じるのであった。

「そんなことがあったのか」

「本当に大変だったよー」

翌日、放課後の部室で、僕は一連の事件について話していた。

「それで時計がなくなってたんだ」

「ムギもゴメンね。時計を壊しちゃって」

梓達にした約束通り、僕はムギに時計を破壊したことを謝った。

「ううん。気にしないで。もとはと言えば、私が持ってきた時計が原因だったんだから」

「でも、どうしてムギ先輩にそんなものが渡っていたんでしょか？」
「犯人によると、彼女が僕の知り合いであることを突き止めていたらしく、彼女に渡せば確実にこの部屋に持ち込まれると考えていたらしい」

「あれ、魔法連盟の方から報告があり、時計をムギに渡したのは」
「そうすれば部屋へと持ち込まれる可能性が高かったから」らしい
「部屋に持つてこさせる理由ってなんだろう？」

「この部屋には僕がいて常時魔力……魔力残渣だけを放出しているから、そのおこぼれを吸収しようと考えたらしい」

時間操作の魔法には莫大な魔力を消費する。

しかも24時間ともなればかなりの量だ。

それを軽減するため、時計自体に魔力を蓄積させるようにしたのだ。

そうすれば、使用魔力量も必然的に少なくなるからだった。

「でも、浩君いつの間にか犯人のことに気づいたの？」

「昨日、時計に触れた時にね」

昨日の放課後に、手を触れた際に僕はそれに掛けられている探知魔法が「術者への通告」しかなかったことに気が付いた。

さらに爆破機能なども仕掛けられているのも把握できたため、犯人確保と時計の完全破壊をする必要があったのだ。

「普通にやったのでは、犯人に気づかれるから、影武者を用意していつものようにやってもらったのさ。その隙に僕が犯人を拘束するといふ作成でね」

「でも、調査とかを始めるのに一日はかかるって言ってましたよね？」
「あれは正式に依頼すればの話で、一番頼もしい相棒が担当中の任務を強制的に止めて連れてこさせることくらいは、1時間もあればできる」

僕は紅茶を口にしながら梓の疑問に答えた。

尤も、最初ここに来たときはものすごく嫌味を言われたが。

「まあ、そのせいで書類が5倍に膨れたけどね」

「あ、あはは……」

まさに苦笑ものだった。

ちなみに、全部始末書だったりする。

理由は、妹を職権乱用でこちらに連れてきてしまったからだ。

「でも、その人はどうしてこんなことをしたのかな」

「なんでも、人間と馴れ馴れしくするのが嫌だったから。らしい」

「なんだそれ？」

ムギの疑問に答えた理由に、律が顔をしかめる。

「魔界では人間は“悪”で滅ぼさなければならぬ種族という認識だから」

「え？」

「魔女狩りというのが昔あったでしょ？」

「確か15世紀から18世紀のヨーロッパで行われたものよね」

「この世界の歴史では、“悪魔と契約を交わした人間”という解釈で通っている

「その魔女狩りで、魔族が大量に惨殺される事態に陥ったんだ。ほかにも、自分の為を力行使しないからという理由で死罪になった者までいるほどだ」

「ひどい」

「そんなの、あんまりですよ！」

僕の話に、梓がまるで自分のことのように怒りをあらわにする。

他の皆も口には出さないが顔をしかめていた。

「それで、人間は強欲で、自分のことを考えない野蠻の種族という風に言われてしまい、魔界では魔族こそが世界を束ねるのにふさわしいという魔族優位説までもが誕生してしまった」

本当はそれが原因で魔界という世界が隠匿されるようになったのだが、それは言わなくてもいいだろう。

「でも、皆も知っての通り、魔界にある家電や建造物は、全て人間界から技術を持ってきている。もはや魔族優位説というのは、魔界の衰退を意味する物へと変わりつつある。今僕は人間と魔族が互いに手と

手を取り合い共存する、“共存説”を魔界に定着させる運動を進めている」

「それじゃ、浩介がここにいるのって——「それはない」——」
僕は滯の言葉を遮った。

「確かに人によつてはそう捉えている物があるのは否定しないが、だからと言って、みんなが気を使うことはない。必要なのは“いつも通り、生活すること”だ。気を使いだした瞬間に、すべては終わりを意味するから、それだけは覚えておくといい」

「浩君」

「何？」

きつぱりと滯に告げた僕に右手を上げながら声を上げた唯に、用件を尋ねた。

「全然わかりません！」

「……………」

唯からの申告に、僕は思わずずっとこけてしまった。

唯はある意味で期待を裏切らない存在だ。

「だったら、それでいいんじゃない」

「えー！ 何だか誤魔化されたような気がする！」

「あ、そう言えばあの女性は誰だったんですか？」

「うーん……秘密」

抗議の声を上げる唯をしり目に梓が問いかけてくるが、僕は少しだけ考えこんで出した結論は秘密にすることだった。

「おやおやこれはあやしいですねー」

「勘違いしないで。皆は知らなくていいことだし、それにどうせ会うこともないからだ」

変な勘繰りをしようとする律に、僕は釘を刺した。

本当のことを言うと、あまり紹介したくない。

妹は、根はとて面白いがすごく変わり者だ。

それにあいつは僕のことをいろいろ知っている。

それを皆に言われるのがとても嫌だった。

「ぶーぶー。横暴だ！」

「そうだく！ 我々は頑固として名前を言うことを要求する！」

「さあ、練習でも始めるか」

律たちの抗議をすべて切り捨てた僕は、席を立ちながら告げた。

「はい！ 分からないところがあるので、そこを教えてもらってもいいですか？」

「もちろん」

すぐに目を輝かせて梓が訊いてきたので、僕は即答に近い形で頷いた。

「律ちゃん隊長、浩君たちが逃げるであります！」

「こうなったら、私たちも練習に加担するぞ！」

「了解であります」

結局、全員での練習ということになった。

2年生編 『ピンチ』 第67話 占いと楽器

「……………」

そろそろ学園祭が近くなつたある日の夜。

僕は、自室でカードを置いていった。

一番上に一枚、その下に三枚並べ、その下にも二枚並べ、さらには一枚並べる。

そして、カードの上に手をかざして僕は目を閉じた。

「我を照らし出しし月よ。我が名の下に全てを示せ。我が前に立ちはだかるすべての物をここに表したまえ」

僕が言葉を紡ぎ終えるのと同時に、からだから掌にかけて暖かい何かが駆け巡る。

だが、それもすぐになくなった。

『「運命など自分で切り開くもの」と仰っていたマスターが、占いをするなんて珍しいですね』

「まあね」

苦笑しながらクリエイトの言葉に答えた。

「この間の時間ループ事件で、これから先に何が起こるかを予期しておくのも一手だと思つたんだ。知っているのと知らないのでは違うから」

『そうですか』

僕の告げた理由に、クリエイトはただそれだけ答えた。

今僕がやったのは月の力を利用したタロット占いだ。

いつもはこのようなことをしないが、この間の時間ループの一件で目の前に立ちはだかる脅威をあらかじめ知ることができれば対処ができると思つたのだ。

普通の占いでは、未来を知ればその未来を覆すことはできないとされているが、このタロット占いはその未来にならないようにする道筋に沿って行けば回避（いい結果であれば的中）する物で、ある種の道

筋を示すものなのだ。

「まずは、未来に起きる結果」

僕は手前に裏向きに伏せられている一枚のタロットをめくった。

それが、この僕が心の中で思ったことの結果だ。

「なっ!?!」

そのタロットの内容に、僕は言葉を失った。

そのタロットは『BREAK』だった。

「よりによって、最悪なカードが出てきたな」

『BREAK』は、文字通りすべての破滅や崩壊を意味し、最悪な部類に入るカードだった。

(僕が考えたのはか学園祭のこと……軽音部の今後のことだから、これが指し示すのは)

「軽音部の空中分解?」

思わず叫び声をあげてしまった。

(落ち着け……そうならないようにするんだ)

何とか自分を落ち着かせ、僕はその二つ上の三枚のタロットを表にする。

それは、この結果が出る原因から連想されるものを示している。

『HEAD BAND』、『BASE』、『NATURAL』

「ヘアーバンドに、基地に天然……まったく分からない」

タロットに表示された文字に、僕は首をかしげる。

ここがこのタロットの難しいところだ。

タロットカードの中には、思うことによって内容がころころ変わる物も存在する。

今回もそのカードのようだ。

「ヘアーバンドということは頭に付けている物……ベースは基地や基礎」

全く分からない。

だが、なんとなくわかるような気がした。

「ヘアーバンド……カチューシャ……律?」

もはや連想ゲームだ。

だが、ヘアーバンドでふとカチューシャが浮かび上がったのだ。そしてカチューシャであてはまるのは部長の律だ。

「ということは、律が原因……あり得る」

律には申し訳ないが、空中分解しそうな要因がいくつか考えられた。

だが、それは今に始まったことではない。

「後は、この『BASE』か……もしかして、これってそのままパートナーを指してるんじゃないのか？ “ベース”……濡のことを」

だとすれば、納得がいく。

「つまり、濡と律が原因で空中分解ということか。あと、この『NATURAL』は何を指してるんだろう？」

最後の一枚だけ、意味が思い浮かばなかった。

「まあ、律と濡に気を付ければいいということか。それじゃ、回避する方法で、まずは第三者のやつは……」

僕は一番上に一枚だけ置かれたタロットを表にする。

そこに書かれていたのは『TALK』

つまり、話すことだった。

「話し合いで解決か……それじゃ、僕のすべきことは……は？」

僕はまだ表にしていけないタロット二枚をめくり、その内容に固まった。

『MAGIC』、『NOTHING』の二枚だった。

「最初は魔法、次が何もしない……矛盾しすぎだ」

『NOTHING』は、直接的な行動をしてはいけないことを示している。

つまり僕にできるのは、当たり障りのないアドバイスをやる程度のことなのだ。

「……とにかく、これで僕たちの未来は分かった。律と濡を注意して観察するようにしよう」

こちらからは何も行動をせず、傍観に徹することを決めるのであった。

それから数日ほど過ぎたある日の放課後。

「~~~~~♪」

「何だかご機嫌だね梓」

先ほどからご機嫌に鼻歌を歌っている梓に、律が声を掛けた。

「あ、はい。学園祭が近いと思つてつい」

「初々しいね」

どうやら初めての学園祭に、梓は思いを馳せていたようだ。

「はい！ 去年の先輩たちのライブも見たかったです！」

「ぶっ!？」

梓の言葉に、ティーカップを口元に運んでいた漣がいきなり嘖き出した。

「そう言えば、漣は去年の学園祭ライブで大活躍だったもんな」

「え？ どういうことですか？」

そんな漣の様子に苦笑した様子で見ていた律が漏らした言葉に、梓が興味を持ったのか律に内容を聞いた

「ライブの最後にステージ上で見事な転——「言うなー——!!」——
も~~~~~!」

律の代わり応えようとした僕の口を、凄まじい速度で移動した漣が口をふさいだことによつて、言えなくなつてしまった。

(というより、あんた魔法とか使つてないだらうな?)

一瞬漣の気配が感じられなくなつてしまった僕は、心の中で漣に問いかける。

「去年のライブの映像ならここに有るわよ」

「本当ですか!」

目を不気味に光らせながら手にしている一枚のディスクを掲げながら山中先生が梓に声を掛けた。

「見る?」

「ぜひ見たいです！」

梓は席を立つと、山中先生が置いたノートパソコンの前で腰を下ろした。

「いや梓。考え直さないか？」

そんな梓に、滯は見るのをやめさせようと必死に説得を始めた。

「律ちゃん唯ちゃん」

だが、そんな滯の様子に山中先生は指を鳴らした。

「イエッサー！」

すると、それだけで内容を理解したのか、律と唯はピッタリな動きで滯の両腕をつかむとずるずると物置部屋の方へと引きずっていく。

「……」

僕は無言で、部室の入り口の方に移動した。

「梓、見ない方がいいぞ。呪われるぞ？」

「それじゃ、おすすめのシーンからね」

滯の脅し（という二はものすごく古典的なものだが）の言葉をすべて無視した山中先生によって、去年のライブの映像のおすすめシーンが再生された。

音声だけでもわかる。

それは、最後のステージの上で転倒した滯のシーンだ。

「ッ!? 見ちゃいました」

「遅かった……」

梓の言葉に、哀愁漂う滯の声が聞こえてきた。

それはまさに、喜劇……悲劇だった。

気を取り直して、僕たちは去年のライブ映像を見返すことになった。

もちろん、最初の方で山中先生の言う“おすすめシーン”ではな

い。

今は最後の楽曲であるふわふわ時間タイムの演奏シーンだった。

「それにしても、演奏の時だけは本当にいい演奏をするんですね」
そんな映像を見ているさなか、梓が感想を漏らした。

「やけに〃だけ〃を強調して。」

「だけを強調するな、だけを」

「言うようになったな、こいつ」

「にゃ〜!？」

律がチョーキングを決め、横から梓の頭を軽く小突き続けた。

(本当に、ネコじゃないかと思う)

〃にゃー〃と口になっている梓に、思わず僕はそんなことを考えていた。

「どうしたの?」

そんな時、いきなり噴出した唯に、ムギが声を掛けた。

「あのね、この時のことを思い出したら。クスクス」

「そう言えば、この時って」

去年の学園祭でのライブのことを思い出したのか、ムギも笑い出した。

「そう言えば、声がおかしくなってたんだっけ」

その代わりに歌ったのが滯だった。

(こうしてみると、歴史を感じるよな)

「梓にとってはこれが初めての軽音部としてのライブだからな」

「成功させような」

僕たちは二回目、梓にとっては初めてのライブだ。

僕と律は改めて成功させることを決意した。

「はい!・私も皆さんと一緒に頑張ります!」

それに梓も力強く頷いて答える。

僕たちの目指すべき未来はしっかりと定められた。

(今のところ前兆はないけど、油断はできない)

僕の脳裏によぎるのは、あの時の占いの結果のこと。

それによれば、律と滯によって、軽音部は空中分解の危機を迎える

ことになるらしい。

注意して律と漣を見ていたが、それらしき兆候は見えなかった。

「盛り上がっているところ悪いけど」

「あれ、和？ どうしたんだ？」

そんな僕たちに声を掛けてきたのは、生徒会の真鍋さんだった。

その表情は若干呆れているような気がした。

「はい、これ」

そう言っただけで真鍋さんが律に手渡したのを覗き込むとそれは『講堂使用届』と明記されていた。

「今年の学祭の分、出してないでしょ」

「あ、忘れてた」

「そんな、軽い言葉で」

律の問題点で上げられるのは、書類を出すことを忘れることだった。

「あんた、またですか——「高月君もよ」——はい？」

なぜか僕にまでお咎めが来てしまった。

「貴方、副部長なんだから、しっかりと臨機応変に対応していかないとダメじゃない」

「ちよつと待った！ 僕、副部長じゃないですよ!?!」

真鍋さんの“副部長”発言に、僕はもう講義した。

「え？ でも、部活申請用紙の時に、副部長が必要だって言ったら『それじゃ、副部長は浩介で！』って言ってたわよ」

「……………律う？」

僕はゆっくりと律の方へと振り向きながら事の真相を問い詰める。

「あ、ごめん。忘れてた」

「「前にもこんなことがあったよな」」

僕と漣の声が思わぬところで一致した。

「あ、それは部活申請用紙の——あいたあ!?!」

この日、律は二人からの痛烈な鉄拳制裁を落とされる羽目になるのであった。

「それじゃ、梓が書記な」

「え？ 別にいいですけど」

突然書記に任命された梓は、困惑しながらも必要事項を明記していく。

「この『名称』ってなんですか？」

「バンド名とかじゃないの？」

梓の問いかけに、僕は即答に近い形で答えた。

そしてペンを走らせようとしたところで、梓の手が止まった。

「そう言えば、バンド名ってなんですか？」

『……………』

一瞬、沈黙が走った。

そして、全員が一斉にばらばらのバンド名を口にした。

「そう言えば、決めてなかったね、バンド名」

「この機会だし決めるか」

律の言葉で、僕たちはバンド名を考えることとなった。

「だったら、平沢唯とズツコケ五人組ってどう？」

「私たちは何もんだ！」

「どうか、おまけ扱いだよな？ それ」

唯の提案に、律と僕で却下した。

「それじゃ、”ぴゅあぴゅあ”は？」

「はいはい。ネタはいいから」

ネタなのか本気なのかはわからないが、ものすごくぶっ飛んだバンド名を口にする藩に、律が即答で却下した。

「うっ……本気なのに」

「本気だったんかい!？」

まさかの本気発言に、僕までツツコミを入れてしまった。

「ほ、ほら、センスは人それぞれですし」

「梓、フォローがきついで」

必至にフォローをする梓に、僕は声を落としてツツコんだ。

「よしわかった!」

そんなカオスになりかけている中、声を上げたのは顧問の山中先生だった。

「私が決める!」

『もう少しみんなで考えよう!』

今度は団結した。

何せ、あの山中先生だ。

とんでもないバンド名が飛び出してくるに違いない。

ならば、この反応はある意味正しいような気がする。

「それじゃ、書き終わったら生徒会室に持ってきてね」

「あ、悪いな、和」

同じクラスだというのは聞いていたが、最近真鍋さんと漣は仲が良くなってきたような気がした。

律の話では、極度の人見知りと恥ずかしがり屋のようだが、きっとそれを超える何かがあったのだろう。

「そうだ! たまには一緒にお茶でもしようよ、和ちゃん」

「分かった。それじゃ、あとでメールする」

唯の提案に答えると真鍋さんは部室を後にした。

「それじゃ、バンド名は各自考えてくるということで、練習でもするか」

「学園祭に向けて一生懸命練習しないとな」

「はいっ!」

漣の言葉に、梓は元気に返事を返すと、練習を始めるべく準備を始めた。

「あ、そうだ。最近私のギターの音の調子が悪いんだけど」

「ん? ちょっと見せてくれる?」

そんな中、唯が訴えたギターの不調に、僕はギターを見せるように唯に促した。

そして、唯から渡されたギターケースを長椅子のところに置いて、

ケースを開けると中に入っているギターを取り出した。

「げっ!？」

それを見た僕は、思わず声を漏らしてしまった。

唯のギターは非常に最悪なコンディションだった。

「何? どうかしたの?」

僕のうめき声に、唯が首を傾げた様子で尋ねてくる。

「どうもこうも、これ弦が錆びてるぞ、おい」

「あ、本当です」

僕の肩の方からギターを覗きこむように見た梓が、僕の言葉に賛同する。

「これ、いつ弦を交換したんですか?」

梓が、唯に弦を交換した日を探ねた。

「え? 弦って交換する物なの?」

『……………』

唯から帰ってきた疑問に、僕たちは一瞬言葉を失った。

僕は今のは幻聴だと信じたかった。

「つていうか、ネックが反ってるし、これじゃオクターブチューニングとかが全く合いませんよ!」

「お、落ち着け梓! 気持ちちは分かるけど、今の唯には理解ができない」

梓のマシニングのごとく放たれた言葉の数々に、唯は理解ができなかったのかその場で固まってしまった。

「つまり、大事にしないとダメじゃないですか。とてもいいギターなのに」

「ええ!? 大事にしてるよ! 一緒に寝たり、洋服を着せたりとか!」

「大事にするベクトルが違う!」

梓の注意に反論する唯の言葉に、僕と梓は思わず同時にツツコンでしまった。

(一緒に寝てよくここまでもったよな)

唯の寝相がいいのか、はたまたこのギターの運がいいだけなのか。どちらにせよ、あまり好ましい状況ではないのは確かだ。

「うう……それじゃ、さわちゃん何とかしてよ」

「え?!? そ、そういうのは楽器屋さんに見てもらったほうがいいんじゃないかな?」

唯が山中先生に助けを求めると、山中先生は顔をひきつらせながら答えた。

「絶対にめんどくさがってる」

「あ、あはは」

律の鋭い指摘に、山中先生は乾いた笑い声をあげてお菓子を口にしたら。

「じゃあ、浩君ならできるよね? プロだし」

「あ、そうですね。浩介先輩ならギターの修理とかできそうですし」
「なんだかすぐく過大評価されているような気がする。」

「言っておくけど、僕にだって修理できる限度はあるからね」

そう言いながら僕はネックの端の部分に人差し指を触れる。

ちなみに、ネックとは一番先端とボディの中間の部分のことを言う。

僕は目を閉じて全神経を指先に集中させると、ネックの端から端まで指を滑らせる。

「ど、どう?」

「順反り……つまり、上向きにネックが反ってる。これじゃ、音がちやんとでないはずだ」

梓の指摘通り、ネックが反っていた。

「今ので分かるのか?」

「簡単にはあるけどね」

濡の感心したような言葉に、僕は頷きながら答えた。

「ねえ浩君。ネックって反るの?」

そんな中、投げかけられた唯の疑問に、どう答えるか悩んだ。

そのまま答えてもおそらく唯には理解できないと思ったからだ。

「本とかの紙を上か下か適当に折って広げると、こういう風になるよね?」

「あ、本当だ」

ためしに、近くにあった不要な紙を軽く折って広げると折った方向に髪が動いた。

「これと同じ原理。弦を強く張っている時ネックの部分には、常に30〜50 kg程の力で引つ張られている状態なんだ。でも使っていくにつれてネックは弦の力に負けてしまう。これがネックが反る理由なんだけど……理解できた？」

「全然っ！」

「だろっね」

今の説明は少し難しすぎたという自覚があった目に、唯が理解できなくても驚きはなかった。

「確実に直したいのであれば、楽器店に持って行ってメンテナンスをしてもらった方がいいと思う。下手にいじって失敗すると、数万円の修理代がとられるから」

「うっ……それはさすがにきつい」

「ということ、楽器店に行くこと」

数万円という額に、唯の顔が引きつった。

「うう……律ちゃんは手入れとかしてないよね？」

「しとるわ！」

さすがのように律に聞くが、速攻で答えが返ってきた。

「ええー」

「私が手入れをしていないみたいなきもちで聞くなっ！」

「そうだよ。いくら大雑把でもいい加減であれな性格をしているからと言って、決めつけるのは良くない」

僕も律の援護射撃に回った。

「律ちゃんの癖に——あいた!？」

「いつっ!?! 僕もですか……」

律から鉄拳制裁を喰らうこととなった僕たちは、楽器店『10GI A』へと向かうこととなるのであった。

第68話 軋み

「よし、到着〜」

学校を後にし、歩くこと数十分。

ようやく目的の楽器店『IOGIA』にたどり着いた。

「それじゃ、私はここで待ってるよ」

「……？ どうしてですか？」

外で待つと口にする漣に、梓は首をかしげながら尋ねた。

「右利き用の楽器を見ても悲しくなるだけだから」

「……………」

哀愁を漂わせて答える漣に、梓もまた哀愁を漂わせる。

そんな漣に、律が一言

「お、今レフティーフエアをやっているみたいだぞ」

「え!？」

と告げると、漣は驚きに目を見開かせた。

「だから、一緒に行こうぜ」

「おー!」

先ほどまでの哀愁はなんだったのか、先ほどとは打って変わった様子の漣に、僕は苦笑するしかなかった。

そして、店内のレフティーフ用のベースが置かれているブースの前に向かった。

「……………」

漣の前には複数のレフティーフ用のベースが展示されていた。

それを前にして、漣は固まっていた。

「こ、ここは天国ですか!？」

そして突然意味の分からないことを叫びだした。

「~~~~~っ! 店員さん、ここにあるギター全部ください!」

「こら、落ち着け」

嬉しいのか楽器をまとめ買いしようとしている漣を律が必死に落ち着かせた。

「……………私たちは先に行きましょうか」

「うん」

そんな濡の様子をしり目に、僕たちはメンテナンスをお願いすることにした。

「あのすみません」

「はい。なんででしょうか?」

カウンターで梓が声を掛けると、眼鏡をかけた男の人が応対した。

「ギターの調節をしてもらいたいんですが」

「はい。それで調整するのはどちらのギターですか?」

「こちらです」

店員の問いかけに、梓は唯にギターケースを渡すように促した。

「これです」

唯がカウンターにギターケースを置いた。

「それでは、ちよつと見せてもらいますね」

そう言つて、店員はケースを開けてギターを見えるようにした。

「うゝッ!」

それを見た店員の表情がこわばった。

ボディは汚れ、弦が錆びているという状態に、店員が口にした言葉は

「これ、ビンテージギターですか?」

だった。

「違います」

「ただ汚いだけです」

きつぱりと答えた僕と梓は、恥ずかしさでいっぱいだった。

自分のギターではないのに。

一方、そんなギターの持ち主はというと

「まだ使ってから一年です!」

「威張るなっ」

胸を張っていた。

まるですごいだろと言わんばかりに。

まあ、ある意味すごいことではあるけど。

「そ、それでは終わるまで店内でお待ちください」

「よろしくお願いします」

気まずそうに、促す店員に、梓は恥ずかしさのあまりに小さくなりながらも返事を返した。

「それじゃ、終わるまでどこかで見てましようか？ ……唯先輩？」

梓の呼びかけに答えず、梓はじつと店員の作業の様子を観察していた。

今は、錆びた弦をすべて切っている工程だ。

「ああ、私のギターが丸裸にされて行く」

「何を言ってるんだ？」

目を潤ませながら嘆くようにつぶやく唯に、僕は目を細めながらツッコんだ。

「それにしても、どうして唯先輩はあのギターを選んだんですか？」

「え？」

そんな中、梓は疑問だったようで、ギターを選んだ理由を唯に訊いていた。

確かに、レスポールは重く、ネックも太くて癖が強い。

初心者向きではないとまでは言わないが、僕も唯がこのギターを選んだ理由が気になっていたので、聞いてみることにした。

「だって、可愛いから」

「……………」

自信満々に唯が答えた理由に、僕たちは哑然としていた。

「可愛い？」

「うん。可愛いからだよ」

聞き間違いだと思ったのか、目を瞬かせながら聞きかえした梓に、唯は再度同じ答えを返した。

見れば、店員も固まっていた。

(あれを可愛いと表現する唯の感覚がわからない)

せいぜい、かっこいいからだらと心の中でツッコみを入れる。

「え？ 可愛いよね？」 浩君

「ま、まあ。センスは人それぞれだし」

「私の言葉を取らないでください」

そんな梓の言葉をスルーしつつ、僕たちは律が待つところへと戻って行くのであった。

「お待ちせしました。メンテナンスの方を頼んできました」

離れたところで待っていた律たちの元に戻りながら、梓が声を掛けた。

「あれ、漣は？」

「あー、あいつならまだトリップ中だ」

漣の姿がないのに気付いた僕が疑問を投げかけると、律が苦笑しながら答えた。

「どうやらまだベースの方を見ているようだ。」

（しばらくそっとしておこう）

僕はとりあえずそう決めるのであった。

「紬お嬢様！」

「紬お嬢様！」

そんな中、ムギの姿を見かけた店員の二人がムギに声を掛けた。

「え？ え？」

事態が呑み込めない梓達に、僕は小さな声で説明することにした。

「この楽器店、ムギの家……琴吹家の系列の楽器店なんだよ」

「そうだったんですか」

「びっくりしたー」

僕の説明に、納得する梓に、息をつく唯。

まあ、これが唯たちならではの反応だろう。

「でも、どうして浩介がそんなことを知ってるんだよ？」

「調べたから」

律の疑問に、僕は簡潔に答えた。

「調べたって……」

「気になったから、ちよつとね」

「どうやって調べたんですか？」

非常識だとは思ったが、気になったため調査を頼んだのだが、梓はその方法を聞き出そうとしてきた。

「申し訳ないけど、それは機密事項だから言えない。まあ、知ったからどうこうするわけじゃないし、危害を加えるつもりはないから安心して」

「だったら、良いんだけどな。あんまり、そういうのはしない方がいいぞー」

律から忠告されてしまった。

確かに友人のことを調べるのはあまり気分がよくないだろう。

(まあ、ムギは知らない方がいいかもな)

ムギは一步間違えれば僕の敵となるような立ち位置にいる。

その所以が、高月家の特性だ。

高月家は魔法使いに対して絶対の力を持つ。

それは、魔法使いを魔法使いでなくする力。

僕はそれを“破門魔法”と呼んでいる。

魔法使い不適格者に行われる魔法だ。

それと似た行為が、“破門”だ。

これは魔法使いはもちろん、大金持ちの家系にも適用される。

ある条件に一致すれば、それが行われるようになる。

そして、それにふさわしい家系を見極め、執行するのが僕の役目だった。

これまで、数えきれない家系をこの手で破門にしてきた。

そう言った家系に一致しているのは、横領やら詐欺などの犯罪行為を息を吸うみたいに行っていることだろう。

ちなみに、破門された家の者は、一文無しになる。

全ての財産や土地すべてを没収する。

人権を無視した裁きなのだ。

そして、それはここでも適用される。

何せ、僕がここにいるのだから。

(まあ、調べた結果琴吹家は優良中の優良家系だったから。そんなこ

とはしなくて済みそうだけど)

今後一生、ムギの家の破門だけはしたくないなど、心の中でつぶやいた。

閑話休題。

「お待たせしました」

待っている僕たちの下に、先ほど応対した店員が姿を現した。

その手には新品同様の輝きを発しているレスポールがあった。

「お、きれいになったな」

「これからはちゃんとこまめにメンテナンスを——「ギー太!」——
……」

(な、名前まで付けてたんだ)

ギターの名前を叫びながら店員からギターを半ばひったくるように受け取る唯の感覚には、僕でさえ舌を巻く勢いだ。

とはいえ、僕も杖に名前を付けているわけだが。

確実にそれとは話が違うだろう。

【クー子なんて呼んだら、怒りますよ?】

【呼ばないからっ】

念話で釘をさすクリエイトに、僕は素早く答えた。

呼んでいる自分が想像できないし、読んだら確実に地獄を見るのは明らかだ。

「ありがとうございます!」

「い、いえ。お代は五千円になります」

店員が請求金額を告げた。

その瞬間に、唯の動きが止まった。

「お金とるの?」

「いや、当たり前じゃないですか」

「ボランティア活動じゃないんだから、取るに決まってるでしょ」

唯の当たり前にも思える疑問に、答える梓に続いて僕も答えた。

その時、なんとなく嫌な予感がした。

「……お金持ってない。どうしよう」

「「「なっ!?!」」」

「予感というのは当たる物だ。」

唯の衝撃の発言に、僕たちは言葉を失った。

店員もまさかそうなるとは思っていなかったのか、完全に固まっていた。

「どうかしたの?」

そんな時、僕たちの様子に気が付いたムギが近づきながら声を掛けてきた。

「それが、唯先輩メンテナンスにお金がかかることを知らなくて」

「え、そうなの? 大変……手持ちあつたかしら」

まるで自分のことのように、鞆の中を探すムギ。

そんなムギの様子を見た先ほどまで声を掛けていた店員が、慌てた様子で声を上げる。

「お、お嬢様! 代金の方は結構ですので!」

「え、でも悪いわ」

「いいえ! お父様には日ごろからお世話になってますから、サービスということで結構です」

「でも……」

慌ててただにしようとする店員と、お金を払おうとするムギの押し問答という不思議な光景が繰り返り広げられてしまった。

結局、ムギが押し切られる形となり、メンテナンス代はタダとなった。

(あの店員の給料の方が心配だ)

僕は店員の給料がどうなるかが不安で仕方がなかった。

「よし、メンテナンスも終わったし、帰るか」

『はい』

律の提案に、みんなが返事をする事で領いた。

「つて、あの濡先輩は?」

「あー、呼んでくるわ」

そう言つて律は未だにベースの前を陣取っている濡の方へと向

かった。

そして残った僕たちは、ギターメンテナンスに関しては無しをしていることにしたのだが、微妙に律たちのことが気になった。

律は濡の襟首をつかんで、強引にこっちに連れて来ようとしたが手が滑ったのか鈍い音と共に、濡がしりもちをついた。

「もういいよー！——」

二人がどんなやり取りをしたのかは断片的にしか聞こえなかったが、何となく聞こえたような気がした。

歯車が軋むようなそんな音を。

午後6時を告げる鐘が鳴り響く中、僕たちは楽器店の前にいた。

「はあー、ギー太がきれいになって良かった〜」

「名前着けてたんだな」

ギターに名前を付けていた唯に、濡が苦笑しながらつぶやいた。

「この後どうする？」

「よし！ お茶でも飲みに行くか！」

「またお茶ですか？」

ムギの問いかけに答える律の言葉に、梓はあきれた様子で肩を落とした。

「あ、ごめん。私この後、和ちゃんと会う約束があるんだー」

「えー。それじゃみ——」

唯の言葉に、不満げに目を細める律が何かを言いかけた時だった。

「え、和も来るの？ 私も一緒に行つていいかな？」

「え……」

濡が唯に尋ねた。

「あ、そうか。濡ちゃん和ちゃんと同じクラスだったんだっけ。いい

よー」

「やった」

一緒に行くことにOKされた漣は、嬉しそうに笑った。

だが、僕は聞き逃さなかった。

一瞬、律の口から寂しそうな声が漏れたことを。

一瞬ではあるが、漣の名前を口にしようとしていたことを。

そして、漣と唯は真鍋さんと待ち合わせているであろう場所へと向かっていく。

「みんな、後をつけるぞ」

「え？ どうしてそんなことをする必要が——「いいからいいから」

——あ、律先輩」

律の言葉に、梓が疑問の声を投げかけるがそれを無視して律が歩き出してしまった。

「浩介先輩」

「……………」

僕は首を横に振って律の後に続く。

「三人とも、遅いぞー」

「……………」

律から促されるまま、僕は律の方へと向かう。

それは、はっきり聞こえたからだ。

さらに歯車が軋んでいく音を。

そしてやってきたのは、とあるこじやれた喫茶店。

僕たちはその漣たちが腰かけた席の斜め後ろ側に座っていた。

「つち、なんだかいい雰囲気」

顔を隠しているつもりなのか、メニュー表を手に行っている律がつまらなさそうに声を上げた。

「つて、言うよりどうしてこんなにこそこそと。浩介先輩も食べてないで何とか言ってください」

「あー、このチーズケーキは美味しいなー」

梓の訴えを完全に無視した僕は、頼んでおいたチーズケーキセットに舌鼓を打つ。

「ふふ。何だか探偵みたい」

『……………』

そんな中、面白そうに声を上げるムギに、一瞬僕たちの間で沈黙が走った。

「よし、突入しよう」

そう口にした律は、滯たちのいる席の方に乱入した。

そして強引に話に加わる律。

“何を頼んでるのー？”などの陽気な声が聞こえる。

「律ちゃん…………アイス溶けちゃうのに」

その言葉で、僕は律が座っていた席を見る。

そこにはアイスとケーキという若干統一性がないような気もするデザートにも、手を付けずに置かれていた。

僕にはなんとなくわかる。

彼女の心の中は、陽気さとは真逆の状態にあるということ。

「はあ…………」

それを目にした僕は、ため息をつくことしかできなかった。

それは自分の無力さに対する物なのか、いらだちによるものかはわからない。

(できれば、占い通りのことは起こらないでほしいんだけどね)

そんな僕の願いもむなしく、占い通りの…………一番僕が危惧していた事態が発生したのは、それから間もない日のことだった。

第69話 くだらないⅡ重要なこと

「……………」

僕は窓から頬杖をついて外を眺めていた。

小鳥が優雅に飛んでいくのが見えた。

「ほおひはんはひよ？ ふえつふあふのふいふひやふみな——
にいい!!？」

「行儀が悪い。食べ終えてから話せ、馬鹿者」

くちやくちやと食べながら話しかけてくる慶介の足を思いつきり踏んづけながら言い放った。

頭じゃなかったのはある種の氣遣いだ。

「んぐ……すまん」

「で、なに？」

口の中の食べ物を飲み込んだ慶介に、僕は用件を尋ねた。

「いや、せつかくの昼休みなのに、ぼーつとしてるから声を掛けたんだよ」

今は昼休み。

購買しかないこの学校では、教室で昼食を食べるのとそれ以外の場所
所で食事をとる生徒の二種類が存在している。

ちなみに僕は教室派だ。

「ちよつと考え事をな」

「何だ、また軽音部がらみか？」

「またとか言うな」

考え事ですぐに軽音部の名前が挙がってしまうあたり、とても複雑な心境になる。

「困ったことがあればこの大親友の俺に相談したまえ！」

「……………僕の親友って、どこにいるんだ？」

胸を張る慶介に、僕は尋ねた。

「ここにいてるって！ この俺、佐久間慶介と言うナイスガイが！」

(それは演技か？ それとも本気なのか？ どちらにせよ、自分のことを美化できるのはすごい能力だと思うよ)

自信満々に口にする慶介に、僕は心の中で呆れ半分尊敬半分という複雑な心境だった。

「あんたはバッドガイだし、親友じゃない。よって相談しない」

「ばんなそがな!!?」

(そこまでショックを受けなくても)

まるで雷に打たれたようなショックを受けた慶介は、地面に崩れ落ちてしまった。

「冗談だよ。その件はとても感謝している。ありがとう、慶介」

「浩介……やはり、お前はええ奴やなあ」

すぐさま立ち直った慶介は僕の頭をトントンとたたき始めた。

「……………」

それは親愛を込めてやっているのだろうが、僕に言わせてみれば

「バルーチ!?!」

「気安く叩くな」

鬱陶しいことこの上なかった。

「あ、高月君!」

「ん?」

そんな馬鹿げた山門芝居を繰り広げている中、声を掛けてきたのはオレンジが買った紙をツイントールにし、左右をピンタイプの髪留めで止めている女子生徒だった。

確かクラスメイトだったような気がしたが、名前は知らない。

「田井中さんが、練習をするから部室に集合だつて」

「律が? あいつが珍しいな」

いつもは率先してティータイムに洒落こむ律が、部長らしいことをしていること(何気に失礼だが)に驚きを隠せなかった。

(……なんかいやな予感がする)

ふと、そんな予感めいたものを感じた。

「ありがとう、名もなき女子生徒A」

「ちよつと! 私をまるで背景のように扱わないでよ!」

女子生徒から怒られてしまった。

「記憶とは移ろいゆくもの。色々な人と出会おうと、関係性のない古い

人物の名前は忘れる物さー」

「いや、意味が分からないよ。それにそれは人としてどうかと思う」
何だかいつの日にか言われたような言葉を女子生徒に言われてしまった。

「まあ、冗談はともかく。ずっと覚えておく努力はするよ。さすがに忘れようとするのは失礼だし。それで、名前は何ていうの」

「はあ……それじゃ、もう一回だけ言うね」

僕の問いかけに、女子生徒はため息をつきながら言うとき咳ばらいをした。

「私の名前は佐伯 三花。所属はバレー部だよ」

「佐伯さんね。それじゃ、僕は部室に行くとするか」

「いつてらっしやーい」

佐伯さんの名前を覚えた僕は、席を立つとその場を後にしようとする。

「あ、その男には気を付けてね。変態だから」

「え?」

注意をしておき、僕は今度こそ部室へと向かうのであった。



「どういう意味なんだろう?」

「さて、浩介も言ったところで」

浩介の意味深な言葉に首をかしげている三花に、慶介は「ふむ」と頷いた。

「佐伯さん」

「何 佐久間君?」

名前を呼ばれた三花は慶介に用件を尋ねる。

「今夜、俺との優美な一夜を過ぎさない——サンコット!」
「な、なに!?!」

渋い声を出しながらナンパをしようとした慶介の頭に、どこからともなく飛んできた本が直撃した。

「これって、教科書？　って、高月君のだ」

地面に落ちた教科書を確認した三花は持ち主の名前を見つけた。

「これが伝説のツツコミなんだ」

一年のころ、クラスの女子の間で有名な話があった。

それは『あるクラスの男子生徒の片方のツツコミがとてもすごい』
というものであった。

その凄いツツコミを三花は目の当たりにしたのだ。

(でも一体どうやってこれを投げたんだろう?)

三花は教室を去っていく浩介の姿を見ていた。

仮に教室の外から教科書を慶介に向かって投げ飛ばしたとすると、
それはものすごいことになるのではという結論となった。

(うーん。一回バレーの大会のヘルプに呼んでもらえるように部長に
頼んでみようかな?)

そんなことを三花は考えていた。

「いてて。さすがは浩介、抜かりはないな」

(佐久間君もある意味すごいかも)

少しして復活していた慶介に、三花は心の中でそうつぶやいていた
とかないとか。

この日も、2年4組は平和だった。

★★★★★

「あ、浩君だ」

「皆も来てたんだ」

部室に入ると、練習の準備を始めている唯たちの姿があった。

「律と滯の二人は?」

「あ、律ちゃんは今滯ちゃんを呼びに教室の方に言ってるわ」

僕の疑問に、ムギが答えてくれた。

僕は生返事をしながら演奏の準備を始める。

「皆、お待たせ—」

少ししてやってきた律の後ろに、不機嫌な雰囲気醸し出す滯が続

く。

(きつと昼食の最中に呼ばれたんだろうね)

何となく不機嫌な理由がわかってしまった。

僕は、二人から視線を外して準備を進めることにした。

「いやー、今年はどうやって盛り上げてもらおうかね〜」

そんな中、律がそんなことを口に始めた。

口調はいつも通りふざけた感じだった。

この後はいつものように濡があきれた声色でツツコみを入れる。

それが、いつもの軽音部のやり取りだった。

「去年はパンチラだったから、今年はへそ出しとかがいいかも。あ、
だったら——」

「練習するんだろっ!!」

だが、今回は違っていた。

部室に、いつになく強めの怒鳴り声が響き渡った。

「……すっるよ〜」

「だったら……」

二人のやり取りは、いつものに戻った。

また聞こえた。

歯車が軋むようなあの音を。

「てい！ たこ焼き〜」

突然濡の頬に両手の指を丸い形にしてくつつけはじめた。

「ポニテ〜」

濡の背後に回って髪を持ち上げたりする律。

いつもであれば、和やかな雰囲気だったそれも、今回ばかりはそんな感じは全くしなかった。

言うなれば、完全に空回りしているような状態だろうか。

「もう、やめろよ」

「あ、そうだ。おススメのホラー映画のDVDを持ってきたんだけど〜」

そう言ってバックの中を漁り始める律。

「もう、練習しないなら戻るぞ」

そんな律に、漣は背を向けながらそう告げた。

それはいつものやり取りだった。

いつもであれば律の小粋なジョークが出てため息をつきながら練習を始めると言った感じになるだろう。

ムギや唯たちも不安そうな表情を浮かべていたがそうだと思うていたのか、何も行動を起こそうとはしていなかった。

「だったら戻れば？」

「は？」

律が口にしたのは、少しばかりいらだった様子の声色だった。

「悪かったよ。せっかくの和とのランチタイムを邪魔してさっ」

「……そんなこと言っていないだろっ!!」

律の嫌味を込めた言葉に、ついに漣が怒鳴り声を上げだした。

「あ、あれ？ どうしたの二人とも？」

「そ、そうだ！ お茶にしましょう？ お茶にしよう。今日根おしいお菓子を用意したの」

険悪な二人に、ようやく事態を察した二人が声を上げる。

「言ってるじゃん！」

「いつ私がそんなことを言ったんだ！」

だが、律たちはそんなことにお構いなしとばかりに口論を続ける。

(いつもの僕ならこういう時どうするだろう?)

僕はふと今まで通りの自分の対処法を思い浮かべてみることにした。

『てめえら、何くだらねえことをやってんだ!! 痴話喧嘩なら表でや

れ、この大馬鹿野郎!!』

(うん。間違いなくダメそう)

余計に雰囲気が悪くするような気がする。

(そう言えば、昔もこんなことがあったっけ)

魔法連盟のころ、仲のいい二人の職員が、大喧嘩をしたことがあった。

理由は忘れたが。

その時、僕は先ほどのように二人を叱った。

というのも、喧嘩で仕事に支障をきたしていたからだ。その結果、二人は連盟をやめていった。

今でもなぜそうなったのかが理解できない。

僕は正しいことをしていたつもりだ。

だが、その結果優秀な部下を二人も失うことになった。

(雷を落とすのがダメならば)

僕が取るのは一つしかなかった。

僕は魔法である物を手にする。

「え？」

それをあたふたとしている梓に差し出した。

梓はそれを渋々受け取ると、僕の思惑に気づいたのかはっとした表情になった。

「あ、あの！ 皆さん、仲良く練習をしましょう……」

それ……ねこ耳を受け取った梓はそれを頭に付けて、練習をするように促した。

部室が痛い沈黙に包まれた。

(ダメだったかな?)

梓を生贄に、可愛さで攻めてみたのだが、これもダメだったのだろうか？

「そうだな」

「練習するか」

何とか口論を止めることができ、練習に持っていくことができた。

ほっと胸をなでおろしながら、今回一番の功労者でもある梓の頭を軽く撫でることで労った。

それからすぐに、練習の準備を終えた僕たちは、文字通りの練習を始めることとなった。

「それじゃ、まずはふわふわからな」

律によって最初に演奏する曲は『ふわふわ時間』^{タイム}に決まった。

「1, 2」

律のリズムコールによって演奏が始める。

最初は唯のギターから、そして僕たちのパートが演奏を始めてい

く。

(ん?)

だが、最初の一音で違和感を感じた僕は、演奏の手を止めた。その理由はすぐに判明した。

それは律だ。

正確に言うと、ドラムのパワーが非常に弱い。

ヨレていないのはいいが、パワー不足で音自体に勢いがなくなっていたのだ。

それに気づいたのか、みんなも演奏の手を止めた。

「あのさ律。ドラムが走らないのはいいけど、パワーが足りなくないか?」

「……………」

漣の言葉に、律は反応を示さない。

まるで心ここに非ずと言った様子でボーっとしていた。

「おい、律!」

「あーごめん」

漣の強い呼びかけに、律は気の抜けた様子で反応を示した。

「何だか調子が出ないや。また放課後なー」

「え、律ちゃん?」

「いいよ、唯」

立ち上がりながらおぼつかない足取りで部室を後にしていく律を呼び止めようとする唯を、漣が止めた。

「でも……………」

「いいんだ」

なおも食い下がる唯に、漣は再度そう告げると律の去っていった方に視線を向けて

「バカ律」

とつぶやいた。

(律が、馬鹿だったらその理由に気付かない漣は、いったい何なんだろうね?)

そんな漣のつぶやきに、僕は心の中でつぶやいた。

それなら、何もできない僕はいったい何なのだろうかという疑問にもなるわけだが。

(まあ、「無能」かな)

自分で言っていて、何とも悲しくなってしまった。

結局、その後に練習をする気にもなれず、いったん解散することになった。

だが、この日の放課後に律が姿を現すことはなかった。

「律先輩、来ませんね」

翌日の放課後、重苦しい空気が部室内に漂っていた。

この日も律は姿を現すことがなかった。

唯の話では、HRが終わって気付いたらいなくなっていたらしい。

「一体どうしちゃったんでしょう?」

「そりゃ、やっぱり滯ちやんが冷たいからじゃない?」

「え?」

梓の言葉に、山中先生が肩を竦めながら答える。

「軽音部の為に一日律ちゃんの玩具になってきなさい!」

かと思えば、滯に指を指してそんなことを口にする顧問。

微妙に違うような気がする。

「そうじゃないと、律ちゃんは今が荒んでヘビメタの道に進んで、二度と戻れなくなっちゃうわ!」

(絶対にありえない)

ヘビメタの道に進むという論理が、僕には全く理解できなかった。

「それ、失恋したさわちゃんだよな?」

「ああん?」

とはいえ、唯の捉え方もだけど。

「でも……」

そんな中、再び口を開いたのは梓だった。

「でも、もしこのまま律先輩が戻ってこなかったら……学園祭はどうなるんでしょうか?」

「学園祭以前に、軽音部の存続の問題だと思う」

梓の言葉に、僕はポツリとつぶやいた。

そしてまた部室は重苦しい沈黙に包まれる。

それを破ったのは椅子を弾いて立ち上がる音だった。

「練習しよう」

「律先輩抜きですか?」

「呼びに行かなくていいの?」

滯の提案に梓や唯たちが異論を唱えて反対する。

「それは……——」もしくは代わりを探すのかもあるわね」——え?」

滯が言葉を詰まらせる中、山中先生がそんな道を示した。

「万が一を考えて代わりを探すのもありよ。高月君ならドラマーの知り合いも多いんじゃない?」

「それは、確かにいますけど——」

山中先生の考え通り、僕にはドラマーの知り合いもいる。

僕が頼めば、なんだかんだ言いながらも来てくれるかもしれない。

でも、本当にそれでいいのだろうか?

それをした瞬間、律の居場所は本当になくなる。

「律ちゃんの代わりはいません!!」

「……ムギ」

突然大きな声で叫んだムギに僕は驚きながらも、ムギの言葉を待った。

「待つてよう。律ちゃん必ず戻ってくるから。待つていようよ」

「……………」

僕は静かに息を吐き出す。

それは安どのため息。

まだ、ちゃんと律の戻ってくる場所はある。

そして、無能な自分への呆れ。

でも、ここで何か直接的な行動を起こすわけにはいかない。

きつと逆効果になる。

人間関係の問題は、僕にはどうしようもないのだ。

(だから、“NOTHING”というわけか)

ものすごく的を得ていた。

(でも、焚きつけることぐらいなら僕にもできる。いや、僕しかできない)

それをやった場合、僕への評価がマイナスになるが、学園祭でライブができるのであれば構わない。

“目的のためであれば、手段は厭わない”

それが僕の持論だ。

これまでもそうやって生きてきた。

ならば、僕らしく振る舞えばいい。

そこに、ちよつとした暗示を込めれば、确实だろう。

「今日から軽音部の活動は休止にする」

「え?」

「どういうことだ?」

ゆつくりと席を立ちながら告げる僕に、濤が訊いてくる。

「このまま部活動が続けても意味はない。無意味な行動は取らないのが僕の流儀だ。律がここに戻るまで、活動を休止にする」

「でも、それじゃ練習がっ」

「もちろん、練習は各自でやってくることに。活動再開時に音合わせができるようにするんだ」

僕の出した結論に、梓が異論を唱えるが、僕は各自で練習をするように告げた。

僕はギターケースを背負い、鞆を手にする

「こういった人から見てもくだらなない」ようなことで休止というのも、いささかやりすぎなような気もするけどね」

「い、今浩君なんて言ったの?」

僕の言葉に、唯が勘違いだと言わんばかりに声を上げた。

「だから、人から見てくだらないことと言ったんだ」

「そんな言い方ってないだろ! ライブができるかどうかの問題なん

だぞっ!!」

さすがに僕の言葉には頭が来たのか、漣が大きな声で怒鳴り声を上げた。

「当然でしょ。人から見てください。僕たち軽音部のメンバーにとつては非常に重要なことなんだから」

「……………」

「そう言うのは、他人や自分自身で解決するのは無理。考えれば考えるほどにドツボにはまっていくから。ちなみにこれは実体験だよ?」

「浩介先輩……………」

僕自身も数か月前に同じ内容で皆に大きな迷惑をかけた。

あれも元をただせば、自分の居場所を見失いかけている状態なのだ。

そんなことを他人がああだこうだと言っても、それは全くもって意味がない。

ならば、誰が言うべきか。

「そう言ったことで重要なのは友人と話すこと。話をすれば多少は気が楽になるはずだよ。僕のようにね」

僕は慶介がいてくれたおかげで、踏ん切りのつかなかった自分と別れることができた。

慶介は、僕にとつては恩人なのだ。

「それじゃ、律にとつて気を許すことのできる友人って、一体誰なんだろうね?」

「……………」

僕の問いかけに、漣は視線を逸らせた。

「もし、律に幼馴染がいれば。異変を瞬時に察知してこういった問題も起こらなかったのかもしれないけど……………まあ、過ぎたことだよね」

僕は最後に“とりあえず、可及的速やかな決着を頼むよ”と告げて部室を後にした。

(通じたかな?)

部室を後にした僕は、心の中でつぶやいた。

あれは、すべて漣に言っていた。

律は滯と幼馴染と言っていた。

そして今回の件は滯と律の問題。

二人が話をするところこそが最善の解決法なのだ。

でも、それを直接言うことはできない。

言ってしまうば、確実に滯を追い詰める。

間接的に言っても滯を少し責めているような感じなのだ。

直接的に言っても今度は滯が再起不能になったらどうしようもなくなる。

(何とかいい方向に行けばいいんだけど)

後は滯を信じるしかない。

少なくとも、律は数日で部室に来る。

それまでが勝負だ。

『クリエイト、律の状態をどう見る?』

「メンタル面では非常に不安定でしょう。ただ、マスターが最も知りたいフィジカル面ですが、体温が通常よりも高かったのを感じました」

僕の問いかけに、クリエイトは明確な答えを返してきた。

僕の見立て通り、律が部室に來ないのはただの風邪だ。

本当の意味で最悪な状態というわけではない。

(さて、僕にできるもう一つのことをやりますか)

僕にしかできないことは、まだ残っている。

そして僕はある場所へと向かうのであった。

第70話 男とは

「失礼します」

「あら、いらつしやい。高月君」

生徒会室に足を踏み入れると、そこには栗色の髪を伸ばした物静かな令嬢の雰囲気醸し出す女子生徒がいた。

「なぜ自分の名前を？ いえ、それよりも生徒会長はどちらに？」

「私が生徒会長なんだけど」

なんと、驚いたことに目の前の女子生徒が生徒会長だったらしい。

そう言えば、マラソン大会とその後の時間ループ事件で犯人が成りすましていた女子に似ていたような気がした。

(どうでもいいことだと思つて完全に忘れていた)

なり増された生徒のことを記憶しても意味がないので、気にも留めていなかったのが、裏目に出たようだ。

「それは大変失礼を。お名前をうかがつても？」

「いいわよ。私は曾我部 恵よ。よろしくね」

立ち上がりながら、人当たりのいい笑みで名前を口にした曾我部生徒会長は、僕に手を差し伸べてきた。

「高月浩介です。軽音部の副部長をしています」

それに僕も応じることにした。

「それで、用件は何かしら？ もしかしてお茶を飲みに来たとかかしら？」

「違いますので、嬉しそうに用意をしようとしなくてください！」

なぜかお茶を飲みに来たことを前提に、話を進めようとする会長に、僕は慌ててツッコんだ。

「そう？ まあ、立ち話もあれだし。お茶でも飲みながら用件を聞かせてくれるかしら」

「分かりました」

結局会長に押し切られるまま、僕は会長に進められるがままに座らされた。

「軽音部で飲んでいるお茶よりはあれかもしれないけど、どうぞ」

「それじゃ……」

ちやつかりと自分の分まで注いだ湯呑を自分の席に置くと、会長は席に着いた。

僕は会長の斜め右側の席だった。

「あ、おいしいです」

「ふふ、ありがとう」

嬉しそうに微笑む会長をよそに、僕は咳払いをする。

「それで、本題を話しても？」

「そうね。それじゃ、聞かせてもらえるかしら？」

ようやく本題に入ることができた僕は、会長に用件を告げる。

「学園祭の行動使用届の提出期限を数日だけ伸ばしてほしいんです」

「……どうしてかしら？」

表情から笑みが消え真剣なものに変えながら聞いてくる会長の目をそらさずに、理由を答える。

「現在、部長である田井中さんは風邪で書類に記入できるような状態ではありません」

「でしたら、副部長である高月君が必要事項の記入をして届け出ればよいのでは？ 副部長にも提出する権限はあることだし」

会長の返答は尤もだった。

「その必要事項の一つでもある“名称”が、まだ決定していないんです。勝手に決めるのは仲間の存在を無視することにもなりますし、部活動に支障をきたす恐れもあります」

「……………」

僕の言葉を、会長は真剣な表情で聞いていた。

「せめて1日だけでいいんです。どうか伸ばしていただけでしよ
うか」

「申し訳ないけど、規則は規則なの。それに、そんな理由で締め切りの延長を許していたら、他の部もやりかねない。軽音部だけ特別に許可を出すわけにはいかないの」

だが、無情にも返ってきたのは却下の答えだった。

「ご存知かもしれませんが、軽音部にも新入部員が入りました」

「ええ。確か中野さんよね？ でも、それがどうかしたのかしら」

入部届の最終的な行き先はここ生徒会になるのだから、会長である彼女が知っていてもおかしくはないのだが、なぜか名前まで知っていた。

(まあ、いいか)

今はそんなことを気にしている余裕はなかったので、僕は考えるのをやめた。

「学園祭でのライブはいわば彼女にとっては初めての舞台です。そう言った場所に立たせてやるのが先輩である僕たちの役目ですし、僕は立たせたいと思います。例え、どんなことをしてでも」

「ちよつと高月君、目が怖いわよ」

いつの間にか相手を威圧しかけていた僕は、慌てて自分を落ち着かせた。

「お願いします！ 一日だけ、提出を待っていただけじゃないでしょうか？」

そして僕は会長に頭を下げた。

本当ならば生徒会役員に頭を下げるのもいやだった。

僕にとつてはそれは屈辱を意味した。

別に、頭を下げるのが嫌なわけではない。

教師や医者には簡単に頭を下げることができる。

でも、生徒会役員だけは嫌だった。

僕は、それを我慢した。

それでライブができるのであれば、頭など何百回でも下げる。

それでもだめなら、力づくでも領かせる。

「貴方の心意気は分かったわ。でも、規則は規則なの。だから、”名称”が未記入のままでもいいから提出してもらえるかしら？」

「えっ？」

一瞬会長の言わんとすることが理解できなかつたぼくは、思わず聞き返した。

「必要事項が記入されていない書類は、書き直しということでもう一度部長や副部長の方返されることになるの。そしてその書き直しの

期限は最高で届の締め切り1日後まで」

「……あ」

そこに来てようやく、会長の理屈が理解できた。

「つまり、使用届さえ出してしまえば、締切日の翌日まで使用届の提出期限を延ばすことができる」

「そういうこと。そうすれば、例外を作ることなく伸ばすことができるし、混乱は防げるわ」

会長の提案はとても魅力的なものだった。

強硬手段ではないとは言えないが、それでも正当な方法で締め切りの延長ができる。

「ただし、表面上は〃未提出〃になるから、気を付けてね」

「分かりました」

会長の注意に、僕は頷いて答える。

「でも、それをするには一つだけ条件があるの」

「……………はい？」

再び思考がフリーズしてしまった。

小悪魔な笑みを浮かべながら会長はその条件を口にする。

「分かりました。呑みます」

僕はその条件を呑むことにした。

「それじゃ、交渉成立ね♪ まずは、講堂使用届を出してもらえるかしら」

「はい」

僕は会長に促されるまま、濤から預けられた講堂使用届を渡した。

ちなみに、どうしてこれを僕が持っているのかというと、濤曰く『浩介に渡しておいた方が安心できる』らしい。

この時ばかりは律に同情したくなかった。

「〃名称〃がないわよ。明後日までに書き直してね」

「はい、すみません」

そしてすぐさま会長から使用届が返された。

もちろん、これも形式的なものだ。

これで、使用届の提出期限は明後日までとなった。

あとは今回の問題が解決するだけだ。

「それでは」

「あ、約束の件、お願いね」

ものすごく面倒なことになったけど。

「ずいぶんと根回しがいいのね」

「……立ち聞きですか？ 山中先生」

生徒会室を出たところで、僕は山中先生に声を掛けられていた。

「ごめんなさいね」

「まあ、いいですけど」

僕は山中先生に背を向ける。

「ちよつと待ってくれる？」

「何ですか？」

去ろうとする僕を呼び止める山中先生に、僕は用件を尋ねた。

「高月君は、今回の件解決できると思う？」

「おかしなことを聞きますね。先生は」

軽く笑いながら、僕は山中先生に向き直った。

「“できる”ではなく、“させる”んですよ」

「……………そうだったわね。ゴメンね呼び止めてしまつて」

僕の言葉に、一瞬驚いたように目を見開かせた山中先生だったが、すぐに微笑みを浮かべながら口にした。

僕はそんな山中先生に一礼をすると、今度こそその場を立ち去るのであつた。

その翌日、僕とムギに梓と唯の四人で風邪で欠席している律の見舞いに行くことになった。

「えつと、この道をまっすぐ行つて……」

律の家がかかれた地図を手に先導する唯に、ついて行く形で僕たち

は歩いていたのだが……

「あの、ここさつきも通りましたよ」

「あれえ？」

梓の指摘に、唯が首をかしげた。

『大丈夫！ 律ちゃんの家への案内は私に任せて！ ふんすつ！』

等と自信満々に息巻いていたが、ふたを開ければこの状況だ。

もはや、天才級の天然かもしれない。

「もう唯は後ろにいる。僕が先導する」

「そうですね、それがいいですね」

「浩君もあずにゃんもしい！」

唯が抗議の声を上げてくるが、僕はそれを無視した。

そして、改めてメモを手を歩き出すのだが……

「ここだな」

「あれ、ここ何回も通ってましたよね？」

一軒の住宅の前に立ち止まった僕と梓は唯の方を見る。

そこは何回も通り過ぎた家だった。

「間違えちゃった、テヘ★」

「もう二度と唯には道案内はさせないっ！」

かわいいこぶる唯に僕はそう告げるとインターホンを鳴らそうとし

「ごめんね。私、人様の家のインターホンを押すのが夢だったの！」
「そ、そうなんだ」

——たところで横からインターホンを押したムギが無邪気に笑
いながら謝ってきた。

そこまで目くじらを立てることもないので、僕は普通に返事を返し
た。

「はい、どちらさ——ですか」

「……………田井中律の見舞いできたんだけど。部屋の場所はどこかな
？」

戸を開けた少年は、僕を見るなり近くのドアの陰に隠れてしまっ
た。

(そんなに、僕は怖いかな?)

微妙にシヨックを受けながらも、僕は用件を少年に告げる。

「ね、姉ちゃんの部屋だったら、階段を上ったところにあります」

「え、 “姉ちゃん”?」

少年の返答に、梓が驚きのあまり固まった。

「へえ、律ちゃんに弟がいたんだ」

「ねえねえ、名前は何ていうの」

二人の言葉に、律の弟は、ドアを閉めて隠れてしまった。

「あれ?」

「えっと……律先輩の部屋に行きましょう」

隠れてしまった律の弟のことはいったんおいておき、お見舞いの方を優先させる結論になったようだった。

「僕はここで待ってる」

「ええー、一緒に行こうよ」

僕の言葉に、唯が不満そうに言いながら一緒に行くように促してきた。

「あのね、男が女の部屋に行くのは倫理的に問題でしょうが。僕はここで待ってる」

「あれ、でも浩君。私の部屋には入ってきたよね」

唯から鋭い指摘が入った。

何気なく僕は唯の部屋に入っていた。

今になって倫理も減ったくれもないわけだ。

「だったら唯隊員に重要な任務を言い渡す」

「ははあ!」

僕はノリでごまかすことにした。

「僕の分も田井中隊長を見舞ってくるのだ!」

「そんなの唯先輩でも誤魔化されるはずが——」了解であります!——
—誤魔化されてる!—

唯の操縦方法は、すでに習得済みだ。

そんなこんなで、唯たちの女性は律の部屋に見まいに向かい、僕は玄関の壁にもたれかかるようにして腕を組み目を閉じると、唯たち

を待つことにした。

「……………」

「……………」

先ほどから律の弟の入った部屋のドアから気配のようなものを感じる。

まるで僕がいるのかどうかを確かめるように。

というより、実際には確かめているのだろう。

先ほどから下がったり近づいたりを繰り返しているのだから。

(人見知りなのかどうかは知らないけど、いい加減鬱陶しい)

これで数十回目にもなるため、そろそろ鬱陶しさを感じてきた僕は、閉じていた口を開くことにした。

「その少年。さつきからバタバタバタバタ鬱陶しい。男ならどっしり構えろっ」

「ツー」

僕の怒号に、中の方で反応があった。

そして、ゆつくりとドアが開いた。

「それで、少年。名前は」

「……………」

出てきたものの、やはり問いかけには答ええない。

「そうだな。まだこっちの自己紹介がまだだったな」

なので、こちら側から歩み寄ることにした。

子供に対しての接し方は分からないので、いつも通りに。

「僕の名前は、高月浩介。君の姉と同じ高校に通っている」

「俺は……田井中 聡」

僕の自己紹介に、少年は自分の名前を告げた。

「高月さんのこと——「ストップ」——え？」

僕は話している途中で、止めさせた。

「苗字ではなく、名前で呼ぶといい。こちらも君のことを聡と呼ばせてもらう」

「は、はい。浩介さんのことは、姉ちゃんからよく聞いてました。とっても豪快で面白い人だって」

(面白い?)

聡が告げた僕のことを話した律の言葉に、首をかしげる。

(どうやら、一回話をする必要があるようだな)

僕は心の中で、律と話し合いをすることを決めた。

「あの、リビングの方で話しませんか?」

「それじゃ、言葉に甘えよう」

聡の提案に、僕は賛同すると彼の案内の元、僕はリビングへと向かうことにした。

「あ、どうぞ」

「失礼して」

聡に促されるまま、僕はソファアに腰を下ろす。

「あの、学校で姉ちゃんどんな感じですか?」

「やはり気になるか?」

僕の言葉に、聡は無言で頷いた。

「そうだな……あいつは、時より不器用なところがある。それが悪いことではないが、不器用さが故に損をすることも多い」

「は、はあ」

「テンションは常に高いかな。その点句の高さはある種のムードメーカーと言ってもいいだろう。だが、空気を読まないとこれはやかましくなるだけだ。何事も程度の問題か」

「そ、そうですか」

何だかさつきから生返事のような気がしてくる。

だが、聞かれたことには何事も真摯に応えなければいけない。

たとえ相手が子供だろうとも、誤魔化すのは相手に失礼だ。

「だが、心はまっすぐな奴だ。どこかの弟のようにな」

「え?」

今度の言葉はちゃんと伝わったのか、聡はこっちの方を見つめてく

る。

「誇るといい。君の姉はとても素晴らしい人物だ。もし、悪口を言うやつがいたら僕に言うといい。そいつにきつちりと話をつけるから」
「……………あははは！」

僕の言葉に、目を見開かせて呆然としていた聡だったが、突然笑い出した。

「何かおかしいことでもいったか？」

「いえ。なんだか、見かけとは違ってたから」

僕の言葉に、笑いながらも聡がその理由を答えた。

「先ほどから、私はどういう風に君に見えているんだ？」

「えっと……………とても怖い感じの人です」

「やはり、そう見えてたか」

自分でもわかってはいたが、そういう風に見えてしまうのを指摘されるとどこかショックでもあった。

「私も治そうとはしているんだが、なかなかこれは治らない。なにせ、この“怖い感じ”を求められる立場にいたからな」

「それって、どういう意味ですか？」

ふと漏らしてしまった僕の言葉に、聡は興味深げに聞いてきた。

「知らなくていいことだ。男というのはな、大事な仲間や人を守れてこそ真の男となる。僕のこのみかけもまた、そうなるための物でもある」

「すみません、分かりません」

僕の言葉の意味が理解できなかったようだ。

当然だ。

理解できないように言っているのだから。

「今は分からなくていい。いずれ分かる時がくる。その時、君は一体その背中で何を守り、何が為に力をふるうか……………楽しみにしておこう」

「あ、あのー！」

僕は聡から視線を外すと、再び声を掛けられた。

「何だ？」

「浩介さんのことを——「あ、浩介。こんなところにいたんだ」——」
聡の言葉を遮るように現れたのは、漣だった。

「漣に皆……って、何故唯は背負われてる?」

「唯先輩何だか、眠っちゃったみたいで」

ムギの背中に背負わされてすやすやと眠っている唯に、首をかしげていると梓が答えてくれた。

「見舞いに行つて逆に眠つてどうするんだ」

僕は深いため息をつきながら、漣たちの方へと向かう。

「そう言えば、聡。僕に何か言いたいことがあつたんじゃないのか?」

「あ……また別の機会がいいです」

僕はふと聡が僕に何かを言おうとしていたのを思い出したので、聞いてみるがはぐらかされてしまい、結局聞くことができなかつた。

「それじゃ、あんまり長いするのもあれだし、帰るか」

「はい!」

「そうね」

漣の提案に、梓とムギに僕は頷きながら答えた。

「それじゃ、またな」

「あ、はい」

漣の言葉に、聡は頷きながら返事をした。

(何だ、女性恐怖症じゃなかったのか)

一瞬そんなことを考えていただけに驚きだったが、もしかしたら聡は人見知り名だけなのかもしれないと、僕は新たに結論付けることにした。

そして、僕たちは田井中家を後にするのであつた。

第71話 ライブに向けて

「あ、ムギ」

「何？ 浩介君」

田井中家を後にしたところで、僕はムギに声を掛けた。

「唯は僕が背負うよ。男で力もあるから」

「それは嬉しいんだけど、ギターはどうするの？」

僕の提案に、ムギが困ったような表情を浮かべながら尋ねてきた。

「それじゃ、本末転倒になるかもしれないけれど、僕のギターを代わりに持ってもらっていい？」

「もちろん」

まるで交換するかのようには僕は唯を背負い、ムギはギターケースを手にした。

ちなみに唯のギターケースは梓が持っている。

「それじゃ、行こうか」

そして僕たちは再び足を進めるのであった。

「すう……すう……」

背中から聞こえるのは規則正しい唯の寝息と時より行き交う車の音。

「なあ、浩介」

そんな中で、漣の声が聞こえてきた。

「何？」

僕は、漣に用件を尋ねる。

「ありがとう」

「何のお礼？ それは」

突然お礼を言ってくる漣に、僕はそう言い返した。

「律のこと。ちゃんと話をするように言ってくれて。後、迷惑をかけてごめん」

「ちよつと待ってくれる？」

お礼と謝罪を口にする漣に、僕はそう返した。

「まず第一に、謝るのなら、僕ではなく皆に謝るべき。皆も差はあれど

迷惑を被ってるんだから」

「……分かつてる。ちゃんと謝るよ」

僕の言葉に、漣は頷くとしっかりとそう答えた。

「それと、部室の言葉は僕の戯言だ。だから、お礼を言われる筋合いはないし、言われても困る」

「全く、素直じゃないんだから浩介は」

僕の言葉に返ってきたのは漣の呆れたような声だった。

「でも、そういうところが浩介君らしいよね」

「はい！」

後輩にまで僕はそう思われていたようだ。

僕はある意味、知りたくなかった事実を知る羽目になってしまった。

「そう言えば、浩介といつの間にあんな風に親しくなったんだ？」

「わりとすぐだったけど。一喝したら後はずるずると」

「浩介の才能かもしれないな、そういうところ」

何だか勝手に才能認定してしまった。

「聡って、微妙に恥ずかしがり屋なところがあるから、初対面の人とあそこまで親しげに話をしていたのは浩介が初めてだと思う」

「人は、移ろいゆくものだ。それは漣にだって言える。君の知る聡という人物像と今の彼ははたして“イコール”で結べるのだろうかね？」

「わざと分かりにくくなるように、言っていないか？」

さすがに僕がわざと分かりにくい言い回しをしていることに気付いたのか、漣がジト目で僕のことを見ながら聞いてきた。

「正解」

そんな漣に、僕はそう答えるのであった。

「本当に大丈夫ですか？」

「もちろんだ。そつちも気を付けて帰りなよ」

梓の自宅に向かう道と、僕たちの帰宅路が分かれている分岐点で、不安そうに聞いてくる梓に頷いて答えると、注意するように告げた。

「はい。それじゃ、また明日」

「ああ。また明日」

唯を背負いながら、手を振ってくる梓に手を振りかえすと、僕は未だに眠っている唯を背負ったまま唯の家へと向かう。

ちなみにギターは仕方がないので僕のだけを、格納庫に入れておくことにした。

『はーいー』

唯の家に到着した僕は、インターホンを鳴らすと中から憂の声が返ってきた。

そして誰かが近づいてくる気配がした。

「どちら様ですか……っってお姉ちゃん?! どうしたの!?! 足を怪我したの!?!」

(今日も飛ばすなあ)

憂のマシニングトークに、僕は苦笑しながら事情を説明しようとした時だった。

「えへへ、実はね寝ちゃったから浩君におんぶされてきたんだ」

後ろの方から唯の無邪気な声が聞こえてきた。

「……………」

僕は思わず言葉を失った。

ただ、言えるのは。

「唯、いつから起きてた?」

「えっとね『何のお礼? それは』のあたりから」

記憶をたどってみた。

「それって、かなり前のことだよな?」

「うん♪」

しかも歩き出してすぐだし。

「だったら、すぐに言いなよ」

「だって、浩君の背中気持ちよかったんだもん」
唯の反論に、僕は意味が分からなかった。

「というより、降りて」

「もう浩君は素直じゃないんだから☆」

「……………」

なぜか、僕はとてつもない敗北感に襲われていた。

「お姉ちゃんがお世話になりました」

「いえいえ」

憂のお礼の言葉が、何となく止めの一言に聞こえたような気がする僕だった。

『浩介、そっちはどうだ?』

「一悶着ありましたけど、何とかいい方向に転がったようです」

自宅に戻った僕は、自室で田中さんと電話をしていた。

『何だまた一悶着か』

「ええ」

また何か嫌味でも言われるのかと僕は心の中で思っていると、

『青春してるじゃないか』

「……………まあ」

以外にも、そう言った言葉はかけられなかった。

「しかし、意外です」

『何がだ?』

「田中さんだったらまた嫌味を言ってくると思ったのっで」

何を言いたいのかがわからない様子の田中さんに、僕はそう答えた。

『お前は、俺をなんだと思ってる?』

「あはは……………」

声のトーンを落とした田中さんの問いかけに、僕は苦笑するしかなかった。

『まあいいが、今年のライブも楽しみにしてるぞ』

「はい。必ずいいライブにしますよ」

僕は田中さんにそう宣言するのであった。

(後の問題は……)

簡単にそれは思い浮かんだ。

未だに決まっていない軽音部のバンド名のことだ。

決めない限り、提出することはできない。

一応期限は明日までになっているが、時間はあまり残っていない。

バンド名を早く決めないといけないのだが……

「うーん、まったく思いつかない」

なかなかいいバンド名が思いつかなかった。

H & Pはいつまでも燃えていき、決してその炎は消えないという意

味で着けたバンド名だ。

では、軽音部はどうだろうか？

どのような名前がぴったりだろうか？

「………寝るか」

僕が出した結論は、考えることの放棄だった。

そして僕は眠りにつくのであった。

「さて、行くか」

「お、今日は部室に行くんだな」

放課後を迎え、席を立つ僕に慶介が声を掛けてきた。

「昨日は、活動を自粛していただけた。今日からは通常通りに活動す

る。別にサボってるわけじゃないんだから」

「それは分かってるけどさ」

「まあ、行くのは生徒会室だけど」

何せ、これからちよつとした野暮用があるのだ。

「は？ 生徒会室って……お前まさか何かよからぬことを——ジャカルタ!?」

「貴様は僕をなんだと思ってるんだ。ちよつとした野暮用だ」

ものすごく失礼なことを口にした慶介に、僕は鉄槌を浴びせた。

「ど、どうもずびばせん」

「つたく。それじゃ、行くからな」

頭を抑える慶介に、ため息を漏らしながら、僕は教室を後にした。

「あ、英和辞典を返し忘れた」

教室を出て少し歩いたところで、先日英和辞典を慶介から借りたまま返していなかったことを思い出した僕は、慶介に返すために教室へと引き返す。

「今日は返さないぜ、マイスイートハニー」

「えっと……」

教室に戻ると、慶介が佐伯さんをナンパしていた。

「……………」

僕は無言で英和辞典を取り出すと、教室内を確認する。

(教室内で巻き添えを喰らいそうな人の姿は無し)

車線上には、その危険性のある人の姿は見かけなかった。

(それじゃ)

僕は英和辞典を手に、慶介の方に向けて全力で投げた。

「ガンマっ!!!」

そして辞典は見事に慶介の頭に直撃した。

「よし」

それを確認した僕は、再びその場を後にするのであった。

「失礼します」

「ちゃんと約束通りに来たのね」

生徒会室を訪れると、生徒会長の姿があった。

「約束は約束ですから」

「クス。それじゃ、お願いね」

僕が会長から出された条件は実に単純だった。

“生徒会室の資料整理の片づけを手伝うこと”

なんでも、生徒会室では資料整理をこの時期に行っているらしい。

理由は知らないが、この時期に行っているのが通例なのだとか。

そして、資料整理は終了したものの、その片づけの作業が問題となった。

会長曰く、生徒会役員は学園祭の開催に向けて手助けなどをしているため、どうしても人員が不足するらしい。

ちなみに、慶介は学園祭に必要な道具を運ぶこき使われ役だったらしい。

確かに、最初に生徒会室を訪れた際に、いくつかの段ボール箱が置かれていたのは覚えている。

『それなら、学園祭が終了した後にすればいいのでは?』

そんな僕の疑問に、会長の出した返事が

『それでもいいのだけれど、学園祭での作業で疲れた役員たちに重労働をさせるのもね』

という会長の心遣いなのかどうかは知らない理由で却下された。

そこで、僕の登場ということだ。

「とりあえず、その段ボール箱を番号順に上の棚に置いて行ってもらえるかしら。番号は右下の方に書いてあるから」

「分かりました」

会長の指示のもと、僕は右下に書かれている番号を確認して、一番若い数字の段ボール箱を持ち上げる。

そして棚の前に置かれた脚立に上って、箱を棚の一番上の方に置いた。

「はあ……浩介様と仕事ができるなんて。幸せ」

「……………」

今何か後ろの方から雑念のようなものが聞こえたような気がしたが、気のせいということにしよう。

そうして、僕は黙々と資料の入った段ボール箱を棚に片づけていく。

そんな中、血相をかいて生徒会室のドアをけ破る人物がいた。

「すみません!!」

「……………いきなりどうしたのかしら?」

ドアをけ破る勢いで開けた人物…………律に、会長は物静かな様子で応対する。

「あ、あの。講堂使用届なんですけど」

「あー。あれね」

律の言葉に、会長は思い出したように相槌を打った。

「確か、あなたたちの部は未提出だったようだけど?」

「すみません!。どうか一日待ってくださいませんか!!」

公では未提出扱いだが、まだ僕たちだけは提出期限が過ぎていない。

だから、律の懇願はある意味無意味だったりもする。

(今日になって、使用届が出されていないことを知らされたわけか)

誰が知らせたのかは、一緒に入ってきた真鍋さんを見れば一目瞭然だろう。

「でも、締め切りはとっくに過ぎてるし、規則は規則だから」

「そこをなんとか!」

「私からもお願いします!」

必死に懇願する律に、驚くことに真鍋さんも加わった。

「提出が遅れたのは、部長の田井中さんが風邪で欠席したためですし、もう一日だけ待っていただけじゃないでしょうか?」

「……………クスクス」

そんな真鍋さんの懇願に、会長はおかしそうに笑い声をあげた。

「あ、あの」

「ごめんなさいね、真鍋さん。その件は大丈夫よ。すでに使用届は提出されてるから」

そんな会長の様子に怪訝そうに声を掛ける真鍋さんに、笑うのをやめた会長は律たちに向き直った。

「え？ でも、私は提出なんか……あれ？ そう言えば使用届は？」

「それだったら浩介に」

いきなり僕の名前が出てきた。

「ですけど、未提出になってましたけど」

「ええ。副部长さんに返したの。彼ね、“名称”を記入せずに提出していたから。だからその修正が必要ということとで今日までに必要事項を埋めて再提出するように指示を出したのよ」

真鍋さんの疑問に、会長が答えた。

「そうよね、高月君」

「……………あなた、人が悪すぎです」

「褒め言葉として受け取っておくわ」

僕の苦言に、会長はさらりとかわしてしまった。

「浩介!？」

「こ、浩介!？」

「な、何をしてるんですか？」

僕の存在によく気付いたのか、驚きの声を上げる唯たちに、僕は最後の段ボール箱を棚に置いて脚立を降りてから、みんなの方に向き直る。

「ちよつとした雑務をね」

そう言いながら僕は律たちの方に歩く。

「これで、取引は成立。ということでもいいですか？」

「ええ。とても満足したわ。ありがとうね、高月君」

僕の言葉に、会長は満足した様子で頷くと、お礼を言ってきた。

「浩介、一体どういうことなのかを説明——「はいはい。歩きながらするから部室に行こうな」——つて、ちよつと待てよ！」

「あ、待ってください。浩介先輩」

「浩君が、策士にっ!？」

生徒会室を後にする僕を追いかけるように、みんなもぞろぞろと出てきた。

こうして、僕たちはもう一度バンド名を考えることになった。

「それにしても、それならそうと言ってくれても」

「滯の言葉を使うのであれば、迷惑を掛けられた仕返し」

僕は律の抗議に対して、そう反論したのは、余談だ。

バンド名を再び考えることとなった僕たちは、それぞれ席に着くとそれぞれの案を口にしていく。

「ねえ、やっぱり」ぴゅあぴゅあ「がいいんじゃない？」

「却下」

再び却下された案を口にする滯に、律は容赦なく却下にした。

「にぎり拳！」はどうかかな？」

「僕たちは演歌集団か？」

演歌みたいなニューアンスのバンド名を、僕はツツコミつつ却下する。

「だったら、靴の裏のガム！」

「今日、踏んだんだな」

「すごい！ 何でわかるの?！」

ものすごい時事性の高いバンド名を口にする唯に、律はどこか呆れた様子でツツコむ。

そんな中、気になるのが僕の隣に座る山中先生だ。

笑顔だが、その笑顔がそこはかとなく怖い。

「だったら、ポップコーンハネムーン」とかは？」

「だからどうしてそんな甘々なのはつかなんだよ！」

もはやそれは滯の才能なのかもしれない。

「あ、だったら。ロケット鉛筆はどうかかな？」

「唯、少し黙って——」

僕が唯に「黙ってて」と言おうとした瞬間だった。

「まどろっこしい!!」

とうとう我慢の限界を超えたのか、山中先生が大声を上げながら、使用届をひったくった。

「全くお茶が飲めないじゃないの。こういうのはね、適当でいいのはいつ!」

『ああ!? 勝手に決められたあ!!』

山中先生によって強引にバンド名が決められてしまった。

だが、それは

「まあ、いつか」

とても無難であり、ピッタリなものだった。

律の言葉に、僕たちは頷いて答えていく。

「よしっ! それじゃ、記念撮影だ! 漕、カメラ! 浩介はボードを」

「それじゃ、私は生徒会室に行くね」

律がせわしなく指示を出す中、真鍋さんはそう言って部室を後にした。

ある意味、一番大物なのかもしれない。

そして僕たちは、先ほど決まったバンド名を書いたボードを背景にして、記念撮影をした。

「浩君! こっちこっち」

「はいはい」

唯に誘われるがまま、僕は唯と梓の間に入り肩に腕を回す。

徐々に実りの秋を迎えるこの季節に、軽音部は〃放課後ティータイム〃別名HTTという名前で新たなスタートを切った。

後は、学園祭に向けて猛練習をするだけ。

「いっくしー!」

なのだが、唯のくしゃみになんとなく嫌な予感を感じてしまう僕なのであった。

2年生編 『学園祭』 第72話 衝撃の知らせ

バンド名も無事に決まり、学園祭まで残り二週間を切ったある日の放課後。

この日も学園祭に向けて練習をしていた。とは言っても、通しで演奏をして見つかった問題点を改善していくという詰め段階だ。

そのおかげで、何とか人に聞かせることのできるレベルにまで問題は改善することができた。

「あら、みんなもう練習をしていたのね」

「あ、さわちゃん」

そんな中、顧問である山中先生が部室を訪れた。

大量の衣装が掛けられたカートのようなものを持って。

(何だか嫌な予感がする)

そして、その予感は現実のものとなる。

「あの、先生。それはなんですか？」

「これはね、梓ちゃんたちのために用意した学園祭用の衣装よ！」

「…………え」

衣装を指差しながら山中先生に疑問を投げかけた梓は、その返答に固まった。

「さあ！…この中から好きな衣装を選んで！」

「うわ、強制かよ!?!」

もはや拒否する余地は与えないと言わんばかりの山中先生に、僕はため息をつきそうになった。

(なんだかものすごくマニアックなものがあるし)

ウエイトレスやバニー服にチャイナドレスなどなど。

まさしくマニアックなものだった。

驚きなのは、それをノリノリで着ていくムギだが。

「なんだか楽しくなってきました」

「おーい、帰ってこい」

洗脳されかかっている瀧が危ない方向に行きかけている。

「ねえ、見てみて!」

「ん?」

そんな中、いつの間に着替えていたのか青色に赤色の丸型の模様があしらわれた浴衣を着ている梓とピンク色に赤っぽい丸型の模様があしらわれる浴衣を着ていた。

「これはどうですか?」

「これ可愛いよ」

そう言つて後ろを向く梓の横で笑顔を浮かべながら飛び跳ねる唯。

「そうね。それなら動きやすそうだし」

「ま、まあ。それなら」

律以外の女性陣の反応は良好だった。

「これにしようよ」

「まあ、これならいいか」

とそんな流れで、何とか衣装は浴衣に決まった。

「それじゃ、みんなの分を作るわね」

「あの、山中先生」

衣装が決まったことで、浴衣の服を僕たちの分も作るために部室を後にしようとする先生を僕は引き止めた。

「作る時は、ちゃんと男物も作ってくださいね?」

「もちろんよ。任せなさい!」

胸を叩いて頼もしそうに答えるが、去年それで女子用の衣装のみを持ってきた前科がある。

(本当に信じていいのかな?)

そんな不安を感じてしまうのであった。

「唯、練習の続きをするから着替えろ」

「えー、私はお茶にしたい!」

唯に注意すると思わぬところから反論されてしまった。

「もうライブまで日もないんですよ?」

「そう言う時だからこそ、ゆとりって大事じゃない?」

(ゆとりと、サボるのは違うんだけど)

「た、確かにそうですね」

「……………はあ。だとしても、制服に着替えろ」

律の説得は無理なのでしないことにして、僕は唯に再度着替えるように促した。

「ねえねえ、これ似合ってる?」

「十分に似合ってる。だから制服に着替えろ」

一回転してアピールをしながら聞いてくる唯に、僕は半ば投げやりになりながらももう一度着替えるように促す。

「ぶーぶー。浩君今日はノリが悪いー」

「はいはい。良いからいい加減着替えなつて。」

頬をふくらませて抗議する唯に、僕は何度目になるかわからない促しをした。

「分かったよ。浩君のいけず」

不満を漏らしながらも着替えに向かう唯に、僕は心の中でため息をついた。

「何だか必死だよな、浩介」

「そうか?」

律の言葉に、僕は首をかしげながら聞きかえした。

「だって、あそこまで食い下がる浩介始めてみたぜ」

「私もだ滞たちが言うのだから、間違いはないのだろう。」

(ちよつと反省、かな)

少し強すぎたのかもしれないので、僕は心の中で反省することにした。

「まあ、学園祭も近いし、せつかくライブができるんだから服に穴が開いたりしたら大変でしょ」

「なるほど。唯ならやりかねない」

「律先輩、それは唯先輩に失礼なのは? 気持ちちは分かりますけど」

後輩にまで分かれる唯のことが、とても不憫に思えてきた。

そんなこんなで、制服に着替えた唯を加えて、いつものティータイムへと移った。

僕たちの今の状態は、バンド名そのままだった。

「そういえば、浩君はみんなのことを携帯の電話帳になんて登録してるの？」

「いきなりなんだ？ やぶから棒に」

唯の突然の問いかけに、僕は内心で首をかしげながら聞き返した。

「ほら、人によって、名前とか色々打ち方があるかなーって思ってる。例えば、私は浩君のことは“浩君”で登録しているし、あずにゃんのこととも“あずにゃん”で登録しているから」

「まあ、どんな名前で登録しようが個人の自由だから、とやかく言うことではないけど僕はたいしては苗字だけかな。電話帳ってふとした拍子に誰かが見ることもあるから。まあ姉妹とか兄弟がいる場合はフルネームだけど」

僕のはおそらくオーソドックスなつけ方だと思う。

「なんだ、つまんないの。てつきり“番長”とかそんな感じのあだ名で登録してるかと思った」

「一体律の頭の中の僕は、どれだけ変なやつなんだよ？」

思わず律の言葉に、僕は突っ込みを入れてしまった。

そんなこんなで、いつものように時間が過ぎていくのであった。

「そろそろ長袖でも出しておくか」

それから数日後の夜、自室で僕は冬用の服を出そうか悩んでいた。

まだ季節は秋だが、少しずつ肌寒くなってきた。

現に、夏と同じようにシャワーでお風呂を澄ましたが、あまりの寒さに体を震わせたほどだ。

だからと言って、冬服はまだ少しだけ時期が早いようにも思える。

「……………もう少し様子を見るか」

結局、僕は様子見を選ぶことにした。

(にしても、何とかいい方向に流れてくれてよかった)

タロット占いで出た軽音部(放課後ティータイムだが)の空中分解の危機。

それは、漣と律の喧嘩によって引き起こされそうになった。

だが僕たちは、なんとかその危機を脱することができた。

若干ではあるが、目には見えない何かを狭間見たような気がした。

「でも、これで終わりなのだろうか？」

ふと、口をついで出てきたのは、そんな不安だった。

僕には胸騒ぎを感じていた。

その原因が

「あの時出たタロットで、まだ起きていないカードが二枚ある」

選ばれたすべてのカードは“必ず”現実になるのがこの占いの特徴だ。

だからこそ、律と漣を指すカードの原因が現実となり、僕が何もせず漣と律が話し合うことを示すカードも現実のものとなった。

そして、まだそれが現実になっていないカードが二枚ある。

「天然を示す『NATURAL』と、魔法を示す『MAGIC』」

きつといつか、この二枚に関係する何かが起こる可能性もある。

だが、天然関連で放課後ティータイムが空中分解する程の問題とは、どんなものなのだろうか？

「現時点でこの世界に、魔法使いが侵入したという記録もないし」

念のために先ほど調べた結果、まだ魔法使いがこの世界に来たという記録はない。

普通の天然ではないことは明らかだ。

もし何らかの力の持ったが天然が原因だとすると、それは魔法以外にはありえなかった。

正直に言つて、自分で何を言っているのかが分からなくなることがある。

だが、その魔法使いも僕以外にはまだこの世界にいない。

(この間の時間ループの一件は、本当に異常事態だったんだよな)

あれはそもそも、我々に認知されないように魔界を出て、この世界

に降り立ったために起こってしまった犯罪だ。

ちなみに、出入国管理センターとは、早い話が外国で行う入国審査のようなものだ。

そこにある転送用のゲートを使って、他世界へと向かう。

そして、それを利用する際には、必ず管理センターの方で記録が残るのだ。

ここまでは、普通の入国審査のような感じだが、管理センターでは転移魔法の反応も検知することができるのだ。

それによつて、違法出国者や入国者を把握することができるのだ。ただしそれにも穴があり、外部エリア（管理センターよりも南側の何もない草原のような場所）ではそれを探知することができない。

とはいえ、転移先の世界で何らかの監視がされている場合は、そこで情報がキャッチされるが。

キャッチされた情報は、出入国管理センターを通じて、魔法連盟へと連絡がいく仕組みになっている。

報告を受けたのが、犯人が不法出国した日の担当責任者であり、その日は責任者は居眠りを数時間程度して監視を怠っていたらしいのだ。

それだけならば、さほど問題にはならない。

せいぜい訓告程度だろう。

だが、一番の問題はそれの発覚を恐れて、転移先であるここから送られた情報を無視したことだ。

ちなみに当然のことだが、この職員は懲戒免職という重い罰を科されることとなった。

閑話休題。

「本当にどういう意味なんだ？」

これで何度目になるかわからない疑問に頭を抱えていると、携帯電話への着信を告げる音が鳴り響いた。

「あれ？・ 憂だ」

なぜか唯が憂に連絡先を教えていたらしく、憂からも連絡が来ることがある。

尤も、話の内容は唯がどうしているかといった感じだが。

その憂からの連絡に、僕は嫌な予感を感じてならなかった。

「はい、高月です」

『浩介さん！ 大変です!!』

出ないわけにもいかず、電話に出ると悲鳴にも似た叫び声が聞こえてきた。

その声の大きさに、僕は思わず携帯電話を耳から話した。

「分かったから、落ち着いて。はい！ 深呼吸」

『は、はい!』

僕はとりあえず憂を落ち着かせることにした。

「それで、何が大変なんだ?」

『お姉ちゃんが、風邪を引いたんです!』

「……………」

憂の口から出た言葉に、僕は一瞬頭の中が真っ白になった。

「何いっ!!?」

今度は僕が叫ぶ番だった。

「それで、唯の容体は?」

『えっと、38度9分で今寝ています』

(かなり高いな)

唯の容体に、僕は心の中でつぶやく。

「他の皆には?」

『連絡しました』

とりあえず、事態は把握できた。

唯は風邪をひいてしまったようだ。

「とりあえず、容体が悪化するようなら僕に連絡をしてもらえない?」

知り合いに医者がいるからそいつのところに入れて行くから」

『分かりました』

とりあえず、憂に指示を出しておくことにした。

そして“失礼します”との憂の言葉で電話は切られた。

(残りも一週間をきっている状態で風邪か……少々まずいな)

数日もすれば風邪は治るだろうが、練習の件を考えるのであればか

なりまらずい状況だ。

「風邪………？」

ふと、僕の頭の中に何かが浮かび上がった。

(ま、まさか………)

それは、あまりにも馬鹿馬鹿しい結論だった。

『NATURAL』が示していたのは、唯のこと!？」

ありえなくはない。

確かに、唯は天然だ。

真鍋さんが去年の勉強会で話していたストーリーからも、十分にそれは言えるだろう。

それが良い所でもあり、悪い所でもある。

まあ、憎めないタイプの人というのは、僕にとってはある意味うらやましいのだが。

このタロットカード占いは、実に意地が悪く意味を把握しづらいカードが出てくることがあるのだが、今回がその例だ。

「全くもって、最悪だ」

(問題は楽器を持って演奏ができる体力を回復することができるか………か)

時間は限られているが、今は唯の回復力を信じることにしか僕にはできなかつた。

それからさらに数日が経った。

「はあ………」

「おいおい、ため息をつくときれい逃げていくぜ」

本日何度目かわからないため息をついていると、慶介がお気楽な感じで声をかけてきた。

「お前はいいよな。能天気で」

「何だか言葉の端々から嫌味を感じたぞ」

慶介にしては鋭かった。

「まだ平沢さんの風邪治らないのか？」

慶介の問いかけに、僕は頷くことで答えた。

ちなみに、慶介には僕が唯が風邪を引いたことを知った次の日には話していた。

理由は分からないが、もしかしたら今後何かをする際に戦力になる可能性が高いと思ったからだ。

友人だからではないと思う……たぶん。

「昨日の時点では治っていないって言ってたから、今日はどうなのかはわからない」

「だったら、今聞きに行こうぜ」

僕の言葉に、慶介が突然そんなことを言い出した。

「はい？」

「だから、平沢さんの様子を聞くために妹さんの教室に行こうと言ってるんだ」

慶介の突然の提案に、首をかしげる僕に慶介はため息交じりに告げた。

「さあ、行くぞー」

「わかったから、引つ張るなっ！」

僕は慶介に引きずられるようにして、憂達のクラスへと向かうのであった。

しかし、慶介のこの行動力には、さすがの僕も舌を巻いていた。

「あれ、浩介に佐久間じゃん」

「律に滯。二人も唯の様子を聞きに？」

「ああ。まだ教室には来ていないらしいけど、もしかしたらと思っただけで、僕が疑問を投げかけると滯が頷きながら答えた。

「それじゃ、一緒に入ろ——「いや、待つんだ！」——……何？」

前の方のドアから中に入ろうとする僕を、律が引き留めた。

「こういうのは何事もインパクトが大事なんだ！」

「はい？」

様子を聞くだけなのに、どうしてインパクトの話になるのか、その話のつながりがよくわからなかった。

「ということ、浩介達は後ろのドアから、私たちは前から突入する」

「よし！ 先頭はこの俺が勤めよう！」

「任せるたぞ、佐久間隊員！」

なぜか意気投合している慶介と律の二人。

「……」

そんな二人に、僕と漣は肩をすくませ合った。

そんなこんなで、無理やり配置に付けさせられた僕たちに、慶介が「行くぞ」

と言ってきたので、僕は『はいはい』と適当に返事を返した。

そんな僕の返事など気にもしていないのか、僕から顔を背けると、ドアに手をかけた。

「頼もくくくう!!!」

そして大きな声で叫びながら律と慶介は同時にドアを開けると叫び声をあげた。

その瞬間、憂達のクラスが固まった。

「下級生をビビらせるなっ!!」

「うっさいっ!!!」

そして馬鹿げたことをした二人に鉄槌が下ったのもまた同時だった。

「フ、吹き飛ぶほどの友情を感じた……ぜ」

意味不明なことを口にしながら教室の端の方で気を失う慶介を無視して、僕は教室に足を踏み入れた。

「あ、あの浩介先輩？」

「気にするな。あれはただの幻覚と幻聴だ」

顔をひきつらせながら聞いてくる梓に、僕はそう告げるのであった。

「それにしても、こんな時期に風邪をひくなんて、弛んでる証拠だ！」
「お前が言うな」

少し前まで、部を巻き込んだ大げんかの後に風邪を引いた律に、僕は鋭いツツコミを入れた。

「そうですよ！ 时期的に考えても律先輩の風邪が移ったんですよ！」

「へ？ 私？」

そんな僕に援護射撃をするかの如く梓が告げた言葉に、律は目を丸くしながら自分を指差した。

「あ、でもこの間浴衣が気に入ったみたいで一日中来ていたから、それで体が冷えちゃったのかも」

「……子供か」

(い、家に持ち帰って着たんだ)

憂の言葉に、僕は唯の行動にため息が漏れそうになった。

「それにしても、あの服はいいとは思っただけどよくよく考えてみると、恥ずかしいよな」

「そうですよね」

律のつぶやきに、梓も頷く。

あの時は精神状態が正常ではなかっただけなのかもしれない。

でも、ある意味でまともなのは浴衣だけだったのもまた事実なのだ。

「だよな、濡？」

「……………」

問いかけられた濡は手を組んだまま、目を閉じて何かを考えている様子だった。

「梓、今日からリードの練習も始めてもらえないか？」

「それって、唯がライブまでに間に合わないということか？」

濡の指示に、律が疑問を投げかける。

「……………」

梓が何かを言いかけたところで、予鈴が鳴った。

「あくまでも万が一を考えてだから」

「……教室に戻ろう。授業も始まるし」

梓が納得してはいないのは、浮かない表情をしているのを見て明らかだ。

なので、僕は強引ではあるが話を切り上げさせた。

短い時間で梓を説得するのは無理だし、梓自身にも少しだけ自分で考える時間は必要だと思ったからだ。

「そうだな。それじゃ、放課後」

「またな」

濡たちも、僕の提案に頷くと梓に声を掛けて教室を去っていく。

僕はその二人を見送りながらも、二人の前を後にした。

「あの、高月先輩」

「何だ？」

そんな中、僕を呼び止める女子生徒がいたので、僕は振り返りながら用件を尋ねる。

「あ、あの。あそこにいる人も……一緒に連れて行ってください」

女子生徒に言われて、僕はようやく教室の端の方で伸びている慶介の存在に気が付いた。

「あ……すまない、忘れてた。ちゃんと連れて行く。ありがとう」

「い、いえっ」

とりあえずお礼を言うと、僕は慶介の下に歩み寄る。

「本当にのびてるなこりゃ」

いつもなら瞬時に回復する慶介が回復しないところを見ると、おそらく回復力を上回るダメージだったのだろう。

（まあ、そのうち復活するだろう）

軽く考えた僕は腕をつかむと、そのままずると引きずりながら慶介を連れて行くのであった。

ちなみに、これは余談だが、毎朝行われるSHRでの出席確認の時も、気を失っていた慶介は見事に欠席扱いになった。

「のおおお!! 俺の皆勤賞があっ!!」

それを知った慶介はそのことを嘆くのであった。

(自業自得だけど、なんだかかわいそうだな)

後で小松に慶介を出席扱いにするように、指示を出しておこうと決める僕なのであった。

第73話 偽物

翌日の放課後。

僕たちは部室で学園祭に向けて練習を続けていた。練習の内容は唯抜きで演奏をするというものだった。

その唯抜きの演奏の練習は、とても順調だった。

梓が唯のパートでもあるリードを演奏し、僕は梓が本来担当するリズムを弾いていく。

それが、僕たちが出した最悪の事態に対応した演奏形式であった。今日もまた唯は学校を休んでいる。

憂の話では少しずつ回復傾向にあるらしいが、気休めだろう。

学園祭まで残り3日。

このままでは本当に、最悪の事態での演奏形式になってしまう。

そして現在は、学園祭で実際に演奏する曲でもある『ふわふわ時間^{タイム}』の演奏を、通しでしているところだ。

曲の最後のところで、全員で音を鳴らすがそれほどズレることもなく曲を終わらせることができた。

「どう？ リードの方出来そう？」

「はい、何とか」

濡の問いかけに、梓は頷きながら答えるが、やはりどこか浮かない表情だった。

（唯が抜けただけだというのに、こうも印象は変わるのか）

いつも唯が立つポジションに梓が立っているというのは、どこか落ち着かなく感じてしまう。

「それなら、もう一度曲目を最初から演奏してみよう」

僕はみんなにそう提案した。

「よっしゃ。それじゃ、行く——」

僕の言葉を受けて、律がスティックを構えた時だった。

部室の出入り口でもあるドアが静かに開いた。

最初は山中先生だと思ったが、姿を現したのは風邪で欠席していた唯だった。

「やつほー」

「来た!？」

気の抜けるような挨拶と共に、部室に足を踏み入れた唯に、皆が唯の所に駆け寄る。

「風邪はもう大丈夫なのか？」

「あ、風邪か。ゲホツ……ゴホ！」

濡の問いかけに、唯はわざとらしくせき込みだした。

「わざとらしい」

「つていうか、治ってるんなら朝から来いよ。みんな心配してたんだぞ」

呆れたような声を上げる梓に律が小言を漏らす。

唯が来たことで、みんなの表情に活気が戻った。

またいつもの放課後ティータイムの空気が流れる。

だが、それには大きな問題があった。

「それより、早く練習しまし——」その必要はない——え？」

僕は梓の提案を却下した。

「どういうことだよ？ 必要がないって」

「唯は風邪で休んでたんだし、それにその分の練習をしないとまずいだろ」

律と濡が僕に疑問を投げかける。

「だって、必要がないし。今やっても無意味だ。それに今のままなら僕はこいつをステージにはあげさせない」

「え……」

僕のきつぱりとした宣言に、唯の表情が曇る。

「浩介先輩！ さすがに唯先輩に失礼ですよ！」

「そうだぞ！ せっかくな方向に行こうとしているのに、何水を差すようなことを言うんだよ」

さすがに今の言葉には、梓達が怒った表情で声を上げた。

「失礼なのはそっちだ。だって、お前……」

「な、何？」

僕はもう一度「唯」を集中して見る。

(やっぱり)

唯の姿にダブって“別の人物”の姿が浮かび上がった。

「唯じゃないだろ」

「「え？」」

僕その言葉に、滯たちが固まった。

僕の目はどのような魔法や変装でも、偽物だとすぐにわかるのだ。

集中してその人物を見て、何か別の人の顔が見えればそいつは偽物ということになる。

分かりやすく言うとAに変装したBがいたとすると、Aの姿にBの姿がダブって見えるのだ。

いつもは違和感を感じる程度だが、集中すればはつきりと見えるようになる。

「な、何を言ってるんだよ。どこからどう見ても唯だろ」

「そうですよ。別に変なところもないですし」

信じられないと言った様子で反論する律に梓。

確かに普通は信じられないだろう。

「そう思うんなら思えばいいし、練習をしたいのであればどうぞ。僕は無意味なこととはしない。ここで見させてもらうから」

僕はそう告げて長椅子に腰掛けると腕を組んで目を閉じた。

「浩介先輩……」

梓のどことなく悲しげな声が聞こえた。

僕はいったん考えを別の方向に向ける。

(でも、今回は不鮮明だったな)

それは、唯が偽物であることがわかった時のこと。

別の人物の姿が浮かび上がったが、それはなぜかはつきりとしなかった。

言葉にするのは難しいが、靄のような感じで同じ顔が二重に見えたのだ。

(あんな風になるのはより精巧な……例えば僕やあいつの完全変装パーフェクト・コピーをしない限り……)

そこで、ふといやな可能性が浮かんできた。

(まさか、本当にあいつなのか?)

それは今日の前にいる偽唯が、妹であるということだ。

(でも、それならおかしい)

僕は心の中で否定していく。

おかしすぎるのだ。

まず第一に、ここに魔法使いが来たという記録は残っていない。

だが、あいつならば記録を残さずに来ることは可能だろう。

……しかも僕を驚かすという馬鹿げた理由のためだけに。

(でも、だとしたらあいつらしくないことをしてるよな)

それは唯が履いている上履きだ。

服装は確かに違和感はない。

だが、唯が履いている上履きの色は下級生を示す“青”だった。

ちなみに、僕たち2年生は青、3年生は緑となっている。

つまり、同じ学年の唯が赤色の上履きを吐いているのは不自然なのだ。

あいつならば、そのような間抜けなミスは犯さないだろう。

(となると、残された可能性は)

もう一つだけ、二重に見える原因があった。

それは“双子”の場合だ。

髪形だけしか変わらない場合だと、姿が二重に見えてしまうことがある。

僕の目は所詮、真の人物の顔を見ることができるものなのだ

つまり、顔の形は同じで髪形をいじればその人物になれるという人の場合だと、見分けることが難しくなるのだ。

とはいえ、僕たちが使う魔法とは全く別物なので、生命パターンを調べればすぐに誰かがわかるわけだが。

それはともかく。

この条件に一致するのは一人しかいない。

それは、唯の妹“平沢 憂”だ。

(でも一体どうして……)

憂がこのような馬鹿げたことをしたのかと首をかしげたが、いたず

ら目的でないのだけはわかった。

「1, 2!」

そんな僕をよそに、律たちは唯……の姿をした憂と共に練習を始めた

(まあ、演奏すれば偽物だつてすぐにわかるだろ)

そうたかをくくっていた僕だが、その目論見はすぐに外れることになる。

それはリードである唯のパートを憂が演奏し始めた時だった。

(ん?)

曲名は先ほどと同じ『ふわふわ時間^{タイム}』だ。

演奏が進んでいく中、僕の疑問は驚きに変わった。

(す、すごい……)

僕の理想形である曲の感じになっていたのだ。

タイミングも、リズムキープも正確で聞いていて心地がいい。

ただ、少し色がなくなったような気もするがだがうまいことには変わりがなかった。

(ば、化物姉妹?!)

姉は絶対音感を持っているし、妹は妹でギターを非常にうまく弾いている。

もしギターをやっていないなかったとしたらものすごく失礼だが、天才とかを超えて完全に化物レベルだ。

そんなこんなで、すぐに曲が終わった。

これまでやってきた中で、非常に完成度の高い演奏が。

「じゃーん」

しかも、演奏している本人はものすごく余裕そうだし。

「……あれ?」

演奏が終わった瞬間、律に見にムギの三人が首をかしげた。

どうやら、いつもの唯の演奏と違うところに気付いたようだった。

「ど、どう思う?」

「ぐ、偶然だろ」

濡の問いかけに、信じられないと言わんばかりに声を引きつらせる

律はそう答えた。

「……………もう一度やってみよう」

「そうだな」

濤の提案で、もう一度同じ曲を演奏することになった。

だが、それもまた完全にピッタリな演奏だった。

しかも、どんどん正確度が増しているようにも思える。

「ふう……………」

そして本人はまだ余裕そうだし。

「……………唯」

「はい」

うつむいて肩を震わす濤の言葉に、憂が返事を返した。

どうでもいいが、口調は完全に憂そのものだった。

「こんなにピッタリ合うなんてっ!」

「唯のリズムキープが正確すぎるんだ、何があったっ!?!」

濤と律のが憂に駆け寄ると、うまい演奏の理由を聞いたでした。

「べ、別に何も」

そんな二人の雰囲気には天変地異の前触れにまでされている始末だし。

(しかし、タイミングが合わなければ注意され、合えば今度は皆に質問攻めにされる)

何だか無性に唯が不憫に思えてきた。

「月が赤いわ」

「ええ!?!」

しかも仕舞いには天変地異の前触れにまでされている始末だし。

「良いじゃないですか、演奏がうまいのならばそれで。私は演奏して
いてとつても気持ちよかったです!」

「そ、そうだよ。梓ちゃんの言うとおりだよ」

(あーあ、ぼろ出した)

もう彼女が憂だというのは確定だ。

妹は確実に、梓のことをあだ名で呼ぶだろう。

(でも、念のために)

僕は首掛けてある勾玉を手にする。

それに魔力を込めることで、勾玉の力を発動させる。一度目を閉じて再び開くと、世界から色がなくなる。

そしてみんなの動きがスローモーションになる。

それは極限の集中状態になった証だ。

この状態で見るのは偽唯の身体だ。

その体から発せられるエネルギーのパターンを見るのだ。

唯や律たちは、微弱ではあるが魔力に似たようなエネルギーを放出している。

それにはもちろん個人差があるので、識別が可能なのだ。

(やっぱり唯のでもあいつのでもない)

偽唯からは魔力反応はおろか、唯のエネルギー反応は感知できなかった。

代わりに憂の物と似たエネルギーパターンを感知していた。

「ふう……」

息を吐き出しながら、気を緩める。

すると、周りに色が戻った。

「そうだよ、律さんに紬さんも疑いすぎだよ」

それは、憂がさらに墓穴を掘るのと同様だった。

「律さん？」

「紬さん？」

「あつ……」

もう頃合いだろうと判断して、座っていた長椅子から立ち上がる。

「もういいよ。遊びは終わりだ、憂」

「そうよ。もういいんじゃないの？」

僕の言葉に同意するように、いつの間に来ていたのか山中先生が憂に告げた。

「いたのかよ!?! ……って」

『憂ちゃん!?!』

僕と山中先生の言葉で、ようやく気付いたのか驚きの声が上がった。

「皆の目はごまかせても、私と高月君の目は誤魔化せないわよ!」

先ほどまで座っていた椅子から立ち上がりながら告げると、憂に向かつて指を突き付け

「だって、唯ちゃんより胸が大きいじゃない！」

「って、そんな理由!？」

あまりにもあれな理由に、僕は思わずツツコンでしまった。

ちなみに、胸の大きさを僕は憂いと唯を判断してはいない。

「な、何のことやらさっぱりわかりません！」

「だったら梓のあだ名を言ってみろ！」

未だにしらをきり続ける憂に、僕はそう促した。

本物の唯ならば、すぐに言えることだ。

「あ、梓二号！」

「うわ、偽物だ！」

憂の口にした梓のあだ名で、偽物であることは確定した。

「ち、違うよ。あ、新しく考えたあだ名だよ！」

『……………』

憂の切り返しに、言葉を失う一同。

「往生際が悪いやつが一番嫌いなんだが……だったら、決定的な証拠でも突きつけましょうか」

ため息交じりに、僕は長椅子に置いてあった自分のカバンの中から携帯電話を取り出す。

「ど、どうするんですか？」

「電話をするに決まってるでしょ」

「あー、なるほどね」

梓の問いかけに答える僕の言葉に、山中先生は何を証明しようとしているのかを悟ったのか、感心したようすで頷いた。

僕はこの間掛けてきた憂の携帯電話の番号を呼び出すと、発信ボタンを押した。

しつかり者の彼女ならば、確実に自分の携帯電話は持ってきているはずだ。

そんな僕の推測通りに、憂の方から携帯の着信音が鳴り響く。

「今掛けている相手は憂の携帯電話。やっぱりちゃんと身に着けてた

ようだな。これで認める気になった?」

「そ、それは……」

追い詰められているのか先ほどから視線をあっちこっちに向けている。

「違うというのであれば、着信画面を見せてくれる?」

「どうして?」

僕の要求に、ムギが首を傾げながら理由を聞いてきた。

「唯と憂とで、電話帳に登録している名前が違うから。例えば滯の場合合は『滯ちゃん』だし、梓の場合は『あずにゃん』になってる。僕の場合は……」

「あー、〃浩君〃か」

僕の言葉を遮って律が口にしたので、僕は頷くことで答えた。

唯が滯の名前を何と登録しているかは知らない。

だが、僕のことを〃浩君〃で登録したり、梓のことを〃あずにゃん〃で登録しているあたり、おそらく滯もそれで正しいはずだ。

「もし、違うのであれば。着信画面、見せられるよね?」

「う……」

僕の言葉に、憂が固まった。

「こんな時にこういうことを言うのは非常に酷だけど、こういう状態をチエスで言う」と

僕はそんな憂にそれを告げる。

「チエックメイト」

「ごめんなさい」

もう言い逃れはできないと悟ったのか、項垂れながら謝罪の言葉を口にするのであった。

第74話 できること

「それにしても本当に似てたな。全く気付かなかった」

「浩介はすぐに気付いてたけどな」

あれから少しして、髪形を元に戻した憂を交えて、席について話をしていた。

「だって、上履きの色が違うし」

『……あ』

僕の挙げた理由に全員が声を上げた。

この部室に来た時、憂の履いていた上履きの先の色は、下級生を示す赤い色だった。

上履きもまた、制服のリボン同様に学年ごとに色分けがされている。

つまり、制服は同学年だが上履きは下級生の物というあべこべな服装をしていた。

「いくら唯でも、下駄箱の場所を間違えることはしない」

「なるほど」

僕の推測に感心したように頷く梓。

まあ、それだけではないがここには山中先生もいるので、言わないに越したことはないだろう。

「それにしても、一回家に戻ってから来たのか？」

「は、はい」

律の問いかけに、憂は頷いて答えた。

「梓ちゃんに浩介さん、ごめんなさい。ベッドで寝ているお姉ちゃんを見ていたらいてもたってもいられなくなって」

「う、ううん。気にしないで」

「まあ、理由が理由だし」

曲がり間違っても、“からかおう”や人をだまそうと言ったものではないのは分かっているの、それほど目くじらを立てる必要もないと僕は結論付けていた。

「それにしても、憂ちゃんギターもできたのね」

「いいえ。前にお姉ちゃんに少し触らせてもらっただけです」
ムギの言葉に、憂は首を横に振りながら答えた。

『……………』

その衝撃的な言葉に、時間が止まったような錯覚を覚えた。
ふと、想像してみた。

唯の部屋にて唯と憂の二人は向かい合っている。

床にはギター関連の本が置かれていた。

『ねえ、このコードってどういう風に抑えればいいのかな？』

『えつとね……………こんな風だよ』

本を見ながら憂は、そのコードを抑えていく。

『へえ、そうやって押さえればいいんだー』

『うん。書いてあるよ。ここに』

感心したようにつぶやく唯に、憂は一冊の本を指差しながら答えた。

(十分にあり得そう)

妄想ではあるが、確実にそんな光景が繰り広げられていてもおかしくはなかった。

「このまま唯には休んでもらったほうがいいのでは？」

「おーい」

ものすごく不謹慎なことを口にする律に、滯がツツコんだ。

そんな時、再び部室の出入り口のドアが開く音がした。

「やっほ〜」

「唯先輩！」

「うわ!? 激しくデジャブー！」

部室に入ってきた唯に、皆は立ち上がると唯の方に駆け寄る。
律の漏らした言葉には多いに賛同しなかった。

「お姉ちゃん、大丈夫？」

「うん大丈夫だよ、憂い〜。心配かけてごめんね〜」

心配そうに容体を聞く憂に、唯は笑顔で答えた。

(大丈夫じゃない)

いつもより鼻声で話している唯に、僕は心の中でつぶやいた。

「さつき起きたらね、とても楽になっていたから少しは練習を……はつくしよん！」

「うわ!？」

盛大なくしやみをする唯に、唯の横に移動していた僕は慌てて後ろに飛びのいた。

「だから、大丈夫だよ」

「全然大丈夫じゃない。私にもティッシュを」

唯のくしやみをもろに受けた律は唯の言葉にツッコむと、憂からティッシュを受け取って顔を拭いた。

「ああ！ ギー太！」

そんな時、唯は長椅子に立てかけられているギターを見つけた。

「こんなところにいたのか」

ふらふらとした足取りのまま、ギターの前に移動するとそれを持ち上げようと手をかけた。

「つて、重いい」

「お、お姉ちゃん!？」

ギターに押しつぶされるように倒れた唯の下に、憂やムギがあわてて駆け寄った。

唯の上に覆いかぶさるギターを適当な場所に立てかけ、長椅子の上に置かれた鞆を一個を残してすべて撤去した。

残った一個のカバン（僕のだけ）を、枕代わりにするのだ。

「とりあえず、この長椅子に寝かして……憂、体温計とかあるか？」

「あ、はい！ ここに」

僕の問いかけに、憂は体温計を取り出しながら答えた。

（本当にあっただ）

勘で憂が持っていると思っただけで聞いたけど、本当に持っているとは驚きだった。

「それじゃ、誰でも良いから体温を測らせて。僕は水とタオルを持ってくる」

「分かった」

矢継ぎ早に指示を出した僕は瀧の返事を聞いて、部室を飛び出すと

階段の踊り場まで下りて周囲を注意深く見渡す。

誰もいないのを確認した僕は、右手を広げる仕草でホロウインドウを展開させると、地面と水平に展開したコンソールに情報を打ち込んでいく。

そして、画面に表示されたのは僕の家のお風呂場にある洗面器だった。

僕は転送の項目に触れることで、手元に洗面器を転送させた。

そして、それを手に僕は部屋に戻るのであった。

「今度はお茶づけにさせてね」

「え？」

看病しているムギに手を伸ばした唯は、熱に浮かされているのか意味の分からない言葉を口にした。

たぶん色々なものがごっちゃになっているだけだろう。

「全然熱が下がってないじゃないか」

「全然どころか上がってる」

熱を測り終えた体温計が示している数字を見た滯が、驚いた口調で唯に告げた。

「この間風邪を引いたと憂から知らされた時の体温は」 38度9分

“ だったのに対し、今回は” 39度1分” だった。

（治りかけていたか、もしくは治ってもいない状態で無理してさらに悪化させたか）

そうなった原因を、僕はそう推測した。

「やっぱりだめだね、私」

そんな滯の言葉に、唯は力なく笑いながらつぶやいた。

「学園祭のライブ、私抜きでやった方がいいかもね」

「そんなんっ！」

唯が口にした言葉に、ムギが反応した。

だが、それを遮るように唯は僕たちの方を見る。

「あずにゃん、浩君。ギターは任せたよ」

「ッ！」

唯の託すような言葉。

その言葉に、僕は衝撃を隠せなかった。

「嫌です」

そんな時に、口を開いたのは梓だった。

「皆で揃って演奏できないんなら、棄権した方がましです！……ッ」

大きな声で叫んだ梓は、唯に背を向けるとうつむきながら逃げ出そうとする。

(間違えたのか？ 僕は選択を……)

このままでは確実に学園祭のライブは中止になる。

それだけではない。

それによつて空中分解が発生するかもしれない。

僕は間違えたのだろうか？

やはり、律たちの時に魔法を使うべきだったのだろうか？

「待って梓！」

絶望に染まりかけた僕の耳に、漣のはっきりとした声が聞こえた。

「唯、風邪が治るまで部室には来るな」

「ええ!? ついに出禁？」

少しの間考え込んだ様子 of 漣が出した結論は、出禁にも近いものだった。

「そうじゃない。一杯寝て風邪を治すことに専念するんだ私たちは信じているから、唯もあきらめるな」

漣の力強い言葉に、上半身を起き上がらせていた唯はそれを静かに訊いていた。

「梓も、リードの練習をちゃんとすること。これは唯がこれなかったらというわけではなく、今後の為に」

「漣先輩……はい、わかりました」

漣の言葉に、梓も涙をぬぐって答えた。

そして僕たちを見渡すと、漣は明るい表情を浮かべてこう告げた。

「今は私たちにできることをしよう！」
と。

今後の軽音部の方向性も決まり、一応何とかなった。

だが、まだ問題が残っていた。

それが唯をどうやって家まで送るかだった。

本人は大丈夫と言っていたが、ふらふらしていて危なっかしい。

憂がいるとはいえ、さすがに重いギターを背負わせて姉の面倒まで

……というのは憚られた。

そこで最初に白羽の矢が立ったのが車を持つ山中先生だった。

だが、山中先生は仕事があるとの理由で、送ることができず、それ以外の女性陣に送らせるというのも少々分が悪い。

ということ、最終的に決まったのは

「で、僕はまたお前をおんぶをして送るというわけか」

僕が唯を背負って送り届けることだった。

「えへへ」

僕のボヤキにも似た言葉に、唯は嬉しそうな声を上げた。

「何で嬉しそうなんだよ……」

背中で嬉しそうな声を上げる唯に、僕は思わず口をついで疑問の声を出した。

「だって、浩君の背中って気持ちいいんだもん♪」

「はいはい、それはとても光栄です」

ため息交じりに唯の言葉に相槌を打った僕は、そのまま足を進めていく。

憂は僕の横を歩いている。

心配なのか時より唯の方に視線を向けると安心したように視線を戻す。

「あ、そうだ。憂」

「何ですか？」

僕はふと思いついたことを告げるべく憂に声を掛けた。

「今回は仕方ないのかもしれないけれど、これからはあんなことはないでね」

「は、はい。本当にすみませんでした。」

僕の注意に、憂は本当に申し訳なきように謝ってきた。

「でも、浩介さんは本当に上履きだけで気づいたんですか？」

「……………鋭いな」

憂の問い問いかけに、僕は降参の意味を込めて答えた。

「僕ってそういう違いを見ることができるとだ。だから憂が入ってきたときに、すぐに気付いた。唯の姿が二重に見えたから。俺と上履きと携帯電話を除けばほぼ完ぺきだったと思うよ」

「そうだったんですか」

そう言う意味では、ほんの些細な間違いさえなければ、僕も最後まで判断することができなかったかもしれない。

「とはいえ、ああいうのは本当にやめてね。一歩間違うと、敵と判断されて怪我では済まなくなるから」

「敵……ですか？」

敵と判断する理由がわからなかったようで、目を瞬かせている憂に、僕はできる限り分かりやすく説明するようにした。

「変そうだと判断した時に、“それじゃ、どうして相手がそんなことをするのか”という部分が大きな問題になる。ただ、大半のやつがろくでもない理由のことが多いから、僕もそれに対応した行動を予測して取っていかねければならない」

「ちなみに、浩介さんならどうしますか？」

「抹殺する」

即答にも近い形で憂の疑問に答えた。

「え……………」

「相手は危害を加えるかもしれない。だとしたら四の五の言わずに潰しておいた方が安全でしょ？」

引き攣った表情を浮かべる憂に、僕はそう言っただけで視線を前方に戻す。

ああは言ったが、本当にそうするわけがない。

ここでそんなことをすると後々面倒なのだ。

行動を起こす前に、相手の心を読み悪意があるようであれば何がしらかの行動を起こすようにしている。

逆に心が読めなければよからぬことをたくらんでいる証でもあるので、素早く判断ができるというわけだ。

問答無用で抹殺するわけではないのだが、ああ言っておいた方が今後変なことはしないのであってそう言う表現をすることにした。

「だから、やめてね。間違えたら大変だから」

「は、はい」

とりあえず、憂にくぎを刺すことができただけでもよしとしよう。

……その代わりに何か大切なものを失ったような気がするけど。

平沢家に到着した僕は、玄関のドアを開けた憂に、案内されるままに玄関に入る

「それじゃ、浩介さん。ありがとうございました」

「いや、困ったときはお互い様だから。よろしくね」

「はい！ 絶対にお姉ちゃんが学園祭のライブに行けるようになります！」

憂の心強い言葉を聞きながら、僕は唯を家の玄関で下すと玄関から出た。

「浩君、学園祭で」

「ああ、待ってるからね」

そして僕は平沢家を後にするのであった。

「はあ……」

自宅に戻って一目散に自室に向かった僕は、深いため息をついた。
「自分にできること……か」

濡が口に使っていた言葉をもう一度口にしてみる。

(僕にできることはなんだろうか?)

答えはもうすでに目の前にある。

『MAGIC』のカード。

魔法という意味のカード。

だが、魔法と一言で言っても何ができるのだろうか？

魔法とは、奇跡を強制的に起こす力。

病気を治す魔法は確かに存在するが、僕はそれができない。

「治癒系の魔法は僕の管轄外。できたとしても成功するかどうかも怪しい」

そんな危険なギャンブルをする気はなかった。

「……………ん？ 通信だ」

考え込んでいるさなか、通信を告げるアラームが鳴り響いたため、僕は考えるのを一旦やめると右手を開く仕草で通信に応じた。

『やつほー、兄さん元気ー？』

「……………」

画面に、やけにハイテンションな妹の姿が映し出された。

『あれ？ ボーとしてるけど大丈夫？』

「大丈夫だ。あんたのバカテンションに呆れただけだ」

ため息交じりに妹の問いかけに、答えた。

『せっかく危機に直面している兄さんを励まそうと思ってハイテンションで話したのは、バカって何？』

「やっぱり把握してたか」

頬を膨らませながら不満そうに言ってくる妹の言葉をすべて無視した僕は、そう返した。

『まあね。兄さんに関するところで、私の知らないことはそれほどないよ。今兄さんの状況はなんとなくではあるけど把握している』

「把握してるだけで、助ける気はない」だろ？」

『だって、兄さんにそんなものは必要ないし』

妹の言うとおりであった。

今回の一件に人の手助けはいらない。

仮に、手助けを借りられたとしても、連盟長命令で却下されるはずだ。

なぜなら、それは職権乱用だからだ。

魔界には、治癒魔法のエキスパートがいる。

そいつの力を借りれば、唯の風邪はすぐに根治できるだろう。

『でも、風邪と聞くと昔を思い出すよね』

「昔？ お前は馬鹿だから風邪なんて引いたことはないだろ？」

覚えている限り、妹が風邪を引いたことは一度もなかった。

よく「バカは風邪をひかない」というが、非常に的を得ていた。

『失礼なっ！ これでも副大臣だよ!』

「しよっちゆうミスとかをやつては連盟長に叱られているけど」

妹は計算系が非常に苦手だ。

そのため、妹の担当した決裁書類は7割間違えている。

そして、連盟長に大目玉をくらうというのが、魔法連盟の恒例行事になっていた。

「まあ、戦闘では非常に頼もしいパートナーなんだけど。で、何を思い出したんだ？」

『思い出さない？ 昔、私が初めての単独任務に行く時のこと』

「……………」

妹に言われて、僕は記憶を呼び起こした。

「あー、あれか」

そして、僕は該当する出来事を思い起こすことができた。

それは、妹の初めての単独任務の二日前のこと。

緊張のあまりに、妹は風邪のような病気にかかってしまったのだ。

当然任務は中止になるわけだが、妹はどうしても行きたいと言つて譲らなかつた。

しまいには、治らなくても行くと言いつつ出さずほだまでに。

ちなみに、単独任務というのは優秀な魔法使いにのみ許されるものだ。

当然難易度も大幅に高くなるが、見返りも大きい。

それが単独任務を無事にこなした者に、エリートという名誉ある称号を与えられるということだ。

当然だが、大出世も確約されるため、職員にとってはまさに千載一遇のチャンスなのだ。

だからこそ、妹は無理をしてもそれをやろうとしていたのだ。

一度こうと決めると、なかなか意思を曲げようとしないう頑固なところは誰かに似ているような気がする。

『あの時、風邪をひいた私に魔法を使ってくれたじゃない』

『どんな魔法だったっけ？』

その時のことは覚えていたが、どの魔法なのかが思い浮かんでこなかった。

『ほら、交換魔法をアレンジしたやつだよ』

『あー、あれね。確かに使ったな』

“交換魔法”

それは、文字通り交換するための魔法だ。

例えば、熱い液体が入っているAのコップと冷たい水が入っているBのコップ。

この二つを同時に交換するのだ。

つまり、熱い液体がBのコップに冷たい水がAのコップになると言った具合に。

それを応用すれば、病気の人とそうでない人とを交換することもできるのだ。

その魔法を使って、妹は元気になり単独任務に向かい、見事ミッションコンプリートを収めたのだ。

そして、今の魔法連盟法務課副大臣の職に就いたのだ。

『兄さんって、体の回復力がすごいから、あつという間に根治させちゃってたけれど』

『バカ言え。あの魔法はもう使いたくないからな』

『あはは……そうだよ。恥ずかしいもんね』

僕の言葉に、妹もそれを思い出したのか、顔を赤くして苦笑しながら

ら頷いた。

交換魔法にはある問題点があり、僕はそれを使うことを避けるようにしたのだ。

『あ、そうそう。特務こっちは無事に終わったよ』

「そんなの知ってる。背景を見れば」

妹の背景には、高月家に置かれている家具が見えていた。

『む、ちよつと順番を間違えた』

「それじゃ、切るぞ」

ため息をついた僕は、妹にそう告げると通信を切ろうとする。

『うん〴〵またね〴〵兄さん』

「は？ それってどういう……って、切りやがった！」

意味深な言葉を残して一方的に通信を切った妹に、僕はどつと疲れが出てしまった。

「寝よう」

まだ夕食を食べていないが、準備をするのも面倒だったので、早めに寝ることにした。

ちなみに、お腹がすいて目が覚めてしまったのは余談だ。

「明日か……」

学園祭を翌日に控えたこの日。

僕は不安にとらわれていた。

それは、当然唯のことだ。

この日も、唯は休んでいるらしい。

『もしもしっ？』

「あ、高月だけど。ちよつといいかな？」

僕は携帯で憂の携帯に電話を掛けた。

『はい、なんですか？』

「唯の体温を教えてくださいませんか？」

僕が電話をしたのは、唯の体温を知るためだった。

『38度1分です』

「そうか」

非常に最悪な結果に、僕は頭を抱えてしまった。

『あの、お姉ちゃん。間に合うと思いますか？』

「……………家族であるお前が、信じなくてどうするんだ？」

どこか悲観したような声色で聞いてくる憂に、僕は手を頭から離すと答えた。

『……………そうですね。お姉ちゃんは間に合いますよね』

「ああ。絶対に間に合う」

どこか希望を取り戻した様子で言う憂に、僕も賛同した。

『それじゃ、明日のライブ楽しみにしてますね』

「はは、これは成功させる必要があるな」

憂からのさりげないプレッシャーに、僕は軽く笑いながら答えると電話を切った。

「……………」

『行かれるのですね？』

無言で窓のそばに立つ僕に、ネックレスの形状のクリエイトが確認の意味を込めて聞いてきた。

「ああ。僕が……………いや、僕にしかできないことだ」

『そうですね。……………我が御心はあなたと共に。私はどこへでもついて行きます』

「ありがとう」

クリエイトの優しい言葉に、僕はお礼を言うと右手を開く仕草でホロウインドウを展開させる。

既に必要な情報は入力済みで、あとは転送の項目に触れるだけだ。

僕は、黒いマントを着ると、項目に触れた。

その瞬間、僕は浮遊感を感じるがそれも一瞬で、気が付けばそこは自分の部屋ではなく唯の部屋だった。

「……………」

僕はベッドの方を見る。

真つ暗だが、しつかりと僕には周囲にある物が見えていた。

それは、魔力で視力が強化されているためでもあった。

唯はベッドで横になってぐっすり眠っていた。

僕はそんな彼女の傍らに近づく。

「……………んう」

そんな時、歩く音で気付いたのか目が開いた。

「浩……………君？」

寝ぼけた目で僕を見つめる唯。

「これは、夢？」

「ああ。そうだ。泡沫の夢だ」

本当は違うが、夢と思い込ませた方が後々都合がいいので、そうさせておくことにした。

「夢でも、浩君とお話ができ……………るんだ」

「僕は、これまでこの力を人を傷つけるためだけに使ってきた」

僕は唯の言葉を無視して、独白する。

「ある時は数百万人の相手を亡き者にしたこともある」

それは、僕が成し遂げた伝説でもあり、罪でもあった。

「でも、そんな僕にだって、人を助けることはできる」

僕はそこまで言うと、唯の方を見た。

未だに寝ぼけ眼で僕を見ている唯。

そんな彼女の前に左手をかざした。

「……………あ」

それだけで、唯は再び目を閉じて眠りにつく。

「恥ずかしいから眠って」

それは恥ずかしいからというのもある。

交換魔法の欠点。

それは……………対象との接触だ。

コップの例だと、コップ同士を。

人の場合は肉体的な接触が必要になる。

妹に交換魔法を使った際、手をつないでやったが非常に時間がか

かったのだ。

なので、試しにおでことおでこを合わせるとものの数分で終わったのだ。

つまり、額通しを合わせなければいけないのだ。

だからこそ、妹も恥ずかしがっていたのだ。

(大丈夫。僕にはできる)

僕は、事故が起こらないように唯の額と自分の額を平行ではなく交差する形でくつつけた。

「チェンジ」

それが合図だった。

僕の足元に魔法陣が展開する。

そして、風のようなものが僕たちを包み込む。

続いて、温かい物が僕の中に流れ込んでくる。

それこそが、唯の風邪だ。

言うなれば、病原ウイルス。

代わりに唯の体内からは原因となるウイルスが消えているはずだ。

交換魔法は、従来からある魔法ではなく、AをBに取り込むという

吸収魔法をアレンジしただけの魔法だ。

なので、術者が望めば自分の状態を相手に移動させるという“交換”をしないでもよくなるのだ。

僕自身、完全に健康という保証はない。

そのため、自分の状態は相手に移動させない吸収という形式にしたのだ。

こうして、交換魔法は数分で終了した。

「これで、唯は明日には元気になってライブに出られる」

試しに、額に手を当てる。

だが、先ほど交換魔法で額どうしを触れさせた際に感じたような熱は感じなかった。

つまり、成功ということだ。

「よし、早く帰ろう」

そして、僕は唯の部屋を後にした。

明日のライブの成功を確信して。
だが、この時僕はまだ気づいていなかった。
僕の取った行動がのちに最悪の事態を巻き起こすことになるとは。

第75話 学園祭

「う……………」

学園祭当日をいよいよ迎えた。

だが、起きた時から体調が優れない。

最初に感じたのは、視界がゆがむような症状だ。

まるで荒れた海の中進む船に、乗っているような感じだ。

「とにかく、起きよう」

さらに次に感じたのは体の異様な気怠さ。

それは、風邪をひいたものとは比べ物にならないほどに強かった。

(何、これ)

このような症状はこれまで感じたことはなかった。

(風邪じゃないのは確か)

風邪ぐらいであれば、このような気怠さや視界の異常は起こらないはず。

だとすると、考えられるのは一つしかなかった。

(合併症状か)

元々僕が何らかの病気を患っており、それに風邪のウイルスが相乗効果で悪さをしてしまう。

(一体どんな病気なんだろう?)

自分の症状をもう一度見つめ直してみる。

非常に強い倦怠感。

視界がゆがむ症状。

これらの症状から想像できる病気の正体は……

「無力……症候群」

ようやくその答えにたどり着いた。

無力症候群。

風邪などと同じ規模の病気だ。

つまり、誰でもなる風邪の魔法使い版だ。

症状は倦怠感と発熱と、これまた風邪の症状だ。

だが、ここから先がこの病気の違いでもあり恐ろしいところだ。

まず視界がおかしくなる。

どのようなになるのかは千差万別なので、一概には言えない。

これが進むとさらに筋力の低下が発生する。

それが強い倦怠感にも感じたりする人がいるらしい。

これをさらに放置すると、今度は意識レベルが低下を始める。

意識が朦朧となり、記憶が飛んだり忘れっぽくなったりする。

やがては意識を失い、適切な処置を施さなければ多臓器不全で死に

至る恐ろしい病だ。

この病気は発症までに潜伏期間を有する。

その期間は半年から1年ほどと言われている。

発症後、死に至るまでの時間は大体が2日。

長くても2・5日という進行の早さもまた恐ろしい病気なのだ。

ただし、この病気は他人には感染しない。

また、かかるのは魔法使いのみで、唯たちがこの病気に陥ることは

ない。

その理由はまだ判明していない。

もちろん、この病気の治療法はちゃんとある。

それが、ある薬草を口にするのだ。

そうすればたちどころに回復するのだ。

ただし、そのタイムリミットは意識を失ってから15時間以内

それを超えると、もはや手が付けられない状態になる。

「とりあえず、魔力で筋力をかさ上げするか」

僕は応急処置ということで、魔力を体に纏わせて筋力を増強させる

ことにした。

「後は、月見草を飲めばいい」

——月見草

それが、この病気への特効薬だった。

それは高月家で取れる薬草で、無償で各病院などに供給している。

この薬草を接種すればほとんどの病気を根治することができるま

さに万能薬だ。

ただし、魔族のみにしか効力を発揮せず、非常に強い苦みがあった

りとするが、それでも需要は大きい。

僕はその薬草を一定の数だけここに備蓄しておいたのだ。

万が一の際に備えて自分で根治ができるようにするためだ。

ふらつく足で、僕はキッチンに向かうと薬草を入れておいた引き出しを開ける。

「おいおい……嘘だろ？」

空っぽの引き出しの中に、僕は思わず呆然としてしまった。

（ついてないな。まさか薬草が切れていただなんて）

ついていないでは済まないが、そう思わざるを得なかった。

「とりあえず、月見草の手配をしておこう」

僕にできたのは月見草の手配をすることだけだった。

高月家に対しては、最短で12時間程度で届けられるようになって
いる。

ちなみに、それ以外の場合は最短で20時間程度だ。

「あとは、身体強化魔法でごまかすか」

『いけません！ マスター！』

自分に身体強化魔法をかけようとしたところで、クリエイトが突然
声を上げた。

『今日は学校の方を休んでください！ そんな状態で学校に行ったら
余計に悪化します！』

「できるかそんなこと。学園祭で一人でも欠ければそれは空中分解
だ。せつかくここまですまく行ったんだ。こんなところで休んでた
まるか！」

クリエイトの提言を僕は切り捨てた。

唯ひとりであそこまでの反動だ。

僕自身、唯ほど必要とされていないのではないかと思うこともある
が、それでも行かなければ不安だ。

『……全く、マスターは強情なんですから』

「はは、お前に言われると中々に来るものがあるな」

ため息交じりにつぶやくクリエイトに、僕は思わず苦笑を浮かべ
た。

『私の方でマスターの手助けをします。重力軽減魔法を使えば身体強化魔法を使わなくても平気になるでしょうから』

「助かる」

僕がお礼を言うのと同時に、体が軽くなったような気がした。

それが重力軽減魔法だ。

要は、体のみ重力を低下させたのだ。

それによって、体への負担を軽減することができる。

『筋力などは弱いままなので、ご注意を』

「ああ……行くか」

朝食を食べる時間もなかったため、僕は学校へと向かうことになった。

「——け、浩介！」

「な、何?」

慶介から声を掛けられた僕は、用件を尋ねる。

場所は2年1組の教室。

今回は縁日ということで、様々なアトラクションで来場者に楽しんでもらうという企画だった。

僕はそこで何かをしていたが、何をしてたのかがわからない。すつかり、記憶が飛んでいる。

「何じゃないだろ。そろそろ部室に行かないとまずいんじゃないの?」

「え? あ?!」

時刻は11時30分。

昨日律から言われた集合時間をとくにオーバーしていた。

「ご、ごめん」

「どうしたんだよ? なんだかいつもと様子が変だぞ?」

さすがは親友を自称するだけはある。

僕の様子の変に、慶介は敏感に感じ取っていた。

「あいつが来れるかどうか気が気じゃないだけだ」

「あー、平沢さんか」

「あいつ」だけで通じる慶介も十分すごい。

とはいえ、何とかごまかすことができた。

「行つてきなよ。ここは俺に任せろ」

「すまない」

お礼を言いつつ、僕は教室を後にしようとして

「よし、今度こそ佐伯さんに夜のドライブでも——いてっ」

馬鹿げたことをしようとする慶介の頭にめがけて、手にしていたあの物を投げつけるのも忘れずに。

「ごめん、遅れたー！」

「遅いぞー」

部室に到着した僕に、律が頬を膨らませながら声を上げた。

「ごめん、肝心のライブの日に」

「本当に、浩介らしいよな。そういうところ」

しまいには濡にまで言われてしまった。

「唯は？」

「……………」

僕の問いかけに、みんなは首を横に振る。

見れば梓は先ほどから窓から外の方をずっと見ている。

待っているのだろう。

唯がやってくるのを。

それからどれほど経つただろうか？

未だに唯が現れる兆しはない。

「唯ちゃん、来ないね」

「……………12時30分か」

時間を確認した濡が静かにつぶやく。

「練習でもするか？ 唯抜き演奏」

「……………仕方ない——「嫌です！」——梓」

律の提案に頷きかけた濡の言葉を遮るようにして、梓が叫んだ。

「やっぱり、唯先輩抜きで演奏しても意味がないです！」

「確かにね……………これだけ用意したんだから」

そう言つて、僕は机の上に置かれた飴やティッシュなどを見る。

それらはすべて喉にいいとされている物ばかりだった。

唯が来て演奏できるようにする準備は整っていた。

そんな中、部室のドアが開いた。

唯かと思つてドアの方に視線を向ける。

「どうかしたの？」

やつてきたのは真鍋さんだった。

「舞台は少し時間が押しているけれど、予定通りの時間になったら移動してね」

「……………分かった」

ついに、時間が来てしまったようだ。

「軽音部、出演者は……………全員揃つていて準備完了」

「え？」

僕たちを見渡した真鍋さんは、手にしていた書類に何かを書き込んでいく。

だが、出演者の一人の唯の姿がないのにもかかわらず、準備完了を告げる真鍋さんに、僕は首をかしげずにはいらなかった。

それはみんなも同じだったようで、そんな僕たちを見た真鍋さんは静かに笑うと、口を開いた

「……………昔ねこんなことがあったの」

そして真鍋さんの口から語られたのは、幼少期の話。

一緒に遊んでいた二人だったが、唯は何かに夢中になっているようで、それは夕方まで続いた。

夕方になったので、先に家に戻った真鍋さんは自宅にやってきた唯を不思議に思い唯が往復していた場所と思われる浴室の戸を開けたらしい。

すると、浴槽の中が赤一色で埋め尽くされていた。

それは、ザリガニによるものだったとか。

「ひいひい!!?!」

その光景を想像したのか、滯は耳をふさいでうずくまってしまった。

「む、昔から変な人だったんですね」

そんな衝撃的な話に、梓がそう言うのも無理はなかった。

「でも、どうしてそんな話を？」

「唯つて一度夢中になったら、他のことをすべて忘れるの。だから、きつと風邪のことも忘れるわ」

それは、真鍋さんなりの励ましの言葉だった。

そんな時、再びドアが開かれた。

「ちよりーす」

「少しは空気読めー!」

大きな顔をして入ってきた山中先生に、律がツツコみを入れた。

「一体今まで何をしていたんですか？」

「そうだよ。大変だったのに」

僕の疑問に、律も乗じて問いかけた。

「あら、何もしていなかったわけじゃないのよ? 今回のことを反省してこの通り、防寒対策を施し対象を作りましたっ!!」

自信満々に言い張る顧問の山中先生の姿に、僕たちは返す言葉がなかった。

ただ言えたのは、

(そのやる気をもつと別のところに回してほしい)

「そして、これがその衣装よ!」

「ん?」

山中先生が掌を向けた方向……ドアから防寒対策を施した衣装を身に纏った唯が姿を現した。

「唯ー!」

「来てたんなら真っ先にここに来なよ!」

唯の到着に、驚く僕たちをしり目に滯が注意した。

(遅れたのは、着替えていたためだったか)

「あれ、あずにゃん？」

「最低です。こんな心配させるなんて」

非難と良かったと思う気持ちが入り混じった梓の言葉が唯に掛けられた。

「ちゃんと埋め合わせをしなよ？ 一番心配してたのは梓なんだから」

(僕も心配してたんだけどね)

濡の言葉に、僕は心の中でツツコんだ。

「え？ そ、そうだったの!？」

「全くダメすぎです！ 大体、風邪をひいたときだって——」

梓の言葉を遮るように、唯は後ろから抱きついた。

なんて言っているかはよくわからないけれど、見ていて心が温かくなるような雰囲気なのはわかった。

「仲直りの、キ——」

これで一件落着かと思つたら、悪乗りした唯が梓から痛烈な一撃を受けた。

「ほ、本当に私のこと心配してたのかな？」

「さ、さあ？」

「悪ノリするのが悪い」

頬に見事なもみじ模様が入った唯の言葉に、僕はそっけなく答えた。

「さあ、そろそろ時間よ」

「がんばるぞー!」

『おー!』

こうして、学園祭のライブは何とか無事に開かれることに……

「つて、唯、ギターはどうしたんだ!？」

「あれ？ ここに置いていなかったっけ？」

ギターを持ってきている様子の無い唯に、僕は慌てて問いかけた。

「ギターだったら憂ちゃんが持って帰ったぞ!？」

「……………そ、そうだったく!？」

「唯ちゃん」

思い出したのか、頭を抱えて悩みだした唯に山中先生が声を掛けた。

その手にある白色のギターを前に差し出ししながら

「これを使いなさい」

「……………」

山中先生に手渡された白色に三角形のような特徴のあるボディのギターを、受け取る唯は呆然としていた。

「ギー太じゃなくてもいいのか？」

「というより、ギー太以外のギターが弾けない」

『だろ？』

唯の言葉も何となく予想できていた。

つまり、どうなるのかというと

「よっしゃあ!!」

唯が走って家まで取りに行くことを示していた。

「あれ、でもライブは……」

「……山中先生、一つ頼まれてくれませんか？」

「へ?」

僕は山中先生に、頼みごとをすることにした。

「学園祭のライブでリードを弾いてほしいんです」

「い、いやよー!」

「お願いします! さわちゃんだけが頼りなんです!」

やはりというべきか力強く拒否する先生に、律が手を合わせて頼み込んだ。

「それなら、高月君が代わりにやればいいじゃない」

「ええ。ですけど、せっかくやるのならインパクトを与えたほうがいいですから。山中先生が演奏してくれればそれだけで強いインパクトを相手に与えることができます」

山中先生の反論に、僕は頷きながらも断った。

「でも……」

「だったら、こういうのはどうですか?」

なおも躊躇う山中先生に、僕は妥協案を示すことにした。
僕は曲目リストの裏面に新たな曲目を書いていく。

1：Don't say lazy

2：ふでペン（ボールペン）

3：ふわふわ時間タイム

「浩介先輩、この最初の曲は練習してないですよね？」

「大丈夫なのか？」

梓の言うとおり、最初の曲“Don't say lazy”は、
それほど練習をしていない。

というのも当初は“Happy!? Sorry!!”の練習を重点
的にしていたためだ。

変更した曲は合宿の時以来練習をしていないため、成功率は大幅に
低下する。

「正直不安だけど、でも何度も練習しているし、最初の曲に関してはリ
ズムの方は僕ができる限りフオローをする。だから、先生」

「……………分かったわ。やるわ」

根負けしたのか、ため息交じりに山中先生は首を縦に振った。

『ありがとうございます』

僕たちは、山中先生にお礼を言うと言つて講堂の方へ向かうのであつた。
ついに、2度目の学園祭ライブが幕を開けようとしていた。

第76話 ライブと……

唯抜きで始まった学園祭ライブ。

最初の曲である“Don't say lazy”は無事に演奏を終えることができた。

体調が悪い僕だったが、ステージの上にいるときはそんな感じはしなかった。

もしかしたら、ランナーズハイのようなものなのかもしれない。

だが、それは僕にとっては非常にありがたかった。

(計算が正しければ、唯が来るまであと4分弱)

次の曲の長さは約4分。

ぎりぎりだった。

「続いての曲は、『ふでペンくボールペンく』です！」

何とか簡単なMCで時間を稼ぐ。

それしかなかった。

本格的なMCは唯に任せている。

現に、唯のMCは比較的受けがいい。

「1, 2, 3, 4！」

律のリズムコールとともに、演奏が始まった。

梓と僕の担当するリフが終わりパートが分かれる。

僕はバッキングコードを、梓はリズムパートを演奏していく。

ボーカルは滯で、僕は歌声に合わせて弦を弾いていく。

クールでなおかつ軽快な曲風に滯の歌声はあっていた。

ドラムのリズミカルで力強い音に、ベースが刻むビートはギターや

ドラムに埋もれるどころか絡み付いていく。

山中先生の演奏は、ブランクがあるとはいえ非常にうまかった。

リズムキープも正確で、音程のズレすらもない。

そしていよいよ間奏……ギターのソロへと入っていく。

僕と梓はタイミングを合わせるようにソロパートを弾いていく。

そして、サビへと入っていった。

(もうすぐに曲が終わる。急いでっ)

ついに最後のサビが終わり、曲の初めのリフへと入った。
あと少して曲が終わる。

そんな時、講堂の出入り口のドアが開いた。
そこから姿を現したのは、ギターを取りに戻っていた唯だった。

曲が終わり、歓声に包まれる中、ステージの前で息を切らせながらも唯は立っていた。

「ほら、捕まって」

「うん」

ステージ前にいる唯に、少しかがみながら手を差し伸べると、唯は手を取った。

「よつと」

僕は唯を片腕でステージまで引き上げた。

「さわちゃん先生、ありがとう」

「……それじゃ、後は頑張りなさいよ」

唯のお礼の言葉に、山中先生はやわらかい笑みを浮かべながらそう言い残すと、ステージ袖の方に向かっていった。

会場から先生に向けた歓声が上がった。

その時の山中先生の背中は、とても威厳に満ちていたような気がした。

それは、教師としてよりは、この学校のOGとしてなのかもしれない。

「皆、本当にごめん」

そんな歓声の中、唯がポツリポツリと言葉を漏らす。

「こんな大事な時に迷惑をかけて……ヒック、考えてみれば、最初から、ヒック……ずっと迷惑を」

「唯、タイが結べてないぞ」

涙を流し嗚咽交じりに、謝る唯に濡はタイを結んだ。

「浩君も、ゴメンね。いつもいつも嫌な思いをさせて」

「はは、僕は隠し事は苦手だ。嫌だと思ったらさすがにそう言ってるよ」
微笑を浮かべながら、僕は唯にそう返した。

「全く、浩介はツンデレなんだから。私たちはみんな唯のことが好き

だよ。もちろん、浩介もな」

そんな僕に、律は苦笑しながらツツコむと唯に告げた。

そして会場からも唯へのコールの声が上がった。

(ツンデレは余計だ)

「これ使って、顔を整えな。まだ泣くときでもないし、やるべきことは残ってるんだから」

「そうだぜ、まだMCもやってないんだから」

「皆……ありがとうっ」

僕からタオルを受け取った、唯はそれを使って涙をぬぐう。

それから間もなくして、唯は演奏の準備を整えた。

「えっと、改めまして、放課後ティータイムです。今回は私がギターを忘れて遅れてしまつて、本当にごめんなさい。ギー太もごめんね」

MCの最初は謝罪からだった。

「最初は『目標は武道館』で始めました。最初のころはギターを買うために皆でアルバイトをしたり、皆でお茶を飲んだり、合宿をしたり、新入部員を得るために頑張ったり、一生懸命がむしやらに練習したわけじゃないけど、でもここが……このステージが私たちにとっての武道館ですっ!!」

唯のMCに会場は拍手で包まれた。

(やっぱり、唯は……皆はすごい)

この会場のほとんどの人の心をつかんでいると言つても過言ではない。

もし、プロデビューをする機会があれば放課後ティータイムはH&Pと同じか、それ以上まで上り詰めるかもしれない。

(でも、そこには……)

「最後の曲だけど、力の限り演奏します。聞いてください! 『ふわふわ時間』!」

僕の考えは曲名を告げる唯の声で遮られた。

そして、すぐに最後の曲『ふわふわ時間』の演奏が始まった。

唯のギターから始まつて僕たちも演奏を始める。

この時、僕はこれまでで一番すごくいい演奏をしたような実感を持

てた。

まるで一つにつながっているかのようには、タイミングが合っていた。

だからだろうか？

気づけば、演奏が終わっていた。

会場は拍手と歓声に包まれている。

「……」

そして、唯は一人ずつ顔を見合わせては頷きあう。

それがライブの終わりを現しているような気がした。

「えっ？」

そんな時、予想外の出来事が起こった。

突然キーボードから音色が聞こえてきたのだ。

それは先ほど演奏した『ふわふわ時間^{タイム}』のワンフレーズだった。

それ行っているムギに続いて、今度は律がドラムの音色を奏で出した。

さらにそれに漑も続く。

ここまで行けば、さすがに何をしようとしているかはわかった。

それはまるで、合宿の時にH&Pの皆で演奏した時のようだった。

僕と梓もそれに続いた。

そして、最後に唯が加わる。

「もう一回っ！」

その唯の言葉で、サビのアンコール演奏が始まった。

サビが終わり、全員が音を伸ばしていく。

そしてドラムのフィルで今度こそ局は終わりを告げた。

「けいおん大好きっ！」

こうして、二度目の学園祭ライブは様々なアクセシブメントがあったものの、成功を収めるのであった。

「律ちゃん、もう一曲やろう！」

「唯！」

律にもう一曲やろうと提案する唯に真鍋さんが飛び出てきた。

「もう時間切れよ！」

「ええ〜!?」

時間切れで後一曲が演奏できないという、オチをつけて。

「これで一通り最後だぞ」

「あずにゃん大丈夫?」

「はい!」

ライブも終わり、待つのは後片づけ。

という名の楽器の運搬だった。

アンプやらドラムやらを、部室に運ばなければいけないのだ。

そう言うことで、数往復していた僕たちだったが、ようやく楽器などの運搬する物が無くなった。

僕が持っているベース用のアンプと、律たちが持つ楽器を支える道具だったりで最後だ。

僕が持っているのが一番重く、それ以外はそれほど大した重さではない。

「先に行ってるよ」

「ほーい」

僕は唯たちに声を掛けると、アンプを手に部室へと向かう。

(つく、目の前がくらくらしやがる)

ライブが終わった直後に、視界が急にゆがみだし始めたことに、最初は驚きを隠せなかった。

ランナーズハイ状態はすでに終わっているようで、今度はその代償が一気に自分に返ってきているようにも思えた。

正直よく歩けると思う。

それほどまでに方向感覚はおろか平衡感覚すらも失っていた。

(これが最後だ。終わったら少し休もう)

休めば少しは具合も良くなるかもしれない。

この後にはH&Pのライブも控えているのだ。
こんなところで倒れるわけにはいかない。

「ふう……やつと運び終えた」

ふらふらしながらも、アンプを部室まで運ぶことはできた。

いくら視界が変だとは言え、場所がわからなくなるほどではない。

「それじゃ、次は……」

いったんしゃがんでアンプを置いた僕は、立ち上がろうとすると体から力が抜けた。

そして、そのまま意識を手放すのであった。

★★★★★

「あれ、ドア開けっ放しですよ」

「本当だ。浩君も珍しいね」

軽音部の部室がある会に続く階段の踊り場で梓が開けっ放しのドアに気付くと唯が珍しげにつぶやいた。

「あれだけ人には」開けたら閉めろ」って、言うくせにね」

「唯たちの悪い癖が移ったのかな」

「澪ちゃん、しどい」

さりげなく唯を例に挙げる澪に、唯は頷きながらつぶやいた。

「それなら、ドアを閉めるようにすればいいのでは？」

「どうでもいいから、早く部室に行こうぜ」

「そうだね、ムギちゃんのお茶も飲みたいし」

梓の注意から話題をそらすように提案した律に、唯は賛同すると階段を上っていく。

「やっほー、浩く——」

部室の中をのぞいた唯は、声を詰まらせ固まった。

「どうしたんだよ、唯」

「部屋の中に何が……え？」

唯の見える方へと視線を向けた律たちは唯と同じように固まった。

そこにいたのは、

「浩君!？」

「浩介先輩!」

床にうつぶせに倒れている浩介の姿だった。

「浩介君! 目を覚まして!」

「浩君! しっかりして! 浩君!!」

体を揺らしながら声を掛ける唯にムギ。

「……………」

「浩君!？」

小さくではあるが反応を示した浩介に、唯が浩介の名前を呼ぶ。

「二人とも、とにかく浩介をここに寝かせよう!」

「あ、ああ!」

「私も手伝います!」

濡の指示に、律に続き梓も頷くと、全員で浩介の身体を長椅子まで運ぶ。

「ちよつと、一体何事? って、高月君はいったいどうしたの?」

「そ、それが来たら倒れていて。今長椅子に横にさせたところなんです」

運び終えたところで顔をのぞかせた顧問のさわ子に、梓が事情を説明した。

「どれどれ……………って、熱!？」

「うわ、本当だ!」

浩介の額に手を当てたさわ子は驚きながら後ずさった。

さらに律もそれに続くが、その熱さに驚きを隠せなかった。

「これは、間違いなく風邪ね」

「え? もしかして私のが?」

「ち、違うわよ。唯ちゃん」

さわ子の見立てに、表情を曇らせる唯に慌てた様子で袖がフオロ―する。

「そうね。とりあえず、病院に連れて行った方が——」
「それには及ばない——」

「浩君!？」

さわ子の言葉を遮るように告げられた浩介の声に、唯が慌てて浩介に呼びかけた。

★ ★ ★ ★ ★

「も——て私の——」

誰かの声が聞こえた。

(いったい僕はどうなったんだ?)

自分の状況がよく理解できない。

ライブが終わったところまでは覚えている。

確か、そのあと後片付けをしていたような気がする。

(そうか、その時に倒れたんだ)

「そうね。とりあえず、病院に連れて行った方が——」それには及ばない——」

結論にたどり着いたところで、山中先生の言葉が聞こえたので、僕はそれを遮るように口を開いた。

「浩君!？」

起き上がろうとする僕に唯の声が聞こえてきた。

だが、体に力が入ら無い為起き上がることができなかった。

「どうして具合が悪いことを隠してたんだ!」

「ライブがあったから」

唯の咎めるような言葉に、僕は簡潔に答えた。

「だからって……」

「そんなに熱がなかったから平気だと思ったんだけど……これは失敗したかな」

「大丈夫? 浩介君」

ため息をつきながら呟く僕に、ムギが心配した様子で聞いてきた。

「大丈夫だって、ちよっと力が出ないけど」

「全然大丈夫じゃないじゃないか」

唯の言うとおりであった。

まったく大丈夫ではない。

「どうやら気を失っていたようで、完全に病気の症状が進行しているようだった。」

「とにかく、高月君を家まで送っていくわ」

「いえ、自分で——つく」

歩いて帰れると証明するために、根性で立ち上がることができたが、どうしても体がふらついてしまう。

「ほら見なさい、そんな状態でどうやって帰るっていうの」

「浩介先輩、ここはおとなしく先生に送ってもらってください」

「……………分かった」

本当に病人のような気がするので、避けたかったが梓の心配そうな表情での懇願に僕は山中先生に送ってもらおうことにした。

「荷物は持ったわね」

「はい」

「それじゃ、行くわよ」

山中先生に促されるように、歩き出そうとするが、やはり足元がおぼつかない。

「あ、私が肩を支える！」

「ごめん」

そんな僕に、自分から名乗り出てきてくれた唯に支えられながらも、僕は部室を後にした。

「……まででいいよ」

「本当に大丈夫？」

山中先生が車を用意するため、待つように言われた校門のところで僕は唯に告げると心配そうな表情で訊かれてしまった。

「大丈夫だって。どうせただの風邪なんだから、寝てれば数日で治るさ」

心配させまいと明るく言うが、正直なところ早めの処置が必要な状態だった。

「おまたせ。さあ、乗って」

「あ、はい」

少しだけ動けるようになった僕は、先ほどよりはしつかりとした足取りで車の中に入り込もうとする。

「浩君！」

「何？ 唯」

そんな時、それを遮るように声を掛けてきた唯に、僕は用件を尋ねた。

「またね」

「……ああ、またな」

唯の言葉の意図を悟った僕は、もう一度会うことを示唆するように答えると、車に乗り込んだ。

そしてそのまま僕は山中先生が運転する車で自宅まで送り届けてもらうのであった。

「お、やっと来たかDK」

「ごめんなさい。ちよつと仕度に手間取って」

夕方、少し遅れて会場に到着した僕に、待ちくたびれたように声を掛けてきたMRに謝りながら理由を説明した。

この日、僕はライブがあるのだ。

(家に戻ったけど結局、月見草は届かなかった)

体調は相変わらずひどい状態だったが、H&Pのライブを待つてくれている人がいるため、僕は中止にすることができなかった。

「まあ、いい。時間には間に合ったわけだし。早速ライブの準備を始めるぞー！」

『おー！』

YJの呼びかけで、僕たちは一斉に腕をあげると演奏の準備をしていく。

(よし、今はライブのことだけを考えよう)

僕はそう言って自分に気合を入れながら演奏準備に取り掛かるのであった。

『これより、30分の休憩に入ります』

ライブは前半を乗り切ることができた。

「はあ……はあ……」

休憩に入り、楽屋に入った僕は椅子に座るだけでも息が切れていった。

「DK、どうしたんだ？　いつもはあの程度どうということもなかったのに」

「大丈夫、平気だから」

そんな僕の様子を心配したYJが僕に声を掛けてくるが、僕は平気だと告げると目を閉じて体を休める。

数十分だろうと、体が休まるのであれば後半を乗り切ることができるとのだから。

そして、後半のライブが再び幕を開けるのであった。

「ただ……いま」

夜、ライブを終えた僕はふらつく足取りで自宅にたどり着いた。

(ライブは成功したのは分かるけど、演奏した曲が思い出せない)

もはや症状は最悪な状態にまで悪化していた。

(とりあえず、月見草は届いているはずだから、早く飲もう)

今後のことを考えながら、僕は家の玄関を開けようとする。

「お、重……」

ドアはまるで鉛のように重かった。

鍵がかかっているというものではない。

(もはや唯たちよりも筋力が下がってるな。これは)

苦労しながらも、何とかドアを開けることができた僕は割り込むように自宅に入った。

「はぁ……はぁ……」

家に入るだけでも息が切れる。

体は依然と怠く、視界もぐるぐるとしていて芳しくなかった。

「後は、月見草を………飲……」

次の行動を起こそうとする僕に、再びあの感覚が襲い掛かる。

(ここまで、か)

僕はすべての終わりを覚悟して再び、意識を手放した。

何となく、懐かしい気配を感じながら。

第77話 熱

「無断欠席……か」

放課後、2年1組の教室で、顎に手を当てながらつぶやく俺。
名は佐久間慶介。

自称、浩介の大親友SA!

別にサービスイリアの略ではない。

(いや、そんなことはどうでもいい)

どうも演技が度を過ぎることがよくある。

そのせいで浩介には非常に手堅い仕打ちを受けてしまうのだが。

俺がおかしく感じているのは、今名前が出た“浩介”についてだ。

本名は高月浩介。

女子9割で構成された部『軽音楽部』に所属する何ともうらやましいハーレム魔だ。

特に本人にその自覚がないことが腹立たしい。

それはのちに追及することにして、俺が一番疑問を感じているのは今日学校を休んだことだ。

浩介はこれまで学校を欠席したことはない。

それが今回は初めての無断欠席なのだ。

理由は分からない。

俺への連絡がないのだ。

(そう言えば、連絡先も知らねえ!?)

今更気づいた衝撃の事実には、俺は頭を抱えなくなってしまった。

(またまた軽音部がらみか?)

本当に不運な目に合う部活だなと俺は心の中でつぶやく。

「とりあえず、行くか」

俺は事の真相を確かめるべく、再び軽音楽部の部室へと向かう。

「お邪魔しまーす」

「あれ？ 佐久間君？」

部室を訪れると、何故だかおいしそうなお菓子がテーブルの上に広がっていた。

(まるでローマの休日だな)

ここは一体何部だろうと思うが、それはひとまず置いておくことにした。

「どうしたんですか？ 佐久間先輩」

「浩介のことなんだけど」

先輩と言われた悦びに悶えそうになるのを必死にこらえた俺は、用件を切り出す。

「浩君はまだ来てないよ」

「いや、同じクラスだから知ってるって」

首を少し傾げながら答える平沢さんに、俺は冷静にツッコんだ。

「え、同じクラスだったんだ」

(あいつ、本当に何も言わなかったんだな)

俺のことは軽音部とは関係がないので、言わないかと思ったが本当に言っていないかったことに少しショックを受けた。

「浩介がどうして来てないのか、事情を知らないか？」

「あ、それなら……たぶん風邪を……ひいたからだ……思う」

俺の疑問に、秋山さんが非常に素晴らしい答えを口にくれた。

(にしても、俺ってそこまで怖がられているのか?)

視線をあちらこちらに忙しく向ける秋山さんの様子に、俺はこれはまた別の意味でショックを受けていた。

「風邪か……ということとは昨日のライブの後に体調を崩したのか」

「え？ ライブに来てくれたの!?!」

俺の言葉に、平沢さんが目を輝かせる。

「あ、ああ」

「どうだった？ どうだった？」

興味津々と言った様子で聞いてくる平沢さんの姿に、俺は浩介のこ

とがある意味憎らしく思ってしまった。

「そうだな。さすがは日本の誇るプロのバンドと言った感じだったな。曲は知らなかったけど、すぐに引き込まれた」

「は？ 何を言ってるんだ？」

俺の感想に、田井中さんが訝しむように俺を見ながら声を上げた。

「いや、だからライブの感想だが」

「私たちプロじゃないし」

どうやら、俺と田井中さんの間で間違いが起こっているようだ。

「俺は昨日のH&Pのライブのことを言ってるんだけど」

「あ、そうだったのか」

「でも、どうして佐久間先輩がライブに？ 当日のチケットは完売で

したけど」

中野さんの疑問も当然だ。

聞いてみれば当日のチケットは完売していたらしい。

「浩介に渡されたのさ。色々あってそのお礼だよ」

「へー、良いな」

平沢さんがうらやましそうに唇に人差し指を加えながらつぶやいた。

「やっぱり浩介の演奏は凄まじかった」

「は？ 今なんて言った？」

俺の言葉に、田井中さんだけでなく軽音部のメンバー全員が反応した。

「だから、昨日のH&Pでの浩介の演奏は凄まじかったって言ったんだけど」

「な、なに!？」

大きな声を上げて立ち上がったのは秋山さんだった。

(び、びっくりした)

いきなり大声を出されたため、俺は驚きを隠すのに必死だった。

「具合が悪いのに無理をしたらっ！」

「あ、待って澪ちゃん！」

「澪先輩、待ってください！」

秋山さんが突然部室を出て行く。
それに続いて部員が全員去っていった。

「……………俺、どうすんだよ?」

取り残された俺は、誰もいない部室でそうつぶやくのであった。

★★★★★

高月家、玄関。

床に倒れる浩介を見下ろしている、一人の少女がいた。

「いきなり月見草を送らせるなんて、何かあったと思ってきてみたら、本当に起こってるなんて」

少女は、心配を通り越し呆れた様な表情を浮かべていた
「意識を失っているだけだけど、このままだとまずいわね。早く調査しないと」

少女の手には草のようなものがあった。

それこそが、魔界での万能薬とも言われる“月見草”だった。

これを調合して液体状にして患者に飲ませることで効果を発する。

調合自体は非常に簡単だ。

必要なのはすり鉢と水のみ。

だが、それには患者それぞれに見合った調合比率にしなければなら
ない。

少しでも間違えれば効果を発揮しないため、調合は医師が行うの
だ。

だが、少女や浩介本人はその調合を簡単に行うことができるため、
医師に行わせる必要はないのだ。

少女は足早にキッチンに向かうと若干慌てた手つきではあるが、す
り鉢で月見草をすりつぶしていく。

すりつぶした月見草を、ビーカーに入れそこに水を注ぐ。

(よし、このくらいでいいかな)

調合を終えた薬を、急須に移し替える。

「後は、これを飲ませる——ッ!」

次の手順に入ろうとしたところで、少女は顔を上げた。

「人の気配……誰かがここに来るわとりあえず隠れましょう」

気配を悟った少女は、慌ててリビングのテーブルの上に薬の入った急須を置くと、人目につかない陰に身をひそめる。

時同じくして、高月家前。

「漣ちゃん……どうしたの？」

「考えなくても、浩介が来ないのはおかしいだろ」

唯の問いかけに、漣は息を整えてから口を開いた。

「でも、風邪なんだからそうなんじゃないの？ まあ、それでライブに出るのも問題だけど」

「だったら、同じクラスにいる彼が、来るのは変だろ。理由を知っているのであれば、来る必要はないのに」

「なるほど……確かにそうですね」

漣の推測に、梓が頷いた。

通常、前もって欠席を伝えられていれば担任は出席の際に有無も言わずにすぐに欠席とする。

だが、無断の場合は出席の際に少しだけではあるが欠席と判断されるまでに時間がかかるのだ。

「それに、昨日は倒れるほどひどい状態だった。そんな状態でライブをした」

「そして、無断欠席……ま、まさか!？」

漣の言葉で、ようやく答えにたどり着いた梓は目を見開かせて漣の顔を見た。

「え？ どういうこと？」

「つまりですね、浩介先輩は、欠席を伝えることができない状態に陥っているっていうことです!」

理解が追いついていない唯に、梓が説明した。

「……と、とりあえず中に入って様子を確認しよう」

「そ、そうね。それが一番よね」

律の提案に、ムギも頷いた。

この時、彼女たちはチャイムを鳴らすということを完全に忘れていた。

「あれ、開いてる」

ドアの取っ手をひいたところで、玄関のドアが開いた。

「お邪魔しま……って、浩介！」

「浩介先輩！」

ドアを開けた彼女たちの目の前に飛び込んできたのは、うつ伏せに床で倒れている浩介の姿だった。

慌てて靴を脱いだ彼女たちは、浩介の下に駆け寄る。

「浩介！ しっかりしろ！」

「――」
濔の呼びかけに、浩介は反応を示さない。

「熱っ!!」

浩介の体に触れた律は、そのあまりの熱さに驚きの声を上げながら手を引っ込めた。

「浩君！ 浩君！ 死んじゃ嫌だよ！」

「濔！ 救急車！」

「あ、うん！」

涙を流しながら浩介に呼びかける唯をしり目に、律の言葉に慌てて携帯電話を取り出した濔は救急車を呼ぼうとする。

そんな時、奥の方で大きな音が響き渡った。

「な、何？」

「ど、泥棒？」

突然の物音に、全員の手が止まった。

「あ………」

その時、濔の手から携帯電話が落ちた。

「濔先輩？」

「どうしたの？ 濔ちゃん？」

濔の異変に、梓達が心配げに声を掛けるが、それを無視して濔は音のした方へと歩いていく。

「漚、勝手に行くのはまずいって！　って、力強っ！」

必死に止めようとする律の手を振り払って、漚は進んでいく。やがて、漚が立ち止ったのはリビングのテーブルの前だった。

「こ、これはすげーいわね」

「ひどいです」

地面に散らばった鍋などの調理器具に、梓達は顔をしかめた。

「これ」

「え？」

そんな異常な光景を気にも留めない漚は、テーブルの上に置いてある急須を手にした。

「この中に薬が入ってる」

「ど、どういうことですか？　漚先輩」

「って、言うか。どうして薬が入っているって言えるんだよ？」

漚の不自然な言動に、梓達は怪訝な表情を浮かべる。

「って、スルーですかい！」

そんな梓達を無視して元来た道に戻る漚に、振り回される形で律たちは移動する。

「どいて」

「漚……ヒック……ちゃん？」

嗚咽交じりに、漚の名前を口にする唯に漚は再度口を開く。

「漚を助けたいのなら、すぐに退いて」

「え、う、うん」

漚から放たれるオーラのようなものに、唯は条件反射にも近い形で漚介から離れた。

それを確認した漚は、漚介の傍らに座ると、手にしていた急須の口を漚介の口に半ば強引に入れる。

「み、漚。一体何をやってるんだよ！」

「治療」

律の怒鳴り声にも近い問いかけに、漚は簡潔に答えた。

「これで、漚介は治る。これはそういう病気だから」

「一体どういふことなんだよ？　というか、どうして漚がそんなこと

を知ってるんだ？」

疑いの目で漣を見ながら問いただす律に、漣は不敵な笑みを浮かべる。

「それは、今のあなたたちが知らなくてもいいことよ」

「は？ いきなり何を言ってるんだよ?!」

突然口調を変えた漣に、律が慌てながら漣に声を掛ける。

だが、それに応じることはなく、漣の身体はまるで糸の切れた人形のように崩れ落ちた。

「み、漣?!」

「漣先輩!」

「漣ちゃん!」

突然崩れ落ちる漣に、慌てた様子で律たちが呼びかける。

「う……………あれ?」

律たちの呼びかけに反応するように目を開けた漣は、首をかしげながら立ち上がる。

「どうして私は倒れてるんだ?」

「何も覚えてないんですか?」

疑問を口にする漣に梓が控えめに尋ねる。

「うーん…………」

だが、その問いかけに、漣は首をかしげるだけだった。

「はっ! まさか、浩介の幽霊が漣に乗り移って——」

「縁起でもないことを言わないでください!」

閃いた様子で口を開く律に、梓が大きな声で叫んだ。

「う…………ん」

「へ?」

そんな時、今まで無反応だった浩介がうめき声をあげた。

「浩介先輩!」

「浩君?!」

再び浩介に声を掛ける梓達だったが、目を覚ます様子はなかった。

「とりあえず、部屋まで運ばないか?」

「え? でも、救急車は?」

律の提案に、滯は若干驚いた様子で聞いた。

「滯がそれで浩介に薬を飲ましたからいいんじゃないのか？」

「え？ 私か？」

「本当に何も覚えていないんだ」

首をかしげて信じられないと言わんばかりにつぶやく滯に、律は目を細めながら口を開いた。

「それで、浩介の部屋ってどこ？」

「あ……」

「こうなったら探検よ！」

「って、ムギ先輩?!」

滯の問いかけに固まる律をよそに、探検と称して家の中をくまなく探しだすムギに慌てて梓が続いた。

浩介の部屋はいとも簡単に見つかった。

だが、そこには問題があった。

「2階か……」

「私たちじゃ無理ですね」

それが、浩介の部屋の場合だ。

浩介の部屋は2階にある。

つまり、浩介を担いで階段を上る必要があるのだ。

だが、普通の女子にそのようなことができるはずもなく、唯たちは再び壁にぶち当たった。

「ならば、俺が運ぶぜ！」

『きやあ!』

突然彼女たちの背後から名乗りを上げる人物に、唯たちは飛び上がった。

「な、なんだ。佐久間か」

「び、びつくりした」

突然現れた佐久間に、律たちは落ち着くように深呼吸をした。

「それにしても、一体いつの間に」

「そんなことより、早く案内してくれよ。運ぶから」

「わ、分かったわ」

滯の疑問を躲すように急かされたムギは、慌てて浩介の部屋へと向かう。

「何とか運べた」

浩介の部屋まで運び終えた唯たちは、浩介をベッドに横たえようと、布団をかけた。

「ありがとな、佐久……って、いないっ!？」

お礼を言いながら、佐久間の立っている方を見た律が驚きの声を上げた。

「本当だわ」

「な、なんだか今日は変なことが起きますよね。滯先輩や佐久間先輩とか」

だから、さつきから聞いているんだけど私が一体どうしたんだ？佐久間がいけないことに驚きながらも不気味そうに言う梓に、滯は不思議そうな表情を浮かべながら問いかけた

「って、もう下校時刻ギリギリ!？」

「あ、そう言えば荷物全部置きっぱなしだった!」

浩介の部屋に置かれていた時計が示していた時刻に、律が大きな声を上げるとそれに滯が続いた。

「急いで取りに戻らないとっ」

「唯は浩介を見ててくれ! 目を覚ましてもどこかに行かないように!」

「了解であります!」

全員は慌ただしく浩介の部屋を去っていくと、高月家を後にするのであった。

「何とかなったようね」

その様子を家の屋根に腰掛けて見下ろしている少女は静かにつぶやいた。

「ここにきて完全複製を行うことになるとはね」

高月家で起きた様々な怪奇現象は、すべてこの少女によるものだった。

最初に行ったのは食器棚の崩壊。

それによって、全員をリビングの方へと集めさせた。

（兄さんが病院で検査されるのは、少々分が悪い）

浩介の肉体は普通の人間と大差がない。

だが、問題は治療方法にあった。

どのような薬を投与しようとも、手術をしようとも無力症候群は根治できない。

根治には月見草の投与が必要になる。

だからこそ、救急車を呼ぼうとするのを妨害するために、打った次の手が任意の人物を操り、薬を飲ませることだった。

それが滲だった。

そこまでは彼女の計画通りだった。

「でも、まさか部屋に運ぶ人員不足までは頭が回らなかったかな」

ただ、あるとすれば浩介を彼女たちが運ぶことができないことまで、考えていなかったことだった。

「彼女たちの記憶の中で一番新しい適材の人物を割り出して演じるのはかなり大変だった」

対応策で出てきたのが、全員に共通する人物に完全模倣パーフェクト・コピーで変装をすることだった。

とはいえ、しつかりとした情報が揃っていない状態での変装だったので、少女は早々にその場を立ち去る必要があった。

それが高月家で唯たちが体験した怪奇現象の正体だった。

「……さて、帰りましょうか」

少女は立ち上がると静かに呟いた。

それから数秒後、少女の姿は消えた。



「ん……」

ふと目が覚めると、僕はなぜかベッドの上で寝ていた。

(おかしいな。確か僕は玄関で倒れていたはずだけど)

記憶はしっかりと覚えている。

無理をしてライブに出してしまった僕は、玄関で力尽きたのだ。

正直、今回ばかりはまずいと思ったが何とかこうして生き延びたよ
うだ。

「浩君」

「ゆ……い？」

ふと聞こえてきた声に、僕は未だに怠い体を動かして、声の方へと
視線を向けた。

そこには椅子に腰かけ、嬉しそうな表情を浮かべている唯の姿が
あった。

「良かった。目が覚めたんだね」

「ああ……何だか迷惑を掛けちゃったみたいだね」

本当に安心した様子で声を上げる唯に、僕はそう返した。

ここにいて僕がこうなっているということは、誤魔化しても無駄な
ことだというのは分かっていた。

「そうだよ！ 無理してライブに出るなんて。滯ちちゃんたち心配して
たよ」

「そうか……それは悪いことをしちゃったな。後で謝らないと」

唯の呆れたような言葉に、僕は後悔の念を感じていた。

それは何に対してだろうか？

みんなに迷惑をかけたこと？

それとも……

「ねえ浩君」

そんな僕の考えを止めたのは、唯が僕を呼ぶ声だった。

「私ね、ライブの前の日に夢を見たの」

「へえ、どんな？」

僕は唯に先を促す。

「浩君が私の部屋に来て、風邪を治してくれる夢」
「……」

それは紛れもなく、僕が実際にしたことだった。

「浩君が、倒れたのって、私から——「違うつ！」——え……」

僕は気が付くと大声で反論していた。

ただ、唯の悲しげな声を聞くのが嫌だったから。

「僕のこれと、唯の風邪とは全く関係はないよ。日ごろの不摂生が祟っただけ」

「でも……」

僕の言葉に納得ができないのか、唯はなおも食い下がる。

「僕が唯の部屋に訪れたという証拠もないし、僕のこれが唯のせいだという証拠もない。唯が気に病む必要は一つもないんだ」

「浩君……」

(らしくないことを言ったな)

本気で今日の僕は僕らしくない。

「納得したのなら、この話はおしまい。いいね？」
「……うん」

僕の問いかけに、唯はしぶしぶではあったが頷きながら答えた。

「それにしても、よく手当てができたよな。薬を飲ませてくれたんだよね？」

今のところ症状は良くなっているようなので、おそらくは唯たちの方で適切な処置を施してくれたのかもしれない。

「ううん。私じゃなくて滯ちちゃんが気絶している浩君に急須で飲ませてたよ」

「急須で？」

唯の言葉に、僕は引っかけかりを覚えた。

(急須ということは、調合が終わっていたということか？ 唯たちが調合を？ いや、それはない。彼女たちは比率を知らない)

月見草の調合比率は、正確にしなければ効果を発揮しないため、か

なり調合が難しい薬草だ。

「どうかした？」

「いや、なんでもないよ」

とりあえずこの件は、追及しない方が無難そうだ。

もしかしたら「あいつ」につながるかもしれないし。

「あ、タオル変えるね」

「あ、ああ」

今気が付いたが、僕の額には濡れたタオルが置いてあった。

それを唯は手にすると、どこから持ってきたのか水が張つてある洗面器に入れて絞ると僕の額に乗せた。

「まるで夢でも見ているようだ」

「え？ 何が？」

僕がふと漏らした言葉に、唯は僕の顔を覗き込みながら聞いてきた。

「唯に看病される日が来ることになるとは。本当に夢みたい」

「私も、やればできる子なんだよ」

「言えてる」

明るく言う唯に、僕が相槌を打つと自然と笑みがあふれ出た。

「ありがとう、唯」

「ううん。私の方もありがとうね」

「唯にお礼を言われる理由は見当たらないけど、素直に受け取っておくよ」

唯のお礼の言葉を僕は、素直に受け取ることにした。

もしかしたら唯には色々な意味を込めてお礼を言ってきたのかもしれない。

「……………」

そんな時、柔らい笑みを浮かべている唯を見ると鼓動が強くなったような気がした。

「どうしたの？」

「い、いや。なんでもない」

首をかしげながら聞いてくる唯に、僕は慌てて答えた。

(今日の僕は何かがおかしい)

唯を見ていると心臓がバクバクいう。

これはきつと熱があるからに違いない。

「唯ー、浩介は目が……覚めてる」

そんな変な雰囲気を打ち破ったのは、部屋に入ってきた律だった。

「浩介先輩！」

「浩介君！」

そして一気になだれ込んでくる梓とムギたち。

「大丈夫ですか?!」

「具合とかはどう?」

「大丈夫だから。だから揺らすのはやめて」

どこにそのような力があるのかはわからないが、力いっぱい体を揺らしながら聞いてくる梓に僕は必死にお願いした。

「まったく、具合悪いのにどうしてライブに出るかな、本当に」

「そうだぞ。私たちがどれほど心配したと思ってるんだ!」

その後、律や滯たちからお説教をされたのは、言うまでもないだろう。

2年生編Y 『忍び寄るもの』 第78話 悪意

あの学園祭の一件から数日が過ぎた。

「浩介、大丈夫か？」

「ああ。大丈夫」

教室に入るなり、いきなり声を掛けてきたのは慶介だった。

僕は慶介に治ったことを告げた。

「そうか。良かったぜ、無事で」

「心配させたみたいで、悪かったな」

普段はあれだが、ちゃんと心配してくれたことはとてもうれしかった。

「にしても、どうして無理して演奏したんだよ？」

「だって、僕たちの演奏を聞こうと待っている人がいるのに、風邪ひいたので休みますとは言えないだろう」

「それで倒れたら元も子もねえだろ」

僕の反論に、慶介があきれた様子で言い返してきた。

「同じことをみんなに言われたよ。さすがに、これ以上言われるのは勘弁してくれ」

この間の濡たちの説教の内容は、大体が慶介の言っていたことだった。

本当は反論することもあるのだが、それは僕と唯たちの価値観の違いに発展するので素直に説教を受けることにしたのだ。

とはいえ、同じことを何度も言われるのは精神的につらい。

「まあ、いいけど。あの後変なことがあったんだ」

「変なこと？」

慶介の言葉に興味を持った僕は、詳しく話を聞いてみることにした。

「ああ。平沢さんたちに浩介のことを話すと、いきなり部室を飛び出していったんだ。で、俺は部室で待っていたわけだ」

おそらく慶介が唯たちに僕のことを話したのだろう。

「それで少しして田井中さんたちが戻ってきた時に、言われたんだ『佐久間、あんたいつの間に来ていつの間に戻ってたんだ？』ってな」
「……」

慶介の話に、僕はできる限り表情を変えないように努力した。

おそらく、慶介は今回の件に関しては完全に被害者なのだから。

「いやー、話を聞くと俺が浩介の家について、浩介を部屋まで運んだんだってさ。何だか怖くね？」

「あー……まあ、そういう日もあるよ」

僕はそう答えることしかできなかつた。

風邪が治ってからさらに数日後。

学園祭が終わったからと言って、何がしらかの変化があるかと言え
ばそうではない。

「はい、今日はタルトよ」

「それじゃ、モンブランいただきー」

「また、お茶で——」梓ちゃんはいらないの？——それじゃ、バナナ
タルトで」

梓も最近どんどん丸くなり始めているような気がする。

これをいいことだと思えばか、それとも嘆くべきか。

(チーズケーキのタルトもあるのか)

「むむ、それじゃ私はイチゴタルト……あ」

「……あ」

ほんの偶然だった。

唯が取ろうとした横にあるチーズタルトを取ろうとしたところで、
手が触れたのだ

「悪い、先にいいよ」

「……………うん」

顔を赤くしながらイチゴタルトを手にする唯に続いて、僕も目当てのお菓子を手にする。

「二人ともどうしたんだ？」

「え？ 何が」

そんな僕たちの様子を見ていた漣が、突然聞いていた。

「いや、何だか二人の様子が変だから」

「うん。何だか付き合いたての恋人同士みたい♪」

漣の言葉に、ムギは頷きながら笑顔で告げた。

「こ、こここここここ!!」

「何い!? 二人は、いつの間にそんな関係に?!」

「ち、違うよ律ちゃん。そう言うのじゃないって」

ムギの爆弾発言に、漣は顔を赤くして固まり律は居心地の悪い笑みを浮かべながら声を上げた。

「でも、それだとさっきのおかしな雰囲気の説明がつきませんよ？」

「それは……………」
「急に手が触れれば誰でもびっくりするだろ」——
そ、そうなんだよ！ びっくりしただけだよ！

梓の鋭い指摘に、僕がフォローを出すと唯は人差し指を立てながら頷いた。

これで納得する——

「怪しいどすなー。ムギ、こうなったらとことん追求するでありますよー！」

「ラジャーー！」

わけがなかった。

(これ以上追及されるのもいやだし。仕方ない、脅すか)

僕はそう思い立つと右手にナイフを魔法で取り出すと律の前の机に目掛けて投げた。

「へ?」

狙い通り律の前に席にナイフは突き刺さった。

「あんまり余計な詮索をすると手元が狂っちゃうかもしれないよ?」

「そ、そういえばー! 昨日テレビで見たんだけどさ——」

僕の脅しに律は忠実だった。

思い通りに話題を強引に反らせることに成功した。

(とはいえ、律や漣の言う通りなんだよな)

漣の指摘通り、最近の僕たちはどこかおかしかった。

これまで普通にできていたことが、普通にできなくなったのだ。

(いつからだろう?)

ふと、思い返してみる。

学園祭以降、ここに来たことはない。

風邪が治りここに来たときにはすでにこのような状態だった。

なによりお見舞いも、薬を飲んだ時以外は来ていないので、きっかけで言うのであればやはりあの時しかないだろう。

(お見舞いの時に何かあったか?)

ふと考えてみる。

だが、一つ以外には思い当たることがなかった。

(いやあれは、熱に浮かされていたらだし)

唯のやわらかい笑みを見たときに感じた胸の鼓動。

それは、熱に浮かされていただけだ。

それ以外にありえない。

——あつてはならないのだ。

そんな、こんなで微妙な状態になりかけているまま、改善する兆し
がなかった。

演奏の方では問題が出ていないが、このままいけば悪影響が出てく
る可能性もあるため、悠長にしてもらえない。

(本当にどうしたものか)

僕は心の中で、考えをめぐらすが、やはり答えは出てこなかった。

(早くこの不安定な状態を何とかしないと、このまま放置しておくこ
とは、大きなトラブルを招くことになるし)

僕はそれを一番危惧していた。

類は友を呼ぶではないが、不安定な状態は不純な要素を呼び込むこ
とが多いのだ。

そして、解決策を見つけ出せないまま、さらに数日が過ぎていく。

僕の一番危惧していたことが実際に発生するとも知らずに。

それは、9月下旬のある日の休み時間のこと。

「全く、唯のやつは……」

僕はため息交じりでぶつぶつと文句を言いながら、唯たちのクラスである2年2組の教室へと向かっていった。

その理由は実にくだらなかつた。

「どうすれば鞆を間違えるんだよ」

それは昨日の夜のことだつた。

次の日の学校の授業の教科書をカバンに入れようとした時のことだつた。

『あれ?』

鞆の中に手を入れた僕は、ふと手に感じた感触に首をかしげた。

『何だろう……』

僕は手探りでその感触の正体である物を取り出した。

『つて、携帯電話!』

出てきたのはピンク色の折り畳み式の携帯電話だつた。

色からして僕の物ではないのは明らかだ。

『一体誰のだ?』

携帯を調べればわかることだろうが、さすがに他人の携帯電話を勝手にみるのは非常識なのでできない。

(仕方ない)

僕は軽く魔法を使うことにした。

とはいえ、携帯電話に人差し指を触れさせることぐらいだが。

その結果、

『これ、唯の携帯か』

僕は持ち主を把握することができたのだ。

(確かに昨日は色々どタバタしていたから間違うのも納得はできるけど)

普通すぐに気付きそうなものだとは思うが、唯なので仕方がないのかもしれない。

本当は朝に通学路で手渡すつもりが、遅刻しそうな時間だったために先に学校に向かうことにしたのだ。

そして最初の休み時間である今、唯に渡すべく教室へと向かっているのだ。

「あ、ここか」

教室に入った僕が目にしたのは、一か所に固まって話している唯や律たちの姿が立った。

よく見ると唯の雰囲気はどよーんとしている。

「何を話してるんだ？」

「あ、浩介君」

近寄りながら声を掛けると、最初に反応したのはムギだった。

「実は、唯が携帯を失くしたらしくてな」

「それだったら、ここにある」

律が事情を説明してくれたことで、ようやく唯の雰囲気の理由がわかった。

「な、なにっ!？」

律の大声に、クラス中の視線が僕たちに集められた。

「これだろ?」

僕は唯に透明のビニール袋に入れておいた携帯電話を差し出す。

「あ、これだ!」

「どうして、お前が持ってたんだよ」

慌てながら携帯電話をビニール袋から取り出す唯をしり目に、律が問いかけてきた。

「僕のカバンの中に入った」

「あ、そうか。あの時に間違えて浩君のカバンに入れちゃったんだ」

「なんだ、ビックリさせんなよな」

唯の言葉で僕の言葉が正しかったことが証明されたのか律は息を吐き出しながら、唯にそう言った。

「えへへ。ごめんね。浩君も、ありがとう」

「っ。別にお礼を言われることじゃない。用はそれだけだから。じゃあ」

満面の笑みを浮かべてお礼を言う唯に、僕は再びあの時の鼓動を感じた。

「あ、待って」

ムギの呼び止める声に無視して僕は早々に教室を後にした。

この時、僕は気付くべきだった。

僕たちを見ている視線に、悪意が混じっていたことに。

「それじゃ、今日は解散！」

放課後、いつものように部活を終えた僕たちは部室を後にする。

「練習もしていないのに疲れました」

「今日はいつも以上にやられてたもんな、あずにゃん」

哀愁が漂っているのも無理はなかった。

この日、梓が山中先生という魔の手によってさまざまなヘアードを付けさせられた。

猫耳に始まり、ウサギの耳や犬耳等々。

しかも衣装まで作っていたようで、滯の時と同じような追いかけてこが繰り広げられることになった。

ちなみに追いかけてこの終わりには、ムギのお茶が入ったことを告げるものだったりもするのだがそれはどうでもいいだろう。

そんなこんなで昇降口で上履きからローファーに履き替えるべく下駄箱のドアを開けた。

「ん？」

中に二つに折りたたまれた白い紙のようなものが入っていた。

僕はそれを手にすると紙を広げた。

「……………」

内容を見た僕は無言で四つ折りにするとポケットに入れた。

「ひっ!？」

「ゆ、唯ちゃん!？」

2組の下駄箱があるあたりから唯の息をのむ声が聞こえた。

それに少し遅れてムギの声も聞こえた。

僕は急いで唯たちの方に向かった。

「どうしたんだ？」

「それが、私にもわからなくて」

地面にうずくまり、両手で両耳をふさいでいる唯の手には紙切れがあつた。

「唯、どうしたんだ？」

「浩君……………」

震える手で、僕にその紙切れを渡してきた。

「……………」

「浩介、ちょっと見せて」

その紙の内容に目を通して僕の手から半ばひったくるように律が紙を取った。

「なんだよこれっ」

「ひどい……………」

その紙の内容を目にした律にムギが顔をしかめた。

『アノオトコトワカレロ。サモナクバオマエタチニオオキナワザワイガオトズレルダロウ』

カタカナ表記で書かれたそれは、紛れもなく脅迫文だった。

「これに関してはこっちの方で何とかする。皆は何もせずに普通にしないで。いいな?」

「……唯はいいのか？」

僕の言葉に、律は唯に尋ねる。

それに対して、唯は無言で首を縦に振った。

「それじゃ、頼むぞ」

「お願いで、浩介君」

「任せて」

律たちの頼みに僕は静かに、されど力強く頷きながら返事を返した。

「にしても、脅迫文を下駄箱に送るだなんてこれまた古典的な」

カタカナ表記にしたのは受け取る相手を怯えさせるためだろうか？

どちらにせよ、読みにくいことこの上なかった。

「とりあえず、解説文もどきでも作るか」

そうつぶやくと、僕は今日受け取った脅迫文を二通、読みやすくなるように解説した。

『あの男と別れる。さもなくばお前たちに大きな災いが訪れるだろう』

それが、唯に届いた脅迫文の内容だ。

そしてもう一通

『平沢唯に近づくな。さもなくばお前に関係するすべてのものに大いなる災いをもたらす』

それが僕に届いた脅迫文の無いようだった。

「クリエイト、この二通の筆跡を比較して」

『了解です。マスター』

首飾りを服から出して二通の脅迫状が見える状態にする。

結果は数秒で出た。

『97%の確率で同一人物です』

「そうか。ありがとう」

やや高めの確立に、僕はこの文を書いたのは同一人物であることを確定させた。

(問題は、これを誰が送りつけたか……あれをやるか)

僕は、これを送りつけた人物を特定するため、先日鞆に入っていた携帯電話の持ち主を特定するために使った魔法を、使うことにした。

それは物に宿る持ち主のエネルギーパターンを調べるものだ。

人が触れた物には、エネルギーが宿ることがある。

それは体力などに属するもので、時間が経てばたつほど薄まっつき判別不能になる。

唯の携帯電話は、常時唯が持っていたためエネルギーが強く宿っていたために判別が素早くできたのだ。

それはともかく、僕は両手の人差し指を脅迫状の紙の上に乗せると神経を集中させる。

そして、両手を紙から離すと、右手を開くようなしぐさでホロウインドウを展開した。

それは僕が通っている、桜ヶ丘高等学校の生徒全員の生命体反応を記したデータだ。

(こういう時に作業員がいてくれると頼もしい)

学校内にテロリストが紛れ込んでいないかを判別するため、学校に入り込んでいる工作課の者が生命データを解析してデータベース化にしているのだ。

そうすることで、前もって事件が防げるだけではなく、時間ループのように偽物が紛れ込んでみてもすぐに把握することができるのだ。

ちなみに、あの事件の時はすっかりこのデータベースの存在を忘れていたのは余談だ。

「犯人を男と仮定すると、現在の男子の数は約20名」

1年の方で約12人、2年生で8人程度だ。

「さらに、データから僕と慶介のデータを除外」

当然のことだが、僕は犯人ではないので、除外だ。

慶介の場合は、日ごろから“ハーレム”だの可愛い子ちゃんと付き合うだの妄言たれているし、時より嫉妬のパンチなどをしてくる（まあ、すぐに200倍で殴り返すけど）ことがある。

だが、慶介は女子に対して怖がらせるような脅迫状を書いたり絶対にしない。

それだけは僕は胸を張って言える。

「よし、一人ずつ調べていくか」

こうして僕は18人の男子データを調べ始めた。

（これは違う）

僕が感じた物と、目の前に表示されたデータのエネルギーパターンを照らし合わせていく。

（ん？）

17人目に入ったところで、非常に似ているエネルギーパターンの人物データを見つけた。

「こいつか」

その人物の名前は『内村 竜輝』と表示されていた。

「まだこいつが犯人という確証はないが……先手は打つべきだな」

僕はそう考えて先手を打つことにした。

通信は相手が出るかどうかかわからないので、メールにすることにしました。

そして、必要なことを終えた僕は、脅迫状をカバンの中にしまい、そのまま眠りにつくのであった。

今思えば、これがすべての始まりだったとも知らずに。

第79話 渦巻く悪意

翌日、通学路でばったりと唯たちと鉢合わせになった。

「おはようございます、浩介さん」

「おはよう、憂。それと唯も」

「お、おはよう浩君」

どこかよそよそしげに挨拶をしてくる唯に、僕はため息を一つつく。

「まだあの脅迫状を気にしてるのか？」

「……」

唯は何も答えなかったが、それがすべてを物語っているような気がした。

「いいか？ あんな脅迫状如きにこっちがおびえたりする必要はない。こちらは何も悪いことをしてないんだから」

「そうだよ！ お姉ちゃんは悪くないよ！」

僕の言葉に、憂も賛同してくれた。

「憂……浩君」

目を潤ませながら僕たちの方を見てくる唯に、僕と憂は頷く。

「分かった♪」

「だからって、腕を組めと言った覚えはないっ！」

「えへへ〜」

先ほどまでの落ち込みはどこへやら……満面の笑みで僕の腕に自分の腕を組んできた。

「というより、歩きづらいのほどいてもらえませんか？」

「いやっ♪」

結局、僕は校門のところまで腕を組んで登校する羽目になった。

だが、それでもいいと思った。

「おやおやく、お二人さんは本当にラブラブどすなー」

もつとも、律に冷やかされたのを除けば。



同時刻、通学路にて。

腕を組んで登校する唯たちの少し後ろで、面白くなさそうに見える人物の姿があった。

その視線には、一種の憎悪が込められていた。

「おのれ……高月浩介め」

そしてそれは浩介にのみ向けられていた。

「俺様の女に手を出しやがって」

ありもしないことをつぶやくその人物は、短めに切りそろえられた金髪に、相手を威圧する吊り目の青年であった。

「どうやら、俺様の誠意は通じなかったようだな。ならば……ククク」

青年は不気味な笑みを浮かべると、足早にその場から移動するのであった。

★★★★★

いつものように自分のクラスでもある4組に向かう。

「おお、君は何て美しい太陽なんだっ！」

「え、えつと〜」

入ってすぐに目に留まったのは、歯が浮くようなセリフを佐伯さんに吹き込んでいる慶介の姿だった。

その表情はどこからどう見ても困っているようにも見えた。

「ん？」

視線を感じたので、その方向に顔を向けると同じクラスの子（名前は知らない）が慶介の方を指差して丸マークを僕に送ってきた。

それは僕にはやってよいという言葉にも聞こえた。

「さあ！俺と一緒に大人のバラの中——ニンジャ!？」

「おはよう佐伯さん。朝っぱらから馬鹿がバカげたことをバカおかしく言って悪いね」

「あ、ううん。別に気にしてないから」

とりあえず、危険なことを口走ろうとする慶介を、百科事典で鎮めておくことにした。

「そう？ それじゃこのバカを、今後バカなことができないようにバカすごいお仕置きをしておくよ」

「ぼ、馬鹿を強調しないでくだ——ぐぼあ?!」

まだ意識の残っていた慶介の首元に、指を突き刺して再び気を失わせた。

そんなこんなで、いつもの一日が幕を開けた。

……はずだった。

「くそっ、一体なんだってんだよ！」

「ど、どうしたんだ？」

昼休み、購買部に昼食を界に向かっていた慶介は、憤りを隠せない様子で戻ってきた。

その手には何もなかった。

「聞いてくれよ浩介！ 購買の方で昼食に焼きそばパンを三つほど買ったんだ！」

「へえ。かなり競争率が高いやつでしょ？ すごいじゃない。でもまあ、そのパンが無いけど」

購買部で一番競争率が高いのは『ゴールデン何とか』というパンだ。

一日に5、6個しか作られないため、幻のパンとも言われている。

噂によると、そのパンにありつけた者は将来大きな成功を収めるという噂まで流れているが、審議の方は定かではない。

焼きそばパンもそんな競争率が高い部類に入っているのだ。

それを三つも手に入れられる手腕は尊敬に値した。

「それがさ！ ここに戻る途中にいきなり金髪の野郎が俺の行く手を遮って『佐久間慶介だな？』と聞いてきたんだ。だから”はい、そうです”って答えたんだ」

「……………それで、どうなったんだ？」

“金髪”というフレーズに、僕は引っかかりながら先を促した。

「そしたらそいつにパンを三つも奪われたんだよ！ しかも『恨むのなら高月浩介を恨め』とか意味の分からねえことを言い残して、どこか行っちゃもうし」

「……………」

どうやら、僕の予感は当たったようだ。

「本当に、最低な野郎だ…………って、どうしたんだよ浩介？」

「ごめん」

「何謝ってんだよ？ パンを取ったのはあの野郎で、お前のせいじゃないだろ？」

慶介に謝罪の言葉を告げると、首をかしげながらそう切り返してきた。

「だけど、慶介はただ巻き込まただけじゃない」

「別に俺は構わねえって。俺ってMだから、逆にウエルカムさっ！」

「……………」

その言葉僕を励ますための物なのか、それとも本心なのかがわからなかった。

だが、僕は前者の方で取っておくことにした。

僕は箸で弁当のおかずやご飯を適当にふたの方に移すとそれを慶介の方に差し出した。

「これは？」

「余りものだ。今日はちよつと多く作ったから。さあ、食べ。食わなければ眠らせる」

弁当箱のふたを呆然と見ている慶介に、マシンガンのごとく告げるとさらに慶介の方に突き出した。

「な、なぜに脅迫系!？」

「じゃあ、食べない？」

「食べるー！」

この切り返しの速さは慶介らしいと思う。

さつきまでツツコンでいた慶介は、料理を口にするので夢中なのだから。

(……にしても、さすがというべきか)

僕は料理を口にしながら、慶介の話のことを考えていた。

(本人ではなく、周りから攻めていく。戦略としては非常に素晴らしい判断だ)

敵ながら、相手の手腕に称賛の声を送るほど、鮮やかだった。

(さて、次はどういう手に打ってくるか……)

相手の打ちそうな手はすでにいくつか予想している。

それに対する策もしっかりと用意している。

だが、いずれもすぐに対抗できるわけではない。

どうしても防戦になってしまいうだろう。

(まあ、たまにはこういうシチュエーションもいいか)

時には防戦一方で、のちに大逆転するということのもいいと思った。

有名な言葉でいうのであれば“倍返し!”みたいな感じで。

(それはともかく、次にどのような手を打つか。楽しみに待つとしよう)

先ほどから殺気のようなものを僕にぶつけている視線を受けながら、僕は心の中でそうつぶやくのであった。

「HRは以上」

「起立、礼」

担任の先生の言葉受けて日直が、号令をかけ一日の終わりを告げた。

「浩介は部活だろ?」

「あたりまえ」

終わるや否や声を掛けてくる慶介に、僕は頷きながら返した。

「それじゃ、俺は帰る」

「また明日」

教室を後にする慶介に、僕は手をひらひらとふりながら見送る。

「そう言えば、慶介って生徒会役員だよな？」

早く帰ったりしてもいいのだろうか？

「ぎゃあああああ!!」

「……………」

廊下の方からこの世のものとは思えない断末魔が響き渡ってきた。

それは慶介のものであるのは間違いないかった。

「やっぱりサボろうとしたんだ」

僕は心の中で慶介に手を合わせた。

「やして……………」

楽器類はすべて部室に置いている。

だが、僕は今のところ部室に行く気はない。

それは別に部活動が嫌だからというわけではない。

僕に殺気を送り続ける、人物がいるからだ。

いい加減鬱陶しいので、こちらから動き出すことにしたのだ。

僕は教室を後にすると廊下を歩いていく。

気配も一緒に移動する。

一応隠れているつもりらしいが、気配ダダ漏れで相手がどこにいるかは手に取るようにわかった。

やがて、人通りの少ない場所までたどり着いた。

そこは、よほどのことがない限り通らない学校の端にあたる場所だ。

僕はそこで足を止めた。

未だに気配は後方を感じる。

「いい加減出てきたらどうだ？ ストーカーさん」

「何だ、気づいていやがったのか」

僕の呼びかけに少しだけ間が空いて声が返ってきた。

その声に、僕は後ろに振り返り、奴と対峙した。

そいつは短めに切りそろえられた金髪に、吊り目が印象的な男子生徒だった。

威圧的だと本人は思っているようだが、僕に言わせてみれば子供が

背伸びをしたような感じで滑稽に見えた。

「お前だな。おかしな脅迫状をよこしてきたのは？」

「さあ？ 俺様は知らねえな」

僕の問いかけに、男子生徒はとぼける。

嘘であることは明白だが、完璧（この世界での）な証拠が無い為僕はそれ以上追及することはできない。

「まあいいだろう。では、何をこそそそついてくる？ 偶々とは言わせないぞ。この辺には特に何も無いから生徒は立ち寄らない」

「なるほどなあ。この俺様を誘い出したというわけか」

ようやくと僕の狙いに気付いた男子生徒は、不敵の笑みを浮かべるとそれをすぐに消して睨みつけ出した。

同時に殺気が増すが、怖くもなんともない殺気に僕は特に反応をすることはなかった。

「まあいい。お前に警告する。平沢唯に近寄るな」

「あんたに指図されるいわれはないが？」

男子生徒の要求に、僕はそう言っただけで斬り捨てた。

「はあ？ あの女はこの俺様の物だ！ 人のものを盗むのは犯罪だと習わなかったか？」

「……………」

男の言葉に、僕は目を瞬かせる。

そして出てきたのは怒りよりも憐みだった。

「なるほど、よくわかった」

「そうか。ならばすぐに軽音部を——」

僕の言葉に、男子生徒が満足げに口を開く中、それを遮るように僕は言葉を続けた。

「貴様が、哀れだということがな」

「何だと？」

僕の言葉に男子生徒の殺気がさらに強まる。

「おまけに惨めだ。貴様は心が空っぽのかわいそうなお子ちゃまだ。前に言ったかもしれないが、僕が何をしようがこちらの自由。貴様の指図は受けない」

「……………」

男子生徒は、僕の宣言に返す言葉も無いようで動揺のあまり、口を只パクパクさせているだけだった。

「ふ、ふん！ いきがつていられるのも今の内だ。この俺様に逆らうと、痛い目を見るぜ？」

「どう見るといふんだ？」

男子生徒の粹がるような言葉に、僕はあきれながら問いかけた。

「この俺様は内村財閥の会長の息子だ！ 政治家の方にも知り合いがいるんだ。俺様の一言で、お前は社会的に抹殺できる」

「……………」

男子生徒の言葉に、僕は何も言い返さずに只々男子生徒をにらみつけるだけだった。

「分かっただろ？ 分かったのなら俺様の言うとおりに——」ならば、僕からも忠告しよう——何だ？」

僕が押し黙ったのを見て自分の勝利を確信した男子生徒に、僕に言えるのはただ一言だけだ。

「あまり私たちにケンカを売らない方がいいぞ？ さもなくばお前……………」

ゆつくりと男子生徒の方に歩み寄りながら、僕は警告する。

そして男子生徒の耳元まで移動すると、小さい声でこう告げた。

「——死ぬよ？」

そしてそのまま僕は、男子生徒野分を通り抜けて部室へと向かう。

(奴の言葉が本当かどうかは、いずれ明らかになるだろう)

本当であれば、久々の大捕り物が繰り広げられることになる。

(いずれにせよ、あいつは恐怖を味わうことになるだろうな)

男子生徒は、僕にケンカを売ってどうなるかを知らない。

“ 高月家にケンカを売って無事だった者はいない”

それが、故郷で言われている言葉だ。

そして今回も同様の結末をたどることになりそうだ。

「さて、早く部室にでも行くか」

そして僕は律たちに怒られるであろうことを予想しながら部室へ

と向かうのであった。

「ごめん、遅れた」

「遅いつー！」

部室に足を踏み入れると、予想下通りの言葉を律からかけられた。

「まあまあ。浩介君、お茶にしましょう」

ムギの言葉に、促されるように僕は自分の席に着いた。

「お、今日はマドレーヌだ」

僕たちの前に出されたのは、マドレーヌというお菓子だった。

「あ、そう言えばあれはどうなったんだ？」

「あれ？ あれって何のことですか？」

律の問いかけを聞いていた梓が律に尋ねた。

「ああ、それがさ唯に浩介と別れるとかいう脅迫状が届いてたんだよ」

「脅迫状!？」

先日は違う下駄箱にいたことと、脅迫状に関することには触れなかつた為知らなかつた梓が驚きをあらわにした。

「大丈夫ですか？ 唯先輩」

「大丈夫、浩君が何とかしてくるって言ってくれたから」

お菓子を堪能しながら頷いて答える唯の言葉に、今度は僕の方に視線が集まる。

「それで、何か分かったのか？」

「ああ。犯人を突き止めて忠告はしておいた」

澤からの問いかけで、僕は先ほど自分がした対応を説明した。

「それなら安心ですね」

「やっぱり男の子ね♪」

僕のその対応で、安心ムードに包まれる部室内。

だが、

「忠告はしたが、これで終わったと思わない方がいい」

「それって、どういうことですか？」

僕の言葉に、梓が不安そうな表情で訊いてきた。

「いや、杞憂に終わってくれれば一番いいんだがな」

僕はそう口にするだけで留まった。

（しかし、あいつの目。あれは、少しばかり厄介な相手になりそうだな）

あの男子生徒から感じた“何か”に、私は底知れぬ不安を抱くのであった。

★★★★★

「あの野郎っ」

誰もいない廊下で、少年……竜輝は唇を噛み怒りに肩を震わせていた。

「この俺様が親切に忠告してやったのに……」

それは実に身勝手な言葉だった。

「そうか。貴様もどうやら痛い目を見ねえと分からないようだなっ」

そして浮かべたのは不気味な笑み。

「ガハハハッ！ 待ってるよ、高月浩介っ！」

高笑いをしながらあ、竜輝はその場を立ち去る。

今、悪意は着実に浩介達へと迫り始めていた。

第80話 廃部！

男子生徒に忠告をしてから2日ほどが過ぎた。

何の音きたもなく、特に問題なども起こらなかった。

(あの忠告で引き下がったのか?)

心の中でつぶやいてみるが、それはおそらくありえないだろう。

あのタイプの人間が素直に引き下がるはずがない。

(まあ、最悪の状況を予期して、対策はすでに施しはしたけど)

現在はそれが完成していない。

だが、そろそろ完成したものを持ってくるはずだ。

僕の頼んだものを一緒に持った“あいつ”が。

「あの、練習をしなくていいんですか？」

この日もまたいつものようにティータイムが繰り広げられていた。

こここのところ毎日のため、梓が声を上げるのも仕方のないことだった。

「これを食べ終えてからだよー」

「極楽じゃー」

「……やれやれ」

待ったりとお菓子に舌鼓を打っている律たちに、漣がため息交じりに肩を竦めた。

それだけで、今日も昨日の二の舞になるということ物語っていた。

「いいんじゃないの。バンド名を現している」

梓にそう言いながら、僕はチーズケーキに舌鼓を打つ。

少しすれば山中先生がやって来てティータイムに加わるだろう。

それがいつもの僕たちなのだから。

だがそんないつもの軽音部、放課後ティータイムの一幕は一瞬で終わりを告げることになる。

「ちよつと、あなたたちー！」

血相を欠いた真鍋さんの訪問によって。

「ど、どうしたんだよ？ 和」

「どうしたもこうしたもないわ！ あなたたち一体何をやらかしたの

！」

尋常ではない真鍋さんの様子に、律が用件を尋ねるが真鍋さんは息を切らせており、話が見えてこなかった。

「和ちゃん？」

「とりあえず、落ち着いて話して。どうしたんだ？」

そんな真鍋さんの様子に唯が首をかしげる中、僕は真鍋さんを落ち着かせることを優先させた。

「ごめんなさい。さつき会長からいきなり言われたのよ」

冷静さを取り戻したのか、真鍋さんが事情を話し始めた。

「何て？」

『軽音楽部を本日付で廃部にする』って」

ムギの疑問に答えるように、真鍋さんはその内容を告げた。

「……………はい？」

そのあまりにも強烈過ぎる内容に、僕たちは一瞬頭の中が真っ白になった。

だが、それでもじわりじわりと頭で理解していく。

『ええっ!!?』

そして驚きの声が響き渡った。

「ど、どどどどうして!？」

「それが私や会長にもさっぱりなのよ。ただ、これは学校側からの通達なのは確かよ」

混乱した様子で問いたただす滲に、真鍋さんは申し訳なさそうに首を横に振りながら答える。

(学校側……………か)

「私たち、何かしましたか?!」

「はっ!。もしかして学園祭のライブに遅れたからそれで!？」

各々が、顔を青ざめさせる。

「いや、そんな理由じゃない」

「浩介君？」

「浩君？」

そんな中、僕はきっぱりと唯たちの予想を否定した。

「何か心当たりでもあるのか？」

澁の問いかけに、僕は頷くことで答えた。

「真鍋さん、ちょっと頼みがある」

「何かしら？」

「生徒会長殿にこの学校で一番偉い、理事長ないしは校長室に案内させて」

僕の頼みは、生徒会長を同伴して一番の権力を持つ人物の下に向かうことだった。

「曾我部先輩を？ でも、もうじき引退よ？」

「良いんだよ、それでも。会長とかいう権限は関係ないから」

「……？」 「一応頼んでみるから生徒会室前で待っててくれる？」

僕の答えに、真鍋さんは理解できないと言った様子で首をかしげながらも、頷くと真鍋さんは足早に部室を後にした。

「浩介先輩、やっぱりこれは——」

「一応言うけど、この件はみんなには責任はない。僕の判断ミスだ」

僕は梓の言葉を遮るようにしてそう告げた。

「え？ それって、どういう——」

「話はあとだ。ちょっと行ってくる」

僕は疑問の声を封じて、部室を後にした。

「……………」

一度僕は深呼吸をして、心を落ち着かせる。

(そこまでしてでも、お前は自分の思い通りにするか)

きつと今頃どこかでほくそ笑んでいるであろう人物に、僕は心の中で問いただしながら僕は生徒会室の方に向かうのであった。

「……」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……」
「……」

生徒会室前で会長と合流した僕は会長を同伴させて、この学校で最も権力のある人物の部屋の前までやってきた。

「一体どうする気？　言っておくけど私でも理事長を説得するのは不可能よ」

「ご安心ください。あなたにそこまで期待はしてませんから」

会長の心配そうな言葉に、僕は笑顔で返した。

「そうやって笑顔で返されると、怒りを通り越して清々しい気持ちになるわ」

「あなたには一種の証人になつてもらいます」

会長の言葉をスルーして、僕は会長に来てもらった理由を話した。

「この中で話し合いでは、ある約束事が交わされます。ですが、所詮は口約束……どちらかがそれを反故にする可能性もあります」

「それで、その約束事を躲したという証人になれ、ということね」

僕の説明で、ようやく僕の目的を理解した会長の言葉に、僕は頷くことで答えた。

「そう言うことなら、私は喜んで引き受けるわ」

「ありがとうございます」

建前とかを気にせずに、僕はお辞儀をしてお礼を言った。

今からすることは、会長の存在がなければ決してできないことなのだから。

「別に、お礼なんていいのよ。だって、——」

会長が何かを言ったような気がするが、声が小さくて聞き取ることができなかった。

僕もさほど重要なことではないだろうと判断して、聞きかえすこともしなかった。

「それじゃ、入りましょう」

会長はそう告げると、理事長室のドアをノックした

『はい』

「生徒会長の曽我部です」

中から渋い男性の声が返ってきた。

その声に、会長は堂々とした声色で名乗った。

『どうぞ、お入りください』

「失礼します」

理事長から入出を許可された僕たちは、理事長室に足を踏み入れた。

理事長室内はアンティーク調の家具などが置かれ、威厳のような物を感じさせる雰囲気であった。

その奥の方の社長椅子の方に腰掛けている初老の男性が、理事長だろ。

「おや、君は……」

「初めまして。2年1組の高月浩介です」

僕の存在に気付いた理事長の問いかけに、僕は自分の名前を名乗った。

「それで、いきなり訪ねてきて何の用かね？」

「私が話すことがあることをよくわかりましたね？」

理事長が会長ではなく僕に用件を尋ねたことに、驚きながら僕は理事長に尋ねた。

「ただの勘だよ。それで、用件は？」

「先ほど生徒会から軽音部に廃部の知らせが届きました」

僕の切り出したように県に、理事長は僕から視線を逸らした。

「部員の人数は満たしており、部としての活動を行っている。それなのになぜ、廃部なのでしょう？ 具体的かつ私が納得のできるお答えをいただきたい」

「……………」

僕の問いかけに、理事長は口をつぐんで何も答えようとはしない。「圧力を掛けられているのではないですか？ 例えば、内村財閥がそれに関連する場所から」

「……………」

鎌をかけてみたところ、効果はてきめんだった。

先ほどまでの様子とは打って変わって、驚いた表情を浮かべた理事長は僕の顔を見てきた。

その顔は“どうして知っているのか？”と物語っていた。

「そうなんですか？ 理事長」

「……………」

会長が僕に続くが、理事長は何も答えようとはしなかった。

（おそろく、口止めされているんだろうな）

例えば、第三者に口外したら学校をつぶすなどと言つて。

だとすれば、僕はそれを守らせたうえで情報を得なければいけない。

「理事長。でしたら、自分たちは理事長の独り言を聞いたということ
でいかがでしょうか？」

「……………分かった」

僕の提案に、理事長は首を縦に振った。

つまりは、理事長が話すことはただの独り言で、それを僕が勝手に
聞いたということだ。

何かを言われても“独り言”で片づけられる。

まあ、今回の相手は一筋縄でいくような相手ではないけれど

「内村財閥の要求というのは一体なんだったんでしょうか？」

「君が所属する軽音楽部を、即廃部にするようにというものだった」

僕の問いかけに、理事長が答えてくれた。

（やはり、僕が狙いか）

「でも、一体どうして理事長が一学生の要求を？」

「内村財閥は、文部省のお偉いさんに親友がいるらしい。文部省が本
校に対して何らかの行動を起こせば、この学校はただでは済まない」

どうやら、内村財閥はかなり強力な力を有しているようだ。

（権力という名の力を自分で得たわけではないのに我が物顔でふるう

……………僕の嫌いなタイプだな）

どうやら、僕は相手に対して遠慮をする必要はないようだ。

「元々気になってたんですが……………」

僕は、ふとある疑問を理事長にぶつけてみることにした。

「彼には人格的に大いに問題があるように見受けられます。そのよう
な人物が、なぜこの学校にいるのでしょうか？」

「……………文部省から圧力をかけられたんだ。言うとおりにしなけ

れば補助金を出さないという」

理事長の悔しさ、苦しさは声からでも十分に把握することができた。

「ひどいわ……まったく」

隣に立っている会長ですら嫌悪感を感じているほどだ。

「ありがとうございます。それで、ここから一生徒ではなく、一個人としての話になるんですが……」

「何を言ってるのかね？」

僕の言葉に、戸惑いの色を見せる理事長をしり目に、僕はポケットから一枚の紙を取り出しながら声を上げる。

「もし、内村財閥によって文部省から不当な圧力が加えられた際はこちらに連絡を。きつと資金援助を無償で行ってくれるはずですから」「これは……君はいったい何者かね?!」

僕の手渡した名刺を手にした理事長の驚きのように、僕は心の中で苦笑しながら

「さあ、誰でしょう?」

ととぼけて答えるのであった。

「今回は、本当にありがとうございました」

「それはいいのだけど、本当に大丈夫?」

会長が言っているのは風紀班や生徒会などがバックアップに着くという話だった。

確かに、風紀班などがバックアップとしてついてくれば、学校内ではこれ以上ない後ろ盾だ。

「ええ。一部活に、そこまでするのは不公平でしょう」

僕はその理由で、断ったのだ。

強力な後ろ盾は確かにあることに越したことはないが、ほかの部活

に対してかなり不公平にも思われてしまう可能性もあった。

尤も、僕が知る中で強力な後ろ盾はすでに大勢いるのだから、必要がないというのものもあるが。

「それに、自分でまいた種ですし、我々で対応したいんです」

それが、一番の理由だったのかもしれない。

「……分かったわ。でも、もし必要になったらいつでも言っただい。できる限りのことはするわ」

「ありがとうございます」

僕は会長に頭を下げてお礼を述べた。

正直そんな時は来ることがないとは思いが、でもその気持ちだけでもとてもありがたかった。

「それじゃ、僕は部室に戻ります」

「ええ。がんばってね」

会長からのエールを受けながら、僕は部室に向かうのであった。

「あ、浩介！」

「ごめん、待たせた」

部室のドアを開けると待ってましたと言わんばかりに、全員が一気に僕の周りに集まってきた。

そう言えば、山中先生の姿を見かけないが、もしかしたら忙しいのかもしれないと、僕は自己完結させた。

「どうだったんですか!?!」

「そうだよ、もったいぶらずに話してよ！」

「とりあえず、説明するから落ち着いて」

僕は、矢継ぎ早に話しかけてくる皆を落ち着かせた。

「まず、今回のこの廃部の知らせはやはり、唯に脅迫状を送った犯人の仕業だった」

「はい!?!」

僕の説明が、予想外だったのか律が驚きの声を上げた。

「ち、ちよつと待って。それじゃ、その犯人がこの部を廃部にするよう

にさせたというわけ？」

律の推測に、僕は頷くことで答えた。

「そんな馬鹿なことができるわけが——」

「ううん。できるかもしれない」

信じられない律に反論をしたのは、ムギだった。

「まあ、ムギだったら相手かどのようなことをしたのかくらいは想像がつくだろうね」

「ええ。お父様がよく話していたから」

楽器チェーンを展開する琴吹グループだ。

“権力を利用した圧力”の手法を知っていて当然だった。

「えっと、つまりどういうこと？」

「それは——」

何を言っているのかわからない藩たちに、わかりやすく説明しようとしたところで、物置部屋のドアが開いた。

「自分たちの持つ権力で、圧力をかけてきたのよ。奴らは」

「和!?!」

「和ちゃん!?!」

突然現れた真鍋さんの姿に、全員が驚きの声を上げた。

「ど、どうして和ちゃんがあそこから入ってくるの?」

「いや、それ以前に何でそこまで言えるんだよ」

唯の疑問の声に律も続いた。

確かに、普通に考えればおかしいことだろう。

だが、それはおかしくもなんともなかった。

(あのバカ)

僕は頭を抱えたくなくなってしまった。

僕の目はその理由を物語っているのだ。

「その答えはすぐにわかるぞ」

「え?」

数歩前に出て真鍋さんと対峙する。

「このナイフによってな」

「えっと、浩介先輩何をするつもりですか?」

僕が取り出したナイフに、梓は慌てて真鍋さんと僕を見ながら疑問を投げかける。

「何を？ ナイフを出してすることと言えば、これしかないだろ」

僕は梓にそう答えると、ナイフを勢いよく真鍋さんの急所に向けて投げ飛ばすのであった。

第81話 次の一手

「なっ!？」

目の前の光景に、律が固まった。

「ナイフが……」

「止まってる」

滯の言葉を引き継ぐように、唯が口を開いた。

唯たちの言うとおり、真鍋さんの手前でナイフは止まっていた。

まるで、そこに壁があるかのように。

「全く、苦勞して頑張った人にやること？ それ」

「それを言うのであればもう少ししましな出方をしろ」

不満げな表情で空中で止まっているナイフを指差すそいつに、僕のため息交じりに言い返した。

「えっと……状況について行けないんですが？」

「浩君と和ちゃんって、そんなに仲が良かったっけ？」

そんな僕たちの様子を戸惑いながら見ていた律たちがある意味かわいそうに思えてきた。

「ほら、戸惑ってるじゃないか。いい加減ちゃんと元に戻れ」

「はあい」

僕の小言に不承不承と言った様子で返事をする、そいつは首元にあるタイを解いた。

「の、和ちゃんの姿が……」

「どんどん変わって行きます」

真鍋和の姿が崩れ、本当の姿に徐々に戻っていく。

やがて、そいつは本当の姿へと戻った。

「ふう……久しぶりね」

「何が久しぶりだ。この間勝手に来てたくせに」

一息つきながら白々しく挨拶をしてくる妹に、僕はあきれながら言い返した。

「あの時はぶっ倒れていたから会ったことにはなりません——」

「本当に変わらないな、お前」

妹のその姿は（というより心だけど）は未だに、昔のままだった。

「あのー、盛り上がり上がっているところ大変申し訳ないんだけど」

「ん？」

そんな僕たちに、控えめに声を掛けてきたのは律だった。

「この人誰なの？」

「あ」

唯の問いかけで、みんなが会話に混ざってこない理由がわかった。

「そういえばこの間、自己紹介してなかったっけ」

僕の言葉に、放課後ティータイムのメンバー全員が頷いて答えた。

この前というのは、もちろん時間ループ事件のことだ。

あの時も、妹には僕の身代わりとして協力をしてもらった。

その時に、唯たちと面識はあるはずだが、名前を告げてはいなかった。たので、当然彼女たちが妹のことを知っているはずがない。

「それじゃ、ご挨拶だ」

「了解だよ」

僕の促す言葉に、妹は応じると数歩前に出た。

「はぁー☆ 私の名前は皆のアイドル、高月久美子でー——ギャバン!!」

「まじめに自己紹介をしろ」

馬鹿げた自己紹介をしようとする妹の頭に魔法でタライを5つ落とした。

「あんなやり取りをどこかで見たような気がする」

「奇遇だな、私もだ」

そんな僕たちを見ていた律たちがぼそぼそと何かを話していた。

（あー、なるほど慶介か）

慶介に制裁を下すのとほとんど同じだったことに、今僕は気付いた。

ある意味慶介は侮れない存在なのかもしれない。

「えー、高月久美子です。よろしく」

再び妹はみんなに自己紹介をした。

今度はかなりテンションが低いけど。

「あ、はい。よろしくお願い……高月？」

「高月ということは……」

妹の自己紹介に応じようとする唯たちだが、苗字の方に気が付いたのか、僕の顔と妹の顔を見比べはじめた。

「妹だ（だよ）」

『……』

一瞬部室内が沈黙に包まれた。

『ええ!?!』

かと思えば今度は悲鳴が響き渡る。

「ちよつと、そんなに驚くことか!?!」

「だって、浩君に兄弟がいるなんて想像がつかなかったんだもん」

（皆の中での僕の立ち位置っていったい）

何だかとてもむなしくなってきた。しまった。

「でも、この間言った時はいなかったけど」

「そりゃ、あの時は任務で不在だったからな」

8月に事故で魔界に来たときは、久美は任務で違う世界にいたため不在だった。

それもこの間終わったが。

「任務ということは」

「魔法連盟で兄さんの下で働いているのよ」

目を輝かせて興味津々といった様子の子のムギの言葉に頷きながら、久美は答えた。

「あの、久美子さんが——にゃーッ!!?」

梓が名前を読んだ瞬間に、久美の攻撃魔法が彼女の耳元をかすめた。

「あ、こいつフルネームで呼ばれると今みたいなことをするから気を付けてね」

「それを早くいいなよ」

まさかいきなり下の名前で呼ぶとは思わなかった為、言わなかったことが仇となってしまったようだ。

（まあ、本気で当てるつもりはないだろうけど）

僕とは違つてそれくらいの分別はあるが、何も知らない人物からすれば恐怖であることには違いない。

「でも、一体どうして……」

「久美子の名前つて“久しい”に“美しい”と“子供”という字で、自分が子供みたいだからいやらしいよ。だから“久美子”という呼び名はタブー。呼ぶんなら“久美”がいい」

昔、これが原因で家が半壊しかける騒動に発展したのだが、それはどうでもいいことだろう。

「それじゃ、久美さん？」

「別に呼び捨てでもいいのに」

滯の言葉に、久美はぼそりと声を漏らしたが、どうやら嫌そうな感じはしなかった。

「むむむ……」

「唯ちゃん、どうしたの？」

そんな中、腕を組んで唸っている唯に、ムギが不思議そうに尋ねた。

「閃いた！」

「……何が？」

まるで頭の上に豆電球に光がともったような勢いで声を上げる唯に、僕は少しばかり嫌な予感を感じながら意味を尋ねた。

「クーちゃんだ！」

『………はい？』

突然口にした誰かのあだ名と思わしき単語に、梓達だけではなく久美ですら目を瞬かせていた。

「まさかとは思うが、それ久美のことか？」

「うん！・可愛いでしょ？」

やはりというべきかなんというべきか、久美のあだ名だったようだ。

(しかし、何という命知らずなことを)

「……………」

あのようなあだ名を久美が何もしないわけがない。

これはもしかしたら大戦争に発展するかもしれない。

現に横にいる久美は、うつむいて肩を震わせているのだから。

(何としてでも怪我はさせないようにしないと)

「あはははは!!」

「はい?」

だが、久美の反応は僕の予想したものとは違っていた。

「クーちゃん」って、何それっ。最高よ!」

「いいのか?」

久美の予想外の反応に、僕が戸惑う番だった。

「だって、子供だとは誰も思わないし、可愛いじゃない!」

「」「可愛い……」」

久美の感受性には家族である僕ですら分からないことがある。

「平沢さん! 私はあなたのが気に入った! 唯って呼んでいい?」

「うん! いいよー!」

そしていつの間にか二人は仲好くなっていた。

「えっと、ものすごく失礼なことを言っていた?」

「いいよ。僕も多分同じことを思ってるから」

律の確認の言葉に、僕は頷いて答えた。

「ちよっとおかしい人だよな」

僕と律の意見が一致した瞬間だった。

「それにしても、久美さんって唯先輩とお知り合いだったんですね」

「そりゃ、前に一回会ってるからな。あずにゃんもだけど」

楽しげに会話を始める唯たちを見ながら声を上げる梓に、僕はそう返した

「え? でも、私は会ったことなんてありませんよ」

「ある。時間ループの時に、僕の影武者をしたやつだ」

「ええ!?! だって、あの時はとても大人っぽいような印象だったの、にゃー!!?!」

梓が言い切る前に再び攻撃魔法が放たれた。

今度は直撃コースで。

「悪かったわね。あの時は正体を明かすわけにはいかないから、演技

をしていたからね」

「はいはい。漕、梓を離して。何となくだけど、危ないから」

「わ、わかった」

これ以上は危険だと判断した僕は漕に梓を久美から離してもらうことをお願いした。

「久美に何かを言う前に、一度考えることをお勧めするよ」

「は、はい」

僕の忠告に梓は小さく返事を返した。

「それにしても、貴女って人見知りで臆病な所があるみたいだけど、口調とかからはそんな感じはしないよね」

「え？ な、なんで……」

久美の感心したような言葉に、漕が驚きで目を見開かせる。

「あんだ、漕の精神干渉をしたな」

「い、いつ!?!」

「兄さんが倒れた時」

漕の問いかけに、久美は簡潔に答えた。

「随分最近ですね」

「ここに来てみたら兄さんは倒れているしもう大変。しかもあなたたちが来るから薬も飲ませられなくて」

「薬?」

とりあえずということ席に腰掛けた久美は出されたお茶を飲みながら、ムギの疑問に答えた。

「これのことよ」

「草?」

久美が取り出したのは月見草だった。

「名前は月見草。私たちの国で取られる万能薬。かなり苦いけどこれを飲めば大抵の病気は治るわ。ただ、これは調合をしなければいけないよ——」

「へえ……」

久美の説明に、月見草をまじまじと見つめながら感心したような声を漏らす唯。

「感心したように言ってるけど、理解できてないだろ」

「え?! それは気のせいだよ! 浩君」

(絶対に理解できてない)

まあ、理解できなくて当然なんだけど。

「急須に入れて飲ませる準備は整ったけど、あなたたちから来たからしようがなく」

「それじゃ、あの時起きた怪奇現象は」

「そ。私がやったの。貴女を操ったのも、兄さんに薬を飲ませたかったから。運ぶ人員は予想外だったから、全員に共通する人物に変装したの」

どうやら、慶介は久美の策略に巻き込まれてしまったようだ。

(なんだか慶介がかわいそうに思えてきた)

「皆もごめんなさいね。特に、漣さんには申し訳ないことを」

「あ、いえ。私はそんなに気にしていませんから」

申し訳なさそうに謝罪の言葉を口にする久美に、漣は手を振りながら答えた。

「いや、久美の言っているのはそういう意味じゃないと思う」

「干渉した時に、貴女の記憶を見てしまった」

「見た………ッ!?!」

久美の言わんとすることがわかったのか、漣は恥ずかしさのあまり失神した。

「み、漣、大丈夫か?!」

「えっと、これ私のせい?」

「はあ………放っておけば回復するよ。今何かを言ったら逆効果だから」

戸惑いの表情を浮かべる久美の肩に手を乗つけて頷きながら返すのであった。

「それで、どうしてクーちゃんはここに？」

「それは兄さんに頼まれた物を届けるためよ」

唯の疑問に答えると、久美はどこからともなく紙媒体の資料を取り出した。

「どうもありがとう」

「全く兄さんって次から次に問題を引き込むよね」

「引き込みたくて引き込んでるんじゃない」

大げさに肩をすくませる久美に、僕はため息交じりに言い返しながら資料に目を通す。

「ねえ、その資料っていったい何？」

「脅迫状を送ったやつに関する個人情報」

唯の疑問に答えながら、さらに紙をめくる。

「何で、そんなものがここに?!」

「久美に調べてもらった。こういうことに関しては、久美よりも勝る者はいないから」

「諜報活動が私の役割だからね」

ツツコミ口調の律に答える僕に、久美は胸を張りながら口を開いた。

「まるで探偵さんみたい」

「そう言うけど、こいつにかかればその人物の知られたくない過去が何もかも全て丸裸にされるから、調べられる側からすればたまったものじゃないけどね」

そう言いながらも、僕はさらに資料を読み進める。

「つと、まあこんなものか」

「さすが兄さん。その読む速さには目を見張るよね」

資料を読み終えた僕は机の上に、奴に関する資料を置いた。

「それで、その人は一体どんな奴なんだ？」

「それは申し訳ないけどあなたたちに言うことは——」「いや、いい——」
—兄さん—

身を乗り出して聞いてくる律に、申し訳なさそうに理の言葉を入れ

る久美の言葉を遮った。

「高月家の規約に反するわよ」

「別に反してはいないさ」

真剣な面持ちで忠告する久美に、僕は軽やかに返した。

「ねえ、〃規約〃って何？」

「高月家が調査で得た情報は部外者に漏えいしてはならないという物」

「他にもいくつもの条項があつて、私たちはそれを守るように言われているの」

例を挙げるとすると〃他の家系に権利行使ができるのは高月家に対して害をなす存在のみ〃だったりする。

これを破ると最悪の場合は勘当となる。

「それじゃ、私たちが聞くとまずいよな」

「だから、どうしてマズイんだ？」

「だって、私たち部外者ですよ？」

僕の疑問に答える梓に、思わずため息が漏れた。

「あのね、奴は軽音部を廃部にさせようと画策した。つまり、ここにいる全員は被害者であり関係者でもある。ゆえに知る権利がある。これでもまだ部外者だというか？」

「……………」

少しばかり強引かもしれないが、それが僕の考えたロジックだ。

何より、知ってもらおう方がメリットの方が大きい。

相手を知らずに、彼女たちに動かれればそれだけでこちらの計画は大きく狂うことになるのだから。

「情報を公開するが、条件は一つ。これから先のことは他言無用だ。ターゲットに対して忠告の道具にするのも。相手にこのことが知られた時こそ、これまでの苦労は水の泡になる。分かった？」

全員が無言で頷いたのを確認して、僕は先ほどの資料に明記されていたことを唯たちに告げることにした。

「ターゲットの名前は内村 竜輝。学年やクラスは唯たちと同じだ」

「内村って、あの人を見下したような感じのやつか」

名前だけで、顔をしかめる律をしり目に、僕は話を続ける。

「彼は『内村財閥』の御曹司。将来はそれなりのポストが保障されている。業界内でもかなりの影響力を持ち、まさに日本を代表すると言っても過言ではない存在だ」

「そう言えば、テレビでやっていたっけ」

内村財閥。

それは、金融や流通関係などあらゆるところに影響力を持つ企業だ。

当然、大富豪だ。

「その裏で、さまざまな悪事やらを行っている。こいつが、その記録」
「えっと……脅迫罪に賄賂、賭博、暴行、監禁、恐喝……って、どんだけあるんだよっ！」

「ざっと50犯以上だ。しかも暴力団の連中とも接点があるから、彼に逆らって生存が確認されているのは一人もいない」

僕の突きつけた真実に、唯たちが顔を青ざめる。

「他にも文部省やら財務省、公安等にも息がかかった者がいる。だから、何かをしてもすべて揉み消される」

「酷すぎますっ」

内村財閥の裏の顔を知った梓が、怒った様子で声を上げた。

「僕は、そう言うやつを何とかすることができる力がある」

「それって、魔法？」

ムギの言葉に、僕は首を横に振って応えた。

「権力だよ」

「権力？」

「高月家は大金持ちの家系や名家などに対抗する権力がある。それが調査と破門の二つ」

それが僕の持つ切り札だった。

「ねえねえ、破門ってあのドラマとかで良く出る奴？」

「ちよつとニュアンスは違う。僕たちで言う破門は、簡単に言えばその家の資産や財産、家財すべてを没収して家そのものの活動を止める行為のことを言う……分かる？」

「さっぱりわかりません！」

簡単に説明してみたが、簡単には言えなかった。

唯がわからなくて当然なのかもしれない。

「まあ、とりあえずすごい力ということだけを覚えてくれればいいよ」
それが一番確実だった。

「破門という行為は人権を無視しているから、やれば確実に僕たちは犯罪者になる。しかも公にすることも不可能だ」

「それじゃ、どうする気なんですか？」

「工作課の者たちを使う」

僕の出した策は工作課の職員を利用することだった。

「工作課？」

「あ、工作課っていうのはね、ここのように魔法文化の無い世界に任務に出る魔法使いの人をアシストする人たちのことよ」

「工作課の者たちは、出版業界や金融関係、教育や医療に公安系など様々な業種の場所に普通の人間を装って潜り込んでいる。主な任務は対象者の監視などかな」

新たに出てきた単語に首をかしげて率に、久美と僕は工作課について説明した。

「そう言えば、去年のクリスマスあたりに、あなたたちが監視されていたっていう記録があるけど」

「なんと?! 私たちはいつの間に危険人物に!？」

「それはちよつと言いすぎだと思うぞ」

律たちはそこまで危険じゃないのだから。

「クリスマス会で彼女たちの前で一発芸をするために魔法を使ったから」

「あー、確かにそれなら監視されても仕方ないかも」

糾弾しないあたり、僕がばれないように細心の注意を払ったことは分かってはいたみたいだ。

「やっぱりあれって魔法だったんだ」

“ やっぱり ” という単語が出てくるのは、僕が魔法使いであることがわかったからなのか？

それとも、それよりも前に考えていたからなのか。
それが全く分からなかった。

「ちなみに、このの学校にもいるからね」

「いつの間に!？」

「し、知らなかった」

実は先回り形式で潜り込むため、気づけばそこにいるのが工作課の特徴だ。

「ちなみに、探し出すのは困難だよ。催眠術で深層心理レベルで自然がないように思いこましているから。聞きまわったりしたら変人扱いされるし」

「それに、当たりを引いたら面倒なことになる。工作課の人たちのことは気にしなくて平気よ。何もしなければ味方なんだから」

僕の言葉に続くように久美が補足した。

皆には言っていないが、工作課の存在は僕が生きるためには必要不可欠な存在だ。

それが、お金。

魔界の通貨は、日本円だ。

その所以は、魔界の者が最初に向かったのが日本だからというのがあるが、真相は不明だ。

故郷にあるお金を、ここに持ち込んで利用すれば、お札が大量に出回ることになり、それはこの国の財政をより悪化させる可能性がある。

それを防ぐのが金融関係に入り込んだ工作課の者たちだ。

どうやって課は知らないが、僕の所有する故郷のお金と引き換えにこの国の通貨に変換してもらっているのだ。

「僕はこれまで、こういう連中のやり口を見てきたから次に起こす行動は手に取るようにわかる。そこで、僕たちは次の一手を打とうと思う。そこでみんなに協力してもらいたいことが一つある」

「それは一体何? 浩君」

首をかしげながら聞いてくる唯たちに、僕は協力してもらいたいことの内容を告げるのであった。

第82話 静かなる攻防

夜、某所にある豪邸にて。

「ああ!? 圧力が効かねえだあ?!」

広々とした寝室と思わしき部屋に竜輝の怒鳴り声が響き渡った。

『も、申し訳ありません。ですが、これ以上圧力をかけても無駄です』

「ああもういい!」

竜輝はそう吐き捨てるのと電話を切った。

「おのれ、高月浩介……こうなったらとことんやってやろうじゃねえかあ!」

竜輝は再び電話をかける。

「俺だ」

『これは、竜輝お坊ちやま。いかがなされましたか?』

電話に出たのは男性のようだった。

竜輝は電話口の男に容赦なく命令を与えた。

「琴吹グループの株を明日中にすべて買い取れ! 買い取ったら経営陣を追い出せ。いいか、明日中にだ!」

『かしこまりました』

それは企業買収の指示だった。

「貴様のせいで周りがどんどん不幸になっていく。その悔しさ、無力さを思い知れ!! ガハハハハ」

竜輝は勝ち誇ったように笑う。

だが、彼は知らない。

竜輝が喧嘩を吹っ掛けている相手がどれほど残虐で、恐ろしい人物であるかを。

そして、この行動がどのような結果をもたらすのかを。

ターゲットが動き出したのは僕が協力をしてほしいことを頼んだ次の日だった。

「おい、高月浩介」

「……………何だ？」

いつものように通学しているさなか、内村から声を掛けられた。

「お前、俺様の忠告を無視したな」

「忠告も何も、私は貴様のような奴の命令を聞くつもりはない」

そう告げて奴の横をすり抜けようとした時、内村は小さな声で告げた。

「貴様のせいで周りにいる奴が不幸になるぞ。楽しみにしておけ」

そのまま勝ち誇った様子で立ち去る内村。

(さて、その不幸とやらを見せてもらおうか)

だが、その脅しにも僕は動揺などはしなかった。

変化は唐突だった。

それは昼休みになってから少ししてからのことだった。

「高月君!!」

「ッ?!」

突然教室中に響き渡る叫び声にも近い声に、僕は思わず直立不動で立ち上がってしまった。

「ちよつと、こつちに来て」

「あ、ムギ！ 引つ張るな!!」

僕は血相を欠いたムギによつて、無理やり教室から連れ出されるとそのまま廊下を走って階段を下りてさらに走り出す。

「いい加減に落ち着け！」

「……………っ！」

僕の一喝で、ようやく落ち着きを取り戻したのか、ムギは走る速度を落として僕の腕を握りしめていた手の力を弱めた。

「それで、何があったんだ？」

「これを見てっ」

そう言つてムギから手渡されたのは、経済ニュースのトピックスだった。

そこにはこう記されていた。

『内村財閥、琴吹グループを買収か?』

(来ると思つてたけど、本当にやってきたか)

成金の権力を持つバカがやることと言えば圧力に買収などの嫌がらせだろう。

「私、どうすればいいかわからなくて」

「安心しな。僕は奴らよりも百歩先を行つている。既に手は打つてある」

当然想定済みなので、策は打つてあつた。

「放課後になつたら結果が出るはずだから。この間のお願い、くれぐれも忘れないで」

「うん、浩介君を信じる」

僕の言葉を信じたムギに、僕は頷くことで相槌を打つた。

「ほら、早く行かないと昼休みが終わるよ?」

「あ、本当だ。それじゃ放課後」

「ああ」

去つていくムギに手を振りながら僕は彼女を見送つた。

「にしても、墓穴を掘るとは言うが、本当に墓穴を掘つたな」

僕はそうつぶやきながら携帯電話を取り出すとある場所に電話をかける。

「私だ。例の件はどうなつている?」

『はい。こちらはすべて順調です。貴方に言われた通りに行つております。このままいけばこちらの勝利で確定でしょう』

電話先の男性の報告に、僕は心の中でガッツポーズをしながら頷いた。

「ご苦労。そのまま、作業を続けて」

『かしこまりました』

そして僕は電話を切る。

現在電話先の男を含め数十人が、琴吹グループ買収を阻止するべく

行動を起こしているのだ。

そして僕の想像通り、放課後にはすべて片が付いているだろう。
(さて、次向こう側が打ってくるであろう手を考えますか)

僕は次なる手を考えながら教室へと向かうのであった。

★ ★ ★ ★ ★

同日の夜、内村家にて。

「は？ もう一度言っ、ママ」

自宅に戻った竜輝は、突然告げられた言葉が理解できずに、母親に聞きかえした。

「ですから、内村財閥が消滅したのよ!」

告げられたのは衝撃的な内容だった。

「そんな馬鹿な! 俺様の財閥が消滅だなんて! 事実なのよ! 株主たちが株を別の会社に売ってその会社に乗っ取られたのよ!!」

「パ、パパは?!? パパはどこに?!」

「今、急いで株主の所に行って株を買い戻すように頼んでいるわ」

内村家は朝まではいつもの勝ち組から、一気に負け組の座へと転落することとなった。

「でも安心して竜輝。まだ、我が家には隠し資産が数十億あるから」

「そ、そうか。明後日には再建できるだろ」

母親の言葉に、竜輝も平静を取り戻した。

「さあ、お夕食を食べて寝なさい」

「ああ」

話はここで一度終わったかに思えたが、さらに転落は止まらない。

翌日、内村家の両親は賄賂や脅迫などの罪で逮捕された。

彼に関係する政治家や暴力団関係者も次々に摘発されていく。

徐々に徐々に、彼はつながりを失っていくのだ。

そして二日ほどして、竜輝は家を追われた。

とある工業団地内にある3階建ての廃工場となった建物。

そこは夜になれば人通りは皆無となり、絶好の潜伏場所となっていた。

廃工場になったのは、数十年前にある事故が発生したためであるとされている。

そこに竜輝は身を潜めていた。

『もう私には連絡しないでください。貴方とはもう手を切ったのですから』

「あ、待て！……ちくしょう……ちくしょう……畜生!!!」

かろうじてつながる電話で、かつて便利屋のように使っていた男から拒絶された竜輝は、毒づく。

「どういうことだ。この俺様がどうしてこんな目に合うのだ！」

ついに彼は、何もかもすべてを失ったのだ。

「お坊ちやま、ここにいましたか」

「あん？」

そんな中、竜輝に声を掛けたのはスーツを着込んだ中年男性だった。

「田中」

「このたびは大変な目に合われたようで」

同情の言葉を投げかける田中と呼ばれた人物に、竜輝は威圧的な目で睨みつける。

「私は、お坊ちやまの味方です」

「はん！ そうだ、それが正しい。またすぐに返り咲いてやるさ」

ようやく得たつながりに、竜輝の威勢が取り戻されたのだ。

「おい、こうなった理由は分かったのか？」

「ええ。お坊ちやまが琴吹グループを買収し始めたのと同じタイミングで、ある企業が株主たちに高額な金を払って株を売らせたのです」
調べておいたのか竜輝の問いかけに答える田中が、事の真相を語った。

「その額、株を売った際の金額が最大で5億、それにプラスで毎年1億だそうです」

「な、なんだと?! どうしてそんな大金を株主に配当ができるっ!!
その企業は何者だ!!」

「こちらです」

その高額すぎる金額に、驚きを隠せない竜輝は田中を問い詰める。

「ムーントラフィック? なんだ、この会社は」

「貿易会社だそうです。色々な技術を様々なところに低価格で販売する企業だとか」

ムーントラフィックこそが、今回の内村財閥の転落劇の幕を開けた張本人だった事を知った竜輝は、さらに核心に迫る。

「代表は誰だ?」

「それが、お坊ちやまと同学年の学生です。名前が“高月浩介”と
なってます」

その名を聞いた瞬間、廃工場内に大きな音が響き渡った。

それは竜輝が近くにあった鉄材を蹴り飛ばしたからだ。

「ちくしょう! あの野郎っ!! そう言うことかっ」

竜輝はこの時初めて、浩介の言葉の意味を理解した。

『あまり私たちにケンカを売らない方がいいぞ?』

(そう言う意味かよ。だが、貴様はこの俺様を怒らせた! こうなれば地獄の底まで突き落として俺様と同じ目に合わせてやるっ!)

浩介に対して身勝手な恨みを抱いた竜輝は、口を開いた。

「おい、田中」

「はい。何でしょうか?」

そして、竜輝はそれを告げる。

「奴の……高月浩介に関する弱みを調べろ。脅せられるのであれば何でもいい」

「かしこまりました」

竜輝の命令に、田中は一礼すると、廃工場を去っていった。

「この俺様に惨めな思いをさせた罰、受けてもらうぞ。ガハハハハハ!!」

しばらくの間、廃工場から竜輝の不気味な笑い声が響き渡るのであった。



数日ほど経った10月になって間もないある日の放課後のこと。

僕たちはいつものようにティータイムの時間を過ごしていた。

「それにしても、まさか内村があんなことをするなんて」

「企業買収でのいやがらせ行為は、権力を持ったバカがやる行動だからな。真っ先に思い付いていたんだよ」

律の言葉に、僕はため息交じりに相槌を打った。

「他にも唯たちの両親の働く会社に妨害をする可能性を考慮していたけれど、どうやら琴吹グループだったようだし」

「あの、浩介先輩」

「何？ あずにゃん」

そんな中、神妙な顔で聞いてくる梓に、僕は用件を尋ねた。

「一体浩介先輩は何をしたんですか？」

「目には目を歯には歯を。その理論に基づいて、逆に内村財閥を買収してやったんだよ」

僕が行ったのは実に単純なものだった。

「でも、財閥の買収は不可能だって……」

「え、そうなの？」

ムギの言葉に、唯が反応した。

「うん。いくつもの会社が一つにまとまったような感じで、買収するのは不可能だって言っていたわ」

「だから、それらの会社を一斉に買収したんだよ。株主に莫大な報酬を支払うことを約束してね」

普通ならば、財閥を買収することは不可能だ。

だが、僕は不可能を可能にすることができる。

経済での企業買収でものをいうのは、やはり資金だ。

幸い僕にはその資金はあまるほどあった。

なので、それを利用したのだ。

「ちなみに、おいくらくらいっ……」

「えつと……5000くらいかな」

単純計算ではあるが大体はそのくらいの費用はかかっているはずだ。

「それって、億単位じゃないよな？」

「もちろん。兆単位です」

本当はさらに値段がかさむのではないかと覚悟していたが、わりと安く済んでくれたので、よかった。

「ということは、内村財閥のすべての経営権が浩介の手の内に!？」

「そんなわけではないよ。個人でできることなんてたかが知れてる。買収を仕掛けたのは立派な会社だよ」

そう言いながら、僕は一枚の名刺を机の上に置いた。

「えつと……ムーントラフィック会長お!？」

「僕、学生と会社の会長を兼任していたりするから」

僕の名刺を見た藩が、衝撃のあまりに語尾を荒げた。

「ムーントラフィックって、確か貿易会社だったよね？」

「表向きはね。さまざまな技術を格安で販売する企業。その真の顔は僕たち魔法使いの中継をする施設」

僕が行く世界（もちろん魔法文化なしだが）で長期間滞在する場合、このような企業を設立することによってサポート体制を整えているのだ。

「もう何でもアリだよな」

律のどこか呆れたような言葉が、皆の心境を物語っていた。

「この会社の重役はすべて魔法連盟の職員だから、魔法関連に対する相談なども受け付けているし、一種の司令塔のような感じにもなっている。僕はそこで会長職として、会社の経営をコントロールしているんだ。今回の買収も、僕が部下に指示を出して職員総動員でやらせたから、功労者は部下だと思おうよ」

「へえ、浩君ってすごいんだね」

分かったような、わかっていないような、微妙は反応をしながら感想を口にする唯。

「それで、内村先輩は今どうなってるんでしょうか？」

「家も追われているはずだから今までのように不自由の無い生活はできなйдらうな」

企業買収の後は本当にあっけなかった。

彼と深くつながっていた政治家を工作課の人に命令を出して逮捕させたりして、無力化していくのはとても簡単だった。

(まあ、まだ一か所残してあるんだけどね)

内村と深くつながっている人物で“田中探偵事務所”というのがある。

そこは内村が相手を蹴落とす材料を探させるために利用する、一種の情報屋のような存在だ。

そこを残したのは、まだすべてを終わらせるわけにはいかないからだ。

近いうち、彼は必ず報復行動を起こす。

そのシグナルとして探偵事務所を利用するのだ。

彼が動き出せば内村がついに行動を起こしたということになるのだから。

そして、そのためのエサも十分に用意している。

後は、彼が動き出すだけ。

「それよりも、この前の約束は忘れてないよな？」

「ええ、もちろん」

僕の確認の言葉に、ムギを筆頭に全員が頷いて答えた。

それは、この間久美が来た時のこと。

「それは一体何？ 浩君」

「それは、内村に対して交渉のようなことを持ちかけないこと」

唯の問いかけに、僕はそう告げた。

「どういうことだ？」

「奴のような人種に交渉を持ちかけても無駄だ。逆上して危害を加えたり、辱めを受ける可能性があるということだ」

『っ!?!』

久美以外の全員が僕の言葉に息をのんだ。

「僕はこれまでにそう言う人物を多く見てきた。だから言っている。絶対に交渉を持ちかけてはダメ。向こうが何をしてもこちら側で全対処はする。だから、絶対に皆は行動を起こさないで。それが条件。約束できるか？」

「うん。分かったよ！ 浩君」

唯をきっかけに、次々と頷いていく濡たち。

このおかげで、僕は思うように動くことができたのだ。

そうでなければ、現在ほとんどでもない事態に発展していたかもしれない。

この頼みは不幸な結末をたどった事例を多く見たからこそその物だったのだから。

唯たちにそのような結末を辿ってほしくはない。

それが僕の思いだった。

「あの時の約束だけど、様子見でもうしばらく継続させる」

「それって、まだ終わりじゃないということ？」

濡はさすがに鋭い。

だが、本当のことを言うわけにはいかなかった。

「そう言うわけじゃないけど、念のためだ」

だからこそ、嘘でも本当でもないグレーゾーンの答え方をしたのだ。

「本当に終わってるといいですよね」

梓のその言葉が、今後のことをなんとなく示唆しているような気がした。

第83話 探偵現る

徐々に昼が短くなるこの季節。

僕はある問題を抱えていた。

(やっぱりついてきてる)

背後をついてくる人物がいることだ。

誰なのかはわかってる。

おそらくは田中探偵事務所の者だろう。

早い話が尾行されているということだ。

だが、僕はその尾行にすでに気づいていた。

この僕を尾行し始めて今日で3日目。

よく粘るなど感心してしまうほどだ。

(だがまあ、そろそろ頃合いだろう)

僕は今日でこの無意味な尾行をやめさせるつもりだ。

そのために、僕は人気のない場所に向かっているのだから。

(さて、そろそろかな)

心の中でそうつぶやいた瞬間だった。

「うわ!？」

何かに躓いた僕は、転びそうになるが何とかそれを防ぐことに成功した。

「ああ!？」

だが、手に持っていた新聞で包まれた花瓶を落としてしまった。

ガラスの割れる音が、花瓶がどうなったのかを十分に物語っていた。

「やっっちゃった」

この日、たまたまいい花瓶を見つけた僕は、家に飾ろうと購入しておいたのだが、それが仇となってしまったようだ。

「ここなら、人目もないし……」

周囲を見渡してみるが、人影は特に見当たらなかった。

探偵はいるようだが、見えないようにすればばれないだろう。

そう判断した僕は地面に無残にも落ちている花瓶に向けて手をか

ざした。

「リペア」

たった一つの呪文だった。

花瓶はまるで巻き戻したかのように元に戻っていき、最終的には僕の手のひらに収まった。

「よし、これで——「嘘だろ?!」——ん?」

大丈夫だと言いかけたところで、後ろの方で男の驚きに満ちた声が聞こえた。

「な、何か?」

「今、花瓶が……」

驚きか、それとも興奮か走らないが口をパクパクさせ手を花瓶と僕に向けて交互に指していた。

「この花瓶がどうしたんですか?」

「割れた花瓶を、今魔法で!」

「魔法みたいがいい花瓶なんですよ?」

しつかりと見ていたようで、声を上げる探偵の人に、僕は誤魔化すように口を開いた。

「いや、違う。俺は見た……お前人間じゃないだろ!!」

「ちよつと、大きな声を出さないてくださいよ! 人に聞かれるじゃないですか」

大声で叫ぶ探偵に、僕は慌てて懇願した。

「だったら、素直に認めろ。お前は人間ではない」

(面倒くさいな)

遊びで相手をしていたが、そろそろ鬱陶しくなってきた。

(どこかに行ってもらおうか)

外国はかわいそうなのでこの近辺でいいだろう。

僕は手の平に魔法陣を描く。

「リブルト」

そしてたった一言呪文を唱えた。

次の瞬間、探偵の姿は無くなっていた。

★ ★ ★ ★ ★

日本某所にある小さな事務所。

「俺は2枚交換だ」

「なら、俺は3枚だ」

アンティーク調の家具に囲まれたその一室に壁に立てかけてある『人情』という文字が書かれている額縁という異様な空間に、3人の男の姿があった。

手下と思われる二人はトランプ（おそらくはポーカー）をし、社長椅子に腰かける黒ひげを生やしたおそらくは頭であろう男は、デスクの上に置かれた何かに目を通していた。

ここは、とある暴力団の事務所なのだ。

だが、普段はとても優しい人たちだ。

人情に厚く義理堅いのが彼らだ。

「お前は人間ではない！……あれ？」

そんな一室に現れたスーツを着込んだ田中が現れ、一番偉いであろう社長椅子に腰かけた男を指差して大声で告げた。

「ああ？」

「あれ？」

突然の侵入者と、余りにも無礼なその言葉に組員たちの怒りは爆発した。

一瞬で二人に挟まれる田中。

がっしりとした体格の良い手下の男は、指の関節を鳴らしながら、田中をにらみつける。

「やれ」

「のおおおおお!!!」

頭の一言で、田中は組員からの手荒い洗礼を受けることとなった。そう、彼らは怒らせると非常に恐ろしい暴力団なのだ。

★ ★ ★ ★ ★

今日は学校も部活も休みだ。

こういう日は、買い物をするのに限る。

そう言うわけで、この日は町一番の大型スーパーにやって来ていた。

(食用酒でも買おうかな)

そう思い、僕はお酒のコーナーへと向かっていく。

(それにしても、やっぱりついてきてる)

後ろの方をつけてくる探偵の気配を僕は察知していた。

(やはり近場はダメか)

懲らしめるつもりだったが、近場ならば大して懲らしめることはできないのではと思った瞬間だった。

(とはいえ、このまま追いかけてつこを続けるのもいやだし……話しますか)

僕は探偵と話し合おうと考え、角を曲がると反転して探偵が来るのを待った。

「っ!？」

「さつきから人を付け回してますけど、何の用ですか？」

突然目の前に現れた僕に驚く探偵に、僕は用件を尋ねることにした。

「俺の尾行に気付くとは、さすがは人間じゃないな」

「あんなバレバレな尾行、誰でもバレますよ」

ため息交じりに反論をする僕をしり目に、探偵は僕のほうに歩いてくる。

「この間は良くもやってくれたな。おかげで俺はやくぎにボコボコにされたんだぞ」

(なぜにやくぎ?!)

探偵の言葉に、僕は思わず驚いてしまった。

飛ばした先は適当だったが、そういう場所に飛ばされるといっている意味すごい奇跡なのかもしれない。

「俺はな、とある人物からお前を調べるように依頼された探偵なんだよ。いいのかな? このことを報告しても」

「報告されて困るようなことを、僕はしてませんよ」

男の脅迫に、僕はとぼけながら言い返す。

「魔法使いだってことも?」

「魔法使い!? 探偵さん、童話の読みすぎですよ」

探偵の言葉を笑い飛ばしながら否定した。

これは僕にしてみれば言い交し方だという自信がある。

「俺、童話は読まないんだけど」

だが、男の切り返しも非常に鋭かった。

(だから魔法使いの怖さを知らないのか)

男の無謀さの理由が、僕にはなんとなくわかったような気がした。

(それなら、もう一度ボコボコにしてもらいますか)

「もうすでに証拠は揃えてるんだ。これをあの方に報告してその後に世間に言いふらしてやる。今度こそ——」

「リブルト」

僕はこの間と同じ場所に男を転移魔法で飛ばした。



日本国内にある暴力団事務所。

「穴に落ちて一回休み!」

「ちくしょう!」

この日も、事務所内は和やかな雰囲気に含まれていた。

ちなみに、手下の二人がしているゲームはすごろくのようなのだ。

「その時に後悔するのはお前だつ!!!」

「ああ?!」

そんな雰囲気ぶち壊すように突如現れ頭に向かって指をさしながら大声で告げたのは、また田中だった。

「あ、あれ!」

手下の二人は、素早い動きで田中を挟むように移動すると指の関節を鳴らす。

「ど、どうぞー!」

「どうも」

そんな時、田中は偶然手にしていたお酒を、頭の男に差し出した。

「やれ」

「うそお」

頭の指示でさらに距離を詰める二人に、田中は絶望に染まった表情を浮かべた。

「のおおおおお!!!?」

「てめえ、ふざけるなよこの野郎!!」

「いい加減にしろ!!」

前回よりもバイオレンスな洗礼を、田中は受ける羽目になるのであった。

★ ★ ★ ★ ★

明日もまた休日。

だが、僕に気の休まる時はない。

次に開かれるH&Pのライブなどのプランを考えたりする必要があるのだから。

「ん? 電話だ」

そんな時に鳴り響く携帯電話に、僕は相手が誰だろうと思いつながら出ることにした。

「はい、高月です」

『この間は良くもやってくれたな!』

電話口から聞こえてきたのは探偵の男の声だった。

(まだ懲りてないのか)

その執着心には、敵ながら称賛のを送りたくなくなってしまいう程に強かった。

『貴様のことを世間にはらしてやる。これでお前はおしまいだあ!!』
(またボコボコにされて、壊れたか……いや、本性が出てきたというベ
きかな)

さすがは生きる価値のない男と関係を持っている探偵なだけはあ

る。

「分かった。何が望みだ？ 金か？」

『そうだなあ……まずは車が欲しいな。それと大金に不老長寿だ』
「……………」

思わず罵声をあげそうになるのを、僕は必死にこらえた。

これが、人間の愚かさというものだろうか。

(反人間派が出るわけだ)

こういう人しか会わなければ、きっと僕もそうになっていたかもしれないのだから。

そう思うと、僕がどれだけ恵まれていたのかがわかるような気がした。

「分かりました。ですが、電話越しではうまく出せるかわかりません。なので、実際に会ってお渡ししたいんですが。場所を指定してもらってもいいですか？」

『いいだろう。ではお前の家の近くの公園に來い』

それだけ告げて、電話は一方的に切られた。

「……………」

不通音を聞きながら、僕は目を閉じる。

だがすぐに目を開けた。

「さあ、行くか」

そして、僕は男との待ち合わせ場所に向かうのであった。

公園には夜遅いせいもあってか、人の気配は一切なかった。

だが、公園の街灯付近にそいつはいた。

「来たな」

「お待たせしました」

仕度を済ませてきた僕は、待たせていた探偵の男に詫びを入れる。

「まあいい。感じが出てるじゃないか」

「ええ。成功させるために必要ですから」

僕は杖状のクリエイトを構える。

「それじゃ、いきます」

男の前に立った僕は、そう告げると杖の先を男に向けて構えた。

「グラビティ・プレス」

「がっ!!」

僕がつむいだ呪文によって、男はまるで地面に縫い付けられるかのように地面に這いつくばる。

「ぎ、ぎぎぎまあ、なにをじだあ!!」

「グラビティ・プレス……対象の重力を重くすることによって動きを封じ込める魔法。貴様のような雑種にはぴったりだ」

僕は男に懇切丁寧に、今掛けた魔法のことを説明した。

「だ、騙したのかッ」

「そもそも、お前の願うような魔法など、この世には存在しない。存在したとしても誰が貴様のようなゴミに魔法を使うか」

魔法とは奇跡を起こす力。

不老長寿の魔法など、おとぎ話に過ぎないのだ。

魔法でお金は増やせるが、それはただのコピーでしかない。

人間が描いたむなし夢なのだ。

「畜生！　こうなれば、こいつを使って、やる」

「防犯ブザーか」

かろうじて動かさせた男の手にあるのは、防犯ブザーだった。

紐を抜くと大音量でアラームが鳴り響く代物だ。

「これで人がやってくるっ」

「無駄だと思うよ」

男の目論見を、僕はバツサリと斬り捨てた。

「だって、この空間結界に覆われていて外からも内部からも僕たち以外には入ったり出たりすることも干渉することもできないから」

「は、ハッターを」

男はそう言うが、これは本当のことだ。

もうすでにこの公園は隔離結界魔法によつて完全に隔離されていた。

「おかしいと思わない？ まだ人通りがないとは言えない時間帯なのに、人っ子一人通らないなんて」

「……………」

僕の指摘に、男の顔が青ざめていく。

「ではご紹介しよう。僕の誇る優秀な部下たちをね」

僕が右腕を上げた瞬間、男を取り囲むように数十人の魔法連盟の職員が姿を現した。

「ひい!？」

「いやあ、我が国はね今反人間派がうっぶんをためすぎていて爆発寸前なんだよ。お前という存在でそれを鎮静化させようと思つてな」

その職員たちの迫力に、悲鳴を上げる男に僕は肩をわざとらしく疎めながら男に言った。

僕の計画は、この男を利用して国民の人間に対する攻撃感情を柔らめるといふものだった。

一度憂さ晴らしをすれば、冷静になるだろうからその際に話を詰めていくのだ。

「いいことを教えてやるよ」

僕は地面に這いつくばっている男の前でかがみこみながらそう切り出した。

「僕は、最初からお前の尾行には気づいていた。気づいていて“わざと”魔法を使ったのさ。お前に弱みを握らせるためにね」

「ッ!？」

僕の告げた真実に、男は歯をカチカチと鳴らしながら震えていた。

「目的は貴様を生贄に、人間と魔族の共存を進めるため。貴様らのようなゴミを掃除できて一石二鳥だ」

「あ……………あ」

僕の言葉に、男はさらに震える。

そんな彼に止めを刺すように、僕はこう告げた。

「お前は手と手を取り合うきつかけを作る事しか価値のない、哀れな

男なんだよ」

「あ——」

その言葉を告げた瞬間、男の目から色が抜けた

「マインドブレイク精神崩壊を確認。罪状は倫理規定法違反、および脅迫罪。連行しろ」

「はっ!!」

僕の指示に、職員は敬礼をしながら応じると、男の腕をつかんで転移魔法によって僕の前から姿を消した。

残されたのは、僕と久美の二人だけだった。

「兄さんも残虐だよね」

「そうか?」

久美の言葉に、僕はとぼけながら応じた。

「わざと人間の心を破壊するなんて」

「それくらいしても罰は当たらないだろ。奴はそれ相応のことをしたのだからな」

僕のあの言葉は、男の精神を破壊させるための物だった。

それを人は精神干渉魔法といい、僕はこの魔法に掛けては群を抜いて強い力を持っていた。

僕がその気になれば、先ほどのように心を破壊することができるのだ。

「人間は意思のない人形のようなもんだ。操ろうと思えば簡単に操れるし、破壊しようと思えば簡単に心を破壊できる」

僕は最後に“まあ、そこがいいんだけどね”と続けた。

「さて、そろそろ大詰めに入るよ。久美も準備の方、頼むよ」

「任せて」

僕の言葉に、久美は力強く答えて僕の前から立ち去ろうとするが、ふとその足を止めた。

「ねえ、兄さん。聞きたいことがあるんだけど」

「何だ?」

久美の切り出した言葉に、僕は先を促した。

「兄さんがそこまで躍起になって財閥を滅ぼそうするのは何のため?」

「いきなり何を言うんだ？」

久美の疑問の言葉に、僕は軽く笑いながら返した。

「だって、兄さんはこれまで何をすることも目的があったはずでしょ。今回の目的は私にはどれも後付けのようにしか思えないの」

「……………何が言いたい」

久美のもったいぶった言い方に焦らされているような感覚を受けた僕は、思わず声のトーンを低くして言い返した。

「兄さんが、ここまで力を入れるのは、軽音部の皆のため？ それとも、唯さんのため？」

「ッ!!」

思わず唯の名前に僕は反応してしまった。

鼓動が速くなる。

(……………そうか)

そして僕は理解した。

僕自身の気持ち。

ここまで行動をする本当の理由を。

「僕が、ここまでするのは——」

そして、僕は久美に告げるのであった。

僕がここまでする本当の理由を。

自分の本心を。

第84話 終わりと思ひ

「ちくしょう、どうなってんだよ！」

とある廃工場にて、竜輝は毒づく。

「あいつはいつになつたら来るんだ！」

竜輝は、探偵である田中が来るのを待っていた。

だが、来ると言った日から数日過ぎてても来る兆しはなかった。

待っている間に、彼を取り巻く状況はさらに悪化していった。

(電話も止まって連絡ができねえ)

彼の携帯電話は、ついに止められてしまい連絡をとる手段がなくなってしまった。

食料は、手にしていた財布にあるお金を利用してコンビニ弁当で済ませている。

だが、お金も残り200円と、ついに底を尽きかけていた。

彼は電話が止まる前に田中から、浩介が魔法使いであるとの報告の連絡を受けていたのだ。

当初は笑い話にして気にも留めてはいなかったが、証拠を持ってくるといふ田中の言葉に、竜輝はその証拠が来るのを待っていたのだ。

(……まさか始末されたか！)

竜輝は、すぐにその結論に至った。

笑い話にして気にも留めていなかったことが、現実であるということとを悟ったのだ。

「やつとわかったぜ。魔法で平沢唯の心を操ってるんだな！ 何たる非業!! いや、外道！」

自分のやっていることを棚に上げ、勝手な妄想を口にする竜輝の心に、ふつふつと怒りが芽生え始めた。

「こうなったら、この俺様で化け物を始末してやろうじゃないか！」

(だが、どうやってだ?)

浩介に対抗する手段を竜輝は持っていなかった。

暴力団などつつながりがあれば別だが、今の隆起には武器になるような存在など残されてはいないのだ。

「……………とにかく、探すか」

竜輝は外を歩いて武器になりそうなものを探すことにした。

工業団地はどこも柵で覆われており、中に入ることはできても工場施設内にまで足を踏み入れることはできないのは、すでに把握していた。

「その坊や」

「あん？」

そんな時、彼を呼び止めたのは黒のローブをかぶった人物だった。

「誰だてめえ」

「私は可愛そうな坊やの救世主」

威圧的な竜輝の言葉に、女性の声が返ってきた。

声からして老婆のようだった。

「坊やは大きな力に立ち向かおうとしている」

「……………」

老婆の話を、竜輝は生まれて初めて親身になって聞き入れていた。

「そんな坊やにこれを渡そう」

「何だこのおもちゃは？」

老婆から手渡されたのは首にかけるタイプのアクセサリだった。

それを怪訝そうな様子で首をかしげる彼に、老婆は応える。

「それは、坊やの身を守るお守り。それがあれば自分を守ることができるとよ」

「はっ……………まあ、ババアの顔を立ててもらってやるよ」

竜輝は老婆からひったくるようにアクセサリを奪い取り、その場を去っていった。

「……………」

その様子を、老婆は無言で見送るのであった。

★★★★★

「じゃあな、唯」

「うん。またね——浩君」

哀れな探偵を一人潰してから二日たった。

夕暮れ時、僕はいつもの場所で唯と別れる。

この日も、何事もなく一日を終えようとしていた。

(あいつの話だと、すでに接触は済ませているようだから、そろそろのはずだけど)

一体いつになるのか、僕にはわからなかったが、とりあえず気長に待つことにした。

内村が行動を起こす時まで。

「ん？ 電話だ」

自宅に戻って数時間程が経ったとき、携帯電話が着信を告げた。

「つて、唯からか」

相手を確認すると、電話をかけてきたのは唯だった。

(一体こんな夜遅くに何の用だ?)

ため息をつきそうになるのを必死にこらえ、僕は着信ボタンを押すと耳にあてた。

「もしも——」

『浩君！ 助けてっ!!』

僕が言い切る前に、唯の助けを求める声が聞こえた。

『よう、高月い』

「内村っ」

続いて電話口から聞こえたのは内村の声だった。

『よくも俺様に、ひもじい生活をさせたな』

「自業自得だ。それよりも、貴様何をしている」

『何を？ 俺様のものを取り返したただけだ』

僕の言葉に、内村は人を苛立たせるような声で答えた。

「……………」

『話がしたいんなら来いよ。場所は——』

内村から場所を聞き出した僕は、急いで家を飛び出す。

(なんとということだっ！)

僕は自分の浅はかさを悔やんでいた。

極限状態に追い詰められた人間は、時にして理解できない行動をす

ることがある。

そのようなことはすでに知っていたはずだ。

僕はそのことを完全に考えていなかった。

(今は一刻も早く唯を助けないと！)

僕は途中で久美に結界を展開してもらえるように頼み、指定された場所へと向かっていくのであった。

指定された場所はどこかの廃工場だった。

周囲を見ると生活していた痕跡があり、ここが奴の寢床だったのだろう。

(入り口付近の花束は何の意味があるんだろう？)

ふと、目に留まった花束に僕は考えをめぐらせるが、それは今は関係ないため頭の片隅へと追いやった。

「よう、高月い」

その奥の方に、奴の姿があった。

そんな奴の手元にはナイフがあり、それは唯の喉元に突き付けられていた。

完全に人質にとられていた。

唯の表情はやはり、恐怖などによって青ざめていた。

「浩君！」

「……何が目的だ？」

内村を射抜くように見ながら、僕は尋ねた。

「貴様の前で、こいつをめちやくちやにしてやろうと思ってるなあ！
他の男に手を出すなんて、躰けねえといけねえし」

「……………貴様はつくづく人間の屑のようだ」

内村に対して、怒りはこみ上げなかった。

逆に哀れにさえ感じる程だ。

「そう言ったられんのも今の内だ」

「きゃー！」

唯の悲鳴が聞こえた瞬間、反射的に攻撃魔法を内村に向かって放つ

ていた。

それはまっすぐに内村に飛んでいき、着弾する

——はずだった。

「何？」

「ガハハハハ！ どうだ、見たか！」

目の前で起こったことに顔をしかめている僕を見て、内村は面白おかしく笑う。

「お前の力は、私には効かな——」

「インパクト！」

内村の言葉を遮るように、僕は呪文を唱える。

「きやああ!？」

次の瞬間、唯はまるで誰かに引つ張られているかのように、内村から吹き飛ばされる。

だが、少し飛ばされたところで唯はゆっくりと地面に着地した。

そして彼女を守るように結界が張られる。

「なっ!？」

「これで、貴様は唯には触れることはできない」

今度は内村が言葉を失う番だった。

「確かにお前には魔法が効かないが、それは〃お前を起点にした〃だけだ。お前以外の人物に対して生じる魔法事象は無効化できないみたいだな」

「おのれえ。高月浩介め」

自分の目的を邪魔された内村は憎悪に満ちた目で僕をにらみつける。

「さあ、始めようか？」

僕の手にあるのは剣状のクリエイト。

内村の手にあるのは攻撃を通さない何かと鉄パイプ。

「おらああああ！」

「浩君！ あぶない!!」

「失笑！ 危なくもなんともない。ほら、遅い遅い」

真正面から殴りかかろうとする内村の攻撃を、僕は叫び声を上げる

唯に笑いながら否定すると、余裕で回避した。

「死ねえええええ！」

「ツフー！」

バカの二つ覚えのように特攻する内村の手にある鉄パイプだけを、僕は真つ二つに切り裂いた。

「この化け物めが」

「私が化け物ならば、それよりも下のお前はなんというのだろうか？」

「ゴミ？ カス？ それとも屑か？」

僕にはその答えは持ち合わせてはいないが、一番最後が有力のような気がする。

「ふざんけんなあー！」

そんな僕の言葉に、内村が咆哮する。

「俺様は！ 選ばれた民だっ！」

「あははははは！ これは傑作だ！ お前のような愚か者が、まだいるとはなっ」

内村の攻撃をかわしながら、僕は内村の言葉を笑い飛ばした。

「貴様は選ばれてはいない。ただ親のすねをかじり、親の光だけで輝いている。哀れなドラ息子だ！」

「ツ!? 貴様あああ!!!」

僕の言葉に、激昂した内村は黒い何かを取り出した。

それはどこからどう見ても拳銃だった。

「はあ、そんなものがあるなら最初からだしなよ」

「うるさい黙れえっ!!」

ため息交じりの僕の言葉に、内村は銃を連射する。

だが、僕はそれを余裕で交わしていく。

「拳銃は確かに恐ろしいが、当たらなければ意味がないんだぞ？」
「くっ!!」

先ほどの連射で弾が切れたようで、内村は拳銃を投げ捨てた。

「結局お前はその程度の人間ということさ。 頭も心も空っぽな可愛
そうな子供」

「うるさい!!」

もう完全に僕のペースだった。

内村は、僕が怒らせようと思えばいつでも怒らせ、そして行動をさせることもできる。

「こいつは俺様の女だっ！　俺はこいつを愛しているんだ！　だが貴様は凡人の分際で俺様の女を盗んだ！　お前だけは許さねえ。絶対に許さねえ!!」

「愛してるだあ？　貴様のそれは愛などではない」

内村の口から出てきた見当違いな言葉に、僕は呆れ果てていた。

「貴様はただ人を自由に操りたかっただけだ。操って自分が特別であるという幻想を見たかっただけだ」

「ち、違う！　俺様は本当に心の底から愛して——」

「では訊こう。お前は彼女がピンチの時、命を張ってでも守れるか？

自分の命を懸けてでも」

必至に否定する内村の言葉を遮った僕は、問いただす。

「そ、それは……」

内村は僕の言葉に口ごもる。

それは応えているも同然だった。

「それができずして、何が“愛している”だ。覚悟もねえくせにちんけな言葉を使うな。ガキ」

「だ、黙れ！　だ、大体関係の内規様にそんなことを言われる義理は——」

「関係ならあるさ——何い!？」

僕の指摘に激昂する内村の言葉を遮って告げた僕に、内村は目を細める。

その姿には威圧感などみじんもなかった。

「だって、僕は平沢唯のことが、一人の女性として好きなんだから」「なっ!？」

僕のカミングアウトに、内村は目を見開かせて固まった。

僕自身も不思議だった。

なぜ、このタイミングで自分の思いを告げたのかと。

だが、それは今はどうでもいい。

「僕には覚悟もある。唯がお前に拉致されたと知って、私は刺し違え

ることになっても唯を助けようと思い、ここに来た。私はこれからも唯を守る。そのために、私には魔法がある」

「は、はは！ 馬鹿馬鹿しい！ 何が守るだ！ 化け物は化け物らしく、人間の奴隷になっていればいいんだっ!!」

僕の決意を、内村は笑い飛ばし暴言を吐く。

「私は変化を恐れた。自分が最強の座から転落すると思ったからだ。魔法だけが私の存在意義。それを失うのを恐れた」

「はあ？ いきなり何を言ってるんだあ？」

僕の独白に、内村は小ばかにしたような表情を浮かべるが、僕はそれを気にせずに続けた。

「でも、平沢唯という存在がそんな僕を変えてくれた。僕の存在意義を新たに作ってくれた。魔法に代わる新たな意義を。だから、僕は変わる。これまでの自分を捨ててもっ！ そして——」

僕はそこで言葉を区切った。

そしてこれまで封じてきた自分の力を解放する。

「この一撃がその証！ 過去の変化を恐れた弱い自分への別れのレクイエム。そして新たな自分になるという決意！ 貴様が平沢唯のことを本当に愛しているというのであれば、この一撃！ 受け止めて見せる!!」

「じ……………上等だあ！ この俺様こそが平沢唯を愛するに足りる存在だと証明してやらあ!!」

僕の誘いの言葉に、内村はうまく乗ってきた。

彼は大きな勘違いをしている。

奴は僕の魔法を防げると“思い込んで”いるのだ。

僕の魔法を“完璧に”防いだものは一人もいないのに。

僕の雰囲気飲み込まれそうになりながらも、言い返せたのは彼女のプライドだろうか？

(まあ、いいか)

僕はその一言で考えるのをやめた。

そして僕は杖状のクリエイトを内村に向けて構える

「永劫の闇よ。我が力に応えよ」

それが始まりだった。

それは数十年ぶりに紡ぐ、魔法の呪文。

「我が名の下に、集え」

それはかつて最凶と呼ばれた魔法。

「全てを滅ぼし、全てに裁きを下す審判の闇よ。我の名の下にかの者に裁きを与えたまえ」

「ひい!？」

僕が内村を見据えると、怯えたような表情を浮かべた。

僕の体中に言葉にはいい表せないほどの力が込み上げてくるのがわかった。

それは、僕の心を侵食しようとする。

でも、僕はそれに耐える術を知っている。

この僕こそが、闇を纏う魔法使いなのだから。

「闇を纏いし魔法使い、高月浩介が命じる。咎人に破壊という名の裁きを下せ！ ダーク・ラスト・ジャツジメント!!」

ついにそれは放たれた。

死神に魅入られた魔法とも言われたそれが。

それを喰らって生還したものは0と言われた凶悪な力が。

「ぐ、ぐぐ……どうだ！ 防いでるぞ！ 俺様はお前の魔法を防いでる!!」

確かに、防いでいるという表現は正しいだろう。

現在、内村を覆うように守る何かは、僕のダークラストジャツジメントと拮抗している。

だが、それはあくまでも“均衡”状態にあるだけだ。

つまり、

「なっ!? ひ、ひびが?!」

ゆっくりとだが、内村を守る何かに小さなひびが入り始める。

「あんたが言っているそれは、確かに魔法攻撃から身を守ることができる。だが、“常時ではない”。それはあくまでも、一時しのぎではない」

「な、何を言って——」

「つまり、いずれそれは破れるということさ」

それだけを告げて、僕はその場をジャンプすることで、結界に覆われている唯の前に着地した。

「浩く——」

「舌噛むから話すな」

僕の名前を呼ぼうとする唯に、告げると勢いよく飛び上がった。

天井が抜け落ちていたので、外まで飛び上がることができた。

「兄さん！」

外まで飛び上がったところで、待機していた久美が空を飛んで近づいてきた。

「久美、唯を」

「任せて！ ちゃんと家まで送るわ」

「浩君——」

唯が何かを言いかけるが、それよりも早く久美は唯の家へと向かっていったため、僕には聞き取ることができなかった。

そしてそれと同時に、爆音が響き渡るのであった。

「……………あ……………う」

トドメの爆発によるダークラストジャッジメントの余波が止んだのを確認した僕が、再びあの廃工場に戻るとそこには地面に倒れている内村の姿があった。

着ている服はいたるところが切り裂かれており、赤い物も見える。

完全に満身創痍の状態だった。

「あの一撃を受けてもなお生きているのは、運がいいな」

虫の息ではあるが、まだ息があることに僕は驚きを隠せなかった。

（まあ、久美に作らせた防御特化型のマジックアイテムのおかげだろうけど）

久美に老婆の姿に変装してもらい、あらかじめマジックアイテムを渡しておいたのだ。

それはこのアイテムの特徴を伝え、内村の絶望に染まった顔を見るためだ。

「さて、お前には二つの道がある」

虫の息の内村を見下ろしながら、僕はそう告げる。

「お前は自分の好きな道を心の中で応えろ」

僕はそう告げるとクリエイトを彼の体に当てる。

それによつて、彼の心の声が一気に流れ込んできた。

その声は“殺す”や“許さない”といった負の感情が主だった。

「まず一つ目。このまま死にゆくのを待つ」

僕の言葉に“死にたくない”、“いやだ”と言った拒絶の言葉が入り込んでくる。

「そして二つ目。改心し、第二の人生を過ごす」

その案件に、内村の“それがいい!”、“頼む、助けてくれ!”と言った懇願が聞こえてきた。

その姿は、まさしく哀れだった。

「心得た。お前の選択した道の先に、命運が有らんことを」

僕は祈りの言葉を継げながら、剣を上空に掲げた。

“何をやる気だ”

今度は怯えが込められている声が聞こえた。

「さようなら、内村竜輝」

僕はお別れの言葉を紡ぎながら、剣で内村の身体を躊躇もなく貫くのであった。

2年生編Y 『気づく思い、変わる日常』 第85話 変化と一手

日本、青森県。

そのとある学校の教室。

「それでは、自己紹介を」

「はい」

黒板の前に立っていた教師と思われる男性の促しに、同じく黒板の前に立っている男子生徒はきはきとした返事をする。

「今日、このクラスに転向してきました、大木竜輝です。よろしく願います」

竜輝の自己紹介に、クラス中から拍手が送られる。

彼こそが内村竜輝であった。

★★★★★

内村竜輝による、一連の事件。

その全ての事件は解決した。

解決方法はいたってシンプル。

内村竜輝を、僕の手で“殺した”のだ。

その後の後処理は早かった。

工作課の人たちの力で、記憶の改ざんを行ったのだ。

——桜ヶ丘高等学校に、内村竜輝なる人物はいない——という内容で。

これによって一部の者を除いた教職員や生徒たちから、内村の記憶は完全に消去された。

また、内村家の方にもそれは及んだ。

逮捕拘束された者たちから、内村竜輝に関する人物の記憶を抹消したのだ。

もうこれで、彼はこの世界から存在自体が消滅したことになる。

そして、ここからが大変だった。

竜輝を久美に治癒させ、新たな名を与えたのちに、僕たちのいる場所とは縁もゆかりもない遠き地へと追いやったのだ。

あの時、僕が剣で刺したことにより、竜輝の心は完全に破壊された。それは記憶自体をも破壊するのと同じ行為であった。

——記憶は人格を形成させる。

その理論によって、僕は当たり前障りのない記憶を彼に与えたのだ。

・花が好きで家事が得意。

・両親はおらず、親戚の仕送りで暮らしている

これらの記憶を彼に植え付けた。

彼は、“大木竜輝”として、新たな人生を歩むのだ。

それが僕と彼のためだ。

願わくば、彼が立派な人生を歩んでくれることを願いたい。

そんなこんなで、無事に終息したと思われた事件だったが、思いもよらぬところまでこの事件は影響を与えていた。

「はあ……」

「お、なんだなんだ？ モテモテのお前がため息か？ ハーレム道まっしぐらのお前がため息か？」

思わず口から洩れるため息に、慶介が反応して茶化すように言ってきた。

「うるさい。こっちは真剣に悩んでるんだ」

そんな慶介に、僕は意気消沈しながらも、しっかりと言い返した。

「そ、そうだったのか。それは悪い」

どうやら僕のように本気だと確信したようで、謝ってくると僕の前の席に座った。

「それで、どうしたんだ？」

「実は、唯に避けられているような気がするんだ？」

それは僕にとってはある意味切実だった。

「はい？ それってさ、偶々じゃないか？」

「偶々？」

慶介の答えに、僕は失笑してしまった。

僕ですら、そう考えていたこともあるのだから。

しかし、

「だったら、これはどう説明するんだ？」

僕は慶介にシチュエーションのことを説明することにした。

それはある日の朝での、登校しているときのことだった

「あ、唯。おはよう」

「あ、お、おはよう……」

偶々唯の姿を見かけた僕が朝の挨拶をすると、唯はどこかよそよそしい態度で返してきた。

「唯、どうかしたのか？」

「そうだよ。様子が変だよ？」

唯の異変を僕よりも敏感に察知した憂いが僕の疑問に続いた。

「そ、そんなことないよ！ わ、私さきに行ってるねっ！」

「あ、お姉ちゃん！」

一気にまくしたてた彼女は、そのまま学校に向かって走っていった。

「……………」

僕たちは、その様子をただ黙った見ることしかできなかった。

また別の日。

「唯、これ忘れ物」

「あ、ありがとう。浩介君」

教室に忘れ物を届けに言った僕に、お礼を言う唯だが微妙に何かがおかしい。

しかも、視線を合わせようとしない。

「唯ちゃん、どうしたの？ 顔が赤いよ?!」

「だ、大丈夫だよ！ ほら、この通り！」

様子のおかしい唯に、ムギがあわてた様子で容体を確認しようとする、唯は慌てて力こぶを作るようなポーズをとった。

「それだったらいんだけど」

結局、この日も顔を合わせてもらうことはなかった。

さらに別の日の放課後。

「唯、今のところリズムがずれてるぞ」

「……………あ、うん」

演奏の練習中、唯のギターの演奏に指摘をすると、どこかよそよそしい反応が返ってきた。

それは、やる気がないというよりも、気もそそろと言った様子で練習に身が入っていないような気がした。

「唯先輩、本当にどうしたんですか？ まさかまだ風邪が治っていないとか?!」

「そ、そうじゃないから大丈夫だよ」

とうとう後輩の梓にまで心配されるようになってしまうほど、唯の様子はおかしかった。

「これでも、偶然と言えるか?」

「なるほど。確かに言えないな」

考えられるだけのケースを話してみたが、慶介の意見を変えさせるには十分だったようだ。

他にも、話してはいないが、ティータイム中（当然部活の時だけど）に唯から視線を感じる事も幾度もあった。

そのくせこつちが顔を向けるとすぐにそらしてしまう。

「僕は、唯に何か悪いことでもしたのかな？　慶介は、どう見る？」

「……………悪いけど、俺には見当がつかない」

僕の問いかけに、慶介は申し訳なきげに告げた。

「いや、良いんだ。こつちこそごめんね、変なこと聞いて」

よくよく考えれば、完全に部外者であるはずの慶介にする話ではない。

彼にしてみればいい迷惑だろう。

「いや、別にいいって。また何かあつたら相談しろよな」

「あ、うん」

僕の肩を軽くたたいた慶介は、自分の席へと戻っていった。

その姿は、僕にはとても紳士的なものに見えた。

(やっぱり、慶介は僕には似合わないほどいい男だ)

彼に比べ、僕はなんだ？

変化を恐れて自分の心から目を背けていたばかりか、好きな奴に怯えさせている。

(あの時の魔法が原因かな?)

考えられる原因は一つしかなかった。

それが、あの時内村に使った“ダークラストジャッジメント”だ。

あの魔法は、映像資料を見ただけでも卒倒してしまうほどに恐ろしい魔法らしい。

それを今まで魔法の世界とは無縁の唯が目の当りにしたらどうだろうか？

(怖がられてる……………よね)

怖がるに決まっていた。

(つて、いけないいけない！)

僕はふと悪い方向に考えようとする自分を戒めた。

まだ、そうと決まったわけではない。

仮定状況で、結論をつけるのはまだ早い。

(こういう時は、第三者の協力を得るのが一番)

だが、慶介は部外者だ。

今回の事案での相談相手には、一番適さなかった。

(だとすると、残るは……)

僕は適任者を見つけると、その人物にある内容を明記したメールを送るのであった。

「浩介！」

「あ、こっちこっちー！」

放課後、場所は家の近くのハンバーガー店。

そこで待ち合わせをしていた僕は、その相手に手を振ることで自分の位置を知らせた。

「ごめんね、無理言つて」

「もう浩介の無理には慣れたよ」

僕の謝罪の言葉に、どこか呆れた表情で相槌を打つカチューシャをした女子……律に、僕は返す言葉もなかった。

「それで、何の用？」

「えっと……」

律を呼び出したのは、唯のことを聞くためだった。

だが、いざ聞こうとすると口が開かなかった。

まるで何かによって無理やり口を結ばれているかのように。

「唯のことだろう？」

「……………やっぱりわかるよね」

そんな僕の様子に一つため息をついた律のことばに、僕は降参と言わんばかりに相槌を打った。

「当たり前だろ。私を誰だと思ってるんだよ？」

「部長だもんな。部員の様子の変化くらい、簡単にわかるよね」

僕の言葉に呆れたようできて、それでいて自信に満ちた表情を浮かべる律に、僕は思わず笑みがこぼれた。

「それで、律から見て唯はどう見える？」

「そうだな……私から見て唯は戸惑っていると思うぞ」

「戸惑い？」

予想もしていない律の返事に、僕は首をかしげながら聞きかえした。

「浩介の気持ちを知って、自分の気持ちがどうなのかがわからなくなっている状態ということ」

「なるほど………ん？」

律の鋭い指摘に、頷きかけたところで、僕は違和感に気付いた。

「どうして僕が自分の気持ちを打ち明けたことを知ってるんだ？」

「どうしても何も、本人から聞いたんだよ。」浩君から好きって言われたけど、私はどうすればいいの？」ってな」

僕の疑問に、予想外の答えが返ってきた。

「いや、どうして唯がそんな電話を？」

「そんなのこつちが訊きたいぐらいだよ」

僕の問いかけに、ツツコミ口調で答える律。

（おかしい、あの結界は音を遮断するんだからこつちの声は聞こえていないはず……いや、待てよ）

そもそも、音を遮断すると言ったのは誰だ？

唯を守るための結界魔法を構築したのは誰だ？

この付近の隔離結界魔法の維持を担っていたのは誰だ？

答えは簡単。

久美だ。

『クス。がんばってね兄さん』

内村の待つ廃工場に向かう際に、久美からかけられた言葉がふと頭をよぎった。

あの時は特に考えもしなかったが、今になって考えるとあれはもしかしたらこのことを言うのかもしれない。

これが指し示す結果は一つしかなかった。

（畜生。嵌められた）

しかも、久美は「音を遮断する」としか言っていない。

現に“結界内から僕たちの方への音は遮断されていた”ので、久美は嘘をついていない。

それだけに悔しかった。

(とすると、僕は唯の目の前で告白をしたのか?)

僕は自分が言ったことを思い出してみた。

『だって、僕は平沢唯のことが、一人の女性として好きなんだから』
しっかりと告白の言葉を言っていた。

その後にもこうも続けていた。

『僕には覚悟もある。唯がお前に拉致されたと知って、私は刺し違えることになってでも唯を助けようと思いい、ここに来た。私はこれからも唯を守る』

(うん。やめよう)

これ以上思い出すと確実に再起不能になる。

「おーい、大丈夫かー?」

「うん。何とか」

恥ずかしさのあまり、卒倒しそうになるのを何とか堪えて返事をした。

「そうか……聞かれてたか」

理解してしまえば単純なことだった。

唯の様子がおかしいのも領けた。

「それだと、まだ唯から返事はもらってないようだな」

「当然だよ。それにまだ受け取れない」

それは僕は前から考えていたことだった。

「あれは、勢い任せの告白だったから。だから、ちゃんとした形で唯に告白したい」

もう一度、ちゃんと唯に思いを告げる。

それが僕の決意だった。

「……………そっか。ならば、頑張つて、告白しな。二人が変な雰囲気のままだと、部活動にも支障が出るしさ」

「ありがとう」

律なりの背中を押す言葉に、僕はお礼を口にした。

「それで、何か策はあるんでしょ？」

「ないっ！」

期待を込めた視線に、僕はきつぱりと告げた。

「ないのかよっ」

その言葉に律からツツコまれてしまった

「でも、早いうちにちゃんと解決させるよ」

僕は律に安心させるように言うと、財布を取り出して僕と律の分の代金をテーブルに置いた。

「今日は相談に乗ってくれてありがとう。これ、ここの代金」

「いや、こんなにいいって」

確実に釣りがくる金額の代金を手渡された律が遠慮するが、僕は首を横に振った。

「感謝の気持ちだから、受け取って。それじゃっ」

「あ、ちよつと——」

僕は強引に律に手渡すと、逃げるようにその場を後にした。

（よし、頑張ろうっ！）

外に出た僕は、夕陽によってオレンジ色に染まる空を見上げながら決意を新たにするのであった。

だが、結局事態は改善することはなく、土曜日を迎えることとなった。

★★★★★

「まったく、強引なんだよな」

「でも、そういうところが浩介の魅力だと思うぜ」

浩介が立ち去ったMAXバーガー。

律のボヤキに返事を返したのは律たちが腰かけていた席から少し離れた場所に座っていた慶介だった。

慶介は、律の対面に腰掛ける。

「で、どうする？ 俺の予測だと何年経っても無理だぞ」

「私も同感。あの二人がすすなりと物事を進められるはずがない！」

慶介の予想に、律が頷くことで賛同する。

その言葉は本人が聞いていたらかなりショックを受けるような内容だった。

「どうしようか……」

「むー……」

二人して腕を組んで考え始める。

（つて、言うかどうして俺は他人の恋路でここまで悩まないといけないんだ？）

慶介は、ふとそんな疑問を頭に浮かべるが、何か意味があるからと自分に納得させた。

「あ、そうだ。いい案を思いついた」

「それは何だ？」

左手に握り拳を作った右手を乗せながら口を開く慶介に、律がその案を尋ねる。

「それはだな——」

こうして、慶介の手によってその作戦が告げられることとなった。



「はあ………僕つて、ここまでヘタレだったか」

気づけば土曜日。

この日も唯に告白をすることができなかった。

ただ一言、“好きだ”と言えはいいだけなのに、それができない自分が不甲斐なく感じた。

（とにかく、明日一日で英気を養おう）

月曜日になったら、もう一度挑戦するつもりだ。

「あれ、メールだ」

そんな決意をしていると、僕の携帯がメールの受信を告げる音色を奏でた。

「つて、慶介からか」

一瞬何かを期待する自分に、“これは末期だな”と思いつつながら、携

帯を開いて受診したメールを表示させた。

「何々……『明日の日曜に、遊園地に行かないか?』か……」

メールの内容は、遊びに誘うものだった。

「明日か……予定とかあったっけ?」

僕は手帳を開いて明日の予定を確認する。

H & Pのライブは12月に小規模程度ではあるが一度開かれる。

その練習もあるが、明日はちょうどそれがお休みの日であった。

「まあ、相談に乗ってもらったお礼も兼ねて、友達づきあいでもしますか」

たまには友達づきあいをするのもいいと思った僕は、行く旨の返信をすることにした。

それから程なくして、集合時間などの連絡が来たので、それを確認した僕は明日に備えて眠りにつくことにした。

第86話 変わる関係

日曜日、いつもいる駅から電車で向かうこと数十分で、目的地に着した。

「今はメール画面を見せるだけで入場できるとは、便利になったもんだ」

慶介曰く、「このメール画面を受け付けの人に見せるれば入場できる」とのことだった。

なんでも「きゅーあーるコード」なる物がなんとかかんとかと言っていたが、聞いていてちんぷんかんぷんだった。

「このモザイクのような絵にそんなものがあるのか」

僕は、メール画面にある「きゅーあーるコード」をまじまじと見ていた。

「浩君?!」

「え?」

そんな時、ふと声を掛けられた僕は慌てて携帯電話から顔を上げて声のした方へと向けた。

そこにはいつもの私服姿の唯が立っていた。

「ど、どうして浩君が!?!」

「それはこっちのセリフだよ!」

突然のことに混乱する唯に、僕も混乱しながら返した。

(ん? 待てよ……)

だが、ふとある考えが頭をよぎった。

「唯」

「な、なに?」

僕はそれを確かめるために、唯にあることを尋ねた。

「もしかして、誰かに誘われてここに来なかった?」

「う、うん。そうだよ。律ちゃんがね、女子水入らずであそぼう!」

「って言うて……浩君も?」

聞きかえしてくる唯に、僕は頷いて答えた。

「どうやら、僕の考えは正しかったようだ。」

「どこに電話するの?」

「首謀者」

僕は最終確認の意味を込めて、ある人物に電話をかける。
相手は数コールで出た。

「お、浩介か。どうした?」

「どうしたって……今どこにいるんだ?」

まるで何事もなかったかのように振る舞う慶介に、僕は脱力感に襲われながらも問いかけた。

「どこって、家だけど?」

「家だ? 貴様、人を誘って家はないだろ」

慶介の答えに、僕は怒りを通り越し呆れながら慶介に言い返す。

「悪い悪い。そのメールのやつ、フリーパスだから一日だけ全アトラクションに乗り放題だし、ランチの方も割引されるから、楽しんできなよ。じゃ」

「あ、おい!」

言うだけ言って慶介は電話を切ってしまった。

「ど、どうしたの?」

「……………」

恐る恐ると言った感じで聞いてくる唯に、僕は目を閉じて考え込む。

慶介がいたずら目的でこのような馬鹿げたことをするはずがない。
唯を巻き込んだことには何か意味があるはずだ。

(なるほど……そう言うことか)

僕はようやくくすべてを理解した。

「唯」

「な、何?」

ならば、僕のこととは簡単だ。

「憂き晴らした。今日はいっぱい遊ぶぞっ!」

「え? ええ!?!」

僕の言葉に、驚きを隠せない様子の唯。

「ほら、行くよ! 時は金なりだ!」

「あ……」

動こうとしない唯の手を引っ張って、僕は遊園地内へと足を踏み入れた。

この時だけは、いつもの感じに戻れるような気がしたのだ。

『トレジャーランド』

そこがこの遊園地の名前だ。

最近オープンしたばかりの遊園地らしく、絶叫系アトラクションはもちろん、ホラー系のアトラクションなども完備されている。

さらに、フードコートのレストランはどれも絶品らしい。

それが、僕がこの遊園地について調べた内容だ。

「唯は何に乗りたい？」

「それじゃあね……これ！」

入園する際に配られたパンフレットに視線を落とした唯だったが、彼女が選んだのは絶叫系アトラクションのコーナーだった。

「何々……『ダウンハート』か。大丈夫？」

「もちろんです！ ふんす！」

なぜか気合を入れる唯に、僕はそれ以上聞くことはなかった。

そんなこんなで、『ダウンハート』に乗り込んだ僕たちだったが。

「うう……」

「大丈夫？」

地面にうずくまっている唯の背中をさすりながら、僕は容態を確かめる。

「大丈夫。少し休んでれば、治るから」

「全く、乗り物に弱いんだったら乗らなきやいい物を」

思わずため息が漏れるが、いつもの唯らしく思えた。

「何か飲み物を買ってくるから、待ってて」

「うん。ありがとう」

弱々しくではあるが、僕の言葉に手を上げて応じる唯に見送られる形で、僕は飲み物をかいべく自動販売機の方へと向かっていった。

「で、次はどれにする?」

唯の調子が良くなったため、気を取り直し次のアトラクションに行くことになった。

「ここなんてどう?」

「ここって、お化け屋敷だけではないのか?」

唯が指差したのは『絶叫! 恐怖の館ver. 2』という名称のお化け屋敷だ。

“ver. 2”というのは、さらに怖くさせるように改良したからだとか。

タイトルの方にそういうのを付け加えるのは、とても斬新だった。

「大丈夫大丈夫」

「ここ、3階建の入り組んだ構造をしているらしくて、迷うと軽く2、3時間は出られなくなるらしいけど」

「……………」

調べた結果を唯に説明すると、青ざめた表情を浮かべる。

「わ、私は大丈夫! 怖くない、怖くない!」

「ならば、行くか」

強がりなのか、本気なのかはわからないが、せつかくの唯のやる気に水を差すのもあれなので、僕はお化け屋敷へと向かった。

「うう……暗い。浩君、どこにもいかないでね」

「大丈夫だって。ちゃんとここにいるから」

薄暗い場所を歩いていると、その不気味さから唯は声を震わせながら懇願するので、僕はそれに相槌を打った。

「きゃあああ!!」

「ッ!」

僕は、今とてもまずい状況に置かれていた。

ここに入ってから僕の腕は唯の腕によってしっかりと固定されているのだ。

それがとても恥ずかしく、顔から火が出そうなほどだった。

「きゃあああ!!」

「にゃ……………!!」

(ん?)

後ろの方からよく知った人物の声が聞こえたような気がしたが、僕はすぐに頭の片隅に追いやった。

(こういうのは役得なのかな?)

好きな人と手をつなげるといふのは、ある意味役得なのかもしれない。

これぐらいならば、別に問題もないし、会っても許されるはずだろう。

「許さない」

「何を許さないって?」

「え? 私何も言っていない………よ」

僕の思考を読んでいるようなタイミングで聞こえてきた声は、唯の物ではなかったようだ。

ならば考えられる可能性は一つしかなかった。

周囲を見るとお化け役のスタッフが僕たちを取り囲んでいた。

「幸せそうなカップルは許さない」

それはおそらくはスタッフの私怨だろう。

「あ———!!!」

「ち、ちよつと! 引っ張らな——ぐはっ!? 痛い、ぶつかって——

——ぐぼおっ!」

そんなスタッフたちの迫力に驚きのあまりに、僕の腕を握ったまま走る唯になす術もなく引っ張られた僕は、色々な場所に顔や体をぶつける。

「ぎゃあああああ!!」

この日、僕のある種の悲鳴がアトラクション内に響き渡るのだった。

お化け屋敷を後にした僕たちは、ベンチに腰掛けて休んでいた。

「ご、ごめんね。浩君」

「別にいいよ。これくらいかすり傷だから」

未だに顔が痛むが、申し訳なきような唯の表情を少しでも明るくするべく、僕はあえて軽く答えた。

「あ、そうだ。お昼にでもしようか。何か食べたいものでもある？」

「えっと……それじゃ、やきそば！」

「定番で来たな……分かった。買ってこるから待ってて」

僕の話題の変更に、すんなりとのつてくれた唯が答えた料理名に、僕は苦笑しながら立ち上がると唯にそう告げてその場を後にした。

(いつ言おう)

焼きそばを買う途中、僕はそれだけを考えていた。

この遊園地での遊びは、いわば僕に対してやるべきことをやれと言う、慶介たちのメッセージのようにも思えるのだ。

ならば、僕はそれに応じなければいけない。

そうでないと皆に対して顔向けができないような気がするからだ。

だが、その後も僕の思いとは裏腹に、なかなか思いを告げる機会がなかった。

メリーゴーランド等のアトラクションは楽しかったが。

「もう夕方だからそろそろ終わりだね」

「そうだな……」

気づけばもう夕方。

徐々に日が短くなってくるこの季節、空を見ればオレンジ色の明かりと暗闇が見えた。

(これでいいのか？ 本当にいいのか?)

このままだと、何もかもが終わるような気がした。

「なあ唯」

「なに？ 浩君」

気が付けば僕は唯を呼び止めていた。

「最後にさ、あれに乗らないか？」

「あれって……観覧車？」

僕が指差した先にあったのは、観覧車というアトラクションだった。

絶叫系でもホラー系でもない特別なアトラクション。景色を楽しんだりすることができらしい。

「前から気になってたんだよ」

「……………うん、いや」

僕の提案に、唯は観覧車の方を眺めていたが頷きながら答えてくれた。

こうして僕たちは最後に観覧車に乗ることになった。

「一周30分ですので、ごゆっくりお楽しみください」

係員の人にそう言われ、僕は観覧車に乗り込んだ。

「……………」

ゆっくりと上昇を始める観覧車内で、僕たちはただただ黙って外の景色を見ていた。

時折唯からの視線を感じる。

だが、僕はなかなか言い出すきっかけが掴めなかった。

「き、今日は楽しかったね」

「そ、そうだな。色々あったけど」

唯の素晴らしい話題にも、僕はすぐに話を打ち切ってしまった。

(何をやってるんだろう)

ふと、自分が情けなくなってしまった。

この間は偉そうに告白して“変わる”とか言っているくせに、いざ本人を目の前になると何も言えなくなっている自分に。

(やっぱり、化物の僕には無理なのかな?)

ふとそんなことを思ってしまう。

僕には恋愛は向いていないのではないかという禁断の思いを。

「こう——」

唯が改めて何かを言おうとしたところで、乗っている観覧車が大きく揺れだした。

「きゃっ!?!」

「危ない!」

大きな揺れにバランスを崩しそうになる唯を捕まえる。
幸いなことに揺れはすぐに収まった。

「一体何が……」

『お客様にお知らせします。ただ今、発生いたしました強風で、観覧車が緊急停止しております。運転再開まで、しばらくお待ちください』
自体が呑み込めない僕に、アナウンスが入った。

どうやら強風が吹いたせいで観覧車が泊まってしまったようだ。

「唯、大丈夫……」

「……う、うん」

状況をのみ込めた僕は、唯の方に問いかけるが、自分の状態に思考が止まった。

僕は唯の体を抱きしめていたのだ。

「ご、ごめん」

「う、ううん。気にしないで」

慌てて離れながら謝る僕に、唯は作り笑いを浮かべながら答えてくれた。

「……………」

そしてまた沈黙。

でも、先ほどの態勢が僕の何かを消し去ったのだろう。

「あのさ、唯」

今度は僕から話しかけていた。

「僕、唯に言わなければいけないことがあるんだ」

「うん……」

唯の表情がこわばるのを感じた。

「僕は、唯のことが……」

そこまで言いかけたところで、僕は再び言いよどむ。

鼓動が早くなる。

だが、僕は決して歩みを止めない。

そして、僕は唯に告げる。

「一人の女性として、好きだ」

「ッ!?!?」

とうとう告げてしまったその言葉。

唯は声ならない悲鳴を上げていた。

「……………最初は、能天気で天然な変わり者だって思ってた」

気が付けば、僕はポツリポツリと口を開いていた。

「でも、何度も演奏をしたり一緒に部活動をして、気づけば僕は唯に惹かれていた。それでも、僕は自分の気持ちに気付かなかった。いや、気づかないふりをしたんだ」

「変わるのが……怖かったから?」

やはり、あの時の僕の言葉は聞こえていたようで、唯の相槌に僕は頷くことで答えた。

「でも、考えてみればそうだよ。僕みたいな化け物が、唯の彼氏になろうだなんて、どうにかしてるよね」

「え……………」

本当は悲しいのに、僕は笑っていた。

冷静になって考えれば、僕のような存在が唯と釣り合うはずがない。やはり、この思いはすべて捨ててしまったほうがいいのかもしれない。

「ごめん。今のことは全部忘れ——んむ!?!」

それはいきなりのことだった。

僕が言い切るよりも早く、僕の唇はふさがれたのだ。

「ん……………」

唯の唇によって。

それは、僕にとっては生まれて初めてのキスだった。

「……………ふはあ」

「ゆ、唯?」

すぐに唇は離された僕は、驚きのあまりうまく言葉にまとめることができなかった。

「浩君のバカ。どうして決めつけようとするの?」

「え?」

今度は僕が首をかしげる番だった。

「浩君の想いは、簡単に諦められるものなの？」

「そんなことはないっ！ 僕はまじめだ！ でも――」

「だったら、ちゃんと聞いてよ。私の言葉を」

涙ながらに唯は言葉を区切った。

そして再び僕の身体にしがみついてきた。

「私も、浩君のことが大好き！」

それは、僕が心の奥底で臨んでいた返事だった。

そしてそれは、全ての終わりを意味していた。

ただの友人としての僕と唯の関係の終わり。

そして、恋人としての僕と唯の関係の始まり。

「……浩君」

「……唯」

夕焼けに照らされる中、僕と唯は

「……んう」

再び唇を重ねるのであった。

第87話 変化する日常

「……」

月曜日の朝、僕は茫然としていた。

(夢?)

ふと昨日のことを思い出してみる。

確かにはつきりと覚えている。

唯に告白をしたこと。

そしてそれを唯が受け入れたこと。

僕たちが恋人関係になったということ。

「~~~~~ッ!」

思い出した瞬間、僕は恥ずかしさのあまり頭を思いつきり振った。

「……………顔洗お」

未だにぼーっとした頭を覚ませるために、僕は顔を洗うべく洗面所へと向かうのであった。

「本当に夢かもしれない」

顔を洗いいつものように朝食を食べ、いつものように家を後にする。

そんな“いつも”通りの生活パターンが告白のことを夢だと思い込ませていく。

そもそも、僕が告白など大それたことができるわけないのだ。

(唯に対する好きという思いが夢になって出てくるとは……………何と恥ずかしいことなんだ)

僕はどうも変に浮かれているのかもしれない。

ここは気をもう一度引き締め直す必要がありそうだ。

「ん?」

そんな時、ふと視線の端の方に平沢姉妹の姿が見えた。

「っ！」

向こうもこっちを見つけたようで、憂は丁寧にお辞儀をして挨拶をするが、その姉である唯は顔を赤らめて僕を見ていた。

(やつぱり、今日もダメか)

事態は何も解決していない。

問題をどう解決しようかと考えをめぐらせていた時だった。

「浩君！」

「うわ?！」

突然体に衝撃が走った。

それは唯が体当たりにも近い形で突進してきたからだ。

「危ないじゃない——」

注意をしようとした僕は思わず言葉を失ってしまった。

それもそのはずだ。

なぜなら僕の腕と組むように、唯の腕に抱えられているのだから。

「おはよう、浩君♪」

「おはよう唯」

満面の笑みで挨拶をする唯に釣られるようにして、僕も挨拶を返した。

すでに僕の理解できる範囲を超えてはいるものの、一つだけわかったことがある。

(夢じゃなかったんだ)

それは、あの夢だと思っていたことは真実で

「もう、お姉ちゃん。いきなり浩介さんに抱きついたら危ないよ」

「えへへ〜」

僕と唯の関係はいい方向に変わったのだということだった。

(まあ、これも夢じゃなければ……:だけど)

そんな嫌な予想を立てたものの、これは夢ではないということには十分にわかっている。

「早くしないと遅刻するのでは?！」

「っと、そうだった! 浩君、憂走ろう〜!」

僕の言葉に気が付いた唯は元気よく声をあげると走り出した。
……僕の腕を抱えたまま。

「ちよっ!? 危ないから! 前もこれで痛い目にあって——」
もう一つだけわかったことがある。

恋人になったからと言って唯の天然は変わってはいなかった。
だが、どこかに憎めないのは、恋人が故なのだろうか?

「おは——」

「確保——!!」

教室に入った瞬間、何者かに体をつかまれた。

「カマンベール!!」

とりあえず、その何者かの頭にかかと落としを決めた。

「何だ慶介か」

慶介がバカなことをするのはいつものこと。

僕は特に気にも留めずに、慶介の上を歩きながら自分の席に向かう。

「いきなり激しいな」

「バカなことをするからだろうが」

数秒で回復した慶介が、僕に抗議の声を送るが僕はさらっと返した。

(前から思うけど、慶介の回復力には目を見張るものがあるな)

先ほどの攻撃もそうだが、慶介相手にはかなりの力を込めて叩き潰しているはずなのだが、数秒で元通りになるというのはどう考えても不自然だった。

(一回、慶介の身体でも解剖して調べてみようかな?)

そんな恐ろしいことを頭の中で考えていた。

「それはそうと、聞いたぜ」

「…………それはいいけど、その気持ち悪い笑みをやめろ」

にやにやしなから僕に声を掛ける慶介に、僕は目を細めながら告げた。

「気持ち悪い言うな！」

「はいはい。で、一体何を聞いたんだ？」

慶介の抗議の声を適当にあしらいながら、僕は先を促すことにした。

「それはだな、浩介と平沢さんが恋人同士になったという噂だZ E！」
「……………へ？」

慶介の口から出てきた言葉に、僕は思わず固まってしまった。

「いや、この俺を差し置いて先に彼女を作るとは。くう、お前もやるじゃないか！」

「いやいや、待て待て待て！ なぜそんな噂が流れる!!」

軽快に笑いながら冷やかす慶介に、僕は少しばかり慌てて尋ねた。
どう考えても時間的におかしかった。

「なんでも、浩介と平沢さんが仲良く腕を組んでいるのをこの学校の生徒が見たらしいぜ？ ほら、浩介ファンクラブ持ってるから、情報が早かったんだよ」

「な、なんという……それで、クラスの雰囲気があれだったのか」

教室内の雰囲気微妙におかしかった理由が、このような形で分かるというのはとても複雑な心境だった。

(それにしても、誰に見られていたんだ?)

昨日もそれなりに警戒していたつもりだが、デートと言うことと、告白をどうやってするかで頭がいっぱいだったので、見られていてもおかしくはなかった。

「それにしても、観覧車に乗っている間に告白とはやるじゃないか。まあ、強風で観覧車の運転が止まったんだから、時間はたっぷりあったんだしな」

「まあな」

30分で一周する観覧車は、強風により運転を中止したというアクシデントによって50分かかってしまった。

まあ、それのおかげで告白することができたのだから、問題は特に
はない――

(ん?)

その時、ふと僕の脳裏に疑問がよぎった。

慶介の言葉が、少しばかりおかしかつたのだ。

「なあ、慶介。ひとつ聞いていい?」

「おう! この天才と呼ばれた男、佐久間 慶介に何でも聞いてくれ」
変に胸を張る慶介に、僕は核心をつくことにした。

「何で、観覧車が止まったことを知ってるんだ?」

「え?」

「しかも、観覧車に乗っている間に告白したことまで知ってるし」
「……………」

僕の問いかけに、慶介は固まっていた。

それがすべてを物語っていた。

「貴様、僕たちの後を尾行したな?」

「い、いや――」

「尾行、してたよな?」

有無も言わせない僕の問いかけに、慶介は周囲を見る。

「咎人に報いをつ! 散!!」

「うげぼるふあ!!!?」

尾行していた慶介に、お仕置きをした僕は慶介を自分の席に座らせ
た。

「よし、これでいいだろう」

「高月君」

「ん? 佐伯さんか」

一作業を終えた達成感に浸っている僕に、声を掛けてきたのは佐伯
さんだった。

「おめでとう!」

「……………」

頬を少し赤らめた佐伯さんのお祝いの言葉に、僕はなんとなく今日
一日が大変なことになりそうな予感をするのであった。

ちなみに、これは余談だが。

「佐久間……は休みでいいか」

HRの出席確認で、気を失っていた慶介は問答無用で欠席にされていた。

「はあ……やっとお昼だ」

「何だなんだ、いつもならぴんぴんしている浩介が珍しいな」

昼休みを告げるチャイムが鳴り響き、周りが昼食の準備をする中僕は机の上に突っ伏していた。

「当たり前だろ。休み時間のたびに質問攻めにされるのは、正直堪える」

休み時間になるとファンクラブの会員だろうか、僕の方に訊きにくるのだ。

3年から1年生まで。

そして事実を知ると卒倒（分かりやすく言うと、気絶だけど）するという光景が何度も繰り返されたのだ。

これにはさすがに堪えた。

「モテモテで何よりだな」

「こんな形のモテはいらない」

慶介の嫌味にも、僕は力なく答えるしかなかった。

「高月君、お客さんだよ」

そんな時、クラスの女子から声が掛けられた。

「また、ファンクラブの連中か」

ため息交じりに僕は席を立つ。

「浩君〜♪」

「って、唯?！」

「尋ねてきたのは唯だった。」

唯の笑みが僕の中にあつた疲労をすべて弾き飛ばしてくれたような気がした。

「いきなりどうしたんだ？」

「あのね、一緒にお弁当を食べない？」

そう言つて僕の前に出したのは、二つのお弁当箱だった。

一つは唯ののだとして、もう一つのお弁当箱は一体……

「あのね、私浩君の為にしてお弁当を作ってきたの」

「唯が？」

顔を赤くしながら頷く唯。

「あまりうまくないかもしれないけれど」

「いや、それでもいいよ。唯が作ってくれたのだったら」

「浩君……」

僕の言葉に、不安そうな表情から一転して、うれしそうな表情を浮かべる唯の頬はもう真っ赤だった。

もしかしたら僕の顔も十分赤いのかもしれない。

僕は何て幸せな……

「はっ!？」

ふと自分がいる場所に気付いた僕は、周囲を見渡す。

そこには僕に微笑みを送るクラスメイトの姿があつた。

全員顔を赤くして、目を輝かせていた。

「ぢぐじよう。どうして浩介ばかりが!!」

……約一名ほどは涙を流していたが。

「場所を移そうか」

「了解であります!」

うん、全く何も変わっていない。

天然なところとかが（以下略）

そんなこんなで、僕たちは逃げるように教室を――

「こうなったら佐伯さんと今度こそサタデーナイトフィーバーでムフフな――ぎゃごっ!？」

出る前に意味の分からないことを喚く慶介に鉄拳制裁を施しておいた。

「それじゃ、いただきます」

「召し上がれ」

人気のない場所を探したが、結局どこに行っても人がいるので、面倒くさくなった僕はこの時期に絶好の昼食を食べるスポットとして名高い中庭のベンチに腰掛けていた。

そして僕たちは手を合わせて昼食をとり始めた。

唯の手作り弁当のふたを開ける。

「……………」

「ど、どう……かな？」

不安そうな表情で訊いてくる唯。

お弁当の内容は白いご飯に足が2本のタコさんウインナーもどき、そしてなぜか目玉焼きというどう判断すればいいのか、評価に悩むものだった。

はつきり言っただけ見た目的には、おいしそうには見えなかった。

僕は見ただけのことを忘れ、謎のタコさんウインナーもどきに手を付けることにした。

「……………うん。おいしいよ」

「ほ、本当？ お世辞とかじゃなくて？」

お世辞を言っていると思っただのか、不安そうな表情を浮かべ僕の方に顔を寄せながら聞いてきた。

「お世辞じゃないよ。僕は世辞が苦手なの。見た目はあれだけど、とてもおいしいよ」

「ありがとう、浩君♪」

最初に見た目のことを悪く言っただけで本当のことだと思っただのか、唯は満面の笑みを浮かべた。

「それじゃ……………」

「え、ちよつと!？」

何かを思い立ったのか、唯は唐突に僕の手からお弁当箱を取り上げた。

「はい、あーん」

「ツ!？」

その時、僕はとんでもない現場を目の当たりにした。

笑みを浮かべたまま、僕に差し出されるのは残っていたタコさんウインナー。

(これが噂の“はい、あーん”か。カップルの十八番とは聞いていたけれど、本当だったんだ)

僕も僕で感心する方向が微妙にずれていた。

「あ、あーん」

しかし、食べる側としてはとても恥ずかしい。

「どう?？」

「うん。おいしいです」

「えへへ」

分かったことがある。

食べさせてもらうと、どのような料理もさらにおいしくなる物だということが。

「それじゃ、次は浩君の番!」

「了解。それじゃ、これで行こうか」

僕に差し出された自分の箸を受け取った僕は、目玉焼きを手にする。

「はい、あーん」

「あ、あーん。はむ……おいしい♪」

恥ずかしげに口を押えながら味わっていた唯は笑みを浮かべる。

「でも、なんだか恥ずかしいね」

「バカ言え。これ、やる方もかなり恥ずかしいぞ」

変な発見をした僕たちは、その後“普通に”昼食をとるのであった。

「あの、浩介先輩」

「何？」

放課後、いつものように部室でティータイムと洒落こんでいると、向かいの席に座っていた梓が声を掛けてきた。

「浩介先輩と唯先輩は、付き合っているんですか？」

「ッ!？」

いきなりの問いかけに、思わず吹き出しそうになるのを必死にこらえた。

「な、なぜに!？」

「もうクラス中で噂になってますよ？ 昼休みに食べさせあいつこを
していた……とか」

顔を赤くして僕から顔をそらせながら答える梓に、僕はすべてを悟った。

どうやら、昼休みの一件はいい意味でも悪い意味で周囲に知らせる
きつかけになったのかもしれない。

(通りで午後から質問する人が来ないわけだ)

知られさえすれば、確認すること自体が無駄になるのだから。

きつとファンクラブの人が直接見たことが大きいのもかもしれない。

「そうだぜー。観覧車の中で熱烈な告白をしたんだぜー」

「まあまあ♪ とてもロマンチックね」

「……どうして律は観覧車だって知ってるんだ？」

相槌を打つ律に、ムギが目を輝かせながら僕に言ってくる中、僕は
律に疑問を投げかけた。

「え!？ そ、それは噂で……」

「あんだ、慶介と結託してたよな。しかも唯を誘い出したのは律だっ
たようだし」

「あは、あはははは……」

僕の突き放す言葉に、律が叫んだ。

「ちよつとばかり、お話をしたほうがよさそうだな……」

「ひいつ!？」

僕は律にそう言いながら、さつきを込めて律をにらみつけた。

ちなみにかかるくではあるが、それでも律の顔が青ざめたため、かなり効果があるようだ。

(今度からナイフやフォークじゃなくて睨みつけるだけでいいか)

そのほうがかなり楽だし、そうしようと僕は心の中で決めるのであった。

「浩君、さすがに律ちゃん隊長がかわいそうだよ」

「……………唯がそう言うんなら」

そんな時にかけられた唯の言葉を受けて、僕は律を睨みつけるのをやめた。

「ゆ、唯の言葉ですんなりと」

「何か言ったか、漣?」

「あ、な、何でもない!」

何かを呟く漣に声を掛けた僕に、漣は頬を赤くしながら慌てて反応した。

「でも、浩介先輩と唯先輩ならとてもお似合いだと思いますよ」

「もおく、恥ずかしいよ、あずにゃん」

照れた風に相槌を打つ唯に、和やかな雰囲気 flowed。

「ううー」

そんな中、一人哀愁を漂わせる人物がいた。

「さ、さわちゃん。そんな恨めしそうに浩介達を睨まなくても。まあ、気持ちちは分かるけど」

恨めしそうな目で僕たちをにらんでいたのは、顧問の山中先生だった。

何となく理由は分かるけれど。

「本当に、二人は付き合ってるの?」

「はい」

何の躊躇もなく答える唯は、ある意味大物だった。

「も、もしかして……き、キスとかも!?!」

「……は、はい」

その問いかけにはさすがに頬を赤くして答える唯。

「にゃ〜」

「はうわあ〜」

「あ、梓ちゃん?! 澪ちゃん?!」

そんな唯のカミングアウトに、とうとう許容量をオーバーしたように梓と澪が顔を赤くしてダウンした。

そんな中、山中先生はというと

「うう……今日はとことん飲んでやるうううう〜!!!」

涙ながらに、部室を飛び出して行ってしまった。

「一番の被害者はさわちゃんのような気がする」

その律の言葉が一番的を得ていた。

「それじゃ、また明日だね。浩君」

「ああ」

夕方、日も暮れ薄暗くなる中、僕は平沢家前まで唯を送り届けていた。

結局、あれから練習をすることはかなわなかった。

何となく原因がわかるだけに、僕も強く言うことができなかった。

でも、なんなのだろうか?

この、無性に離れたくない気持ちは。

「唯」

「なに——んむ?!」

言い訳になるかも、それは衝動だった。

気が付けば、僕は唯の唇に自分の唇を重ねていた。

「はむ……ちゅ……ぷはあ……もう、強引だよ。浩君」

「あはは……ごめん」

照れたような、少しだけ怒ったような表情で言ってきた唯に、僕は苦笑しながら謝った。

僕の自惚れだろうか？

唯はそれほどこいやだというような印象は感じなかった。

「じゃあね、浩君」

「うん、また」

そして、僕たちは今度こそ別れるのであった。

第88話 悪夢と決意と

「ん……」

ふと目が覚めた。

閉められたカーテンの隙間から朝日が差し込み部屋を照らす。

「あ、起きましたか？」

「え……憂？」

声を掛けてきたのは、憂だった。

その服装はなぜかエプロン姿だった。

「どうしたんですか？ 驚いたような顔をして」

「いや、だって……」

目を瞬かせる僕に、不思議そうな表情を浮かべる憂だが、そもそも根本的におかしかった。

「どうして、ここにいるんだ？」

「どうしてだなんてひどいです。それは私たちが恋人同士だからですよ」

照れ笑いを浮かべる憂の返事に、僕は自分の耳を疑った。

「もうー、何を言わせるんですか？ 浩介さん」

「何を言ってるんだ?! 僕の恋人は憂じゃないぞ！」

顔に手を当てて恥ずかしそうに相槌を打つ憂に、僕は慌てて否定した。

「ですから、本当は私のことが好きだったんですよね？」

「……は？」

憂の言葉に、とうとう僕の理解が追い付かなくなった。

「私って、こうすれば……ほら、お姉ちゃんみたいになれるんですよ」

「みたいだな。それがどうしたらそう言う結論になる？」

結んでいた髪を唯の髪形にして唯そっくりになっている憂に、僕は理屈を問いたです。

「浩介さんはお姉ちゃんを私に重ねていただけなんですよ？」

「……………お前は、何を言っているのかわかるのか？」

憂の言葉は、姉を侮辱しているとしたか取れない内容だった。

病的に感じるほど、姉を立てていた憂という人物は、そこには影もなかった。

「僕が好きなのは、寸分の狂いもなく唯だ」

「私にはわからないなあ。だって、お姉ちゃんはいつもごろごろしていて、何もできなくて、天然でいい加減な人なんだよ？ だからね」

憂はそこまで言うと、僕の前まで近づく。

「私にキスして？」

「ッ!？」

思えば、ここから僕の迷走は始まった。

「滯……どうしてここに？」

家を飛び出すと、まるで僕を待っていたように立っていた滯に、僕は驚きを隠せなかった。

「浩介を正しい道に戻すためだ」

「それならちようどいい、憂を何とかしてほしいんだ。なんだかおかしくなっちゃったみたいなんだ」

僕はこれ幸いにとばかり、滯に憂のことをお願いした。

どう見ても憂の様子は異常だ。

「おかしいのは浩介の方だよ」

「え？」

だが、返ってきたのは僕が予想してもいない言葉だった。

「いい加減で、変なあだ名をつけたりする奴のことを好きになる理由がわからない。もつと適任者はいるだろ？ たとえば私とか」

「ッ!」

小悪魔を彷彿とさせるような笑みを浮かべる滯の言葉に、僕は逃げるように駆け出した。

おかしい。

何もかもがおかしい。

気が付くと、梓と合流している場所まで来ていた。

「私を袖にして唯先輩を選んだ気分はどうですか？」

「な、何を言ってるんだ!？」

梓の皮肉を隠そうともしない言葉に、僕は言葉を失った。

「唯先輩といちゃいちゃして、さぞかし気分が良くて笑ってるんでしょね。私の気持ちも知らないで」

「ちよつと待って、梓だつて言ってたじゃないか!」 “ お似合いだつて”

あの時の梓の言葉に、嘘などないということに僕は信じたかった。

「そう言わなければいけない状況に追い込んだんじゃないですか!先輩に嫌われないためにがんばってきたのを見て笑わないですよ!

私は浩介先輩みたいになんでもできるわけじゃないの!」

「ツ!」

僕は走って逃げる。

何から逃げるのだろうか?

(どうしてこんなことに?)

分からない。

何もかもがわからない。

「はっ!?!」

気が付くと僕はベッドの上に寝ていた。

外は夜なのかまだ薄暗かった。

(ゆ、夢?)

確信はできないが、徐々に頭がさえてくることで、理解することができた。

試しに、自分の頬をつねってみる。

「うん。痛い」

ちゃんと痛みを感じたので、これは現実だとはつきりした。

(それにしても、何であんな夢を)

僕が見たのは紛れもなく悪夢だった。

「……………ダーク・ラスト・ジャッジメントか」

悪夢の原因はおそらくこの間の魔法だろう。

あの魔法は、爆発的な攻撃力を誇る魔法だが、それは闇というものを利用しているからだ。

闇とは別名邪気とも言い、人の負の感情（怒り、悲しみ、憎しみなど）によって生成されるものだ。

人間には完全なる悪人はいない。

巷にいる犯罪者は“闇”にとらわれた一種の被害者だ。

とはいえ、普通であるならば闇にとらわれても自分自身で対処することが可能などで、犯罪行為に及ぶことはないが。

僕は、その闇を無意識的に集束させて体の中に取り込む体質らしい。

そのせいで、僕の周りでは色々な事件が引き寄せられる。

この間の通り魔にしろ、内村竜輝や時間のループにしろ。

できる限りそれを防ぐため、封印を施しているのだが、この間の一件で一時的にはあるが解放してしまったため、その代償が僕に押し寄せているのだ。

その代償は一定ではない。

とてつもないほどの破壊衝動に襲われることもあれば、悪夢を見たりすることもある。

今回は後者のようだった。

悪夢の場合は、本人である僕が一番恐れる物を見させられる。

今の例でいえば、夢の中で憂達が口にした言葉は僕が無意識的にそうなることを恐れている物なのかもしれない。

（とはいえ、かなりストレスになるんぢよね）

夢の中とは言え、みんなから浴びせられる言葉の矢は、僕をこれほどかというほど痛めつけていた。

（憂に言うべきなんだけどな）

僕は、ふとそんなことを考えていた。

夢に憂が出てきたことで、これまで僕が抱えている課題を思い出しってしまったのだ。

その課題は、“憂に唯と交際を始めたことを言う”というものであった。

順番が違ったり、至極簡単そうに見えるかもしれないが、実はこれが重要かつ難しいことだった。

憂は、悪く言えば、唯に依存している節がある。

そんな彼女に、交際のことを言えば修羅場に発展する可能性だってあった。

何せ、僕は憂から姉を奪った人さらいのようなものだから。

二人いっぺんに愛せばいいという人もいるだろうが、それはいささか幼稚だ。

一人を満足に愛せない者に二人など無理に決まっている。

(何年かかっても、憂には快く受け入れてもらえなければ、その先のステップには行けない)

ご両親への挨拶はその後だ。

「よし、頑張ろう！」

僕は、改めて決意を固めるのであった。

皮肉にも代償で見させられた悪夢が、僕の背中を後押しすることになったのであった。

「突然だが、決議を取る！」

放課後、軽音部部室でいきなりそんな話題を切り出したのは、部長の律だった。

「いきなりどうしたんだ？」

「そうですよ、決議って言っても一体何の議題何ですか？」

律の言葉に、漣と梓が首をかしげる。

「議題はもちろん！ 我が部のバカツプルのことだ!!」

「あー」

「納得です」

議題がわかるや否や、二人は僕に呆れたような視線を送りながら頷

いた。

「ほえ？」

「な、何？」

間の抜けたような唯の返事をしり目に、僕は二人の視線の真意を尋ねる。

「二人とも、ここ最近その……毎日い、いちやいちや……してるだろ。そのことを律は言ってるんだよ」

よほど恥ずかしかったのか、頬を赤くして僕から視線をそらせながら説明してくれた。

「いちやいちやって、それほどひどくはないと思うけど」

「そうだよ、私たちがやったのはせいぜい——」

唯の言葉で、僕はこれまでの部活中のやり取りを思い起こす。

ある日の軽音部、その1。

「今日はカップケーキよ」

「おいしそうだな、おい」

ムギがテーブルに置いたカップケーキに律は感嘆の声を上げながら一つ手にした。

それに続くように、それぞれがカップケーキを手にしていく。

「はい、浩君。あーん」

「あ、あーん」

最近、僕は進歩して“はい、あーん”に普通に応じられるようになった。

まだ多少は恥ずかしいが、それでも取り乱したりすることはほとんどない。

「うん。やっぱりおいしい」

「でしょ♪」

「それ、ムギが持ってきたのだぞー」

唯の笑みの前では、律のツツコミなどただの雑音でしかなかった。

またある日の軽音部、その2。

「浩君。すりすり」

「唯、さすがにこれは恥ずかしいぞ」

座るや否や、いきなり僕の腕にしがみつく唯に、僕はそう口にした。

「でも、気持ちいいよ」

「つたく、この甘えんぼさんめ」

唯の幸せそうな表情の前では、僕は実に無力だった。

それから唯が離れるまでの間、僕たちはずっとくっついていて、

ちなみに、これは余談だが。

「ムギちゃん、悪いんだけどお茶を——」

「もふもふ」

山中先生が部室を訪れた際も、唯は僕の腕に抱きついてたため、

「うがああああああ!!!」

発狂した山中先生は、部室を飛び出して行ってしまった。

「——くらいしか思いつかないよ」

「それだけ思いついて“くらい”じゃないぞ」

確かに律の言うとおりだった。

考えてみればたくさん思い当たるようなことをしていた。

最後のに限れば、ものすごくひどいことをやっているような気がした。

（今度、山中先生に謝ろう）

心の中でそう決める僕なのであった。

「それで、二人の席を離そうと思うんだけど、賛成の人」

律の呼びかけに、手を上げたのは以外にも提案した律本人だけだった。

「な、なぜ!?!」

「だって、人の恋路を邪魔するのも悪いし」

「それに、下手に刺激すると悪化しそうですし」

「仲がいいのが一番だから」

滯と梓にムギと理由を口にするが、なんとなく腫れ物に触るように扱われているような気がするのには気のせいだろうか？

結局、この律の提案は“僕たちが程度を守ること”という結論になるのであった。

とはいえ、それから数秒後には“はい、あーん”をしていたので、全く意味はなかったが。

「ただいま〜」

「お、お邪魔します」

夕方、僕は唯に連れられていく形で平沢家を訪れていた。

目的はもちろん、憂に僕たちのことを話すためだ。

「おかえりなさい、お姉ちゃん。どうぞ、スリッパです」

「あ、ありがとう」

あいも変わらず憂は心配りができているが、あの悪夢を見ると裏があるのではないかと変に勘ぐってしまう。

「浩介さんだけが来るなんて珍しいですね」

「そ、そういえばそうかも」

憂の言葉に、僕はたどたどしく返した。

確かに、今まで律や滯たちと一緒にここを訪れたことしかなかった。

(怪しまれたかな?)

少しだけ不安に思ってしまう。

唯には僕が今日ここに来た目的を事前に説明しておいた。

表向きは夕食をごちそうになること。

裏の目的は、憂に交際していることを話すためだ。

唯の役割は、僕が話を切り出せる状況に追い込むこと。

そうでないとは確実に切り出すことなく、終えてしまうような気がするからだ。

ちなみに、僕が来ることは唯がメールで連絡していたので、憂は事前に知っている。

「それじゃ、お夕飯の準備をするので、浩介さんはリビングで待っていてください」

「あ、僕も配膳を手伝うよ」

唯が私服に着替えるために自室へと向かって行く中、リビングに案内された僕は、配膳の手伝いを買って出た。

何もしないでいるのは、さすがに気まずく感じたからだ。

「あ、すみません。お願いします」

こうして僕は、料理の配膳を手伝うこととなった。

「これで、最後ですな」

「な、なんだか量が多いね」

テーブルに並べられた料理の数々に、僕は苦笑しながら感想を漏らした。

どう見ても三人分の料理ではなかった。

「そうですか？ これでも足りないような気もするんですけど」

「……………」

(僕ってどれだけ大食漢に思われてるんだろう?)

あながち間違いではないけど。

準備は終えたが、唯はまだリビングに来る兆しがなかった。

「遅いな、唯のやつ」

「浩介さん」

ふとつぶやいていると、憂に声を掛けられた。

「何？」

「浩介さん、何か大事な話があるんじゃないですか？」

憂の目からは決して誤魔化させないという強い意志を感じた。

僕は、それを正面から受け止める。

「……………少し前から、唯と真剣に交際している。平たく言えば、付き合っている」

「……………」

「もちろん、遊び半分ではないし、唯のことを幸せにできるように努力するつもりだ。今日、ここに来たのはその挨拶をするため」

憂は表情を変えずに僕の言葉を聞いていた。

「だから、僕たちの交際を許してほしい。この通りだ」

土下座をするわけにはいかず、頭を深々と下げた。

「それって、いずれはお姉ちゃんとは結婚するということですか？」

「そのつもりだ。今は無理だけど、行くべき所に行って、しっかりと落ち着いたらなるけど」

憂からの切り込んだ問いかけに、少しばかり意外に思いながら、僕は冷静に答えていった。

実際、そこまで深くは考えていない。

というのも、唯は進路がある。

その進路がはっきりするまでは、僕は今の立ち位置でいるつもりだった。

「そうですね。だったら安心だね、お父さん、お母さん」

「へ？」

憂の口から出た単語に、僕はその意味が理解できなかった。

「ああ、君になら私の娘を任せても大丈夫だろう。ねえ、母さん？」

「ええ。それに何より娘が選んだ男の子ですもの。しっかりしていて優しそうだから、私は大賛成よ」

そう言いながら現れたのは、唯の両親だった。

「えつと……………」

「えへへ、浩君そこまで私のことを考えてくれてたんだね」

混乱している状態の僕に、畳み掛けるようにして頬を赤くしながら体をくねらせている唯が姿を現した。

そんな、サプライズにとうとう頭の処理能力を大幅に超えてしまった僕は

「……………きゆう〜」

「こ、浩介さん!？」

「こ、浩君!？」

気を失うのであった。

「う……ん」

「あ、目が覚めた」

気が付くと、僕はどこかに横たえられていた。

（あ、そうか。僕気を失ってたのか）

何だかとてもなく恥ずかしいところを見せてしまったような気がする。

少しだけ冷静になると、頭にやわらかい物の感触があった。

「大丈夫？ 浩君」

真上には唯の顔があった。

どうやら、僕は膝枕をされていたようだ。

キスや食べさせあいっこをしているのだ、膝枕程度で照れるわけがない。

「大丈夫。唯もごめんね、重かったでしょ？」

「ううん。重くなかったよ。とてもかわいい寝顔だったし」

「か、可愛い……」

前言撤回。

唯の前では慣れなど関係がない。

「あらあら。ふふふ」

「こうして娘は自立していくのだな」

「ツ!?!」

横からかけられた両親の声に、僕は素早く土下座した。

「大事な娘さんにひざまくらをさせて本当に申し訳ありませんでしたっ!!」

「ちよ、ちよつと落ち着いて」

それからしばらくして、ようやく落ち着きを取り戻した僕たちは夕

食に舌鼓を打っていた。

「ということは、憂もご両親方も知っていたんですか？」

「うん。ごめんなさい。学校の方で噂になっていて」

食事の際に、全ての事情を知らされた僕に憂は申し訳なさそうに謝ってきた。

要約すると、僕と唯の交際はすでに憂は知っていたそうだ。

そしてそれは両親もで、僕の本心を聞くために、わざと知らないふりをしていたのだ。

ちなみに、ご両親方がいたのは本当に偶々だとか。

「どうか、娘のことをよろしく頼むよ。高月君」

「はい。この命に代えても、娘さんを幸せにします」

そして僕はご両親にもう一度自分の覚悟を告げる。

修羅場は展開しなかったが、自分にとつてはものすごくいい決意ができたことを考えれば、これはとてもいいことなのかもしれない。

一気に二つの課題をクリアするのは少しばかり予想外だったが。

そんなこんなで、この日の夕食は、今までよりも楽しい物となるのであった。

2年生編 『遠き地より』 第89話 訪問者

日本、成田空港。

そこに、キャスター付きのスーツケースを手にする金髪の人物の姿があった。

「ふう……」

その人物は、成田空港を出ると、息を吐いた。

「やっと来れた」

その人物の目はとても輝いたものだった。

「彼のいる、日本に！」

その来訪者は、これから会うであろう人物のことで胸を躍らせるのであった。

一気に二つの課題をクリアしてから少しの日数が経った。

衣替えにより、全員は冬服の制服を身に纏うようになっていた。

そんなある日の休日、僕は慶介に呼び出され、佐久間家にやって来ていた。

「悪いな、休みの日に呼び出して」

「別にかまわないけど」

僕の前に差し出されたのはオレンジジュースが入っているグラスだった。

向かい側で申し訳なきげに謝る慶介の前にも、オレンジジュースの入ったグラスが置かれていた。

「実は、俺は今までのやり口を変えることにしたんだ」

「何を言ってるんだ？ いきなり」

唐突に変なことを口にする慶介に、僕は目を細めながら相槌を打った。

「相手からの告白を待っていたんだが、それではだめだと思ったんだ」
「何だ、そっちのことか」

慶介の話題に、ため息を漏らしたくなかったが、彼にとつてはとても重要な内容だと思ったので、僕はまじめに聞くことにした。

「要は俺自身の魅力を相手に伝えさせればいいんだ」
「なるほど、考えたな」

確かに自分の魅力を相手に伝えることができれば、慶介の場合はかなり状況は一変するだろう。

その後もいろいろと力説を始める慶介の話をしり目に、僕は目の前のオレンジジュースに手を伸ばすと、口元に近づけた。

(ん?)

そんな時、違和感を感じた。

(なんか、臭い)

オレンジジュースの入ったグラスから、ものすごく臭いにおいがしたのだ。

例を挙げるとすれば、くさや並の臭さだ。

(何か入ってるのか?)

僕はそう思うとグラスを置いて慶介の方に置かれたグラスを手にとると匂いを嗅いだ。

(臭くないということとは、何かを混ぜたか)

毒は体が勝手に解毒してしまうので僕には効かない。

だから、問題はないがわざわざ変なものを口にするのもいやなので、慶介がモテ論に花を咲かせているすきを狙ってグラスを入れ替えると真面目に話を聞いている態度をとって誤魔化した。

ちなみに、これは余談だが昔僕を暗殺しようとして青酸カリを飲ませたバカがいたが、体調を崩すことはなかった。

このことから、“僕の暗殺は実力行使以外にはない”という物ができてしまったことがある。

「あ、悪い。話に熱中してしまった」

「いや、中々に興味深い内容だったよ」

本当は適当に聴いていたが、とりあえず適当に感想を言っておくことにした。

「そう言ってもらえること助かるよ。あ、これ遠慮せずに飲んでくれよ」

「それじゃ」

僕は慶介に促されるまま、オレンジジュースを飲み始めた。

それを見て慶介も僕の方に置かれたものとは知らずに、口をつける。

「そこで、俺が考えたのはズバリ、惚れ薬さ！」

「……………」

思わず僕は言葉を失ってしまった。

それほどまでに慶介の口にしたアイデアが、馬鹿馬鹿しかったのだ。

僕はそれをジュースを飲み干すことで誤魔化した。

そして慶介もジュースを飲み干す。

「そしてこれがその惚れ薬だ」

「少し拝借」

僕は、慶介がテーブルの上に置いた惚れ薬と思われる透明な液体の入った小瓶を手にするまじまじと観察する。

「それを飲むと、最初に目に入った人物のことが魅力的に見えて仕方がなくなるといふ、男の夢の薬さ！」

「くだらない」

まさしくその一言に尽きた。

僕は惚れ薬が入った小瓶をテーブルの上に置いた。

「それで、何か感じないか？」

「何が？」

慶介の突然の問いかけに、僕は首をかしげながら聞きかえした。

「例えば頭がボーっとしてくるとか、くらくらするとかそんな感じだよ」

「……………どうして？」

無性に嫌な予感がしたが、僕は理由を聞かずにはいられなかった。

「実はな、その惚れ薬を浩介のジューズに入れたんだ。どうだ？」

「……………」

(だから、変なおいが…………いや)

安心するのはまだ早い。

もしかしたら交換したジューズの方に、それが入っているのかもしれない。

(落ち着け。まずは確認だ。僕が好きなのは、唯だ)

自分自身に問いかけ、答えを見つける。

そこに自分で思い当たるほど不自然な思考回路はない。

ということは、考えられる結果は一つだけだ。

「そっちの方はどうなんだ？」

向こうの方に入っているという結果になる。

「何を言ってるんだ……………い、入れたのは浩介のだけだ」

「入ってるのはそっち」

「へ？」

僕の言葉に、慶介の顔が固まった。

「変な前ふりをするし、それにジューズから変なおいがしたから、すり替えたんだ」

「どうしてお前はいつも俺の邪魔……………あ……………ばかり……………あ……………するんだ！」

僕の種明かしに、慶介がもう抗議するがそれは逆切れに近かった。

「惚れ薬の効果ぐらい自分で試してすればいいだろ」

「お、俺は……………あ……………理性が強いから……………あ……………惚れ薬のようなものに感情が動くようなことはないんだよ！」

何だか慶介の反論が少しずつおかしくなってきたような気がする。

このままここにいるのは危険だと悟った僕は、腰を上げて立ち上がる。

「あ……………」

そんな僕の腕を慶介が突然つかんできた。

まるで行くなと言わんばかりに。

「な、何をするッ！」

「べ、別に何でもない」

薬のせいか、それともいつものことなのか。

とはいえ、自分の腕を驚きに満ちた表情で見ているので、おそらくは前者かもしれない。

どちらにせよ、この背筋に走る寒気は偽りではない。

「浩介、今日は何か違うくない？」

「……………はあ?」

唐突におかしな事を猫なで声で言い出す慶介に、僕は素っ頓狂な声で叫んだ。

「ああ、髪を切ったのか」

「け、慶介?」

何だか目が血走っていて怖い。

「口づけというのは生物に共通するコミュニケーションさ。さあ、目を閉じて」

「……………」

はつきり言おう。

今とてつもない寒気が体を走っている。

それは恐怖と同等の感情だった。

そんな感情に支配された僕は

「いぼお!」

思いつきり慶介の顔面を殴り飛ばした。

「薬、馬鹿効きじゃないかつ」

紛れもなく慶介に惚れ薬の効果が出ていた。

(感情が左右されないんじゃないのかよ?)

「ばーか! ゾウリムシ! 単細胞!」

「ははは……素直じゃないな、ベイビー!」

どうしてだろう、惚れ薬でおかしくなっているとわかっているのに、僕の罵倒に対する慶介の言葉を聞いていると無性に殴り飛ばしたくなるのは?

「鍵かけて、部屋に閉じこもって……牛丼でも食ってろ、このターコ！」

僕はそう言って部屋の出入り口であるドアの前に向かう。

「お、おい！」

「あ、誰にも会わない方がいい。変態がばれるぞ」

慶介に忠告した僕はドアを開けるとそのまま部屋を出た。

「ま、待ってくれ〜！」

慶介のむなしい叫びをしり目に、僕はドアを閉めるのであった。

「つたく、何が惚れ薬だ」

僕は先ほど慶介の部屋から持ってきた小瓶を観察する。

「これは人目のつかないところで廃棄するか」

結局この日は、惚れ薬の廃棄という用事を抱えてしまう僕なのであった。

「へえ、そんなことがあったんですか」

「まったく、あいつは一体何を考えてるんだか」

翌日、学校に向かっていた僕たち軽音部のメンバーに、僕は先日慶介の一件を説明した。

「いや、効果を確かめるために浩介先輩にのませようとした佐久間先輩も佐久間先輩ですけど、それに対応する浩介先輩の方法もすごいですよ」

「だって、女子だったらまだしも、男に言い寄られて嬉しいわけないですよ」

梓の言葉に、僕は全力で反論した。

それほど気持ち悪かったのだ。

「でも、浩介君も、うれしかったんじゃないかしら？」

「はいいい!? 冗談は頭の中だけにして！」

うつとりしながらかけられた言葉に、僕は猛抗議した。

絶対にそういうのだけはないと断言できる。

「むう……」

「あの、唯さん？ 本当にムギの言葉は根も葉もない冗談だからね？」
不機嫌そうに頬を膨らませる唯に、僕は恐る恐る釈明した。

「浩君は、私じゃなくて、ほかの女の子に言い寄られるのがいいんだ」
「そっち!？」

「どうやら〃女子ならまだしも〃という単語に、唯は反応を示しているようだった。

「そんなわけではないでしょ。言い寄られて本当にうれしいのは唯以外にいないから」

「本当?。」

僕の言葉に、少しだけ信じる気持ちになったのか上目づかいで聞いてきた。

「ああ、もちろんだ。命をかけてもいい」

「……………浩君を信じる。えへへ」

そう言うや否いや腑抜け切った笑みを浮かべて腕にしがみついてくる唯。

「はあ……」

「気持ちは分かるけど〃またかよ〃という感じのため息をつくのだけはやめてっ」

今日も平和な一日になりそうだった。

「おっす、こうす——がほっ!？」

教室に入っただけですぐに表れた慶介の顔面を僕は条件反射で殴り飛ばしていた。

「い、いきなりなにを」

「ご、ごめん。まだ例の薬が効いているのかと思っただら反射的に」
涙目になりながら鼻を押さえる慶介に、僕は申し訳なく謝った。
どうやら薬の効果は切れているようだ。

「少ししたら切れたけど、入れ替えるはずらくねえか？」

「変なものを混ぜるからだ」

慶介の抗議に、僕はバツサリと言り返した。

「ほら、チャイムなったぞ」

「ちくしょう!!」

何やら力説しようとした慶介に、たまたま鳴り響いたチャイムに、
離れるように促すと叫びながら慶介は自分の席へと戻っていくので
あった。

「なあ、浩介」

「今度はなんだ？」

昼休み、珍しく教室で昼食を食べていると、前の席に慶介が腰かけ
ながら声を掛けてきた。

「何かな、この学校交換留学生を受け入れたらしいぜ」

「へえ、交換留学ね。それで、それがどうしたんだ？」

慶介の話に食いついた僕は、さらに先を尋ねることにした。

「今日、その留学生が来てるらしいんだ」

「それで、クラスの様子が変わったのか」

この日、クラス中が妙にふわふわと落ち付がない様子だったことが
気になっていたのだが、どうやら原因はこの留学生にあるようだ。

「なんでも、珍しいんだとき。留学生が」

「留学生はアイドルじゃないんだから。まったく、はしたない」

「俺も同感だ」

僕の吐き捨てるような意見に、慶介も賛同する。

「あぁー、高月君は仲間だって信じてたのに!」

「シヨック」

そんな中、それを聞いていたであろう女子たちがブーイングをして

きた。

しかもその中に佐伯さんの姿もある。

「大体あんたら、留学生と会話できてるのか？」

『うっ!?!』

僕の言葉に、女子たちは言葉を失った。

「そもそも、僕にとってはどうでもいいことだけど、日本人ははしたない女性が多いという誤った認識を留学生には抱かせてはいけないんじゃないのか？ アイドルじゃないんだから、見物にしてみたり写真をパシャパシャとつたりサインを求めたりとか」

「すごい、まるで見てきたようだね」

（本当にやってたのかよ?!）

ため息よりも、驚きの方が勝った。

「僕も興味はあるから聞くけど、その留学生ってどういうやつだ？」

「なっ!?! この俺を裏切るのか!!」

女子に、留学生のことを尋ねると慶介から今度は抗議の声が上がった。

「裏切るも何も、大挙して押し寄せてサイン攻めしたり、見物にする事がはしたないと言っただけであって、留学生がどういう人物かに興味があるのは彼女たちと同じだと言っているだけだ」

「つく、ここにきて裏切りか」

窓に手をつけて、何かのドラマの主役になりきったように、ぶつぶつと喋る慶介に、僕はため息を漏らした。

「どうせ、〃自分よりも注目されているのが悔しい〃っていうしょうもない理由の嫉妬だろ」

「しょうもない言うなっ! これでも切実なんだぞっ!」

「凶星だったんだ」

僕の指摘に、声を荒げる慶介に、僕の席に集まっていた女子の一人がポツリとつぶやいた。

「大体だな! もとをただせば浩介が、平沢さんという天使を――

―ガブリエル!」

「いい加減黙れ」

とりあえず、支離滅裂な言葉を聞くのが面倒になったのでいつものように潰しておくことにした。

「それで、どういうやつなんだ？」

「えっとね、金髪で、とつてもかわいい感じだった。まるで王子様みたいなー！」

「そうそう。なんだかまるでヨーロッパみたいなの雰囲気になってたもんね」

一人が口を開くと次々に説明を始め、しまいには留学生談義が始まってしまった。

(まあ、とりあえず身体的特徴だけは分かったからいいか)

談義の方には耳を傾けず、僕は必要な情報だけを得るのであった。

ちなみに、この女子たちの留学生談義は、昼休みが終わり先生が教室に来るまで続いていた。

ここまで話に花を咲かせられるのは、ある意味才能ではないかと感じる僕なのであった。



「律ちゃん、オイーツス」

「オイーツス」

いつものように唯が軽音部の部室を訪れた。

「あれ、浩君は？」

「さあ？ 掃除当番とかじゃないか？」

首をかしげながらいまだ来ていない浩介のことを尋ねる唯に、律が相槌を打つ。

「はい、唯ちゃん」

「ありがとー、ムギちゃんいつものようにお茶を入れたムギに、唯は嬉しそうに顔を輝かせながらお礼を言うと、お茶に手を付けた」

そんな、いつもの軽音部の風景画、この後一変することを彼女たちは知らなかった。

「Excuse Me」

「ふえ!?!」

ドアが開いたのと同時に、流暢な英語が唯たちに聞こえた。

「ここは軽音部の部室かな?」

『……………』

金髪に一件女子と見間違えるほどの美形男子の問いかけに、唯たちは固まっていた。

「り、りりりり律ちゃん!? 英語だよ! 英語の人が来た?!」

「違いますよ! 留学生じゃないですか!?!」

「お、落ち着け。こういう時は私に任せておけっ!」

突然のことに動揺する唯たちに、力強く告げた律は部室を訪れた男子の前に歩み寄る。

「ハ、ハロー。マ、マイネームイズ…………」

片言の英語を話した律に、固唾をのんで見守っていた唯たちがズッコケた。

「あーえー…………ココ、ケイオンブ、デスカ?」

だが、それでも律たちの慌てている理由が伝わったのか、片言のたどたどしい日本語ではあるが、問いかけた。

「い、イエス!」

それに反応したのは、先ほどまであたふたしていた唯だった。

その答えに、男子の表情が明るくなる。

「それじゃ、ここにコウスケと言う人物はいるかい!?!」

「へ?」

男子の口から出てきた意外な人物の名前に、漣が声を漏らした。

「浩介君とお知り合いですか?」

「うわ!?! ムギちゃんも英語になった!?!」

「ですから、英会話をしているだけです」

突然英語で会話を始めたムギに、驚きをあらわにする唯に項垂れながらツッコみを入れる梓。

そんな中、ドアの開く音が彼女たちの耳に入ってきた。

「何だなんだ? ものすごく騒々し…………」

中に足を踏み入れながら、呆れた口調で声を上げる浩介は、男子生

徒の姿を見ると目を丸くして言葉を失った。

「ま、まさか……お前」

そして、目を瞬かせながら浩介はその人物の名を口にするのであった。

第90話 旧友

「はあ、やっと終わった」

運悪く掃除当番だった僕は、掃除を終えて部室へと向かっていた。
(全く、慶介のやつ)

僕は心の中で、慶介に毒づく。

というのも、終わるのが遅くなったのは、慶介が原因なのだ。

「皆聞いてくれ！ この状況はおかしいと思う！」

掃除の最中に、突然そんなことを喚きだした慶介に、掃除をしていた僕たちはその手を止めた。

「何がおかしいんだ？」

「今、俺たちは掃除とはなんたるか……その心を忘れているような気がするんだっ！」

強い口調で持論を述べる慶介の言葉は、とても立派なものだった。

「私もそう思う！ やっぱり掃除はちゃんとしないとねっ！」

慶介の言葉に、珍しく女子が同調した。

僕も慶介の意見には同意する。

「そこで今日。俺は掃除としての心を取り戻す大変すばらしい案を提案する！」

「それはどんな？」

掃除当番の女子が、慶介にその案を尋ねる。

「掃除中、女子はメイド服を着るといいう、大変すばらしい者だっ!!」

その言葉に、教室の音頭が一気に下がった。

「高月君、私も手伝うよ」

「私も」

「あたしもよ」

手に持っている箒を持ち直そうとしていると、女子たちが名乗り出た。

「どうやら、相当慶介の馬鹿げた案が許せなかったらしい。」

「あ、あれ？ 皆さん目が怖いですよっ。」

「タイミングを合わせて行こう」

『はいっ！』

慶介という名の敵に、僕たちは臨時のチームが出来上がっていた。慶介の逃げ道をシャツトアウトするべく、窓際に追い込んだ。

『咎人に罰を!!』

「げぼあ、ぐぼお、ぐぼあ!？」

女子と僕の一齐攻撃に、慶介は沈んだ。

こうして、女子の敵は退治されるのであった。

「く、ククク。男、佐久間 慶介。男の夢の前で、無残に散る………ガク」

そんな意味の分からない言葉を残して。

この騒動によって、掃除の終わる時間が遅れることになったのだ。

ちなみに慶介はそのまま放置しておいた。

どうせ少しすればケロッとして帰っていくのだから。

(ん?)

階段を上ったところで、上の方から騒がしい声が聞こえてきた。

「何を騒いでるんだろう?」

声からして律の物だというのは分かるが、詳細の方までは把握できなかったため、僕は首をかしげる。

そして階段を上りきった僕は、部室のドアを開ける。

「何だなんだ? ものすごく騒々し——」

そう言いながら部室に入った僕を、沈黙が襲った。

それはまた僕も同じだった。

部室には慌てふためく律に唯、そしてなぜか項垂れている梓の姿があった。

そこまでは別に普通の軽音部の光景だろう。

だが、僕の前に立っている人物はそれだけではなかった。

金色の短めの髪をしたこの学校の制服を身に纏っている人物がいたからだ。

(嘘だろ?)

その人物の後姿には見覚えがあった。

「ま、まさか……お前」

それは、僕にとっては忘れられない存在。

「ジョン!？」

最初にできた友達なのだから。

ジョンと思われる男子生徒は、僕の言葉に反応しゆつくりとこつちに振り向く。

美形男子を思わせる整った顔つきは、まぎれもなくイギリスの学校と一緒に通っていたジョンだった。

「ジョン！」

「コウスケ！」

久しぶりに再会できた旧友に、僕たちは手を取り合った。

「どうして、お前がここに……まさか、交換留学生って！」

「そうだよ！ 僕のことだよ！」

嬉しさのあまりに、僕たちは会話を始めるがついていけない人物がその場にいた。

「ちよつと、マシンガントークをしてないで、説明してくれよ！」

「この人は一体誰なの？」

「あ………」

すっかり紹介する過程をすつ飛ばしていたことに気付いた僕は、何とも言えない表情を浮かべながらジョンと顔を見合わせるのであった。

「それじゃ、紹介するよ」

気を取り直した僕たちは対峙する形で立っていた。

唯たち軽音部のメンバーは横一列に並び、その前に僕とジョンが立っている。

「彼はジョン・オルコット。イギリス留学でのガーディアンでお世話になった、オルコット家の長男」

「ガーディアン?」

僕の紹介に、聞きなれない単語だったのか、唯が首をかしげた。

「ガーディアンっていうのは簡単に言えばホームステイ先のような感じで、他人を受け入れてくれる家のこと」

「確か、イギリスの留学はガーディアンが必要だったんだよね?」

さすがはお嬢様でもあるムギだ。

留学に必要な条件もしっかりと把握していた。

僕はムギの言葉に頷いて答えた。

「ちよつと、いいかな?」

「何?」

そんな中、漣が手を上げて声を上げる。

それにジョンが反応する。

ちなみに、今僕は通訳をしている状態で、ジョンの言葉を唯たちに言っている状態だ。

面倒くさいが、それをしないと伝わらないため、通訳をしている。

ちなみに、翻訳魔法というのがあり、本国言語で会話ができるようにすることができるといえる。

だが、それでは意味がないので、全く使用していない。

とはいえ、英語以外は別だが。

閑話休題。

「オルコット家って、もしかしてオルコット楽器の……」

「ああ、御曹司だよ」

「ツ!!」

ジョンが答えるまでもないので、僕が頷くことで答えると、漣が燃え尽きたようによろめいた。

「漣ちゃん!」

「漣!」

そんな漣に駆け寄る唯や律たち。

「だ、大丈夫なのかい?」

「ああ。いつものことだから。そつとしておいてあげて」

心配そうに聞いてくるジョンに、僕はそう相槌を打った。

「オルコット楽器って、音楽界では知らない人がいないとされている家ですよね?!」

「そうだね」

おそらくは梓や滯の反応が正しいのだ。

オルコット楽器グループ

それは、音楽界に置いてある種の革命をもたらせたとされている。どのような革命なのかは、はつきりしていないが音楽評論家だったことが関係しているのではないかと言われている。

噂では、ガールズバンドの追い風となったと言われている。

バンドの中に女性が混じりことはあれど、ほとんどが女子で構成されたガールズバンドは全く存在すらしなかった。

音楽界では男女差別がないと言えればそれは嘘になる。

酷い話ではガールズバンドという理由だけで、演奏をさせずに不合格にするコンテストもあったほどのだから。

だが、現在はガールズバンドというのもまた一つの立派なバンドという認識がされるようになり、女性の活躍の場が広がりつつある。

それはともかくとして。

またこの楽器グループの作る楽器はすべて逸品とされており、高値で売買されていたりする。

「それで、こっちの方から。キーボードの琴吹紬」

「琴吹紬です。よろしくお願ひいたします」

僕の紹介に、ムギは流暢な英語で自己紹介をした。

「ん？ 琴吹って……あの琴吹グループかい？」

「そうなるね」

さすがは楽器店の御曹司だ。

すぐに琴吹グループの関係者であることがわかったらしい。

「いやあ、このようなところであなたにお会いできるとは光栄ですよ」
「ありがとうございます」

笑顔でジョンの握手に応じるムギはある意味すごかった。

「それで、横にいるのがリードギターの平沢唯。僕の恋人だ」

「なんと?! コウスケに彼女ができたのか! いやいや、とてもかわ

いらしいお方だ……コウスケがうらやましい」

恋人という言葉に、驚きをあらわにするジョンだが、微妙に失礼なような気がした。

「な、なんて言ってるの？」

「とつてもかわいい恋人さんだねって」

唯の疑問に、誤魔化しながら通訳をしようとするが、ムギによってさえぎられてしまった。

「ッ!？」

「……その横が、リズムギターの中野 梓」

「よ、よろしくお願いします」

緊張した様子でおじぎをする梓に、ジョンが一言

「とてもかわいい子じゃないか。幼さがあって」

「……」

また通訳に困るようなコメントをするジョンに、僕はどういえばいいのかに悩んだが、最後の方をぼかして翻訳することにした。

「それで、その横がここの部長でドラムの田井中律」

「あー、男勝りのこだね」

「た、田井中律です。よろしくお願いします」

声を上ずらせながら、自己紹介をした。

“男勝り”と言われてもなんとも思っていない様子がある意味すごかった。

「それで、最後が……あっちの方で隠れてるのが秋山濤。かなり恥ずかしがり屋で、いつもあんな感じなんだ」

「そう言うことだったのか。嫌われているのではないかと、思っ心配してしまったよ」

まあ、事情を知らない人からすればそうだろうな。

「あ、秋山濤でしゅー！ よろしくお願いしますしゅー！」

完全にテンパっているのか律よりも声を上ずらせて、髪ながら自己紹介をした。

ちなみに濤にはこの学校で語られている伝説、通称“秋山伝説”なる物が存在するが、それはまた別の機会に説明することにしよう。

「彼女たちが、今僕が所属している第2バンド、放課後ティータイムのメンバー」

「なるほど、なかなか個性的だね」

「どうやら、彼女たちの強すぎる個性はジョンのお気に召したようだ。」

「あ、一緒にお茶でもしませんか?」

「いいのかい? 僕は完全に部外者だけど」

ムギの提案に、ジョンは戸惑ったような表情で躊躇するが、

「ええ、もちろんですよ」

「それに、イギリスでの浩介先輩の事も知りたいですし」

という、皆の反応に圧されるようにして、僕たちはいつものメンバーにジョンを加えてティータイムをすることとなった。

「おいしい。イギリスで飲んだ紅茶と変わらない味だ」

「ありがとうございます」

ムギが淹れた紅茶に口をつけたジョンの間奏に、ムギは嬉しそうな表情でお礼を言った。

「あの」

そんな時、口を開いたのは律だった。

「浩介とはいったいどうやって知り合ったんですか?」

「うーん。それは、僕よりコウスケの方が詳しいと思うけど?」

そう言っ僕の方に視線を向けるジョン。

「何だか恩着せがましくなるから言いたくないんだけど」

そんなジョンの視線につられるようにこちらを見る皆に、ティーカップを置きながら僕はつぶやいた。

「お願いします、浩介先輩。聞かせてください」

「私も、知り合うきっかけが気になるし」

「どうやら、さらに興味をひかせてしまったようで、話すようお願いをする皆の目は、絶対に離させるといふ熱意に満ちていた。」

「浩君、私も聞きたいな」

「……………分かった、わかった。話しますよ」

唯の上目遣いによる懇願で、とうとう根負けした僕は、両手を上げ

ながら降参の意を示して返事を返した。

「あれは、僕がイギリスに留学をするために向かった時のことだった」
そして、僕は当時のことをみんなに話し始めるのであった。

時間は大幅に遡り、約5年ほど前。

「ここが、イギリス」

ヒースロー空港を出た僕は、イギリスの風景に魅入られていた。

小学校を卒業したのを節目に、世界の教育というものを知っておきたいと思い、僕はイギリス留学の道を選んだ。

同級生の中には、僕の頭がいいから留学をすると言っている者もいた。

それを否定はしない。

自分でもわからないが、どこかしらかにそういう一面があるのかもしれないなかったからだ。

世界の教育を知るというのも本当の理由であった。

「さて、まずはガーディアンを探さない」と

イギリス留学をするにはガーディアンという身元引受人のような人物が必要になる。

試験は問題はないにしろ、このガーディアンが問題となった。

学校側で探してもらったのだが、すべての候補先でお断りという結果になったのだ。

なんでも、小学生ぐらいの子供の面倒を見れる保証がないとのことだった。

しかも、僕には両親がいない。

この世界には親がいないために、僕の身分は完全に怪しい物となっているのだ。

それが、さらにガーディアン候補に警戒をさせてしまう要素と化し

ていた。

そう、何もかもが早すぎたのだ。

(うーん、今日見つからなければ諦めるか)

子供の僕がホテルなどをとれるわけもなく、野宿になるのはゴメンだったため、ぎりぎりまで粘ってみるつもりだった。

「昼食はとれたけど、これからどうしよう」

近くの喫茶店で軽く昼食をとった僕だったが、この後どうするか首をかしげていた。

そんな時だった、ある悲鳴が聞こえてきたのは。

「きゃあああああ!! ひったくりよ!」

女性のかなぎり声に、僕は慌てて立ち上がると周囲を見渡す。すると、少し先の方で走り去っていく男の姿があった。

手には女性物のバッグが見えた。

(あいつだっ!)

僕はすぐさま犯人を特定し、男の後を追う。

「待てっ! そのひったくり野郎!」

「なっ!? ガキかよ!」

軽く走りながら、男との距離を詰めていく。

「くそッ! ガキに捕まっつてたまるか!」

僕の姿に男はそう吐き捨てながら走る速度を速めるが、その努力もむなしくさらに距離は詰まっつていく。

「この糞ガキがっ!」

それに気づいた男は懐から銃を取り出すとそれを僕に構えた。

「ぶっ殺してやるッ!!」

「ッ!」

銃声が鳴り響くが、僕はサイドステップでその場を離れることで銃

弾を躲した。

「なっ!？」

「この私に銃を向け、発砲した度胸は認めよう。だが——」

一瞬で僕は男の懐に潜り込む。

「それはただの無謀だっ!」

「うおおお!!? グガっ!」

背負い投げの要領で僕は男を投げ飛ばした。

投げ飛ばされた男はその場で昏倒した。

「ひったくつたこのバックは返させてもらうよ」

男を適当な電柱に縛り付けて、手にしていたバックを奪い取った僕は、男にそう告げるとその場を後にした。

背後から歓声のようなものが聞こえたような気がしたが、それを気にせず、僕は先ほど女性がいたであろう場所にかけていった。

「失礼。貴女の取られたバックはこちらですか?」

「は、はい! これです! ありがとうございます、坊や」

僕の差し出したバックを大事そうに抱えた腰まで伸びた金色の髪の毛の女性は、優しい笑みを浮かべてお礼を口にした。

「それじゃ、僕はこれで」

「待って!」

立ち去ろうとする僕を、女性が引き留めた。

「助けてくれたお礼がしたいわ。欲しいものがあつたら何でも言つてちょうだい」

「……………いえ」

女性からの申し出に、僕は静かに声を漏らす。

「私はべつにお礼がほしくてやったわけではありません。ですので、お礼は不要です」

「……………でしたら、お茶を一杯ごちそうすると言うのはどうかしら?」

なおも食い下がる女性に、僕は根負けしてそれでいいと告げた。

「だったら、この近くにいい喫茶店を知っているの。行きましょう」

頷くや否や女性は半ば強引に僕の手を引いて行くのであった。

この時、僕は知らなかった。

この出会いが今後の運命をすべて変えることになるであろうことを。

第91話 友のため

近場にあった喫茶店に招待された僕は、女性に紅茶をごちそうになつていた。

適当な席に腰掛けた僕は、女性に聞かれるがまま事情を話していた。

「そう。貴方は日本からの留学希望生なのね」

「ええ、まあ」

話しても何の意味もないと思い、僕は紅茶に口をつける。

「もしよければ、留学用の書類を見せてもらえないかしら?」

「ええ。構いませんけど」

女性の申し出に、僕は一瞬考えたが、別に知られてまずいようなことは書かれていないので、承諾すると書類を女性に手渡した。

「留学試験を最優秀な成績でパスしたのはすごいことよ。でも……」

僕が手渡した書類に目を通した女性は、感心した様子で口を開くが、なんといいばいいか迷ったような表情を浮かべた。

「でも、ガーディアンがいらないようだといくら試験をパスしても留学は無理よね」

「ええ。今日中に決まらなければ辞退するつもりです」

「諦めるの?」

紅茶に口をつけが鳴ら応える僕に、女性が疑問を投げかけた。

「諦めてはいませんよ。最後の最後まで、希望を持っていくつもりですから」

「そう。変なことを聞いてしまつてごめんなさいね」

「いえ、気にしてないので」

女性の問いかけに答える僕に、その女性は申し訳なさそうに謝ってきたので、僕は首を横に振りながら答えた。

それから数分して、僕たちは別れた。

「へえ、そんなことがあったんだ」

「さすが浩君だね♪」

感心したようにつぶやく律とは対照的に、笑顔で腕に抱きつく唯の頭をなでることで対応した。

「その女性とはそれっきりで、二度と会うことはないだろうと思っていたんだけどね」

「また会うことになったんですか？」

「しかも、すごい形で」

僕はその時のことを思い返してみた。

いきなりガーディアンが見つかったという連絡で向かったガーディアンの自宅は、まるで某国の大統領が暮らしている場所を彷彿とさせるほどの広さと大きさを誇る建物だった。

そして、その住人こそが、あの時の女性だったのだ。

「偶然って、あるもんなんだな」

「そんなに起こることはないと思うけどね」

滲の漏らした言葉に相槌を打つムギの言うとおり、そんなに起きるようなことではなかったのだ。

僕のはただ運が良かっただけだ。

「コウスケって、相手から行動を起こさないと何もしない癖があるからね。留学先の学校でも、僕が話しかけてようやく会話を始めたくらいだし」

「なるほど、それで佐久間と知り合ったわけか」

「なんだか自分のことが分析されるのは、すごく居心地が悪く感じた。」

きつと相手も同じ心境なのかもしれない。

「……………ジョンの言うとおりだけど。」

「自分から話しかけるって、何を話せていうんだ？ 天気のことでも話せと？ 知っていることをなぜ話さなければならぬ」

「そして、理屈派ですね」

皆が僕を見て一斉にため息をついた。

「ここに入部するのは勧誘して？」

「いえ、自分から言い出しましたよ」

「へえ、あのコウスケが自分から入部を決めるなんて。驚きだ」

ムギの説明に、感心したようにジョンがつぶやく。

僕はただただ居心地が悪く感じながら、紅茶に口をつけるのであった。

「それにしても、まさかジョンが、日本に来てしているなんて」

自宅に戻った僕は、自室のベッドの上で静かに呟いた。

ジョンは、イギリスで初めてできた僕の友人。

その出会いは、今でも鮮明に覚えている。

『君が、タカツキコウスケだね。僕は、ジョン・オルコット。ジョンって呼んでね』

『た、高月浩介。僕のこと、浩介と呼んで』

家のリビングで、自己紹介をしあい、手を握る。

それが、全ての始まりだった。

『貴方は、今日から私の家族よ。私のことを母親のように接してくれるかしら』

『……はい』

女性のその言葉があったからこそ、僕は今があるのかもしれない。

僕は、とてもうれしかった。

『コウスケって、どこことなく親しみを感じるんだよ。だから、僕が兄貴分だね』

『おいおい、それは勘弁してよ』

時には、兄弟談議に花を咲かせたこともあった。

結局、誰が兄かという結論は出なかったけれど。

「…………気が付けば、僕って」

ふとあることに僕は気付いた。

「僕は何もお返しができていない」

オルコット家に対して、僕は恩返しをしていなかったことを思い出したのだ。

これまでは色々と与えてもらっただけだった。

でも、それではだめなのだ。

ちゃんと自分で何かを返していかなければ。

「しかし、一体何をお返しすれば……………」

浮かび上がった問題はそれだった。

僕には、どうすればいいかが全く分からなかったのだ。

「はあ…………ギターの練習でもするか」

考えていても何も始まらないと考えた僕は、ギターの練習をすることにした。

相棒でもある Gibson のギターを構えて、次に演奏する曲のギターパートを軽く弾いていく。

弾くとは言え、アンプにはつないでいない。

なので音の迫力は皆無だが、基礎練習にはもってこいだった。

「……………そうだった」

そんな時、僕はある方法を導き出した。

(でも、これは……………)

しかし、その明暗にはある障害があった。

それは、唯たちだ。

彼女たちの協力がなければ、僕はそれを行うことができないのだ。

「とにかく、明日の部活の時に、頼んでみよう」

僕はその方法を実現するべく、気合を入れるのであった。

「オルコット君の為に、演奏をしたい!？」
「ああ」

翌日の放課後、僕は部室で律たちに思いついた方法を告げていた。僕が思いついたのは、演奏を聴かせることだった。

「歌というのは不思議な力を持っている。」

歌に乗せて、僕の感謝の気持ちを相手に伝えることができるのではないかと考えたのだ。

本人に言うのは少しばかり恥ずかしかったので、この方法が何かお返しができる気がしたのだ。

ただ、問題なのは一人ではだめなこと。

ちゃんとした曲にするには、放課後ティータイムの演奏が必要になる。

「もちろん、無理にとは言わない。これは僕の勝手な思いつきだから、みんなが嫌なら——」
「ちよつと待った」——律?」

僕の言葉を遮るように口を開いた律に、僕は首をかしげた。

「何でもかんでも決めつけるのが浩介の悪いところだよ」

「そうですね。私も、先輩たちのバンドの仲間じゃないですか。その仲間が駒ていることがあって、綿地たちにそれができるのなら、私は協力しますよ」

「私も。なんだかんだで、浩介君の昔のことを教えてもらったから。何かお礼をしたいなって思ってたのよ」

漣や梓、ムギが続いて僕にとがめるように声を掛けてきた。

「……ありがとう、みんな」

「よっしや、それじゃどの曲にするか決めようぜ!」

律の呼びかけで、僕たちはジョンへの感謝の気持ちを込めた演奏の曲名を考えることになった。

だが、これが一番難航した。

「演奏するんなら、やっぱり誰も知っている曲の方がいいよな」

「それじゃ、『ふわふわ時間^{タイム}』とかは除外ですよね」

漣の言うとおり、せっかく演奏するのならオリジナルではなくカバーの方がいいだろう。

「でも、あれ以外で演奏できる曲なんてあったか？」

『……………』

律のその言葉に、全員が考え込み始めた。

律の言うとおり、そのような曲は全く……………

「あっ!？」

「うおっ?! びっくりした…:… 一体どうしたんだよ、大声なんか出して」

なかったと思われたが、実はそれに該当する曲が存在したのだ。

「いや、あったんだよ。おそらくは誰でも知っつていそうな曲が」

「それって、一体何? 浩君」

興味深げに聞いてくる唯に、僕アその曲名を告げた。

『『翼をください』だ』

「『あー』」

その曲名を知って唯たちはなるほどと言わんばかりに、声を上げた。

「あの曲は、軽音部の始動のきっかけになった曲だし、いいじゃんか」
「そうだったんですか!」

腕を組みながら感傷に浸る律に、梓は目を輝かせながら相槌を打った。

(まあ、アドリブでやった曲だけど)

あの時のことを思い出すと、笑い出しそうになった。

よくもまあ、無茶ぶりに応じたものだと思っても思うほどだ。

「実は、あの時の曲にアレンジを加えてみたんだ」

「そうなんだ、でも音源は?」

「それならムギに返した音楽プレイヤーに入れてあるはずだけど」

漣の問いかけに答えると、ムギは若干慌てた様子で鞆から音楽プレイヤーを取り出すと操作していた。

「あ、本当だわ」

データを見つけたのか、驚いた表情を浮かべたムギはイヤホンの片方を自分の耳に、もう片方を梓に渡して再生を始めた。

曲の演奏を聴いていた梓は頷くとイヤホンを唯に渡し、ムギも漣に

渡す。

渡された唯と漕はそれぞれ領くと律の方に手渡した。

「おー、本当に『翼をください』なのかが不思議に思える感じだ」

「曲調をアップテンポに、メリハリのある感じにしてみましただから」
元の曲の静かな曲調もいいが、アップテンポな曲調もとても似合っている曲に仕上がったという自信があった。

「もうすでに譜面は作ってある。今からでも練習をしよう」

「え？ どうしてだ？」

僕の有無も言わせぬ口調に、首をかしげながら律が訊いてきた。

「ジョンが来るのは明日で最後。明後日にはイギリスに帰るんだ。だから練習は今日しかできない」

『あ……』

僕の返答に、ようやく気付いたのか全員が声を上げた。

交換留学は明日で最終日を迎える。

明後日にはもうイギリスでいつもの生活を送っているだろう。

だからこそ、少し焦っていたのだ。

「それじゃ、コウスケの友達の為に、頑張るぞー！」

『オー……』

こうして、僕たちはアレンジした『翼をください』の演奏を成功させるべく練習を始める……のだが、とんでもない問題が浮上した。

「浩介は本当に、バッキングパートでいいの？」

「ああ。これが放課後ティータイムでの僕の立ち位置だよ」

最初はパートの分類。

当初は僕をメインにしようという意見が上がっていたが、僕は丁重に断ってバッキングギターになった。

それが、僕の立ち位置であり、いつもの姿なのだ。

そう言う面では、僕がバッキングパートを担当するのが通りだった。

そして、一番の問題は、演奏中だった。

(よし、ここまでは大丈夫)

順調に曲を演奏していた時にそれは起こった。

(ん?)

サビの箇所ですべて全員で声を合わせたところで、何か違和感を感じた。その違和感の正体に気付くことがなかった。

だが、正体はすぐに気付くことになった。

それは間奏を終え、2番の歌詞をある人物が歌い始めた瞬間だった。

(……………)

違和感は確信へと変わった。

その歌声が程よくバランスの取れている音の調和を大きく狂わしたのだ。

「ストップ、ストップ！」

「ど、どうしたんですか？」

突然演奏を中断させたことに、驚きをあらわにする梓。

「梓、さっきの箇所、もう一回歌ってもらっていい？」

「は、はい」

僕の言葉に、快く頷いた梓は2番の歌詞を歌い始めた。

(さっきほど下手じゃない)

うまいともいえないが、それほど下手というわけではない歌声だった。

やはり、さっきの変な歌声は気のせいなのだろうか？

「それじゃ、今度はギターを弾きながら」

「は、はいー」

念のために、僕は梓にギターを弾きながら歌ってもらうことにした。

『……………』

その瞬間、部室中が痛い沈黙に包まれた。

梓が奏でた歌声は、一言でいうと“下手”だった。

音痴というわけではないが、ただただ下手なのだ。

音程は外れているし、ビブラートを効かせすぎたり、他には歌いだしのタイミングがずれていたり等々凄まじい歌声だった。

一番すごいのは、そのことに当の本人が気づいていないことくらい

だが。

(これは絶対にダメだ)

改善する時間がない僕が応急処置として取ったのは、

「あ、梓のボーカルは僕がやるよ」

ボーカルの変更だった。

「え？ どうしてですか？」

僕の提案に、梓が首をかしげながら聞いてくるが、本当ことを言つて傷つけるのも気が引ける。

「そうだな、それがいいな。浩介にも見せ場を作らないと」

「そ、そうなんですか？」

「そうなんだよ、あずにゃん」

未だに納得していない様子の梓だったが、僕たちは強引に納得させることにした。

結局、梓は渋々ではあるがボーカルの変更を受け入れてくれた。

(今度梓にはボーカルトレーニングをすることにしよう)

このままだと遅かれ早かれすごい地獄を見ること人あるのは確かだったため、僕は心の中でそう決意するのであった。

そんなハプニングがあったものの、何とか人に聞かせられる演奏のレベルにまで僕たちはたどり着くことができた。

(あとは、演奏を成功させることだけを考えればいい)

僕は心の中でそうつぶやき、明日の本番に思いを馳せるのであった。

この後、ある問題に僕たちは直面することになるとも知らずに。

そして、僕たちは運命の日を迎えるのであった。

第92話 サプライズとお別れと

ついに運命の日を迎えた。

「よし」

昼休みの終盤に差し掛かったところで、僕は席を立った。そしてその足で向かうのは、佐伯さんのところだ。

「佐伯さん、ちよつといいかな？」

「何？」

声を掛けると、今まで話していた女子たちから視線をそらして用件を尋ねてくる。

「一つ、お使いを頼まれてくれないか？」

「へ？」

僕の言葉に、予想していなかったのか驚きのあまりに目を瞬かせる佐伯さんの前に、ジョンへの宛名を記した一通の封筒を差し出した。

「留学生のところに行つて、これを渡してもらいたいんだけど」

「えつと……自分で渡せばいいんと思うんだけど」

僕の頼みごとに、困惑した表情で言ってくる佐伯さんに、僕は肩を竦めて答えた。

「この間偉そうに言った手前、自分から行くというのは少し憚られるから」

「高月君つてそういうところ真面目よねー」

「そうそう。別に気にしないのに」

苦笑しながら理由を言う僕に、周りにいた女子たちは笑いながら相槌を打った。

「それに、僕クラス知らないし」

「あー……」

補足する形でつぶやいた僕の言葉に、佐伯さんと話していた女子が苦笑しながら声を上げた。

「分かったよ。その代わり……」

「……なにこれ？」

佐伯さんの手から僕に手渡されたのは、一枚のチラシだった。

「このケーキを私たちに奢ってね♪」

「チヨイ待て、なんで佐伯さん以外にも」

それは有名なケーキ屋さんのチラシだった。

「ケーキの味はお墨付き。」

フランスなどでの賞をいくつもとっているパティシエールが作っているらしい。

そのため一個一個のケーキの値段が、べらぼうに高いのだ。

コンビニにあるショートケーキの2〜4倍と言ったところだろうか。

「だって、私たちも行くし☆」

「それぼったくり!？」

「じゃ、よろしくね〜」

僕のツツコミをスルーして佐伯さんたちは教室を去っていった。

僕の手紙をジョンに届けるために。

「浩介」

「何？ 慶介」

そんな彼女たちの背中を見送っていると、肩に手を乗せながら慶介が話しかけてきた。

「大丈夫。いいことと悪いことはセットで来るものさ」

「何でだろう、お前に同情されると無性に腹が立つのは」

うんうんと頷きながら励ましの言葉に、僕はなぜか怒りが込み上げてきた。

「平沢さんと付き合ったことで、男子から呪いを与えられたのだっ！

俺という名のっ！」

「いや、意味わからないし」

いきなり呪いと言われても、話の筋が全く理解できなかった。

「だから、身から出たさびびというか、自業自得ということだぜえい！」
「……………呪いならば、払って見せよう、力づくで」

僕はサムズアップしながら耳元で大声を上げる慶介の手を振り払って、慶介と対峙する。

「あ、あの。顔が怖いですよ。浩介さん」

「ふふ、ふふふふふふ」

僕は元凶と距離を詰めていく。

そして僕は、

「ぎゃああああああ!!!」

呪いを払いのけるのであった。

「準備はできた？」

「こつちは問題なし！」

「私もよ」

「私も」

「私もです」

「私もできています！」

放課後、軽音部の部室で演奏の準備をしていた僕たちは、お互いに確認を取り合って状況を確認した。

もうすでに演奏ができる状態になっていた。

「山中先生の方は？」

「さわちゃんはあそこでお茶を飲んでもらってれば問題はないと思う」

今回の一番のネックは山中先生だった。

ジョンは現在この学校の生徒ではないのだ。

放課後、HRを終えたのと同時にジョンは他校生となったのだ。

そんな彼が校内にいるのを教師に見つかるのは、避けなければいけないのだ。

ただ、山中先生はこの部活の顧問を担っている。

当然、部室に来ることになる。

来ない日もあるが今日は来ないということを保証できるわけではない。

山中先生にはお茶を飲んでもらっている間にベンチに腰掛けてもらうつもりだ。

そうすればばれにくくなると思ったからだ。

本当であれば、しかるべき場所に申請をすればいいのだが、完全に私用のために、生徒会や風紀委員に協力を求めることもできない（というより、そもそも承認されるわけがない）ため、現在危ない橋を渡っている状態なのだ。

「よし、頑張つて演奏しよう！」

『おー！』

皆で気合を入れたところで、部室のドアが静かに開いた。

「浩介、言われた通りに来たけど……」

「オルコットさん、そこに座ってください」

困惑した様子で訪ねてきたジョンに、ムギは人当たりのいい笑みを浮かべながらジョンに英語で告げた。

「さあさあ」

「そ、それじゃ」

促されたジョンはベンチに腰掛ける。

「これから演奏するのは浩君が友人に感謝の気持ちを込めたカバー曲です。聞いてください『翼をください』」

「1, 2, 1, 2, 3, 4！」

唯のMCと同時に律が早いテンポでリズムコールをする。

そして曲が始まった。

アップテンポでメリハリの効いた曲が、部室を包み込む。

その曲に唯の柔らかな歌声でさらに場を和ませ、ムギと律に僕がそれを支えていく。

そして滯の歌声で広がりすぎた曲調を引き締める。

この曲は軽音部が始まるきっかけとなった曲。

そして、それは今日の前にいる友人に感謝を告げる曲へと変貌していた。

まるでみんなが一つになったような錯覚を感じるほどにまで、曲の完成度は高かった。

(あれ?)

そんな時、僕は何かを感じた。

ただそれは、違和感などのようなものではない。

ただ、なんとなく頭に引っかかっただけだ。

(今は曲に集中しよう)

僕は自分にそう言い聞かせることで、演奏の方に再度集中する。

唯のギターパートで曲は終わった。

それはまさしく駆け抜けるような速さだった。

そして、僕たちに贈られる観客からの拍手は、それが成功したものだということを現していた。

「はあ。うまくいってよかった」

夜、自室のベッドで横になった僕は、息を吐き出しながらつぶやいた。

ジョンへの感謝の気持ちを曲に乗せて送るといふ僕の提案は、見事成功の結果を収めることができた。

(今頃ジョンはどのあたりにいるんだろう?)

時間的にはまだイギリスにはついていないはずだ。

『ありがとう』

別れ際に言われた嬉しそうな表情を浮かべたジョンのお礼の言葉は、今でも僕の心の中に残っている。

(一体なんだったんだろう?)

そんな中、ふと思いつかぶのは、演奏中に感じた違和感。

どうしてなのかは分からないが、考えられるものとしては

(もしかして、いい演奏をしていたから?)

というものであった。

別に自惚れているわけではない。

これほどまでに、時間の流れを忘れるほどいい演奏をしたのはあっただろうか？

答えは否だ。

おそらくは、今までで一番いい感じの演奏をしたと思う。

(やっぱり、進化している)

そう、その一言に尽きるのだ。

唯たちは凄まじい速度で進化して、次のステップに踏み込もうとしている。

(これならば、もしかしたら)

第二のH&Pになるのも時間の問題なのかもしれない。

「だとすれば、彼女たちは僕の……ライバルになる」

これまでではなくても土俵下でのやり取りだった。

でももし、同じ土俵に立つというのであるならば、僕は彼女たちと争うことになるだろう。

そして、僕は負けるつもりは一切ない。

(いつの日か、対決できる日を楽しみに待つことにしよう)

僕はいつか来るかもしれない対決の日を夢見て微笑むのであった。

「それで、今度は何の用？」

またある日の休日、僕はいつぞやのように慶介に家に来るように言われ、ギターの練習を切り上げて慶介の家に来ていた。

「まあまあ、入ってくれよ」

今度案内されたのは、リビングだった。

テーブルには見たことのない花が置かれていた。

「また惚れ薬とかを混ぜてるんじゃないだろうな？」

「そんなことはもうしないって」

何気にもこの間の惚れ薬混入のことを根に持っている僕は、目を細め

て慶介に確認して、大丈夫だと判断した。

「実はこの間の惚れ薬は、ある植物からできているらしいんだ」
「植物？」

なんとなく嫌な予感がした。

例えば、目の前に置かれた強烈なおいを発している謎の植物とか

が。
「これがその花らしいんだ。おっと、匂いを嗅がない方がいいぜ。常人だと嗅いだけでコロツと行く場合があるから」

（ずっと匂いを嗅いでも何も変化がない僕は、いったい何なんだろう？）

効かないのかもしれないが、僕は植物から距離を取った。

「ふははははは」

「……………」

その植物を慶介はあろうことか花に近づけると思いつきり匂いを嗅いだ。

そして、ゆつくりと鼻を元の場所に戻した。

「よくよく見ると、あの人結構美人だよな」

「……………」

慶介が指し示す先に視線を向けるとカレンダーが壁に掛けられていた。

そこには盆踊りで踊っているおばあさんの姿があった。

「慶介、またバカ効きだぞ」

「え？ 俺ってウザイ？」

返ってきたのは、全くもって的外れな内容だった。

（会話が成立していない!?!）

どう考えてもそれしか思い当らなかった。

「浩介、今日は何か違うくない？」

「……………はあ!?!」

唐突におかしな事を猫なで声で言い出す慶介に、僕は素っ頓狂な声で叫んだ。

というよりこの光景は何だかひどく既視感を覚えるのだが。

「ああ、髪を切ったのか」

「け、慶介？」

この間よりも何だか目が血走っていて怖い。

しかも今度は鼻息も荒いし。

「口づけというのは生物に共通するコミュニケーションさ。さあ、目を閉じて」

「……………ひ!？」

いきなり肩を力いっばいつかんできた慶介は、再びわけのわからぬ言葉を口にした。

「しねええええええええ!!」

「ぎやーーーーーーー!!？」

背筋が凍りついた僕は、条件反射で慶介の顔面を無我夢中で殴り続けた。

「……………は、はは。男、佐久間慶介。愛に生き、愛に死ぬ……………ガク」

「何が愛だ。バカたれが」

とりあえず惚れ薬の大元となった植物は燃やしておき、僕はそこから逃げるように立ち去るのであった。

(あいつ、いつかホモ疑惑が流されるぞ)

そんな友のことを心配しながら。

ちなみに、液体の方は適切な手段で処分をしているため、探しても見つかることはないだろう。

(あいつはそうまでして、女子にモテたいものかね)

思わずため息が出てきそうになるが、完全に持っているものの余裕のような気がするので、心の中に留めた。

そんなこんなで、僕は自宅の方へと戻っていくのであった。

『DK、ライブの件正式に決まったぞ』

「そうですね。どうぞ」

夜、自室で予習復習をしているさなかにYJからかかってきた電話の内容は、今年最後となるライブについてのことだった。

僕は、次のライブの詳細を話すよう、YJを促した。

『時間は30分、使用する楽曲は3曲ほどが限界だろう』

「そうですね。楽曲名の方は決まりましたか？」

本当に小規模のため、こちらに割り振られる時間の方もかなり短くなっていた。

だが、僕たちには不満等はない。

演奏する場所（ステージ）があるだけでも、十分にありがたいのだから。

昔は場所探しから奔走していたのだから、今考えれば非常に恵まれていると言っても過言はなかった。

『いや、それはまだだ。それで、楽曲を決めるために、明日そっちに行くから、準備をしておけ』

「分かりました」

YJの指示に応じた僕は“失礼します”と、告げてから電話を切った。

そして先ほどまで腰かけていたベッドから立ち上がると、僕は窓際の方へと歩み寄った。

「いよいよか」

そしてぼつりと僕はつぶやいた。

これまで9月のライブを最後に小休止を取っていたH&Pだったが、再びライブ活動を再開させる時期に突入していたのだ。

ここから先は年末年始を通して忙しくなることが予想されている。なにせ、

「2月には大規模なライブがあるんだから」

2月のライブが年度末最後の大規模なライブとなるのだから。

このライブでの一番の目玉はやはり、“NEW STARS PR
OJECT”だろう。

今回から1時間に拡張された事と、これまでこのプロジェクトに応

募・当選したのものにも参加権を与えていることから、かなりの選考難易度が考えられる。

拡張できたのは、ひとえに社長の努力のおかげだ。

本当に社長様様である。

「これから忙しくなるな」

言葉とは裏腹に、僕の心の中はわくわくしていた。

やはり、演奏をしているときが一番僕にはスツキリできる時間だからなのかもしれない。

放課後ティータイムの方も、特に用事がなければライブはないはずなので、十分両立はできるだろう。

ただ、ライブの日などはどうしても部活に参加できなくなるので、こればかりは仕方のないことだ。

「さあて、これからも色々がんばりますか!」

こうして僕は、年末年始に向けて気合を入れるのであった。

2年生編 『ファーストステップ』 第93話 移ろいゆくもの

11月下旬。

季節はすっかり冬へと移り、ひと肌恋しい季節が訪れようとしていた。

周りを歩く女子生徒は、みなマフラーやらカイロやらで寒さを紛らわしている。

「はあ……」

試しに息を吐いてみると白い靄のようなものが出てきた。

季節はもう冬だ。

僕はこここのところ毎日ある場所に立ち寄っている。

それはとある橋だ。

そこに差し掛かった時、ツインテールの髪形の女子生徒の姿があった。

「何をやってるんだ？」

しゃがみこんで何かに手を伸ばそうとして、逃げるように走り去っていった。

「……………ああ、なるほど」

少し近寄ってみると、そこには虎次郎の姿があった。

「おはよう、虎次郎。はい、いつもの御飯だよ」

「にゃ〜」

下から差し込むように魚の切り身の入ったアルミパックを差し出すと、口元に黒い模様の入った猫はそれを食べていく。

この猫は、この間偶々見つけた野良猫だ。

本来であればこのようなことはしないが、魔が差したのか僕は今でも餌やりを続けている。

可愛げは全くない。

というより最初は威嚇されたりもしたが、最近はそんなこともなく頭を撫でて威嚇することもなかった。

そのうち飼い主と誤解してついてくるのではないかとも思ってしまったりするのだが、さすがに考えすぎだろう。

「それじゃあね、虎次郎」

食事を終えた虎次郎の頭を軽くなでると、アルミパックを回収して僕はその場を立ち去った。

ひと肌恋しいお寒いこの季節。

僕の心はどこかホツカホカだった。

「寒いな、浩介」

「なにだらしないことを言ってるんだ……」男たるもの寒さには強くあれ」だぞ。まあ、確かに寒いけど」

教室で寒さに体を震わせている慶介に、僕はため息交じりに言った。

そんな時、僕の席に近寄る数人の女子生徒の姿が目に残った。

「高月君でも寒いって感じるんだね」

「超人だから寒さも厚さも感じないって思ってたんだけど。やっぱり高月君も普通の人だったんだね」

「お前らは僕をなんだと思ってるんだ？」

女子生徒たちのあまりな言葉に、僕はジト目で追及する。

まあ、言いたいことは分かるけど。

「だって、夏なんて暑いのに平然と汗もかかずにいたじゃない」

「慣れの問題だ。もっと熱いところにも行ったことがあるんだから、ここの夏の暑さなんてまだまだ可愛い物だ」

任務で様々な世界に行くことがある僕の工作上、仕方がないのかもしれないが中には劣悪な環境の世界もある。

気温数百度の灼熱地獄もあれば、氷点下90度越えの所だってある。

そう言った場所に対応できるように訓練を積んでおり、ある程度であれば耐性が出るようになっていた。

とはいえ、暑いものは暑く、寒いものは寒いわけだが。

「はあ。寒くても、暑くても浩介はモテるんだよな。不公平だよな」
「不公平って……」

慶介の嘆きに、僕は言葉を失った。

「ちくしょー。なぜだー、なぜ俺だけモテないんだー!」

「それは……」

「やっぱり……」

「性格じゃない?」

慶介の言葉に、女子生徒から周りに回って僕の方に来たため、思いついた理由をそのまま口にした。

「あの、それは逆にダメージがかいんですが」

「知るかつ!!」

季節がどうなろうと、僕たちはある意味いつも通りだった。

放課後、いつものように部室に集まった僕たちは唯が来るのを待つことにしたのだが……

「暗くないか」

「明かりでもつけるか?」

僕の言葉に反応した律がこっちを見ながら聞いてきた。

「いや、照明じゃなくて雰囲気か」

「冬だからこんなものだろ」

(冬と雰囲気暗いのとどういう関係があるんだ?)

律の言葉の意味が、僕にはまったく理解できなかった。

もしかしたら冬の空気というのは人の雰囲気を暗くする何かがあるのかもしれない。

そんなこんなで、再び部室内が沈黙に包まれた。
先ほどからずつとこのような感じなのだ。

さすがに冬だからと言って雰囲気まで暗くされるのはたまったものではない。

(抗議してでも元に戻してもらおうか)

そんなことを考えた時だった。

「ううう、寒いいいい」

体を震わせながら唯が姿を現した。

そしてそのまま流れるように僕の横に腰掛けた。

「律ちゃん、お寒いですな」

「お寒うございますね」

(それはどこのおばあさんだ?)

口にするとは何か面倒くさいことになるような気がしたので、あえて何も言わないことにした。

「あ、律ちゃん」

「何だ唯——ひゃあああ!!?」

「おお、あつたかい——」

ふと何かを思い出したような表情をした唯は律の頬に両手を触れさせた。

「何を、するんだっ」

「ひゃあああ!!?」

律もやり返す形で、一気に部室が賑わしくなる。

(さすが唯。雰囲気を変えるのが上手だ)

もはやそれは素質なのかもしれない。

「こうなったら、ぴと」

「ッ!」

いきなり腕に抱きつく唯。

「うん、やっぱり浩君はあつたかあつたか、だよ」

「あはは、僕もだよ」

寒さなど感じていかなかったが、体の内側から暖かくなるような感じがする。

きっとそれがひと肌なのかもしれない。

どんだん僕は元気になっていくような気がした。

きつと唯の力なのかもしれない。

「……………なんだろう、寒いはずなのにそれが気にならなくなるこの感じは？」

「私も、なんだか寒さが吹っ飛んだよ」

「私はもう慣れました。でも、暑いです」

それを見ていた周りが別の意味でぐったりとしてしまったが。

そんなやり取りもひと段落したところで、練習を行うことにした。

「うーん、寒くてギター太が弾けないよ」

「何、洒落ごとを」

唯の漏らした言葉に、僕は冷たく返した。

それほどくだらない理由だったのだ。

(まあ、気持ちには分からなくもないけど)

「そうだ！ 手袋をすればいいんだっ！」

「やってみろよ」

唯が名案だとばかりに口にした案が、どのような結果をもたらすのかがわかったのか苦笑しながら律が促した。

それを受けた唯は手袋をはめるとピックを持つとうとするが

「ピックが持てないよ〜」

「そこからかいっ！」

ピックをお手玉のように弾く唯に、思わずツツコみを入れてしまった。

そんなこんなで、ようやくピックを持つことができた唯は、弦を押えてピックを持った左手をストロークさせる。

聞こえた音色は、伸びが悪くミュートしているようなものだった。

つまり、簡単に言うとう

「あうう、弾けない！」

ということだった。

すると、何を考えたのかギターを横に置いて手袋を外すとそれを先ほど自分が座っていたベンチに置き、それを指差して

「失望したっ！」

などと叫んだ。

(まあ、ある意味予想通りの結果だけど)

弾けた方が僕にとっては驚きだ。

「当たり前だ。なあ、律？」

そんな唯に言った滯は、律にも同意を求めようと声を掛けるが、返事が返ってこない。

(ん?)

「律？」

滯が再度声を掛けるが、やはり反応がない。

ぼーっとどこかを見ているだけだった。

「律、どうしたんだ？」

僕はドラムの椅子に腰かけている律の顔の高さに合わせてかがむと手を振りながら声を掛けた。

「ッ!? きゃ!!」

「たんぺ?!」

一瞬何が起こったのか理解できなかった。

だが、左頬からじんわりと伝わる痛みが何が起こったのかを物語っていた。

叩かれたのだという事実を。

「……………なぜ？」

「あ、わ、悪い。浩介の顔が目の前にあったから、びっくりして」

慌てて謝ってくる律だが、僕は怒りよりも疑問の方が強かった。

窓側に移動して首を傾げ続ける。

窓から伝わる冷気がなぜか一番冷たく感じた。

「浩介先輩大丈夫ですか？」

「僕の顔って、ビンタされるほど変なのか？」

心配そうに声を掛けてくる梓に、僕はそう尋ねた。

「い、いえ！ 浩介先輩は何も悪くないですよ！」

「そうだよ！ みんな冬が悪いんだよ」

梓に続いて唯が返事を返した。

「冬のせいにしてないでください」

「あ、そうだよね。冬でもいいことはあるもんね」

何とか立ち直れた（というより、深く考えるのが馬鹿馬鹿しく思えてきた）僕は窓から視線を外した。

「あ、そうだ！ 今度の日曜日皆で鍋をしようよ！」

『……………』

唯の唐突な提案に対して、みんなの反応は冷ややかなものだった。

「あれ？」

「ごめんなさい。その日は私、用事があって行けないの」

「私も。弟を映画に連れてく約束をしているから」

「私も、その日は家から出られそうになくて」

ものの見事に用事が重なっていた。

「ここまで来ると作詞的なものを感じる。」

「ええ〜…………… 滯ちやんと浩君は？」

「私も、歌詞の方を考えたいから」

「そんなあ〜」

滯の返事に、悲しげな表情を浮かべる唯に、圧された滯は視線を逸らした。

「いつも唯や律が邪魔をして作詞に集中できないんだよ」

そう言って床に置いたのは一冊のノート。

それは滯が作詞をするときに詩を綴る物だった。

「ほら」

それを開いた滯は見るように促したので、それを覗き込んだ。

「なんだ、これ？」

そこにはページ一杯に色々な絵が描かれていた。

（これはいつから作詞ノートからお絵かき帳になったんだ？）

そんな変な沈黙が走る中、これを書いた主犯の二人はというと

「申し訳ありませんでしたあつ！」

土下座をして息を合わせて滯に謝っていた。

「あ、それじゃ、浩君は？」

「僕も無理だ」

ここちらの方にも及んだ問いかけに、僕はきつぱりと告げた。

「そ、そんな……」

「おやおや、もしや不倫ですか？」

「はあ!？」

にやりとほくそ笑んだ律の一言に、僕は首をかしげる。

「そうなんですか!？」

何故だか僕に不倫疑惑がかけられてしまってる!？」

「信じてたのに……」

「浩介君、それは人として最低よ」

そして非難の目が向けられる。

「だあああ!! 不倫なんかするわけないだろうが! 僕が愛してるの

は唯だけだっ!!」

「ッ!？」

「おやおやく、お熱いどすなあ」

僕の大声の告白に、唯の顔が真っ赤になる。

そんな中、律のいたずらっ子のような表情が全てを物語っていた。

(嵌められたっ!)

「浩介先輩、恥ずかしいことを大きな声で言わないでくださいっ」

「……………」

もう、何も言うまい。

「そ、そそそそれで、どうしていけないんだ?」

そんな中、滯りよって話題が変えられた。

まあ、ドモラなければもつとよかったんだけど。

「一回故郷の方に戻るから」

答えも非常に簡潔だった。

「故郷って、魔界ですよね? どうして戻るんですか?」

「新人のバカがどうも気が弛んでいるようだから、一回徹底的にしごいてやるんだよ」

それはこの間父さんから言われたことだった。

『管理センターの新人がどうも気が弛んでいるらしくてな、遅刻をしたり転送ゲートの座標を間違えたりしている。このままでは任務に支障が出る故、お前の方で性根を叩き直してもらいたい』

それが、父さんの指令だった。

「ついでに、年始に行く仕事も一緒に片づけてくるから帰るのはかなり遅くなると思う。まあ、年末年始はゆっくりしたいからね」

「むう……それじゃ、ギターと憂の三人で鍋にしよう」

（三人……なのか？）

何だかツツコんではいけないような気がするんだが、すごく気になった。

「ギター汚さないでくださいよ。この間メンテナンスしてもらったばかりなんですから」

ティーカップを手にながら注意をする梓に、唯はピースサインをしながら口を開いた。

「大丈夫だよあずにゃん。ちゃんと前掛けをするからー」

「……ならいいですけど」

「いいのかよ!？」

梓の反応に思わずツツコみを入れてしまった僕だが、みんなもそれは同じだったようで、梓の方に視線を送っていた。

そんな冬の部活風景だった。

「あ、浩君。寄り道していい?」

「別にかまわないけど、どこに行く気だ?」

帰り道、全員と別れふたりきりになって少ししてから聞いてきた唯に、僕は疑問を投げかける。

「コンビニ♪」

何のためらいもなく、笑みを浮かべて告げたのはそれだった。

「なぜにコンビニ?」

（今日はみんなおかしいな）

律はいきなり顔を叩くし、ムギは突然どこかに行くし、梓は“おも

ちや〴〵を買いにどこかに行くし、唯はなぜかコンビニに行こうとするし。

「何の食べ物を買うんだ？」

「ああ!? 浩君、私の心の声を読んだんだね」

当たり前だったのか頬を膨らませて抗議の声を送る唯に、僕はため息をついた。

「心を読むまでもない。さっき唯のお腹がかわいらしくなってたし」

「あううう、浩君のイジワル」

「はいはい、むくれないむくれない」

気づかれていないとでも思ったのか、頬を膨らませる唯に、僕はなだめながらコンビニへと向かうのであった。

「につくまーん、ホツカホカ〜♪」

「良いよな、お前は何事にも幸せそうで」

当たり前のことなのに、それを嬉しそうに喜んでいるのはある意味才能なのかもしれない。

「浩君は私といて楽しくない？」

「そんなことはない。ただ、唯のように何事にも楽しむという感覚がわからないだけ」

悲しげな表情を浮かべる唯から視線をそらして、僕はそう返した。

「それじゃ、浩君はこれからそれがわかっていくんだね」

「……………そうだな」

そのような日が来るかはわからないが、僕はそう返しておくことにした。

その日が来るときこそ、僕は本当の意味で変われるかもしれないから。

「ということ、浩君には肉まんを半分進呈しよう！」

「どうも」

唯から肉まんを分けてもらった僕は、それを口にする。

肉まんの生地に入った肉が、実に絶妙な味を出していた。

「どう？」

「最近のコンビニはレベルが高いんだね」

唯に促されて出てきたのは、そんな言葉だった。

第94話 とある冬の日

土曜日の放課後。

「浩介は、これから部活か？」

「いや、今日は用があるからこのまま帰る」

いつものように声を掛けてきた慶介に、俺は相槌を打った。

用というのは他でもなく魔界に帰ることだ。

夏休みのあれで懲りた僕は会社にあるゲートを使っていくことにしたのだ。

少しだけ面倒くさいが、背に腹は代えられない。

そう言うことで、今日から魔界に帰還するのだ。

(これで鍋パーティーに間に合えばいいんだけど)

さすがに姉妹だけで鍋をするというのは悲しすぎるような気がした僕は、無理をしても参加することにしたのだ。

とはいえ、用事をおろそかにはできない。

そこで、早めに戻って仕事を素早く片づけることにしたのだ。

「珍しいな。最近は愛しの平沢さんに会うために、毎日部活に参加をしているのに」

「ちよつと待て。それではまるで、僕は唯に会うために部活をしているみたいではないか」

少しばかり聞き捨てならないことを言われたような気がした僕は、素早く反論した。

「でも間違つてないだろ？ それなのに部室に行かないということは一――」

「……………慶介、『他の女ができたのか』とか言ったら潰すぞ」
慶介の言葉を遮って、僕は彼が言いそうな言葉を封じることにした。

「そ、そんなことがあるわけないじゃないデスカ」

「カタコトになつてるぞ」

見るからに怪しさ満点だった。

「こ、これは宇宙からの電波を受信してたのさっ」

「もういいよ。それ以上続けられると惨めになるから」
慶介の肩に手を置いて、僕は深く頷くと鞆を手にして教室を後にした。

「ぢぐじょう!!! 下剋上だ！ 下剋上してやるうっ!!」
後ろの方からそんな喚き声が聞こえてきた。
今日もなんだかんだ言っただけで平和だった。

「おかえりなさいませ。高月大臣」

「どうでもいいけど、そんな堅苦しい出迎えはいいから」

魔界に到着した僕に非常に堅苦しい出迎えをする職員に、僕は何度目かわからない頼みごとをした。

「そんな恐れ多いことできません！ 高月大臣は我々の象徴なのですからー！」

「はあ……………」

もはや諦めかけていた。

僕はこのままずっと同じような出迎えをされるのだと。

「ちーす、大臣。元気つすか？」

「……………はい？」

入出国管理センターのロビーに出た僕に掛けられた言葉に、思わず言葉を失ってしまった。

「大臣、堅苦しいのが嫌って言ってたつすから。こんな感じでどうつすか？ それとも浩介と言ったほうがいいか？」

「……………」

確かに、堅苦しいのは嫌だとは言った。

だが、物には限度と言うものがある。

僕が言っていたのは“大臣”の部分だけを抜けという意味だ。

間違っても、ため口でしかも呼び捨てにしろという意味ではない。

「貴様、名前は？」

「俺っすか？ 俺は根室 忠（ねむろただし）っす」

僕の雰囲気が変わったことにも気づかず、根室は口調を変えない。
い。

それどころか肩を叩いたりしてくる。

（落ち着け。相手は新人だ。ちゃんと言葉で説明をしよう）

見たことがない顔なので、新人職員であることは間違いがない。

新人であれば言葉遣いが少しおかしくて当然だ。

そう自分に思い込ませることで、怒りをこらえる。

「あ、たかっち。これから飯食いませんか？」

「……………」

その言葉で押さえていたものが一気に決壊した。

「咎人に罰を!! ナイトメア!!」

「ぎゃあああああ!!」

僕は根室に魔法という名の鉄槌を下すのであった。

「……………」

「ええ。そうなります」

連盟長室に移動した僕は、連盟長から先ほどの騒動の経緯を聞かれていた。

「相手は幸い命には別条はないみたいだが、まさか本当に武力行使するとはな」

「本当に面目ないです。堪えようとはしていたのですが、我慢ができませんでした」

根室は病院の方に搬送されたが、幸い命に別状はなかったみたいで、ほっと胸をなでおろした。

「まあ、心の方には傷を負わせたがな」

とはいえ、彼の心の中には決して拭えない恐怖が植えつけられたことだろう。

それが“ナイトメア”の恐怖なのだから。

(全く、どうしてああも極端何だろう)

僕は心の中でため息をついた。

「しかし、あの浩介がよく変わったものだ」

「はい？ どういう意味ですか？ それは」

連盟長から言われた言葉の真意がわからなかった僕は、連盟長に尋ねた。

「昔のお前ならば、我慢することなく即座に抹殺していたはずだ。それを我慢しようとしたばかりか、少ないダメージに留めようとするなどといった配慮をするようになるとはな。驚きだ」

「私だって、変わりますよ。連盟長」

「ほう？」

僕の言葉に、連盟長は興味深げに眼を細めて僕を見てくる。

それはまるで値踏みのような気がした。

ならば僕も負けていられない。

僕も負けじとばかりに視線を逸らさない。

「……………そっちの方に言われていた書類がある。本当にする気か？」

「どうやら僕の方が勝ったようで、連盟長は手にあった服を見て呟いた。

「ええ。このくらいの量、僕には造作ありませんし」

「そうか」

僕の言葉に、連盟長は何も言わなかった。

「がんばれよ」

ただ、そう静かにエールの言葉を掛けられた僕は、連盟長に一礼するとその場を後にした。



「変わる……か」

浩介が立ち去った連盟長室で、宗次朗は静かにつぶやいた。

その声色は息子の成長を喜ぶ父親のようなものであった。

「久美子の情報では、浩介には婚約者ができたようだな」

そうつぶやきながら、宗次朗は引き出しから一通の書類を取り出す。

その書類には『平沢唯について』という表題の資料だった。

それを一枚一枚目を通していく。

そこに記されているのは唯の素行や人間関係などの個人情報だった。

「別に問題もなさそうだな」

資料に目を通し終えた宗次朗は、静かにそうつぶやいた。

「とりあえず、私はしばらく静観することにしようか」

いずれは自分の手助けが必要になる時が来るかもしれない。

宗次朗はそれまで何も言わずに待つことにしたのだ。

「にしても、あいつに恋人か……やはり、私は間違っていないかったか」

その時の宗次朗の表情は、部下を思う連盟長ではなく息子のことを思う父親のもとなっていた。

★★★★

「よし、こんなものだろう」

法務大臣室に移動した僕は、一気に年末年始の仕事のノルマをこなしていた。

腕を伸ばして、固まった筋肉をほぐしていく。

「今何時だろう？」

ふと時間が気になった僕は、その時刻に、驚きを隠せなかった。

「夕方!？」

しかも日数的に一日経っているし。

(そう言えば、意識がなくなっていた時があったな……あれが原因か)

時間が予想よりも掛った原因を突き止めた僕は、思わずため息を漏らしながら頭を抱えた。

時間的にも夕食時だろう。

(間に合わなかったか)

自分の不甲斐なさに、怒りが込み上げてきた。

「しようがない。遅れてでも参加するか」

僕は遅れて参加をするという方向で、修正することにした。

それからは本当に素早かった。

処理していた仕事用の書類をまとめて、提出用のスペースに置いておき、半ば走るような勢いで大臣室を美出した。

そして入出国管理センターで“特務再開”という名目の元、僕は元の世界に向かうことにしたので。

「それでは最終確認をいたします」

唯たちのいる世界とつながるゲートを前に、新人の職員(根室ではない)によつて、最終確認を行っていた。

これは、転送先に間違いがないかを確かめるための物だ。

「世界コードは“F-0001A”、転送場所は日本の拠点地。以上で間違いは？」

「ない」

職員から告げられた転送先の情報に、僕は間違いがないことを確認して、薄暗い部屋の中でうつつすらと光を発して存在をアピールする魔法陣(ゲート)の上に立った。

「それでは、転送を開始します。護武運を」

新人職員の言葉とともに、僕は浮遊感に襲われる。

(帰ったら急いで唯の家に行こう)

そんなことを考えながら、僕は唯たちのいる世界へと転送されるのであった。

「よし、到着……………」

目的地に到着した僕は、思わず言葉を失った。

そこは全く見知らぬ場所だった。

目の前には壁に掛けられた大きな額縁などがあった。

(……………完全に他所の家じゃないか!?)

何が起こったのかを理解するのに時間はかからなかった。

(あの野郎、座標を間違えやがったな)

それしか考えられなかった。

「はっ!？」

そして思い出した。

ここは人の家だ。

つまり、この家の人がここにいることになる。

(騒動に発展する前に、ここを出ないと)

僕はこの場を脱出するべく行動を開始した。

「あの……………」

「ッ!？」

その矢先に背中に掛けられた女性の物と思われる声に、僕は身を固くする。

だがそれも一瞬のことで、素早く声の方に振り向くとクリエイトを突きつけて魔法を使える状態にした。

魔法を使って記憶を消去しようと考えたのだ。

しかし、どうやらその必要はなかったようだ。

「つて、梓!？」

そこにいたのは携帯電話手にソファ―に腰掛けて、目を驚きに見開かせている梓の姿があった。

「こ、浩介先輩? どうして私の家に」

「向こうで僕を送るやつが場所を間違えたみたいで」

驚きながら聞いてくる梓に、僕は恥ずかしさのあまり苦笑しながら答えた。

「そ、そうなんですか」

「お騒がせして申し訳ない。僕はこれで——」待ってください!——

「素早くその場を後にしようとする僕を呼び止めたのは、梓のその一言だった。」

「な、なに?」

「あの、この子を助けてください!」

「助けてって……梓、猫でも飼ったのか?」

梓の視線の先にはソファアーの上で立っている子猫の姿があった。

「違いますっ。友達から預かってたんですけどいきなり具合が悪そうになって……家には誰もいなくて、私どうしたらいいか」

「なるほど、状況は把握した」

何が起こっているのだけは把握することができた。

それじゃ、ちよつと見てみるけど、報酬はチーズケーキ3つだからね。

「は、はい! ありがとうございます」

「その前に、靴脱いでくる」

今気づいたが、僕は靴を履いたままりビングに立っていた。

ものすごくマナー違反だが、当初は靴を履いていてもおかしくない場所に行く予定なのだから、かんべんしてもらいたい。

「つて、土足で上がらないでください!!」

とはいえ、起こられるのはある意味仕方のないことだったが。

靴を玄関に置いてきた僕は、気を取り直して子猫の容態を調べるところから始めた。

右手を開くようなしぐさで目の前にホロウインドウを展開させる。

「子猫のバイタルを確認……正常」

ウィンドウに子猫のシルエットが現れさまざまな値が表示されるが、倍たるには異常が見られなかった。

「この猫具合なんて悪くないけど?」

「え!?! で、でもさつき吐いたんですよ!」

僕の下した結論に、梓がすごい剣幕で抗議してきた。

「だったら、もう少し調べてみるか」

さらにホロウインドウを展開し、コンソールで猫に関する情報を入力して検索を掛けた。

「ん？」

すると、検索によって出てきた情報に気になる記述を見つけた

「えっと……『猫は時々毛玉を吐くことがある』……梓、この猫が吐いたのって毛玉じゃないよね？」

「……………」

その沈黙がすべてを物語っていた。

「すみませんでした」

その梓の謝罪を打ち消すように、呼び鈴の音が響き渡った。

しかも間髪入れずに何度も何度も

「ちよつと出てきます。何かあったら呼んで。すぐに対応するから」

僕は玄関へと向かう梓に声を掛けながらクリエイトを構え臨戦態勢を整える。

やがて数人分の足音と共に梓が戻ってきた。

「あれ、浩君？」

「浩介さん？」

「へ？」

姿を現したのは平沢姉妹だった。

「あの、浩介先輩が来るまで唯先輩に電話をしていたので」

「な、なるほど」

梓のその説明が、全てを物語っていた。

「もしかして浮気ですか!？」

「違うー!」

「ち、違います。これはただ……」

憂の言葉に、僕は素早く反論した。

そしてすべての事情を二人に説明する。

「そ、そうだったんですか。びっくりしちゃいました」

「わ、私は浩君を信じてたよ」

ほっと胸をなでおろす憂とは対照的に胸を張る唯だが、憂の“浮気”の単語に反応していたのを僕は見逃していなかった。

「それで、あずにゃん二号は？」

「それが、毛玉を吐いただけだったみたいで」

唯の問いかけに、頬を赤く染め、申し訳なさそうに答える梓。

(勝手になづけるなよ)

その勝手に名づけられてしまった子猫は、ソファアーの上で眠っていた。

「良かったね、何もなくて」

ある意味取り越し苦労だったわけだが、唯は嫌そうな顔を一つもせずに喜んでいた。

「あ、ねえねえ浩君」

「何？」

ふと何かを思い出したのか僕の方に視線を向けて声を掛ける唯に、僕は用件を尋ねた。

「マシユマロ豆乳鍋とチョコカレー鍋、どっちが食べてみたい？」

「はあ!？」

唯に突き付けられた究極の二択に、僕は思わず大きな声で叫んでしまった。

(というより、何その変な鍋は!?)

「まさかとは思うけど、今日しようとした鍋ってそんな感じか？」

「うん♪」

満面の笑みを浮かべながら頷く唯に、僕は頭痛がした。

唯の味覚は僕とは一生合わないような気がした。

「ねえ、ねえ。どっちがいい？」

「急用を思い出したから帰る！」

「あ、待ってよ！ 浩君」

恋人の前から逃げるのは少しだけ気が引けるが、どっちも非常にとんでもない鍋になるに違いない。

そしてそれを僕がも食べる羽目になるだろう。

いくら何でも命が惜しいのだ。

(ごめん、唯！)

唯に心の中で謝罪の言葉を送りながら靴を履いて、すぐに僕は転移魔法でその場を離脱するのであった。

第95話 手の暖かさ、心の冷たさ

自宅に逃げ帰って数時間後、部長である律から集合命令がかかった。

場所は近くのファーストフード店『MAXバーガー』とのことなので、僕はそこに向かう。

「いらっしやいませ、浩介君♪」

「なるほど、そういうことか」

お店の制服を身に纏って、満面の笑みを浮かべながらカウンターに立っているムギの姿を見て、僕はすべてを察した。

そう言えば、ムギが僕たちと別れたのもこのお店の近くだったような気がした。

「ポテトを一つ」

「かしこまりました」

笑みを崩さずに対応するムギは、確かにこういった場には向いているのかもしれない。

「私、一度バイトでタイムカードをに記入するのが夢だったの」

「そ、そう。夢がかなってよかったな」

頬が引きつっているが、何とか僕はムギに相槌を打つことができた。

「この人も、まさか志望動機が『タイムカードに記入できるから』だとは夢にも思えない。」

「それじゃ、バイト頑張つて」

「ありがとうございます」

二つの意味を込めた言葉に送られながら、僕は唯が待つ席へと向かった。

ちなみに、逃げ出したことを唯はそれほど気にも留めていなかった。

「それどころか、

「やっぱりそのまんま食べたほうがおいしいよね」

等と言っていたぐらいだ。

まあ、聞く前に気付かないあたりが唯らしいのだが。

「あ、漣ちゃんおかえり」

そんな中、作詞をするべく一人で海に向かっていた漣が戻ってきたようだ。

「お、良い詩が……できなかつたんだな」

落ち込んだ表情を浮かべる漣の様子に、律は成果が予想できたようだった。

ある意味一番行動力があるのは漣のような気がする。

「でもすごいよね、一人で海に行くなんて。みんな私を置いて大人にならないでね」

「そ、そう言う唯は、先に大人の階段を上ってるだろ」

予想外にも漣の鋭い指摘に唯の顔が赤く染まった。

(まあ、確かに大人の階段は登ってるけど)

あながち間違いではないが、言い方を間違えれば一気に危ない単語だった。

「そ、そういう律ちゃんはまだだよ?!」

「そ、そんなことはないぞ! 私だって……」

なぜかツツコむべきところをツツコまない律に、唯が問いかけると律は大きな声を上げながら身を乗り出して唯に反論した。

だが、途中で口をつぐんでしまった。

「あ、そういえば律、浩介」

「な、何?」

そんな律に、漣は何かを思いだした様子で声を掛けた。

「この間の歌詞なんだけど、どうかな?」

「あー、あれか『どんなに寒くても』のやつか」

この間漣から歌詞と言われて渡された一枚の紙のことを思い出した。

タイトルは“冬の日”というもので、これまでの直筆ではなくワープロ文字だった。

もし何も言われずに受け取っていたら、ラブレターと勘違いする……

(待てよ)

そこで、僕はふと心の中に引つかかった。

「がんばってパソコンで作ってみたんだ」

「ということは、あれは滯が……」

照れ笑いを浮かべる滯に、律は顔を引きつらせる。

「この間言っただじやない。郵便受けに入れておくからって」

「……………」

滯の言葉に、律は何かを思い出しているのか顔をどんどん赤らめていき、やがて

「うがああああ!!!」

爆発した。

「あれをやったのは滯かあっ!!! いまどき古風なことをするんじゃない!!」

「こ、浩介先輩。律先輩は一体どうしたんですか?」

滯の肩をつかんで力任せに揺らしている律の様子に、不安げに訊いてくる梓。

「……………さあ?」

大体事情は把握できたが、律の名誉の為に僕は白を切ることにした。

(なるほど、ラブレターだと思ったのか)

ならば、いきなり僕の顔を叩いたのも、ちらちらと頬を赤くして僕の方を見ていたことにも納得がいく。

律の中では僕がラブレターを送ったことになっていたのだろう。

(あれ? ということは、僕が叩かれたのって、元をたどると滯のせい?)

そんな結論にたどり着いてしまった僕は、どうしたものかと心の中でつぶやく。

(滯にどのような折檻をするべきか……)

とはいえ、折檻の内容についてだが。

「まあまあ、落ち着いて。ハンバーガーでも食べようよ」
そんな混沌と化した中でも、唯は唯だった。

結局数分で律が落ち着きを取り戻したので、一件落着きということになりこの話は終わりとなった。

おそらく、この話題は口にしてはならぬ禁忌となるだろう。

(勧誘ビデオに続いてこれか。一体いくつ禁忌が増えるんだ?)

勧誘ビデオというのは、梓が入部する前に撮影したものののだが、結局日の目を見ることもなく禁忌とされてしまったものだ。

それについては、また別の機会に話すことにしよう。

その後、バイトを終えたムギが合流し、一日していたことについての話に花を咲かせることになった。

それは色々なすれ違いがもたらした、ある種の喜劇のような冬の日であった。

「へえ、そんな一日だったのか」

休日明けのある日。

僕は教室で慶介と休日の過ごし方について話していた。

「何、その意外そうな感じは?」

「てつきり俺は平沢さんとデートかと思っただけだ」

一体慶介の頭の中での僕たちは、どれほどのバカップル認定を受けているのだろうか?

……まあ、大よそ当たっているけど。

「仕方ないでしょ。いきなり打ち合わせが入っちゃったんだから」

「分かるけどさ、こういうのって熱が冷めるのが一番怖いんだぞ?」

何せ男子はほかにもいるんだから、言い寄られたりとかするかもしれないし」

慶介の言わんとすることは分かる。

「いわゆるあれだろう、”私と仕事とどっちが好きなのっ!”というやつ。」

まあ、僕ならば後者を取るけど。

仕事をして養えるだけの財を得なければ、何も始まらないのだから。

「それは大丈夫。そんなことをした瞬間に、僕が黙っていないから」「そ、そうか」

僕の笑顔に、慶介は怯えたような表情で相槌を打つ。

(失礼な奴だよな。かわいくはないが、それなりにフレンドリーな感じだと思っのに)

「というか、そう言う慶介はどうなんだよ?」「は?」

ふと僕はあることを思い出して慶介に反論した。

「この間言ってたじゃないか。俺、これをあの子に届けるんだ!」「って」

「あ、あれは……」

僕の言葉に言いよどむ慶介。

その様子で何があったのか、大体想像ができた。

「まあ、人生いろいろだよな。うんうん」

「くうっ! その何もかもわかってるといふ顔に腹が立つ!!」

あえて真相には触れずに頷いて見せると慶介は顔を赤くしながら声を上げた。

「何のことだ?」

「う………ちぐじょうっ。俺だって、俺だってえええ!!!」

首をかしげながら訪ねる僕に、慶介は血の涙を流して大声を上げながら教室を飛び出していった。

(あと少しで授業始まるのに)

しかも次の授業の先生はチャイムが鳴ってすぐに来るタイプだ。

さすがに早く戻ってこないとまずいような気がする。

そんなことを考えている間にもチャイムが鳴った。

「授業を始めるぞ。早く席に着け」

そしていつものようにチャイムの後すぐに教室に入ってきた担当の先生の言葉に、クラスの皆が次々に席について行く。

だが、慶介は戻ってきていない。

「お、なんだ。佐久間はサボリ——」
「います！　ここにいます!!」
「——」
担当の先生が言い切るよりも早く、ドアを開け放った慶介が抗議の声を上げた。

「佐久間は欠席つと」

「ちよ!？」

教室に來ている慶介は、担当の先生によって欠席扱いにされた。

「後で佐久間にはA4サイズのプリント、100枚分の課題を用意することしよう」

「ぢぐじょうくく!!」

その仕打ちに、慶介は再び血の涙を流しながら去っていった。

「ぎゃああああああ!!」

遠くの方で慶介の断末魔が聞こえた。

(よっぽど恨みを買ってるんだね、慶介)

始まりはこの担当の先生にした、慶介の何気ない質問が発端だった。

そう、それは今年の最初の授業でのこと。

「では、何か質問がある者はいるか？」

「はいはいはい!」

担当の先生の言葉に、素早く反応した慶介は大きな声を上げながら手を上げた。

「どうぞ、佐久間君」

「先生は彼氏とかいますか!？」

その質問に、教室の温度がかなり下がったような気がした。

「佐久間、お前には特別課題を出してやろう」

「あ、あの〜。これは？」

額に青筋を浮かべた担当の先生(女性)が慶介の机に置いたのはA4サイズのプリントだったが、かなり分厚い。

それこそ百科事典を数冊重ねたぐらいの厚さだ。

「特別課題のプリント100枚だ。これを明日までに説いて提出しろ。一日遅れるごとに倍に増やしていくからな」

「鬼！ 悪魔！」

「ほう？ ではもう200枚追加してやろう」

後から聞いた話だが、この先生には彼氏のことやお見合いのことなどの話題はタブーらしい。

うまいこと逆鱗に触れてしまった慶介は、その後担当の先生に目を点けられてしまったらしい。

ちなみに、特別課題の300枚のプリントは期限までに終わらず、最後は僕に泣きついてきたりしたので、一緒にやることとなった。

その時点で枚数は千を超えていたような気がするが。

結局、この日慶介は欠席だった罰として膨大な課題を出されることになるのであった。

(あ、あとでお詫びの品でも渡そう)

あまりにもかわいそうすぎる慶介の姿を見て、僕は心の中でそう決めるのであった。

放課後、夕陽が差し込む部室で僕たちはいつものように練習をしていた。

「ひゃう!？」

「な、何?!」

「どうしたの？」

いきなりすごい声を上げた藩に、唯が声を掛けた。

(び、びっくりした)

一瞬ドキッとしてしまった自分が恨めしかった。

「ベースが膝にあたって、それが冷たかったから」

「ひゃう!？」 だつて。 もう一回やって」

「い・や・だ」

もう一度やるようにせがむ唯は、ある意味すごかった。

「でも、大変だよな。女子はスカートだから」

僕は普通にズボンなので、ボディが足に触れたところで冷たいと感じたりすることはない。

「そう言えば、ムギはいつも普通にキーボードを弾いているけど、手がかじかんんだりしないのか?」

「うん。私手が暖かいから。ほら」

濡の疑問の声に、ムギは笑みを浮かべながら両手を差し出した。

すると、唯たちは次々にムギの手を握っていった。

「あ、本当だ」

「暖かい。一家に一台ムギちゃんだね」

（いやいや。ムギはカイロじゃないんだから）

唯の言葉に、心の中でツッコみを入れる僕は梓の横にいた。

梓の場合は後輩だからなどといった理由かもしれないが、僕の場合は恋人である唯が焼きもちを妬くからだ。

妬いてくれるのは嬉しいのだが、後始末が面倒なので、できれば避けたいというのが僕の本音だ。

「私、体温が高いから手が暖かいの」

「浩君もあずにゃんも、一緒に」

そんな時、僕たちに気付いたのか、唯が僕たちにも手を握るように促してきた。

「え? 私はいいです」

「僕も」

唯の言葉に、僕は目を瞬かせた。

（唯、言葉の意味が分かっているのか?）

仲間とは言え、ほかの女子の手を握ることを促す唯の気持ち理解できなかったが、きつと僕を信じてくれているのだと納得することにした。

というより、それ以外に考えられなかった。

「はい、どうぞ」

「それじゃあ」

「失礼して」

満面の笑みを浮かべて両手を差し出してくるムギに答えるように、僕たちはムギの手を握った。

「あ、本当だ」

（そんなに暖かいか？）

僕にはそれほど暖かさを感じる事ができなかった。

きっと僕も体温が高いからだろう。

「あずにゃんの手は小さくてかわいいね〜」

「ッ!？」

そんな中、それを見ていた唯の言葉に梓が顔を青ざめた。

「どうせ私は手が大きくて心も冷たい女ですよ」

「うわ、まだ根に持っついていらっしやる?!」

確か、その話題は夏の合宿のはずなので大体2〜3か月前のはずだが。

「違うよ澪ちゃん。手が冷たい人は心が暖かいんだよ」

（ん？ それだと……手が暖かい僕は心が冷たい？）

何となくあつてはいるが、少しショックだった。

だが、ショックを受けているのはほかにもいたようで、

「ムギ、何をやってるんだ？」

「え!？ な、何でもないよ」

窓に両手を当てて冷やそうとするムギに、律が声を掛けていた。

「ムギちゃんは、手も心も温かいよ♪」

「…………ふふ。ありがとう、唯ちゃん」

やわらかい笑みを浮かべながら口にした唯の言葉に、ムギは嬉しそうにお礼を言った。

その後、僕たちはいつものようにティータイムを迎えることとなった。

「あつたかい〜」

「本当です」

ムギが淹れた暖かい紅茶に、皆の顔がゆるむ。

「あ、この間の歌詞は絶対になしだからな」

「ええ!？ どうして?!」

そんな中、ふと思い出したのか律が滯にそう告げていた。

(まあ、ある意味黒歴史にも近いからな。あの歌詞は)

まさかのラブレターと勘違いをさせた歌詞だ。

当然の反応だった。

「浩介は、良いと思うだろ?」

「僕も今回ばかりには律に賛成だ」

「そんな……」

僕の方にまで聞いてきた滯に、僕は心を鬼にして滯が考えた歌詞を斥けた。

というより、もしこの歌詞を採用して律がラブレターと勘違いしていたことを思い出しそれによって演奏に問題が発生するようになることになれば、とんでもない問題に発展する可能性もある。

ならば、いつそのこと没にした方がましだ。

そんなこんなで、肌寒くはあるが心温まる冬の日は過ぎていくのであった。

第96話 ライブ

冬休み目前、今年も残すところ残り10日となった12月21日の放課後のこと。

「ライブ？」

全ては律の提案がきっかけだった。

「そう。中学校の時の友達がライブに出るから一緒に出ないかって誘われてるんだ」

律が机の上に置いたのは大みそかライブと名付けられたチラシだった。

タイトル通り、開催日は12月31日だ。

「でも、開催まであと10日しかないけど」

「私たち何も準備していませんよ」

律の提案に、漣と梓が異論を唱える。

僕たちは当然だが演奏する曲目を決めたりしていない。

それどころか、練習自体をする必要もあるので10日という時間は少し短いのだ。

「でも、面白そう」

「だろ？」

そんな漣たちの反応をしり目に、唯はすでに乗り気だった。

「それに大勢の人の前で歌うのは……」

「そんなんじゃないつまでたつても成長できないぞ、漣」

「そうだよ、そうだよ」

体を縮ませながら声を上げる漣に、律が真剣な表情を浮かべながら反論した。

それに唯も続く。

「……………それじゃ、多数決にしよう。今回パスの人」

頬を赤くしながらも手を上げながら意見を求める漣。

「律先輩、唯先輩。ごめんなさいっ！」

謝罪の言葉を掛けながら反対票に投じる梓。

(彼女たちの実力で、ライブに出ても平気か?)

僕は、そこに集約していた。

確かにライブに出ればかなりのステップアップが見込まれるだろう。

だが、失敗すれば洒落にならないダメージを負うことになる。

それは避けなければならない。

リスクを回避するのであれば、反対にするのが一番だ。

「私、みんなと一緒に演奏するのが楽しいの」

とはいえ、せっかく楽しみにしているムギに水を差すようなまねは僕にはできなかつた。

「僕は賛成」

「えっと……私も」

先ほどまで反対していた滯や梓も賛成に回った。

(まあ、彼女たちなら失敗をも乗り越えるだろう)

そんな気がしていた。

デメリットよりもメリットの方が大きいのもまた事実だ。

「いよつしやあ！ ライブ参加決定！」

「やったー！」

全員が賛成に回ったことで、ライブへの参加が確定した。

こうして、僕たちの初の外でのライブへの参加が決まるのであった。

そうと決まれば話は早い。

そうと言わんばかりに、僕たちは律の“参加申し込みをするぞー！”

“という言葉を受けて参加申し込みのため大みそかライブを開催するライブハウス『LOVE PASSION』へと向かっていた。

「うわー。もうじきクリスマスだね」

「早く行くぞ」

途中ショーウィンドウで何かを眺めている唯に、律が声を掛けた。そんな寄り道をしながらも、僕たちは目的地に到着した。

ライブハウスの出入り口に続く階段を下り黒色のどっしりとした威圧感を放っているドアの前に立った。

「な、なんだか緊張するね」

「それじゃ、開けるぞ」

ムギの言葉に、律は総いながらドアノブに手をかけるとドアを少しではあるが開いた。

「あの一、すみません！」

「はい」

律の呼びかけに女性の声が返ってきた。

「とにかく、中に入って」

「あ、はい！」

早速緊張しているのか、律の声はかなり上ずっていた。

そして僕たちが中に入ったところで、栗色のショートヘアーの女性が姿を現した。

「あ、あの一！ 参加申し込みにきました！ 放課後ティータイムです！」

「あなたが……ラブ・クライシスの子から話は聞いているわ」
僕たちを見回した女性は、最後に律の方を見ながら返した。

（ラブ・クライシス？）

どこかで聞いたような名前だと思ったが、すぐに思い出した。

（NEW STARS PROJECTの参加者だ）

かなり前とはいえ、彼女たちは僕のライブで実際に曲を披露しているのだ。

（これはかなりまずいのでは？）

まさか梓達のようにばれるとは思えないが、万が一のこともある。用心するに越したことはないだろう。

何せ、僕はまだDKであることを隠さなければいけないのだから。

「放課後ティータイムって何だか可愛くていいわね」

「……」

女性の称賛の言葉に、律と唯の表情が明るくなった。
よほどうれしかったようだ。

参加条件に記されていた“選考”を僕たちは受けていた。
とはいえ、内容はシンプルで、僕たちが演奏していた曲を聞かせる
ことだった。

今流れているのは、以前録音しておいたふわふわ時間^{タイム}だった。

「———という感じなんですけど」

曲が終わったのを見計らって、律が声を上げた。

「……………うん。それじゃ、この参加申し込み用紙に必要事項を記入し
てね」

少しの間考え込む表情を浮かべた女性は、そのまま参加申し込み用
紙を律に手渡した。

それは出場資格を獲得したこととイコールであった。

「当日のスケジュールを説明するわね」

そして女性から当日のスケジュールについて説明が行われた。

「集合は13時」

「随分早いですね」

「リハがあるからね。各バンド15分くらいで」

相槌を打つ律に、女性は丁寧に答えながら説明を続けた。

そして次々に伝えられる必要事項だが、当の本人はちんぷんかんぷ
んの様子だった。

(仕方ない。こっちの方で覚えておくか)

唯たちにしても、聞く気すらない始末だった。

「それじゃ、中を案内するわね」

当日のスケジュールについて説明が終わると、女性の後をついて行く形でライブは椅子内を案内された。

「ここが楽屋よ」

「うわあ〜」

最初のドアを開くと、そこは鏡などがあつたりとまさに楽屋そのものだった。

(間仕切りがないのはあれだけど、こっちで用意すればいいか)

男女兼用なのは気が引けるが間仕切りを自分で用意すればいいだけなので、特に深く考えないようにした。

「あの、暖簾とかをつけてもいいですか？」

「それ良いねー」

想像してみた。

暖簾のかかったドアから姿を現すムギたちの姿を。

「ここは温泉じゃないぞ」

「それと、ほかの子も使うから」

という女性の一言で、ムギの案は没となった。

「それで、こここの扉から……」

そう言いながらドアを開けると、そこはステージへとつながっていた。

「うわ〜、広いよー」

「あれってミラーボールですよね」

唯たちはステージの広さに興奮を隠せなかったようで、目を輝かせていた。

「当日の照明プランも考えてきてね」

「はい！ もうピカピカでグルングルンでっ！」

(もう意味が分からないから)

要領を得ない唯の照明プランに、僕は心の中でため息をつく。

「ここで、ライブをするんですね」

「……そうだね」

そんな中、会場を見ていた梓の一言に、ムギが相槌を打った。

規模としては小さいほうの部類に入るが、最初であることを加味す

れば十分な規模だ。

「おーい、今から燃え尽きてどうするんだ？」

そんな中、人で埋まっているのを想像したのか、完全に燃え尽きている藩に、律は苦笑しながらツッコんだ。

「それじゃ、本番はお願いね」

『よろしくお願いします』

外まで見送ってくれた女性の言葉に、僕たちはいつせいにお辞儀をして返事をするのであった。

参加の申し込みを済ませ、やることと言えば曲目などセッティングだろう。

ということ、場所を移して平沢家の唯の部屋で、話し合いを行うこととなった。

「ライブハウスで？」

「うん。それでいまその話し合いなんだ」

お茶を持ってきてくれた憂に、唯は集まった理由の説明をしていた。

おそらくは言いたくて仕方がなかったのではないかと思うけど。

「へえ。すごいね、お姉ちゃん」

「えへへ」

妹に褒められたのがうれしいのか、唯は照れたような笑みを浮かべていた。

「曲目は4曲だから……曲は、ふわふわにかれー、ふでペンとドントでいいか」

「まあ、それが無難だね」

曲の構成は既に決まっていたので、特に問題はない。

一番の問題は、

「当日は、何を着る？」

衣装だった。

「一年の時に来たやつはどう？」

「あのふりふりの……」

DVDでどのような衣装なのかを見ていた梓と、実際に着ていた滯が難色を見せた。

「さわちゃんに頼めばあずにやんの分も作ってくれるよ？」

「ええ〜」

今度ははつきりとした拒否反応だった。

「でも、さわちゃんが用意していた衣装はほかには、スク水に白衣に――

――嫌ですっ！」――「ですよね」

(どうして山中先生は変な衣装しか用意してないんだろう?)

そもそも、それを着ると思う根拠を知りたかった。

「だったら、新しい衣装を作ってもらおうとか？」

あまり、期待ができないけれど。

「だったら、変身して戦う感じなのはどう？」

「それ良いわね！ 魔法少女とか」

「いやいや、無理があるから！ というより、一体どうやって演奏中に服装を変える気だ？」

変な衣装案を出す唯たちに待ったをかけた。

このままだと壮絶な衣装になりかねない。

「それは浩君の出番だよっ！」

完全に僕の魔法を頼りにしていた。

「確かに服装を変える魔法はあるけど、演奏中で、全員が動いていてそれをみんなにも適用するのはいくら僕でも難しい。しかも、失敗すれば素っ裸になるし」

確かに衣装変更の魔法はある。

だがあれは一種の転送魔法だ。

対象が移動(それがたとえ数センチでも)していれば適用が難しくなる。

さらにはそれを全員分となると、かなりの集中力を必要とする

いくら僕でも、それは不可能に近かった。

しかも、衣装変更の魔法は衣装を消去する魔法とセットであり、この適用範囲が衣装変更魔法よりも広範囲のため、失敗すれば衣装だけが消去されるという最悪の事態に発展する。

（そう言えば、魔界のエンターテイメントか何かでこの魔法を使おうとして失敗し、全裸になった事案があったっけ）

まさしくその通りのことになるうとしている。

「せ、制服でいいんじゃないか？」

「私もそれでいいと思います！」

「僕も」

滯の提案した制服の方が断然ましだったので、僕は梓に続いて同意した。

「そ、そうだな。それがいいか」

さすがの律たちも制服の案を受け入れざるを得なかった。

「あ、そうだ」

衣装も決まりひと段落ついたところで、唯は何かを思い出したのか鞆から紙を取り出した。

「はい、これ憂と純ちゃんの分」

それは大みそかライブのチケットだった。

出場者の特典として数人分ライブハウスの人からもらっていたのだ。

とはいえ、一人当たり最大で二人までしか誘えないが。

（誰を誘おうか）

それ以前に誘う相手がわからなかった。

「お姉ちゃんの初ライブのチケット……もつたいなくて使えない！」

「使わないと入れないぞー」

唯から受け取ったチケットを大事そうに手にしながらつぶやく憂に、思わずツツコみを入れてしまった。

そんなこんなで、何とか一通り決めた僕たちは、解散することになった。

「へえ、ライブハウスでライブかあ」

「ようやくと踏み出したって感じた」

翌日の昼休み、お昼ごはんを食べながら（ちなみに僕は購買部で購入したパン）、ライブハウスでライブを行うことを話すと、慶介は興味深そうに返した。

「でも、浩介達にとっては、これが学外で行う初ライブか。見に行きたいな」

「あ、そう言えば」

慶介の言葉で、僕は昨日もらったチケットのことを思い出した。

「どうした？」

「そのライブハウスのチケットがあっただった」

「な、なにい!？」

凄まじい勢いで食い付いてくる慶介の反応は、ある意味予想していたものだった。

「これがそのチケットなんだけど」

「も、もしかして親友の俺のために!？」　　くう！　　浩介、お前意外といいやつなんだなあ」

慶介の前にチケットを見せると、慶介は涙ぐみながら口を開いた。

「……………」

何だか無性に腹が立った。

「一枚100万円で渡してあげる」

「ひ、100万円?!?!」

さすがの金額に、慶介は固まった。

「そ、そんな……でも、あのDKのライブのチケットを……」

青ざめながら何やらぼそぼそとつぶやく慶介の様子に、僕はすつきりとしたので冗談だと告げることにした。

「浩介!」

「な、なに!?!」

いきなり身を乗り出して大きな声で名前を呼ぶものだから、僕は驚いて少しだけのけぞった。

「ローンでいいから売ってくれ!」

「……月にいくら返すんだよ?」

慶介のローンという手に、僕は慶介に聞いてみた。

「えっと……せ、千円」

「……………」

慶介の告げた金額はつきり言って論外だった。

(一年間に1万2千円返済したとして、100万円を返済できるのは……約90年)

冗談で行ったつもりがまさか生涯返済をすると告げることは予想外だった。

「あー、冗談だから。お金取らないから。ただで渡すから」

「そ、そうか。良かった」

僕の冗談だという言葉に、ほっと胸をなでおろす慶介に、僕はチケットを手渡した。

「絶対に見に行くからな」

「まあ、来たところで意味はないけれど」

そんなこんなで、一人を誘うことができた。

(あともう一人はどうしよう)

そんな時、ちょうど佐伯さんが通りかかった。

「佐伯さん」

「何? 高月君」

僕は佐伯さん呼び止めた。

「大みそかだけど、暇?」

「ええ!?! そ、そんな……ダメだよ。高月君には唯ちゃんがいるのに……」

「……………」

僕の問いかけに、佐伯さんは頬を赤くして身をよじりながら恥ずかしげに答えた。

確実に変な勘違いをしている。

「何を想像しているのかは大体わかるけど、ライブハウスでライブをやるから、見に来ないかという意味だぞ？　もし、大丈夫そうならこれを渡すけど」

「へ!?　あ、そう言うことか。よかった、一瞬どうしようかと思っちやったよ。喜んで、いただくね」

顔を赤くして恥ずかしそうに笑いながらも、佐伯さんは僕の手からチケットを受け取った。

「誘ってくれてありがとうね」

「どういたしまして」

佐伯さんのお礼の言葉に返した僕は、そのまま自分の席に戻った。

「ちくしよ！　なんで浩介ばかり良い目に合うんだ！　俺と浩介の差ってなんだー！」

「そんなの当然だろ」

理由は一つしか思い当らなかった。

『うーん……性格』

「何も全員で声をそろえて言うことないじゃないかっ！」

なぜかクラスの皆と同じタイミングで答えてしまったことに、慶介は血の涙を流すのであった。

第97話 プレゼントとセツティング

終業式の帰り道、

「あ、見てみて」

夕日が差し込む中、帰路についていると何かを見つけたのか唯が駆け出す。

「どうしたんだ？」

そこは何かのお店のガラス窓だった。

唯はそれを興味深そうに覗き込む。

お店の中というよりは、窓ガラスに張られたポスターだが。

「へえ、こんなところにも張り出されてるんだ」

「私たち、これに出るんだよね？」

「がんばろうな、梓」

「はいっ！」

僕たちは大みそかライブの開催を告知するポスターを前に、再び心を入れるのであった。

「あ、他にはどんな人が出るんだろう」

「うっ!？」

唯の言葉に、漣のうめき声が返ってきた。

「漣先輩!？」

声の方を見ると、地面にうずくまっている漣の姿があり、それを目の当たりにした梓が驚きの声を上げる。

「あー、漣は極度の人見知りだから」

そんな梓に、律は苦笑しながら口を開いた。

（本当に大丈夫か？）

漣の姿を見ていると、そんな不安を感じてしまう僕なのであった。

それから数日が過ぎ、12月25日を迎えた。

この日はクリスマス。

恋人たちが幸せに過ごすまさに恋人のためにあるのではないかと
思わせる日だ。

とはいえ、恋人がいない者にとっては拷問にも等しい。

それは、戦争を起こすほどだ。

そのような戦争が発生しても、恋人たちは楽しい一日を過ごす。

ある者は樂しげに話し、ある者は腕を組んで歩いていく。

僕たちもその例に漏れていなかった。

「えへへ〜」

「全く、さつきから頬が緩みっぱなしだ」

僕と腕を組んで歩きながら笑みを浮かべている唯に、僕はため息交
じりに注意した。

「だって、浩君に初めてもらったプレゼントだもん♪」

「そんなたいそうなものじゃないけど」

唯がうれしそうなのは理由があった。

それが唯の手の中にあるやや大きめの箱だった。

中には僕お手製のVシステムが内蔵された眼鏡（度なし）と取扱説
明書が入っている。

それには転送機能はついていないが、通信だけならできると
なっている。

ちなみにエネルギーは毎晩午前3時に余剰体力からひかれたもの
となっている。

人間は様々な要因で体力が有り余った状態で眠ってしまう。

しかも寝ている間に体力は自然と目減りしていくので、かなりもっ
たいなかった。

それを利用して、放出される体力を吸収してエネルギーに変換させ
るようにしたのだ。

これによって、体力を強引に吸収して、朝起きたら気怠くなると
言った症状は起こらない。

ちなみに、効率だが唯ぐらいならば一日で約2時間程度の通信が可

能になるだろう。

使わなければ使わないだけ時間も増えていく。

当然だが、これは魔界の技術だ。

中にある物は唯には伝えていないが、注意書きの方で何度も何度も人目のあるところで使用しない旨のことを書いている。

変に技術が漏れると危険だからだ。

そんな危険を冒してまで僕が唯にそれをプレゼントしたのは、もし離れ離れになるようなことがあってもいつでも話をすることができるようになるという理由からだ。

当然だが、離れ離れになるという確証はないし、予定もない。

だが、何が起るかがわからないのが人生。

もしかしたらそういう事態になるのかもしれない。

その時の対抗策をあらかじめ用意しておくことにしたのだ。

「あ、お姉ちゃんに浩介さん」

「あ、憂〜」

そんな中、僕たちを見かけたのか、声を掛けてきたのは憂だった。

「買い物の帰り？」

「はい」

手にある買い物袋で、何をしていたのかがわかった僕の問いかけに、憂は頷いて答えた。

「あ、そうだ。憂にもクリスマスプレゼント」

「ありがとうございます。浩介さん」

僕は憂いのために用意しておいたある物を入れた小さな箱を、憂に手渡した。

「むう〜」

「むくれるな。憂のは唯のとは意味が違うから」

憂にプレゼントを渡したことに面白くないのか頬を膨らませる唯に、僕は苦笑しながらそう告げた。

「……だったら、良い」

渋々ではあるが唯も納得したようだった。

ちなみに、憂にプレゼントしたのは『緊急呼び出し装置』だ。

これは、シンプルに黒縁の箱にてっぺんにある赤いボタンというシンプルな形状だ。

効果は文字通り、何らかの身の危険を感じた際にそのボタンを押すことで、僕の方に連絡がいくようになっていくというものだ。

この装置のすごいところは、ただ連絡するわけではないことだ。

それは転送機能があるということ。

具体的には僕がこの装置のある場所まで転送ができるようになる。もちろん、ボタンが押されないとできないが。

だからこそ『緊急呼び出し装置』なのだ。

連絡があつた瞬間に、僕は転送して現場に向かい危険を排除する。そのための装置。

色々とする装置ではあるが、これも恋人の家族という特権だ。

それに、もしかしたら唯の窮地の時に一緒にいるかもしれないので、悪い話ではない。

そんなこんなで、僕のクリスマスプレゼントは結局発明品ということになったのだ。

「それじゃ、僕はここで」

「うん。またね、浩君」

名残惜しくはあるが、家の前に到着してしまったため、僕はなくなく唯から離れた。

そして僕は唯たちと別れ自宅へと戻るのであった。

それから6日経った12月31日。

暦の上では大みそか……今年最後の日を迎えた。

僕たちは大みそかライブの会場でもある『LOVE PASSIO

N』へと向かっていた。

「お疲れ様です」

「ど、どうも」

ライブハウスの前にはすでに数人の人がいて、こちらに気付いたのか礼儀正しく一礼して声を掛けてきたので、それに律が応じた。

「あれってなに？」

「たぶん、これに出場するどこかのバンドのファンだと思う」

数は少ないが、ファンを有しているのはすごいことでもありバンドのメンバーにとっては励みとなる活力の源のようなものだ。

そして僕たちは階段を下りてライブハウス内に向かう。

「おはようございます。うっ!？」

挨拶をしながらドアを開いた律は、目の前の光景に息をのんだ。

そこには出場者と思われる人物の姿があった。

顔に切れ込みのようなメイクを施していたりする者や、赤い髪の女性等々、威圧感が半端ないほど強かった。

(これはなかなかにして個性的だな)

現に濡は逃げようとしているし。

「おはようっす」

「おはよう」

だが、外見とは裏腹にフランクな感じで帰ってきた。

(中山さんみたいなタイプかな)

中山さんの場合、外見は違うが正確はかなりフランクだったので、あながち間違いではないのかもしれない。

「律ちゃん、濡ちゃん！」

そんな中肌色のフード付きの上着を着てサングラスのようなものをつけていた青髪の女性が、眼鏡を外すところらに駆け寄ってきた。

「マキちゃん！」

(あ、ラブ・クライシスのドラムの人だ)

ズバズバと意見を出していた人でもある。

この人がいなければ、プロジェクトは進化しなかったはずなので、発起人のような存在だ。

しかも、何がすごいかと言えば、意見を出してくれたお礼状を送ったところ、“お礼を言われるようなことはしていない”と言った趣旨

の返事が返ってきたところだろう。

「紹介するね。ラブ・クライシスでドラムのマキちゃん。今回このライブを紹介してくれた人」

「どうも、うちの律ちゃんがお世話になってます！」

「お前は律の母親かっ」

何度も頭を下げる唯に、僕はため息交じりにツッコんだ。

「こっちがベースの綾。滯ちゃんの大ファンなんだ」

「この間のライブ、滯さんの演奏はともかっこよかったです！」

同じベース担当だからか、それとも滯の持つ魅力か、ファンがいるというのはすごいことだ。

「え？ ライブに来てくれたの!？」

「あ、遅れて来た子」

唯が驚きに満ちた声を上げると、唯の顔を見た銀色の髪の少女がそうつぶやいた。

(こんなところまで尾を引くんだね)

しようがないとはいえ、ある意味強烈なイメージが残っているような気がした。

「すみません！ すみません！」

何度も頭を下げて謝る唯だが、頭を下げる度に背中にあるギターからの風圧で髪が煽られているのだが、本人はそのことに気付いている様子はなかった。

「いえいえ、とっても楽しいライブでしたよ」

「っ!？」

そんな少女の言葉に、今度は顔をにやけだした。

「え、えっと……」

「知らない人からライブをほめられたことがないから……たぶん」

「気にしないで上げてください」

困惑するベースの少女に、僕と律はさりげなくフォローをすることにした。

「あ、そうだ。良かったら、見に来て」

「今度は単独ライブする予定だから」

「あとこれも良かったら」

二人の少女から渡されたのは次のライブを開く告知のチラシと、C Dだった。

（これで彼女たちは参加権を失くすけど、既に上に向かっていようだし問題はないか）

願わくば、彼女たちもこれをきっかけに次のステップが踏めるようになってほしいものである。

「それじゃ、またあとで」

「ま、また……」

僕たちに手を振って去っていく彼女たちに、律たちは半分生返事っぽく返した。

「何だか、私たちと意気込みが違うな」

（そりやそりだ）

僕たちはあくまでも部活レベルでの音楽活動をしている。

それはいい加減とかではなく、もっと根本的なものが違うのだ。

「そうだ！ ログマークなんてどうかな？」

「ログマーク？」

突然提案する唯に首をかしげる僕をしり目に、唯は自分の手のひらにペンで何かを書いていく。

「こんなのとかどう？」

「それは温泉！」

自信満々に掲げた掌に書かれていたのは、温泉マークでおなじみのものだった。

「ええー!?!」

「だったら、ティーカップを書いてみたらどう？」

シヨックを受けたような表情を浮かべる唯に、ムギが提案した。

「おおー、待ったりお茶するいい感じになった」

改めて書き直した唯が見せたのはティーカップから湯気のようなものが出ているロゴだった。

確かに、これならいいのかもしれない。

「私のステイックにも書いて」

「それじゃ、私はピックで」

「僕もピックに書いてもらおうかな」

「皆でお揃いだね〜」

次々にせがまれる唯は、みんなとお揃いなのがうれしいようだった。

「それじゃ、ミーティングを始めるわよ」

そして書き終えた頃に、案内をしてくれた女性の声が聞こえた。

僕たちはお互いに頷き合うと、手を上げて気合を入れるのであった。

「私たちは二番目だね」

「二番目か……」

「溍的には最初がよかったか？」

話し合いの際に公開された演奏バンドの順番に微妙な反応をしている溍に疑問を投げかけると、凄まじい勢いで首を横に振った。

「それじゃ、何番目がよかったんだ？」

「えっと……」

律の問いかけに、溍は視線を色々な場所に向けるだけで応えようとはしなかった。

結局、何番目だろうと緊張することには変わりはないみたいだった。

「すみません」

「あ、はい」

そんな時、ライブハウスのスタッフの人だろうか、男の人がこちらに駆け寄りながら声を掛けてきた。

「こちら、バックステージパスです」

「あ、ありがとうございます」

6枚のバックステージパスを受け取った律は、別のところにかけて

いく男の人の背中にお礼の言葉をかけた。

バックステージパスとは、簡単に言ってしまうえばステージのそでや楽屋などに入る時に必要なものだ。

つまり、関係者であることを証明するもので、貼っていないと楽屋などに入ることすらできなくなる。

「あ、あの人すごいよ」

「あれは強者だな」

近くにいた人のギターケースに貼られている使用済みのバックステージパスの数々に律は感心したような声を上げる。

相当な場数を踏んでいる証拠だった。

ちなみに、僕の場合はバックステージパスは専用のファイルに貼つてある。

ギターケースに貼るのはさすがにあれだったからだ。

「それじゃ、これが私たちにとっては最初の一枚だね」

「そうだな……」

唯がつぶやいた言葉に、僕は静かに相槌を打った。

厳密に言えば、僕は数えきれないほど場数を踏んでいる。

だが、“放課後ティータイム”の高月浩介としては、これが最初のライブハウスでのライブとなる。

それだけに感慨深いものがあつた。

「それじゃ、ペタツと」

「唯、それは自分に貼ってないと意味がないから」

ギターケースに貼る唯に、僕は苦笑しながら指摘した。

「えつと、それじゃ……」

「なぜそこに貼るっ！」

自分の足に貼った唯に、律がツツコんだ。

「それじゃ、ここにペタツと」

「湿布かつ！」

肩の方に貼った唯に思わず梓と突っ込むタイミングが揃った。

最終的には左腕の方に貼ることで落ち着いた。

「何だか無難な位置だね」

本人はあまり納得していない様子ではあったが、そこがしつくりくる。

僕は唯と同じく左腕に貼っていた。

「あ、それよりもセッティングシートを書こうぜ！」

それぞれがバックステージパスを張り終えたところで、律はそう提案すると床にセッティングシートを置いた。

セッティングシートは曲名や曲調、テンポに著作権やら音響等々さまざまな事柄を明記していく必要がある。

それを基にライブハウスのスタッフが演奏中に演出をしていくのだ。

セッティングシートをバカにしていると、セッティングシートに足をすくわれるという事態にもなりかねない。

そんな中、律はさらさらっと、曲名を書いていく。

曲順はこんな感じだ。

1 : カレーのちライス

2 : ふわふわ時間タイム

3 : ふでペンボールペン

4 : Don't say lazy

「えっと、曲名や曲調はいいとして、照明イメージはどうしようか……」

「うーん。どう書いたらいいんだろう」

僕はあえて何も言わないようにした。

こういうのも経験だ。

頭をひねって考えれば曲に対しての理解も深まる。

そして、次のライブではさらに向上することができるかもしれないからだ。

僕がアドバイスをするのは、律たちが聞いてきたときだけだ。

「ちよっと聞いてくるね！」

「へ？」

唯の予想外の行動に、一瞬頭の中が真っ白になっている僕をよそに、唯は立ち上がるとどこかに向かつていった。

そこは先ほど入った時に一番インパクトの強かったトサカヘアの女性たちの下だった。

(怖い人のところに聞きに行くというのは勇気があるだろうに……)

ある意味唯らしかった。

「なんだか〃元気な感じで〃とか〃ポップな感じ〃って書いてたよ！」

「それじゃ、うちもそんな感じで」

何はともあれ分からないところが無くなった律は、セッティングシートに記入をしようとしたところで、

「ちよつと待って」

「どうしたんだ？ 滯」

突然それを遮った滯に、律が首をかしげた。

「うちは、全部ピンクがいいっ」

「ピ、ピンク……ですか？」

滯の提案に、梓が引きつったような声を上げる。

言いたいことは分かる。

僕だって言いたいほどだ。

「ダメ……かな？」

「そ、それじゃ、ふわふわのさびの部分はピンクで！」

うつむいた滯に、律があわてて声を掛けた。

「あ、あのミラーボールも使おうよ！」

「それじゃ、前奏とかに使おうぜ」

なんだかんだあったが、何とか形になりつつある。

「それで、私にピンスポットを当ててもらおう！」

「却下！」

「そうですよ！ メンバー紹介の時に一人ずつ当ててもらいましょうよ！」

僕の反対意見に賛同するように梓も続いた。

ある意味個性的な意見だったような気がする。

「音響イメージってどんなのかな？」

「待っててっ」

(せめて僕の方に視線を向けるとかしてよっ)

知ったかふうに見えるのが嫌なのもあるけど、自分で決めたこととはいえかなりむなしかった。

「“リヴぁーぶをください”とか、“ボーカルをください”って書いてたよ」

「それじゃ、こっちもそんな感じで……MCはどこに入れるの？」

聞き終わった唯の言葉に、律はさらさらと書いていくが今度はMCの部分で躓いた。

(まさかね。三度目はないよね?)

「行ってくるー!」

両腕を構えて力む唯は、そのまま先ほどのバンドのところに向かつていった。

そして再び聞いてくる唯はすぐに戻ってきた。

「なんか、書き終わったから参考にしていいだっつて」

「おー、それはとっても心強い! ——っつてええ!?!」

唯の手にあるのは数回も聞いてきたバンドのセッティングシートだった。

「すみません、すみません!」

「ありがとー」

慌てて何度も頭を下げる僕と律とは対照的に、唯は満面の笑みでお礼を言っていた。

(な、何だかもう馴染んでる)

ある意味唯は最強かもしれない。

そんなこんなで、いろいろあったがセッティングシートを書き上げていくのであった。

第98話 去る年、来る年

時刻は午後1時51分。

なんだかんだあって何とかセッティングシートを書き終えた僕たちは会場の観客側の方に立っていた。

ステージの方で行われているのはリハーサルだ。

他のバンドのリハーサルを見るのは様々なところで為になる。

例えば、どのような音作りをしているのか、どのようなエフェクトを使っているか等々例を挙げればきりが無い。

「うわあ、すごいエフェクターの数です」

梓はエフェクターの数に、律はマイクの方に関心を持っているようだった。

人が違えば関心を持つ方向も違うようだ。

(あれ? そういえば、唯はどこに……)

「ねえねえ律ちゃん、浩君。お菓子が売ってるよ〜!」

そんな時、唯のはしゃぐ声が響き渡った。

「あ、これはCDだ。私たち売るもがないよね〜」

「……………」

唯の言葉がものすごいとげとなつて突き刺さってくる。

「あずにゃん、これに私たちは移るんだね! すごいすごい〜」

大はしゃぎしている唯だが、僕たちは恥ずかしさでいっぱいだった。

「律」

「おおっ」

僕の呼びかけに、律は意味をくみ取ったのかすぐさま唯を抱えた。

「はいはい、外に出ましようね」

「ええ〜、律ちゃん?!」

律によって強引に外に連れ出されていく唯とともに、濡たちもそそくさと退散していく。

「皆さん、どうもお騒がせしました〜」

僕は会場にいる全員に謝りながら、会場を後にするのであった。

「ねえねえ、『放課後ティータイム様』だつて！」

「分かったから、落ち着け」

未だに興奮冷めやらぬと言った感じではしやぎ続けている唯を落ち着かせた。

「お茶にしない？」

「……………」

(ある意味ムギもすごいかもしれない)

なぜかバスケットに飲み物(おそらくお茶だろう)が入った水筒を手をしているムギに、僕は心の中でそうつぶやいた。

そんなこんなで僕たちは、いつものお茶会をすることになった。

「はあく、落ち着く」

「やつぱり、これだよな」

落ち着くことには成功したが、これはこれで落ち着きすぎな気がする。

「良い匂い」

「おいしそうだね」

そんな中、僕たちに声を掛けてきたのはリハーサルを終えたのか、ラブ・クライシスのメンバーと、セッティングシートのアドバイザーをしてくれたばかりか、シートそのものを貸してくれたバンドの人たちだった。

「皆さんも一緒にどうですか？」

「え？ ……それじゃ」

「お言葉に甘えて」

ムギの予想外の提案に、一瞬戸惑いを見せた彼女たちだったが、頷くことで答えるのであった。

こうして、お茶会は予想に反して大きくなった。

「へえ、それじゃ色々なコンテストに応募してるんですね」

「なかなか入賞しないんだけどね」

お茶がてら、僕たちは緑色の髪を伸ばしている女性たちの話を聞いていた。

なんでも、音楽を始めたが、いまだにコンテストで入賞する機会がないとのことだ。

「それでも、諦めないよ」

「そうだよね、諦めたらそこですべて終わりだもんね」

女性の言葉にラブ・クライシスのマキさんが続く。

外見は全く違うが、彼女たちの共通点の一つ。

彼女たちは、音楽が純粹に好きなのだ。

だからこそ、入賞できなくても音楽を続けていられる。

もしかしたら、それこそがミュージシャンとしての素養なのかもしれない。

(何か僕は重要なことを忘れていないか?)

待ったりとした時間が流れる中、僕はそんな疑問にさいなまれていた。

「放課後ティータイムさん！ リハ、お願いしますよ！」

「あ……」

スタッフの人の言葉で、ようやく僕は忘れていたことが何かを思いだした。

スタッフの人に急かされる形で、僕たちは急いで会場の方に向かいセッティングを始めたのだが……

「ま、ままず何から始めればっ」

「セッティングだよっ！」

あたふたとしている唯に、同じく動揺している律が答えた。

(そう言えば、初めての外でのライブだったよね)
忘れていたが、これが彼女たちにとって初めての学園外で行うライブ。
ブ。

ならば、ここまでテンパっているのも納得だ。

「そ、そうねっ!!」

「誰に言ってるんですか!」

誰もいない柱に向けて受け答えするムギも十分にテンパっていた。

「こら回るなっ!」 というか僕にリード線を持たせてどうする気!?!」

テンパっているのが極限に達したのか周りをぐるぐるとまわり始める梓達を落ち着かせようとするが、なかなか落ち着かない。

(だ、大丈夫か?)

とてもじゃないが不安になってきた。

(というより、これはネタだよな?)

なぜか僕の服のポケットにツッコまれたリード線に、心の中でつぶやいた。

僕はとりあえずリード線を、ぐるぐる回る梓の手の中に一瞬のすきを狙って戻した。

「それじゃ、お願いします」

「は、はい!」

そんな状態も女性の一言で収まった。

その後は早かった。

セッティングも終わり演奏準備を整えた。

「そ、それじゃ……2曲目のふわふわをコーラス、いきますっ」
律の宣言の直後、リズムコールが行われ唯がギターの音色を奏で始めた。
めた。

不安していたが、緊張の割にはちゃんと曲が演奏できている。

ただ若干音が堅いが。

そして、セッティングシートで明記した希望通りに、ミラーボールが動き出した。

「唯、歌っ」

「え? あっ?!」

ミラーボールに気を取られ、ボーカルを忘れていた唯に一喝すると慌てた唯はマイクを顔にぶつけた。

ハウリング音が鳴り響く中尻もちをつく形で唯が倒れそうになるのを、僕は何とか片手で受け止めた。

だが、いったん崩れると止まらないのが世の定め。

「大丈夫——」

「濡先輩!？」

「濡ちゃん!？」

慌てて駆け寄ろうとした濡がいつぞやのライブと同じように何かに足を取られたのか地面に転んだ。

さらにそれを防ごうとした梓とムギも続くようにこけた。

「お、落ち着けっ」

雪崩形式でダメになっていく典型例だった。

「大丈夫! 大丈夫!」

「しっかり落ち着いてもう一回!」

「がんばってー」

そんな僕たちに声援を送ってくれたのは一緒に参加している他のバンドのメンバーだった。

このライブは僕たちだけのライブではない。

ライブ自体を成功にさせるには、僕たちやこの場にいるバンドメンバーたちの頑張りが必要なのだ。

「……皆、もう一回!」

『おー!』

僕は唯たちに声を掛けて、もう一度リハをすることにした。

先ほどの大失敗で何かが吹っ切れたのか、今度はしっかりと演奏をすることができた。

そして、ついに大みそかライブの幕が開いた。

「それじゃ、頑張るぞ」

「お、おー」

ついに本番を迎えた僕たちは、再び気合を入れた。濡の方も気合は入っている。

そして僕たちは薄暗いステージに出た。

全てのセツティングは終わっており、演奏の準備は万全だった。

曲の入りは律のシンバルの音が合図だった。

一気に照明が灯り、僕たちを照らし出す。

テンポが速く、難易度も少し高めだがそれでも唯たちはちゃんとそれを弾いている。

僕もバッキングコードではあるが、唯のボーカルに合わせて唯のボーカルをつぶさないように注意をしながら弦を弾き、ときにはリズムパートを弾いている梓と合流したりする。

それが、僕たちなりの演奏スタイルだった。

早いテンポでメリハリが弱い曲調に、唯の甘い歌声がうまい具合に合わさる。

この曲のボーカルは唯が一番しつくりと来ていた。

そしてこの曲一番の難所でもある間奏でのリードギターのソロがやってきた。

最初は伸ばしめで、後半は速弾きにも近いスタイルでの演奏を求められる。

僕と梓はただ音を伸ばすだけで簡単だが。

(本当に本番の時はいい演奏をするんだよな)

難なくソロを乗り越えた唯に、僕は心の中でつぶやいた。

ソロさえ乗り越えれば後はサビの部分のリフなので、難易度も高くなる。

そして唯のギターの音色で、この曲は無事に終わった。

「どうもー！ 放課後ティータイムですー！」

曲のあとにMCを入れたのは、僕の意見だった。

最初よりも、しよっぱなから曲にした方がインパクトが強くなるよ
うな気がしたのだ。

決して、僕がそう言うのが好きだというわけではない。

「私は、メインボーカルでリードギターの平沢唯ですー！」

MCの際の照明希望通り、唯にスポットライトが当たる。
そして拍手が送られる。

「そして、サイドボーカルでベースの秋山滯ちゃん」
「ど、どうも」

唯の紹介に滯にスポットライトが当たる中滯は観客に挨拶をする。
すると、観客からも惜しみない拍手が送られた。

「そしてキーボードの琴吹 紬ちゃん」

「こんにちはー」

「次がドラムの田井中 律ちゃん」

「どうもー!」

次々と唯はメンバー紹介をしていく。

ちなみに、当初はフレーズを入れようとしていたが、僕の方で却下した。

印象度は強くなるが、かなり恥ずかしくなりそうな気がしたからだ。

特に滯が。

「リズムギターの中野梓ちゃん」

「こ、こんにちは」

梓にとってこれが二度目のライブ。

緊張の色は隠せない様子だった。

「そして最後が、もう一人のサイドボーカルでバッキングギターの高月 浩介君」

「どうも」

僕は右手を挙げて紹介に応じた。

拍手が聞こえるが、その中に慶介の姿を見つけた僕は、少しでも強く感じた。

「それじゃ、次の曲。ふわふわ時間!」

そして次の曲が始まった。

「名残惜しいですが、次で最後の曲になります。聞いてください。Don't say lazy」

唯のMCが合図となり、スティック同士が合わさる音が鳴り響く。その直後、ドラムのフィルで曲の演奏が始まった。

キーボードの音色とパワーのあるドラムに目立たず、されど力強いビートが絡み合い、さらにそこにギターの音色が合わさる。

そして僕と滯の歌声もそれに乗った。

Bメロに差し掛かった瞬間、これまでのギターの音色が大きく変わった。

これまでの軽く薄い音色から、甘く深いギターの音色へと変化したのだ。

これもひとえに梓が加わったことによるものだった。

そして、間奏に入ってくる。

ピックスクラッチから始まる梓のギターソロは、僕の時とは違い優美な雰囲気をおぼせるのに十分だった。

そして駆けるようにして演奏は終わった。

それは、僕たちの外での初ライブが無事に終わったことを意味していた。

そして惜しまない拍手に包まれながら、僕たちはステージを後にすると次のバンドのメンバーに、バトンタッチするのであった。

「ううん。終わったあー」

大みそかライブも無事に終わり、星空が輝く空の元腕を伸ばしながら唯は声を上げた。

「お疲れ様」

そんな僕たちに労いの言葉をかけてくれたのは、観に来てくれたら憂達だった。

「あ、皆。待っててくれたんだ！」

「お姉ちゃん！ すっごくよかったよ！」

唯の下に駆け寄った憂は感動冷めやらぬと言った様子で感想を口にしていた。

「本当、恰好よかったわよ。皆」

「……ありがとう」

真鍋さんの感想に、唯はとてもうれしそうにお礼を言っていた。

「浩介ー」

「なんだ、まだいたのか」

僕に声を掛けてきた慶介に、僕はジト目で返した。

「おいおい、せっかく来たのにそれはあんまりだぜ」

「で、どうだった？」

慶介の言葉を無視して、僕は感想を求めた。

「いやー、感慨深いと思ってな。あの浩介がいるバンドの演奏が」

「そりやどうも」

“あの”には僕がDKであることが含まれている。

その後、外に出てきてファンに囲まれたラブ・クライシスに労いとお礼の言葉をかけるのであった。

僕は、少し離れた人気のない場所に立っていた。

目の前にはラブ・クライシスでドラムをやっているマキさんの姿があった。

「それで、話って何？」

帰り際に呼び止められた僕は、話があるということだけで彼女に人気のない場所まで連れてこられたのだ。

「単刀直入に言うね。君、DKさんでしょ？ H&Pの」

「……………」

マキさんの言葉に、僕は無言を貫いた。

それだけでもすごいことだ。

何せ、内心動揺しまくりだったのだから。

「うまく隠したつもりだったんだけど」

「確かにね。でも、会った時からなんとなくそうじゃないかなって思ってたんだよ。だって、私の顔を見て驚いたような表情をしたし、何より口調とかが一緒だから」

いくら僕でも、口調まではごまかせない。

些細なところから気づく彼女も、十分にすごい人だった。

「決定的だったのは、リハーサルの時の君の態度」

「態度？」

マキさんの指摘に、思わず首をかしげた。

「他の皆が緊張で動揺しているのに、君だけは堂々としていて、余裕そうな感じだった。だから、かなり場慣れしてると思った」

「……………」

もはやここまで来ると反論のしようもなかった。

「あ、心配しないで。君のことは誰にも話さないから」

「そうだと助かる」

僕は彼女のことを信じることにした。

律の友人だからというのもあるが、この間のライブでズバズバと切り込んでいった彼女が馬鹿げた真似をするようには思えなかったからだ。

「ただ、一つ聞いていい？」

「どうぞ」

真剣な面持ちで訊いてくる彼女に、僕は先を促した。

「どうして、プロのレベルのあなたが、アマチュアバンドで演奏をするの？ もちろんんだけど、彼女たちは将来プロになる可能性があるけれど、でも聞いておきたい。どうしてプロのあなたが、そこにいるのか」

「……………」彼女たちは僕や君たちが知らない何かを持っている。だからだ」

マキさんの問いかけに、僕が言えたのはそれだけだった。

「それが何なのかは僕は知らないけれど、それはきつとどのバンドにも劣らないと、僕は信じてる」

「……………」

僕の返答に、しばらく無言だった彼女はゆっくりと口を開くと“そう”とつぶやいた。

「ありがとう。何となくわかったわ。それじゃ、またいつか」

「ああ。またいつか」

皆を待たせているからか、駆けていく彼女の背中を見送ると、僕は平沢家へと向かう。

律曰く、“年越しは一緒にいるぞー”とのことだった。

「はあ……今年も終わりか」

満天の星空の中、僕は静かにつぶやくのであった。

『はーい!』

「高月だけど」

『今開けますね』

呼び鈴を鳴らした僕は、インターホンから聞こえる憂の声に名前を名乗ると、声から少ししてドアが開いた。

「遅れてすまない」

「いえ、大丈夫ですよ。あ、コートもちますね」

僕からコートを受け取った憂は横に置いてあった衣文かけにコートをかけた。

「今ちようど年越しそばが出来上がったところなんですよ。浩介さんの分もあるので、よければ一緒に食べませんか?」

「へえ。それじゃ、ご相伴にあずかろうかな」

憂の言葉に僕は言葉に甘えることにした。

そして、憂に言われてリビングに向かったのだが……

「ほら、虎ビキニもあるわよ」

「いやです!」

なぜか虎耳のヘアバンドをつけている梓の姿があった。

(虎耳も似合うな)

口にしたら色々な意味でまずい事を眩く。

それほどまでに似合っていたのだ。

もはや才能なのかもしれない。

「そんな才能いりませんー!」

そんなツツコミがありながら、僕たちは憂が持ってきた年越しそばをごちそうになるのであった。

「ああ、またババだ」

「そういう時は心の目で読むんだつ、唯」

「了解であります! 律ちゃん隊長!」

(ババ抜きで心の目を鍛えるつて……)

出来たらすごいかもしれないが、ある意味シユールだった。

僕は開始後一番に上がってしまい、手持無沙汰だった。

そもそも最初にババを持っていたのは僕だったりする。

横が梓だったので、僕はあえて心理戦で挑んでみた。

(ババで悲しんで、それ以外の適当なカードで喜ぶ、ベタな方法に引かかるとは)

ババをひいたときの梓の固まった表情は、今でも記憶に新しい。

(にしても、今日はいろいろなことがあったな)

ふと思いついてみる。

ライブで出会った様々なバンドメンバー。

彼女たちは、唯たちにある意味でいい影響を与えたと言つても過言ではない。

(本当に今年はいいい一年だった。)

新しい部員、中野梓を中心に発生した問題。

そしてその後僕の正体で発生した二つの問題。

さらにはどうしようもない男が出てきたりしたり、時間が何度も繰り返されることになったこともあった。

これらの事件や出来事は、何がしらかの形で僕たちを成長させているのかもしれない。

だからこそ、僕は恋人を得た。

初めて、これから先の毎日を共に歩んでいこうと思える人と巡り合えた。

きっと僕は幸せだ。

それはみんなも同じだと信じたい。

(来年も、もっともっと……)

そこまで考えた僕の意識はゆっくりと黒く染まり始めた。

(そう言えば、ライブで疲れてたんだっけ)

初めての外ライブだ。

僕とて緊張くらいはする。

尤も、唯たちがちゃんと演奏ができるかどうかという意味ではあるが。

そしてそのまま僕は眠りにつくのであった。

「浩君、起きて。浩君！」

「んう……一体何？」

僕は唯によつてたたき起こされた。

未だにしつかりとまわっていない頭で周囲を見渡す。

「初日の出を見よう！」

「……………」

「浩君！ 寝るなー！ 寝たら死ぬぞーっ」

「ツタツタツタ!?!」

唯の言っている意味が理解できずにいると、眠ったと勘違いした律

の高速ビンタが炸裂した。

ちなみに、今のは律の声帯模倣だ。

いくら僕とて、騙されない

「おはよう、浩介！」

「……おはよう、律。非常に過激なモーニングコールをどうも」

僕は律へと殺気をぶつける。

「あ、あれ……ばれていらっしやる!？」

「後で少しお話をしましょう。田井中さん？」

「ひい!？」

加減を忘れたので、いつもより強い殺気を律にぶつけてしまった。

顔を青ざめさせた律をしり目に、僕はゆっくりと立ち上がった。

「唯、寝癖がついてるぞ」

「ええ!?! ホ、本当?!」

目に留まったのは寝癖なのか、髪の毛の所々がぼさぼさになっている唯の姿だった。

「ほら、直すからじっとしてな」

「あ、うん。ありがとう」

手クシではあるが、唯の寝癖を直していく。

「年が明けてもバカップルは変わらずか」

「でも、二人とも幸せそう♪」

「はいっ」

「うるさいぞ、そこ」

周りではやし立てる漣たちに、僕はそう言い放つのであった。

最後まで起きなかった山中先生をそのままにしておき、僕たちは唯に先導される形で高台の方へと向かっていた。

「さわちゃんはおのまままで良かったの?」

「いいんじゃない？ あんなでも一応教師なんだし」

唯の言葉に、先の上に上がっていた僕は少し高めの段差があったので唯を引き揚げながら答えた。

「浩介ってたまに辛口だよな」

「そう？」

律に指摘されるが、僕にはそれほど自覚がなかった。

「うわあ……」

「きれい」

「ここ穴場なんだ〜」

濡たち感嘆の声を上げるので、改めて初日の出に目をやると、山々の間から日光が顔を出していた。

それは確かに幻想的な景色だった。

「それじゃ……」ほんっ」

そんな中、濡は僕たちの集中を集めるように咳払いをする。

「あけましておめでとう」

それは新年恒例の挨拶だった。

『あけましておめでとう』

そして僕たちもそれに応じた。

そんな日常的一幕だが、少しだけ気になることがあった。

「とこころであずにゃん」

「はい、なんですか？ 唯先輩」

それは同じだったようで、唯は笑みを浮かべながら梓に声を掛けた。

かわいらしく首をかしげている梓に、唯はそれを口にした。

「いつまで付けてるの？」

「え？ ……にゃ!？」

自分の頭を指差しながら問いかける唯につられて自分の頭に触れた梓はようやく頭につけっぱなしの虎耳に気付いたようだ。

「ど、どうして誰も言ってくれないんですか!!」

「だって、似合ってたから」

「一種の才能だな。それ」

「あううう……」

梓にとつてはある意味あれな新年になってしまったが、これもある意味放課後ティータイムらしかった。

ちなみに、これは余談だが。

「どうして連れてってくれなかったのよ!!」

と、戻った時に憂特製のおせち料理を口にしながら抗議をしてくる山中先生の姿があった。

「初日の出を見れば今年こそ恋愛運アップになるかもしれないのに!」

「結局そこですかい」

どこまで行っても山中先生は山中先生だった。

2年生編 『セカンドステップ』 第99話 応募！

新学期も始まり、いよいよ学期末に向けて走り出した僕たちであったが、この時期は僕はいろいろと忙しかった。

「今日も浩介はまっすぐ帰るんだ？」

「ああ。本当に最近忙しくて困るよ」

HRも終わり手早く荷物をまとめた僕は、慶介に相槌を打ちながら鞆を手にする。

「でも、それも今日で終わりだろ？」

「まあね。厄介なことが終わるから」

慶介の問いかけに答えた僕は、そのまま駆け出すように教室を出ると学校を後にするのであった。



時をさかのぼり、新学期が始まって少し経った日のこと。

この日も軽音部の部室ではティータイムが繰り広げられていた。

「浩介も大変だよなー。ライブの準備で休むだなんて」

「でもライブって来月なんだよね？　なのに、どうして準備を始めるの？」

ひと月前からの準備に、首をかしげる唯に、声を上げたのは梓だった。

「それは当然ですよ！　セッティングや音響確認の打ち合わせとかいろいろ大変なんですからー！」

「しかも、浩介はバンドを引っ張っていく影のリーダー。責任だつてあるんだぞー！」

「み、濡ちゃんも!？」

梓に続いて濡までもが声を荒げたことに驚く唯。

「濡はDKのことが絡むと人が変わるからなく」

「梓ちゃんもね」

からかいの意味を込めた視線を濔に送りながら相槌を打つ律に、紬も続いた。

「あ、すみません」

ふと我に返った梓はしゅんと小さくなって謝った。

「でも、この間のライブ楽しかったねー」

「そうだな。いい経験だったよな」

唯の感想に、濔も頷いた。

大みそかに開かれた、ライブハウスでのライブは彼女たちにいい影響を与えていたようだ。

「そんなあなたたちに朗報よー！」

「にや!?」

「うわ!? いつの間に……」

「あ、お茶入れますね」

梓の横から大きな声で叫ぶさわ子に、驚きをあらわにする梓達。

尤も、紬は驚くこともなく落ち着いていつものように、お茶を入れるべく立ち上がったが。

「ありがとね。ムギちゃん」

「いいえ」

いつもの席（浩介と梓の机の横の部分）に腰掛けたさわ子は、紅茶を淹れた紬に労いの言葉をかけた。

「それで、朗報って?」

「あ、そうそう。さつきネットでこんな催しを見つけたのよ」

律の問いかけに思い出したのか、さわ子は得意げな表情で告げるとどこからともなく一枚の紙を取り出した。

それはサイトの内容をそのまま印刷したものであった。

「えつと……『NEW STARS PROJECT』?」

「これって、一体……」

そこに記されていた名称に首をかしげる唯たちに、さわ子はにやりと笑みを浮かべた。

「腕はいいけど、デビューの場がない。ライブをする場所や機会もな

いという人たちに光を当てるための企画らしいわよ。有名バンドとの合同ライブという形にはなるけど所定の時間は参加希望バンドだけで、ライブができるのよ」

「へえ……」

興奮を持った律は、印刷された用紙に目を通し始めた。

「これまでは15分という短い時間だったけれど、今回はそれが4倍の1時間まで拡張された」

「おおー、それはすごいぞすなー」

4倍という数字に、唯が感嘆の声を上げる。

「1時間の使い方や曲の構成は自由。しかも、なんと！ オリジナルの楽曲を相手のバンドの人に売ることでもできるという特典付きっ!!」

「誰？」

興奮のあまりに、席を立ちあがって力説するさわ子に律が目を瞬かせながらツツコんだ。

「あ、書いてある。曲の演奏契約を結ぶことによって、契約バンドへ演奏することによって演奏料を支払うんだって」

「参加方法は？」

紙に目を通していた藩に、紬が疑問を投げかけた。

「えっと、演奏した楽曲を下記住所に送付するだけだって。あとは選考があつて、採用なら連絡が行くらしい」

「選考ってあるんだね」

「それはもちろんよ。新人バンドにとってみれば、一躍有名になれるチャンスだからね。応募者が増えるのは当然。倍率はかなり高いわよ。それに、有名なバンドも自分たちの看板を汚さないようにある程度のレベルは求めるだろうし」

唯の言葉に、再びさわ子が説明を始めた。

「どうする？…これに出てみるか？」

「私は賛成」

「私もです」

「一応、応募するくらいなら」

「賛成」

律の問いかけに、全員が賛成票を入れた。

「それじゃ、応募ということ。あ、どうせだから浩介には内緒にしておこうぜ」

「そうだね！ 浩君をびつくりさせてみたいもんね！」

そんな律の提案に、唯が真つ先に食いついた。

「……全く」

そんな二人にため息をつく滯だったが、すぐに紙の方に視線を落とす。

「えっと、応募資格で下記事項にあてはまる方は応募できないって」

「どんなどんな？」

滯の言葉に、唯たちは滯が見えるようにおいた紙の方に集まる。

—— 応募資格 ——

- ・ 以前に当企画に参加したことがある者（選考落ちを除く）
- ・ 当企画の参加権を応募者の落ち度で剥奪された場合
- ・ 応募者の中に一名でも18歳に満たない者がいる場合（ただし部活動などの正規活動であり、なおかつ学校名や部活動名を明記し、監修者である顧問の承認を証明する書類が添付されている場合は可とする）

・ 当企画に応募する以前にライブを開いた場合、または応募から企画出場までの間に開く場合（部活動や合同ライブなどは除く）

・ コピーバンドの場合（1曲でもオリジナル楽曲がある場合は除く）

—— 以上 ——

「うへえ、厳しいなあ〜」

「それだけしつかりとしてるってことだな」

応募資格の一覧を読み終えた律のため息にも似た言葉に、滯が相槌を打つ。

「でも、応募ってどうやってするんでしょう？」

「そう思って、書類を作っておいたわ！」

梓の疑問を予想していたのか、にやりとほくそ笑むと再びどこから

か一枚の紙を取り出した。

そこには「応募用紙」と書かれていた。

「それじゃ、梓書記な」

「別にいいですけど」

まるで流れ作業のように梓にゆだねた部長の律に、梓は複雑そうな表情を浮かべるものの、鞆から筆記用具を取り出した。

「えっと、バンド名は放課後ティータイム……この責任者住所ってどうするんですか？」

「バンドの責任者って、順当に考えると部長のはずだから律の住所でいいと思う。住所の方は私が書くから、貸してもらってもいいかな？」

「あ、はい。どうぞ」

住所を書く項目で手が止まった梓に、漣はそう口にするると梓からボールペンを受け取り、律の家の住所や連絡先を記載していく。

「バンドメンバーの氏名住所を書かないといけないみたいだから、みんなも書いて」

先に書いたのか、漣はそういいながら隣に座っていたムギに応募用紙を渡した。

「それじゃ……」

ムギはボールペンを受け取るとさらさらと必要事項を明記していく。

「はい、梓ちゃん」

「あ、ありがとうございます」

ムギから応募用紙とペンを受け取った梓は、お礼を言うと再び必要事項に記載していく。

「最後は唯先輩ですね」

「ありがとう」

最後の唯も必要事項に記入を済ませた。

「えっと、最後は楽曲情報ですね……えっと、これ全曲書いていくんですよね？」

「そうみたい」

応募の仕方の紙に目を通していた滞が頷いた。

「演奏する曲目が決まっていればその曲を。そうじゃない場合は自分の持ち曲を全部書き出すんだって。その際に作詞作曲者も記載すること」

「えっと、それじゃ、まずはふわふわ時間タイムですね」

こうして、梓たちは自分の持ち曲を書いていく。

「ふう。やっと終わった〜」

「こうしてみると、少ないですよね」

「確かに」

梓のつぶやきに、律が頷く。

書き上げられたのはわずか6曲分だった。

「あ、でも参加者には一〜五曲の楽曲の演奏課題が与えられるそうですから、大丈夫だと思います」

「後はMCとかで時間が削れるだろうし」

応募用紙に記載されていた内容を、梓が告げたことで、問題はとりあえず解決となった。

「後は、承認を証明する用紙を——」それならあるわ!——ほ、本当に手際がいいな」

律の言葉を遮って書類を取り出すさわ子に、律は目を瞬かせながら口を開いた。

そんなこんなで、応募用の書類が出来上がり、これまたさわ子が事前に用意していた茶封筒に応募用の書類一式を入れて封をした。

「よっしゃ、帰る時にポストに投函しようぜ!」

「あ、投函するのは私がやってもいい? 昔から郵便物を投函するのが夢だったの!」

「うん、いいよー」

律の言葉に、手を上げて懇願する紬に、満面の笑みを浮かべながら唯が答えた。

「選ばれるといいね」

「そうだな」

そんな希望に胸を躍らせるようにして、彼女たちはお茶に口をつけ

るのであった。

★★★★★

「おはようございます」

「おう、今日はオフモードか」

事務所に入ると、僕の姿を見たYJがつぶやいた。

オフモードというのは変装などを一切していない状態のことを指す。

「オンにした方がいいならするけど?」

「いや、そのままでもいい。今日は最終選考だからな」

YJの返事を聞いて、僕はソファアに腰掛けた。

テーブルの上には最終選考にまで上り詰めた5組のバンドがピツクアップされていた。

「それじゃ、それぞれの組の提出した音源を聞いた結果、どこが相応しいか。一人ずつ言っていこうか。まずはMR」

「この中にはないね。どれも曲はいいが、パンチに欠ける」

YJに促される形でMRは首を横に振りながら答えた。

「僕も、ちよつと」これだつ」というものは「

私ものです」

「俺もだ。浩介はどうだ?」

ROやRKに続いてYJが答えると、こちらの方に振ってきた。

「僕も同意見。よさそうではあるが、いささかパンチに掛ける。盛り上がらなければ、それは失敗だ」

満場一致で不合格という結果になった。

「しかし、どうするんだ? このままだとプロジェクトの参加団体がいなくなるけど」

「それは心配には及ばない。俺たちの方で極上のバンドを見つけておいた。浩介以外の全員がそいつを合格にしている」

僕の疑問に返ってきたのは、意外なものだった。

「そうだったのか。僕は何も知らないが?」

「ちよつと事情があつてな、俺達だけで選考を進めてたんだ。浩介がどうしても嫌だと言うならそこも落とすが、どうする？」

真剣な面持ちで投げかけられたYJの問いかけに、僕は頭の中で考えをめぐらせる。

(プロジェクトがご破算になるくらいなら、乗ってみてもいいか)

それに、僕以外の皆が満場一致で合格にしているのだから、間違いはないだろう。

「僕の答えは決まっている。みんなの耳を信じるよ」

「よし。それじゃ、そのバンドへの通知はこっちの方でするから、不合格通知の方を浩介の方でやってもらつていいか？」

「分かった」

YJの指示に頷いた僕は、さつそく落選した5組のバンドに不合格通知を作成して発送手続きに入るのであった。

だが、この時気付くべきだった。

皆が企んでいることを。

「浩介、今日も……またですか」

「そう言うこと。まあ、今日は家の掃除だから。例の関係で散らかってるから片づけようと思って」

翌日の放課後、ジト目で話しかけてくる慶介に、僕は苦笑しながら答えた。

本当は先日ですべてが終わっているはずなのだが、1次と2次選考の時の参考資料がまだ散らばっている状態なので、今日はそれを片づけようと思っていたのだ。

(後、壊れかけた棚の修理も)

いい加減、歩いただけで崩壊する食器棚を何とかしたかったため、僕はついでにということでも食器棚の修理を一緒にすることにしてい

たのだ。

「本当、大変だよな浩介」

「全くだよ。おかげでここ最近唯とも話せてないし」
話せるのは昼休みのほんの数十分だけ。

そう言う意味では唯には非常に申し訳ないことをしているような気がするが、これも今日までの辛抱。

明日からはたつぷりと唯と話をすることにしよう。

「くそお。こうなったらアタックをかける！」

僕の言葉を聞いた慶介は悔しげに声をあげると、なぜかそんなことを言い出した。

「浩介、見ててくれ！ この俺が成功する姿を！」

「はいはい」

拳を握りしめ、宣言する慶介に適当に返事をする僕のことを気にした様子もなく慶介はたまたま近くを歩いていた佐伯さんの方に声を掛けた。

「佐伯さんっ！」

「な、なに!?!」

大声で叫んだため、飛び上がるほど驚いた様子で慶介の方に振り向いた。

「この俺と忘れられない素敵な一夜を共にしないか？」

「お断りします」

ダンディな声色で誘った慶介に、佐伯さんは清々しいほどきっぱりと断りを入れた。

「……………っ!?!」

「じゃあね」

一瞬で石と化した慶介に、佐伯さんはそれだけ告げると教室を去っていった。

「慶介。大丈夫だ。お前にも春は来るさ」

慶介の肩に手を置いて、僕は思いつく限りの励ましの言葉を贈る。

「ぢぐじょう。それが一番頭にくるっ！」

「……………じゃあ、勝手に固まってるよ」

じたばたじたばた暴れる慶介に、僕は冷たい視線を送りながら突き放すと立ち去ろうとした。

「のわっ!?!」

「行かないでくれ! 無視しないでくれ!!」

いきなり足にしがみついた慶介によって、僕は勢い良く地面に倒れた。

「……………ふんっ!」

「ぎゃーっ!?!」

僕はそんな慶介に向けて捕まれている足で勢いよく蹴り飛ばした。

「何しやがるッ! 一生そこで眠ってる! このタコ野郎!!」

慶介に罵声を浴びせた僕は、そのまま教室を後にするのであった

「クク……………浩介のキック……………いつもより、強い——ガク」

教室ではそんなことを呟いて沈む慶介の姿があったとか。

第100話 訪問!

あれから数週間の時が過ぎて、ライブまで残り2週間となったある日のことだった。

「平沢さんたちがおかしい?」

昼休み、僕の切り出した相談事に、慶介は昼食(この日はお弁当)を口にしながら首をかしげた。

「ああ。最近妙にそわそわしたり内緒話をしたりしてて、あれは絶対に何かを隠しているような気がするんだ」

この間は僕の姿を見ただけで、まるで幽霊を見たかのように驚いて飛び跳ねていたし。

「ムムム………はっ。まさか、浩介の誕生日が近いとか?!」

「残念ながら違います。というか僕の誕生日先月だし」

「それは残念だ」

慶介の名推理(?)は見事に外れた。

「ちなみに、いつだ?」

「1月1日」

父さんが言うにはあと少し早ければ12月31日だったのだとか。

まあ、僕的にはどうでもいいが。

「す、すげえじゃないか!」

「……何が?」

なぜか興奮した様子の慶介に、僕は首をかしげながら尋ねた。

「だって、ほんの一週間でケーキをまた食べることができるとだぞ!プレゼントだってもらえるんだぞ!」

「ところがどっこい。正月にケーキを食べるような家はどこにもないし、プレゼントももらえない。学校だって休みだから明けおめでとうメールはもらえても、誕生日のお祝いのメールはもらえない。どこもいいところなんてないさ」

ちなみに、故郷にはちゃんとお正月という風習があるし、クリスマスという概念もある。

これまで、そう言ったお祝い事をされた覚えは一度もなかった。

「だったら、全世界の人が浩介をお祝いしているって思えばいいじゃないか。それに、来年は俺もお祝いのメールを送ってやるから」
「唯だけでいいからいらない」

「くっ！　これが持つ者の余裕かっ！」

意味の分からないことを叫ぶ慶介に、僕は心の中でため息をついた。

「それじゃ、浩介がセクハラまがいのことを——「ほら吹くのも大概にしろよ？」——はい、すみませんでした」

慶介の全く違う答えに、どすを聞かせて止めた。

「もういい。時間が解決するだろうから。放っておく」

「なんとという単純明快な解決法」

本来であれば心を読めばいいだけの話だが、あれはあまり使いたくはない。

むやみに使うのはこれまでの関係を壊すことにもなりかねないからだ。

「でも、もしかしたら平沢さんは浮気をしてるのかもしれないぜ？」

「……………ん？」

慶介の言葉に、僕の手が止まった。

「ほら、平沢さんってとつてもかわいいからさ。言い寄られて……………的なことだったらどうす——」

「その時は、そいつとお話をして決める」

言葉は普通だったが、心の中は尋常ではないほど怒り狂っていた。

「強引に彼女と付き合っていた時は…………」

「時は？」

「潰す」

慶介に促される形で、僕はそれだけを告げた。

（まあ、唯にそんな気配は微塵も感じないんだけど）

隠れてやっていたとしても、僕ならばすぐに気づける自信があった。

それを感じないということは、慶介の言ったことはありえないということになる。

(とはいえ、唯のことでここまでむきになるなんて)

平静を保てなくなるといのは、もしかしてやきもちだろうか？

とはいえ、あまり強くすると引かれるので、自重した方がよさそう
だ。

「そ、それで、今日は部活じゃないんだ？」

「ああ。ちよつと向こうの方でね」

話題を変えるように口にした慶介の問いかけに、頷きながらおかず
である唐揚げを頬張る。

今日、次のライブでの“NEW STARS PROJECT”の
選考で選ばれたバンドが説明を聞くために来るのだ。

中山さんたちの話では、5人の女性と1人の男性で形成されたガー
ルズバンドのようなものらしい。

一体どんな人物でバンドなのかを考えると、楽しくて仕方がない。

「大変だよな、浩介も」

「まあね。ライブが終わったら埋め合わせをするつもりだから」

唯とのデートプランもしっかりと練っている。

本人が喜んでくれれば成功と言ってもいいだろう。

「まあ、頑張れよ。絶対に行くから」

「どうも」

慶介のメールに、僕はそう答えるのであった。

★★★★★

少しだけ時間をさかのぼること数日前のお昼時の、軽音部部室。

「それじゃ、開くぞ」

「う、うん」

「な、なんだか緊張しますね」

浩介を抜いた部員全員が、律の集合の一声で部室に集まっていた。

彼女たちの視線の先……テーブルの上に置かれているのは封が開
けられていない『チェリーレーベルプロダクション』という会社名が
記された水色の封筒だった。

封筒には『通知書在中』と明記されていたため、中身が何なのかは容易に想像ができた。

ちなみに、この封筒は律の自宅に届いていたが、全員の前で開封すると決めていた律によって開封されなかったのだ。

尤も、一人で見るのが怖いという理由も無きにしも非ずではあるが。

部長であるため、封筒の封を開けた律は、緊張の面持ちで中に入っていたものを取り出した。

中身は三つ折りにされた、一枚の白地の用紙だけだった。律は震える手で、紙を開いていく。

「ツ!!?!」

そして中身に目を通した律は、突然声にならない悲鳴を上げた。

「どうしたんですか!?!」

「も、もしかして、落選!?!」

その様子を見ていた梓達が、慌てて律に声を掛ける。

「と……………」

「豆腐?」

「当選したぞっ!!」

震える声から一転、喜びにみちた声を上げた。

「う、うそ!?!」

「私も見る!」

「私も」

次々と結果の書かれた紙に目を通す唯たちは、そこに記された“当選”の二文字を目の当たりにした。

「し、信じられないです」

「私も、まさか本当に選考に通ったなんて」

驚いた様子の梓の言葉に賛同するように頷きながら滯が続いた。

「でも、これでまたみんなと一緒に演奏ができるね」

「……………そうだな」

「えっと、今後のことについて書いてある」

満面の笑みを浮かべながら口を開いた紬に滯が頷き、律は採用通知

の方に目を通した。

「何々……『指定日時と時間帯に事務所に向かい、そこで詳細を確認してください』だって」

「それじゃ、浩介には事務所に行く時にこのことを教えるとするか」
「賛成！」

律の案に、唯は素早く賛成の声を上げた。

「それと、昼休みに浩介抜きで練習して、驚かそうぜ」

「それいいね！ 高月君めつたなことでは驚かなさそうだから、楽しみかも♪」

「私は音合わせで浩介先輩が対応できなくなると思うんですけど」

圧倒的な賛成に梓は控えめに手をあげると、異論を唱えた。

「それに、あまり隠しておくって怪しまれるんじゃないか」

「そこは大丈夫。根拠はないけど、うまくいくって。だって、浩介だし」

「た、確かに……」

「そうだけど……」

律の反論に、漣たちの反対意見も弱くなる。

二人でさえ納得させられる何かを持っているのが浩介のすごいところでもあり怖いところでもあるのだが。

結局、この後二人は押し切られるような形で浩介に隠れての特訓が始まるのであった。

その反動によって、放課後の練習はほとんど0に近くなったが。

そして、唯たちは指定された日を迎える。

「浩介は？」

「今日是用があるから無理だって」

学校の校門前で携帯電話を片手に唯は首を横に振った。

「驚かせる相手がいないんじゃないじゃ意味がないじゃないか！」

「しようがないですよ、H&Pの活動なんですから」

「だから話しておけばよかったんだ」

律の不満に、梓はため息交じりに相槌を打ち、漣はジト目で隠し続けることを選んだ律を見ながら告げた。

「まあまあ。高月君は明日驚かせばいいんじゃないかな」

「それもそうだな」

紬の出した提案に、頷いた律は指定された場所である『チェリーレーベルプロダクション』へと向かうのであった。

「まるで都会みたいだね！」

「都会みたいと言うか、それだと、あそこが田舎町になるぞ」

目的の駅に到着して早々に唯が口にした言葉に、律がツツコミ口調で相槌を打った。

「ほら、バカやってないで早く行くぞ」

「はーい」

いつの間にか漣が引率する形で駅を後にしていた。

「唯先輩、もう少ししやきつとしてください」

「しやきつー」

項垂れるように歩く唯に注意をする梓は言葉と共に姿勢を戻す唯を見て何とも言えない表情を浮かべた。

「それにしても、浩介ってライブでも控えてるのか？」

「そうみたいだぞ。2月の中旬に大きなライブをやるらしいから」

律の疑問に漣は即答で答えた。

「どうして、漣ちゃんが浩君のスケジュールを知ってるの？」

「うえっ!？」

そんな漣に、唯は怒りに染まった目で漣をにらみつけながら問いた

「ゆ、唯先輩落ち着いてください。浩介先輩は自分のホームページを持っていてそこで活動について書いてあるんです」

「あ、本当だ」

そんな唯の様子に慌てながらも梓は唯にそのホームページが表示

された携帯画面を見せながら説明した。

それは、H & Pの活動予定や、出演情報などが記されたサイトであり、自己紹介はもちろん、Q & Aコーナーなどと充実したコンテンツになっている。

それを知った唯から、怒りの感情は消えいつもの雰囲気に戻っていた。

「ふう……」

「それにしても、浩介先輩に関することだとあそこまで豹変するんですね」

「浩介も似たようなもんだけどな」

緊張の糸が切れたのか、そっと息を吐き出す滯を見て梓は意外だとばかりにつぶやく言葉に相槌を打つようにつぶやかれた律の言葉はある意味的を得ていた。

そんなひと騒動がありつつも、唯たちはついに目的地である『チェリーレベルプロダクション』がある5階建てのビル前へと到着した。

「ここが、事務所」

「意外と大きくないね」

「……………それ、中で言ったらひどい目に合うから言わない方がいいぞ、唯」

事務所を前にした唯の怖いもの知らずの暴言に、律は冷や汗をかきながら注意した。

「とにかく、中に入りましょう」

そんな梓の言葉で、律たちはビルの階段を上っていく。

そして事務所のある3階にたどり着いた彼女たちの前に無機質なドアが立ちはだかる。

ドアの窓ガラスには『チェリーレベルプロダクション』という文字があり、間違っていないことを唯たちは知ることができた。

律は緊張の面持ちでドアをノックした。

「どうぞ」

「し、失礼しますー！」

中から帰ってきた男の声に、律は声を上ずらせながら応じるとドアを開けた。

「ようこそ、チェリーレベルプロダクションへ。『放課後ティータイム』の皆さんで相違はないかね？」

彼女たちを出迎えたのは茶色の背広を身に纏った、ちよび髭の生やした男性であった。

髪は短髪で、整った顔立ちのその姿から醸し出される雰囲気は、ダニディーとも言えなくない。

「は、はいー！」

「君たちのことは彼からよく聞いている。今バンドメンバーは外に出ているんだ。時期に戻ってくると思うから、奥のソファの方に腰掛けて待ってもらってもいいかな？」

男性は、人当たりのいい表情で唯たちに尋ねた。

「は、はい」

「それじゃ、案内しよう」

そう言つて、男性は奥の方へと唯たちを案内した。

「どうぞ」

「あ、すみません」

全員が腰かけたところで、男性は人数分のお茶を律たちの席の前に置いた。

「おっと、紹介が遅れたね。私は荻原おぎわら 昌宏まさひろ。ここの社長だ」

「あ、私は——」「君は田井中 律君だったね?」——え? は、はい。そうですけど」

律の自己紹介の言葉を遮るようにして、彼女の名前を呼ぶ昌宏に、律は戸惑いを隠せなかった。

「で、君が中野梓君で、その横が秋山澪君。そして琴吹紬君に平沢唯君だったね」

「あ、あの。私たちどこかでお会いしましたか?」

次々と名前を口にしていく昌宏に、梓は怪訝そうな表情を浮かべながら訪ねた。

「いいえ。ただ、貴女たちのことは『彼』から詳しく聞いていたから」

「彼？」

昌宏の口から出た“彼”という単語に、律は首をかしげながらつぶやく。

「ん？　もしかして、彼は君たちに話して——」「ただ今戻りました」
——つと、どうやら戻ってきたようだね」

昌宏の言葉を遮るようにして、ドアが開かれる音と共に聞こえた男の声に昌宏は話を中断させるとドア側から見える位置に移動した。

「なあ、今よく知った声が聞こえなかったか？」

「き、気のせいだよ。きつと」

先ほど聞こえた声に聴き覚えがあった律の問いかけに、濡は冷や汗を浮かべながら答えた。

だが、彼女たちは薄々気づきかけていた。

それを必死に追い出そうとしていたのだ。

その大部分は、信じたくないという理由がほとんどだったが。

「当選者はもう？」

「ええ。こちらに」

さらに聞こえた女性の声に答える昌宏。

「大変失礼した。ちよつとした用事………で」

「え？」

声の主が彼女たちに姿を現せたところで、固まった。

それは唯たちも同じようで、目を瞬かせていた。

「ど、どうして浩介（君）がここにいるの（んだ）!!？」

事務所内がちよつとした騒ぎに包まれるまで、それほど時間はかからなかった。

第101話 参加

あれからしばらくして、突然の事態に混乱していた僕たちは社長やMRたちの尽力のおかげで、ようやく落ち着きを取り戻すことができた。

混乱している最中に、何か変なことを口走っていないかどうかが気になったが、今はそのことはどうでもいいだろう。

「とりあえず、落ち着いたかな？」

「ええ。何とか」

「はい」

僕は申し訳なく思いながら、社長の問いかけに頷きながら答えた。

「それにしても、こ……DKって事務所に所属してたんだな」

「私も知りませんでした」

一瞬浩介と呼びそうになった滯と梓は、驚いた様子で感想を漏らす
が。

「オフィシャルサイトに書いてあるんだけど、『チェリーレーベルプロダクション所属』って」

「うっ!？」

ちなみに、このことはH&Pのオフィシャルサイトのメンバー紹介のページでしっかりと書いてあるので、知っていて当然だと思っていた。

だからこそ、唯たちの驚く姿を見た僕も驚いていたのだ。

「それで。僕は聞いてないぞ。彼女たちが次のライブの参加者だなんて」

「そりやそうだろ。言っていないからな」

僕の追及に、YJは悪びれるどころか堂々とした態度で答えた。

「それに、当選に賛成したのはDKですよ」

「卑怯じゃないか？ バンド名のことを伏せて決めるというのは」

RKが全くもって正しい言葉を投げかけてくるが、僕は追及の手を
緩めない。

何よりも問題なのは、バンド名を隠して採決を取ったことだ。

ある意味詐欺師並みのやり口だった。

……それに何の疑問も抱かずに引つかかる僕にも問題ありだけど。
「だが、DKはそれでも賛成した。今更取り消しだとか言わないよな？」

「……………」

MRの切り返しに、僕は何も言えなくなってしまった。
完全に僕の負けだった。

「はつきり言うと、今回のライブに参加するのは反対だ」
「なぜ!？」

僕の言葉に、律が答えを求めてくる。

「君たちはまだ僕たちのライブに出られるレベルに達していない。そんな状態でライブに出したら僕たちはいい笑いものだ」

いくら新生バンドとはいえ、観客たちにとっては「あのH&Pが選んだバンド」という認識なのだ。

下手な演奏をするようであれば双方にとって不名誉なこととなる。
それだけは何が何でも避けなければならなかった。

「そんな言い方はひどいです」

僕の答えた理由に、梓が非難の言葉をあげる。

「と、思ってたんだけど」

「え?」

だが、僕の言葉は終わっていない。

梓の言葉を受けて、僕は静かに言葉の続きを口にする。

「この間の大みそかライブを見てその考え方は変わった。だから、今の僕ならば皆がライブに参加することを心の底から賛成できる」

「……………」

「ありがとう、浩君!」

やわらかい笑みを浮かべながら告げた僕の言葉に、唯は嬉しそうな表情でお礼を言ってきた。

「ただし、このライブは5人だけで演奏しなければいけない。そのことを承諾すること。これが僕の出す参加の条件」

「どういふこと?」

僕の言わんとすることが伝わらなかったのか、ムギは首をかしげながら詳しく聞いてきた。

「僕は放課後ティータイムのメンバーでもあり、H&Pのメンバーでもある。でも、僕はDKとしてステージに立っているから、放課後ティータイムの一員で演奏をすることは無理なんだ」

「ということは、浩介先輩抜きで……」

僕の話を理解した梓はポツリと言葉を漏らした。

「遠慮はしないでいい。僕は納得済みだし、それに例え一緒に演奏ができずとも僕は放課後ティータイムの一員であることは変わらない」

「……………」

それは僕の本音だった。

少しの間、みんなは口を閉ざしていたが、

「それじゃあ……」

「参加するぞー!」

口を開いた梓に続いて律が声を上げた。

『おー!』

(ここ、事務所なんだけど)

心の中でツツコみながら、視線を社長たちの方に向ける。

社長や他の皆も苦笑しながら肩を竦めていた。

「それじゃ、具体的な話に入ろうか」

頃合いを見計らって、僕は唯たちに声を掛けた。

「まずは最終確認だけど、演奏予定楽曲は、選考時に送ってきたリスト以外にある?」

「ないぞ」

僕の問いかけに律が答えた。

それを聞いた僕は、次の質問を投げかけることにした。

「このリスト内に、他人が作曲し尚且つその人から演奏の許可をもらっていない曲はある? ちなみに、ふわふわとかは作曲者はムギという扱いで、僕は作曲家じゃないから」

「だったら、無いかな」

濡の返答を聞いた僕はさらに続ける。

とはいえ、ほとんど問題はないのは知っているのだがこれも形式的な質問だ。

「ライブに出る際に、名前は本名で大丈夫か？ 希望すれば偽名でも可能だけど」

「はいはい！ それじゃあずにゃんはあずにゃんで、漣ちゃんは漣ちゃん、ムギちゃんはムギちゃん、それから——」

「分かったから、唯はちよつと黙っててね」

僕の疑問に右手を挙げて偽名の案を口にする唯の肩に手を置いて律は頷きながら止めた。

（あれも天然が故か？ 狙っているとしたか思えないレベルなんだけど）

あれが偽名ならば、僕はDKから浩君に改名している。

「本名でいいから。偽名だと収集つかなさそうだし」

「ええ。偽名良いじゃん。かつこよさそうで」

「それじゃ、本名での参加で……後はこのプロジェクトの概要を説明するでしょうか」

唯の言葉を切り捨てるように、僕は話を進めた。

「この企画は後半の1時間という時間を使う企画。あらかじめ登録してくれた曲を演奏するというシンプルなもの。コンテストでもないから、心置きなく演奏をしてもいいし、MCや構成もすべて自由に決められる」

「おお。太っ腹どすなー」

僕の話聞いた唯が、お茶を飲みながら和んだ口調で相槌を打った。

「この企画では、お互いの演奏曲のトレード……つまり、放課後ティータイムの曲と僕たちが演奏する曲を交換して演奏することが恒例となっているんだ」

「……………」

僕の説明に、目を瞬かせるだけの律の反応に、僕は理解していないことを把握した。

「例をあげると、僕たちが『ふわふわ時間^{タイム}』を演奏したら、唯たちは『L

eave me alone』を演奏するという感じだ」

「な、なるへそ」

「分かりやすく例を取り上げたところで、ようやく律は納得したようだった。」

「僕達の方はこの『ふでペン〜ボールペン〜』を演奏しようと思うんだけど、そっちはどう?」

「私は別にそれで構わないけど………」

「私も」

「私もです」

律の視線に促されるように唯たちも賛同していく。

「そして、僕たちがそっちに演奏してもらいたい曲は、これ」

そう言つて、僕は予め用意しておいたCDを律たちの前に置いた。

「えつと……『Colors』?」

CDのラベルに書いてある曲名を、怪訝そうな表情で読み上げた。

「僕たちが作曲したわけじゃないけれど、クールな感じでかつこいい曲調が特徴の曲だよ」

「何だか難しい曲のような気がするんですけど」

僕の説明で感じ取ったのか、梓の言葉は実を的を得ていた。

この曲は音の上下が激しい曲だ。

全体的にも難しい曲だが、それは『Happy!? Sorry!!』でも同じこと。

しかもこの曲も演奏予定の曲目に書き添えられている。

ならば、僕の選曲した『Colors』も十分演奏することは可能だろう。

「確かに、少しばかりレベルは高いだろうね。でも、この曲を見事に演奏できればみんなのレベルは一段階上がることを意味している。早い話がやつてみると言うことだ」

何事も挑戦あるのみ。

やる前から諦めていればそれは成長の停止にもあたると僕は思っている。

まあ、失敗してしまうとダメージが大きくなるのが欠点だが。

「これは、僕からの『放課後ティータイム』に対する挑戦状だ。受け取ってもらえるか？」

「やろう！」

僕の言葉に、声を上げたのは唯だった。

「大丈夫だよ。だって、大みそかのときだってちゃんとできたんだもん！ きつとうまくいくよ！」

「唯……そうだな。大みそかの時も無理だと思っていたのができたんだもんな」

唯の言葉に、律は目をいったん閉じるとその眼を開いた。

そこには不安の色は全く感じられなかった。

「浩介の挑戦状……」

『受け取らせていただきます！』

先ほどまで腰かけていたソファから立ち上がった律たちは、力強い目で僕にそう言葉を返した。

「そうか。この曲の演出はこっちで指定するから、そっちは僕たちが演奏する『ふわふわ時間^{タイム}』の演出を考えておいて」

「分かりました」

僕の申し出に、相槌を打ったのは梓だった。

「それと、ライブまでの1週間。僕は軽音部での部活を休む」

「え？」

「少し言葉が足りなかったかな。正確にはライブまでは僕は演奏をしないという意味だ」

僕の言葉に驚きと悲しげな表情を浮かべる唯たちの様子に、僕は慌てて補足説明をする。

「なんだ。そう言うことか」

「でも、どうして高月君は演奏をしないの？」

全員が納得する中、疑問を投げかけてきたのは、これまで静かに話の流れを見守って来ていたムギだった。

「……今回のライブは、僕抜きでの演奏が必要になる。それなのに僕が入って練習するというのは、意味がない。だからだ」

「浩君？」

「なんでもない。アドバイスぐらいはするし、ちゃんと部室にはいくけど練習には加わらない。僕抜きでちゃんと練習をすること」

一瞬の表情の変化に、唯は不思議そうに首をかしげて声を上げたが、僕は首を横に振ると再度律たちに説明をした。

「二週間後、会場には17時入り。出番は19時から。楽屋には会場の様子の中継するテレビがあるから、それでライブの模様を見るのもいいし、練習をするのもいい。それは唯たちの自由」

そして僕は当日についての説明に話を移した。

「ねえねえ、お菓子とか持って行ってもいいの？」

「別に制限はしないけど、お手洗いには行けなくなることを考えるように」

バンドメンバーで一番のネックはお手洗いだ。

途中に挟まれる休憩は、文字通りの休憩とお手洗いに行くという意味もある。

演奏中にお手洗いに行くというのは演奏家としては腕前以前の話題だ。

なので、僕たちの場合は開幕2時間前から水分以外は摂取しないようにしている。

ちなみに、大みそかライブの時、僕は紅茶は飲んだがお菓子は一切口にしていない。

「何事も常識の範囲内で」

「はーい。うーん、それじゃケーキと……うんめえ棒を」

全く分かっていない唯に、僕はため息を漏らすことしかできなかつた。

「ふう……」

自宅に戻った僕は、静かに息を吐き出した。

別に疲れているからではない。
体調も万全だ。

ただ、それ以上に精神的な疲れが多かった。

『……………今回のライブは、僕抜きでの演奏が必要になる。それなのに僕が入って練習するというのは、意味がない。だからだ』

あの時、ムギの問いかけに答えた僕の言葉。

それは、僕の本心の理由だった。

あの言葉に僕は嘘偽りはないと断言してもいい。

だが、それだけが理由なのかと言われれば、それは嘘になる。
演奏に加わらないのは少なからずもう一つ別の理由もある。

「どうしたものか」

僕の視線の先にはテーブルの上に置かれた一通のエアメールがあった。

宛名はローマ字表記で僕の名前が書かれている。

封はすでに切っており、中身は確認済みだ。

別にエアメールが嫌なわけではない。

問題はその中身だった。

「どっちにしろ、ちゃんと話さないかね」

もう僕の中で答えは出ていた。

だが、それを唯たちに話す勇気がなかった。

話してしまえば、唯を悲しませる結果になるのは目に見えているからだ。

何かきつかけでもあれば、あるいは…………

「まったく、僕の優柔不断なところは未だに治らず、か」

まあ、異性と付き合ったことがないのだから当然かもしれないが、ここまで来るともはや清々しく思えてしまう。

「近いうちに話さない」と

タイムリミットはあと半年。

それ以降は送り主にも迷惑をかける事態になりかねない。

それに何よりも

「今は一週間後のライブのことに集中しよう」

目先に控えたライブに向けて頑張る皆に水を差すようなまねはしたくなかった。

それがいいわけであることも重々承知している。

だが、放課後ティータイムの一員として、唯の恋人として僕はどうしてもこの時期に言うことはできなかった。

「でも、このままではいけないよね」

いずれそう言うことを話さなければいけない状態になる。

いつまでも放置しておくわけにはいかなかった。

「とにかく、今日から一週間は気合を入れよう！」

僕は自分にまとわりついてくる問題をいったん置いておくことにした。

ライブまで残り一週間。

どのようなライブになるのか。

それを楽しみにしながら、僕は眠りにつくのであった。

第102話 別れ

あれから早いもので一週間が経った。

唯たちはあれから毎日練習に練習を重ねていた。

僕は宣言通りに、練習には加わらず所々でアドバイスをするにとどまっていた。

そのかいてもあって、何とか観客に聞かせられるにたるレベルにまで到達することができた。

後は唯たちが本番でその演奏をするだけだ。

「いよいよ今日だな」

「ああ」

放課後、荷物をまとめている僕のところに慶介がやってきた。

「全力で頑張れよ。俺も応援しに行くから」

「当たり前だ。僕はいつだって全力だ。慶介が来ようが来まいがそれは変わらない」

いつだって僕は自分の持てる力全てを発揮し続けていた。

これからもそれは変わることはないだろう。

「そうだったな。それは失礼した」

頭に手を置きながら謝ってくる慶介に、僕は机の上に置いた鞆を手にしながら立ち上がった。

「それじゃ、俺は先に行くな」

「はいはい。勝手にどうぞ」

投げやりに慶介を送り出すと、慶介はそのまま教室の外の方に向かっていった。

慶介と僕の行き先は全く同じだ。

だが、行き方が違うので、ここでお別れなのだ。

「さて。僕も行きますか」

時刻は15時30分。

会場は電車で小一時間、車で4、50分あれば十分に到着する場所に存在する。

会場に到着するのは17時までなので、十分に余裕がある。

とはいえ、前半は僕たちが演奏をするので早めに行っておくことに越したことはない。

ちなみに、唯たちは電車で僕の場合は早めに到着する必要があるの
で、中山さんの車で向かうことになっている。

何だか贅沢をしているような気分だけど、こればかりは仕方がない。

僕も足早に教室を後にした。

向かうのは、僕の家だ。

本当は校門前に来ようかと言っていたのだが、それだといろいろ目立ちすぎるため無理を言ってお家の前での待ち合わせにもらったのだ。

自宅前には一台の灰色のセダンが止まっていた。

車のことは詳しくないので、それ以上は分からないけれど、それが中山さんの車だった。

僕は急いで運転席の方に駆け寄った。

「すみません、遅れました」

「いいっていいって。十分に間に合うから」

謝る僕に、中山さんは軽快に笑いながら相槌を打った。

「さあ、早く乗って」

「はい」

中山さんに促されるまま、僕は後部座席に乗り込むと少しして車はゆっくりと動き出した。

会場に向かっている間、僕は手早くDKの衣装に着替えていく。

まあ、サングラスをつけて黒のマントに身を包むという感じだけで、黒いスーツに関しては無効の楽屋の更衣スペースで着替えるつもりだ。

「田中さんたちは？」

「彼なら、いつものように車でほかのメンバーを乗つけて向かっているはずだ。こっちよりも早く着くみたいだから」

「そうですか」

他のメンバーの状態を聞いた僕に答える中山さんの言葉で、再び車

内を沈黙が包み込む。

「彼女たちはどう？」

「良い状態ですよ。あとは、観客の前でいつものように演奏ができれば十分にうまくいくでしょう」

中山さんの問いかけに、僕はありのまま伝えた。

「そうかい……それは寂しくなるな」

「……ええ」

中山さんの言わんとすることは、なんとなくわかった。

唯たち、放課後ティータイムは今、新たなステップを踏み出そうとしている。

これまではアマチュアに足を掛けただけの集まりだったが、今度はプロに足を掛けたアマチュアという扱いになる。

それは、H & Pとの関係が終わるときでもあった。

「でもまあ、その時はDKがびしっと言わないとな」

「ええ。分かっています。しっかりというつもりです」

それは一種の決意だった。

(本当に、すごいところまで上り詰めたよ。皆は)

僕は心の中で、唯たちに称賛の言葉を贈る。

そして、僕たちは会場へと向かっていくのであった。

「さて、それじゃ行くか」

「ああ」

開演時間である18時3分前となり、僕たちは楽屋を後にする。

皆は言葉にはいい表せない緊張感に包まれていた。

それもそのはずだ。

今回の企画の参加者は、これまでの参加者とは比べ物にはならないほどのレベルなのだから。

「私たちは私たちの演奏をするまでだ。相手が誰であろうと、それは変わらない」

「……そうだな。DKの言うとおりだ。おめえらも気合を入れろ！」
僕の言葉に、YJは頷くと他の皆に喝を入れた。

「さあ行こう。私たちを待つてくれる観客たちのところに」

『おう！』

手を差し出しながら呼びかけると、みんなはそれに応じて僕の手の上に全員が手を置いた。

これで覚悟は十分だ。

後は、いつものように演奏をするだけ。

舞台袖に到着すると、観客たちのエールが聞こえた。

これもまたいつものこと。

そして、ゆっくりと照明が落とされた。

それに反応して観客たちが、待つていましたと言わんばかりの大きな歓声が響き渡る。

そして僕たちは、ステージへと出るのであった。

★★★★★

H & Pによるライブが始まって、50分が経過した。

唯たちがいる楽屋内に置かれた液晶モニターに映し出されているライブの様子の映像に、唯たちは釘付けになっていた。

「すごい……」

「はい……」

それぞれの表情に浮かぶのは、目の前で演奏をするDK達に対する驚きだった。

「すごいのは分かってましたけど、実際に見てみると本当にすごいです」

ファンであるはずの梓や澪の表情も強張っていた。

「こうして見てみると、難しいよな」

律のその眩きに、反応する者はいなかった。

改めて彼女たちはH&Pの実力を知ったのだ。

「大丈夫だよ」

そんな中、明るい声が彼女たちに掛けられた。

「唯？」

「大丈夫だよ。私たちにもできるよ。絶対に」

それは聞く人によれば喧嘩を売るような言葉。

宣戦布告とも取れる物だった。

だが、唯の言葉は梓達の強張った表情を崩すには十分だった。

「そうだよな。私たちも負けてないもん」

「お、あの濡が宣戦布告をするとは、あたしや悲しいですわい」

「一体誰なんだよ。それ」

律の言葉にツツコみを入れ、それは周囲に笑いをわき起こさせた。

「あ、はい」

そんな時、楽屋のドアがノックされたので、律が声を掛けるとゆっ

くりとドアが開いた。

「現在、休憩時間に入りました。10分後から出番ですので、ステージ

に向かってください」

「分かりました」

スタッフである女性の言葉に、律が返事をする和一礼してドアを閉

めた。

ステージへの行き方は会場を訪れた際に、スタッフの人から案内さ

れている。

極度の方向音痴でもない限り、迷うことはない道順だ。

「それじゃ、頑張ろう！」

『おー！』

律の声掛けに全員が応える。

そして、彼女たちは楽屋を後にするのであった。

休憩時間が終わり、会場の照明が再び落とされた。

それは後半の部の始まりを意味していた。

白いスポットライトに照らされたのは、DKとMRの二人だった。

二人はそれぞれステージの端側に立っていた。

「ええ、今回は私たちのライブを見に来ていただき本当にありがとうございます
ございます。まずは、私の方から一言を——」

「DKは相変わらず堅苦しいなく。皆さん、気を付けてくださいね。
DKの一言は本当に長いですから」

DKの言葉を遮るように肩を竦めながら、観客の方に呼びかけるM
RにDKは不満そうな表情を浮かべる。

「長くはない。ほんの30分だけだ」

「世間では、それを“長い”と言うんだぞ?」

MRのツツコミに、会場内から笑い声が漏れる。

「……………さてー! ここからは違うバンドの演奏を聴いていただくこう」

そのツツコミにDKは間を開けて話題をそらせた。

「そのバンド名は?」

「バンド名は『放課後ティータイム』だっ」

「何だか優雅に紅茶をたしなむ光景が浮かぶね」

バンド名を聞いたMRが感想を漏らした。

「確かに。このバンドはガールズバンド。個性豊かなバンドメンバー
達が織りなす演奏に注目だ!」

「まずは恒例の課題曲から。DK、課題曲は?」

バンドの紹介を終えたところで、MRが演奏曲目の話に移した。

「今回の課題曲は『Colors』。静かだが、それでいて力強い曲調、
そして歌声が求められる楽曲となる」

「まさしく、実力を知るのにふさわしい楽曲だね。さあ、それじゃ皆さ
ん一緒に」

MRの言葉から少しだけ間が空いて、

「せーの」

『ミュージック、スタート!』

会場中に、音楽の始まりを告げる声が響き渡った。

それと同時に、スポットライトが消え再び会場内は暗闇に包まれた。

そして会場内に響いたのはキーボードの音色。

それと同時に暗闇の中、ステージの薄紫色の照明が絨を照らす。

続いて、ギターの音色が産声を上げ梓と唯を照らした。

そして最後にドラムとベースの音が響き渡り、照明はメンバーを照らし出す。

そして1番に突入する。

ドラムとキーボードベースの音色に滲の歌声が合わさる。

所々で、律たちがコーラスを入れていく。

そしてギターの音も加わったところで、照明はメンバーのみではなくステージ全体を照らした。

それぞれが、楽器を譜面通りに弾いていき順調に2番へと入っていった。

すると、観客たちは掛け声を入れ始めた。

それは、彼女たちの演奏が素晴らしいものであるということを示している物であった。

2番のサビが終わり、間奏に入る。

ここからギターの速弾きソロが始まる。

最初は唯だ。

左手をせわしなく動かし弦を抑えていく。

そしてキリのいいところで梓がそれを引き継ぐ。

ムスタング特有の音色が、会場内を包み込む。

そして最後は体をしならせることでサビへと入っていった。

サビが終わり、最後の箇所となる。

それは最初の前奏と同じだったが、ギターの音色を強く出した物となる。

そして最後は全員がびったり音を合わせて、曲を終わらせた。

そのすぐ後に、観客側から歓声が湧き上がった。

「中々に素晴らしい演奏でした」

「それじゃ、メンバー紹介。行ってみようか！」

ステージのそこから出てきたDKたちによって、彼女たちは自己紹介を始める。

「リードギターとボーカルの平沢 唯です」

「リズムギターの中野 梓です」

「ベ、ベースとサブボーカルの秋山 澪です」

「キーボードの琴吹 紬です」

「ドラムでバンドリーダーの田井中 律です」

(ものすごく緊張してるな。ありや)

それぞれの自己紹介を聞いていたDKは心の中で苦笑しながらつぶやいた。

「それじゃ、ここは彼女たちにお任せして。私たちは向こうの方にすっこんでいきましょうか？ MR」

「了解」

僕の呼びかけに応じたMRは観客に手を振りながら、舞台袖に向かっていく。

それについて僕もMRと同じ方向に歩く。

「頑張って」

マイクには拾われないように、小さな声で応援の声を掛けた。

それは、DKにとっては一種のけじめだったのかもしれない。

「それじゃ、次の曲。ふわふわ時間!!」

それを受けて、唯は次の曲名を告げた。

こうして、放課後ティータイムのライブが始まった。

「すげえ」

「……ああ。これはたまげた」

ライブが始まり既に40分を経過した中、YJたちは驚きの声を上

げていた。

「会場の皆がノッている」

「こんなこと、今までなかったのに」

ROとRKが口を開いた。

唯たち放課後ティータイムは会場の心をつかんでいた。

「さすがDKだ。確かに、彼女たちはここまで来るかもしれない。これはすごいな」

「……そうだな」

YJの言葉に相槌を打つDKの口調は寂しげだった。

（僕がいなくても、あそこまでのいい演奏ができる。これならもう、思い残すこともないかな）

それは避けられない運命に対する一種の安心感でもあった。

DKには絶対に避けることができないその運命に対して不安だったのは、バンドのことと最愛の人物でもある唯のことであった。

だからこそ、このライブは彼にとって一種の背中を押す出来事になった。

『皆ありがと——！』

「終わったみたいだな」

ステージから聞こえる唯の声と観客の歓声に、YJがつぶやく。

「ああ」

残り時間はあと2分。

終わるにはいい頃合いだった。

だがそこで、予想外のことが起こった。

『アンコール！ アンコール！』

観客たちからのアンコールの声。

「訂正する。これは恐ろしいことだぞ」

YJの言っている言葉の意味は、DKには何となくわかっていた。初めてこういった大勢のライブ会場に出たにもかかわらず、観客たちの心をつかんでいる。

それが、このアンコールにつながっているのだ。

その力はH&Pとほぼ同等……いや、それ以上かもしれない。

「ありがとうー。それじゃ、アンコールで“ふわふわ時間”^{タイム}をD Kさんを交えて演奏したいと思いますー！」

「おや、御指名のようだね」

ステージの方から聞こえた唯の言葉に、M Rは茶化すようにD Kに声を掛けた。

「茶化すな。行ってくる」

そんなM RにD Kはそう告げるとステージのそでからステージの方に出た。

「この私を指名するとは、まあなんとも怖いもの知らずだね」「えへへ〜」

D Kの言葉に唯は頭に手を当てながら笑った。

一瞬だけ唯に向けたD Kの口元は悲しみなのか、それとも喜びか。そのどちらでもないような表情がうかがえた。

「よおし。皆、アンコールと彼女たちの要請を受けて、今夜限りの特別編成だ！ しつかりと聞いてくれ！」

D Kの呼びかけに、会場中が一瞬にして歓声に包まれた。

それを遮るようにして突然キーボードが音色を上げ始めた。

それは先ほど演奏した『ふわふわ時間タイム』のワンフレーズだった。

(あの時のか)

それは合宿の時と前の学園祭のライブの時に演奏したものだ。細に続いて、今度は律がドラムの音色を奏でだした。

さらにそれに滯も続いて音色を奏でだす。

そこにD Kと梓も続いた。

そして、最後に唯が加わる。

こうして、サビのアンコール演奏が始まった。

まるで打ち合わせをしていたかのような音の入るタイミングの良さに、観客たちはさらに盛り上がりを見せていた。

サビが終わり、全員が音を伸ばしていく。

そしてドラムのフィルで今度こそ曲は終わりを告げた。

こうして、ライブは大成功という最高の結果を残して終了となるの

であった。

「お疲れ様」

「あ、お疲れ様です。MRさん」

ライブが終わり、楽器を手に会場を撤収する唯たちの前に立ちはだかったのは、MRたちだった。

「すごく盛況だったな。これはとてつもないほどにすごいことだよ」

「ありがとうございます」

MRの称賛の言葉に、梓がお礼を述べた。

「そう、お前さんたちが初めてだ。あそこまで客の心をつかんだのはな」

「え、えつと……何かいけなかったですか？」

MRたちの雰囲気が変わったのを感じた律が、しどろもどろになりながら問いかけた。

「いけなくはない」

それに答えたのはYJだった。

「君たちは、俺たちのライバルとなりうる存在にまで上り詰めたことなのだからな」

「そ、そんな。ライバルだなんて——」

YJの言葉を受けて両手を前方で振って否定する瀧の言葉を遮ったのはDKだった。

「恐れ入ることはない。お前たちの演奏はそれ相応のレベルだった。全くもってアウェイの環境下で観客の心をつかむその腕は、私たちに匹敵する。だからこそ、ライバルにふさわしい。もしコンテストで会うことがあった時は、私たちH&Pは——」

『絶対に負けない！』

それは宣戦布告であった。

それだけでも彼女たちには、彼らの本気さが伝わってきたのだ。そして、そのまま彼らは唯たちのわきを通って去っていった。

「何だか、すごいことになっちゃったな」

「うん……でも、認めてもらえたってことなんだよね？」

H & Pのメンバーの背中を見送りながら口を開いた律に、唯がそう相槌を打った。

「唯ちゃん？」

「だって、ライバルっていうことは、私たちもH & Pのようにすごい演奏ができるっていうことなんですよ？ それってすごいんだよ！」

首をかしげる絀に、唯は嬉しそうに両手を握りしめながら答えた。

「……でも、ライバルってことは先輩とは敵ということに——」

「違うよあずにゃん。よくわからないけれど、私たちは今までと変わらなと思うの」

唯の言葉に、具体性などはなかった。

「そうかもしれないな。彼は、絶対に態度を変えることはしない。まあ、練習の質は上がるかもしれないけれど」

「でも、なんだか楽しそう♪」

それでも、漣たちは頷いた。

それはひとえに、彼女たちは知っているのだ。

“高月浩介”という人物を。

そして、知っているからこそ、唯たちは頷けたのだ。

「それじゃ、早く帰ろう。もう外は真っ暗だし」

「明日が休みで良かったね」

「そうですね」

話題を変えるように口を開いた律の提案に、唯たちは頷くと通路を歩き会場を後にした。

「あずにゃん、また虎耳をつけてよ」

「嫌ですっ！」

所々に輝く星空の下、唯たちの楽しげな会話は耐えることがなかった。

★ ★ ★ ★ ★

「……………」

あのライブの後、初めての部活動の日を迎えた。

僕は部室前のドアの前で立ち尽くしていた。

理由は一つ。

(どう入ったものか)

一昨日に一種の決別宣言のようなものをしてしまった手前、どうい
う風な顔をすればいいのかがわからなかったのだ。

(あほらしい)

怖気づいている自分に喝を入れる。

(あいつらがそんなことを気にするような奴じゃない)

そんなことはとづくにわかっている。

そうじゃなければ、僕の存在を受け入れたりなどしないのだから。

ならば、僕の取るべき態度など、一つしかない。

「悪い、遅れた」

「遅いぞ、浩介っ！」

いつものように部室に入った僕に、律から檄が飛ぶ。

「大丈夫っ！ 浩君のお菓子は律ちゃんから守ってあるよ！」

「いや、それはそんなに重要なことじゃないと思うんですが？」

微妙に方向が違う唯の言葉に、梓がツツコミを入れる。

「浩君、ほらほら、今日はチーズケーキだよ」

「何っ!? よっしゃ！ 今日はいち飲み明かすぞお!!」

「全く、いつからここはお茶菓子部になったんだ」

大好物のチーズケーキと聞いた僕の反応に、藩がため息交じりにつ
ぶやいた。

そんなこんなで、僕たちはいつものように部活動の時間を過ごし
た。

そして季節は冬から春へと変わっていくのであった。

3年生編 『新学期』
第103話 新学期！

季節も冬から春へと過ぎ、始業式の日を迎えた。
世間では入学式や入社式などが行われる時期だ。

「……………」

今日は始業式。

僕は一人で橋の付近で腕を組みながら立っていた。
道行く人が時よりこちらに視線を向けてくるが、すぐにそらしてい
く。

「遅い」

口に出たのはその言葉だった。

そう、僕はある人物を待っていたのだ。
その相手は

『明日は橋のところで待ち合わせだよ！ 遅れてこないでね』
と先日言っていた唯だ。

「あれ、浩介先輩？」

そんな僕に声を掛けてくる少女がいた。

「梓。おはよう」

「おはようございます。ところで、何をしてるんですか？」

挨拶をすると梓は不思議そうな表情を浮かべながら、疑問を投げか
けてきた。

「唯を待ってる。今日は一緒に登校しようって言ってきたんだけど
……………」

「来ていませんね」

少しだけ周りを見回した梓が、何とも言えない表情でつぶやいた。
「ものの見事に遅刻だな」

思わずため息が漏れてしまった。

「梓、一緒に学校に行くか」

「え？ でも唯先輩は？」

「知らん。遅れるのが悪い」

梓の問いかけに、僕は一刀両断した。

ここで30分ほど待たされたのだから、

「そ、それじゃ行きましょう」

「そうだな」

こうして僕と梓は先に学校へ行くことにした。

「何だか暖かくなってきましたね」

「そりゃ春だからな。でも時期にこの暖かさが暑さに変わっていくけど」

桜並木はないけれど、温かさは季節を張るだと伝えてくれる。

あと数か月でこれが暑く感じるようになるのだから四季とは不思議なものだ。

「あ、浩介先輩。実は新しい曲で、わからないところがあるので教えてほしいんですけど」

「構わないよ。部活の時に分からないところとかを詳しく聞かせて」「はいっ」

最近、梓から尊敬光線（目に見えるわけじゃない、ただの比喻だけ）が出ることは少なくなった。

尊敬されなくなったということではなく、ただ単に普通に接してももらえるようになったということだ。

僕としてはそっちの方がやりやすいので願ったり叶ったりでもあるが。

（ん？ 何か後ろから気配が）

そんな時、後ろの方からこちらに向かってくる気配がした。

ここは普通の道だ。

人が後ろから来る気配がしても当然だ。

だが、その気配はその普通とは違っているところがあつた。

（足音を消しているなんて普通じゃない）

どうして普通に歩いているのに足音を消す必要があるのだろうか？

つまり、この気配の人物は僕たちに危害を加えようとしているとい

うことだ。

(だったら)

やられる前にやってしまえばいい。

気配は僕の方に近づいていく。

(このぐらいならば後ろ蹴りで十分か)

ちょうど後ろ蹴りの射程内に入ってきたので、僕は行動に移すことにした。

「せいっ!」

「ぎゃ?!」

全力で後ろ蹴りを食らわした僕は、素早く反転して僕の方に近づいてきた人物を確認した。

「つて、律!」

後ろの方で倒れていたのはなんと律だった。

「大丈夫か? というより生きてるか?」

「――」

律から反応がない。

慌てて首筋に手を当ててみたところ脈はあるようなので生きてはいるようだ。

どうやら気絶しているだけらしい。

「一体どうして律先輩が?」

「そ、それが……梓と浩介の姿を見つけたから驚かそうとして」

「僕が振り返りにしてしまったというわけか」

一、二、三步ほど後ずさりながら答える滯の説明で、ようやく何が起こったのかが理解できた。

(後は、律をどうするかだな)

問題は今のびでている律だ。

(このまま放置するわけにもいかないし、背負っていく――つ
?!)

気絶している律を背負うということを考えて瞬間、背筋に寒気のようなものが走った。

それは間違いなく殺気のようなものだった。

(これって、唯の殺気か？ まさか唯がいるのか?)

気になった僕は周囲の気配を念入りに確認してみるが、それらしい気配や人影はなかった。

(気のせいか？ それにしては妙にタイミングが良かったけれど)
どちらにせよ、背負うのはやめておいた方がいいかもしれない。
(だとすると……)

残された方法は一つしかなかった。

「濡、律の左腕を持ち上げてくれる?」

「う、うん」

僕から距離を取っていた濡に指示を出すと、濡は律の左腕を持ち上げた。

そして僕も逆の右腕を持ち上げる。

「気を取り戻すまで、引きずって行く」

僕が取った行動は、律を引きずることだった。

そんなこんなで、数メートルほど引きずったところで、

「あの一、いい加減引きずるの辞めてくれませんか?」

と、律の方から声が掛けられた。

「やっとお目覚めか」

「大丈夫ですか？ 律先輩」

目を覚ました律に、僕はため息をつきながら腕を離した。

ちなみに、濡も僕に遅れてだが腕を離していた。

そして、梓は健気にも律の容態を案じていた。

「二人を驚かそうとしてまさかけりを入れられるなんて驚いた……つていうか、浩介謝れよ!」

「あー、悪い悪い」

「むきー! それは絶対に本気で悪いと思ってない!!」

謝れと要求してくる律に、僕は投げやりに謝ると癩癩を起したように声を荒げた。

「足音消して、こっちに向かってきたもんだから、暴漢かと思って」

「いやいやいや! 足音消しただけで暴漢にされたら命いくつあっても足りんわ!!」

「そう?」

律の言うことも尤もだが、僕の感覚からすれば律の言っている方がおかしく思えてしまった。

「まあ、いきなり後ろ蹴りをした浩介も悪いけど、驚かそうとした律も悪いと言えるかな」

「そうですね」

二人に尋ねてみると、意外にもこちらよりの答えだった。

「……まあ、痛み分けということではここは穏便に解決ということにしよう」

「そうだな」

このままではらちが明かないと感じた僕は、お互いが悪いということとで和解することにした。

握手をすれば和解は成立だ。

「あれ? 浩介に対する痛みって何?」

そんな律をしり目に、僕たちは歩き出す。

その途中でムギとも合流した僕たちは、学校に向かっていくのであった。

「何か音が聞こえないか?」

「あ、本当だ」

校舎内に入った僕たちは、微かに聞こえる何かの音に首をかしげていた。

「とうより、これって」

「あ、待ってよ。浩介君」

僕はその音色が何なのかを知っていた。

ムギの声を無視した僕は、導かれるように音色が聞こえてくる方向に足を向ける。

階段を上り最上階に到着したところで、音色は非常に大きくなっていた。

「これって、ギターだよな？」

「と、言いながらドアを開けても意味がないと思うんだけど」

疑問の声を上げながら部室のドアを開けるといふ、ある意味矛盾した行動をしている律にツツコみを入れた僕は、開いたドアから中の様子を確認する。

「……………」

部室内では、右腕を風車のように回している唯の姿があった。

(ウインドミル奏法か)

昔、あるギターリストが用いていた演奏奏法をする唯の姿に、僕は啞然としていた。

「なにやってんだ？ お前」

僕は、未だに回し続けている唯に、声を掛けた。

今の僕は、きつとあきれ果てたような表情を浮かべているに違いない。

「新歓ライブに向けて新しい必殺技を開発中!!」

「へえー」

力強い唯の説明に、律は何とも言えない表情を浮かべながら相槌を打つ。

「必殺って…………」

(殺してどうするんだよ?)

そんなことを考えてしまう僕は、きつと心が荒んでいるに違いない。

「にしても、ずいぶん早かったな」

「えへへ。目覚まし時計を一時間早く見間違えてしまいました」

頭に右手を当てながら照れ笑いをする唯の表情に、僕は怒気を抜かれてしまった。

本来ならば、何の連絡もせずに先に学校に行っていた唯に断罪をするべきなのだが、まあいいだろう。

「あれ？ 何か口元についてるわよっ」

「え?」

そんな中、ムギの指摘に唯は自分の顔を手で軽くたたきながら確認していた。

「じつとしてろ。取るから」

「あ……ありがとう、浩君」

満面の笑みでお礼を言ってくる唯を見ていると、心が洗われるような気がする。

「はいはい。朝からいちやいちやしないでくださいね。そちらのお二人さん」

「イチヤイチャなんてしてない!」

「そうだよ! 律ちゃん。私たちはイチヤイチャなんてしてないよ!」

ジト目で注意をしてくる律に、僕と唯はもう反論した。

見れば梓達もジト目で僕たちを見ていた。

「イチヤイチャっていうのは……ん」

「んむ?!」

いきなりのことに、僕は一瞬何が起こったのか理解ができなかった。

『なっ?!』

全員が驚きに満ちた声を上げるのも当然だろう。

何せ今、僕と唯はキスしてるのだから。

「えへへへ、久しぶりにすると恥ずかしいね」

「……………ノーティンバーヤ!! (何をしてるんだ!!)」

いきなりのことに気が動転した僕は、思わず母国ではるか昔に使われていた言葉を使ってしまった。

「な、ななな、何をしてるんですか!!」

「そ、そそそ………そうだよ! キスなんて………キキキキスなんて………ぷしゅう〜」

「み、濡?! 大丈夫か?! おーい、濡!」

「まあ、まあ、まあ☆ あれが“キス”なのね。私、初めて見たわ〜」
動転のあまりかなりドモリながら声を荒げる者や、あまりの衝撃的

な光景に気を失う者、そんな彼女を解放する者に、なぜかうつとりとした表情で感心している者など、軽音部部室は一瞬にして混沌に包まれた。

「えへへ〜浩君、大好きー!」

そんな混沌の中でも、元凶である唯だけはいつもと変わることはなかった。

「さ、さて。準備完了」

「わ、私もです」

「私もよ」

「わ、私も」

「終わったよー。ふんすつ」

あれからしばらくして、ようやく落ち着きを取り戻した僕たちは、演奏の準備を整えていた。

最後は未だに朝食の食パンを食べ終えていない唯だった。

全員がそろい、ようやく練習をすることができるようになった。

「それじゃ、軽く流していこう。まずはふわふわからな」

そんな律の掛け声のもと、僕たちは通して練習をしていくのであった。

練習を終えた僕たちはクラス振り分けを確認するべく、昇降口へと向かっていた。

ちなみに梓達二年生とは場所が違うので途中で別れたのでいない。

「それにしても、三年生か〜」

「どうしたんだよ?」

不意にしみじみとした口調で話す唯に、律が声を掛けた。

「三年生と言えば一番上だよ!? うーん、私はどうすればいいんだろ
う?」

「まず目覚まし時計を正しくセットできるようにしろよ」

「というより、慎みを持ってば？」

唯の言葉に、僕と律は半ば投げやりに答えた。

ちなみに、部室内でのキスの話は、完全にタブー扱いになっていた。「ねえねえ、見て見て！」

そして廊下を歩いて昇降口へと向かい歩き出していた僕達を止めるように唯の声が聞こえた。

「どうしたんだよ？」

「これで、上級生っぽく見えるかな？」

そう言ってくる唯だが、

「どこが変わったんだよ？」

律の言葉通りだった。

全く変わっているところなど見受けられなかった。

（つて、待てよ？）

もしかしたらそれかもしれないという答えが浮かんできた。

「まさか、髪留めを逆にしたとかじゃないよな？」

「ふんすっ！」

「あ、本当だ」

どうやら正解だったようで、胸を張りながら髪を右側にかき分けた。

（確かに変わってはいるけど、絶対にわからないだろう）

「分かりずらいから、却下」

「ええ〜!!？」

どうやら律も僕と同意見だったようで、律の一言で却下となった。

そんなこんなで、僕たちはクラス発表が張り出されている昇降口前へと向かうのであった。

「うわー、すごい人ばかり」

クラス発表が張り出されている掲示板の前にたどり着くと、そこにはすでに大勢の生徒たちの姿があった。

「クラス分けどうなってるんだらうね」

「さあ？」

ムギの問いかけに、僕は首をかしげながら答えた。

「また浩君と滯ちゅゃんが別のクラスだったりして」

「っ!？」

律の言葉に、滯の肩が震えた。

「律、あとでお話をしような？」

「ひい!？」

とりあえず、“浩君”と口にした律に制裁を下すことを決めた僕は、目の前の人だかりに視線を向けた。

「どちらにしても、これじゃ見えないよな」

「もう帰りたい……」

クラス分けをどうやってみるのか首をかしげている横で、滯は項垂れながら呟いていた。

(暗すぎるぞ、滯)

そんな滯に、僕は心の中でツッコんだ。

「それじゃ、ちよつと私が見てくるよ」

「おう、頼んだぜ！」

どうしようかと頭を悩ませている僕にをしり目に、唯は自信に満ちた表情でそう告げると両手を前方で重ねて人と人の間をかき分けるようにして飛び込んでいった。

(まるでカンチョウでもしそうな感じだな)

ものすごく下品なことを考えてしまった僕は、それを頭の片隅に(というより完全に抹消したい)追いやった。

(あそこの下駄箱を登れば見えるか)

僕もただ待つわけではない。

下駄箱の方によじ登ってクラス発表の掲示物に目を凝らした。

(3—1にはない)

左側から順番に名前を確認していくが、それらしきものはなく隣のクラスの名前を確認していく。

(なっ!?)

その瞬間、僕の体に電気が走ったような衝撃を感じた。

僕はゆっくりと地面に降りたところで、

「つと!？」

「ええ!？」

後ろ向きに戻ってきた唯の背中を支えることで転ばないようにした。

「ありがとう、浩君」

「大丈夫か？ 唯」

お礼を言ってくる中、転びそうになった唯に心配そうに声を掛ける律。

「そ、それでどうだったの？」

「それがね——」

そして唯の口から衝撃のクラス構成が告げられるのであった。

第104話 クラスとコンビと

僕たちは新たなクラス『3―2』の教室にいた。

席は出席番号順で、すでに荷物は置いてある。

律たちはムギの席の周りに集まっていた。

(にしても、みんなが同じクラスだなんて)

このような偶然はどうすれば起こるのかが気になった。

「浩介！ おは——ぎよわあ!?!」

「気安く呼ぶな……って、慶介か」

考えているところにいきなり名前で呼ばれた僕は鉄槌を放ったところ、相手が慶介であることに気付いた。

「は、ははは。初日早々にいいのをもらいそうになった」

「なにをオーバーな。ただの正拳突きだろ」

ただ少しだけ魔力を纏わせて攻撃力を増幅させているけど。

「ただの〃じゃないから！ただでさえ浩介は——」ねえねえ、見て見て！——って、聞けよおい！」

唯の声に、僕は何やら熱弁している慶介を無視してムギの席の方に向かった。

「って、真鍋さんも同じクラス？」

「ええ。偶然ってあるものね」

苦笑しながら相槌を打つ真鍋さん。

彼女もまた、このクラスなのだ。

「いいクラスだよね〜」

幼馴染と一緒にのクラスだったことに喜びをあらわにする唯。

「うげっ!? 生徒会長……」

「……人の顔を見るなり〃うげっ〃とは何よ」

後ろから来た慶介の言葉に、真鍋さんがジト目で慶介に、言い返した。

「あれ？ 和ちゃんと佐久間君は知り合い？」

「なんでも生徒会メンバーらしい」

慶介と真鍋さんが知り合いなのが不思議なのか、首をかしげる唯に

僕は慶介から聞いたことをそのまま説明した。

「え!? そうだったんだ」

「全く知らなかった」

「……その驚き方はひどくねえか?」

そんな僕の説明に驚きをあらわにする律たちの反応に、慶介は少しばかり傷ついた様子でツツコんだ。

「こう見えても、俺は生徒会副会長なんだぞ!」

「……ええ!?!」

「賄賂にでも手を染めたのか?」

初めて知った慶介の衝撃的な真実に、僕たちは驚きを隠さずにはいられなかった。

「ちよつとひどすぎませんか?! ちゃんと適正な手続きで選ばれましたよ!」

「そ、そうだったんだ。悪い、慶介が副会長だなんて想像できなくて!」
「つたく」

謝る僕に、慶介はため息交じりに呟いた。

「慶介のことだから人の弱みに付け込んで副会長になったんだとばかり」

「それ謝ってるのかどうか微妙だ! というより、俺の扱いひどすぎやしませんか、それ!?!」

「何だか騒がしいクラスになりそうね」

そんな僕たちの様子を見ていた真鍋さんは苦笑しながらつぶやいた。

「まあ、あのバカが変なことをしたら僕に言つて。必要とあらば——」
「つて、俺を無視するなっ!」

真鍋さんのつぶやきに相槌を打っていた僕に、慶介が声を荒げた。
「ええいつ。こうなつたら、浩介の恥ずかしい話を——げふあ!?!」

「こんな風に鉄槌を下すから」
「か、考えておくわ」

とりあえず鬱陶しい慶介を力づくで黙らせておくことにした。
「それにしても、狙ったように一緒になつたな」

そんな慶介から視線をそらすように滯がお退いた様子でつぶやいた。

「はっ!? まさか生徒会パワーで?!」

「生徒のクラス配置を決めるほど生徒会に権力はない」

律の推測に、僕は首を横に振って否定した。

というより、あつてたまるか。

「だとすると、そんなことができるのは……」

「はい、みなさん。席についてください」

滯の言葉を遮るようにして教室に入ってきたのは、山中先生だった。

(まさか……)

なんとなく予感を感じた僕は足早に自分の席に着く。

「このクラスの担任になりました、山中さわ子です」

黒板に見えやすく名前を書いた山中先生は、自己紹介をしつつ簡単な挨拶をした。

(やっぱり担任だったんだ)

初めての担任ということで、少しだけ不安ではあるが、山中先生ならなんだかんだ言って乗り越えそうな気がする。

クラスの人たちも好意的だったのが、その証だ。

そんな中、僕の前の席に座っている律は何やらその前の生徒と話をしていた。

「田井中さーん」

「は、はひい!?!」

そんな律に、山中先生が声を掛けた。

「私語は辞めてくださいね」

「す、すみません」

恐怖なのか、それとも素なのか。

慌てた様子で立ち上がった律に、山中先生は困ったように微笑みながら注意した。

その姿は軽音部の過去を感じさせない物だった。

そしてHRでは自己紹介に費やされることになるのであった。

「先生、すみません」

HRが終わり、職員室に戻っていく山中先生を律が呼び止めた。

「何？」

「ちよつと聞きたいことが、あるんですが」

山中先生に気を使っているのか、律は改まった口調で話しながら先生の元まで歩み寄った。

僕たちもその後が続く。

「このクラス分けてさわちやんが？」

「そうよ。私がお願ひしたの」

律が投げかけた疑問に、山中先生はすんなりと認めた。

「それって、完全に職権乱用ですけど」

「何よ。嬉しくないの？」

僕の指摘に山中先生は頬を膨らませて反論してきた。

「私も名前を憶えないといけない生徒が減るし♪」

「おい。今、本音が漏れたぞ」

ある意味山中先生らしい理由だった。

「私はすつごく嬉しいよ！　ありがとう、さわちやん」

「唯は少し落ち着け」

そんな中、律が一人興奮している唯の肩に手を乗せて落ち着かせた。

「だって、高校最後の年を皆で一緒にいられるんだよ！」

「一緒だけど、進路とかはあるからな」

若干現実逃避をしている唯の様子に、僕はこの先待つ現実を口にすると全員が項垂れた。

「でも、いいと思うよ！　だって、一緒に学園祭で出し物ができたくさんお話ができるし、テスト勉強を教えてもらえるし、宿題を写してもらえるし、浩君と一緒にいられるし」

「おいっ。ハハハ」

指を折りながら、楽しそうに口にする唯だったが、後半でものすご

いことを言っていたため僕は慌ててツッコんだ。

「今さりげなく惚気ましたね」

そんな僕に、律たちはジト目で眩く。

「……………もうそろそろ始業式が始まるから早く移動しなさい」

「はい」

「またあとでね、さわちゃん」

山中先生の言葉に頷いた唯たちは講堂に向かって歩き始めた。

表面上は笑顔だが口の端がかなりひくついていた。

(少し自重した方がいいのかもしれない)

このまま教室で爆発されたら、とんでもないことになるのは必至だ。

まあ、唯の前に自嘲という言葉はないにも等しいのではあるが。そんなこんなで、僕も足早に行動へと向かうのであった。

「どうしたんだ？」

講堂に向かう途中で、通路の端の方でしゃがみこんだ唯に、僕は声を掛けた。

「見て見てー！」

「桜の枝か…………」

唯が掲げたのは何の変哲もない桜の木の枝だった。

「よしっ。浩君、早く早くー」

桜の木の枝をポケットに入れた唯は立ち上がると僕に早く来るように促してきた。

「つて、何が“よし”なんだよ!?!」

僕はそんな彼女を追いかけて行くのであった。

始業式は主に校長先生の“ありがたいお話”と校歌斉唱だった。

とはいえ、前者の方が9割の時間を有していたという点はお察し

だ。

(仕分けされたら確実に校長の話は縮小させられるよな)

某所で某人物が行っていた仕訳の姿が脳裏をよぎった。

その長さは、よくも数十分にわたって永遠と話せるほどの内容があるなど、感心してしまうほどだった。

そんな始業式も終われば後は簡単な連絡事項を伝えられて解散。

あつという間に放課後を迎えることとなった。

「うーん」

「どうしたのよ、唯?」

そんな中、先ほどから横で両腕を組みながら唸り続けている唯に、真鍋さんが不思議そうな表情で声を掛けた。

「あ、和ちゃん! あのね、あと一本で1ダースなんだよ!」

そう口にする唯の席には確かに桜の木の枝が11本あった。

(というより、なぜ集めるんだ?)

「そう。それじゃ、私は生徒会室に行くわね」

「うん。また明日ね」

(……………)

唯も唯でかなりあれだが、真鍋さんも大概かもしれない。

興味なさげに相槌を打つ真鍋さんに、僕は思わずそんなことを思ってしまった。

「唯、部活はいなくていいの?」

「あ、そうだった!」

本気で忘れていたのか席を立ちあがる唯に、僕は思わず苦笑してしまった。

「しっかりしなさいよ。このままだと来年は廃部になるわよ」

「あ……そうか」

真鍋さんに指摘されたことで、抜けていたのか重要なことを思い出したようだった。

僕たちが卒業すれば後輩である梓だけになってしまう。

最低5名の部員がいなければ、その部活は廃部となる。

今月いっぱい廃部か否かの境目と言っても過言ではない。

「それじゃ、私は生徒会室に行くわね」

そう告げて、僕の方に顔を向けると意味ありげに頷いた。

なんとなくではあるが、真鍋さんが何を言いたいのかがわかったよ
うな気がした僕は、頷くことで返事を返した。

「浩介！ 久々に遊びに——ぐえ!?!」

僕たちの前から真鍋さんが離れたのを見計らってか、声を掛けてき
た慶介の首根っこをつかんだのは真鍋さんだった。

「あなたも一緒に生徒会室に行くの」

「か、勘弁してください！ 今日だけは、今日だけはあ!!」

「そんなこと言って明日からも逃げるんでしょ。あなたは副会長なん
だから——」

慶介と真鍋さんは、何やら言い合いをしながら教室を去っていっ
た。

「二人とも仲良しだね」

「まあ、あれはあれでいいコンビなのかも」

和やかな口調でつぶやく唯に、僕も頷きながら相槌を打った。

「ほら、僕たちも行くよ」

「そうだね！ 私たちが頑張らないと、あずにゃんが一人になっちゃ
うもんね！」

唯も唯でしつかりと先輩をしている。

そうでなければ、後輩の心配などできるわけがないのだから。

まあ、子供っぽいところがあるのが玉に傷だが。

「よし、頑張るぞー。おー！」

そして唯は気合を込めて右腕を天に向けて突き上げるのであった。

「お。遅いぞ、二人とも」

「ごめんごめん」

部室に入ってきた僕たちに掛けられた言葉に、唯は悪びれる様子もなく謝った。

律の言うとおり、僕たちが一番最後だったようで、僕たち以外のメンバーはすでに集まっていた。

「あ、そうだ。あずにゃん。ちよつとこつちへ」

「は、はい。何ですか？ 唯先輩」

唯に呼ばれて、椅子から立ち上がると、おずおずと僕たちの方に歩み寄ってくる梓に、

「あゝずにゃん！ 二年生になれてよかったね〜！」

「にゃ!? それは、どういう意味ですか?!」

いきなり抱きついてお祝いの言葉を投げかける唯に、梓は驚きながら相槌を打った。

「それにしても、梓は二年になっても変わらないよな〜」

「律先輩にだけは、絶対に言われたくありません!!」

いたずらっ子の笑みを浮かべながらかけられた言葉に、梓は自分の身体の一部（あえて場所は言わないでおく）を隠して猛反論した。

「おやおやく? 私はそこだとは言っていないぞー」

「思いつきり見てたじゃないですか!!」

にやりとほくそ笑みながら言い返す律に、梓も負けじと応戦する。
(子供か。お前らは)

思わず口に出しそうになるのを僕は何とか心の中に留めることにした。

「浩介先輩はどうですか!」

「は? 何のことだ?」

少しばかり考えているうちに、状況は大きく変わっていたようでそれにうまくついて行けなかった僕は、聞きかえすしかなかった。

「浩介は、胸が大きいほうがいいと思うか? それとも小さいほうがいいか?」

「……………」

そんな僕に律が話してくれた内容は、僕にとってはどうでもいいほどくだらないものだった。

しかも静観してた滯やムギに唯までもが、僕の答えを固唾をのんで見守っていた。

「知らん」

そんな中、僕が出した結論はどちらも選ばないことだった。

「卑怯だぞー！」

「そうですよー！」

そんな僕の結論に、律と梓が異論を唱えた。

「そんなことを選んで何の意味が？ 変な軋轢みたいなものを生むだけだろ」

「む……これ以上ないほどの正論だ」

僕の反論に、律も返す言葉がないようだ。

「さあ、これとくだらない話は終わりにして——だったら、高月君は誰のが好み？」——……」

話を終わらせようとしたところで、これまで何も言わないでいたムギが突如として口を挟んできた。

「おおー それだったらいいな。大きい小さいとかは関係がなくなるんだし。さあ、選ぶのじゃ！ 私か、梓か——「唯」——って、即答かい！」

律が言い切るよりも早く、僕は答えを口にしていった。

「自分の恋人を差し置いて、別のやつの名前を口にするわけないだろうが」

「浩君……嬉しいな」

僕の言葉を聞いていた唯は頬を赤くしながらもじもじとしていた。

「………負けた上にあのイチヤイチャは、精神的にきつい」

「わあ……」

やはりと言うべきか、なんというべきか。

ものの見事に事態の收拾がつかないような状態になってしまった。（これだから身体的な問いかけは嫌いなんだよ）

どう転んだところで收拾がつかなくなるのは分かりきっているのだから。

僕は心の中で深いため息をついたのであった。

第105話 勧誘!

その後、何とか事態の收拾がつき、いつものティータイムを満喫していた。

「はあく。やっぱり部室が落ち着きますなー」

「そうだよなー。春休みも部室に来たくて仕方なかったぐらいだし」
のんびりとしている律たちには切迫した感じなどは一切感じられなかった。

ある意味すごいことではあるが、この状況でそれはあまりほめられたものではない。

「ダメだよ律ちゃん。ちゃんとしないとあずにやんが一人になっちゃうんだよー!」

「そう言う割にはのんきなポーズだよな」

そんな律に注意をするのまでは良かったが、ポーズは完全にのんびりモードの唯に思わずツツコンでしまった。

「でも、そうだよな。新学期なんだし、やることは一つ」

「新入生の勧誘ですね!」

律の言葉に期待を込めて目を輝かせながら相槌を打つ梓。

「ムギのケーキを食べる!」

「って、何ですか!!」

律が続けた言葉に、梓は全力でツツコンだ。

最近、梓もなんだかんだ言って遠慮というものがなくなってきたよ
うな気がする。

……気のせいだとは思うが。

「嘘、嘘。冗談だって」

「律先輩が言うのと冗談には聞こえません!」

頬を膨らませながら笑みを浮かべながら謝る律に、言い返した。

「でも、冗談抜きでちゃんとやらないとまずいと思うけど」

「そうだよな……」

僕の言葉に、神妙な面持ちで溻が頷いた。

「あ、だけどここのままいけば来年は確実に梓は部長になれるぞ」

何故だか、僕の頭の中では“部長”のたすきをかけてわきに手を当てて大きな声で笑っている梓の姿が浮かんできた。

「……………はっ!? い、今はそんなことはどうでもいいんですっ!!」

それは梓も同じだったようで、頬を赤くしながら声を荒げた。

(今、絶対に考えてたよな)

「そ、そんなことより、新入生の勧誘に行きましょう!」

(そして、思いつきり話題を変えて誤魔化した)

梓もすっかり律たちに染まったような気がする。

「あ、そうだった。私、ビラを作ったんだよね」

「ええっ!?!」

唯の口から出た言葉に、思わず口に出してしまった。

目覚まし時計を見間違えるような唯が、そのような粹なことを思いつくはずがなかったからだ。

「うちの憂の勧めでしてね」

(やっぱりかい)

まあ、予想はできていたことだが。

そして唯が僕たちに前に出したのはどう解釈すればいいのか分からない物だった。

(この前面の人物って、梓か?)

頭には猫耳があるので、おそらくはそうだと思う。

だとすると、かなりとんでもないことになるのだが。

「それじゃ、僕は印刷してくる」

僕はその考えを振り払うように唯作成のチラシを手にとると、そう口にして席を立った。

「おう、任せたぞ! 浩介三等陸佐!」

「それを言うなら、“三等陸士”だ。というか階級を呼ぶなっ!」

微妙に階級で呼ばれるのが嫌いになってしまった自分に、思わず苦笑が漏れそうになるのを必死にこらえた。

そんなこんなで、僕は唯お手製のチラシを印刷するべく職員室へと繰り出すのであった。

「おう、また印刷か」

「はい。大丈夫ですか?」

職員室に足を踏み入れ、印刷機の方に向かおうとすると、小松先生が声を掛けてきた。

「そっちは大丈夫だが、古典の方は大丈夫なんだろうな?」

「あはは……またお世話になりそうです」

小松先生の問いかけに、僕は頭を掻きながら苦笑して返した。

「気をつけろよ。三年で、内申点に響くんだからな」

「……………分かりました」

そう言いながら自然な動作で手渡された一枚の用紙には、数名の人物の名前が書かれていた。

小松先生の話から察するに、要注意人物のようだ。

この学校に不良が入ることはできないと思うのだが、内村の例がある。

そう言った下種は、表では聖人ぶっているが、本質は人以下の化物だ。

小松先生には、そう言った人物を特定しておくようお願いをしておいた。

彼らの動向に細心の注意を払い、問題があるようであれば対処ができるようにするためだ。

僕は小松先生に一礼すると印刷機の前に歩み寄り、唯お手製のチラシを印刷するのであった。

「戻ったぞ……………って、何をやってるんだ!!」

「ほえ?」

印刷を終え部室に戻った僕が見たのは面妖な着ぐるみに身を纏っている唯たちの姿だった。

「新入生を勧誘できるようにこんな着ぐるみを着てみることにしたんだよ〜♪」

「……………全くお前らは」

唯の答えに、僕は思わずため息をついてしまった。
とりあえず、印刷しておいた100枚のチラシをベンチの方に置いておく。

「いいか？ 今年の勧誘は部としての存続をかけた物なんだぞ？」

そして僕は、唯たちに注意をする。

「それなのに、そんな面妖な着ぐるみを着て勧誘したら来るものも来ないだろ」

右手の人差し指を立てながら唯たちの横をすり抜けて、奥の方に移動する。

「というよりなぜその発想になるのかが僕には理解できない。とにかく、とつととその着ぐるみを脱いでちゃんとした格好で——」

そこまで口にした僕は、唯たちの方へと振り向くがそこにあった光景は

「つて、誰もいないっ!!」

もぬけの殻となった部室だった。

どうやら僕が注意をしているときに勝手に行ったようだ。

しかもご丁寧に僕の分のチラシを残して。

「……………行くか」

もはや怒りを通り越してあきれてしまった僕は、ため息交じりにチラシを手にとると勧誘に繰り出すのであった。

「軽音部です。もし興味があつたら3階の音楽準備室まで来てね」

僕が声を掛けたのは、三人組の女子生徒だった。

「ねえ、軽音部ってあの軽音部？」

「あの変な服を着ていた……………」

「ちよつと、あれは……………」

軽音部の名前を聞いたとたん、三人は何やらこそこそと話し始めた。

彼女たちにしてみれば小声で話しているのだろうが、僕の耳にはしっかりと聞こえていた。

「あ、ありがとうございます」

そう言いながらチラシを受け取った女子生徒はそそくさと退散していった。

(なるほど、唯たちのあれは悪い意味で影響力がありそうだ)

もはや笑えない状況ではあるが。

「おい、その凡人」

「……………」

そんな僕に高圧的な態度で声を掛ける男子生徒がいた。

外見は平凡な男だが、リボンの色は緑色……新入生であることを物語っていた。

「あんた、上級生に対してため口とはいいい度胸だな？」

「はんつ。貴様のような凡人に敬語を使うなんて、この俺のプライドが許せないんだよ」

どうやら、とんでもないタイプの新入生のようだ。

いい加減こんな屑の相手をするのは嫌なのだが、売られた喧嘩は買うのが僕の流儀だ。

「そう。だったら、そのプライドごと消してくれるわっ!!」
「がっ!!!」

一瞬で距離を詰めた僕は相手の身体に拳を突き刺した。

とはいえ、体は貫通していないが。

だが、相手の精神を思いつきり破壊してやった。

後はあたりさわりのない記憶と心をインプットするだけ。

それらの行為はものの数秒で終わる。

「それにしても、こいつは一体誰なんだ？」

僕はそうつぶやきながら、男子生徒のポケットから生徒手帳を取り出した。

「って、完全に要注意人物じゃん」

少し前に小松先生から渡された、注意すべき人物の名前と同一だった。

「本当に対応することになるとは……」

何とも言えない気分になった僕は、生徒手帳を元の場所に戻すと、誰かに見つからないうちにそそくさとその場を立ち去り、ビラ配りを続けたのだが……

「やっぱりだめか」

ビラ配りを続けていたが、相手の反応は芳しくはなかった。

「やっぱり、あの着ぐるみか？」

軽音部の名前を告げた際に、表情が一瞬変わっていくのを何度も見たのと、『あの軽音部？』という言葉が僕の予想が正しいことを裏付けていた。

「……………はあ」

思わず口からため息が漏れてしまうのも、ある意味しょうがないことなのかもしれない。

「いったん部室に戻るか」

唯たちの成果も気になるため、僕はいったんビラ配りを中断すると部室に向かった。

「あ、戻ってきた」

部室に戻ると唯たち全員の姿があった。

「そっちは？」

「全然ダメだった。浩介は？」

「こっちもだ」

やはりと言うべきかなんというべきか、お互い結果は芳しくなかった。

「どうしたものか……」

「このままだと来年は、あずにゃん一人になっちゃうよ」

「その前に廃部になると思うけど」

腕を組む律に唯が心配そうな表情を浮かべて続いた。

「うわあ!?! 梓! どこに行くんだ!!」

「な、何!?!」

一体どのような光景が、滯の脳内で繰り広げられていたのかはわからないが、突然大きな声を上げて駆け出していく滯に視線を向けつつすぐに彼女から視線を逸らした。

放っておけばすぐに直ることを全員は知っているのだ。

色々な意味で一、二年もいれば、お互いの性格もわかるということなのかもしれない。

「でも、本当にどうすればいいのかしら……」

「ここが部長としての手腕の見せ所だ」

首をかしているムギをしり目に、僕は律を焚きつけた。

「そうだよな。部員が増えれば部費も増えるしな」

(何だか邪な言葉が聞こえたような気がしたけど)

「ブヒッブヒッ」

「唯、それは一人のレディーとしてどうなんだよ?」

そしてダジャレのつもりか、自分の鼻を持ち上げて豚の鳴きまねをする唯に、僕は苦言を呈した。

「よっしゃ! 部員獲得大作戦、開始だぜ!」

「ブヒッ!!」

「だから、一人のレディーとしてそれはどうなんだよ? って、行っちゃった」

僕の苦言に答えることもなく、律たちは部室を飛び出していった。

「梓—— そっちに行つてはダメだあつ!!」

「……………」

そんな混沌と化した部室の中で、僕は静かに息を吐き出す。

ちなみに律の言う大作戦とは、「行き倒れ作戦」という名前だった。

どういふことかというのと、新入生の前でわざと倒れ、部室である音楽準備室まで連れてきてもらい、そこで入部届に記名させるといふある意味詐欺行為にも等しいやり方だった。

尤も、これは

「間に合ってます〜!!」

という、二名の被害者の言葉と逃走で失敗に終わった。

(どうしてそれで行けると思ったのか、その理屈が知りたい)

まあ、独特な理由過ぎて僕には理解ができないかもしれないが。

「僕、チラシを配ってくる」

「だったら、これを——「着ません!」——ちえ」

未だに余っているチラシを手に部室を出ようとする、唯が指し示してきたのは何かの動物の着ぐるみだった。

当然着ることもなく、僕はむくれている唯の相手を律たちに押し付け(任せ)る形で、部室を後にするのであった。

「やっぱり無理か」

「あれ? 浩介先輩」

チラシ配りをするものの、なかなかいい感触が出ない中、ふと言葉を漏らしていると誰かが僕に声を掛けてきた。

「ん? なんだ憂か。何をしてるんだ? いつもならとつくに帰っている時間だろ?」

「はい。ちよつとお姉ちゃんたちのことが気になったので」

憂のできた妹は未だに健在のようだった。

「軽音部の方はどうですか?」

「はつきり言つて最悪だ。このままだと来年は梓が一人になる可能性が高い」

勧誘活動を続けて感じていた感触の悪さに、僕はそう判断していた。

「そうなんですか」

「憂こそ、部活をやる気はないのか? 今からでも十分……というより確実にどこの部でもやっていけそうだと思うけど」

僕のはつきり過ぎる返答に、表情を曇らせる憂の姿に、僕は違う話題を振った。

誰かに見られでもしたらとんでもないことになる。

例えば

『よくも、憂を泣かしたなあ。一生呪ってやるう』

不気味な格好をした姉に不吉なことを言われながら追いかけられるとか。

しかも彼女の場合は、それを本当にやりそうだから恐ろしい。

「でも、私はお姉ちゃんにご飯を作ったりしなければいけないので、部活をする時間がないんです」

「……………だったら、こういうのはどうだ？」

まるで子供を抱えた専業主婦のような返答に絶句しながらも、僕はある一つの策を揭示することにした。

「来年、もし部員が梓一人になっていたら軽音楽部に入部する。唯の進路次第だけど、憂にも十分な時間が出ると思う」

「……………」

僕の揭示した案に、憂は目を瞬かせて僕を見ていた。

「言っておくけど、部の存続っていう理由じゃない。梓のためだ。一月も一人で活動させるといっなのは、先輩としては避けたい。入部に抵抗があるのであれば入部せずに梓と一緒に、活動をするという方法もある。もちろん無理強いはしない。だけど、もし梓が一人にするのが心配だったら、あいつをそばで支えてやってほしいんだ」

「……………浩介先輩」

長い沈黙ののち、憂は静かに口を開いた。

「チラシ、受け取ってもいいですか？」

「……………もちろんだ。恩に着るよ」

その返答は僕にとっては快諾のようにも聞こえた。

「あ、このことは梓には絶対に内緒にしておいて。変に気を使わせるのも嫌だから」

「分かりました」

チラシを渡しながら、僕は他言無用と憂にお願いした。

憂の場合はおいそれと人に話したりしないから大丈夫だろう。

「それじゃ、私ご飯の支度があるので戻りますね。勧誘頑張ってください」

「どうも。気を付けて」

憂の激励を受けながら、僕は彼女を見送った。

(やれやれ……気を使われちゃったかな?)

なんとなく、憂の性質を利用したような気もしなくはないが、まあいいだろう。

利用できるものは何でも利用する。

そうしなければ何も進まないのだから。

「さて、もう一人にも声を掛けるか」

憂いと梓とくればセットになっているもう一人の人物にもとに、僕は足を進めるのであった。

第106話 新歓ライブ

「ふう。疲れた」

自宅に戻った僕は、思わず自室のベッドに倒れこんだ。
「勧誘しても成果なし。バカには絡まれるし」

そして愚痴が漏れてきた。

結果が出ないのはある意味当然だというのは理解はしているつもりなのだが、出なければ出ないでかなりストレスになる。

「これじゃ、来年は本当に廃部かな？」

その後、鈴木さんにも憂と同様の提案をしたが、二人とも僕の提示した案を受け入れてくれた。

鈴木さんは掛け持ちにするのかどうするのかは分からないが。

とはいえ、いくら二人が加わったところで残り二名の部員を獲得しなければ、軽音部は廃部になってしまふのには変わらないのだ。

「何か方法はないものか」

ふとそんなことを考えるが、勧誘方法でできる限りの策は講じているのだ。

これ以上何ができるといえるのだろうか？

(もうこうなれば魔法を使うしかない)

魔法を使えば、入部希望者など何十人でも集めることができるだろう。

だが

「そんなことをしてまで希望者を集めるのは……」

魔法を使うことに関してはかなりの抵抗があった。

そもそも魔法をそのようなことに使うのは、僕のプライドが許さなかつた。

「ん？ 待てよ」

魔法のことで僕はあることを思い出した。

(ちよūdōいい、適任者がいたな)

僕の脳裏によぎったのは一人の人物だった。

僕は思い立ったが吉日とばかりに、コントローラーを装着すると右

手を開くようなしぐさで前方にホロウインドウを展開させ操作していく。

『どうしたの兄さん?』

通信の相手は妹の久美だった。

「久美に折り入って頼みたいことがある」

『な、なに?』

僕の改まった物言いに、久美の表情も強張った。

「来年、この世界の高校『桜ヶ丘高等学校』に入学して、軽音部に入部してもらいたい」

『……また唐突ね』

僕の用件を聞いた久美が苦笑しながら漏らした。

「冗談で言っているわけじゃないから」

『わかってるわよ。これでも妹ですから』

それもそうかと、僕は久美の反論に相槌を打った。

『でも、どうして?』

「久美も言ってたじゃないか。この世界に興味があるって。ならば、これはいい機会だと思っただけだ」

久美の問いかけに、僕は当り障りのない理由を告げた。

別に嘘をついているわけではない。

ただ、本当の理由を隠しているだけだ。

『兄さん、それが本当の理由じゃないよね?』

「……本当に久美には驚かさされるよ」

僕の本心など、久美にはすべてお見通しのようにだ。

『何年兄さんの妹をしていると思っっているの? 兄さんの本心くらいはお見通しよ』

「だな。降参だ」

僕は両手をあげて降参の意をあらわにした。

「後輩に中野梓という人物がいる。久美は覚えているだろ?」

僕の問いかけに、久美は当然と答えた。

「このままだと、彼女には後輩ができなくなるかもしれないんだ。もちろん、部活でのだが」

『……それで?』

「先輩として何もしてやれなかったからな。せめて部員の確保ぐらいはしたい。でも、現実とは残酷なものだ。入部希望者は全くと言っていいほどいなかった」

自分で話していてかなり惨めになってきた。

何せ、それは僕にとつては失敗を意味するものなのだから。

「だから、久美に入部してもらいたいんだ」

『事情は分かったけれど、私は私はすでに彼女と会っているのよ?』

私が入部したら彼女が逆に悲しくなるんじゃない?』

確かに久美の言うとおりであった。

久美と梓はすでに面識がある。

もし、久美が入学して軽音部に入れば、梓はぬか喜びに終わるかもしれない。

だが、久美の場合はその限りではない。

「久美には一完全変装《パーフェクト・コピー》があるじゃないか。それを使つて変装すれば、ばれないだろ」

『……兄さんって時々無茶を言うよね』

僕の出した案に、久美はため息をつきながらつぶやいた。

「僕は無理だと思つていったことは一度もない」

これまでもいろいろな無茶難題を吹っ掛けたが、それらはすべて組が自力で何とかできると判断したからだ。

あそれは今回のことも同様だ。

『まあ、別にいいけどね』

そんな僕に、久美は降参するように肩をすくめた。

『私もここで一度じっくりと根を生やして勉強して見たかったし』

それはある意味、承諾の言葉だった。

「ありがとう久美。恩に着る」

『家族なんだからこれくらいは当然だよ。任せて。この高月 久美子、兄さんの一番弟子として、へまはしないから』

「信じてるよ」

久美の頼もしい言葉に、微笑しながら応じた僕は、そのまま別れの

言葉を口にして通信を切った。

「さて、これで必要なことはした。後は……」

新歓ライブを成功させるだけだ。

「今日もやるのか？」

「もちろん！ 今日にはスパイ大作戦だ！」

翌日の放課後、僕は律に珍妙な勧誘活動をするのかどうかを尋ねたのが今の答えだ。

漣とムギの二人はすでにビラ配りに向かっているため、部室にはいない。

「……なんとなく何をするのかはわかるけど、？あまり変なことはせずに、自重してよ」

「わかっているって。それじゃ、行って来るな」

本当に分かっているのかどうかは疑問だが、僕は律と油井に梓の三人を見送った。

三人がいなくなれば、この部室に残るのは僕一人。

「さて……そろそろかな」

そうつぶやいた時だった。

「あの、入部希望なんですけど」

部室を訪れる一人の女子生徒。

栗色の髪にやや細めの目は、どこか温厚そうなイメージを与えさせるのに十分だった。

リボンの色は赤なので、2年生で間違いないだろう。

「お茶とかは出ないけど、どうぞ？」

「あ、はい」

とりあえず僕は女子生徒を前の梓の席に座らせた。

「それじゃ、これからに産質問させてもらうけどいいかな？」

「はい、大丈夫です」

僕の問いかけに、女子生徒はうなづいて答えた。

それを確認した僕は、当たり前障りのない質問をすることにした。

「これまで音楽経験は？」

「昔、小さいころに」

僕の最初の問いかけに、しっかりと答える彼女の様子を見ながら、

僕は次なる質問をぶつけた。

「得意な楽器、やりたい楽器はあるかな？」

「できれば、ベースをやりたいです」

女子生徒の答えはこれまでのものよりもはっきりとしたものだった。

しかも、目も輝いて見える。

(彼女もか)

その姿で、僕の中で一つの結論に達した。

「申し訳ないんだけど、ベースは今たりているんだ」

「そうなんですか」

僕の返答に、女子生徒はショックを受けた様子で相槌を打った。

「あ、これつまらないものだけどよかったら食べて」

「ありがとうございます」

いろいろなお菓子の入った小袋を受け取った女子生徒は、そのまま部室を去って行った。

「やれやれ……二年連続でこういうことをするのはかなり疲れるな」

その後姿を見送りながら、僕はため息をつきながらつぶやいた。

それは去年のこと。

今回と同じように、入部を希望するものが多数僕のもとを訪ねてきた。

というのも、その時がたまたま僕がビラ配りをしていない時間帯だったという偶然によつてだ。

最初はラツキーと思って話していると、入部を希望した生徒たちの大半が楽器を演奏したこともなくせに演奏ができるという嘘(見えかもしれないが)をついたり、明らかに特定人物を狙って入部しよう

とする者たちばかりだった。

その時は当たり障りのない理由で断ったが、それから僕は入部を希望する者全員（約一名除く）に当たり障りのない質問をすることにしたのだ。

その一つが今の“音楽経験があるか否か、そしてあるのであれば得意な楽器や、やりたい楽器がなにか”

次が“尊敬する人物はだれか”だ。

この二つのいずれかで嘘をついたり、過剰な反応を示したりすればその人物はお断りしている。

これは軽音部を守るためだ。

「まったく、気が休まらないよ」

思わずそんな愚痴が漏れた。

自分が買ってやっているの、自業自得なのだが。

「たっだいまー」

「はあ……楽しかった」

そんなこんなをしていると、スパイ活動をしていた律たちが戻ってきた。

「それで、どうだったんだ？」

「どこの部もいろいろと考えていました」

そういつて席に腰掛けながら梓はもらってきたのかチラシを渡してきた。

真っ赤なチラシに“青春の汗を流そう”というキャッチフレーズが書かれていた。

「なるほど、これは確かに興味を引くな」

「あ、こっちには入部特典が付いています」

さまざまな部活で色々な案を出しているのは明らかだった、

そんな時、部室のドアが開く音が聞こえた。

「いらっしやいませー！」

（ここはファミレスか、コンビニか？）

三人の反応に、僕は心の中でツツコんだ。

「って、なんだよ。滯とムギか」

入ってきたのは馬と猫のぬいぐるみを着ている漑とムギだった。

「ビラ配り終わったんだ？」

「うん。とても楽しかった♪」

なんでも楽しめるムギはある意味最強なのかもしれない、

そんな時、再びドアが開く音が聞こえた。

『いらっしやいませ！』

(だから、ここはコンビニか?)

僕は心の中でツツコみを入れた。

「つて、さわちゃんかよ」

「何よ、ひどい言い草ね」

入ってきたのが山中先生であることが分かった律が漏らした言葉に、頬を膨らませた。

「すみません。それで、一体どうしたんですか？」

とりあえずいつまでたっても話が進まないの、謝りながら話を先に進めた。

「衣装なんだけど、こんなの作ってみました」

自信気に僕たちの前に掲げたのは、メイドっぽい服だった。

「制服でいいですっ」

その服を見た瞬間、すさまじい反射神経で梓は却下した。

「ええ、でもこの服のほうが——」「制服で！」——わかりましたよ」

なおも食い下がる山中先生に、今度は漑たちも参戦した。

これによって、山中先生の案は没ということになった。

そんなこんなで、また一日が過ぎて行き、ついに新歓ライブ当日を迎えた。

「なあ、律。この部分なんだけどさ」

ライブの開始時間まで部室のほうで僕たちは待機していた。

「梓、緊張のほうは大丈夫か？」

律たちにとっては二度目の、梓にとっては最初の新歓ライブだ。

緊張している可能性もあったので、聞いてみたが返ってきたのは

「はい！ 大丈夫です」

という、頼もしい返事だった。

「それだったら安心だ、頑張っつていこうな」

「はいっ」

僕と梓で互いに気合を入れる。

そんな中、唯はといえば先ほどから指をくねくねさせたり上のほうに向けたり等々、意味の分からない行動を繰り返していた。

「何をやってるんだ？ 唯」

「えへへ、何でもないよ」

律の問いかけに頭をかきながら答える唯の様子に、ますます疑問が募っていった。

「あ!? もうライブの時間です!」

そんな梓の言葉に、僕は疑問を頭の片隅に追いやった。

「よっしゃ! それじゃ、ライブで挽回するぞ!」

『おー!』

律の言葉を筆頭に、僕たちは気合を入れるのであった。

「あ、そうだ。唯」

「何? 浩君」

みんなが部室を出ていく中、僕はふと言わなければいけないことを思い出したため唯に声をかけた。

「絶対にウインドミルはするなよ?」

「ういんどみる?」

僕の言っている意味が分からなかったのか、首を傾げている唯にわかりやすく説明することにした。

「始業式の日をやっていた奴だ。腕をぐるぐる回す奴」

「へえ、あれがういんどみるって言うんだ」

ようやく言いたいことが伝わったようで、僕は軽く息を吐き出した。

「でも、どうして？」

「あれは、一歩間違えれば弦を切ることもなるし、周りにいる人にぶつかったり指を怪我したりするからだ」

ウインドミル奏法とは、いわゆるステージでのパフォーマンスだ。歯ギターなどがいい例だろう。

右腕を風車のように回して演奏をするという、ダイナミックなパフォーマンスだが、周りにいる人に腕がぶつかったり、弦を強くストロークさせて切ってしまったり、指を切ってしまうなどなど初心者がやれば大抵が怪我や失敗などといった結果となる。

まさにハイリスクハイリターンだ。

それを名前も知らずに成功させている唯はある意味最強だと言っても過言ではない。

「わかったー！」

「……………」

本当に分かっているのか疑問だが、信じるしかないため、僕は唯を信じることにした。

そして僕たちは新歓ライブの会場である講堂へと向かうのであった。

「新入生の皆さん、ご入学おめでとーございます。軽音部です」

幕が上がり、新歓ライブが始まった。

開始早々にお祝いの言葉を口にしたのは唯だった。

「私たち軽音部は、毎日お茶を飲んだり練習をしたりしています。とても楽しい部活なので、もし興味があったら部室に来てください」

唯のMCに会場に来ていた新入生たちが拍手を送る。

ふと右隣に視線を向けrてみた。

「……………」

緊張のあまりか顔がこわばっている梓の姿があつた。

(大舞台で演奏をしたとはいえ、緊張はするか)

こればかりは慣れるしかないため、僕は苦笑しながら視線を会場のほうに戻した。

「それじゃ、聞いてください。『ふでペンくボールペンく!』」

こうして、部の存続をかけたライブが始まるのであつた

第107話 結果

新歓ライブも無事成功という、最高の結果で幕を閉じた。

「ぷはあ！ 今日のリブはとても良かったな！」

「梓と唯と浩介の絡みもばっちりだったしな」

「本当ですか！」

互いに労う中、僕はといえばあまり釈然としていなかった。

（唯のやつ、やるなといったのにやるんだもんな）

原因は唯が最後の曲である『ふわふわ一時間《タイム》』で行った演奏方法だ。

「まあ、肝心の唯が完全に燃え尽きているけど」

そんな律の指摘通り、机に突っ伏している唯の姿は、某ボクシング漫画の主人公のごとく真っ白に燃え尽きていた。

「ウインドミルなんてするからだ」

ぐるぐると腕を振り回していた唯に、会場中がざわついたのは記憶に新しい。

それがいいのか悪いのかは定かではないが。

「だめですよ先輩。これからビラ配りに行くんですから」

「ええ〜!? あずにやんの鬼ー」

抗議をするも梓に引つ張られていく唯は、そのまま部室から去って行った。

それからさらに数日が過ぎた放課後。

この日も新入部員を獲得するべく、待っていたが来る兆しは一向になかった。

「来ませんね……」

机に突っ伏すように顔を載せていた梓が力なくつぶやいた。

「まあ、まだ時間はあるから」

「今月いっぱい様子を見よう」

「そうですね」

滯と僕の言葉に、梓は力なく笑みを浮かべると席を立った。

「ビラ配り？」

「あ、いえ。ちょっとお手洗いに」

ムギの問い掛けにそう答えた梓は、そのまま部室を後にした。

「後でもう一度、みんなでビラ配りに行ってみるか」

「そうだな」

「行くんなら、普通の格好で頼むよ」

ビラ配りに行くことを提案した律に、僕は心からそう頼んだ。

あのぬいぐるみは確実に逆効果になるのは確実だ。

「うーん」

「どうしたんだ？」

そんな中、一人腕を組んで唸り続けている唯に、僕は問い掛けた。

「ちゃんと入ってきやすいようにしておいたんだけどな」

「……………」

唯のボヤキに、僕は無性にやな予感を覚えた。

ろくでもないことをしているのではないかという、予感が。

自分の恋人にそのような疑いをかけてしまうのは少しばかり気が

引けるが、唯ならばやりかねないのだ。

そんなことを思っていると、ドアが大きな音を立てて開け放たれ

た。

見ればお手洗いに行っただけの梓が、血相をかいだ様子で戻ってきた。

その脇に抱えられている置物が、いやでも目に入った。

「唯先輩！　これを片付けてください!!」

「ああ、私のケロ〜」

それはカエルの置物だった。

お世辞にもかわいいとは言えない置物の首元には『ようこそ、軽音部へ!』と書かれたボードがかけられていた。

「どうやらこれが唯の言う『入りやすい方法』らしい。」

「唯、この置物はやめておけ」

「ぶーぶー、浩君とあずにゃんのケチ」

僕の指示に、唯が頬を膨らませながら抗議をしてくるが、僕はそのには取り合わなかった。

(あれ? そういえば梓はお手洗いに行ったんじゃ?)

そんな疑問が頭をよぎったが、さすがに聞くのはまずいので頭の片隅へと追いやった。

だが、梓はすぐさま部室を後にしたので、おそらくはお手洗いに行ったのだろう。

「そういえば、浩介先輩ってもしかして入部希望者の人を門前払いにしませんか?」

「なに? 藪から棒に」

梓が戻ってきて少してから突然聞かれた言葉に、僕は首をかしげずにはいられなかった。

「実は純が、浩介先輩が、入部希望者を次々に切っている門番だ」みたいなことを言っていたので」

「どうやら彼女とは今一度、話をしなければいけないようだな」

梓の言葉を聞いた僕は、指の関節をぽきぽきと鳴らしながらつぶやいた。

「お、落ち着けて!」

「そ、そうですよ! いくら純でもそれは危ないですから!」

「冗談のつもりで言ってたんだけど」

冗談のつもりで言ったはずが、なぜか律たちがものすごい勢いで静止してきた。

この二人がふだん僕のことをどう思っているのかがわかりやすかった。

「それで、その噂って本当なの?」

「本当だけど」

そして麦の改めての問いかけに、僕は隠さずに答えた。

「あっさりと認めた!」

「って、何をやってるんだよ!」

「そうですね！　せっかくの入部希望者なのに！」

すんなりと僕が認めたことに驚きをあらわにしている漕をよそに、律と梓が僕を問い詰めた。

「普通の入部希望者だったらいいんだけど、普通じゃない奴らばかりだったから」

「どういこと？」

「楽器経験もないくせに経験者だとか、明らかに特定人物と組むのを狙っているような嘘をつくし」

あまりにもわかりやすいウソのため、ため息すら漏れてくる。

「でも、それくらいだったら平気でやってるやつもいたぞ」

「……………」

誰がとは言わなかったが、視線を唯のほうに向けていたのでおそらくは唯だろう。

「そういうやつを簡単に言うと……………」

「言うど？」

「“漕たん萌え萌え”とか、“あずにゃんぺろぺろ”とか言ってるような連中」

『…………』

僕のたとえ話に、全員が目を細めて僕のことを見ていた。

「な、なに？」

「い、いやあく浩介の口からそんな単語が出てくるなんて思ってもいなかったから」

「一応念のために言うけど、例えであつて僕が言っている言葉じゃないからな？」

苦笑を浮かべる律の言葉に、僕は念押しするように言った。

「それはともかく、こんな奴らと一緒に部活をしたいと思う？」

「絶対にいや！（です）」

答えはすぐに出たようだ。

「だからそうならないように、振り分けただけ」

「そうだったんですか」

事情を説明すると、梓は納得した様子で頷いていた。

結局この日は、入部希望者が来ることはなかった。

「なあ浩介」

「なんだ？」

数日後の放課後。

部室に行こうとした僕を呼び止めるように声をかけてきた慶介のほうに、面倒くさいと思いつつも顔を向けた。

「俺は今、とても重大な問題を抱えているんだ」

「問題？ それはいったいなんだ？」

慶介の表情から、ふざけた内容ではなく真剣なものであると悟った僕は、慶介に詳しく話を聞尋ねた。

「それはだな」

「それは？」

かなりもつたいぶっているが、それだけ緊張感が増していく。

「浩介が俺に構ってくれる時間が、日を追うごとに減っているということだ!!」

「……………」

慶介の言葉に、教室が一瞬凍りついた。

まるで氷点下の世界へと紛れ込んだような冷たさを感じた。

「新入部員獲得で忙しいのは分かるけど、もう少し俺にも構っても」

——「高の月武術・圧っ!!」——「ゲボルビン!?!」

慶介が言い切るよりも早く、僕は体術（正確には魔法を使用した体術だけ）で慶介を吹き飛ばした。

「何が重大な問題だっ!」

「な、なんだか、最近この鉄拳制裁が快感になりつつある、俺だった……ガクッ」

そんな背筋の凍りつく言葉を残して慶介は気絶した。

「そろそろ、こいつをどこかに隔離でもした方がいいかな」

腕を組みながら、そんなことを考えてしまう。

「この時、慶介とあの様な関係に至ってしまおうということを、彼はまだ知らないのであった」

「おいこらそこ！ 勝手なナレーションを入れるな!!」

おかしなナレーションを入れてきた、明るい茶髪のロングヘアのクラスメイト（確か立花さんだったような気がする）に、僕は声を上げた。

「本当に仲がいいよね、二人とも」

「頼むから、変な目で見ないで。というか勝手な妄想は絶対にしないで、佐伯さん」

どういう縁か、今年も同じクラスになった佐伯さんに、僕は必死に懇願した。

「わかってるわかってる」

（絶対には分かってない）

たぶん口だけだと思いつつながら、僕は部活に向かっていく佐伯さんを見送るのであった。

「お幸せに」

「おいこら！ にやにやしなから言うな！ というか、慶介と僕の関係を勝手に解釈……ってこら、人の話を聞けっ!!」

にやにやと笑みを浮かべながら意味深な言葉を残して去って行く立花さんに、ツッコむがそれを聞くことなく立花さんは教室を去って行った。

「つと、そうだった。早く部室に行かないと」

なんとなく、変な目で女子に見られそうな気がしていた僕は、また律に文句を言われるのも嫌なので、早々に教室を後にするのであった。

「今日も来ないな」

「これ、今月中に来なかつたらあきらめた方がいいぞ」

夕日が差し込む部室で、ぽつりとつぶやいた漣の言葉に、僕はいつの日にか言ったことを口にした。

梓は用があるのかまだ部室に来ていない。

「そうだな……にしても、何か悪いことをしたかな？」

(しまくりだろ)

律の漏らした言葉に、僕は心の中でツツコんだ。

不気味なぬいぐるみや、かなり違うがデート商法の手口のような勧誘方法などなど。

「でも大丈夫よ、きつとなんとかなるって」

「いつも前向きなのがすごいよなムギは」

「ありがとう、高月君」

いろいろな意味を込めて感心しながらつぶやいた僕の言葉に、ムギが笑顔でお礼を言ってきた。

「こうなったら、虫取り網大作戦で部員を獲得するか！」

「……律、それはどういう作戦だ？」

律が提案した作戦に、漣が内容を尋ねた。

「それはだな、新入生を虫取り網で捕まえて——」

「それじゃ、ただの拉致だろ！」

作戦の内容を聞いた僕は、思わずツツコみを入れてしまった。

「それじゃ……——「私はこのままでもいいと思う」——はい？」

律の言葉をさえぎるようにして告げられた言葉に、全員が唯のほうへと視線を向けた。

「今はあずにゃんがいないけど、こうして6人で集まってお茶を飲んだりお話をしたり、練習をしたりするのってとても楽しいと思うんだ。だから、このままずっと6人でいいと思う」

「……放課後ティータイムは6人。それ以上でも以下でもない、か」

「それでいいか。1年のうちに部員のこととは考えようぜ」

唯の言葉は、もしかしたらただの諦めた言葉にも聞こえるかもしれ

ないが、もしかしたら最善の選択だったのかもしれない。

それは目には見えないものだが、いつの日にかはつきりとわかる日が来るはずだ。

とはいえ、このまま何もしないというのはだめだが。

「あなたたち、一年は短いわよ?」

「え? だって、365日もあるのに……あ、もう何日かすぎちゃった」

山中先生の重みのある言葉に反論する唯の言葉は、唯らしいものだった。

きつとそれがわかるのはかなり先になるような気がする。

「そういえば、ムギ今日のお菓子は?」

「タルトを持ってきたの」

律の問いかけに、ムギは笑みを浮かべながらケーキが入っている箱を取り出した。

中に入っていたのはイチゴやバナナなどの7種類のケーキだった。

「あ、あずにゃんはバナナだと思うんだ。だからバナナは取つといてあげよう」

「それじゃ、私は——」

唯の言葉を受けて、全員が好きな味のケーキを手にしていく。

ちなみに僕は、狙っていたかのように用意されていたチーズタルトを選んだ。

(にしても、一体ドアの前にいる奴はいつになったら入ってくるんだろう?)

先ほど(とはいっても、唯が新入部員の勧誘をやめることを口にしたあたりだけ)から感じる梓の気配に、僕は心の中で首を傾げながらチーズタルトに口を付ける。

そこで、ドアが開いて梓が姿を現した。

「っ!? げほっ! ごほ!」

その梓の姿を目の当たりにした律と唯が、大きく咳き込んだ。

それは口の中の物を嘔き出さないだけ、ましだったのかもしれないと思えるほどの驚きようだった。

「ご、ごめん！　すぐにビラを配りに行くからっ」

「ムギ先輩、ミルクティーをください。後、バナナタルトも」

慌てて席を立った唯が、梓の横を通り抜けた時に、梓が珍しく自分から紅茶とお菓子の催促をした。

「私、今年はこの6人でやりたくになりました」

「梓……」

唯の話を聞いて、彼女の中で何らかの心境の変化でもあったのかも
しれない。

それがどういったものかまでは、僕には分からないが。

「あずにゃく——」

「唯先輩、これからはもっと厳しくいきますからね」

そんな梓の言葉に感動したのか、いつものように抱き付こうとした
ところで、唯のほうに振り向いた梓がきっぱりと宣言した。

「はい、ギター出して」

「え？」

その梓の言葉に、唯はぴたりと両腕を前に突き出した姿で固まっ
た。

「そりやそうなるわな」

新入部員の獲得をやめればそこから生じた時間が、練習に回される
ことになるのは当然のこと。

「こ、浩君？」

「その視線は、助けてとでも言いたいのか？」

僕に救いを求めるような視線を投げかけてくる唯に聞いてみると、
必死に首を上下に振って頷いた。

「梓、せっかくなんだからケーキでも食べたらどうだ？」

「浩君！」

それを受けて僕の言葉に、唯が明るい表情を浮かべる。

「でも、浩介先輩」

「そのあとに練習をすればいいんだし」

あまり浮かない顔をする梓に、僕はそうつぶつけた。

「それもそうですね」

その僕の言葉を聞いた梓は、先ほどとは打って変わってすんなりと頷いた。

一方唯はといえば、裏切られたといわんばかりに固まっていた。かと思えば、僕たちに背を向けて

「やっぱり、新入部員カモ〜ン!!」

と、いう切実なる願望を口にしていた。

これが、新入部員獲得を目指していた僕たちの顛末であった。

3年生編 『片づけ』 第108話 寝言と掃除

新入生の勧誘をやめ、時期は早くも4月下旬となった。

5月の初めにはゴールデンウィークという、大型連休がある。

クラスメイトも、この連休はどうするのかという話しで持ち切りだ。

やれ遊びに行くとか、家族旅行だとかそういったのが主だったが、もつとも部活がある人にとってはあまり意味がなかったりもするわけだが。

ちなみに軽音部もその例にもれず、部活は行おうとのことだが、はたしてちゃんと練習をするのかどうかもわからない状況だ。

それはともかく、この日もいつものように放課後を迎えた。

「ムギ、浩介。早くいくぞ」

「わかってる」

律の催促に応じながら、僕は荷物を素早くまとめていくと鞆とギターケースを手に律たちのほうへと足を向けようとしたところで、ふと違和感を感じた。

「あれ、今日の日直はムギだったか？」

黒板に書かれている文字（6限が英語だったので、書いてあるのは当然英語だ）を消しているムギに、僕は首を傾げながら尋ねた。

僕の記憶が正しければ、この日の日直は唯だったはずだ。

「ううん。本当は唯ちゃんなんだけど」

僕の疑問に困ったような笑みを浮かべたムギが見ている方向に視線を向けると、そこには机に突っ伏して眠っている唯の姿があった。

「お昼からずっと眠ってるの」

「って、おい！」

眠ってる唯の姿を見た律が、盛大にずっこけた。

「さっきからずっと起こしてるんだけど、なかなか起きないのよ」

（後ろ側から聞こえていた寝息は、唯の物だったのか）

「ほら唯、起きろ。放課後だぞ」

律は唯の席まで移動すると軽く唯の体をさすって起こそうとした。

「むふふー、ダメだよ、浩君。そんなところは」

『……………』

唯の寝言に教室中が沈黙に包まれた。

そして自然と視線がこちらに集まってくる。

「な、なに?」

「お幸せに」

「あらあら、まあまあ★」

視線に耐えかねて口を開いた僕にかけられるのは、ある意味罵倒されるよりもつらいものだった。

「そこ! 意味深な言葉を投げかけるな! それとうつとりとした表情で見ないで!」

なんだか最近自分のペースが乱されてばかりのような気がする。

「ビュービュー、この色おと——ごふあ!」

有無も言わずにからかってくる慶介を黙らせた。

「というか、唯も起きろ! いったい何ちゆう夢を見てるんだ!!」

「大丈夫だよ。今日は日曜日」

体を先ほどよりも激しく揺らしても唯が起きる気配はなかった。

「浩介、ものすごくいい案を思い出した」

「一応聞くけど、目覚めのキスをしろとかじゃないよな?」

万策尽きたところで、律から頼もしい言葉がかけられた。

だが、その表情にある笑みが無性に気になった僕は、律に尋ねた。

「……………もちろん」

「何、今の間は?」

「唯、ケーキだぞ!」

僕の問いかけに頷くまでに開いた間に僕は追究しようとするが、それを無視して律は“いい案”を実行した。

「そんなので起きるわけが——」

「う……………ん」

声掛けだけで起きる訳がないとたかをくくっていた僕の言葉を遮るように、唯は体をもぞもぞと動かすとゆっくりとした動きで上半身を起こした。

(お、起きた!?)

まさか起きるとは思っていなかったので、僕の驚きはとてつもないほどに大きかった。

「……ケーキない。嘘つき」

だが、寝ぼけたような目で周囲を見渡した唯は、ケーキがないことがわかるとそのまま眠りについてしまった。

「なっ!? ムギ、本物のケーキを!」

「ラジャー!」

(もう諦めろよ)

僕はため息交じりに心の中でつぶやいた。

「こうなったら、最終奥義だ。平沢さん、愛しのこう——」寝むってる」

——ありがとうございます!」

いつの間にか気を取り戻していた慶介が、馬鹿げたことを言おうとしていたため、僕は裏鉄拳で慶介を沈めた。

「あ、いたいた」

そんな中、ふと聞こえてきたのは担任であり顧問でもある山中先生の声だった。

すれ違うように教室を後にしていく生徒に声をかけながらこちらのほうに歩み寄るそのさまは、猫かぶりなのか、それとも巢なのかは言うまでもないだろう。

簡単に言えば、教師らしい教師の姿だった。

「あなたたち、この間化した着ぐるみなんだけど、そろそろ返してもらえないかしら。演劇部のほうで使うみたいなの」

(いったい何に使うつもりだろう)

何度も見た着ぐるみに、僕は純粹に疑問がわいた。

普通に考えれば演劇なのは間違いないが、どういった演劇の内容になるのが非常に気になった。

「そういえば、この間の勧誘で使った後、どうしたんだ?」

「うーん……あれだったら、確か使わなくなったから部室のほうに置いてあったはずだけど」

「返せよ。借りものなんだから」

滯の問いかけにあげに手を添えて思い出すようにつぶやく律に、僕はため息交じりに言った。

「それじゃ、早く部室に行くわよ」

「あれ、山中先生もついていくんですか？」

先導する形で歩き出す山中先生に、滯が尋ねた。

「ええ。演劇部の子に渡さないといけないし、なんとたつて顧問だからね」

顧問の部分で胸を張る山中先生は、ある意味すごい教師かもしれない。顧問だからいい。

「それじゃ、部室へ出ばーっ！」

「あ、待てよ律！」

ずんずんと進んでいく律の後を追うようにして、滯都立に山中先生は教室を去って行った。

「ムギはどうする？ もしなんだったらこっちのほうで日直の作業を引き受けるけど」

本来は唯がやるべきだが、本人はおそらく起きないと思うので、誰かが代わりにやるしかない。

ならば、一応恋人である僕がやるのが筋というものだろう。

「ううん、大丈夫よ。私ね、友達の日直の作業を手伝うのが夢だったの。だからこんな早く夢がかなってうれしいの♪」

「そ、そう」

ムギはいろいろな意味で幸せな人なのかもしれない。

「だから律ちゃんのほうに行行って」

「……わかった」

テコでも意見を変えなそうだったので僕は素直に頷くと、鞆の中からメモ帳を取り出すとそれを一枚破って、走り書きをしていく。

『こら！ 授業ぐらい、まじめに受けろっ。先に部室に行ってるぞでいいか』

前半で戒めの言葉、後半で本当の要件を書いておいたメモを僕は唯の机に置いておくとそのまま教室を後にするのであった。

「あれ、浩介」

「着ぐるみは？」

部室に到着した僕に気が付いたのか、こちらのほうに視線を向けながら名前を呼ぶ滯に、僕は本地を切り出した。

「それだったら……」

僕の疑問に、滯は視線を横に移動させる。

その先にいたのは律だった

「あ、そうそう。ここにを入れておいたんだった」

何かを考えている様子の律は、ぬいぐるみを置いていた場所を思い出したのか音楽室と部室をつなぐ連絡用の通路であるドアのほうに歩み寄っていく。

そしてドアを開けた瞬間、僕たちはその光景に言葉を失った。

別に、そこが異界化しているわけでもゾンビが群がっているわけでもない。

あるのは段ボールや本といったものが無造作に積み上げられている惨状だった。

「なにこれ？」

山中先生がそう問いかけたくなるのも当然だった。

そんな中に律は気にすることなく入ると、段ボールの山の一部に腕を突っ込んだ。

(なんだか、嫌な予感がするんだけど)

無謀さに積み上げられたダンボール。

そしてその間に手を突っ込む律。

まさかとは思うが、べたなことにはならないだろうと思いたいが、

念のために一步内側に下がった。

「あつた！」

そう言つてぬいぐるみを取り出すと僕たちに見えるように掲げた律だったが、取り出した拍子に積んでいた箱がバランスを崩して一気に崩壊を始めた。

「ぎゃああああ!!」

崩れ始めた瞬間に素早くドアを閉めた僕は、中から聞こえる断末魔をただただ聞いていた。

そして中の騒音が止んだところで、僕はゆつくりとドア開けると中から豚の置物が転がってきた。

「律、大丈夫か？　大丈夫なら返事しろ。大丈夫じゃないのなら言つて」

段ボールに埋もれた倉庫と化した連絡通路内に向けて呼びかけた。

「それってどっちも同じ意味にならないか？」

「いや、わかっているから」

真剣な面持ちで指摘してくる滯に、僕は即答で答えた。

それはともかく、一刻も早くジャングルと化した連絡通路から目的のもの（プラス律）を探し出さなければいけない。

「おう？」

「見つかったのか?！」

段ボールの隙間から布のようなものが見えた僕は、それを引っ張つた。

「ぬいぐるみが出てきました。とりあえずこれを返してもらつていいですか？」

「いいけど、律ちゃんは？」

山中先生が求めていた犬のぬいぐるみを手渡すと、山中先生は心配そうに尋ねてきた。

「はい。すぐに救出しますから」

「それじゃ、お願いね」

僕の答えを聞いて、山中先生はそう告げるとぬいぐるみを片手に部屋を後にするのであった、

「さて、救出しますか」

「どうやってするんだ？」

「そんなの、決まってるじゃないか」

気合を入れる僕に不安そうな表情を浮かべて聞いてくる滯に、僕は当然だといわんばかりに答えると段ボールの一つを持ち上げる。

そしてそのまま部室のほうにもっていった。

さらに通路内にあるダンボールを持ち上げると部室に運ぶのを繰り返していく。

「なんというアナログな」

？

いったい何を期待しているのかが微妙に気になったが、僕は黙々と段ボールの運搬をしていく。

「出てきた」

「律?! 大丈夫か!」

とりあえず部室のほうに引きずり出すと、滯が慌てた様子で声をかけた。

だが、返事がない。

「浩介! 救急車を呼んで!」

「落ち着け、脈はある。ただ気を失っているだけだ。少し寝かせておけばすぐに気を取り戻す」

命の危機だと勘違いしたのか、取り乱した様子で迫ってくる滯に僕は安心させるように告げた。

「そ、そうなのか……よかった」

「……………」

ほっと胸をなでおろしている滯の姿に、律と滯がどれほど仲がいいのかを狭間見たような気がした。

「さて、問題はどう運ぶかだけだ」

さすがにここで寝かせるわけにはいかないのでベンチのほうに運ぶ必要がある。

だが、問題は僕が運ぶとなると完全にお姫様抱っこのような感じになることだ。

背負うとおろす際にものすごく面倒になる。

ただし、これをするとなると問題は

『浩君、一体何をしてるのかなかな?』

満面の笑みを浮かべて詰め寄る唯の姿が浮かんだ。

不要なトラブルを避けるには、やらないことが一番。

だが、そういうわけにもいかないので僕がとった行動は

「濡、律を運ぶから足を持ってくれる?」

「わ、わかった」

濡に手伝わせることだった。

腕のほうであれば唯も妬きもちをやくこともないだろうし、見てはいけないものを見る危険性もなくなる。

まさに最善の策だった。

こうして、無事に律をベンチのほうに運ぶことができた。

「こんにちは……って、どうしたんですか!」

「ああ、梓。実はな」

ちようどいいタイミングで部室を訪れた梓が、部室の惨状に驚きをあらわにしたので、濡が一連の事情を説明してくれた。

(今のうちに、あそこの荷物を全部こっちのほうに持ってくるか)

これもいい機会なので掃除をすることにした僕は、連絡通路内の段ボールなどを部室に移動させることにした。

「———というこで、これから掃除をします!」

「ええ……」

それから少しして、ようやく起きたのか寝癖を付けた状態で部室にやってきた唯と、意識を取り戻した律に掃除をする旨を告げると嫌そうな表情を浮かした。

「そんなに掃除がいやなのか?」

「だって……」

「私たちは」

その言葉に、唯と律が手を取り合うとささつと窓際のほうに移動して、

「三度の飯より掃除が嫌いだ!!」

「どういう意味だっ!!」

二人の口にした妙な格言に濤が全力でツッコんだ。

「そもそも、ここの掃除は音楽室の掃除当番がするんじゃないのかわ？」

律の反論に唯も腕を上げて賛同した。

「それはそうなんだけど……」

「こんな私物だらけの掃除を頼めるわけないだろ」

律のもつともは反論にが弱くなる濤をフォローするべく僕が代わりに答えた。

「だらけというより、全部私物ですけど」

僕の言葉に反応した梓は、すでに掃除を始めていた。

「うん、確かにっ!」

腕を組んで頷く律の姿はあきれを通り越して清々しきささえ感じた。

「しようがない」

だが、ようやく律たちはやる気を起こしたようで律は段ボールの山を、唯はカエルの置物を手にするると連絡通路のほうへと向かった。

「せっかくしまっておいたのに」

「おいこら、何平然と元に戻そうとしてるんだ!!」

自然な動作で連絡通路に置こうとする二人に一喝した。

「ちえ、何とかごまかせると思ったのに」

「……一遍、この世の物とは思えない痛みを味わった方がいいかな?」
律の悔しげな表情に、僕は笑みを浮かべながら問いかけた。

「しようがない。まじめにやるか」

「最初からそうしてくれ」

ようやくやる気を起こしてくれた律に、僕は心の底から思いながら答えるのであった。

第109話 掘り出し物

「それにしても、こうしてみるといろいろありますね」

連絡通路内のすべての荷物を部屋のほうに運び終えたのを見た梓が、しみじみとした様子でつぶやいた。

「何かあるたびにとりあえずということ置いていたからね」

ムギの言うとおりだ。

『置く場所がないからとりあえずここに』や『使うかもしれないからとりあえず』

そんな感じで連絡通路に置いていったのだが、気づけばまるでジャングルのような惨状となっていた。

フォローするのであれば、これが三年かけてであるということぐらいだらうか。

「それにしてもなんだ、このぬいぐるみの山は？ お店でも開くつもりか？」

「それ、私が200円で取ったやつだよ！」

「知るか。とっとと持って帰れ」

胸を張りながら答える唯に僕は一周して近くにあったレモンか何かのぬいぐるみを唯に手渡した。

「ぶーぶー」

そんな僕の反応に、頬を膨らませながら抗議してくるが、僕はそれを無視した。

「あ、これも持ってけ」

そうやって律が渡したのは、お世辞にもかわいくもなんともないおじさんの頭だった。

おそらくはキーホルダーか何かだろう。

「それは私のじゃないよ」

「へ？ それじゃあ、誰の」

唯の返事に、律はキーホルダーのようなものをまじまじと見つめながら首をかしげていると、それを強奪する人物がいた。

強奪した人物……濡は大事そうに抱えるとすたすたと自分のカバ

ンのほうに向かっていく。

「あんたのかよ!!」

律がそうツツコみたくなるのもわかるような気がした。

「あれ、そっちのほうまで片づけるのか?」

「うん。使うことがなかったからついでにね」

連絡通路ではなく食器棚と化した場所の整理をしているムギに声をかけるとそんな答えが返ってきた。

そして次々にテーブルの上に置かれていくお皿やグラスの数々。

「こうして見てみると豪華だよなー」

テーブルの上に置かれた売れば数百万の値は下るであろう者の数々に、律は感嘆の声を上げた。

そんな中、唯はおもむろに一つの箱を手にした。

それはムギが箱の中に詰めていたものなので、中に入っているのは何らかの食器だろう。

「ムギちゃん、これっていくらぐらいするの?」

「それを聞きますか」

ある意味禁断の質問に、僕は驚きながらもムギの答えを待った。

「えっと、値段は分からないけれどベルギー王室で使われていたものと同じだったはずだけど」

「王室」

ムギの答えは僕の予想の斜め上に行くものであった。

(確実に方はいくな)

価値は分からないが、割ったらシャレにならないのだけは分かった。

そんな中、王室という衝撃の単語を耳にした唯は唾然とした様子で手に持っている王室御用達(?)の食器が入った箱を落とした。

「のわあ!?!」

間一髪のところまで滑り込んだ律が箱をキャッチしたことで難を逃れた。

「ゆ、唯。心臓に悪いことをするな」

「ご、ごめんなせえ。わい、つい驚いちゃって」

「誰？」

注意する律の言葉に、誰かのキャラを演じながら謝る唯に、僕は思わず小さな声でツツコむのであった。

「これは誰のだ？ バケツに石とかが入ってるやつ」

「あ、それは僕のだ」

濡が見えるように掲げたのは、僕がよく使う道具だった。

「いったい何に使うんだよ？」

「何って、研ぐんだけど」

そうでなければ石（正確には研ぎ石だけど）を置いておかないはずがない。

「いや、そんな常識だろ」みたいな感じで言われても」

「でも、何を研ぐんですか？」

律のツツコみをよそに、梓が疑問を投げかけてきた。

「魔導媒体……わかりやすく言えば魔法使いの杖のようなもの。形は色々あるから杖や水晶玉に剣とか。その中で剣の場合は威力を落とさないようにするために定期的研いで切れ味を維持する必要がある」

「なんだか大変なんだね」

僕の説明を聞いたムギが感心したような口調でつぶやいた。

「大変なのは最初のうちだけ。少しすれば全く苦にもならないよ。メンテナンスはいつも酷使していることに対する感謝の気持ち。そう思えば、どのようなメンテナンスも大変だとは思わなくなるもんだ。毎朝顔を洗ったりするのと一緒だ」

「へえ……」

そんな僕の言葉に、間の抜けたような声で相槌を打つ律に僕は言うのも野暮だということ悟った。

「ほら、早く片付けの作業を進めるよ。これじゃいつまでたっても終わらない」

『はい』

僕の催促にみんなはうなづきながら返事をする。再び片付け作業へと戻っていくのであった。

「何とか片付いたな」

「一仕事をした後のお菓子はうまいなあ」

片づけの作業も一通り終えた僕たちは、いつものようにお菓子を食べていた。

「一仕事って……そもそもだらしくしていたのが原因だけどね」

「そいつは言わねえお約束だよ」

「だから誰だよ」

僕の言葉に、渋い声で言ってくる律に、何度目になるかわからないツツコみを入れた。

「でも、私たちの物ではない私物もあるよな」

滲の視線の先にあるのは床に置かれ、数箱の段ボールだった。

中身は音楽関係の雑誌などで、軽音部らしさを感じることができるとのだった。

「真面目に活動していた頃もあったんですね」

「あずにゃん、今の軽音部が異常なだけで、過去の軽音部がいい加減な活動を続けているわけじゃないからね」

梓がポツリと漏らした言葉に、僕は苦笑しながら口にした。

「高月君、それフォローになってないわよ」

「しかも、浩介が“あずにゃん”っていうのはものすごくあれなんだけど」

そんな僕にムギと律から指摘されてしまった。

「言うな律。僕もそう思ってきたところだ」

「だったら言わないでください!!」

僕の言葉に、梓から怒られてしまった。

なんだかんだ言って梓も僕から“あずにゃん”と呼ばれるのは嫌なのかもしれない。

(とはいえ、このあだ名は実に彼女を正確にとらえていると思うんだ

けど)

そういう理由で今後呼び続けそうだった。

「ねえ、見てみて!」

「ん?」

そんな時、連絡通路のほうに入っていた唯が若干興奮気味に大きな声を上げながら戻ってきた。

両手にはアルミ製かどうかは分からないがケースがあった。

「お、もしかして金目の物か!」

「意地汚く聞こえるぞ、それ」

興味津々で唯に近づきながら声を上げる率に、僕はぼそりとツッコんだ。

それはともかく、唯の持っているケースの中身が気になった僕たちは、ベンチの上に置いて中を見てみることにした。

「ギターだ」

中に入っていたのは茶色を基調にしたボディでやや小さめなギターだった。

「少し古いけどかなり高そうなギターですね」

「そうだな……値段は分からないけれど、数万はいくと思う」

梓の言葉に頷きながら僕は値段の予想をした。

とはいえ、ほとんど適当だったりするが。

「なあんだ、つまんない」

「もっと面白いものを期待したのに」

そんな中、あつという間に興味を失ったのか律と唯は不満げに言葉を漏らしながらギターケースから離れていった。

「軽音部なんですからもっと興味を持ちましょうよ!」

「本当に分かりやすいよな、二人とも」

梓のツツコミに続くように苦笑していると、部室のドアが開いた。入ってきたのは顧問の山中先生だった。

「あら、懐かしいわね」

「これ、先生のですか?」

梓の手にあるギターに気付いた山中先生の言葉に、梓が尋ねた。

「そうよ、父親の友人にもらったギターなの」

「もしかして、先生は軽音部だったんですか!？」

山中先生の返答に、梓はもしやといった感じで先生に問い掛けた。

「ええ、そうよ。言っただけだった?」

(まあ、言えるわけないけど)

山中先生の軽音部時代はある意味タブー扱いとなっているのだから、話せるはずがなかった。

何せ、話してしまえば、“そういった部分”も触れることになるのだから。

「やっぱりそうだったんですね! 学園祭の時うまいなって思ったんです!」

「まあ、かなりブランクはあったけど今の唯ちゃんよりはうまいわよ」
(久々の尊敬モードだ)

最近はなくなったが、尊敬のあまりに興奮した様子で目をキラキラと輝かせている梓の姿に、僕は懐かしさを感じていた。

最近はしなくなったが、最初はこんな感じだった。

まあ、どちらかといえば変に尊敬されるよりは普通に接してもらった方が僕としてはそれほど苦痛にはならないのでいいのだが。

「今度教えてもらってもいいですか?」

「いいわよ」

とんとん拍子で話が進んでいくが、一つだけ問題があった。

「唯、例のやつを」

「ラジャー」

僕は唯に声をかけてあるものを用意させた。

「梓」

「何ですか? 浩介先輩」

そんな中、僕は梓に声をかけた。

「確かに山中先生は、ギターがかなりうまいから別にかまわないんだけど……」

梓が怪訝そうな表情をうかべる中、僕はそう告げると

「これが学生時代のさわちゃんです」

と言って、唯が卒業アルバムにあつた軽音部時代の山中先生の写真を掲げた。

「だけど、いいのか？」

「……やっぱりいいです」

梓の判断は取り下げだった。

「何でよ!!」

「まあそうなるわな」

頬を膨らませている山中先生に、僕は小さな声でつぶやくのであった。

「私物は持ち帰ることになっているので、持って帰ってください」

「ええ……」

唯からギターを手渡された山中先生は若干戸惑ったような表情をうかべながら、ギターを受け取った。

だが、その表情が一瞬歪んだ。

「うーん……弾く時間がないのよね」

「え？ それじゃ、どうするの？」

山中先生の言葉に、尋ねた唯に、先生はギターをもとのギターケースにしまうとそれをベンチのほうに立てかけた。

「これ売って部費の足しにでもして頂戴」

「おお、太っ腹!」

山中先生の判断は、それを売るといふものだった。

「いや、太っ腹というより……」

「押し付けられてるだけだろ!」

ただ、その真意を見抜いていたのか、滯と律の反応は冷やかだた。

「でも、いいんですか？ かなりいいギターですけど」

「ええ。保存状態も悪いし、ちゃんと弾いてくれる人を買ってもらっ

た方がこのギターも幸せだと思おうの」

梓の問いかけに答えた山中先生の言葉には嘘花あった。

「あ、そういういえば、楽器店での買取額アップのクーポンがあったから、それ使って」

「おお、浩君も太っ腹だ！」

ふと、僕は自宅に届いていた買取額上昇クーポン（2割）のことを思い出したので、僕は快くそれを提供することにした。

まさか、これが飛渡でもない珍騒動へと発展するとは知らずに。

「さてと、それじゃ行きますか」

「なあ、このケース誰が持つんだ？」

すべての始まりは、律のその問いかけだった。

今日は誰も荷物がやや多めだ。

多めとはいっても、どっさりといった様子は見受けられない。もつとも唯だけは別だが。

ムギの大量の食器などについては深く考えないようにした。

きつと何らかの方法で持って帰るのだろうから。

それはともかく、問題になっているのは、誰がギターケースを持っていくかということだ。

見つけたギターはレスポールに比べれば重さは軽い方だ。

だが、それも持つのが非力な女子だとそれも大きく異なる。

（まあ、僕が持てばいいか）

唯一の男手なのだから、僕が持つても問題はない。

そんな結論に至った僕は、自ら立候補しようとして手を上げようとした時だった。

「だったら僕が——「ちよつと待ったあ！」——」

僕の声を遮るように律が待ったをかけたのだ。

「じゃんけんで負けたらケース持つゲームやろうぜ！」

「意味が分からない」

律の提案に、僕は速攻でツツコんだ。

いったいどんなゲームなのだろうか？

「いや、だからな。みんなでじゃんけんをして、負けたら決められた間はそのギターを持つっていう遊び。じゃんけんなら公平に……あ」

言葉通りに受け取ったのか、内容を説明する律は何かを思い出したように言葉を止めた。

「浩介って、心を読むのって使えたりするの？」

「当然。人の嘘を見抜くのに必要なだから常時使えるようになってる」

“魔法”の二文字を口にしなかったのは非常にありがたかった。

部室内とはいえ、出入り口に近いところで口にされるのは非常に危険だ。

軽い魔法を使っているところを見られても、手品や見間違いなどといくらでもごまかしはいくが言葉はそうはいかない。

(まあ、どっちも目撃されれば危険なんだけど)

だからこそ部室では魔法のたぐいの話はあまりしないのだ。

(いつかこの部室に対盗聴盗撮の結界魔法でも展開しておくか)

そんなことを考えているあたり、僕にはもしかしたら隠す気など全くないのかもしれないが。

閑話休題。

「それって、解除は」

「できない。今のように出力を弱めることはできるけど、それでも少しでも集中すれば律たちがその時に強く考えていることは分かる。対策には真逆のことを思えばいいんだけど、そんなことをするのは難しいだろうし」

「それじゃ、ずるじゃないですか！」

梓からもつともな抗議の言葉が返ってきた。

「だったら、目を閉じればいい。僕のこれは目に入った人物の心を読み解くんだから。じゃんけんて全員がグーやチョキを出すまで目を閉じておけばいい」

「それじゃ、それでいいこう」

(まあ、一番手っ取り早いのはやらないことなんだけど)

それを言うのはちよつとばかり空気を読んでいないと思ったので、

僕は心の中にとどめておくことにした。

そして僕は目を閉じた。

「それじゃ、行くぞー!」

「本当にやるんですか?」

乗り気ではない梓が、律に尋ねる。

「おやおやー、梓ちゃんは負けるのがいやなのかなー?」

「む?! そんなことないです! やってやるです!」

律の挑発に見事乗せられた梓は、いつかの合宿の時に口にした言葉を言い放った。

「それじゃ、最初はグー」

(適当に出すか)

律の掛け声を耳にしながら、僕はそんなことを考えていた。

「じゃんけんポンっ!」

そして僕は適当にグーの手を出すのであった。

第110話 ホームセンター珍道中

荷物持ちをかけたじゃんけん勝負は第八戦を終えていた。
現在の戦況を言うのであれば、

澤：1回

律：2回

ムギ：0回

梓：2回

唯：3回

というのが、それだけの荷物を運んだ回数だ。

どうやら僕は運がいいようで1回もギターケースを持つことはなかった。

とはいえ、一番の悲劇は

「待ってよ〜」

「じゃんけん三連敗は自分の責任だぞー」

じゃんけんで三回連続で負けて永遠とギターケースを持ち続けることになった唯だろう。

「今日は鞆だつて重いんだよ!」

「それも自業自得だ」

唯の反論に、僕はため息交じりに言い返した。
重くなった原因の荷物は、これまでの付けを支払う形になっている。
る。

要するに自業自得ということになるのだ。

「そんな目で見ても、持たないぞ」

そんな中、唯が恨めしそうな眼で僕を見ていることに気が付いたの
で、僕はそう言い放った。

「浩介君、助けて〜」

「うお!?」 女性の武器を利用しやがった!」

上目づかい+涙目で助けを求めてきた唯に、律が驚いたような声を
上げた。

「……勝負とは、いつも理不尽なものだ。諦めな」

「ば、バツサリ……」

唯の助けてアピールを一蹴した僕に驚いたのだから、あきれたのだからわからない声を上げる律をしり目に、僕は唯から視線を逸らした。
(危ない。あと少しで本当に変わるところだった)

一瞬でもケースを持つとうと心が動いた自分を叱咤する。

「唯ちゃん、そろそろ時間よ」

「はあー……今度こそ負けない!」

ムギの言葉を受けて僕たちのところにまで歩いてきた唯はギターケースを置くと気合を入れなおして手を組んだ。

「返り討ちにしてくれよう!」

そんな唯に応じるように律達も手を組み始めた。

「なんだか子どもですね」

「私は子供だっ」

梓のつぶやきに、胸を張って答える律は、ある意味清々しささえ感じた。

「大人になりましたようよ……」

「というか、威張るなよ」

そういいながらも、手を構えている梓や僕も同じなのかもしれない。

そんな中、一人手を構えていない人物がいた。

「滯、どうしたんだ?」

「じゃんけんだよ!」

それに気が付いた律たちの呼びかけに、滯は僕たちのほうへと視線を向けた。

「これなんだけど」

そういつて僕たちに見えるように差し出してきたのは、先ほど手渡されたチラシだった。

チラシには『春の新生活応援セール』と銘打って、さまざまな商品と値段が書かれていた。

安いかどうかは分からないが、春先で新生活を始める人が多いこの季節。

セールと銘打てばお客が集まるという戦略が見え見えなチラシだった。

(食器棚があつたら買ったんだけど)

なんだかんだで放置していたが、家の食器棚の問題はいまだに解決していないのだ。

あまりにもひどいので、現在は色々なものを使って棚を支えている状態だが、これが非常に面倒くさい。

「こういう棚とかを一つ置けばすつきりすると思うんだ」

「いいんじゃない?」

「そうですね。この値段なら何とか部費で買えそうですし」

「まあ、置き場所が増えるのはいいことだもんね」

僕を含めた全員が、賛成だった。

「それじゃ、ホームセンターにでも行こうか」

「っ!」

なんだかホームセンターという単語にムギが強い反応を示したよ
うな気がしたが、気のせいだろうか?

「おっと、その前にこれをやろうぜ!」

「そうだね! 今度こそ、勝つよ!」

「まだ続けるのか」

もうやめたと思っただけに、ため息が出そうだったが、やらないわけにはいかず、僕たちは再びギターケースを持つ人物を決めるべくじゃんけんをするのであった。

「ここがホームセンター!」

チラシに記載されていたホームセンターに到着するや否や、感動したような声を上げたのはムギだった。

「ここにはいろいろな便利なものが、揃っているのよね!」

「は、はい」

そのままのテンションで問いかけられた梓は若干押され気味に答えた。

「ムギ、ホームセンターに来るのは初めてかー？」

「うん。前から一度来てみたいって思ってたのよー」

ブレザーをひらひらと開いたり閉じたりしている律の問いかけに、ムギは目を輝かせながら頷くと僕たちに背を向けた。

「行きましょうー！」

ずんずんと前に進んでいくその姿は、まるで未開の地へと探検する隊長という異名を持つ男性タレントを思わせる感じだった。

「あ、私もー！」

「おい！ ギターを忘れてるぞ」

それに続くように駆けだした唯を律が呼び止めた。

「ごめん、ごめん」

頭をかきながら戻ってきた唯は、ここ来るまでに数回連続で負けたために持ち続けているギターケースを手にする、店の奥のほうへと姿を消した。

「家具売り場はどこだろう」

「いや、僕に聞かれても」

二人の後姿を見送ったところで投げかけられた疑問の声に、僕は首を傾げながら答えた。

「仕方ないな、全員で手分けして探そう」

「そうだな」

「その方が早いですね」

律の提案に、僕たちは満場一致で賛成すると、家具売り場を探すべく手分けして捜索に当たることになった。

(それにしても、本当にいろいろ揃ってるな)

家具売り場を探しながら店内を見て回っていると、その品揃えに僕は舌を巻いていた。

まるでほとんどの物がここで揃うのではないかという錯覚を感じるほど、品そろえが良かったのだ。

「で、もう見つけちゃったけど」

目的の家具売り場を見つけた僕は、息を吐き出しながらあたりを見回す。

(目印は……あの布団でいいか)

近くにあった布団売場に陳列されていたピンク色の布団を目印にした僕は、唯たちを探すべくその場を後にした。

「確かこっちのほうに唯の反応が……」

あてずっぽうに探すとかなり時間がかかるので、僕は軽く魔法を使っていた。

とはいえ、唯の生体反応をたどっているだけだが。

その反応をたどった僕がたどり着いた場所で見えた光景は

「ズギューーン!!!」

電動式のねじ回しを動かしてはしゃぐ唯の姿だった。

「何をやってるんだ?」

「あ、浩君! これ、かっこいいでしょ!」

満面の笑みを浮かべながら電動式のねじ回しを僕に差し出してきたが、僕はいったいどういう反応をすればいいのだろうか?

「バアン、バアン、バアン!」

「こら、うるさい!」

梓と漣と僕に向けてねじ回しを動かす唯に、漣が叱咤する。

「はい、三人は死にました!」

そして何故か僕はやられてしまった。

「子供か」

漣たちのいるほうに歩きながら思わず口からそんな言葉が漏れてしまったが、出来ればわかって欲しかった。

自分がどれほど恥ずかしい行為をしているのかということ。

「まったく。浩介の言うとおりだぞ」

「……そういう律は何をしている」

僕の言葉に賛同する律だが、その頭には工事現場などでかぶっている黄色に緑色の細い線が横に入ったヘルメットのようなものに四角形の物体がくっついていているものをかぶっている律に、僕は問い掛け

た。

そんな妙な格好をしている律は視線を滯のほうへと移すと

「のわ!？」

四角形の物体（ヘッドライトだった）に明かりを灯して滯を照らした。

「店の物を用もなく触るな！」

「いやーん。おやめになってー★」

今度は滯と律が騒ぎ始めた。

もはや呆れるしかなかった。

とはいえ、一番呆れているのは僕の横に立っている梓だろうけど

「ねえ、見てみて！」

「今度は何ですか？」

そんな僕たちに声をかける唯に、げんなりとした声色で返事をしながら視線を向けると

「これなんか、動きやすそうだよ！」

「ぶかぶかじゃないですか」

工事現場などでよく着られている作業着を身に纏っている唯の姿があった。

とはいえ完全にぶかぶかでお世辞にも動きやすいという感じはしなかった。

「それでね背中に〃放課後ティータイム〃って書いてもらおうよ」

「暴走族かつ」

唯の提案に思わずツツコミを入れてしまった僕に、唯はその場に座り込むと誇らしげに胸を張った。

「……ムギは？」

「ムギ先輩はあっちのほうで色々と見て回っています」

これ以上はさすがに付き合いきれない（主にツツコみの関係で）ため、僕はこの場にはいないムギの場所に行くことにした。

梓からムギの居場所を教えてもらった僕は、この混沌と化した場所を梓に任せ（半ば押しつけだが）て、ムギを探すべくその場を後にするのであった。

「結局見つからなかったな」

お店の中を一通り歩き回ったところで僕は一つ大きく息を吐き出しながらつぶやいた。

ムギを探していたのだが、ムギを見つけないことができなかったのだ。

(痕跡をたどってはみたけど、どれだけ移動してるんだ?)

ムギの生体反応をたどって歩いていた僕は、いろいろな場所をぐるぐると歩く羽目になっていた。

それはまさしく、好奇心旺盛な子供のような感じだった。

そして、気づけば出入り口のほうへとたどり着いていたのだ。

「あれ?」

ふと気づくと、テーブルのようなものが置かれている場所に律や澤たちの姿があった。

それだけではなく、探していたムギの姿も。

「あ、浩介! どこ行ってたんだよ。まったく、子供か?」

「お店の物を使って遊んでいたやつ言葉か? それ」

わき腹に両手を添えて呆れたような口調で言葉を投げかけてくる律に、僕はジト目で反論した。

「というより、ムギのその大荷物は何?」

「買ったやつたの♪ ホームセンターって本当に素晴らしい場所ね」

満面の笑みで答えるムギの両手にはパンパンに膨れているレジ袋があった。

「それで、棚のほうは?」

「明日の放課後に学校まで届けてもらうことになった」

ムギから視線を外した僕の問いかけに、携帯電話を手にしていた澤が答えた。

「それで、唯たちは?」

「さあ? どこか見てるんじゃない?」

次いで出た僕の疑問に、律は首を傾げてながら答えた。

「みんなく」

「お、噂をすればだな」

僕たちに駆けつけられる唯の声に、視線を向けると手を振りながらこっちに向かつてきている唯と梓の姿があった。

なんだか梓は強引に連れてこられている形だけだ。

「それじゃ、皆も揃ったんだし、楽器店にでも行くぞ」

「ちよつと待った」

楽器店へと向かおうとした僕を呼び止めたのは、唯だった。

「まだゲームは終わってないよ！」

「……まだやる気か」

腕を構えている唯の姿に、僕はため息を漏らしながら唯たちのところに戻った。

「それじゃ、いくよ！ じゃんけんポン！」

こうして、僕たちは再びギターケースを持つ人物を決めるじゃんけんをするのであった。

なんだかんだあつてようやく本来の目的地でもある楽器店『LOG IA』へと到着した。

「すみません」

「はい、何でしょうか？」

カウンターのほうに向かった僕が店員に声をかけると、店員の男性はこちらに向かってきた。

「このギターの査定をお願いしたいんですが」

「こちらですね」

律から受け取るような形でギターケースを手にとるとそれをカウンターの上に置いた。

店員はケースのふたを開けて中を見る。

「はあ、まさかあのあと四連敗するとは」

「勝利のブイ！」

どうでもいい話だが、あのあと律は四連敗という稀にみる大敗の結果を残していた。

さすがに肩が痛いのか手で肩を抑えながら腕を回していた。

「後、このクーポン使えますか？」

「失礼します……ええ。お使いになれます」

僕が差し出したクーポンを受け取り確認した店員は頷きながら答えるので、クーポンを使うようにお願いした。

「それでは、査定いたしますので、店内でお待ちください」

そんな店員の言葉で、僕たちは少しの間店内を見て回ることにした。

(とはいえ、楽器関係で買うのではないんだけどね)

本当に見ているだけだ。

「唯、どうしたんだ？」

「ねえ、浩君。あれってどうやって演奏するのかな？」

ギターを販売しているスペースで何かを見ている唯に声をかけると、一つのギターを指さして聞いてきた。

その先を見てみると、弦が上下二つあるタイプのギターがあった。

「ほかのギターと同じ。ただ、手の動きはこれまで以上にシビアに難しくなるから、やめておいた方がいいかもしれないな」

唯だったかもしれないものにするかもしれないが、さすがにこればかりはギャンブル過ぎる。

「へえ〜」

「査定をお待ちのお客様、お待たせしました！」

そんな時、遠くのほうから店員の声が聞こえた。

「どうやら査定が終わったみたいだ。戻ろうか、唯」

「うん♪」

僕の呼びかけに笑みを浮かべて頷いた唯は僕の腕に自分の腕をか
らめる。

まるでそれが普通だといわんばかりに。

(少し前までは離せとか言っていたのに……僕でも変わるものなんだね)

そんな人間じみた自分がどこか嬉しく感じつつある僕なのであった。

カウンターのほうにはすでに律たちが集まっており、僕と唯が最後に来る形となっていた。

「お待たせしました。こちらのギターですが60万円で買い取らせていただきます」

そして店員から営業スマイルで告げられた金額に、僕たちは愕然とするのであった。

第111話 お金狂騒曲

「あ、あの?」

あまりの金額の大きさに固まっていると、店員から心配そうな声がかけられた。

「ごちそうさまでした!」

一番最初に正気に戻った漕は、何故かそんな言葉を口にしてお辞儀をするとカウンターに背を向けた。

「さあ、帰るぞ」

「おいこら!」

「帰るな」

律が勝手に帰ろうとする漕の肩をつかんで阻止した。

「だ、だって……六千万!」

「落ち着け、桁がものすごく変わってる」

混乱しているからなのか、あたふたとしながら二桁も増やした金額を口にする漕の対応は律に任せることにした。

「ありがとうございます」

「って、少しは躊躇しろ!」

そんな僕たちの横で躊躇なく現金の入った封筒を受け取るムギに思わずツツコミを入れてしまった。

「ムギ、ちよつと唯たちのところで待っていてもらっていい?」

「え、ええ。わかった」

僕はムギに唯たちのほうに行くように告げると、ムギは疑うそぶりも見せずに唯たちのほうへと向かっていった。

「でも、どうしてこんなに高額なんですか?」

「もしかしてムギに気を使つて?」

僕と律は店員の人に高価な価格となった理由を尋ねた。

ムギはこの楽器店の系列会社の令嬢だ。

もしかしたらサービスという名目で値段が吊り上げられたのかもしれないと考えたのだ。

「いいえ。それは関係ありません」

だが、店員から帰ってきたのはそんな答えだった。そのまま店員はカウンターのほうへと向かうので、僕たちもそれに倣って移動した。

そして僕たちのほうを見ながら、店員は静かに口を開いた。

「こちらのモデルのギターですが、1980年代始めに生まれたギターでして——」

そして店員からギターが効果になった理由を説明された。

話を聞けば、高価な買取価格になったのも頷ける。

「それとお客様の買取りアップクーポンを加味いたしました、このお値段で買い取らせていただくことになりました」

「……」

店員の説明が終わったが、唯たちから一向に反応が返ってこない。

見れば全員が唾然とした表情で固まっていた。

どうやら、彼女たちにはこの話は難しすぎたのかもしれない。

もしくは、あまりの高額な価格に思考回路が停止しているかのどちらかだろう。

「と、とにかくとても貴重なギターなんです」

そんな彼女たちの様子に慌てた様子で説明しなおす店員に、思わず同情してしまう僕なのであった。

場所を楽器店から近くのファーストフード店に移した僕は、唯たちに席を取っておいてもらうようお願いをして邪魔にならない場所で電話をかけていた。

『はい、山中です』

「高月です」

電話の相手は山中先生だった。

『どうしたの？ いきなり電話なんて』

「先生から預かったギターの売却が終わりましたので、そのお知らせに」

電話の用件は、先生から預かったギターに関してだった。

予想以上に高額な値段が付いたので、持ち主である山中先生に一応確認をすることにしたのだ。

『別に明日でもよかったのに』

「ええ。ですが、少々価格がすごいことになっていたので、確認を」

『それで、いくらだったの?』

山中先生の問いかけに、僕はその金額を言うことにした。

「60万円です」

『ええ!? そんな値段で売れたの!』

やはり、電話先のほうから驚きに満ちた声が聞こえてきた。

「一応聞きますけど、本当に部費に足しにしているんですね?」

『……』

僕の問い掛けに、山中先生からの返事がない。

「60万という大金を知っても部費の足しにすればかなり太っ腹な教師として慕われるという私のどうでもいい独り言はともかく、どうするかは先生のご判断にお任せします」

『……』

今度の無返答は、富か名声かの葛藤と見た。

『いいわよ。先生だもの。一度行ったことは覆さないわ』

「ありがとうございます。それでは明日、買取り証明書をお渡ししますのぞ」

ほくそえみたくなるのを必死にこらえて、僕はそう告げると電話を切った。

「さて、早く戻るか」

あまり長く待たせてはだめだと思い、僕は天寧に戻るとポテトのMサイズを注文してそれを手に唯たちの待つ場所へと向かった。

「ポテトXLサイズだ、釣りはいらねえ！」

「つて、そのお金を使ったのか!？」

戻ると、律と漕の声が聞こえてきた。

見れば、お金の入った封筒を漕に突き出していた。

「ごめん、遅れた」

「遅いぞー浩介」

声をかけた僕に、律が口をとがらせて文句を言ってきたが、それを無視して彼女たちの前の席に腰掛ける。

「で、そのポテトは封筒のお金を使ったのか？」

「いや、さすがにこれは自腹だけど」

僕の追及の声に、律は苦笑しながら答えた。

その言葉に嘘はないようなので、僕は心の中でほっと胸をなでおろした。

「でも、本当にいいんですか？ こんな大金を部費に当てちゃつて」

「いいんだつて。さわちゃんが部費にしろつて言つてんだから」

60万という大金に、罪悪感を覚えたのか浮かない顔で声を上げる梓に、律は軽く答えた。

「ほれ！ 6人で——「僕はいらぬ」——5人で分け合えば1人で12万円！」

数十枚の万券を梓の前に掲げながら声を上げる律に、僕は微妙に違うと思いつつも辞退した。

理由としては単純。

お金には困つておらず、これ以上お金が増えたらキャパシティーを超えるからだ。

とはいえ、ちゃんと仕事には就くが。

「私、欲しいエフエクターがあつたんですよ〜」

大金を見せられた梓は目を回してふらふらしながら口を開いた。

「あずにゃん陥落」

まさに唯の言うとおりだった。

「馬鹿っ！こんな場所でそんな大金を見せびらかすな」

そんな中、漕が律に一括する。

驚きなのはそれで梓が元に戻ったことぐらいだろうか。

「そういう漕もほら、12万だぞー」

だが、そんな漕にも律の魔の手(?)が伸びる

「12万かマルチアンプシミュレーターとかいいよな」

「私はツインペダルにフロアタムとかかな」

次々と欲しいものを口にする律たち。

唯一何も口にしていない唯だが、その笑みから何位を考えているのかが大体想像ついてしまった。

「「ふふ、ふふふふ」」

「あ、あの……みんな?」

「なんだか、落ちてはいけないところに落ちかかってるぞ」

不気味な笑みを浮かべ続ける唯たちに、おろおろしながら声をかけるムギをしり目に、僕はそう漏らすのであった。

お金が絡むと人が変わるといいうが、今の唯たちはその典型例なのかもしれない。

結局、ファーストフード店を出るまでこの状態は永遠と続くことになるのであった。

翌日の放課後。

軽音部部室に注文していた棚が届いた。

棚には軽音部関係の物を置いていき、何とかきれいに収めることができた。

(なんだか、無意義は水道の蛇口を磨いていたけど、何をやってるんだろう?)

まるで何かに取りつかれたように磨く麦の姿はまるで魔女を彷彿

とさせた。

あまり関わり合いたくないので、放っておくことにしたのだが、気にならないといえようそになる。

「だいぶ片付いたな」

「はい！」

二人がそんな会話をしている中、僕はふとあるものを見つけた。

「なんだ、これ？」

棚の陰から除く謎の物体に首を傾げながら、僕はそれを引っ張り出した。

「これって、完全に唯の私物だ」

名前は知らないがカエルの置物だった。

「唯！」

「あう!？」

濡の呼びかけに、唯のひきつったような声が聞こえてきた。

「私物は全部持ち帰る約束だったじゃないですか！」

「だって、それ以外にこんなにあるんだよ！」

梓の小言に、唯は震えながら一方を指さした。

その先にあるのは、ベンチの上に置かれた複数個の紙袋だった。

紙袋には様々なものがぎっしりと詰め込まれていた。

「こんなに持って帰ったら憂に怒られちゃうよ！」

「ここに置いてたら私が怒ります！」

梓の切り返しが最近どんどん鋭くなっているような気がしてならないほどにすごかった。

「憂だって怖いもん！ この間だって、怒られて一生懸命謝ったんだから」

「姉の威厳まるでないな」

なんとなくその光景が目には浮かんでしまった。

「そういう浩介先輩も、これ忘れてますよ」

「あ、ごめん」

呆れたような表情で梓から手渡されたのは、クリエイイト用のメンテナンス道具一式だった。

「とりあえず、格納庫にでもしまっておくか」

とりあえず、それを受け取った僕は、道具一式を格納庫にしまうことにした。

「それって何？」

指を鳴らしたのと同時に頭上に突如出現した黒い靄に、ムギが首を傾げながら疑問の声を投げかけてきた。

「格納庫。こういった道具をしまっておいて、いつでも取り出せるような状態にさせておく。この空間はどことも接点を持たないから、たとえ世界が滅びても僕が生きている限り影響を受けることもない」

簡単に言ってしまうえば、そうこのようなものだろうか？

まあ、大きさに限りがある時点でこの例えは不適合かもしれないけれど

「世界が滅びたら、外に出ることはできないんじゃない？」

「詳しいことはツツコんだら負けなんだよ！」

梓の的確な指摘に、これまた唯の的確な反論が返された。

「ということ、浩君。これを格納庫に入れても——「ダメ」——ぶーぶー」

唯が言い切るよりも早くに断ると、頬を膨らませて抗議してきた。

「あのね、この格納庫は武器や戦闘に役に立つものを入れておくためのものなんだ。関係のないものを入れておくところじゃないし、入れたら入れたで有事の際に必要なものがすぐに見つからなくて命取りになることだってある。だからダメ」

「浩君のケチ」

唯の抗議を無視しながら、僕は先程から床に置いてあるメンテナンス道具（バケツや研ぎ石に掃除をする際に拭くための布や乾拭きをするための布など）を手にすると、それを先ほどから出現している黒い靄へとほうり上げるようにして投げ入れた。

そして即座に格納庫を閉じた。

「よし、これで片付けは終了」

長いようで短かった整頓は何とかこれで終わった。

「そうだな。今後は自分の私物はちゃんと持ち帰るんだぞ」

「……そういう律はいつたい何をしているんだ？」

口ではもつともらしいことを口にしてはいる律だが、その手にある本のようなものを柵に入れている律に、濤がジト目で見ながらで問いかけた。

「テヘツ☆」

片目を閉じてお茶目に誤魔化す律の姿に怒りというよりも、もはや呆れたような感情が湧いてくる。

それもある意味律の才能なのかもしれない。

「ひいつ!？」

そんな中ドアが開く音に律たちは体を震わせるといふ異様な驚き方をした。

「柵は届いたの？」

「ええ、こちらに」

部室にやってきた山中先生の問いかけに全員が固まったまま微動だにしないので、僕が代わりに受け答えした。

「あら、なかなかいいじゃない」

どうや柵のほうは好印象のようだった。

だが、そんな中、僕や律を除く全員が直立不動で山中先生のほうに向かつて整列をし始めた。

律の場合はまるでスローモーションでもしているかのようなゆっくりとした動きでその場を離れようとしている始末だし。

「皆、どうしたのよ。人が話しかけているのに」

そんなどこからどう見ても不自然な様子の皆に、戸惑いの色を隠せない様子で声をかける山中先生に応じるかのごとく、濤が逃げあだ層としている律の肩をつかむと強引に山中先生の前まで移動させた。

「ああ、さわちゃん。何だあ、来てたんじゃあ!？」

本人は、ごまかしているつもりだが、両手を握ったりするそのさまはかなり不自然だった。

(なぜにそんな不自然な態度を)

「……それで昨日はどうだったの？」

「き、昨日!？」

山中先生の“昨日”という単語に体を震わせる律の姿に、なんとなくその理由がわかったような気がした。

「ギターよ。持って行ったんでしょ？」

「あ、ああ！ あれは確か……」

山中先生の言葉を受けた率は声をうわ面セルが、なぜか言葉を詰まらせた。

（あまりの大金に、緊張でもしてるのかな？）

「と、とても古いギターだったらしくて」

そんな律に代わって梓と澪が代わりにギターについて話し始めたが、やはり声が震えてぎこちない態度だった。

「あれえ!? ということはさわちゃんは50代でいらっしやる?!」

両手をもみながら、唯が何気に恐ろしい爆弾を投下した。

僕はそつと耳に手を当てた。

「どこにピチピチした50代がいるかっ!!!」

「ぐ、ごめんなさい！ ごめんなさい！」

それはまさに爆風であった。

すさまじい気圧に、耳をふさいでいるはずの僕にさえはつきりと声が聞こえてくるほどだ。

「父親の友達から借りたって言ったでしょ？」

「そ、そうでした」

なんとなく、唯はいつも通りのような気がした。

「それで、いくらだったの？」

（尋問？）

値段に関しては、先日僕が話しているはずなので、明らかに山中先生の質問は不自然だった。

だが、僕のほうに意味ありげな視線を送ってきたので、これは試練の類だろうと納得することにした。

嘘つき者がバカを見るという教訓を教えつける昔話のごとく。

「えーっと……1万円」

全員が顔をそむける中、律が告げた金額はとてつもなく少ない額だった。

(残りの59万はどこに行った?)

「やっぱりそんなものよね」

山中先生が一瞬不気味な笑みを浮かべたのを僕は見逃さなかった。

この人、明らかに演技をしている。

「それじゃ、買取り証明書を頂戴。部費に計上するから」

「はひ!？」

演技だとは知らずに、ほっと胸をなでおろしている律たちに畳みかけるように、山中先生は手を差し出しながら買取り証明書の啓示を求めた。

「まさかもらわなかったの?!」

「ええつと、ここに」

「なんだ、ちゃんとあるじゃない」

ブレザーのポケットから取り出した買取り証明書と思われる紙切れに、山中先生がそう言葉を漏らした。

隣で固唾を飲んで律を見つめる唯たちの姿が、部室内の緊迫した空気をひしひしと伝えていた。

(詰んだな)

どちらにせよ、買取り証明書を見せることになるのだから、ウソがばれるのは時間の問題だった。

だが、律は予想だにしない行動に打って出た。

(た、食べた!?)

なんと手にしていたと思われる買取り証明書を口に入れたのだ。

(そ、そこまでして60万円を手にしたいのか)

律の執着心に、僕は驚きを隠せなかった。

『食え!・食え!』

「食えじゃないからー!」

何よりもすごいのは、隣で全身を左右に振りながら食えコールをする唯たちのほうだけだ。

(でも、これって無駄なような気がするんだけど)

なんたって、相手はあの山中先生なのだから。

「何をしているの!・早く出しなさい!!」

「絶対に嫌だっ」

買取り証明書を口から出そうとする山中先生、方やなんとしてでも飲み込みたい律との壮絶な戦いは

「出しなさいっ」

「ひいひいひい!!!?」

メガネをはずした山中先生の渾身の一言で幕をが下りることになるのであった。

第112話 後輩

「ウソ!? 本当に60万円だったの」

「とても貴重なものだったらしくってっ」

あつさりと律の口の中から取り出された買取り証明書を、指でつまみながら確認した山中先生の言葉に、土下座をしていたムギが相槌をうった。

「ごめんなせえ! おら、あまりの金額に気が動転してしまつて」

「心が汚いんですね」

「昔からこうなんだ」

同じく土下座をしながら謝罪の言葉を口にする律に、これまた土下座をしている梓と漣が声を上げた。

先ほどまで食べコールをしていた者の言動とは思えない身の変わりようだった。

「他人事のように言っているけど、二人も同罪だからな」

唯一その場に立っている僕は、苦笑しながら二人にツッコんだ。

「ちゃんと素直に言えば、全部部費にしてあげただけだな。律ちゃんの言った1万円を部費として計上するから、その棚を部費で買ったことにしなさい」

「ええ。それは絶対に嘘だ!」

山中先生の言葉に頭を上げて抗議の声を上げる律の姿は、実に童話の顛末に酷似していた。

「というより、山中先生。それがわかっていたから僕が連絡していたことを黙っていたんですね?」

「さあ、何のことかしら?」

ウインクをしながら答える山中先生の言葉が、僕の予想が正しいことを物語っていた。

「まったく、律が悪いんだぞ。変に隠そうとするから」

「そうですよ! 私はちゃんと正直に話すべきだって言いました」

「お前らに言う資格はないっ!」

仲間からも裏切られた律の心の叫びに、僕は同情を隠せなかった。

まあ、自業自得だけだ。

「さわちゃん！」

そんな中、一人勇敢にも拳手をする人物がいた。

まあ、唯しかいないが。

「そのお金で……そのお金で私の頬を叩いてください！」

唯の願い事はささやかなものだった。

そして山中先生に60枚のお札で叩かれるともものすごくうれしそうな表情をうかべる。

それこそ本当に幸せそうだと思うほどの。

(唯みたいなのがたくさんいたら無用な争いはなくなると思う)

ふと、そんなことを考える僕もまたあれなのかもしれない。

「はい」

「あの、この10万円は何ですか？」

山中先生に差し出された10万円という大金を前に、僕は山中先生の真意がわかりかねていた。

「あなたの分よ。ちゃんと電話で正直に言ったんだから」

「なんと!?! 10万を自分の物にするべく、手を回していたのか!」

山中先生の言葉に、後ろから驚きに満ちた声が聞こえてきた。

「汚いぞ！」

「そうです！ 最低です！ 卑怯です！」

お金の前では友情など無に等しいとはよくいうが、これは少しばかりひどすぎた。

まさかここまで非難されるとは思ってもいなかったのだ。

「いえ、結構です。連帯責任というか……彼女たちの馬鹿げた行動を止められなかった自分にも責任があるのね」

「さすが浩介！ よつ男前！」

律よ、さつきと言っていることが真逆だぞ。

「しようがないわね。それじゃ、この中から好きなものを一つ買ってあげる」

「本当ですか!?!」

何とも言えない表情をうかべながら口にした山中先生の言葉に、滲

が目を見開かせた。

「みんなで話し合って決めなさい」

これは山中先生なりの譲歩なのかもしれない。

「一つといわず、一気に五つほど——「凶々しいっ」——あたっ」

そんな律と滯は置いといて、僕たちは好きなものを一つだけではあるが購入することができるようになった。

「にしても一つとなると、やっぱりアンプが無難か」

「エフェクターのほうがいいような気がします」

「見事にばらばらだな」

一つに絞ろうとするが、やはり難しいよう意見がまとまることはなかった。

僕としては、どちらも捨てがたい。

アンプならば使い道もあるし、エフェクターならば音への色付けができる。

「でも、皆で使えるものじゃないと」

「あ、それだったら私にいい案があるよ！」

「それは何？ 唯ちゃん」

滯の言葉に反応した唯の提案に、ムギが興味津々で尋ねた。

「ケロをもう一体増やすのはどうでしょう！ そうすれば、新入部員も集まるはず！」

（絶対にありえない）

僕たちは唯の迷案を切り捨てて、そのまま力説する唯を置いて歩き出した。

「ああ〜！ みんなひどい〜！」

“ひどいのはお前の案だ”と心の中でツツコんでいると部活中なのだろうか、新入部員を指導する声が聞こえてきた。

「どの部活も新入部員への教育が本格的に始まっているな」
「そうですね」

両腕を頭の後ろで組いながらの律の言葉に、梓が相槌を打つ。
だが、その声には若干力がこもっていないような感じがした。
気になって梓のほうを見ると寂しげな表情で、練習をしている部員たちのほうを見つめている梓の姿があった。

(やっぱりなんだかんだ言っちゃって、新入部員は欲しかったんだな)
もしかしたら、僕たちに必要なのは、機材でもなんでもなく人材なのかもしれない。

それぞまざまざと思い知らされるのであった。

「新入生を入部させるのはどうすればいいんだろうか」

翌日の昼休み、同じことを思っていたのか律が疑問を投げかけた。

(もう万策は尽きてるんだよな)

演奏、ビラ配り。

部活動としてできることは、ほとんどやっている。

その成果が現在のありさまなのだ。

「こうなったら……誰か、私を音楽室まで」

「それはもうやった」

「というより、悪徳商法まがいの勧誘は止めろ」

少し前に律がやった、行き倒れ作戦という名の悪徳商法まがいの勧誘を再びしようとする律を止めた。

というより、あれで部員が集まると思った律の発想がすごい。

「それじゃ、どうするんだよ!」

「それだったら私にいい考えがあります!」

アイデアが浮かばない中、再び拳手をしたのは、唯だった。

「今度は本当に大丈夫なんだろうな? ケロを増やすとか言うなよ?」

「大丈夫! 今度はすつごく自信があるから」

僕の念を入れる言葉に、唯は自信満々といった様子で相槌を打つ

た。

「それは何だ？」

「それはねー」

そして、唯の口から名案を告げられるのであった。

「これはいったい、何ですか？」

「新入部員のトンちゃんだよ！」

翌日の放課後、部室にやってきた“新入部員”を梓に紹介することとなった。

律と滯は机のそばにしゃがみ込み、ムギと唯は新入部員を強調するように掌で指し示し、僕は新入部員のそばで立っていた。

「梓ちゃんの後輩よ！」

「へえ……」

ムギの言葉に返ってきた反応はそれだけだった。

別に涙涙の感動物語を期待していたわけではない、

だが、予想に反して、リアクションがなさすぎるのだ。

「唯、本当にそれが梓が欲しがっていたやつなんだろうな？」

窓際に置かれた水槽で優雅に泳ぐ亀（トンちゃん）を指さしながら尋ねた。

「本当だよ！ だってあずにゃんこの亀を欲しそうに見ていたよ！」

「いえ、私はただ変な亀だなんて思っただけです。それに物欲しげにみていたのは唯先輩のほうですけど」

その瞬間、部室内に嫌な沈黙が走った。

全員の視線が水槽の前で固まる唯へと向けられる。

「やっちゃまったな」

「しかも絶対にしてはいけない方向に」

梓のためにというお題目のもと購入した亀が、梓が所望していたものではなかったというのはある意味最悪の結果でもあった。

当然だが、やり直しはない。

「ああ……」

「でもどうしてですか？」

床に崩れ落ちる唯をしり目に、何とも言えない表情で疑問の声を上げる梓に、観念したのか濡が本当のことを告げた。

その理由を聞いた梓は一つ息を吐き出すと鞆を机に置いて水槽の前へと歩み寄る。

「こんな早とちりで飼われたら迷惑だよ」

水槽のガラスを指で軽くつつきながら亀に呼びかけるようにつぶやくと、優雅に泳いでいた亀は首を上下に動かした。

それはまるで梓の言葉に頷くかのよう。

「頷いた!？」

「か、かわいい!？」

そのしぐさに驚きをあらわにする僕たちと、別の方向で目を輝かせる唯。

なんだかいろいろと趣旨が本来の物とは異なっているような気がするのは、僕の考えすぎだろうか？

「大丈夫。ちゃんと私が世話をするからね」

「いやいや、私だってちゃんとするよ!？」

梓の言葉に、横で立っていた唯が反応した。

「無理でしょ」

「そうだね。数日坊主になりそう」

三日坊主ならぬ数日坊主とはいったいどういう意味だと自問自答してみる。

だが、妙に的を得ているようにも思えた。

「ええ〜!?! 二人ともひどいよー」

「うわ!?! 唯! 抱き付くな! とういかくつつかせな!」

抗議の意味を込めてなのか、唯は僕と梓に抱き付いてきた。

そうになると、自然に梓との距離は縮まるわけで、体どうしが密着している状態だ。

密着とはいっても、ただ肩が触れ合っているというものだが。

「なっ!?! 浩君の浮気者〜!」

「自分でやったんだろうが!!」

自分で抱き寄せておいて自分で騒ぎ出す唯に、僕は必死にもがきながら反論した。

「にや!? どこを触ってるんですか!!」

「触ってない! それは唯の手だ!!」

部室内は一気に混沌と化していくのであった。

「ぬあにい!? ついに浩介がハーレム手国を建国しただ——ザマス!」

「誰が、いつ、そんなことを口にしたっ」

翌日の休み時間、次の授業の支度をしているときに慶介が話しかけてきたので、この間の部室の整頓から始まる騒動について話をしていった。

「だけどよ、触ったんだろ? 梓ちゃんの胸」

「触ってない。あれは唯の手だ」

この間梓にも聞かれた内容に、僕はげんなりしながら答えた。

あれは結局、唯が自分でそう言い出したことで解決した。

だが、なんとなくむなしさを感じたのは、僕の気のせいだろうか?

「でもよ、なんで俺にも話してくれなかったんだ?」

「何をだ?」

次の授業で使う教科書を取り出しながら、慶介の問いかけに答えた。

「ギターのだよ。10万だなんてすごい大金じゃないか!」

「まあ、大金だというのはあってるけど、どうしてそれをわざわざお前に言わなければいけないんだ?」

母親ならばまだしも（もつとも母親に本当に言うのかどうか微妙なところだが）一友人にホイホイと大金が手に入ったことを言うのはただのバカというものだ。

「言ってくれば色々たかかって一生、左団扇——ガンマ!？」

とんでもないことを口にする慶介の頭に拳を振り下ろした。

「貴様のねじまがった性根、一遍まっすぐになるまで叩き直してやろうか?」

「も、もうすでに叩かれています」

地面に突っ伏している慶介の言葉を僕は無視した。

「それで、その新入部員さんは調子どうなんだ?」

「さあ? ただ泳いでるだけだが、まあ、マスコットにはなってるな」
すさまじい回復力で立ち上がった慶介の問いかけに、僕は腕を組みながら答えた。

新入部員という形で軽音部にやってきたトンちゃんは、部での人気者と化していた。

まあ、問題は山積みなわけだが、それは大丈夫だろう。

何せ、朝練の際に梓が亀の飼い方なる本を持ってきていたのだから。

「おっと、もう時間か。それじゃあな」

「ああ」

席替えがあり、僕の席は唯のななめ右上の席になっていた。

ちなみに隣は

「本当にあなたたちは仲がいいわね」

と口になっている真鍋さんだったりする。

「御冗談を。あいつが勝手に来るだけ。そもそも、ここになった時点であいつは早々来ないだろうと思ってたんだが……少々当てが外れたか」

慶介は真鍋さんに苦手意識を抱いている節があったので、僕は休み時間は少しだけのんびりできると踏んでいたのだが、現実はこの通りだ。

まあ、襲来する頻度が去年より少し減少したのを見れば、かなりいい傾向であると思うが。

「私はあなたのボディガードではないわよ」

「それはぜひ、あのバカに言っっちゃってほしい」

苦笑しながら返ってきた言葉に、僕はそう相づちを打った。

それは席替えで真鍋さんの隣になった時のことだ。

「裏切り者」

「何だ突然」

げっそりとした表情をうかべて恨み言を言いに来た慶介に、僕は冷やかな目で見ながら応じた。

「俺が苦手な生徒会長をボディガードにするとは……友達のを裏切ったな！」

「別に裏切ってないし……というかこれはくじ引きで決まったんだから」

肩をすくませながら、僕は次の授業の準備を始めた。

「俺の隣の席の子は何も言わないで怖いんだよ！」

「いいじゃないか。その方が静かになるし」

慶介の嘆きを切り捨てて、僕はすべての準備を整えた。

「ぢぐじょうく。覚えてろよ!!」

最後は悪役のような捨て台詞を残して去って行った。

「え？ なになに？ 和ちゃんがボディガードになったの!？」

「どこをどうとればそういう話に受け取るんだ？」

「それよりも早く次の授業の準備をしないと授業が始まるわよ」

寝ぼけ眼の唯に、諭すように言葉をかける真鍋さんの姿は母親のような感じがした。

そんなこんなで、またいつもの一日が過ぎていくのであった。

「ドラム嫌だ!!」

とある人物がそんなことを叫ぶ時までは。

3年生編 『楽器』 第113話 予感

それは、ギターの騒動がひと段落して数日後の放課後のことだった。

この日も、全員（約二名を除く）が亀であるトンちゃんの前へと集まっていた。

（完全に部活としての本分を忘れてるな、あれは）

唯は水槽に張り付いて可愛いとつぶやいているし、梓は熱心に亀の飼育方法が書かれている本を読んでいるし。

「ねえねえ、漣ちゃんも名前を読んでみなよ」

「え……トン……ちゃん」

先ほどまで水槽に張り付いていた唯は後ろのほうで控えめに（もしかしたらただ単におびえているだけなのかもしれないけれど）立ち尽くしていた漣に促すと、漣はおずおずと名前を呼んだ。

すると、トンちゃんは漣の呼びかけに反応したかのように顔を水面からのぞかせた。

（この亀、人の言葉がわかるのか？）

どうやら、世の中にはまだまだ僕には読み解けない謎があるようだ。

そして漣も唯と同じく可愛いと口にする始末だ。

「ちゃんと世話もしないとだめですよ、唯先輩。水温を一定にしたり毎日餌を上げたり水を取り替えたり」

そんな唯たちにくぎを刺すように、飼育方法の本を読んでいた梓が口を開いた。

ちなみに、エサはトンちゃんを買った際におまけでついてきたものを使用しているが、せいぜい数日分だ。

そろそろそれもつきかけていた。

「ギー太よりも手がかかるね」

「当たり前だ。楽器じゃないんだから」

「至極当然のことを呟く唯に、僕は音楽雑誌（に偽装した魔導書）に目を通しながらツツコミを入れた。」

「あ、エサなら私に任せて。家でもいろんな亀とか飼ってるから。ミシシッピニオイガメとか」

「よ、よろしくお願いします」

（え、エキスパートだ）

さらりと亀の種類を口にしたムギに、目を瞬かせながら梓は頷いた。

「かわいがるのはいいけれど、責任もって飼えよ」

「そうだな。世話がいやだからって捨てたりは——「もう嫌だ！」——」

僕の苦言に頷くようにつぶやいた澁の言葉は、律の叫び声によって遮られることになる。

「ドラム嫌だ！」

『はいい!?!』

何やら、またしてもひと騒動が起こりそうな予感がした。

「ドラムがいやだって、何を言ってるんだ？」

「すまん！ 嫌だは言い過ぎた。でも、これを見ろよ」

律の言葉に本を机の上に置いて立ち上がると、律がいるであろうベンチのほうへと歩み寄りながら、僕は呆れてしまい心なしか言葉に力がこもらなかったが、律は右手を僕達の前に掲げると即座に撤回した。

代わりに僕たちに見るよう促してきたのは、今朝真鍋さんから“参考ないしは記念に”と言われて渡された学園祭と新入生歓迎会でのライブの映像だった。

「これがどうしたんですか？」

「ここを見てみる！」

そういいながらステージの映像のある部分をズームさせた。

「うわ、暗!?!」

「照明が当たっていないのね」

そこに映し出されたのは額だけ光り輝く人物の姿だった。

どう見ても律だった。

「ドラムは隅っこですからね」

梓の言うとおり、ドラムは後方に配置されるのが普通なので、どうしても隅っこになってしまう。

これは、ドラマーの宿命なのかもしれない。

とはいえ、工夫の仕方によっては、この問題も解消されるが。

「でも、おでこだけは輝いてるよ」

「うるさいっ」

唯のフォロー（？）に律は自分の額を抑えながら言葉を吐き捨てた。

「それにこれだけじゃないんだよ、ほら！ 去年の新歓も今年の新歓も!!」

「暗いな」

「あ、足が見えました」

律の力説に映像を確認してみると、確かにどの映像も律の姿は唯や梓に比べてはつきりと見えていない。

「でっ」

映像を一通り見終えた僕は、後ろのほうで僕たちに背を向けるようにしゃがみこんで泣きまねをする律に、続きを促した。

しばらくの無言のうちに

「他の楽器やりたい」

律が口にしたのは、そんなとんでもないものだった。

「おいおい、映像に映らないからほかの楽器をやるだなんて前代未聞だぞ」

「それに、誰がドラムをやるんだよ」

僕の言葉に続いて告げられた疑問の言葉に、律は泣きまねをやめると壁のほうを見ながら口笛を（吹けてはいないが）吹き始めた。

（考えてなかったんかい！）

「それにちまちましたのは苦手だからドラムをやるって言ったのは律だぞ」

「だからさ、取り換えっこでもしようぜ！」

濡の言葉に律がそんな提案を出した。

「なんだかおもしろそう！」

「だろ？」

気づけばもう決定事項のごとく話が進んでいた。

「まあ、いんじゃない」

「よっしゃ！ 浩介が味方になったぞ」

僕が賛成に回ると、律は興奮した様子でガッツポーズをした。

「ドラムをやめる云々は別として、色々な楽器に触れてみるのは、経験としてはいいと思うからだ」

念のためにと、僕は付け加えるようにして律に告げた。

ドラムをやめるといふ話とはかく、さまざまな楽器に触れるといふのは経験を積むいいチャンスだ。

一つの楽器に集中するのではなく、出来るだけ多くの楽器に手を触れれば、適正な楽器パートを見つけるだけではなく、その楽器の演奏のむずかしさなどがわかったり、自分楽器パートの重要さがわかったりもできるのだ。

そんな理由で、僕は賛成票を投じたのだ。

「それじゃ、私のギター使ってみる？」

「え、いいの!？」

そんな中、快く自分の楽器を差し出したのは、唯だった。

こうして、律発案の楽器取り換えつこが始まるのであった。

「じゃーん！」

唯のギターレスポールを構えた律の姿に濡れたちが感嘆の声を上げる。

「ギターを持っていてる姿がすごく様になってます」

「でも、やっぱり変な感じね」

「いやいやー」

梓とムギの言葉に、律は右手を頭の後頭部に添えながら相槌を打った。

とはいえ、梓のはものすごく危険な感じがする感想だったような気が

がしたが。

「うわーん！」

そんな中一人泣き声を上げたのは、唯だった。

「どうしたんだ？」

「ギー太が律ちゃんに浮気した〜！」

唯の様子に何があったのかわからずに尋ねると、泣きじやくりながらその理由をこたえた。

「自分から笑顔で差し出したんじゃないですか！」

「ギー太、君のことは忘れないよ！」

「意味がわかんない」

涙を浮かべて窓の外を見つめながらつぶやく唯の言葉は、まさしく謎そのものだった。

「それじゃ、唯先生よろしくお願いします！」

「唯先生!？」

「変わり身早いな、おい」

先ほどまで涙ぐんでいたのはどこへやら、律の先生という言葉にすっかり元に戻って「いやいや〜」と照れ笑いをしている唯に、思わずそうつぶやいてしまった。

(まあ、そういう訳のわからないところも魅力といえば魅力なんだけどね)

口に出したら確実に砂嵐が巻き起こりそうなことを、僕は心の中でつぶやいた。

そんな中、一人テーブルのほうへと向かうのは漑だった。

「何故に座る？」

「どう考えてもすぐに飽きると思うから」

「……確かに」

漑のその言葉に否定をするだけの材料が僕にはなかった。

そんなこんなで、唯によるギターレッスン(?)が幕を開ける。

「左手で弦を抑えて、右手でストロークだよ」

「いや、それぐらいは分かってる」

本当に基礎の基礎を教え始めようとした唯に、律が申しわけなさそ

うに右手を上げて告げた。

「ええ!? それじゃ、一体何から教えれば……」

「……」

あえて僕は傍観に徹することにした。

これもまた、彼女たちのレベルアップになるのであれば、ここで僕が手を出すのは野暮だと思ったからだ。

「仕方がないですね」

あたふたとする唯を見かねて声を上げたのは、譜面台を手にした梓だった。

「まずはふわふわ時間タイムからやってみましょう」

そう言いながら譜面台に置いたのは、ふわふわ時間タイムのギター用の譜面（通称TAB譜）だ。

こうして、唯によるギターレッスンは梓を交えた二人掛の物となった。

「ええつと、それじゃ……」

「あ、座った方が弾きやすいかもです」

譜面をのぞき込む律に、梓がすかさずアドバイスを入れた。

立ちながらだと、ギターがどうしても動いてしまう。

だが、座ればボディが体にしっかりと固定されるために動きずらくなるので、弾きやすくなるのだ。

そんなどうでもいい豆知識は置いといて、律は梓のアドバイスに従いベンチに腰掛けた。

「それじゃあ、最初のコードは“E”ですから……人差し指は3弦の1フレッドで、中指は5弦2フレッド、薬指は4弦2フレッドを押さえてください」

「……………」

梓の言葉に、律はただ眼を瞬かせるだけだった。

（まあ、確かに呪文にしか聞こえないもんな）

ギターのことをよく知らない人にとっては、呪文よりも厄介なものかもしれない。

「梓、口で言うより、実際にやった方が早いと思うよ。こういうふう

に」

「え、ちよっ!？」

見かねた僕は、律の手をつかむ。

「人差し指がここ、中指がここ、薬指がここ。それで、はい右手を動かす」

なんだか頬が赤いような気がするのは気のせいだろう。

そして何より

「……………」

隣から感じる殺気は気のせいだと信じたい。

「お、おうー!」

そんな中、律は僕に言われたとおり、右手をストロークし始めた。

聞こえてくるのはずれたギターの音色だった。

「律ちゃん、右手はもつとぐにやんぐにやんに動かすんだよ」

「律先輩、弦を抑えている指を立ててください。ちゃんとなっていない音があります」

それはともかく、矢継ぎ早に梓や唯から投げかけられるアドバイスに、律の表情が見る見るうちに曇り始めていった。

(これはあと2, 3コードで躓くな)

そんなことを思ってしまうほど、律の表情は悪化していたのだ。

「それじゃ、次のコードですね」

「これが難しいんだよねー」

Eの次にくるのはAコードというものだ。

ちなみに押さえ方は薬指が2弦2フレッド、中指が3弦2フレッド、人差し指4弦2フレッドを抑えればいいだけなので、それほど難しくはないが初心者にとっては難しいことには変わりないだろう。

「ギター無理かも」

『え!?!』

律の一言に部室中に衝撃が走った。

主に、やめる速度に。

「いやー、ギターって覚えることが多くて大変だなー。御見それしました」

「いえいえー」

ギターを両手で唯のほうに掲げる律に、唯も両手でそれを受け取ることで応じた。

「ギー太、お帰り〜」

そして戻ってきたギターを手に柔らかい表情をうかべる唯の姿に、どこか心が洗われるような感じがするのであった。

それが、すべての始まりだったのかもしれない。

この後に続く率を中心とした珍騒動は。

ちなみに、これは余談だが。

「唯」

「何かな？ 浩君」

帰り道、僕と唯に梓の三人でいつものように帰路についていた。

ただ違うことがあるのだとすれば

「なせに脇腹をつねり続けているのですか？ 唯さん」

先ほどから強く脇腹をつねっていることを除けば。

「なんでだと思う？」

「いや、疑問形に疑問で返されても……って、いい加減地味に痛いんだけど！」

先ほどから痛みをこらえている僕としては、これ以上は勘弁願いたかった。

「浩君、律ちゃんの手を取って鼻を伸ばしてた」

「あー、あれか。って、鼻は伸ばしてない！」

不満げに洩らした唯の言葉に、ようやく理由がわかった僕は、即座に釈明した。

「あれはコーチのためだ。というより他意なんてない」

「ぶー。あずにゃんが教えていたんだからあずにゃんが普通やるのに」

「練習は気づいたものが率先して教え——って、痛い、痛いから！！」

もはや釈明の余地なしということなのだろうか、僕の脇腹をこれまでもよりも強くつねる唯に、僕は悲鳴を上げた。

「あ、あの唯先輩。浩介先輩も反省しているんですから——「だから、何？ あずにゃん」——い、いえ何でもないです！」

控えめに止めようとした梓に、唯が声をかけると梓は震えながら諦めた。

結局、いつかデートをするということだけで唯の機嫌を戻すことに成功した。

この時、普段のちよつとした行動が自分でも予想できない結果を生み出すことを思い知るのであった

第114話 輝きと策

「こうふふえふあひひひよふあー」

「食べながらしゃべるな」

昼休み、目の前でお弁当をほおぼりながら口を開く慶介を咎めた。女子は女子で、男子は男子同士で食事を摂るというわけではない。ただ単に席の問題（僕たちが座るだけの机の幅がなかった）だけなのだ。

そんな唯たちは、楽しみに昼食をとっていた。

だからと言って僕たちも楽しくというわけにはいかない。

「それで、何だ？」

「浩介はいいよなって言ったんだ」

あらためて慶介が何と言っていたのかを尋ねると、そんな言葉が返ってきた。

「いきなり何を言うんだ？」

「だってよ、部員はかわいい女の子だけで、顧問だって優しくて美人の山中先生じゃないか」

慶介の口から出たのはある意味いつも通りの言葉だった。

「可愛いはいいとして、山中先生の場合は微妙に違うと思う」

あの人の本性を知っている僕からすれば、素直に領けられなかった。

「それは自慢か!? 一生俺にはできえないことだという自慢なのかあ
!!」

「うっさい」

「ごふあ!?!」

むさくるしく雄たけびを上げ始めたので、とりあえず沈めておくことにした。

「あなた、本当に扱いなれてるわね」

「慣れているというよりは、どんどん投げやりになってきてないか?」

そんな様子を見ていた真鍋さんと滯から呆れたような驚いているようなよくわからない口調で話しかけられた。

「まともに対処すると時間をもつたないから、最近はお面倒だと思ったらぶちつとつぶしてるんだよ」

「ちよつと、俺は虫感覚での対応ですかい!？」

苦笑しながら返すと、例にも漏れずに素早い回復を見せた慶介がツツコみの声を上げた。

「浩介も浩介だけど」

「彼も彼ね」

なんだか僕と慶介が同列に見られているような気がするのはいのせいだろうか？

(それにしても、律のやつはまた放浪の旅か)

ふと視線を横に逸らしてみると、そこにはほかの学生たちと楽しそうに話をしている律の姿があった。

「いいですか?」

「ん?」

ふと廊下のほうから女子の物と思われる声が聞こえてきた。

「私に続いて覚えてくださいね。水平リンベ、青い船!」

「……」

聞こえてきたのは元素表を覚える定番の語呂合わせだったが、それは何かが違っていた。

(それを言うなら、“水平リンベ、僕の船”では?)

なんだかどこぞの星が降る町にいる天使がしそうな言葉の間違いに、心の中でツツコみを入れた。

「天使じゃありません!!」

「……………」

「どうかしたのか? 浩介」

まるで僕の心の声を聞いているかのようなタイミングで返ってきたツツコミの言葉に啞然としてみると慶介から声がかけられた。

「いや、なんでもない」

今のはただの気のせい。

夢でも見ていたのだと自分に思い込ませることにした。

そしていつもの昼休みの時間は過ぎていくのであった。

「というわけで、今日もやろうぜ！」

「何が」というわけ“なんだ？”

放課後、一足先に部室に来ていた滯がドアを勢いよく開け放って告げた律の言葉にツツコミを入れた。

「輝け律ちゃんシリーズまだ続いてたんだ」

「もしくは楽器取り換えっこか？」

ギターの一件で辞めないところが律のいいところでもあるのだが、理由が理由なだけに少々微妙な心境だった。

「やっぱり輝いてないとだめかもしれない！ さわちゃんを見てみろっ！」

「な、何よ？」

律の言葉に、僕達はいつもの定位置である僕と梓の席の横の部分を利用して優雅にキーキを口に行っている山中先生へと視線を向けたので、山中先生は戸惑いの表情をうかべる。

「担任になってからお肌はつやつや髪はきれいだしっ」

確かにこここのところ山中先生は輝きを増してきていると思う。

とはいえ、抱く感情はただの憐れみみたいなものだ。

「ふふ。担任ともなると、教壇というステージに立って皆に注目されるからね」

「ぶっくくく」

山中先生の言葉に、僕は笑いがこらえきれなくなり吹き出してしまった。

「な、なによ！ 笑わなくてもいいじゃない」

「くくく、すみません。律、優雅に泳いでいるアヒルはその実、水面下では必死になってもがいているもんだぞ？」

「はい？」

山中先生が輝いている理由がわかるために、僕は直接ではなく間接的に伝えたのだが、どうやら通じなかつたようだ。

「山中先生、老婆心ながら言わせていただきますけど、やりすぎは毒になりますので、ほどほどに」

「うっ。うるさいわねー」

僕の忠告に、山中先生は一瞬表情をこわばらせたものの、そっぽを向きながらキーキを頬張った。

「——というわけでキーボードを弾いてみてもいい？」

「ええ。もちろんよ」

少ししてやってきたムギに事情を説明した律の頼みに、ムギは快く承諾すると、キーボードの電源を入れて演奏ができるように準備を整えた。

「それでは……」

若干緊張しているのか指を震わせながらも鍵盤に乗せた律は、さらに力を込めて鍵盤を押し込む。

すると、何とも明るい音色が部室内を駆け巡って行った。

「律先輩って楽譜読めるんですか？」

同じく部室に来ていた梓の問いかけに、律はテンポよく数音を鳴らした。

「あ、＼だいじょうぶ＼だって」

(なんで解読できてるんだ?)

まあ確かに聞こえなくもないけれど

「さすがにムギもめい……じゃないよな」

濡が言葉を途中で止めるほど、ムギの目は輝いていた。

そこでさらに律はさらに3つの音を鳴らした。

それはまるで

「あつ。いま、むーぎーちゃん」って」

「言った言った」

僕には救急車のサイレンの音にも聞こえるのだが、どうやらムギと唯にはそれが違って聞こえていたようだった。

僕には理解のできない謎ワールドが、律とムギに唯の三人の中では

展開されていた。

それから少しして、演奏のコツをつかんだのか、音色を変えながらチャルメラの音を奏でる。

「キーボードっていろいろな音色があつて面白いよな」

「新しい曲のイメージがどんどん固まるわ」

(どんな曲にする気だっ!?)

今のチャルメラからいったいどのような曲を編み出すのかがとても気になった。

「なんだか楽しそう……」

そんな時、律の楽しげに弾いていく姿に触発されたのか、前のベンチで腰かけていた漣がポツリとつぶやいた。

そして律の目が怪しく光つたのを僕は見逃さなかった。

「ねえムギ、私にも弾かせ——」

席を立ってムギに声をかける漣の言葉を遮るように、ヘビメタ風の音色を鳴らした。

「や・め・ろっ！　そういうのは止めような？　そういうのはっ」

勢いよく律の頬を両手でつかんだ漣に対抗して、律も漣の頬を両手でわしづかみにした。

「……まったく何をやってるんだか」

「いやー、でも楽しかったな。これでほとんどの楽器を取り換えっことしたし」

漣との格闘も終わり腕を伸ばしながら感想を漏らす律。

(あれ？　何か抜けてないか?)

ふと僕は何かの楽器を弾いていないことに気付いた。

「ねえねえ、ベースはやらないの？」

「ベースはだめ！」

それは唯も同じったようで首を傾げながら問いかけた唯に、漣はいつになく強い口調で拒否した。

「ベース以外の楽器はやりたくないし、ベースじゃないとできないし……」

恥ずかしそうに視線を色々な場所に移していた漣は、やがて静かに口を開いた。

「低くて太い音色とか、ベースラインを作るのも楽しいし、それにみんなを支えている感じが好きで皆の音に埋もれない、そんなベースistになりたいんだ」

それは、秋山漣というベースistの基盤にも思えた。

「知ってるよ。だからベースにだけは手を付けないのさ」

(意図してベースをやらなかったのはそういうわけか)

一瞬、ギターと同じ弦楽器だから避けたのかと邪推してしまった自分が恥ずかしく思えた。

「ほほう、私と浩君みたいにアツアツどすなー」

「さりげなくのろけなくてください」

唯の言葉に、梓のジト目での注意が飛んできた。

と、そんなときどこからともなく異音のようなものが聞こえてきた。

それは軽い爆発音にも思えた。

そんな異音の発信源は明らかに先ほどから動く気配のない漣であった。

「語りすぎた」

そう言つて動かなくなった漣の頭からは、まるで煙でも出ていそうな感じがするほどに燃え尽きたような感じがした。

「うお!? 漣が生きる屍に?!」

「しっかりするんだ、漣隊員ー」

そんな漣に唯が体を軽く揺さぶりながら正気に戻させようとする。

「律ちゃん、私に任せてね!」

と、力強く律に告げる唯だが一体何を任せるのだろうか?

その後に聞いてみても、“ないしょ”という答えが返ってきたた

め、僕にもそれは分からなかった。

ただ、なんとなく

(絶対にろくなアイデアじゃないな)

そんな気がしてならなかった。

3年生ともなれば、必ずあるのがクラス写真だ。

卒業アルバムのための写真にも必要なため、これからはこういう機会が増えるのは確実だった。

つまり、何を言いたいのかというと、

「早く並んでね」

僕たちは今、クラス写真の撮影中なのだ。

クラス写真ほど、惨めなものはないだろう。

なぜならば、背の低い人はそれをはつきりと自覚させられるのだから。

それはともかく、僕の身長はやや平均並みのため、前から3列目という場所になる。

「あれ、高月君」

「佐伯さんか。奇遇というかなんというか」

隣に立ったのは去年から同じクラスだった佐伯さんだった。

「何、その嫌そうな反応」

「別に嫌だとは言っていない。ただ、あんたにかかわると面倒くさいのが付いてくるからだ」

「その面倒くさいというのはこの俺のことですか？ 浩介さん」

ジト目でこっちを見る佐伯さんにため息をつきながら答えていると、後ろのほうからそんな声がかげられた。

「お前、本当にストーカーにでもなる気か？」

僕の後ろに立っている慶介に、僕はため息をつきながら問いかけ

た。

「それもまたいいかもしれないな。俺は佐伯さんの陰。それはまるで忍者のごとく」

「背中か体に棺を構えたら、どこぞの変体の神様にでもなれるんじゃないか?」

まあ、その前に潰されるのがオチだけど

「それにしても、慶介は僕と身長が同じだったはずだが。なぜそこにいる?」

正確には僕よりも数ミリの差ではあるが小さいので、僕よりも大きい背丈であろう後ろのほうにいたことが信じられなかったのだ。

「知らねえよ。気づいたらここにいたんだ」

「気づいたらって……完全に背の順関係ないよな」

というより、誰もそれに気づかないのがすごい。

「それを言うなら向こうを見てみる」

「向こうって……ああ、なるほど」

慶介の指さす方向に視線を向けると、そこには和気あいあいとしている律たちの姿があった。

何故だか一番後ろの列に立って。

「それじゃ、行きまーす」

カメラマンの日意図が声を上げたため、僕は話をやめて正面を向いた。

この時、僕は慶介を無理やりにもどこかに移動させるべきだったのかもしれない。

そうすれば、後々にあのような騒動は起こらなかったはずなのだから。

「浩君、もうちよつと前」

「ごうか？」

放課後、唯の指揮のもと僕は律のドラムを前のほうへと移動させていた。

そうしているうちに、顧問である山中先生をはじめ梓達も集まってきた。

「おーっす……っつて、何をやってんだ？」

そして一番最後に訪れた律は、ドラムの前に腰掛ける唯に、啞然としながら声をかけた。

「律ちゃん、ドラムの位置を変えてみたんだ！」

「へ、へえ」

思いつきり引いてはいるものの、唯は自信満々の様子でさらに言葉をつづけた。

「たまには席替えをした方がいいんだよ！」

どうやらそれが唯の考えた策のようだった。

これならば確かに、目立たないという問題点は解決する。

「めっちゃ恥ずかしいぞ」

とはいえ、恥ずかしさが増すのは明らかなのと、もう一つの問題点があった。

「ちよつとその位置じゃ変よ。もう少しドラムが後ろにしないと」

ドラムが一番前に出てくるバンドは多くない。

そのため、この配列は違和感しかなかった。

なので、山中先生の指摘は十分に的を射るものであった。

「もうちよつと後、もう少し」

そして山中先生の指導の下、僕たちはドラムの位置を丁度いい場所にまで移動させていった。

その結果

「うん、これで十分よ」

「今までと変わってないな」

『ですよー』

これまでの配列と同じものとなってしまった。

「大丈夫！ まだまだ策はあるから」

最初の席が餌羽扇が失敗に終わったかと思えば、唯は突然ヘッドライト月のヘルメットをかぶった。

「わきゃ!？」

そしてヘッドライトをつけるとそれを律に向けて照射した。

「これなら輝けるよね！」

「や、やめろお！」

律の悲鳴に辞めるどころかささらにライトで照らす唯に、律の体は小刻みに震え出した。

「やめろ、唯っ！ もう虫の息だ」

「や、やっってもうたっ」

唯の二つ目の策であるライトアップ作戦は、律の気絶で失敗となった。

「もしかして、律ちゃんは寂しいんじゃないの？」

「寂しい？」

しばらくして意識を取り戻した律に、唯はそう尋ねた。

「演奏中はいつも後ろだから」

「なるほど、確かに的を得ているな」

寂しい⇨輝きたいという図式はどうにもわからないが、人は時に本心とは違う感情を抱いてしまうことがある。

吊り橋効果のようなものがその典型例だろう。

まあ、今回のような事例は聞いたことがないけれど。

「だから、演奏中にもっとコミュニケーションをとろうよ！ 後ろで寂しい律ちゃんのためにつ」

「……」

唯の出した策になんとか嫌な予感がするのは気のせいだろうか？

そもそも、どうやって演奏中にコミュニケーションをとるのだろうか？

「あの、どうやってですか？」

「こんな風だよ。じゃかじゃかじゃんじゃかじゃ、はい！」
「……………」

梓の疑問に答えるように実演して見せた唯に、僕は思わず言葉を失った。

演奏するマネをしながら要所要所で律のほうに振り替えるという、何とも単純な方法だった。

とはいえ、それをやられる方は心臓に悪いのは言うまでもないが。「皆も一緒に、後で寂しい思いをしている律ちゃんとコミュニケーションを取ろう！」

「ええー」

全員にやるように呼びかける唯に、嫌そうな表情をうかべる梓の気持ちはよくわかる。

僕とてやりたくない。

「せーの。じゃかじゃかじゃんじゃかじゃ、はい！ じゃかじゃかじゃんじゃかじゃ、はい！」

そんな梓の意思を無視して強引に始めた唯に、僕と梓もいやいやではあるがコミュニケーションをとることにした。

まあ、肝心の律はやるたびに肩を震わせているので、結果はお察しだろう。

「唯、もういい——」

「ダメだよ律ちゃん！ 律ちゃんの悩みはみんなの悩みだよ！」

律の言葉を遮って心配した様子で語りかける唯。

「いや、だから別に悩んでは——」

「皆で乗り越えようね！」

「話を聞け——」

なんだか茶番劇のような感じになってしまったが、これはこれである意味有意義なものだったのかもしれない。

なぜならば、僕はようやくこの問題の本質を知ることができたのだから。

(ならば解決の時も近いか)

押し問答を繰り返している唯と律を見ながら、僕は心の中でそうっ

ぶやくのであった。

第115話 原点回帰

部活も終わり、梓とともに帰路についている僕と唯に梓の三人は、歩道を歩いていた。

「うう、こんなに持ってきたのに〜」

「諦めて持って帰ってください」

あのあと色々と策を披露した唯だったが、そのかいむなしく空振りに終わったため道具一式を持ち帰ることとなった。

ちらつと見る限り、フロアスタンドやラケットなどが見えるが、一体何に使うつもりだったのだろうか？

「ねえあずにゃん、浩君」

「何ですか？ 唯先輩」

「なんだ？」

そんな時、唯に僕たちは声をかけられた。

「律ちゃんがだめだったら私がドラムをやるよ」

「はい？」

唯の口から出た突拍子のない言葉に、僕は思わず顔をしかめてしまった。

「律ちゃんは、きつと何かに悩んでいるんだと思うんだよ。ほら、えつと……ストライクじゃなくて」

「もしかして、スランプって言いたいのか？」

顎に手を当てながら口づさむ唯に、僕はまさかと思いつながら、あてはまる単語を口にした。

「そうそれ！」

「全然違ってましたね」

唯が口ずさんでいた言葉と言おうとしていた言葉がまったく似ていなかったことに、梓は苦笑しながら相槌を打った。

「きつといつもと違うことをやれば解決できると思うんだ。だから、私があずにゃんと浩君の後ろでドラムをやるね！」

「……ダメです（だ）」

唯の言葉に少しだけ考えをめぐらしてみた結果、僕と梓が出した結

論は却下だった。

「うっ。二人がシンクロした!?!」

「馬鹿なことを言うな。というか、唯にはドラムは無理だし」

ため息をつきながら、僕は唯のアイデアを一蹴した。

「ドラムは音楽においてすべての根幹部分……ドラムが狂えば、ギターやベースの音自体が歪んでしまうほど重要なポストなんだ。余興としてならともかく、本気であるならば僕はあまりお勧めはできない」

「うう、浩君いつになく厳しい」

僕の直球の言葉に、唯は少しばかりショックを受けた様子で相槌を打つ。

「演劇とかには主役や脇役はあるだろうけど、音楽にはそんなものはない。みんなが主役、皆がメイン。だから、僕は音楽が好きなんだよ。全員が主役になれる音楽が」

祖国では、力あるものが主役の座を得るといふ風潮が強い。

どこの世界でもそうなのかもしれないが、祖国だけはそれが特に顕著なのだ。

そんなところでも、音楽だけは別だった。

奏者、聞き手すべてが主役としてなりうる存在。

それが好きで僕はこの世界に飛び込んだのかもしれない。

(まあ、ただの後付の理由かもしれないけれど)

「なんだか、浩君ってすごいね」

「はい。浩介先輩の音楽にかける思いが聞けて良かったです」

そんなことを思っていると、感心したような唯の言葉と、久々の尊敬のまなざしで見つめながら声がかけられたので、僕はどうも居心地が悪く感じてしまった。

「律がああなったのは、彼女自身の立ち位置を失ってしまったから。一種のアイデンティティークライシスとでも言える」

「あ、アイデン?」

自分というものを見失う心理的な状態であるそれは、今の律にぴったりの状態なのかもしれない。

「これを解決するには、律自身がドラムとは何か、自分がどうしてドラムを始めたのか、その原点に戻る必要がある。その時こそ、ドラマーとして律はさらなる高みに上ることになるんだから」

「御免なせえ、私には何が何やらさっぱり理解できないっす！」

一通り話し終えた僕に、唯はこの物まねなのか、くぐもった声でそう告げた。

後では梓が苦笑しているが、大体同じ状態であることだけは分かった。

「つまり、解決方法は少しだけ様子を見ようっていうことだ」

「なるへそ！」

要点を細かく噛み砕くと、ようやく唯は納得したようで左掌に右手で作った拳を置きながら相槌を打った。

「唯！」

「ふえ？ どうしたの浩君」

「えっと………」

大きな声で呼んでしまったため、驚いた表情をうかべながら用件を聞いてくる唯に、僕はそれを口にするここと躊躇ってしまった。

言おうと思っっているがそれを口にすることができなかった。

(なんだか変な気持ちだ)

心と体の異なった反応に、僕は苦笑しそうになるが、それをこらえた。

「唯の案だけど、一概にだめだとは言えない。前に言った通り自分のパートの存在意味を考えるきっかけになるので言えば、無駄じゃないと思う」

「えへへ、ありがとう。浩君」

とつきに口から出たごまかしの言葉に、唯は顔を緩ませながらお礼を言う嬉しそうに前に進んでいく。

「浩介先輩は甘やかしすぎです。また明日何か持ってきたらどうするんですか」

「はいはい、以後気を付けますよ」

梓の溜息と呆れたような視線を交えて投げかけてくる言葉に、両手

を上げながら答えると僕は唯に取り残されないように唯のほうへと掛けていく。

(ま、いつか言えればいいか)

まだ時間はあるのだから。

そんなこんなで僕たちは帰路につくのであった。

その次の日の朝の教室でのこと。

「律ちゃんたち遅いね」

「滯ちゃんもね」

僕と唯、ムギの三人はいまだに訪れる気配のない二人の席へと視線を向けながら話していた。

HRまで残すところあと1分。

遅刻が確定しているといっても過言ではない状態だった。

もつとも、昇降口にいるのであれば滑り込みセーフだが。

「律はともかく、あの滯が遅刻とは」

「何かあったのかしら？」

僕の言葉にツツコまない当たり、律は遅刻してもおかしくはないという図式が成り立っているのかもしれない

(なんだか、律が不憫に思えてきた)

自分で言つたくせに抱いてしまった感情に、僕は何とも言えない気持ちになってしまった。

「まったく、遅刻するなんて弛んでるどすな」

「その言葉、全部唯に返すよ」

憂に起こされなければいつまでも寝ている勢いの唯の言葉に、僕は苦笑しながら二人の名誉のために言い返した。

「ほえ？」

そんな唯の間の抜けた声と同時に鳴り響いたチャイムによって、僕

たちは自分の席へと座っていく。

それから数十秒後、

「おはよう、皆」

「……」
いつものように教室に入ってきた担任の山中先生だったが

僕は山中先生の姿に、思わず目を瞬かせてしまった。

尤もそれはクラスのみんなも同じ様子だったが。

目には真黒なサングラス、口元にはマスクという装備をしたその姿は非常に不気味なものであった。

はつきり言うど、不審者と間違えられて騒動が起こらないのが不思議なほどの不気味さだった。

「それでは、HRを始めます」

そんなクラス中の沈黙の中、山中先生は連絡事項を話し始めた。

「あと二週間で修学旅行です。そこで、皆には自由行動の班分けをしてもらいます。人数は今配ったプリントに書かれているとおりです」
山名先生が言い切るのと同時に、僕のほうにプリントが渡ってきました。

そこには『修学旅行の班分け』という題目で下のほうに文章が続いていた。

「メンバーが決まったらプリントに名前を書いてそれを私に提出してください。期限は今週中なので、明日までです」

(班分けか……そういうえば、男子はどうするんだろう)

まだ続く山中先生の話によそに、僕はふと湧きあがった疑問を解決するべくプリントのほうに視線を向けて、文面をよく読むことにした。

「あ、律ちゃんに滯ちゃん！ 来なかったから休みなのかと思ったよ」

そんな中、大きな声を上げて二人の名前を呼ぶ唯に、僕は反射的に廊下側に視線を向けると、そこにはしゃがみこんで山中先生に隠れている律たちの姿があった。

「何をやってるんだ？ 二人とも」

きつと僕の表情はあきれ果てたような感じになっているのだろう。

何せ、本当に呆れているのだから。

(どうあがいてもばれないはずがないのに)

一番前という席の位置を見てもそれは明らかだった。

「す、すみません。遅れました……うわ!？」

教室がクラスメイトの笑い声に包まれる中、観念したのか律は後頭部に手を当てながらごまかすように笑いながら謝ろうとした律は、山中先生の姿を見て顔をひきつらせた。

(やっぱりそうなるよね)

心の中でそうつぶやきながら、僕は山中先生に言われるがままに席に着く二人の姿を見るのであった。

「さわちゃん先生!」

「どうしたんですか? なんだか怖いよ」

HRも終わり、休み時間になったこともあり、僕たちは廊下に出ていった山中先生のもとに駆け寄った。

理由はもちろん、サングラスにマスクという重装備の理由を聞いたのだ。

「きれいにしようと思ってやったらこんなふうになっちゃって」

「……」

そう言いながらマスクとサングラスを取り外した山中先生の顔は、文字には表せないほどの凄まじいものだった。

「うう……」

悲しげに呻き声を上げる山中先生にかけることができたのは言葉は

「やりすぎ(です)」

たったそれだけだった。

はかなくも、僕の忠告した通りのことが起こってしまったことに、僕は何とも言えない気持ちを抱くのであった。

「やっぱり私はドラムだなー」

数日間にも及ぶ輝けシリーズは、部室に集合してすぐに放たれたその一言で幕を閉じることとなった。

「そうだと思った。ザ・フーのDVDを見たって言ってたし」

「ぎ・ふー？」

笑みを浮かべながら口にした単語に、唯が首を傾げた。

「キース・ムーンって言って、律が憧れているドラマーだよ」

「私聞いたことがあります。変人とか壊し屋とか言われている人ですよね」

やはり音楽には人一倍詳しい梓のことだけあって、すぐに二つ名を口にして見せた。

キース・ムーンとは、1900年代に一世を風靡したドラマーだ。

自宅の窓やホテルの窓などから家具などを投げ飛ばしたり、爆竹を仕掛けて自宅を廃墟にするなどの行為が、そう呼ばれている所以だったりもする。

逸話では、ライブごとにドラムを破壊しているというものもあるが、本当かどうかは定かではない。

「なるほど……律には爆破願望があったんだな。あまり気は進まないけれど、律の家を木っ端みじんに爆発——「しなくていいからっ！それに、そこまで憧れてるわけじゃないし！」——そう？」

どうやって律の願いを叶えようかと考えている僕に、律からの鋭いツッコみが入った。

とはいえ、普通に考えれば爆破願望はあるわけがないのは明らかなのわけだが。

「やっぱり私はここでみんなの背中を見て、皆の音を聞きながらドラムを叩くのが好きなんだ」

「そうだよね。後ろを振り返ると、そこには律ちゃんがいる、ステイックを鳴らしたりすると、“頑張るぞー！”って思うもんね」

やはり、感じ方は人それぞれなのだろう。
僕はそこまで考えもしなかったのだから。

(皆の音……か)

「それに、バラバラになっている音が一つになる一体感もいいしね」
「そうだね」

放課後ティータイムの演奏が素晴らしい理由の一つは、もしかしたらこの一体感なのかもしれない。

全員が全員を信頼し合えるからこそ、いい演奏ができているのかもしれない。

(律に教えるつもりが、僕が教えられていたとは……)

最初は律に自分の楽器の存在意義について教えるつもりが、逆に僕は音楽というものを教えられることとなってしまった。

だが、それもいいのかもしれない。

わからないところを教え合うというのが。

「あつ。そういえば、この間律ちゃんが私のキーボードをしゃべらせてくれたおかげで新曲ができたの♪」

「あ、あれで……」

思い出したように両手を胸の前に合わせながら切り出したムギの説明に、僕はその時のことを思い起こしてみた。

……

(さっぱりわからない)

熟考した結果、出たのがそれだった。

「ねえ、弾いてみて、弾いてみてー！」

「ええ」

語尾を弾ませながら急かす唯に相づちを打ったムギは、自分の楽器でもあるキーボードの前に移動する。

そして僕たちはベンチのほうに移動して聴く体制に入った。

「すう……」

静かに深呼吸をしたムギは静かに指を鍵盤の上で走らせた。

そして奏でられるメロディーは、とても透き通っていて夕日が射し込んでいる部室の雰囲気にとっても合っていた。

「とつてもいい曲だべ！」

その曲を聴いていた唯が手をたたきながら感想を口にした。

「これ、ムギが弾き語りしてみたらどう？　かなりいいと思うよ。皆もそう思うでしょ？」

そして、同じく曲を聴いていた僕は思ったことをそのままムギに提案した。

「うん！　すごくいいと思う」

「私もです」

僕が確認するように皆に声をかけると唯たちも頷きながら僕の提案に賛同してくれた。

「ありがとうね」

「それじゃ、漣。歌詞よろしくな」

ムギのお礼の言葉に、律は歌詞を書くように漣に声をかけたところで

「あのねっ」

ムギがそれを遮るように声を上げた。

僕たちはもう一度ムギのほうに視線を向ける。

「曲のタイトルはもう考えてあるの」

「どんなどんな？」

ムギの言葉に、唯は興味津々とばかりに身を乗り出しながら先を促していた。

「とりあえず、唯は落ち着く」

「ぶーぶー」

ベンチから落ちたら危ないので、僕は唯をちゃんと座らせるが不満げな視線を向けられてしまった。

『honey sweet tea time』っていう曲名なの」

「結局お茶か」

「でも、なんだかピッタリな曲調だし、いいと思うよ」

曲名と先ほど弾いてもらった曲調は見事なまでに雰囲気が一致していた。

まさに曲の雰囲気ピッタリな題名だった。

「よし、滯が歌詞を作ってる間は、私たちは——」
ベンチから立ち上がりながら告げられた律の言葉を僕はもしかしたら練習などをするのかと思いつながら聞いていた。

「お、このラスク蜂蜜を塗るとおいしいねっ」

「ほんとだ。まさにベストコンビってやつだなっ！」

本日のお茶菓子であるラスクに蜂蜜を塗っていた唯の感想に、律は頷きながら称賛していた。

「……」

「まあ、こうなるとは思っていましたがね」

おいしそうにラスクをほおぼる唯たちに、言葉を失っていると、苦笑しながらつぶやく梓の言葉にどことなく罪悪感を感じてしまうのはなぜだろうか？

「おい唯、ほっぺに蜂蜜がついてるぞー」

「あずにゃん、拭いて〜」

まるで何かを期待するように知らせる律に、唯は体を乗り出して梓に拭いてもらうようをお願いをし始めた。

「嫌ですっ」

「むむー。それじゃ、浩君が拭いて」

「それじゃあって……」

梓の拒絶の返答に、頬を膨らませた唯だったが、それもつかの間、こちらのほうに顔を向けてきた唯が拭くように言ってきた。

(ここで恥ずかしいことでもすれば、トラウマになって練習を始めるかも)

僕はふとあくどい思惑を考えてしまった。

「え？ 浩君」

自分の肩に突然置かれた僕の手には、唯は目を丸くする。

そんな唯をしり目に、僕はゆっくりと顔を唯の頬に近づけていき、そして

「ペロ」

舐めた。

「ひゃう!？」

「おやおやく」

「んや!？」

僕の突然の奇行に唯は悲鳴にも似た声を上げ、律は興味深げ（からかうような）な視線を向け、梓は顔を真っ赤にした。

「も、もう……皆の前で恥ずかしいよお」

頬を赤くしながらかわいらしく怒ったように言ってくる唯の表情に、胸に強い衝撃が走った。

（あれ、これってもしかしなくてもミイラ取りがミイラになったかな）

そして今になって僕は自分のとった行動が間違えていることに気付くのであった。

「ご、ごめん」

僕は慌てて唯に謝ると、誤魔化すようにラスクを頬張った。

結局、僕はしばらく律からはにやにやとした視線を向けられ、梓にはあからさまに視線を避けられるようになってしまった。

幸いだったのは、次の日にはそれがなくなっていたことと、山中先生がその場になかったことぐらいだろうか。

3年生編 『修学旅行』 第116話 修学旅行前日

それは、ある日の休み時間のこと。

「ねえ、高月君」

「なんだ？ 佐伯さん」

次の授業の準備をしているところに、佐伯さんから声がかけられた僕は、準備の手を止めて佐伯さんのほうに顔を向けて用件を尋ねた。

「この間、修学旅行の班分けの話があつたでしょ？」

「確かにあつたね。それが？」

数日前に山中先生からHRで言われたことを思い出した僕は、さらに詳しく聞いてみることにした。

「その……よかつたら私たちと一緒に班にならない？」

「……………」

（またか）

佐伯さんの口から出た本題に、僕は心の中でため息をついた。

というのもここ数日の間、僕は数人の女子から同様の誘いを受けているからだ。

“正直言つて僕なんかを誘つて何が楽しいのだろうか？”と思つてしまうのだが、それは口にしないようにした。

一度してしまえば場の雰囲気が悪くしてしまうからだ。

さすがに僕もそんなことをするほど馬鹿ではない。

「悪いけど、もう組む班は決まつてるから」

僕は、これまで何度もしている言葉を佐伯さんに告げた。

そう、僕はすでに軽音部メンバー（梓を除く）で班を組んでいるのだ。

尤も誘つてきたのは律だが、誘われなくても僕は唯と一緒に班にはいるつもりだった。

折角の修学旅行だ。

羽目を外しすぎない程度に楽しんでも罰は当たらないだろう。

それに、もしほかの女子がいる班にでも入ったらと思うと……
(考えないようにしよう)

ちよつと考えただけで背筋が凍るような寒気を感じた僕は、それ以上考えるのをやめることにした。

「そう……」

「悪いね」

「ううん。気にしなくて大丈夫だよ。だって……ねえ?」

目に見えてがっかりしたような表情をうかべた佐伯さんは、慶介のほうに視線を向けると意味ありげに聞いてきた。

「なるほどね」

「ちよつと、人の顔を見て何意味ありげな表情をして頷頷き合ってるんだっ!」

佐伯さんの言わんとすることを察した僕の相槌に反応した慶介が、こちらのほうに近づきながら聞いただしてきた。

「言ってほしいのか?」

「言わないでください!」

僕の応えに、慶介はまるで滑り込むような勢いで土下座をしながら止めさせてきた。

何となく、慶介が惨めに思えた僕は、土下座をしている慶介から視線を外すことにした。

「大丈夫だよ。慶介はとても変態でバカでいい加減(*以下同じ内容なので省略) 人だけど、とってもいいやつだから」

「ありがとう、浩介。とても言うと思ったか!! なんだよその暴言にも近い言葉は! しかもフォローがたった一言だけだし!」

僕ができる最高のフォローに、慶介が不満げに抗議(というよりツツコミに近い) してきた。

「これでも、まじめに真剣に考えたんだけど」

「それであれって、逆に俺が傷つくんだけど?!

「まあ、それはともかく。慶介は人の嫌がることはしないやつだから。それは僕も保証するよ。だから、どうかな?」

慶介からのキレのいいツツコミをもらったところで、僕は佐伯さん

が安心してできるように慶介のことを話した。

「高月君がそこまで言うんなら……でも、一つだけ条件があるの」
「条件？」

一体どんな条件が課せられるのかとドキドキしながら佐伯さんの言葉を待っていると

「佐々木君が変なことをしたら止めてね」

「もちろん。全力全壊で止めさせてもらうよ。まあ、近くにいたらだ
けど」

何とも簡単な条件だったことにほっと胸をなでおろしながら、僕は
その条件を呑んだ。

「ちよつと今、全開の“かい”がすごく物騒な漢字になってたぞ!!」

「ただの気のせいだから、気にするな」

「そ、そうか。それならよかった」

なんだか意味の分からないことを喚き散らす慶介を安心させるよ
うに相づちを打った。

こうして、何とか慶介は佐伯さんの班になった。

「よかったな、慶介の夢がかなったな」

僕たちから離れていく佐伯さんの背中を見送りながら、僕は慶介の
肩をたたきながら祝福の言葉をかけた。

ちなみに慶介の夢は“女子と一緒に思い出に残るような時間を過
ごしたい”といったものだったはずだ。

「嬉しいんだけど、どうしてだろうか？ この悲しい気持ちは」

僕はそんな複雑そうな慶介のつぶやきを無視することにした。

「それにしても、どうして人を選びたがるんだろう。たかかと言って
はあれだけど、自由行動の班分けだろうに」

慶介の班分けが決まった次の日のある休み時間のこと。

僕の席にやってきた慶介に僕はふとそんな疑問を投げかけてみた。
そんな僕に、慶介は驚きに満ちた表情をうかべながら

「浩介、お前知らないのか？」

と聞いてきたので、僕は

「何のこと？」

と、聞き返した。

「自由行動の班分けは、部屋割りにもなってるんだよ」

「……………は？」

慶介の口から出たあまりにも衝撃的な答えに、僕は一瞬固まってしまったが、何とか反応することができた。

「プリントにもちちゃんと書いてあっただろ？ 『部屋割りを兼ねている』って」

慶介に言われて僕はようやくちゃんとあの時配られたプリントに目を通していなかったことを思い出した。

もつとも、慶介の表情から嘘をついているようには思えなかったので疑ってはいなかったが。

「なんで、男女混合なんだよ。倫理的に大問題だろ」

いくらなんでも年頃の男女が同じ部屋で寝るだなんて問題がありすぎる、

保護者から苦情が殺到していてもおかしくはない（というより、無い方がおかしい）状態だ。

「それがな、男女別になると、ホテルの部屋が足りなくなるらしいんだ。5クラスの男子を固めても」

「……………」

この学年は一クラス二男子が2名。

まあ、一部のクラスは1人だが、4人と5人で分けても十分に足りそうな気がするが、きっと大人の事情があるのだろう

「なんでも、数年間修学旅行で使用しているホテルに教師が間違えて予約を取ったらしくて、他のホテルで予約を取ろうとしたんだけど部屋が不足しているみたいで断られたから、そうならしい」

「しかし、大丈夫なのか？ 本当に」

さすが生徒会の役員。

裏事情まで説明してくれる慶介に感謝しながら問いかけてみた。

「保護者には一人ひとり説明をしているらしい。なんでも男女混合にする際はそのメンバー内の女子の誰かと交際をしている男子にする、とか。見回り回数を増やすとか」

「何それ」

慶介の口から出た教師たちの対応策に、僕は自分の耳を疑ってしまった。

最後のはよくわかる。

だが前者の案はいつたいなんだ？

「なんだか教師側が各クラスの交際している男女のことを把握しているみたいで、恋人同士だったら問題はないだろうっていう理屈みたい」

「いや、問題ありまくりだろ」

一体どうやって把握しているのかはこの際おいておくとして、恋人同士だからこそ発生する問題はあるはずだ。

主にA，B，C的な奴で。

「まあ、それを兼ねての見回り強化らしいけど」

「この教師は能天気なのか、馬鹿なのかよくわからない」

慶介からされた説明に、僕はため息交じりに呟くのであった。

『はははっ。それはいいじゃないか！』

「勘弁してください」

夜、自室で予習をし終えたところにかかってきた中山さんからの電話で、修学旅行でのとんでもない事実を話すと、軽快に笑いながら言い返されてしまった。

『浩介だって眼福だろ』

「いや、まあ……そういわれると否定はできないですけど」

僕とて唯と一緒にいられてうれしいという思いがあるので、あまり強く言い返すことはできなかった。

『まあ、分かっているとは思うけどハメは外すなよ』

「分かっていますよ」

自分の立場的にも、不要なトラブルを招くようなことは避けるのが一番だ。

まあ、女子と一緒にの部屋に寝るという時点でそれはできていないわけだけど。

週刊誌に“DKに熱愛が発覚か？”などという見出しが載るのはできるだけ避けたい。

載ったとしても、それは自分で公表したときにしたいものだ。

『それじゃ、そろそろ切るわね』

「あ、はい。おやすみなさいです」

僕のあいさつに、中山さんも“お休み”と返して電話が切られた。

「さて、僕も寝るか」

気づけばすっかり夜の10時を過ぎていたので、僕は早々に翌日の授業で使う教科書などを鞆に入れて、部屋の電気をきってベッドにもぐりこむのであった。

「よし、これで一通りそろえたかな」

修学旅行前日、僕は旅行用かばんに必要な荷物を詰め込んでいた。

肌着や非常時の食料などもばっちりだ。

もちろん魔法関連の物を持っていくことも忘れない。

(武器関連は格納庫に入れておくとして、それ以外の物は……)

必要なものがあるかどうかを見極めながら、僕は持っていく魔導具を選んでいく。

結局僕が選んだのは、一回だけ物理攻撃などから身を守ってくれる
防御アイテムだった。

折角の修学旅行だ。

不意打ちを気にして歩くのではなく、純粹に旅行を楽しもうと考え
た結果だった。

「さてと、明日の修学旅行はいつたいうものになるのだから」

なんだか無性に不安に感じてしまうのは、どうしようもなかった。

一応唯たちとは修学旅行での自由行動の時に行くところを話し
合ったりはしたが、ちゃんとまとまらずその場で臨機応変に
回っていくという方向で話が決まった事も原因の一つだ。

行き当たりばったりというものが何とも僕たちらしかったが、それが
そこはかとなく怖くもあるのだ。

(まさか旅行先で乱闘騒ぎを起こすようなことはないよな?)

そんな不安を抱えながら、僕はついに修学旅行当日を迎えること
なるのであった。

第117話 波乱の幕開け？

修学旅行当日。

僕たち桜ヶ丘高等学校の3年は、クラス別に東京駅の新幹線ホームに集まっていた。

そこが集合場所だったからだ。

「人多すぎだろ」

平日ではあるが、人がごった返しているホームを見て、思わずげんなりとしてしまった。

人混みが嫌いだというわけではないが、好きでもない。

とはいえ、ライブでは話が別だが。

「おーい、こつちこつち！」

「分かったから、大きな声を出すな」

ただでさえ人が多いのがいやなのに、視線までこちらに注がれてはたまったもんじゃない。

僕は両手を大きく振りながら自分の立っている位置をアピールする律たちのいる方に、小走りで向かっていく。

「おはよう、高月君」

「おはよう」

さわやかな笑みを浮かべながら挨拶をするムギに、僕は挨拶を返した。

「浩君の席って、私たちの横なんだよね？」

「そうみたい」

座席は数日前に配られたしおりに記載されていたので、自分たちの座る場所は把握している。

ちなみに、一番後ろの席だった。

「遅刻している人はいないわね。それじゃ、皆、乗って」

『はい』

そんな話をしていると、クラス全員がそろったことを確認した山中先生の指示で、僕たちは新幹線に乗り込む。

「あれ」

「よっ、浩介」

自分の席に向かった僕は、隣……窓側の座席に意外な人物が腰かけていたことに首を傾げた。

「どうして慶介がそこなんだ？」

「どうしてって……ここが俺の席なんだよ。っっていうか、しおりに書いてあっただろ？」

僕の疑問に、慶介はジト目でこちらを見ながら答えた。

「興味がなかったから自分の位置しか見てない」

「いつもの浩介らしい対応だなっ！」

そんなどうでもいいツツコミを聞きながら、僕は荷物を上のほうに置くと、そのまま慶介の隣の席に腰掛けた。

それからすぐに、新幹線はゆつくりと動き出した。

こうして、僕たちの修学旅行は始まるのであった。

「……………」

いくつかの駅を出てしばらくしたころ、僕は隣で音楽プレーヤーにヘッドホンを接続して聴いている慶介にストレスを感じてた。

ストレスを感じている理由は、音漏れがひどすぎるからだ。

本人にすれば、いい曲だと思っけていても、こちらにしてみればただの雑音でしかないのだ。

しかも、聴いている曲はエフェクトのようなものがかけられているやっだし。

ちなみに、余談だが持ち物で音楽プレーヤーなどを持ってきてはいけないという注意事項はないらしく、別に持ってきても問題はないとのこと。

(騒がれてもあれだけど、雑音を聞きながら堪えるのは嫌だぞ)

ポリユームを下げるように言えばいいのだろうか、慶介の使用して

いるタイプのヘッドホンではいくら音量を下げても音漏れがするのには変わらない。

その結果、僕は考え付いたある方法をとることにした。

「……おい」

「」

軽く慶介の腕をたたきながら呼ぶが、慶介は車窓の眺めを満喫（曲に合わせて体を上下に振っていたが）しているようでまったく反応がなかった。

「おいっ」

「いてっ。なんだよ」

今度は頭を軽く叩いて呼びかけてみたところ、ようやく反応が返ってきた。

「慶介、万能ナイフ持ってきたか？」

「持ってきたが、何に使うんだ？」

僕の問いかけに、慶介は鞆から万能ナイフを取り出すと用途を聞いてきた。

「ちよつと切りたいものがあるだけ。ほら、慶介は聞いてなよ」

「おう」

僕は適当に慶介の疑問に答えると、ヘッドホンをつけるように促した。

万能ナイフとはいえ、さすがにナイフやハサミなどはついていない。

あるのはカンのふたを開ける物や爪切りといったものだ。

僕はその中で爪切りを出すと、再び体を上下にゆすつている慶介の近くにあったコードを手にした。

そして、僕はそのコードを爪切りで切断した。

雑音がなくなったことを確認した僕は、投げ捨てるようにコードから手を放し、万能ナイフを簡易テーブルの上に置いて伏せておいた本を手を取った。

「あれ？」

突如音が聞こえなくなったことを不審に思った慶介は、コードを手

繰り寄せる。

「浩介！」

「弁償するから静かに満喫しろ」

慶介の怒りに満ちた声に、僕は本から視線を逸らさずに一蹴した。「あれは、俺が小遣いを貯めてようやくと手に入ったものだったんだぞ！」

「……」

血の涙を流している慶介に、罪悪感を感じた僕は鞆の中に手を入れた。

そして、心の中で呪文を紡ぐと、先ほどまでなかったものの感覚が伝わってきた。

「泣くな。これをあげるから」

「ヘッドホン……」

慶介に手渡したやや大きめのヘッドホンを慶介は目を瞬かせてみていた。

「安心しろ。それは慶介が持っていたのより数倍の値段だから。何回か使っただけで、別にどこも壊れてないし」

「い、いいのか？」

「僕は本を読んではただで十分だから。弁償の意味を兼ねてあげる」

高揚した様子で聞いてきた慶介に、僕は頷きながら答えた。

「浩介！ お前は天使だな！」

「……」

先ほどとは打って変わって大げさに手を取って言ってきた慶介に、僕はなんとなく寒気を感じてしまった。

ヘッドホンを壊した人に言う言葉でないのは明らかだが、本人が喜んでいいるのだからそれで良しとしよう。

「マスター、最初からそれを渡すつもりなら、普通に渡してもよかったのでは？」

事の成り行きを見守っていたクリエイトが、誰にも聞こえないように頭に直接話しかけて（祖国では念話と呼んでいるが）きた。

【普通に渡したら、あのヘッドホンを使いそうだから】

そして僕も念話でクリエイイトにそう返した。

慶介のことだ、” 大事なものだからこつちが壊れるまで他のは使わない！” とか言いそうだったので、この処置がある意味最善だったと僕は信じているのだ。

それはともかく、少ししてヘッドホンを装着した慶介だったが、音漏れがすることは一切なかった。

体を上下にゆするのは鬱陶しかったが、それは我慢することにした。

「ふう。たまには歩かないとね」

テレビでやっていて、エコノミック症候群とやらにかからないようにするための対策である歩行を僕はしていた。

(それにしても、外国の人が多いな)

何故かは知らないが、今いる車両は外国の観光客と思わしき人たちの姿が目立っていた。

ちなみに、今いるところは僕たちの座席がある車両ではない。

「おい、 浩介」

「ん？」

突然名前を呼ばれた僕は、歩くのを止めて呼んだ人物のいる方向に振り向く。

「何をやってるんだよ？ こんなところで」

「何って、 散策だけだ」

飲み物が入った水筒のコップ部分を片手に近寄ってくる慶介に、僕は答えた。

「散策って、ここですか？」

「たまには歩かないと健康に悪いんだよ」

慶介からの指摘に、僕はやれやれとため息をつきながら言い返す。

「それにしても、一体何を飲んでるんだ？」

「コーヒー、微糖」

僕の疑問に対する慶介の答えに、僕は言葉が出なくなった。

しかも答え方が某有名な缶コーヒーのCMのナレーションと同じだし

「どうした？ あ、もしかしてコーヒーが飲みたいとかか？」

「そうじゃなくて、二泊三日の修学旅行の飲み物でコーヒーを入れてくるか？ 普通」

そういえば、小学生の時の遠足でオレンジジュースを水筒に入れていった奴がいたような記憶がある。

あれもあれで、ありえないような気もするが。

「そうか？ 別におかしなところはないと思うん——」

慶介がコップのほうに視線を落としながら答えていると、突然車内が大きく揺れた。

恐らくカーブかなんかに入ったためだろう。

僕も少しよろめいたが、人にぶつかったりはしていないので問題はなかった。

あるとすれば……

「ど、どうしよう……コーヒーが」

「ああ、見事にやっちゃったな」

よろめいた慶介が座席に腰掛けるご婦人のスカートにコーヒーをかけてしまったことぐらいだろう。

婦人は今はぐっすりと眠っているようだった。

「慶介、ここは男の見せ所だぞ」

「そうだな。しっかりしないとな」

僕は慶介に婦人……女性を起こすように促すが、それは不要だったようだ。

覚悟を決めた慶介は、ポケットからハンカチを取り出した。

（つて、ハンカチ？）

慶介のとった行動に、僕が目を瞬かせている中、慶介は何を思ったのかその場に跪いた。

そして両手を女性が腰かけている座席のほうに……って、まさか。僕の予想は正しかったようで、慶介はなんとコーヒーを拭きだしたのだ。

それで拭けるのかどうかは微妙だが、問題なのは、一步間違えれば確実に痴漢に間違えられることだ。

「慶介、それは——」

僕は慌てて慶介の行動を止めようとしたが、それはちよつとだけ遅かったようだ。

「Hey!」

怒りが込められた慶介を呼ぶ女性の物と思われる声によって。

「いったいあなたは何をしているのよー!」

「ひいつ!?!」

どうやら女性は外国の人だったようで、まくしたてるように慶介に英語を話し始めた。

「しかも私のスカートを汚して! これ高かったのよー!」

「だ、誰かおしほりを!」

まくしたてるように怒鳴る女性に、慶介は背を向けてこちらに逃げてきた。

(つて、僕を巻き込むな!!)

僕も逃げ出そうとしたが、その必要はなかったようだ。

何せ、慶介は走り出してすぐに女性に捕まったのだから。

肩をつかまれた慶介は、そのまま体を半回転させられ。

「マダムっ!」

思いつきり平手打ちされた。

慶介を引つ叩いたことで満足したのか、女性は慶介に背を向けると、自分の席に戻って行った。

対する慶介は、引つ叩かれた頬を片手で押さえながらこちらに歩いてきた。

(素直に起して謝ればいいものを)

下手なことをするから痛い目を見るのだと、僕は心の中でため息をついた。

「戻ろうか、浩介」

「そうだな」

僕は何も言わずに慶介と共に僕たちの座席のある車両に戻るのであつた。

「いやー、旅行はいいな!」

「律ちゃん、お行儀が悪いよ」

「そうだぞ。座席の上で胡坐をかくな」

戻つてすぐに聞こえたのは、修学旅行という行事に開放的な気分になつていゝであろう律の声と、それを咎める唯と滯の声だつた。

「あ、浩君おかえり。あれ? どうして佐久間君はどんよりしてるの?」

僕たちが戻つてきたことに気付いた唯が出迎えながらも、女性に引つ叩かれたことでどんよりとしている慶介に気が付いたのか、疑問を投げかけてきた。

「ちよつとしたハプニングだ」

それが僕ができる最善の答えだつた。

「お、そうだ。折角だし記念写真を撮ろうぜ!」

「いいね、いいね!」

そんな僕たちをしり目に、律の提案に唯が賛同した。

「少しは落ち着け」

「いいじゃない、旅の思い出にもなるんだし」

律の提案に、止めるように言う滯をムギが宥めた。

「ということ、浩介写真撮つて」

「はいはい」

僕が止めても素直に聞くような感じではない(そもそも止める気もない)ので、僕はカメラを受け取るとディスプレイをのぞき込んで四

人が入るように自分の立ち位置を調整した。

「ちよつとそこ！ 用もなく立ち歩くのは止めなさい！」

そんな僕たちを見つけたのか、山中先生に怒られてしまった。

「浩介が写真をどうしても撮りたいと言つて聞きませーん」

「……おい」

律によつて、何故か僕が首謀者になつてしまった。

「先生もこつちに来て一緒に撮ろうよ」

「行かないわよ！ まったく貴方たちは」

唯の誘いに、山中先生は即答で拒否すると、怒つたように注意しながらこちらに向かつてきた。

そして山中先生が僕たちのほうに来たところで、律から両手の人差し指と親指を合わせるようなジェスチャーを送られた。

(あー、なるほどね)

その意図を悟つた僕は、すぐさま行動に出ることにした。

「山中先生」

「何よー！」

僕の呼ぶ声にこちらを振り向いたところで、僕は写真を撮る合言葉である

「はい、チーズ」

と告げた。

そしてシャッターを切ると、そこにはいい笑顔でポーズをとる山中先生の姿があつた。

(ライライ)

うまく乗せられている山中先生に、僕は何とも言えない気持ちを抱いてしまった。

「あ……」

そしてそれは山中先生も同じようで、声を発したかと思えば、肩を落として僕たちの前から去つて行った。

その後姿を見てなんだかとてもかわいそうに思えてしまった。

とどめを刺した僕が言うのもあれだが。

「それじゃ、次は私が撮るから、浩介君はこつちに来てね」

「わかった」

ムギの心遣いに感謝しながら、僕はムギにカメラを手渡すとムギが立っていた座席のほうに移動した。

「よっこらせいと」

移動してきた僕の隣に、まるでそこにいるのが当然だと言わんばかりの勢いで唯が移動してきた。

「熱々どすなー」

「いやん、照れますなー」

「……いいから早く写真を撮れ」

律のからかいを含んだ言葉に照れたように頭をさする唯をしり目に、僕はムギに写真を撮るように急かした。

これ以上からかわれると、顔が真っ赤になった間抜け面が記録に残ってしまうからだ。

「はい、チーズ」

ムギの合図によって僕を含めた軽音部メンバーの写真撮影は無事に終わった。

そのあとは自分の席に戻り、再び鉄道の旅にいそしむことにした。

第118話 手品と悲劇

「それじゃ、この中から好きなカードを一枚とって」

さらにしばらくして僕は慶介の目の前である程度カードシャッフルすると、カードを伏せたまま横に広げて慶介に差し出した。
(どうしてこうなったんだ?)

僕はこうなった経緯を軽く思い出してみることにした。

たしか、そうだ。

女性に引っ叩かれたショックから立ち直った慶介に言った“お前はウソをつくと言った僕に、嘘だと否定した慶介にそれを証明するためだった。”

「……………」

事の経緯を思い出している中、慶介は警戒しながらカードを一枚取った。

「それを僕に見えないようにして覚えて」

横に広げたカードを一つのヤマに戻したながら僕が指示すると、慶介はカードが僕に見えないようにしながら表の方を見る。

「それじゃ、そのカードを好きなところに戻して」

「本当に、これで分かるのか?」

カードを横に再び広げて促す僕に疑いの声を上げながらも、カードを伏せて戻したので、僕はそれを再び一つのヤマに戻した。

「それじゃ、最後にこれを好きなだけシャッフルして」

カードのヤマを受け取った慶介は、念入りに何度も何度もカードをシャッフルしていく。

「ほら」

「これから僕はカードを一枚一枚見せていくから、慶介はカードを見て全部“違う”って答えて。僕は慶介の目を見てさっき手にしたカードを当ててみせよう」

「やってもらおうじゃないか」

当てられないと思っている様子の慶介が頷いたのを確認した僕は、伏せられるように簡易テーブルの上に置かれているトランプのヤマ

の一番上のカードを手にとると、それを慶介の目の前に掲げる。
「違う」

慶介の答えを聞いた僕は、そのカードを簡易テーブルのヤマが置かれている場所とは違うところに置いて、またトランプのヤマから一番上のカードを手にとるとそれを見せていくという行為を繰り返した。
「違う」

慶介が、数十回目の否定の言葉を口にした、その数十回目の段階で、僕はようやくそのカードを見つけた。

「慶介が選んだカードはこれだな？」

「……………」

僕の言葉に、慶介は固まった。

それはまるで信じられないとばかりに。

「ど、どうして!?!」

「言っただろう？ 慶介は嘘をつくとき目が少し大きくなるって」

どうやら中的のようだった。

慶介の問いかけに答えず、僕はトランプを集めて箱にしまった。

「まあ、これで嘘はつけないってわかっただろ」

「ちよっと待て!」

カードをカバンにしまおうとしたところで、慶介から待ったがかけられた。

「何か？」

「そのトランプ、少しだけ貸して」

どうやら、トランプを貸してほしかったみたいだった。

「絶対に仕掛けがあるに決まってる！ 調べさせてもらうぞ」

「どうぞ、好きなだけ。トランプはそんなに使うわけじゃないから、気のすむまで調べれば」

僕は慶介にトランプを手渡すと、鞆に入れておいた本を取り出す。

ちなみに、今のは魔法ではなく、本当にただのインチキだ。

タネもちゃんとある。

(あ、梓にメールでも送っておくか)

本を読もうとしたところで、僕は旅行中の軽音部についてまだ何も

話していなかったことを思い出したので、僕は鞆に本をしまい代わりに携帯電話を取り出すとメールを表示させて文章を打ち込んでいく。(練習を怠らないように……つと、こんなものかな)

我ながら、固すぎないかとも思うがこのくらいがちようどいいということで納得することにした。

そしてそのまま梓の携帯にメールを送信した。

送信完了のメッセージが表示されたのと同時に、窓の外が一気に真っ暗になり、轟音が車内に響き渡った。

どうやらトンネルに入ったようだ。

(危なかった。あとちよつとで圏外になるところだった)

トンネル内で圏外になることはないが、時頼そうなってしまうことがあるので、僕はほっと胸をなでおろした。

「分かったぞー！」

「ん？」

そんな僕に、慶介がいきなり声を上げた。

「やつぱり、『俺が嘘をつくとき目が大きくなる』ってのはウソじゃないか！」

「ああ。あれのことか」

慶介の言葉で、僕はようやく慶介が何のことを言っているのかわかった。

そんな僕をよろに、慶介は突然カードを数枚取り出すと僕の前に掲げた。

それは僕が慶介に貸していたランプだった。

「仕掛けはこのランプにあつたんだ。一見上下対称になっているように見える模様だけど、この真ん中の風車だけは違う」

そう言つて慶介が指摘した箇所を見ると3枚あるうちの2枚の上側には羽根はないが、1枚には上側に羽根があつた。

「浩介は、予めカードの向きをすべてそろえて置いて、俺にカードを覚えさせた隙にカードを逆向きにした。俺の選んだカードは逆向きになつているからいくらシャッフルしても同じだ」

得意げにネタを暴いていく慶介は、一旦言葉を区切つた。

僕は慶介の推理を静かに聞いていた。

「つまり、浩介は俺の目を見ていたのではなく、トランプの模様を見ていたんだ！」

「別に、そう思いたければ思えばいいんじゃない？ それでお前のプレイドが満足するなら別にかまわないけれど」

自信満々に語られた慶介の推測に、僕は動揺もせず普通に言い返した。

僕の強気な言葉とは裏腹に、慶介の推測は見事に当たっていたりする。

「なんだと？ 降参なら降参って言えよ！」

「別に」

とはいえ、あのくらいのトリックは道具さえあれば子供でも思いつく。

それを言い当てられたところで悔しくもなんともない。

逆に、むきになっていている慶介の方が意味面白く思えてきた。

「だったらこうしよう。今からもう一度同じことをしてもらおうじゃないか。そこで当てたら浩介の言ったことを認めてやるよ」

「いいぞ」

慶介の提案に乗った僕は、もう一度その場で同じことをすることになった。

先ほどと同じ手順でカードを選んでもらい、それを覚えさせそして伏せてあるカードのところに戻させる。

慶介はこの時に、模様が一致しているかを念入りに確認していた。

そしてそれを気が済むまでシャッフルしていく。

「さあ、当ててみるよ！」

「それじゃ、遠慮なく」

僕は自信満々の言い放った慶介にそう告げると、慶介にカードを一枚もかぎすこともなくトランプカードの中から一枚のカードを選ぶと、それを慶介に向けて掲げた。

「これだろ」

「……………なんでだよ!!」

どうやら見事に当たりだったようで、驚きに満ちた表情を浮かべながら慶介が叫んだ。

「窓ガラスに写ってた」

理由を告げた僕は、慶介の背後にあるドアの窓ガラスを指差した。

そこには窓があり、いまだにトンネルの中のため、それが鏡の役割を果たしていたのだ。

つまり、完全なインチキだ。

「……………もう一度」

種明かしをすると、慶介はゆつくりとバインダーを下して、見えないうようにしてやり直しを求めてきた。

「何度やっても同じだと思うけど」

「なぜだ？」

「内緒」

慶介の問いかけに、僕は一言告げるとトランプをポケットに入れた。

「いいから教えてくれよ」

「嫌だ」

なおも食い下がる慶介に、僕は再び拒否すると読みかけの本を読むことにした。

(それにしても、よく話すことがあること)

隣の座席で楽しそうに談笑している唯たちの様子を横目に、僕は心の中でつぶやくのであった。

「あ、浩介」

「今度は何？」

再び散策をしている僕に声をかけてきた慶介に、僕は要件を尋ねた。

「浩介のトランプで、今度は俺に手品をさせてくれ」

「別にかまわないけど、失くすなよ?」

「分かってるよ」

慶介の願いを断る理由もないので、僕はポケットから先ほどしまったトランプを手渡した。

しつかりとくぎを刺して。

「それじゃ、俺の華麗なシャッフル捌きを見てろよ」

「いいから、早くしろ」

変にかっこつけて告げる慶介を急かして、僕は慶介にシャッフルをさせた。

「うわ!?!」

「何をやってるんだよ。馬鹿」

シャッフルを始めて早々、見事に失敗してトランプを周囲に散らばした慶介に、僕は片手を頭に当てながら口を開いた。

「わ、悪い」

「いいから慶介はそっちに散らばったカードを拾え」

申し訳なさそうに謝る慶介に檄を飛ばしながら、僕は周囲に散らばったトランプを拾っていく。

「よし、これで全部だな」

「いや、まだ残ってる」

ことを成し遂げたような清々しさを醸し出す慶介に、僕はある方向を指さしながら告げた。

彼にとつて不幸だったのは、今僕たちがいる車両は先程慶介にビンタをした女性のいる車両であること。

そして何より、ぐっすり眠っている先ほどの女性のスカートの上に僕のトランプがのっていることだ。

「おいおい、勘弁してくれよ」

先ほどあれで恐怖を味わった慶介は、声をひきつらせながらも恐る恐るといった様子で女性に近寄っていく。

そして慶介は女性のスカートへと手を伸ばした。

(ま、まさか起こさず取る気か?!)

慶介の決断は、ある意味勇者よりもすごかった。

それはともかく、ゆつくりと手を伸ばした慶介だったが、無情にも女性が身じろぎをしたためにトランプは女性の足元という、非常に取りづらい場所に落ちてしまった。

今度こそ女性を起こすかと思っただが、慶介はさらに信じられない行動にでた。

なんと、足元にあるトランプカードを取ろうとしているのだ。

だが、それは傍から見れば確実に痴漢行為をしているようにしか見えないうものだった。

(もう知らない)

どうなるのかを悟った僕は、巻き込まれないようにするために慶介から距離を取った。

そして、無謀なことをしている慶介だったが、その動きが止まった。

かと思えばまるで吹き飛ばされたかのように通路を挟んだ反対側の座席まで後ずさった。

どうやら、最悪な事態になってしまったようだ。

「あんたはさつきから何を考えてしてるんだ！ もう今度は許さない」

「だ、誰か助けて！」

怒り心頭の様子で英語をまくし立てながら立ち上がる女性から逃げるように、慶介は僕が立っている方向とは反対側の車両へ逃げている。

「ぶっ殺してやる!!」

だが、それを猛追する女性は物騒な言葉を口ずさんでいた。

しかも口調も変わってるし。

まあ、慶介のやったことを思うと、そうなって当然だとは思いますが。

(とりあえず、今のうちにカードを回収しておこう)

僕は女性が慶介を追いかけているすきに、最後の一枚のカードを回収しておくことにした。

さて、逃げ出した慶介だったが、すんなりと捕まったようで先程と同じ要領で体の向きを変えられると

「のおお!!」

断末魔と共に殴られるのであった。

「ほうふへ、はへほ?」

「そうだな」

ものすごく言っていることが理解できなかったが、何を言いたいのかはすぐに分かった。

殴られた鼻を抑えながら戻るように促す慶介に、同情を隠せなかった。

そんなことを思いながら、僕たちは自分の席がある車両へと戻るのであった。

「それは違うよ!」

「いや、おにぎりは最初に香りを楽しんでパリパリとした食感を堪能するのが通なんだって」

戻ってすぐに聞こえたのは、何やら議論をしている律と唯の声だった。

「あ、浩介君おかえり。あれ? どうして佐久間君は鼻を押さえてるの?」

僕たちに気付いたムギの問いかけに、僕はどう答えたものかと悩んだが、

「ちよつとしたミスだ」

結局そう答えることにとどめた。

「浩介!」

「浩君!」

「な、何!?!」

そんな僕に詰め寄るように声をかけてきたのは、律と唯だった。

その眼は真剣そのもので、僕は固唾を吞んで後に続く言葉を待つ

た。

「おにぎりは海苔から先に食べるんだよね！」

「いいや、食感を楽しんでから食べるのが正しいよなっ？」

二人が聞いてきたのは、おにぎりの食べ方だった。

（何？ このくだらない不毛な争い）

二人にしてみれば重要なことなのだろうが、関係のない僕から見ればまったくもってくだらないものだった。

「知らんっ！」

だからこそ僕の答えもそうなるわけで。

「ええー、ちゃんと答えてよ！」

「そうだぞー！ 男はここでびしっと言ってこそじゃないか！」

僕の出した答えにこちらににじり寄りながら猛反発してくる二人に、僕は一つため息をつくと

「自分の好きなようにすればいいだろ」

というのであった。

結局、この後もおにぎりの正しい食べ方討論は律が車窓から見える富士山に気づくまで続くのであった。

それが、僕たちが京都駅へ向かうまでの出来事だった。

（なんだか、あとが思いやられるな、これ）

しよっぱなから色々とかオスな状態になっているこの修学旅行に、僕は不安を覚えるのであった。

ちなみにこれは余談だが、二回も女性に怒られた慶介だが、京都駅に到着するまでどんよりとしていた。

さすがの慶介も、シヨックからの立ち直りは時間がかかるようだった。

とはいえ、すぐに立ち直られたらある意味すごい人になるわけだが。

第119話 京都狂騒歌

『京都ー、京都ー。お忘れ物のないよう、ご注意ください』
新幹線で揺られること数時間。

様々な騒動を起こしながらも、なんとか僕たちは京都駅にたどり着くことができた。

「京都だー！」

「京都だね、律ちゃん！ 浩君」

「分かったから、静かにして」

京都に到着したことで、さらにテンションを上げる二人に、僕は静かにするように促した。

「えつと、次はどこに行くんだっけ？」

1日目でもある今日は、学園側が指定したルートを通って京都市内を回っていくことになっている。

各班で自由に移動ができる自由行動は、2日目だ。

そんな僕たちの次なる目的地は

「金閣寺やで！」

まるで僕の心を読んでいるのかと思うほどのタイミングで声を上げた律だったが、語尾がおかしかった。

「やで？」

「京都にいる間は関西弁でしかしゃべってはけないゲームやで！」

首を傾げる滯りに、律は元気よく関西弁で返事を返した。

「おおー、ゲームですかな」

「そうやで！」

（本当に、次から次によくやるよ）

次から次に新しいことをし始める何時に、僕はある種の尊敬の念さえ感じ始めていた。まあ、どうなるのかが予想できたりするけど。

「あなたたちも早く移動しなさい」

『はーい』

そんな僕たちに、山中先生が若干ではあるが呆れたような表情をうかべて移動するように促してきたので僕たちは駅のホームを後にす

るのであった。

山中先生について行つてたどり着いたのは、改札口前の大広場だった。

見ればほかのクラスの学生たちが腰かけている姿が見えた。

山中先生に座るように言われたため、僕たちは周囲のクラスの学生たちに倣うように、その場に座った。

「みんなそろつているわね。班長は必ず班の人がそろつているのかを確認すること」

そして始まったのは山中先生からの注意事項の連絡だった。

「どうして、私たちは座らされてるんだ……じゃなくて、座らされてるんや？」

「ほら、こういうときつて必ずいなくなる人かいるだろ？」

律の右隣で体育座りをしながら先生の話の話を聞いていると、関西弁でしか話してはいけないゲームを続けているのか、関西弁に言いなおしている律に、滯は冷静な様子で答えた。

(そういえばいたっけ)

昔の社会科見学で工場の出口と入口を間違えて反対側からやってきた、間抜けな同級生がいたのを思い出した。

その生徒は確か、ロストボーイとか呼ばれていた記憶があるが、今はどうしているのやら。

閑話休題。

ふと、それにピッタリ合いそうな人がいるのを思い出した僕は、視線を横……律の左側のほうに向けた。

「あ、いた」

視線の先にいたのはキャリアバックを机代わりにして両腕を載せて眠っている唯の姿があった。

(食べて寝て……一部の人には羨ましがられるほどのことをしてるよな)

しかも不思議なのは、見ていても不快な気分にならないことだったりもする。

逆に愛おしく思えてしまうほどだ。

(きつとこれが惚れた男の弱みっていうやつだね)

僕はそう結論付けると、再び先生の話に耳を傾ける。

「それじゃ、これからバスに移動するから遅れないようについてきてね」

どうやらもう話は終わったようで、山中先生の言葉に、クラスのみんなはゆっくりと立ち上がると移動を開始した。

(あ、唯を起こさないと)

「唯、起き——」

立ち上がって荷物を持ったところで、いまだに眠っている唯を起こすことにした僕は、唯を起こすべく声をかけながら視線を唯がいる方へと向けたところで、僕は言葉を失ってしまった。

「皆、早く行こう！」

そこにはいつ起きたのか、キャリーバックの取っ手をもって声を上げる唯の姿があった。

「……なんでこういう時には目が覚めてるんだろう」

「すごいんだかすごいくないんだか……わからないよな」

自然と口から出た言葉に続くように律が声を上げた。

「律ちゃん、漣ちゃん、浩君も早く——」

「おう！」

「分かったから、大きな声で叫ぶな」

本日何度目かの注意をしつつ、僕たちは唯に続いて京都駅を後にした。

「ここが京都か」

駅を出た僕は京都の街並みを見ながらつぶやいた。

遠くのほうに白い塔のようなものが見える。

あれがいわゆる“京都タワー”なるものだろうか。

(やっぱり京都はいいよね)

これでも僕は、修学旅行の行き先でもある京都のことをいろいろと調べていたりするのだ。

？金閣寺などが有名だが、お寺などが多く京都タワーもろうそくに見立てられて建設されたのではないかという説があることも調査済みだ。

(楽しみだな)

僕はこれから出会ういくつかの観光地に思いをはせたところで

「見てみて、律ちゃん！」

「おー、まるで大根みたいだな」

唯と律がさっそくはしゃいでいる声が聞こえてきた。

「そうだ！ 写真撮ろうぜ！」

「賛成！」

「浩君も一緒に取ろうよ！」

律の提案にムギが即答で賛同すると、唯に近くに来るように言われたので僕は駆け足で唯の横に移動した。

どうやら京都タワーをバックにするみたいで、唯たちがしゃがみむのに従い、僕もその場にしゃがみ込んだ。

「はい、チーズ」

「ごらっ！ 早くバスに乗りなさい！」

そんなことをしていると後ろの方から山中先生の若干怒っているような声が聞こえてきた。

(そういえば、移動中だった)

初めて見る京都の街並みにすっかりと抜け落ちてしまったようだ。

(気を付けないと)

僕はもう一度気を引き締めながら、荷物を手にバスへと乗り込むのであった。

何せ、この班の中で、頼りになりそうなのは半分しかないのだから。

それはともかくとして、バスの中は僕たちが最後だったこともあって、空いている席は残り少なかった。

とはいえ、前のほうにまとまって4席ほど空いている席がある。

この分なら前方の席に相席という形で座れば一つの班で固まれるだろう。

「おーい、浩介！ こっちこっち」

その相席相手である慶介の隣に座れというアピールに、僕は慶介の後ろの席に腰掛けることで応じた。

「つて、後ろかーい！」

「新幹線のようなトラブルは勘弁してほしいから」

思いだすのは同じ女性に二度も痛い目を見る慶介の姿だった。

さすがにここにその女性はいないが、どんなことに巻き込まれるのか不安でしようがないので、隣ではなく後ろの席に座ることにしたのだ。

【あまり変わってませんけどね】

とりあえずクリエイトの言葉は無視して、僕は窓のほうに顔を向けた。

それから間もなく、律やムギ、唯に滯の四人がバスに乗り込んできた。

律は慶介の隣へ、滯とムギは僕の後ろの方の席に。

そして唯は

「はあ、疲れた」

と言いながら僕の隣の席に腰掛けた。

「つて、食べて寝ただけだろ」

唯の言葉にツツコミを入れるが、唯は意にも返さずにバックの中をあさりだした。

「次はこれにしよつと」

「いい加減にしろ」

事の成り行きを見ていた滯が、新しいお菓子の袋を取り出す唯に呆れたような声を上げた。

「はい、浩君どうぞ」

「どうも」

「あ、漣ちゃんとムギちゃんにも」

袋から取り出したお菓子を僕たちに配っていく唯の姿を横目に見ながら、僕は早速唯にもらったお菓子（飴だけど）を口に入れるのであった。

それからしばらくして、クラスの人が全員乗っているかどうかの確認作業を終えたのか、山中先生が最後に乗ってきた。

「それじゃ、お願いします」

山中先生がバスの運転手に向けて声をかけると、バスはゆつくりと動き出した。

京都駅を出て、市街地を走っている中、バスの中は話声で満たされていた。

それはこちらも例外ではなく、

「ねえねえ、浩君。明日はどこを回ろうかな」

「それはほかのみんなと相談だから、“ここだ”って言えないな」

早くも明日の自由行動に胸を弾ませている様子の唯に、自然と僕の顔もほころんだ。

『Xお姉ちゃんをよろしくお願いします』

それが新幹線に乗っているときに送られてきた、憂からのメールの内容だ。

憂も、唯のことを心配しているのかもしれない。

（それはいいとして、最初の“X”はどういう意味だろうか？）

何か意味でもあるのかと、考えをめぐらせてみるが、答えが思い浮かぶことはなかった。

なので、これはただの打ち間違いだろうと解釈することにした。

（よほど気が動転しているのか？ ……まさかとは思うけど、唯が二日間戻ってこないことをさつき知ったとかじゃないよな？）

あの完璧という言葉がふさわしいほどできた妹である憂が、打ち間違えたまま気づかないで送信する原因がそれしか思い当らなかった。

（まあ、梓がいるんだし大丈夫か）

向こうの様子を想像しそうになるのを必死にこらえ、すべてを梓に丸投げすることにした。

「なあなあ、浩介の恥かしい話でも話そうぜ」

「おっ、それはいいな！」

そんな考えに意識を傾けていると、慶介と律の声が聞こえてきた。

しかも、なんだか聞き捨てならない内容だったような気がする。

「それじゃ、まずは俺からな。浩介って無類のチーズケーキ好きだろ？」

「確かに」

僕はとりあえず、二人の話を静かに聞くことにした。

別に恥ずかしくもなんともないからだ。

チーズケーキが好物であることくらい、親しい者は誰でも知っていることだからだ。

「前に浩介の好きについてチーズケーキをおもちやのケーキとすり替えたことがあったんだけどさ」

「おお、意外とすごいことをするんだな。それでそれで？」

（ん？）

慶介の話している内容にもすごく既視感を感じた。

それはいつの日かのように時間を繰り返しているというのではなく、ただ単純に体験したことがある内容という意味だ。

当然と言えば当然だが、ものすごく気になったので、僕は慶介の話の続きに耳を傾けることにした。

「ケーキを食べようとした瞬間『これはおもちやじゃないか』って、おもちやのケーキを真つ二つにへし折ったんだ」

「あれって慶介がやったのか。というか、へし折るところが浩介らしいな」

（それって、完全にこの間のじゃないか）

僕をだしに笑い合う二人は一旦置いとくとして、ようやくすべてを思い出すことができた。

数日前のことだ。

いつものように昼休みにチーズケーキを食べようとしたときに、そ

れがおもちやであることに気が付いたのでそれを勢いよくへし折つたのだ。

最初は自分で間違えて入れてしまったのかと思っていたが。

「なるほど、あれは貴様の仕業だったというわけか」

「あ……いや、そのお……」

恥ずかしさよりも怒りが込み上げてきた僕は、ドスを効かせた声で慶介を問いただす。

「ふんっ」

「オールバック!?!」

後ろの席から慶介に制裁を加えた僕は窓のほうに視線を向けた。

「後からの攻撃とは……恐るべし、浩介の底力」

律のひきつった声を聴きながら、僕は流れゆく京都の街並みを見ることにするのであった。

結局、この後に僕の恥かしい話をする事がなかった。

こうして僕たちは金閣寺へと向かうのであった。

「ここからは自由行動になります」

金閣寺の駐車場でバスが止まると、山中先生は両手を数回たたいてクラスのみんを注目させてから口を開いた。

「集合時間は1時間後なので、それに間に合うようにここに戻ってくるように」

『はい』

山中先生からの中事項を聞いた僕は、クラスのみんなど同じように応じた。

こうして、僕たちは金閣寺へと解放……観光するのであった。

「律ちゃん、皆――！ 早く早く」

バスから降りた途端はしやぎ始めた唯を追いかけていった先にあったのは金色の建物だった

これが、金閣寺なのだろう。

「うわあ……」

「金色だ」

皆が感嘆の声を上げる中、僕は驚きのあまりうまく声を発することができなかった。

予め調べていたとはいえ、実際に目の当たりにするとそのすごさは違うものだ。

金閣寺の建物の周囲にある湖のようなものが風情を感じさせるのに一役買っていた。

「これって、本当に金でできてるの？ じゃなかった、出来てるん？」

「そうだぜー！ あ、いや。やでー！」

何故か関西弁で疑問を言い直す唯に応えるように、これまた関西弁に言い直して答える律。

どうやら、まだあのおかしなゲームが続いているようだ。

「せやけど、これを持って帰ろうと思ったら駄目だぜ……アカンで。おまわりさんに、捕まる……捕まってしまうんがオチだぜ……やで」

「……」

律のおかしな関西弁を聞いていると、無性に悲しくなってくる。

けなげな努力に対してなのか、それともあまりの出来の悪さに対してなのかはわからない。

「金閣寺っていうんはな、昔に燃やされてしもうて今あるのは新しく建てられたものなんやって」

そんな中、助け舟を出すかのごとくムギが金閣寺を見上げながら、関西弁で説明をし始めた。

きつと、これが“本物”の関西弁なのだろう。

無理をしている感じもなく、自然な口調での関西弁は聞いていてもすんなりと頭に入ってくる。

「ほんまは鹿苑寺っていうらしいわ」

『おお〜』

ムギの上手な関西弁での説明に、思わず僕たちは拍手を送った。

「うう……」

そんな中、一人敗北感のようなものに打ちひしがれているのがいた。

「律、悪いことは言わないから関西弁ゲームは止めておきな。なんだか見ていてすごく惨めだから」

「う、うるさいやい！」

こうして、律の関西弁でしか話してはいけないゲームは幕を閉じるのであった。

その後、抹茶を飲める場所で抹茶とお茶菓子に舌鼓を打ったりしながら、金閣寺を堪能した僕たちは、再びバスに乗り込むと次の観光地に向かうのであった。

「それにしても、お菓子を先に食べたら抹茶の苦いのが気にならなくなったね」

「そうだね。僕もびっくりだったよ。あれは」

抹茶を先に飲もうとした僕たちに、ムギが教えてくれたのはお菓子を先に食べてから抹茶を飲むと苦さが引き立つという豆知識だった。

実際に、その通りに行ってみるとムギが言っていた通り、苦さがお菓子の甘さと絶妙に中和していた感じだった。

ちなみに、これは余談だが後々調べてみるとお菓子を先に食べるのは、そうすることでお茶の味がわかるかららしい。

逆にしてしまうと、お茶の味がお菓子の味によってわからなくなるらしい。

ちなみに、煎茶の場合はお茶を先に飲んでそのあとにお菓子を食べるのが正しい作法らしい。

バス車内で軽く昼食を摂った後に向かったのは、神社だった。

「北野、てんまんぐう?」

「有名なところなのか?」

鳥居の上のほうに書かれている神社名を読み上げた湯に、両手を頭の後ろに回している律がつぶやいた。

「有名じゃなければ来ないだろ」

「大体神社だったら近くにあるしな」

確かに学校の近くにもあるので、それほど新鮮味がわからないのは仕方がないのかもしれないが、修学旅行の見学で来るぐらいなのだから、何かがあるのかもしれない。

「きつと大仏とかがあるんだよ!」

「そんなものあるわけないだろ」

ここに大仏があつたらあつたでこつちがびつくりする。

そんなふうに着にツツコミを入れながら境内を歩いていると、真鍋さんの班と遭遇した。

「この神社は学問の神様で受験生には有名な神社よ」

「あー、なるほど」

唯たちの話が聞こえていたのか、真鍋さんの説明に僕はここに来た理由を悟った。

確かに学生である僕たちには、この神社はとてもありがたい場所なのかもしれない。

「境内に牛の石像があるでしょ?」

そう言いながら真鍋さんに案内された先にあつたのは、牛の形をした石像だった。

「これをなでると頭がよくなると言われて——」

「よしよしよしよし」

真鍋さんの説明を聞いた律と唯が、目を光らせたかと思うと石像をなでまわし始めた。

しかも、その中になぜかちやつかりと慶介の姿があるし。

恐らく、班のメンバーとはぐれたのだろう。

(あれ、絶対に罰が当たるな)

突然のことに茫然としていながらも、僕がそんなことを考えている

と

「こら、そこ！ 何してるの！」

まるで待つてましたと言わんばかりのタイミングで現れた山中先生によって、僕たちは怒られるのであった。

(なんで僕まで)

これが連帯責任というものなのだろう。

少しばかり理不尽にも思えたが、そう納得することにした。

少しして山中先生の説教も終わった僕たちは、境内の中を見て回ることにした。

「あ、見てみて律ちゃん！ 絵馬だつて」

「お、本当だ」

そんな中、突然一方向を指さして声を上げた唯のが指し示す先を見た律が、軽く驚いた様子で相槌を打った。

そこには絵馬が販売されていることとその場所を知らせる看板が立てられていた。

「絵馬に願い事を書こうよ！」

「そうだな！ 記念になるかもしれないしな。そうならば、善は急げだ！」

唯の提案をのんだ律は、そのまま看板の案内に従って絵馬が売られている方向に走り出した。

「牛牛！」

「カルビーー！」

意味の分からないことを叫びながら走っていく二人の後を、僕たちは何とも言えない表情をうかべながら追いかけるのであった。

「つと、これでみんな書き終えたな。それじゃ、かけるぞー」

絵馬を二枚購入した僕たちは、それぞれが絵馬に願い事を書き記した。

僕の場合は、スペースの問題から別の絵馬に書くことにしたが。

律は武道館進出を、唯は生涯満腹を、漣とムギは志望校に合格する

ことを願い事として記していた。

色々個性のある絵馬になっていた。

「浩君はどんな願い事にしたの?」

「別に何でもいいでしょ」

かくいう僕もかなり恥ずかしい願い事をしているので、言葉を濁した。

「えー、別にいいじゃん」

「それじゃ、絵馬を見ようっと」

そんな僕に頬をふくらまして不満げに食い下がる唯とは対照的に、先程僕がかけた絵馬を律は直接確認し始めた。

「あ、ちよっと——」

僕が止めるのよりも早く、律はそれを見つけてしまった。

「あつたあつた。えっと……『皆が仲よくいられますように』……」
「……………」

その願い事に、皆は驚いた様子で言葉を失うところちのほうに顔を向けてきた。

それは絵馬に書いた願い事を声にして読み上げた律も同じだった。

「へえー、浩介って以外にも純情なんだな」

「べ、別にそんなことは」

沈黙を破るようにならからかい口調で声をかけてきた律に、僕は視線を逸らしながら反論した。

そうでもしないと赤くなっている顔を見られそうだったから。

「……仲が悪いより仲がいい方がいい演奏ができると思つて書いたのであつて、深い意味はないんだからね!」

「なんで、ツンデレ口調?」

「あらあらあら」

澤からジト目でツツコミを入れられ、ムギからは微笑まじげな視線を向けられるという、なんとも居心地の悪い状態となつてしまった。

「あ、そうだ! せっかくだからお参りしていこうよ!」

「それいいな! 願いがかなうかもしれないし」

そんな状況を打破したのは、唯の提案だった。

「よし！ みんな走れ——！」

『お——！』

律は唯の提案に賛成すると、そう告げて本殿に向けて一気に駆け出して行った。

「つて。ちよつと待つてよ！」

気づけば僕だけが取り残される状態になっていたので、僕は慌てて皆を追いかけた。

「神様——！ このお願いを叶えてくださいーい！」

「お願いします！」

「乙女の願いを！」

「だから、大きな声で叫ぶな！」

大きな声で恥ずかしいことを叫んでいる唯たちに、僕はツツコミを入れながらみんなの後を追いかける。

そして本殿の前までたどり着くと、唯が鈴を鳴らして僕を含めたみんなを手を合わせてお願いごとをした。

「叶うかなー？」

「叶うといいね！」

一足早く願い終えた唯たちは再び大声で話しながら去って行く。

「おいこら！ お賽銭を忘れてるぞ！」

「あ！ 本当だっ」

「お賽銭を忘れた！」

お賽銭をしていないことを告げると律は思い出したように声を上げてこつちに向かつてかけてきた。

お賽銭を上げないでお願いをしたことが悪かったのか、それとも僕たちがここで無礼なふるまいをしたことに対する罰なのか

「ちよつと、さつきから何なのよ!!」

「うわ!? びっくりした」

突然涙声でどなり声を上げたのは山中先生だった。

立っている場所からするとお守りかおみくじでもしようとしたのだらう。

「私に対するあてつけのつもりなの!？」

「ちよつ、さわちゃんそれは誤解だつて」

「そ、そうです！ 私たち絵馬を書いていて」

どうやら、唯たちの大きな声で叫んでいた言葉の何かが知らないうちに山中先生にとつての地雷を踏んでしまったようで、半ば錯乱状態に陥っている山中先生を落ち着かせるべく律を筆頭にムギと唯が宥めるが一向に落ち着く様子を見せない。

「そんなウソを言つてもダメ！ こつちに来なさいつ」

それどころか、逆に怒りを増幅させたようで、僕たちは半ば連れて行かれる形でその場所を離れることとなつた。

そして人気のない場所で僕たちは自由時間いっぱいまでありがたいお話を聞かされる羽目になるのであつた。

「な、なんで僕まで……」

おみくじでも買つていたら、きつと今日の運勢は大凶が出たに違いないと、矢継ぎ早に山中先生から話しているのを聞きながら思うのであつた。

第120話 鬼門

「はあ……疲れた」

「まったく、冷や汗掻いたじゃないか」

日も暮れ、僕たちはついにこれから二日間過ごすことになる旅館を訪れた。

そして向かった部屋は畳六畳ほどの部屋だった。

一人当たり一畳分のスペースがあれば十分なので、それほど窮屈ではないようだった。

(さて、これからが一番の鬼門なんだよな)

山中先生の連絡事項では午後六時に大広間に集合して夕食をとることになっている。

服装はジャージだ。

つまり、制服から着替える必要があるということなのだ。

滯は一足早くジャージを取り出して着替える準備を始めていたが、僕がいるために制服を脱ぐそぶりを見せない。

(これは思っていたよりもつらい)

僕は到底ここで馬鹿騒ぎができるような気分にはなれなかった

「唯、先に制服に着替えろ」

「えー、めんどくさいー」

いつもは賑やかに感じる二人のやり取りも、どこか夢うつな感じで聞いていた。

「滯、頼みがある」

「な、ななななんだ？」

突然声をかけられたためか、それとも緊張状態にあるためか上ずつた様な声を上げて返事を返してくる滯を見ると、僕のほうが冷静になることができた。

「僕はトイレのほうで着替えるから、全員が着替え終えたらノックをして教えてほしいんだ」

「わ、わわ分かった」

僕はトイレという楽園に逃げればこの鬼門は軽々と突破すること

ができる。

難しいことはない。

「ジューー」

「な、なんだ？」

問題が解決したところで、こちらに向けられている視線に気づいた僕は、視線を向けている律に疑問を投げかけた。

「浩介はいつまでそこにいるんだ？」

「すぐに引っこむ」

律の疑問に簡潔に答えた僕は、着替えを手にトイレの方に向かおうとしたところで、律が再び口を開く。

「はーん。なるほどな、浩介は私たちの着替えているところが見たいんだな」

「はい?!」

「なっ?!」

律の言葉に混乱した僕は、うまく言葉を紡ぐことができなかった。

「いやー、それじゃ、トップバッターは——」

「そんなのダメだよ！ 律ちゃん」

「そうだ、唯！ 言ってやれ」

律が品定めをするように皆を見回し始めたところで、唯が止めさせんとばかりに異論の声を上げた。

「浩君が女子の着替えているところを見てもいいのは、私だけなんだから！」

「って、それも違うっ!!」

顔を赤く染めて言い切った唯に、僕は全力でツツコミを入れた。

「あらあら、まあまあ〜」

「こ、浩介と唯はそこまで……はうう〜」

「そこ！ 頬に手を当てながら笑みをうかべない！ それと、そんなことしてないから！」

頬に手を当てながら笑みを浮かべるムギと、顔を真っ赤にしている滯にも僕は全力でツツコんだ。

「おお〜、今日も浩介は絶好調だな」

律の感心したような声が聞こえた。

(律のやつ、これが狙いだっただのか)

僕は漫才師ではないと心の中でツツコンでいると、

「それじゃ、恥ずかしいけど見ててね」

「脱ぐなあ!!!」

ブレザーを脱いでYシャツのボタンに手をかけたところで、僕は慌ててそれを止めさせるべく唯の元に迫ったが

「ぬあ!?!」

「きや!?!」

何かに足を取られた僕は、唯を巻き込んで畳の上に倒れてしまった。

「あいたた……唯、大丈夫……ぶ」

「うん、大丈夫……」

自分の体制に気付いた僕たちは、そこから先を口にするのができなかった。

今の僕の体制は、僕が唯を押し倒しているようにも見えるのだから。

「はうわあ!?!」

「うお!?! 浩介って意外と大胆だなー」

こうなることは予想外だったようで、驚いたような声を上げる律と、許容範囲を突破したのか、ひきつったような声を上げる瀧とこの部屋は混とんと化してしまった。

「ぼ、僕はノーマルだあああ!」

そして僕は僕でわけのわからないことを叫びながら、トイレへと逃げ込むのであった。

「まだ、集合時間まで少しだけ余裕があるな」

「そうだね」

あれからしばらくして、何とか落ち着きを取り戻して着替え終えた僕たちは、各々が寛ぎながらのんびりと時間を過ごしていた。

別におかしなところは何も無い。

さつきから唯がこちらを頬を染めながら見てきたりとか、滯が僕と目を合わせないようにしているとか、些細な問題だ。

「お茶でも入れようか」

「何か遊ぶものでも持ってくればよかったね」

テーブルの前に腰掛けた滯がお茶を入れようと準備に取り掛かる中、畳の上に寝そべって何かを読みながらぼやいた言葉に反応したのは以外にもムギだった。

「それだったら、これはどう?」

そう言つてムギが鞆から取り出したのは一回り大きな箱だった。

箱には『人世あてもんゲーム』と書かれていた。

「あ、それ知ってる。確かあの手この手でお金持ちになるやつだよな」

決して人生●ゲームではない。

「あ、それじゃおやつでも食べながら遊ぼうよ!」

「おい、この後夕食だぞ」

一体いくつお菓子を持ってきているのかが気になるが、この後には夕食が控えているのだ。

ここでお菓子なんか食べたしたりしたら夕食が食べられなくなる危険性だってある。

「大丈夫大丈夫」

「ちゃんと全部食べるって」

「残すなよ」

余裕気に答える唯と律に、滯は少しばかり呆れたように目を細めるとそう口にするのであった。

「それでは、いただきます」

『いただきます』

数十分後、夕食の時間を迎えた僕たちは大広間で手を合わせると夕食に手を付けていく。

今日の夕食はうどんに天ぷら、そしてお寿司にお吸い物という豪華なものだった。

ちなみに、お吸い物はお替り自由らしい。

「浩介」

「なんだ？」

天ぷらをお箸でつかんでいると、向かい側の席に座っている慶介が突然声をかけてきた。

「浩介にとっても重要なことを聞きたいんだ」

「何？」

その表情はいつになく真剣そのものだったため、僕は気を引き締め、慶介から投げかけられるであろう疑問を待った。

「お前、唯ちゃんたちの着換えを除いたのか？」

「っ！」

慶介の疑問に、思わず先ほどの唯を押し倒してしまったことを思い出した僕は、肩を震わせたが表情には出さくないですんだ。

だが、慶介にとっては今の僕の反応で十分に伝わったのだろう。

慶介の表情が驚愕の物へと変わっていつているのだから。

「浩介、お前というやつは……畜生！　こうなったら俺もみんなの着替えを——っっ！」

慶介がバカげたことを言いきる前に、足で慶介の体を力いっぱい蹴り飛ばした。

「食事中だ、うるさい。それと、馬鹿げたことをやったら潰すぞ」

「男の勲章は、ダメだ……まじで、死ぬる」

痛みに悶える慶介は放っておいて、僕は食事を楽しむことにした。

そんな中、二人ほど橋が止まっている人がいた。

「あんなたち、もう食べないの」

「き、休憩しているだけ……うぷっ」

「ちゃんと残さず食べる……うぷっ」

短めの黒髪に、男っぽい雰囲気をもっている女子学生の問いかけ

に、律と唯が応えた。

とはいえ、声が何とも苦しげだった。

「二人とも、もしだめだったら僕が全部食べるからいつでもギブアップ言いな」

「協力感謝……うぷっ」

なんだか見ているだけで可愛そうに思えてくるが、本人たちが奮闘する意思があるのであれば、僕は手出しはできない。

僕は自分の料理に舌鼓を打つことにするのであった。

結局、二人からほぼ手つかずの料理を渡されたのはそれから数分後のことであった。

「ふう……………」

「極楽だな」

僕と慶介は、浴槽につかりながら体を温めていた。

どうして慶介と一緒に入っているのかというと、夕食を終えてしばらくしたところで、慶介が部屋を訪ねてきたからだ。

なんでもお風呂の時間なのだとか。

ちなみに、女子はクラスごとにお風呂に入る時間が決められている。

とはいえ、一クラスの女子がお風呂に入ったら温泉がパンクしてしまうので、数人に分けて入るようにしているらしい。

それは僕と慶介も同じことで、男子の場合は各クラスで決められた時間に温泉に入るとい形になっている。

つまり、わかりやすく説明すれば、今この温泉にいるのは僕と慶介の二人だけなのだ。

「それにしても、浩介はいいよなー」

「急になんだ？」

突然羨ましげな視線とともに告げられた言葉に、僕は戸惑いながら聞き返した。

「だってさ、浩介は毎日楽しく過ごしているし恋人だっているし。本当にうらやましいよ」

「慶介、君は一つ大きな誤解をしてるよ」

慶介の言葉を聞いた僕は、一つだけ慶介の考えに反論することにした。

「僕が今ここにいるのは唯や友人がいるから。そうでなければ僕はここにはいない。それに、慶介は羨ましいと思う」

「どうしてだよ？ 俺は恋人だっていないし」

「いないけど、慶介は僕にはない良いものを持っている。僕が一生得ることができないものをね」

戦いの中で生まれた僕では手に入れられないもの。

それは、“優しい心”。

今の僕にそれがあるのかどうかは別として、仮にあったとしてもそれは人より劣るだろう。

「だから、慶介も本当の自分を出すべきだと思うけどね。そうすれば、恋人の一人くらいはできるはずだし」

「そうかね……」

「まあ、こういうのはもう少し後になってわかるものだから、今は分からないものかもしれないけど、でも一つだけ言わせて」

あまりぱつとしない表情をうかべている慶介に、僕はそこでいったん言葉を区切ると慶介から顔をそむけた。

「僕は慶介と友達になれてよかったって思ってる。慶介のおかげで今の僕はある。だから、ありがとう」

普段なら絶対に言えないようなことを僕は慶介に告げていた。

今振り返ると、本当に色々なことがあった。

部活をやめるかもしれないこともあった。

でも、その時にさりげなく僕の背中を押していたのは他ならない慶介だ。

彼は、いわば僕の恩人でもあるのだ。

「浩介……」

「さ、さあ！ もう十分に暖まったんだし、でるぞっ」

慶介の言葉で、自分が何を言っていたのかを理解した僕は、恥ずかしさのあまり逃げ出すように脱衣所に戻るのであった。

「あ、浩君！」

「ん？ 唯に律か」

外に出たところで声をかけられた僕は声のする方に視線を向けると元気に手を振っている唯の姿があった。

その横ではこっちのほうに視線を向けている、いつもよりおとなしめの律の姿もある。

「他の二人は？」

「今着替えてるよ。そろそろ出てくるんじゃないか？」

僕の疑問に答えた率は、どこからか牛乳瓶を取り出すと飲み口の部分に口をつけてそれを傾け呑み始めた。

「律ちゃん、身長も伸ばしたいの？」

「ぶふっ!？」

にやりとほくそ笑みながら唯から掛けられた言葉に、律が思いつきり牛乳を噴出した。

「汚っ！」

僕は慌てて律から距離を取った。

「何を言うか！ これはご褒美ではないか!!」

「あんたこそ何を言ってるんだ!!」

もはやただの変態へと成り果てかけている慶介に、僕は全力でツツコミを入れる。

「ぢぐじよう、大きくなってやる〜」

そんな中、律は涙を流しながらそうつぶやいていたとか。

なんだかんだあって、部屋に移動した僕たちを待っていたのは、すでに敷かれていた五つの布団だった。

「私はここな！」

「それじゃ、私はこっち」

「私はここだよ！」

「じゃあ僕はここぞ」

次々と自分の寝る場所を決めていく律たちに乗るように、僕は出入り口側の端の方の布団を選んだ。

「そこのお二人さん、隣同士だからって変なことをしたらダメだぞー」
「するか！」

律のからかうような笑みを浮かべながらされた注意に、僕は顔が赤くなるのを必死にこらえながら全力で否定した。

「え？　しないの？」

「してほしいの!?!」

割と本気で残念そうな表情をうかべる唯に、僕は驚きを隠せずにツツコミを入れた。

そんな馬鹿騒ぎをしていると、ドアがノックされた。

「はい」

「いきなりごめんなさい！　高月君はいる？」

ムギが返事をするやや乱暴にドアが開け放たれた。

それを行ったのは、意外にも佐伯さんだった。

息を切らせながら僕の名前を口にしたため、僕は嫌な予感を感じながらも応対した。

「どうした？」

「その……佐久間君が」

「おーけー。案内してくれる？」

佐伯さんの口から慶介の名前が出た時点で僕は何が起こったのかを理解したので、佐伯さんに部屋まで案内するようにお願いした。

「それじゃ、ちよつと殺^やつてくるね」

「お、おう」

僕は律たちに声をかけるとそのまま部屋を後にした。

目指すは佐伯さん達に割り当てられた部屋だ。

そして、そこで見た光景は……

「いやー！ 来ないで！」

「ぐへへへへ、良いではないか、良いではないか」

どこかの時代劇の悪代官のごとく、青色の短めの髪が特徴の女子を追いかけまわしている慶介の姿だった。

「……」

他の女子はうまく逃げられたようで、出入り口のほうで何とも言えない表情をうかべてその光景を見ていた。

それをしり目に、僕はゆつくりと中に足を踏み入れると奥の部屋の出入り口に立った。

「ずいぶん楽しそうだな」

「浩介か！ ああ、すっごく楽しい！」

僕が声をかけると、女子を追いかけるのをやめた慶介が、満面の笑みを浮かべながら頷いた。

「そうか、それはよかったな」

「だろ。あははは——ギャバン!!」

僕は軽快に笑う慶介の脳天に、渾身の一撃を繰り出した。

ただの拳骨だが、威力はコンクリートでさえも粉々に粉碎するほどだ。

もちろん多少は手加減したが。

そんな一撃を喰らった慶介は地面に倒れ伏した。

息はしているようなので死んではない。

「自分をさらけ出せとは言ったが、変態になれとは言っていないぞ、この馬鹿者が!!」

完全に気を失っている慶介に罵声を浴びせた僕は、慶介の対処を佐伯さんたちに任せる（押し付ける）とそのまま部屋を後にした。

（なんでこうなるんだ）

僕は心の中のため息をつきながら、自分たちの班の部屋へと戻るの

であった。

「それじゃ、明かりを消すぞ」

「目覚ましはセットしたよ」

消灯時間ということもあり、明かりを消すべく紐に手を伸ばす溍に、唯が相槌を打った。

(僕の枕元で轟音を鳴らすのは勘弁してほしいんだけどね)

さすがに贅沢は言ってられないので我慢することにした。

そして僕は布団にもぐりこんだ。

ちなみに、僕の布団の上はテーブルがある。

最初はそのようなものはなかったが、分けつけたかったので、僕が設置したのだ。

そうすれば、どうやっても互いに布団を行き来することが難しくなるからだ。

「ふぎ!?」

「唯?!」

突然の謎の奇襲攻撃に、唯は僕のほうに倒れてきた。

「先生、琴吹さんがやりました」

唯の体を慌てて起き上った僕が支えていると、律からこの奇襲をした犯人の名前が告げられた。

そしてその犯人はすでに次の攻撃の準備を整えていた。

「え、ちよっと。むぎゅ!」

溍の顔を直撃したのは枕だった。

「まくら投げだね! 面白——ふぎゃ」

「ふっふっふ、もうすでにここは戦場なのだよ、お嬢——うぎゃ!」

何とも楽しい様子で始めたのは修学旅行定番(?)のまくら投げだった。

(早く寝たいんだけどな)

僕としては朝から色々ツツコミを入れたりなど、かなり飛ばしていたのでゆつくりと休みたかった、

だが、悲しきかな。

恐らくこれは小一時間は続くだろう。

そんな時、ここに入ってくる人物の姿があった。

赤いジャージを身に纏う顧問でもあり担任でもある山中先生だ。

「あなたたち、一体何を——」

「行くぜ！ スーパーショット田井中号!!」

山中先生が、まくら投げをしている律たちに声をかけようとしたところで、律がものすごくあれな技名を叫びながら一回転をし始めた。

そして、投げ放たれた枕はムギが立っているところを大きくそれて、先ほど入ってきた山中先生のほうへと飛んでいった。

「危な——」

それにいち早く気付いた僕が手を伸ばして山中先生に直撃するのを防ごうとしたが、奮闘もむなしく枕は山中先生の顔面に直撃した。

「あつ……」

一気に氷点下まで下がったかのように凍り付く部屋の雰囲気、誰もがその場から動くことができなかった。

そんな枕は重力に従ってゆつくりとされとて素早く床に落ちた。

(怖っ!?)

その時の山中先生の表情を間近で見た僕は、戦慄を覚えた。

怒りをこらえているのか、ひくひくと動く眼の端が僕が抱いている恐怖の感情を底上げした。

そんな大魔神と化してしまった山中先生だが、ふと、唯たちがどんな表情を浮かべているのかが気になったので、周りを見てみると、そこには床に伏せて寝息を立てて寝ている演技をしている皆の姿があった。

「いや、それは無理がありすぎるからっ!」

寝たふりをしている皆に思わずツツコミを入れる僕をよそに、山中先生がついに行動を始めた。

ずれ落ちたメガネをかけなおして、ゆっくりとした足取りで前方に進み

「うぎゃっ!?!」

律の背中を踏みつけた。

悲鳴を上げる律を無視して、山中先生は部屋の証を完全に消すと、ゆっくりとした足取りで玄関先まで歩いて行った。

そして……

「早く寝なさいっ!!」

大きな声で怒鳴り、ドアを勢いよく閉めるのであった。

山中先生の怒りに満ちた足音が部屋の中にいる僕のところまではつきりと聞こえた。

まさしく、大魔神だった。

(さてと、僕も寝るか)

周りの様子を見るからに、もうまくら投げはお開きだろうと思ひ、僕は布団にもぐりこむと眠りにつくのであった。

(明日はどこに行こうかな)

そんなことを考えながら。

★★★★★

浩介が眠って数分後、唯たちに割り当てられた部屋から楽しげな声が響いていた。

中では、浩介を除く全員がまくら投げ第二戦を繰り広げていたのだ。

最も積極的にやっているのは濡を除いた三名だが。

「喰らえ、唯！ おりゃあ」

「おっと！ 私には当たらないよ！ 律ちゃん」

そんな中、律が唯を狙って放った枕を、唯は右によけることでかわした。

だが、それが悲劇の幕を開けるきつかけとなった。

突然だが、ここで彼女たちの配置を説明しよう。

出入り口側の布団で眠っている浩介の前方に唯が立っており、その右斜め上の部屋の隅で漣は退避している。

その漣と出入り口との中間地点に絨が立ち、唯から見て前方に律が立っている。

つまり、唯が避けると枕の落下地点は当然のごとく浩介が寝ている場所となってしまうのであり……

「うぎゅ!？」

枕は浩介の顔面に直撃する結果となった。

「あ……」

「何をしてるんだよ、律!」

眠っている浩介の顔面に枕を直撃させたことを責める漣に、律は申し訳なさそうな表情をうかべた時だった。

浩介の手によって顔の上に乗っている枕が取り除かれた。

「一体これは何の嫌がらせだ」

「こ、浩……君?」

いつもとは違う浩介の雰囲気、唯は目を瞬かせながら彼の名前を口にするが、浩介は反応することなく立ち上がった。

「明日は早いっていうのは分かってるだろ?」

「え、ええ……」

浩介の体から放たれる殺気にも似た重い雰囲気、圧されたのか、ムギが一步後ずさりをしてしながら答える。

「だというのに……フフ……フフフ」

「こ、浩介ちよつと怖いぞ」

「お、落ち着こう。話せばわかる」

うつむきながら不気味に笑いだす浩介の姿がさらに恐怖を増させていく中、律は必死に対話による解決を試みようとしていたが

「むぎや!？」

一瞬のうちに漣は意識を刈り取られていた。

「漣!？」

「漣ちゃん!？」

慌てて床に倒れている漣のもとに駆け寄る三人は、漣の体をゆする

ものうめき声を上げるだけで目を覚ます兆しが見えなかった。

「ま、まさかこれは……」

「あの伝説の——」

漣の傍らに落ちている枕を見ながら律と唯が声を上げた。

「超音速枕!?!」

「お、恐ろしいわ」

律と唯のつぶやきにムギが顔をこわばらせながらつぶやいた。

「ど、どうしよう律ちゃん」

「こ、こうなったら戦うしかない!!」

そう言い放った律は、先ほど浩介が投げた枕を手にすると立ち上がって勇敢にも浩介と向かい合った。

「喰らえ、こ——ぶぎや!!」

「二り、律ちゃん!?!」

枕を投げ用としていた律は、顔面に枕を当てられそのまま床に倒れた。

万事休すかと思われた唯たちだったが、二人を倒したことで満足したのか、それともただ冷静になったのか浩介は自分の布団にもぐりこむと再び眠りについた。

「浩介君って、もしかして寝起きが悪いのかな?」

「わ、わからない。でも、浩君、恐ろしい子っ」

紬の疑問に答える唯は、最後にそう口にして話をまとめた。

だが、それはこの場にいる者たちの考えていることと同じものでもあった。

結局、漣と律数分後に意識を取り戻したが、彼女たちの中には“眠りについた浩介を起こしてはいけない”という暗黙の決まりができるのであった。

第121話 朝のピンチと自由行動

「んん……」

目が覚めた僕はいつものように目を開けた。
窓のほうのふすまから洩れる朝日が、今が朝であることを知ることができた。

周りの静けさから、まだみんなは眠っているようだ。

(それにしても律たちには困ったものだ)

若干頭の回転が鈍い中、僕は昨夜のことを思い出していた。

何があったのかを言えば、実に単純だ。

寝ていた僕を枕を当てて邪魔した。

むろんワザとではない(と信じた)が、いきなりたたき起こされた方にはたまったものじゃない。

しかも、それがまくら投げに巻き込まれたのならなおさらだ。

だからこそ、人が寝ているところではまくら投げはするなという警告の意味を込めて僕は濡や律に全力で枕を投げたのだ。

枕の特性で、威力は和らぐし、命までとらないように加減はしたので問題はないだろう。

(今夜もまくら投げを始めたらどうしてくれようか)

自分でも驚くほど物騒なことを考え始めたため、僕は考えるのをやめさせるべく起き上がることにした。

だが、そこで僕は違和感に気が付いた。

何故か右腕が動かないのだ。

正確に言えば、動くことは動くがものすごく重いのだ。

まるで、誰かに掴まれているかのよう。

(掴まれている?)

「まさか……」

僕は嫌な予感がしたため、何とか動かせる左半分を右にねじるような感じで体を起こすと、自分の右腕を確認してみた。

「……なぜ?」

その光景に僕の口から出たのは疑問の声だった。

簡単に説明すれば

「スー……スー……」

僕の右腕に抱き付くようにして唯が寝ているだけだ。

しかも器用にテーブルの脚の隙間をかいくぐるように。

「一体どうすればそんなことができるんだよ？」

眠っている唯に疑問の声を投げかけるが、当然答えは返ってこない。

「しかし、これはまずい」

主に精神面と状況的に。

唯は僕の腕を抱き枕のように自分の体にくっつかせている。

要するに、女性が悩むであろう部分も触れているわけで。

(そういえば、腕に何かやわらかいものが当たってると思ったけど、これってそういうことなのか)

最初は布団だと思っていた感触も、状況を飲み込むとまったく違ったものになっていく。

僕とて男だ。

このような状況で冷静にいられるほど経験はない。

(理性を失って……:ということは断じていや、おそらく……:きつと……:たぶんないと思うけど)

どんどんと自信がなくなってしまうのも男の性というものだろうか。

「って、一人で納得してる場合じゃない」

そしてこれが二つ目の問題だ。

何度も繰り返し通り、僕の右腕に抱き付くように唯は眠っている。

もしこんなものを律たちが見たらどうなるだろうか？

「おやおや、お二人さんは朝からお熱いどすなー」

こちらをにやにやと笑いながら見てくる律。

「はううう」

処理能力を超えて失神する瀧。

「あらあら、まあまあ、ふふふ」

いつにも増して微笑まし気な表情を浮かべるムギ。

「なによ！ それは私へのあてつけのつもり!? うわああん!!」

血の涙を流しながらわめき散らす山中先生。

「裏切り者には死を、幸せ者には疫病神を」

同じく血の涙を流しながら物騒な言葉を呟き続ける慶介。

「想像してしまった」

思わずカオスと化した部屋の状態を想像してしまった。

だが、このままいけばそれが現実のものとなるのは間違いない。

(となれば、やることはただ一つ)

この状況からの脱出だ。

「まずは時間を……」

僕は首を動かして時計を探した。

時計はすぐに見つかった。

唯が自分の枕元に置いていたのだ。

時計が示している時刻は午前5時。

皆が起きる時刻は午前6時。

つまりタイムリミットは、後1時間ということになるのだ。

もしかしたら途中で起きる人がいるかもしれないが、その場合は魔法でもう一度眠らせればいいだけの話だ

「よし、やるぞ。平和な一日を手に入れるために」

こうして、僕の戦いは幕を開けた。

「ふう……ようやく腕を解放することができた」

長い時間をかけて奮闘した界があり、何とか腕の部分の束縛を解くことができた。

(しかし、敵も手ごわい)

唯は、僕が腕を引き抜こうとすればするほど、どんどんと抱き付く場所を移動させるのだ。

まるで僕の手から逃れるかのように。

その結果が手に抱き付いているというものであったりする。

(しかも手だからあそこの感触がよりダイレクトに)

あの箇所の子細やかな感触は、じわりじわりと僕から余裕をなくしていくのだ。

(と、とにかく……ここは慎重に)

僕は震える手を抑えながら唯の手から僕の手を解放させていく。

「んっ……」

「っ!？」

誤って右手を動かしてしまったため手に当たっている物に刺激を与えてしまった。

僕は息をのんでその場でじっとする。

「ふふ……浩君のエッチ」

「……」

(もしかして起きてるのか?)

何ともピンポイントすぎる寝言なだけに、疑問を感じたがふと時間のほうを確認してみた。

時刻は午前5時50分。

残り時間はあと10分弱にまで迫っていた。

(腕の解放で時間を取られすぎたか)

このままだと確実に間に合わなくなってしまう。

再び脳裏によぎる最悪な結果の未来の僕の姿。

(大丈夫だ、まだ時間はある)

僕は自分を落ち着かせて再び作業に取り掛かる。

(よし、あと少しで外れる)

何とか唯が掴んでいるのが僕の人差指と中指と薬指だけという状態にまで持ってこれた。

時間もまだ6分ある。

(勝ったな。これは)

僕は早くも勝利宣言を出した。

誰に対してかは知らないけれど。

(よし、一気に指のほうも進めるか)

僕は早速最後の関門である指の解放に取り掛かろうと

「何をやってるんだ？ 浩介」

「ヒギっ!？」

したところでかけられた滯の声に、僕は変な声を上げながら固まった。

(まさか、ここにきて最悪のパターンになるとは)

僕はこうなつた運命を心の底から恨んだ。

だが、恨んだところで状況は変わらないわけで。

「つて、(んんん)!!？」

僕の姿をじっくりと見ていた滯は、手元に視線を向けると顔を赤くして同じ言葉を繰り返し始めた。

「あ……」

滯の慌てのように、僕は今の自分の体制を思い出した。

今僕の右手は唯の胸元にある。

これは唯が抱き寄せているからなのだが、何も知らない人から見れば僕が唯の胸に触っているようにも見えるだろう。

「(んんん)……」

「んう……」

(つて、これはまずい!!)

先ほどよりボリュームを上げ始めた滯の声(叫び声にも近いが)によって、律たちも目を覚ましかけている。

あと数秒で、全員が目を覚ますことになるだろう。

そうなれば、僕に待っている未来はただの混沌だ。

「させない！ リスリプト!!」

「(んん)……きゆう」

左手を床のほうに掲げて呪文を紡ぐと、悲鳴を上げていた滯はまるで糸の切れた人形のようにその場に崩れ落ちた。

そしてすぐに規則正しい寝息を立て始める。

それは、滯の悲鳴に目を覚ましかけていた皆も同じだった。

「やれやれ……まさか本当にこれを使うことになるとは」

僕のため息交じりにつぶやきながら、今度は勢いよく唯の手から僕の手を引き抜いた。

僕が濡たちにかけたのは睡眠魔法だ。

これをかければどんなに深刻な不眠症の人でも、一瞬にして眠りに就かせることができる魔法なのだ。

ただ、問題はこれをかけると、反対の魔法である覚醒魔法をかけないと一生目を覚ますことができないところだが。

現に、先ほど勢いよく手を引き抜くという暴挙を行ってもなお、唯はぐっすりと眠っており目を覚ます気配すら見せない。

「折角だし、この時計にするか」

僕は唯の目覚まし時計に手をかざすと呪文を紡いで、覚醒魔法をかけることに成功させた。

これによつて、目覚ましが鳴り響けば覚醒魔法が発動して皆が目覚ますという寸法だ。

「さてと、僕は着替えて顔でも洗ってくるか」

僕は残された3分間を、着替えと顔を洗うことに費やすのであった。

ちなみにこれは余談だが、覚醒魔法によつてちゃんと目が覚めたみんなだったが、濡から『浩介と唯が抱き付いている夢を見た』という話を聞いた時は息が止まりそうになったということを、ここに記しておこう。

「皆、ちゃんと集まっているわね」

ホテルの出入りに集められた僕たち2組は、山中先生のほうに視線を向けていた。

時刻は午前8時。

各クラスごとに集まって担任の先生から今日一日の注意事項を聞

いてから、皆お待ちかね（？）の自由行動という形になっている。

僕たちは2番目に早い時間での出発となるわけだ。

「本日は自由行動になります。班ごとに決められた場所のを効率的に見学するように。何かがあったら先生の携帯に電話をして、それと――」

山中先生から、注意事項が説明されていく。

要約すると、ホテルに戻る時間は6時までとのこと。

そして何かがあったら、山中先生の携帯に電話をするということの二点だ。

そんな重要な話をしている中、平然と先にどこかに行こうとするのが二名いた。

「その二人、さっさと戻ってきなさいっ！」

「う……ばれてた」

すんなりと山中先生に見つけられてしまったことに、肩を落としながら唯たちは僕たちのほうに戻ってきた。

（本当に大丈夫なのかな？）

二人の様子を見ると、無性に不安に駆られる僕なのであった。

そして、二人が戻ったのを見計らって、山中先生も連絡事項を続けるのであった。

「私たちは嵐山なんだけど……」

山中先生から渡された行先が記されたメモを見ながら滯がつぶやいた。

（嵐山か……どこか観光する場所ってあったけ？）

事前に調べておいたとはいえ、あまり興味がなかったのでさっと調べるのにとどめて覚えようとしなかったことが、こんなところで響いてくるとは全くの予想外だった。

それでも、覚えているのは、とても見て回るのが難しい場所だということ。

清水寺などの一般に知られている有名な観光地のエリアから見れ

ば、影が薄いのが理由らしい。

「それじゃ、タクシーで行ってみるのはどうかな？」

「そうだな。それならある程度時間も稼げるし」

時間を稼ぐ方法を考えている時点で色々と損をしているような気もするが、あえて何も言わないことにした。

「律は何か案が……って、律と唯は？」

「さっきまで一緒にいたけれど」

「僕も同じだ」

律に意見を聞こうと話を振る滯は、律がいないことに首をよしげながら僕たちに聞いてきたので僕たちも首を横に振りながら答えた。

「一体どこに……」

二人を探すように周囲を見渡し始めた滯に倣うように周囲を見渡した僕だったが、二人の姿はすぐに見つかった。

楽器店の窓に顔をくつつけて中をのぞき込んでいる二人の姿が。

「なんで京都に来てまで楽器店なんだよ！」

「いやーん、いけず〜」

ツツコミを入れながら律の体を楽器店から引きはがす滯に、律は足をじたばたさせることで抵抗する。

その姿は完全に駄々っ子と母親だった。

「ちよつとだけだつてば」

「まったく……置いて行くからな！」

いまだに抵抗する律に、呆れたようにため息を漏らすと背を向けて歩き出そうとした時だった。

「お、ここレフティーモデルが置いてあるんだ」

「っー」

ふと律がなにかに気付いたように声をもらした瞬間だった。

右に180度体の向きを変えると早歩きで向かったのは楽器店の窓だった。

そして、先ほどの律たちと同じような体制で中を覗き込み始めた。

完全にミイラ取りがミイラになってしまった。

「滯、移動するぞ」

「ヤダ」

立場が入れ替わるように、今度は律が移動することを促すが、返ってきたのは拒否の言葉だった。

「小学生の子供か、あんたは」

このままではいつまで経っても移動ができないので、少しでも暴挙に出ることにした。

「うわ!？」

暴挙とは言っても濡の服の襟首をもって窓から引きはがしただけだが。

「いい加減移動しよう?　いつまでもここにいるのはもったいないから」

「そ、そうだったな」

すぐに正気(どちらかという諦めがついたとでも言うべきなのだろうけど)を取り戻した濡によって、移動手段が告げられた。

「タクシーって何人乗りだっけ?」

問題なく濡の説明が進んでいたが、唯の出した疑問がそれを変えてしまった。

「確か運転手を除いて、四人乗りだったような」

『あ……』

そこで全員が気づいたように声を漏らした。

四人乗りということは、誰か一人が乗れないということになる。

「大型車のほうにするか?」

「いや、それだとお金のほうもかさむし、普通のでいいよ。僕が乗らなければいい話だし」

「でも……」

律の提案を断ると、ムギが申し訳なきような表情を浮かべながら食い下がってきた。

「大丈夫だって、タクシーぐらいなら走って追いかければ十分だから」

「あ、そう言えばそうだよな」

僕の一言で、僕が普通の人間ではないことを思い出したのか、納得したように相づちを打った。

「僕は走ってタクシーを追いかけるから、皆はタクシーに乗っていいよ」

「それじゃ……」

最後は強引だがムギを説得することができた。

「その代わり、僕の荷物をお願いしてもいいかな？　これを持ったままだと少し走りにくいから」

「任せてくださいさいつ」

胸に手を当てながらされた唯の頼もしい返事に安心しながら、僕は自分のバックを唯に渡した。

「それじゃ、タクシーを呼んで。僕は姿を消して追いかけるから」

「悪いね」

話をうまくまとめたところで告げられた濡からの謝罪の言葉に、僕は首を横に振ることで返した。

濡が電話でタクシーを呼んで数分後、タクシーがやってきたので唯たち四人で乗り込むとそのままドアが閉まり走り出していった。

この時、僕は魔法で姿が見えないようにしていたため手を振るなどのことは一切やっていなかった。

とはいえ、濡たちは終始申し訳なさそうだったが。

「さて、僕も移動しますか」

タクシーが走り出したのを確認した僕は、軽く準備運動をするとそのまま車道の端のほうに立って、唯たちが乗ったタクシーを走って追いかけるのであった。

外伝Ⅰ すべての始まり【UA通算8万突破記念】

——始まりはひよんなきっかけだった。

桜の木も散り、季節はゆつくりと夏に向かっていく中、僕は教室で担任の先生からの連絡事項を聞いていた。

クラスメイト達は、先生の連絡事項にどこか浮き足立っている（そわそわしたような感じ）様子で聞いていた。

それもそうだ。

なにせ明日から4連休なのだから。

いわゆる“ゴールデンウィーク”なるものだった。

「みなさん、さようなら」

『さようならっ』

先生が挨拶をして、それに応える生徒たち。

それと同時に、まるで爆発したかのように教室に話し音が溢れかえり始めた。

彼らは友人たちと遊びに行くか行かないかの話で盛り上がっている。

そんな中、僕は手早く荷物をカバンに入れるとそのまま教室を後にした。

周りでがやがやとにぎわっていても、それがどこか別世界のような錯覚さえ覚えた。

僕の今の状態を簡単に例えるのであれば透明人間。

誰も僕のことを認識していない。

でも、僕は実際に認識されている。

大声を上げれば、その場にいる人が何事かといわんばかりにこっちを見てくるだろう。

そう、僕は孤独だった。

僕、高月浩介は現在小学2年生。

ただ違うのは、僕は人ならざる者が住まう世界である魔界から来たことだ。

1年前、魔法連盟（魔法使いを取り締まる警察のような組織）の連盟長でもある父さんに、突如おかしな任務を言いつけられてこの人間界にやってきていた。

任務の内容は、“魔法を使用せずに、栄誉を残す”こと。

魔法を使つてはいけないという条件が故に、僕はどのようにしてこの任務を達成するのかを1年かけて考えてきたが、なかなかそれが見つかるとはならない。

そうしているうちに、月日が流れていつてしまったのだ。

（そもそも、どうしてこんな変な任務を与えたんだ？）

どちらかというところの方が不可解だった。

（やはり、“あの”答えが原因か？）

ふと浮かび上がったのは、それだけだった。

それは、任務を言い渡される直前に父さんから真剣な面持ちで投げかけられた物だった。

内容も“もし我が国を侵略しようとするものが現れた場合、おぬしはどうする”という、いかにもなものであった。

その問いかけにどのような意図があるのかわからないまま、僕はその問いかけに“全員まとめて始末する”と簡単に答えて見せた。

自国を守るには、危険因子を少しでも排除することが最善の策だ。お咎めなしでそのまま生かして帰せば、再び侵略するかもしれないのだ。

その返答に、父さんは表情を真剣な面持ちから険しいものへと変えた。

そして告げられたのがあの任務だったのだ。

（あれのどこが間違いなんだろう？）

自分でもいまだにそれがわからなかった。

それはともかく。

僕は現在魔法文化のない世界に来ているわけだが、大きな問題があった。

それが、クラスで孤立しているということだった。理由ははっきりしている。

それは、僕がひととして必要な何かが大きく欠落しているからなのかもしれない。

小学校に入学してからというものの、誰も話しかけてくる兆しを見せない。

それどころか怯えているような感じさえ見受けられる。

それはまるで、化け物を見るようなものだった。

(まあ、話しかけられても困るんだけど)

自分の20分の1の年の子供に、一体なんて受け答えすればいいのかが僕にはわからなかった。

(まさか、ここまでだったなんて)

魔界にいるときから、コミュニケーション関連が大きく欠落しているとわれ続け、それも自分で自覚はしていたがこうして実際にこの現状を目の当たりにすると、驚きを隠せずにはいられなかった。

(まあ、どうでもいいか)

結局そういう結論に達するあたり、僕は何かがおかしいような気がするが、それよりも僕の一番の問題は、やはり任務達成の手段だ。

なんと少しでも任務を成功させてこの茶番のような任務を終わらせなければいけない。

(でも)

どうしてだろうか？

一人でいればいるほど、任務のことを考えようとするほどに、胸が痛んでくるのは。

任務にあたっての、サポート体制は万全だ。

まずは小学校の教師に数人、魔法連盟の人間をもぐりこましている。

他にも医療機関や役所、金融機関に、治安維持組織にも同様に魔法連盟の物が潜入しており、僕の任務をスムーズに遂行できるようにしてくれている。

もつとも、これを行っているのが工作部隊なる者たちなのだが。

そして、生活費。

これに関しては僕の自費からねん出することになっている。

とはいえ、僕の場合贅沢さえしなければ向こう100年ほは働かずに暮らしていけるほどの財産があるのでこれについては問題はないだろう。

現に不自由したことはこれまでに一度もないのだ。

ただ、あまり使いすぎるとこの国の経済バランスを崩し（必然的に通貨の量を増やすことにもなるので）かねないのでやっていないが。何事も程度ということだ。

次に、住まいだ。

これに関してはどういうわけかすでに用意されていた。

一面、白い外壁の一軒家で誰がそこに住んでいる人物が魔法などという非科学的な力を使えると思うだろうか？

それはともかくとして、今現在僕は自宅に食材がないため、鞆を自宅のほうに置いて買出しに出ていた。

（僕はいったい、なんでここにいるんだろう？）

買い出しをしている最中、僕はそんな答えのない疑問を自分に投げかけてしまう。

こういう時は魔法の練習をして力をつけておくようにすればいいのだが、それも満足にできない。

なぜならば、魔法連盟が定めた世界渡航に関する法律が存在するためだ。

それは、魔界から他の世界に向かう魔法使いたちが守らなければならないことなのだが、その最初のほうにこう記載されている。

『魔法文化のない世界に渡航する場合、ライセンス課からの魔法使用許可を得ずしてのBランク以上の魔法の行使を禁じる。』

ただし、生命に関わる場合はこの限りではない』

もちろん、この法律は魔法使いを取り締まったり秩序を保たせるのに重要なのは言うまでもない。

だが、僕にはこれ以上ないほどに楔のようなものになっていた。

ちなみに、ここに出てくる“ランク”だが、これは魔法の効果と難易度を示したものだ。

下がD、上がSSSまである。

例を挙げると、空を飛ぶ魔法はBランクで、姿形を変える魔法はSランクに認定されている。

他にも、A地点から一瞬でB地点に移動する転移魔法もSランクだ。

(ここに來るときに、父さんに子供の姿にされたけど、これって、地味に調子が狂うんだよな)

解呪を行うにはSランク相当の魔法を使わないといけない。

だが、それを行うにはライセンス課(僕のように魔法文化のない世界に向かった魔法使いに対して、魔法使用の許可を出したり、魔界内の魔法を使うための資格などを発行する部署)に許可をもらわなければいけないが、もらえることはないだろう。

現に数日前も却下されたばかりだし。

(ほんとにどうしよう)

結局、また振出しに戻ってしまう。

これまで結論らしい結論に達したためしがないのだ。

まるで永遠に続く迷路に迷い込んだような心境だった。

「ん？」

そんな暗い心境のまま、買い物を終えてスーパーから出た時、ふと音楽が聞こえてきた。

(そう言えば、このあたりってストリートミュージシャンが出没する場所だったつけ)

大型ショッピングセンターや、娯楽施設ができたことよって、人が多くなり始めているため、よく一発逆転を狙っている(かどうかは分からないが)ミュージシャンたちが駅前的一角でライブを行っていたりしている。

もつとも、中には珍妙なことを喚き散らす宗教勧誘や、子供じみた妄想しか口にしない政治家の幼稚なスピーチなども存在するが。

後者はいいとして前者は実に面倒くさい。

その面倒くささと言えば、宗教に入れとしつこく勧誘された時に、二度と口が開けないようにでもしてやろうかと思つたほどだ。

閑話休題。

「行つてみるか」

意外そうに見えるが、僕は音楽に興味を持っている。

昔、英才教育としやれ込んだ父さんにピアノをやらされていた影響だが、ストリートミュージシャンが出没したときは、急いでいない時には毎回立ち寄ることになっているのだ。

この日も僕はそれほど大きくはない買い物袋を手に、ライブを行っているミュージシャンがいるであろう場所へと足を進めるのであつた。

大型のショッピングセンターなどができているだけあり、駅前ロータリーにはタクシーやバスなどが数台停車していた。

周囲に建ち並ぶビルの外壁にはやや大きめなモニターが取り付けられており、そこには何らかの食料品のCMなどが映し出されていた。

駅のほうにもアイスクリーム屋やコンビニなどのお店が存在しているの、帰宅途中のサラリーマンや学生にとってはかなり重宝する場所だろう。

ちなみに、現在住んでいる場所から今いる場所は数駅ほど離れている。

というのも、地元のスーパーは品ぞろえが悪いのか、売り切れていることがしばしばなので売り切れがしにくい大型のショッピングセ

ンターを利用することになっているのだ。

もつとも、ここでも売り切れるときは売り切れるがしよつちゅう売り切れ状態のスーパーよりはましだ。

そんなロータリーの一角にいたのはただのストリートミュージシャンというには似つかわしくない人物だった。

ピアノのようなものの前に立っているどこか自信がなさげで気弱そうな男性と、弦楽器を手にしている二人の女性という構成だった。その横に控えている金髪の男の人も、おそらくはメンバーなのだろう。

弦楽器を手にする女性二人は対極的な印象を持った。

銀色の髪を後のほうでくくっている女性は、お花畑にいる令嬢のようなほんわかしたような印象に満ちている。

そしてその横に立っている短めの黒髪の女性は戦乙女のごとく堂々とした気迫に満ちていた。

そんな彼女たちの周辺には人は全く集まっておらず、それどころか彼女たちの前を通りかかる通行人が立ち止まるそぶりすら見せない。

「それじゃ、最後の曲『Only for you』です」

そんな中、黒髪の女性が静かに曲名を告げると、ピアノのような鍵盤楽器から始まり、続いて弦楽器の女性たちも演奏を始めた。

それを聞いていてなぜ人が集まらないのかがわかったような気がした。

(音程もリズムもめちゃくちゃ)

魔法使いが最初に行うのが、どういうわけか音感やリズム感覚などを鍛える練習なのだ。

この理由についてはいまだにこれだという説明されていない。色々な説はある。

耳を鍛えて敵の攻撃の位置を把握するためやら、魔法の精度を上げるためなど挙げていけばきりがない。

なので、魔法使いは大抵が音感やリズム感覚などが優れているのだ。

僕の場合は、そのためのピアノであり絶対音感であると言われたこ

とがあつた。

もつとも、魔法使い全員が絶対音感だというわけではないが。それはともかく、僕は今日の前で演奏している曲の音色が、まったく絡み合っていないような気がしていた。

ギターという弦楽器と鍵盤楽器が勝手にあちこちに飛び回っているため、ただの雑音でしかなくなっているような印象しか感じなかったのだ。

(歌声はいいのに残念だ)

恐らく黒髪の女性がボーカルなのだろう。

彼女の歌声は曲全体を一気に引き締めていくのに最適だ。

それだけにもったいなかった。

そんなことを思っていると、どうやら曲は終わったようで二人の女性深々とお辞儀をした。

この時、自分のとつた行動がとでも不思議でならない。

「下手くそ」

心の中でとどめておくつもりだったその言葉を、口に出してしまつたということが。

「おい、坊主」

踵を返そうとしたところでよ認められた僕は、その相手の顔を見るとその男性は二人の女性の横で彼女たちを見ていた金髪の男だった。

その男の人は視線で人を殺せるのではないかというほど鋭い眼で僕を睨みつけていた。

どうやら僕をつぶやきがこの男の人に聞こえていたようだ。

「さっきの言葉、聞き捨てならねえな。もう一度言ってみろ」

「……………」

完全にあつちの世界の人間のようにならみつけてくる男に、僕は無言で睨み返す。

(今ここで始末するのもいいが人が多すぎる)

母国とは違い、そういうことをする際には細心の注意を払わなければいけない。

人が大勢いる場所で事を構えるのは、後々の片づけが面倒になるか

らだ。

(それに)

こうしていれば、こっちにメリットがある。

目の前の男の視線など、僕にとってはただの子供の物だ。

それで僕をどうこうすることなどできやしない。

でも、この状況を客観的に見れば、大の大人が子供を脅しているという風に見えなくもない。

現に通行人の人たちも訝しむ様な目で男のほうに視線を向けているのを横目で見ている。

どの道勝つのは僕だ。

そう思えば、この状況もおかしくなってくる。

「てめえ、何笑ってやがんだ！ 大人を舐めてんじゃ——」

「はいはい。そこまでそこまで」

目を見開かせ胸倉をつかんできた男に、僕はついに実力行使に出るのかと自分でも驚くほどの他人事のように思っていると、手をたたく音と共に一人の男性が仲裁に入った。

「社長」

「子どもを相手にそれをやってはいけないよ。竜輝君」

社長と呼ばれた黒髪の男性は茶色のジャケットに黒のスーツをまとい、穏やかな口調で金髪の男を窘めた。

だが、穏やかな口調とは裏腹に、底知れぬ威圧感のようなものが関係ない(ある意味当事者だけ)僕まで飲み込み圧迫感を感じさせた。

「君も、人を怒らせるようなことは言っではいけないってお父さんとお母さんに教えてもらったよね？」

(な、ナニコレ)

こちらに向けられただけで、これまで感じていた圧迫感がさらに増した。

それは目の前の紳士的な男性の本性は戦国時代に生きる武将かと思わせるほどの物だった。

余談だが、ここに来るにあたりこの世界の歴史は一般常識程度は把握している。

もつとも、かなり付け焼刃な状態だけど。

閑話休題。

「二人とも、ちゃんと謝るんだ。人を馬鹿にするようなことを君が悪いが、それに腹を立てて子供をにらみつける竜輝君も悪い」

「すみませんでした」

逆らえなかった。

僕からすれば、ただの独り言に反応した向こうが悪いので謝る気はもともとなかった。

それでもこの男性の言葉には逆らうことができなかった。

きつと僕にわからない何かがこの男性の言葉にはあるのだと思う。

「それで君」

お互いに謝り、痛み分けという結果で今回は決着がついたと思った矢先、今度は男性が口を開いた。

「さっきの言葉、一体どういう意味か教えてもらえないかな？」

口調こそ穏やかなものだったが、その表情は答えなさいと告げているように思えた。

しかも答えるまでここを離れることはできないという可能性だけである。

(周りの目もないし)

男性が仲介してお互いに謝ったことで、周囲の人の目は一気に薄れていき、現在は誰もこちらの様子を気に掛ける者はいない。

周りから見ればお互いに謝って和解し、今現在は男性が親しげに話しかけているという、見方によっては優しいおじさんに戸惑う子供という状況と判断できる状態だ。

もしここまでを掲載しているのであれば、この男性こそ非常に脅威なのではなからうか？

僕は降参の意を込めてため息をつく理由を告げることにした。

「弦楽器の二人の演奏と、ピアノみたいな楽器を弾いている人とのタイミングの差があった。厳密にはピアノのほうがワントテンポずれています」

「……………続けて」

僕のその指摘に、男性は静かに続きを言うように促した。

「最後に音と音が絡み合っていない……恐らく、必要な楽器がないのかそれとも使用している楽器が間違っているのかのどちらかだと思います」

その僕の言葉に、金髪の男と二人の女性たちが表情をこわばらせた。

(これは、修羅場だな)

僕はその男たちの表情の変化を見て、いつでも攻撃できるように準備した。

後は力ギにもあたる呪文を紡ぐだけで攻撃魔法を発動させることができる。

「君」

「……っ」

男性が声を上げたのを聞いて、僕はさらに警戒を高めた。

「頼みたいことがあるから、ちよつとおじさんと一緒にいつてきてもらつてもいいかな?」

「……」

安心させるように柔らかい笑みを浮かべながら聞いてきた男性に、僕は少しだけ考えを巡らせる。

(このままついで行って大丈夫だろうか?)

表面上は穏やかで敵意のようなものは感じない。

だが、裏ではどうなっているのかまで分からない以上、下手について行けば命取りにもなりかねない。

(読心術も時間がかかるし)

心を読む読心術も考えたが、問題点があったため止めた。

読心術自体はすぐに行使することができる。

だが、相手の心を読み解くにはかなりの集中力と時間(とはいえ、数十秒程度だが)を要する。

この状況でそれをするのに必要な時間がないのだ。

そう、ほんの数秒遅れただけでもややこしい事態になったりするのだから。

(まあ、大丈夫か)

このままついて行って何をされようとも、魔法という絶対の武器がある以上行く方が行くまいが関係がないことに気付いた。

何かがあっても切り抜けられる自信はある。

僕にかけられた楔も『命に関わる場合』には全く関係ないのは明らかだし。

「わかりました」

そんな結論に至った僕は、男性の誘いを受けることにした。

「そうか。それじゃ、早速で悪いけど移動しようか。君たちも移動の準備を」

「は、はい」

これまでのやり取りを静かに見ていた女性二人と男性に声をかけ、三人は手早く楽器を片付けていく。

「それじゃ、行こうか」

そして素早く片付け終えた三人と共に、僕達は男性の後について行くことにした。

そのあとに待ち受けているものを知らずに

外伝2 それは一つの転機【UA通算9万達成記念】

——それは一つの転機だった

「さあ、こつちだ」

男たちに案内されるままに向かったのは、歴史ある（悪く言えば古い）4階建てのビルだった。

見たところ、建物の外壁にひびなどは見られないが雰囲気的にも古い建物であることを物語っていた。

ビル内部へはガラス張りの扉を開けてはいる構造になっているようで、男の人たちに続くようにして中に入った。

ビル内部には管理人や受付の人がいるような場所はなく、無異質な扉と階段しかなかった。

中に入った僕は男性たちについて行く形で階段を上っていく。

4階建てのそのビルは、3階までは零細企業と呼ばれる部類の会社が入っているようだった。

そしてたどり着いたのが最上階でもある4階だった。

先頭を歩いていた男性が自然な動作で扉を開けた。

「さあ、どうぞ」

「……おじやます」

男性に招き入れられた僕は、出来るだけ不自然にならないように周りを見渡していく。

通路は人ひとりが通れる幅で、左側には何かの部屋なのだろうかドアがあり少し奥の左側のドアには“更衣室”というプレートがつけられていた。

一番奥にはやや横長の窓ガラスがあり、そこから差し込む陽の光はどことなく寂しさを感じさせる。

そんな通路を置くまで進むと意外にも開けたスペースに出た。

左側にはテレビ台の上に置かれた小さめのテレビとその前には木製のテーブルに、両サイドには緑色のソファアアが置かれ反対側には普通の会社に置かれているようなデスクがいくつか設置されている。

「どうぞ」

僕は男の人に促されるままソファーに腰掛け、それに続いて、5人も対面のソファーに腰掛けた。

(窮屈じゃないのか?)

明らかにぎゅうぎゅう詰めになっている彼女たちを見て心の中で首をかしげながらも、僕は口を開く。

「それで、要件というのは?」

僕としては、早々にこの場を立ち去りたいので男の人たちに用件を尋ねる。

「単刀直入に言おう」

それまで浮かべていた柔らかい笑みがまるで水が流れていくかのように消えていき、自然と空気までもがぴりついたものとなった。

「我がプロダクションに入らないかい?」

「……………はい?」

男性の口から出た要件に、僕は自分のきつき間違いかと思ってもう一度聞き返すことにした。

いくらなんでもありえなさすぎる。

「君をここ」チェリーレーベルプロダクション」にスカウトしているんだ」

どうやら僕の幻聴でも聞き違いでもなかったようだ。

となると、問題なのは

「社長! 何を言ってるんですか! 相手は餓鬼——「竜輝君」——す、すみません」

「……………」

社長と呼ばれた男性が口にした要件に、ソファーから立ち上がって声を荒げた金髪の男の人に対して、社長と呼ばれた男性はただ一言名前を呼んだだけだ。

それだというのに、金髪の男の人は畏縮したように謝罪の言葉を口にするソファーに腰掛けた。

「ちなみに、これは冗談ではないよ」

冗談であつたらどれだけよかつたことだろうか。

僕の中で“頷くな”という心の声がこだまし続けているのだから。

「……自分は子供ですけど」

我ながらなんという屈辱的で都合のいい言葉だと思う。

自分は子供ではないと普段から思っている僕にとっては屈辱的であるし、都合のいい言葉だと思ったからだ。

「確かに君は子供だ」

とはいえ、ここまでのはつきりと肯定されると、怒りよりも自分が惨めに思えてきてしまう。

“だがね”と社長と呼ばれた男性は前置きを置くと

「私にはそうは見えないのだよ」

と続けた。

「外見上は確かに子供だが、どこことなく大人を思わせる雰囲気がある……正直、君のような子供を見るのは初めてだ」

離している内容は普通かもしれないが、男性の話を聞いていると、妙な胸騒ぎを感じてならない。

(この男、まさか工作課のやつじゃないだろうか?)

この男性の妙に鋭いところも工作課の者ならば領ける。

僕はこの世界にいる人物で、誰が工作課の人間なのかを把握している。

だが、それでも全員というわけではない。

父さんが意地悪するような形で、僕の知らないメンバーをよこすことがあるからだ。

なので、僕は軽く鎌をかけてみることにした。

「今日は満月ですか?」

「さあ、私にはわからないが……涼子君、わかるかい?」

悩んでいる様子の社長と呼ばれた男性は、一番右端に腰掛けていた銀色の髪の女性は慌てた様子で携帯電話を取り出すとボタン操作を始めた。

どうやら月の満ち欠けについて調べているようだ。

カチカチという音が事務所内に響く中

「えっと……今日は新月のようです」

音が鳴りやむのと同時に携帯の画面から視線を外した女性が月の

満ち欠けについて答えてくれた。

「だそうだよ。それで、月がどうかしたのかい？」

「い、いえっ。その、私……月が好きなものでして」

まさか深く掘り下げられるとは思ってもいなかった僕は、慌ててとってつけた（訳でもないけど）理由を口にしながら、この男性たちは白であることを確認していた。

“今日は満月か”

それは、僕たちの同胞であることを確認する合言葉のようなもの。むろん、父さんのほうで合言葉を変えている可能性もあるが、見たところ不自然なところ（演技をしているといった様子）は見受けられないので、そのような判断をすることにした。

だとすると、この人の言っていることは本当のことかもしれない。「最近の若い子はゲームが好きで空を見る子が減っているからな。いやいや、感心感心。どうかね、今度一緒に夜空を見に行かないかい？ こう見えても私は星博士と言われていて——社長。話がずれていきますよ——つと、そうだったね。すまないすまない」

話の内容がいつからかスカウトから星座に変わっているのを、黒髪の女性が戻すように論じて話をもとの話題に戻させた。

「でも、私は別に音楽とかうまくは……」

我ながら何ともひねりのない断りかただろうか。

これでは……

「上手くない人があそこまでの確な指摘はできないと思う。もしうまくなくても音楽の素質があることを意味している……とおじさんは思うんだけど？」

と言われてしまうのも当然だ。

おまけにこの男性は自分の退路まで塞いで見せた。

ここままでされると、もはや私にはどうしようもない。

（この人、恐ろしい）

口調や表情こそ穏やかだが、自分の意見を意地でも通そうとする気迫がにじみ出るほどに溢れ出していた。

「少しだけ考えさせてください」

それが今の自分に出来た精一杯の返事だった。

「そうか。答えが決まったら教えてほしい。これがおじさんの連絡先だから」

僕のほうに一枚の名刺を手渡す男性の表情は、失望なのかそれとも別の意味を持つのかよくわからなかった。

“ 良い返事を待っている ” 最後に僕に投げかけられた言葉に、僕は静かに一礼をすることで返すとその場を逃げるように後にするのであった。

「音楽……か」

事務所からの帰り道、電車に揺られながら考えていたのは先程のやり取りのことだ。

音楽が嫌いというわけではない。

音楽ほど主役も脇役もないものはないのだ。

魔法だけではなく普通の会社などでも言えるが、実力のあるものの上に行き、主軸となっていく。

それは努力の結晶かもしれないし、はたまた生まれ持つての才能なのかもしれない。

“ 高月は常に最強でありトップでなくてはならない ”

その文言は我が家に伝わる家訓だ。

誰からも突かれぬ（どちらかというど非の打ち所がないと言った方が正しいだろう）完ぺきな存在になることで、周りから妙なちよっかいを出されぬようにするという意味らしい。

僕もまた生まれてから様々な英才教育を受けてきた。

そのおかげで、勉強だつて文章作成以外ならば全教科満点をとれる自信もあるし、魔法に関しては誰ひとり（家族は除いてだが）追従を許さない自信もある。

ただ、一番大事な何か欠けているというのが両親の言葉だ。

それが何なのかは自分で考えろということと教えてもらえなかったし、自分も自分で考える必要もないと思っていたので考えたことがなかった。

その結果がこのありさまだ。

「ほんと、馬鹿みたい」

思わず口をついて出たその言葉に、今度はため息が漏れてしまった。

結局のところ、僕は迷子なのかもしれない。

“ 人生という名の ”

憂鬱な気分のまま自宅の最寄り駅に到着し、とぼとぼと歩いているそんな時だった。

「泥棒っ！」

僕が普通の人だったら絶対に聞こえないほど小さな女性の声に、僕はその足を止めた。

それから少しして、帽子をかぶった男が慌てた様子で姿を現すところらに向かつて駆けてくる。

その手には男が持つには似つかわしくない女性物のバックが握られていることから、この男が泥棒（というよりはひったくり）犯であることが明らかだった。

——もしかししたら、知り合いの女性のバックを慌てて届けているだけかもしれないという考え自体はこの当時の自分には一切なかった。

「邪魔だ、餓鬼っ！」

（この僕が、餓鬼だと？）

男から見れば僕の外見はただの子供だ。

まさか僕が自分よりも数十倍生きている存在であることなど知る由もない。

だが、この時の僕は少し前までの調子の狂わされる一件で虫の居所が悪かった。

——否、当時の僕からすればどのタイミングでこのようなことが

起こっても、同じような行動をとっただろう。

「私は貴様のような餓鬼ではないっ。その罪、その命を持って償え」
最初は口調こそ激しかったが、後半のほうではいつもの口調で男に言いきっていた。

こちらに向かつて疾走する男をしり目に、僕は自然と周囲の状況を確認していた。

男が走っている道の横の土地一帯は何かの工事なのか『立ち入り禁止』という看板が設置されている。

その敷地内にある建築中の建物（恐らくはマンションか何かだろう）の最上部ほうでは、その材料なのか赤色の鉄状の物（恐らくは鉄筋）が置かれていた。

（これを使おう）

もうすでに僕の中で何をするのかのヴィジョンは決まっていた。

後はもう一つ必要なピースがそろうだけだ。

それも

「わけのわかんねえことを言ってるじゃねえぞっ！」

男がバックを持っていない方の手で、ズボンのポケットから取り出したサバイバルナイフのようなもので揃ってしまった。

「生命の危険状態と認識。魔法の一時使用条件をコンプリート」

つまりは、魔法を使って何がしらかの反撃ができる状態になったということだ。

無論、法律上ではという前置きが付くが。

すでに僕の視線は刃物を手にする男ではなく、別の場所へと向かっていた。

そこは建設中の建物に向けられていた。

（鉄筋を支えているのは4本のロープか）

これらすべてを斬ってしまえばどうなるかは誰でも気づくだろう。下から見えるということは、かなり高く積み上げられているかもしれない。何かにつるさされているだけかだ。

なので、支えている物さえ失くせば後は重力に従っていくのみ。

どう考えてもこの置き方はかなり危険なものなので、建設業者にも

問題はあるのは間違いない。

「では、パーティーを始めよう」

やるのは簡単。

かまいたちの要領で鉄筋を支えているロープをすべて切断しただけだ。

「ぶっ殺し——」

僕の言葉に激高した男がこちらに向かって駆けだそうとするが、時すでに遅し。

次の瞬間には爆音にも近い轟音と共に、男が立っていた場所に大量の鉄筋が散乱していた。

男がどうなったのかを確認することなく、僕はその場から逃げるように走り去る。

男がどうなったのかなど、確認するまでもないというのも理由の一つだが、あの人物の追手に僕の姿を見られでもすればいろいろと面倒なことになるという方が大きかった。

「ふう……」

誰もいない自宅に戻った僕は、靴をやや乱暴に脱ぎ捨てると、一目散に自室に駆けこんで大きく息を吐き出した。

（現場を離れて少ししか経っていないというのに、ブランクが大きかったな）

これまでならば、悪人をつぶせたことに対して喜びに心が満たされるはずが、この時は虚しさだけしか感じなかった。

（後悔しているとしても言うのか？ この僕が）

まさか、と自分自身で否定する。

これは僕が自分で選んだ道だ。

後悔などするはずがない。

『我がプロダクションに入らないかい？』

何故か頭をよぎるのはあの男性の言葉だった。

「なんだってんだ。一体」

いつから自分はここまで腑抜けになったのだろうか？

ここまで自分自身の考え……心を揺さぶる存在はいたのだろうか？

「音楽……か」

気が付けば、僕の思考は再び音楽に移っていた。

何故かはわからない。

『浩介、お前は兵器にはなれない。なぜなら、お前に人の心があるからだ。それがたとえ数ミリの大きさほどしかなくともな。それがお前が兵器にはなれない証だ』

それはいつの日にか父さんから言われた言葉だ。

確かに理に適っているとは思うが、このような形で実感したくはなかった。

いつもの僕であれば、すぐさま断っているであろうスカウト。

(仕方がない)

いつまでも苦しむくらいなら、いつそのことすぐに返事をして楽になった方がいいのは明らか。

僕は携帯を取り出すと社長と呼ばれた男性——わきわら荻原 まさひろ昌宏氏に渡された連絡先の書かれた名刺を見ながら番号を打ち込み、発信ボタンを押すと耳のほうに近づける。

『はい、荻原です』

数コールで出たのはあの時の男性だった。

そこで初めて気が付いた大きなミスがあった。

(僕、名前を言っていない)

僕もよくよく考えると、向こうから名前を教えてもらっていない。スカウトをすることに集中(僕の場合は違うけど)するあまり、お互いに大事なことを忘れてしまっていたようだ。

「先ほどそちらの事務所に伺った者ですが」

『ああ、君か』

どうやら声で僕のことがかかったようで、実際に目の前にいれば目を少しばかり大きくして、掌にもう片手の拳をポンツという音が鳴りそうな感じで合わせているような仕草をしているような感じの言葉が返ってきた。

『それで、返事を聞かせてもらえるかい？』

「はい。荻野さんのお誘いですが、喜んでお受けいたしたいと思いません」

少々固く、事務所での言動と矛盾しているような気もしたが、そのことをいったん思考から外す。

『そうかつ。受けてくれるのか！ いやー、それはよかつた。うん、本当によかつた』

ものすごく大げさに喜ぶ相手の声に、僕は一種裏があるのではないかと勘繰ってしまったが、

『今日は本当にめでたい日だ！ 本来であれば、祝杯をしたいが、今の場でできないのが残念なくらいだ！』

「あ、あはは」

まるで子供のように喜ぶ荻野さんの様子に、僕は苦笑を漏らすしかなかった。

『それじゃ、よろしく頼むよ。期待の新人くん』

「はい。こちらこそ」

僕は“失礼します”と告げて電話を切った。

こうして、僕はチェリーレーベルプロダクションに所属することになった。

……のだが

「あ、また名前言ってない」

どうやら、自己紹介は遠い先のことになりそうだ。

——それは一つの転機であった

第122話 観光

移動すること数十分。

「ここが嵐山か〜」

目的地である嵐山に到着した律が、周囲を見渡しながら感嘆の声を上げる。

「お疲れさま、浩介君」

「浩介も到着したし、まずは渡月橋から」

労いの声を掛けるムギに手を上げることと答えていると、漕が次の目的地の名前を口にした。

ちなみに渡月橋というのは、右京区の嵐山にある大根川に架かっている橋だ。

千年以上も前の橋だというのだからかなり驚きだ。

「そう言えば、唯と律は？」

姿が見えない二人のことを聞いた僕は、もう一度周囲を見渡してみる。

まさか迷子かと思いつながら見渡した僕が見たのは

「あ、見てみて！ モンキーパークだって」

「おー、おサルさんか」

反対側の歩道で何かを（十中八九、案内板だろう）見てはしゃぐ姿だった。

「よし、唯。すすめー！」

「おー！」

どうやら二人の中では古くからある橋よりも、どこにでも（？）いる動物のほうに興味が向いているようで二人は案内板が示す道へと駆けていった。

「だから、どうして京都に来てまでサルなんだよっ」

「……あの二人、完全に僕のことを忘れてるよな」

モンキーパークへかけていく4人の背中を見ながら、僕は何とも言えない寂しさを感じ

「おーい、浩介！ 早くしないとおサルさんが逃げちゃうよーっ！」

「大声で人の名前を呼ばないでっ」

前言撤回。

感じていたのはとてつもない恥ずかしさだった。

人の多い場所で名前（しかもあだ名）を呼ばれて恥ずかしくない人がいるのであればあつてみたいものだ。

僕は周囲からの何とも言えない視線から逃げるように、4人の後を追いかけるのであった。

「着いたー。てっぺんだ！」

橋を渡り、上り坂を駆け上がって行ったところにある開けた場所で、唯は街並みの様子を見渡しながら感嘆の声を上げている。

（にしてもすごいな、ここは）

周囲を見渡すとサルしかない。

いや、人の姿も見かけるが、比率ではサルのほうが上回っている。確かにモンキーパークだ。

もつとも、唯たちはサルがいることに気付いていないようだけど。それほどここからの景色に、夢中になっているのかもしれない。

「これって全部京都なんだね」

「まあ、京都じゃなかったらそれだけで驚きだけど」

今見えている街並みの一部が奈良とかになつていれば逆に驚くのは間違いないだろうし、そもそもそのようなこと自体ありえないだろう。

もつとも、二つの県の境目であれば十分にあり得るが。

「お、そうだ！ みんなで記念撮影しようぜ！」

「それいいね。撮ろう撮ろう！」

そんなどうでもいいことを考えている僕の横で、律の出した案に唯がはしゃいだ様子で頷くとすぐに律は少しだけ離れた場所で麦と一

緒に景色を見ていた滞のほうへと駆けていく。

どうやら写真を撮ることを伝えに行ったようだ。

「それじゃ、この景色をバックにして……はい」

周りを見回してそう言いながら、律はこちらに携帯電話を差し出してきた。

「何を言いたいか、なんとなくわかるけど、これはどういう意味？」

「写真よろしくね☆」

律から帰ってきた言葉は、僕の予想通りの言葉であった。

しかもごまかすためかはわからないが、僕に向けてしてきたウインクが妙に毒気を抜いてるのが腹だたしかった。

（まあ、これも男の宿命か）

“元” 女子高に通い始めて早三年。

色々な意味で慣れてきた今日この頃だった。

ちなみに、この後にムギや唯たちの分も撮影させられる羽目になったのは言うまでもない。

何故か僕の番の時は集合写真の他に、僕と唯だけで恥ずかしげなポーズでの写真も撮らされるし。

どのようなポーズなのかは……思い出したくなかった。

そんなどうでもいいようなことはともかく、サルへのエサやりができる休憩小屋でエサやりを体験した僕たちが立ち寄ったのは、お土産などが売られているお店だった。

「梓にお土産を買わないとな」

「そうだね」

今一人でいる後輩へのお土産を買うためだ。

お土産を忘れた日にはめった刺しにされそうだ。

……いろいろな意味で。

「でもあずにゃんはどんなお土産がうれしいのかな？」

首をかしげて悩む唯のその言葉に、律たちも悩み始めた。

「……」

ふと視界の隅に見えたのは猫の置物だった。

約1メートルの大きさを誇るその置物はお世辞にもかわいいと言

えない笑みを浮かべて鎮座していた。

一瞬“あずにやんだからねこ関連の物でも買えばどうか？”という考えも浮かんだがこの置物と一緒に闇に葬ることにした。

そもそもあずにやん自体が唯の付けたあだ名だし。

(まあ、本人も嫌がつてるわけじゃないし、いいか)

「それでどうする……ってあれ？」

自己完結させた僕は、周囲に唯たちの姿がないことに気が付いた。

慌てて周囲を見渡すと、意外にもすぐにみんなの姿を確認することができた。

「やっぱり京都だったらこれだよー！」

「いいや、これっしょー！」

色々なお土産を手をしている皆の姿を。

(お人形はデカすぎるし、木刀はお土産というよりは武器だし)

今更だが、個性的な人の集まりだと思ってしまう瞬間だった。

「とはいえ、どんなお土産がいいのやら……ん？」

とりあえず、唯たちは放っておいてお土産の選別をする僕の視界の隅に、あるものが目に留まった。

「ねえ皆」

「なにになに？」

「何か見つけたのか？」

僕の声に、全員が手にしていた物を置いてこちらによって来た。

「これなんてどうだ？」

「なるほど。これは私たちにぴったりだなっ」

めぼしいものを手にしながら聞いてみたところ、皆の反応はいい感じのものだった。

「それじゃ、私はこれ」

「私はこれにしようかな」

「じゃあ、あずにやんはこれだね！」

次々と皆がお目当ての物を手にしていく中、最後の最後で一つだけ問題が発生した。

「そういえば、浩介君のがないけど」

「「あ……」」

ムギの一言に、皆が固まる。

確かに、六人目のことは考えていなかった。

とはいえ、別に僕はそういうのは気にしないので別に構わない訳だが。

「えつと……」

「ど、どうしよう。このままだと浩君だけが仲間外れになっちゃうよっ」

大丈夫だと言おうとしたが、唯の慌てように僕はその言葉を飲み込んだ。

変に気まずい雰囲気になるのがいやだったというのものもあるが、一番の理由は唯の悲しげな顔を見たくはなかったからなのかもしれない。なので、僕は慌ててそれを確かめる。

「あ……」

その時、僕はそれを見つけたのだ。

それならば、仲間外れのようににはならないと思えるものを。

「じゃあ、僕はこれで」

「おお！ なんだかいい感じになったなっ」

「よかった〜」

本当によかったのはこちらのほうなのだが、唯の安心した表情を見ているとそんなことも些末なことに思えた。

「それじゃ、梓へのお土産はこれで決まりっつと」

こうして無事に、梓へのお土産を購入することができた僕たちは、一旦お土産屋を後にした。

「それにしても、どうして今回はお金がいっぱいあるんだ？」

「きつとお菓子とかをかうためだよっ」

今回の修学旅行で僕たち学生が持つことを許された金額はかなりの高額だ。

最も高額とはいっても万の値まはいかない。

そんな僕の疑問に自信満々に答える唯には、申し訳ないが、それはないと思う。

「いや、家族とかへのお土産のためだと思っぞ」
「はっ!？」

律の言葉に目を見開かせて固まった唯の姿は、完全にそのことを忘れていたことを物語っていた。

……かくいう僕もだが

「よしっ それじゃ家族へのお土産を買っぞー」

「おー!？」

律の呼びかけで、再びお土産やへと入っていく律と唯にムギの三人を見ながら、僕と滯は顔を見合わせると苦笑いを浮かべ合う。

(っ?!)

その時、どこからか視線を感じたような気配をした。

しかもそれには殺気のようなものが含まれている。

周囲をさりげなく見渡すが、不審な人影などは見当たらない。

(気配も消えているし、大丈夫か)

疑問を抱きつつも、僕はお土産屋へと向かう。

向かったのだが。

「どうするか……」

僕は“食べ物コーナー”の前で首を傾げ続けた。

僕にとつての家族というのは、祖国にいる両親のことになる。

つまり、母国に何を送るかということにもなるわけなのだ。

母国に食べ物を送ってもいいのだろうかという疑問が渦巻いている僕の視界には、一本の木刀があった。

(素材的には全くあてにもできないものだけど、物質強化をすれば欠点は補えるか)

修学旅行のお土産で武器を送るものなど普通はいない。

とはいえ、お菓子などのおいしい食べ物も捨てがたいわけで悩んでいたのだ。

両方を送るという手もあるが、なんだかそれはそれで美しくないよな気がしたので却下していた。

(だあっ。もうこうなったら適当に決めてやる!)

とはいえ、考えることに面倒くさくなってしまった僕は、適当にお

土産を選ぶことにするのであった。

「……………」

一足早くお土産を買い終えた僕は、お土産屋の前の広場の手すりの前で山やビルなどの建物の景色を眺めていた。

ふと、自分の手にあるお土産が入った紙袋に視線を落とした僕は、何とも言えない気持ちを抱く。

H & P や社長の分のお土産（お菓子セット）はちやんと忘れずに買った。

無論故郷にいる家族へのお土産も忘れてはいない。

だが、そのお土産の内容が何とも言えない気持ちを抱かせる原因となっているのだ。

「あ、浩君！」

「……………唯か」

そんな僕の心境とは真逆のヒマワリのように元気な声を上げる唯に、いつも変わらないなと思いつながら相槌を打つ。

「むう、なんだか面倒くさい人が来たみたいな反応された」

上の空に返事をしてしまったからか、唯がフグのように頬を膨らませる。

「そんなことないよ。ちょっと考え事をしてただけ」

あまり彼女の機嫌を損ねるのはいろいろとまずいと思ったため、すぐに弁解しようとする。

「考え事？」

「あ……………」

しまったと思った時には時すでに遅く、唯は心配そうな表情で僕の顔を見ていた。

「何か困っていることがあるんだったら、この解決屋平沢唯がドドンと

解決して進ぜよう！」

「ものすごく不安になる称号だな。しかもいろいろと変なの混ざってるし」

きつとどこかの番組かドラマでもまねているのだろうと思っっていると唯が不機嫌そうに頬を膨らませた。

「浩君、ごまかそうとしてる」

「別にそんなつもりは……ただ、何となく戸惑っているだけ」

離していいものだろうかと思っただが、変に隠し事していると疑われるのも嫌なので、正直に話すことにした。

「何を？」

「僕はいったい誰なのかってね」

唯の顔を見ていると、言いたくはなかった内容の言葉がどんどんいえるようになるのは、きつと彼女の才能なのかもしれない。

もしかしたら彼女だからかもしれないけど。

「母国では、死神とかそういう感じで通っていて、僕もまたそれにふさわしい考え方をしていた。そしてそれが普通のことだっと思っていました」

「……」

僕の言葉に、唯は静かに耳を傾けていた。

聞き流すのではなく、ちゃんと受け止めようとしているのは、彼女の顔を見ればすぐにわかった。

「でも、ここにきてからそれは段々と薄れていく。それがとてつもなく怖いんだ。このままいてもいいのか、もしくはまた元に戻るべきなのかって」

それは僕が漏らした初めての心のうちだったのかもしれない。

徐々に薄れていく戦場での感覚。

軽音部に入部したときは、どこに何人の人がいるのかは感覚的ではあるが手に取るように把握することができた。

敵に……ましてや魔法の魔の字もない少女に背後をとられたことに気付かないこともなかった。

でも、今はどうだろうか？

集中をすれば、人の気配を把握することはできる。
それでも前よりも何倍も集中をする必要がある。
しかも最近では気を抜けばだれかに背後をとられていたことだつてあるほどだ。

どちらがいいのかなんて唯にはわかるわけがない。
それが価値観の違いなのだから。
でも一つだけ言えるのであれば

「まあ、どちらにしろ、惚れた女を守るくらいがちょうどいいかなつていう結論に今なつたわけだけどね」

「浩君」

僕の言葉に唯の頬に赤みが増し、僕を見る目はどこかはかなく、そして宝石のような美しさを持つていた。

その顔を見ている自分もつられるように顔が暑くなるのを感じて慌てて唯から視線を逸らした。

「ねえ、浩君」

「なに？」

そんな僕に賭けられた声にも、僕は顔をそむけたまま応じる。

「その惚れた女って誰なのかな？」

「何を言ってる……」

唯の不自然な言葉に首をかしげながら唯のほうを見ると、その表情に僕は言葉を詰まらせた。

表情は笑顔だった。

だが、目が完全に笑っていない。

悪くすれば殺気まで感じるような雰囲気まで醸し出していた。

これは返す言葉にはより一層気を付けなければならぬ……さもなれば命がないと。

そんな一種の恐怖を感じながら、僕はゆっくりと口を開く。

「唯以外に誰がいると言うんだ？」

「滯ちゃんとか」

まったく疑問を感じさせることなく断言した唯に、僕は目を瞬かせ

これが狐につままれたような感じとでもいうのだろうか？

「どうしてそこで漣の名前が出る？」

「だって浩君、漣ちゃんと楽しそうに笑い合ってたじゃんっ」

(あの視線は唯のだったのか)

一瞬とはいえ、背筋が凍るほどの殺気を放てる彼女が恐ろしく感じた。

(こりゃ、嫉妬が理由で刺されそうな気がする)

そうならないことを本当に願いたい。

とはいえ、今の問題はどのようにして唯に説明をするかだ。

彼女にちゃんと理解してもらえるように説明しなければ、堂々巡りになるのは必至。

今後もよい関係が続けていくためには、避けなければいけないのは明らかだ。

男としてちゃんとしなければいけない部分だというのもあるが。

「僕がこれまで、唯に対して態度を変えたことがあったか？」

「……」

僕のその疑問に、唯は何も答えない。

だが、頷かないということは工程だと思っても大丈夫だろう。

もし子これ頷かれたらどうしようもなくなってしまうわけだが、何とか話のきっかけはつかめた。

「僕は自分で言うのもあれだけど、不器用な方だ。二人同時に好きになるなんて芸当はできない。僕が心の底から好きな人物は、唯だけだ。それは時間が経とうとも変わらない」

それは説得ではなく誓い。

唯へのでもあるし自分へのでもある。

何があるうとも、僕は彼女を好きでいる。

気障っぽく言えば、愛し続けることへの誓いの言葉。

「それじゃ、漣ちゃんのは？」

「彼女は仲間……同じ音楽の道を進んでいる同士のようなもの。それ以上にもそれ以下にもなることはない」

そもそも彼女は人見知りが激しいところがある。

そんな彼女と僕がそのような間柄になるところは全く想像もできなかった。

「……………」

そんな僕の言葉を聞いた唯はただ無言で僕のほうを見る。

それはまるで嘘かどうかを見極めているようで、僕もそれに応じるように真正面から見つめ返す。

「それじゃ……………」

長い沈黙ののちに、唯が静かに口を開く。

「私にキスをしてっ」

「……………」

唯の言葉は僕の予想を大幅に上回る内容だった。

(この間まで子供っぽいって思ってたんだけど)

普段の子供のような天真爛漫な笑みを浮かべていた時の姿はなりを潜め、大人の女性が纏うようなオーラをまとっている唯の姿に、僕は魅了されたように何も言えなくなってしまった。

いや、もしかしたら魅了されているのかもしれない。

「……………」

昔からキスは誓いの意味があるという言い伝えがある。

どういう理屈かは知らないが、その行為には絶大な効果と意味合いがあるというのは間違いないだろう。

彼女が欲しがっているのは僕の言葉の誓いの形。

だからこそ、彼女はキスを選択した。

僕が、一度立てた誓いは必ず守り抜くという性格を知っているから物なのかもしれない。

(ありがとう、唯)

心の中でお礼を言いながら、僕は唯の両肩に手を置く。

そしてそのまま彼女に顔を近づける。

公衆の面前で口づけを交わすというのは、恥ずかしいことこの上ない。

だが、今後もう一回するのであれば予行演習とでも思っていればいだろう。

唯が静かに目を閉じるのに倣い、僕も静かに目を閉じた。

「ん……」

やがて唇に柔らかい感触が伝わってきた。

口づけをしていたのはほんの数秒なのかもしれないし、もしかしたらそれ以上かもしれない。

相も変わらず、キスというのは時間の感覚を狂わせる。

余韻を感じながら、ゆつくりと彼女から離れていく。

目を開けると、先ほどとは何も変わらない景色が広がっていた。

「浩君」

目を開けた唯の頬は、ほんのりと赤くなっておりそれがまた色気を感じさせる。

それはもう、再びキスをしたくなるくらいに。

「おおく、情熱的どすなー」

「ううう……」

とはいえ、友人に見られながらするというのはかなりハードルが高い。

いや、そもそも人に見られながらするのが趣味ではないのが一番の理由だが。

「いつから見えた?」

「唯が〃私にキスして〃っていうところかな」

何かを言いたげな笑みを浮かべながら答える律に、思わず〃それはほとんど最初じゃないか〃と突っ込みたくなったが何とかこらえることができた。

どうやら完全にキスをしているところを見られたようで、濤は顔を真っ赤に私立の後ろに隠れている。

隠れてはいるが、ちらちらとこちらのほうを見てはまた隠れるという行動を繰り返していた。

ムギは、目を輝かせていた。

「熱々どすな、唯隊員」

「えへへー。浩君は私の恋人だもん♪」

律の冷やかしにも、唯は直球で返す。

それもまた一つの幸せの形……

「なわけあるかつ！ 律はにやにやしながらかつちを見るなつ。ムギも目を輝かせない！ 濤はいい加減草むらから出ろっ！」

自業自得の形になってしまった混沌を何とかするべく、僕は奔走することになった。

結局、全員がその場を離れられるようになったのは、それから数十分ほど経った後だった。

外伝3　そしてそれは宿題となる　【U A通算10万達成記念】

翌日、学校が休みであることを前もって伝えておいたため、挨拶をするべくお昼過ぎに例のプロダクションを訪れると、すぐに男性に引っ張られるように置くまで移動させられた。

「それでは、紹介しよう。この子が今日から我がプロダクションのメンバーになった。待望の新人だ」

すでにここのメンバーの人は全員集まっていたようで、僕の紹介が行われた。

「それじゃ、順番に紹介していこうか。まずは……」

社長は次々に事務所に所属している人物の名前を口にしていく。

ここ、〃チエリーレーベルプロダクション〃に所属しているのは主に二つのグループである。

最初は篠崎しのさき 葵あおいら8人の女性で結成されたアイドルグループ『pink y girls』

そして

「私は、中山翠。よろしく」

あの時、弦楽器で演奏していた黒髪の女性……中山さんが名前を口にした。

「わ、私は荻原涼子です。よろしくお願いします」

中山さんの隣で同じ弦楽器を演奏していた銀色の髪の女性……荻原さんが名前を告げるが、視線をあちらこちらに向けて落ち着きのない様子なのが少し気になった。

「僕は太田保と言います。よろしくお願いします」

あの時ピアノのような鍵盤楽器を弾いていた男性……太田さんは静かに頭を下げる。

何となく自信なげな感じで、頼りなく見えるがさすがに初対面に等しい状況で決めつけるのは失礼だろう。

「俺は田中竜輝だ。せいぜい足を引っ張るなよ」

あの時僕にくっついてかかっていた金髪の男……田中さんは皮肉交じりに吐き捨てる、僕のほうから視線を外す。

この4人によって結成されたバンドグループ『prominence』である。

昨日、軽く調べてみたがこの二つのグループ名は一切ヒットもしなかった。

おそらくは、全く売れていないと考えた方が正しいだろう。

「私はこの社長の、荻原 昌宏だ。よろしく」

そして社長と呼ばれていた男性が最後に名前を告げる。

苗字が銀色の髪の女性と同じだが、もしかしたら親子かただの偶然かと結論付けることにした。

「そして、彼が……」

「社長、どうしたんですか？」

僕のことを紹介しようとした社長が、こちらを見たまま固まる。

「そう言えば、私としたことが名前を聞くのを忘れていたようだ」

「……高月浩介です。若輩者ですがよろしくお願いします」

そう言えば名前を言うのを忘れていたなと思いつながら自己紹介をした僕は軽くお辞儀をする。

中身はともかく、外見は小学生なのだから少しばかり固すぎたと思っただが、これ以上砕けた言い方が思いつかなかったのでこれはこれでいいのかなと割り切ることにした。

「ちよつと硬すぎるような気もするが……まあ、いいか」

社長も首をかしげる始末だが気にしないことにした。

「では、皆グラスを持って」

「……」

今気づいたがテレビ台のある側のテーブルの上には、軽くつまめる程度の物ではあるが食べ物と僕を含めた人数分の紙コップ、そしてお茶やジュースなどが入ったペットボトルが置いてあった。

グラスではないがわざわざ指摘するのも面倒だったので、僕は周りに做うように無言で紙コップを手にする。

「つと、皆飲み物を入れてなかったね」

という社長の言葉で、各々が苦笑しながらペットボトルを手にした社長のほうへと歩み寄る。

(この和やかな雰囲気、アットホームというやつか)

社長が飲み物の種類を聞いては、指定された飲み物を注いでいく社長を見ながらそんなことを考えていると、社長はこちらのほうへと顔を向けてくる。

「最後で悪いけど、ジュースがいいかね？」

「……いえ、お茶でお願いします」

なんだか子どものように見られている気がしてむっとしたが、よく考えれば外見が子供なので致し方ないなと思いつつながら、お茶を社長に注いでもらう。

「それでは、乾杯っ」

社長の温度に合わせてその場にいた全員も“乾杯”と口にする、各々が飲み物を口にする。

これが僕の歓迎会(たぶん)だということは今更だが理解できた僕は、静かにお茶を飲み干す。

別に歓迎会自体が嫌いなわけではない。

いや、嬉しくないという人はよほどいないはずだ。

ただ、

「こんな小っちゃくてかわいい子が、新人さんかあ」

「ねえねえ、年はいくつなの？」

質問攻めをされてうれしいと思う人がどのくらいいるのかは別の話だが。

(小さい言うな)

父さんから外見を小学生程度にまで去れているのだからそう見え普通なのだが、それでも言われると悲しくなってしまうのだ。

我ながらひねくれているなど思いながらどうしたものかと考えを巡らしていると、

「これこれ、あまり新人を困らせるものではないぞ」

「す、すみません。久しぶりの新人さんで、つい」

苦笑しながら注意する社長に、短めに切られた青髪の女性……篠崎

さんは下をちよこつと出して片目を閉じながら茶目っ気に応えると僕から数歩離れていった。

「さあさあ、食べて食べて。今日は無礼講だ！」

「社長太っ腹です！」

なんだか僕を取り残して騒ぎ始める事務所の人たちを見てみると、寂しさを感じてしまう。

それは僕が未熟だからなのか、それとも……

色々と課題は山積みだが今はこのパーティーを楽しんでおくべきだと思った僕は、机の上に置かれた駄菓子に手を付けるのであった。

歓迎会のようなものが無事(?)にお開きとなり、片付け終えたころには時計の短針が“4”を指し示していた。

『pink y girls』のメンバーは全員ダンスレッスンのよう
でレッスン会場のほうに行っているため、今事務所にいるのは『p r
o m i n e n c e』のメンバーと社長と僕だけになった。

「さて、それでは彼は『p r o m i n e n c e』の一員として活動して
もらうわけだが……」

そして今行われているのは、今後の活動方針に対する会議だ。

「高月君。君は何が弾けるのかな？」

社長の疑問に思っているように、まず決めなければいけないのは僕
が何の楽器を演奏するかだ。

「いや、その前にバンドとかそういうのを理解してねえだろ」

「あいにく、理解できています。ギターとベース、ドラムにキーボード
によって構成されているんですよね？」

社長の方に確認の意図を込めて視線を向けると、社長は静かに頷い
て応えた。

「それで、お前は何か弾けるんだ？」

「僕は……」

僕の出した答えが正しかったのが氣にくわなかったようで、田中さんは不機嫌な顔を隠すことなく問いかけるが、答えに詰まってしまった。

それは別に何も弾けないというわけではない。

ただ単純に何が弾けると言えば良いのかに迷ってしまっただけなのだ。

物心がついたときから始まった、魔法に関する英才教育はさまざまに分野にわたり、その一つに音楽があったのだ。

とはいえ、習ったのはピアノの弾き方と歌ぐらいだが、その分野に見事にはまった僕は、音楽の分野を極めた。

その結果が、どのような歌でもうまく歌え、どのような楽器もうまく弾けるようになった。

尤も、それを知った父さんからは、呆れたような表情でため息をつかれたが。

それはともかくとして、当時はそれで構わなかったが、いざそれを利用しようとなると一つに絞るのは難しい。

(早く決めないと)

いつまで経っても決まらないことに、徐々に焦燥感を感じた僕は

「ギターですっ」

と、口にした。

「ギターか」

「中々にすごいチョイスだね」

周りの感心しているのか、それとも意外すぎて驚いているのかは定かではないが、各々が真剣な表情を浮かべながら口を開いた。

「よし、それじゃ軽く引いて見せてくれないかね。ギターは中山君のを使うといい」

「僕の腕を知りたい……ということですよね？」

僕の言葉に特に否定はしないよと応えた社長は、

「それでは中山君」

と、中山さんに声をかける。

それに「あいよ」と返事をした中山さんは、壁に立てかけられていた大きめのバック……ギターケースを手にとると、中からギターを取り出した。

まるで新品のようなそれは、とても大事に扱っているのが見て取れた。

「本当はアンプにつなぎたいところだけど、時間の都合で無理だからこれで勘弁な」

中山さんの言葉にさん達が社長に視線を向け、社長はそれから逃れるように何も無い壁に視線を逸らす。

その一連の行動が、何となくではあるものの時間以外の理由があると思わせたが、それは僕に向けてギターを差し出してききた中山さんによって頭の片隅へと追いやる。

割れ物を扱うように中山さんからギターを受け取った僕は、ひもを肩にかけてギターを構える。

(何を弾こう)

問題はその一言に尽きる。

ここは簡単なものを弾いておくのが無難なような気がするが、それだどこににいる人たちになめられる可能性もある。姿形が子供そのものなのだ。

せめて技術の分野ではなめられないようにしたい。

それが僕の気持ちだ。

だからと言って、高い技術力を披露するのも気が引ける。

そんな複雑な思いで悩んだ結果

(中級レベルの演奏でやるか)

一応ではあるものの引くコードは決まった。

(人前で演奏するなんて初めて)

これまで一人の時にしか演奏をしていないため、どのような反応を見せるのかは予想できない。

もしもうまいと思っているのが僕の妄想であれば赤っ恥は避けられないだろう。

その不安が重圧なって僕にのしかかる。

でも、それは僕にとっては何となく心地よくも思えた。

一度深呼吸をすれば、のしかかっていた重圧が軽くなっていた。

「いきます」

宣言ののちに始めたのは3つのコードを組み合わせた簡単な物だった。

やや難しめのコードを、素早く弾くことで難易度を引き上げる。

これならば、メンバーとなる人達が馬鹿にすることはないだろう。

(ふう……)

そこそこ良い感じに弾けた。

それが僕の最初の感想だった。

〴〵井の中の蛙大蛇を知らす〴〵という言葉もある。

自分の感想が自分よりも上の実力の人からすれば、大きく変わってくるはずだ。

「どうかね？」

暫しの沈黙を破った社長の言葉に最初に口を開いたのは荻原さんだった。

「私はとても良いと思います」

「僕も」

「あたしもいいと思います」

次々に頷いていく中、残ったのは田中さんだけとなった。

その田中さんはため息にも似た感じて息を吐き出すと

「俺もだ」

と

不機嫌な感じで頷くのであった。

「よし、では今日から君はProminenceのリードギターだ」

「……………わかりました」

社長の采配に、驚きつつも返事をした。

(まさか、小学生の子供にリードをやらせるとは)

自分で子供だと思ってしまうのはいいのかとも思うが、それはこの際頭の片隅に追いやってもいいだろう。

それだけ、このリードギターというパートはすごい物だったのだ。

「さて、彼のパートが決まったところで今この活動について何だが。まずは中山君、現状について説明してくれるかい？」

社長の言葉を受けて、中山さんが説明を始めた。

「現時点での演奏のオフア―はなし。コンテストに応募をするも、すべて予選審査で落選という状況です」

中山さんの口から告げられたのは、予想よりも遙かに厳しい状況だった。

(スキル不足かそれとも……)

いずれにせよ、この状況を変えることがまず先決だろう。

「あの、一つ提案があるんですけど」

「お、早速意見を出すか。やはり君は才能があるね」

それはいったいどのような才能かとツツコミたい気持ちを抑えつつ、僕は提案を口にする。

「バンド名とメンバーの改名はどうでしょうか？」

「は？」

「何を言ってるんだ？」といわんばかりの視線でこちらを見る田中さんを見無視しつつ、僕は言葉が続ける。

「音楽系統は毎日何組ものバンドが誕生しています。そんな中で輝くにはインパクトが必要です」

「つまり、インパクトが出るようにバンド名を変えろということかね」

僕の領きに、「でも」と口にしながら荻原さんが意見を言い始めた。

「私たちの名前まで変える必要はないと思います」

その荻原さんの言葉に他の人達も頷く。

「本名ではなく、完全な偽名で、なおかつ正体がわからないという感じにするだけで関心を持って貰いやすくなると私は思いますけど」

音楽の世界は非常に過酷な物だ。

日々数多ものバンドが結成されている。

今日まで有名だったバンドが明日には新たにできたバンドによって埋もれてしまうことだって日常茶飯事だ。

そんな世界に足を踏み入れるということは、それ相応の対策を講じ

なければならぬ。

それがバンド名の変更だった。

「……俺は賛成だ」

突如として口を開いたのは田中さんだった。

「田中さん？」

「一体どういう風の吹き回しですか？」

他の人達が驚いているほど、田中さんの賛成票は意外だったのだろう。

かくいう僕も、まさか味方になってくれるとは思ってもいなかった
ので、内心かなり驚いていた。

厳密には感動するほどだが。

「別に深い意味はねえさ。ただ、最近マンネリ化していたのは事実だし、ここいらでイメチェンしてみるのも良いと思っただけだ。ま、このガキと同じ意見なのは癪だがな」

「……」

先ほどまでの感動はなんだったのだろうか。

ものすごく裏切られたような気持ちにもなる。

(やはりこいつは僕の敵だ)

僕は再度田中さんを敵認定した。

ちなみに、この田中さんの言葉は彼なりのからかうという意図があったのだが、そのことに僕が気づくことになるのはかなり後のことであつた。

閑話休題。

「それじゃ、名前を変えるところ、案は考えているのかね？」

「……」

当然ともいえる社長からの問いかけに、僕は何も言えなかつた。

別に自分の案を口にすることが怖いというわけではない。

確かにバンドの名前というのは、ある意味グループの根幹部分でもある。

それをいじくるのはかなり神経を使う。

だが、今僕が何も言えないのはそれが理由ではない。

「……まさかとは思うが、案を考えてないなんてことはないよな？」
「……………」

そのまさかだ。

それゆえに何も言うことができなかった。

だが、僕の沈黙が答えとなってしまうたようで、田中さんは一つ深いため息をつく。

「……………すみません」

「いや、謝らなくてもいい……………っていうより、相手は子供なんだから少しは加減しなさいよ」

周囲からの何とも言い難い視線に、身を縮まらせながら謝るとはつとした表情で慌てて両手を振る中山さんは田中さんのほうに顔を向けると、表情を引き締めながら田中さんに注意した。

言われた本人はそっぽを向いて頬を搔いていたが。

(なんなんだろう、この虚しさは)

自分では子供ではないと思っているのに、子供である立場を利用してその場をごまかそうとしている自分に、何とも言えない虚しさを感じた。

そのような虚しさを感じていると、今までの雰囲気を取り替えるように社長が手をたたく。

「それじゃ、こうしようかな」

僕たちの視線が集まる中、そう前置きを置いたうえで、社長は言葉を続ける。

「浩介君、君に〃宿題〃だ。新しいグループ名を次にここに来るまでに考えておくこと」

(〃宿題〃とはまた絶妙な言い回しをしてくれる)

「そうだね……………次は楽曲とか方針とかを決める必要があるから明日とこういうことにしよう」

「わかりました」

いい笑顔を浮かべながらさらりと悪魔めいたことを言ってくれろと思いつつ、僕はそれお受け入れた。

こうして、僕はバンド名を考えるとという宿題を課されるのであつ

た。

第123話 迷走

「それじゃ、そろそろ帰るか」

色々と騒動もあったが自由行動の時間は、滯の言葉によって終わりを告げようとしていた。

なぜならば、リミットである夕食の時間が迫ってきていたからだ。

青空だった空もオレンジ色の光に染められているので、今の時間帯が夕方であるのは時計を見なくても明らかだった。

「帰りは電車にしましょう」

「そうだな」

ムギの提案に反対する者はなく、僕たちは律の案内の元駅に向かって歩き出した。

色々とあわただしかったが、それでいい思い出になったと余韻に浸りながら旅館に戻る。

——はずだった

「あれ？」

それはふいに立ち止った律の一言から始まった。

「まさか迷ったなんて言わないよな？」

「……迷ってない」

僕の問いかけに、僕たちに背を向けたまま律が応えるが、その様子だけで答えているのは明らかだった。

何となくおかしいとは思っていた。

律について行くとだんだん住宅街へと街並みは変わっていくのだから。

「あははっ、もう駄目だよ」

そんな中、突然聞こえてきた陽気な声に、後ろにいたであろう唯のほうへと視線を向ける

「そんなに舐めたくすぐつたいよ」

飼い犬であろうブルドック（たぶん）に頬を舐められている唯の姿

があった。

「なんだかこっちはものすごく平和だよな」

色々な意味で唯は平常運転だった。

「律」

「だから迷ってなんかいないぞ」

ふと律のほうを見た僕が声を掛けると、律がやかましそうな声色で返事が返ってきた。

「いや、そういうことを言いたいわけじゃないんだけど」

僕はそう言いながら、人差し指を律の後ろのほうに向ける。

その先にいたのは買い物帰りだろうか、手に白いビニール袋を持ちながら歩く女性だった。

「ここは住宅街。」

買い物帰りの主婦がいてもおかしくはない。

「あの人に駅までの場所を聞いてみたらどうだ？」

「……迷ってないからな」

いまだに迷っているか否かにこだわる律に“はいはい”と適当に相づちを打ちながら行くように促す。

「あ、あの！ すんまへんっ」

「な、なんで京都弁？」

「まだ続けてたのか、京都弁ゲーム」

何故か京都弁(?)で話しかける律に首をかしげる僕に続いて、やれやれと言わんばかりの声を上げる漣。

まるで異国の地に来たようにたどたどしく道を尋ねる律に、買い物帰りの女性は困惑した様子でジェスチャーを交えながら駅までの道を律に教えるとそのまま去っていった。

(絶対に変人に思われてるよな、あれ)

「~~~~つ、通じたよ〜！」

「律ちゃんおめでどう！」

そんな僕の不安など知る由もなく、抱き合う唯と律の二人のもとに、漣が歩み寄る。

「それで、場所は分かったのか？」

「もちろんさ。さあついてこーい！」

自信たっぷりに答えた律の導きの元、僕たちは今度こそ駅に向かって歩いていく。

「……迷った」

「……今更認めなくてもいい」

先ほどよりも小さな声で迷ったことを認める率に突っ込む僕の声にはどこことなくため息が混じっていた。

それもそのはずだ。

律についていくこと数分、たどり着いたのは一軒家の前だったのだ。

しかも駅のえの字も感じられない雰囲気の住宅街。

これで迷っていないなかったら、確実に故郷に連れて行っていることだろう。

……悪い意味で。

それはともかくとして、問題はここからどうするかだ。

(そういえば、今朝迷った時の対処法を言われていたっけ)

あの時、朝の一件があつて、よく聞いていなかった自分をぶん殴りたい。

「あ、そうだ！」

そんな中、唯が何かを思い出したのであろうまるで彼女から光が周囲を照らしているのではないかと思うほどに、笑みを輝かせる。

そんな彼女がおもむろに取り出したのは、何の変哲もない携帯電話であった。

「おぉー」

どうやら山中先生の携帯に連絡して助けを求めるようだ。

(というより、それを思いつかない僕って……しかも携帯忘れてるし)

ふと気になってバッグの中やらポケットの中を確認してみると、案の定携帯を忘れていた。

携帯などなくても魔法などを使えば簡単に連絡ができるため、持ち

運ぶ癖が未だについていないのだ。

どちらにせよ思いついていても、唯の力を借りることになっていたみたいだ。

それはともかくとして、携帯を取り出した唯はそれを耳に当てる。相手は引率者である山中先生だ。

「あ——あ」

しばらくの沈黙ののち、唯の表情が和らぐのを見て、山中先生が電話に出たんだと悟った。

きつとこの後、一言二言注意を受けることになるんだろうなと思いつながら、電話が終わるまで待つことにする。

「あ、もしもしあずにゃん？ 私たちね今迷子に——」

「梓に電話をしてどうする!!」

予想外の名前に前にずっこけながら唯にツツコミを入れた。

「梓は魔法少女とかじゃないんだから」

「あ、そうか」

濡と同時にツツコミを入れたことが功を奏したのか、唯はなるほどといった表情で頷くとそのまま電話を切った。

(なんとなく、梓が呆れているような気がする)

きつと電話口では半目になって呆れたような表情を浮かべていたに違いない。

(まあ、梓にはあとでフォローを入れとくとして、問題は今この場をどうやって乗り切るか……か)

結局のところ、どうやって駅まで向かうのかという話になってしまふ。

「唯ー、濡ー!」

「あ、和ちゃん!」

詰んでしまった僕たちに声をかけてきたのは、真鍋さんだった。まさに救世主のように頼もしく見えた。

それは他のみんなも同じだったようで、濡たちの表情に希望のようなものが満ちていた。

律に至っては感極まって真鍋さんたちのもとに駆け出すほどだ。

だが、この時の僕はあることを失念していた。

このような入り組んだような場所の住宅街に、真鍋さんたちがいるのは不自然だということに。

「助かつ——」

「駅まではどうやって行けばいいのかしら？」

真鍋さんの問いかけに返ってきたのは、律がヘッドスライディングする音だった。

「そつちも迷ったんだ」

「ということとは、高月君たちも？」

律の行動ですべてを悟ったのだろう、真鍋さんは困ったような表情を浮かべながら聞き返した。

「こうして一緒になったのも何かの縁。一緒に駅まで行かないか？」

というより、行つてください」

「そうね……そのほうがいいよね」

このままだと半永久的に迷子になるという嫌な予感がした僕の懇願が通じたのか、苦笑しながらも聞き入れてくれた。

「ということだから、いい加減起きろ」

「……なんだか、扱いがひどいぞー」

力尽きたといわんばかりに倒れ伏している律に声をかけた僕は、抗議の声を上げる律をしり目に時計を確認する。

（もう時間がないな）

切羽詰まっているというわけではないが、あまり時間をかけることができない状態の時間になっていた。

「和ちゃんについていけば安心だね」

「……ですね」

いつの間に来ていたのであろう、唯がハンカチで律のスカートや顔の汚れた場所をぬぐっていた。

見ると真鍋さんたちは濡とムギを交えて、地図をそれぞれが手を伸ばして指示しながら駅までの道を話し合っているところだった。

確かにこの人たちに任せていれば大丈夫かもしれない。

「ところでさ、浩介」

「何？」

そんな光景を見てみると、律から声をかけられる。

その口調はとても真剣そうだった。

「浩介の力なら、これ一瞬で解決できるんじゃないのか？」

「そうだね！ 浩介は魔法使いだもんねっ」

魔法のことをぼかして聞いてくる律と、まるで太陽のように明るい笑みを浮かべながら声をすぼめる唯。

確かに二人の言うとおりで。

こういう時こそ魔法の出番だと思うのが普通だろう。

この状況でおあつらえ向きなのは転移魔法だろう。

A点とB点の二か所を一直線に結んだ空間（亜空間）を移動することによって可能となる魔法で、僕たち魔法使いが習得する魔法の一つだ。

ちなみにこの転移魔法も、人によってさまざままでA点とB点の空間を強引にくっつけて（亜空間を使わないで）移動するものもある。

亜空間は一瞬で形成でき、それほどのリスクがないのが特徴だが、非常に不安定で出口である軸がぶれやすいデメリットを持っている。

軸がぶれる要因は様々で、対象地点が複雑に移動していたり亜空間の形成・移動時に外部から何らかの干渉を受けたりなど等々があげられる。

ちなみに、“VS”を用いた転送システムによる移動は、このリスクが軽減されているだけで、リスクがなくなったわけではない。

何せ同じ亜空間形成型なのだから致し方がない面もあるが。

閑話休題。

「確かにそうだけど、この状況でそれを行うことはできない」

「え？ なんでだよ」

納得できないといった様子で首をかしげる率に、僕は軽くずっこけそうになった。

「あのね……いったい何のためにあの宣誓書を書いたと思ってるんだ？」

「それは、浩介を受け入れるという証明のためだろ？」

「浩君もそう言ってたよ」

僕の問いかけに対する二人の答えに、僕は昨年のことを思いだす。

(確かにそんなことを言っていたかも)

自分ではちやんと言っていたつもりだが、聞きようによつては本来の目的が分からないかもしれない。

「すまない。少々説明が足りなかったみたいだ」

「どういうこと？ 浩君」

僕が謝ったことに不安を感じたのか、唯が心配そうな表情浮かべる。

「僕たちの世界では魔法文化のない場所で、魔法が使えない人たちに故郷や魔法のことを知られるのが固く禁じられているんだ」

原因は魔法文化のない世界で受けた“魔女狩り”にある。

魔法のことを恐れた者たちが魔法使いを化け物と決めつけ、魔法使いたちを根絶やしにするため(理由についてはいろいろと諸説がある)に行われた惨い事件。

これによつて魔法が使えない人たちへの怒りは計り知れぬほどに膨れ上がったのだ。

一時期は魔法が使えない者たちを根絶やしにする“人魔戦争”なるものまで計画されていたらしい。

もつとも、それはさすがにまずいと判断したのか、魔法連盟によつて阻止されたので起こってはいないが。

そのような経緯もあつて、何十年も時間が経った現在でさえ、魔法が使えない人間に対する風当たり(差別ともいうが)は強く、魔法が使えない人間(厳密には魔界に住んでいない人だが)と魔法が使えるものが、同じ経緯で罪を犯してもその刑罰は天と地の差があるのがい例だ。

ちなみに、僕にケンカを売った探偵野郎は、魔法が使えない人たちを滅ぼせといまだに言い続けている者たちの怒りを和らげる目的で生贄として捧げたが、その後の消息は明らかになつていない。

何の情報も入つてこないが、あの男が生きている可能性は皆無であることはなんとなくではあるが悟っていた。

閑話休題。

「魔法を使っているとところを見られた場合は、その人物の記憶から魔法に関することを消去しなければならぬ」

「でも、私たちは消されてないよ」

首をかしげる律だが、それもそうだろう。

そのための宣誓書なのだから

「宣誓書にサインをした者は例外。記憶を消す必要がない」

「なるほど。だから私と律ちゃんは大丈夫なんだね」

納得した様子で相槌を打つ唯を見て、僕はさらに話を進める。

唯が理解できていれば律もちゃんと理解できていると思ったからなのだが。

「ここは住宅街。何時人が来てもおかしくはないし、それに真鍋さんたちもいるからおいそれと魔法は使えない」

「そっかー。残念ですわね、唯隊員」

「なぜにそこまで残念がるんだ……と、どうやら向こうも終わったみたい」

どうしてそこまで残念がるのかが分からぬに首をかしげていると、どうやら濡たちのほうも駅までの道を確認し終えたのか、こちらのほうに向かつてくるのが見えたため僕は話をいったん終わらせる。

「それじゃ、行きましょ」

そう告げて歩き出す真鍋さんはどことなく頼もしく見えた。

(やっぱり、魔法なんてものがなくても十分やっていけるんだな)

少し前の僕であれば、魔法が使えない人に完全に任せるということはしなかったであろう。

見下しているつもりはないが、どのようなことに対しても魔法にはかなわないと思っていた。

だが、最近は時頼人のみでありながら魔法の効果と同等の……いや、それ以上の効果をはっきりしている場面を見ていて考えが変わり始めていた。

そしてそれは同時に、僕自身がこの場所^{世界}に、馴染み始めている証でもあるような気がした。

(まあ、それよりもまずは旅館に戻ることを考えようか)

僕はいったんそこで考えることをやめると、地図を片手に歩きだす真鍋さんたちの後についていくのであった。

いろいろと大変ではあったが、何とか駅にたどり着いて旅館に戻ることができた。

「……あれ？」

「さっきの場所だね」

わけがなかった。

僕たちがいるのは、先ほど真鍋さんたちと合流した場所だ。

そう、僕たちは見事に元の場所に戻ってきてしまったのだ。

僕たちの間に何とも言えぬ重苦しい雰囲気は漂い始めた。

唯と律にムギの三名はいつも通りだが

「和あ」

滯のほうは涙目になっていた。

誰がどう見ても、僕たちはいまだに迷っている。

「ちよっと待って。もう一度地図を確かめるわ」

そういつてもう一度地図を確かめ始める真鍋さんを見ながら、どうしたものかと考え始めると

「しやれこうべ」

と、全く関係のない単語が聞こえてきた。

「つく……くく」

その関係のない単語に顔をうつむかせながら肩を震わせる滯の様子は、必死にこらえているようではあるが笑っているようにしか見えない。

「しや」

「つぶ……あはははは」

その単語を口にした律が再び口を開くと、今度は笑い出した。

「み、滯ちゃんが壊れた」

驚いた様子でつぶやく唯のその言葉はある意味的を得ていた。

(うーん。どうするべきか)

彼女たちに任せておけば大丈夫。

僕の出る幕はないと思っていたが、少々雲行きが怪しくなり始めた。

腕時計のほうにふと目をやると、人知を超えた力でも使わない限り、どうやっても食事の時間までに戻ることは絶望的な時間だった。

要するに、魔法を使うしかないということだ。

だとするとどうやって使うのが問題になる。

場所は住宅街。

どこから見られているのかがこちらからでは分かりづらいという、魔法を使う上ではあまりいい環境ではない。

人員は魔法のことを知っている人物に加えて、魔法のことを知らない人が数名。

人数的には何人になろうが問題はない。

基本的に増えれば増えるほど消費する魔力量も大きくなるが、そうそう魔法を使わない現在の状況下ではさほど問題はない。

あるとすればやはり魔法の存在を隠匿するという部分だろう。

魔法という文化が存在しない世界において、魔法や故郷の存在を知られることを禁じている法律はどこにも存在はしない。

いわゆる、不文律というやつだが、これを守らないといろいろと面倒なことになる。

主に魔法連盟長からの“ありがたいお話”をいただくという意味で。

(さすがに修学旅行帰りに何時間も説教されるのは勘弁だ)

父さんが一度説教を始めると、軽く10時間位続くというのが、魔法連盟内ではある意味有名な話だ。

(それだとしたら、どうしようか)

真鍋さんたちに魔法の存在を知られずに魔法を使う方法を見つけようと、僕は必死に考えを巡らせる。

(そうだった)

そこでふと思いついたアイデアが、僕の頭の中にすさまじい速さで

作戦を組み立てさせた。

（あれだったらそうそう問題もないだろうし……よし。これでいこう）

こうして僕は、夕食に間に合うように旅館へ戻るべく作戦を開始するのであった、

第124話 逃走

「ちよつと駅への行き方を聞いてくるよ」

「悪いけど、お願い。高月君」

申し訳なさそうな真鍋さんの視線を受けながら、僕は律と唯を連れてその場を離れる。

そして向かうのは人気がない場所だ。

完全でない場所というのは住宅街なので皆無だが、人目に付きにくいところであれば数えきれないほどある。

それが、住宅街の死角といわれる場所なのだが、今はそれはどうでもいいだろう。

そんな場所までたどり着くと、困惑したような表情を浮かべた律が口を開く。

「こんな場所に連れてきて、いったいどうし——はっ!？」

突然目を見開かせたかと思うと、シナを作り始める。

「……何やってんだ?」

そんな律の奇行に、僕は数歩ほど後ずさりをしながら問いただす。

「いや、私たちをまとめていただいちやう……みたいなの?」

「ぶ——」

頬を赤らめて、あからさまに照れてますという表情を浮かべる律の言葉に、僕は思わず吹き出してしまった。

「ななななな——」

否定したいのにうまく言葉が出てこない。

それほどに今の僕は混乱していたのだ。

「あはは、冗談冗談。浩介がそんな奴じゃないって知ってるんだから、慌てなくてもいいのに」

「だって……なあ?」

どうやらからかわれたようで、心の中でほつと胸をなでおろしつつ律に相槌を打ちながら、この場にいるもう一人のほうに視線を向ける。

(うお!?)

思わず驚きの声を上げそうになるのを必死にこらえた自分をほめたくなった。

別に唯はにらみつけているとかではない。

にらみつけるでもなく、悲しげな表情を浮かべるでもなく、ただただ笑顔だったのだ。

だが、その表情からは黒いオーラのようなものが思いつきり放たれていた。

「えっと、唯さんや」

「大丈夫だよー。浩君がそんな人じゃないって知ってるからー」

何とも間の抜けた声をあげるが、節々に怒りのようなものを感じられる。

「ごほん」

今後、唯を怒らせるのは（主に、誠的な意味で）危険なので本当にやめようと心の中で誓いつつ、話を切り替えるため咳ばらいを一つする。

「二人を呼んだのはほかでもない。この状況を切り抜ける策を行うためだ」

「策っていうことは……もしかして？」

どうやら律には何のことなのかうまく通じたようで、僕は無言で頷く。

「魔法の力を使って駅のほうに強制的にたどり着けるようにする。」

「でもどうやってするんだ？ 確か、魔法って人に見られちゃいけないんだろ」

心配そうに律が言ってくるが、まさにそのとおりだ。

魔界は、その存在を魔法が使えない者に知られることを固く禁じている。

だが、やりようは十分にある。

「そこで、ちよつとした演出を施すことにしたんだ」

「演出？」

「ああ。それは――」

唯の相槌に頷いて、僕はその内容を二人に告げた。

「――以上が、僕の考えた筋書きだ」

「確かに、それだったらいけそう」

この後の流れを一通り説明し終わると、律は何度もうなづいていった。

僕の策は、所謂パニック映画風の物だ。

要するに、この場にいる全員をパニック状態にさせたうえで、転送魔法を行使するという筋書きだ。

「それだと、どうして私たちを呼んだの？」

「この策を実行すると、本当の意味でパニックを起こして何をするのかがわからないという不確定要素を持った人物が一名いるから、彼女へのフォローをお願いしようと思って」

「あー」

唯の疑問に答えると、二人はその人物が誰であるのかを理解したようだ。

「一応聞くけど、それってケガとかしたりしないよな？」

「当然。転んだりしたら知らないけど」

念を押すように真剣な表情で聞いてくる律に答えると、僕は無言で目の前にホロウインドウを表示させる。

そしていくつか操作をしたのちに、ウインドウを閉じる。

「さあ、行くか」

僕は二人にそう告げると、帰りを待っている真鍋さんたちの元に戻るのであった。

こうして、僕の作戦は幕を開ける。

「ごめん、お待たせ」

「道のほう分かった？」

やや小走りで何食わぬ顔で戻ってきた僕たちに、真鍋さんからの疑

問が投げかけられる。

「ああ。しっかりと教えてもらったよ」

僕は自信たっぷりな返答をする。

「それじゃ、案内頼めるかしら？」

「任せてよ」

真鍋さんから案内役を頼まれた僕は、律と唯に目配せをする。

それに二人が小さくこちらに頷くことで答えたので、こちらも同じように頷き返す。

「それじゃついてきて」

そして僕が先導する形で、歩き始めるのであった。

僕の先導の元、無言で人気の少ない住宅街を歩き続ける。

「本当にこの道で正しいの？」

「大丈夫。ちゃんと確認したし、道も間違えてないから」

さすがに不安を覚えたのか、心配そうに聞いてくる真鍋さんに、僕は自信をもって答える。

(少し早いか)

この時僕は、仕掛けを発動させるタイミングを見計らっていたのだ。

転送魔法の入り口である“ゲート”はすでに生成しており、こちらのタイミングでいつでも開くことができる状態だ。

ただ、ゲートまで距離がありすぎれば運動が不得手の物にはリスクが発生してしまう。

誰もケガをしないようにするには、運動が苦手な人でもちゃんとたどり着ける距離で仕掛けを動かせる必要があるのだ。

「この道を右に」

そんなタイミングを見計らいながら歩いていた僕は、突き当りのT字路を右に曲がる。

(残りの曲がり角はあと5か所。そろそろやるか)

距離的にもそろそろいい感じになつてきた。

そう判断した僕は仕掛けを動かした。

まずは結界魔法の展開だ。

これによつて結界内には僕たち以外には誰もいなくなり、不特定多数の人に魔法が見られる危険生がなくなる。

発動の準備はとつくに済ませていたので、あとは指を軽く鳴らすだけだ。

指を鳴らしたところで、不審に思うようなひとは誰もいないため、ばれる心配は一切ない。

指を鳴らした瞬間に、僕を起点として結界魔法が発動していく。

結界内は少しではあるが空気が変わっているが、それを感じ取れるのは魔力を有する者か、勘の鋭い人くらいなものだろう。

(そういう意味では、梓は興味深い)

前にちよつとしたトラブルで彼女たちが母国に来ることになった際、梓が真っ先に違和感のようなものを感じたらしい。

(もしかしたら魔法の素質でもあるんじゃないのか?)

ふと、そんなどうでもいいことを考えてしまう僕は、いつか確かめようと結論付けて頭の片隅に追いやることにした。

(さて、次の仕掛けを動かすか)

結界魔法が正常に動作しているのを確認した僕は、作戦を第二段階に移行させる。

それは、右手で軽くルーンを描くだけで十分だった。

僕は隣で歩いている唯に目くばせで合図を送る。

「ね、ねえ。何か聞こえない?」

僕の合図を受けて、唯が疑問の声(ものすごく棒読みだけど)を上げる。

「別に、何も聞こえないぞー」

そして唯の言葉を受けて律が答える(こちらも非常に棒読みだけど)

そんな時、バイクのふかし音が聞こえ始める。

「この音って、バイク？」

「でも、見当たらないぞ」

さすがに大きな音が聞こえれば、真鍋さん達も周囲を見渡し始める。

だが、バイクの姿などどこにも見当たらない。

僕たちはいつの間にかその場に立ち止まって、身を寄せ合っていた。

全員（数名を除く）の表情にあるのは、得体のしれない恐怖心だった。

その次の瞬間だった。

けたたましいスキル音とともに、複数台のバイクが僕たちが歩いていた場所から躍り出てきたのだ。

「走ってっ！」

僕のその一言をきっかけに、全員が一斉にバイクとは反対の方向に走り出す。

ここまでは僕の予想通りだ。

パニックをうまく誘発することに成功した僕は、心の中でガッツポーズをしながら最後尾を走る。

一番心配していた滯は、律に手を引かれる格好ではあるがしっかりと走っていた。

「バイクを振り切るっ。そこを左に曲がって！」

全員に聞こえるように声を張り上げた。

すると、先頭を走っていた真鍋さんは、何の疑いもなくT字路を左に折れたのだ。

一人でも左に曲がると、あとはそれに従うように全員が左に曲がっていく。

同じように左右に曲がらせていく。

バイクの姿はとっくに見えない。

僕たちを追い回しているのは、バイクの吹かす音のみだ。

だが、全員はバイクが迫ってきていると思い、走って逃げ続ける。「その道を右に！」

そしていよいよ最後の曲がり道だ。

僕が調べたところ、その先は行き止まりだ。

だからこそ、ここを選んだのだ。

(今だっ！)

僕はタイミングを見計らって右手で再度ルーンを描く。

次の瞬間、空間が大きく変化した。

場所は先ほどまで走っていた左右にやや高めの塀がある細道だが、そこは転送魔法によって生み出された亜空間に過ぎない。

それすらも、魔法の使えない全員に走る由もなく、そのまま僕たちは左右にやや高めの塀がある細道を、走り続ける。

徐々にバイクの音が遠ざかっていく中、走り続けること数十秒。

「もう……大丈夫……みたい」

開けた場所に出られた僕たちは、その場に立ち止まると大きく息を切らせながら全員を安心させるように告げた。

その言葉に今まで走っていたみんなは僕と同じように立ち止まると膝に手を当てて息を整えだす。

全員が全員、恐怖から解放されて安心した様子だった。

「……あれ？」

最初に異変に気付いたのは、息を整えてようやくいつもの冷静さを取り戻した真鍋さんだった。

「ここは……旅館の近くの駅」

そこは、僕たちが宿泊している旅館の最寄りの駅前だった。

僕たちが出てきたのはビルとビルの中の細い路地のような道だ。

先ほどまで走ってきた住宅街を彷彿とさせる道とは大きくその景色は異なっている。

そんな光景に、全員がキツネにつままれたような表情を浮かべる中、

「まあ、たどり着けたんだからいいんじゃないかな」

と僕が声を上げれば、真鍋さんたちも若干腑に落ちない様子ではあったものの“そうね”と頷いた。

そしてそれに倣うように全員もうなづく。

「それよりも、早く旅館に戻ったほうがいいんじゃない……夕食の時間もあるし」

最後に律がそう締めくくったことで、僕たちは今度は歩いてその場を後にする。

時間的にも歩きでも十分に間に合う程に余裕があるので、迷いさえしなければ夕食までには確実に旅館にたどり着くことができるはずだ。

こうして、僕たちの波乱の自由行動は終了となった。

第125話 参考にならぬもの

何とか無事に旅館にたどり着き、食事の時間に間に合った僕たちは、お風呂を済ませて寝る準備を始めていた。

ちなみにお風呂に入っている間、女湯のほうでは交替で引率の先生が監視としていたらしい。

室内の浴室を使っていたらしく、先日あった覗き事件のことすら知っていない律たちが、どうしてなのだろうと不思議がっていた。

その様子を見て、僕は啓介の（ないかもだけど）名誉のために黙っておこうと、心の中で決めた瞬間だった。

「それじゃ、あれは全部高月君の仕業だったの？」

「そうだぜっ」

その最中に律が先ほどの逃走劇の真実を話してしまったのだ。

まあ、別に彼女たちには言うなどは言っていないなかったので、別に構わないのだが。

あまり話が広まりすぎると、それはそれで面倒にもなりかねないので、出来れば控えてほしいのだが、そもそもそれならやるなという話でもあるわけで。

「それだったら、私たちにも言っただけでよかった」

「だって、全員に話したら真鍋さんたちをごまかすことができなくなるでしょ。あくまでも自然な感じにするのがメインなんだから」

あの場では魔法のことを知らない真鍋さんたち一行を、いかにこちらの思い通りに動かすかが一番大事なカギだった。

真鍋さんは冷静に物事を判断するタイプだ。

そういうタイプの人を思い通りに動かすには、恐怖によるパニック状態に陥らせればいい。

しかも、そのパニックが集団で起こっている状況で、あればなお効果は増す。

集団心理的なものかとも思うが、それは定かではない。

「でも、あのくらいだったらあんなことをしなくても大丈夫だったと

思うよ」

「まあ、念には念をつてやつだよ」

確かにムギの言うことも一理あるが、魔法のことを知られないようにするため、これでもかという処置を施さないといけないのだ。

だが、結果的に言うと、これだけの対策を施しても父さんに、怒られるのは確定なわけだが。

というか、すでに怒りの連絡と思わしきメッセージが届いていたりする。

(出来れば聞きたくない)

でも聞かないなら聞かないで強制的に聞かされそうなので、結局は聞くしかないわけだが。

閑話休題。

(そういえば、昨日は佐伯さんが助けを求めに来たっけ)

あのアホは何をしでかすかわからない。

大方、今日も懲りずに何かしでかしてるに違いない。

「高月君!! 助けてえ!」

「うお!?!」

「今度は何をやってるんだ? 変な宗教にでも目覚めたか?」

今夜はノックもなしにまるでけり破る勢いで開けられたドアの音に、律たちが体をびくつかせる中、涙目の佐伯さんの姿に何が起きているのかを大方理解できた。

「あー、わかった。すぐに処理しよう」

「もう、作業だよな。それ」

軽く腕まくりをしながら、佐伯さんの部屋に向かう僕の耳に聞こえてきた声はあえて無視することにした。

「なんだ、今夜は静かじゃないか」

佐伯さんの部屋の前まで来ても、啓介のはしやく声は一切ない。

だが、班のメンバー全員がおびえたような表情で避難してるのは、中でただ事ではない何かが起こっている証拠でもある。

「皆、一応安全のために少し離れてて」

とりあえず、女子に被害が出てはまずいので全員を離させることに

した。

そして、全員が離れたのを確認した僕は、部屋のドアを開ける。

「グフ……ぐふふふ」

そこにいたのは、僕たちに背を向けて正座をしている啓介の姿だった。

どうやら何かを見ているようで、気味の悪い笑い声をあげていた。

(確かにこれは怖いわ)

女子たちがおびえるのも無理はない。

(にしても、いったい何を見れば、あんなふうになるんだ?)

僕は気配を消して、啓介の背後に忍び寄ると、肩越しに覗き見た。

(何々、『絶対成功するル〇〇ダイブの方法』?!)

〇パ〇ダイブとは、世界的に有名な某怪盗が仲間みたいな関係の女性に向かって、一瞬で下着のみになってダイブをするというものだ。

最近夜にこのアニメが放送されていたのでよく覚えていた。

最後は女性の返り討ちにあってノックアウトされるが。

(啓介、こんなの見て何をやる気だ?)

その疑問の答えが一瞬分りかけた自分に嫌悪感を抱いていると、

啓介は勢い良く立ち上がると

「よおし、これで俺は漢になるツ!!」

(やる気だ。本当にダイブする気だ)

というより、この展開で行くと僕のほうにダイブしてきそうだ。

「三花ちゃくくく——んごおっ?!」

とりあえず、僕に飛び掛かれても困るので、男性の一番の急所を宙返りの要領で蹴り上げることで回避した。

だが、運のいいのか悪いのか悪いのか、けり上げた反動で啓介の体はそのまま後ろのほうに飛んでいき、床に置かれたデジカメ(お小遣いを使い果たしてまで買った啓介の自慢の一品らしい)に、自分急所の部分の下敷きになる位置で重力に従って落下し始める。

「ツ!?~~~~~!!!」

声にならない断末魔を上げながら苦しんでいた。

(うん。あれは痛い)

同じ男としてどれほどの痛みなのかはわかるが、原因が原因だけに同情はできない。

とりあえず、昨日と同じように縛り付け女子たちの邪魔にならない場所に放っておく。

「処置のほうは終わったから、安心して」

「あ、ありがとうございます！ 高月君は命の恩人だよっ！」

佐伯さんの本気にも近い感謝の言葉を聞きながら、僕は自分の部屋へと戻るのであった。